國文注釋全書

東宮侍講　本居豐頴
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

目録

以上

緒言

一源注拾遺ハ僧契沖ノ著ニシテ八卷ナリ、源氏物語ノ注釋書ニシテ、諸抄ノ誤謬ヲ訂シ且ツ遺漏ヲ拾ヒテ自己ノ意見ヲモ擧ゲタレバ拾遺ト名付ケタルナリ、本書ハ帝國圖書館所藏ノ寫本ヲ底本トシ刊本ヲ以テ校合シタリ、

一源氏外傳ハ熊澤了介ノ著ニシテ春夏秋冬ノ四卷ニ分テリ、源氏物語ノ全篇ヲ概括シテ論評シタルモノニテ、上古ノ遺風ヲ知ルニ必要ナルコト、文學トシテ貴重ナルコト、俗人ノ矯風ノ料タルコト等事實ヲアゲテ賞賛シ、本文ハ强ヒテ五十四帖ノ次第ニカヽハラズ、卷々ノ心詞ニヨリテ論ヲタテ或ハ注釋ヲ加ヘタリ、本書ハ内閣文庫本ニヨリ松井簡治氏所藏寫本ヲ以テ校合セリ、

一勢語圖說抄ハ齋藤彥麿ノ著、伊勢物語ノ注釋書ニシテ五卷ナリ、契沖阿闍梨

ノ勢語臆斷、荷田春滿ノ伊勢物語童子問、賀茂眞淵ノ伊勢物語古意等ノ說ヲ基トシ、本居宣長ノ玉勝間ニヨリテ誤リヲ正シ、且、自己ノ意見ヲモ加ヘテ圖解セリ、本書ハ松井簡治氏秘藏ノ寫本ヲ底本トス、

一多武峰少將物語考證ハ丸林孝之ノ著ニシテ一卷ナリ、卷首ニ提要、異同、本傳等ヲ揭ゲ、本文ニ傍注ヲ施シ考證ヲ加ヘタル刊本ナリ、

一四十二物語考證ハ山本明清ノ著、卷首ニ提要、大意、別本異同等ヲ揭ゲ、本文ニ校訂ヲ施シ標注シタルモノニテ、文政二年ノ刊行ナリ、

一鳴門中將物語考證ハ岸本由豆流ノ著、本文ニ校訂ヲ加ヘ標注シタルモノナリ、本書ハ黑川家秘藏ノ春村翁書入本ヲ以テ底本トセリ、

一狹衣物語下紐ハ著者未詳五卷アリ、狹衣物語ヲ抄釋摘解シタルモノニテ、狹

衣ノ系圖、物語ノ由來等ヨリ、本文ニ入リテ事實年代句解等ヲ記セリ、本書ハ松井簡治氏所藏ノ刊本ニヨレリ、

一宇治拾遺物語私注ハ小島之茂ノ著ニシテ三巻ナリ、宇治拾遺ノ難句難語ヲ抄出シテ注解セリ、本書ハ東京帝國大學所藏ノ原本ニヨツテ校合シタリ、

一唐物語提要ハ清水濱臣ノ校訂標注シタルモノニシテ一巻ナリ、文化六年ノ刊行ナリ、

一取替早物語考ハ岡本保孝ノ著、難句ヲ抄出シテ考證注解セリ、本書ハ帝國圖書館所藏ノ況齋叢書本ニ據レリ、

一今物語書入本ハ書入者不詳、朱ヲ以テ傍注ヲ施シ或ハ餘白ニ細書セリ、本書ハ山本信哉氏所藏本ニ據レリ、

一今昔物語訓ハ小山田與清ノ著、黑川家本ヲ底本トシ、今昔物語出典攷ハ岡本保孝ノ著、帝國圖書館所藏ノ況齋叢書本ニヨレリ、

一梁塵愚案抄ハ一條兼良ノ著ニシテ、本名ヲ神樂催馬樂注秘鈔ト云フ、後白河院勅撰梁塵秘抄二十卷中ヨリ、神樂催馬樂ヲ抄出シテ注釋シタルモノナリ、本書ハ松井簡治氏秘藏ノ賀茂眞淵翁ノ考注セラレタルモノヲ底本トセリ、

一梁塵後抄ハ熊谷直好ノ著ニシテ四卷ナリ、上二册ハ神樂歌ノ注、下二册ハ催馬樂歌ノ注ナリ、共ニ本文ニ校訂ヲ施シテ詳解セリ、本書ハ故黑川博士淺草文庫本ヲ以テ校合セラレタルモノヲ底本トセリ、

明治四十三年六月

編　者　識　ス

源註拾遺

源氏外傳

勢語圖說抄

多武峯少將物語考證

四十二物語考證

鳴門中將物語考證

全

源註拾遺第一

大意

此物語抄物の大物部なるは河海その初か然るに晴記の違へるか草案歟傳寫の誤歟日本紀萬葉等にありとてひかれたることの本書になきことすくなからず後によき人々のつゞきてつくり給へる抄どもゝこれを本にて信ずべき人のしたまへることなればいづれもつたへて根源を考がへずひかるゝほどにたゞ此一書のみならず假字物がたりに出來といでくる抄どもその誤りをうけずといふことすくなしまことに本みだれぬれば末をさまらずといふことよろづにわたりてつゝしむべきことゝなり

段々の褒貶は資治通鑑の文勢司馬光が詞をまなぶと云々○今案此說は誤なり通鑑は趙宋英宗治平三年に出後冷泉院治暦二年にあたれば此物語におくるゝこと六十餘年なるべし

拾芥抄上末源氏物語目錄部第三十云「明石浦傳　卅二東屋狹席　右これによれば明石の卷の次に浦傳の卷東屋卷の次に狹席の卷有歟諸抄にふたつの名見えずおぼつかなし

更級日記云東路のみちのはてよりも猶おくつかたにおひいでたる人いかばかりかはあやしかりけんをいかにおもひそめたることにか世の中に物語といふもののゝあんなるをいかで見ばやと思ひつゝつれ〳〵なるひるまよひゐなどにあねまゝはゝなどやうの人々のその物語かの物がたりひかる源氏のあるやうなどところ〴〵かたるを聞くにいとゆかしさまされど我おもふまゝにそらにいかでかおぼえかたらんいみしく心もとなきまゝにとうじん（等身）にやくし佛をつくりて手あらひなどしてひとまにみそかにいりつゝ京にとくあげ給ひて物語のおほく候なるあるかぎり見せ給へと身をすてゝぬかをつきいのり申ほどに十三になるとしのぼらんとて九月三日かどでしていまだちといふ所にうつる云々

又云そのゝちは何となくまぎらはしきに物語のこともうちたえわすられて物まめやかなるさまに心もなりはてゝぞなどておほくの年月をいたづらにてふしおきしにおこなひをも物まうでをもせざりけん此あらましごとゝてもおもひしことどもは此世にあんべ

かりけることどもなりやひかる源氏ばかりの人はこのよにおはしけるやはかをる大將の宇治にかくしすゑ給べきもなき世なり

又云いみじくやむことなくかたちありさまものがたりに有けるひかる源氏などのやうにおはせん人を年にひとたびにてもかよはしたてまつりてうき舟の女君のやうに山さとにかくしすゑられて花紅葉月雪をながめていと心ぼそげにてめてたからん御ふみなどを時々まち見こそせめとばかりおもひつゞけあらましごとにもおぼえけり

又云かくのみ思ひくんじたるを心もなぐさめんと心ぐるしがりては丶物がたりなどもとめて見せ給ふにげにおのづからなくさみゆく紫のゆかりを見てつゞきの見まほしくおぼゆれと人にかたらひなどもえせずわれとはまだみやこなれぬほどにてえみつけずいみじく心もとなくゆかしくおぼゆるまゝに此源氏のものがたり一のまきよりしてみな見せ給へと心の内にいのるおやのうつまさにこもり給へるにもことことなく此事を申ていでんまゝに此もの語見はてんとおもへど見えずいとくちをしく思ひなげかるゝにをはなる人のゐなかよりのぼりたる所にわたりたればいとうつくしうおひなりにけりなどあはれがりめづらしがりてかへるになにをかたてまつらんまめ〳〵しきものはまさなかりなんゆかしくしたまふなるものをたてまつらんとて源氏五十餘卷ひつにいりながらざい中將とをきみせり川しらゝあさうづなどいふ物がたりどもひとふくろとり入てえて歸る心ちのうれしさぞいみじきやわづかに見つゝ心もえず心もとなく思ふ源氏を一の卷よりして人もまじらずきちやうの内にうちふしてひきいでつゝ見る心地きさきのくらゐもなにゝかはせんひるはひぐらしよるはめのさめたるかぎり火をちかくともしてこれを見るより外のことなければおのづから名などはそらにおぼえうかぶをいみじきことに思ふに夢にいときよけなる僧のきなる地のけさきたるがきて法華五卷をとくならへといふとみれど人にもかたらずならはんともおもひかけず物がたりのことをのみこゝろにしめてわれはこの頃わろきぞかしさかりにならばかたちもかぎりなくよくかみもいみじくながくなりなんひかる源氏のゆふがほ宇治の大將のうき舟の女きみのやう

にこそあらめとおもひける心まづいとはかなくあさまし又云はつせの精進はじめてその日京をいづひたふるに佛をねんじたてまつりて宇治の渡りにいきつきぬ舟のかぢとりたるをのこども舟をまつ人の數もしらぬにこゝろをごりしたるけしきにて袖をかいまくりてかほにあてゝさをゝおしかゞめてとみに舟もよせずうそぶいて見まはしいといみじうすみたるさまなりむごにえわたらてつく〳〵と見るにむらさきの物語に宇治の宮のむすめどものことあるをいかなる所なれはそこにしもすませたるならんとゆかしくおもひし所ぞかしけにをかしき所かなとおもひつゝからうじて渡りて殿の御らう所の宇治殿をいりて見るにもうき舟の女きみのかゝる所にやありけんなどまづおもひいでらる已上古き物に此もの語をほめたるは此更級日記初なるべし又紫の物語とこれには名付たり

狹衣云「からどまりそこのみくづとながれしをせゞの岩浪たつねてしかな　かひなくともかのあとの白波をだに見るわざもがなとおぼせどみやこのうちの御ありきをだにも御心にまかせたまはず所せくわりなき御もてなしなればまいておぼしかくべきことにもあらねばいと口をしくおぼしつゝけらるゝにかのひかる源氏のすまの浦にしほたれわび給ひけんすまひさへぞうらやましくおぼされける

又云源氏宮（源氏二字をくはふ上に源氏宮とあり）の御かたち此ごろはいとゞさかりにとゝのほりまさらせ給ひてまことにひかるとは是をいふべきにやと見えさせ給ふ女宮なり

又云ありつるこからびつ引よせさせ給ひてこれやむかしのあとならんみればかなしとかや光源氏のゝたまひけるものをとはのたまはすれどごらんずるにみづからかきあつめたまへるゑどもなりけり　右狹衣に源氏をひけるは爲時作にてひける歟母の作れる物なれども狹衣とても作物語なれば有ける事にして引用る歟僻案抄には狹衣の作者大貳三位にあらずといへり

平判官康頼入道法名性照がかける寶物集第四に妄語戒を説て云まぢかくは紫式部が虚言をもつて源氏ものがたりを造りたる罪によりて地獄に墮て苦患忍びがたき故にはやく源氏ものがたりを破り捨て一日經をかきて弔ふへしと人の夢にみえたりけるとて歌よ

みども寄合て一日經を書て供養しけるは覺え給ふらん物をといへりかゝれは家々の集などにはさだめてそのことをよめる歌なとおほくあらめどいまだ見あたらず　新勅撰集釋教に紫式部がためとて結縁經供養し侍ける所に藥草喩品を送り侍るとて　權大納言宗家「法の雨に我もやぬれんむつまじき若紫の草のゆかりに綺語の沙汰ある後に源氏をもてあそふ人功德をなして跡をとひけるにや一篇の表白は若此時作りたるにや

袋草紙に古物語の歌の撰集にいるはなしと申ことゝかや後拾遺雜一　藤原爲時歌「われひとりながむとおもひし山ざとにおもふことなき月もすみけり是は源氏ものかたりの歌なりかの物語にはいりぬとおもひしと侍るなり件の物がたりは紫式部が所作なりと云々このこと引ながら今の本に有無の沙汰なく何のかはりめのことをもいへる抄なしおぼつかなきことなり　今案此爲時歌古本の源氏には有ける歟今の源氏にはあることとなし若雲隱の卷などあつて源氏嵯峨院に入てよみ給ふになして式部がながむを入ぬとなして父が歌を用ひたるにや爲時の詠を古物語の歌と申されたるにこれも一說に爲時と存せられたるにや古きものがたりの歌も集に入歟伊勢ものがたりは常のことなり拾遺集戀二「思ひきやわが待人はよそながら七夕つめのあふを見んとは同戀五「思ふことなすこそ神のかたからめしばしわずるゝ心つけなん此の二首はともにうつぼ物がたりの歌なり

榮花物語をみるに紫式部が娘は大貳三位のみならず今一人これあり楚王の夢の卷に大宮の御歌の紫式部がむすめ越前の辨云々とあり

明星云此須磨の卷に源氏の左遷のことを書たる心は西宮左大臣高明公云々○今案此說信じがたしその故は此物語は寛弘の初に作といへり冷泉院安和二年より寛弘元年迄三十六年なり藤式部幼少よりなれ奉りて思ひ歎きけるを比なればとあれば五十歳にも及ぶべし紫式部日記は寛弘六年の記なれは五十五歳にかりならん歟その後宣孝に嫁して大貳三位を生へきか相違如何

更級日記にも源氏は五十餘帖といへりさし六十帖と

いはゞいま流布する本雲隱溶傳狹席等二三帖も落たる歟さて大數をあけて六十帖といふかそれを天台六十卷に准らへたりなどいふは此物がたりの中に天台敎門に付てかける所あるによりて台宗にかたよる人のおしていふ歟榮花物語にも佛法の深意をかけることあり女とても皆法門の歌などよめるを見れば大意を心得たる人おほかりけるにやと見ゆ檀那院贈僧正に一心三觀の血脈を相續したるよしたとひ式部天台法門の意を知とも橋姬の卷に法師さへあまりひじりだちたるを嫌ひ日記にもこと〳〵しく數珠引ざけ經よみなどずるは女に似合ぬよしかければさやうのこは〳〵しきことはすべからずもし說のごとくならばにくきこととなるべし

式部が名は紫上のことを一部にわたりて詮とよく書たる故なるべし日記の公任のこと葉更級日記に紫のものがたりといへる其證なるべし

式部をさなかりし時兄の惟規とともに父爲時に史記をよみならひけるに式部はとくよみはてける故あはれをのこ子にてもたばやと爲時もいひけりその後女の眞名を學ぶはよからぬことゝおもひて一の字をだに眞名にはかくまじきやうにおもひけるよし彼日記に見えたり

此ものがたり發起の事說々あり爲時が作紫式部が作これさへ分明ならざれば習一定し信じかたし

定家卿の詞に歌ははかなくよむ物と知りてその外は何の習ひ傳へたることもなしといへること古今密勘に見えたりこれ歌道においてはまことの習ひなるべし然れば此物語を見るにも大意をこれになずらへて見るべし式部が此ものかたりをかくに人を引てあしくせんとはおもふまじけれど其身女にて一部始終好色に付てかけるに損せらるゝ人もあるべし又擇主賢臣などに准らへてかけるところに叶はずして罪を得たればにや地獄には入にけん源氏の薄雲にとありしは父子に付ていはゞ何の道ぞ君臣に付ていはゞ又何の道ぞ匂兵部卿の浮舟におしたち給へる朋友に付て何の道ぞ夕霧薰の二人はともにまめ人に似たれど夕霧は落葉宮におし立て柏木の靈に信なくかをるの宇治の中君の匂兵部卿に迎へられての後度々たはぶれしも罪すくなからず春秋の褒貶(ホウヘン)は善人の善行惡人の惡行を面々にしるしてこれはよしかれはあしゝと見

せたれはこそ勧善懲悪(クワンゼンチヤウアク)のきらかなれ此物語は一人の上に善悪相まじはれることをしるせり何ぞこれを春秋等に比せん

古抄に台家の化儀化法の兩種の四教などの沙汰ありやさしくかける物語をこはくしき物とす寂蓮はおそろしき猪のしゝもふするのとこといひつればやさしくなるとこそいひつれ物語の中にその人ならぬ法師はいむことなどのたふときかたはあれどひじりたちこは〱しきよしみづからかけりその作者をいふとて又こは〱しきものとせんことかは

勅撰の集の中に此もの語の名出たるは千載集戀四寄源氏物語戀といふ心をよみはべりける　よみひとしらず「見せばやな露のゆかりの玉かづら心にかけて忍ぶけしきを同「逢坂の名を忘れにし中なれどせきやられぬはなみたなりけり

新勅撰釋教にあるは上に出せるがごとし同雜二源氏の物かたりをかきて奥にかきつけられて侍ける從一位麗子「にかもなき鳥の跡とはおもふともわかすゑ〱はあはれともみよ

續古今雜中　源氏ものかたりのすまの卷かきて奉りける人につかはされける　月花門院「濱千鳥あとをみるにも袖ぬれてむかしにかへるすまの浦なみ　返し醍醐入道前太政大臣女「今更にすまのうらぢのもしほ草かくにつけてもぬるゝ袖かな

續後拾遺物名　源氏の卷々の名をよみ侍ける中にゆふがほ　權中納言公雄「神垣は花の白ゆふかをるらし吉野の宮の春のたむけに

おなじ卷の名の中にかゞり火　よみ人しらず「から衣すその原のこたかゞり日も夕ぐれにはや成にけり

新續古今集哀傷　源親行身まかりて後の遠忌に茂行すゝめて源氏の物がたりの卷々を題にて人々に歌よませ侍りける時桐壺の卷の心を　前參議能清「なきりとて出し歎きにくらへてもながき別れは猶ぞかなしき

おなじ時横笛を　寂恵法師「笛の音をながき世までにつたへずはむなしくなりしひとや恨みん

あるものゝもうしけるはうつぼかけろふより住吉物語にさへ長歌あり五十餘帖のなかにはところ〱にありぬべきことなるをなきはもろこしのひとにも詩

文に長短ありければ紫式部が筆にても長短は得ざりけるにやといへり

毛詩には關雎螽斯等の篇は后妃の德化を示し鄭衛の詩は淫放をいましむ美惡水火のごとし但文章においては鄭衛の詩もおとるべからず此物語は人々の上に美惡雜亂せりもろこしの文などに准らへては說べからず定家卿云可ㇾ翫二詞花言葉一ヲかくのごとくなるべし

越後守爲時を或は越前守とあるは誤なり後拾遺集別部云ちゝのもとに越後にまかりけるにあふさかのほどより源爲善朝臣のもとにつかはしける藤原惟規「あふ坂の關うちこゆるほどもなくけさはみやこの人ぞ戀しき

新後拾遺にはちゝのともに越後にまかりけるにと有てまつはとこそきゝ給へしかさてはまさりなんものをこれはたゞよしがかたりしはのふのりがこのうたをよみておこせて侍しかへりことをゑちごに遣したりしにのふのりはうせてちゝためときが返事をいとあはれにかきつけられて侍りしいまにうしなはてはへりとぞ申たりしかと有まつはとはけさはとある所のことなり戀三云ちゝのもとにこしのくにゝ侍けるときおもくわづらひて京に侍ける齋院の中將がもとに遣はしける　藤原惟規「都にも戀しきことのおほかれば猶このたびはいかんとぞおもふ

宇治拾遺に此歌よみて終に死にのぞみけるとき僧を呼て最後をすゝめける時のことありまた新勅撰羇旅に藤原惟規か越後へ下り侍りけるにつかはしける

伊勢大輔　けふやさは思ひたつらん旅衣身にはなれねど哀とぞきく

これ父爲時につきて下る時の歌なるべければこれらにておもふべし紫式部が鹽津山にてよめる歌も父が任はてゝのぼる時よめるなるべし

爲時は菅三品の弟子にて詩文をよくし歌をも能くよまれたり惟規も後拾遺より初て入て末の集までに歌見えたり

此物語流布の抄物普通の假名だに違ひて散々なる故に義もまた隨てたかへりたとへば墟の字の假字は太布なるを太由とかける類なり

新續古今集雜中云源氏物語の揚名介のことを忠守朝臣に尋侍るとて申おくりける　藤原雅朝朝臣「つた

へおく跡にも迷ふ夕かほのやとのあるじのしるべともなれ　返し　丹波忠守朝臣「心あてにそれかとばかりつたへきてぬしさたまらぬ夕がほの宿

かくはあれど揭名問答源語秘決等をみれば心得らるゝなり

此物語の中の歌末の集に入たるは新拾遺集雜中に題知ず　紫式部「里の名を我身にしれば山城のうぢのわたりぞいとゞすみうき　浮舟の卷の歌なり

諸抄に此物語の大意をいへる中に用あることあり不用なるもあり法華に准らへ史記左傳などに准らへたるよしたとひ下心さることありども假字にかける物に似合ず既に作者のみづからきらへることなれば用あることをのみ用ゆべし卷々の次第源氏昇進の次第等は用あることなり

御堂關白出家以後くはへたまへる奧書とて云々　これ信じがたし其故は彼入道したまへるは寬仁三年なれば此物語出て後十五年も過ぐし書たまふべくば殿といはれておはさんほどにこそあらめ

紫式部日記云さゑものないしといふ人侍りあやしうすゞろによからずおもひけるもえしり侍らぬ心うきしりうごとのおほうきこえ侍りしうちのうへの源氏の物がたり人によませたまひつゝきこしめしけるにこの人は日本紀をこそ讀たまへけれまことにざえあるべしとのたまはせけるをふとおしはかりにいみじうなんざえあると殿上人などにいひ散らして日本紀の御つぼねとぞつけたりけるいとをかしくぞ侍るこのふる里の女のまへにてだにつゝみ侍るものをさる所にてざえさがしいてらるらんよ此式部丞（惟規）といふ人のわらはにて史記といふふみよみ侍りしときゝゝならひつゝかの人はおそうよみとりわするゝ所をもあやしきまでぞさとく侍りしかはふみに心入たるおやはくちをしうをのこゞにてもたらぬこそさいはひなかりけれとぞつねになげかれ侍しそれをとこだにざえかりぬる人はいかにぞやはなやかならずのみ侍るめるよとやう〳〵人のいふも聞とめて後いちといふもじをだに書わたし侍らずいと手づゝにあさましく侍りよみしふみなどいひけん物めにもとゞめずなりて侍りしにいよ〳〵かゝること聞侍りしかばいかに人もつたへきゝてにくむらんとはづかしさに御屛風のかみにかきたることをたによまんかほをし侍ら

ざりしを宮の御まへにて文集の所々よませ給ひなどしてさるさまの事しろしめさせまほしげにおほいたりしかばいとしのびて人のさふらはぬものゝひまひまにをとゝしの夏ごろより樂府といふふみ二卷をぞしどけなくかくをしへたてきこらさせて侍るかくし侍り宮もしのびさせたまひしかど殿もうちもけしきをしらせたまひて御文どもをめてたうかゝせ給ひてぞ殿は奉らせたまふまことにかうよませ給ひなどする事はたかの物いひの内侍はえきがさるべししりたらばいかにそしり侍らん物とすべて世中ことわさしげくうきものに侍りけり

源氏の物がたりおまへにあるをとのゝこらむじてれいのすゝろごとゞもいできたるついでに梅のしたにしかれたる紙にかゝせたまへる（梅のしたとは梅枝の卷の事歟）「すきものと名にしたてれば見る人のをらで過るはあらじとぞ思ふ　たまはせたれば「人にまたをられぬ物をたれかこのすき物ぞとは口ならしけんこれらによればまさしく式部がかける物なり

三箇大事といふ事源語祕決にかゝせ給へり但みづかひとつは三之一といふにてひかれたる左傳まではあるべからず三夜式も物語の意李部王記をもてまだくは證すべからず川社にさきにいふがごとし又同物語末にも此事あるに抄にひけるは李部王記の式にことなり又揚名介は清愼公の揚名關白の詞揚名問答に信西入道がいへる詞なとに事きれてつくべしとのゐものゝふくろまた意得やすけなり

源註拾遺卷第二 以今案二字置愚意初

桐壺

いとやむことなきゝはにはあらぬが　呼花にきはめて上臈の品をいふ無上事と書　今案やむことなしといふ詞大かた然也但し又唯やむことを得ぬにもいへり後撰集羇旅部のこと書になかはらのむねきがみのゝ國へまかり下り侍ける道に女の家にやどりていひつきてさりがたくおぼえければ二三日侍りてやむごとなきことによりてまかり立ければ衣をつゝみてそれが上に書ておくり侍ける此やんごとなきはえやむまじきことありて出るを云り公事ならば呼花の意にかよふべけれどさらば女にかたらひつきて二三日とゞまる事あるまじければたゞわたくしにもえとゞまらぬ事のあるをいへりまたかげろふの日記にはやむごとあると云ふこともあり

めさましきものにおとしめそねみ給ふ　抄云冷眼などかけり目もすさましく見るなり世俗に目にあまるやうなることを云歟　今案帚木にとうろかけそへ火あかくかゝげなどして御くだものばかりまゐれりとばかり丁もいかにそはさるかたのこゝろもなくてはめさましきあるじならんとのたまへば云云　玉かづらに世に（夕がほ也）あらましかば北の町（明石也）に物する人なみにはなどか見さらまし人の有さまとりぐになんありけるかどゝしうをかしきすちなどはおくれたりしかどもあてはかにらうたくもありしかななどのたまふさりとも明石のなみにはたちならべ給はざらましとのたまふなほ北のおとゝをは目さましと心おきたまへり姫君のいとうつくしげにてなに心もなく聞たまふがらうたければことわりぞかしとおぼしかへさる又云梅の折枝（紫也）てふとり飛ちがひからめいたる白きこうちぎにこきがつややかなる（紫上也）かさねて明石の御かたに思ひやりけたかきをうへはめさましと見たまふこれらは冷眼の意にあらず

恨をおふつもりにやといふ下に引あしかれと思はぬ山の云々　今案詞花集雑上和泉式部が歌なり類したれば引けり本歌にはあらず

さとがちなるを　今案和名云周易說卦云其於レ木也

爲二聚多心一師說多心讀各賀古可遲これによるに何がちといふたく
ひは皆此多の字なり
いとあつしく　今案日本紀に彌留をあつしれとよめり病のおもる意なり篤癃をあつゐひと〻よめるにあはせて思へば病の輕きを薄しといひて重きを厚しといふにや
あひな〻めなそばめつ〻いとまばゆき人の御覺えなり　細流にまばゆきを人のそねみてうちもむかはぬかたちなりと註し給へり　今案細流はめをそばめつ〻といふにつゞきたればかくは註したま〻ど御覺えといふによれば日のか〻やく時まばゆくて見がたきやうの意なるべきにや
いとはしたなきことおほかれど　註よわきものにつよくあたる心なり　今案此註かなはず枕草子にはしたなきものといふ下のひとつに人をよぶに我かとてさし出たるものまして物くる〻をりなどかけりこれにて心得べし竹取物語に宮はたつもはしたゐるもはしたにてゐたまへりといふに同しそれにつけてふたつの心あるべし大氣なるをおほけなき荒きをあらけなきといふ類なきは詞にて無の字の意ならねばはしたなきもたゞはした歟またはしたのなしといふ義ならばそれにてもおなじ意なりその故ははしたはなかばに同じたとへば十ある物いつ〻ありて今いつ〻のなきをはしたなしといふべければなり
此御にほひにはならび給ふべくもあらざりければ
細 黍稷非馨明德惟馨といへるごとく人の威德を匂ひといふなり　今案これは上に世になくきよらなる玉のをのこ御子さへうまれたまひぬめづらかなるちこの御かたちなりといふをうけてかけり遊仙窟幷に萬葉集に艶の字をにほふとよめるこれなり朝日の匂ふ花のにほふなどおなじ下にゐにかける楊貴妃のかたちはいみじき繪師といへども筆かぎり有ければいと匂ひなしといへり取合て見るべし
わりなくまつはさせ給ふ　今案わりなくの注に無別日本紀無破とあり日本紀に無別の言まだくなし無破は菅家萬葉にあり
此御子をよすげもておはする　抄萬に助及と書をとなびたることなり　今案萬葉に助及の言まだくなし不可用

まかなともいとたゆげにて　孟目也　今案萬葉第七云「大舟をあらみにこぎいでやふねたき我みしこらか目見はしるしも　目をあけて物を見る目つきをいふなり目也とのみある注は足らず

かきりとてわかるゝ道の悲しきにいか生行まほしきは命なりけり　今案いかまほしきはとは生に行といふを兼たるにてこそ歌たるを諸抄に此意を注せられず今類歌とも覺えたる限りいだして證すべし

拾遺別
鳥山にいく嘆のみ行ければとゝめんよしもなきわかれかな　盧秀法師

同卷三
何せんに命をかけてちかひけんいかはやとおもふ時もありけり　實方朝臣

後拾遺
しぬはかり歎きにこそはなげきしかいきてとふべきわか身ならねば　小式部内侍

新古今別
都にもおもふ人のみおほかれば猶此たびはいかんとぞおもふ　藤原輔尹

同
別路はこれや限りのたびならんさらにいくべきこゝちこそせね　道命法師

大和物語
しねとてや取もあへずはやらはるゝいといきがたきこゝちこそすれ

後拾遺哀傷
別れにしその日ばかりはめぐり來ていきも歸らぬ人ぞ戀しき　伊勢大輔

御つかひのゆきかふほどもなきに　今案河海に交加をゆきかふとあるは何に出たるにか萬葉には往反と書り

おたぎといふ所に　河鳥部野をいふなり　今案和名抄に愛宕郡に鳥戸の外に別に愛宕鄕あり

猶おはするものとおもふか　今案土佐日記に「あるものとわすれつゝ猶なき人をいつくととふぞかなしかりける

ゐはせのなだらかに　河平日本紀　今案日本紀に平の字なだらかとよめることなし

すげなし　無人望日本紀　今案日本紀に此言なし

なくてぞとは　奥入「ある時はありのすさびににくかりきなくてぞ人は戀しかりける　今案奥入にひかれたる歌今考ふれば六帖第五物語「ある時はありのすさびにかたらはで戀しきものと別てぞしる　此歌はありて奥入の歌なし何に出たるにや

にはかにはたさむき夕暮　孟津莽花ともに肌寒將寒兩說なり將を可用なり　今案萬葉に膚の字を書て

はたへさむしとよめる歌おほし將の字をかけることなし

おもかけにつとそひて　集ツト日本紀　都ツト　今案日本紀に集の字をつと丶よめるとなし推量するに神集をかんつとへとよめるを心得損したるかそれはつとふにてこそあれ又都の字もつと丶よめる事なしすべてとは常によめり日本紀にはふつともかつてともよめり

宮木野の露吹むすぶ風の音に小萩がもとをおもひこそやれ　細宮木野は宮中の心なり花露吹むすふは泪をいふ　今案赤染衛門が家集に野分したるあしたにをさなき人をいかにともいはぬをとこにやる人にかはりて

新古雜下あらし吹かせはいかにとみや木野のこはきが上を人の

新古露もとへかし　この類歌によれば宮木野は唯こはぎをのたまはん料にて宮中にかくるまでは有まじき歟露吹むすぶ風の音とつゝきたる意涙にも有まじき歟

もゝしきにゆきかひ侍らんことは　河百官の座をしく故に禁中を百敷といふ　今案萬葉に此詞おほきに百磯城百師木などかきてて一所も百敷とかけることなし又百官もまだ定まらぬさきよりの詞なり又百官といふは大數にてこそあれ河海の說おぼつかなし

歌いと丶しく虫の音しげき淺ちふに　今案河海に此注に後撰秋中にある近江更衣の五月雨にぬれにし袖をといふ歌を引給へるに後拾とあるは傳寫の誤なるべし

いとさう／＼しく　抄寂寞サウ／＼シ和名さびしきなり　今案和名に此言なしさび／＼しといふべきをさう／＼しといふ和語の習此類おほし萬葉にさびしきには不樂とも不憐ともかけりつれ／＼なるをのみさびしといふにはあらず萬葉によめるには此字の意によめる歌あり

いとうしろめたう　河影護ウシロメタシ和名心もとなきやうの義なり　今案和名に全く影護の字なし凡かやうの態藝の字は和名に出さずまれ／＼事のたよりにあるをはおく

歌あらき風ふせぎしかけのかれしより　今案拾遺雜下東三條太政大臣の長歌に「たのもしき陰にふたゝ

びおくれたりふた葉の草を吹風のあらきかたにはあてしとてせはきたもとにふせぎつゝ云々

ゑにかける楊貴妃のすがたはいみじきゑしといへども筆かぎりありければいとにほひなし　今案枕草子にゑにかきておとるものといふ中に物語にめでたしと聞えたるをとこおんなのかたちとかけり

いとおしたちかと〳〵しき所　河最押立(イトオシタチカヽシ)才日本紀　今案日本紀に才の字をかととよめれどかくつゝきたることまたくなし今のかと〳〵しきは才の字の意とはほえす唯石などのとがりたるかどの心なるべし

すべていひつゞけばこと〳〵しううたてぞなりぬべき　今案新撰萬葉に素性のうたてにほひのといふ歌を別様とかゝせたまへり

くにのおやとなりて云々またその相たがふべしといふ　今案又の字に太上天皇の尊號を得たまふべき意こもれりおほやけのかためとなりて天下をたすけばみだれうれふべからんずる相はたがへてよかるべしといふこゝろに見たる人は又の字をうしなへり

きはことにかしこくて　孟贈妹(キヘコトニ)　今案each際にてきは

ごとにとこの字にごるべしその故は上にいよ〳〵みち〳〵のざえをならはさせ給ふといふよりつゞきたれば其一才その一能ごとに堪能なりといふ也

うけばりて　孟諾(ウケバリ)　同承諾はゝかることもなきをいふなりわれはとおもへる體也　今案諾の字日本紀にうめなりともうへともせともよみたれどもうけばりとよめることなし此よみ何に出たるにかおぼつかなし唯人のうけてそむかぬ意なり憚ることもなきをいふなりといふもわれはとおもへる體なりといふも叶はず

こよなく　無越(ヨヨナク)　奥入　孟ことの外といふ詞なり　今案中務[illegible]集に春宮の殿上人扇奉るに「こよなくもけふは涼しきたもゝゆゑあふく袖さへ秋になりつゝ

　これに過てこゆることなき意なり殊の外も末にてはかなふべきか初は叶はず

なづさひ　孟昵近(ナツサヒ)なれむづふ事也　今案此詞ことに萬葉に多し意に孟津のごとくみゆれどその字は見ゆる所なし

こぎでんの女御また此宮とも御なかそば〳〵しきゆゑ　湖側(ソハ)々敷と書ききまにひかはぬ意なり　今案うつ

ぼ物語菊の宴の櫱宴神歌に「うばそくか行ふ山の椎かもとあなそば〳〵し床にしあらねば　柧棱を文選にそば〳〵しと讀り和名抄云柧棱（柧棱二字和名曾波乃木）木名也又四方木也かと〳〵しければものにさはる意なりそば〳〵するなと常にもいふ言葉なりそばの木もそは〳〵しき木にて名づくる歟蕎麥をそばむぎといふもかどある故也胡瓜をそばうりといふもふくれ出たるものおほければなるべし側々は暗推の字ながら末にてはかなふ意あるへし

みづらゆひ給へる　河髮以(ミヅラ)　今案此二字出る所をしらず和名抄云唐韻云髻（計反和名毛止々利）鬟也四聲字苑云鬟（音還）和名美豆良一云訓上同屈髮也

いとかうきびはなるほどは　河稚(キビヘ)日本紀　今案日本紀に稚の字神代紀　わかしとはよみたれどきびはと點したることなし　肝稚(キモワカシ)舒明紀

帶木

すきこと　海逸(スキ)日本紀數奇白氏文集　今案日本紀に逸の字すくとよめることなしもしすぐともすぐるともよめる處はある歟末考數奇は漢書李廣傳に出たりこれは別の義あるうへ音訓大きに違へり嗜の字好の字などはすくとよむべき字なれど何れの字もまさしくすくと點せるを見ず

内の御物いみ　海儀軌曰云々　今案儀軌は秘密の經の中に佛菩薩を供養し奉る作法の儀形軌則を說給へる所を拔出して譯したれば儀軌といふ儀軌すなはち經なり眞言に八家ありて名請來の經儀軌多き中にかやうのこととける儀軌なしこれは本朝陰陽家の僞作なるべし物忌の和訓をもて齋戒の齋の字をものいみとよめり

をさ〳〵たちおくれず　今案萬葉第十四東歌に「とやの野にをさきねらはりをさ〳〵もねなへこゆゑにはゝにころはえ此歌をさ〳〵詞のはじめなりをさきねらはりはうさきねらはれにてしのひてかよふ女の母の聞つけてかり人の兎をねらふごとくうかゝひねらひて見つけらるゝなりをさきを承てをさ〳〵といへりねなへてゆゑには不寐子故(ネナコユヱ)になり子とは女なりはゝにころはえは母被嘖(ハヽニコロハレ)なりまた大和ものがたりに故兵部卿の宮此中納言の君にしのひてねたまひそめてけりとき〳〵おはしまして

後此宮をさ〳〵とひたまはざりけり又やがて此下に殿上にもをさ〳〵人すくなにとあるなどを引合せていづれにもわたりてかよはせば大かたといふに似たり

むつれ聞えたまひける　孟津引歌「おもふとて何しに人にむつれけんしかならひてぞ見ねばこひしき　今案此歌は拾遺戀四にあり上句おもふとていとこそ人になれさらめとあり暗記のあやまりてひかれけるにや

おほとなぶらちかくて　今案おほとのあぶらを乃阿切奈なればつゞめてかくいふは芳野にあるといふべきをよし野なるなといふにおなじ燈は油にてともすものなればあぶらといふ和名に燈盞を阿布良都伎とよめり萬葉第十八には燈を安夫良火といへり

かたわなるべきもこそとゆるし給はねば　注頑片輪(カタワ)　今案まづかたわとかける假字誤りて注もこれに随ひてあやまれり鳥の片羽よりいふ詞なればかたはとかけりうつぼ物語初秋の歌に「つはものゝはらにやとるはつらけれとかたはに見えぬおとやなりけり「大鳥のはねやかたはに成ぬらん今はおとやに霜のふるらん「かたはなる名(はなるイ)のおとやにも聞ゆるはおもひいらるゝころにもあるかな「秋の夜の數をかゝせんしきの羽の今はおとやのかたはにはせん

おのかじゝうらめしきをり〳〵　河各競(オノガジヽ)日本紀　今案日本紀の中に此詞なし　萬葉第十二に「各等(オノガ)師ひとしにすらじ妹にこひ日にけにやせぬ人にしられず　貫之家集に「置露の心やわけゝる菊の花うつろふ色のおのがじゝなる　六帖に「戀はみなさまさまありと聞なへにおのがじゝとぞねはなかれける　拾遺物名　四十九日　輔相「秋風に四方の山よりおのがじゝ吹にちりぬる紅葉かなしな

まちがはならん夕ぐれ　今案拾遺雜戀にまた少將に侍りけるときうねめまちのまへをわたりけるにあすかのうねめなかめいだして侍けるにつかはしける　小野宮太政大臣「人しれぬ人待がほに見ゆめるはたかたのめたるこよひなるらん　返し　明日香采女「池水のそこにはあらでねぬなはのくる人もなしまつ人もなし

そこにこそおほくつどへ給らめ　注足下也　今案そこを足下と心得るは大きに誤れり萬葉にはそこは彼處こゝは此處と書て和語なりそなたもこなたもといふことをそこゝもとつゝけよめり

たゞうはべばかりのなさけにて　今案萬葉第四　湯原王「うはべなき物には人もしかばかり遠き家路をかへすとおもへば　同　家持「うはべなき妹にもあるかもかくばかり人もこゝろをつくすと思へば　ともにうはべのなさけのなしといふこゝろなり後の歌に得羽重無とかけるによれば表邊の意ながらへの字九重などの類に音便をよむべき歟

おひさきこもれる　尖(オヒサキ)　同　苗　今按此二字何に出てたるか日本紀などには見えず唯生前(オヒサキ)の意なり

たゞかたかどを聞つたへてこゝろをうごかすこともあめり　今案古今序にゑにかける女を見ていたつらに心をうごかすがごとし

それしかあらじとそらにいがゝはおしはかりおもひくださむ　今案　河下さん　孟廢さんの兩義廢さんもことわりはあれど下さんさしあたりて聞ゆ

世にふるたづきすくなく　今案萬葉第一にたづきを鶴寸と假字にかき第十二には多頭寸とかけり又第九には田時とかけり然ればもとはつもしを濁れる詞なり

ずりやうといひて人のくにのことにかゝづらひ　今案史記伍子胥傳に鞅々をかゝつらふとよめり

そひふしたまへる御ほかげいとゝめでたく　河火影日本紀　今案火影といへる詞日本紀になし萬葉第一に「燈の陰にかゝよふうつせみの妹かゑまひしおもかけに見ゆ」

文をかけどおほとかにことえりをしすみづきほのかに心もとなくおもはせつゝまたさやかにも見てしがなとすべなくまたせ　今案返事のすみつきほのかにて心もとなければなほさやかなる返事を見てしかなとおもひてまた文をやればすべもなきまて返事せずまたせてとにかくに人をなやますなり

ひさうなきいへとうし　細貧相なるなりきの字は添字なるべし此類詞に多き歟　今案無二貧相一(ナキヒンサウ)王人母(イヘトウジ)といふなるべし遊仙窟に主人母をいへとうじと點せり六帖第五の題に家童子を思ふとあるをある人流布の印本に他のかきたる本にて校合したるには

假名にてとじとあり日本紀第十三に允恭天皇の后忍坂大中姫いまだをとめにて母の御もとにおはしましける時闘鶏國造（ツゲノクニノミヤツコ）中者のとじと呼まゐらせけるをはらたちてふづくませ給へるとありそこに戸母此云二覩自（トジ）一とあれば家をまかなひをさむる以上の老女をいふ故にはらだゝせ給へるなり和名に負をとよむ所にもくはし萬葉第四には坂上郎女が娘におくる歌にわが子の刀自とよめれは老少に通していへり家童子とわろく心得たるより六帖にも後の人眞名にかける歟としをとうしといへるは音便なるべし

涙もさしぐみ　今案後撰に「いにしへの野中のしみつ見るからにさしくむものはなみだなりけり

あはつかにさしあふぎゐたらんはいかゞは口をしからぬ　明あは〳〵しくいひてさしむかひ居たるなり

今案さしあふぎゐたらんはといふは何ともせぬ意なりさしむかひ居たるなりとのみいふはかなはず

いとくちをしくたのもしげなきとがやなほくるしからん　箋浮なり或說にとかや詞也　今案とがは難の心なり詞といふ說はしかるへからす又注に猶くるしからんといふをひさうなきいへとうじといふにかけたるもしからずたゞひたふるにといふよりつみゆるしみるべきをといふまでにかけて心得べし

あまりのゆゑよし心ばへ打そへたらんをばよろこびにおもひ　弄故とは種姓などにや由とはよせあること歟おなじことながらすこしかはるべき歟心ばせはその外なるべし　今案萬葉第九見二菟原處女墓一歌の總に處女墓中儞造置壯士墓此方彼方二造置有故縁聞而雖不知新喪之如毛哭泣鶴鴨此故縁たとへば眼目といひ淸淨といふ一義とも見ゆればいまのゆゑよしもあまりのゆゑともあまりのよしともいひては文章もわろくことわりもきこえねばさてかくはいへるなるべしよろこびにおもひは俗にいふ拾ひ物の心あり

ふるごたち　河後漢書註鄭玄曰禮記云居之言後言在二夫之後一故以レ女謂二後達一　今案故より下の六字おほつかなし後漢書を考ふべし御等と云意成べし本期文粹第一賦二少男女一詩　會使跣彈レ琴者閭巷稱二辨御一（俗謂貴女爲レ御蓋取二貴人一女御之義也）何御といふたぐひ貴女より

おこりてさらぬにもいへり

あたら御身を　今案大和物語に平仲が色このみけるさかりにといふよりをとこぞよにいみじきことにしけるといふまでの武藏がことの一段こゝに似たり

うちひそみぬかし　舌出(ヒツム)　遊仙窟　今案遊仙窟に舌出の字なし萬葉第四に家持「百年爾老舌出而與余牟(オイシタイデヽヨヽム)とも我はいとはじ戀はますともこれを六帖第二におんな(嫗なり老女のことなり女にはあらず)の題においくちひそみなりぬとも我は忘れじと引なほして入たり此老舌出の詞を誤て遊仙窟と引なりよゝむとは下にかをる大將のいときなき時たかんなをつと握りてしづくもよゝにくひぬらし給へりとあるに合せて案すればよだれをたるゝをいふかよだれといふもよを垂るゝにてよとはつの流れ出をいふかよゝとなくといふも是なるべししつくもよゝといひてさぐりあぐる聲にあらず

そのおもひいでうらめしきふしあらさらんやあしくもよくも　今案注にこの廿七字異本になしといへり

なきは落たるなりその故はあまにもなさでたづねとりたらんもやがてあひそひてとあらんをりもかゝらんきさみをも見すぐしたらん中こそちぎりふかくあはれならめとはことわりのつゝかぬなり猶おもふにやがてそのといふ下にをりなどいふことの落たらんにや

むげにうちゆるべみはなちたるも心やすくらうたきやうなれどおのづからかろきかたにぞおぼえはべるかし　今案拾遺戀五に「恨みぬもうたがはしくそおもほゆるたのむ心のなきかとおもへば　おもてはこのうたのこゝろみえねど下のこゝろはかよふべし

けぢかきまがきの中をはそのこゝろしらひおきてなどをなん上手は

いきおひことにわるものはおよばぬ所おほかめる

今案有意(コヽロシラヒ)　日本紀第廿八天武紀上

かたちなといとまほにも侍らざりしかば　箋まほ　まほとはまをともよむ千載集にむすこけのまほならずともとよみしは眞靑の心に用る也また萬葉に潸舟のまほにも妹にと讀しは眞帆なりしかれどもまをと讀べし　今案衍の歌は千載戀三　待賢門院安藝「そなれ木のそなれ〳〵てむす苔のまをなら

ずともあひみてしかな　まほはかたほにむかひたる詞なるを此歌に眞青とよせたるは假字遣ひのその頭よりわろくなれる故なりかたほなるといふにむかひたるまほなればまほなりそれをまをのごとくいふより假字の沙汰なき頭蓋を逢にさへなしてよみければむすこけの眞青とはつゞけたるなり假字をはよく沙汰してかくは讀むましきことなり後の歌は早蕨の卷にまたく引けりしかれども萬葉にはかたくなき歌なり

おもてぶせにやおもはん　今案後撰集春中　躬恒「かさせども老もかくれぬ此はるは花のおもてもふせつべらなり

人なみ〳〵にもなり　今案萬葉第十八大伴家持敎ニ喩史生尾張少咋ニ歌の中に云「ちさのはなさけるさかりにはしきよしそのつまのことあさよひにゑみゝゑまずみうちなげきかたりけまくはとこしへにかくしもあらめやあめつちの神ことよせて春花のさかりもあらんとまたしけん時のさかりぞ云々こゝに似たり

およひゝとつを　箋小指也　今案註誤れり和名云指皆反和名由比俗云於與比　儀禮云李和名古於與比小指第五指也これ指を總しておよひといへり」

影もよしなどつゝしりうたふ　花一説飛鳥井は京にある清水也二條萬里小路にありと云り　今案蜻蛉日記によるべし大和の明日香にあり

すきたはめらん女には　河婬婇(スキタハム)　今案此字何にか出たる

わづらはしげにおもひまつはすけしき見えましかば　今案萬葉第十三の歌散浪の思纒(オモヒマツハシ)若草乃思就(オモヒツキニシ)西云々

ごくねちのさうやく　今案後拾遺　誹諧にひるくひて侍ける人今は香もうせぬらんとおもひて人のもとにまかりたりけるになこりの侍りけるにや七月七日に遣はしける　皇太后宮陸奥「きみかゝすよるの衣をたなはたはかへしやしつるひるくさしとて

さるへき節會など五月のせちにいそぎまゐるあしたなにのあやめもおもひしづめられぬにえならぬねをひきかけ　今案なにのあやは菖蒲にかけていへりえならぬは伊勢ものかたりにこのはふりしくえにこそありけれわたれとぬれぬえにしあればなど江に

縁をかけて淺きことにいへば淺からぬをえならぬといふ歟それに取て深きためしには堀江などを引ていふことにて江は淺からぬ物なればこれは江にはあらで瀬をいふ歟えとせと同韻にて通する故に兄をせともえともよむこれに准らへて知べししからばえならぬねはふかき根すなはち上のあやめのねなりそれを深くおもふなかく忘れじ又はいはひにもよみかくらは藥玉かくるに縁ある詞なれば引かけといへり

九日のえむにまづかたき詩の意をおもひめぐらしいとまなきをりにきくの露をかこちよせなどやうの今案菊の露をかの菊水などにことよせて歌よみかくるをかこちよせといへり

つきなきいとなみにあはせ　注かのかたき詩を思ひめぐらすいとなみにさしあはする也　今案此注叶はずあはせはうきめにあはするなといふに同じかたき詩をおもひめぐらして作らんとするに心もなく歌よみかくれば返しせざらんもさすがにてまたこれをさへよまんとするをつきなきいとなみするめにあはするといふなり

きぬの音なひはらく〳〵として　今案日本紀に喧響の字をおとなひとよめり詞花集雜上にしのびたる男の鳴りけるきぬをかしかましとておしのけければよめる　和泉式部「音せぬはくるしきものを身に近くなるとていとふ人もありけり

やをらより給ひて　注やかてといふ意なり又靜なる義なり　今案やをらはやはらかにて柔らかなり他の物語にはすなはちやはらかといへる所もあり俗にそろりとゝいふにかなへりやはらかなれは靜なる義といふはかなへりやかてといふはあたらず

このちかきもやに　今案母屋とかくは母は音にはあらずおもやの上略也日本紀萬葉などの歌におもふをもふとのみよめるになすらふべし母を古語におもといへるはそたつる恩の重き故なるべしおもやを本としてさま〳〵の屋ほそ殿ひさしなどの出くるはあまたの子に似たればさておもやとはつけたるなるべし又延喜式に身屋とかゝれたる所ありみともとかよへばこれももや歟身狹とかきてむさとよむもみとむとかよへばなり身狹は大和高市郡にある地名なり

式部卿の宮の姫君にあさがほたてまつり給ひし歌などをすこしほゝゆがめてかたるもきこゆくつろきがましくうたずしかちにもあるかな　細圓は方に初まる物なり歌を正體にも語らざるなり　孟方圓なりすくにもかたらぬなり四方のものをすぢかへはゆがむなりそばつらをいふことなり　今案古注あたらず和名抄云野王按云頰音俠和名豆良一云保々面旁日下也かほをかたぶくればほゝのゆかむなりくつろぎかましくといへる此心なり枕草紙にも夏ひるねしておきゐたるえせかたちはつやめきねはれてようせずばほゝゆかみもしつべくといへり方は甫亡（ほはう）切にて假字はうなりこれによりて萬葉などには波のかなに用ゆ今はほゝとかけるにも心のつかざるなり

いとけはひあてはかにて　河勝人（アテビト）妙（アテ）　細姫妍（アテハカ）日本紀　今案河海に出されたる字何に出たるしらず細流に出さるゝ字日本紀の中にあてはかといふ言あることなし

伊豫のすけはかしづくやきみとおもふらんないかゞはわたくしのしうとこそおもひて侍めるを　今案大和物語に云本院の北の方のまだ輔の大納言のめにていますかりけるをりに平仲がよみて聞えける

「春の野にみどりにはへるさねかづらわがきみさねとたのむいかにぞ

女君はたゞこのさうじぐちすぢかひたるほどにぞふしたるべき　今案すぢかひは筋替（スヂカヒ）角違（スヂカヒ）など心得る人あるべしすぢるといふ詞あればすぢりちかふといふなるべし

ありしながらの身にて　細「取かへす物にもがなや世の中をありしながらの我身とおもはん　今案此歌何にか出たる六帖めきたれとなし

あごはしらじな　河吾子日本紀　今案日本紀にはこに濁音の字を用たればあごなりあきともいへりふるくはわれをおほくあれといへりあとわと同韻にて通ず自他に通じておのれといふごとくわれといふ詞もまた自他に通ずればわぎみわどのなどいふわも我なりさればあごもわごといふなり

ふつゝかなるうしろみ　今案萬葉十七に太馬をふづまとよみたればふつゝかは人のふとり過たるがいやしけなればそれよりおこりてよろづのとしななくてしたゝか過たるをふつゝかといふ歟末摘花の

巻にみちのくにがみのあつこえたると文かける紙
さへわろきことをいふとてかけるも准らへておも
ふへし人のやせすぎ紙のうすゝぎたるもわひしく
わろけれどふつゝかなるとあつすぎたるとのわろ
きまではあるまじきなり

人あまた待めればかしこげにと聞ゆ　注おそれがま
しといふ心也　今案注は似て叶はずむつまじくさ
しこめられて候上に人もあまたさふらひてゐてた
てまつらんことはおそろしげに見え候と申なり

空蟬

ないがしろにきなし　注しとけなきなり　今案蔑(ナイガシロ)
此字なり物ともせぬこゝろなりこゝにてはきたる
物かともせぬ様なりしどけなしと注せるもたかへ
るにはあらねどよくは叶はず

くれなゐのこしひきゆへるまでむねあらはに　今案
神代紀云天鈿女乃露二其胸乳(ムナチ)一抑二裳帶(モヒモ)於臍下(ホソノシタ)一而笑(アザワ)
噱向立これにてかけり

はうぞくなるもてなしなり　河傍側花飽足　今案放
俗なるべしはを清みそを濁るべし

かいまみなどはまだしたまはざりつることなれば

孟
垣間見(カイマミ)　萬聞(カイマミ)　今案萬葉に垣間見なしされど日本
紀に覗其私屛をかいまみとよめるもこゝろは垣間
見なり聞の字かいまみとは何によめるにか

風ふきとほせとてたゝみひろげてふす　細屛風なる
べし次の詞に見えたり　今案疊廣げ歟あつさをわ
びてくつろぎふす心歟たゝみひろげにふすとあり
けんをひろげてと寫し誤る歟そのゆゑは風吹とほ
せといはゞひろげたる屛風もたゝむべきことわり
なり又たゝみたる屛風をたゝみといふべからず又
とはかりそらねして火あかきかたに屛風をひろげ
てといへることと重疊せり

かのぬきすへしたるうすぎぬ　今案日本紀第廿九に
垂髮于背(スヘシモトヽリス)これによればぬきたれたるといふ心なり

うつせみのはにおく露のこがくれてしのび〳〵にぬ
るゝそでかな　今案此歌全篇伊勢集に有といふ古本
には有けるにや今考ふるにあることなし「空蟬は
おもふに聲したゝざらばまた衣手に霜はおきてん
此歌のみあり古人覺え損じけるか

夕顔

打よろぼひてむね〳〵しからぬ軒　今案徙倚(ヨロホフ)日本紀

かたほなるをだに　孟綱纖（カタホ）日本紀　還（カタホ）延喜式（カタホ）　今案上の字頑嚚になしいかゞ　細かたほは頑也頑愚のこゝろおろかなる心なりほの字濁みてよむべし　河海をさなくかたなりなる心と云々いかゞかたはと云詞なりかたくなる〳〵をたにもあるを源はいかばかりとなり　今案めのとなどやうのおもふべき人はあさましうまほに見なす物をましていとおもたゞしうとつゞけていへり　萬葉に左右又諸手又二手とかきてまてとよめるは眞手にていづれにても一手を片手といふに對する詞なりこれに准らふるにかたほとまほとも對せる詞なれば頑と注し給ふも叶はずこく船のまほにもとつゞけたるによらば片帆眞帆にてかたほはそはむきなる追風にかたほにかけまほはたゞしき追風に眞帆にかくる心によせて云詞歟神樂歌に「ゆふしでの神のたき田のいなのほのもろほによればこれといふ　此もろほは稲のほなりこれはこなたかなたよりなびきあふをいふ歟もしは二莖ならび出るをいふ歟此もろほもかたほに對する詞なれどこれにはよるべからざる歟つきじろひめぐはす　今案和名抄云說文云觝（丁禮反與漢語抄）云牛[illegible]木之頁比　以レ角觸レ物也この觝の字つきしらひとよみたれど今は衝突などの字なるべしめぐはせは史記項羽傳には眴の字を用離騷には目成とかけりやうめいのすけなる人の家になん侍りける　今案つれ〴〵草に政事要略に揚名目ありといへり介と目との間に椽あれば揚名椽といふものもあるべきことわりなりかやうにかねておもひしに揚名問答にひかれたるにはたして椽の字あり新續古今集雜中云源氏物語の揚名介のことを忠守朝臣に尋侍るとて申送りける　藤原雅朝朝臣「つたへ置跡にもまよふ夕かほのやとのあるじのしるべともなれ　返し丹羽忠守朝臣「心あてにそれかとばかりつたへきてぬし定まらぬ夕かほの宿　揚名介は所傳もたしかならぬこと此返しに明白なり名づくる心をおもふに只名のみをあげてまことの介のごとく國務を司どることもなく權官のごとく祿を得ることもなき故なるべし

御こゝろざしの所には　今案六條の御息所はいつころいかにして思ひそめたまへるよし右に見えずかやうにうちまじへたる文章なり御心ざしの所とい

ふにて淺からずおもひたまへることとみえたり
あさげの御すがたは　今案萬葉の歌引が如し第十二の最初にあり「朝鳥はやくな啼そ我せこがあさげのすがた見れは悲しも　又朝戸出のすがた夜戸出のすがたともよめり
かたちなどねびたれど　注調行（ネビユク）　年たけたるをいふ　今案調行の字何に見えたる歟此詞かやうのかんな物語なとの外みえぬにや
なのめならぬかたは　細なべてならぬなり　今案大形ならぬこゝろなりなべてならぬとはすこしかはれり
なげのふでづかひ　河なけはないがしろなり　秘なほざりの筆づかひなり　今案ないがしろは輕慢の心あれば不叶ものをなげやる心なればなほざりの心なるべし六帖に
ほど／＼につけてわかかなしとおもふむすめを　鈔不レ重レ生レ男（コトヲ）重レ生レ女（コトヲ）　長恨歌　今案こゝに引長恨歌の句心かなはず
みなみのはしとみあるながやに　孟橋の寺の中屋に　今案引所の歌萬葉第十六に長屋とかけり誤れり

右近の君こそ　鈔こそとは官女をうやまふていふ詞女嬬こそといふが如し　師こそとは人をよびかくるとていふ詞なり下の詞にも北殿こそとてあり　今案よひかくるとていふ詞といふ說は誤なり初の說よしすゑに京にこそといふ詞も同じ詞と見えたり後拾遺にすまひこそといふ女の名あり宇治拾遺に地藏菩薩を地藏こそといひ花こそ物はおもはざりけれといふ歌を通俊卿難ずとて花こそといふを女の名のやうなりと申されたることとあり大和物語にも聞給ふやにしこそとあり
たしかにその車をみましとのたまひて　今案見ましをと有けんをその字落たる歟
おひまどはしてなのめにおもひなしつべくば　注俗におひにかしなどゝいふ心也今案此注誤れり此おひは跡をおひたづぬるなりまどはしは尋まどふ也
くまなき月かげひまおほかるいたや殘りなくもりきて　今案「君なくてあれたるやとのいたまより月のもるにも袖はぬれけり
なりはひにも　孟東作稼穡（ナリハヒ）　和名田宅（ナリハヒ）日本紀　今案ともにあるをなし日本紀に田家をなりどころとはあり

うはそくがおこなふ道をしるべにてこん世もふかき契たがふな　今案上に明がたちかうなりにけり鳥の聲などはきこえでなどいふよりみればこん世も深きを來ん夜も深きとそへたるにや

ゆくさきの御たのめいとこちたし　今案こちたしは萬葉に言痛とも事痛ともかきて多き詞なり心にかはる所ある人の言をいたむと事々しきと事おほきと也今はことおほき意なりおほきなる心なりといふ注は不叶

ゆくりなくあくがれんことを　今案不意(ユクリナク)日本紀

にはかに雲がくれて明行空　今案物にとらるべき前表めきてかけるにや

おき中川　今案水原抄等に奥中河とある説は大きに誤りなり引ところの歌は萬葉第二十に有て於吉奈(オキナ)我河波(ガガハ)とかけり日本紀第二十八云男依等與ニ近江軍一戰ニ息長横河一破レ之延喜式第二十一諸陵式云息長陵 舒明天皇之祖母名曰ニ廣姬一近江國坂田郡 これらを引合せて考ふるに近江國坂田郡にある息長河なり萬葉に奈我とかけるも長にて中にあらぬ證なりにほは水鳥にて息の長き物なれば枕詞におけりいきを萬葉にはおきその風ともいへり延喜式兵部式に近江國横川驛あり横川を息長にあれは息長川といふなるべし

つと御ゝかたはらにそひくらして　孟集(ツト)日本紀　今案誤りは上にいふ如し

見る人もくるしき御有さまをすこし取捨ばやとおもひくらべられ給ひける　箋夕かほのあまりおほときてさしむかひの心やすきと御息所の心ふかくとりぐるしき心を思ひくらべて互に取捨たく思ひたまふなり　今案夕かほをこゝにはなに心もなきさしむかひをあはれとおほすまゝにと云るは取捨たきこゝろあるにあらず此めやすきにくらべてあまり心ふかくみるもくるしきまでなるを取捨たきとなり

われかのけしき　孟夢だにも何とも見えずみゆれどもわれかもまどふことのしげきに　今案これは萬葉第十一の歌なり一二の句夢にだに何とも見えぬ落句こひのしげきになり此歌は不叶引歌に及ばねども古今の歌を引けるはわれかといふには叶へり

隨身もつるうちしてたえずこわづくれ　今案梓弓つ 萬葉第四 ま引夜音(ヨト)の遠音(トホト)にも君がみゆきをきかくしよしも

同上一　はや人の名におふ夜聲いちじろくわか名をいひてつまとたのまん

物の足音ひし〳〵とふみならしつゝ　今案萬葉の長歌にこのとこのひしとなるまでさげきつるかも

みづわくみて　孟日本紀云々　今案罔象此云三美都波一みづわぐむと假字ことなりまたくむの詞そへりみつわくむを又はみづわさすとも云り日本紀を引說は誤りなり

ことのさまおもひめくらしてとなんこしらへおき侍りつる　今案喻日本紀

みあかしのかけ　今案日本紀云大拾燃燎

つゝみのほどにて　今案大輔を堤中納言といひ大和物語に監命婦のつゝみなる家をうりてとあり所の名なり

かゝるみちのそらにてはぶれぬべきにやあらん　今案萬葉第十五挽歌云いめのごと（夢也いぬは）みちのそらぢにわかれする君　こゝの引歌「立て行ゆくへも知らずかくのみぞ道の空にてまどふべらなり　これは何にある歌にか見なれず新古今戀三　道信朝臣「心にもあらぬ我身のゆき歸り道の空にて消ぬべき哉　孟放埓いたづらになるやうの心なり　今案はぶれはこのものがたりに多き詞なりあぶれともあり委は古今の心をだにもはぶらさしの歌に見およふものを引て注す日本紀の崇神紀に溢の字を用たり古事記には波布理と假字にかゝれたり孟津に放埓とあるは音にてはうらつにて常にもいふ詞なりはぶれとは大きに違へりそれにつきいたづらになるやうなる心なりとあるは俗に好色なとに放埓なるをいたづらものといふそのこゝろかこゝにていたづらになるといはゞ此かみにかくはかなくてわれもいたづらになりぬるなゞめりとおぼすとあるごとくむなしく死ぬる心なり更に叶はず

川の水にて手をあらひて　今案敏達紀云於是綾糟等懼然恐懼乃下ニ泊瀬中流一向ニ三諸岳一漱レ水而盟曰云々

足を空におもひまどふ　今案萬葉「立居するたどきもしらず我心あまつ空なりつちはふめども「わぎもこか夜戸出のすがた見てしより心そらなりつちはふめとも「立とまりゆきみの里に妹を置て心空なりつちはふめども「下野のあそのかはらゆ石ふ

まず空ゆときぬよなが心のれ　いせ物がたりに云
野にありけども心は空にて

御(み)つかひあめのあしよりもげにしげし　今案兼盛集に「君を思ふ數にしとらばをやみなくふりそふ雨のあしはものかは文章にもしげきことには雨のごとし林のごとしなどいへり

あゐかに見え給ひしも　今案和名抄第九淡路國津名郡平安阿萬加此あゐかは鄉の名なり今のあゐかの心にてつけたる名歟しからは平安の字にて心得べき歟

いとしも人にと　今案孟津におもふとていとしも人になれざらんとひかれたる歌は拾遺戀四よみ人しらずの歌なり今の本にはいとこそ人になれさらめとあり古今の糸によるものならなくにを物とはなしにと引たる類なるべし

見し人のけぶりを雲となかむれば夕のそらのむつまじきかな　今案異本にむつかしきとあるは寫し誤れるなるべし新古今哀傷に同じ人の歌に「見し人の煙となりし夕より名そむつまじき鹽かまのうら
これを引合せておもふべし

うちとけてむかひゐたるひとはえうとみはつまじきさまもしたりしかな　注空蟬と軒端のむかひしことなり　今案此注の心ならばうちとけてのてもじ濁りて軒端の荻にくらべていよ／＼空蟬の用意ありしことをほめ給ふこゝろなるべしてもし清て軒端のことゝ見ば人といふ事の叶はねば誤なり

猶こりずまに　今案まはそへたる詞なり萬葉第十五にあはずまにしてとよめるもあはずしてなり

四十九日　細いづくにても訓によむべし　今案拾遺に藤原輔相が四十九日を音に隱題によめる歌もあれば只音然るべきか此次にいはく幾十よかとあるをもとをかあまりとよめといへるはこゝろ得がたしとをかあまりならばすくにさかくべし餘の字をかんなにかきたるを見ながらいかゞ訓にはよむべき五六日七八日なども作者は音を用ひてやかき侍りけん四五人など同じ

歌蟬のはもたちかへてける云々　今案後撰戀四につらくなりにけるをとこのもとにいまはとてさうぞくなと返しつかはすとて　平なかきがむすめ「今はとて梢にかゝる空蟬のからを見んとはおもはざ

りしを　返し　源巨城「わすらるゝ身を空蟬のから衣かへすはつらきこゝろなりけり

若　紫

ある人きた山になん　今案北山といふ處もあれどこれは北の方なる山なり河海に萬葉第二持統天皇の北山にたな引雲とよませ給へる歌を引かれたるはこゝをよませ給へるとこゝろ得給へるにや明日香岡本宮にてよみ給へる御歌なればその北なる山を廣くさし給へるなり

山のさくらはまだ盛りにて　今案こゝに赤人の歌とて引く歌は赤人にあらず家持集にありてはての句はまたさかずけりとあれば類例には引べし此歌によりてかけるにはあらず又引ける躬恒の歌家集にはなし玉葉集に入れり

さるべき物つくりてすかせたてまつる　今案日本紀第二十四皇極紀云以ㇾ水送ㇾ飯うつぼ物語に松の葉をすきてといへり

ゆほひかなる處に侍る　河寛ひろき心也「みよし野の大河のべのゆほひかに云々　今案ゆほひかに寛大の心とは見ゆれど引所の六帖ㇾ歌より外にはみえぬ詞か然ればその字と定べからず又大川のべのと引かれたれど現本大川水のとあり現本よき證下にいたりて見ゆべし

近衞の中將をすてゝ　今案佐理卿の大貳に請ひなりて下られしなどをおもひてかけるにや

すこしおくまりたる　河奥(オクマリ)日本紀　今案日本紀の中におくまるといふ詞なし萬葉におくまへておくまげてなどみゆる今の詞におなじ

かつは心をやれるすまひ　抄山にもあらず里近くて妻子のたよりよきやうに心をつけしすみかと也　今案此註誤れりわかきさいしの思ひわひぬべきによりかつは又心をはらしやりてなぐさまんためといふこゝろなり萬葉に思遣(オモヒヤル)とよめるはみな思ひをもらしやるなり想像をおもひやるとよめる心にはあらず今の心をやるこれに同じ　遣ㇾ悶遣ㇾ情遣ㇾ懐遣ㇾ憤などといへり

さいつころ　孟去何頃(サイツコロ)　今案さきつころをいはきと通ずればさいつころといふ去何頃は胸臆の作ㇾ字なり用べからず

人々かいりうわうのききさきになるべきいつきむすめ

今案娑竭羅は梵語こゝには海と翻すればかいりう
わうは娑竭羅龍王なりいつきむすめは萬葉第九に
きぬあやの中につゝめるいはひ子とよめるにおな
じ

つらつきいとらうたげにて　河　頰面様勞亮(フラツキオモヤウラウタケ)日本紀
今案此六字日本紀にまだく有ことなし

いぬる十よ日　今案よの字あり音なるべし下の此十
よ年にやなり侍りぬらんとあるをおもふべし

さかしら心なく　今案賢良(サカシラ)萬三情進同　同同情出同十六

歟うちつけにあさはかなりと　河　あさくはかなき心
か　今案たゞあさきにてはかはそこはかなどので
とくそへたる詞なり萬葉第十二に紅のうすぞめ衣
あさはかに又あらそめのあさらの衣あさはかにと
よめる歌に共に淺の一字をあさはかとよめり

佛はおのづからとておとなく／＼しうはづかしげなる
につゝまれてとみにもえたち出給はず　今案はづか
しげなるにといふまでは源のことつゝまれてとい
ふより尼君の心なり

歟さしくみに袖ぬらしける　源僧都兩説　今案後撰
戀四「いにしへの野中のしみづみるからにさしぐ
む物は涙なりけり　蜻蛉日記に人の家のまへ近き
いつみに八月十五日夜月の影うつりたるを女とも
見るほどにおほぢに笛ふきてゆく人あり「雲井よ
りこちくの聲を聞なへにさしくむばかりみゆる月
影

名もしらぬ木草の花とも色々に散まじりにしきをし
きけるとみゆるに　今案朗詠ニ野草芳菲紅錦ノ地　名
もしらぬ小草花さく川邊をといふ句はこゝを取て
作れり

おく山の松のとぼそをまれにあけてまだみぬ花のか
ほをみるかな　細山櫻戸をまれにあけての句法な
り　今案定家卿の歌は萬葉第十一「足引の山櫻戸
を明置てわがまつ人をたれかとゞむるこの歌を本
歌の本體にして腰の句あけ置てといふを今のこゝ
のまれにあけてといふにかへ下句花こそあるじ誰
を待らんは忩任卿の花こそ宿のあるじなりけれと
いふを取てわが待君をといふにあはされたれば彼
腰の句は此歌をとられたりとこそあるべきにかへ
りてこゝを彼句法といふは顚倒せり孟津に定家卿
の歌の下句をまた見ぬ花の色を見る哉とあるは暗

記の誤りか傳寫のあやまりかおく山の松の扉とは萬葉十一に「奥山のま木の板戸をおしひらきしゑや出こね後は何せん「奥山の眞きの板戸を音はやみ妹かあたりの霜の上にねぬ　同十四に「奥山のまきの板戸をとゞとして我ひらかんに入來てなさね　これらは眞木は奥山にあるものなればかくつづけたりこれらおなじつゞけやうなる上やがて所にかなひてよめり花のかほとよめる歌　後撰春下三條右大臣「きのふ見し花のかほとてけさみればねてこそさらに色まさりけれ　輿風集「うすくこき色はまがへと花といへばひとつかほにも見えわたるかな　拾遺「櫻花露にぬれたるかほみればなきてわかれし人ぞ戀しき

すきたるふくろにいれて　今案透たるか又網に結たる袋か河海に引たまへる萬葉の歌は叶はず

こんるりのつぼともに御くすりどもいれて　今案竹取物語に「今はとてあまの羽衣きるをりぞ君をころもとおもひ出るかとてつぼの藥そへて云々

「まことにや花のあたりは立うきとかすむる空の景色をも見ん　注花のあたりは立うきとのたまふも尤と誠にや見侍らん紫の故に立ぞわづらふとのたまふこと誠とうけがたしと下心によめる歌なり花のあたりはのはの字に心をつくべし　今案源氏の歌に夕くれにほのかに見たる花に紫の上を喩て花の縁に霞の立わつらふとよみたまへるをうけたれば尼公の花のあたりといふやがて紫なり花のあたりはまことに立うきなりと霞によせてほのめかしのたまふ心をけさの御ンたちのさまのけしきに見奉らんとなり霞は花にそひて立やすき物なれば也古今「君により我名は花に春霞野にも山にも立みちにけり後撰「春來れば花みんとおもふ心こそ野への霞とともに立けれ　上の注歌に叶はず野花に花の上にのみよめるといふもかなひては聞えず

けににくからずかきならして　今案氣不レ惡にてひとつのにはあまり物にや

とはぬはつらき物にやあらん　奥入「君をいかでおもはん人にわすらせてとはぬはつらき物としらせん　今案此歌何に出たるか　六帖五「こともつき程はなけれどかた時もとはぬはつらき物にぞありける　同六「我宿にきゐる鶯羽をよわみとはぬは

つらき物にぞありける
おもかげは身をもはなれず山ざくら心のかぎりとめてこしかど　今案我心の有ほどをば山櫻のもとにとめてこし物を何の心の身に殘ておもかげの立そふぞとなり

いかゞたばかりけん　河事計爲與萬葉（タバカリセヨ）　今案河海に引たまへる萬葉の句はことはかりせよにてこゝろはおなじけれど誤りなり日本紀に慮（タバカル）同計同測同方便これらみなたばかるとよみてはかるにおなじ

なきねにふしくらしたまひつ　今案六帖「夕さればなきねにふしくらしたまひつ君をまつちの山鳥のなく〳〵ぬるをたちもきかなん

おなじ人にやと　河「みなと入のあし分小舟さはりおほみおなし人にやこひんと思ひし　今案是は誤なり萬葉十一湊入のあしわけ小舟さはりおほみわがおもふ君にあはぬころかも十二「湊入のあし分小舟さはりおほみ今くる我をこすとおもふな　かくのごとくなればこゝに引歌にあらず古今「ほりえこぐたなゝし小舟こぎかへりおなじ人にや戀わたりなん

なけの御ことのは　今案後撰「ことのははなけなる物といひながらおもはぬためは君もしるらん六帖「あはれをばなけのことばといひながら思はぬ人にかくるものかは兼盛集「ことのははなけなる物とおもひせば何かは人のつらくしもあらん

人つてならで聞えしらせばや　今按後撰「いかにしてかくおもふてふことをだに人づてならで君にしらせん

「あしわかの浦にみるめはかたくともこはたちながらかへる波かは　細蘆の若きにわかの浦をよせたり今案蘆若の浦を別にひとつの名所とするは誤れるを此細流にはよく釋し給へり蘆の若きによせたること少納言が返しに蘆を捨てたゞわかの浦とよめるにて明らかなりまた元眞家集にかのえさゐを隱題によめる歌「なにはがたこげど小舟はあしわかのえさるほとこそひさしかりけれ　これは蘆分小舟さはりおほみの心にてあしわかのしげれる江をこぎさるほどの久しきとよめり若き蘆はことにやはらかなるものにてよわければ古事記にも武雷神建御名方神の御手をとり給へは若葦のごとしとい

へり又萬葉第二の歌に葦若の足痛吾勢とよめり別に注之

いざかし　孟率伊勢物語　今案伊勢物語にいさかしといへる詞なし去來といふにかしはそへたる詞なり率の字日本紀萬葉等にいざとはよめり

このひざのうへに御ことのごもれよ　今案史記樊噲傳云上獨枕二一宦者一臥日本紀第六垂仁紀云時天皇枕二皇后膝一而晝寢同仁德紀云徴二隼別皇子枕二皇女之膝一以臥萬葉第五琴娘子歌云「いかにあらん日のときにかもこゑしらむ人のひざのへわがまくらせん　同第七寄日本琴歌云「ひさにふすたまのをことのことなくばいとかくばかりわがこひめやも

いみじうきりわたれる空も　今案霧は截と云詞を體になしていふ詞なれば體用にわたる也截は截流障截也などいふ詞なり遮の字をさへぎるとよむも障截也今こゝにきりわたれるといふは霧のわたれる體にていふにはあらすきるといふ用にていへりやがて此作者の歌に「しのゝめの空きりわたりいつしかと秋のけしきに世はなりにけり

朝ぼらけ霧たつそらのまよひにも行過がたきいもがかどかな　今案霧のたちまよふといふを道を迷ふに兼たり萬葉十一「妹が門行過かねて草結ぶ風吹とくなあはん日までに催馬樂のうたもこれより出たるなるべし

立とまり霧の籬のすぎうくば草の戸ざしにさはりしもせじ　今案きりのまがきとは霧の物を立へたてゝ見せぬこと垣の如くなれば云さてまがきとは萬葉に前垣と書たればまへのかきなり菅家萬葉下に「君に見えんことやゆゝしきをみなへし霧のまがきに立かくるらん「さやかにもけさは見えずやをみなへし霧のまがきに立かくれつゝ曾丹集「山里に霧のまがきのへたてずばをちかた人の袖もみてまし

草のとざし　今案後撰戀五「いふからにつらさぞまさる秋の夜の草のとざしのさはるべしやはとしごろもあつしくさだ過たまへる　今案あつしくは尼君の病の事桐壺の巻にも有し詞なりさだは河海に央の字を出し給へり何にゝ見えたる字にかおぼつかなし　萬葉第十一「人間守あし垣こしにわ

きゝ子をあひみしからに事ぞ左太（サダ）おほき「おきつ浪へなみのきよる左太の浦の此さだ過て後こひんかも　此後の歌は第十二にも入れり初の歌に付て案するにさだとはころといふ心と見えたりさてころとはこのころの心なり此物語になかさだのすちなどあるは中頃なり年のさだ過たるとはよきころほひを過る心なり央の字はかなひても見えぬ字なり

よへぬひし御ぞどもひきさげて　細衣架などより引さけてなり　今案蜻蛉日記にすゞひきさげ經ひきさげなどあり提の字にて只とりて持なり

源註拾遺巻第三

末摘花

わかむとほり　河王家無等論　今案論の字は倫の字を寫し誤れる也世雄無等倫妙智無等倫等皆同じさて此王家無等倫の義物に見えたる證なくばあたるべしともみえずもし其義あらば又むの字ははねすしてむとほりと下へ付てよむべき理也百濟王禪廣の末を百濟王某乙（ソレガシ）といひけるを略して王といひければ王家（ワカ）といふべしさてそれを音便にわかんともいふべきは催馬樂にわいへんなどいふ例也とほりはすぢの心にて王家の裔といふ心などにや延喜式に中納言眞世王の末を王氏といへり又桓武天皇の御裔にもいへりいづれの親王にもあれ氏を賜はらであるほどとは皆王氏といふにや王氏を王家といふへし末にいたりて短かくいひてよく注せる所ありつと覺ゆぞこを用ゆべし

ちゝ君のもとをさとにて　孟末摘の父宮なり　今案この說誤なり上にいへる兵部大輔なりその上ちゝ君をとは此上に末摘の事なくていふべきやうなし

又此說の如くならば故ひたちのみやとつゞくべきやうなし又ことは顚倒せり

きんをぞなつかしきかたらひ人　今案琴は聲ある物なればかたらひ人といふ人とは萬葉には鴈を遠つ人郭公をもとほつ人後撰にも郭公を待人を誰ならなくにとよみ此物語の末には猫をも人といひつればよろづにわたりて似つきたる所にはいふべきなり

みつの友にて今ひとくさやうたてあらん　細河海　詩のことゝ云々但酒の事にて可然歟　今案細流の說可然但詩もあまりに好みもし作りもせんはうたてかるべく酒もすこしなどはいふべきにあらねど詩をあまりに作らんよりは酒はすこしこのむともうたてかるべし

うしろめたうかたじけなし　今案かたじけなしははつかしきなり物などを得てかたじけなしといふは俗に過分といふごとく無德なる身をかへりみれは此ものをたまはるははづかしといふ心也

こまぶえ取出たまへり　今案和名抄云雜名苑注云篇以竹爲之今案所謂高麗笛一孔也此字一說和名古萬布江　除二吹處一而六孔之笛也　此笛の事か但かゝるもの吹たまふべき物ともおぼえねば常の笛を高麗より作りて來たるをいふか

わざとびははひけと　今案萬葉にわきも子がわざとつくれるとよめる如くこの中務びはをひくをつねに我わざとするなりもしびはゝひけどことさらにひかぬ心ならば此わざとの詞すさまじげにてといふ上に下して置べしまたびははひけども語顚倒せり

またるゝ月の　河六帖「したにのみこふればくるし山のはにまたるゝ月のあらはればいかに　今案此歌はもと萬葉第十六に有て六帖第一雜月に取て入たるにともに山のはに出てくる月のとあり八月廿よ日よひ過るまでまたるゝ月といへば引歌に及べからず

なみ〳〵のたはやすき御ンふるまひならねば　今案後撰に「霰ふる深山の里の佗しきにきてたはやすくとふ人ぞなき

歌いくそたび君がしゝまるまけぬらん　今案無言遊退兩說の中に無言を用ゆべしその故は小侍從が返歌にその證明らかなり日本紀に棲遑をも進退をも

しゝまひてとよみて只しゝまと點じたる所なければ其義かはれり

御ゝかゆこはいひめして　今案和名抄云史記廉頗強飯斗酒食肉十斤（飯音作萬反亦作ニ飰飯一 強飯和名古八伊比）

えかたのやうにもつゞけたまはねば　今案えの字は引くだしてえつゞけ給はねばと見るべし

「はれぬ夜の月まつ里をおもひやれおなじこゝろにながめせずとも　今案後撰に信明朝臣「こひしさはおなじ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

紫ゝ紙ゝ年へにければはひおくれふるめいたるに

細光はへはい同事也　今案灰おくれたると見てその上に此注あるははえおくれたるを兼たりとの意にや然らばはえおくれたると直にいふ心し

中さだのすち　今案上にいふごとくさだはころなり

ぬすまはれたまへ　今案萬葉第十一「心さへまたせるきみに何をかもいはずいひしとわがぬすまはん「山川にうへをふせおきてもりかへす年のやとせをわがぬすまひし

なきぬはかりに思へり　今案なきぬべきばかりにと心得べし　拾遺に　伊勢「うつろはんことだにをしき秋はきになれぬはかりもおける露かな　此ぬの字におなじ

くだいてける心もなく　河腐（クタス）　今案河海の心は命婦が心にくきほどにてやみなんと思へりしをおしたちて逢てかれが心をむなしくするを今腐（クタス）といひてくだしてけるをかれが我を心もなう恨おもふらんと源のおもひ給ふとなり只命婦か心をさまぐに摧（クダ）きしかひもなくといふなるべし

御だいひそくやうのもろこしのものなれど人わろきに何のくさはひもなく　今案秘色ハ五雜組曰陶器窰最古百世傳柴世宗時燒造所司請ニ其色一御批云雨過靑天雲破處這般顏色做將來然唐時已有ニ秘色一陸龜蒙詩九天風露越窰開奪ニ得千峰秘色一來さてこの秘色は臺のうへに飯などもるうつはなりくさはひもなくば可然料理もなきなりくさは種の字はひはあぢはひなどのはひか又和名十七菜蔬を注して云兼名苑注云草間ニ可レ食曰ニ菜蔬一（在疎二音和名 菜蔬ハ久佐非良）魚鳥などはいふに及ばずはかぐしき草はひもなしとにや

とびたちぬべくふるふもあり　河「世の間をうしとは

さしもおもへども飛立かねつ鳥にしあらねば　今案萬葉第五にうしとやさしとゝあり書寫の誤か後撰に「いにしへも契てけりな打はぶき飛たちぬべし天のはごろもこれは廣明朝臣の中納言になりて師輔公よりうへのきぬそへてつかはされし返しなればことばはおなじことながら心かはれり

またほのくらけれど　孟衡黑（ホノクラシ）　今案此字何にか出たる心得がたし日本紀に凌晨をほのぐらしとよめり

あなかたはとみゆるものは御ゝはなりけりさきのかたすこしたりて色づきたり　今案和名抄云皶鼻ハ野王案皶ハ音砂和名邇岐美波奈　鼻上胞也俗に石榴鼻といふこれ也にきみは同和名云唐韻云痤ハ昨禾反和名邇岐美　小癤也つねにきひといふ物也赤くしてこまかにつぶ〳〵と出る物なれば丹黍といふ義なるべし

いろは雪はづかしくしろうてさをに　今案蜻蛉日記にあなさむ雪はづかしき霜かな萬葉第十六怕物歌に「人玉の佐靑（サヲ）なる君が只ひとりあへりし雨夜は久しとおもほゆ

ふるきのかはぎぬいときよらに　河又拾遺云中宮安子ふるきのかはきぬを高光少將入道横川にすみ侍けるにつかはしける「夏なれど山はさむしといふなれば此かはきぬは風をふせがん　今按此歌拾遺にはなし

おきなのいといみじきぞ出きたる　今案櫻井素丹といふ人のよみけるを聞て聞書などせる古本を見しにはいとみしかきぞとありき

げにしなにもよらぬ　今案帯木今はたゞしなにもよらじといへる所をふくみてげにといへり

まけてやみにしかなと物のをりごとにおぼしいづ　今案犯てと見るべからず負てなり

あつこえたる　今案厚肥たるなりいたくあつき紙は人のこえふとりたるに似たればなり

歌から衣きみがこゝろの　今案着るとつゞけたり

袖まきほさん　今案引歌は萬葉第十にあり

いろこき花と見しかども　今案此引歌何にか出たる未見及下の句は古今雜體にくれなゐにそめし心もたのまれずといふ歌のなり

歌ひたすらくだす　河匹如（ヒタスラ）白氏文集　今案匹如身はするすみなるみとよめり如何永の字は日本紀にひたすらともひたふるともよめり

くはや　今案宇治拾遺には只くはともくは〳〵ともあり

歟みもし見よ〳〵や　花　我もみん人もみよとの心也今案源の親にねんごろに見よとてや此衣は給はりつらんとなり我もみんとあるは不稱か

きやうだいからくしげ　今案和名抄云鏡臺辨色立成云加々美加介此和名あれど昔より音にいひなれけるにや今も然いへり又云嚴器俗用唐櫛匣三字賀良玖師介

うつくしきかたおひにて　今案萬葉第九云八年兒之片生乃時從云々此物がたり末にはかたなりともいへり

うきよを見あつかふらん　今案神代紀に悶熱をあつかふとよめり

みてゐたらて　今案見て居てあらでなり天阿切多なればつゞめてかくはいへり上にうきよを見あつかふらんとくゆる心なれば心ぐるしきは末摘にて見てのてにごるべきにや紫を心ぐるしといはゞ源のほかにおはするほどの紫の心をくるしといへるか

あかゝらんはあへなん　孟あへなんはそのまゝあるべしとの心也　今案此注かなはず敢は搆と心かよひて聞ゆれど赤きは猶堪忍すべし黑く色どりなし給はゞ見苦しさまさりてたへがたしとなり又或注に似の字あへなんと讀也此鼻はべにの色に似てそのまゝ赤からんとの心也といへり此義心得がたし日本紀の應神天皇紀に肖此云阿叡とあり是は此物語のするにあえ物といふあえにてあやかるといふ詞也似の字あえとよめる事は見ねど肖　字の例なればさも讀べし其義ならばあかゝらん色はあやかりなんにてはじめより赤からぬ所までうつりなんといふ心とぞいふべき拾遺に「風はやみ峰のくず葉のともすればあやかりやすき人の心か」よろづの事のあやかるといふみな此心にてうつりゆく心ありさてこれはかんなも阿江にて阿遍にあらず又似の字あへとよむとも常のにるといふには必すこしかはれりべにの色に似てそのまゝ赤からんとは何の義ぞや赤きが見苦しければこそ紫ものこひ給へば孟津の注はたらねど赤きは猶そのまゝもあるべきを黑く色どり給ふなど心得れば猶義あり

日

日のいとうらゝかなるに　今案遲々をうら〳〵とよめり後のうを略してうらゝといふにかはうらやか

といふ心にそへたるなり
いつしかとかすみわたれる梢とも　或注霞る梢のいつ
花さかんと心もとなきと也今案諸本如此
ほゝゑみわたれる　今案忍咲(ホヽヱム)遊仙窟同欲咲同　ほゝゑむ
といふ和語の心は頰咲なるべし口を開き齒もとを
あらはさで忍びて笑ふ程に頰にすこしそのさまの
あらはれて見ゆる心也又含の字古語ふくむまたふ
ほこもりと應神天皇の御うたにあるふほもこれな
り咲たきをふくみてすこしゑむ意なり

紅葉賀

常よりもひかると見え給ふ　今案ひかる源氏といふ
故に常よりもといへり
歌から人の袖ふることは　今案おもひながら逢こと
の遠き中をかくかすめて立居につけてとは舞には
立居すればそれによせてたつにつけ居るに付ても
ありし事にも思ひ出てあはれと見侍りきとなり萬
葉十一「たちゐするわさもしられず思へども妹がつ
けねば間使もこず　同「立て思ひ居てもぞおもふ紅
のあかもすそひきいにしすかたを　十三「立居する
たときもしらず我心あまつ空也つちはふめども
かいしろなど　孟垣代也警固也垣に立て此内にて裝
束を着する也　今案此注おぼつかなしやがて下に
木高き紅葉の陰に四十人のかいしろいひしらず吹
たてたる物の音どもにあひたる松風まことのみや
まおろしと聞えて吹まよひ云々　河海云長秋卿笛
譜云　哢花云垣代には云々　此説の如くならば樂
人をすへて垣代といふか日本紀の武烈紀云立(ウタガ)二歌
場(キテヒトナカ)衆一歌場此云二宇多我岐一　續日本紀云天平六年二月癸巳朔天
皇御二朱雀門一覽二歌垣一男女二百四十餘人五品已上
有二風流一者皆交二雜其中一云々又稱德天皇由義宮に
して歌垣を御覽じける事をも記せり行列する事垣
のごとくなれば歌垣といふか今垣代といへるこれ
なるべし
けざやか　河清(ケサヤカ)萬葉　今案萬葉に清の字さやかとは
おほくよめどけざやかとよめる事なし氣清(ケサヤカ)と書へ
きなり
うけはしげにのたまふと　孟兕咀(ウケヘシ)のろふなり　今案
日本紀に兕の字かしり咀の字はとこふとよみてう
けふとよめることなし誓の字祈の字をうけふとよ
めり萬葉にも祈の字をうけふとよめり日本紀古事

記の意は善悪に付て祈るをいふかならずのろふに
　はかきるべからず
人まにまゐり給ひて　今案日本紀に間の字をひとま
　とよめりひまといふは此略かこゝにては人のなき
　まと聞ゆれど貫之の梅の花いつのひとまにうつろ
　ひぬらんといふも必らず人間とも聞えぬにや
いかならん世に入てならできこえさせんとて　今
　案後撰「いかにしてかく思ふてふことをだに人づ
　てならで君にきこえん
歌よそへつゝ見るに　今案細流にひかれたる新古今
　の歌は恵子女王の歌にて詞書に贈皇后宮にそひて
　春宮にさふらひける時少將義孝ひさしくまゐらざ
　りけるになでしこの花につけてつかはしけるとあ
　れば今此歌を引なほして用たるべし
たゞちりばかり此花びらにと聞ゆ　今案うつぼ物語
　に花さくらのいとおもしろき花びらにとて歌あり
　伊勢家集に梅の花のたよりに物いひたる人とおも
　はせてゐにをとこ女のゆきあひて物いひはじめた
　るをひとつのひらにかゝせたまへる云々
心なげにいはけて聞ゆるは　今案此句は上の内わた
　りなどにてといふ上へ返して見るべしまだかたお
　ひなる人をさしもかしづき給ふべきならぬに世づ
　ける心もなういはけなきやうに聞ゆるは内わたり
　などにてはかなくみ給ひけん人を物めかし給ひて
　人やとがめんとおぼして左様にいひなし給ふなら
　んとおしはかる心也こゝにいはけてといへるはい
　はけなきなればいはけなきもなきは付たる字にて
　おほけなきの類に無の字の心にはあらぬなるべし
　日本紀に驚駭又喘息をいはけてとよみたれど是は
　おどろきさわぐ心にてこゝに叶はず
此みゆる女房にまれ　孟まれとはあれといふ心也
　今案女房にもあれといふべきを毛阿切麻なればつ
　ゞめてまれといへり
かうさだ過るまで　今案さだはころの意なり物を定
　むといふもよきころをはかりてさだむるなればこ
　ろほひの意なり日本紀に准況をころほひなそらふ
　とよめるをおもひ合すべし河海の央の字出る所を
　しらず
もりこそ夏のとみゆめる　引歌「ひまもなくしげり
　にけりな大あらきのもりこそ夏の陰はしるけれ

今案此歌何にある歌にか見及はず　信明家集に「郭公きなくをきけば大荒木のもりこそ夏のやどりなるらし　此歌にてかけるなるべし

まだかゝる物をこそおもひはべらね　引歌「白髪に黒髪まじりおふるまでまだいとかゝる物はおもはず　今案是は萬葉第四坂上郎女歌也拾遺にも入「黒髪に白髪まじりおゆるまてかゝる戀にはいまだあはなくに

はしばしらにと恨かゝるを　細引歌「津の國のながらの橋のはし柱ふりぬる身こそ悲しかりけれ　今案これは新勅撰羈四に謙徳公につかはしける讀人不知とて思ふ事むかしながらのと有る歌也拾遺戀四「かぎりなくおもひながらの橋ばしら思ひながらに中や絶なんよみ人しらず　是等にてかけるにも有へし

ほと〳〵わらひぬべし　孟殆也　今案上のとをすみ下のとを濁るべしほと〳〵とはあやうき心なり歌にしかよめりあふなく何せんとしつるなど俗にいふ是にかなへり程々しとよめるは程をふる心にてことなり

ぬがじとすまふを　今案遊仙窟に推の字禁の字ともにすまふとよめり

おもなのさまや　今案日本紀に妄措をおもなしとよめり

歌いかゞうらみぬ　注うらむべき事よとなり　今案此注不叶いかゞうらみざらんにて落着はうらめしくおもふなり

廿餘年　細音に讀也　孟はたちあまりとよむべし　今案細流につくべし若訓によまばはたとせあまりとよむべしはたちあまりとよみては女御の御としをいふやうなり

花宴

なほあらじに　細なほあらじとことなしぐさにいふことを聞しれらくはすくなかりけり萬第七默然不有　今案此引歌今の本にはもだあらじとことのなぐさにとありも事之名種爾と書たれば胸の句は誤なり發句は古點にはなほあらじとよみけるにや蜻蛉日記などにも此ことばありしかれとも彼集中此詞多きにもだと假字にも書たれば今の點叶へり直の字たゞともなほともよめば或なほあらじはたゞにはあらじ也或注に猶かくのみにてはあらじと思給

ふ心とあるは違へるにはあらねど能く心得られたるにはあらず

弘徽殿のほそどの　今案和名第十六唐韻云廊音郎和名保曾止乃殿下外屋也萬葉第十七には細殿とかけり廊の字の和訓すなはち此意なり

おくのくるゝ戸も　孟くるゝ戸にくぎさしかためこし萬葉長歌　今案萬葉長歌にまだくかゝる歌なし第二十に下總國防人が歌に「むらたまのくるにくぎさしかためとし妹がこさりにあよくなめかも　此歌の事なるべきか然れども若此歌ならばあらぬ事也又くるゝとある戸なれば山櫻秋霧などのやうにとの字濁りて心に樞戸と心得てしかるべきやあらん

歌うき身世にやがて消なば　今案後撰戀二まかり出て御ふみつかはしたりければ　中將更衣「けふ過はしなまし物を夢にてもいつこをはかと君がとはまし　小大君集に「我しなばいつこをはかと尋てか此世につきぬこともかたらん

頭中將のすさめぬ　河不肯萬葉　今案萬葉に此詞なし

ふみともきやうさくに　細景迹　花形迹　今案花鳥に今文景迹の二字をば形迹と釋せりとありもし形迹を用ば上を濁り下を清むべきか詩文章の秀逸を驚策といふ此字なるべし

そしうなるものゝしども　細そしうは紓の字かだむ心也　今案紓の字そしうとよめる事何にありともなければおぼつかなし音なるべく聞ゆる詞なり

ふさはしからず　河不祥日本紀　今案日本紀に不祥をさかなしとはよめりふさはしからずとよめることなしふさはしとは俗に相應するをいへり神代よりあることばなり古事記八千戈神御歌云奴婆多麻能久路岐美祁斯遠麻都夫佐爾登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多々藝母許禮婆布佐波受幣都那美曾邇奴岐宇弖蘇邇杼理能阿遠岐美祁斯遠麻都夫佐邇登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多々藝母許母布佐婆受幣都那美曾邇奴棄宇弖夜麻賀多爾麻岐斯阿多尼都岐曾米紀賀斯流邇斯米許呂母遠麻都夫佐爾登理與曾比淤岐都登理牟那美流登岐婆多々藝母許斯與呂志云々　このなかのふたつの布佐波受も俗にいふとおなじこゝろにきこゆまた萬葉第十八に大伴池主おなじき家持より針袋のをかしきをえて「とりがなくあづまをさしてふさはしに

ゆかんとおもへどよしもさねなしこれもふさはしきゆかばやとおもへどゆくべきよしなしとよめるか

あなわづらはしよからぬ人こそやんごとなきゆかりはかこち侍るなれ　細こゝにさふらふ女房の云なりしもざまのものこそ親類もとめはすれとなり箋同　今案これは源氏のかしこけれど此御前にこそはかけにもかくさせ給はめとのたまふにこたふる詞なれば下ざまの人こそやんごとなき人のゆかりはもとめて其陰にかくれて身をよせ侍れみづからやんごとなき御身にてかくのたまふはあなわづらはしやといふ也わづらはしとは事のかさなりしげきにいふなり白氏文集に託の字をかこつとよめり今のかこつこれより

扇をとられて　細催馬樂石川の歌云々抄開書石川は加茂の名所也むかし高麗人の住し也　今案鴨川を石川やせみの小川といふことは加茂の縁起をもて長明のはじめてよまれたる事にてこれより先には人知らずと彼人の無名抄にみえたり催馬樂にいへる石川鴨川の別名ならば歌主あはせて申さるべし又世にも知る人おほかるべければ歌合の時難ずるにも及ぶべからずこれは河内國石川郡なるべし其故は姓氏錄に河内國諸蕃に大狛連出レ自二高麗國人伊利斯沙禮斯一也大狛連出レ自二高麗溢士福貴王一也島木高麗國伊理和順使主之後也これらを石川郡におかれたるかさてその從者どもの末のものなど取かくしたる事有けるにや

うちおほどけたるころに　今案俗におどけたることをいふとは狂言にかゝれるをいふは此轉せるにや

葵

すぢことになりたまふを　今案筋異なり

所々の御さしき　注棧敷　今案日本紀に假庪をさずきとよめり今のさじきなり棧敷は暗推の字歟

おほよそ人　今案後撰戀四又拾遺戀二忠房朝臣「君が名のたつにとがなき身なりせばおほよそ人になして見ましや

ひとだまひのおくに　今案和名抄云漢書注云副車ハ曾閇久流萬俗云比度太萬比　後乘也

すゞろなる車のどうに　今案和名抄云說文云轂古祿反漢語抄云車乃古之岐俗云筒　輻所レ湊也

めもあやなる御さまかたち　花めもあやはうつくしきもの丶文(アヤ)を見るやうなる心也後拾遺集　後頼歌「もみぢ葉は錦とみゆと聞しかどめもあやにこそ（けふ後拾）けさはなりぬれ此めもあやはあやなき心也紅葉の散るを云り其心かはるべし　今案こゝに引かれたる歌は後頼の歌にはあらず堀川右大臣のかつらにて紅葉をよみ給へる歌なり後拾遺第二十誹諧に入れりめもあやとはあやしく見る心にてこゝの詞とおなじ

手をつくりてひたひにあてつゝ　今案土佐日記云六日みをつくしのもとより出て難波津にきて河しりにいるみな人々女おきなひたひに手をあてゝよろこぶ事ふたつなし又大鏡をひかれたるもよく叶へり通聴はたすけたる類例なり

いかにおぼしうむじにけん　河倦老子經　今案枕草子にくんじてともいへり此物語にくしてともいへりともにおなじ詞にて屈の字をばかくいふ歟宇と久と同韵にて通ず倦はいかるとよめば今のうんずるといふに叶はず

しめのうちにはとある手　今案新勅撰神祇齋院にまゐりて略上下　京極前關白太政大臣「春は猶殘れる物を櫻花しめのうちにも散はてにけり　これは此物語より後の歌なれど類したれば引置なり

よの人ぎゝも人わらへにならんことゝおぼす　今案後撰「よろづ世とちぎりしことのいたつらに人わらへにもなりぬべきかな　中務家集「今更に老のたもとに春日野の人わらへなるわかなつむなり

とかくひきまさぐり　今案　弄(マサグル)日本紀

たけくいかき　河猛辛(タケクイカキ)　今案辛の字いかきとよめる事は何の文に出たるにかおぼつかなし日本紀に嚴矛をいかしほことよめり舒明紀にありしかれは嚴の字を用べきか孟津にいからしき體也とあれば瞋怒等の字なるべきか

ひたふるこゝろ　今案永頼(ヒタフル)同頓絶同既切同この四つ日本紀にひたふるとよめる中にかはる心あるべし此中にこゝにひたふる心といへるには既切とかける叶ふべき歟

うつし心ならず　河現心(ウツシコヽロ)萬同　現人日本紀　孟「梅花木づたひちらす鶯のうつし心は我思はなくに　今案うつし心にふたつあり現心は萬葉第十一にかけり「ま

すらをの現心も我はなしよるひるいはず戀しわたれば　同十二「うつせみのうつしこゝろも我はなし妹に相見てとしのへぬれば　これら今の義にてうつゝ心也現人を日本紀にうつしごゝろとよめる事なし現人神をはあらひとがみとはよめり顯見蒼生と書てうつしきあをひとぐさとよめる中の顯見をうつしきとよめるは又今のこゝろなり孟津にひかれたる鶯のうつし心とよめる歌は何に出たるかいまだ見及はねどうつろふ心につゞけたればこれは今の心にはあらずして今ひとつのうつし心也　萬七一本歌「こちたくはかもかくせんを紅の寫心哉妹にあはざらん　同十二「うちひさす宮にはあれどつき草の移情は我おもはなくに　同「もゝにちに人はいふともつき草の移情はわれもためやも　古今「いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして以上のごとく所により歌によりて見わくべし

思ふも物をなり　細「おもはじと思ふも物をおもふなりおもはじとだにおもはじやなぞ　今案此引歌よく叶へり但何に出たる歌にか未見及六帖に「思はじと思ふものから夏の雨のふり捨てがたき君にもあるかな此歌おもむきは叶へど物をなりといふ所殘れり思はじやなぞの句は心得がたし寫あやまれるか

御ぐしいとながうこちたきを　今案こちたきはさきざきも有し詞也但萬葉第十二の歌に人言乎繁三毛人髪三云々此こちたみをかけるやうは毛人とはえその人の事なればかしこの人の髮のおほくてむづかしきをことしげくむづかしきにたとへて義をもてかけり今こゝにいとながうておほきをいひたればおなじ事にはあらねど心はかよへり

いであらすや　今案此やはありやあらずやといふやにはあらで三島江やなといふやもしをそへたるなり其故はありやあらずやとは疑ひて問ふ詞也これは源氏の君の葵の上をなぐさめ給へるに託たる靈のいてさにはあらずといへる詞なればなりかくいひてえ心得ぬ人は咄哉非とやをいての下へうつすべし

物思ふ人のたましひはげにあくがるゝものになん

今案兼盛集　返事もさらにせねば「我こひにたぐへてやりし玉しひのかへりこと待ほとの久しさ

小大君集に　大納言朝光「なくなればなけのあは
れもいはるゝをさはこゝろみにあくがれぬ玉　金
葉戀下　出羽辨「送りてはかへれと思ひし玉しひ
のゆきさすらひてけさはなきかなこれらは類する
所あるをもて引く
めにみす〳〵世にはかゝることこそはありけれとう
とましうなりぬ　今案看ミス〳〵此詞うつぼ物語に
もあり
宮の御ゆもてよせ給へるに　今案蜻蛉日記云諸本如此
けしのか　今案蜻蛉日記にもけしやきのやうなるこ
とをすといへり
けふなんうひたちし侍るを　今案宇津保物語祭の使
「夏ばかりうひ立すなる時鳥すには歸らぬ年もあ
らじな　曾丹集に源順「郭公うひだつ山をさとしらば
このまを行て聞べきものを　惠慶集「山里の人のみ
なかけけふみれば薄く霞の峯にうひだつ
あしをそらに誰も〳〵まかで給ひぬれば　今案萬葉
「立居するたどきも知ずわが心あまつ空なりつち
はふめども「わぎも子がよとでのすがた見てしよ
り心空なりつちはふめども「立どまりゆきみの里
に妹をおきて心空なりつちはふめども「下野のあ
その河原に石ふまず空ゆときぬよなか心のれ　い
せ物語に野にありけど心は空にてといへり
ゆすりみちて　河動ユスル　同響　日本紀　今案兩字ともに日
本紀にゆするとよめる事なしすべて他の字にても
ゆするといふ詞なし萬葉第七「大海のいそもとゆ
すり立波のよらんと思へる濱のさやけく古歌「朝
もよひきの川ゆすり行水のいつさやむさやいるさ
やむさや　藥師寺佛足石のかたはらの歌「みあと
つくる石のひゞきはあめにいたりつちさへゆすれ
ちゝはゝがために又案するにゆするとゆるとは同
じ詞也しかるに萬葉第十一にたまゆらといふに玉
響とかきたれば河海に出し給へる字ゆするとよむ
まじきにはあらず
かつそこなはれたまふことゞもの有を　孟かくとい
ふこゝろなり　今案かつは且の字かつかつにて苟
且の義苟且はかりそめともよめりしはらくともよ
めりみなかつ〳〵にかよふこゝろありかくは萬葉
に如此とあまたかきてかつと心ことなりかつ〳〵
は物のかたはしすこしあらはるゝこゝろなればこ

れにて能聞ゆるをいかなれは物ごとにかつといふ
詞たにあれはかくと改めて注せるならん
にはめる御ぞ　今案にふめくといはんがごとし
おこなひなれたるほうしよりはけなり　今案萬葉に
勝殊異これらをけとよめり
宮はしづみいりて　今案しづむは泣しづむ也萬葉に
「玉きぬのさゐ〳〵しづみ家の妹に物いはずきて
今し悔しも「いにしへのおうなにしてやかくばか
り戀にしづまんたわらはのごと
袖のうへの玉のくだけたりけんよりも　今案萬葉第
五山上憶良の古日と名づけて愛せられたる子のう
せたる時の長歌に「世の人のたふとひねがふ七く
さのたからも我は何かせん　わが中のうまれ出た
る白玉のわか子ふる日は　玉きはる命たえぬれ立
をどりあしずりさけびふしあふきむねうちなげき
手にもたるあがことばしつ世のなかのみち　此歌
上に白玉の我子古日といひ下に手にもてるあかこ
とばしつと云り飛散るはくだくる心なればこれを
いふか又白氏文集哭二崔兒一詩云掌珠一顆兒三歲鬢
雪千莖父六旬豈料汝先爲二異物一常憂吾不レ見二成
人一悲傷自斷非レ因レ劍啼眼加昏不二是塵一懷抱又空
天默々依レ前重作二鄧攸身一
かゝるほだしだに　今案　古今「よのうきめみえぬ
山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ
かたはらさびしくて　今案玉葉哀傷女御熈子女王か
くれて後よませたまひける朱雀院御製「ひとりね
に見えし昔のおもほえて猶なき床をもとめつる哉
ねざめかちなるに　今案和名云周易說卦云其於レ木
也爲二堅多レ心一師說多心讀奈賀古可遲何がちといふ詞これになず
らへて知るべし
秋のあはれまさりゆく風の音　今案萬葉第三に「う
つせみの世はつねなしとしる物を秋風さむみしの
びつるかも
朝ぼらけのきりわたれるに　今案此作者の歌に「朝
ぼらけ空きりわたりいつしかと秋のけしきに世は
なりにけり
聞えぬほどはおぼししるらんや　今案齋宮のきよま
はりによりてとはぬほどはおぼしめししりておこ
たりとはしたまはじの心を用ゆべし源氏これをう
けてさらにとはのたまへり

はて〳〵は哀なる世をいひ〳〵て　今案　拾遺に「世の中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん

いつもしぐれはとあり　河「神無月いつもしぐれはふりしかどかく袖ひつるをりはなかりき諸本如此

みなれ〳〵て　細「みなれ木のみなれそなれてはなれなはこひしからんやこひしからじや　今案此引歌聞なれたれど何に出たるにかしらずそなれといふもたゞなるゝにおなじきか好忠歌に「みよし野のきた山蔭にたてる松いくあきかせにそなれきぬらん

君もたび〳〵はならうちかみて　今案心にかなしひ出來てなみたのこほるゝ時洟(ハナ)もたるものなればかくいへり和名第三云字書曰洟〈夷反和名須々波奈〉鼻液也文字集略云擤〈他朗反又他頂反俗云波奈加無〉以レ手去二鼻洟一也

世のさか　盃惡(サカ)　今案惡の字は日本紀にさがなしとよめり不祥をもおなじくよめり休祥を仁德紀によきさがなりとよみたれは此さがはよき事なりさてそれをなしといふはあしきなれば惡の字をさがなしとよめるなり此故に盃津は誤なり今こゝにいふさがは神代紀に性の字をさかとよめるこれなり

めをしぼりつゝ見給ふを　今案人をさいなみなやむるをしぼるといふそのごとく老人のみえぬ目をしひてすりのごひなどして見るをしぼると云り

さうにもまなにも　今案さうとは假字をいへり賢木に朝顔の歌の次に御手こまやかにはあらねどらうらうしうさうなどをかしうなりにけりといへるをおもふべし

歌なき玉ぞいとゞかなしき　細源の心の切なる方より言也源の今住捨がたくおぼす心から葵の上の魂もさこそあくがれがたくおもひつらんとなり此義宜也花鳥なき床にねんの歌を引り此歌の心はなき魂の方よりおもひおきたる樣也此義不叶歟　今案細流の說尤也但なき床にねんとおもひ置たる心をあくがれがたきに思ひ知てなき玉ぞいとゝかなしきともよむべければ本歌なるべき歟

また霜の花しろしとある所に　今案鴛鴦瓦冷(ニノ)霜花重(シ)とあるをしろしと改けるなり

歌君なくてちりつもりぬる　今案みつねがいもとわがぬるとこなつの花をとれり

をかしげなるひわりこ　今案和名第十四行旅具云蔣魴切韻云樏（力委反漢語抄云樏子加禮比計今案俗所謂破子是破子讀和理古）樏子中有レ障之器也

かうかず〳〵にはあらで　河亥の子の餅は色々也三日夜の餅は一色なれば數々にはあらでといふ也今案所せきさまにはあらてといふにて知べし數々はたゞ數のおほきなり色々をいふにはあらず

みつがひとつにてもあらんかし　今案此事此物語の中に三個秘傳の一つにいへりしかれども上にかうかず〳〵にところせきさまにはあらであすのくれにまゐらせよとのたまへるをうけてさてもねのこはいくつかつかうまつらすべう侍らんと惟光かとひ申せるにおきてゝのたまへるにて心得るにゐのこもちひのおほかりし其三分が一許せよとのたまへるなるべし後拾遺云三條太政大臣のもとに侍ける人のむすめを忍ひてかたらひ侍ける女のおやはらたちてむすめをいとあさましくつみけるなどいひ侍けるに三月三日かのきたのかた三夜のもちひくへとて出しけるに讀る　藤原實方朝臣「みかの夜のもちひはくはじわづらはしきけばよどのにははこつむなり

今はじめてぬすみもてきたらん　今案紫を初に父宮の許へわたし給はんとするを聞てぬすむやうにてみそかに二條院へゐておはしければ今かくいふなり

おもかげに戀しければ　今案おもかげに見えてこひしきなり六帖第四に「めをさめてひまより月をながむればおもかげにのみ君はみえつる

なればまさらぬ　細「みかりするかたのゝ小野のなら柴のなれはまさらで戀ぞまされる　今案胸句萬葉にかりはの小野のとあり腰句も櫟柴とかきてならしばと點したりなればとうけたるは能く叶へど字のまゝにはいちしばのとよむべし結句も戀こそまされとあり

みそかけの御さうぞく　今案みそかけは衣桁ともいふ和名云爾雅注云箷（音移字亦作椸和名美會加介）懸レ衣架也　催馬樂高砂にみそかけにせん玉柳

けふばかりは猶やつれさせたまへ　今案襤褸をやつるとよめれは衣より出たる詞なるべし

春やきぬるとも　河「あたらしく明くることしは百と

せの春やきぬると鶯ぞなく　今案此引歌に貫之家集にあり胸句あくることしをもゝとせとあり六帖にはあくることよひを風雅集賀にはあくるとしをはかやうにあれど下句はみなおなじく春のはじめと鶯ぞなくとあればとにもかくにも叶はずこれは後撰集卷頭敏行朝臣歌に「ふる雪にみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる元日に二條のきさいの宮にてしろきおほうちぎをたまはりてよまれたるはうちぎを賜はりてよろこびかしこまる心を下句にいひたれば年ごとの例にまゐりて調し置たまはらん衣をきて君が心にも春きにけりとおほしめすやうもやと思ひて參りたれとのたまへるにや

歌あたらしき年ともいはず　今案貫之集「あたらしき年とはいへどしかすかにからくふりぬるけふにぞ有ける　後撰「なく涙ふりにし年の衣手はあたらしきにもかわかざりけり　これらの歌を取合てよめるにや

賢木

うき世をゆきはなれなんとおぼす　今案躬恒集に「あら玉の年ふりつもる山里に雪はなれぬる我身なりけれ　後撰「人心うさこそまされ春たてばとまらずきゆるゆきかくれなん　拾遺「いづかたにゆきかくれなん世の中に身のあればこそ人もつらけれ

はなやかにさし出たるゆふづくよに　夕月夜日本紀

今案日本紀にはなし萬葉にあり

しめのほか　今案實方家集に「たれならんいはでのもりにことゝはんしめのほかにて我名かりけん

歌をとめこが　乙通女　今案乙女とかくは俗也物に見えたる事なし乙の假字は於の字にて遠にあらず少女ををとめといふは小津女なり津と登と通する故にをとめといへり

とのゐものゝふくろをさし〳〵みえず　今案とのゐものは夜のもの也其袋は俗にいふ番袋なりとのゐする人初はおほかりければもてくるともて歸るとがおほかりけるか世かはりて源氏の威勢おとろへたればとのゐの人もはか〴〵しうはなくなりてゆきかひし番袋も見えずとなり後撰云まさたゞがとのゐものをとりたがへて大輔がもとにもてきたりければ　大輔「ふるさとのならの都のはじめより

なれにけりともみゆる衣か　返し雅正「ふりぬと
て思ひもすてじから衣よそへてあやなうらみもぞ
する
后の御心いちばやくて　今案大和物語に平中にくか
らずおもふわかき女をめのもとにゐてきておきた
りけりにくけなることどもをいひて女つひにおひ
出しけりこの女にしたかふにや有けんらうたしと
思ひながらえとゞめずいちはやくいひければちか
くたにえよらで云々
かうすぢことになり給ひぬれば　今案齋院になりて
神につかへたまへば筋異になり給ふといへりこの
字濁りてよめるは誤なり
五たんのみすほうのはじめにて　今案みすほうは御
修法なりすの字濁るべからず正月の御修法を俗に
みしほといひならへるにても思ふべし
歎つゝわか身はかくて過せとや胸のあくべき時ぞと
もなく　今案　萬葉「春日野の淺茅が上におくれゐて
時ぞともなしわかこふらくは　古今「わかことく物
やかなしき郭公時ぞともなくよたゞ鳴らん
よぶかきあかつき月夜の　今案萬葉第十「しくれふ
るあかつきづくよ紐とかてこふらん君とをらまし
物を
歌あふことのかたきをけふに　今案難きに敵をそへ
たり返しの下句これを受たり今逢給ひて今まで逢
ふ事のかたくおはしてかたきなどのやうに我恨み
し事をけふにはたし給はずば昔がつらさのやまず
我恨みのとけずして互にこれ故幾世か輪廻せんと
なり御ほだしにもこそと詞につゞけたる心これな
りさすがに打なげき給ひてといへるもまた此故な
り
歌かつは心をあたとしらなん　今案六帖に「こゝろ
こそこゝろをはかる心なれこゝろのあたはこゝろ
なりけり
ありしにもあらずかはりゆく世　今案「天川うきゝ
にのれる我なれや有しにもあらず世はなりにけり
雲林院にまうで給へる　今案常康親王の僧正遍昭に
ゆづり給へるを寺として元慶寺の末寺とし給へり
委は三代實錄に見えたり
昔を今にと思ひたまふる　伊勢「いにしへのしつのおた
まきくり返し昔を今になすよしもかな

とりかへされん物のやうに　呼「とりかへす物にもがなや世中をありしながらの我身とおもはん　今案上の二首何に出たるにか　金葉集「池に作我名を丶しのとりかへす物にもがなや人を恨みじ　紫式部兄藤原惟規
六帖「取かへす物にもかもやはこ鳥のあけてくやしき物をこそ思へ　菅家萬葉に「あめつちをとり返すとも見えなくにほしとも見ゆる秋の菊哉　此とりかへすは今とたがひて上下を打かへす意也
山つとにもたせたまへりし紅葉　今案萬葉第廿に元正天皇御製「足引の山ゆきしかは山人のわれにえしめし山つとぞこれ
みづからのおもておこし　今案おもてふせといふに引かへたる詞なり仲文家集に「あが佛かほくらべせよごくらくのおもておこしを我のみぞせん
かすみもひとのこゝろ昔も侍ける　細「山櫻見にゆく道をへだつれは霞も人の心なりけり　今案此引歌は後拾遺春上に藤原隆經朝臣歌にて下句人の心ぞ霞なりけりと有隆經は後冷泉院の頃の作者にて此物語より後の歌なる上引やうもたがひたればさる古歌の有けるを引けるなるべし

心のかよふならはいかにながめの空も物わすれし侍らん　今案此下に引君こふるこゝろの空にかよへばやといふは貫之集の歌にて玉葉旅にいれり
らのへうし　今案和名云唐式云染麻帋廿五張穀帋五十張標帋廿張標は音方小反神端也見二唐韻一かゝれば表紙とかくは暗推の字なり
ぢす　細帙(チス)簀也　今案日本紀に黄卷をふんまきとよめり帙の事なりされど經には帙といひなれてふむまきといはず法隆寺の寶物を拜ける中にも此帙簀のいとふるくまぎれなき古代の物と見えたるにつゝめる經侍りき
みたてまつるたびことにめづらしからんをはいかゞはせん　今案六帖に　素性「ふしてぬるとこめづらなる君なれば今しもあへる心ちこそすれ
歌　月のすむ雲井をかけてしたふとも　今案したふともとは源氏藤の御出家をうらやみしたふともにて下句も源の心なり藤をかけて見るは誤りなり歌につゞけたる詞にても知べし藤はうらやまれてかへりていつかこの世をとよみたまへり
うちうなたれて　今案低侗(ウナタル)神代紀下

いとしのびてたびかさなりゆけば　今案　六帖「あふことをあこぎのうらに引たびのたびかさならば人も知りなん　いせ物語にもたびかさなりければあるしきゝつけてと云り

さはれ　孟さはあれどもとの詞なり　今案さはあれの略なりはの字わとよむべし

花散里

人しれぬ御心つから　今案古今「春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみん

さゝやかなる家　今案細々許　遊仙窟

おぼれかしくやと　今案　後拾遺　齋宮女御「夢のごとおぼめかれゆくよの中にいつとはんとか音づれもせぬ「おぼめくな誰ともなくてよひ〳〵に夢に見えけん我ぞその人

歌をちかへりえぞしのばれぬ　花をちかへりは萬葉に百千反と書り　今案萬葉にまだく百千反といふ詞なし五百箇山八百日行濱などいふ時百のかなは保なり違にあらず五百入とかきて廬の借字とせり拾遺集云　みつね「郭公をちかへりなけうなゐこがうちたれ髪のさみだれの頃　此歌躬恒集にもいせたりをちかへりの詞此歌にはじまれり百千遍の義ならば保知加敝里とよめるを後の人のをちかへりと改たるかもしは躬恒も音便に思ひ誤りて初よりをちかへりとよめるか

うゑしかきねもとて　細「花ちりし庭のこすゑもしけりあひてうゑしかきねもえこそ見わかね　今案此引歌何より出たるか未及見　曾丹歌に「花ちりし庭の木のまのしげりあひて天照月の影ぞまれなる上句はこれに似たり

いかにしりてか　細「いにしへのことかたらへはほとゝきすいかにしりてかふる聲のする　今案是は六帖第五物語の歌なり兼輔家集云びはとのにまでたりければむかし物がたりし給ふとて北面によびあはせてふることども有ける中にとて此歌ありいかにしてかはふる聲のするとあるは誤なるべし

ことわりの世のさかと　今案注に悪の字さがともさがなきとも用ゆるなりとあるは誤なりさきに字を出しつれば今略之

須磨

ひたゝけたらんすまひはいとはいたかるべし　細両

河海貫之　今案紫式部日記云などかかならずしもおもにくゝひき入たらんがかしこからん又などかひたゝけてさまよひさしいづべきぞ云々引合せて心得べし叨はみだるとよめりひたゝけとは何によめるにか

よにかくれてわたりたまへり　今案夜に隱なり　貫之家集に「よにかくれきつるかひなく紅葉も月にあかくそ照まさりける

とざまかうざま　今案　東西(トサマカウサマ)日本紀

いへはえにかなしう思へるさま　今案えといふは淺きをいへり下はえならずおもふ心をとよめるも淺からず下にはおもふなり然れば深くおもふ事もいへは淺くなりていはれぬをいへばえにといへり

歌とりべ山もえし煙も　今案新古今哀傷に「世のはかなきことをなげくころみちのくにゝ名ある所々かきたる繪を見て　此作者の歌「見し人の煙となりし夕より名ぞむつまじき鹽がまの浦　拾遺「とりべ山たにゝけふりのもえたゝばはかなく消しわれとしらなん讀人しらず

年月をへばいはほの中にも　今案いかならんいはほのなかにすまはかはの詞ばかりを取なり

涙をひとゝめうけて　今案涙の目にみちたるをいへり

歌見しはなくあるは悲しき　今案河海にあるはなくなきはかずそふといふ歌を小町とてひかれたり小町家集にありて新古今哀傷にも小町とていれり但榮花物語見はてぬ夢に世の中のあはれにはかなきことを攝津守爲賴朝臣といふ人「よの中にあらましかはと思ふ人のなきがおほくもなりにける哉是を聞て東宮の女藏人小大進の君返し「あるはなくなきは數そふ世の中にあはれいつまであらんとすらん　とぞ有る小町家集と小大君家集とに入まじりたる歌おほければこれは小大君が歌の小町集にいれるなるべし

世になくなりぬる人ぞといはんかたなくくちをしきわさなりける　今案貫之家集に「うけれともいけるはさても有物をしぬるのみこそ悲しかりけれ

歌さきてとくちるはうけれど　今案淸養父がさきてとくちる物おもひもなしを詞のみを取れり

みかはやうど　今案兼輔集に「口なしの色この本はいふはなたえてゐての山吹本するかな　これはゐ

でといふみかはやうどに山吹の花もたせていろめきたる人にやるべしとあり
かいのしづくもたへがたく　今案　萬葉集第十「此夕ふりくる雨はひこぼしの早こく舟のかいのちるかも　古今「我うへに露ぞ置なる天河とわたる舟のかいのしづくか
歌おなじ雲井か　今案抄にかをかな也といへるわろし疑ひてさだめぬ心にて感あり定家卿の歌ははかなくよむとはかゝる事なり
いとむもれいたく　今案此詞末摘やらんの卷にもありき拾遺集雜戀に　家持「久かたの雨のふる日をたゞ獨山べにおればむもれたりけり　是は萬葉第四にありて鬱有來(イフセカリケリ)とあるをむもれと改て入られたれば沈鬱の心なるべしいたくははなはだしきなりよりゐ給ひしまきはしら　今案河海に「わきもこがきてはよりそふまき柱そもむつまじきゆかりとおもへば　此歌六帖めきたれどかれにはなし何より出たるにか
歌にしほたるゝことをやくにて　今案河海に後拾「秋までの命もしらずはるの野の萩のふるえをやきとやくかな　此歌流布本にやくと聞かなとあれば相違せり　後拾遺戀四さがみ「やくとのみ枕の下にしほたれて煙たえせぬとこの浦哉　續千載雜中紫式部「よもの海に汐くむあまの心からやくとはかゝるなげきをぞつむ　新拾遺戀二いづみ式部「よさの海のあまのしわざと見し物をさも吾やくとしほたるゝ哉　夫木廿五經信「袖の浦にたゞわかやくと汐たれて舟なかしたるあまとこそなれ　これら皆燒と役とをかねたり此中に相摸と經信とは此物語より後なり其外も皆類例なり本歌などにはあらず
歌うらにたくあまだにつゝむ　今案胸句あまさへつつむと心得べし其故はあまたにつゝむと心得てはあまたの詞海人と聞えぬ故にこひのひを火になしてこれまでよみつゞけざれはたくといふ心あらはれず海人さへと見ればそれもこひの詞をはまでと上にてもしほ火たくあまと聞ゆるなり
しめやかにてあるべきものを　今案徐(シメヤカ)日本紀深沈(シメヤカ)同
つみふかき身のみこそ　今案諸本如此
伊勢島やしほひのかたに　今案　後撰三「しほのまにあさりするあまもおのがよゝかひありとこそ思ふ

べらなれ長谷雄　新古今雜下　いづみ式部「しほのまによものうら〳〵尋ぬれど今はわがみのいふかひもなし兼盛集「すまの浦あさりするあまの大かたはかひある世とぞ思ふべらなる中務集「あさりしてかひありけりと思ふ身をうらみてふると人やみるらん歌いせ人の波の上こぐ　細いせ人はあやしき物ぞなそといへば小舟にのりて浪の上こぐ　この歌にて詠給ふにや　今案此引歌何にか出たる

せき吹こゆるといひけんうらなみよる〳〵は　今案此物語の筆法ところ〳〵にはかやうに秀句につゞけたりいつれもわさとならすみゆ

ほのかにたゞちひさき鳥のうかべると見やらるゝも　今案蜻蛉日記云諸本如此

雁のつらねてなく聲かちの音にまかへるを　今案本朝文粹第十一重陽後朝同賦秋雁櫓聲來應製詩序　菅家云秋雁者月令之賓也櫓聲者風窓之聽也觸物以感非來繞湖之波驪心以思只望銀漢之岸又後相公同賦寒雁識秋天應製詩序云急櫓似機杼破孀閨之睡寒聲亂檣想伴漁舟之遊

初雁は戀しき人のつらなれやたびの空とぶ聲の悲しき　今案つらは雁行に族類の心をそへたりたびのそらとぶは飛に間をそへたり六帖に「我宿にきゐる鶯羽をよわみとばぬはつらき物にぞ有ける　これを引合せておもふへし

おほやけのかうし　河海辭日本紀　今案日本紀に見えたる事なし

我身だにあさましきすくせとおぼゆるすまひにいかでかはうちぐしてはつきなからんさまをおもひかへし給ふ　今案いかでかはの下にて句を切べし然らざればてにをは違ふ故なり

歌月の見るらんこともはづかし　今案年のおもはんことぞやさしき松のおもはんこともはづかしなどを取用たり

くしいたうてゆかす　孟苦痛也　今案屈し痛うてなり

いとかうさくなる名をとりて　今案諸本如此

いけるかひありと思へり　今案兼盛集に「すまの浦にあさりするあまの大かたはかひある世とぞ思ふべらなる

みやりなるくらかなにぞなるいねどもとり出てかふ

など　今案和名第十六兼名苑云囷一云廩（伊奈久良）四聲字苑云廥（音會反和名久佐久良）芻藁藏也いねども取出てといふは上の囷の字かなふやうなれど此いねといふはわらなればくら何ぞなるは廥の字あたれり
さるべき都のつとなど　今案都のづとにいざといはましをといへるは都のかたへゐなかよりもてくる物をいふこゝは都よりゐなかへもてくるをいへり
かへりみのみしつゝ　今案萬葉第二人丸長歌に「此道のやそくまごとによろづたびかへり見すれど云々此詞彼集中におほし
雲ちかくとびかふたづも　今案萬葉「天雲にはね打つけて飛たづのたづ〳〵しかも君しまさねば歌
たつがなき雲井にひとりねをぞなくつはさならべし友をこひつゝ　今案是は河海にひきたまへる萬葉第十五の歌を本歌とせり　多都我奈伎安之徴乎左之（タツガナキアシベヲサシ）弖等妣和多類安奈多頭多頭志比等里佐奴禮婆（テトビワタルアナタヅタヅシヒトリサヌレハ）　此歌のはじめの句は鶴が鳴くといふにてたづきなきをそへたるなり此うたは草香江の入江にあさるあしたづのあなたづ〳〵し友なしにしてといふにおなじつゞけやうなれど鶴をはじめに置二句隔てゝ承たれば紫式部が心はたづきなきといふ詞に鶴之鳴とそへたると思ひて取れりと見えたりたづ〳〵しは多頭（タツ）多頭志と書たれば鶴之鳴を表とせは多頭我奈伎（ガナキ）と書べきに都の字を用たればたつきなきを表にてよめるかなどもおもへるかたづきをは萬葉に鶴寸とも多頭寸とも多度伎（タドキ）ともかきてつもしを濁りきを清めり多頭加奈伎と書たらばたづきなきに鶴之鳴をそへたりともいふへし多都我と書れは式部が心得誤れる也
いとしもとくやしう　細「おもふとていとしも人にむつれけんしかならひてぞみねばこひしき　今案此歌拾遺戀四によみ人しらずにていとこそ人になれさらめとあり以前孟津には何しか人にむつれけんとひかれたりともに如何
せんしやうばかりを　今案和名云本朝式云軟障一條
蜻蛉日記にせじやうとかゝれたり
ひぢがさ雨とか降きて　今案催馬樂に「いもが門やせなが門行過かねてわがゆかばひぢがさのひぢがさの雨もやふらなんしてたをさ雨やどりかさやどりやとりてまからんしてたをさ　萬葉第十一に

「妹か門ゆき過きかねつ久かたの雨もふらぬかそをよしにせん　これを六帖にはひちがさの雨もふらなんあまがくれせんとあり此歌いにしへよりかくあやまりて催馬樂の歌もこれより出來たるか
山谷詩云歸扇障二小雨一ひちがさ雨にちかし
波いといかめしうたちきて　今案日本紀に嚴の字重の字ともにいかしとよめり事を嚴重にするを常にはいかめしうするなと物にもかけり瞋恚忿怒等の字をいかるとよむもいかしに下は通ふか怒濤怒浪などいへは此いかめしうはいかる心か
海のおもてはふすまをはりたらんやうに　今案萬葉第七「あま小舟はかもはれると見るまてにともの浦わにたてるしら浪
神なりひらめく　今案 虺虺(ヒカリヒラメク) 日本紀
かくて世はつきぬるにやと心ほそく思ひまどふに
今案日本紀第九神功皇后紀云新羅之建レ國以來未三嘗聞二海水凌一レ國若天運盡國爲レ海乎

源註拾遺巻第四

明石

猶これよりふかき山をもとめてや跡たえなまし　今按　古今「よの中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれるゆきやけなまし
空のみだれ　今案五月の雨をさみだれと云は五月(サ)亂(ミダレ)の心なり雲などの常の雨よりは打亂るればさてかくは名付たるか萬葉にはさみだれとよめるは一首もなければその丶ち付たる名にや今も此心にて見るべし
くしにけるこゝろのほど　孟苦也　河窮屈也　今案窮屈を用べし苦は用べからす
いとかくちのそことほるはかりのひふり　今案和名抄云文字集略云霈大雨也 音沛 日本私紀云火雨 和名比左女　雨氷 同上 今俗云比雨留　ひふるといふ心は氷降なり大雨のあらくて物にあたる音こほりのくだくるやうなればいふなるべし又俗にへうの降と云は氷雹なり麥のあかむ頃よく降ものなりこれが降つれは鎌にてかりたらんやうにそこなはるゝなり大雨

をひふるといふはこれにはあらずひは氷なれば上聲にいふべし俗にひのあめがふるといふこれなり大雨を誤て火雨とかけるはひふるといふを火降と心得てこさかしきものゝ火なるべしと思ひて改けるにや

空は墨をすりたるやうにて日もくれにけり　今案古今戀長歌に「すみぞめのゆふべになればひとりゐてあはれあはれとなげきあまり云々六帖「すみぞめのたそかれ時のおぼろ夜にありこし君にさやにあひみつ　同「たゝこゝに君きまさぬか墨染のたそかれ時にそのすがたみん

雨のあししめり　今案宸神代紀下

なこり猶よせ歸る浪あらきを　今案餘波をなこりとよむ心は浪殘なるべしなころといふもこれか萬葉第七に「なこの海のあさけのなこりけふもかもいそのうらわに亂てあらん

聞も知たまはぬことゝもをさへつりあへるも　今案日本紀云韓婦用ニ韓語言ー云々欽明紀

そのつみをふるほどいとまなくて此よをかへりみざりつれど　今案他生の苦患なるべし河原左大臣の靈時々河原院にきたり給へることおもひ合すべし

月のかほのみきら〳〵として　今案六帖第四面影めをさめてひまより月をなかむればおもかげにのみ君は見えつる

まこと神のたすけにもあらんをそむく物ならば　今案漢書云天與不レ取反受ニ其咎ー時至不レ行反受ニ其殃ー此心なり

またなにごとをかうたがはん　今案歸去來辭云樂ニ夫天命ー復奚疑

秋のたのみをかりをさめ　今案古今「秋風にあふたのみこそ悲しけれわがみむなしくなりぬとおもへば

のこりのよはひつむべきいねのくらまち　今案拾遺「秋ごとにかりつる稻はつみつれど老にける身ぞ置所なき

いひしにたがふと　河「ほどふるもおぼつかなくもおもほえずいひしにたがふとはかりはしも　今案此引歌何に出たるにかいまた見及はず

あはと見るあはぢの島のあはれさへ殘るくまなくすめる夜の月　抄此歌のあはと見るは海のうへのあは

のやうに淡路島のうかび出たる心なり哀は催レ興心にや夕月夜の頃を思ふべし　細 是は水の泡なるべし此さへの字は躬恒が歌に詠せし時の哀さへ残らざるよしなり 哢 あはとみるは海の泡のやうに淡路の島のうかび出たる心なり 註 昔の歌によみし月のあはれさへとなるべし　今案先躬恒が歌よりよく心得て見るべし新古今集雑上にはたいしらずとて載せられたり家集には十五夜の月の歌にてあはと雲井にとあり淡路様にて有し時都の方より出来る月にそなたこひしとくかれはと雲井はるかに見し月の任はてゝのほりてこよひ君のます雲のうへ近く見れば處がらにやいとゞさやけくおもしろく見ゆるまとよめりあはとは阿波門をかれはといふにそへたり貫之集に「あはと見るみちだにあるを春霞かすめるかたのはるかなるかな六帖にはかはと見る道たにと有川と見なからえこそわたらねといふを顕昭はあはとみながらとそへたるよし申されたるを定家卿はかたぶけ給へとそへたるべきなり今源氏のあはとみるといふ五もじもあればとゝいふに阿波門をそふること本歌におなじ泡の心はなし上句はわざとおなじ詞をたゝめりあはれさへとは月のくまなきのみならずこよひのあはれさへ残るくまなしといふなり躬恒歌は所がらをりふしにもあひたればとり出たるにてかれをかりて今の心をよめるなり

入道びはのほうしになりて　今案兼盛家集びはのはうし「よつの緒におもふ心をしらべつゝひきありけども知人もなし

くひなのうちたゝきたるはたがかどさしてとあはれにおほゆ　細 また宵に打きてたゝく水鶏哉たが門さしていれぬなるらん　今案此歌聞なれたれど何に出たるといふことをしらず

住吉の神をたのみはじめ奉りて此十八年になり侍りぬ　今案和名第八播磨國明石郡住吉 須美與志 又同郡に葛江 布知衣 あり顕昭のかゝれたる物に住吉明神海に藤の花をうけて此ながれよらん所を我御領のかぎりにせんとのたまへるに藤江の浦によれる故さて藤江となつけたるよしかゝるかゝれば明石はことに住吉によせあるか

歌 たび衣うらがなしさに　細 うらがなしきは只物悲

しきなり花鳥に心かなしと侍如何　今案うらがなしうらさびしうらなしなどいふうらは皆心なり萬葉に心ゝとなしといふをうらもとなしとよめるにて知べし身は外にあらはれてみゆれば表なり心は內にありてかくるれば裏なり

玉もなとかづけたり　今案萬葉第一　人丸「あみの浦にふなのりすらんをとめらが玉ものすそにしほみつらんか

いひがたみと　孟一條院御製「こひしともまだ見ぬ人のいひがたみ心に物のなげかしきかな　今案まだみぬ人にか此歌八代集には見えずそののちの集などに出たるか

おもふどちみまほしき　細「おもふとちいまみにゆかん玉つしま入江のそとにしつむ月影　萬葉　今案此歌まだく萬葉にあることなく又萬葉の歌の體にあらず勅撰の外夫木抄名寄歌枕にも見えず何にある歌にか

秋のよの月毛の駒よわがこふるくもゐにかけれ時のまもみん　今按萬葉二一「吾駒のあかきをはやみ雲井にぞ妹があたりは過てきにける　同七　遠くありて雲井に見ゆる妹が家にはやくいたらんあゆめ黒駒　同十一　我駒のあかき早くは雲井にもかくれゆかんぞ袖まけわぎも今の歌初の二句は河海にひかれたる六帖第二の久かたの月毛の駒をといふ歌を取用雲井にかければ今引萬葉の歌とものこゝろを取用てつきげの駒といふにかなへて雲井をやがて都とし歌の惣體は六帖第五の「まなづるのあしげの駒よながぬしのわが門過はあゆみどゝまれといふ歌をおもひてよめるときこゆ

いはにおひたる松のねざしも　今案萬葉十二いはの上におふる小松の名を惜み人にしられずこひわたるかも　古今たねしあれば岩にも松はおひにけりこひをしこひばあはざらめやも　これらの詞を取かへかけるなるべし

けにもおもひしらん人にこそ　細　草子地なり明石上よりも今ちと物のこゝろをしりたる人にと也　孟あたら夜などいへる末をうけてげにとかけり草子の詞なり　今案細流はげにを請て心得たまへるか孟津の義につくべし又明石の上より今ちとなどあるもしかるべからず大かたの世の人にかけて然る

べくや
つねはいとはしき夜のながさもとく明ぬるこゝちす
今案遊仙窟云昔日雙眠恒嫌二夜短一萬葉四　此よらの
はやく明ればすべをなみ秋の百夜をねがひつるか
も
ちかひしこともなどかきて　細「忘れじとちかひし
ことをあやまたばみかさのやまの神もことわれ
今案此引歌何に出たるかおぼつかなし　萬葉第四
に「おもはぬを思ふといはゞ大野なるみかさのも
りの神ししらなん此歌を取て末の人のよめるか伊
勢家集にびはのおとゞちかことなどたてしをりに
「あふこともたのむることもあやまたばよにふる
こともあらじとぞ思ふ　此腰句をこゝろをえて取
れるか古本にはもしちかひしこともと有けるか
歟
うらなくも思ひけるかな　今案うらなくは無心に
て何心もなきをいふ　萬葉十二「つるばみの一重衣の
うらもなく有らんこゆゑこひわたるかも　同「うら
もなくいにし君ゆゑ朝なさなもとなぞこふるあふ
とはなしに　同十三長歌「いさなとり海のはまべにう
らもなくやどれる人は　同十四「うらもなく我ゆくみ
ちに青柳のたりてたてれば物もひつゝも　同「いは
ほろのそひの若松かぎりとや君がきまさぬうらも
となくも　同廿「秋風に今か今かと紐ときてうらま
ちをるに月かたぶきぬこれらにて心得べしうらも
となくはこゝろもとなくなり
月もたちぬ　花鳥　六月　今案上に六月ばかりより心
ぐるしきけしきありてなやみけりとあればこれは
七月なり
心ことなるしらべをほのかにかきならし給へるふか
きよのすめるはたとへんかたなし　今案後撰集に夏
の夜深養父が琴ひくを聞て　藤原兼輔朝臣「短夜
のふけゆくまゝに高砂の峰の松風吹かとぞきく
おもひむせびたるも　今案萬葉四「白妙の袖わかる
べき日をちかみ心にむせびねのみしなかゆ
みそびつあまたかけ　今案日本紀第五垂仁紀云田道
間守至レ自二常世國一齎物也非時香菓八竿八
縵焉延喜式云橘子二十四蔭云々これは蔭の字なれ
ばけを濁るかあまたかけは數懸歟こなたかなたに
荷を置て朸にてになふを一懸といふべしさやうな
るにかくといひならへり

弟子ともにあばめられて月夜に出て行道するものはやり水にたふれいりにけり　今案行道する物かといへるをかをはにまがへて寫しだがへたるなるべし此か文字前後におほし物はにては心得がたき故に細流に物の字には心なきなり行道するは也と注したまへるゝ髣髴なり

いはのかたそばにこしもつきそこなひてやみふしたるほどになんすこしものまぎれける　今案竹取物語に百人ばかり天人ぐして登りぬそのゝちおきなおむなちのなみだをながしてまとへどかひなしあのかきおきし文をよみてきかせけれど何せんにか命もをしからんたかためにか何事もようもなしとてくすりもくはずやがておきもあからでやみふせり

歌

わたつ海にしなえうらぶれ　河海底延喜萬二萬十に君こふとしなへうらぶれ云々　今案海底をわたつみと點したるは萬葉第一也瀰あり又第七にはわたのそこと點したり是を用べしわたつみと點せると幷に喜撰式と云ものともに誤なり其故は第七に綿之底奥己具舟とも海之底奥津白玉ともつゞけたるにともに之の字を加へたるにて知べし又第一の歌は海底奥玉藻とともにおきとつゞけたるに第五にはかんなにてわたのそこおきつふかえのとかけれは之の字そへたる證にそへて定てわたのそことよみてわたつみとはよむべからずしなへうらぶれは於君戀之奈要浦觸とかけり第二に人麿の歌に夏草思志萎而といへるしなえなりこれは夏草のつよき日にあたりてしをるゝにたとへていへりしはそへたる字にてなゆるなりしなへとかく假字たかへりうらぶれは萬葉には皆假字にてかけり楚辭に悒々をうらふると點せり異本にしづみうらぶれといへり萬葉の詞にて萬葉になきつゞきなれはしなえうらぶれに付くべし

歎つゝあかしの浦に朝霧のたつやと人を思ひやるかな　今案細流にひかれたる萬葉の歌おなじ十五に「我故に妹なげくらし風早の浦のおきべに霧たなびけり「奥津風いたく吹せばわきもこがなげきの霧にあはまし物を　此歌どもにて心得べし歎きは長息をつゞめたる詞なれば朝霧はなげきのきりにて長き息をつけば霧のごとくなるをいふ歎つゝあかす夜の息朝たつ霧のごとくもあらんとおもひや

り給ふとなりよく聞ゆる歌なり又萬葉第五に「大野山きり立わたる我なげくおきその風にきりたちわたる

あいなく人しれぬものおもひさめぬるこゝちしてまくなぎつくらせてさしおかせけり　今案和名云蠛蠓上亡結反下亡孔反漢語抄云加豆平利之日本紀私記云末久奈木小虫亂飛也陰則天風春則天雨日本紀第十三允恭紀云初皇后忍坂大中姫隨母在家獨遊苑中時闘雞國造從傍徑行之乘馬而莅籬謂皇后嘲之曰能作園乎汝者也汝此云那且曰壓乞戸母其蘭一莖焉壓乞此云異提戸母此云覩自皇后則採一根蘭與於乘馬者因以問曰何用求蘭耶乘馬者對曰行山撥蠛蠛此云摩愚那岐今おもふに此日本紀の自注の假字によればまくなきはくを濁りきを清むべきかつくるとは小蟲亂飛也の心にて使にいひふくめてそこよりともしれずさしおかすればいへるにや心得がたき詞なり源語秘決にくはし

みをつくし

あついたまへるに　今案日本紀に鶯癃以と江とは五普通ずればあつえ給ふにて病のおもくなるなり

人の御ため　今案後撰に「我身からうき世の中と歎きつゝ人のためさへかなしかるらん

内大臣になり給ひぬ　細左右の大臣闕なきなり内大臣は令外の官とて官位令に載さる官なり大織冠の時は内大臣を左右の大臣の上にも置たり　今案日本紀第廿五孝德紀云天豐財重日足姫天皇四年六月庚戌云々由是輕皇子不得固辭升壇即祚云々以阿倍內麻呂臣為左大臣蘇我山田石川麻呂臣為右大臣以大錦冠授中臣鎌子連為內臣増封若干戸云々中臣鎌子連懷至忠之誠據宰臣之勢處官司之上故進退廢置計從事言云々辛亥以金策賜阿倍倉梯麻呂大臣與蘇我山田石川麻呂大臣　同二十七天智紀云八年冬十月丙午朔乙卯天皇幸藤原內大臣家親問所患云々庚申天皇遣東宮大皇弟於藤原內大臣家授大織冠與大臣位仍賜姓為藤原氏自此以後通曰藤原大臣辛酉藤原內大臣薨云々甲子天皇幸藤原內大臣家命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔仍賜金香爐これによるに鎌足公初は內臣に任し給ふ左右の大臣に次て諸司百官の上に居て忠正の故に進退をつかさどらしめ給か天智天皇七年五月五日蒲生野に猟し

たまへる御供をいへる所にも内臣及群臣といへり八年十月十五日に至りて内大臣を授たまへるを此間に内大臣とあるは内臣とありけるを後人大の字をみだりに加へたるなりしかれは左右大臣の上に内大臣をおかれたりといふは誤なり通曰二大臣一とあるは内大臣なれば猶左右大臣に簡ひて内大臣といふべきことなれど簡はずして只大臣といふとのこゝろなり

よすがつけむことを　今案貲(ヨスガ)日本紀　同 因同

歌うちつけのわかれををしむ　今案乳つけをうちつけにそへたり

山寺のいりあひのこゑ〴〵にそへても　今案「朗詠」「山寺の入あひの鐘の聲ごとにけふもくれぬと聞ぞわびしき

蓬生

まちうけたまふ御たもとのせばきには　今案「うれしさを何につゝまんから衣袂ゆたかにたてといはましを「嬉しさを昔は袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな

さるものえうして　花 用なり　今按要の字なるべし假字も要はえう用はようにて異なり

くづれがちなるめぐりの垣　今按築墻をついひち又ついがきとよめり今の世上にてつきたるはついひち木竹にてしたるはかきとおもひてかよはしいはず墻も垣もかきなるに土にしたかへてかくにてかきは土をもとゝして木竹にてしたるにもかよふと知べし木竹なるをついひちとはいふべからずかきは限といふ心なるべし

ぬす人などいふひたふる心あるものも　今案既(ヒタフル)切日本紀 同 頓絶同上

さやうのことにもこゝろおそく　今案心鈍(コヽロオソク)萬葉十三

からもり　河 唐守　今按伊勢家集にからもりが道たづねわびてふせるをとこ「やへとづる道は夢にもまどふらしぬる玉にだにあふと見えねばうつぼ物語樓上「からもりがやどを見んとて玉ぼこにめをつけんこそかたは人なれ

かくやひめの物語　今案竹取物がたりのことなるべし

とき〴〵のまさぐりものにし給ふ　河 弄(テマサクル)　今案幣の字まさぐるとよめること何に出たるにかおぼつか

なし弄の字を日本紀にまさぐるとよめりもてあそぶともよめり物を手に持て遊ふをもてあそぶといへはまさぐると心おなじ

いまのよの人のすめる經うちよみおこなひなどいふことはいとはづかしくし給ひて見たてまつる人もなけれどすゞなどとりよせ給はず　今案蜻蛉日記にとかくしなさせたまひてほだいかなへたまへとぞおこなふまゝになみだぞほろ〱とこほるゝあはれいまやうは女もずゞひきさげきやうひきさげぬなしときゝしときあまゝさりがはなさるものぞやもめにはなるてふなどもどきしこゝろはいづちゆきけん云々又紫式部日記云なでう女がまんなふみはよむむかしはきやうよむをだに人はせいしきとしりうごちいふをきゝ侍るにも物いみける人の行末いのちながかゝめるよしともみえぬためし也といはまほしく侍れど思ひぐまなきやうなりことはたさもありよろつのこと人によりてこと〱なりほこりかにきら〱しく心ちよげに見ゆる人ありよろづ徒然なる人のまぎるゝことなきまゝにふるきほんごひきさがしおこなひがちにくちひゞらかしずゞのおとたかきなどいと心づきなく見ゆるわざなり

よろしきわか人どもゝむげにしらぬ　今案侍從をもとにてそのなみの人どもをいへり

もえ出る春にあひ給はなんと　河「岩そゝぐたるひのうへのさわらひのもえ出る春になりにけるかな抄此引歌いかゞたゞ草木の春にあふにたとへていへるなり　今案河海にひかれたる歌は萬葉第八にありて志貴皇子懽御歌一首とて載たる歌なればこゝによくかなへり草木ともいはでもえ出るといへる此歌にていへること明らかなるを抄に此引歌いかゞといへるはかへりて誤りなり

たいしがはらなどまて　今案元輔家集につくしにてだいにのみかどにぼたいずたてまつりあけらるゝに「みがくらむ玉の光をたのむかなかすにもあらぬたいしがはらも

まゝのゆいこんはさらにも聞えさせず　今案上に末摘花の詞にこまゝのたまひおきしこともありしかばとあるをうけてそれはおほせのことくなればかさねて申に及はずとてその上をいふなり

玉がつらたえてもやまじ行道の手向の神もかけてち
かはん　今案伊勢家集に物へゆく人にかづらをやる
とて「けづりこし心もしるく玉かづらたむけの神
になるぞ嬉しき
いのちこそしり侍らね　今案古今にいのちだに心に
かなふものならば又えぞしらぬ今こゝろみよいの
ちあらばなどいへる歌をふくめるか後拾遺雑四か
たらはんといひて道明法師のもとにまうできたる
人のよみ侍ける　よみ人しらず「たえやせん命ぞ
しらぬみなせ川よしながれても心みよ君
こしの白山おもひやらるゝ雪のうちに　今案古今「消
はつる時しなければこしぢなる白山の名は雪にぞ
有ける「君をのみおもひこしぢの白山はいつかは
雪のきゆる時ある　上にほかには消ゆるまもある
をといへるをおもへばこれらを引べし
卯月ばかりに花ちる里をおもひいて聞えたまひて云
々なこりの雨すこしそゝぎてをかしきほどに　今按
俊成河古「雨そゝぐはなたち花に風すぎて山ほとゝぎ
す雲に鳴なり　俊成卿は源氏をこのみ給ひければ
花ちる里は本歌によるに橘なれば此三句こゝの詞

ばかりを取用られたるべし
木たちしげくもりのやうなるを　今案萬葉「あさな
さな我見る柳鶯のきゐ鳴べきもりにはやなれ
おほきなる松に藤の咲かゝりて月かげになびきたる
風につきてさとにほふがなつかしくそこはかとなき
かをりなりたち花にはかはりてをかしければ　今案
定家卿家集　春夜樹「春の夜はあたりの梅を吹風
に袖の香かふる軒の橘　此歌こゝの心を得てよま
れたりとおぼゆ
すきならぬこだちのしるさに　諸本如此
いひしにたがふつみ　細「いとゞこそまさりにまされ
忘れじといひしにたがふことのつらさは　今按此
歌何にか出たる
むかし物語にたうこぼちたる人もありけるをおぼし
あはするにおなじさまにてとしふりにけるもあはれ
なり　河古人釋一同顔叔子事云々定家卿本には
塔こほちたりとあり或又堂とかきたる本もあるな
り　細畢竟實法なる人のことなり　今案顔叔子が
故事其心まだく叶はず更に用べからず昔物語に親
の功徳のために立たる塔あるひは堂をその子不孝

にしてこぼちたるよし書る物あるによりてそれにおもひ合すれば父常陸宮のしおかせ給へることを改すして末摘花の居給へるを孝行の心なりとあはれに見給ふなり細流に畢竟實法なる人のことなりとあるは昔物語と云よりあはれなりと云までに渡りて末摘花の事ならば叶べしたうこぼちたる人もありけるをと云までのことならば叶はずかれにくらべてもこれをあはれなりとほむる故なり塔の假字はたふなり今はたうとあれば堂か堂樀と云とありとがおほうかくれにけり　今案花ちる里もめうつしこよなからぬ所なるによりて末つむ花の方のよからぬことどもおほくまぎれてかくるゝとなり

ちかきしめのほどにて　今按諸本如此

關　屋

昔にはすこし云々いとゞありがたきすさびことぞ

注一説にいとゞありがたきすさびことぞとよみつゞくべし昔にかはらぬ御心のなつかしさはいとゞありがたき御しわさやと空蟬へいへり　今案此一説ひがことなり用べからず其故はいとゞ有がたきを下へよみつゞけはなつかしきなんといふを句として切べきかそれ切ともつゞくともすさびことをありがたしとおもはゞようなきことゝ思へどゝいへる忽に自語相違するにあらずやもしまたすさびごとこそといふまでをつゞけてこゝを句として猶かゝる御使するはようなきことゝ思へとさすが心づよくすくよかにえ聞えかへし侍らで此御文給はりて參れりといふよしならばさも心得られぬべけれども御すさびことゝ知らば何かいとゞ有がたきとはいふべき只ありがたきを句絶とするがむつかしからず心明らかにてよし

繪　合

さしぐしのはこのこゝろばに　細　さすくしなり只櫛か　抄綏の字をこゝろばとよめり組たるべきか又云篩のくりかたと見えたり私兩説あれども組を以て正とすと云々　今案和名抄第十四容飾具云唐韻云梳音疏一訓二介都留一細櫛也枇毗志反和名保曽岐久之百刺櫛佐之久之同卷服玩具云禮記注云綏音受和名久美所下以貫二珮玉一相受承上也又用二組字一音祖此字何にかこゝろばとよめるもしくみをこゝろばといはゞくりかたといふ異説あるべからず拾遺集雜上に物へまかりける人のもとにぬ

さを結ひふくろに入てつかはすとて　よしのぶ
「淺からぬ契むすべるこゝろばゝたむけの神ぞしるべかりける　このこと書のこゝろぬさを結ひて袋に入てといふ義ならば歌の二三の句はそのぬさを云か又袋をたとへばあみなどすけるやうにむすへるを結袋といひてそれにぬさを入たらば二三はその袋に付てよみて下句中のぬさをいふか榮花物語にはこひとよろひにたきものいれてつかはすこゝろは梅の枝なりとあるは薫物の箱のうへに梅花の作り枝をさしたらんをこゝろばといへるにやとおぼしくりかたをいはぬこと明らかなり今こゝの御歌こゝろばに書きたればくみにあらぬこともしられたり又此下に至りてえんにすきたるちんのはこにおなじきこゝろばのさまなどいといまめかしといへるも沈の箱に沈の心葉をさしたるなりその箱の心ばなる故におなじきといふにはあらずその心ならばおなしきといふ詞なくてありぬべししからば能宣のうたはぬさを袋に入れてそれにこゝろばをさせばぬさと袋との外にいへるにや

とばかりうちながめたまへり　細　時ばかりなりしばらくと也　孟時　日本紀　今案日本紀にとばかりと云詞なし後拾遺雜二　門おそくあくとて歸にける人のもとに遣はしける　和泉式部「ながしとて明ずやはあらん秋の夜はまてかしま木のとはかりをだに歌によめるはこれ初かおもひ絶なんとばかりをなどいふは假字にてこれにおなじからず

わかるとてはるかにいひし一言もかへりてものはいまぞかなしき　今案此かへりては歸るに却てを兼たり後拾遺戀四に　道命法師「逢見しを嬉しきことにおもひしはかへりて後の歎き也けり　此かへりてに同じ

しめの內はむかしにあらぬ心ちして神代のことも今ぞ戀しき　今案神代のことももとは業平の神世の事もおもひ出らめといふ心を得て用ひたるなるべし續千載集秋上よみ人しらす「しめのうちの花の匂ひを鈴虫の音にのみやは聞ふるすべき

かへし　選子內親王「色々の花はさかりに匂ふとも野原の風の音にのみきけ

左なほがすひとつあるはてに　細　左方一番の勝となり今一番なるべき時須磨の繪いできたり　今案こ

れよりさき幾番もありてさてはての一つがひ殘り
たる時にすまの卷出來たりといふなるべしあなた
にも心してはてのまきは心ことにすぐれたるをえ
りおき給へるとつゞけたるにても見えたり
ふかきらうなくみゆるをれものも　今案をれものと
は物のなかばをれたるやうにて何にもたらぬはし
たなる心か蜻蛉日記にもおほし
いへのこの中にも猶人にぬけぬる人のなにことをも
好みえけるとぞ見えたる　今案日本紀に良家子とか
きてうまひとの子とよめり搢紳をうまひとゝよみ
たる高家なれはいへのことといへりもとより拔群な
る人のこのみ學ひて得る道なり
いにしへのすみがきの上手ともあとをくらなしつへ
かめるは　今案墨跡とは歌にゆきかくるとよめるに
おなじことなれはいにしへの上手とも今此源氏の
君と世をおなしくして御繪を見はいたく恥て何方
にもゆきかくれなましとあまりにほむる心なり

松風

かのとのゝ御かげにかたかけてとおもふとありて
今案かたかけてとはたとへば家をたよりにひさし
をつくるごとく彼殿の德蔭によるをいへり思ふと
ありてとはおもふといひてのこゝろなり
つなしにくきかほを　今案萬葉集第十七に家持長歌
につなしとるひみの江過てといへり此つなしは魚
なり其魚にくげに見ゆる物にてそれがやうしたる
にくきかほといふか日本紀に嗜の字をつなむとも
つらますともよみたれど此字の心とは見えず
はなどうちあかめつゝはちふきいへば　今案東坡
も虎を手うちにする者も蜂をば吹といへり蜂の身
に近づく時はうそぶきて拂ふ習也諺に預かればな
からのぬしといふやうに年ころ田はたけなども己
が物のやうにおもひをれる故に修理して移り住ま
んといふをさま〴〵によかるまじきよしにいひな
してきらふ心にいふを蜂ぶくとはいへり呀花に腹
立の體なりといふもたがはぬと預りたる所なれば
それまではいたるまじき理なり
おなじことをのみ云々いふより外のことなく　今案
拾遺集賀に源順「老ぬればおなしことこそせられ
けれ君はちよませ君に千代ませ
又はえしもかへらじかしとよする波にそへて袖ぬれ

がちなり　今案よする波は上のかへらじと下の袖ぬ
れがちなりにかゝれり
天にうまるゝ人の　今案細流に天上欲退時の文は今
別るゝ悲の心ばかりに取なりとある此心を用べし
但今都へのほる人は天へものほる程の心にてわか
心は此苦ありとなりこれは用ゆべからず其故は天
に生るゝと三途に歸るとはひとりの天人の上の昇
沈にて都へ上る人と明石にとゞまる人とことなる
に叶はず別の悲しひのかぎりをいはんとて天上を
わかれて三途に下るらん時の悲しひになずらへて
といへるまでなり
いくかへりゆきかふ秋を過しつゝうき木にのりて我
歸るらん　今案「天川うき木にのれる我なれやあり
しにもあらず世はなりにけり
かくこそはすぐれたる人の山ぐちはしるかりけれ
河引歌「人よりもおもひのぼれる君なればむべ山
口はしるくぞありける　今案此引歌何に出たるか
おぼつかなし　六帖に「秋霧の立まふ山の山口は
かねてぞしるきうつろはんとて　此歌にていへる
なるべし

つくろわれたる水のおとなひかことがましう聞ゆ
今案續後撰集雜上云東北院の渡殿のやり水に影を
見てよみ侍ける　紫式部「影見てもうき我泪落そ
ひてかことがましき瀧の音かな
歌いさら井ははやくのことも　今案日本紀に潦水を
いさらみづとよめり又六帖に「我門のいさら小川
のまし水のましてぞ思ふ君ひとりをば　潦は和名
にはたづみとよみて雨の後にはかにたまりてし
ばしある水なりしかればまし水は眞清水にはあら
で増水なりよりて殊にましてぞおもふとつゞけた
りしかればいさら井も潦井にてもとは水のすくな
きか雨の便にてはまさりなどするをいふなるべし
めぐらしおほせらる　今案本朝文粹第十三に慶滋保
胤のかゝれたる勸學院佛名廻文一篇ありめぐらし
は諸人にふれまはして善根をともにするなるべし
里遠しやとのたまへば　花「里遠みいかにせよとかか
くのみはしばしもみねばこひしかるらん　今案此
引歌何にゝ出たるにかおぼつかなし萬葉第十一に
「里遠みうらぶれにけりまそかゞみとこのべさら
ず夢に見えこそ人麻呂集の歌也同卷にこれに似て

すこし何のかはれる歌もあり

木丁にはたかくれたるかたはらめ　今案遊仙窟云擧ニ頭門中一忽見ニ十娘半面一小町家集に「しどけなきねくたれ髪を見せじとやはたかくれたるけさの朝かほ

やへたつ山は　今案如覺法師「もゝしきの内のみ常に床しくて雲の八重たつ山は住うし

めぐり來て手に取ばかりさやけきやあはぢの島のあはと見し月　今案惠慶法師集に東山にて月あかき夜「久かたは手に取ばかり成にけり雲のゐるてふ寺にやどりて

薄　雲

わがみはとてもかくても同しこと　今案蟬丸「世の中はとてもかくてもおなしこと宮もわらやもはてしなければ

又手をはなちてうしろめたからんこと　今案萬葉十一「たらちねのはゝが手はなれかくばかりすべなきことはいまだせなくに

あまそぎ　今案喜撰式の長歌にもよめり

たゞひめぎみのたすきひきゆひ給へるむねつきぞうつくしけさそひて見えたまへる　今案萬葉第十六竹取翁歌にみどり子のわか子がみにはたらちねのはゝにいだかれよりたすきはふ子が身にはゆふかたきぬひつりにぬひき云々枕草子云あまにそぎたるちごのめにかみのおほひたるをかきはやらで打かたぶきて物など見るいとうつくしたすきがけにゆひたるこしのかみの白うをかしげなるも見るにうつくし又云いみじうこえたるちごのふたつばかりなるがしろううつくしきがふたあゐのうすものなごきぬながくてたすきあけたるがはひ出來るもいとうつくし

うらゝかなる空に　今案遲々萬葉

御さしぬきのすそにかゝりて　今案神代紀下云則攀ニ持衣帶一不ㇾ可ニ排離一

あす歸りこん　河海櫻人を引式注櫻人は花人と云がことしうつくしき人をいふべし　今案櫻人の櫻は地の名難波人と云が如し和名抄云尾張國愛智郡作良郷これなり　萬葉第三に　高市黑人「櫻田へたつ鳴わたるあゆちかたしほひにけらし鶴鳴わたるこの櫻田は櫻人に島津田をとまちつくれるといへ

るにあたるへし作良郷は海邊にて其前に島ありてそこに田あるを島津田といふか　重之集に「名取川わたりてつくるをしま田をもるにつけつゝよかれのみする　此類なるべし其舟とゞめはそのふねをとゞめよなりことをこそあすとはいはめはことはにこそあすともいはめなり古事記に仁德天皇の御歌に「やたの一もと菅はこもたずたちかあれなんあたら菅原ことをこそ菅原こいはめあたら菅原

日本紀に木梨輕太子の御歌に「おほきみをしまにはふり布儺あまりいかへりこんぞわがたゝみゆめことをこそたゝみといはめわかつまはゆめこれらのことをこそにおなじつまさるせなはとはあとさと同韻の字なれば妻有せなをかよはしていへりあめをさめ又催馬樂の中にあやめをさやめといへるがごとしさねこじは實不來にてまことにはこじとなりことはにこそあす歸りこんといはめ小島田を見てこんといふはことよせにてまことにはかのかたに妻あるせなればあすまことには歸りこじとなり細流に次の歌のあすもさねこんを早く來んとなりと注せられたるはかなはず

歌中々にをちかた人は心おくとも　今按此心おくとは「露ならぬ心を花に置そめて人に心をおきつしらなみ此心なり隔心するをいふにはあらず

我にていみじうこひしかりぬべきさまを　今案　拾遺　忠岑「春はなほ我にてしりぬ花ざかりこゝろのどけき人はあらじな

うつくしげなる御ちをくゝめたまひつゝ　今案くとふと同韻にて通ずれば含の字をくゝむともふくむともよむなり育の字をはくゝむともよむも心は羽含にて鳥の子を羽の下にくゝむてかくすより出たる詞なり

たゝよの常の覺えにかきまぎれたらば云々さてもあるべき物をなどおぼす　今案明石上の人がらはこれよりかみ上かしこにはといふよりねひまさりゆくと云までにつくせりよのつねのおぼえにかきまきるとはおほかたの受領ばかりの人のむすめならば容體などは麗く尋ねばかゝるたぐひなからんやは猶ありぬべきことゝおもひなすべきをこれは親の入道こそひがものゝ聞えあれ大臣の孫なれば種姓はさてもありぬべきほどとおぼしめすといふなり

細流暁花等の説は叶ふべしとは見えす
夢のわたりのうきはしか　河「世の中は夢のわたりのうき橋かうちわたしつゝ物をこそおもへ　今案此歌何に出たるにか六帖などには見えず
そのとしおほかた世の中さわがしくて　今案伊勢家集によのさわがしき比「さだめなき世をきく時の泪こそ袖の上なるふちせなりけれ　六帖には此歌かなしひに入れたり
人やうたてこと／＼しうおもはんと　今案菅家萬葉にうたてにほひの袖にとまれるといふ歌のうたてを別様とかゝせ給へり古事記に雄略天皇の御世のことをしるせる處に市邊押歯皇子の物のたまへるを舎人どもうたて物いふみこと申けるうたてもおなじ
こゝろにむせび侍りつゝ　今案萬葉に「白妙の袖わかるべき日をちかみ心にむせひねのひしなかゆ
宮もかくればとにやすこしなき給ふ　細　小町が姉「いにしへのむかしのことをいとゝしくかくれは袖ぞ露けかりける　今案此歌何にか出たる小町が姉の歌古今後撰にある外後の集六帖等にもみえず

もえし煙のむすぼゝれたまひけんは　細「むすぼゝれもえし煙をいかゞせん君だにかけよながき契を　今案此歌何に出たるにかしらず
つらからんとてわたり給ひぬ　河「つらからん人のためにはつらくしてつらきはつらきものとしらせん　今案此引歌何より出たるにか後撰戀一「思ふ人おもはぬ人の思ふ人おもはざらなん思ひしるべく　此歌をよみうつしたるにやとおぼし
やなきの枝にさかせたる御ありさまならん　今案細流にひかれたる歌は後拾遺集春上中原致時が歌にて題しらすなり作者部類に齋宮寮頭四位治部大輔有家子長保六年卒とあり長保は一條院御宇の年號五年ありて次に寛弘八年あり六年といへるは誤かもし六年其月に寛弘元年と改らるべければ改らざるさきにて相違なきか此物がたりよりすこしさきによめる歌か
ふさはしからぬ　河不祥　今案上に不祥の字日本紀にあるよしあれど見えたる所なし
いかでおもふことしてしがなと　今案おもふことは如思にても有べきかとの下におもへどなどいふと

の落たるかもしはとの字は衍文か
たれうき物と　細「打返し思へばかなし世の中をたれうき物としらせそめけん　今案此引歌六帖第三沫雨第五思ひ煩ふ所に載たるに共に初の五もじうたかたもなり沫雨に入たる心は下句のうき物といふを浮物とかけたりと見て入れたるなるべし

槿

こち／＼しくおぼえ給へるもさるかたなり　今案土佐日記にふなきみのばうさもとよりこち／＼しき人にてかうやうのことさらに知らざりけり「私云是は歌なとよむことをしらぬをいへり」
かしこくもふり給へるかなと思へど打かしこまりて
　今案此かしこくはまことにおそろしく見ゆるまでふり給へるなりおもへどゝいふにて知るべし
かみさびにける年月のらうかぞへられ侍るに　河神閑　神翁同　閑雅同　今案神さびは萬葉には神備ともよめり左備なと假名に書て字なし閑雅はみやびやかとよみて別義なり神閑神翁は不可用萬葉第十六に「此ごろのわかこひぢからしるしあつめ功に申さば五位の冠　神さびにげるとは齋院なるに付ての詞なり
歌人しれず神のゆるしを　今案此歌下句細流孟津の注叶はず齋院を恨むるなり今は何のいさめにかこたせ給はんとすらんとかきつゞけられたるにて知べし　いさめは神のいさむる道ならなくにより出たるか又萬葉第九登二筑波嶺一爲二嬥歌會一日作歌に他妻爾吾毛交牟吾妻爾他毛言問此山乎牛掃神之從來不禁行事叙云々　日本紀には制の字をいさむとよめり
そのよのつみはみなしなどの風にたくへてき　細河海に見えたり東南の風をいふなり　今案級長戸は風神の名科戸風といふこれにおなじ細流の說誤なり
みそぎを神は　細「戀せじのみそぎを神はうけずとか人を忘るゝつみふかしとて　今案此歌は定家卿の詠なり
ほゝゆがむこともあめれはこそ　今案頬喎たり
しほやき衣の　歌「すまのあまの汐やき衣なれゆけばうとくのみこそなりまさりけれ　今案此歌何に出たるにか　萬葉三「すまのあまの鹽やき衣のふ

ちぬまどほにしあればいまだきなれず　同四「須磨のあまの鹽やきゝぬのなれなばかひとひも君を忘れて思はん　同十一「しかのあまの鹽燒衣なるといへばこひてふものはわすれかねつも

にしなるがことぐしきを　今案西の門は雜人も出入せずしかるべき人の出入のためにまうけられたれはこれより入給ふなり

みかどもりさむげなるけはひうすゞきいできて　今案うすゞきは下のすはつにて舂(ウスツキ)にや足のなべきてうすづくやうにしてくるにや

みそゝせ(みとせイ)のあなた　今案下の歌をあはせて見るに異本にみとせのあなたしかるべきか源氏の身を觀したまふこゝろならばくちずさびもそれに應ずべきに式部卿の宮かくれ給ひて程なくあれたるよしの歌と見ゆその上物に感してはふとさまぐの心おこる習にはあれどみかど守のせうのさひてあかずとうれふるにつきては此宮のほどなく荒たるをおもふべきはしたしく身の上の生れ出しよりてなたを觀せんばうときなり

さすかにしたつきにて　今案和名抄云張揖云禪擬へ天灑二音之多都岐舌不ㇾ正也(ルナリ)

いひこしほどになど聞えかゝるまばゆさに　細「身をうしといひこしほどに今(イチシ)はまた人のうへともなげくべきかな「今案此歌何にかある知らず」

人づてならでのたまはせんを　今案後撰戀五　敦忠「いかにしてかく思ふてふことをだに人つてならで君にかたらん

こゝろづからとのたまひすさぶるを　河「こひしさも心づからのわざなればおき所なくもてぞわづらふ

今案此歌何にか見えたる

いとかく世のためしに　今案「こひ侘てしぬてふことはまたなきを世のためしにも成ぬべきかな　此うたの詞を取か

ゆめゆめいさら川などもなれぐしやとて　今案古今集古本にいさや川をいさら川と書けるがありてそれによれるにや後拾遺集序にもあふみのいさら川のいさゝかにこの集をえらへりとかゝれたり

松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕ぐれに　細ふかくもなき雪のさまなり抄松と竹と雪のつもりやう各別なり　今案上に雪のいたうふりつもりたるう

へに今もちりつゝとてつゞきたれば細流の說叶はず抄の說事足らずこれは松と竹と共に葉ありて雪のつもるを松はたわまで綿をかけたらんやうなるに竹はうちなびきもしはをれなどもすればけぢめ見ゆるといへりされどかならず松をまさりて竹をおとると勝劣を見るにはあらざるべし

歌 氷とぢし石まの水はゆきなやみ　今案後撰に「天川冬は氷にとぢたれや石まにたきつ音だにもせぬ

打もみしろかでふし給へり　今案源氏紫上兩說紫上にはあらず源氏といふを用べし

未通女

我心にまかせたる世にてしかゆくりかならんも　細不意也おもひやりもなくとなり　今案ゆくりならんにてかの字衍文か萬葉に大舟のゆくら〱ともゆくらかにとも大ふねのゆたともたゆたふともあまたよめり俗にゆるやかなるをゆくりといふゆくりとゆくらと同じかるべし日本紀に富寬をとみたゆたふとよめりたゆたふとゆくら又心かよふべししかれば種姓富貴ならぬ人は從四位下まではおほくの年月をへてさま〲の勞をつみても至りがたきを我御子の故にきびはなる人の四位になりて初よりゆたかならんはしかるべからずとて六位になし給ふをいふなるべしもし不意ならばゆくりかのかもし無用なるべし又不意を日本紀にゆくりもなくとよめるは不慮におなしくおもひかけぬにふとことのあるにいへりおもひやりのなきといふ心にはあらず

思ふやう侍りて大學の道にしばしならはさんのほい侍るにより　今案嵯峨天皇の皇子の中に源氏となし六位敘して大學の學生となしたまへるありそれに准らへてかけるか

家より外にもとめたるさうぞく　今案萬葉十四「ひと妻とあせがそをいはんしからはか隣のせとをかりてきなはも

すぐしつゝしづまれるかぎり　細　年よりたる人をいふなり　今案くずしつゝをさかさまにうつしてすぐしつゝになせるにやくずしき人といふはつねにくすみたる人といふなり

さるかうがましく　今案蜻蛉日記にもさるかうことをいふといへることあり

けうさうしまどはされ　花假粧なり細けさうするなり　今案假粧は女のかたちつくりにいふ詞なるうへに今はけうさうなれば別に考へあるべし

御心のうちを見せ奉りたらば　今案拾遺集戀一　よみ人しらず「人しれぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな　新勅撰戀五云中納言定頼讀人しらず「あだ人の心のうちをみせたらばいとゞつらさの數やまさらん

雲井の雁もわがごとやとひとりごちたまふけはひ　細「霧深き雲井の雁もわがごとやはれせず物の悲しかるらん　今案　この歌何にあるにかいまだ知らず

いとさくしりおよすげたる人　花觿の字をさくしりとよめり角にてしたる錐なり云々　今案和名抄刻鏤具云唐韻云觿(チ八許規反和名玖之利)角錐童子佩ㇾ觿說文云角銳端可以解結者也

いろ〳〵に身のうきほどのしらるゝはいかにそめける中の衣ぞ　今案いろ〳〵とは夕霧の歌に紅の泪みとりの袖といふをうけたるなり中の衣は(後撰戀五)「つらからぬなかにあるこそうとしといへへたてはてゝしきぬにやはあらぬ(拾遺戀三)「衣だに中にありしはうとかりきあはぬよをさへ隔てつるかな(うつぼあて宮)「年月もきぬも中にはおほくとも心ばかりはへだてざらなん

くつしいたくて　今案屈しいたきなりいたきはうもれいたきにおなじ屈する心のつよきなり

歌あめにますとよをかひめ　孟齊表紙にはとよわか姫とあり用之云々　抄延喜式神名帳廿番豊若宮とあり　今案帶をとられてをあふぎをとられてともいひかへたれば豊若姫といふかましまさばさもいふべきか延喜式に住吉に豊若神社のあることなし

けゞしう　今案今の俗にもたま〳〵いふ詞なり後のけを濁りていふなり

ましがつねにみるらんも　今案汝をいましといふその上略なり催馬樂にましはなれよとあるも汝が妻を離別せよといふなり

きんちらは　今案蜻蛉日記にも此詞おほし

何かは六位など　今案何かはゝ上に大宮の何かかうながめがちに思ひいれ給ふべきゆゝしうとのたまふも雲井の雁故とはしりながら六位をうたてく夕霧のおもひて打ながむらんやうに空しらずつくり

てのたまふを何かはさまで深く歎き侍らんとなり
大殿の太郎君の心み給ふべきゆゑなめり　今案太郎君のこゝろと切て心得べし心のほどをこゝろみ給ふべきなり
歌九重を霞へだつる　細洞中をちとうらみたる也　今案心づからおりゐ給へば御述懐はあるべからず只洞中に世中をしろしめさず靜におはする心也
あまたにもながれずやありけん　弄其席にあまたの人々ありしに歌をかゝざる故にかく云なり作者の詞なり　今案すんながれてのながれてにて御さかづきのことなるべし
命ながくてかゝる世の末を見ることゝ取かへさまほしう　抄昔薄雲女院方源氏などへあしくし給へることもとりかへさまほしう後悔なるなり　今案下におぼしむづがるといひ老もておはするまゝにさがなさもまさりてといへり後悔にあらず昔の世にかへさまほしきまでなり
ゐんもくらべぐるしう　今案副(タグヒ)くるしきなり
御としみのこと　今案蜻蛉日記にはやとしみをぞし給ふべきなどおほよそ此詞猶見えたりそれは精進の後魚を用る事のやうに見ゆる猶考ふべし「年(イナシ)齋節齋土佐日記
やり水の音まさるべき岩をたて　今案白氏文集云諸本如此
をさ／＼名もしらぬみやま木ども　今案定家卿「たのむかなその名もしらぬみやま木にしる人えたる松と杉とを

源註拾遺卷第五

玉かつら

あらましかばと　今案拾遺哀傷に　藤原爲頼「よの中にあらましかばと思ふ人のなきがおほくもなりにけるかな

あかしの御かたばかりの　今案ばかりはほどなり

ひとしなみには　今案等しきなみ也

ひゞきのなだもなだらかに過ぬ　今案なだをうけてなだらかといへりひゞきのなだは播磨也忠見家集にいよにいきたるによしあるうかれ女のいひたる「音にきゝめにはまだみずはりまなるひゞきのなだと聞はまことか返し「年ふれば朽こそまされ橋柱昔ながらのなだにかはらて　袋草子に忠見が童名なだといひけるよしあればうかれ女もひゞきのなだとよみ返しも名だにといふにもたせたるか此返しの次の詞書につの國に年ごろ身をしづめてこもりゐたるをとあれば返しはこれにて心得べしひびきのなだのあり所此うかれ女が歌にさだまれるを抄に忠見家集に今ひとつあるを引てなどこれを引もらされけん

歌「ひゞきのなだもさはらざりけり　今案さわがさりけりなるべし

心をさなくもかへりみせて　今案　不賢(ヲサナシ)　不肖(同)　不叡(同)　不敏(同)　以上日本紀　をさなしき心のなきををさなしといへばおろかなる意也いとけなき子ををさなしといふもまた此意也　公忠家集に「みづうみにしほたるばかりをさなくて都にとしのおいにけるかな　重之集「をさなくぞ春のみとふと思ける花のたよりにみゆるなりけり

たゞ水鳥のくがにまどへるこゝちして　今案本朝文粹第三辨ニ散樂一策邑上天皇勅問繇云宜レ學ニ峽猿之奇態一莫レ泥ニ水鳥之陸歩一此後の句を取用たり　又萬葉第十四東歌云「人の子のかなしけしたにはますどりあなゆむこまのをしけくもなし　かなしけしたはとはかなしくしてはなりあなゆむは足惱也濱渚鳥とおける陸歩の心也

松浦箱崎　河　松浦宮あまたの說あるか風土記に神功皇后御鏡石になりて鏡山にましますと見えたり仍て一體と云歟　今案此河海說は松浦鏡宮ある所を

鏡山とおもひてかくのたまへる也鏡山は萬葉仙覺抄に豐前風土記をひけり萬葉の第三もまた豐前といへり河海あやまれり

佛の御なかにははつせなん日の本のうちにはあらたなるしるしあらはしたまふともろこしにだにきこえあんなる　今案三代實錄第二十八云貞觀十八年五月二十八日甲辰先レ是律師法橋上人位長朗申牒偁大和國長谷寺是長朗先祖川原寺修行法師位道明靈龜年中率ニ其同類一奉ニ爲國家一所ニ建立一也靈像殊驗遐邇傳止云々又長谷寺壺坂寺の觀音靈驗第一なるよしもあり

つばいちといふ所に　今案今の世の丹波市といふ所なりといふはつばをたばとよこなまれる歟　武烈紀云於是太子思ヨ欲聘ニ物部麁鹿火大連女影媛一遣ニ媒人一向ニ影媛宅一期レ會影媛曾奸ニ眞鳥大臣男鮪ニ恐レ違ニ太子所レ期報曰妾望奉レ待ニ海石榴市巷一　萬葉集第十二云「つばいちのやそのちまたに立ならし結び　紐をとかまくをしも「紫ははひさすものそつはいちのやそのちまたにあへるこやたれ　これら丹波市なるべし丹波市は山邊郡にありて長谷寺までは今の三里餘あるべしされぱつば市にとまりて下に日くれぬといそぎたちてみあかしのことどもしたゝめいでゝいそがせばとあれば丹波市にはあるべからず又淸少納言に市はたつの市つばいちはやまとあまたあるなかにはせ寺にまうづる人のかならずそこにとゞまりければくわんおんの御えんあるにやと心ことなりといへりこれによればつば市といふ所あまたある中にははつせにちかきつばいちをいへり　敏達紀云有司便奪ニ尼等三衣一禁ニ錮楚ニ撻海石榴市亭一用明紀云逆君　潜自レ山出隱ニ於後宮一（謂炊屋姫皇后之別業是名ニ海石榴市宮一）　これは同國高市郡なり以上三所見えたり又景行紀に豐後國にも海石榴市ありしか名つくる故もみえたり

かしこかきありく　今案搔首と詩にも作れり心ゆかぬ時のしわざなり

かけんもゆゝしくていひ出ず　今案萬葉に「嶺山をゆめ人かくなわすれにしその紅葉のおもほゆらくに

いとあたらしくめでたくみゆ　今案あたらしくははむる詞也惜の字をあたらしとよむ故にかゝる人の

今迄ゐなかにおはせしをよとおもふ也と注せるは叶はずめてたくみゆとつゞきたるにて知るべし新の字の心也

ひきたがへこゝまがへるやうもあり　今案蜻蛉日記に「霜がれの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなづけてしかな

あてき　今案童女の名なり紫式部日記に其比もありて見えたる名なり

まかでゝなぬかに過侍りぬれと　今案萬葉第九「わかゆきはなぬかは過じ龍田彦ゆめ此花を風にちらすな

この君とのたまへば　細源氏の詞この君とは紫上をいへり　花此君とは源自稱と云々如何　孟紫の事を源の宣ふ也　今案我に似たらばしもうしろやすしかしとおやめきて宣ふといへり此君は源氏の自稱なること明かなりおやめきてとはけさうする人などのことは中々紫上のあたりにてかやうに委しく尋給ふ事あるべからずはゞかる處なゝわかかほに似たる歟などくらべて宣ふはおやめきたる詞也

おうなになるまで過にけるを　今案和名抄云説文云嫗(和名於無奈)老女之稱也萬葉集云「いにしへのおうなにしてやかくばかり戀にしづまんたわらはのごと女の假名は遠無奈(ヲムナ)これは於の字を用ひてその心かはれり老女を於無奈といふは老女(オヒランナ)於伊遠無奈　この略語なる故於の字を用たりとおぼし玉かづら廿二歳なればおとなしくよきほどなるを卑下のやうにかくのたまへり

むつかしきふるものあつかひ　今案ちとそしりくちにいへば何人ぞさだめてはかく〳〵しき人にはあらじいつくのふるものならんなどいふ心なるべし

こひわたる身はそれなれど玉かづらいかなる筋を尋きつらん　今案玉かづらといふに三つのまがひあり玉髪は花鬘なり玉髲は髪のすくなき人などの髪をたすくる物也玉葛はよろづのかづらをほめていへり和名容飾具云釋名云髲(音被和名加都良)髲ハ少者所以被助其髪也俗用鬘字非也鬘ハ著花鬘之鬘見伽藍具河海に纓の字をたまかづらとよむよし和名等に見えたる事なし今いかなるすぢといふは髲なりたとひ玉鬘とかけり共かやうによめゝ類は皆髲也と知べし日本紀安康天皇紀に押木珠鬘なといへるは華

鬘ノ類なり
人のかたちはおくれたるも又猶そこひある物をとて
今按そこひはきはまりの心也底といふは此略なる
べし萬葉第十五に「あめつちのそこひのうらにあ
がごとゝ君に戀らん人はさてあらじ　會許比とか
けりそこゐにはあらず
あだひとといふいつもしをやすめところにうちおき
て　今案あだひとはよもじなるをいつもじといふこ
とはあた人のあた人はなど歌によりて今ひともじ
くはへつれば五もじとなるあた人のといふいつも
じといはゞあだ人はともあだ人をともいふにわた
らねばさてあだ人とのみいふなるべし

初　音

年たちかへるあした　今案拾遺「あら玉の年立かへ
る朝よりまたるゝ物は鶯のこゑ
いける佛のみくに　今案うつぼ物語にいきてはたら
く佛ときこゆるにかちまゐりたまへ
おとせぬさとのと聞え給へるを　河「けふたにも初
音きかせよ鶯の音せぬ里はすむかひもなし　今案
此歌何に出たるにか

くたぐしくぞあめる　今案碎(クダくシ)文集綱流に歌のこと
をいへるやうにあれど文のことばおほかるをいへ
るにや
物よりことにけだかくおぼさる　今案伊勢物語にそ
のたき物よりはことなり
歌めつらしや花のねぐらに　河「人しれず待しもしる
く鶯のこゑめづらしきけふにもあるかな　今案此
歌何に出てたるかしらず
さけるをかべに家しあれば　今案萬葉第十にはいへ
ゐせばとあるを六帖に今引ごとくにて入たるによ
れるなり
あれは誰時　今案萬葉第廿防人が歌に「あかときの
かはたれ時にしまかきをこきにしふねのたつきし
らずも　此かはたれ時も彼者誰(カレハタレドキ)時にて今のあれは
たれ時におなじ曉も夕ぐれもおなじくほのかなれ
ばなのりを問ふ心也しまかきは島陰なり
さきくさ　河朱草(サキクサ)後漢書　福草同　村種延喜式同　紫草同風土記　今
案朱草福草は延喜式治部省式に見えたり村種は式
中にある事なし紫草は何の國の風土記に出たるに
や萬葉集和名抄には紫草はむらさきなり和名云文

字集略云葸音娘和名佐木久佐ハ日本紀私記云福草草枝々相當也令義解神祇
令云三枝祭謂二率川社祭一也以二三枝華一飾二酒罇一祭故曰三枝也さきはさいはひな
ればさいはひくさの意也萬葉第五に三枝之中爾乎（サキクサノナカニヲ）
禰牟登（ネムト）とつゞけたりみつある物はかならず中ある
故なり葸と三枝と名は同じけれど心はかはれり三
枝は葸をまなびてすることとなるべし
はちすのなかのせかいに　花十樂の中に蓮花未開樂
の心也　今案これは誤なり十樂の中なるは蓮華初
開樂にこそあれ
御はなの色ばかり霞にもまきるまじく花やかなるに
今案拾遺集春　菅家萬葉集の中「淺緑野べの霞は
つゝめどもこぼれて匂ふはなざくらかな　此歌を
用たりしかるに諸抄考られず其故をいふにもと定
家卿も花櫻といふ一種ある事を知り給はで古今に
花櫻と詠るをも花薄などの類に思ひ給へる故也さ
やうによめるもなきにあらねどまた別にある事を
さまたげぬ也うつぼ物語に花櫻のいとおもしろき
花ひらにとて歌あり花櫻の葩（ハナビラ）に歌をかける也　貫
之家集に「雨ふれば色さりやすき花櫻うすき心も
わがおもはなくに　六帖に花櫻の題かには櫻の下
山櫻の上にありて「花櫻いかでか人の折てみぬ後
こそまさる色も出こめ　此次に猶二首あり初の歌
は躬恒が歌にて彼家集にもあり詞花集京極前太政
大臣の家に歌合し侍りける時によめる　康資王母
「紅のうす花さくらにほはずはみな白雲と見てや
過まじ　此歌を判者大納言經信くれなゐの櫻は詩
につくれども歌にはよみたることなんなきと申け
ればあしたにかの康資王母のもとにつかはしける
　京極前太政大臣「白雲はたちへたつれど紅のう
す花櫻こゝろにぞそむ　かへし康資王母「白雲は
さもたゝばたて紅の今ひとしほを君しそむれは
紅の櫻を詩につくれるとは文選沈休文が詩に山櫻
開テ欲ㇾ燃と作れるなどをいへるにや　先達も見もら
せる事なきにあらず
白妙の衣はなゝへにもなどかかさね給はざらん　今
案萬葉第廿防人が歌に「さゝが葉のさやく霜夜に
七重かる衣にませるころがはたかもかるはきるな
りころはこらなり
みはやす人もなきを　今案古今に「山高み人もすさ
めぬさくら花いたくなわひそ我見はやさん

かぎりあるみちの別のみこそうしろめたけれ命ぞしらぬなど 細「かぎりある別のみこそかなしけれ誰も命は空にしらねば 河「なからべは命ぞしらぬ忘れじとおもふ心はつきそはりつゝ 今案右二首何に出てたるにか

みづうまやにて 今案萬葉第十四に「鈴かねのはゆま馬屋のつゝみ井の水をたまへな妹がたゝ手ゆ

竹河うたひてかよれる姿 河舞の姿をれたるなり句兵部卿に求子(モトメゴ)まひてかよれる袖とあり 今案かよれるはたゝよるをいふかはきにかよふきやすきをかやすきといふがごとし 萬葉集第四「秋の田の穂田のかりはがかよりあはゞそこもか人のわをことなさん 催馬樂總角にもまろびあひにけんかよりあひにけりといへり竹川の巻に竹川うたひてみはしのもとにふみよるほどゝいへるもこゝにかよれるといへるもおなじうたひてこなたへより來る也

・胡蝶

からめいたる舟つくらせ給ひけるおろしはじめさせたまふ日は 今案古今雜上云中務のみこの家の池に舟をつくりておろしはじめて遊びける日とあり

みづとりどものつがひをはなれずあそびつゝほそき枝どもをくひてとひちかふ 今案こゝを句にてをしのなみのあやとよむべし 萬葉第十「春霞ながるゝともに青柳の枝くひもちて鶯なくも同第十六長忌寸意吉麻呂詠二白鷺啄レ木飛一歌「池神の力士まひかもしらさぎのほこくひもちて飛わたるらん

ぎやうかうの人々 今案行香とかく

昔物語を見給ふにも 細住吉物がたりなとにも云々今案住吉物語は小一條院の御歌を引けり源氏よりは後に出來たるものなり

おほたの松のとおもはせたる事なく 花「こひわびぬおほたの松の大かたは色に出てやあはんといはまし此心は色にやいでましといふと云々彼歌は六帖にも朝綱集にも重之集にもありと云々 今案朝綱集は見ざれば知らず六帖にも重之集にもみえず兼盛家集にぞ「二葉より今はおほたの松の葉のいくよか君をこひてへぬらん とよめる歌のみえたる

かたよりにほのきえて 今案萬葉第十に「秋の田のほむきのよれるかたよりにわれはものおもふつれ

なき物を

螢

人たまのわらゝかに　今案萬葉第八に「玉にぬきけたでたはらむ秋はきのうれ和々良葉における白露この歌わゝら葉といへるは末葉は後に出れば柔らかなる心かこれによるにわゝらかといへる重點の所をたかへてわらゝかとなれるにや

ひきつみたまへば　今案袖をひきつ身をつみつなどしてさなせぞとこゝろをつけたまふなりつむは撕の字なり

ほたるをうすきかたに　今案うすきかみをと有けんをみをたとなせるにや吉野よりすきて出せる漆漉などいふ紙はいと薄き物なりさる體の紙などにつつまれけるにや

ほのかなれど孟會明（ホノカ）　今案ほのかは萬葉に髣髴を用たり會明はあけほのなり

のきのしづくもくるしさに　今案催馬樂「あつまやのまやのあまりのそゝき我たちぬれぬその戸ひらかせ　此歌の心を得てかけり

などいとにけなくもあらまし　今案などかいとにけなくもあらんと見るべし

人ににぬありさまこそ　今案おほかたの世の人のことくならぬを人ににぬといへりいふ心は源氏はまことの親に似て好色の心あれは親ともいひかたし親のもとなとにありてかやうなる御心はへならばにげなきあはひにもあるまじけれどさもなければかれにもこれにもつかぬゆゑに人ににぬとはいふ也さてかりそめにも親めく人のけさう心あれは世がたりにやならんとなけくなり

よしといへどなほこそあれとのたまふ　細形よきひとはあれどこれほどの人がなきとなり　今案細流の注いまだつきぬかなほはすなほにて質朴也なほ人なほものといふも俗なるをいへばおほかたの人は形よしといへども俗にこそあるを此兵部卿はよしとなり上にかたちなどはすくれねどゝえらびてその外をばほめたて給ふにて知べし

なほあるをばよしともあしともかけたまはず　今案此なほあるは上になほこそあれとのたまふといへるにはかはれり萬葉第七に　默然不有跡（モダアラジト）あとのなくさにいふことを聞知らくはすくなかりけり此五

もじを古點にはなほあらじと丶よめる故に此物語花宴などになほあらじにといふ詞あるに注に此歌をひけりしかれば花散里の此次にかれはかゝりこれはかゝりとのたまはぬ人々の事は源氏のことはにもかけ給はずとなり此次にいふべき人の猶あれどもその人たちをばといふにはあらず

歌 そのこまもすさめぬ草と 花 後撰恵慶「かをとめてかる人あるをあやめ草あやしく駒のすさめざりけり 今案後拾遺を後撰と引れたるは誤りなり又とふ人をかる人と改たるも誤なり集に五月五日はじめたる所にまかりてよみ侍けるとあればとふ人ことわりなりまた恵慶集に五月菖蒲ふける所をとこうまひかへてみる「わがこまのつねはすさめぬあやめ草引ならへてはけふこそはみれ 經信卿後拾遺に今の恵慶の歌を入られたるを難せられしはかへりて誤りなり拾遺戀二に みつね「おふれどもこまもすさめぬあやめ草かりにも人のこぬがわびしき 花散里の歌のこゝろこれをもとより取れるなるべし惠慶も此躬恒の歌によれるなるべし又元眞集に「こまなへてすさめぬ澤のあやめ草けふにあはずは猶やからまし

歌 にほ鳥にかけをならぶる 今案にほ鳥にとはにほ鳥のごとくにといふ心也萬葉第五第十八にともににほ鳥のふたりならびゐとよみ第十五にはにほ鳥のなづさひゆけばとよめり花散里の歌もその駒といひみぎはのあやめといひてひきつるといふはふたつにかゝる緣の詞也源氏の返し又わかこまとあやめとをかけてひきわかるべきといへること同じわかこまは若駒也老馬は智あれどあしをは用べからねば若駒を賞する也五日には駒をも菖蒲をもともにひく日なればけふにあひつるといへり騎射なればおひおくるゝやといへるも生と追とをかねたり此上に用なき薦になして若駒を若薦にかよはしていはん事わづらはしといふべし

すみよしのひめぎみの 今案今世にある住吉物語には後拾遺にある小一條院の曉のかねのこゑこそきこゆなれといふ歌を引用ひたれば此物語に引べきにあらず昔のはうせて所々のこれるを書つゞけたるにや

ほと〱しかりけん 細 おどろ〱しきなどいふ詞

也　今案ほど〳〵しは殆の字をほとんどゝよむは此ほと〳〵を音便にかくいふなり危殆はともにあやうしとよむほと〳〵の心もこれにおなし然れは上のとをすみ下のとを濁る也ほどふる事を程々しといふはかはれりふたつの證歌　萬葉第七旋頭歌「みぬさとるみわのはふりがいはふ杉原薪こりほと〳〵しくにてをのはとられぬ　拾遺雜戀「宮つくるひたのたくみのてをのおとのほと〳〵しかるめをも見し哉　右二首は殆也六帖「ふしの山なけきこるてふをのゝえのほど〳〵しくもなりしほと哉　右一首は程々とよめり

かた心つくかし　細さやうなる方の心つくかし也

今案片心なるべし俗にもかた心にかゝるなどいふ言なり片思片寄片心片目片耳などの類なり俗に片意地なりといふに此かたごゝろはおなじかるべし

わが世のほどはとてもかくてもおなじことなれど

今案「世の中はとてもかくてもおなじこと宮もわらやもはてしなければ　此歌の上句の詞ばかり取用たり

もしさやうなる名乘する人あらば　今案告の字をのると讀り萬葉になかなのらさねとよめるも汝が名をつげよの心なり然ればなのりは名告なり

常夏

ひみづめして　今案和名云四聲字苑云氷〈筆綾反和名比〉水ノ寒シテ凍結スル也膳夫經云立秋後不レ得レ頒ニ氷槧一〈今案以レ氷入レ槧也〉

するはん　細今の世にもありひめといふ物也　今案和名云唐韻云糈糅〈今案二音和名比女或說云非ニ米粥之類一也〉

底きよくすまぬ水に宿れる月はくもりなきやうのいかてかあらんとほゝゑみてのたまふ　細おとゞはらならば別したる事も有まじきと也くもりなき月も濁れる水にはくもらでは叶はざる也　晒おとゞ腹にありし女子にてさやうによろしからぬにやと也　今案辨少將もくはしきさまはえしり侍らずとて近江君のよろしからぬ事をあらはにいはず源氏も朝臣やさやうのおち葉をだにひろへとのたまふ故に下心には細流弄花のこゝろあるべけれどもおもてはしかるべからずうへはみさをつくり給ひしかどこゝかしこしのびありきせし人なればさるおとりばらの女子もなどかなからんといふ事をにごれる水に宿る月のくもりにたとへ給ひそれに下心

もあればほゝゑみて呀するやうにのたまふにこそ
おなじかざしにて　今案河海に伊勢が歌を引給へり
しかれどもこれは拾遺雑下　藤原爲頼「ぬす人の
立田の山に入にけりおなじかざしの名にやけがれ
ん　此歌にて取れる詞にや心もすこしよるかたあ
り

いとはれぬべきよはひ　今案　萬葉第五山上憶良の
哀ニ世間難レ住歌に老て人にいとはるゝ事を「たつ
かづゑこしにたがねてかくゆけば人にいとはえか
くゆけは人ににくまえとよまれたりいとはえにく
まえはいとはれにくまれ也「いづくにか身をはよ
せまし世の中に老をいとはぬ人しなければ

まことのうちなるほとは　今案　養在ニ深窓一人不レ識（長恨歌）

世のきゝ耳かろしとおもはれば　今案　萬葉第十一
「ことにいへば耳にたやすしすくなくも心のうち
にわがおもはなくも

和琴　花 最前は弓六張をならべてつるをうちならし
しより和琴といふものをつくり出したりとも云り
今案弓六張ならべて引けるよりおこるといふ事
は長明の無名抄に見えたり或書云令下三琴之神天ノ牛
首命並張臥張張ニ天ノ眞ノ弓六張一而調レ之皷上レ之此神ナリ
者是飯假井宮之玉琴社神

こゝにはこれを物のおやとしたるに　今案繪合に先
物がたりのいできはじめのおやなる竹取にうつぼ
のとしかけをあはせてあらそふとありこゝはこと
に内大臣の事をいはんためなればたよりおもしろ
し

こざらましかば　今案諸本如此

うたゝねはいさめ聞ゆる物を　河 引歌云々「たらち
ねのおやのいさめしうたゝねは物思ふ時のわさに
そありける　今案後撰集にあり

ふとうのだらによみいんつくりてゐたらんもにくし
今案取わきて不動といへるは此尊忿怒の相を現
しいかめしくて女の念ずるに相應せぬ故なるべし
禁秘御抄に帝はながき數珠を持念佛なとし給はん
事はしかるべからぬよしかゝせ給へる類なり不動
の印は眞言の多き中に今いへる　劔印慈救咒なる
べし劔印の樣ことごとしく慈救咒もあらゝかに聞
ゆる眞言にて殊に女に相應せぬ故にいへりおほよ

そいづれの佛菩薩等の印にても女などの結び居たらんにくかるべし女の念ずべきは佛には阿彌陀藥師ぼさちには地藏觀音天女には辨財天女吉祥天女など然るべしおほよそ如來と菩薩と天女の類はいづれもふさひぬべし不動降三世等の明王多聞持國等の諸天をははるかに憶念し奉りあるひは祈の師につけてたふとぶべし持佛などに安置したらんはまことにけうとかるべし貴賤男女僧俗老幼分々に隨ひて其用意あるべき事なり

后がねの姫君　今案うつぼ物語に東宮にたちたまふべきを坊がねといひ伊勢物語にむこがねなどいへるにおなじ

心みごとに　今案試言(コヽロミゴト)になり

ねきことになしはしなびき給ひそ　今案萬葉集第十一に祈の字禱の字ともにねぐとよめり願の字をねがふと云も同じ心なり神につかふる者を禰宜といふも國家をはじめ自他の事を神にたのみてまもり給へと祈り申ものなる故なり社の字をこそとよむもこそはこふ心也乞の字をもこそとよむに同じ彼禰宜等が祭りて所願をこふ神のます所なれば社とは名付たる也古今「ねぎことをさのみきゝけんやしろこそはてはなげきのもりとなるらめ

ひとかうそしるとて　今案人のかくそしるとて也

せうさい〳〵　河 小賽和名　今案和名抄第四雜藝類云雙六簺名苑云雙六子一名六采(今案簺ハ是簙音博俗云須久呂久) 又雜藝具云雙六采楊氏漢語抄云頭子(ハ雙六乃佐以今案見ニ雜題雙六詩一) 萬葉十六には詠ニ雙六頭一謌語有て假名には佐叡とあり頭子をさいといふも采の字の音を和語に用たる也小賽の字和名にある事なし玉篇云簺(先岱切行ノ棊相塞曰ノ簺) 簺は此字にや玉篇の注のこゝろは棊にけちさすを塞といふにや但塞の字蘇得切塞也と注したればふさくなれど蘇代切にては隔也とあれば相互に道をたちてとらんとするをいふかいづれにても棊に付たる字にて雙六の采とは見えず

てかきせいし給ひて　今案手をかき頭をかくは心にかなはぬ事の口にてさもいはれぬ時のわざなり

この人もはたけしきはやれる　今案はやれるとは五節もしめやかならぬ本上をいふなり上にざれたるわか人といへるにかなへり

かたちはひぢゝかに　細 泥土ぢかなると也下す〳〵

しき也　今案俗に下手〳〵しきをつちけのはなれぬと云類なるべし又案するに肱近にて手のみじかきを云る歟佛の三十二相の中にも兩臂修直摩膝相又諸指圓滿纖長相とてあり古事記に日本武尊の宮簀媛に賜へる御歌にもひさかたの天のかぐ山とかまにさわたるくゝひはほそたわやかひなをまかんとはあれはすれとゝあるは宮簀媛のほそやかにたわやかなるかひなをほめての給へりされば手も指もふとくてみじかきはけたかゝらぬそのひとつをもて餘をなすらべていふか

つみかろげなるを　今案河海に二説あるを細流に何れも可然但猶第一の義よろしき也とのたまへりしかれ共此物語に此言處々にあるこゝろを考ふるに末摘花の鼻いやうならぬをつみかろしといへるかとおぼしければとがすくなしといはんがことし

ひたひのいとちかやかなると　今案まゆと額の間みじかきをいへり佛の三十二相にも額廣平正とてほめたり額のみじかきはいやしくみゆる物なるをいへり

おほみおほつぼとりにも　今案和名云周禮注云褻器（褻音思列反）謂清器虎子之屬也（今案俗語虎子ハ於保都保清器ハ師乃波古）これによれば大御虎子（オホミオホツボ）なり河海尿壺（オホツボ）花鳥に大壺（延喜齋院式）尿壺の出所はいまだしらず清器は世にきたなき事をいふ宇治拾遺にもある女の人にこよみかゝせければはこせぬ日といふ事をあまたかけるよしありしのはこにてとれはきたなき事をいはじとてとる物の名をも略してさていふにや

妙法寺のべたう大とこ　今案三代實錄第四云詔（シテ）以近江國滋賀郡比良山妙法最勝兩精舍爲（ス）官寺

あえものとなん　今案貫之家集に天慶六年正月藤大納言殿の御せうそくにて魚袋をつくろはせんとてたまはせりけるおそく出くるにちかひ近くなりにしかば大殿に此よしをきこしめしてわがむかしよりようすると仰られてあえものにけふばかりつけよとてつかひしてたまはせたりしかば悦びかしこまりてようしてまたの日まつの枝につけてたてまつる應仁天皇紀に肖此云阿叡とありあやかるもおなじ

いとふにはゆるにや　今案河海にひかれたる歌は何にか出たる未見及後撰戀二又拾遺戀五に「あやし

くもいとふにはゆゑ心かないかにしてかはおもひ
たゆ拾やむべき
みなせ川にをとて　河「あしき手を猶よきかたにみな
せ川そこのみくづの數ならずとも　今案此歌何に
出たるにや
歌　草わかみひたちの海のいかゞさき　今案元眞家集
「ひたちなるいかご（いかゞ夫木廿六）の崎のわすれ貝ひろふかひな
き物にも有かな（ぞ有ける夫）　河海に蜻蛉日記をひかれたるは
たがへり
おほかは水の　今案六帖に「みよしのゝ大川水のゆ
ほひかにおもふ物ゆゑなみの立らん此三四句まで
を取れるなり
べにといふもの　河粉白氏文集　今案和名云經粉和名閉邇
經赤也染䓃赤所以著頰也今按經即頳字也又云
文選好色賦云著彩則太白（面名之路暁毛能）　粉はしろきもの
なる事誰も知れる事なれど文集に頳粉とあるを河
海にひかれたるを重て引とて頳の字をおとせるか
考ふべし

篝火

せこが衣もうらさびしきこゝちし給ふに　河六帖「秋
風の涼しくふけばわがせこが衣のすそのうらぞさ
ひしき　今案六帖には初の句はつかせのとあり
打松　今案定家卿の歌にいたつらにをり松たきてと
よみ給へり押折て打入るれば打松を折松共云か折
と打とまがふべければ折松を打松と書なせるにや

野分

つくりわたせる野邊のはな　今案古今に仁和のみか
どみこにましくける時布留の瀧御覽じにおはし
ますとて道に僧正遍照の母のもとにやどり給ひけ
る時遍照がよみて奉れる歌のこと書にも庭を秋の
野につくりてといへり
すゝしうおもしろく　今按萬葉第十に「秋風は涼し
くなりぬ馬なへていさ野にゆかなはきの花見に
なたゝる春のおきへの花園　今案後撰集に伊勢「數
しらず君がよはひをのばへつゝなたゝる宿の露と
ならなん
露の玉の緒みだるゝまゝに　今案後撰に「白露に風
の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける
春のあけほのゝ霞のまよりおもしろきかば櫻の　河
朱櫻名和「淺緑野邊の霞はつゝめどもこぼれて匂ふ

かばさくらかな　今案朱櫻をかばざくらとしたまふは誤なり和名云本草云櫻桃ハ一名朱櫻和名波々加一云邇波佐久良かくのごとし又木具云玉篇云樺ハ戸花胡化二反和名加波又云加仁波今櫻皮有レ之木皮名可ニ以爲一レ炬者也　此玉篇に云る心は何の木とえらはず木皮の炬とすべきをすべて樺といふか萬葉第六赤人長歌云　櫻皮纏作流舟二眞梶貫云々和名今櫻皮有之といへる是也炬とするのみならずよろづの器物などをとつるに用る物也猶委くは本草綱目樺の下に見えたりかばざくらといふは櫻の中に此櫻ことに其皮を用るによければ名づくるか又かば色とて一種の染色の名なれば花の色に付て名作るか河海にひかれたる歌は菅家萬葉集に出て拾遺にのせられたるも共に落句は花櫻かなとあればかば櫻かなと引かれたるは誤なれど物語のこゝにひけるやうかば櫻とは色に付て名づけてすなはち花櫻のことゝ見えたり花ざくらは紅なればかば色かよふべし

我かほにもうつりくるやうに　今案古今に忠岑「雨ふればかさ取山の紅葉ばはゆきかふ人の袖さへぞてる　萬十「我せこか白妙衣雪ふればうつりぬべくもゝみづ山かも

日のわづかにさし出たるにうれへがはなる庭の露

今案おもふ事ある時に心のかなへる人にむかひてうれふるごとく野分に吹しかれたる草などの日のさし出たるにあひてうれへがほにみゆるとなりうれひがほはうたへがほの心也

むねづふ〳〵となるこゝち　啀成也　孟同　今案鳴にてあるべし

風につきてあくかれ給はんやかろ〳〵しからん　今案古今「風の上にありかさだめぬちりのみはゆくへもしらすなりぬべらなり

なよ竹をみたまへかし　河　靡竹　今案なよ竹を靡竹とかけること何に出たるにか大かたの物には見えずおほつかなし和名抄云兼名苑注云長間筝ハ和名之乃女この長間筝を俗になよたけとももどんなたけともいへり萬葉集第二云奈由竹乃騰遠依子等者云々第三云名湯竹乃十縁皇子云々よとゆと通する故にこれらはなゆ竹とよめりとをよるとはとをによるにてひけばたわみよるをしなやかなるにそへたれば爰に見給へかしとある源氏の心かなへり

ほそびつ　孟わたをかけてむしりなどする物也　今案萬葉第十三云處女等之麻笥垂有績麻成長門之浦ニ丹云々此麻笥の事か細流にぬりをけなどのたぐひかと有ぬりをけは塗麻笥也漆にて能ぬるは綿などのかゝらぬやうとてなり令義解に彦神に楯鉾を奉り姫神に絡架麻笥などを奉るといふ所に麻笥を水桶とかゝれたりこれにておもへば水桶ををけといふも麻笥より名付たる名にてかよはし用られたるなるべし

ほと〳〵しくこそ吹みだり侍りにしか　今案あぶなくこそといふ心常にかはらず

風さわきむら雲まよふ夕にもわするゝまなくわすられぬ君　今案萬葉第二人麻呂歌に「さゝの葉はみやまもさやにみだれとも我は妹思ふ別きぬれば　これも烏だになかずしづけきみ山をさへさゝの葉に風吹わたりてさわかすとも我はまきれずしてひとへに妹をぞおもふあかずして相わかれきぬるなごりにとよめる心なれば今の歌これをもとゝせるにやあらん

行　幸

此おとなしの瀧こそ　河「とにかくに人めづゝみをせきかねて下にながるゝおとなしのたき　今案此歌何に出たりといふ事をしらず

上達部のひらはりにものまゐり　今案和名云周禮注云平張曰レ帟（半金反和名比頁波利）

よたけくいかめしく　今案なよ竹をなゆたけともよめればゆたけくをよたけくといへるか萬八「おほの浦のその長濱によする浪ゆたけく君をおもふ此頃

けしうはおはしまさゞりけるを　今案萬葉第十五に異情をけしきこゝろとよめりおほよそ異の字をけともよめる事多し殊の字をもけとよめり此字なりにごりの末に　今案澆季の心なり上にきよめといふ事侍ればといふ水のことなればそれをうけていへり男女ながらへて相住をすむべき水こそとよせおちゆくけちめといふも流れてくだる心をふくめたり

いにしへはげにもおもなれて　河馴思抄面馴歟　今案面馴を用ゆべし

ひとふしようないなしとおぼしおきてければ　今案内

大臣のこゝろにあらぬ所ありともこゝは前後を思案して用心せらるべき所なるをとおもひ給ひし事なり

十六日ひかんのはじめにて　河彼岸齋法成道經曰云々　今案藏經の目錄に見えず僞經なるべしすべて彼岸と云事は此國にてある事なるべし蜻蛉日記にもみえたり

よるべなみかゝるなきさに打よせてあまも尋ねぬもくつとぞみし　今案よるべなみに浪をそへもくづにもをそへたり古今に興風が泪にうかぶもくづなりけりとよめるより出たり

さてもたがいひしことをかくゆくりなくうち出給ふぞ　今案ゆくりなくは不意を日本紀によめり抄に遠慮なき心かとあるは不意にてふとしたることゝいはむにおなし心なりと知られざりけるなるべし

いとかやすく　今案かはかよわくなとのごとくそへたる字也

いそしく　細いそがしく也　今案日本紀に勤心(イソシキコヽロ)また勤乎(イソシキカナ)などあれば能役などをつとむるをいそしといふなり　仲哀紀云筑紫伊覩縣主祖五十迹手(イトテ)聞二天皇之行一云々天皇即美二五十迹手一曰二伊蘇志一故時人號二五十迹手之本土一曰二伊蘇國一今謂二伊覩一者訛也此いそしと宣ふもよくつとめたりとほめ給ふ也又續日本紀云勝寶二年三月戊戌駿河國守從五位下猶原造東人等云々於二部內廬原郡多胡浦濱一獲二黃金一獻レ之鐐金一分沙金一分於レ是東人等賜二勤臣姓一文德實錄第四曰仁壽二年二月乙巳參議正四位下兼行宮內卿相摸守滋野朝臣貞主卒貞主者右京人也曾祖父大學頭兼博士正五位下猶原東人博通二九經一號爲二名儒一天平勝寶元年爲二駿河守一于時土出二黃金一東人採而獻之帝美二其功一曰勤子臣也遂取二勤臣之義一賜二姓伊蘇志臣一父尾張守從五位上家譯延曆年中賜二姓滋野宿禰一　これらにて知るへしいそがしきといふ詞はらうがはしきをいへばかなはぬなり但事をつとむるにいとまなき心にていそがしと名付たらばもとはおなじ詞にてもあるべし

ざうやく(役)をもたちはしりやすくまどひありきつゝ

今案景行紀云是小海耳(チヒサキノミ)可二立跳渡一(ヘシリテモワタリツ)　萬葉第五「なにはつにみ船はてぬと聞えこば紐ときさげて立はしりなん

をといとけざやかに聞えて出きたり　細をとはいらへたるなり　今案日本紀第三云熊野高倉下忽夜夢云々高倉下曰唯々而寤世に上にむかひてはあゝといひ下へむかひてはをといへど昔は上にむかひてもをといひけるにこそ

たのみふくれてなん　今案あまるまでたのむ心也和名云聲類云皺八比吶反和名布久流肉憤起也

ひゞしうかきいだされよ　今案蜻蛉日記にも此詞あり美々しうなり俗にもいふことなり

ながうたなどの心ばへあらんを　抄こゝろには短歌といひよみにはなかうたといへり　今案萬葉に何歌一首并短歌二首三首などあり此短歌と云るは三十一字なれば初のなかき歌を長歌一首といはざれども長歌なること知ぬへし又反歌ならぬ所にも常の歌を短詠短歌あるひは一絶などいへり又第五に思二見等一歌七首長一首短六首　又第十三に此月者君將來跡云々反歌葦邊往雁之翅乎見別云々右二首但或云此短歌者防人妻所レ作也然則應レ知二長歌一亦此同作焉こゝに長歌短歌ことはにあらはれて明らかなり又續日本後紀第十九に仁明天皇の四十の寶算を賀し奉るとて興福寺の衆僧壽命經を四十部書寫しその外さま〳〵の說義をなし長歌一首をよみそへて奉りけるをそのころ和歌すたれて公家にも沙汰なかりしかばめづらしき事にして載られたるに長歌とあれば長歌をさして短歌といへるは極りなきひが事也此事は定家卿のかき給へる物にも萬葉など委しく考へて父俊成卿の千載集に短歌とて長歌をのせ給へるをもうけぬ事にほの〳〵書給へり新勅撰集廿卷第十六より十九迄は雜歌を四卷にわかち第二十に更に雜歌とてあるは雜體なれば雜の外に立て雜歌五といはざるか初に長歌次に旋頭歌あれど俱にさは標せずしてこと書にのみ源政長朝臣の家にて人々なか歌讀侍けるに初冬の述懷といへる心をよめる權中納言通俊かつらの家にて旋頭歌よみ侍けるに戀の心をよめるなどかきて物名にいたりて物名と標してりうたんを讀侍けるなどかゝれたるも長歌と標しては中古以來の誤をたゞすやうなる上まさしく父卿の非をあらはすやうなりさりとて短歌と標せん事はみづからの心にかなはねば雜歌とは標して旋頭歌はあらそひなけれど長歌をの

み撰せずしてこれより俄に撰せんもけやけゝれば
ことがきにしらせられたるなるべし萬葉の撰者時
代長歌短歌等の事かんがへしるされたる一卷の中
に長短の心此勅撰にあらはされたり

いとようすかし給ふ　今案後拾遺に　義孝「忘れて
も有べき物を此頃の月夜にいたく人なすかせそす
かすといふにすかしこしらふると一向にたぶらか
すとあり今は弄するかたなればわらはべのむつか
るをすかすかごときにはあらずよりて人のおやけ
なくかたはなりやといへり

藤袴

うけひ給ふ人々　細呪咀の心也爰にてはたゞあしさ
まにおもふ心　今案日本紀の中に神代紀には誓の
一字誓約の両字ともにうけふとよめり神武紀より
後にに祈の字をうけふとよめる事おほし古事記に
は音をもて假名にかけりともに呪咀の心にあらず
字の如く知るべし呪の字は神代紀にはかしるとよ
めり又のろふとも讀り咀の字はとこふともとほふ
とも點せりともにのろふなりうけひはひろく善惡
に通ずべければ後にはそのあしき方に用ひてのろ
ふ事の様にのみいへりのろふはよきかたにはかよ
はしていはず

うけばりて　河請日本紀　諾同今案此両字ともに日本
紀にかくよめる事なし諾の字はうめなりとよめり
うへなりに同じ又せともよめりいなせのせなり心
くるしきことなるとをとり〳〵に見しかとけに上
をうけたる詞兵部卿の宮左兵衞督ゝとの媒もとり
とりに心くるしけなることをみしかとかなはて此
並のをもとか心あさく聞まゝに信して觀音に祈け
る故にこそ石山寺の靈驗もあらはれけめといふな
るへし

重複次にもあり衍
おりたちてくみはみねともわたり川　今案此渡川奈
落なり來世の事なれは此一二の句をはいへり下句
は夫婦のかたらひせし人引渡すといふなれはわか
渡さすして人にわたさせんものとは期せさりしと
なり互に約するをのみちきりといふにあらす期の
字をちきりとよめり心に期するを今は云り信明家
集云公平か三君をたちたるころ女「侘つゝも此世
はへなんわたり川後のふちせを誰にとはまし　返
し「此世をはおひもかつきて渡してん後ははしめ

の人をたつねよ此公平女の歌は大和物語に詞すこしかはりてあり今玉鬘の返歌
しのびがたく思ひ給へらるゝかたみなればぬき捨侍らんこともいと物うく侍るものを　今案拾遺「藤衣はらへてすつる涙川岸にもまさる水ぞ流るゝ　同「限りあればけふぬき捨てつ藤衣はてなき物は涙なりけり後拾「思ひかねかたみにそめし墨染の衣にさへもわかれぬるかな千載「をしきかなかたみにきたる藤衣たゞ此頃に朽はてぬべし
此御あらはし衣の色なくばえこそ思給へわくまじかりけれ　今案あらはし衣の事諸抄に注せられぬか分明ならぬにや
歌うつたへに思ひもよらで　今案うつたへとはひとへにといふ心也萬葉第四に「さか木にも手はふるてふを打たへに人妻といへはふれぬものかも　同「打たへにまが木のすがたみまくほりゆかむといへや君をみにこそ　同十「打たへに鳥ははまねどしめはへてもらまくほしき梅の花かも　同十六長歌「ありきぬのたからの子らが打たへにへておる布を日にさらし云々　蜻蛉日記云導師のはじめにもうつたへに秋の山へをたづね給ふにはあらざりけりまなこたち給ひし処にて經の心とはせ給はんとにこそありけれ
歌おなじ野の露にやつるゝ　今案うつぼ物語に「おなじ野の露はいづれもとまらねどまつきゆとのみ聞がくるしき　此歌をおもへるにや
かしこくもおもひより給ひけるかな　哢細 人はおそろしくおもひよるとなり　今案かゝるかしこきはよしといふ心なり聖教に普賢の賢を善なりと注せり若菜上にやう〳〵暮かゝるにかせふかずかしこきけなりとけうしてといへるも蹴鞠のためによき日なりといへるなり
よし野の瀧をせかんよりも　細「手をさへてよしの瀧はせきつとも人の心はいかゞとぞ思ふ　今案此ひかれたる歌は下句人の心をいかゞたのまんなり六帖第四に女をはなれてよめるとて　紀友則「たきつせにうき草のねはとめつとも人の心はいかゞたのまん　かくて此末に友則在原滋春紀貫之凡河内躬恒おの〳〵十句づゝ付たる中に是は躬恒か句也

いかにぞやこだいのことなれどたのもしくぞ思ひ給へけるとて　今案いかにぞやこだいとは夕顔の昔の事をほのめかしいへる也

歌いもせ山ふかき道をば　今案細流には名所ふたつとのたまへり妹山背山を取合せて妹背山といへば此歌名所みつをよめりおほくの人今に至るまでいもせ山をかくはしらぬなり萬七「人ならばはゝのまなごぞあさもよし木の河のべの妹と背の山　背の山は北に妹の山は南にあたりてその中を紀川と云川の流るゝなり其ふたつの山のあひたを流るゝ程の妹背河といへり吉野河の末なればながれてもいもせの山の中におつるとはよめり又此引歌は兄弟の間をいもせといひたれば爰によくかなへり又同卷に「せの山にたゞに向へるいもの山ことゆるすやも打橋わたす　これによればむかしは橋をもかけたりとみゆればをたえの橋もいよ〳〵よせあるなり妹背山を面によめる事萬葉にあまたあり

霜もおとさずもて參れる　今案大和物語下云先帝の御時承香殿の御息所の御さうしに中納言の君といふ人さふらひけりそれを故兵部卿の宮わか男にて一宮と聞えて色ごのみ給ひける頃しも忍びてねたまひそめてけり云々かの承香殿のまへの松に雪の降かゝりたりけるを折てかくなん聞え奉りける後撰戀四「こぬ（くゆる後）人をまつのはにふる（え後）白雪のきえこそかへれあはぬ思ひに　とてなんゆめこの雪おとすなとつかひにいひてなんたてまつりけるこれにならひてかけるなるべし

御（ミ）使さへぞうちあひたるや　今案いとかじけたるしたをれのさゝにうちあひてやせ〳〵にさゝやかなる使といふなるべしとふらひの使にはなきかほなるをつかはしたるがよしと世にもいふごとく物おもひにわひはつるよしをつたふる使にこえふとりて心ちよげならんはうちあはざるべし

眞木柱

げにそこら心くるしげなることゞもを　河多（ソコラ）日本紀　幾（ソコ）多（ラ）同　今案日本紀には若干をそこらとよめり多の字はにへさともさはともよめりともにおほきこゝろなり又甚多とかけるをもにへさにと點じたりそこらとよめる事なし萬葉にこゝばくそこばくこゝたこゝらそこらそきたくこきたくそこたなどいふ

詞さま〳〵にかけり
心あさき人のためにぞ寺のけんもあらはれけん　今
案心あさき人を鬚黒とも玉葛とも辨ともさま〴〵
にいへる中に辨のおもとなるべし上に石山の佛を
も辨のおもとをもならべていたゞかまほしくおも
へどゝあるは鬚黒の石山に祈れるにはあらずして
辨のおもとがせめられて祈けるなるべし驗ありて
ことありて後玉鬘の辨ぞうとみ給ふ故にこもりゐ
にけりとてげにそこら心ぐるしげなる事どもをと
り〳〵に見しかどゝはげには上をうけたる詞兵部
卿宮左兵衛督などの媒もとり〴〵に心ぐるしげな
ることを見しかどかなはで此辨のおもとが心あさ
く聞まゝに信じて観音に祈ける故にこそ石山寺の
靈驗もあらはれけめといふなるべし

歌 おりたちて汲は見ねどもわたり河　今案此わたり
河は奈落なり未來の事なれば此一二の句はいへり
下句は夫婦のかたらひせし人河渡すといふなれば
わがわたさずして人にわたさせん物とは期せざり
しと也互に約するをのみちぎると云にあらず期の
字をちぎるとよめり心に期するを今はいへり信明
家集云公平が三君を絶たるころ女「わびつゝも此
世はへなん渡り川後の淵瀬を誰に問まし　かへし
「此世をばおひもかつきて渡してん後ははじめの
人を尋よ　此公平女の歌は大和物語に詞すこしか
はりてあり今玉鬘の返歌並に後の詞は此歌にてか
けるなるべし

はなうちかみ給ふけはひ　今案以前にも此詞ありな
く時はかならずはなもたる故なり

歌 みつせ川わたらぬさきに　今案みつせ川を渡るに
付ては引渡さんといふ人ありてうるさければ今さ
まさまのおもひにながるゝ涙川のあわと消ばやと
はかなくよめるなるべしよりて心不叡の御消所や
とは源氏ののたまへるなり河海に水深(ミヲ)日本紀　日本
紀に水深をみをとよめる事なし延喜式には水脈を
みをとよめり和名抄には水脈船をばみをひきのふ
ねとめり

よきみちなかなるを　今案萬七「みわのさきありそも
見えず浪立ぬいづこよりゆかんよきみちはなし同
十一旋頭歌「岡ざきのだみたる道を人なかよひそあ
りつゝもきみがきまさん曲道(ヨキミチ)にせむ 六帖二「忘河よ

き道なしと聞てこそいとふのかみもたちはよりけれ

御手のさきばかりはひきたすけきこえてんや　今案遊仙窟云余時把ニ著手子一

うちはへふしわづらひたまふ　細うちたへなり　今案うちはへは萬葉に打延とも打經ともかけり久しく引しろふをいふ打たえてといふ義にあらず

おぼしうとむな　今案聲をかやうにうより下の四字共に上聲によむべしかやうによめはなの字おぼしうとみけるなの義になるなりおぼしうとむなとむの字平聲にさぐれば莫思疎になりてなは莫にて禁止辭今のこゝろにあらず

みゝなれにて侍れば　今案後撰に「ちはやぶる神も耳こそなれぬらしさま〳〵いのる年のへぬれば

よそにても思ひだにおこせたまはゞ　今案下に袖の氷もとけなんかしとつゞけたれば思ひに火をもたせておこせも其縁か拾遺に「水鳥の下やすからぬ思ひにはあたりの水もこほらざりけり

御火とりめして　今案和名熏爐（比度利）

そらなげきをうちしつゝ　今案　金葉　讀人不知「はかるめることのよきのみおほければそらなげきをばこるにやあるらん

おほきなるこの下なりつるひとり　今案和名云熏籠方言注云火籠（多岐毛乃々古）今熏籠也

さといかけたまふ　今案いは發語の詞にて懸給ふか萬葉に伊の字をそへたる事おほし日本紀に擊刀をたちかきすとよめるに萬葉に劔大刀さやをぬき出でゝいかご山とつゞけたるもいかくといふ心也若射の字か日の影の物にあたるを詩には射ると作れり火とりの灰を打懸給ふ事矢を射懸るやうなれはいふか細流に沃懸也とあり沃の字はいかゞ侍らん沃懸地の心か

身さへひえてなん　今案新撰萬葉戀歌に「涓川ながれて袖のこほりつゝさよふけゆけば身のみひゆらん

まみいといたし　河傷はほめたる詞也　今案いたしは痛にて見るに心いたましき也北方の事をいふに木工君が下心ある故也ほめたる詞にはあらず

ちうけんになりぬべき身　今案二佛の中間まては有べからず只いづかたにもつかずはしたなる心なり

古今「木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわか身は成ぬべらなり　間人(ハシウト)といふ氏の時間の字をはしとよむにて此歌を心得て今の中間をも知るべし

宮のおはせんほど　呼うちなどへまゐり給はん時の事を付君のわひ給也　今案世におはせんほど也呼花の注誤れり

かうがいのさきして　今案和名云櫛墳㡬文選云勁㡬(くへ)理(ム)レ髮(李善云通俗文ニ所ニ以理ー髮、謂ニ之㡬ー也或音ま)　釋名云𨬬(音盜)導也所ニ以導櫛ニ髮ー也或曰櫛𩯭ハ櫛音(かうがい)和名賀美加岐　此國に名つくる心は髮掻にてかみを音便にてかうといひかきを五音を通はしてかいといふなり

はなすゝりあへり　今案これもまた泣事也

歌 あさけれど石間の水は　今案やともる君なりもるは守に漏をかねたり

歌 ともかくもいはまの水は　今案離別の悲しびにともかくも物もいはれぬとつゞけたり

まがくしき事などを　今案日本紀には禍の字をまかとよみ延喜式第八には悪事(古語麻我言登)萬葉集には枉(マガ)言(コト)とかけりこれらの字なるべし

歌 み山木にはね打かはし　今案六帖第六「みやまぎによるは來てなくはこ鳥の明は歸らんことをこそおもへ又なくは無に鳴をそへたり

歌 なかめする軒のしづくに　今案遊仙窟に未必の二字をうたかたとよめる事ふた所有未決の詞なりよりていづれも此詞をよめる歌末にやの字などあり又水上にふくれたる沫の出くるをもうたかた共いへばそへてよめる歌多し今この歌もそへたり和名抄云沫雨淮南子註云沫雨雨ニ潦上ー沫起若ニ覆盆ー(和名宇多加太)　萬十二「歌かたもいひつゝもあるか我ならばつちにはおちじ空にけなまし　同十五「はなれそにたてるむろの木宇多我多毛久しき時を過にけるかも　同十七「天さかるひなにある我を宇多我多毛紐ときさけて思ほすらめや　同「鶯のきなく山吹宇多賀多母君が手ふれす花ちらめやも萬葉にこれらのかきやうを思ふに昔はかもじにごりたりと見えたり　後撰「思ひ河絶えず流るゝ水のあわのうたかた人にあはできえめや

玉もなかりそとうたひすさび給ふ　今案風俗上野歌に玉もまねかりそとあるは日本紀に勿の字をまな

とよめるはすなはちなかれの心なりなとねと五音通すればまねにまなにて只なとのみいふに同じければこゝになかりそとはかけるなるべし清少納言にも池はとあるつゞきに原の池玉もはなかりそといひけむもをかしとかけり六帖に「原の池におふる玉ものかりそめに君をわが思ふ物ならなくにこれも風俗の歌よりよめるか今此風俗をうたひ給ふはおいもすかねやの心を取かおいもするかにといふ心なりおひとかけるはあやまりにておいにて玉藻をかりはてずしておくは老るまでさてもあるかとこゝろみるべければなからそといふなるべし六帖に「わかせこがおゆるかをしさゝこの池の玉もにもかな刈てはやはん此歌玉もの老るは猶かれば又わかきがおひ出れば王もにもかなといへり萬葉第二人まろの長歌にも石橋におひてなひける玉藻ゝぞたゆればおふる打橋におひをゝれる六字一句川藻もぞかるれははゆるとよめるに似たり大将の方へ玉鬘をゐて渡したるは玉もをかりはてたるにゝたれは下の心のたとひなるべし又かく大将はゐて渡さるゝとも玉鬘の心にだに我を忘れはてずば刈ぬ玉ものおゆるまでさてあるごとく心ばかりはかよふなからひならんの心か細流に晁瀼の故事を引給へるは叶はず

あかもたれひき　細引歌「立て思ひゐてもぞ思ふわきもこがあかもたれひきいにしすかたを　今案此引かれたる歌は萬葉第十一に有て腰句くれなゐのとありあかもたれひきも赤裳下引とあり古點にはたれひきと讀るにや六帖にもしかあり萬葉同巻に紅之襴引道乎中置而一云須蘇衝河乎第五巻には白妙の袖ふりかはし紅のあかも須蘇毘伎第六末通女等者赤裳須素引第九紅赤裳數十引山藍用摺衣服而第二十にはをとめらか多麻毛須蘇婢久許乃爾波爾とよめりかれこれを引合するにたれひくとよめる古點はかなはす

色に衣を　今案續古今におもふともこふともいはじといふうたも口なしの色に衣をといふにおなじ六帖第五にありてくちなし色の歌なり

源註拾遺卷第六

梅枝

るりのつき　今案瑠璃坏なり和名云孫愐切韻云甌（時ロ反俗云都岐乃波太）器緣謂ニ口邊ー也甌はつきのはたにて其注に器緣とあれは器の字をつきともよむべきにや

歌 はなのえにいとゞ心を　今案新古今に　大貳三位「春ことに心をしむる花のえにたがなほざりの袖かふれつる　此今の歌をおもへるに似たり

見給ふ人の涙さへみづぐきにながれそふ心ちして

河 中務集「なき人のかきとゞめける水ぐきをみるに涙のながれぬるかな　今案此歌中務集にみえずいかゞ齋宮女御集に「いにしへのなきになかるゝ水莖の跡こそ袖のうらによりけれ

古萬葉集　今案菅家の新撰萬葉集に習ひていへるなるべし

だんのからくみのひも　細段々の文なり抄闕　啄木の類なり　今案だんは和名抄調度中服玩具云四聲字苑云緂（吐敢反俗音吐含反）青而黄也此字也段々の文といふは誤なり本音は吐敢反にてすめるを俗に濁りていふ故に奴含反と云り此字延喜式の中におほく見えたりからくみは同腰帶類ナリ緋帶唐韻云紟（辨下蒲□切與レ褲同　今案加良久美）綟レ絲爲レ帶也

をさく〳〵みはやすまじきには　今案古今「山高み人もすさめぬ櫻花いたくなわひぞ我みはやさん

いとしりびに　孟河海にしりゐとあり　今案しりゐは後居なるべし又日本紀の顯宗紀に座下をくらしりとよめりかゝれば下居とも書べしいみじう思ひのほれど心にしもかなはで限りあれば屈してすくせの引かたになほ〳〵しき人の聟などになるは座上へものほらんと思ふ人のゆるさねばちからなくしりべさまにおし下されて居るに似たる心なりしりびはいかなる義にか心得がたしをおほいゐひの類をわきまへずしてたかふるよりかゝる事はおこるなり

歌 つれなきはうき世のつねになりゆくを　細雲井の雁のつれなきはよのつねにある歸也かくつれなきを露もわすれずしたひきにける心ふかさはわか身のごとくなるたぐひまたも有まじきとなり　今案此注大かたたがはぬやうなれどうたゝ玉しひは出

ていにしやうなりひとのつれなきはよのつねのつれなさのごとくなりゆくをえしもわすれずこふる我やひとり世の人にことなることならぬものゆゑなど人は世のつねにしたがひてつれなくなり行に我もさらば世とゝもにうつらずしてつれなきをえわすれずこふるぞとよめる心なりゆくをといひ人やとあるに心をつくべし又雲井の雁の返止を引合ても心得べし

かたぶきつゝみゐたまへるとぞ　今案此様のかたぶく此物語にあまた所あり俗にも不審なることある時頭をかたぶけて案ずといへりげにさることなり如意輪観音の手をもて頬をさゝへ給ふを思惟手といひ歌につらづゑつくとよむも皆此類なり

藤末葉

あやしくそむき〳〵にさすがなる御〻もろ戀なり　今案世のつねには相思はぬをかた戀といひ相思ふを諸戀とはいへり之は夕霧は内大臣にまけんことをねたくおもひ雲ゐの雁は中務宮などのことをうたがひてそむき〳〵ながらさすがにかけはなれねば諸戀といへり

うち〳〵のことあやまりも　今案「あさな〳〵見し都路のへたゝればことあやまりにとふ人もなし

四月のついたちごろ　今案これは七日なり然るをついたちごろといふは朔日二日のついたちにはあらず卯月のたちたる比なればかくいへり萬葉第六三日月の歌にも月たちてたゞ三日月とよめり

すぎにしかたのけうなかりし恨　今案けうは興なり源氏の口いれ給ひし時内府のゆるされざりし無興の恨なり一説に大宮への不孝といへりそれも未通女巻にみえしことなれどこゝには叶はずやかて下に御心おごりこよなうねたげ也とあるにて知べし

なにがしのをしへ　今案孔子をさしてなにがしといへり其をしへは儒道なり

藤のうら葉のとうちずんし給へる　河「春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はゞ我も頼まん　今案萬葉第十四本歌に「春べさく藤の末葉のうらやすにさぬる夜ぞなきころをしもへば此結句はころをしおもへばなり後撰の歌もこれを取てよめるかはるひさすはせんなきやうなれば春部さくを書あやまれるにや

あしがきをうたふ　河蘆垣催馬樂云々　今案まうよこしけらしも中嶮(マウヨコシ)つらんなり讒の字日本紀幷萬葉によこすとよめりとゞろけるば衰ろへたる家なりとあれど萬葉にひかる神なるはたをとめと讀るをおもひ合するに音に聞ゆる娌婦(オトヨメ)といへるか又車などのとゞろくやうに心しづかならぬおとよめといふかおとよめは兄の妻の弟の妻をいふ詞なり弟の妻は兄の妻をは姒婦(オホヨメ)といふ和名にみえたり

まかてん空もほと／＼しくこそ侍りぬべけれ　花鳥、におとろ／＼しきと云心なりはや夜もふけたるほどに道の空もおそろしかるべき心に宰相中將いへるなり　今案はと／＼しは上にもいふごとく殆(ホト／＼)なり醉てあやうき心なり上のとを清下のとを濁るべし上下共に濁らは程々しくにて程をふるこゝろなりいまの義にあらずして誤なりおどろ／＼しくは騒やしくなり續日本後紀の宣命にすなはちかやうにかゝれたりしかればほと／＼とおどろ／＼しくとおそろしきと文字もかはりこゝろもかはれり

松にちぎれるはあたなる花かは　細六帖「常磐なる松にちぎれる藤なれどおのがこゝろと花は咲ける　今案此歌は貫之家集六帖新古今ともにみどりなる松にかゝれるとあれば唯歌の詞にはあらで松にはふ物なればいふか若は詞をかへて取か

世のためしにも　河「戀するはしぬるものともきかねども世のためしにもなりぬべきかな　今案此引かれたる歌は六帖に伊勢が歌にてこひしきにしぬる物とはとあり續後撰戀二にも伊勢とて載られたり又後撰戀六にはこひわびてしぬてふことはまたなきをとて忠峯が歌なり上も似て下はまだく同じければ續後撰と六帖とは異説かあるひはよみあはせたるか又玉葉戀四に順「いさやまだ戀にしぬてふこともなし我をや後のためしにはせんこれは好忠家集に好忠が歌を和せられたる歌なりこれは似て別の歌なり

かはくちのところ　今案六帖第二關部に川口關をよめる歌二首ありこゝの心は「川口の關のあらがきいかなればよるのかよひをゆるさゞるらん　此下の句をふくみたるかとおぼし下の女いときゝにくしとおぼしてとは内府を關のあらかきあらゝかにきひしくよるのかよひをゆるさずと恨みられたる

を関わびてとなり河海にひかれたる下句の心叶へらずや

歌　あさき名をいひながしける　今案此上句は夕霧のとくもしひてのたまはゞゆるしもあるべきを心くらべして我はまけじとし給ひしは誠には我をおもひ給ふことの深からぬなり川口の淺きがごとく淺きからあふことのとゞこほりしなりもらしゝとはたゞもりしなりそれを水のもるといふによせていかゞもらしゝと云り萬葉第十二に「玉あへば相寝る物を小山田のしゝ田もるごとはゝかもらすも　一云母之守之師これによるに關の荒垣はなにかさしても守しきびしくは制せざりし物をと内府をたすけてよまれたるなりあさましはけしからぬ心なりわがゝたの淺きをはさし置てけしからぬ恨ごとやといふ心也又一向に舞ひて全篇夕霧をいへるか君が心のあさき名を川口のごとくいひながすは心のせきをばいかゝもり損し給ひしぞとなり川口をはうはゝれたる故に返しにくき田の關を引合せたるにやすこしうちわらひてとは夕霧の内府と女のたすけて咎をわれにのみおほするをさにはあらぬ物をと少しあさ笑ふこゝろなり又まけじとせし心もあればこれもすこしはいはれたりとうくる心も有べし

歌　もりにけるくき田の關を　菊多は陸奥の郡の名和名に木久多と注すきくの二字をかへさまにいひならへるなり枕草子にもせきはといふにくきたのせきといれたり能因歌枕とていまの世流布するに菊多とかきてくきたとよむ俗にはきくといふなりとあり詞花集　崇德院御製に「秋ふかみ花にはきくの關なれば下葉に月も守りあかしけり　歌の心はまことに我も心くらべせざりしにはあらねど内府もくきだの關のかたきごとく守り給ひてつれなくゆるし給はざりし故にあふことの今までとゝこほりつれば偏にわが思ふ心の淺きにはなし給ひそとなりおふせざらなんはおふせずあらなんとねかふ詞なり忠見の歌に「やかすとも草はもえなん春日野はたゞ春の日にまかせたらなん　此上のなんは將蘭にてもえむなり落句は任せてあらなんにて任てあれの心なり下知なり願ふ心なりこらへなんおなじからず或說にあさきかたにばかり内府にとが

をおふせいふべきことにはあらざらんとなりとあり耳ある人きゝわくべし

あくゑもしらずがはなり　今案伊勢集に「玉すだれあくゑもしらずねし物を夢にもみじと思ひかけきや　此上句の詞を取用たり

くわん佛ゐて奉りて　今案灌佛の佛像を出すをいへりゐは將率これらの字なり

かた〳〵よりわらはべいだし　今案拾遺集雑戀に灌佛のわらはを見侍りて讀人不知「から衣たゞより落る水ならで我袖ぬらす物や何なり　但しこれは禁中の灌佛なり

歌 なにとかやけふのかざしよ　今按かつみつゝは且見乍なりかつはかつ〳〵なりめのまへにかつはみながらの心なり伊勢物語に「天雲のよそにも人のなり行かさすがにめにはみゆる物からとある歌の心相似たり　新古今雑下に　皇嘉門院「何とかや壁におふなる草の名よそれにもたぐふ我身なりけり　こゝの歌の詞を取用たまへるにや

歌 なれこそは岩もるあるじ　今案まし水は眞清水にて眞はほめたる詞なり和名云日本紀云妙美井八之三豆又六帖に「我門のいさゝ小川のまし水のましてぞ思ふ君ひとりをばとよめるは増水と聞えたり

歌 なき人は影だにみえず　今案つれなくて心をやれるとは詩にも波心池心谷心などいひ池のこゝろ谷のこゝろなど歌にもよめば井の心とも云べし昔は大宮などのみて心をやり給ひしに今は井の心のみつれなくてやるとなりやるとはわき出ながれゆくをいふべし下に太政大臣おきなはことゝいみしてとのたまへば此歌夕霧と雲井雁との相住て心をやるをばいふべからず

そのかみのおい木は　河「いにしへのふるき翁のいはひつゝうゑし小松はこけ生にけり　人丸　今案此歌何にかみえたる萬葉第三「妹が名は千代にながれむ姫島のこまつがうれに苔むすまでに

若菜上

女のあざむかれん　孟人あざむくは欺詿也たぶらかさるゝ心なり　今案欺誑の誑を詿とかゝれたるは暗記の失錯なるべし

またまこゝろにおもひ聞え給ふべき人もなければ　今案まこゝろは俗に眞情なる人といへり心にいつ

はりなきを眞心といひ言に僞なきを眞言といふ道をしる人はかならず心と言と相應してともに僞なしその中に心は知がたき物なるに言に顯はれてしらるゝ故に眞心を眞言といふなり誠信等の字は心の僞なきをいふに言に從がへてまことゝよむを思ふべし

みなほがらかにあるべかしく　今案ほがらかは朗の字なり古今にしのゝめのほがら〳〵と明ゆけばとよめるも是なり又紫式部家集に「うちしのひなげき明せばしのゝめのほがらかにだに夢をみぬかな

やもめずみにて過しつゝ　今案和名抄云鰥夫釋名云無妻曰鰥古頑反和名夜無乎　言鰥々然不寐如魚目恒不閉者又云釋名云無夫曰寡和名夜毛女　玉篇云寡或曰孀霜反或曰嫠婦嫠狸反　やむをやむめはむともと通すればやもをやもめなりかく男女にわかちていへどいせ物がたりにもむかしをとこやもめにてゐてとかきてやもをと書る事なし

にはかに物をやおもはせ聞えん　河かねてよりつらさを我にならはさでにはかに物を思はするかな

今案此うた何に出たりといふ事をしらず

中納言などは年わかくかる〴〵しきやうなれど行さきとほくて人がらもつひに大やけの御うしろみともなりぬべきおひさきなゝめれはさもおぼしよらんになどかこよなからん　今案此こよなからんは似付ざらんの心なり

いきまき給ひしかど　細威勢ありてとなり　河いかれる姿　今案つれ〳〵草にいへるゝ腹たちたることにあれば河海によるべしこれは入道宮におされて惡后の腹立給ひしとの心なり胸のほとばしる故に息の短くなれば息を卷といふ義なるべし

內侍のかんの君はつとさふらひ給て　河集日本紀　今案これは河海の誤なり集はつどふなりつとは俗にもつと近くよるつと遠のくなどいふ詞なりその字とてあるべからずふとなどの類なり

御いむことの　今案日本紀第二十一云善信阿尼等謂大臣曰出家之途以戒爲本願向百濟學受戒法

けふかあすかとおぼえ侍つゝ　河朝忠集「人の世の老をはてにしせましかばけふかあすかもなげかざらまし

今案朝忠集には發何人の身の下句はけふかあすか

といそがざらまし　女返し「心にもかなはざりける命もてたのみもおかずつねならぬ身は

御まちりめ侍りなん　今案まもりめは守目なり後拾遺集戀三に伊勢の齋宮わたりよりまかりのほりて侍ける人に忍ひてかよひけることをおほやけもきこしめしてまもりめなどつけさせたまひてしのびにもかよはずなりにければよみ侍けると道雅三位の歌のこと書にあり

又とり返すべきにもあらぬ月日　今案金葉集戀上に藤原惟規「池にすむ我名をゝしのとり返す物にもがなや人をうらみじ　此歌よめる惟規は紫式部が兄なり又菅家萬葉に「あめつちを取かへすともきかなくに星とも見ゆる秋の菊哉　此取かへすは打返す心にてかはれり六帖に「取かへす物にもがもやはこ鳥のあけてくやしき物をこそおもへ

御前にて御あるじのことさうじ物にてうるはしからずなまめかしくせさせ給へり　今案後撰集雜四亭子院にさふらひけるに御ときのおろしたまはせたりければ　伊勢「いせの海に年へてすみしあまなれどかゝるみるめはかつかざりしを　又雜一云法皇はじめて御くしおろし給ひて山ぶみし給ふあひだ后をはじめ奉りて女御更衣なほひとつ院にさふらひ給ひける三年といふになんみかどかへりおはしましたりける昔のことおなし所にておほんおろし給ふけるついてに云々

人のくちといふもの　河「人中を人ぞさくなるゆめよ君人の中言きゝたつなゆめ　今案この引歌は萬葉第四にありて坂上郎女の歌なり發句は汝平與吾乎腰句は乞吾君落句はきゝたつなゆめなり又同じ郎女「いふことのかしこき國ぞ紅の色にな出ぞおもひしぬとも

かく空よりいてきにたるやうなることにて　今案禮記問喪篇云禮義之經非ニ從レ天降一也非ニ從レ地出一也人情而已矣和泉式部歌に「つくづくと空ぞみだる思ふ人あまぐたりこん物ならなくに

かへしろよりはじめ　河壁代又防壁　今案和名抄云釋名云縛壁以レ席縛ニ著於壁一也漢語抄云防壁古毛縛壁も防壁もともにたつこもとよみて壁代にはことなるか

らてんのみつし二よろひ　今案日本紀云弓矢二具

ゆすゑつき　今案蜻蛉日記にはかなき中なればかくてやむやうもありなんかしとおもへば心ぼそうてなかむるほとにいでし日つかひしゆするつぎのみづはさながらありけるうへにちりゐてあり云々

人よりことにかぞへとり給ひける　今案千載集雑上上東門院より六十賀行ひ給ひける時讀侍ける　法成寺入道前太政大臣「かぞへしる人なかりせば奥山の谷の松とや年をつまゝし　又紫式部家集に「あしたづのよはひしあらばすめらきの八千代の數もかぞへ取りてん　同公

夜のふけゆくまゝに物のしらべどもなつかしくかはりて　今案後撰に兼輔朝臣「短夜のふけ行まゝに高砂の峰の松風ふくかとぞ聞く

歌　めにちかくうつればかはる　今案ある人此歌心をいひのこすといへり餘情はさる事にていひのこせることはなきなり

歌　命こそたゆともたえめ　今案命は心にまかせぬ物なれば絶る期あらばたゆともさだめなき世のならひのことくならぬふたりの中の契なる物をなにか絶る期あらむとなり

こなたの御けはひにはかたさり　今案萬葉第四「いくそばく思ひけめかもしきたへの枕かたさり夢にみえこし

わが身までの事は打おき　河六帖「いかにかと思ふ心のある時は我身をおきて人ぞ戀しき　今案此引歌六帖にある事なし拾遺戀一に　讀人不知「いかでかと思ふ心のある時はおぼめくさへぞ嬉しかりける　此歌上句同じ晴記の失錯にや又後撰に　信明「わびしさを同し心と聞からに我身を捨て君ぞ戀しき　此歌の下句にてかけるにやあるひは引歌に及ぶべからずみゆ

友まつ雪のほのかに殘れる上に　今案家持集「白妙の色わきがたき梅がえに友まつ雪ぞ消殘りたる　貫之集「梅の花咲もしらずやみよしのゝ山に友まつ雪のみゆらん　詩人玉屑に殘雪のことに待伴といへるはこれらによくよれるとなりされど待伴差明などは俗語といへり唐の世より有ける詞にて此國にも傳へてよめるかおのづからいひあはせたるにや

これもあまたにうつろはぬほど　今案古今に「あは

れてふことをあまたにやらじとや春におくれて獨さくらん　此歌を心にふくみてかくのたまふか

などてかくおいらかにおほしたて給ひけん　河「人ごとに老らかにと心得たるかさにはあらすをひれたる由をねひれてなどいふやう也　今案只老らかなるべし此物語にもあまたある所老らかにては叶ひねびれたるの準らへにては叶はぬ所多かるべし竹取物語にかくや姫を戀たる五人の人々に竹取翁出て石鉢などのかたきことをいひける時御子たち上達部聞ておいらかにあたりよりたになありきそとやはのたまはぬといひてうむして皆歸りぬとあり又宇治拾遺物語に元輔　落馬せしことをかける所に殿上人の車おほくならへたてゝ物見ける前わたるほどにおいらかにてはわたらで人見給ふにと思ひて馬をいたくあふりければ馬くるひておちぬとあり又此あらまきをはをしとおほさばおいらかに取たまひてはあらでといへる所もあり於以とかきて於比とかゝず老らかの心を用ゆべし假名をたゞさぬ故此たぐひの迷ひおほし

いかでかこのかけは立はなるへきと　今案「けふのみと春を思はぬ時だにも立ことやすき花のかけかは

山ぎはよりさし出る　今案山ぎはゝ山のはなり萬葉に山際とかけるをやまのはともやまぎはとも點せり

歌身にちかく秋やきぬらん　今案「秋といへばよそにぞ聞しあだ人の我をふるせる名にこそ有けれ此歌よそにぞ聞しとあれば今身にちかくといへり新古今戀五に思ふこと侍ける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍ける　六條左大臣室「身にちかく來にける物を色かはる秋をはよそに思ひしかども　是は此今の歌を取てよみたまへるか青葉山はこゝにいふは名所にあらず古事記の垂仁天皇の段にも品遲別命出雲の大社に詣給へることをいへる所に出雲國造之祖名岐比佐都美餝青葉山而立其河下將獻大御食云々

歌水鳥の青葉は色も　今案萬葉第八に「秋の露はうつしなりけり水鳥の青葉の山の色付みれば　こゝに水鳥とふは鴨なり紫の歌に青葉の山もうつろふとよめる青葉を色かへぬ鴨の青羽に取成して人の

心こそ萩の下葉の色つくやうにうつろふかとみゆれとなり孟津に萩の下葉とは我心はかはらぬをそなたの心よりおぼしなすとなりとあるは違へり古今に「秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする「はゝそちる岩まをくゞる鴨鳥は金葉秋おのが青羽も紅葉しにけり「かもの居る入江の蘆千載冬は霜かれておのれのみこそあをばなりけれ　此二首はこゝの歌を思へるか

日々にものをひきのふるやうにおよすげたまふ　今案俗にも引のはすやうにといふちゞめる物をのぶるに似たり

あまかつなど手つからそゝくりおはするも　今案蜻蛉日記云下のきくさをとりあつめてめづらかなるくすだませんなどいひてそゝくりゐたるほどに云云下にそゝぐといふ詞ありこれにおなじ延喜式第八に噪の字をそゝぐとよみて注に古語といへりさわぐ心なり又物語どもにそうそぎたつといへる詞もそゝぎたつにうは音便にそへたるか後の人のくはへたるかにて此綱にや

あしこにこもりなんのち　今案あとかと通してかしことといふに同じ

かな文見給へるはめのいとまいりて　今案かな文はなだらかにてかへりてよみがたく又句讀も心を着ざればわきがたき故なり

おぼろけならではかよひあひみ給ふこともかたきを今案このおぼろけよのつねならばおぼろけにてはといふべき所なるを事たがひたる樣に聞ゆる詞なり細流におぼろけならぬことならではと也とあるは注の詞をこゝにおかば叶ふべけれどもさにはあらぬ詞なりおぼろけは少々の義なりまれに少々ならではといへる心なりかよひあひ見給ふはかよひあひて見給ふと心得べしかよひて相見給ふとは心得べからず

人やりならずきぬもみなぬらして　今案紫上の心からちごうつくしみしてきぬどもゝみなしとゞにぬらしてぬぎかへがちにし給ふとなり

いとうたて思ひぐまなき御ことかな　孟思ひぐまなき人とは懇なるを思はぬ心なり　今案源氏のあまりなるまで御心をつけ給ふよとなり

こなたはかくろへたりけり　今案上にきりつぼは若

宮ぐし奉りて参給にしころなればとつゞきてあれば其ひまにて人めもなき所なればいへり

よしあるかゝりのほどを尋て　今案後の四本懸にはあらず一かゝりあるなどいふ詞なり後に鞠のかかりといふ事もこれより出ておなじ心なり

かしこき日なりと　今案よき日なりといふなり

わづかなるもえぎのかけに　孟萌黄はまだ淺緑なる木かげ也　今案萌木なるべし上にゆゑある庭の木立のいたく霞こめたるにといひて色々のひも解わたる花の木どもといへる次にかくかけるを細流に花はちりたる跡なりと注し給へる心叶ふべし細流の心はゆゑある木立は惣にて花の今咲木と散て葉のもえたる木とをわかてり萬葉第十に柳の歌に目生とかきておほくもゆとよめり

さしぬきのすそつかたすこしふくみて　花なえばめるなり　今案ふくたみてといへるたもしのおちたるか含みてといふはなえばめるに叶はず

さくらはよきてこそなど　河「吹風も心しあらば此春はさくらをよきてちらさゝらなん　今案此歌末考古今に「春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふとみん

春のたむけのぬさぶくろにやとおほゆ　今案諸本如此いかなれば花に木つたふ鶯の櫻をわきてねぐらとはせぬ　今案此歌の心は鶯の花に木傳ふ物からいかなればこと木竹よりは櫻を取分たるねぐらとはせずしておほくは外の木竹にぬるらんとて源氏を鶯にたとへ女三宮を櫻にたとへ外の木竹を紫上などにたとへたり鶯のひたすら櫻をねぐらとせずといふにはあらず源氏も紫上のやうにこそ思ひ給はね女三の宮のかたにもをり／＼渡りてねたまはぬにはあらぬにたとへを引合すべし

春の鳥の　今案鶯の事なり和名云陸詞切韻云鸎烏莖反楊氏漢語抄云春鳥子宇久比須　春鳥也萬葉集第二には春鳥とかきてうぐひすとよめり

櫻ひとつにとまらぬ心よ　細鶯は花の木にとまらずと云々　抄春の鳥ならば櫻ひとつにとまるべきをとまらぬ心よあやしきとにや　今案櫻ひとつにとまらぬ心よとはなど櫻ばかりにはとまらぬぞと云なりこと木竹にのみねて櫻にはかならずねずといふにはあらずとまらぬとは心をとゞめぬをいふ心

をとゞめぬ故にぬることのまれなれば歌にはねぐ
らとはせぬとよめりねぬといふことをやがてとま
らぬといふにはあらず下に夕霧の詞にわりなきこ
とひたおもむきにのみやはといらへてといへるも
何かさくらひとつにはやとらんといへればすべて
櫻にやどらぬ物と心得るは誤なり細流の心は鶯
は櫻にねぬものと見給へるかしかるべからず河海
は櫻一つにとまるへきをひとつにのみはとまらぬ
心があやしきといへるかとみ給へるかしからば叶
ふべし櫻ひとつにとまるべきを櫻にはとまらぬが
あやしといへるかとの心ならば細流におなし
深山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色に
あくべき　河杲鳥（ハコドリ）萬箱鳥（同）同或貌鳥の異名と云々　今案
杲鳥は萬葉第十にかほどりとよめり同卷にあさが
ほを朝杲とかけり又みかほしやまといふは見之欲
山なるを同第三には見杲石山とかけり杲は音かう
なるを借て用たり萬葉にかほとりは第三には容鳥
第六には貌鳥第十には杲鳥又第三のごとくかけり
第十七には可保等利とかけり然れば河海に杲鳥を
はこ鳥としたまへるは誤なりまた萬葉に箱鳥なし

又六帖第六に箱鳥の次に別に容鳥を出したればこ
と鳥なり花鳥にかほ鳥の歌を出し八雲御抄を引な
どして末にまづはこ鳥正説なりとあるは猶かほど
りをおかぬ心あればこれも誤のうちなり
此夕よりくしいたく物おもはしくて　花頭痛也又苦
痛也　今案此詞前にもみえたりくしは屈しなりい
たくはうもれいたくのいたくにおなじ
みかきが原をわけいりてはべりしに　細「立かへり又
や分ましおもかけをみかきか原のわすれかたさに
今案この歌何に出たるにかしらず新拾遺に　大納
言經信「百敷やみかきが原の櫻はな春し絶すは
匂はざらめや　此歌御垣といふによりて名所のみ
かきが原にいひかけたり今も院中の垣の內をかく
いへる心またおなじ細流に爰は名所にあらずとあ
るはさることとなれど其名は名所なりみかきとのみ
いはで原といひわけ入てといふ皆名所によするこ
ころ也夫木抄第四に御會花契二多春一　京極關白「ち
よまでと咲ぞはしむる櫻花みがきが原にほりうゑ
しより

若菜下

うれたくもいへるかな　今案日本紀第三云慨哉大丈夫云々慨哉此云三手聚多棄伽夜」　李善秋興賦注云慨許既反説文曰慨太息也字林曰慨壯士不ㇾ得ㇾ志也
かゝる人つてならてひとことをものたまひ聞ゆる世ありなんや　今案後撰戀　敦忠朝臣「いかにしてかく思ふてふことをだに人つてならて君にかたらんいつらこのみし人かと尋てみつけ給へり　今案萬葉に郭公をまつ人雁を遠つ人なとよめり後撰にも「待人は誰ならなくに郭公おもひの外になかはうからん
ねう〳〵といとらうたげになけば　花猫の字の音めうなりねうは在音通ずる也　今案此御注叶はすこれは今の俗ににやを〳〵となくといふをかくいへりこゝろは歌にみえたり「戀わぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなくねなるらん　人のかたみと手ならせば我心知がほに汝よ何とて將寢將寢とは嘯ぞと思ふ人の我とねんといふやうに聞なせるなりなくねなるらんといふに心をつくへしうたてもすゝむかなとほゝゑまる　細我物思ひをすゝむるなり　今案勸進といふもしはつゞけど和語
にすゝむるとすゝむとはかはれりすゝむるとは人にすゝましむるなりすゝむはみづからはげみてすすむなりこれは猫のかたよりねん〳〵と嗜かゝるを我おもふ人をは我かたよりいかてねばやと思へど及ひなきをやうかへてかれがかたよりねん〳〵となくよといふ心なりさやうに聞なして物思はしき中におかしきかたもあればそこをほゝゑまるとはかける物なり
大將もさる世のおもしとなり給ふべきしたがたなれば　今案したかたは下形なり假令繪の朽木かきのごとし下地といはむにおなじ
たゞ昔の御有さまに似たてまつりたらむ人をみんと　今案萬葉第二人麿妻死之後哀慟作歌に「たまぼこの道ゆき人もひとりだに似てしゆかねは云々又第三卷石田王卒之時山前王哀傷作歌に「河風の寒きはつせを歎つゝ君があるくに似る人もあへや
馬ぞひ　今案御者日本紀
山あゐにすれる竹のふしは　今案新勅撰に　定家卿「ちりもせし衣にすれるさゝ竹の大宮人のかざすさくらは　此歌こゝの詞にてよまれたるなるべし

かざしの花のいろ〳〵は秋の草にことなるけぢめわかれて　今案わかれてのでもじ清べし折節神無月中の十日にて下にもいどしろくかれたる荻をたかやかにかさしてといへり冬まゝ秋の末なれば秋の草といふか秋をへてかれたる草なればかくいふにもあるべし

めのみまがひいろふ　今案ろとそと相似たり若いそふにやいそふはあらそふなり　争日本紀

歌　すみのえをいけるかひある　今案貝によせたり

うへのきぬのいろ〳〵けちめおきておかしきかけはんとりつゞきてものまゐりわたすをぞ　今案これは四位五位等位によりてかけはんもかはるをいふか　和名第十三祭祀具云本朝式云十一月辰日宴會其飲器參議以上朱漆椀五位以上葉椀和語云久保天　これに准らへていふ有識に尋ぬべし下に尼君のおまへにもせんかうのをりしきに云々これによるにも上にも次第あるべしとおぼし

いもゐの御まうけ　河　齋日本紀　今案日本紀にみえず

人の御こゝろしらひ　今案有意日本紀廿八天武紀上

宮はもとよりきんの御ことをなんならひ給ひけるをいとわかくて院にもひきわかれ　今案引わかれは琴の縁に言ひかけたり

ことのこゝろもしめ奉るべきとて　今案しめは令湛といふ詞のごとく令染なるべし御心にしましめ奉らんの義なるべし

宮の御かたをのぞきたまへれば　細　夕霧ほのかにのぞき給ふなり　孟　夕霧のやうにいへども源ののぞき給ふ也　今案細流にしたがふべし其故は下に紫上はえひぞめにやあらん色こきうちきなどまたあかしはもえぎにやあらんこうちき着てなどあり源氏にあらざること明らかなり又明石を橋にたとへをとりてこれもかれもといふよりいとよくもてをさめ給へりといふまで更に明なり

ふしまちの月　細　二月十九日なり　今案ねまちの月廿日なり臥待おなじ心なれば廿日なるべきか　續古今戀三　坂上是則「ねて待しはつかの月のはつかにも逢みしことをいつかわすれん　同雜上に後鳥羽院くらゐにおはしましける時御いのりにさふらひて廿日夜の頃まかり出けるを猶とゞめおほせ

られければ　承仁法親王「さもこそはねまちの月の頃ならめ出もやられぬ雲の上かな　此一首明證なり新勅撰戀五に　殷富門院大輔「待人はたれもねまちの月影をかたぶくまてにわれながむらん　これはねまちの詞あれどいつれの夜と知がたし昔より十九夜といふ説有けるにや風雅集戀二に伏見院御時六帖題にて人々に歌よまさせ給けるに一夜隔たるといふことを　前大納言爲兼「夜がれそむるねまちの月のつらさより廿日の影も又やへだてん　これは十九夜をねまちとよめり誤也十九夜をばおきふし待といふか六帖の歌に「君をのみおきふし待の月なればやちよもこゝにありあけをせよ　十八夜を居待といひて廿日月を寐待といふあはひなれはおきつふしつして待こゝろに名付たるにや

かうやうなるものゝねにむしのこゑよりあはせたる　今案伊勢がうたに「よりあはせてなくなる聲をいとにしてわか涙をは玉にぬかなん　此詞を取てかけるにや

春の空のたと／＼しき霞のまより　今案紫の上春をめて給ふに夕霧此人に心のかゝれは同心していへるか

みゝなともすこしひが／＼しくなりにたるにやあらん口をしうなん　今案此くちをしうなんはかやうに付へし

あやしく人のざえはかなくとりする事どもゝ物のはえありてまさる所なる　今案人のざえもまさりはかなくとりすることゝもゝまさりてあやしく物のはえある所なるとなりあやしくとはいかなれはかゝるそとあやしむ心なりとりするは人々の心々にしたがひてあるひは手かき歌よみ琴和琴琵琶など引ことなり一事を執する心なりはかなくとはなほさりにするやうの心なり

和琴はかのおとゞばかりこそ云々をさ／＼きははなれぬ物に侍めるをいとかしこく　今案夕霧の紫の上のこと心にかゝる故取分てかくいへるなり

われかしこにかこちなしたまへば　今案託の字をかこつとよみたれば明石にて聞しよりもびはの聲のまさりたりと我をしへ給はぬことまでも我德のやうにいひよせなしたまふ心なり

よろつの物のねのうちにしたかひて　細諸の樂器琴の音にしたかひたるなり　今案琴の音の諸の樂器に隨ふといへるなるべし

いづこのそのかみのかたはしにかはあらん　今案今の世にひく琴の音いづくか昔のかたはしにも似んといふ心なり

それにかへてや思ひし程よりはいまゝでもなからふるならんとなん思ひしらるゝ　今案續古今雜下に守覺法親王「ながらへて世にすむかひはなけれどもうきにかへたる命なりけり　これこゝの詞にてよみたまへるなるべし。

つひによるかたありてこそあめれ　河「よるかたもありといふなるありそ海のたつ白波のおなし所に　今案此歌何に有て引かれたるにや

御身もぬるみて　河小町集「人しれぬ我おもふ人にあはぬよは身さへぬるみておもほゆる哉　今案小町集には二三の句われが思ひにあはぬよは如斯ありこれはおもひを火になしたればぬるみてといふ詞いはれたり河海は誤て引かれたるべし萬葉にぬるといふ詞に少熱とかけりぬるしといふ義訓を借れり

なにしに參りつらんとはちふく　河撥撫はらひすつる也縮合にあり　今案蜂吹なりうそをふきて蜂をよせつけぬやうにするに喩ていへり　東坡云搏ㇾ虎者不ㇾ能ㇾ不ㇾ吹ㇾ蜂取意

いかばかりしみはべりけるにか　河深著日本紀　今案日本紀に深著をしみとよめることなし萬葉に染の字をしみとよめりそとしと通してそみにおなじ

身をいたづらにやはなしはてぬ　今案「夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり　やはといひてなしはてぬといへるは落着は身をいたつらにもなすべしとなり竹取物語においらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬとかけるもこゝにおなし古今に伊勢が歌に人の心にあかれやはせぬといへるより彼集後撰の作者まてあまたよめる詞なり後はすくなし

秋の空よりも心つくしなり　今案古今に「木のまよりもり來る月の影みれば心づくしの秋はきにけりおきて行空もしられぬ明ぐれにいつくの露のかゝる袖也　今案元輔集に人のもとより歸りまうで來て又の日「小夜深み歸りし空もなかりしをいつこより

置露にかあるらん　詞花戀下には初の句よせふか
み落句露にぬれけんとあり歸る空もなかりしに空
なくてはいつこより袖の露は置つらんと也今の柏
木歌是をとれりとみゆ空もしられぬとていつくの
露といへる心おなじ古注に本歌を引もらしたるの
みならす此心を得られざりけるにやみえたる注な
し續古今哀傷に　清愼公「みるからに袂ぞぬるゝ
櫻花空より外の露や置らん　かゝる論なりを正徹
は柏木が心も心となきうちの歌なればてにをはの
分別もなしと申されけるよし近江君が歌などこそ
式部其人からに合せてあやしげによみなしたれど
夫もてにをはたがへる事なし柏木の此歌も式部か
作てかき出せる事なるにてにをは違へる歌よまん
やは古歌の例を引れたる如く也違へるにはあらず
あけくれの空にうき身は消なゝんゆめなりけりと
みてもやむへく　今案新古今戀三　後德大寺左大臣
「さめて後夢なりけりと思ふにも逢はなこりのをし
くやはあらぬ　攝政太政大臣「身にそへるその面
影も消なゝん夢なりけりとわするばかりに
歎くやしくぞつみをかしける　今案拾遺集に東三條
太政大臣兼家歌に「大原野へのつぼすみれつみおか
しある物ならはてる日もみよといふことを云々是
をとり用たるべし
なめげなるしりうこと　今案輕（ナメシ）日本紀　無禮（ナメゲ）萬葉
清少納言にもなめげなる物をと書り
いとまか〈〈し　河社言萬（マガく〜シ）曲字也　今案萬葉に枉
言はまがことなりまが〈〈しとはよまず日本紀に
は禍の一字又禍害の兩字をまかとよめり延喜式第
八には惡事をまかことゝよめり
不動尊の御もとのちかひありその日かずをだにかけ
とゝめ奉りたまへとかしらよりまことにくろけふり
をたてゝいみしき心をおこしてかぢし奉る　今案不
動尊立印儀軌云復求觀ニ自身ニ成ニ本尊形像一以ニ眞
言文字一布ニ身諸支分一一百由旬內所有難調諸鬼神
所持者皆悉能散壞又正報當者能延ニ六月一住
いとくやしきことゝなん有ける　今案齋宮にて經佛な
とをいみし罪の事なり
五かいばかり　今案五戒は沙彌戒なり不ㇾ及ニ十戒一云
云　今案此注誤なり五戒は在家の優婆塞優婆夷の
戒なり淨行の優婆塞優婆夷は八齋戒をたもつをい

ふ也十戒を沙彌戒といふなり
おのれひとりもすゝしげなるかな　今案後撰集戀三に右大臣「おもひには我こそ入てまどはるれあやなく君やすゝしかるへき
むねつぶ〳〵となる心ちす　今案蜻蛉日記にもむねつぶ〳〵とはしるとあり
あたら人のふみをこそおもひやりなくかきけれ　今案あたら人のと何を切てよむべし
わか身ながらもさばかりの人に心わけ給ふべくはおほえぬをと　細柏木に思ひかへておぼしめす事となり　今案さはかりの人は女三なり我にて思ふにもそれほどなる人にはえ心かけじとなり
うちよりはたび〳〵御使　哢女三の方へ源のおろかにやといふ心の文ありしとなり　今案此注叶へりとみえずたゝ御使のたび〳〵參りしなり
朝夕すゞみもなき頃なれど　河「夏の日も朝夕すゞみある物をなど我戀のひまなかるらん　今案此引歌何より出たるにかしらす菅家萬葉に「なつ草も夜のまは露にいこふらんつねにこがるゝ我ぞ悲しきこゝろは似たる歌なり

いまおもへばいかにかとあることとなりけり　今案いかにといひてけりとゝめたるてにをは心得がたしいかにもといへはかなへばその心とみるべき歟
いづくの露のかゝる袖なりのたくひか
つくねどころの人めして　今案作物所
かく年もせめつれば　今案後撰に「たのめつゝわかるゝ人を待ほどにとしさへせめてうらめしきかな
まかひるさなの　花鳥に摩訶毘盧遮那の御誦經ありとなり　今案まかひるしやなの法を修し給ふべし大日經はあらはに誦する經にはあらず又抄に大日經の題號に大毘盧遮那神變加持經とひかる神變の上に成佛の二字落たり

柏木

しひてかけはなれなん　今案父母にかけはなれんする命もかひなくまた不孝の罪も重かるべきことをしひておもふこゝろをはその心としてなり
なのめならすおもひのほりしかと　細攝政にもなりぬべきことなり　抄是はたゝ大かた心高かりしことか　今案上に何事をも人には今ひときはまさらんといへるにてみるへし細流の御説は叶はず

たれもちとせの松ならぬ世は　河六帖小町「うくも世に心に物のかなはぬか誰も千年の松ならなくに　今案六帖第四恨題に作者なし胸句おもふ心にとあり曽丹家集に源順の詞にもされどなぞやあみのめすきたりともいはゝいへたれもちとせの松ならなくにとかいふことをげにはかなきもかしこきもちとせの後はあちきなし

などかくほともなくしなしつる身ならんと　細程へても顯れざることにこそあれとなり　今案此注不可然なとかく身をほとなき物と心からしなしつらんとなりおほけなきことよりおこりて病とさへなれるをいふなり

今はとてもえむ煙もむすぼほれたえぬおもひの猶やのこらん　河「此世をも後をもいかに〳〵せんもえむけふりのむすぼゝれつゝ　今案このうた何より出たるにか

かゝるものどもとむかひゐて　させる貴僧ならぬ驗者にむかひ給ふこともなきを云々　今案此注不叶上に猶はなやきたる所つきて物わらひし給ふおとゝのとかきつゝけたれはちとかろ〳〵しくさるものにも打むかふへき人に書たり

まとひそめにしたましひの身にもかへらずなりにしを　河「戀わひてよな〳〵まどふ我玉は中々身にもかへらざりけり　今按此歌何より出たるにか此物語より後なれど出羽辨歌に「おくりては歸れと思ひし玉しひの行さすらひて今はなきかな

おほさうの御とむらひ　今案蜻蛉日記に「こちといへはおほさふなりし風にいかてつけてはとはんあだらなたてに

よにかくれて出させ給ふ　孟世に夜に南說云々　今案下に夜居の加持の僧などのこゝちすれば云々又とかくきこえかへさひおほしやすらふほどに夜あけがたになりぬ云々夜にの說を用べし貫之家集に「夜にかくれきつるかひなくもみち葉も月にあかくぞてりまさりける

御心よりもらし給ふまし　今案御心より外にもらし給ふなとなり

わが御とかあることはあへなん　河あへなんは有なんなり　今案あへなんは敢なんにて堪なんの意なり

ふたついはんには女の御ためこそいとほしけれ　今案ふたつをくらべていはゝなり女房の中に我をゝこ也とみるものあらんはやすからぬことなれどわれはつれなしつくりてあらば朱雀などの下恨めしくおぼしめすとがをおひてもありあへて堪忍すべし我とがなきよしをあらはさんとて人にもかくとしらせは女三の御とがはたへがたければ此ふたつをくらへていはゝ人にかくとしらせば彼御ためいとほしき事とおぼすなり

誰ものごめがたき世なれば　今案萬葉第二「あすか川しからみわたしせかませばなかるゝ水ものどにかあらまし

みこたちはおぼろけのことならて　今案みこたちの上は大かたの人のごとくおぼろけのことならずしてといふなり或注におぼろけならぬことならではと也いへるはこゝろえかねて本文にいはぬ言をそへたり

さらはかの御契ありけるにこそはと思ふやうにしもみえさりし御心ばへなれど　今案或説にこそはとの所を句とすさらばより下つゞきて柏木と落葉との中を御息所のゝたまふなり上に御とふらひの度々になり侍めるをありがたうもと聞え侍るもといふ語脉はさあらは今はとて是かれにといふへつゝけり

ものふかう成ぬる人のすみすきて　花 法にはづれたる心也　今案すみすぎては俗にくすみ過るといふ心なり水至清則無レ魚といふ類なり

歌 此春は柳のめにそ玉はぬく　今案「鶯の春さめざめと鳴をるはこのめもものをおもふなるべし

おやのけうよりもげに　今案親の凶よりも異にといふなるべし

ことならばならしの枝にならさなん葉守のかみのゆるしありきと　ことならば　花 如此ならばなり 細同
今案古今集に此ことばおほし萬葉第七に「殊放者おきにさけなめみなとよりへつかふ時にさくべきものか　第十に「殊落者袖さへぬれてとほるべくふらんを雪の空にけにつゝ　菅家萬葉に「こひわひぬ影をたにみし玉桂殊者ねさへにほりて捨てん　是らのかきやう如此ならばの義にあらず俗にちがはゝ何とせんといふちがはゝに假たり　細柏

木とかへてのやうになるゝ枝にてあらば故衞門督のゆるし有しと申べきとなり　今案此注不叶ならしの枝にならさなんとは我と故衞門督とは此かしは木とかへでとの連理せるがごとく末あひてみゆるやうに中よくて君の事をもたのみおかれつればかんの君とおもひてならし給へと女二の宮へよみかけらるゝこゝろなり

などてみるめにより人をもおもひあき　今案萬葉「いせのあまのあさな夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな　このうたの詞ばかりを取たるか

横　笛

世をわかれ入なん道はおくるともおなし所を君もたつねよ　今案世をわかれは箏の緣おなじ所は野老によせ君も尋ねよは心ざしふかくほり出させて侍るといふにかけてみるべし女三の御返しのうき世にはあらぬところ又同じ

うきふしもわすれずながらくれ竹のこはすてがたき物にぞ有ける　今案是もたかうなをつとにきり持てしつゝもよゝにくひぬらし給へばといふにかけてくれ竹のこは捨がたきといふをみるべし涎をよたりといふはたりは垂にてよはよゝのよなり然ればよゝとなくといふは涙などをも流してなくをいふなり

まことにこのうきふしみなおほしわすれぬべし　今案上の歌の初の二句にかゝりていへり

をさなき君鑓などすだきあはて給ふに　河多集（スタキ）萬葉潜（スタキ）同上　今案潜の字萬葉にすだくとよめることなし理又大きにたがへり

ことのをたえにし後より　今案後拾遺に　道綱母「なき人は音つれもせでことのをゝたちし月日ぞかへりきにける

世のうきつまにといふやうになん　細引歌「淺ぢふのおさゝが原におく露ぞ世のうきつまとおもひみだるゝ　今案此歌何に有といふことをしらず

かきりだにあると打ながめて　細引歌「戀しさの限だにある世なりせばつらきをしひてなけかざらまし　今案是則集にありて下句年へて物はおもはざらましなり　六帖幷續古今戀四にあるもおなじ

鈴むし

法華のまだら　今案法華の曼荼羅は觀智儀軌不空三藏翻譯弘法大師請來にとかれたり曼荼羅は梵語こゝには眞言とも壇とも翻す多義を含む故に多くは梵語を用る也當麻の曼荼羅など俗にいふは密教にとくところの曼荼羅を閙なれて似たる故にいふなり實には曼荼羅にはあらず漢土の書に淨土の變相を圖するなどいふ是なり曼荼羅に四種の差別あり佛菩薩の形像をかくは大曼荼羅なり釋迦如來の代に飾文珠菩薩の代に劍などかくは三摩耶曼荼羅なり三摩耶に本誓の義あり學問を好む人は書を翫び音樂を好む人は琴琵琶を貯ふるが如くおの〳〵所得の法門を物をもて表し給ふなり梵字にて種子をかくを法曼荼羅といふなり第四に羯磨曼荼羅といふはかみの三種に通ず土をねやし木を刻みて佛像を作る其威儀事業成就の所をさして羯磨曼荼羅といふ羯磨をこゝには事業と翻する故なり

けうしのぼさち　今案狹持菩薩日本紀

經は六道の衆生のために六部かゝせ給ひて　今案定家卿も母のために手づから法華經六部書給へるはこれにならひ給へるなるべし

けかけたる　河計又堺　今案界の字を用ゆふしのみねよりもけに　今案萬葉に勝の字をけとよめりすみてよむべし

ゆたけきさきらを　今案寬吻と書へしさの字濁るべからず知名抄云說文云脣吻上音旬久知比留下音紛久知佐岐良くちさきらのゆたかなるとは辯舌なるをいふなり

さまかはりたるいとなみにそゝきあへる　今案そゝきはさわぐ意なり延喜式第八大殿祭祝詞云取葺計草乃巣古語云二蘇々岐一とあるこれなり俗にいそかしく立居するをそゝ〳〵するといへり已前に紫の上のあまかつなど作りてそゝくりゐ給ふといへるにおなじ詞なり

大かたの秋をはうしとしりにしをふりすてがたき鈴蟲の聲　今案秋とは源氏の心をのたまへりいかにとかやいて思ひの外なる御ことゝ源のゝたまへるもこゝを聞とがめてなり下の句は源のなつかしう物のたまふによせ給へり

心もて草のやとりをいとへどもなほ鈴むしの聲ぞふりせぬ　今案心もてとは女三の心づからなり草のやどりをいとふとは世を捨給ふを云り鈴蟲によする

に草のやどりは縁有る詞なり三條宮は渡給はんと
あるを恨給ふまては有まじきか下句は鈴虫の聲を
聞もふるさぬやうに女三をふるしてはみ參らせぬ
となり
心ばへふかう　細盛なる世を捨てしつかに住給へる
心ばへどもなり　今案唯心はへふかう盛なる世を
捨てなどまては有まじ

源註拾遺卷第七

夕霧

ことのほかなりける御もてなしにはゐてはまうでと
ぶらひ給はずなりにたり　細伊勢物語にゐていきて
あらんとありゐてはわざとなといふ心なるべしつ
いでならではとなり　今案しひてえまうて給はず
といふ本用ゆべし伊勢物語のゐていきては將てな
りひきゐてゆかんなればこゝにかつて叶はずしひ
てもまさしきかなはしひなれど中頃より誤てしゐ
てと書きたればそのしの字の落たるなるべし
あなたの御せうそこかよふ程すこしとほうへたゝる
ひまに　細御息所の御方程遠きとなり　今案御息所
より夕霧へのせうそこのひまありてとほき程なり
此せうそこは人してのたまひかはすあへしらひな
り
なかぞらなるわざかな　細霧の深き空をいへり　今
案歸るべきいへぢはみえずゆるす人のなければ霧
のまがきは立とまるべうもあらでつくかたなき
を霧のたつ空によせて中空といふなり細流の說叶

はず和泉式部歌「人はゆき霧はまがきに立とまりさも中空にみえしよひかな なかゆふるかな風 夕霧の詞とは心は表裏してよく相似たり

やらはせ給ふ 河 逐日本紀 今案大和物語に「しねとてや取もあへすぞやらはるゝいといきがたき心ちこそすれ

くるす野のさうちかゝらん 花 今案山城國愛宕郡之内小野郷は上賀茂領也栗栖郷は下社領也寛仁二年十一月二十五日陣定ありて官符をなされをはりぬくるす野の庄近からんといふは此所なり又宇治にも小野栗栖野ありそれをいふにあらず 今案三代實錄二十六同四十二云愛宕郡栗栖野といへり 和名抄第六云山城國愛宕郡栗野久留須 小野乎乃 宇治郡小野乎乃 小栗乎久留須 花鳥の說これにおなじ常曉和尙小栗栖に法琳寺を建て大元法を行ひ給ひし彼小栗栖の常曉といひならへり宇治にあるはたとひ只くるす野といふともまことにはをくるすなり栗野と書て久留須（クルス）と註したるは註に野もしの落たる歟ともに栖の字なきは二字に限りて名をつくる故によみつくるなり萬葉第六に「さしすきのくるすの小野の萩の花ちらん時にしゆきてたむけんとよめるは大和にて又別なり

ちゝにくだけ侍る思ひに 河「君こふる心はちゝにくたくれどひとつもうせぬ物にぞありける 箋用ニ此歌ニ 今案これは後拾遺戀四に和泉式部が歌なり例にはひけどもこれにはよるべからず菅家萬葉に「一たびも戀しと思ふにくるしきは心そちゝにくだくべらなる 又曾禰好忠が歌に「君こふる心は千々にくだくれどなと數ならぬわが身なるらん

月くまなくすみわたりて霧にもまきれずさしいりたり 箋 霧はふれども絕間さやかなるものなり面白し 今案上に霧のたゝ此軒のもとまて立わたればといひ又夕暮の霧にとちられてと云て其後月のあかきかたにいざなひ開ゆるもといひてこゝに明がたちかうなりにけり月くまなくと書たればよひの霧は晴たれば霧にまきれすといふ歟又月はさやかにて霧は薄き時はさはらぬ事もあるなり萬葉第六に「ぬば玉の夜霧のたちてすまなくにてれる月夜のみれば悲しき

朝露のおもはん所に 今案古今に「何をして身のい

たつらに老ぬらん年のおもはんことぞやさしき
六帖「いかて猶有としらせじ高砂の松のおもはん事
もはづかし

なごりなく打たゆめ　今案ゆふきりのまめ人なりと
落葉におもはせて油断させ参らするをいへり

ぬれきぬは猶えほさせ給はじ　今案拾遺に　菅家「あ
めのしたのがるゝ人のなければやきてしぬれぎぬ
ひるよしもなき

人々ありしまゝにきこえもらさなん　細何となくみ
やす所へ人の申侍れかしとなり　今案有しまゝに
女房達などに御息所へ此よし申せしとなり細流の
申侍れかしは唯心にて思ひ給ふやうなり

あやしう何心もなきさまにて　箋落葉の打とけたる
常の姿にて夕霧にみえしことなり　今案此註落葉
の心にあらず用意有てもおもはれずして近付れし
ことを悔たまふなり

なにがしが心をいたして　今案心をいたすは心を致
すなり出すにあらず致すはこゝろのかきりをつく
しきはむるなり

まいていふかひなく人のことによりて　今案人のこ
とは人の言人とは夕霧なりよりてとは此ての下に
はの字落たるにやましていふかひなうゆうきりの
ねきことによりたらはいかなる名をかくたさまし
實事なければしばしはうたかふ人ありともつひに
は其よしあらはるべしとおぼしなくさめごともとな
り又まいてといふ下に我心よわかりせばと心を入
て見ても同じ古家の両説ともに叶はず味はふべし

又めくりまゐるとも　今案後拾遺に　實方「契りあ
りて此世に又はうまるともおもかはりしてみもや
忘れん

あながちにならひ侍けるを　細あまりへたてなかり
しも今くやしきとなり　今案思へばたゞ時のまに
へだゝりぬべき世の中をといふつゞきなればいつ
もあひ奉る事のやうになれておもひしが悔しき心
なり隔なかりしをくやむ心にあらず

はづかしとのみおぼすにいと〳〵ほしうて　今案落
葉の物をはづかしとのみおぼしめすによりいとい
たはしさにふともえたづね給はぬと也

人しれずおぼしよわる御心もそひて　細夕霧ねんこ
ろにもあらばとゝ御息所の心の中にいさゝかゆるし

給ひて下待給へるなり　箋此時夕霧のおはしたらばゆるさんと御息所の待給へるとなり　今按これは落葉の御心のよわりて夕霧を下待給ふにさはりなど有てえおはせぬゆゑに文はおこせ給ふと落葉のおぼすかと御息所の推量し給へるなり御息所の心のよわりてゆるす心にて下待給ふにはあらず味はふべし

此御文もけさやかなるけしきにもあらて　今按けさやかとは女二の心をあはせて逢給へるけしきならぬを云り

めさましげに心ちよがほに　今按夕霧の歌を見て御息所の心の中に女二の心を合せ給はざりしを悦ひ給ふなり

こよひもつれなさをいといみじとおぼす　今按さきの夜は逢給はずとも今宵を契り給はゞかく歌をおこせて夕霧のみづからまうて給はぬことはあらじをこよひをもたのめ給はざりしよと推してそれを可然こと〻思ひ給へるをつれなさをいみじとおほすと云り

かくおきなのなにがしまもりけんやうに　今按萬葉第十六に「すみのえの小集楽に出てうつゝにもさかつますみを鏡とみつも右傳云昔者鄙人姓名未レ詳也于レ時郷里男女衆集野遊是會集之中有二鄙人夫婦一其婦容姿端正秀二於衆諸一乃彼鄙人之意彌増二愛レ妻之情一作二斯歌一讃二嘆美貌一也ともし此ことなどにや

をごづりとらんの心にて　河誘ヲゴツリ　コシラフ　艫ヲコヅル　細了簡してとらんとなり　今案誘は日本紀にをこづるともわかづるもよめりすかしあざむく心なり艫は艣の訓におなじくのふとよめりをこづるとは何によめるにかしらず細流の註はかなひてもみえず六帖第五思ひ煩ふといふ題に「あだ人のをこづりさをのあやふさにうけひくことのかたくも有かな

おぼろけにおもひあまりてやはかくかき給へつらん　或注大かたに思ひあまりてのことにはあらじとなり　今案此註かなはずおぼろげにとはおぼろげのことにはといへるなり

あだへかくして　河あだに取かくしての心なり　今案あたへてといふ言さき〳〵は有きざれふかく取かくしての意なり

おしとき御馬にうつしおきて　今案和名云説文云鞍（晋安字或作レ鞌和名久良俗有二唐鞍移鞍結鞍等名一）馬鞍也　左大將朝光歌に「ひたちなるを野のみまきの露草のうつしは駒のおくにぞありける

猶いといはけて　今案驚駭（イハケテ）日本紀　喘息（イハケテ）同上いはけはいはけなきと同じなくといふはたゞ詞歟あらきをあらけなく大氣なるをおほけなくといふがごとし六帖第三に「逢ことのかたみせにするあみのめにいはけなきまて戀かゝりぬる

おほそらをかこちて　河「身のうきを世のうきとのみなかむればいかにおほぞらくるしかるらん　今案此歌何に出たるにかいまだしらず古今に「世の中はいかに苦しと思ふらんこゝらの人に恨みらるれば此うたを取てよめる歌歟古今に「大空はこひしき人のかたみかは物おもふごとになかめらるらん此下句をとれるにや

命さへ心にかなはずと　河「いのちさへ心にかなふ物ならばしにはやすくぞあるべかりける　今案これは古今に「命だに心にかなふ物ならば何かわかれのかなしからまし「こひしきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける　此二首の上下の句を取まじへて引れたり上の歌の心をかへて詞をとれるものなり

花やてふやとかけばこそあらめ　今案枕草子に「皆人の花やてふやといそぐ日も我心をば君ぞ知ける

いととくことなしひに　今案ことなしいひになりことなしげにいふなり古今に「むら鳥の立にしわが名今更にことなしふともしるしあらめや

いづれとかわきてながめん消かへる露も草葉のうへとみぬ世を　今案古今に「露をなどあだなる物と思ひけんわが身も草におかぬばかりを

歌　里遠み小野のしの原分けてきて　細を野のしの原ここは名所にあらず草のはらをいへり　今案分てきてといへる故に唯道すがらのことゝ心得てかくのたまへる歟淺茅生の小野の篠原とよめる等の歌は名所にあらねどこれは小野にしてよまれたれば名所なるべし小野に入てもをのゝ篠原分てきてといはんこと何條事かあるべき

をくらの山もたどるましう　河「秋の夜の月の光し清ければくらふの山もこえぬべらなり　細引歌に及

ばずくらき所もあるましきなり　唹引歌不用をく
らの山のくらからしと也本歌のくらふの山ををく
らの山といひたるにや然は面白哉　今案新古今秋
上に題しらず　大江千里「いづくにかこよひの月
の曇るべきをくらの山も名をやかふらん　此歌こ
よひの月とさへあれば疑ひなく是をとりてかける
なるべし　後撰雜二　業平「大井河うかべる舟の
かがり火にをくらの山も名のみなりけり　續後拾
遺秋下　是則「秋の色はちくさながらにさやけき
をたれか小倉の山といふらん

そむき〳〵になげきあかして　今案萬葉第七に「わ
かせこをいつちゆかめとさき竹のそかひにねしく
今し悔しも

おしつゝみてなごりもいかでよからんなどくちすさ
び給へり　今案上にうへよりおつるとやかい給ひつ
らんとてかくかけるはしかかき給ひつればこそ文
をおしつゝみて後のなごりにも猶彼歌のいかによ
からんと云句をばずし給ふならめと也此本文夫木
抄にも見えたりもと何より出るといふとをしらず

おふしたてけんおやも　孟「かゝる身におふしたてけ
んたらちねのおやさへつらき戀もするかな　今案
此引歌何に出たるにか知ず菅家萬葉に「たらちね
のおやもつらしなかくはかり思ひにまよふ世にと
とめたる　玉葉戀五に朱雀院御時入内の後いかな
ることかありけん　清愼公のもとへつかはしける
女御藤原慶子「身のうきに思ひあまりてはて〳〵
はおやさへつらき物にぞ有ける

此ほどのみやづかへはたふるにしたがひてつかうま
つりぬ　今案たふるは堪るなり力の堪るほどつかへ
しなりたゆるにと書るは假字大きに違ひて絶ると
なるひがことなり假字しらぬ人のかけるものかく
のごとし

おずましかべきわざをも　今案古語拾遺云天鈿女命（アメノウズメノミコト）古語天乃於須女其ノ神強捍猛固故以名今俗強女謂二之ヲ於須志一ト此縁也　おずましは此註の心
也おぼすまじかるべきかなとある本は是を心得か
ねて改めたるにや

ひとりとまり給ふべうもあらで云々めもきりていみ
じ　今案蜻蛉日記云女おやといふ人あるかぎりは有
けるをひさしうわづらひて秋のはじめのころほひ
むなしくなりぬ云々山寺にてかゝるめをみればを

さなき子をひきよせてわづかにいふやう云々物おぼえざりしほどのことなればにやおほえずさとにもいそがねとこゝろにしまかせねばけふみないでたつ日になりぬこしときはひざにふし給へりし人をいかでかやすらかにと思ひつゝわがみはあせになりつゝさりともとおもふ心そひてたのもしかりきこたみはいとやすらかにてあさましきまでくつろかにのられたるにもみちすがらいみじうかなしあが君と云々てをする　今案うつぼ物語にはあか君

ほとけともいへり

いとまだしらぬ世かな　細 または又なり夕ぎりの語にて可然となりかやうのことは世にたぐひあらしとなり　今案下に少將が詞にまだしらぬはけによつかぬ御心がまへのけにこそはと有又にはあらす

いまだなること明かなり

うらみわひむねあひがたきふゆの夜にまたさしまさる關のいはかど　今案建春門院にて北面歌合に關路落葉　左　權大納隆季卿「逢坂のせきの岩かどた

ゝきあげて木の葉もてくる風の使か　右勝清輔朝

臣一浪のうへに紅葉こきおろす清見かた山の高根に嵐ふくらし　左歌ふるまひ心ばへをかしくみゆるを歌合のうたにとりていかにとかや申侍りしを關のいはかどは良暹法師のひがことゝいひたりけることなりしかれども彼關のいはかどふみならし山たち出るきり原の駒といふ歌を岩の廉といへるぞ巖門といふことはつねのことなれば相坂の關に岩門とよみたらん更にとがあらしとおもふ給へてそのことにおきてはさやうに申侍し也右云々袋草子云又良暹於二或所一語云一日江州より上洛之間於二會坂一時雨に逢石門に立入てかしこくぬれすと云々　是優艶義歟而懷圓聞云圓石門には何様に被二立入一哉門侍歟云々懷圓咲て其は石廉にて侍不二知給一歟不便々々云々良暹閉口懷圓度々蒙レ難者也　但爲仲歌にあつまちのことつてやせんほとゝぎすせきのいはかどいまそすくなる　如此者石門歟又彼失歟　愚案後拾遺集戀五にいそべに浪はよせすとやみしと申つかはしける人の返事に　紫式部「かへりては思ひしりぬや岩かどにうきてよりくる岩のあだなみこれと高遠卿の歌は石廉なり今の夕霧の歌と爲仲の歌とは石門也高遠の歌を取て石門とよまんはひが事なり然らすは二つともにあり

て別の詞なりいづれも難ずべからず
まろは丶やうしにき　今案大和物語に「あらばこそはじめのはてもおもほえめけふにもあはで消にしものを　萱萬　玉葉戀三　興風「戀しとは今はおもはす玉しひのあひみぬさきになくなりぬれば
御心こそおによりけにもおはすれさまはにくけもなければえうとみはつまじとなにこゝろもなう　今案後撰戀四に一條がもとにいとなんこひしきといひやりたりければおにのかたをかきてやるとて　一條「戀しくはかげをたにみてなぐさめよわがうちとけて忍ふかほなり　かへし　伊勢「かけみればいとゞ心そまどはるゝちかゝらぬけのうときなりけり
かく心をさなげに　細夕霧の詞なり 孟同 抄夕霧の詞にはあらす心なるべし　此鬼こそといふより詞と云々　今案兩說蘭菊なり
かう／＼しきけを　細神々しきと也 哢濁りて讀なり　今案神々しきなればはたを清下を濁て讀べし俗にいふもしかなり初より濁るべき理なし
おいらかにしに給ひね　細直にとなり 哢同 孟まことにと也　今案をとなしうといはんがことし俗に尋常にしねなといふもかよふべしおいらかの詞竹取物語宇治拾遺などにあるもをとなしくといへるにかよひて聞ゆ
歌
なるゝ身をうらみんよりは　今案萬葉になるゝといふに穢の字を書り垢づきてふりたる心なれば五文字人をさしみつからをさす兩義の中我をさすかたなるべしたちやかへましといふもよく叶へり
たはぶれにくゝめつらかなりと　今案古今「あかぬやと心みがてらあひみねばたはぶれにくきまでぞ戀しき
たゝかゝるこゝろざしをふかきふちになずらへたまひてすてつる身とおほしなせ　今案たくみなる書ざまなり
いは木よりけに　今案河海に萬葉第十二に磐城と書ていはきとよめり若此義歟不動の心なりとあるは心得がたし彼歌は「磐城山たゝこえきませ磯崎のこぬみの濱に我立またん　之は名所なり同第十六に「ことしあらばをはつせ山の石城にもこもらばともにおもふなわかせ　此石城は墓の事なり日本

紀に石楠これに同じいづれもこゝにかなはず萬葉第四に石木にもならまし物をとよみ第五にいは木よりなりてし人かともよみ伊勢物語にいはきにしあらねはさすがにあはれとおもひけりといへるに同しつよくつれなき事をいふとてけにとはいへりけは勝なり

いひもていけばたが名かをしきとて　河引歌「いひもてはたが名かをしきしなのなるきそちの橋のかけしたえずは　細引歌に及ぶべからざる也　今案河海の引歌何に有にかしらず萬葉に「里人もいひつくかねによしゑやし戀てもしなん誰名ならめや「人めおはみたゞにあはずてけだしくも我戀しなば誰名かあらんも古今に　深やふ「戀しなばたか名はたゝじ世の中のつれなきものといひはなすともこれらの歌を心を得て取歟

御　法

たきゝこるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふ法ぞはるけき　今案拾遺集賀に　中納言朝忠「萬代の初めとけふを祈おきて今ゆくすゑは神ぞしるらん　此歌をおもへる歟

もゝちどりの囀るもふえの音におとらぬ心地して　今案百千鳥は萬葉十六に「我門のえのみもりはむ百千鳥ちどりはくれど君はきまさぬ　是は百千の鳥をよめる故に百千鳥と云てそれをたゝみていふとき千鳥はくれどゝいへり同集諸鳥を百鳥とも千鳥ともよめるをこれはそれを引合せてひとつによめるなり和泉式部は千鳥のひとつゐたるをみて百千鳥とは誰かいふらんとも讀たれば古しへも後も諸鳥にわたれるを古今の百千鳥さへづる春はと云歌に付て鶯と心得る先達も有紫式部も鶯と心得けるにやこゝに書るも笛の曲に春鶯囀(シュンアウテン)あればそれを思ひてかけるとみえ若菜上に朝ぼらけのたゞならぬ空にもゝちどりの聲もいとうらゝかなりとかけるも又鶯をさせるに似たり

みな人のぬきかけたる物のいろ〳〵　今按陵王の舞に感して見物の人々のきぬ脱きて禄のやうにするにやさることはなきことか詳ぬべし

今夜はすばなれたる心ちしてむとくなりや　今按諸本如此

かた〳〵におはしましては　細花鳥中宮の御詞と云

云いかゞこれは紫上の詞なり　今按上にひんかしのたいにおはしますへければこなたにはた待聞え給ふと云るは六條院の東對なるべし下にみどきやうなどによりてぞれいのわが御ゝ方にわたり給ふといふにてしるべし又下にあなたにもえわたり給はねば宮ぞわたり給ひけるとあるを抄に六條院に中宮は御里ずみなり紫上の御對面ありたきゝ病中かなはざる故に二條院へ又中宮の行啓あるなりこれらによれば花鳥の御說あたれる歟然らはあなたとは六條院にて紫上の御病中あなたへ對面にわたらせたまはんことも中宮の御身に取てかたしけなし又こなたへ行啓し給はんことも女御にておはせし時などよりは中宮にて作法もわつらはしければそこを參らんことはたわりなくなりにて侍れはとはのたまふなり又紫上の御詞ならは侍れはとのたまへばしばしはこなたにおはするにといふべきを侍ればとてしばしはこなたにおはすればとかけるにも中宮の御詞ゆゑなり

はゝをこそまさりておもひ聞ゆれ　今按匂宮をば紫上のそだて參らせたまひたる故わらはべのほど中宮をばたゞ宮とおぼ給ひて紫上をまことのはゝおやなりとおもひ給へるなり

さるは身にしむばかりおぼさるべき秋風ならねど　今按六帖に「吹くれば身にもしみける秋風をいろなるものとおもひけるかな

いまはかのくらき道　今按法華經等の從冥入於冥の心也和泉式部か歌を孟津に引給へり此歌後拾遺集には人たれと同時の人なれば引歌には有べからず只類例なるべし

ことなるかのよの御ひかりともならせ給はざらんものから　今按上に源氏の今はかのくらきみちのさふらひにだにたのみ申べきをとの給へるにこたへてかくはかけり

しにいる玉しひのやかて此御ゝからにとまらなんとおもほゆるもわりなきことなりや　今按とまらなんはねがふ詞なり或註に死入魂は紫の死骸にとまらんとなりと有は叶はず歌をよまぬ人の唯歌學とてするはかやうのことおほし

露けさは昔今ともおもほえず大かた秋の世こそつらけれ　孟源の御返歌愁傷は昔も今もわかれず唯秋が

悲しきと也　今按大かたあきの世こそとは秋に飽をそへて大かたの世のつらきにあきたる心なり
のほりにし雲井ながらもかへり見よわれあきはてぬつねならぬ世に　今按上句は紫上の魂のことなりよき人の死ぬるを神あがりといふも神魂の天にかへる心なり萬葉に天にしらるゝ高日しらるゝなどいへるもこれなり秋好中宮のかるゝ野を紫上はうしとおほして秋に心をとゞめざりけんとよみ給へるに同心して秋をおとしてよみ給はんも秋好の御心あへしらひにわろければ我飽はてぬといふ所に秋をおもはせてよめるふかき用意といふべし

幻

わかやどは花もてはやす人もなし何にか春の尋ねきぬらん　今按後撰に「なにゝ菊色そめかへし匂ふらん花もてはやす君もこなくに
香をとめてきつるかひなく大かたの花の友といひやなすべき　今按後撰に「年をへて花のたよりにこととはばいとゞあたなる名をや立なん六帖」とはるゝもあたにはあれど此春は花のたよりぞうれしかりける　同みつね「あぢきなく花のたよりに　とはるれば我さへあだになりぬべら也　重之集「をさなくぞ春のみとふと思ひける花のたよりに見ゆる也けり
これより外に見はやすべき人なくやと　今按古今「山高み人もすさめぬさくら花いたくなわひそわれ見はやさん
袖のしがらみせきあへぬまで　細「あすか川心のうちに流るれば袖のしがらみいつかよどまん　今按此歌何に出たるにやしがらみは水をせく物なるを下句のつゞき心得がたきにや拾遺戀四に　貫之「涙川おつる水上はやければせきぞかねつる袖のしがらみ　まさしく此歌にてかけりと見ゆ
かの御かたみのこうばいに　河「わきもこがうゑし梅の木見るごとに心たへつゝなみだながるゝ　今按此引かれたるは萬葉第三に大納言旅人卿の歌なり下句心むせつゝなみだしながるとあり
またつひにすみはてさせ給かたふかう侍らんと　花始終道心さめずして世中をすみはつるとなり　今按すみはつるとは山里などの事なり
かりがねし苗代水のたえしよりうつりし花のかげをだにみず　今按諸本如此

さもこそはよるべの水にみくさゐめけふのかざしの名さへわするゝ　細よるへの水のことゝ河海に委しくしるさる此歌はよるべは便の心也まつりの日なるによりて神社にことよせていへり中將君は紫上をよる心にしてさふらひ侍るなりみくさゐるとは今紫上ましまさずして便をうしなひたるなりされば葵のかさしなとも忘れたり源もあふひといふとを忘れはて給ひぬるよとなり宗祇云中將名さへ忘るるといへるを逢ことに心得たらはにくゝもなり侍るへしよるべはたよりなりみくさゐるはあせたる心なり紫上うせ給ひて後はけふのかざしの心をもおもひいれられぬ故に名さへわするゝと云へり歎の心なるべし定家卿の僻案抄にもよるべの水の事みえたり　今案よるをよるべと讀る歌僻案抄によるへなみ身をこそ遠く隔つれと云をひかるそれまでもなく此物語上にもあり又萬葉第九には塚の上に木の枝なひけり聞がごとちぬをとこにしよるべけらしもこれよりけらしといふをよるべけらしもとさへよめりされどよるべといふ詞のみをいひてよるべの水といへるよしを釋せられねばことたり

ても聞えず奥義抄袖中抄等の中に釋あり歌並に詞を釋せんには先ことを明らかにして理を其上にいふべしよるべの水といふことはいかなることともいかならんことともいはて心をのみとありかゝとといふは用なきことなり夫木抄廿六にいなりの祭みけるに人のもとよりつかはしける歌の返事　和泉式部「神かけて君はあらかふたれかさはよるべにたまる水といひける　又袖中抄第四古歌に「かみさびてふるえにたまるあま水のみくさゐるまでいもをみぬかな　奥義抄にも有そこには神さびの寄邊にたまるとあり　又道綱母歌に「たえぬるか影だにみえばとふべきをかたみの水はみくさゐにけり　かたみの水とはうらなひをはうらかたとも云それをたゝかたとのみもいへは神のしるしあらはるゝ心よるへの水といふに同じきかとふべきにといへるうらなひによれりまた萬葉集第十七にみなうらとよめるも水占と聞ゆ又嘉應二年十月住吉社歌合に社頭月といふ題に　清輔朝臣「月影はさえにけらしな神かきやよるべの水につらゝゐるまて　判者俊成卿云よるべの水といふ事は源氏の物

語にも加茂の祭の日の歌にさもこそはよるべの水もみくさゐめと讀るをみ給へしさしてふるき歌にもえ見及び給ひ侍らず此水をおろ〳〵うけ給はるにたとへばいづれの社にも侍らめどまつ當社の御まへの月には海のおもて水をみがき濱のまさこ玉をしけらんをばおきてよるべの水にむかひて月はさえにけらしなと思はんことやいかゞと云々作者清輔朝臣云よるべの水は何れの社にも侍るにこそ又歌に讀る事源氏のみにあらず和泉式部集などは御覽ぜざりけるにや云々此問答俊成卿も住吉に取て月によむべき景色おほきをおきてよるべの水を思ひよられたるをこそ難せられたれよるべのみつはいづれの社にも有へき義は同心なり然ればよるべの水は何といふと心得て後うたのこゝろをさたむべきなり和泉式部の心誓水とてちかふ時は水をのむことあれば其心をよめりとみえたり世に神水を飲て誓ふなどいふ是なり日本紀云敏達天皇十年春潤二月蝦夷數千冦於邊境由是召其魁帥綾糟等詔曰云々於是綾糟等懼然恐懼乃下泊瀬中流向三諸嶽漱水而盟曰云々臣等若違盟者天地諸神及天皇靈絶滅臣種矣　いせ物かたりに「山城の井手の玉水てにくみてたのみしかひもなき世なりけり　中務家集に「神水に影のかたぶく山ふきはかはづの聲をあはれとやきく　これもよるべの水の上に山吹の咲かゝりてうちなひきて影のみゆるを蛙の聲のあはれなりとて山吹により給へる神の他念なく打かたふきて聞給ふにやとよめるかとみゆ日本紀に瓮の字を瓮とよめるは瓶のひらくて盃のなりしたる類にいへれば託瓮といへるにや神前に瓮に水をいれ置に神の託し給ふを掬て誓水には用ふべければなり中將が歌の前にあふひをかたはらに置きたりけるをとり給ひていかにとかや此名こそわすれにけれとのたまへばといひて歌ありてとはぢらひてきこゆけにいとほしくて「おほかたはおもひすてし世なれどもあふひはなほつみおかすべき　なとひとばかりはおぼしはなたぬけしきなりといふまで心をつけてみるに中將が身の上の古しへにかけぬうたにあらずさこそは昔の契りはかはりて寄邊の水にみくさのゐることくにもあらめけふのかざしの名をさへ忘れたりとの

たまふことよとよめるなり其心をいたはりてあふ
ひは猶やつみおかすべきとはよみ給へりつみおか
すべきとは拾遺に東三條入道の大原野へのつぼす
みれつみおかしある物ならばといふをとれるなる
べし古註ども始終の心をよく得られたるなし
いもが垣ねにおとなはせまほしき御こゝろなり　細「ひ
とりしてきかはかなしき郭公妹がかきねに音なは
せばや　今案此歌何にいてたるにかしらず
郭公きみにつてなんふる郷の花橘は今ぞさかりと
今案古今に「なき人の宿にかよはゞほとゝぎすか
けて音にのみなくとつげなん
つれ〴〵とわりなくくらす夏の日をかことかましき
むしのこゑかな　細蜩を虫といへる面白し心は我至
極なきくらしぬるに蜩さへかく鳴くらすよと也か
ごとがましとはわりなくなどいふ心なり　孟かこ
とはかこつ心也　今案古今秋上に題しらず讀人し
らすとて螢一虫一松蟲四蜩二以上八首を續けて載た
るもひぐらしを蟲に入たるなりがことがましきは
わりなくの心にあらず續後撰集雜上云東北院の渡
殿のやり水に影を見てよみ侍ける　紫式部「かけ
みてもうき我が涙おちそひてかことがましき瀧の
音かな　又千載集冬に堀河院の御時百首の歌奉り
ける時のしぐれの歌　中納言國信「み山べのしく
れてわたる數ごとにかことがましき玉かしはかな
百首にはかこちがましきと有かゝればかことゝか
こちとも同じくてかこつけがましきなり此かこつ
は託の字なり事をよせそふる心なり
たなばたのあふせは雲のよそに見てわかれの庭につ
ゆぞおきそふ　今案七夕詩に露應二別涙一珠空落また
露及二明朝一涙不レ禁二これらの心なるべし
いまゝでへにける月日よとおぼすにも　細引歌「人の
身もならはし物を今までにかくてもへぬる世にこ
そありけれ　今案此引歌は古今戀一に「人の身も
ならはし物をあはずしていざ心みんこひやしぬる
と　同戀五「身をうしとおもひにきえぬ物なればか
くてもへぬる世にこそありけれ　此二首の上下の
句をおもひわたりて一首になし腰句はこゝに今ま
でとあるによりて古歌にも然ありきとおぼして所
詮は次の歌をひかるゝか上句を誤たまふなるべし
引歌なくてもあるべし

まことや導師のさかつきのついでに「春までの命もしらす雪のうちに色づく梅をけふかざしてん　今案拾遺集冬部に屛風の繪に佛名のあした梅の木のもとに導師とあるしとかはらけとりてわかれをしみたる所　よしのふ「雪ふかき山路になにゝかへるらん春まつ花の陰にとまらで　貫之家集云佛名のあしたに導師のかへるついでに法師をとこども庭におりて梅をもちてあそふあひたに雪のふりかかれるうめをゝれる屛風の繪なり「梅の花をりしまがへは足引の山路の雪のおもほゆるかな

雲隱

匂宮

さをしかのつまにすめる萩の露にもをさ〳〵御心うつし給はず　三「秋田かるかりほのやどりにほふまでさける秋萩みれどあかぬかも　かやうにはよめども誠ににほふ草にあらず　今案此句ふは色につきていへり香にはあらず

老をわするゝきくに　河「みな人の老をわするといふ菊は百とせをふる花にぞありける　前頭更有二蕭條物一老菊衰蘭三兩叢　樂天　今案ひかれたる歌は貫之集にあり「みな人の老をとゞむといふ菊は百とせをふる花にぞありけり　とあれば違へり樂天の詩を用ゆとみゆれど老菊を老をわするといへるはかなはぬにや元輔家集に「老の菊おとろへにける藤ばかまきしにのこりて有とこたへよこれは樂天の句を用たる事明らか也

あながちにもまじらひよらず　河交參日本紀　今案日本紀に交參をまじらふとよめる所みえず

おもひよれる人はいざなはれつゝ　今案古今に「いたづらにゆきてはきぬる物ゆゑにみまゝほしさにいざなはれつゝ

紅梅

なくさめのともあらなんと　今案あらなんはありなんなるべしあらなんは末をかけたる願ひなれば上に我世にやと云るてにをは違ひて不叶吟味すべし

けちかき人のおくれ奉りていきめぐらふはおほろけの命ながさならしかしとこそおほえ侍れ　今案我さへ源氏のおはせねばわするゝ時なく悲しうおぼゆるをまして氣近うなれたる人のおくれとまりてながらへたるは少々の命なかさとはおもはず命なか

きものは恥おほしといはんやうに此御誤にいきとまれるをうきことにぞおもはんずらんの意なり
下ニアリイ
きこえをかさんかしとて　今案をかすは侵凌とてしのおなしきなり
上アリイ
さかしきひじりの有けるを　今案阿難の光を放たるるを佛とみたるゝ諸の羅漢たちを云りさかしきひじりさへ佛の後には阿難を佛とみたれは我も此匂宮を源氏のかたみとみて源氏をしたふ心のやみのはるけ所にせんとなり

うらみての後ならましかは　今案諸本如此

紅の色にとられて　河後撰「紅の色にとられて梅の花香そこと〳〵に匂はざりけるゝ　今案此引給へる歌は紅の色をはかへてと有て躬恒が歌也誤也六帖には貫之歌なり躬恒集にはなくて貫之集にあり营歌は後撰と同じ又後拾遺に　元輔「梅花香はことごとにゝほはねどうすくこくこそ色は咲けれ

あだ人にせんに　河化人日本紀　越人孟子　今案日本紀に化人といへることなし孟子に又越人なし菅家萬葉に泛の字化の字をよめり

もとつかのにほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をやちらさん　花兼輔集「もとつかのあるだにゝるを梅の花いとゞにほひのそはりぬる哉　今案引給ふ歌家集にはもとの香の落句はるかなるかなとあり

竹川

わかき男の心つかひせぬなうみえしらかひさまよふ中に　今案諸本如此

よそにてはもき木なりとやさだむらん下に匂へる梅の初花　今案古今に兼藝法師が「姿こそみ山がくれの朽木なれこゝろは花になさはなりなむ　後撰に躬恒が「いせの海のつりのうけなるさまなれどふかき心は底にしづめり　是らの心を下にふくみてよめる歌なるべしあたごの山にといふ歌は俊頼のなるを俊成と引けるは誤なり

廿よ日の頃うめの花さかりなるに　今案古今の月やあらぬのこと書をうつせるにや

さくらゆゑ風に心のさわくかなおもひくまなき花とみる〳〵　今案菅家萬葉に「鶯のわれてはくゝむさくら花おもひくまなくとくもちるかな

櫻花にほひあまたにちらさじとおほふはかりのそではありやは　今案上句は古今にあはれてふことをあ

またにやらじとやといへるをおもへるに似たり
あはれてふつねならぬ世の一言もいかなる人にかくるものそは　今案この歌上に限りとあるをまことにやとおぼしてといひ下にゆゝしきかたにてなんほのかにおもひしりたるといふにて心得るになき人にこそあはれといふ言はかくれといへるなりされば又藏人少將の歌に「いける世のしには心にまかせねばきかでやゝまん君か一こと　これも死ぬる事の心のまゝならばあはれといふ一言をゝ君がいふべきを心にまかせぬ事にてながらへたらばあはれとだに君がいふをきかでやゝまんとなり拾遺戀五に「いきしたゝことの心にかなひせばふたゝびものはおもはざらまし　藏人の歌は是よりいてたるか孟一こともきかで心にもまかせぬしにをやせんとなり愚按此註歌に不叶歟

水のほとりのいしに苔をむしろにて　今案石上題詩拂二綠苔一　樂天曾丹家集に「川上のかさぎのいはやけをぬるみ苔をむしろとならすうばそく

ながれてのたのめむなしき竹河によはうき物とおもひしりにき　今案たのめはたのみとある本然るべしたのめは令レ憑なり人のかたよりたのむるなり人だのめ空だのめ是なりたのみは我心にながれてはさりともとたのむなりむなしきは竹のうつほなるにつけていへる詞なり

御前の庭にて拝し奉り給ふかんの君たいめんし給てかくいと草ふかくなりゆく葎のかどをよきたまはぬ御心ばへにも　今案新古今雜下に大江擧周はじめて殿上をゆるされて草深き庭におりて拝しけるをみて「草わけて立居る袖のうれしさにたへずなみだの露ぞこぼるゝ　赤染家集にも有こゝに似たり

源註拾遺卷第八

宇治十帖
橋姫

いでやをりふしこゝろうくなど　細さてもといふ詞なり　今案いでは詞のかゝりにいふ詞なり日本紀第十三允恭紀に壓乞をいでとよみ萬葉集處々に乞の字をよみ欲得をよめり但これはいでそれを給へなどいふ心なればすこしかはるべきか咄哉をいでやとよむ歟考ふべし

たづきなきこゝちするに　今案萬葉第一に鶴寸(タツキ)とかき第十二に多頭寸(タツキ)とかけりもとはつを濁りきを清む

たゞみやぞはくゝみ給ふ　今案萬葉第九に羽裹(ハグクム)とかけり羽含とも書べし鳥のかひこをそだつるより起れる詞なり神代紀に育の字をひたすとよめり古事記には日足(ヒタス)と書り古事紀にかける心にてはぐゝむといふ古語なり

へんつぎ　孟篇突　今案ふるく書たる本をもて櫻井刑部入道素丹といひし人の講せしを聞たる本きもじを濁れる聲をさして篇續とかたはらにかけりま

さしくは篇續と書べきなりたとへは木篇とさだめては木篇の字を旁(ツクリ)をおほく案し出せるを勝とするやうの事なるべし

跡たえて心すむとはなけれども世をうち山に宿をこそかれ　今案　諸本如此

しげ木の中をわけ給ふに　今案六帖に「ことならば山下水となりなゝんへめしげきのなかに行へくも

雲がくれたる月のにはかにいとあかくさし出たれば　今案古今序に喜撰が歌の事を評して秋の月を見るにあかつきの雲にあへらんがごとしとかけるを宇治の事なれば便ありてかく書かへたる歟

山のかけぢに　今案和名抄云文字集略云磴道　士登反上　磴之道漢語抄云夜末乃加介知　山路閣道也

まだきにおほゞれたる涙　今案後撰に　伊勢「さらばよと別るゝときにいはませばわれも涙におほゝれなまし

氷魚もよらぬにやあらむ　河鮴(ヒヲ)和名氷魚　今案和名云考聲切韻云鮴　音小今案俗云氷魚是也初學記ニ冬事ノ對ニ雖レ有ニ氷魚霜鶴之文一而尋ニ其義一非也　白ヲ小魚名也似ニ鮊魚一長一二寸者也文字集略云鮊　音白漢語抄云之呂乎　魚薄身白色也

あやしき船どもに柴かりつみ　今案新古今集に　寂蓮「くれて行春のみなとはしらねども霞におつるうちの柴舟　こゝを取てよめるなり

われはうかはず　今案この作者の歌に「水鳥を水のうへとやよそに見ん我もうきたる世をすごしつゝ身さへうきてと　細「さすさをのしづくにぬるゝ袖ゆゑに身さへうきてもおもほゆるかな　今案此歌何に出たるにか

ひをむしにあらそふ心にて　今案和名云唐韻云蜉(音誘)漢語抄云朝ニテ生暮死スル虫也(比乎無之)

ことさらびき給へり　今案ことさらびはわざとめくといふにおなじ

かたへは峰の松風のもてはやすなるべし　今案かたへとは片つかたはの心なりおほくはなどいふ心なりと注せるはかなはず

おちあぶれてさすらへむ事　今案あぶれははふれに同じ日本紀第五崇神天皇紀に溢の字をはぶるとよめりこれにてあぶると同じ義なる事をしるべし

あとはきえず　細引歌「かきつくるあとはちとせも有ぬべし忘れずはのぶ人やなからん　今案此引歌何に出たるかしらず

推　本

かゝる山ふところ　今案齋宮女御集にあはれのさまやれいの山ふところとあり

ちる櫻あれば今ひらけそむるなど色々見渡さるゝに　細「さくら咲櫻の山のさくら花咲櫻あればちるさくらあり　今案此引歌何より出たるにか

河そひ柳の　河六帖貫之歌「いなむしろ河そひ柳水ゆけばおきふしすれどそのねたえせず　今案此うたは顯宗天皇の御歌を載たるなり六帖第六に紅梅の歌に　貫之「くれなゐに色をはかへて梅の花かぞこと〳〵に匂はざりける「鶯のすくへる枝ををりとらばこをはいかでかうまんとすらん　此次に柳とて今の歌ある故に河海には上をうけて貫之歌とおもひ給へるは誤なり凡六帖は作者をしるす事他の勅撰などゝはおなじからず委見ばみづから知べしやがて鶯のすくへる枝をとあるは拾遺物名によみ人しらずの歌にて貫之家集にもなきを引つゞけてかけるにて知るべし

山かぜに霞吹とく聲はあれどへたてゝみゆるをちの

しら波　今案後撰春中「かへる雁雲路にまどふ聲すなりかすみふきとけこのめはる風

をちこちのみぎはの波はへだつともなほふきかよへうぢの川風　今案後拾遺集戀三に高階成順石山にこもりて久しう音もし侍らざりければよめる　伊勢大輔「みるめこそあふみの海にかたからめ吹だにかよへしがのうら風　紫式部と伊勢大輔と同時なから大輔は宮づかへにも後に出たりとみゆれは源氏よりは此歌も後なるべし此歌大輔が秀歌なり下の句はこゝの歌をよみうつしたるべし

水にのぞきたるらうに　今案のぞくは臨におなじ詞なり中務集に屏風の繪に付て歌よむこと書に池にのぞきたる松にふぢかゝれりと云りかいまみをのぞくといふものぞみかゝりて見る故なるべし

あじろ屏風　河簟篷屏風也　今案和名云説文云籧篨〈蘧廉二音〉篨竹席也方言曰江東謂二之籧篨一〈渠除二音和名阿無師路〉かゝればあむしろをあしろといふなるべし

野をわきてしも　河「わきてしも何にほふらん秋の野にいづれともなくなびく尾花を　今案この歌何に出たるにかしらす

夜ふかき月のあきらかにさし出て山のはちかき心ちするに　抄八宮の心我よはひにくらべて観したるなり　今案　抄の義あやまれり源家長朝臣歌に「秋の月ながめ〳〵て老が世も山のはちかくかたぶきにけり　かやうに西の山へ近きをこそよはひにくらふる事に侍れこれは月の明かなるによりて東の山のちかきやうに見ゆる山里の景色なり　萬葉に「この山の峰にちかしと我見つる月の空なるこひもするかも

我なくて草の庵はあれぬともこの一ことはかれじとぞおもふ　今案かれしはくさの庵につけてのたまへり

あけぬ夜のこゝちながら　河「あけぬよのこゝちながらにやみにしをあくぞと〈あさくらイ〉いひし聲はきゝきや　花「人しれぬねやはたえせぬきり〳〵すたゞあけぬよのこゝちのみして　今案諸本如此

秋霧のはれぬ雲井にいとゞしく此世をかりといひしらすらん　今案後撰に「ひたすらにわがおもはなくにおのれさへかり〳〵とのみ啼わたるらん　菅家萬葉「常ならぬ身をあきぬれば白雲にとふ鳥さへぞ

かりとねをなく
今はまして野山にましり侍らんも如何なる木のもとをかはたのむべく侍らん　今案後撰に「春雨のふらば野山にまじりなん梅の花笠ありといふなり　是は梅の花笠といふをふくみていかなる木の本をかはと古今の遍昭の歌に引かけたり
雪ぎえにつみて侍るなりとてさはのせり　花中務集「雪ぎえに袖はぬれつゝいつしかと春日の野べにわかなつみけり　今案流布の中務集には此歌みえず
雪ふかきみぎはのこせり誰ためにつみかはやさんおやなしにして　細中君の歌なり我身のありさまはたがためにつみはやすべきこともなき身となり　今案萬葉第十一に「我宿のほたでふるからつみはやし身になるまてに君をしまたん
いろなりとかいふめるひすいだちて　今案いろなりはるりいろを書あやまれるにやひすいはそびとてるり色に見ゆる鳥也俗にかはせびといふ　和名云爾雅集註云鴗音立和名曾比日本紀私記用二此字一文德天皇小紀用二魚虎鳥三字一今案魚虎見二兼名苑等一鳥也靑翠而食レ魚江東呼爲二水狗一　古事記には翠鳥と書り和名をそみどり共そにどりともいへり
むらさきの紙にかけるきやう　今案紫紙金泥のふるき經いまの世にも殘りてありむかしは紫の紙に墨にてかける經も有べし

總角

たゝり　今案和名云楊氏漢語抄云絡垜多々理他果反下垜は梁と同字也延喜式九月神嘗祭註文云金銅多々利二基金銅麻笥二合金銅世比二枚云々又同式に檽の字も用ひられたり和名に栭の字をたゝりかたとよめり若栭を誤て檽に作りて假字に書る歟細流に引給へる令義解に金絲柱とあるは絲を今本に線に作れり六帖に「但馬絲のよれどもあはぬ思ひをば何のたたりにつけてはらはむ　此歌絡垜に祟を兼たり
わかなみたをは玉にぬかなんと　細「よりあはせてなくなる聲を糸にして我なみたをば玉にぬかなん　今案伊勢家集云つねになやましくせさせ給ひけるをつひに六月にかくれさせ給ひにけるあさましくいみじく悲しくてつかまつりし人さながらあつまりて夜晝なきこひ奉るにのちの御わざのをりにやうく／＼なりぬ雨のふる日心うしといひし人しもに

なんこもりゐにけるうへの人あつまりて御わざの
くみをなんしけるしもなる人糸はよりはてたまふ
べかなり只今なにわざをかしたまふこゝには雨を
なん見いたしてなかめ侍るといひあげたりければ
うへの御もとたちのかへしにはいとはよりはてゝ
今はねをなんよりあはせてなき侍るといひおこせ
たればしもなる人とて歌ありこゝによく叶へり
ものとはなしにとか　今案注にひかれたる貫之の歌
古今のみならず拾遺集家集六帖皆一同に物ならな
くにとあり用ひかへたるなるべし

松の葉をすきてつとむる山ぶし　今案日本紀云以ㇾ水送ㇾ飯　曾丹家集云「うはそくが朝なにきさむまつの葉はけさの雪にやうづもれぬらん　うつぼ物語云源少將は山に入し日よりこくをたち松の葉をすきて云々

おぼつかなくおもひつゝ過すこゝろおそさの　今案萬葉集第十二に「山しなの岩たの杜に心鈍たむけしたれは妹にあひがたき

曉の別やまだしらぬ事にて　細「まだしらぬ曉おきの別れには道さへまよふ物にぞありける　今案此歌何より出たるにかしらす

鳥の音も聞えぬ山とおもひしをよにうきことはたづね來にけり　河「とふ鳥の聲も聞えぬおくやまのふかき心を人はしらなん　今案この歌も出る所をしらず

身もなげつべきこゝちする　奥入「たつねくる身をしとはずはよさの海に身をなけつべき心ちこそすれ
　今案此歌何に出たるにか

おなじえをわきてそめける山ひめにいづれか深き色とゝはゝや　今案此歌前の詞をかけておなじえをわきてこのはのうつろふはと云歌にもとづけり

いとゞしき水の音にめもさめてよはのあらしに山鳥のこゝちしてあかしかねたまふ　花「あふことは遠山鳥の目もあはずあはずてこよひあかしつるかな
今案此引歌何に出たるぞやすゐりやうするにこゝの詞をとりて後の人のよめる歌にてこの歌によりてこゝをかけるにはあらざるへし

こはたの山に馬はいかゞ侍るべき　今案引歌拾遺にはこはたの里に馬はあれどゝあれど萬葉第十一にはこはたの山にとあれはいまは萬葉に有まゝに用

たり萬葉はかちにてゆく勞をいはんとてこはた山に借て乘べき馬はあれどもといへり今は御馬にのり給ひてはいかゞ侍らんといふことを木幡は宇治への道にて似付たる古歌もあればかくかけり
ふるの山里いかならん　細「初時雨ふるの山里いかならんすむ人さへや袖のぬるらむ　今案此引歌は新千載集冬に有て寛和二年殿上歌合によみ人しらずとて腰句いかならしといりたり夫木抄第三十一には寛和歌合好忠腰句いかならん落句袖のひつらんとあり寛和のころの歌なれば用へし
いづこより秋はゆきけん山里のもみぢの陰は過うきものを　孟是ほと我はこゝを立うきに秋はいつくよりゆくぞとなり　今案八宮は秋かくれ給ひければそれを秋はゆきけむとよせたるなり前後の歌にあはせて見るへし孟津の注叶はす
秋はてゝさひしさまさる木のもとを吹なすごしぞみねの松風　抄是は松風の吹過るやうにこゝにとまらぬ匂の心を我とよみ給へるなり　今按此抄の心は叶はず木のもとは子のもとゝそへて姫君たちのことなり下の句はさのみ紅葉をさそひて松風に吹な過そとなり木のもとのさひしさまさるは紅葉のちる故なりこれはみな人の御迎に參りていざなはれて歸り給ふ事を中君故に殘りおほくおぼしめす中の心をかくよせて上は八宮の御跡をしたふさまにのみよませ給へる也そこを下にけふのたよりを過し給ふ御心ぐるしさとみたてまつる人あれど事々しく引つゝきてえおはしましよらずとはいへる也
ことわりにてうらなくもものをといひたる姫君もざれてにくゝおぼさる　細匂宮の心なり　今按是より草子地なるべしうらなくといふより女一宮の心をはかりていふなり匂宮はむすぼゝれたるとよみ給ふほどなれば俄にことわりを聞えたればとてにくきまではおほすまじくや
むなしくなりなん後のおもひ出にも　今案拾遺集戀三　和泉式部「あらざらん此世の外の思ひ出にいまーたびのあふよしもかな　此歌の心愛に似たり同時なればこれを用ひてかくといふにはあらず
顏をばいとよくかくし給へり　今案前漢書外戚傳云初李夫人病篤上自臨候レ之夫人蒙レ被謝曰　妾久寢レ病形貌毀壞不レ可三以見二帝願以二王及兄弟一爲レ託上

曰夫人病甚殆將レ不レ起一見レ我屬二託王及兄弟一豈不レ快哉夫人曰婦人貌不レ修飾一不レ見二君父一妾不レ敢以二燕媠一見上レ帝（師古曰燕媠謂不二嚴飾一也）上曰夫人第一見レ我將下加二賜千金一而予中兄弟上尊官上夫人曰尊官在レ帝不レ在二一見一上復言欲二必見一レ之夫人遂轉嚮歔欷而不二復言一（師古曰轉嚮謂レ轉レ面而嚮レ裏也）於レ是上不レ說而起夫人姉妹讓レ之曰貴人獨可不下一見レ上屬中託兄弟上邪何爲恨レ上如レ此夫人曰云々

ちゞのやしろをひきかけて　細「ちかひつることのあまたに成ぬればちゞのやしろもみゝなれぬらん　今案此引歌何より出たるにかしらす後撰に「ちはやぶる神もみゝこそなれぬらんさま〴〵いのるとしのへぬれば　此歌に似たり

きしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけて何たのむらん　或注に今まで契り給ひしことのかはりたるにておもひしらるゝ御詞どもを行末かけて何にたのむわが心ぞとなり　今案此注誤れり此落句は何たのむらんにて匂宮の何たのめ給ふぞと讀るをこなたにたのむと見たるよりあやまれりたのめは令レ憑なれば此たのむも令レ憑と書てよむべきなり

行末のみじかき物と思ひなばめのまへにだにそむかざらなん　今案此上句は中君の歌の下句匂宮をうらみて行末かけ給ふ御詞のたのまれぬ心なればかやうにことわりを申とけども行末の契りをみじかゝるべき物と見給ひけなりよしさやうにみじかきものと見給はゞと也中君の恨る方をば置て只契りのみじかゝらんことを思はゞといふかたにのみよみなせり返歌の體なり

歎つれなきはくるしきものを　細「いかでわれつれなき人に身をかへてくるしきものとおもひしらせん　今案此歌何より出たるに歟　古今集戀一「心がへする物にもか片こひはくるしきものと人にしらせん　拾遺戀二「戀するはくるしき物としらすべく人を我身にしばしなさばや

早蕨

こゝろぼそき世のうさもつらさも　今案　和泉式部「世の中のうきもつらきも悲しきもたれにいへとか人のつれなき

これはわらはべのくやうして侍るはつおなりとて　今案供養の二字萬葉第十にはそなふとよめりはつ

おは假字わろし延喜式第八祝詞の中にあまた初穂と書り三代實錄第十八に新錢を神に奉り給ふ事を新ニ鑄作ニ之早穗二十文云々新穀を神に奉るより起れることはなり

君にとてあまたの春をつみしかばつねをわすれぬ初わらひなり　今案拾遺に　天暦御製「いつしかと君にと思ひし若菜をばのりの道にぞけふはつみける

此歌を下におもへるなるべし

歌 この春はたれにか見せん　今案此腰句は君ならで誰にか見せんと友則かよめる一首ものはかはりたれども皆ふくみたるやうなり

歌 あたらしき年ともいはす　今案「あたらしき年ともいはすふるものはふりぬる人のなみだなりけり

歌 かひ〴〵しくもあひしらひ聞え給ける　今案かひがひしくとはかひありげの心也常にいふかひ〴〵しくとはその事によく遂してなづまぬ方にいへり

いはせの杜のよぶこ鳥めきて　細 花鳥の義しかるべし「戀しくばきてもみよかし人づてにいはせの杜のよぶこ鳥かも　人づてならで逢しことの有しとなりされば へだてはあるまじきといふべきをそれをばいひのこし給ふとなり　花 いはせの杜の呼子鳥の事しかとしたる古歌は侍らねどもこゝろを取ていはゞ戀しくばきても見よかしの歌大かた無相違にやいはせの杜のよぶこ鳥めいたりとは人づてならぬをいふ心なりいはせの杜をいはたの森とかける事源氏の一本有と云々　今案花鳥にいはせの杜にしかとしたる古歌なしとのたまへるは誠に網にもれたる鳥釣をのかれたる魚なり　萬葉集第八に鏡王女「神なびのいはせの杜の呼子鳥いたくななきそわれ戀まさる　六帖第八にも入たりその夜の事をかけていはゞ呼子鳥のいたく鳴くやうに戀のまさるべければのこさるゝなりきてもみよかしの歌は何にあるか上手めかぬ歌にておぼつかなし又一本にいはたの杜ともあるよし六帖第二森の題に「聞からにもゆる思ひは山しろのいはたの森になく呼子鳥　此歌初の岩瀬の杜の歌よりは深切なればこれにていはたの森とかける本まさるべきか本歌によればいづれにてもおなじ意にて花鳥の御說は叶ふべからざるなり

袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねごめうつろふや

どやことなる　今案後撰春下に　伊勢「垣ごしにちり來る春を見るよりはねごめに風の吹もこさなん　袖ふれしとは大君の袖ふれしなり落句のやもし心得がたきなり宿やことならんの心歟

いとふにはえて　河「にくさのみますだの池のねぬなはゝいとふにはゆる物にぞ有ける　今案此詞常夏にも有て引歌今のごとし何に有うたにか　後撰戀二　拾遺戀五「あやしくもいとふにはゆる心かないかにしてかはおもひやむ（たゆ拾）べき

さきにたつ涙の川に身をなげば人におくれぬ命ならまし　今案此歌は古今に「さきだゝぬくひのやちたび悲しきは流るゝ水のかへり來ぬなり　此歌を辨の尼が下におもひて大君のながるゝ水のごとくうせしにおくるゝくいをせんよりさきにたつ泪の川に身をなげなまし物をとよめるなるべし

いよ〳〵やつして　今案辨尼はいよ〳〵別を思ひてしほたるゝ心なり

人はみないそぎたつめる袖の浦にひとりもしほをたるゝあまかな　細袖の浦は出羽なり新古今に「ながゐするあまのしわざを見るからに袖のうらにもたつ涙かな　吾長居うらめしきとなり永祿元年十一月八日御説殊勝也　今案袖浦袖湊ともに筑前なり新古今とて引給へる歌は金葉集雜上に母の歌の返しにむすめのよめる歌なり集云しほゆあみに西の海の方へまかりたりけるにみるといふものをみづからつみて都なるむすめのもとへつかはすとて　平康貞女「いそなつむ入江の浪のたちかへり君見るまでの命ともがな　返し　むすめ「なかゐするあまのしわざと見るからに袖の浦にもたつなみだかな　かくあればことたがへり古今に僧正遍昭のみな人ははなの衣になりぬなりとよみ給へる歌を下にふくめるに似たり

ありふれはうれしきせにもあひけるを身をうち川になげてましかは　細「かゝるせもありける物をとまりゐて身をうち川とおもひけるかな　今案此引歌は新古今集雜中に東三條入道關白太政大臣の歌にて腰句已下宇治川のたえぬはかりもなげきけるかなとあり圓融院御返しもあり下句大君の別の時をいへり次の歌の後の詞にて知べし

ながむれば山より出て行月も世にすみわびて山にこ

それ　今案土佐日記に「都にて山のはに見し月なれどなみより出て浪にこそいれ　句はへだてたれど山より出て山にこそいれは此貫之の歌を思ふべしすみわびては澄と住とをかけたり

しなてるやにほのみづうみこぐ船のまほならねどもあひみしものを　河萬葉「しなてるやにほの湖にこぐ舟のまほにも妹に逢見てしかな　今案此引歌萬葉に有事なし萬葉の抄をも書たる人のこの有なしをも考えずしてこゝに何とも注せぬ事おぼつかなし六帖などにあるべき歌ざまなれどそれにもなし何より出たる歌にかおぼつかなし此しなてるやは聖徳太子の片岡山とつゝけ給ひ萬葉第九に片足羽川とつゞけたるにおなじからずそれは階のかたゝかひにて昇り降る人もそれにしたがへは片といふ詞まうけんとて云り照は刻みいろへたる階をほめて云り今のしなてるも詞はそれに同じうてつゞくる心かゝるべし古事記中巻應神天皇御製長歌云美本杼理能迦豆伎伊岐豆岐志那陀由布佐佐那美遲袁須久須久登和賀伊麻勢婆夜云々又萬葉第十三に師名立都久麻左野方息長之遠智能小菅不連會伊苅持來云々みほ鳥はにほとり也かづきてはうかび出て息を銜ものなれば道をおはしましこうしてやすませ給ふよしをのたまはんためなりしなたゆふは布と牟と同韻にて通ずればしなたゆむ歟又布と留とも同韵なればしなたゆるかさゞなみちは篠浪路にて近江路也すく／＼とは俗にすご／＼と行と云に同じさゝ浪のはあとより段々により來るはきざはしの級に似たるをよわき風による小浪なればたゆみて續かぬ心にしなたゆむとのたまふかたえてつかねばしなたゆるとのたまへる歟今のしなてるやも此御製にて心得べしにほの海と云も誠の海ならでにほがための海といふにや又日本紀第九神功皇后紀云忍熊王逃無レ所レ入則喚二五十狹茅宿禰一而歌之曰伊裝阿藝伊佐智須區禰多摩枳波屢于知能阿曾餓句夫菟智能伊多氐於破孺破珥保廼利能介豆岐齊奈則共沈二瀬田濟一而死之これより起れる名歟和名抄云近江國野洲郡邇保在南北　邇保郡もにほの海より出たる名歟しなてるやさゝ浪とつゞけたるはそのこゝろなり段々にきざはしのやうに波のたつにほの海となり

寄生

おまへの菊うつろひはてゞさかりなるころ　細うつろひはてずしてなりうつろふからに色のまされば の心也　今案ての字清べし此巻の下に菊のまだよくもうつろひはてゞわざとつくろひたてさせ給へるはなか／＼おそきにいかなるひともとにかあらんいと見所ありてうつろひたるを云々又いせものがたりに神無月のつごもりがた菊のうつろひざかりなるにと云りうつろふことのさかりなるなりうつろひたるとさかりなるとにはあらず時分にても知べしうつろひて後一さかりあるが菊の徳なり

あくるまさきてとか　細「あさ顔は常なき花の色なれやあくるまさきてうつろひにけり　今案此引歌何に出たるにかしらず

あしこもとに　今案かしこもとになりかとあと同韻にて通す

なにゝかゝれると　花「藤波に松のあらしは音せずばなにゝかゝれる花としらまし　今案此歌何に出たるにか又金葉の歌は基俊のむすめ皇后宮女別當が歌なり

おほ空の月だにやどる我やどにまつ宵過て見えぬ君かな　細引歌元良親王の「大空の月だにやどにいるものを雲のよそにもすぐる君かな　といへるを少し引かへたり　今案此引歌は元良親王家集にあるにや集などには見えぬ歌なり　宣長案に此歌親王家集にあるよし花鳥に引たまへりとあり

まくらのうきぬべきこゝちのすれば　今案六帖第五枕「獨ねの床にたまれる涙には石のまくらもうきぬべらなり

わが心ながらおもひやるかたなく　今案此おもひやるは思ひをやるなり萬葉にあまたおもひやるとよめるは皆これにて想像をおもひやるとよみてそのことをさぞあらんなどおしはかるやうによめるは萬葉には一首もなし

をば捨山の月のみすみまさりて　花和泉式部「月みては誰も心ぞなぐさまぬをば捨山の麓ならねど今案此引給へる歌は後拾遺雜一に藤原範永歌也只古今の歌をもとゝしてこれらをば類語といふべし

おもがくしにや　今案萬葉第十一云「むかへればおもかくしする物からにつきて見まくのほしき君か

も　琵琶行云猶抱二琵琶一半遮レ面
あまりにならはし給てにはかにはしたなかるべきが
　今案給てはたまはでにて假に物をの歌にてかけ
るなるべし又は給ひてならば一夜もへだてずなら
はし給ひてとて同じ歌によれるにや
見ぐるしきわざかな　今案見る目のくるしきなり見
たからぬといふにはかはれり萬葉第八に「彦星の
おもひますらん心より見る我くるし夜のふけ行ば
大かたにきかまし物をひぐらしのこゑうらめしき秋
のくれかな　今案諸本如此
あまもつりするばかりになるも　孟「戀をしてねをの
みなけはしきたへの枕の下にあまぞつりする　今
案此歌出る處をしらす
たゞ世はうきなどやうにおもはせて　細「世やはうき
人やはつらきあまのかる藻にすむ虫の我からぞう
き　今案この歌も又出る所をしらず
くやしきにもまたげにねはなかれけり　今案六帖第
四に「神山の身をうの花の郭公くやし〳〵とねを
のみぞなく　けにといへる處此歌をふめり
いまのまもこひしきぞわりなかりける　今案　後撰

戀一「あはざりし時いかなりし物とてかたゝいま
　のまもみねは戀しき
ことわりしらぬつらさのみなん　孟「身をしれは恨ぬ
物をなぞもかくことわりしらぬつらさ成らん　今
案此引歌出る所しらずことわりしらぬつらさなる
らんとはしひてつらく思ふ我心をことはりをもし
らぬものかなといへるなるべし
またおもひます人なき心のとまりにて　今案拾遺戀
四に「おもひます人しなければますかゞみうつれ
　る影とねをのみぞなく
われこそさきになど　今案六帖に、「人よりは我こそ
さきにわすれなめつれなきをしもなにかたのまん
細流に此五もしを人なればと引給へるはあやまり
なり
人のかういふにうたてけちえんならんも　今案うた
　ては菅家萬葉に別様とかゝせ給へり
けにぞしたやすからぬ　今案これは薫の詞にむねは
おさへたるいとくるしう侍る物をとのたまへるは
おもては中君のためにてうらは我しのぶおもひを
そへていへるをうけてげにぞといひ胸の上をおさ

ふる故に下心のやすからぬとなりこれは中君の薫のほのめきかゝるをうるさく思ひ給ふにかけていへり「水鳥の下やすからぬ思ひにはあたりの水もぬるむべらなり

こだになどすこしひきとらせ給ひて宮へとおぼしてもたせ給ふ　細孟 蔦の類なり　河 不䗅コツ 呼 又云木にとりつきたる虫のからの類なり蛁ヘ竹洽ノ切斑身ノ小蟲ヘウ也

今案こだになどすこしひきとるといふは蔦の類と有然るべし木䗅といふものあそ歟□の字は玉篇に斑身ノ小蟲とありて だにと讀べしとはおぼえす推量するに蛃の字少々似たれは寫誤れるを呼花は現本の字に付て玉篇を考出せる歟和名抄云野王按蛃知税反與レ蚋同和名太仁　今有ニ小蟲一善齧ム人謂ニ之含ニレ毒即是だにといふ虫は初は薄くてひらなるが犬などにくひつきて日をふれは零餘子の色に大きさもそればかりになるものなり木につく事はいまだしらずたとひ木につくたにありともこゝにはかなはじ

河つらもちかくてけせうにもあれば　狹少也せばき心なり　今案顯證にてはれ〴〵しきなり

むかしわかれをかなしひてかはねをつゝみて　今案此因緣大日經疏一行記 に有に似たり彼疏を見てもとつく所を尋ぬべし

ほに出ぬ物おもふらししの薄まねくたもとの露しけくして　細 しの薄一種類別にありといへる說あり但穗に出ざるさまをいふかしの薄ほに出るとよめる歌おほし然れは穗に出ざる類別なりといふ說非歟

今案萬葉第七に「妹かりと我かよひぢのしの薄我しかよはゞなびけ篠はら　又六帖に「なよ竹に枝さしかはすしの薄よませに見えん君はたのまじ右萬葉の歌上にしの薄といひてそれをしの原といひつれはしのをやがてすゝきといへり六帖の歌にもなよ竹に枝さしかはすといひよませとさへいひたればこれ又萬葉に同じしかればしの薄はほに出ぬ物にて類別なるを穗にいつる物にもよみたるはのちに至りて誤まれるなるへし萬葉に皮須々寸と書てしのすゝきと點したる歌第十に二首ありて穗に出ずとよめり但し皮須々寸ははたすゝきとよむべきかと思ふ　今案有それは別に注す今の歌前の詞によるにまことにほに出ぬにあらす穗に出べきが出ぬほどによそへて云り萬葉第九に石上ふるの

わさ田の穗には出ずとも第十六にははたすゝき穗にはいづなどおもひたるともよめるは穗に出るものをかりてほに出ぬといへりそれに准らふべし

菊のまだよくもうつろひはてゞ　細菊のさかりなるをいへり　今案此御注誤なり上にも此ことにはありてそこに引合て注せしがごとしさかりは過ぎてややうつろふころを云りうつろひて紫になりたる時の一盛を又もてあそぶ物なるにまだよくも紫になりかへらねはまたよくもと云りいかなるひともととにかあらんいと見所ありてうつろひたるをといふにて前後兩所を見るべし

御そのなれは　今案詞花雜上にしのひたるをとこの鳴りけるきぬかしかましとておしのけゝれはよめる　和泉式部「音せぬはくるしき物を身にちかくなるとていとふ人もありけり

まづくちかためさせ給ひければ　今案かためのかもし清むべし口をかためさせ給ひければなり

こゝろしらいていひたりければ　今案省（ココロシラヒ）日本紀

四　阿

あてひてもおはしまさず　今案あてはけだかき心なりあてひといふはあてめくあてだてなどいはんがごとしおのづからあてなるはめでたき事なるをこれはなま〱のあてめくをわろき事にしていへるなり

こたひの頭は　細こゝもとは悉皆虚言也よからぬものゝ人媒介する事今もかくいへる類あるなりかやうの所に心を著べき數に書るなるべし　今案こたびは日本紀に此行と書り媒のそら言する事いにしへよりあることなり戰國策云燕王謂ニ蘇代一曰寡人甚不レ喜ニ訑（アザムク）者ノ言一也（沈州謂レ欺曰レ訑補曰訑徒案反或作レ誕）蘇代對曰周地賤レ媒爲ニ其兩譽一也之ニ男家一曰ニ女美一之ニ女家一曰ニ男美一然而周之俗不ニ自爲取一レ妻且夫處女無レ媒老且不レ嫁舍レ媒而自衒弊而不レ售（敝猶レ敗無レ成レ事也）順而無レ敗售而不レ敝唯媒而已矣

いとまだくかしこき君にて　今案史記に速の字をまだけりと讀り心とくかしこしといふにや

そゝめきてありくに　今案延喜式第八大殿祭祝詞云引結弊葛目能緩（ユル）比取葺計草（クサ）乃噪（ワ）岐（古語云ニ蘇々岐一）此そゝきと同し詞歟噪はさわくとよめばそゝめくそゝくりなどかよふべき歟草のそゝぎとは風などにさわぎ

なゐをいふかそゝくるにやとおもへどそれははし
はしのみたるゝ心なれば字叶ざる歟潘岳秋興賦
に素髮颯垂領　この颯の字と同意には用まじき
にや

世にあふれんと　今案あぶれとはぶれと同じあとは
は同韻にて通せり崇神紀に溢の字をはぶるとよめ
り

見奉りしらずなりにければあるを　今案あるをとは
さてもあるをなり

うきしまのあはれなりしことも聞えいづ　孟入道右
府はこれ常陸にある名なり云々　今案しだのうき
しまの事なるべし

いは木ならねば　今案萬葉第四に家持「かくばかり
こひつゝあらずば石木にもならまし物をものおも
はずして

かすならぬ身にもの思ひのたねをや　河「かずならぬ
身にはおもひのなかれかし人なみ〳〵にぬるゝ袖
かな　今案此引歌例より出たるにかしらず拾遺雜
上草合し侍りけるところに「たねなくてなきもの
草はおひにけりまくてふことはあらしとぞ思ふ

おそき人にて　今案上にも有て古語拾遺を引て注し
き

あせにおしひたして　今案　後拾遺戀四　和泉式部
「さま〳〵に思ふ心は有物をおしひたすらにぬるゝ
袖かな

この御ことはべらましかば　今案これは浮舟のめの
とが一向に少將をそしるにあらず初め浮舟を望み
しまゝにて常陸守が中君にうつらずはの心なりう
ち〳〵やすからぬむつかしき事はをり〳〵侍ると
もとは浮舟を母は詮とおもひ常陸守は中君をおも
ふにうき舟にかよはゝ常陸守やすからず思ふべき
ゆゑにをり〳〵むつかしき事はありともといふな
り

さはぶれず　孟不放埒　仙源抄流離　今案不放埒
はまたく暗推也流離は日本紀にさすらふとよめり
はぶるとよめることなしはぶれずば不溢なり上に
いふがごとし

いとおほかる御ぐしなればとみにもえほしやられず
今案うつほ物語諸本如此

こともありかほに　今案萬葉第四「夏葛のたえぬ

つかひのかよはざれはことしも有こと思ひつるかも

あひてもあはぬやうなる　細「ふすほどもなくて明ぬる夏のよはあひてもあはぬ心ちこそすれ　今案此引歌何より出たりとしらず

いたちの侍らんやうなる　今案いたちは其性さわがしくてかりにもしづかにをらず行歸り走りありく物なれば浮舟の母のうき舟を思ふのみならず常陸守や子どもが心をもとらんとしてこなたかなたしりもすゑず心も空なるを云り細流に狐の類にて疑ひ多きよしに注し給へどよからぬものともににくみ恨られ侍とうれへたるにて思ふべし又いたちといふ物はこなたかなたに子をいざなひありきてそれをそだつとていよ〳〵はしりさわげば其こゝろにもいふか

ひたのたくみもうらめしきへだてかな　今案延喜式二十二民部式上云凡飛驒國毎年貢二匠丁一百人一同三十四木工寮式云凡飛驒國匠丁三十七人以二九月一日一相共發二請寮家一不レ得二參差一飛驒國の番匠より起てすべて木たくみの類をひだのたくみといふなり萬葉第七に「ひた人のまき流すてふにふの川とよめるは杣人をもいふとぞ見ゆるかれもよろづの材木をあら作りしていたせばさも云べし

浮舟

またふりぬ物にはあれどきみがためふかきこゝろにまつとしらなん　細いまだ手にもふれざるといふ心なり孟同　今案千代のあえものとならばふりたる松にこそ付て參らすべけれど但千代ふべきものなればふりぬ枝に著たるにて深き心をもて君がために千年をまつなりとしり給へとなりまたふりぬをいまだ手にもふれぬ心といはゞまつとしらなんは何をまつにかなるへき未嘗(マダフリヌ)といふに千年の心もこもればこそそれをまつとは聞ゆれ

こよひ夢見さわがしうみえさせ給へれば　今案金葉集雑上詞書略之讀人しらず「ねぬるよのかべさわがしくみえしかど我ちかふればことなかりけり　夫木抄第三十六　和泉式部「ねぬるよの夢さわがしく見えつるはあふに命をかへやしつらん

心に身をも更にえまかせず　今案後撰に「いなせともいひはなたれずうきものは身を心ともせぬ世な

りけり　千載雑中　紫式部「かずならで心に身をはまかせねど身にしたがふはこゝろなりけり

世にしらずまとふべきかなさきにたつなみだもみちをかきくらしつゝ　今案　拾遺別　よみ人しらず「わかるればまづ涙こそさきにたていかておくるゝ袖のぬるらん　後拾遺別　中原頼成「いづちともしらぬ別のたびなれどいかで涙のさきにたつらん

涙をもほどなき袖にせきかねていかにわかれもとゞむべき身ぞ　今案　紫式部「なにか此ほどなきそでをぬらすらんかすみの衣なへてきる世に　拾遺別　御めのと少納言「をしむともかたしやわかれ心なるなみたをだにもえやはとゞむる　後拾遺雑一　源雅通朝臣女「わりなしや心にかなふ涙だに身のうきときはとまりやはする　孟涙をさへせきかぬれば別をいかにとゞめむとなり　抄我数ならで程なき袖ゆゑ別をもえとゞめぬとなりしたひたる歌なり　愚按孟津はよし抄の説はよくあたらず

汀の氷をふみならす馬のあしおとさへ心ぼそく物がなし　今案下に至りて匂宮の御歌にもこの詞あり続古今集冬　寂蓮法師「かち人のみきはの氷ふみならしわたれどぬれぬしかの大わた

宮もまめだち給ひて　今案　遊仙窟云五嫂曰娘子把レ酒ヲ莫レ嗔アナタワ

わが名もらすなよとくちかため給ふを　今案くちをかため給ふなればかためのかもじ清てよむべしくちがためし給ふなどあらは口堅を體としてつゞく る故に濁るべきなり

峯の雪みきはの氷ふみわけて君にぞまどふ道はまどはず　今案新古今集雑一　土御門内大臣「朝ごとに汀の氷ふみわけて君につかふる道ぞかしこき　この歌を取用られたり

おやのかふこは所せき物にこそ　今案或説中宮の御いさめを所せきとはいふなりとあるは誤なり引歌の心をもてみるべし但本歌は親のまもる娘をよそへたり今は下句のこゝろを用たり

かきくらしはれせぬみねのあま雲にうきて世をふる身をもなさはや　細あま雲は雨雲天雲両説ともに用之　今案天雲とも雨雲ともよむ事勿論なりされど此歌は上の詞に雨ふりやまで日ころおほくなる頃といひ匂宮薫大将の歌も同じ心にて又かきくらし

ともうきて世をふるともそへたれば雨雲とよめるなり

まじりなはと聞えたるを　花「しら雲のはれぬくもゐにまじりなばいづれかそれと君はたづねん　今案此引歌何より引かせ給へるにかいまだしらず遠き旅などに行人のよめるか又死して煙とのほらんの時の事をいへる歟　河海に引かれたる歌は新勅撰戀四にあり

歌やへたつ山にこもるとも　河白雲のやへたつ山にこもるともおもひ立なばたつねざらめや　今案此引歌何より出たるにやいまだしらず

いざとけなり　花さと〳〵しき也用心するなり喚物のさときこゝろ也　今案いは寢なりねごきをいぎたなしといふしは〳〵目のさめていきたなからぬをいのさときと云也俗にめざとき人よざとき人などもいへり花鳥喚花ともにいの字を釋せられぬ事如何

里びたる犬どもの　今案　定家卿「さとひたる犬の聲にぞしられける竹より奥の人のすみかを

あふりといふ物　今案和名抄云唐韻云韉（音薦）障泥（和名阿不利）韉ノ飾也西京雑記云玫瑰鞍ヘ以二緑地錦一為二蔽泥一　今案即障泥也　後稍以二熊羆皮一為レ之

このものとがめする犬のこゑたえず　今案上に黒びたる犬どもの出來てのゝしるもいとおそろしとあればそれをうけてこのものとがめする犬と云り萬葉第十三に長歌の末にいめたてゝしゝ待がごとゝこしきてわかまつ君をいぬなほえこそ枕草子ににくきものゝ下にしのひてくる人みしりてほゆる犬はうちもころしつべし

いづくにか身をはすてんと白くものかゝらぬやまもなく〳〵ぞゆく　河拾遺「いづこともも所さだめぬ白雲のかゝらぬ山はあらじとぞ思ふ　今案匂宮の御歌引かれたる拾遺の歌を取用し意はことなり本歌はあだなる心はかけぬ人あらじといふ心を雲にたとへたり集に此歌に次て「白雲のかゝるそらごとする人を山のふもとによせてけるかな　これにても心得べし今の匂宮の歌はおもひの切なる餘りにいづくの山にか世を捨んとかの山この山心にかゝらぬ處なしといふ事を雲によせてかゝらぬ山もと緑の言をつゞけたりなく〳〵もゆくに無をかねたり

中務集に「いつとてもあはれとみるをねぬるよのつきはおほろけなく〳〵ぞみし　或注に身をなきにもなさんと思ふ人さへいづくとも思ひさだめぬよしなり思ひに忘却したるさまなるべしといへり叶ふべしとはおぼえす齋宮女御集「わひぬれば身を浮雲になしつゝも思はぬ山にかゝらずも哉

なげきわび身をはすつともなきかけにうき名なかさんことをこそ思へ　今案うき名ながさんは入水せんとおもへはよせ有

めのとあやしく心はしりのするかなゆめもさわかしくとのたまはせたりつ　今案最勝王經捨身品に薩搖王子の餓虎に身を投たまふべき前相にかゝることおほし

蜻蛉

人のいみしくをしむ人をばたいしやくもかくしたふなり　今案雪山童子四句偈を聞をはりて鬼神の爲に身を投給ひしかば鬼神身を帝釋と變して捧けて助け奉る童子もし死し給はゞ人のをしむべき事決定してかねてしらるればそこを心得ていみしくをしむ人とはいへるにや

またかゝる事此世にあらじとなん見奉る　今案またかゝることにてたもし濁るへきにや

もの〳〵しきすぢに思ひ給へばこそあらめ　今案おもひ給へはこそとは思はゞこそあらめの心也

宿にかよはゞとひとりごち給　細「なき人の宿にかよはゞ郭公かけてねにのみ啼とつげなん　今案此引歌に付て定家卿云なき人の宿とは我身は居たれどうせにし人の後家なればなき人の宿にかよひありかばといひてしでの山の鳥なれば彼山に行て音にのみなくと告よとよみたるとならひて侍るなりとあれど三條宮にて薫のこれを誦し給ふにても知るべしなき人の宿とはかなたをさしていへることとあきらかなり

おもひ出るもいとほし　細　右近などが心のうちに匂の御出の夜いさとかりしとのゐ人なとの事を思ひ出たる也　哢花　同　孟　御使の心に此うき舟の御在世に匂の御出の夜のやうにはなきよとおもふ也　今案孟津によるべし下に右近あひていみしうなくとありあはぬさきなれば使とものの心なる事見えたり

ましていといみじうさるべきにてともかくもあらま
じよりもいかばかりものをおもひたちて　今案諸本如此
これを見つけてせきとめたらましかばとわきかへる
心ちしたまへどかひなし　今案せきとめわきかへる
皆水の縁に云り
御文をやきうしなひ　今案匂宮御詞侍従詞両説なり
御文をと云る侍従が詞なり
あはれしる心は人におくれねど數ならぬ身にきえつゝ
つぞふる　今案ひとにおくれぬとはひとにおとらぬ
心也それを人をなくなして跡にのこる身にあらね
どゝいふ心にかけたるは薫は浮舟におくれ給へる
にかけたり數ならぬ身にきえつゝぞふるとは數な
らぬ身ゆゑさ過して今まで御弔も申さで心のう
ちは人におくれ給へる人のおもひまどひておはす
ばかり我も思ひきえつゝ日を經侍るとなり
すきたるものきたるはばうそくにおほゆる　孟傍側
なりもの〳〵しからぬすがたをいふなり　今案放
俗なるべし放逸にして卑俗ならんといふにや
わがこゝろみだりし橋姫かな　孟たゞうちがうらめ
しきとなり　抄大君をして宇治の橋姫といへり
今案上にむかしの人ものし給はましかばとあり大
君をさしていへること明らかなり
うれしきせもや　細「いのりつゝたのみぞわたるはつ
せ川うれしき世にもながれあふやと　今案此引歌
詞はよく叶へれど新古今に「かゝる」も有ける物
を宇治河のたえぬばかりもなげきつる哉　此かゝ
るせといへるすなはちかゝるうれしきせといふ心
にて所もかなへり
猶今みん初花のさまし給へるに　今案細流には匂宮
の御さまと云り上を承てみるにさま〴〵のあそび
などをにほふ宮のもてはやして朝夕目なれてもな
ほはつ花のことくめづらしく見給ふといふにや又
上にわかき人々參りつとひたるころなりとあれば
いろ〳〵しき本性ゆゑめなれてさまでなき人をも
初花の樣に見給ふといへるにや次にかをるの本性
をいへるに見合すべし今見ん初花とは催馬樂に「け
さ咲たるさゆり花といへるを取歟又六帖に「待人
の今見えたらば初花をおし折とれる心地社せめ
大將の君はいとさしもいりたちなどし給はぬほどに

て　孟薫は内々へ御入あることはなければ別心なると也　今案此いりたつはうき舟又は女一宮の事をおぼしてさやうのあそびなとの心にいらぬをりといふにや

そもむつまじく思ひ聞ゆべき故なき人　今案一わきもこがきてはよりぬる眞木柱そもむつまじきゆかりと思へば　さきに引れたり何に出たる歌ぞ

花といへばなこそあだなれ女郎花なべての露にみたれやはする　今案をみなへしをうけてなべての露にといへり

いとけざやかなるおきな事にく丶侍りとて　今案細孟の御說ともにかなはずこれはさきの薫の歌をおさへておきななどのいはんやうなりとておきなごとにくしとたはふれていふ也すなはち下の歌その心なりつきのことば又おなし

なかについてはらわたをたふる秋の天といふことを　今案　樂天が詩斷腸を常にはらわたをたつばとよめりこ丶にはらわたをたふるといへるおほづかなしはらわたをたゆるはといへるを書あやまてるかたふるは勘の字の假字なり斷絕の字の假字はたゆるなりたふと讀事なし

手　習

いかきさま　孟威攪　河辛　今案いかめしといへるにて嗔の字なるべし威攪は殊に暗推とみえたり威の字の音は爲にて伊にあらぬ上に音と訓とを合せて威攪とはいふべからず

たい〳〵しきわざかな　孟退々也　今案此物語の中に此詞おほし退々の字心得がたしいづこに有をみるにも大事といふにかよひて聞ゆれは大々(ダイ〳〵)しきにて濁りてよむべきにや

けしやくことせさせたまふ　今案芥子(ケシ)燒(ヤク)事とは護摩なり魔怨等を降伏するにことに白芥子を用ることなり蜻蛉日記にもけしやきのやうなる事といへる詞あり又此物語上の卷にけしの香にしみてといへるもおなし

つきしみりやうじたるもの丶　今案著染(ツキシミ)領したるもの丶なり

あがほとけ京にいでたまは丶こそはあらめこ丶まではあへなんなど　今案竹取物語にかくや姬のある處にいたりて見ればなほ物おもへるけしきなりこれ

を見てあが佛なに事思ひ給ふぞおほすらん事何事ぞといへは云々仲文家集云「あが佛かほくらべせよこくらくのおもておこしを我のみぞせん　あへなんは敢なんにて來り給ふに據なんくるしからじといふ意なり

つきたる人物はかなき氣にや　細 浮舟のよわきさま也　孟 よりましのよわくて物をいはすとなり　今案兩説のうちよりましのいはぬがあたれりはじめよりくちばしりたるはみなよりましなればなりさてさうじみのこゝちはさはやぎてといへりしるべし

終にかくほいのごともせずなりぬるとおもひつゝ　今案ほいのごとは如にても事にても叶へり其中に如なるべきにや

世の中になほ有けりといかで人にしられじ　今案六帖に「いかでなほ有としられし高砂の松のおもはんこともはづかし

彼夕霧の　今案これよりいと心ほそきにといふまで草子の地にて上の思ひ出られてといふよりつれつれとおこなひをのみしつゝとつゞくべし

身をなげし涙の川のはやきせをしがらみかけて誰かとゞめし　今案貫之家集に「なみた川おつるみなかみはやければしからみかけてせく袖ぞなき　萬葉二「あすか川しがらみわたしせかませばながるゝ水ものどにかあらまし

かきほにうゑたるなでしこ　今案古今「あな戀し今も見てしが山がつのかきほにおふるやまとなでしこ

君にもはすのみなどやうのものいだしたれば　今案はすのみは菓子なり和名抄第十七菓類云蓮子爾雅云荷笑菓其實蓮 音連蓮子和名波知須乃美

小鷹狩のついでに　河 小鷹狩（カリ） 萬葉新點（ハット）　今案河海に引かれたる萬葉第十九の歌には始鷹狩（ハットカリ）と書り小鷹狩とはかゝず但始鷹狩すなはち小鷹狩也

かぎりなくうき身なりけりとみはてゝし　今案和泉式部歌に 諸本如此

なにかをちなる里もこゝろみ侍りぬれば　今案 諸本如此

荻の葉におとらぬほど〳〵に音づれわたる　今案「秋風の吹につけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし

いときせい大とこになりて　今案萬葉第九に碁師歌二首云々同第四卷に碁檀越といふもの有此碁師歟碁師も碁聖と同じ心か

ひとつ橋あやうがりて　今案淮南子云若レ行二獨梁一不下爲レ無レ人不上レ兢二其容一　六帖第三橋の歌に「津の國のなにはの浦のひとつはし君をしおもへばあからめもせず

くはしくもそのほどのことをもいひさしつ　今案此くはしくもの詞に末かなはず字などの落たるにや

所のさがにや　孟惡　今案神代紀上に神性と書きてかんさがとよめり然ればさがとは人の上にてはひとなり生れつきともいふに同じこれに准らへて惡は日本紀にさがなしとよめり別の義なり

紀　不良同上　また休祥同上　かゝれば此さがふこゝろなればさがなしとは惡を不善じ意なり

狹衣四はかなしや夢のわたりの浮はしをたのむこゝろもたえもはてぬに

今案兼盛歌に「みちのくのあにおにこもれりときくはまこ作者の歌に鬪はまことかとよめる歌おほし　歌にてはにくき詞なり

なまわかんどほり　孟生王家無等倫　日本紀　王之子孫也　今案わかむとほりの詞末摘花の卷よりこなたみつよつみえたりわかは王家むは音便とほりは流通などつゞく詞を思へば王家流といふなるべし

小野にはいとふかくしけりたる青葉の山にむかひて

今案青葉なる山を青葉の山と云り紅葉する山を紅葉の山といひ卯花のおほかる山を卯花山といへる類なり　萬葉第七旋頭歌「垣ごしに犬よひこしてとかりする君青山の葉しげき山部に馬やすめよ君　この青山の葉しげきといへる青葉の山といはねどこゝの詞これにてかける歟　古事記中云本牟智和氣御子到二於出雲一拜二訖大神一還上之時肥河之中作二黑樔橋一仕二奉假宮一而坐爾出雲國造之祖名岐比佐都美餝二青葉山一而立二其河下一將レ獻二大御食一之時其御子詔言是於二河下一如二青葉山一者見レ山非レ山若坐二出雲之石垧之曾宮一葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎問賜也これは假山か萬葉第八に　三原王「秋の露はうつしなりけり水鳥の青羽の山の色つくみれは　これは青羽の山を水鳥のと

つゝくえ心をあらはさんとて青羽と書けるか韓衣裁田県十緒見名瀧山などの書やうの類か咲花に若狭近江に青羽山ありと云り若は其名所をよめるか新古今賀部によれば近江也但彼歌作者によれば丹波か考ふべし

ひきほしたてまつれたりつる　細　海藻なるべし花うつぼにひ色のをしきよつしてひきほしくだ物などゝいへり　今案[illegible]松にてすることゝ見えたり蜻蛉日記にみるのひまほしのみじかくちぎりたるをゆひ集めて云々赤染衛門家集に御いみにこもりたるそうどものれうにひきほしたてまつれりしに「ひきほしてたもとかわくとおもへども涙ぞまさるみるめたえては

しなやかなるわらは　河　差是白氏文集　今案文集は覺えねど差是の字おぼつかなし長袖嫋娜と文選にみえたり秋興賦に影の字をしなぶとよみ垂文選　璀璨上同　嵬々日本紀　いづれも心に通ふべけれど垂の字を除きては今のしなふには叶ふべからず　萬葉第十「いさなみに今も見てしか秋はぎのしなひにあらんいもがすがたを　同二十「立しなぶ君がすがたをわすれずばよのかぎりにやこひわたりなん

ことごとにはみづからさふらひて申侍らん　細　毎事は參りて申べくとなり　今案ことごとは古今に「梅の花ふりおける雪にまがひなばたれかことごと分けてをらまし　此ことごとに同じかるべし悉の字ことごとくといふ略にてつぶさなる意なり

のりのしと尋ぬる道をしるべにておもはぬやまにふみまどふかな　今案しるべは導者日本紀　指南萬葉菅家　おもはぬやまは後撰に小貳につかはしける　藤原朝忠朝臣「ときしもあれ花の盛につらければおもはぬ山に入やしなまし　六帖二「紅葉見に君におくれてひねもすに思はぬ山をおもひつるかな　齋宮女御集元眞集重之集實方家集にもおもはぬ山とよめり

右源註拾遺七卷一覽湖月抄之次牽爾註愚意以備他日校考也後加大意一卷共八卷全

元祿九年七月十九日　密乘沙門契沖

同十一年正月五日一校畢

源氏外傳

或婦人云古より男方の敎を書る樣々の書の中には女方のまねふへき事も有へけれと文學なき者は讀解かたく侍れは昔より書をける假名の物語をのみ見侍りて聊心を得んより外の事侍らす其中にもはか〴〵しき敎となるへき物も見え侍らす源氏物語は色好の事のみを作て書侍る物なれ共さしも賢き女の書置る物なれは書さまのやさしき故やらん又は同し女さまの心のかよふにや萬の事見るに心得よく侍る事多く侍りて左樣ならん物にても自然愚なる女の敎とは成へき事にや侍らん　云源氏物語は表には好色のことを書けとも實は好色の事に非す其故に源氏物語を好み見る人にも正しきに過たる人有此物語を書たる意趣は萬の事世の末に成行は上代の美風衰へて俗に流ん事を歎き思ふといへとも其あらはに正しき書は人忌て近つけす見る人すくなけれは世にあまねからす敎を書たる事は多けれ共詞すくみて人厭ふ心あれは書置とも其詮なき事を思はかりて强て敎かましき筆法をあらはさす只好色の戲となして其中に古への上臈の美風心もちひをくはしく記し殘せる者也それをもとむるの心なく一向の作り物語としてよくいへり能書りなと云て尋常の口に任かせてかきたる物語の樣におもへるは淺見の人の和漢の書にくはしからさる故也尤莊周か寓言に類して彼を是と比し昔の人の上を今の人の事の樣に云ひ唐土の事を和國の事となして書たる事はあれとも其實は皆證跡ある事共也故に古人も實事なる事は司馬遷か史記の筆法也と云り近代の人の事を隱さん爲に源氏の君と云好色人の名を假に立て作物語と云なし古今和漢の故事又は其世の事まて取集ておふせかきたる成へし紫式部か父爲時は博學達才の人にて國史を書つがむとて下書し置けを式部取て此物語に書なしたるとも云りされは一條院も此物語を御覽じて日本紀をこそ能く見たる者なれと仰られしとそさて此物語を見んには好色淫亂の事を心とせす作者の奧意に心を付て書中の故事を知へし是をしらずして好み見る人は損多くて益少なし夫日本王道の長久成事は禮樂文章を失はすして俗に落さるをもて也剛强に過たる物はなかゝらす寛柔なる者は久し齒は剛なれ共早くおち舌は柔にして終を

保つかことくなる事は都ての物理也武家は强梁の威をもて一旦天下の權を執るといへ共齒の落か如くにして久しからす王者は柔順に居て位を失ひ給はす然共柔にして德なきは人の敬うすし人の耻て敬する所なけれは存すといへ共無かことく終には絕るに近し絕たるを繼へくして古の音樂文章を見るへき物は唯此物語にのみ殘れり故に此物語に於て第一に心をつくへきは上代の美風也禮の正しくしてゆるやかに樂の和して優なる體男女共に上﨟しく常に雅樂を翫ていやしからぬ心用ひ也次には書中人情を云る事詳也人情をしらされは五倫の和を失ふ事多し是に戾りては國治らす家とゝのほらす此故に毛詩にも淫風をのこせるは善惡共に人情に達せんか爲也國民皆君子たらんには政刑も其用なし唯凡人を敎ん爲の政道なれは人情時變をしらては成かたしさるにより此物語にも種々の事に寄て人情をつくししらしめ且時勢の移り行さまを能く記せり歌を始め詞の末まても夫々の人の氣方を繪かき出すか如く書あらはせり是又此物語に於て人情を得たる所尤妙也然共歌に於ては其詞幽玄にして其さかひに至らすしては知かたし其上歌をよむ事昔の人は今の人の文を書かことく其心の思ふ所をすくにいひ述しを人の心言葉次第に俗に近くなりゆき歌と二つに成て歌道といふもの出きてむつかしくなりぬかくなりもて行けは古人の詞の風流もゆく／＼は知かたく愈俗に流れ行へきなれは此書中に於て文章の妙なるとふるき詞のきゝしりかたき所を撰て心を付へしされは古人も詞に付て不審をひらくには源氏物語にすきたるはなかるべしともいへり都て此物語は風化を本として書り中にも音樂の道を委しく記せり絲竹の遊ひは君子の業也故に管絃の遊をしらされは上﨟の風俗絕て凡情になかるゝ物なりいかにとなれは人の心は生物なれは動かすといふ事なし樂は遊の正しく美なるもの也故に此正しき道のこもれる遊による時はをのつから人から上らふしく風俗けたかく美しく成もの也然とも此道にうとき人は面白からす少其心をうれは又なく淡くおもしろきもの也淡くしてあく事なきはいたれるわさ也古語にも君子の交りはあはくして水のことしと云り音樂は君子のたのしむ心のゆく衛なれは少心あらん人のしらて叶はぬわさ也此故にむかしはつくしのはて陸

奥の末迄も少し心有人は男女となく樂をもて遊ひたりまして公家なとには不知人もなかりしを近き世と成て上臈の遊も俗に流れてあらぬ業をし音樂の事などは勤知る人もまれに成行夫々に家を立てやう〳〵勤る計に成たる也家々の業と成ては君子の遊も伎藝におちて役者の樣に覺てより事のあさく成行互に我家を立る我心出來て却て小人の心の便と成事有其道に執心の人あれとも秘事大事とて我家の外には出さねは後には知人稀に成也知る人稀になる事は終には絶るに至物也君子の道は普く人に知らしめん爲なれは秘事大事とする事はひとつもなき也ひとに云聞せ書殘して普く知しめん事を願共知人稀に成行をのみ君子のなけきとする所也然に秘事大事を立るは道を重んする方に似れ共多くは小人の我滿我立の利術勝心による也音樂の道も此物語に書止すは今の世と成ては知人なかるへし其道にふかゝらす其傳とする所の意味には通し難かるへし都ての道其ふりたえぬることはおこしかたきもの也故にこの物語には隨分そのふりをかき殘せりふりは則其風體也此物語にも當時家々の秘事口傳とする事は書面には悉く書き顯はし難きにより大略を書止て後の君子を待もの也道はすへて君子に出れは後世にをいても君子たる人は少しの端をして其道の意味に通しすたれたるをも起すへき者也且風を移し俗を易るは樂よりよきはなしといへり此物語に於て音樂の道取分心を止て書置るは此故也風化の道をつくして人自鼓舞を得これ此物語の政道に便有所也都て上古の風は純素にして厚くけたかし末の世のならはしは驕奢にしてうすくいやし禮樂の敎も代々に衰へ風俗の優美なるも時に従ひて遷り行き九重の遺風も俗になかれ公家の風俗も終に絶果なん事を悲て彼魚を取て筌を忘るといへるか如く此物語は自然と人の好る好色を釣糸にして普く世の人に弄はしめ明君の興給はん時迄殘しとゝめんの志也されは此物語なくはいかてか上世の王者の遺風を仰き知んや是故に順德院も此物語をは日本の至寶と記し置たまへり然るに其至寶たる處は都て禮樂の道に達せさる中人已下の人は其深意をに知へからす婦人云うけ給にて其心を得侍り作物語と斷なから見るに聊もさやうに思はれ侍らぬは有事を皆さま〳〵に取なしてかけるゆゑ成へし

源氏外傳春之巻

桐壺

さて桐壺の巻の中に更衣の事によりてみかとの寵愛にすきさせ給ふをもろこしのためしもひき出つへしといへるは玄宗の故事と聞へ侍りさやうの人たにもいろにみだれ給ふ事はいかなる事にて侍るや其外巻々の内心得難き侍る所々を記し侍り其ことわりを承りたしや　云唐の玄宗もよき生付の人にて初は太平の天子といひ孝經の序までをつくり堯舜の道をも興さんと思ひしほとの人なりしかとも楊貴妃か色に本心を失て世のさわきも出來たり桐壺の帝もよき御人からなれともかく甚しくいろを重んし給はゝ後にはいかやうなる事か出來なん玄宗楊貴妃かためしもよそならしなといへる成へししかれとも寵愛の甚しき所謂少似て其外は大きにことなり玄宗に初威つよかりし故に宮中の后夫人をはしめとして心にはそねみても外に顯はれてくるしめなとする事はせさりし也楊貴妃に書おされたり貴妃も才智明慧善巧便佞先意希旨といへは甚しく利發なりしと見へたりしからは姿にかゝり美人にて器體のゆたかに上らふらしき德はあるまし大かた生附よくて品なき女は心けはしき
イナシ一衍字ナルヘシ
もの也けはしき上に威のある者なれは權をもとり人をも推つくる物也然れとも不德にして心根くらく分別なき故に叔父兄弟をすゝめおけて富貴を極めしめ兄の國忠權を執て天下に憎まる國忠故に玄宗をうとみ楊貴妃をにくみて亂出來たり貴妃終にくるしみにしつみて凶死せり桐壺の更衣は上らふしく心うつくしき人なり兄弟一家のものをすゝめ出したる事もなく何のきにりもあるへき人ならす誠の賢女聖女といふは世間の才覺はつたなきやうにて女しく上らふしきもの也更衣は天然と賢女の風ありし人也さて更衣は父なくてうしろみは母君にて宮仕をもし給へはことある時はより所もなく心細きこと尤なり楊貴妃は其身の富貴は云に及はす兄弟姉妹まて富貴を極て甚しく美をつくし此更衣とは各別也然に楊貴妃のためしもといへるは人情といふもの時執の威勢ある人もとより備る人の上にはあしき事ありてもいはすふとさし出たるやうなる人をはあしからてもこと〳〵しくいふ物也

まうけの君とは春宮をいへるにや春宮と云事は如何先天の時乾坤南北に位し震長男子にて北東に立て春を含めり後天の時乾坤西北西南の無用の地に退て震正東に位して天下の春をつかさとれり難波津に咲や此花冬こもり今は春へとさくや此花と云るも此心成へし夏は春のことを長し秋は春の事ををさめ冬に春の事を蔵したる道理也春をつかさとるは天下を知の義也此故に御位をつきたまふへき皇子を東宮と申す也震は乾坤の長子にて北東に居冬こもりなかに春の初をふくめり終に正東に出て天下をしる義也

おぼへいとやむことなくとはいかゝ　俗に武士の實德有て其聞へあるをおほへの者といへりさやうの心にて此更衣も女德女容備りてやむ事なききこへあるをいふ成へし

御遊の折々何事にもゆへあることのふし〳〵には上らふしき人は上らふのなすへき事には器用なるもの也其所作からまてもよきもの也此故に御遊なとのをり〳〵は必絃の一方にめされしなるへしみめかたちよくても琵琶箏にかゝりて所作からあしく常の形までもみをとりする人ありみめかたちはよからねとも弦にかゝりて上座にをかれす日頃のよきといふ人にはたちまさりてみゆる人有也

坊にもようせすは　夫婦男女は子孫相續の爲なれ一の子有て後は妹の威德もまし人の思ひ入もちかふもの也夫につれて御もてなしもおもかるへし右大臣の息女女御腹の一のみこは東宮たるべき事疑なけれともあしくせは此更衣腹のみこにと帝は思すへしと女御の疑給ふ也一のみこはやむ事なくおもおもしく世とゝものかしつきにて源氏の君は帝御一分の御愛子におぼしたり世俗にも嫡子をは大切に弟は愛ふかきゝ也いとけなきは他人さへ當分の愛あるもの成故に兄よりも弟を愛するやうにいふ物也帝の御なくさみにちかく愛し給ひて贔負すへきやうに思したる體にはあらす然れとも俗情といふものゝねたみていろ〳〵の事をさたする物也下々ももとより備はりし人の贔負をして位をとりたる人の愛をそねみあしさまにいふものなればあしくせは御位も此更衣腹のみこにそゆつり給はんなとつふやくを女御も自らきゝつたへたまふへし若さ

やうにも成なは崩御の後は世のさわきにもなるべしと也人情時勢如斯なる事を知るへし聖代は天子は妻十二人諸侯は九人と定め給ふ事は御子多からん爲也人の子は多は母方に似る者也其中母のよきに似又母方の先祖のよき人なとに似て多くの御子達の中に賢人生れ給へはえらひて太子に立御位につけ奉らん爲也此主意道理とも後世すたれて勢次第にて德のえらひなければ世も末に成行國も亂るゝ也然共大によき事の道理至極成事とても君の德に不相應なる事を取行へは却て亂逆のはしとなるもの也大方の悪事をなしたるにおとれりといへり

うちはしわた殿こゝかしこの　かよふ道に不淨をちらし置て衣のすそを汚しさきへも跡へも歸さぬ樣に戸をさしこめなとするやうなるはらあしき事は賤の男賤の女もよのつねにてはしかたき事也嫉妬の凡情ふかく火氣盛にして心くらくなり氣動てはあるまじき邪思も出來る者也昔大臣公卿の息女なれはかゝるいやしき事をはしり給ふまじき事なれ共ねたくにくしと思ふ者の身によき事あれは機嫌あしくあしき事あれは機嫌よき物なれは其主々の心にうけて下々の者どものしたるわさなるへし今大身の人々の民をくるしめよと云に下知はなけれとも主人の利を欲する心に受て夫に得たる小人ともさま〳〵の非道をする事也上には知ぬ事と云なから上の好む所にしたかふもの也帝も世務諸道の御つとめをこたり給はすは御心のいとまもあるましけれはまうのほり給ふこと禮義のまゝ也とも待遠にもおほされし御志たに深くおはしまさは待遠也とも更衣の恨もあらし然らは人の譏も有へからす牽牛織女は秋の一夜ははかなきやうなれとも世々經てつきぬ契りこそあらまほしけれと何事も生付て命數命分といふもの有甚しけれはとりこして久しからぬ物也此更衣も帝は過てかたはらに人なきやうにもてなし給へは更衣の命短くなりて思ひの外なる御なけきあり更衣にも色々のうきめをも見せ給へりたゝ帝の御身の慾の爲にのみ愛し給ひて畢竟更衣の御身をいたはりおほさぬ故也うしろみなき人なれは事にふれ別にうち〳〵の御めくみなとあるは別段の事也左樣の所には御心もつかす或ははゞかりなとし給ひてやもめの母君にまかせ

置給ふはかひなき事也心なき人の子を愛するも如此我なくさみに愛して子のくるしむ事をしらさる者多しわすらるゝ身をは思はすといへる情はあつき古人の心也帝も此心おはしまさはさま〳〵の人のひか言をも引動し給はゝ更衣もくるしみ給ふへからす

心こと成ものゝ音をかきならし　上らふの遊には糸竹にしくはなし爪音撥あたり上手にても位なき有樂にはさのみ功なくても其ひゝきに位ありてゆたかにしめやかなるあり皆心のうつり人からの位也

はかなくきこえ出ることのは　總して嬉しき事にも悲しき事にもはき〳〵と始終のこらぬ樣にことば多かるは下らふのわさ也かりそめにはかなくいひ出るも詞すくなにて優なることばづかひものいひの上らふしきを人よりことなりしといひし成へし

月のおもしろきに夜ふくるまてあそひをそし給ふなる　帝は遠音に糸竹の音の聞たるおもしろしことに月には一入興ある事なれとも御心に愁あれは主上の御心をおもひやりもなく時節不相應なる遊ひをすさましく聞し召なり音樂は上らふの事なれとも時の風情なくかきならしたるはかりは詮なき事也臣妾にいみなき禮義なれは公界むきはゝからすといへとも心ある人はかくはあるましき事也

あさまつりこと　君か國天下に何事かありつらん遠方より告來る吉凶近臣の夜のまの事にあへるを待も有へしと思召せは早朝に出御あり諸臣は奏すへき事の有は云ふに及はすさもなき人も君の仰ことやあらんと未明より出仕する事也いにしへは太政官の人々も早朝より出仕有し也太政官とは左右大臣大中納言參議辨少納言外記史等也此人々むかしは天下の諸事をすへて沙汰せし也後三條院は末代の賢王にて朝まつりことに出御有て諸民のうれへのそみを自きこしめしたるといへり延喜天暦の御時もとより朝まつり事有へき也

今はうちにのみそさふらひ給　うちとは禁中を云ふそれは心を内といふ義也心は一身の主宰也天子は天下のこゝろ也一身の萬事心より出る如く天下の命令皆天子より出れは也又禁中といふ事は不正を禁する義也王道は人道也正道也道術のかわりたる者形體の異なる者なとは召入さる法也僧尼も異形

異道なる故也名籍の事蕃客と同く玄蕃寮のつかさとりと見えたり今も太神宮には入られす宮中には神事の時はいまるゝ也こまうと(高麗人)相人なとは異術の者成ゆへ古風にて宇多の帝の御誡にはゝかり給ふ成へし

さう人　人の形氣を見て吉凶をしるもの也善人には吉の相あり惡人には凶の相あり氣にあらはるゝ也又形に生付相有是は先祖に善惡也

桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされしためし

人情といふ物いける程は本よりの后又は女御なとおはすれは其最負をいひて時めく人をねたむ者也たゝ人にても本妻のひゐきをして妾なとをはあしくいふ者也終ににくみ仰て其人死して後はあはれふ心出來て死したる人のよき事を擧本妻の不仁なるあしき事をいひたつる者也はしめは桐壺の更衣をそねみて色々にくみしかともなくなり給ひて後は其罪春宮の女御一人に歸して人々あしくいへはきゝ傳へ給ひてかくのたまふなるへし

なめしとおほさてらうたく(うイ)し給ふ　なめしとは無禮なり源氏のちかつき給ふを無禮とおほさていたはり給へと也これ帝の愛によりて用心おはしまさゝりし故に後のひか言も出來し也男女の情は律義の外也と俗にもいへり此故に聖人禮を作りて淫の源をふせき給へり川に堤をつくが如し禮なくしてへたつれは人の情と有禮と定りて別の道正しきは常となりて邪正をえらはすして無事なり

うへのつねにめしまつはせは　上古には大學寮あり其外源氏藤橘氏の院とて學校あり又國々にも國學ありし也應神天皇は百濟國より儒をめしよせて御子達の師とし給ふこれによりて仁德天皇の御兄弟位を讓り給ひし善行もおはしましき天子の皇子といへとも生なから御位をさつけ給はすたゝ人と同しく學校にくたし給て文武の藝を習はせ奉て人情をもしろしめしたる故に威を下に奪はれ給はす文武を御手に握りて天下をしろしめしたり仲哀天皇應神天皇自ら大將として西戎を征し給ひしにて知へし末の世となりて此政教衰へしかは十二三元服の御子をたに學校にくたし給はて女中とひとしくうへの局すみをさせ給へは好色の心も時に先たちて發し身のならはしやはらかに人情時變うとく成

給ひぬ是王威の下にうつりて天下を失ひ給ひし本意也

御かた〱の人々世の中におしなへたらぬをえりとゝのへすくりて　葵の上の官女種姓も心もかたちもをしなへたらぬよき人々をたつねてさふらはせ給ふ也男の爲にはよきにはあらねと女かたの心得には上臈しく嫉妬なき風俗也葵上の母宮の人から上らふしき故成へし此里をやすみ所として學校にのみ置給はゝ淫風のみたれも有ましきに禁中にては局すみにて御息所の女房ともちらすつかへなとさせ給はあしき敎也王德のをとろへし事尤也或は我娘にまさりたる女房をきらひあしきをあつめぬれは娘の心さま容儀までも次第にあしくなりぬれは夫の心とまらて外へうつり家道そむき淫風になるも有是は娘におもひつかせんとて外へをひ出す也葵の上のことく本妻の方心やすくて外の亂なきやうならはうるはしき風俗成へし惣して此物語かくのことく善惡ともにありのまゝに記してほめすそしらすみる人のこゝろに殘し心をつけたる書樣妙也

もとの木たち山のたゝすまひ面白き所　木はさらにうへたるよりも古木はよき物也山も苔むして物ふりたるは見所あるもの也後世に神社の大木を伐あらし社をけつかうに作りなとするはなさけなき事也人のすみかにさへ古人は心ありて古木をはのこしたりと見へたり

箒木

かくろへことをさへかたりつたへけん　かくれしのひて人はしらしとおもふ事もつゐにかくれなく遲速はあれともかくれはてたるためしは無き事也善惡とも誠のおほふへからさる道理也人のこゝろは形色聲臭共になき物なれはしらるへき樣なし殊にわろき心なとはよくかくして人のしらしと思へとも彼人は此心だてこのかたぎとよくしりて世の人のあまねくとなふる者也此故に君子は我心に恥る也吾心の知る所は天下の人是を知也凡人は心くらき故に外人のみる所はかりをつゝしみて我心の神明を恐さる物也

をのつからかしこまりもせす　誠の友といふは互に尊卑をわすれて誠の道を以て心の友とする者也漢

の光武帝の嚴子陵を友とし給へるか如し子陵も光武の尊位を見す光武も子陵か庶人たる所を忘れ給へり凡人のしらさる道を此道理をしらすして暗にかなふものも有也

人をはおとしめなとかたはらいたき事おほかり　其身長したる所ありてへりくたりゆつれは其善彌大也其上ゆつりくたる心の德は萬善の上也其能にほこれはその能を失ひ其功にほこれはその功をうしなふ大なる損なれ共其道理人情を辨へさるは愚痴の至也

さはいへと猶ことなり　男は才智器量ありてなりののほりぬれとその家の内は思ひの外にもとのいやしき風俗にて妻子なとは夫とのおほえにたくひかたきも多し内外共にとゝのほりてのほる人も有へけれとも夫はまれなる事也又位ひきく時代のおほえなき人の家の内おもひの外によくとゝのほりて妻女のよういたかき人にもおとらす心はつかしきあり是等は内々の質朴なれは外に知かたしこゝには世間の大體を云る也もろこし人も聟をはえらひて婦をえらふ事くはしからす男は見やすく女は見かたき故也といへり好色のゑらひにはあらすよくえらむへき事也子の身心ともに母かたに似る者多けれはつゝしむへき義也

心は心としてことたらす　是は中人の質也よく取たつれは上らふしく也世に落ふるれは心も共にくたり手跡なども世にありし時よりはおとり琵琶箏の爪音も昔のやうにはなき物也器量なき人は常にかくの如し才德器量ある人はさあらす身はくたりおちふれても心はわろひたる事なく浮世の富貴にまきれて事しけかりし時思ふやうにもなし得さる文の道をも學しり糸竹の遊ひもしつかなるいとまに心にいれてなし得れは何事も富貴の時よりは一きわまさりて心恥かしきけはひ多し明石の上是也上の品の人にも猶たくひまれ成へし我ものとせんには本より位たかく生付もてなし共によくそなはりたる人よりはこれこそあらまほしかるへけれ然共かくの如き人は世にまれなれは多きかたにてかくいへり

すへてにきはゝしきによるへき也　此源氏のとかめ尤也富貴の中にのみよき人多きやうにいへるはか

たおちたるなりそれにはよらぬ物也右大臣の女にも弘徽殿の女御のやうなるあり大納言の女にも桐壺の更衣の樣にすくれて上臈しき人あり下の頭の中將の詞は過をかさりたるやうなる歟

うち／＼のもてなしけはひをくれたらんは　富貴の家の子はいともまもあり師もまねきやすし詩歌管絃文の道にもうとからしより近付ものもいやしからねは下らふの事は知ましき也もてなしからにて中品の生付も上品に及へきと思はるゝに無藝文盲にて樣體もおくれたるあるはよく／＼生付惡きか親の家の風俗あしく敎もなきかとうたかはるへし

大かたの世につけてみるにはとかなきも　とかなきは子細なき也何事もよそにて見る時は子細なき人も立いりてみる時はきず多き物也まして一家の骨肉とたのむ人をえらむには我心のことくなる人は有ましき也世の中といふもの何事につけても思ふに叶たる事はなきもの也慾にて思ふやうなる事のあらんやうに願ふは惑也家風のあしきは惡疾あるか親兄弟の人からあしきか其身の不具か人けなき生付か頑愚成か怒氣多きか大かた如斯大なる疵たになくは緣にまかせて定たるかよき也有かたき者なるをあるへき事のやうに思ひてあまりえらひすくれはかへりてあしきに定る事多し諺にも刀えらひする者は後には朴の木をさし馬數寄する者ははて／＼は牛にのると云りよめえらひ人にこへたる者は大かたはとりそこなふ者也又男子の器量すくれたるが一向たくひかたくあしき女もちたるもあり女の生付心樣萬人にすくれて世に有かたけなるが頑愚無器量の夫にしたかひて一生むなしきかことくなるも有男女夫婦の道は人力の及かたき所あり命ありと見えたり

誠のうつはものとなるへきをとりいたさんにはかたかるへし　いにしへより才有かたしといへとも君たる人には眞の德ありて天心に叶へき志たにおはしませば國天下のひろき中には賢者も出來る物と見えたり德不孤必有隣の理也上に德なく學校の政なくてたゝに才德の人をえらひ求てはいつの時いつれの國にも有かたき者也たま／＼有てもあくる事なくあけても用る事なけれはなきに同し

上は下にたすけられ下は上になひきて　國天下の政

は相談にて事ゆくものなれは其中才德不足なる人ありといへともさのみめにたゝす人君たる人は自才智あれともをさめたくはへてさきたてす寛裕虛中にしているゝ事天地の量のことく成時は官々職々のもの己か天質を盡して上をたすくる者なり衆說のまち〳〵なるをえらひて時所の中庸に叶たるを取用給ふは君の德也諸臣の及かたき所うたかはしき事は畢竟君より出へき事は才智をもて上をたすくるといへとも實は上の德になつきしたかふ者也君はたとへは心のことく臣はたとへは手足耳目のことし是を心服といふへしこれに加るに學校の政禮樂の敎を以せは道ある世なるへし

せはき家のうちにあるしとすへき人ひとりを思ひめくらすにたらはてあしかるへき大事ともなんかたかたおほかる　一家のあるしは一人のはからひにまかすれは却て大事なりそれ一門の不和家人の安危はおほくは妻の心の慈不慈にかゝるものなり子孫の盛衰も妻の仁不仁による事多し男子女子の形心さま母に似るものなりよきには似かたくあしきにはよく似るものなれは一大事のかゝれる所也愚痴なるも事ゆかす才發過たるも牝鷄のあしたする禍あり驕れる者はたちぬふわさならすして人の産を破る者也大方女事をよくする女は無用の遊ひを好ます女事を務めぬ女はいやしき遊ひを好者也とりわき女子は母の心術躬行に習ふ物なれは人の家の産業までを破れり家內貧乏なれは夫の軍用公役もとゝのほらすはては其身もことたらはてくるしめり事たらされは貪生す天下の惡の源也又一向に女事にのみかゝり居るも庶人の妻にしてはさも有へし士以上の婦人の文の道絃歌の道をしらさるも野也優なる所なけれは家道せはし一度は張一度は弛すは文武の道なれば正しきことにあそふ事なくてはかなはす

必しも我おもふに叶はねとみそめつる契はかりをすてかた〳〵思ひとまる人は物まめやか也と見え　必我こゝろにかなはねともあはれみをくはへてとかく堪忍しとくるは貞心仁厚なる人也女子といふものは我と嫁を定て來るには非す父母媒のはからい次第に嫁する者なれは罪なししかるを我心にあはすとて離別するは其女一人の恥辱難儀になること

なれは不便なる事也不仁不義の凶德たになくは敎みちひきてよかるへし慾心にて我一人よからぬ妻をもちたるやうにおもひよきにかへんと思へ共よからぬは大方よの中の常也或は妻の父兄一門の前を思ひ或は君命をはゝかり人口をはかりて一日一日と過る內に子なと出來ぬれは子を不便に思ひなとゝかくして一生過る者多し又氣方のあひたる緣にて外よりみたるやうにはなきもあり男女はかりにもあらす君臣朋友の交も心にあひたるはすくなし智者は世の中はかくのことくなる物としり君子は物を以て物を見て此人は本より如此なる人とおもへはとどむる心もなく或は故者の故たるを失はす或はすちめを思ひ或は禮義を以て心のあふとあはさるとをとはす君たる人よきをとりよからぬをすつる樣なるは不仁也不仁にしては國の親となる事難し直きをあけてまかれるをえりすてさる時は人服しやすし

物まめやかにしつかなる心の　古は女德女容の備りし婦人も稀にはありしかと源氏の時分には滯有難ししはしは色よきに目うつることあれと夫婦となり常に友とすれは心たての眞實による物也かたちよくてもたのもしけなきか慈愛の心なき人は年月そへてうとまるゝもの也かたちはよからねと貞心慈仁の眞實ある人は折ふしに見まさりする事有年月にそへてしたしく成もの也しなも自然に德に附たる品ある者也わかきうちは色を好みあなたこなたとたつさはりたる人も終には色にあきて實に歸する者あり右馬頭なと隨分のすき者なれとこゝに至て得心したる體也河たちは河にてはつるといふやうに好色もあためきて終に得心せぬ人は必あやまちし出す者也

あまりのゆへよし心はへうちそへたらんをはよろこひに思ひすこしをくれたるかたあらんをもあなかちにもとめくはへし　ゆへよしは文章詩歌管絃のたくひ風流の心はへなるへし實體なる人は日用の事に心を入て風流なるわさには心をそめぬ者多し又風流に過たるものは實體常行の事におろか也此德あれは此病ある也うしろやすくは夫の留守に置さしはなちなとしてもたしかなる人から成へしのとけき人の主人にして優にゆたかなる人也心たしかに

にてゆたかなるは家主第一の徳也此本たにあらは他の事はなくても可也禮樂をほとこすへき質成へし實なくて愛敬なるは輕薄にも近くあためきたる難も有へし實ありて後の愛敬はすこしありてもよかるへし妻女のみにもあらす君子の人を用るにも備らん事を求す人のかしらとし上にをくへき人からは才たらすとも眞實の徳ある人をえらむへし其人の下につきてひとつ〳〵えたる事をつとむる時はたとひ實薄き人も上に居る人の實にひかれて才の一品はとぐへき也上に居る人眞實の徳薄く才智を事とする時は其下はいそかはしく僞かちになりて事しけき物也人の才をもつくす事あたはす

にこりにしめる程よりもなまうかひにてはかへりてあしき　佛は無のねといひて何もなき物也釋迦も達磨も衆生も死して何もなくなりたる所は同し佛也人々佛性是也草木國土までも無より生して無に歸すいきなから此理をさとりたるを佛ほさつといふ生身の彌陀如來也されとも佛といふもの有樣に云置たるをうけて見給ふへしと云り凡俗の迷たる心を濁るといへり佛法に輪廻と見たる故に五倫をまぬかれ無に歸したる心を成佛と云也出家して心にはなれぬ所あらはかへりてあしき道に輪廻すへき事と也

心はうつらふかたありとも見初し心さしいとをしくおもはゞさるかたのよすかにはおもひてもありぬへきに　夫の心にうつらふかた有共女のかたより見しらぬ樣にてすくさはさすか夫も見初し契を思ひて十分ならぬ中也ともさるたよりに思ひて有へきを其樣なる事のまぎれにあひては斷絶すへきわさとなり人間世の習ひ夫妻のみにあらすさま〳〵六かしく心くるしき事多きもの也何事も堪忍して言に出さすして世の有さまとわきまへゐれは無事に過るもの也氣みしかく我ともていてゝは事のやぶれし出すためし多し

ゑむずべきことをはみしれるさまにほのめかしうらむへからんふしをもにくからすかすめなさは夫につけて哀もまさりぬへし　ゑむするは怨也少のうらみ也うき事もみしれるさまにほのめかしにくからずかすむるは皆心のたかぶりなく和氣ある故にうらむるもかこつもしたしみとなりてかへりて夫の心

もをさまるもの也詩は可怨といへり君子はうらみすとかめすと云とも詩を學て初て怨る情をしる也此情は凡心火氣のうらみに非す恨むるによりて夫婦も和睦し朋友もしたしむ道理也しうねくうらむる物はにくき心そこにある也愛の深きよりうらむる者は人の迷惑する樣には恨みす心あまり詞たらさるやうなればかつはちかつあはれむへし詩歌ともに其道を得たらん人はひとしかるへき也

すくよかならぬ山のけしき木ふかく世はなれてたくみなしけぢかきまかきの内をはその心しらひをきてなとをなん上手はいと勢ことにわるものはをよはぬ所おほかんめる　すくよからぬは不健也つよからぬ山也はけしからぬ山のすかた也はけしくいはほ峙たる山は書よしはけしからぬ山のすかたはふとはめおとろかされとも見るにあかぬやうなるはかきかたし山のかさなりいくへもたゝみて深山めきてはるかに見ゆるは面白物也とりわき上手のわさなるへし山ふかく水流遠きは天下萬民命の源也山の常にして動かさるは仁者の心に似たり水の流れてとゝこほらすやまさるは智者の心に似たり人性の本然にかよひぬれは人皆山水をたのしめり繪にかきてもとりわき面白し總して物の中を得て常なるものは繪にかきてよし繪にかきて見苦しきものは常を得す長久ならぬもの也といへり女なと書たるも唐の女の繪は幽微ににほやか成所すくなしむかしの日本の女の體はまされり今の女のすかた繪に書たるは唐の女の繪にはおとれり女德女容のくたりたる故也男の體は唐人の體うるはし日本の男も衣冠烏帽子狩衣直垂に太刀なとの繪まてはよし今の袴肩衣の體繪に書たるは見苦し武者繪も日本のむかしのはよし近代の武者繪はよからす武道の衰たる故也

いといたくおもひなけきてはかなくなり侍りしかはたはふれに　右馬頭好色の心にて方々へうつりぬれは我本妻をあはれと思ひやる情うすく己か我をたてんとし人の眞實をはかりしらさるは不仁也女といふものは内にのみ居て夫ひとりをたのみにするものなれは何になぐさみうつらんかたもなしされは思ひつめたる所變じかたき也其情を思はゝあはれに不便なる心生すへしたゝあた〳〵しくすきこ

のめるかたにのみうつりて人を我にしたかはしめんとのみ思ひ女のせんかたなき情をしらさる也總してこよひの物語右馬頭か木枯の女いへるはよきにあらすわかき人々に心をつけんとならはむかし物語にとりなしなとしていふへき事也此本妻の事いへるはあしき樣にはあらねと是もいひ過たりとみゆまして藤式部か師とたのみたる人の娘のうへをいふ事猶しかるへからす然もいひて人の心付にもならさる事なれは無詮事也すへてよしあしにつきて妻の事を人前にいふは見苦しき物也と世俗にも心有人は云事也わかき人の心にはつかさらめと實德なる女は終のよすかと成へき所をいはんとならは我妻の事ならすとも何とそよその事もしはむかしの事にいひなしてもあるへき事也頭中將の夕貌の上玉かつらの事を悲しく思ひての給ふ事はさも有へししかれとも本妻のあしさまなる事の給ひ出たるは中將には似合さるか人におとされてなと誰となく有へき事なりいにしへの人は妻に大罪有てやむ事を得す離去すへきにも小罪をいひ我身の短慮になして出したりと云ふ朋友の大過ありて義絶するも又同し厚の至也頭中將も隨分は上らふしき人なれともかやうのたらさる所あり源氏はつゐに人の噂の給はす天質の美仁厚の生つきの故なるへしこの故にあしきくせは有しかと行末さかえ給へり

三史五經のみち／＼しきかたを　三史は史記前漢書後漢書也五經は易書詩春秋禮記なり三史と同しやうにつらねいふへきにはあらされとも其頭は道德の學なかりし故に博學をもとゝせりこの故に近頃までも學者をはものしりといへり道々しきといふものその跡斗也男さへ物しりかほ成はにくきにまして女の道しりたてなるはあしく誠の道々しき女は自然に此上品の位に叶へし男のをとこしく女の女しきはまことの人なりまことの人則賢人賢女なり聖女といふは吉祥天女のたくひに思へともさにはあらす文王の后妃は聖女にておはしましゝかと道たてなとしてかと／＼しき事もなし心の明なる所少も外に見えすしていかにも女しくすくれたる上らふの風情也男も女も心のくらき所より萬事の惡は出來る也男女とも道德をしらてかなはさる事

也もろこしの婦人は詩を作り日本の婦人は歌をよめり詩歌ともに道理を知らでは何事をかのふへき只まなひやうに善悪ある事也

うたよむと思へる人のやかてうたにまつはれ　歌たてする事を此段に戒めたりすへてよきことにてもそれたてといふ事はよからす忠孝の道も孝たて忠たてなれはあしき也物しりたて武勇たてみな見にくき物也其善にほこれは其善を失ふ理也

いはまほしからん事をもひとつふたつのふしはすくすへくなん　ひとつふたつのふしはいはすして過す也男さへ又人もなけに我知たる事心得かほなることはりを人に先たちていひとりたるはあしく古の人の言のをそかりしは知ことのかたきにあらす行ふことのかたき故也言に行の及はさるははづかしき事なれは知たる事もたやすくいはす云へき人たにあれは人にいはせて我は其跡にしたかひやむことを得されはしひられてかくも有へきかなといへり我是をたつる心なくゆつりてさきたゝぬ心は虚也虚は明也明なれは其言理にあたる己虚明にして言理にあたれは人の争ふ心生せす人より其理をたつるもの也況や婦人は年老てもはつかしけに静なるを徳とす心わたかまりねちけていはさるにはあらす上らふしく物はちする心より大事のことはしらずかほにて人にはからせいはすしてかなはさる事も何となくひとつふたつはすくしてやむ事を得すしていへは人そのいふ事をいとはず誠のあらはれぬ道理なれは其人たしかなる心たにあれは人おのつから主本とする物也男女ともに徳ある人は言すくなく天地不言して四時行はれて萬物生す徳の至なり

かの人々のすてかたくとり出しまめ人にはたのまれぬへけれとおほす物からあまりうるはしき御有さまのとげかたくはつかしけに　葵の上の體おりめたかにてけたかき上らふなれ共たをやかに愛敬つきたる所すくなきなるへししかれとも心身共に上らふなる故にけはしきやうなる事物怨しなとは少しもなき也あた〳〵しくうしろめたき事なけれは本妻としてうちたのまむにはよき人也顔色柔和に形容うちたをやかにて心の貞正なるは聖女なれは左様の人は世に有難し此徳あれは此病ありそなはらん

事を求むへからす
もてはなれてうと／＼しう侍れは世のたとひにてむつれ侍らす　繼母繼子の間也すへて繼子をは愛せよ大切にせよと父兄も教へ他人もいさめ其身も左様におもへる故に却てへたてと成てにくむ心出來る也いかにとなれは實子の中にたに愛の厚薄は有もの也ましてまゝ子は他人なれは無理には愛せられす我を後の母とたのむ子なれはにくむはひが事なり愛せん大切にせんとは思はすして何心なきかよき也愛せんと思へとも此心たてにては愛せられすと思ふよりあるましきにくき心も出來る物也無心なれは其惡しき所見えても心にかゝらす慈母の名までこそなくとも不慈のそしりは有へからす殊に紀伊守うつせみの知き身上よろしきうちは禮義の往來はかりなれは愛惡のかゝる處にあらす大身なる人も我子なと出來ては欲より有ましきひかこと出來る類もあり是は幼少より親の家にて上らふしき敎なきかいたす所也又爰に世の譬にてといへるはたゝ遠々敷といはん爲はかり也空蟬わかく紀伊守おとなれは互に遠慮有へきほとなり

めてたき事も我身からこそと思ひて　萬事にわたる事也いかに過分なる事にても我身不相應なる事はいかゝと也分別思慮に及はす義を見ては進み不義を知てはさくるは上品の人なり善惡是非の得失利害損益を分別して心に好ま敷事にても不義なれはせす心にきらはしき事にても義なれはつとむるは中品の人也此中品の工夫我人の大切成所也勇なくては決斷なりかたしうつせみは此決斷の所明也女といひ尤奇特也天性智勇の靈明なる人也得失利害をもわきまへす情欲のひくかたにとゝむは下品の凡夫也

空蟬

やがてつれなくてやみ給なましかばうからまし強ていとをしき御ふるまひのたへさらんもうたてあるへしよきほとにかくてとちめてんと思ふ物からたゝならすなかめかち也　うつせみの心つよきに思こり給ひてやかてこのまゝつれなくて音信もなくやみ給なんはうつせみの爲には本望なから又かなしくも有へししかれはとて心よはき體をみせてたえす音信あらんは迷惑也よきほとにつれなくてはてんと

思ひとぢむる也情に發するは民の性也禮義にとゝまるは先王の澤也との心にてたゝならすなかめかちなるは男女の情に發する所也然ともしひておもひおこしてつれなきは禮義にとゝまる也尤殊勝也いとつらうもうれたくもおほゆるにしゐておもひかへせと心にしもしたかはす　好色を心としてそのことをやめんと思ひかへす其やむへからす正しき道を心とする者たに時として好色の意念發るは凡情の習也然とも常に正しきによる心あれは其意念は知やすし少しきさしおこる時にはやくやめて他の事に移るへし心に事とする事あるものは邪路におちいらさるものなり

ひるよりにしの御方のわたらせ給ひて碁うたせ給ふ

　爰に碁のことをいひたるは碁なとは精を入る物なれは身上も忘るゝ事也左樣の所を思へき也敎也うつせみの軒端の荻との樣體ともよく〳〵おもふへし道學を事とし六經に遊ふ人の爲には妨なれとも所作なき者は碁に精を入て他のあしき事をわするゝはせめての事也その爲に聖人の作り給ひしなるへし三百六拾目は壹年の數にかたとり石の黑白は陰陽のましはりにかたとり後の人は其理其心をしらすして跡により石のいきしにを知のみ也其理を得ても德をしれる人の爲には無用の事也

かほなとはさしむかひたらん人なとにもわさとみゆましうもてなしたり　うつせみの用意ふかき體也物しつかに深く幽なるは容體の第一なりされは關雎の詩に聖女の德を稱して窈窕と云り窈窕は幽閑の心也かくうちとけたる家の中にてしかも碁なとには心をとられぬへき折ふし其用意失はすは奇特也

心ちそ猶しつかなるけをそへはやと　ふと見たる所も一かとあるよき生付の人なれ共女しくしつかなる氣象なし世に大かたよき生付の人は多けれとも用意しりたる人まれなれはよき生付もあさまになりてをしあはせてあしくみゆるもの也

いよのゆけたもたと〳〵しかるましうみゆすこしゝなをくれたり　軒端の荻はいよの湯桁をもかそへつへし女の物かすかそへすきたるははしたなかるへし上らふしからぬ樣なれは下さまの事よくしりたらんと也下の事をしりたるはよけれとも上らふの心ありて知りたるはめくみの及へき道也下らふの

心にて知たるはたゝにいやしきのみなり
いひたつれはわろきによれるかたちをいといたうもてつけてこのまされる人よりは心あらんとめとゝめつへきさましたり　人は用意心さま也ひとつ〳〵いへはよき所なくあしき方なる生付なれど心さま用意の能ゆゑにおしあはせてよく見ゆる也
ありしなからの我身ならはととりかへす物ならねとうつせみの心中始終この心あり女の縁といふもの有生の初より天命あれは人力の及はぬ所ありよき生付よき心さまの人何の心しらぬ野人の所へ行きてあたらものと見ゆるありあしき生付よからぬこゝろさまの人にてかくても人の女といはるへきかとおもふ人の思ひの外によき所へ行て有付榮る有天命を安してあしきをも厭さるは賢女の道也

夕　顔

いつこかさしてとおもほしなせは玉のうてなも同しと也　「世の中はいつこかさして我ならん行とまるをぞ宿とさたむる　富貴に本心を失ひて奢たる人の目には玉の臺をのみすきてはかなき住居をはあなとる物也道しれる人は玉の臺は好しからす七年夜雨しらすして過し事を惜める詩人も草庵のしつかなる樂を始てさとれり悦つきては悲しみきたる盛なるものは必をとろふ道なくして富貴に奢れる人は哀衰をいたきて死する者也其心物あはれにて何のわきまへなきもの也あしふけるわらやに心をすまし死生の道にもまとはさるひとこそあらまほしき事なれ貴賤上下のましはりわらはへのあそひ事のことし下となりてはかるへきにあらす上となりて驕へからす堯舜禪受三盃酒湯武放伐一期碁といへり聖賢は富貴貧賤に心なしあふ處の境界也この故に天下をたもてともあつからす（さはりなくイ）
こゝのしなの上にも生れ　九品の上生也阿彌陀は無量壽佛とて不生不滅の心を云生も假死も假也只常住なる者は即心佛のあみたなり迷ひの目には生死有さとりの目には生死なしされは悟道の心の位を無量壽佛と名付たり文殊普賢觀音勢至なといふも皆心の位を釋迦と云人の名付たる也九品の淨土極樂世界と云は心の迷をとけぬれは道のたのしみ悟道の心の位によりて道德の樂も淺深ある所を九品に立たり道心の樂は何共云へき樣なけれは暫凡心

の好みしとふへき事を云列ねていたく願はしき有さまをいひきかする也墨繪に書たる松風の音也まよひの心よりみれは十萬億土の外にある樣に遠けれ共悟の心には娑婆世界即寂光の淨土也唯心の淨士己心の彌陀こゝを去事遠からずされは佛とはほとけりと云和訓也迷のほとけたるを云也此故に生れなから佛とならされは死して佛になると云理はなき事也然とも死すれは上に君なく下に臣なし飢寒の事なし何事もなく空々寂々としたる所は生れぬ先の心也是極樂世界ともいふへし又佛といふ共可也

かやうのなみ〳〵まてはおもほしよらさりつるをありし雨夜の品定の後いふかしくもおもほしうなる

大人の耳には細事を入さる事也人は善惡の友によるなれは殊更人の上たる人には善人をえらひてちかつくへき事なり初よりあしき事を聞されはあしき習はつかさる者也心すてに善にさたまり物の道理明らかなる後は世の中のあしきならはしなと聞ても政道の心もちには成て我心のけかれにはならさる者也未心定らさる若き人にはかりそめの物語も大事也いにしへは狂言なと云はかなきたはふれにさへ貴人の下の情しらてあしかるへき事共をいひて心をつけしとなん近頃はそれにも貴人は夢にもしり給はぬ下々のあしきならはしを云てわる心をつくる也貴人に知らすへき細事は上に居て下をなやまし富て奢をしらさる類の政教に便有へき人情時勢の事共也民の難苦をよくしれは禮義の外の榮耀俗樂はなすにしのひす李油か詩に誰知盤中飱粒々皆辛苦

となりの家にあやしきしつの男の聲々目さましてあはれいとさむしやことしにこそなりわひにも好む處すくなく井中のかよひも　此段貴人たる人のよく心をつけてしり給ふへき所なり庶人はやすく寢るいとまたにすくなし晝は終日はたらき夜は夜更るまてのしわさあり曉は鷄の聲に先たちて起きて夜の衾もあたゝかならされはねさめかちにていと寒し夏はふせやの暑に苦しくて冬はねふれすなりわひは業作也たのみなきとは五穀のみのりすくなく年をとるへきたのみなしと成へし他國へ商賣せんも思ひよりなし如何して妻子をもはくゝまんと心細

き也あきなひ耕作ともにいとなみの品はかはれとも貧なるものより合は同し事也千人萬人の辛苦をあつめて貴人へまいらする物也其辛苦より出たる衣食金銀なる事をしらて榮耀の奢にのみ用て世のため民の爲になるへき仕業なきは無下に愚なる事也位高き人の仕合あしく子孫はろひおちふれなとするは皆其天罰なる理をしらず昔民間に孝子あり城下に出て家老の家居の結構なるを見て此結構なるは千萬人の辛苦と涙とのあつまりなることと思へは堪かたしといへり平氏の世さかりの驕は人のにくむ所なれともおちめのあさましくあはれなりしはいたましき事也此故に聖人臨の陽盛においては八月に至の凶を示し給ふ十一月に一陽來復し十二月に二陽長す來年六月遯の陰盛を今年早く戒給ふ樣に世盛の時に身の驕をかへり見民の辛苦をいたみなは子孫の衰有へからす公家はいにしへの禮樂を不失淳素にして風流に道學をよく務め詩歌のわさうとからす位に應して身持け高く人道の法を取へき本となりておはしまさんには代々衰へ給ふ事あるへからす武家は恭儉剛直にして弓馬の道を

不失公家を尊ひ士を教へ民を撫安し天下を警固して凶賊起らす萬民みな其利其樂を得はほろふる事有へからすむかし公家の世盛に驕奢遊樂の風流のみ事とし給ひ民の辛苦を顧み給はさりし天罰にて武人に奪れ給ひてかく衰へたり尊氏の末より信長の頃までの公家の衰へは目も當られぬ事といへり公家一統の時に合せては微なれども近年公家中へ入所の米金は武家內緣のつゝけを合せはいにしへ五畿內五箇國の貢物にはまさるへしといへり昔は日本も軍役民間に籠りたる故に貢物は十一に當れり畿內五ケ國の貢物とても十一なれは甚かろし總して公用は大なる樣にても費多からぬものなり私用の奢は目に見へすして費夥しき者也昔は驕奢ならぬ務あり今は人道の本たる務も見へす世俗のいやしき事のみをもて遊へは實は何の業もなくて民間の辛苦を集め費す也大名緣邊にて內々へ入所の物は猶以諸國の辛苦也此後はいかなる禍にかあふへき其時のあはれを思へはいたましきに身の上には知さる事是非なき事他武家も又是に同しさきのよの契しらるゝ身のうさに行末かねて頼めが

たさよ　前世の宿縁つたなければ今世かくのことしとたゝ身のはかなさを觀して未來は頼む所もなきよし也西戎の佛法にて前世現世後世を立てゝ世界を輪廻と見たれは三世をいふ也中華の儒道にては三世をいはす天地陰陽の理は山澤氣を通して出る泉あり川の流て本の水ならぬ如く萬物皆無中より來り形色は數有て消失ぬ殘る物は何もなし生れかはると云事なし輪廻はなしと知る也

御枕かみにいとおかしけなる女ゐて　御まくら上は枕かみ也女は御息所の念成へし生靈死靈と云物億兆の中に一人有かなきか也昔の人は魂神强く魄精あつく萬事の勉め通りて根深かりし也此故に思ひ入深き物靈と成たるためし唐日本共にありし也近世は人の魂魄薄く成り萬事の務も深からす思ひもあつからさる故に靈になるもの希也昔より云ならはしによりてさも有かとおそるゝ者あれは其心の虚に乘して狐狸なとやうの物なと靈のまねをして人を誑かすと見へたり實の靈はなき事也希に死靈になりたるも數ありて後は消失する物也又子孫を立祭らしめ或はほこらなと立て神のより所をなせは其靈やむ物也夕顔は恐るゝ心深き故に我となくなり給ふ成へし御息所の靈にては有へからす狐は罪なくても弱き者による常の事也

物にけとられぬるなめりとせん方なき心地し給　物の人の氣をうはふに非す自ら恐しとおもふ心より氣を失ふ物也昔或法師夜更て闇に寺へ歸るとて日頭猫またの事を聞て恐しく思ける處に手飼の犬むかへに出てあまへけるを闇の夜なれは犬共しらす猫またと心得てよはひさけひて氣を取失ひしと也草も木も化物に見なし晝は何事もなき物ともを夜は色々に見る事皆心の惑也其迷に依て狐狸も變化する也人は萬物の靈長なれば本心たに不失は何物も害する事はならす昔天狗の人につきたるか云り慈悲なる人程おそろしきはなし其門前も過かたし邪見なる者は我同類なれはたふらかし易しと也我心先邪暗に成て後邪氣も入もの也

なにかしのおとゝをおひやかしけるためし　昔は山澤しけり荒厲の所多かりし故に魑魅魍魎の厲鬼有し也常に形ある者に非す人の心によりて時に形をあらはす事も有厲氣也邪氣は正人にふるゝ事不能

其上幽明人鬼境界別なれは相交る事なし魑魅の栖かに行てはみる事有わさと魑魅に犯されしとて勇だてにて行ば此方の心先邪鬼と成ぬ惡鬼の犯す事尤也魑魅の有所へゆかて叶はさる道理有て行は我に道理あり邪氣犯すへからす鬼神に横道なしといへり若見へても害をなさす昔大剛強の者の惡をなし罪重き者を深山の境の番に置て魑魅魍魎を防しめたる事有厲氣を退て人家を弘くせん爲也惡氣も人に勝事はならさる道理なり故に剛強にて恐ざれは次第に退き消する者也又すぐれて勇有者を惡氣の誑かし試たるためし有貞信公其類なるへし古狸は剛弱共に人をたふらかす者と云り晝は陽明によりて人心明なれは犯しかたし夜の暗きにたよる者也理に明なる者は晝夜の隔なし故に恐るゝ所なし

ものゝ足音ひし〳〵と踏ならしつゝうしろよりくる心地す　晝は心もひろく氣も散し或は世間も騒しく我心もうきたる樣なれは大方の事は聞もいれす夜は世間しつまりぬれは少しの事も聞ゆる也廣き所には間の風も有風の物に當るも怪しく聞なされ鼠鼬なと樣の物のありくも人か何かと思はるゝ物也

忍ふ共世に有事隱なくて　凡人の物を隱すは鳥のかしらを隱して尾のあらはなる樣なり一旦は隱るゝ樣なれ共善惡共に誠は隱れなし

うかひたる心のすさひに人を徒になしつるかことまけぬへきが　うかひたる心のすさひは浮氣のすさひといふ心成へし外慾に引れて本心の放心するは主なき宿のあれたることとし色に奪れ浮氣に成てなす事は皆本心なき也よき友なと有ていさむれはうかひたる心もしづまる者也わかき人のよき師なきは危しあやまちして後夢の少し覺たるやうなるも詮なし

世に類なくゆゝしき御有樣なれは世に長くおはしますましきにやと天の下の人のさわき也　源氏君人からの世にたくひなけれは長命ならしと思へる也惣して清靈なる者は氣うすく體よはし櫻は命短く蘭はきへ易し名もなき草は引すてゝもかれ難き如く聰明なる人には短命多く愚不肖なる惡人には長命多し氣濁り質しふときは强き物也靈質にして人道をしらされは色に移者有義經義よ杯也源氏の疵も好色にて生質は仁慈聰明の美質なる人と見へたり

時代の風俗なれは好色も其時は只今の心に思様にに有まし今は好色の模様かはりて實は同し事也

女は只やはらかにてとりはつしては人に欺かれぬへきか流石に物つゝみしみん人の心には隨んなんあはれにて我心のまゝに取直してみんになつかしく　女は三從の道とて幼少の時は親にしたかひ成人して嫁すれは夫に隨ひ老ては子に從ふといへり隨從を以て道とする者也此故に物やわらかにて我を立ぬ者也柳の枝に雪折のなき樣にあしき方へはなひかぬ心の貞信なる人ならては本妻として後やすき事はなし夕顔は今の世の奉公人など云る類ひなるへきか親もなくおちふれて誰にてもはくゝむ人に任せたる身なるへし本妻としてうち頼まんにはたらはぬ心地すへき人也

此程迄はたゝよふなるをいつれの道に定まりて趣くらんと　七々日の間中有にたゝよふと云へり輪廻の說よりかやうの事もいへり四十九日百ヶ日一周忌三年忌七年十三年三十三年忌なとゝて吊をするも皆輪廻を助る說なるへし月忌とて每月の忌日に精進をする事は佛說にもなしと云り唯一念の稱名にて往生疑なし一度の題目にて成佛すと云なから又重々の吊ひをする事は念の爲か冥加の爲かと一休はいへると也

源氏外傳夏之卷

若紫

よろつにましなひかちなゝとせさせ　ましなひは厭術なり唐の醫術わたらさりし以前はみなましなひにて諸病をいやしたり三輪の明神五條の天神其祖なといへり昔人は慾すくなく氣體すくやかなりし故に病もねふかゝらすみゐる所甚しきやうにても病はうきてかろかりし程にましなひにて氣を轉せしかは愈たりき厭術の少し殘りてあるは其名こりあるもあり又後の人の昔をまなひて作りたるもみへたり石針なとは唐の上古のましなひなり藥種も常に食物として朝夕用ひては何の事もなきを少し匙のさきにかけて用れは死生を定め大病をいやす事是又ましなひと同理なり食物は我彼に勝我生を養ふそなへとすれは別義なし藥は我彼に負てうくる故に病をいやす者なり道理ましなひと同し人心多慾にしたかひて病も根にふかく入故にましなひも次第に重く成て針灸藥と漸々に實に成たりとみへたり或人云近江國に醫師有て病人に藥をあたへけるに病家の家人邪氣の祟りといふものあり祈禱すへきやといひつれは醫師藥に神靈あり邪をしりそくるの術は藥にしくはなしといへり其道に得たる者は其理明なりとなり今も瘧はましなひ祈禱なとにておつる者多しうきてかろき病氣故成へし根に入て重きは藥ならてはいへさるなり醫師も祈禱者も其術に得たり命ある者はしるしあり命は即神也といへり

すゝめしたひ給ふほとよつみうることそとつねにきこゆるを　飛鳥を籠の中に入てなくさみとする事不仁なり彼雲をこふるの心あり總して何事によらず物をくるしめて己か樂とする事は君子のせさる事なり

かうやうなる人のしるしあらはさぬときはしたなかるへきもたゝなるよりはいとおしう　萬一驗なき時はひしりの爲如何なれはしのひたるとなり人の爲手もちあしからぬやうにとの氣遣ひ奇特なりあつき心なり

僧都よの常なき御物語のちの世の事などきこえ　佛氏は生死を以て無常とす生死あるはこれ常あるな

りもし生死なくは却て常なき成へし草木の春花さき秋かるゝは常也若常に花さかは妄ならん此理なければは也畢竟佛氏は世界をもつて幻妄とす總には天をも幻として無に歸する者なり其上天竺の人は情慾あつく執心ふかし此ゆへによろつはかなきあり樣常なき事をいひて其貪欲愚痴をやふらんとする故なり日本の人は欲情執心ともに淺し却て便利の欲とて物六かしき世をいとひて氣隨に成る者多し世のはかなきを聞てはいよ〳〵後の償もなく結句さしあたる情欲をほしゐまゝにする者多し日本人には無常の説はあひかたし

まして後の世のいみしかるへきを覺し續けて　後の世の事地獄の説は愚人のおどしごとなりといへり地獄極樂のさた道心執行の事佛經にくはし是にて實つき事すむへくは悟といふ事は有ましきなり然るに迦葉に一枝の花をみせ微笑したれは印可せられたり其上無量義經にも四十餘年未顯眞實と說り是にて諸經に説處の地獄等の義實説にあらさる理をしるへししかれとも古の佛を願ふ者は地獄をおそれて惡をやめ極樂をもとめて善をなしたれは猶可なり此故に源氏も後世の事を聞ては先非を恐れ山居もせまほしくおほせり今佛をねかふ者は不願者よりも惡人多し佛教古にあらす願ふ者の心昔にあらされはなり

こゝにものし給ふはたれにかたつね聞へまほしき夢を見　總して我かくしたきと思ふ事ふといひ出しにくき故に夢の告といひて取たつる事多し今の男山へ宇佐八幡を勸請の時出家の夢に見たるとて取たてたりといへり菩薩號をつけ佛法繁昌に隨ひ男山のみ盛になりて根本の宇佐は廢れたり昔の人は理直にて左樣の事を信したりとみへたり今は文明の運にめくりたれは夢の告なといひても人信せされは坊主なと得いはさる勢に成たり時頼鶴岡八幡宮の夢想の告により青砥左衛門に加増せられたれ共左衛門は受す物のはかなき事は夢といへり罪なくとも左衛門か首を切れと夢想あらは切給ふへきかといへり如此有智の者一人二人世に出て次第にはつかしく成たる者なり

すくよかにいひて物ごはきさましたまへれば　今はすくよかなるやうは邪見にて慈悲なし柔和なるや

うは世間を諂へり慈悲無慾にて世間をはなれたる僧は世にまれなり

法華三昧をおこなふ堂の懺法の聲山おろしにつきて　むかしは經をよむもおもひ入たるつとめなれは其聲の殊勝にて人の心を感せしなり今は其心あらすしてよむ故に音聲もよからす昔の人は人からよく眞實なりしかともいまた物の道理をは明らかにしらさりしなり箱の中に何ありといふはさあらんと信したる樣なり今の人は人からおとり眞實うすけれ共文明の運にて物の道理を知事次第に明なり此箱の中に何ありといふともあけて見されは信せさる樣なり夫に依て後世の敎を信せさるもの多し佛者の心行あしけれは佛法も衰にむかへり

れいのひちりきふく隨身　昔は隨身に樂人多かりしなり篳篥は其聲笙笛のやうにうるはしからすといへとも十二律を全く備たる物なり此故にひちりき吹者は調子に入事早し上手にてなけれはかしましきものなり夷狄の樂器といふ說あり琵琶も胡國より渡りたると云ともさにはあらし樂は聖人神明の德なくては作り初むる事あたはす賢人の力にもならさるものなり夷狄には賢人たに中行なるは稀なり琵琶ひちりきともに夷狄に初るへき道理なし古書に琵琶は女媧氏の作なりといへり其後中夏に中絕し胡國におちとまりかへりたる成へしひちりきも左樣なるへきか

さうの笛もたせける　笙は黄帝の時初て作りたまふと云り鳳凰の雄聲は六律にかよひ雌聲は六呂にかよへり此故に鳳の羽二つをあはせて頭をつけ口をかたとりて聲をなしたるもの也

僧都琴をみつからもて參りて　此樂器上古渡來本朝之條勿論なり允恭天武已下令彈之給由見日本紀其後延喜の比迄も彈する人あり中古以來樂曲斷絕なり又白虎通に云琴は禁也禁追於邪氣以正人心也ある人云琴は舜初て五絃の琴を作りて南風をうたひ給へりといへり後世の人五絃にして彈しかたき故に文武の二絃を加へて七絃とすといへり變宮變徵にても有へし上代の人命をかけて遠國にわたり傳來りつる曲なるに餘り大事に秘して彈する人まれなりしかは終に秘し失たりとみへたり

おこなひのらうはつもりて大やけにもしろしめされ

ざりける事と　出家は樹下石上麻衣草座して世間の富貴をはなれ入里乞食是其行なり今の僧は寺院を結構し衣服をかゝやかし位をのほりて富貴を極む是凡俗の心さしにて出家の本意にあらす行の勞つもりて上にもしろし召れす阿闍梨にもならさるは尤殊勝なり

女君れいのはいかくれてとみにも出給はぬを　夫婦の間は心はよく和して禮うや／＼しく賓主のことく成をよしとすおも／＼しくうしろやすきは本妻にして第一のたのみ所也葵の上は此貞正の徳は備りたれとも愛敬におきてかける所あり此故に和しかたし愛敬深き人は又たをやき過てうしろめたき疵有柳の枝に雪折のなきやうに物和かにしてあしきかたになひかぬを貞順の徳といへりいにしへ夫婦とする人をえらふには其徳其氣質のたくひたるを考てあはせたり葵の上の夫をえらばゞ正道をこのみ大やうにおとなしく事すくなきやうなる夫ならはよく和すへし源氏にはあひかたき人也道ある世には富貴貧賤の撰もなくたゝ徳のたくひたるをえらひたり今は身代の位のみを吟味して人からの合不合を知らさる故とりちかへて男女ともになんぎするもの多し

行先の身のあらんことなとまてもおほししらすたゞとしごろ　おさなき子の父母なとのなく成たるを悲は誠なり君子の悲に似たり凡夫も悲は誠なるやうなれともましはりあれは誠といひかたしはやくはなれて我身の迷惑する事此人なくては世間の思ひ入身の爲惡き事なと思ふは死をかなしむなり死は常の理なれはかなしむへきにあらす君子は別を悲ふ計にて身の爲のましわりなし此故に悲といへとも心に苦勞なし凡夫は悲むよりは心の苦勞おほし

女は心やはらかなるなんよきなど今よりをしへきこへ給　唐にも桃花を女德に比したるは温和の色にとれるなるへし俗にむつくりとしていとをしらしきといふ樣なる事なるへし

御かたちはさしはなれてみしよりもいみじうきよにてなつかしう　よそ／＼にみしと遠かたちよりも近まさりしたるなりすへて形はおとりても心のよき人はそひよりしみまさりする者也かたちよくても心のよからぬ人はよそより見てはよけれともな

るゝにしたかひて見おとりするものなり夫婦は内にしての友なり色かたちを云はわかきどち其初め一二月の間の事なり後には互ひに心を友とするにうちつくものなり心のよき人は形も自からいやしからす

にび色のこまやかなるがうちなへたる　外祖父の服は三月なり其うちなれは着服なり服の輕重により志の厚薄によりて色も淺深あるなりもろこし上世の喪服の制は日本の今の人の氣質にはあひがたし服　輕重によりて志の淺深有事知なり服の輕重も日本の人氣に應してよろし天地の間の風氣うつり行ものなれは五百年千年にてはあらぬやうにかはるものなりいにしへの人は玉の冠をきたり今の人は一日も着しかたし人の氣力各別なる故なり何事も時處位といふ物有かはらぬものは五倫五常のみなり其外の禮樂法度はうつり行風氣にしたかひて損益あるへし

よからねどむけにかゝぬこそわろけれ　こゝは總しての人の事にかけてみるへし先何事も沙汰してこそすゝむ道もあれ何の藝能も初よりよき人はなし上手と成は習ひ得て後の事なりよからざるを恥てならはねば一生無藝無智なりこれを其恥に非るを恥て恥心亡ふといへり聖人には常師なしといふ人ことに尋學たまへはなり俗にも問は當座の恥不問は一代の恥といへり尤なりされとも問は當座の善なり積て一代の德なり不問は當座の不善一代の愚なり其事は初心にはよからされともよく人にくたり學ふの心は初より善なり不知にして知にしたかはす無能にして能にまなひす己か我を立て知能をそしるは國家の不祥なり

きたの方もはゝ君をにくしと思ひきこへ給ける心もうせで　心も失せては文字濁る也失すし也まゝ子をにくむ事は慾心と嫉妬の二つよりおこる物なれは上臈にはあるまじき事なりすこし道理をきゝたらはさやうのまとひ有まじき人多し今は教なくならひよからさる故に大かた氣質のよき人もかゝるいやしき心に成行と見へたり

末摘花

物の音からのすぢことなる物なれば聞にくゝもおぼされず　琴はこと樂器にあはせねばひゞきわたり

てつかさどる聲なりといへり上古には甲にしらべたる物か近年唐人の傳とて彈ずるは乙のなる程下調子にしらぶるなり今の琴は他の樂器合奏のなるべき物ともみへす但今の琴もひゞきは遠くきこゆるものなりといへり或書に太宰帥經信卿の申されしはあかたの唐坊にてひきしを聞しは蟲といふ虫のあかゝり障子にあたる音に似たりとぞ物語侍けるとありめつらしきやうにいはれしほとに上古の琴の音はたえて後の事成へきか只今の琴上古の琴と同し事か同しからさるか上古のやうにては糸のしまりもむつかしく傳も大方うしなひたれは今乙にしらふることかいまの調子にては糸のしまりもいらざる程に夫にしたかひて細工なとをも略したるか琴にかきらす唐人は歷代の樂はこと／＼く失てしらざるなり音律達者なるゆゑ代々樂をも作直して古樂をば皆失ひたり日本は音律不達者なれは一度傳來たるを大事に守りてつたへぬれば昔のまゝ也此故に古樂の殘りたるは日本ばかり也もろこしに明王おこり給ば必日本に來て傳かへすべし今の唐人の樂は一向もとの姿の殘たる物に非されは唐人の傳ふる琴のしらべ昔の物にてあるへしともおもはれす日本にても琴をば傳へ失へり惜むへし

中々なる程にてもやみぬる哉物きゝわく程にもあらてねたうとのたまふ　琵琶箏最雅聲にして淡きこゑなれとも箏はすがゝきに風あらわれて上手下手其人からはやく聞とらるゝ物なり琵琶はまことの音をひきしむる人古今まれなる物なれは大方のけいこにては耳にとまらず琴は律呂の響つよくとりわき淡き物といへりしからばいよ／＼きゝわきかたかるへし和琴たに其風をうつしたる物なれはしらべ出てすかゝく程其人の姿はやく[うはイ]は聞わきかたし

さらはもろともにとて御かゆこはいひめして　昔は毎朝先かゆこはいひを用ひて出仕して退出以後飯をば用ひたりと見へたり先粥にて身の力を持是にて朝の食はすみたり此末の卷にも嵯峨にてとまり給へるに御くだ物こはいひとあり純素の風なり此時分源氏頭中將などより上の大身は多くはあるましきなり今の歷々の國主にもおとるべからす今ならは振廻何かといふ成へしかゆこはいひなとは鷹野のさきにても用ずむかしはかやうに質素なりし

故に人民ゆたかに公家の代千七八百年ゆるきなくつゝきたり民のみつぎ物もろこしの貢法にて十分一をさゝげたり此故に年貢といふて貢法の貢の字をかけり此時は軍兵農にあり軍を出し陳をなすことのすみやかにして驕なく文武の勤怠ざりし故なり五百餘歳の間清盛頼朝北條足利信長秀吉とうつり替て治世短き事は純素の風過美にかわり農兵貢法やぶれて上下おこたり人民苦む故なり堯曰四海困窮天祿永終と天下の人民困窮する時は天下の威德おとろへて永く亡るとなり聖人の言に數千歳の後いつれの國に至てもたかふ事なし

行幸のことを興ありとおもほして君達集りての給ひおの〳〵舞ともならひたまふ　行幸に歷々の公達舞人に成て習ひ給ふは上代の美風なりかやう事を晴わざとして常に禮樂に怠り給はぬ故に風けたかくして俗におちさるなり末の世は雲上の風もおち心おこたりていやしく成行にしたかひて禮樂いとはしく成故に末々の人に次第にゆつりもて行て上たる人は人に見物せられても用なしたゝしらさるかまされりなと利口を云り上﨟のすへき事をはせすして心のみをこたりぬれは日々にいやしき事のみをならひて子々孫々に至ては俗を去事遠からす諸國の人の見あふく所もなきやうに成ゆくなり心志躬行古への公家ならねは敬し給ふへきやうもなし禁中の衰微する基なり禮は有職として[illegible]してもなきことを家々に了簡を加へ流義をたて我も〳〵と秘すれは肝要の事を共に秘し失ひて次第に知人も絕々に成なり又其知る人も我一人と思へは慢心生し人にたかふり意地をたつれは禮にはあらて人の心をそこなへり樂は樂人にあづけたま〳〵普代してとりあつかふ人も家々たてゝ渡世のやうなれは外にくわしく人のしらんことをきらへるゆゑにさま〳〵の傳も殘少く古の御遊がゝりなといふ風も聞へすされは君も何によりて古をしのび給へき便なし公家のみにもあらす武家の風も又同し古へは大樹國郡の主といへとも弓馬の遊ひをみつからし給ひ諸士をうちまじへて遊ひ給へは君臣むつましかりき今はみつから弓馬の道をしり給はねは人になさしめ給ふへきやうもなしたま〳〵なすといへとも實なき習なり諸士も弓馬の上手は藝者のやう

なるとなましゐに理窟をいひて不知を恥ともせす弓馬ともに藝者にあつけて其身は不案内なり此故に渡世となりて是も大事は秘して失へりたま〳〵心に入て學ふ者も弓にて一生終るほとならでは大方にもなしがたし馬又同じ古の武士は十七八廿歳計にては弓馬ともに達し武功をあらはし文道にもうとからざる人多かりき是文武ともに藝者に落すして秘する事なかりしゆゑなるへし

物の音ともつねよりもみゝかしかましくてかた〳〵いどみつゝ　我も〳〵とけいこする物音しげくかしがましきなり其上絃管の遊ひは互に聞合せもちあひて大事にする物なれは靜にして感心ありけいこはおほえの爲面々にする物なれは耳かしましきやうにも有へし

大ひちりきさく八の笛　今の世のよりも大なるひちりき昔は有しとなり物はちいさき程聲すみて高し雷は百里をおとろかす程の大聲なれとも殊外調子はひきし人もおさなき子の聲かへりて調子高し尺八の聲大成べけれとも調子は卑かるへし然らはよくはあるましきなりそれにより常に用ひざる歟

しかくなとのゝしる　試樂也樂のならしなり試樂は稽古熟して後絃管あはせて調ふへき位をこゝろむるなり能熟して無心にしてする事なれは當日の樂よりは試樂よく出來る事あり

我ならぬ人はまして見しのびてんや　末つむのかたちを見あらはし給ては彌見すてかたしと也かたちよきを見ては愛におほれ惡を見てはすてゝかへり見さる事凡情なり然るに源氏常陸のみやのあしきかたちを見給ひて彌見すてかた〳〵して後まではぐくまれし事尤奇特なり仁愛のふかき故なり此ゆゑに末々まてさかへ給ひたる成へしかやうの事にて作事にあらさる實を知へし源氏といふ名こそかはるへけれ如此人はありたると知へし一向作事にして實を取さるは遺恨の事なり同し好色にても不仁者の好めるはいやし平清盛なとの類なり天質は仁愛聰明なれとも道德をしらす善政善教なけれは習にひかれて好色なる人は其本不仁ならざるゆゑに其好色いやしからす奇特なる所有大かた生質仁愛聰明成人は多くは色を好り如此人道有世には直に道におもむく故に此煩なしみちなく教なけれは靈

なる氣質好色にうつると見えたり古人の色を好る中には有道の世ならは君子と成へき人多し近代の好色は大かた不仁にしていやし此故に德にうつらす今は好色の實はむかしにまされとも好やうの風かわりて昔の樣にはあらす昔の人に今の好色をきかせたらは甚しくにくむへし不仁を恥とおもはされは昔の人とははるかにおとれり今風儀のかはりたる眼より源氏を今の世に置たらは善政善敎はなくとも昔のごとき好色はあるましきなり其世には左樣なる風俗にてさのみあしき事ともせざりしやうなりたゝ不仁を恥とせしと見へたり

つゝみにころも箱のおもりかにこだいなるうちをきてをしいでたりこれをいかてかはかたはらいたくおもひ給へざらん　物の笑止なるといふはかやうの事なり古流のかたき事のみならひ覺て風氣のうつり行今の世の公界をしらで一大事と傳をとり行ひたるには見苦しくおかしき事有今武家にも小笠原流なといひてこと〳〵しき進退は當世のかと〳〵しからすとり行ふ中にては人のわらひ草となれりおくり物さゝげものなともいにしへは己か志を蓄して土産品かはれり今は手のつかざるやうに太刀目錄樽代なとゝてかろく取行ふ中にくだ〳〵敷土産なと人多中にもち出たるも時に合す井中の蛙といへるやうに時の風をしらぬ東中人の公界へさし出たるたぐひさま〳〵有末つむより源氏への音物はよきにしても似合ざるなり貧き者は財用を以て人におくらす老たる者は勞をなして人に禮せすといへり貧なる者は身を以て手足の勞をなして志を行ふへし物をとゝのへやる事はあしく其上末つむは本臺にあらす貧なる故に見捨かたくはくゝまるゝ事なれはうけてのみ居給ふへき事なり命婦なとにもとひ合せすふる女房のわざなるへし今も男女となくかやうのにが〳〵しき事多し音信をしてせさるにはおとりたる事あり人情時宜をしらす身のほとをしらてあしく意得たるゆゑなり

袖まきほさん人もなき身にいとうれしき心さしにこそ　我ならぬ人はましてみしのひてんやといふよりこれまては仁愛ふかく年たかき人にもありがたくおとなしき心なりしらす〳〵天質のよき所なり

かやうのかいなてにだにあらましかは　かいなては

筝よりいてたることはなり末の巻にもみへたり大かたに引得たる人々をもかいなでのこゝろやりはかりといへり拍子に合せて大かたの樂の方にあふ成へしよきと云ては爪音けたかく位ある事也夫程迄こそなくとも大體のなみならはといふ心なり
人々まいれはとりかくさんやかゝるわさは人のする物にや　とりかくさんやといふばかりにては心こもりてよかるへしかゝるわざは人のする物にやあらんとて憤り嘗したる詞なり凡情みな如此なる者也まへの仁にしておとなしきにはとりあはさるなり道を知らさる人はよき生れつきの人もならひにひかれてとけさるものなり
たゝ梅の花の色のことみさかの山のおとめをは　求子の歌なり常陸宮の姫君をの給へり此歌の心最前の奇特なるこゝろいれとは無相應なり前の心は本性なりこれは習なり又わかき故にても有へし富貴の人の何に不足なる事もなく心おこりしたる人は隨意我まゝにて少も氣にあはさる事は機嫌あしくすてむちうつ事有今大かたさやうなり

紅葉の賀

まひのさま手つかひなんと家のこはことなる此世になをえたる舞の師のおのこどもけにいとかしこけれとこゝしうなまめいたる　こゝしうは大やうなる心也其道の者ともは練磨してならひなとはあれとも大やうに風流なる事は堂上のやうには得舞出さぬ也なまめいたるすちをみせぬとは餘情なきなり居は氣をうつし養は體をうつす道理ありて堂上地下の舞格別なりむかしのみにもあらす寛永のはしめ二條亭行幸の時舞樂有て輪臺青海波なとは堂上の人々舞給ひしなり台德院殿御感悦大かたならすして關東下向の後も度々これをしたはしめ給へりとなり同し管絃にても御遊はしづかに位有て各別也舞樂も地下の役人には上手あれとも堂上の舞とは雲泥也舞の位より初容體已下各別也禁中の風の俗にことなる事おされさる事なりとてそれより信心崇敬の心もつき給へりとなりこゝしき體は家筋よく位たかくて居の氣をうつしたるなり舞は樂の功ある事なれは上手なりされとも氣象に習によることなれは樂人は及へからす位につきてそなはりたるものなり又家たかく官位にすゝみても其人から

による事なりおなし堂上にて其人からをえらへは其氣象をあらはせり地下にては人から上手をえらひても此氣象はなき事なり舞のみにもあらす箏琵琶の爪音撥あたり堂上は各別なり何ほと功をつみ上手に成ても地下の及はさる事あり箏琵琶とりたるかゝり手つき所作からよりはしめ地下は優にけたかき所なし吹物打物はたまさかよきもあるへけれとも樂人の達者上手には及へからす夫は堂上はけいこ未熟なるゆゑにてもあるへし手跡も平人は能筆も位なしあしくても堂上には位あり武家大身の手跡又各別なり皆居の氣をうつす故なりこのことわりをわきまへずして平人に絃管をつたふる事をおしむ人は一向無案內なる事なり天下にあまねくしらしめてこそはじめて公家の各別なる所をもしり信心恭敬の心も出來へきことなれ樂をしらて爪音撥あたりのけたかきも知べきやうなし平人は雅聲を一向しらされは能囃子にはおとりて思へり是をおしみてしらせさるはいよ〳〵公家の衰微なる事をしらす聖人は雅樂を作てあまねく天下におしへて婬聲を防給しに今はたま〳〵少のこりたる雅聲を秘してしる人稀なれは婬聲日々に盛に成て雅樂は大かたたゆるに近し神樂の罪人也婬聲とは宮商角徵羽の五音其位を失へるものを云今堂上に朗詠とて詩をうたはるゝ大かた亡て三四首のみありと聞ゆふしはかせ他のうたひ物とは各別なり興に乘してよき折ふしよき聲にてうたひ出給はゝ人の心を感動すへき物なり

詠などし給へるはこれや佛の御迦陵頻伽の聲ならむ　迦陵頻伽は鳥なり此鳥日本に出たる事なし聲よき鳥なり釋迦の聲生付てよかりしかは此鳥にたとへていへり總して聲のよきをほめては此鳥に比する也佛の聲は第一生付にてもあるへけれ其又聲よき子細も有事なり男女のみちを忘て腎水かたくとちぬれは聲匂ひ有て言舌あやある者なり

昔の世ゆかしけなり　佛氏は世界を輪廻と見たる故に前生今生後生の三世を立り現世の果報は過去の宿緣故也されは今源氏のめでたきも前世の善功ゆかしきと也聖人は造化に輪廻なき故に一貫に見給ふなりしかれとも一貫の中に鬼神は福善禍淫の理にて善人には福あり惡人には禍あるなり又善人な

れとも禍ありて悪人に福あるものあり是は先祖父母の故なり先祖父母悪をなして鬼神に感し禍の運命めくりくる勢のうちには子孫の善人其しるしなし子孫の善行先祖の悪にかつ程の善なれは轉して福と成也先祖の善をなして鬼神に感し福の運命めくりくる勢の中には子孫の悪いまた禍を受す然れ共其命おとろへては必災害至る物也かやうの道理佛教の三世に似たり佛氏も畢竟は輪廻をまぬかれて三世なき所に至らんとす是を解脱と云成へし

心うつくしうれいの人の様に怨みの給はゝ我もうらなく　すへて本妻の夫を眞實大切におもひ入てうしろみあつかふ人は少容不足なるかたありても終には本妻におもひつく物なり妾は一旦めつらしきやうなれとも心底淺はか成所あれは終にはあく物なりまして葵上のやうに容體とゝのほりて其うへに源氏にしたしからは他にうつる心は薄かるへし夫に大やうなるは本妻の疵なり夫の心もあだ〳〵しくはしめは心につかぬ妻も他事なく大切に見ゆれは夫も感心起て他の心にいらぬ事はわすれてしたしく成ものなり

なやらふとて　追儺は禁中よりはしめ諸家にも有し事なり昔は山澤深かりし故に鬼神も靈に人心もたけかりき故に病氣も邪氣の類有て人をなやますにより唐朝日本ともに儺をせり今は山澤淺く鬼神の靈もうすく人心もよわく成たれは病も人の腹心に入てみる所甚しからす然ともむかしの甚しきは治し易く人を損ふ事も畢竟少し今の甚しからさるは治しかたく人を損ふこともふかし

おとこ君はなとかいとさしもとならはいたまふ御こゝろのへたてとも　總して妻方のいきほひをさしはさみて夫をかろしむるはみくるしき物なり男も女も下つかた程此ほこり有ものなり源氏のおしけちて其驕をさしはさまぬ様にし給ふはよしされと葵上は上﨟なれは此習なし歴々のむすめにても夫にほこる心あるは上﨟の下﨟なり始よりのあへしらひあしくて妻に權をとらすれは奪れる子の不可用ことくなるものなり妻にまかれたるも口おし取直さんとすれは不和になりやふれに成事有妻といふもの初は物はつかしきはかりなるものなれはとかく夫のならはし次第なり

弘徽殿なとのうけはしけにのたまふと　愛之欲其生惡之欲其死天命ある事をしらされはなり弘徽殿女御も桐壺の更衣をにくみ果し給へは又藤壺立かはり給へり藤壺死給ふとも又立かはるへき人有を知給はす人のあしき我身の利と思ふは凡情のまよひなり

さうのことは　箏を秦箏といへるは深からぬ説なり伏羲氏五十絃の瑟を作り給ふ中古二にして廿五絃となれり然とも五聲のそなはる事は五十絃廿五絃同事なり堯舜の時より孔子の時分までは廿五絃を用たりと見へり秦の時樂音に淫せる人又二にして十三絃とす五十絃廿五絃十三絃ともに同し理なり古は人の體大に氣すくやかなりゆゑやかにして長し此ゆゑに五聲各十にして五十絃を用ゆ天地人の風氣うつりかはりて用かたき故二にして廿五絃とす廿五絃又人の氣根にあひかたけれは十三絃とす箏の十三絃自然に河圖の數に相應せり一六二七三八四九五十是なり秦の世には聖神出給はす如此の神器はしむへき人なしたゝいにしへの跡によりて聲音の學術ふかけれは平人といへとも二つにする事になるへき事なり秦の聲にあらさる事明なり

かきあはせはかりひきてさしやり給へれは　はしめ壹越調のしらへにてありしを平調にしらへ給へはかきあはせをし給ふなりかきあはせにて糸のよくあひたるとむらのあるかよくしらるゝなり又樂よりもかき合はむつかしきものなれはひきてきかせ給ふも敎なるへしかき合は位第一なり上手の位よくしらるゝ物なり

さしやりてゆし給御手つき　由は左手なり左手取と推と由なり律のしらへには六八斗巾はおすなり九はとり十八はゆる也とりゆといふときは九十の事なりゆするといふ時は十なり十八柱ちかけれ共柱のちかくにてゆしたるはよからす柱とをくゆしたるかよきなり其上ゆの時は人指を糸の下へさし入中指と人指とにてさしはさみてこれにかなへるか八の糸の左手もかさねて二度おす事なれはゆともいふへきか平調は柱の立樣六八のあたりは手とをなれはおさなき人は手をさしのへされはとゝかさるなり

花の宴

弘徽殿の女御中宮のかくておはするをおりふしことゝにやすからす　弘徽殿の女御藤壺の宮に立后を越られしをやすからす思せは藤壺とは同座も無也然といへ共今日はやむ事を得ずして參り給ふ也かりそめなからかやうの事は君威のおとろへの端也易云履霜堅氷至と聖人の用心を示し給へり陰の長して陽をおかし臣の奢て君威を奪ふ事一朝一夕の故にあらす少の所より端顯れて大に成物也君たる人の用意あるへき所也后女御は皆臣なり臣下の位祿は君のまゝ也立后を人にこへられたるとて君前の同座せさるは君をなみする也かやうの所より后女御の親里もまして君をしのくばしめとなれり又親里の威勢よりかく成行事もあり君に智勇の德おはしませはかやうの時節よきしりそけ所なり後の災をふせく道なり智仁勇の德一つもかけては君位長久ならす平清盛源賴朝はしめて王威を奪ひたるやうなれ共一朝一夕のゆゑにはあらすもとかやうの所よりはしまれり霜の置たるを見て頓て堅き氷にいたることしらるゝなり臣妾たる者すこし我まゝ有所にて其末の代には君をなみし威を奪ふに至る天照太神三種の神器を帝王の御傍はなれすおはしまさせ給し御おきてふかし一もかけては天下をたもち給ふ事成難し寶劍の西海にて失給しは帝王のなかく天下を失ひ給ふへき前表なり其元百年二百年の僅とは見へす大臣の王威を輕んしそめたること大鏡なとにも多く見へたり婦人の威を取て夫を蔑にするもこゝにあり女とおもひゆるして大方の事は咎さるより後堅氷に至ておさめかたくも成もの也漢の高祖の呂太后賴朝の二位の政子是なり弘徽殿の女御も此二女にはおとるましき人なれ共そたちあしからさるゆゑに夫ほと迄には至らさるかもしそたちよからすは惡もはげ敷成も桐壺帝崩御の後は猶ほしいまゝ成へし

日いとよくはれてそらのけしき鳥の聲も心地よけなるに　二月の廿日あまりの景氣宮中の有樣上代の體をおもひやりてみるへしこの時は帝王の天下しろしめしたる日にて日本國中の人はいふに及はす高麗百濟よりも來朝し大禮行はるゝ事なれは王城も廣かるへし然とも上代に遠からす文華漸々備ると

いへとも猶質素の古風に近けれは火災なともなく古木ものふり鳥も德氣を見てくたりすむへけれはそらのけしき鳥の聲後世見かたき風氣成へし末代の眼にてみるへからす

まして帝春宮の御さへかしこくすくれておはしますかゝるかたにやむことなき人多くものし給ふ　昔は君臣共に文學有て不學なるはなかりし也君として君の道をしらす臣として臣の道をしらさるは大なる恥なれとも今は我人習に成てひとなみの多きに安し居也さしあたりたる當座の失禮をたに人ことに赤面せりまして貴人高位と成て何をもしらす威勢はかりにて人をおし付上にたつは恥しき事也

春宮かさしたまはせてせちにせめの給はするにのかれかたくてたちてのとかに袖かへす所をひとおれけしきはかりにまひ給へる　春宮の御所望なれは舞給はぬ事も成ましきなり去年青海波の事おほし出ての事なれは辨すまし給はんもいかゝなりけしきはかりにてやみ給おもしろし

頭中將いつらおそしとあれは柳花苑と云舞を是はいますこし　頭中將は源氏の少はかり舞て入給へるに同しやうなるも興なかるへし是はちと久しく舞すまし給へるかよきなり萬の事に時處位のおもひはかり有へき事なり

まつかのわたりのありさまのことようおくまりたるはやと　葵上のあたりなり葵上の母宮上﨟しく樣體心もちゐおくふかく葵上はなほおもりかなるゆゑすゑ〳〵の女房一家の作法まてもそれにしたかひておくふかくて卒爾に人の入へきやうにはなし弘徽殿は父右大臣よりよろつはなやかにいかめしき事を好給て上﨟しきかたは後れたりと見へたり弘徽殿はきとしたる人なれは女房なとも正しかるへき事なれ共其身心もちゐしつかに奥ふかく上﨟しき所なけれは女房なとも淺はかに物ふかゝらす

たゝ大やけことにそしうなるものゝしともをこゝかしこ　そしうは麁の字なりかたましきなり公義の用には出つかへすしてかくれ居たる心なり總して物の上手は無欲にて人つきなくすねしき所有もの也或はうち氣或は物むつかりして世間に出る事を好まさるも有されは時代の威勢ある貴人は知給はす又末々はしりてもあけさるものなりさる故にさま

てよからねどさし出る物は時めくものなり時の奉行下すちかく〳〵明らかに勇もなくては彼是に障り有てとり出る事ならさるものなり道學明なる時に源氏生れ給ひてよく敎へよくならはされ給はゞすくれたる人成へし只一つのあしきくせによき事を見かくしてとり出る人なし其世に上下共になひきて此君を光にし給ひしは此德有故成へし

ましてさかゆく春に立出給へらましかは　おきなもほと〳〵舞出ぬへくと左大臣のの給を受てとてもの事に左大臣立出給はゝ當時の面目ならむとなり今は親子むこ舅なとかゝるあいさつは有へからす古は人倫よく和したる故也左大臣舞給へきにはあらねと興あり感ありし事を立も出ぬへきと有し返答に興ありしを頭中將の柳花苑にゆつりてさかゆく春に立出させ給はゞとの給ひし返答はよき答なり當時の情にてはおもひよるましきことばなり古の美風おもひやるへし

よからぬ人こそやむことなきゆかりはかこち侍なれといふけしきを　こゝにてはたはふれにいへる事なれ共是も一つのおしへなりいやしきもの〻よき親類にかゝつらひとかくいひあつかふは見くるしき物なりよきかたより蕁られて是非なく應するは可なり又富貴の人のわびたる親類をしらすかほにてたつねさるはいよ〳〵あしきなり富貴になりたるは先祖の積善の餘慶にて一朝一夕の故にあらす先祖より見る時は其子孫みな富貴貧賤ともに同し子孫なり其上富貴は人をめくみすくふ事富貴のみちなりほとこしの次第は先ちかきよりするものなり凡心はいやしき親類持たるを外聞あしきやうに思へり皆人しりたる事なれは蕁るをは却て人も奇特におもひたつねさるはいやしまるゝ事を知人すくなし

源氏外傳秋之巻

賢木

世のなかかはりてのちよろつものうくおほされ御身のやむ事なさも　父帝位をさり給ひ我をにくむ人に威うつりぬれは後宮にてさへ危きに官職にのほりてはいよ／＼立かたし威を取たる人何事に付てか取たをさんと思ふ時なり有に慎なくては禍のまねきなるへし父帝は昨日迄の主君也今上は皇子なれは何事にもかはる事あるましき様に思へとも天威の移かはる所にて勢各別なるものなり諸侯にてもそれよりくだりても其勢は同し物なりかく有道理としれは安すれ共其情勢のわきまへなけれは慎り父子中悪くなり諸臣に悪み出来悪き事共有なり惣して帝王の隠居といふことは其古はなき事なり天に二の日なく國に二の王なき理りなれは今上の尊位の上に又先帝の尊位を並ぶるは日の二つ王の二人なり此故に君勢し給へは攝政有黄帝は崩御の跡見へたまはすくつはかり殘したり生なから神と成て天上し給ひたりといへり黄帝に位を去給はて叶はさる事有たる成へし院になりおはしましては二つの日なり天理に非れは跡をかくして去給ひたるなへし又神武なれは其理に當て生なから化し給ふか日本の讓位の初は皇極天皇也孝徳帝即位の後重祚あり其後持統元明元正等皆女帝なり聖武天皇退位の後孝謙廢帝已來は毎度の事なり二の王ある事をいみて院の御所を仙洞といひて此世の外に出給ふ義成へし又黄帝を道家の祖神として仙家の本とすれは黄帝によりていへる事にても有へきか

人のためはちかましき事なくいつれをもなたらかにもてなして　人の名のたち面目なきやうなることをするはあしき事なり情をおよ割なり古人は罪に大罪あるたに其罪をかくしていはすいさゝかの事にことよせて追出せは人は夫のおとなけなきやうにそしるなり自其罪を負たるは厚き心なりまして罪もなき我心のすさみにまかせて人の身あしきやうにするはひか事なり御門の御詞ふくむ心ありておもしろし

かやうなるほとはいとゞ御心のいとまなくて思しおこたるとはなけれと　御息所なとへとたえあるさま

なり男女は子孫生々する爲なれは子孫ある時は夫の心入大切まさるものなり人のおもひ入もかはり女の威もまさる物なり
おほやけことにそふおほくたゝみところこゝなし同し子にても人からよきをは父母も別して馳走し心入有物なり
ひまもなうたちわたりたるによそほしうひきつゝきて立わつらふ　かやうの物見には威勢ある數人多く召具する人はかねてより其所を取定て出るものなり人數多けれは他人の心をつくしてかねてとり置たる所ともいはすよき人の忍ひておはする所ともわきまへす末々の者は主人の威にほこり味方の多きをたのみて狼藉なれはあまたの人の心をいたましの其親子兄弟の情をおふ物なりかやうに儀なる事ならはいかにもそれとなきやうにやつれて人のかたわきにたつるやうにすへし左様になるましくは出さるかよきなり此時た大臣しり給ふか家司なと歴々あるへきにかゝる事の勢は常の事なれは其いきほひもあるへき事なり大かた富貴の人威ある人は揚々として奢くらせは人情にくはしからて心もつかさると見へたり人の心をやふる事は主君にてさへ重き罪なるにまして臣下たるへき人第一にすへき事也況や諸人にもおらすよき女車の有所を見すましあまたの車をさしのけさする事大なるひか事に貴人の常にて心のつかすしてさしもなき所に心をつけて禮なとし給へり古人は下賤に居る賢者を求めて友とし貴賤を忘れてかたり萬のいさめ下の情を知給ひしは斯るにつけても心深きためし也
人たまひのおくにおしやられて　座敷の集會は位次第なり其上臭からよき人は互にあいさつしかるへきなり又出行なとは位ある人とても無人なれは人數多き人にはものけなくをしけたるゝ事ある物也召具の末々の者はたれともしらす又少はしりても勢のなきかたをはあなとりて狼藉する事あり主人も心なきは直に面を見合されは其車のうちよりはのしりてもしらさるふりにて下々にまかせ人をゝしけなとするは凡人の情常の事也たかき人の無人にてさやうの所へ出給はんはかねて心得あるへし其覺悟有て出れは何事ありても恨はなきなりくるしかるへきとおもはゝ遠慮したるかよきなり

心のかきりつくしたる車ともにのりさまことさらひ
　よからぬ人のさまなりわさとこのましく人のめ
に立やうにとするなり女の物まうで物見なとに衣
服をかさりてこゝをはれとし人のめに立やうにす
るはあしきことなりそれゆへ恥かましき事も出來
よからぬ亂の端とも成こと有心ある人は常の服よ
りもやつれてしのふへき所なるに人目をおとろか
さんとする事は何そや男子の若朝に出仕すること
に衣服をとゝのへ禮儀を盡すことく婦人の君朝と
する所は夫のまへ舅姑の所なり其ほと〳〵につき
て心を用ひかたちをおさむへき所なり其外は晴と
いふ共男子の朋友の往來のことし夫の外に女の心
たしなみ身のかさり有へき事なきか然はにや夫死
しては落髪せりさなくても不容飾夫のあるときは
かさるを禮とし夫なくてはかさらさるを禮とす
あたらおもりかにおはする人の物になさけをくれて
　葵上のみならす母宮もおもりかに上﨟しきはか
りにてなさけ〳〵しくいたわりふかき方はおくれ
給へると見へたり下々の人も主人の心掟のやうに
あるもの也葵上は人をあしくとはおほさゝれ共情
おくれたる所より下々に及てはなさけなきやうに
なりたるなり惣してこの度のこと葵上方諸事よろ
しからす御息所には道理あれは其無念の所により
て邪氣のたゝりもあるへし父左大臣の家のおきて
不足なる故にしり給はぬ葵上一人の難義となりた
るなりもとより物見なとは好み給はぬ人の懐姙の
折ふしといひそゝのかし出すことよろしからす
むまはのおとゝのほとにたてわつらひて　かやうの
所まても源氏はおもひやりふかく心つきて奇特な
る人なり兼てより所をとりおかんも人しりてこと
ことし又人多く召具して拂ひのけんともせさせ給
はす忍ひて立わつらひたる體富貴の人には殊勝也
袖ぬるゝ戀路とかつはしりなからをりたつたこのみ
つからそうき　此歌眞實の情より出て何の作意もな
けれは感あるなりおくの源氏の返歌は巧なるやう
なれとも作意に出　實少し御息所に成て此返歌を
見たりとも我おもふ實はうすくして心かしこくい
ひ落すやうにし給ふと却て腹立もあるへきか詞に
かゝはらす實有て感あるを本とすへきか惣して心
かしこく利口にいひまはし理屈にちかき歌はにく

いけして大かたよろしからさる物なり
この御いきすたまこちゝおとゝの御からなといふもの有ときゝ　水はうるほへるに流れ火はかはけるにつく邪氣は邪念につきて生す然れ共鬼神は横道なし邪氣も神なれは無理なる邪念をはたすけす御息所のは道理にて其無念におもふ念おさめられされは邪氣是もたすけたるなるへし御息所の精神ゆきて靈に成たるにはあらす故父大臣の靈又はたれのたゝりなといふはみなそら言成へし巫の口よせよりましにうつすなといふことはならひありてなすことなりこれ西戎より傳來の一の幻術なり
うつゝにもにすたけくいかきひたふる心いてきて是も邪氣のたくひ御息所の念にたよりてなす事なり夢は少たよりあれはうつゝの心になき事をも見る物なり下々の女なと夫をうらみ妾をねたみなとして是は實にゆきて打かなくりもしいのりても靈になりてもとりころさんとおもへとそのしるしもなしまして御息所なとねたしとおもひ給ふは下らうのことく心根はあるへからすたゝ邪氣も狐やうの物もはやり物なりはやらかせはさま〳〵の天怪をなすものなり今も下々の愚痴なる中には生靈死靈とて色々のことあり是はみこ山伏なとをよせていろ〳〵心をまとはすゆへに幻術にて作りいふ事の中に狐なとのしわさ間にましる事あり昔は歴々もかやうのこともてはやされし世の習により御息所の名をたてし狐狸のしわさも有へし近年文明の運にて次第にれき〳〵はさやうのまとひなき故に生靈死靈のさたもなし人の心むかしのやうに根に入てはまとはすうたかはしき念あるゆへに邪氣出來せぬなり
人にかりうつし給へる御ものゝけとものねたかりまとふけはひ　他人に靈をいのりうつしたるなり其隙に生れたまへるを物のけとものねたかるなりかやうの事も幻術の一色なり實なき事なれは次第になくなるなり紙にても幣を切竹木にはさみ坐中におほく立てゝいのりおとらするやうの事其今もするものありしらさるものはきとくとおもひて驚くなりしりては誰もなる事なり
たいらかにもはたとうちおほしけり　此念は凡情のくせなり我身に敵する人うらみ有人の大病をきゝ

て大かたは死すへきとおもはれよろしきと聞ては
本意なき念出るなり惑ひなり
たゝ芥子の　祈禱の時護摩に芥子をたく事あり其芥
子の香御息所の衣裳にとまるなり是にて御息所の
靈にはあらさる事を知るへし精魂はかりかよふな
らは此香にしむことはあるましきなり神は形なき
物なれは狐なとの天物のかくする事なり御息所の
體をしてみするも天物のさする事なり
はかなき事のおりに人のおもひけちなき者にもてな
すさまなりし　車あらそひの時我をなき者におもひ
けちたる遺恨わすれかたくて其心のしつまらさる
なり他人におしけたれ給はゝ遺恨なりさまてはあ
るましけれと葵上は本臺といひ御息所は忍ひかよ
ひ給ふといふ計にこそあれともに大臣の息女なり
前坊の御息所なりまさりはするともおとるましき
身にかく物けなくあなとらるゝとおもほし恨散し
かたかるへし
のほりぬる煙はそれとわかねともなへて雲井の哀な
る哉　人を戀したひては何となく空のみなかめらる
るものなりまして煙となりしをおもひ給はゝかく
有へきなり
かきりあれはうすゝみ衣あさけれと涙そ袖をふちと
なしける　限りあれはとは定法にまかせて輕服をき
給ふなり此兩首は哀ふかく感あり作意もなく哀情
より出たるなるへし
宮はしつみ入て其まゝにおきあから給はす　此程は
産方の經營のみなりしに思ひかけさる事の出來し
たるなり凡此物語は盈をかくの理をふかくあらは
せり今葵上は夕霧を生給ひおもふ事もなく十分な
るへきに此事の出來たるなり人は尊卑ともに我身
一代の盛あるものなり凡心にて其盛をしらて行末
にては猶よき事もあらんやうにおもひて何となく
月日をくらすうちに盛過おとろへにむかひぬれは
うきにもあひ心しつかにこのましきあそひなとす
へき日比は空敗暮しゝ事後悔するものなり孝子は
日を愛すといへり今日の無事なるは天の慈命なり
學問禮樂弓馬なとの藝にあそひたのしむへし形あ
る物はかくる所なくては叶はす是命の自然なれは
まさん事を願ふへからす其かけたるをませはかへ
りて大なる所そこなはるゝものなり

中納言の君といふはとしころしのひおほしゝかとこの御思ひの程は中々さやうなるすちにもかけ給はすあはれなる御心かなと　年比中納言の君に心はかけなから此程御なさけのかゝらぬを中納言のあはれと見るなり天眞の靈あれは義理に感するなりたとへは我によき事にても其人の不義をは見かきる心あるへし情慾の醉狂の亂れさめて後恥かしかるへし源氏も奇特なり中納言の君もさすか人々の中にすくれたるほとあり本性のよき人は變にあひてみゆる物なり源氏の君も心のすきみにまかせ給ひて葵上の在世日比の無音今更に後悔にて一しほなげきもあれは忌中に眞實を盡し給成へし

少納言はいとかうしもやはとこそおもひきこへさせつれあはれにかたしけなく覺いたらぬことなき御心はへをまつうちなかれぬ　嫁娶の差別もなくいつともなくあるへきと思たれはかやうの所まて源氏の心のつきたるをうれしく思なり紫上その身からといひ寵愛たくひなかりしかとも二條院六條院にても皆對に住給ひて寢殿には住給はす六條院の寢殿には後に女三宮住給へり紫上は婚禮なくてむかへ給へるゆへなるへきか　昔は如此禮義正しかりしなり唐にも無以妾爲妻と見へたり尤種性よく心さまあしからぬ人は婚禮なくてむかへたりとも本妻としてよかるへけれともそれにならひてすちなくいやしき者のしかも心さまあしく色のよきはかりにて本妻と成者あれは家道みたれて子のそたちまてあしきものなり近世は正しき禮義もかたもなくすたれたりと見へたり

すゝか川やそせの波にぬれ〳〵すいせまて誰か思ひおこせんことそきて書給へるしも御手いとよし〳〵敷なまめきたるにあはれなるけをすこしそへたまへらましかはとおほす

榊

ものはかなけなるこしはかきをおほかきにていたやともあたり〳〵いとかりそめなめり黑木の鳥ゐ共はさすかにかう〴〵しく見へ渡されてわつらはしきけしきなるにかむつかさのものともこゝかしこにうちしはふきておのかとち物いひたるけはひなとも外にはさまかはりて見ゆ火たきやかすかにひかりて　上

世の風おもひやるへしかくてこそ國ゆたかに世長

久なるへき道理なれは越やすき小柴を大垣にてかろき板屋はなれ〳〵に見へてあさはかなるやうなれともかへりて卒爾に行きにくきやうなるは禮義のそなはりたる故也古人は宮殿やくらを以て要害とせすして禮儀を御息所はいたりふかくしめやかなる所すくれたる人ときこえたれとも物のあはれしりなさけ〳〵しき所おくれ給へる人とみへたり此ゆへに奏上うせ給ひて後本臺にもなし給はさりしなるへし本妻にしてなさけすくなきは第一の疵なり物のけなとの惡名をおひ給ふも慈愛のうすき故なり

大將の御事侍つるに世にかはらす大小の事をへたてす何事をも御うしろみと覺せ　物語のうへにて見へたる源氏にては好色にのみかゝりて何をなすへきいとまもなくして國政なとにあつかりては用にも立ましき人と世に思へり然れとも詩歌作文管絃に長し給へる事は物語にも見へたり文學達才にして弓馬にもうとからぬ人と見へたり生質仁厚にして人を捨給はす此所大臣の器量第一なり惣して其代にてみると後世より見るとは相違の事有其世には治世無事の時とおもへとも其世の凶事ともを取あつめ一所に書つらねたる記を見れは治世の（此間缺文追て可入）事なきやうなり又戰國の記を見れは朝夕軍ありていそかしきやうなれとも世間無用の多事やみて却て隙なるものなりといへりされは戰國の士には弓馬はいふに及はす文學ともに達者なるものあり合戰の事のみとりあつめ書たる記なる故書にてはさやうにみゆるなり源氏も一生好色人のやうにみゆれともさありては人の交もなりかたかるへしいにしへの書を見るは萬事おもひやりあるへし

おほききさきも參り給はんとするを中宮のかくそひおはするに　此弘徽殿のふるまひはたゝ人の夫婦の中よろしからぬやうなる事なり天子には后女御共に臣妾なれは上よりちかつけ給ましくは是非に及はす我かたよりさくるといふ事はなき道理なり臣君を侵し陰の陽をしのくこれ無道の至極大亂の源なり禮の立さる事はこれより大なるはなし畢竟君に智仁勇の德おはしまさゝる故なり天照皇の御遺敎すたれたる事なけくへし

御位をさらせ給ふといふはかりにこそあれよのまつ

りことをしつめさせ給へることも我御よの同し事にておはしましつるを　唐朝のいにしへ徳盛に道行はれし時は天子の御位を去給ふと云事なし大老に成給へは攝政あり皇子は皆臣にして諸臣と共に歯しゆつり諸臣下の心をも人品をも委しく知しめし天下の諸侯にもしたしく交り下の事をもみつから知給へり本朝上古又同しく攝政し給へり下より上をみる事は見やすく上より下を見る事は見かたしゆへに下に居て下の事人情なとよく知給ひて天子崩御の後位に即て君となり給へは天下の權の臣下にくたるへきやうなし生なから尊位におはしまして下の事知給はさる故に下に知人出來て天下の權うつる事古今皆しかり又天子は天下の尊位なり御子とても人君なり父とても位をさり給へは人臣に准すまつり給ふも天子にて崩し給ひしとはかはるへし生なから父君は臣となり臣子は君と成り給ふも理ならす況や死後をや又院なから天下の政務しろしめすは攝政に似たりさある程ならはそのまゝ在位にてあるへき事なり大舜の天子たるは舜の父は初より庶人なり其上堯の位を繼給て堯の先を祭り給へは堯の子の道理なり又は本生たるはかりにて養給へは何の號もなし出て公卿諸侯百官にましはり有にあらす舜も父母にまみへ給ふ時は御位の用なしよはひを尊み德を尊み其時に中するのみ父には孩提赤子匹夫の時の心にてつかへ給へは何心もなし漢の高祖父に太上の號を奉れるは本理にあらす只舜の如く高祖一人の父母にして無位を以て養て可也後世は此非禮に從ふのみ

大將の君とし月ふれとなを御心はなれ給はさりつるをかうすちことになり給ぬれは口おしとおほす　父兄の勢盛なる時奢らす時めかす謙退質素にして引こもりぬる者は威勢なき時もかはる事なしさやうなる人は世人もいたはりおもへは盛衰ともにさのみかはらぬ物なり又世に色このまさる人はけはしき所ありいろめかすしてはなれかほにも見へすかた〳〵權の姫路よき人からとみへたり

たゝこの大將の君をそよろつにたのみきこへ給へるに猶このにくき御心のやまぬ　源氏と藤壺の事如此大不義は可有事にあらすかやうの事有ては行末源氏さかへ給ふへきやうなし仁者は一旦過ち有ても

終には榮ゆる事をつよくいはんとて如此事書出せるか此物語の大體實事を記るに不相應なり但し此ものかたりは好色を釣いとにして上古の美風を殘せり後世其魚を得すしてつりいとにまとはん事を恐れ其釣糸なる事をあらはさんとて如此大不義の人の假せかたくめつらしき事を作りましへて物語の興としたるかすへてむかしの物語はめつらしき事を好りとみへて竹取の物語なと一向に信するにたらさる事とも有

九重に霧やへたつる雲の上の月をはるかにおもひやるかな　むかしも今もおなし大内なからこよひの月なとをよ所の事に思ひやるとなり其時の勢にて心にかゝる事なれは自然と詞の餘情にもあらはるへし又御外戚の上下をへたてゝ我まゝなるを霧によそへていへるにても有へし

心もとなき所なく世にさかへ時にあひ給ひし時はさる一つものにて何につけてかよをおほしゝらんとをしはかられ給ひしをいまはいとゝいとうおほしゝつめて　人は蕭にあはされは心もみかゝれす智ふかゝらさるもの也生れなからさはる事なく成長したる人は無下に事の心をしらされは大事にはあたりかたし此故に古より亂をしつめよをたすけし人は多くは人倫の變に處し事の難にあひたる人なり

つかさめしの比この宮の人はたまはるへきつかさも得すおほ方のとうり（道理）にても宮の御たうはりにても必あるへきかゝいなとをたにせす　私の遺恨を以てほやけ事を抑揚するは君をなみするなりたとひ人は非にして我は是ありとも私を以て公事にましふへからす況や大后の怒は人のよきをそねみ自の非をしらさるものなり右大臣大后を光にしてほしゐまゝに依怙せらるゝ事これよりうしろくらき事あるへからす

このとのゝ人とも又おなしさまにからき事のみあれは世の中はしたなくおほされてこもりおはす　大將左大臣なとは私の遺恨をもて人の官位をおさふる樣なる事をする人にはあらす中宮も我につらかりし人にあたる樣成心おはしまさすこれを以てみれは弘徽殿の后右大臣なとゝは各別の人からなりこれは大なる事なれとも世の人さやうの善をあけすして一の非あれは其非をのみあけていへり至體の

小人なる人にはかへりてとかめ罪すへき非はなきものなり一事の非を以て全體の善人をすてかしこく罪におちいらさるを以て全體の不善人世にさかゆる事道なき世の中とみへたり

世のおもしとものし給へるおとゝのかく世をのかれ給へは　車あらそひの時下々の奢りたる體をみれはおもひやりふかく人情時變を察してよくおさめたる人とはみへされとも其體おもく〳〵しく大臣めきて二條右大臣の樣に分別なくかろ〳〵しき人とは見へす右大臣のはえ〳〵しさにはたとひ當今の外祖父なりとも大后おはせすは權威かくのことくにはあるましきなり大后は右大臣より根ふかく惡ある人なり桐壺の帝のいかに左大臣を朝家のおもしと思しおきたりとも忽用に立給ふましき勢はみへたる事なり大后を退けすして立置給ふは御あやまりなり君に對して無禮の罪あらはれたり

そのみちの人々わさとはあらねとあまためしたり殿上人も大かくのもいとおほうつとひて左右(ヒダリミギ)にこまとりにかたわかせ給へり　此時分文學盛なりしとみへたり常の事にて珍しからされはわさとかましくかくへきやうなし物の序てに心なくみへたるにてあまねかりし事を知るへし人に上たる人の文旨はあるへからす源氏三位中將なと博文の人とみへたりかやうなるおりのまほならぬ事かす〳〵に書つくる心なきわさとかつらゆき(貫之)かいさめ　かやうの事につけても古人の人の爲に忠ある心つかひ殊勝なり心なく折ふしはからす事とゝむるさへ人の爲いためり況や人のよき事をいひけち疵のみとりあけて披露する心思ふへし

文王の子武王のおとうとゝうちすし給へるは御なのりさへ　此心おこり凶事の出來し先兆なるへし若くて文才に長したるを不祥といへる是なりこれより人を見くたし何とも思はすして愼うすけれは必凶に入物なり此時分唐朝本朝ともに德を好み心をみかく學術なかりしかは博學達才を以て聖賢とおもひしなり故に周公の德をしらすして其才の美はかりをしるゆへに文學に長し物を博くしり詩文にさときを至極とせしことに源氏をは其代には時の有職と天下よりゆるして博學の名を得たる人なれは德をしり給て心のおこりも生すへき事なり

中將の宮のすけなとまいりつやなとの給上けはひの
したとにあはつけきを　大臣の器にあらす不德の體
なり君惡王ならすといへとも智勇おはしまさねは
如此人勢にのりて天下の權を執り是を道なき世と
いふ

おとゝはおもひのまゝにこめたる所おはせぬ本上に
　思慮なく物ことに急なるはあしけれともこれよ
り以下おとゝの申されやうみなことわりなり

おほやけの御かたにうしろやすからすみゆるは春宮
の御世こゝろよせことなる人なれは　朧月夜の事に
つきて立腹はことわりなから當代にうしろくらく
春宮の御代いそかるゝことあるは跡もなき事成へ
し東宮も源氏も立かたくあやうき勢なれはさやう
の所存あるへきやうはなき事なり

なときこえつることそとおほさるれは　源氏と朧月
夜との事右大臣の腹立ことわりなれとも弘徽殿の
心を知なから遠慮もなくいひ出し給は知なきなり

　須　磨

よの中いとわつらはしくはしたなき事のみまされは
せめてしらすかほにありへても是よりまさることも
やと　退てとかなしといへり情る者の心も少しはや
はたにきにくしと思ふ其心もそしりおほせたる所あ
れはいよいよいひたつる罪うすくなる人情大かた
しかり其世に勢ある人のにくみをうけて又そのか
たの小人たちましり議する時は其身に罪なしとて
もたのみには成かたきなり他人の上には平常の事
も取なしやうにて罪になる物なり機をみてよきは
とに身退すして必害にあふ者なりさる故に人の上
に立たまふ人は小人を信し給はさるを明とす常人
は何心なくすくるに小人は才覺をして罪に落いれ
んとかまふることなれは上たる人よくよく明なら
ては一度はおちいる物也君子をさへいてあしくせ
んとおもへは罪におとしいるゝ事和漢ともにむか
しより其ためしおほし況や常人の少つゝ過失なき
ことあたはすいひたてゝ罪におとさん事いとやす
し君臣ともに國天下の政にあつかる人は後世の譏
をおもひて小人惡人諂諛の人を近つけさるやうに
用意すへき事なり

今は世中はゝかるへき身にも侍らねといちはやき世
のいと　いちはやきはすみやかなる心なり急に物の

うと／＼しき心也物に遠慮しきゝあはせみつから
の見聞をもくはへて明白成時にこそ善悪をも沙汰
すへき事なるに我心の怒にまかせ少の事をも大に
いひなしてにくきものにあたりまた人のあしくい
ふを詮議にして急に沙汰するやうにてはやすきこ
となし悪人は諂ひ善人は自退くより外の事なしさ
れは少人に威勢つき出頭する時は國天下の風俗日
々にあしく成ものなり

にこりなき心にまかせてつれなくすくし侍らんもい
とはゝおりおほくこれより大きなる恥にのそまぬ先
に世をのかれなんと　詩述之作要里樂云臣罪當誅天
王聖明程子云道二盡文王心一出來とむかしより君子
の罪をならして建議するをゝ罪責に罪あるにあら
すけれとも君子は自罪なしといはす道を學ふ者も
身の罪なきをいひわけしてふ人の義をあかし度と
おもふあり我罪なしとて身退かすは讒人の讒いよ
いよ深かるへし身退む事尤成へし

なをさるへきにて人のみかとにもかゝるたくひ　倚
侍は夫あるも任せらるゝ事なれは文官百衣とは
かはれる此時代には萬月前の事ともを筆といよへ

き風俗にあらす旦微成の大后何事にかよせて退け
たきと仰給へと祈ふしなれは當今に罪あらさるよ
しの給へるなるへし

臺盤なともかたへはちりはみてたゝみところ／＼ひ
きかへたる　古風の質素面白しいまはいふさる所の
たゝみも其日にしきおきて畳にうつみ用の時召に
たゝさまなり破れざるていみとかへなとするなり
如此費つもりて困窮し天禄永く絶て衰微となるも
のなり

父みこはいとおろかにてもとよりおほし付にけるに
まして昔のきこへをわつらはしかりておとつれきこ
へ給はす　去かたく親しき中は人のゆるしもあり問
給へはとて罪にもあたり給はしたとひ罪にあたる
とも問へき人にて義あらは無是非事なり我のゆる
しなき他人たに義を知る人はかやうの時節の心は
て見所ある事にあたりてはとかめられたるもあし
あなゆゝしやおもふ人々かた／＼につけてわかれ給
人かなしの給ひけるをきくたよりありても問給に
きいふしう心うけれは　凡情のならひ互にかけにて
はとかくいへともわか事をいはるゝを聞ては腹立

するもの也往來の女房なとあなたこなたにつけて追從する故嫁姑あひよめなと中の惡くなる所也はしらかくれに居かくれて涙をまきらはしたまへるさま　尋常のかなしひは哀情そのまゝ見ゆるものなり猶深からぬは心におもふよりは言葉かなしきやうにいふものなり至りてふかきなけきはかへりてはつかしくてしのぶなり紫上のなみたをまきらはし給へる情は至りて親切なり

御はかはみちの草しけくなりて　古人の墓は天子諸侯といへともたゝ土のみかきあけて其上に草木しけれり何のつくろひもなく路の草もしけくわけ入につけても感慨のみおこり孝心發出すへし後世墓の路をきよめ人の目をおとろかし見物のたよりとなる事よからぬ人のしわさなり古質素の陵は今に傳へて有後光嚴院後圓融院以下代々の御墓あるも石塔なといふ事もなく只松柏或は椿植たる計なりたとひ主しらぬも只土のみ高くて人のあはく事まれなり後世の結構すきたるは其子孫ある時はかりにて程なくくつれ木石なととりあはかれて哀なる體になる事なり其代とは孝孫の情をふさき後世に人心をいたましむ古人の心の深きにしかす

ありし御面かけさやかに見へ給へる　其上に任すか如く孝子の心に親をなしと思はすかゝる難にあひたる時は世事ともにましはりなければ眞實の孝心一入なるへし

世ゆすりておしみきこへ　今の風俗より源氏をみれは大にあしきやうなれとも其世の風俗と見へたり其代にも少過て不義の事は一二ありと見へたれ其其時はしられさりしとみへたり源氏好色の下流にたち給ふゆへに人の國の事昔の事迹とりつけていひたる事もあるへし

いける世のわかれをしらて契りつゝ命を人にかきりける哉　源氏の心はたゝ今の別やかて死別に成へきかと思せしと紫上をなくさめてかりそめの生別のやうにの給ひなしたるをあさはかにきこへなし給ふといへともすへて我心におもふ事をのこりなくいひて人の心をいたましむるはよからぬ人の言なり我かなしみの深きをも淺はかにいひなし立歸るましきとおもへとも頓てかへらんといひて人をなくさむるは人をいたはるなりよからぬ人はさほとおも

はぬ事をもいひて人のなけきをます樣にするは不仁なり

月のいとはなやかにさし出たるにこよひは十五夜なりけりと思し　いにしへ禁中の天下なれは政道事しけく打すてあそひし給ふ事もなりかたけれは明月をまちつけ花の時に事よせて詩歌管絃有り心和し樂みてゆたかなりし故なりこの故に世の中もゆるやかなりき近代はいとま多き人も詩歌管絃意かちなり心和せすたのしまさるゆへなり此故にいやしき事のみ胸中に入なり管絃する人は歌をしらす歌をよみ管絃する人も詩に達せる才學なき人多し文學なくては詩歌に實なく管絃にて心の樂をみちひく事しらさる人は詩歌けたかゝらす源氏みる人多しといへともかやうのたしなみなき人遺恨なる事なり

恩賜の御衣はいまこゝにありとすんしつゝ入給ぬ御そはまことに身をはなたすかたはらに　古人君邊をわすれぬ志尤殊勝なり聖廟源氏ともに其恨忠臣の恨にして却て君をわすれさる上世の美風おもふへしゐろこし人もいにしへは日本をは君子國といひしと也天子を拜する事なけれは御衣を拜し給へり菅丞相の詩に去年今夜侍清涼秋思詩篇獨斷腸恩賜御衣今在此捧持毎日拜餘香

よろつの事さまかはりみたまへしらぬしも人のうへをもみ給ひならはぬ御心にめさましう　これは上らふしきに過たるなり在位の人は民の父母なれはしつのしわさはわさともくたりて知給ふへし幸にかかる所に住給ひて見給ふは天下政の本を知給ふ事なり文に過て下にとをくなりつゐに公家の天下の權を失給ひし事一朝一夕の事にあらす心の上臈しくけたかきは利慾なくけたかきをいふ成へし身商人にくたるとも心利におちす好む所義理ならは清白の人なりされは事の上にて黒白をいひかたし

琴をひきすさみ給ひてよしきよに歌うたわせ大輔よこ笛ふきて　歌うたわせといへるは唱歌なるへきか管絃の時唱歌をすれは笛の唱歌をすることゝなりされとも此時はよこ笛吹人なれは唱歌は笙にてもあるへきか笙の唱歌も笛ひちりきに應するやうにふしよく絃の調子にあひたるは面白き物なり笙は舌にて調子さたまり絃も笙を聞てしらへひちりき

も笙をきゝて舌をしらふるなり笛はかりしらふることなく笙ひちりきを聞て夫に應して吹ものなりことに絃に笛一管は吹にくし調子さとからては絃に不合して和せさる物なり笛よけれは面白きものなり

大との丶三位中將は今は宰相に成て人からのいとよけれは時よのおほへおもくてものし給へと世の中いとあわれにあちきなくものゝおりことに戀しくおほへ給へはことのきこへ有てつみに當るともいかゝはせんとおほしなりて俄にまうて給　其比は文武わかれすして公家武家の名もなかりしなり故に如此人の義理ふかししらさる人はかやうなるを大やけにそむくといへとさにはあらすかほとの義勇ある人ならては主君の用にたゝさるものなり

よもすからまとろますふみ作りあかし給　上代の人の心よろしき所見へたり久々にて對面すこしの內の事なれは世上の事人の上なとかたりあかさんに大やけのことしたしき中のことといふへきこと尋問ふへき事大躰ありてはや詩歌によりて情を述なくさみ給ひし事よき風俗なり心ゆたかにして當世の利害に戚々たらさることおもしろし

さいひなからもものゝきこへをつゝみていそき歸りたまふ　おほやけの下知よからぬ故に私の情をのへ義をおもへともとけて後は又おほやけをおそるゝ道に歸着す忍ひてなすはおほやけをおもんする也然れは久しき滯留はあしき故に早くかへり給ふ事尤なり

かくかたしけなき御贈にとて黑駒奉り給　此時まて文武いまたわかれすといへとも源氏は大將をかけ給ひて武將なりつれは無事の時にこそ身退てゐ給へ武の備用意ありと見へたり須磨の住居萬事略義なれとも馬は數をたて置れたる躰なり此物語は女の筆にて男女の交りのみ多く書たれは弓馬の事は見へかたし此所にてかく前後に多くあるへき事をかゝさる所見へたるなり

やよひのついたちにいてきたるみの日けふなんかくおほす事ある人はみそきし給ふへきとなまさかしき人のきこゆれは　公義をおそれ遠慮ふかき躰なり此心にて好色におかしある時の風俗を今よりみるゆへか又下流に立たまふ人なれはつけましたるかさ

ては其身の美質か不祥と成たるにても有へし然れともの時ならは源氏のあやまちはあるへからす

源氏外傳冬之巻

明石

猶風雨やます神なりしつまらて　弘徽殿大后の剛惡の心よりひか事多くし給へるとかめに大雨雷風常にこへて久しきなり心の思（鬼イ）におそれあれは是より愼も出來とみへたり是天の慈命なり大后は剛惡の心ありとも後世の惡にくらへては猶かろき事なり然るに後世咎なき事はいかゝ云上代後世と天下の人品風俗各別なり古はなへての人の心位よかりし故に今よりみれは惡かろしといへともその時にありては大なり其上山林しけり川流深かりしかは鬼神の靈もさとくて咎はやかりしなり惡も又大ならさるにさとし甚しけれは恐て改る事はやし後世はなへての人品惡人小人多し故に小惡も積てとくへからす風俗大に亂て改かたし後世の惡は多くは柔惡なり

猶これよりふかき山をもとめてやあとたへなましとおほすにも波風にさわかされてなんと人のいひつたへんこと後の世まていとかろ〳〵しき名をやなかし

はてん　勇に疵あるを恥とするは武士の情なり此時まてはいまた文武二にあらさる故なり此物かたり女の筆跡なれはやわらか成事はかりかきあらはして武備の事はかきもらしたれと自然に處々にかくのことく武の備みへたり

君は御心をしつめて何はかりのあやまちにてか此なきさに命をはきわめんとつようおほしなせと　生質仁愛ふかき人なる故に勇氣もありしとみへたり上臈そたちにて此書又女筆なれはつよき所は見へぬやうなれとも動なき心の勇をみるへし文武いまたわかれさりししるしなり

人のみかとにも夢を信して國をたすくるたくひ　般の武丁なとの事成へし夢は晝の心の影なりといへりおもふによりてみる夢あり聞見によりてみる事有見聞せすおもはさる事も大かた世間にある事をみるも有感するによりてみる事もありつきなき夢を見るはつきなき意念のおこるかことし苦しみ勞してみる夢もあり恐れて見る夢もあり如此の夢は聖人にはなし聖人には正夢のみあり正夢とは晝の正思のことし書通せさる經典の夢に通するは正夢の類なり學士に志深けれは此夢有先兆瑞夢も正夢なり平人にもまれには有事なり武丁の傳説を夢見給ふは正夢なり是武丁のかねて大臣諸士の許容せさらん事をはかりて天帝の夢にみへ給ふとの給しといふ說は功利の覇術にて大道は行はれさるなり武丁至誠の心にて賢をおもひ給ふゆへに同氣相もとめて夢見給へりこれらは正夢の中の瑞夢成へし孔子の兩楹の間に祭らるゝとみへ給ふは後世至聖文宣王の號を受給ふへき先兆なり源氏の父帝を見給ふは正夢なり近頭も正夢を見たる者有妻死して子二三人有しか奧の間に子供はねたり次の間に父ねたりある夜夫の夢に彼妻來てこはなど打とけて寢給ふそといへるにふとおきたれは奧の間に置し櫃より火もえあかれりいそき櫃をなけ出して滅したりおとろかす（さカ）は夫も子も燒死すへきなりこの妻平生貞正和順にて世に稀なる人なりき此故に死して不亡もの存せるなりこれ神明不測の理なり其時の火は猫のくひ玉に火のつきて衣櫃の上に行てすりおとしたるか櫃にうつりてもえ出たるとなり

いにしへのことをも見しりてものきたなからすよし

つきたる事もましれゝはむかし物語なとせさせて人はふるきを用ゆと常人たに老人の物いひたるは面白き事ましる物也まして一かとある人はおもひやるへし本のねさしいやしからぬ人の民間におちふれ居たらんは一入政道に助ある事有へし源氏はおほやけの御うしろみ政道にあつかり給ふへき人とおほしおきてたれはかやうの所をも人をも見給ふ事後學成へし

おやたちのかく思ゐつかふを聞にもにけなき事かなと　人情誠に然りしかれとも禮義をまちてみつからけす人のいさなひにもなひかさりし賢女の道なりこれは女のなつかしきさまにてしとけなくひきたるこそおかしけれ　箏は年わかく手しなひてやわらか成時よりけいこの勞をつみたるかよきものなりとりわき早只拍子早掻は糸にひた〳〵としなひて糸と手と別ならぬやうになけれは誠の音はきこへぬなりされは箏は女に上手あるへきなり菅掻のはなれ小爪(イナシ)なとのすみてつよく奇麗なる音は又男の勞をつみたるにあるへきか年より手こわく成ても勞ある人のはからめいておもしろかるへし上手のひきける音の耳にはとまりて心はかりはゆけとも手のかなはさるは勞のたらさるなり故人は志ふかく根氣よくてけいこの勞を積たる事格別多し長き曲をも五反七反弾せしなり何の藝も所作と心と相叶されは上手とはならさる物なり

てつかひいとゆとうからめきゆのねふかうすましたり　ゆは左の手なり九はとり十はゆる故にとりゆといへりとりゆといふ時は九十なり然共九もとりてゆり十はすくひてゆる也此曲を後世は左の手のしなとのみ心得て古人の心傳を失ひたりとみへたり此物語によりて心つき(つきイ)て不傳の曲をおこしたる人有左手の色といひなから心のゆくに付てふかくすめる色有必しも箏の上手下手にもよらす是は心のゆくへなれは堪能といへとも其人ならされはしらさるとみへたり筆紙のおよふ所に非す口傳ならては傳かたし

あかしにはれいの秋ははま風のことなるに

明石上の心つかい何に付てもみおとりせすとゝのほりたる人なり男子の賢者たに君臣の間におゐては世になひかぬ獨立たにあしくすれは心よわき事

と見へたり
君はすきのさまやと思せと　明石上の思はるゝ所道理なれはつゐに源氏まけておはしまさて叶はさる事なり其けしきを見て入道もいさなひ入たる成へし
やゝ遠くいる所なり　今は岡邊を岡越といへり入道の濱の家といふ所より十七八丁ありとなり源氏月見の屋敷といふ所もいまあり明石第一の風景なり淡路島山のかさなり海上の體此所殊に勝れたり
二條の君の風のつてにもありきゝ給んことは　平生は何とも思はされとも程經たゝりなとしては我を大切とおもへる妻の事をはおもひ出るものなりかりそめのすさひは一旦興あるやうにてもおもひ入各別なれはそれにつけても一入戀しきなり
かういみしく物おもはしきよにこそ有けれ　女子は父母の家に世こもりてありしよりもまさる身のかたつきは十八に一人なりといへり大かたむかしこひしきものなりおしはかりおもひしにはたかひてさま／＼心くるしき事おほし世のなかはかゝるものそとしれは恨少し
なたらかにもてなしてにくからぬさまに　明石上の心さま奇特なりなしみもなき人をうらみはらたちなとするは淺はかなり我身の程をおもひしりて源氏に恨の色なきは賢なり
二條の君も物あわれになくさむ　紫上心もちゐ奇特なり夫の久しき留守にうたかはしき事なきやうに毎日のありさま繪にかきてさふらふ人々にもしらせぬわさとならぬ日次の記にたしかにしたまへる成へし
つゐに后の御いさめをもそむきてゆるされ給ふへきさため　其ひとゝなり仁愛ふかく我にあたせし人にてもおほやけことに私の恨をむくひすおとなしき心とみへたり其上學力才智ともにかね給ふさやうの人は又たくひ有かたかるへし沈淪を人のおしみ思ふはことわりなり好色の人にて用にも立ましきやうなれとそれは時の風俗なれは其世の人も疵とは思はし又付ましたる惡名も多かるへし今も美男にてすくれたる人には一向なき好色の名立事あり
ありしよりもあはれにおほしてあやしう物おもふへき　はしめはあしきにつきてのおもひ後はよきにつ

きての思なり人間世善惡につけて思ふ事なき日はまれなり智者は世間如此成物としり愚者はかくもあるものかとなけくなり初は明石上遠慮あるへし其上なしみもなき事なれは京の事一入おほし出たるへし又京のきこへをはゝかりなとして思の外のとたへあるへし此頃となりては宣旨いまた下らされとも歸給ふへき定出來て京のはゝかりもうすく其上去年の秋よりの事なれはやう／＼互にむつましくみなれ給ひ明石上は見なれ給ふほとよき人なりおもふ事なきやうになりての別れはなけきも一入深しかくある上にもつゐに濱たちへは明石上出られすおも／＼しく色めきたる所なき人と見へたり又なさけおくるゝものなるに明石上はけたかく女しくとゝのほりたる人なり

入道の宮の御ことのね　女子の箏をよくひき得たるは五聲あやありて糸の色つや各別なり手やわらかにてよく糸にしなふ故かにきはゝしきやうにきこゆる有此故にいまめかしうといへる成へしことさら位たかき人なれはけたかき音もそひてたとへんかたなかるへし

これはあくまてひきすまし心にくゝねたき音そ　明石上の體人の手本と成へし少心得たる事さへ人に所望せられてはもて出やすき物なるに二とせなれし源氏につゐにきかせたてまつらす別のきわに源氏にも父にも催されて涙のとゝめかたきまきらはしに少ひきならしたるはやむ事を得さるなり又なきものにいひし薄雲女院よりも上手なれはその世にはならひなきなり調子にも違しさとき體なりしのひやかにしらふるとは微音に糸合のきこゆるかきこへさるほとにしらふる事なり調子さとく功なくては成かたし但常の心かけならはしにてなるものなり生得聲にさとき人も心かけならはねはならさるものなりことに女のしらへはしのひやかなるへき事なりむかしは笙の調子を吹出す宮の竹をききとりて頓て調子のうちにひは箏をしらへたるなり

ねたき音そまされる　箏の器量すくれておなしすかかき小爪なれとも各別にきこゆとなり

耳なれ給はぬ　今は絕ぬる手なとむかしはあまた有て家々に秘したる手なと多くありたるとみえたり

さやうの事とも秘し失たり涙のまきれにかきならしたれとも猶しのひかたけれはひきさしたるをかほとまてあらん事ともおほさて月ころしゐ給さるは一人なこり多かるへし

澪　漂

此段はさやかにみへ給ひし夢の後は云々の評なるへし

鬼神の事はなきと窮てみれは靈妙なみすへからさる事有ありと思てみれはしるしなき事多し此故に聖人は不測とのたまへり子の難にあはんとする時親の神靈の告たるためしむかしも今も自然にある事なりあるかとみれは又かさねてはなし不測なり源氏の沈困きはまりて至誠に父帝を思ひ給ふゆへに夢に見へ給ふなるへし罪に沈てなと帝の宣ひし事は眼病空花をみるなり上幼主にて政を心にまかすへき人のみつから權をとらんよりは我をそむかぬ人のしかも勢ありし人にとらしめてうしろみしたらんはよかるへしよき事はうちまかせはからはせいかゝと思ふ事は議論し外に居てみることは心虚にて明なりみつからあつかりてはみえかたき事あり葵上の父大臣は先代に功ありし人なり源氏にはそむかぬ人なれは一段とよろしき事なり（上幼主よりといへるよりちゝのおとゝ攝政し給ふへきよしゆつりきこへ給ふさある條の評なるへし）

うけひき　致仕の大臣攝政の事承引なきなり實病にあらさる事は我人しれり世のみたりかはしきに籠居といへは直過て君臣の非をあらわす事しのひかたきゆへに病といへる事はことはなり

二條院にも　是人情をよく知給へり凡人は我身富貴なれは氏筋有人のおちふれともいはす我にしたかふへきやうに思へり心には口おしと思へともわらひを折て首陽にもともなひかたけれは時にしたかひて手を屈し膝をかゝむるもの也源氏は皇子なれは心おこりし給ふとも人もとかむへからすさるにかくあれたる所にみつから立より心中をおもひやりてたのみ給へる事は尤奇特なり古今いやしき者の成のほりたる人は無禮なり

（本文脫する歟）恩にてあたを報ゆと云るも猶心あり人にめいわくさする心有は外は恩を以てすれとも內は人の心を責る所有孔子は德を以て德に報ひ直を以て怨に報との玉へり是は心なし源氏先朝の大后に事る道を以てうしろみ給は直也後白河院の小松の內府に仇

を恩にて報せられしとの給ひしも重盛の心はしからすして父入道を教訓せられしは道理の至極なれは是而也凡人は道理を外にして氣味のよき事を好む物なれば源氏の時を得給ひし折から大后につらくあたり給へかしともどかしくおもふ也（書入云大后はうき物は世なりけりさおほし給りておとゝはことにくゝいさはつかしけにつかふまつり心よく聞え給ふ云々の條の評なるへし）

兵部卿のみこ　紫上の父なり

須磨へ源氏うつろひの時兵部卿宮は世間のきこえを憚り給ひて音信給さりしなり弘徽殿大后がたをはゞかりて外人の音信せさるは自他の爲あしき事なれは尤なりしたしき人をは人情のゆるす所あれは兵部卿はとふらひ給ひても源氏の御爲宮の御爲くるしかるましきにははゞかり給しはきこへさる事なりしたしけれは源氏の恨もさあるへき事なり兵部卿の宮は心うつくしき人なれは又心をおこして義理を立る所なきなり須磨のうつろひを問給ふほとの心ならは紫上をはとられ給はし繼母の姦も出す事なるましきなり

世に鷄冠花をもてあそふ者あり色の美くしき計りにて隨分いやしき花なれは遊女も心といひ體といひいやしき物なり（書入云あそひさものつさひまいれるも上達部聞ゆれとこのましけなるはみな目ととめ給ふへかりつとある條の評なるなり）鷄冠のごとく成へし傀儡は同しものなり洛中におく事は下々のわかき者妻を持へき勢なく倫を亂んとするを防かむ爲に置たる物ゝみへたり後にはいろ／＼かさりをつけ藝能をならはして富貴の人妻子持たる者のもて遊ひとなれりつゐに人にうとまれ或は人をそこなひさま／＼惡事のなかたちとなれり

蓬　生　朱書云是より蓬生の卷なるへし

おやの御かけとまりたる　今もおとろへたる家屋敷金銀にめてゝ賣はなつもの多し又其身の勢によりてはなさてかなはさる事もあるへけれとも大方は舊宅をうりて（つイ）行末のよき者稀なりおとろへなからも親のやしきをまもりて忍ひ過せはとかく一生はおくるものなり賣て一旦價をとりよきやうなれともやかて其直なく成て後悔するものなり末つむ孝心にてはなち給はさるゆへ幸をも得給へり

もとよりありつきたる　末つむのおはの事をいはんとてまつ世に有なみ／＼の人の事をいへりさやうのなみ／＼の人とは受領なとの品の人の世中ゆたかになとあるは中々位をも身をもちあけんと上

﨟しき事を好み心をもたつる事有此末つむ花のおは君なとは心のおとりなるゆゑにやむことなき筋なからかやうの受領なとの妻に成て心も下すしきをかくいへり

人跡なともさせる事なき所もよき人のすめる跡をはなつかしく人のおもひめなれたる岩木も一かとあるやうなりあしき人の住たる所は風景よくても思ひなしよからすされは此おは君も人からよくけたかく上﨟しくは受領の妻になり給ふともおしき事よりといひて人おしむへしよからぬ故此議ある成ゝし古へ男女の縁に位のなつみはなかりしなり男女の生付相應に賤き家の女もいやしきにくたれり歸京ありても月日ふるまてとひ給はぬは忘はて給ふなり末つむの心中なり

衰をみすつるは不義の心にて又さかえに付て媚へつらふを恥ともおもはぬものなり平生はさのみかはりなきやうなれとも心に義理の守りあり人は變にあひてしらるゝなり衰を見すてす權勢にも禮義の往來の外は求なし好色の人は色の爲にたつねよる事なれはあしきと見ては二度かへりみさるなり好色下さまの人はうとむへき末つむを源氏の見すて給はさる慈仁の深き故なり末つむ富あるの人ならはかくまてはかへり見給はしをきはめてまつしきゆへなり萬惡一慈に不勝といへり源氏の末のさかへ給ふ事尤也

關屋

ものゝきこえはゝかりてひたちにくたりしをそ　朱書云此所の本文落たるか

源氏爵をあさくして功をおもくし給也　水至りて清は魚なし凡夫は大かた不屈なる者かちなりそれをとかめては世に人有難し其すてられたる者己かあしき事はいはてかへりて其人を訾り仇となるものなり凡情は如此物とおもひてむかしにかはらぬやうにし給ひしは奇特なり又我によき者をすゝめて位祿を增すは私也公儀の位祿は公義の奉公の功によるへけれは我によきあしきにはよるへからす

繪合

うへはよろつのことにすくれてゑをけうあるものにおほしたり　此本文落たるか

后女御なとにしては繪を好せ給ふ事さもあるへし天子にはあまりやはらか過たり王威うつりて武家

の天下を取へき前表なり清盛頼朝も此術なくては
うはふへからす一朝一夕のゆゑにあらす平氏の亡
ひたるも頼朝の末三代にて絶たるも尊氏の子孫中
頃より武威のおとろへたるもみな風流に過たる故な
り義満か豪奢驕淫をみるへし君風流に過て威大臣
にうつれは末のほろひをはからすして君に威をか
へしては威なく成て自由ならさらん事をにくみ
臣君をはけつこうに馳走過て下の事を知り給はさ
るやうにするなり唐日本ともに古今の凡情なり

才かくといふ者　才學のことわり面白し人學ひされ
は道をしらす才は天質なり不才の人は學ひて己か
益を取德を知才ある人は天下國家の用をなすもの
なり生れ付才ありても學されは其事業いやしゆへ
に才學を兼たるを尊ふなり大かた才學かねたる人
は災にあひかちにて幸を得る事まれなり氣質靈明
なる故にいのちも長からさる人多し

ほんすのかた／＼の　本才ある人は又文才にもすく
れさる者多し本才文才かねたるはまれなり本才は
人情時變に通する才也國天下を治る第一なれは本
才といふ成るへし文才の藝は一能なり

松風

なにはかりのおほえなりとて　總して今の身の位を
わきまへす先祖の富貴なりし事なといひて身を高
ふるはみにくき物なり身はへりくたり心はいやし
からねはよきすちの人成にとてとりたてたき心出
來るは人情なり明石上これにかなへり

おくりにたにとせちにのたまへと　入道か二度都の
地に入さる事は其義あり尼公の夫婦はなれて都の
住居にあるましきか當分のおくり又は折々のほ
りはさもあるへし明石上の下らるゝ事叶さる事は
公義なりしかれとも道ある世ならは折々老父の見
廻りに下り給ふ事あるへし文王の后妃も此事のつ
とめ成就しては年々國をへたてゝ父母を歸寧し給
へり人生第一の孝行たに成かたきは公義重きに過
たり君重きに過れは必下に遠し下に遠けれは君威
かへりてかろく成て終に國天下を失ふもの也

薄雲

姫君をとりはなち給ひてやう／＼明石上の心中を思
ひ知給へり　なみ／＼の人は其子をさへいたはり思
ふ心はなきを奇特の事なり文王の后妃はおまたの

女中を子のことくにし給ヽたらさるをたすけ不及をおきなひ衣服なともそれ〳〵にはへあるやうにいたはり給ひしかは宮女は皆父母のことくしたひたりみつからは事そきあらへる衣をつけ給へとも女しく愛敬ふかくけたかき容體ありしとなり是を以聖女といへり道々しくかとある金言妙語は一つもなしもし男の賢聖のことくならは聖女とはいふへからす聖人には人倫の至りなり故に男は男しく女は女しきなり今は琵琶箏も心にいらすしてけいこもしめやかならす數のみ覺ゆるもありもよほされて役義のやうにするも有明石上のやうに心に入て樂しみに引入まれなり此ゆへに上手もありかたし書入云かしこにはいとのさやかに心はせあるけはひに住して云々の條評なるへしか御心はへなとの世のためにもあまねくあはれにおはしまして　朱書云此所の本文落たるか

威勢に任せ權門たてするを云り此女院は其身權威をふるひ給はす牝鷄の朝するほとこそなけれ國母王侯の母公めのとなとに至て我子の代となれは威勢にほこり世にむつかしくいひあつかはるヽ事有者也然に此女院は世人に苦辛をかけらるましき爲也美質の人とみへたりみちある時に生れ給はヽ賢女ともいはれ給ふへき人からなり　此所は薄雲の女院の行跡の評あるへし

乙女

藤衣きしは　除服の御祓也藤衣をきたるは昨日今日の樣なるに月日のはや立て今日除服あるをよと也古人のあつき情に相應せり末の世の薄きにならひたる人は喪の間一年を久敷思ひて除服を待かぬるにぬきすつるを殘り多く思ふは孝心の至也此齋院は美質の人なるに年頃神事に心をすましゝつかに居給ひぬれはいよ〳〵古風にかなへる成へし　槿ノ齋院也

たかき家の子としてつかさかうふり心にかなひ　朱書云此本文など落たるにや

程々につけて心のまヽに生たちぬる者は文武共に藝能に心をかけす文盲無智にして成人する者多し賤しき家に生れたる者には藝能にも長し才智かしこき有是は我身の程を口おしく思ひよき事をまなひて人らしく成たく思故也後には筋よき人の子も無才なれは事にあつからす次第におとり行賤しき者も才力あるもの成あかれり賤者は藝能あれ共本利欲の心より長したる者なれは人よりはしめ家風

萬事よろしからさるなり學校の本は高き人の家の
子をくたさすおいたちをよくせんとの事なり
時移りさるへき人に　此勢は今も有事也武家なとに
も親の器量あり時のおほへ位祿不足なき家の子の
親の爲にもてかしつかるゝをはしらていつもかく
有へきと思ひ學文才藝のつとめもなく親におくれ
て後思の外に人にあなとりおとしめらるゝ主君も
つゐへなる者に思離るれは立のきなとして本より
無才なれは身を立つへき樣なく飢に及へるもあり
こゝろみさせ給　先習禮し給ふ也是は寮試うけさせ
んとてまつ習禮し給ふ事を云り學生を大學寮にて
試みを寮試と云試は史記をよましむる也よくよみ
たる人を擬文章生に補す擬進士とも云凡儒業つと
むる人の次第道をふるには先補大學生灯燭料を給
はりて九年の間螢雪のつとめをなして功をつみて
後大學寮にて試らる史記をよましめて難義を問ふ
五條の中三條に通するを及第とす即文章得業生に
補すさらに樟梓七年と云てくすの木は七年を經れ
は用に立に喩て七年の間學問して其後式部省にて
課試をとく先詩賦を作る次に策の文をかく昔是に
秀才進士の二科あり秀才をは方略と云方略は無端
の大事と云心也献策の時問題に答てかく事きはめ
たる大事也進士をは時務策と云書に見へたり今の
世には文章得業生二人あり秀才の爲に始より給料
を給ひて學問したる人也其は方略の宣旨を下され
て式部省にて課試せらるゝ也又入學の衆の中に器
ある時博士これを擧すれは大學寮にて是を試て又
史記をよましむ及第の人を擬文章生に補す廿人有
是を式部省にて試て詩若くは賦を作らしむ及第人
を文章生に補す是を進士と云り或は御前にて勅題
を下されて試らるゝ事あり文章生に補して後更に
方略の宣旨を蒙りて課試をとくるも有進士は時務
策たりと雖方略の宣旨を蒙れは方略の試也文章生
の方略をかうふりて献策する事は當職の時と又外
國の掾に成たる時と散位の時とにかうふる也京官
に任して後は献策せさるならひ也或は又文章生さ
らに得業生に轉して課試の例も有或は文章生にと
とまりて方略の式に及さる事も有源氏夕霧の君は
今此例也朱雀院の行幸の次に御前試に詩を作りて
及第し給て進士に成て頓て侍從の官に任したり聖

代の學校の體にはあらす漢唐の德おとろへ文を翫ひし時の風也それたに日本にて盛に取用られ（給ひイ）しは奇特なり此節もし上古學校の政教をうつしたらは今に至て君子の風は有へきを聖代には大學小學ともに禮樂弓馬書數の六藝を致たりと見へたり

御覽し得たる所ありて　源氏の君見知給ふ所ありて師につけられたるなり質直に古風なる故當世にはかなはさる成へし世をはなるへき出家さへ時にもてはやさるゝは時にあわする心ありこは〳〵しく人そゐなきに誠に出家はある事なり

むかしおほえて大學の　只今源氏の御興行にて夕霧の入學したまふ故に志さす人多しとなり何の藝もすくれたる人上手には人おほくしたかひ學ふものなりたとひ上たる人文學藝術おこしたく思ひても師達者ならすしては成難し此故に古はすくれたる者の出來るやうに文武ともにありしなり

世中の事共ゆつりきこへ給人からいとすくよかにきら〳〵しうて　朱書云此本文なとの註釋にや　又すこしおゝしうあさやきたる御心にはしつめかたし　再案此本文の行りなとの註釋ならんか

此[illegible]あれは此病ありかとありてなたらかならぬ病なけれともすまのおちめに身をすてゝとはれしは義ありかとなき人は又義にうとし

秋風樂にかき合てさうか（唱歌）し給へる聲いとおもしろければ　朱書云此本文のくたり抔の註釋にや　又さうか（唱歌）の殿上人あまたさふらふ　再案本文此あたりの註釋なるへからん

今樂人の譜をとなふるは笙笛の覺の爲計なれは音にかなはすして糸にあはすされは弦ひきにくき也弦にくわしき堂上の人々の唱歌は音に叶てよく糸にうつり弦も引よき也笙の譜も笛ひちりきの甲乙いろうつりによくあふやうにいへは面白しこれを唱歌の譜といひたるにや日本へわたりたる樂はみな聲有て辭なけれは別にあるへきやうはなし樂人は大かた唱歌にはふしをきらふ也これふし息にも手にもうつりて管したるくなる故也尤ふし過たるはあしけれとも音に叶はさるは一向いやしき也

思はぬ人にをされぬるすくせになん　朱書云此本文のくたり抔の釋にや　又人世を保ち給へき御すくせはけたれぬものにこそ　再案此本文の註釋なるへし

人を擧又退けなとする事人力の樣なれ共畢竟天命有あかるへき命ある人をあけ廢すへき命ある人を

退ては人力と思也福命有人は一旦おとしても終によくなる物也威勢に任て一旦擧てもとけさる有御心のかなはぬ時そ命なかくてかゝる世はみることと　朱書云此行りの註釋か

世間に浪人ひかみ隱居ひかみとてたゝさへ凡人はひかみ出來て腹立る事あるものなりことに大后盛世の時道理の外に心の儘にふるまひ給へは必しも大后をおし付るとなくとも道理のまゝならは我あしきと思ひ給ふへし世主國君ともに隱居すれは天命にて威おち諸人のおもひ入ちかふ物なり其勢をしらされは腹立多し君子は世の勢をしりてかく有事とおもふゆへにとかむる事なし

玉鬘

總して人は利發にもていてたるは人からよろしからさるなりことに女はおんひんならさるは見苦し女は陰なり地なり靜なるを性とすされは男子よりも一しは驕をいましむる事なり心は利發にてもさやうに見へすつたなきやうなるをよしとすかたちきよけなれど夷中そたちなる人は幽深玄遠の女德有かたし今は都そたちといひて風體はよけれとも人にかくるゝところうすし夷中人ははつる心より人にかくるゝ事ふかけれは女德のかたはかへりて夷中そたちやまさるへき女嫁しては好色のかたにいさなはれす一命のはたし所とおもひてかたく貞心を守りてたゝよはさるを人の妻第一とするなり

初音

さすかにうちとけて　人主自然に威有りて仁愛なれは家風ゆるやかにゆたか成もの也和はかりにては作法みたりかはしく成て和をとけすかへりてゆたかにもなき者也○誠に此時節一時千金寸陰を惜むへき時成へし其世にすむ人はさも思はぬと見へたり今も人々樂むへき天の時を空しくする事多し○浮きに心かろく又心みしかくいら〳〵しくては物の成就しうちつく事はなきもの也心なかからては久しくたもたさるもの也○家居は事たにとゝのふへくはかろく見所有て住なしたるをよしとす屋の結構なるは氣つもりて養生に惡くと云へり柱太からす戶かへの見ゆるを養生には好めり人の家居ことことしくしなして道具とゝのほり過たるはうち見るより主の心あさくおもはるゝものなり

みつむまやとてことそかせ給へきを　朱書云此本文の註釋か　今案水むまやとは男踏歌にいひ傳へたる事也蹈歌に人を饗應するに付て酒或は湯つけなとを用るを水むまやと云事をそきて簡にする心なりまた飯むまやともわらむまやともいふはひきつくろひてもてなすなり踏歌の人の所々をめくるを驛踏にたとへその驛に水はかりも人ものみ馬にもかふは水むまやといふ又人は飯を食して馬にはわらなとかへはいひ驛わらむまやといふことく酒肴はかりを水むまやといひ饗膳を飯むまやと名つけたり厩牧令の水驛といふその心にてはなきなり

螢

人さまのわろらかにけちかくものし給へは　朱書云本文此くたりの註釋か　世に今貞女と云は心けはしく女しからぬ所多し是は貞正にはあらす又愛敬有とみゆるはをくそこもなくやはらかにてたのもしけなし玉かつらは愛敬有て心のそこたゝよはからす是識の貞正也

けにいつはりなれたる人や　朱書云此あたりの本文註釋ならんか　總して人の僞をよく勘辨し推察するを我なからかしこき事の樣に思へりこゝにて見れは賢きにはあらて我心僞多き故也我正路なるにはあらさるへし然らは常に僞りはからるへき樣なれ共さにはあらす無ㇾ情者不ㇾ得ㇾ盡二其辨一と云り

日本紀なとはたゝかたそはそかし　と云る日本紀を何にもあらぬやうにいひなして玉かつらを弄し給へるなり但日本紀人皇紀には天下の大路をしるし神代上下には日本の道を盡したる物なれとも面授口決さま〳〵の神秘多く女の入たつへき道にあらすされは人情時變のこまやかなる事女の心もちひに成とはかへりて有ましき程に日本紀といへとも此物語に及ざる所有へし總して此物語は女のをしへにかきたる書也箒木にも三史五經の道々しきかたを明にさとりあかさむこそあいきやうなからめ云々其頃清少納言なといひしは博學多識にしてれきの學士なとに口あかすへくもあらさる也されは女とちの物語にもをのつから古語をつかひなと女しからすこは〳〵しき事のみ也それをきらはしく思て三史五經に達せん事を戒たりさりとて又人情時變をしらさらんも口おしけれは敎へん爲に

この物語をあらはして女の上の事變を盡し心もちゐをさゐをさま〳〵敎たる也一部の趣意皆女を戒むるに有女のうへ第一のまもりは嫉妬にありそれによりて此物語夫は必色にふける者にて女の方に堪忍する事を本としたりされは源氏の仁厚なるも博達儒士の鬢黑夕霧も佛道を專としたる薰も共に色にみたれ上天子より下右馬頭藤式部迄一婦をのみは守らさる事をさま〳〵しるしてみせたり

常夏

男女とも子の敎は家風根本なり家風は主の德を本としてよき人のあつまるに有其上に心たて身もちなとのしつけはあるへし

篝火

いときは〳〵しう物し給ふあまりにふかき心をも尋ねすもていいて〻朱書云此あたり本文の注釋か善惡のけじめきは〳〵しきはよろしからさる事にやよろつ急なる事は多くは後悔あるものなり但我身の惡を去善に移るは滯なく速なるをよしとす人を用捨する事なとはよく考へ有へき事なり

野分

世の有様に　春のおと〻にて花を見ては秋も及ふましきやうにいひ又た〻今は春をおもひすてたる有さま世人の時にしたかひ勢にうつるに似たるとなり

行幸

なかくしたまふへきほとならぬも人の御むすめとて朱書云本文此あたりの註釋か氏姓を正して不レ亂け王者の政なるに本生の氏姓を改て時にしたかはしむるは大道をしらさる人のなす事なり中國にて漢の世此あやまり盛なり日本にても源氏の時よりはし〳〵ありたるとみへたり武家の代となり梶原は平氏なるに源太と頼朝の源氏のことくよはれしあやまちを傳へて後世盛に成しにや秀吉の時は多くは羽柴をなのれり源氏の時まて上﨟には上古の王風のこりて殊勝の事なりたてたるところむかしよりいと〻けたかき　内大臣の氣性をの給へり一度いひか〻れる事はおれかたき性となり情のこわき意地あり凡情といふ者腹立のまきれにふといひ出して後悔多き事なり人のいひしにおれたくもおもへともおれかねて過ちをか

さり非をとくるあり內府も最前は尤其理ありつれともよく思めくらし給はゞなたらかに禮義をまうけてゆるさるへき事なり夕霧ほとのむこはなし然をいひさかして子にも疵をつけ母公のうらみをおひ給へるは大なる失錯なり短慮のいたす所なり
くた〵〵しきなを人のならひにたる事に侍れと　光こそまさり給へと言まて源氏の事也かうしたゝかと言よりは內大臣の事也しとけなき大君すかたの光こそ源氏もたくひなきやうなれふとさ高さなれあひてしたゝかに宿德の大臣らしきはなすらひてもみへさると也少しいやしき方成へしたけたかく容儀いはんかたなきをおしたてよきと世ほむるは平人のよきなり容儀はほむへき所なけれとも風情けたかく何となく平人ならぬ人有上品の生れ付なりほめたる內大臣よりほめさる源氏のかたはまさりて聞ゆ女も容儀はすくれされとも女しく愛敬ありて又けたかく上臈しき風あるをよきとすへし
思ひよらさりけるよとしれ〵〵しき心ちす（本文此あたりの註釋か）夕霧學者にていにしへの道德禮儀を見聞給へは情に發れとも禮にとゝまり給ふ心あり後世學て益すくなきはよる所有て學ふ者なき故也夕霧は人からよきゆへに學のしるしもすみやか成へし
ないしのかみあかはなにかしらこそ物むつかしきおりぱあふみの君みる（此本文なとに何れにかせし註）人をあなとりなふる事を好もの世に多しわきより見ては笑止なるものなりかへりて見くるしき事出來恥をかくたくひもあり

眞木柱

いかはかりのむかしのあたにこそおはしけん　あたかたきそとみる人に尤生れ付て人の爲意地あしきものも自然にはあれとも多くはみつからとれる事なり玉かつらの事は源氏の心のまゝにも成さる事なり王女御の事は北の方紫上にもしたしくし源氏へも相談し給はゝ源氏の心にてはよそにはおもひ給ふましきなり
さいへと思ひやりふかうおはする人にて　螢兵部卿宮はおもひやりふかきゆへによく分別有て源氏の疎略にあらさる事をよく明らめ給となり〇日頃我心をとゝめて何とかなと欲せし事のたかひしを我心をすてゝ相手の餘義なき情をしりて恨とせぬ事

はおもひやり深からてはかたき事成へし

梅　枝

位あさく　淺位の人は身もちふるまひもかろ〳〵しく平生ならひ人もめにたてされは自然とよからぬ行跡ともましるものなり高位の人はさやうのふるまひおもひなからもふるまはれさる事多かるへしつゐによかるへきこゝろを　人の爲わか爲にしかるへきこゝろをつかへとなり人の爲によき事は我爲にもあしからさる物なりつゐにといへる面白し當分形氣にひかるゝ事は終にはあしき事に成もの也

藤裏葉

何事もおもふまゝにて　此段は前に御息所葵上の事をの給ひてさて世間は定なき物そとなり仍只今源氏の心のまゝに榮花をも盡したく思へとも行末幾り給はん子孫のおとろへとならん事をおもふ故に榮耀をもきはめさるよし紫上にかたり給ふなり盛衰は理の常なり心なき草木たにのかるゝ事なしいかに人をや

須　磨

朱書云此段上須磨の卷の解に出

世の中いとわつらはしくはしたなきとのみ　其世に勢ある人のにくみをうけ又其方さまの小人立ましり讒する時は身に罪なきとてものまれす人の上に尋常なる事もとりなしやうにて咎になる物なり機をみてよきほとに身退ては必害にあふさるほとに人の上に立給ふ人は小人を信せさるを明とす常人は何心なく過るに小人は才覺を以ておとしあなにいるゝやうにする事なれは上たる人よく〳〵明ならては一度はおとしあなに入物なり或いはく源氏は内侍（尚イ）おぼろ月夜のかみの事によせてかく成給へは罪なしともいひかたかるへきか云其時代の風俗を考るに他人にありてはつみとは成へからす尚侍はさたまりたる后女御更衣にてもなしすてに玉かつらは夫を持なから内侍をかけ給へりおほやけさまの宮つかへなりされとも是は天子の御志もある人なり人もゆるさぬ事なれは今の世ならはかろき者ならは死罪おもき人は流罪にも成へきなり又當時は常の事になりてある事にむかしならは重き罪と成へき事あり時代變れは其時代を以て論すへし或聞末代おとろへたる世にさへ成かたき男女のたはふれを上世禮法の盛なりし時みたりかはしき事は

いかゝ云いにしへは此國の人の心たけく勇に過たり八幡宮は天子の御身なから自ら大將と成給ひ其御母は女性にて大將軍と成給ふ況や諸臣百姓に至る迄心たけ過て和をやふりやすく治かたかりしかは人と生れたる者はたれものがれぬ男女の情によりて歌をよみたけきに過て野人成るものはみつからはつるやうにし后女御の定り給ふ數の外の宮つかへの人々は詠歌月花の折々につけて志をみせ人からやさしくおもひいれ或はしのひ或はあらわれしも共に罪有し事をきかす日本は四海第一の武國なれは上代質素の時にはかくあらては和をむすひかたし是和歌の戀を主とせし心なり末代文備りて奢長し風俗やわらかに成武勇おとろへたり此時にあたりて戀を本とし男女相たはふるゝやうにてはいよ／＼王道おとろへて見くるしかるへしむかしは戀をもつてたけきをやわらけ人倫をむつましくし國をおさむ後世はかへりて人道のみたるゝはしとなれはこれをいましめたり源氏なとの時よりやう／＼和の用にはならて害をなすしかれともむかしのなこりにて禁法もなし朧月夜はとの事にて罪とする時にてはなしされともむかしとは天理人情かはりたれはいひ立れは罪にも成たり今も一向の野人の死を何ともおもはす勇に過て立かたき者は和歌のみちなくはしつまるましきと思ふ者あり歌をよみ戀の情出來ての事にてはあらねとも古歌を一二首きゝおほへ心に感したるはかりにても其身の凶をまぬかれ人をそこなはさりし者ありしなり或問もろこしには男女の情欲を用ひて國をおさめたる事なし日本には道なきゆへか云もろこしとても上古には同姓めとらすといひし法もなし男女の別道とて後世のやうにきひしく立たる法度もなかりし也中和の國なるゆへに武の過るといふ事なく文の勝といふ事もなし日本は武國なるゆへに勇に過たりもろこしより禮樂制度わたりて後自然に法も立たるなりむかしはさやうの事もなかりしかは男女の情欲を用ゆるとは思はされとも自然に戀といひてたけき心を和らけたり今も心のおちつかさるわかき者にはおさへの爲に妻子をむかふなと同し事なり學校の政正しく男女ともに時分々々のつとめいとまなくみたりかはしき事なく時分よく婚

細をむすふ上々の事なれとも夫は有德の代の事なり德ある君にても時を得給はされは急にはならさるなりもろこしにても上古には媒の禮も備はらす後世事しけく情欲あつく人の心邪僞に成て男女の心にまかすれは亂に成故媒をさためたり後には媒も又僞出來て巧言をいひてたはかりぬれは諺にも媒ことばといへりせひなく堪忍すれとも夫婦和せす家おさまらす終に家道貧しく公役を欠に至れり上古は大身小身富貧といはすたゝ男女の德のたくひたるを合せたりき聟は大身をとるへく妻は下よりとるへしなとといふこともはしまりたり舅姑につかへやうのよきとあることも貧賤の家にはさもあるへしされとも人から心たてによれは一篇にはいひかたしいやしきより成あかりたる者とおもひやりもあらんかと思へはかへりて下々けはしく人をつかふ事あしきものなりもとよりの上らふはおこらてなりあかりたる者はおこる者なれは夫婦は大身小身をいはすしていにしへのやうに人から次第にあわせたきものなり今は上らうほと慇懃に下らふほと無禮多し是時代のかはり故歟

かのすまはむかしこそ人のすみかなとも有けれ　すまにいたりて右は一の谷ひよ鳥越左は海なれは地せはく要害よき所なるゆへむかしの關所なりきされはむかしは人しけかるへし王道行なはれ天下平なりしのちはさして用心もいらすしてすむ人まれ成へし兵庫明石なとより里はなれあまの家も所々にちいさくてさひしきゆへに名を得たり山谷の景氣繁昌はすましき地なり

よろつのこゝきしかた行末　大も小も親の世に出顯したる者は子の代には大方悪く成者也世の中の婦か姑に成如く行めぐりて又身の上になる事なれとも時を得たる者は心のまゝに奢り後の望有者は人をおとしたく思ふ事淺ましき心ともなり大かたは人のいひなし世のあしきならひにあやかりてふかき思はかりなきゆへなりことに罪なくて時を失ひたる人は世のいとはしさも一入成へし君子なれはかねて心得て身しりそき難にもあはす天命をしるゆへに小人の譏をかなしむ事もなし此時代に今やうの學問もなかりしかはよき生れつきの人も凡夫にて終りし事おしむへし

中にも姫君のあけくれにそへて　眞實の配流にもあらすみつからしりそき給へは紫上本臺といふにもあらす苦しかるましきかされとも遠慮あるは尤なりたとひ配流なりとも夫婦はもろともにつかはさるへき事なり唐にては夫婦はつきしたかひたりと見へたり日本にてはいつよりか妻をはなちとゝむる事はしまれり人情にあらす源氏なとのはそれよりもかろし當分官位はかりけつゝ位田職田のみはなれ給へりとみへたり明石入道は任國して後都にかへらす引こもりたりとみへたり如此の類もろこしにも多し源氏は女君に難義なる配所をみせ給はん事いたはしく思したるを女君はたとひ死におもむくとも一所にこそと思ひ給へる尤至極なり

おとゝてなたにわたり給てたいめし給へりつれ〳〵にこもらせ給へらんほと云々よろついとあちきなくなんときこへ給ふ　これ實に病あるにあらす女院御在位の時は東宮御外戚の右大臣をさし置て世の政を取行ひし人なれとも當今御代に成て御母后の御心まゝにて難義なる事のみ多きゆへにこもられし成へし故院の御世の事をおもひ又御遺言なとをおもひてはいかなる事あれとも源氏なとにかかる事に成給ふへきとは思はれすとなり世のさはりにもなるへくは左遷なとも有へき事なるに年老たる左大臣にさへいさめ給へなとゝの內意もなくかく成給ふ事忽先君の命をそむきたる事かた〳〵にしほたれ給成へし

さきの世のむくひにこそ侍なれは云々　造化のはじめに陰陽五行のましはりによりて自然と人の一生の禍福定る事なり其上に親先祖のなしたる善惡の行の造化の神に感したる所子孫に應する事ありともに鬼神の功用也然れ共今の人心入よく行事よけれはたとひ凶禍の命を生付ても妖は德にかたさる理にてひるかへして吉福至るものなりたとひ福分よく受ても此身の心行あしくては必凶事いたる者なり畢竟とかは其身に歸する理なれはいひもてゆけは身のおこたりと自反の心尤者特なり先祖の善惡の感應造化の定りにて禍福の大にちかひたるはまれなり大方は今の人の心と行からにてよくもあしくもなる事也源氏の身のゆたんとはいひなからかやうに成へき罪のおほえはなし后かたの人々の

いふやうなる事はすこしもなき事なれともあやまりなき心をたのみにて其まゝあらんは無禮にも成へきか主君の御前あしきといふ計にてさしたる事なきにてたにかしこまりたる體にていひわけなく自然に聞召わけらるゝやうにするか臣下の禮なり遠く流罪すへきときこゆれは大なる恥にのそみ給はさるさきに世をのかるへしとなり遁世を出家のやうに思へとも昔の遁世は和漢ともに只世中の交をやめて引こもりゐるをいふあしさまに成たるを恥といへるは今俗に面目といへる類なり身に不義惡事あらは罪にあはすして仕合よくとも恥なり人は只當世の毀譽を心にかけす身の實義をおもひて後世の名をよく考へき事なり

つみふかき身のみこそ　伊勢太神宮は佛法をいみ給ふ故に其詞まていむ事なり佛をは中子とも立すくみともいひ經は染かみ寺はかはらふき塔はあらゝき堂はこはたき僧はかみなか比丘尼は女かみなか齋はかたがしはと云りいむそとて其名をいはぬ事なれは西にむかひてねをのみそなく念佛申と云事いはれさる故にかくいへる成へし大和姫の世記にも佛法のいきを絶と有西南の法は人の國をすゝめとるの謀なれはやかて此國も佛にすゝめられて王道おとろへん事を見給へはつよくいみ給ひしなりみやす所は佛法を信しなから齋宮の地に居給へは後世をねかふことならさるゆへにかくいへるなりいせと加茂には齋宮おはしまさてかなはさるなりことむつかしくなして造作なるゆゑに絶たりと見へたりけたかくいやしからぬ風たにあらは事はかろくして質素の古風にして取立たき事なり大和姫は内侍所をかしらにいたゝき給ひて三室山を經て伊勢の山田の地にいたり給へはむかしはおこりたる事にてはなかりし事明なり

明　石

帝王のふかき宮にやしなはれ給ひて云々天地ことわり給へ　當今の母后の源氏の母更衣をにくみねたみ給ひし餘に源氏までをにくみ給へは此人春宮の御代の御うしろみと定りたれは春宮の御代をいそきて不忠の逆臣ありと讒し給ひしなり内侍のかみの事をついてにして官職をけつり給へるなり逆心の罪は源氏には少もなき事なり無實の讒言を天地こ

とはり給へとなり源氏は帝王の御愛子にて朝夕御かたはらに置せ給ひ其上才智すくれて世の政にもあつかるへき器量なる故にわさと親王にもなし給はす人臣にくたして萬事ならはしめ給ひしなり仁愛ある人もたのみたる故にしつめるともからを多くたすけうかゝへ給ひしなり好色のたゝひとつのみ此人の疵なりしかれともみちある世ならは其不義には至るましき生付なり好色も不仁にて好者有仁愛の質にて好む者あり不仁の者の好色はいやしそれゆへに人をも多くそこのふものなり仁愛才智の人は氣質靈なり靈なる弊は物にうつりやすしこのゆへに教學なく道なき世には色にうつる物なり然とも心根よきゆへにそれを以て人をそこなはす風俗も上らふしきものなり

なにかし延喜の御手よりひきつたへたる事三代になん

山ふしは山林をめくり樹下巖窟をふしどゝするをいふ成へしすへて法師の名とするとみへたり今俗にもてあそふつくしことなとはいやしき物なり何もしらさるものゝ面白く思ふ也正樂の箏ごはの音は田夫野人は松風も同しやうにおもひて一向おもしろく思はさるなりすこし律呂もわきまへたる人又は學問して古風をしたふ人ならては雅樂をは好まさるものなり入道我身を卑下して田舍山伏なれは娘のひわをよしと思ふも眞實よきやらん又ひか耳にてよからぬやらんしりかたしよく聞人にきかせたきとなり延喜帝前代後代たくひまれなる琵琶の御上手なり然るを入道の父大臣直につたはり給ひて上手なり入道又父よりつたわりたり然れとも延喜帝のあそはされし御撥音まことのびわの音といふものには入道もおよひかたしされはかやうなる物とて人におしふる事もならさるに此娘は何としてか自然にまことの音をひきとりひきしつめるはちあたり前大王の御手に通してよく似たてまつりたりこれを何とかしてきかせ奉りたきとなり其返答に源氏なゝの物の音なとは琴をことゝも思はれましきにはつかしとてやめ給也源氏は又古歌の心をとりかへて明石の女はさてはたくひなき上手なるへけれは源氏なとの琴をことゝも思ふましきと也源氏物語抄五卷熊澤氏所作也曾聞全部五十四卷各抄出之

中院前內相公通茂潤色之且擇切於時事者爲五册也全部抄者今出納大藏函藏之乃各册內相自以朱批校之本云以執齋之本敬寫畢

亨保庚子夷則初九　堯臣

右源氏外傳得諸丹波國篠山松崎神童之所

延亨元年甲子夏五月廿七日　湯元禎

天明戊申仲秋七　小草居士收焉

余聞熊澤子源氏外傳久矣偶見根公詢許處々借而謄寫來當推古今人才焉今讀之愈滋味其識高出人意表若玩源語者讀之其益非淺小也但体裁非外傳考之跋中乃非舊稱欲更名曰源語評　于時

天明戊申抄冬　兎道山樵愷識

右源氏外傳はしめよりわかなの下にいたる大關括囊翁藏本をもてかたはら朱書の校合弁朱跋うつし畢ぬ且あかしより末紙の墨跋ともに括翁の藏本にもれ侍りぬ

于時文政十一のとし卯月初八日　花鳫園

凡例

此物語の作者は流布本奥書に抑伊勢物語根元古人說說不同或曰在原中將自記云々因玆有ニ謙退一此奥詞等ニ彥麿曰さらば自讃の詞はいかゞ又曰伊勢筆作也或云生年十三幼書レ之似ニ彼家集文體一故號ニ伊勢物語一云々伊勢家集其端文體偏以同之云非ニ彼筆一者何稱ニ伊勢一乎あかたゐ大人の云伊勢は七條后に仕へし女房なり七條后は昭宣公の御女にて二條后には御姪なりいかでかゝる事かゝむされば物語書しは誰とも知がたし其時代は後撰集の後なるべし拾遺集のころかともおもはるそは後撰集並古今六帖の歌などとりてつくれぱなり仁和の帝芹川の御幸又源順の名など見出てとかくいふは幼しそれのみにあらずいといと後の歌あり定家卿の云上古之人强不レ可レ尋ニ其作者一唯可レ翫ニ詞花言葉一而已云々此論うべなり

伊勢物語と號しはかの奥書に伊勢筆作也云々或說曰爲ニ狩使一下ニ向伊勢一仍有ニ此名一其說又難レ信始則載ニ南京春日之詞一次又註ニ西對夜月思一富士之雪武藏野之烟凡非ニ伊勢國事一多以爲ニ此物語肝心一云々この論いとよし淸輔朝臣袋草子に有ニ密事一之故爲下構ニ僻事ニ上而號ニ伊勢物語一とあり堀川後度百首藤原忠房伊勢ならばひがことぞともおもはまし大和なるてふ美作の池賀茂長明伊勢人はひかことしけり對馬より甲斐川ゆけば和泉野のはら西行法師伊勢人はひかことしけるさゝくりのさゝにはならで柴にこそなれとあるなどをおもへばひかことといふこゝろもて伊勢とは號しならむこの事は臆斷にも古意にも委しくいはれたり彥麿おもふにかの密事ある故に僻ことゝいふにはあらじ實事をは潤色して作物となし僞をはよくとゝのへて誠の如くし本文と左注とを矜楯してよきをそしりよからぬをほめ古歌と自作歌と贈答とし歌と作者の才にまかせてひかこと多く作れる故の名なるべし妹脊の略語なりといふ說は非なり

明月記に寬喜三年八月七日徒然餘日一昨日染ニ盲目之筆一書ニ伊勢物語一其字如鬼とある也廣く翫ふ事の物に見えたる始めなるらむ源氏歌合の卷に伊勢物語といふ名目始て見ゆ其後天福の比の本あり又眞字本は六條宮の御名を僞たるみだりぶみなり假字を用る例をしらず假名のわきまへもなきを古人のしわざなりされど古本によりて書たるにや中には捨がたきところもあり

源氏繪合に在五物語といふ名あり狹衣に在中將日記といふ名有更級日記に在中將集といふ名ありかゝれ

ば古へよりひとつの書ありしにや古今集の端詞業平朝臣に限りて委しく長きは書しところいとゆかし業平朝臣の集などいへるものゝありしに後人作りそへて此物語となしたるか

此物語にむかし云々とあるは誰人とさしていふべからぬとかの中將の集などをもとゝして作りたる書なるべければ業平朝臣を含めたる事決し其よしはあたし人の名はかつ／＼みえたれど此朝臣の名をばあらはさずして含めて書るにてもしらる

三代實錄に業平體貌閑麗放縱不拘略無才學善作和歌云々とあるによりてこの物語を實事なりと思ふ人あれどいと／＼ひがことなりこの朝臣は正しく阿保親王の御子にて平城天皇の御孫なればいさゝかの放縱不拘はとがむべからず同實錄に貞觀十四年五月十七日勅遣正五位下右馬頭在原朝臣業平向鴻臚館勞問渤海客是日官賜宴とありこは職員令に玄蕃寮頭一人掌佛事僧尼名籍蕃客辭見讌饗送迎及在京夷狄監當館舍事と云々とありて好色淫亂の人いかでかゝる職にあつからむされはこの物語の趣意は業平朝臣の實をばあらはさずおもむきにつくり曲げて此朝臣ならぬ如くなしまた根もなき虛事を作りそへて此朝臣を含めたるなどすべて記者の戲に多しあがたゐ大人の云物語の物語なることゝ意得て後に業平のなりひらならぬをしるべきなりといはれたるはいとよろし

此物語の註釋世にあまたあれど得たる所得ぬ所互にありそが中にすぐれてよろしきはひとつふたつなり契沖阿闍梨の臆斷はいと／＼よろしかれど此物語にふかくなつみて實錄の如く說なされたり荷田大人加茂大人の所著は眞字本の誤多きにも心つかずひたすらに古本とのみうちたのまれしゆゑにたかへる事おほくいと異やうなり又眞字本によりてみたりに本文を改め削りなどせられたりされどよるべきはこの三家の說のみなり

今あらはせる圖說抄はかの三家の說をあはせまた鈴の屋大人のたまかつまによりて誤をたゞし彥麿かをもひよれるをもしるして衣服器財草木などあるは其物を見ぬるに圖寫をかりて件ごとに圖をあらはせり見ん人おのがひがごとを見出給はゞいかにも正し給ひてよ速にあらため直してむ

齋藤彥麿

勢語圖說抄卷之一

石見國濱田家人　藤原彥麿誌

むかし男うひかうふりしてならの京春日の里にしるよしゝて狩にいにけり其里にいとなまめいたる女はらから住けり此をとこかいまみてけりおもほえす故郷にいとはしたなくてありければこゝちまとひにけり男のきたりけるかりきぬの裾をきりて歌を書てやるそのをとこしのぶすりのかりぎぬをなんきたりける

「かすか野のわかむらさきのすりころもしのふのみだれかぎりしられず」となむおひつきてやりけるつい（此一句下陸奥の云々の歌の次に有べしさらではおひつきてと云事聞えす）でおもしろき事ともやおもひけむ（春日野の云々の歌のかへしには古き陸奥の云々の歌贈答の次第よろしとて古歌をかへしにしたるなり）

「陸奥のしのふもぢすりたれゆゑにみだれそめにし我ならなくに」となんおひつきてやりける（こゝに入べし春日野の云々のかへしに追つきてこの陸奥の云々をやりたるなり）といふ歌のこゝろばへなりむかし人はかくいちはやきみやびをなむしける（古歌を引直し意をかへてかへしとしたるがいちはやきみやびなり）

昔は大古近古をいはず過にし方を今にむかへていふなればいにしへとはいさゝか意異なりいにしへは去方なりむかしは向方にてその去方を今にむかへていふ名なり○をとこは少子にて少女にむかへたる名なり日本書紀神代巻に可美少男とある訓注に少男此云烏等孤とあり○うひかうふりは中昔のころの元服と同じ少児始て冠を着るを後世は初冠とも元服ともいふ其式は伊勢貞丈ぬしの云児童の髪を理髪の人紫の組糸にて結び髪を短く切なり其時加冠人始て冠を着するなりこの加冠より名をも附るなりといはれたりこは後世北條足利などの時代の式なるべければいかゞあらむしるべからねど大かたのさまも異ならじとおもはる今世の式はいたく異なり○ならは三代實錄に清和天皇貞觀六年十一月七日庚寅先是大和國言平城舊京其東添上郡西添下郡和銅三年遷自古京都於平城云々延曆七年遷都於長岡云々とあり○京は字音にてよむべし眞字本に花洛長安京師など書しになづみて縣居大人はみやことよまれつれどかへりておだやかならずこの物語の時世には詞に字音をまじへ用る事めづらしからず下に修行者御隨身せち（切）にしんしち（眞實）にしちよう（實要）に願立など其外もありかゝれば

京も音にてよまむことさまたげなし○かすがは姓氏錄左京皇別に大春日朝臣出レ自二孝昭天皇皇子天帶彥國押人命一也仲臣令家重二千金一積爲レ堵于時大鷦鷯天皇臨二幸其家一詔號二糟垣臣一後改爲二春日臣一桓武天皇延曆二十年賜二大春日朝臣姓一とありて其所の地名となりたるなり和名抄に大和國添上郡春日加須加 とありさてこの春日の二字はもとかすかの枕詞なりしを後に春日をかすかとよむ事とはなりぬそは明日香の枕詞は飛鳥なるを後に飛鳥の字をあすかとよめる類なり○さとは多戸の略にて民家の群たるを云戸令に凡戸以二五十戸一爲レ里　頭注書人云戸令ヲ引タルハヨシさと云言ノ意ヲトクハココニ入用ナキコトナリ多戸獨處トモニイカヾナリ　○しるよしは知行由緣なり萬葉集にしるといふ領の字を書り其知行所をゆくりにしてなり○狩は鳥など狩に行たるなり○いにけりは眞字本に往の字をかけるになつみてあかたゐ大人はいきけりとよまれて行去とは異なればいにけりとよむわろしといはれつれどこはいきにけりのきを略きたるなるべし下にかゝる道はいかでかいまするとあるは異にてかしこは眞字本に御座と書たるぞよく叶へるこの

言萬葉集にあまた有○いとは最甚などの字の意にていたくと同言也○なまめいたるは遊仙窟に婀娜の字をよめり媚ありてうるはしき意なり○はらからは契沖師は兄弟なりといはれつれど打まかせては云かたしいにしへは同母の兄弟をばはらからといへど異母兄弟をはらからといひし例なし定家卿の女のぬりこめの本に女はら住けりとありこゝに兄弟の事用なければさもあるべくおもはるれど用なしとて兄弟あらばいかゝはせむ下にひとりのみもあらざりけらしといへる例もありまたいとなまめいたるをほめながら女原といやしむべくもあらすかにかくにぬりこめの本はからの二字脫たりとおもはる○かいまみは垣間見にて物のひまよりうかゝふことなり村田並樹はかいはそへていふ詞にて搔の字の意まみは目見なるべしといへり古事記に竊二伺其方產者一とあり日本書紀に覗其私屛とあり竹取物語にこゝかしこよりのぞきかいまみまとひあへり大和物語にさてかいまめに云々などとあり○はしたなくは知顯抄にたらぬことなくよき事をいふといへるはいひもてゆけば末は其意におつめ

れどうちまかせてはいひがたし契沖師ははしたなくのなくは詞にて有無の無にはあらず大氣をおほけなく荒きをあらけなくといふが如しこの説よく叶へりあかたゐ大人はわひしくて有といはむがことしかゝる故郷におもほえずよろしき人のわひしげにてあるを見てはゆくりなく心にしみておもほゆべきなりといはれたりこれもことはたがへれと意は同じ俗にいふ所から不相應の人といふ意なりすべて物のたりとゝのふ事なきをいふ今俗言にも物のそろはぬをはしたといふ其意なり竹取物語にみこは立もはしたに居るもはしたにて居たまへり元眞集に我宿に植てたに見む女郎花いとはしたなる秋の野よりはうつほ物語にいとはしたなき心をなして云々蜻蛉日記にいとはしたなくてかへる事度度なりぬ云々大和物語にいとはしたなくてあしも折捨て云々源氏玉かつらにかへらむもはしたなし云々枕草子にはしたなきもの異人をよふに我かとて云々堀川後度百首にさもこそはよはのあらしのあらからめあなはしたなのまきの板戸や○男のこの字は衍なり眞字本になきぞよき男のとありては

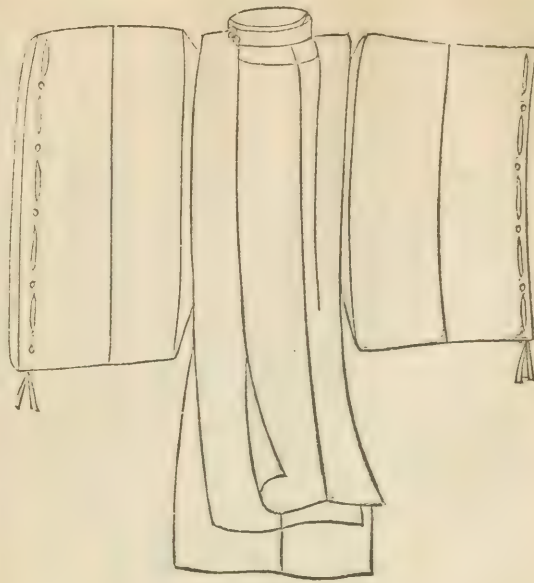
歌を書てやるは女のしわざになるなりと玉かつまにいはれたり古今著聞集に雅通直衣の裾を切て歌を書し事よく似たり○かりきぬは狩の時鷹飼犬引の着る服なりしを弓引爲にも辨利なればよき人も着ることゝなり後には狩ならでも常に着しなり今世には院參の時に大臣以上は直衣納言以下は狩衣となり武家にては有紋を狩衣といひて四品の禮服となり無紋を布衣といひて准六位の服となれり○しのぶずりは知顯抄臆斷古意玉かつまなとの説皆叶はず白き絹に青き物して摺たるよしなり公忠集に打みれは思ひ出よと我宿の忍草もてすれるなりけりとあるを思へば忍草もて摺たるもあるべし○春日野の云々の歌はこの物語の作者のよめる歌なり新古今集に業平朝臣として載られたるはいとひがことなり意は春日野の若紫にたとへてその狩衣も折ふし紫に摺たればやがて若紫のすり衣とつゞけ忍摺の紋の如く思ひみだれてかきりしられずとなり顯輔の歌にきのふみししのふのみだれ誰ならむこころのうちぞかぎりしられぬ○おひつきては追々引續てといふ意なるべし源氏あけ巻にみちの

くの紙におひつき書給ひて云々伊勢集にならの坂のわたりにておひつきておこせたりける云々とあるは異なり○ついでは歌の贈答の次第なり春日野の歌にこたふべきはこの陸奥の古歌こそ次第よけれとてかへしとせしなりおのれ先には下の武藏野の心なるべしとある所と同し趣にて記者の自註なるべく思ひしかどさてはおもしろき事ともや思ひけん又かくいちはやきみやびをなむしけるなどいふにかなはずみつからよめる歌と名高き古歌と贈答に作りなしたる記者の心なり○おもしろきはおかしと同意にて可怜傾歳などの心なり古語拾遺に於茂志呂言衆面明白也とあり○陸奥の云々は古今集戀部に題しらず河原左大臣とありて四の句みだれむと思ふとあり陸奥は東國の極みなればしか號けたるなるべし委しくは諸國名義考にしるせりしのぶは信夫郡に忍摺をいひかけたるなりもちずりは戻摺なり意はこの物語にてはこの衣の紋の如く思ひみだれ給ふは誰故なるぞ我故に亂れ給ひしにはあるへからずなり古今集にては意異なりかれはみつからの心をいへりこれは人の心をことわるなり

古歌の一句をかへて趣意を異にし贈答にとりなしたるは記者のたくみにていち早きみやびなりさて定家卿の云河原左大臣源融寛平七年八月薨七十三於二在中將一非二幾先達一如何こは春日野の歌を實に業平朝臣の歌と思ひひがめ給ひし故の不審なりさてこそ此物語の作者の作り備へたる歌を業平朝臣

冠の圖

として後の集にもえらびとられたれ○いちはやきはちはやふるともと同言にていちは嚴最などの字の意なれば勢ひ疾きなりはやは早速なとの意にて先だちすゝむことなりいにしへは強惡の神なとに云しを後世うつりては物のさとく心さゝたる事にいへる也かげろふ日記にひとく〳〵といちはやく

いふにこそ云々又打ねたる程にかといちはやくたたく云々又せみのこゑいちはやう鳴たれば云々大和物語に此女いちはやくいひければは云々源氏若菜にいちはやきこゝちして云々〇みやひはみやぶりにて都風なり下の鄙びと對言にてさとびなどにも

忍摺狩衣の圖

むかへたる詞なり風はそのならはしをいふ萬葉集に烏梅能波奈伊米爾加多良久美也備多流波奈等阿例母布左氣爾曾可倍許曾この詞は古歌の意をかへてかへしとしたる卽妙をほめていちはやきみやびとはいふなり

むかしをとこありけりならの京ははなれ此京は人の家また定らさりける時に西の京に女ありけり其女世の人にはまされりけり其人かたちよりは心なんまさりたりけるひとりのみもあらさりけらしそれをかのまめをとこうち物かたらひて歸りきていかゞおもひけん時は彌生の朔日あめそほふるにやりける

「おきもせすねもせてよるをあかしてははるのものとてなかめくらしつ

ならの京ははなれは桓武天皇延曆三年に奈良より長岡にうつさせ給ひ同十三年に長岡より今の平安にうつさせ給ひしなり〇人の家また定らさりける云々慶保胤池亭記に予二十年以來歷ニ見東西二京ニ西京人家漸稀殆幾ニ幽墟ニ矣人者有レ去無レ來屋者有レ壞無レ造知顯抄に文德天皇の御時冬つくのおとゞ閑院殿をつくりて帝に奉りしより東の京榮え人の

家居もしきりにたつ云々などあり今も西の京はいたくおとろへたり○西の京は内裏より西なり日本紀略に延暦十三年秋七月辛未朔遷二東西市於新京一云々○世の人にはまされりは世の字はかろくみて大方の人にはまされるをいふ○ひとりのみもあらさりけらしは契沖師はぬしある人といはれたりあかたゐ大人は又思ふ人外にもあるをしらせたりといはれたりともに強言なり彦麿おもふに上にはらから住けりとある類にて母か兄弟か又はめのわらはなどゝ住しをいへるのみなるべし○まめ男は眞實なる男といふ意なり日本書紀に忠誠をまめとよめりこゝには實要に好色に風流なる意をかねてつくれるなるべし○彌生は草木の彌生出るこゝろなればいへり○ついたちは朔日一日の事をいへるなるべけれど此物語にては月の始をもついたちといへるなるべしされはついたちつこもりの日を云る事多くて他日の事まれなるにてもしらるいにしへ月立月隱といひしは月始月末の事なり○そほふるはしめやかにふるなり萬葉集に伊夜彦於能禮神佐備青雲乃田名引日須良霂曾保零後撰集に八月中の

十日ばかりに雨のそぼふりける女郎花ほりに藤原のもろたゝを野べに出しておそくかへりければ遣しける左大臣（小野宮實頼公）暮はては月も待へし女郎花雨やめてとはおもはさらなんなどあるをおもへばいさゝかふるをいふなるべしそとはしづかなる事をいへり古事記に和加夜流牟泥遠曾陀多岐云々こは弱々しき胸をそとたゝくなり今もしかいへりかゝれは今世にしよぼ／＼雨といふは則そほふる雨なるべし○おきもせす云々の歌は古今集にやよひのついたちよりしのひに人に物いひて後に雨のそほふりけるによみてつかはしける業平朝臣とあり歌の意はおきもせすねもせすしてたゝつれ／＼とよをあかしては晝もひねもすにかきこもりつく／＼と打ながめくらすとなりなかめに長雨をよそへたるなり歸りきていかゝおもひけんなどあるにて古今集の歌に今一入餘情をそへたるなり謙德公集によるはさめひるはなかめにくらされて春のこのめそいとなかりける六帖にふしておもひおきてなかむる春雨に花の下ひもいかゝとくらむ千載集につれつれとふるは涙の雨なるを春のものとや人のみ

るらむ毛詩に寤寐思服悠哉悠哉輾轉反側又言言念君子載寢載興といへるによく似たり

むかし男ありけりけさうしける女のもとにひしきもといふ物をやるとて

「おもひあらはむくらの宿にねもしなんひしきものには袖をしつゝも

二條の后のまたみかどにもつかうまつり給はてたゝ人にておはしける時の事なり

けさうは懸想にておもひをかくるなり○ひしきもは和名抄に辨色立成云六味菜楊氏漢語抄云鹿尾菜比須木毛とあり今のひじきなり○おもひあらはは云云の歌は萬葉集に念人將來跡知者八重六倉覆庭爾珠布益乎また玉敷有家毛何將爲八重六倉覆小屋毛妹與居者などいへるをおもひてよめる作者の歌なるべし又古事記に阿斯波良能志祁去岐遠夜邇須賀多多美伊夜佐夜斯岐氐和賀布多理泥斯とあるまてはこの物語の記者は心つかじ萬葉集の歌をとりて六帖又新古今集新千載集などにもよめりむくらは和名抄に葎草本草云葎草和名毛久良とあり歌の意はおもひあらはむくら生ていやしき宿にもねむ引敷物にはそてをしながらもとなり鹿尾菜を引敷物にいひかけたる也○二條后は藤原高子なり贈太政大臣長良公の女清和天皇の御后陽成天皇の御母なり是より以下作者の自註にて本文にたがへる事もあり則作者の意にて與にそなへしなり○みかとは内裏の御門なるを後には國中をもいへりこゝにては天皇をみかどゝいへり○つかうまつり給はては三代實錄に二條后諱高子貞觀元年十一月二十日從五位下五節舞姬この時十七歲なり是より前のことなるべし○たゝ人は凡人なり

鹿尾菜之圖

むかし東の五條におほきさいの宮おはしましける西の對に住人ありけりそれをほいにはあらで心さし深かりける人行とふらひけるをむ月の十日はかりの程に外にかくれにけりありところはきけと人の行かよふへき所にもあらざりけれはなほうしと思ひつゝな

（傍注：行とふらふ　人こゝろさし深かりイ　イニナシ）

んありける又のとしのむ月に梅の花盛にこそを戀て（思ひ出）いきて（てかのにしのたいにイ）立て見居て見みれとこそに似るへくもあらすうちなきてあはらなる板しきに月のかたふくまてふせりて去年をおもひ（こひイ）出てよめる

「月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつはもとの身にしてとよみて夜のほの〳〵とあくるになくなくかへりにけり

五條の大きさいの宮は藤原の順子なり閑院贈太政大臣冬嗣公の女仁明天皇の御后文德天皇の御母清和天皇の御祖母にて二條后の姨なり○西の對に住人は誰ともしれされどまづは二條后を含めたるか○ほいにはあらては契沖師は本意にはあらでなりといはれたり實要にはあらでたゝ好色に心ざし深きをいふ縣居翁の眞字本によられしは誤なり古今集をすてゝ何かは僞作の眞字本にしたかふべき○む月は本つ月なるよし縣居大人のいはれたり睦の字によりていへる說はつたなし○猶うしと思ひつつは有所は聞けど行へき所ならねば猶うしといへるなり○立て見居て見みれとは下にとみかうみ見れと云々といへると同格の文なり其人をらねばなり月やあらぬ云々の歌の意をあらはしたるなり○あはらは和名抄に亭阿波良夜遊子息處小屋也人所ニ停集一也とあり四壁なき亭をいへりこゝにては人も住すあれはてたる家をいふなるべし今も破家をあばらやといへり○月やあらぬ云々の歌は古今集に五條の后の宮の西の對に住ける人にほいにはあらでものいひたりけるをむ月の十日餘になむ外へかくれにけり有所はきゝけれどえものもいはて又のとしの春梅の花盛に月のおもしろかりける夜云々とあり歌の意は月もあり春もむかしの春なりたゞ我身ひとつはもとの身ながら其人なければ昔にも似ぬ事よとなり新古今集に清原深養父むかしみし春はむかしの春ながら我身ひとつのあらすも有哉とよめるは此朝臣の歌を註したるか如しと玉かつまにみえたり新勅撰集に後成卿梅かゝもみにしむ頃はむかしにて人こそあらね春のよの月續後拾遺集に定家卿我のみや後も忍はむ梅の花匂ふ軒はの春のよの月新古今集後京極里はあれて月やあらぬとかこちても誰淺ちふに衣うつらん○よのほのほのとあくるは十日はかりといひて月のかたぶ

くなどおもへは十五日頃なり
むかし男ありけり東の五條わたりにいと忍ひていき
けりみそかなる所なれば門よりもえいらでわらはへ
のふみあけたるついちのくつれより通ひけり人しけ
くもあらねどたひかさなりければあるし聞つけて其
通路に夜ことに人をすゑて守らせければいけともえ
あはでかへりけりさてよめる
「ひとしれぬ我通路のせきもりはよひ〳〵ことにう
ちもねなゝむとよめりければいといたく心やみけり
（みけるを聞ていといたうえんしイ）
あるじゆるしてけり二條の后に忍ひて参りけるを世
のきこえありければせうとたちのまもらせたまひけ
るとそ
東の五條わたりに住人は誰ともしれされど自註に
二條后の事としたるなり本文にはそれといはで其
意を含めたるなるべし○みそかは密なり○わらは
べは童部なり○ついひちに築土なり和名抄に築墻
淮南子云舜作二築墻一和名都以加岐一云豆以比知と
あり源氏須磨に長雨についち所々くつれて云々浮
舟にあし垣しこめたる西おもてをやをらすこしこ
ぼちて云々枕草子に人にあなづらるゝ物ついちの
くつれ云々史記孔子世家云居十月去レ衛將レ適レ陳
過レ匡顔淵爲レ僕以二其策一指之曰昔吾入レ此由二彼
缺一也琴操云孔子到二匡郭外一顔淵擧レ策指二匡穿垣一
曰往與二陽貨一正從レ此入云々○たひかさなりけれ
は六帖にあふ事をあこぎがしまにひくあみのたひ
かさならは人もしりなむ○あるしは誰ともしれず
○人をすゑて藤原の家の勢ひは盛にして並びなき
富榮なるをかくさまにつくりなすぞ記者のたくみ
なる○人しれぬ云々の歌は古今集に東の五條わた
りに人をしりおきてまかりかよひけり忍ひある所
なりければ門よりしもえいらで垣のくつれより云
云とあり大方はおなし歌の意明らかなり伊勢集に
あふさかの關はよるこそもりまされくるゝをなと
て我たのむらむ返しもりませとよるは猶こそたの
まるれぬるまもあらは越んとおもへは源氏藤裏葉
に關守のうちもねぬべきけしきに思ひ云々家隆卿
清見かた我通ひちのせきなれや打ぬるひとも浪の
よる〳〵○いといたう心やみけりは甚強く心痛け
りなり○二條后より以下例の記者のにはむれたる
自註なりとがむべからず○せうとは兄人にて弟人

にむかへたる號なりこゝにては昭宣公國經卿なぞにあてゝいへるなるべし

昔男ありけり女のえう（あふイ）ましかりけるを年をへてよはひ渡りけるをからうしてぬすみ出ていとくらきにきけりあくた川といふ河をゐていきけれは草のうへに置たりける露をかれは何ぞとなむ男にとひける行さきおほく夜も更にけれはおにある所ともしらで神さへいといみしうなり雨もいたうふりけれはあはらなるくらに女をはおくにおしいれて男弓やなくひをおひて戸口にをりはや夜も明なむと思ひつゝ居たりけるに鬼はや（女をはイ）○ひとくちにくひてけり　あなやと　いひけれと神なるさはきにえきかさりけりやう／＼夜も明行にみれはゐてこし女もなしあしすりをしてなけともかひなし

「しら玉か何ぞと人のとひしとき露とこたへてけなましものをこれは二條后のいとこの女御の御もとにつかうまつるやうにて居たまへりけるをかたちのいとめてたくおはしけれはぬすみておひて出たりけるを御せうと堀河のおとゝ太郎國經の大納言まだ下らうにてうちへ參り給ふにいみしうなく人あるを聞つけてとゝめてとりかへし給うてけりそれをかく鬼とはいふなりけりまたいとわかうてたゝにおはしける時とや

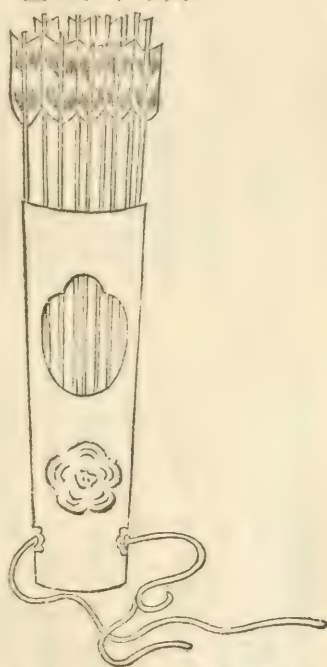
えうましかりけるは難得なり○よはひは萬葉集に結婚と書り竹取物語にやみのよにも穴をくゝりかいまみまとひあへりかゝる時よりなむよはひとはいひける云々源氏玉かつらにけさう人はよにかくれたるをこそよはひとはいひけれ云々枕草子によはひ星ともあり眞字本には夜這ともかけりされどこれらは後の物なれば證に立がたし思ふに結婚の意にて今世にいふ呼迎るも同し事なるべしよはひのはひのつゞめはひなりさるを後にうつりては密にかたらふをもいひしならん猶考べし○からうしては辛勞してなり○くらきにきけり眞字本にはくらきにゐていきけり云々とありてあくた川の下にゐてはなしゐては牽將などの字の意なり○あくた川は攝津國島下郡なりこゝにては京の事の如くかけり作り物語なればとがむべからす○草のうへに置たりける云々あかた居大人はとかくいはれつれと物語なればかくまてことわりを立て論ふべくも

あらずたゞ文のあやとみて過さなむ○行さきおほくは眞字本に遠くとあるぞよき○鬼ある所とも云云下をいはむ料なり○神さへ云々は雷鳴なり枕草子にかきくらし雨ふりて神もおとろ〳〵しうなりたれば物もおほえす云々○あはらなるくらは田舍の里はなれたる廣野又は堤などに公税を藏め置倉なり調貢の後むなしきをあばらなるくらといふなるべし○弓矢なくひをおひ業平朝臣右近衞中將にてあれば弓矢をもてりといふはわろし業平朝臣にまれたゞ昔有し男にまれとかくいふべからず武官の弓矢にてもたゞ常の獵などの弓矢にてもわきいふは幼し竹取物語に此まもる人々も弓矢をたいして云々翁もぬりこめの戸さして戸口にをる云々○鬼はや一口に云々下にあらぬ自註はあれどそは戯れて本文にたかへたるなればこゝにては誠に鬼魅類にとられたるなりすへて物語には多くあることなり日本書紀齊明天皇卷に宮中見レ鬼また於朝倉山上有レ鬼などいへる類なり和名抄に人神曰レ鬼和名於邇或記云於邇者隱音之訛也鬼物隱而不レ欲レ顯レ形故以稱也とあり韓詩外傳に人死肉骨歸二于土一

血歸二於水一魂氣歸二於天一其陰氣薄然獨存無レ所レ依也故爲レ鬼といへるはうるさき理屈なり龍猛大士曰女人地獄使能斷二佛種子一外面似二菩薩一內心如二羅刹一然則於二我門德一者不見二女人一云々こは兒女をおとろかすべき淺はかごとなりこゝに用なければどちなみによりていへり○あなや古語拾遺に事之甚切皆稱二阿那一とありて今も切なる時はあゝといふ是なり萬葉集に痛の字を書るも其意なり○神なるさわきに○ゐてこし女云々○あしずりは眞實にかなしみにたへぬ時にいたくなけくさまをさなひてみゆるものなり萬葉集に立平杼利足須里佐家婢云々また反側足受利四管云々また足垂之泣耳八將哭云云源氏總角にあしずりもしつべく云々蜻蛉にあしすりといふ事をしてなくさまわかき子どものやうなり○しら玉か云々の歌は古今集にぬしやたれとへとしら玉いはなくに云々とあるを思ひて記者のよめるなり新古今集に業平朝臣として載られたるはいとみだり也歌の意明らか也元眞集にしら玉か露かとゝはむ人も哉物思ふ袖をさしてこたへむ○二條后の云々より以下例の記者の戯れなり縣居大

人はとかくいはれつれと言立て論ふべき事かは藤原氏の威勢は其時世のみに限るべからず邇々岐命天降の時より今日に至るまで藤原氏の威勢よわりし時節なし○いとこの女御は染殿后藤原明子なり太政大臣良房公の女にて文德天皇御后清和天皇御母なり○太郎は長良公の長子なればなり基經公は三男なれど良房公の養子にて位階高ければ始にいへり眞字本に堀河大將太郎基經國經大納言云々とあるは位階の高卑によりて兄弟の次第を誤れり○下らうは年臈少くていまた雖官なるといふさてあかたゐ大人は今昔物語に昔業平之妻被喰鬼事之語と題して此本文ありかゝれは此奥書はなかりしを後人書加へしなりといはれ

弓の圖

矢なくひの圖

つれどこの物語も今昔物語もともに作り物語なりこの物語はみやひたり今昔物語はさとひたるのみの違ひなり此物語に奥書ありとて今昔物語に本文のみとりて奥書をとらぬをいかゞはせむ強てとかく論ふは博識の大人に似つかはしからぬ小量なり古事談に業平朝臣盜ニ二條后ヲ宮仕以前ニ將ゝ去之間兄弟達昭宣公等追至奪返之時切ニ業平本鳥ヲ一云々仍生ゝ鬢之程稱ニ見ルト歌枕ヲ一發ニ向關東ニ一云々とありこれらは俗說にしたがひて書るなるべし

むかし男ありけり京にありわひてあつまにいきけるに伊勢尾張のあわひのうみつらを行に浪のいとしろくたつを見て

「いとゝしくすぎ行かたのこひしきにうらやましく

もかへる波かなとなむよめりける
京にありわひて云々は世にありわひてなりわたら
ひも心にまかせねは他國に行むと心ざすなり此段
實の業平朝臣と見る時はいかなる事につきてか其
心を得す古今集に東下りの事あれは文德天皇の御
代の事なるへし續日本後記三代實錄には此朝臣の
事あれと文德實錄に見えざれは其間の事熟されと
用なけれは國史に記されざるは此朝臣壹人に限ら
ねば云がたし〇あつまは日本武命のあつまはやと
のたまひしより然號けられたる但し古事記には足
柄山より東とし日本書紀には碓井山より東とし給
へり〇伊勢尾張の名義は諸國名義考に委しくいへ
ればこゝにはもらしつ〇いとゞしく云々の歌は後
撰集にあつまへまかりけるに過ぬるかた戀しく覺
えける程に川をわたりけるになみの立けるを見て
とあり意は明らかなり文選張景陽雜詩云流波戀二
舊浦一行雲思二故山一といへるに似たり
昔男ありけり京や住うかりけんあつまのかたに行て
住ところもとむとて友とする人ひとりふたりして行
けり信濃國淺間のたけに烟のたつをみて

「信濃なる淺間のたけにたつけふりをちこち人のみ
やはとかめぬ
住ところもとむとて云々此物語はすへて業平朝臣
を含めたれと公の官人私に住所もとむる事あるべ
からすこゝをもて記者のたくみにものしたるおも
むきをさとるべし〇信濃の名義は諸國名義考にい
へり〇あさまのたけ云々日本書紀天武天皇十四年
灰二零於信濃國一草木皆枯焉さて此條尾張參河の間
なるべければ信濃の淺間山見えむをいかゞ後拾遺
集に三河のすのまたにて信濃のみさかの方を見や
りてよめる歌ありこは國界の山なれば淺間とは異
なればなり荷田大人の云くこの條は前の條と次の
條との間にあれば尾張三河の間なりともいふべけ
れど別條にて次第連續の條々にあらず本文にいづ
れの國にて見しといふ事なければ淺間山のみゆる
所にてよみしとみて置べしと云り此說よろし思ふ
に此歌入べき所なければ只何となくこゝにいれし
なるべし强て論ふべからず〇信濃なる云々の歌は
後撰集に信のなる淺間の山もみゆなれはふしの烟
のかひやなからむと云にならひて記者のよめる歌

なり新古今集に業平朝臣として撰ひとられしは例の撰者たちのみだりなり歌の意はかばかりあやしく立のほる烟を遠近人はいかでみとがめざるみとかめぬことはあらじとなり眞字本に禮哉波尖將目とありこれにてはすこしとゝのはぬこゝちすされはあかたゐ大人もみやはとかめぬといへるによられたり

むかしをとこありけり其男身をえうなき物と思ひなして 以上イニナシ

京にはあらしあつまのかたにすむへき國もとめにとて行けりもとより友とする人ひとりふたりしていきけり道しれる人もなくてまとひ行けり三河の國八橋といふ所に至りぬそこを八はしといひけるは水ゆく川のくもてなれは橋を八わたせるによりてなむ八はしといひける其澤のほとりの木のかけにおりゐてかれいひくひけり其澤に杜若いとおもしろく咲たりそれをみてある人のいはくかきつはたといふ五文字を句のかみにすゑて旅のこゝろをよめといひけれはよめる

「から衣きつゝなれにしつましあれははる〳〵きぬるたびをしそおもふとよめりけれは皆人かれいひのうへに涙おとしてほとひにけりゆき〳〵て駿河の國にいたりぬうつの山にいたりて我いらむとする道はいとくらうほそきにつたかへてはしけり物心ぼそくすずろなるめをみる事と思ふにす行者あひたりかゝる道はいかでかいまするといふをみれは見し人なりけり京の其人の御許にとてふみかきてつく

「駿河なるうつの山へのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけりふしの山をみれはさつきのつこもりに雪いとしろうふれり

「時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらむ其山はこゝにたとへはひえの山をはたちばかりかさねあけたらむ程してなりはしほしりのやうになむ有けるなほゆき〳〵て武藏の國と下つふさの國との中にいとおほきなる川ありそれを隅田川といふ其河のほとりにむれ居て思ひやれは限なく遠くもきにけるかなとわびあへるにわたし守はや舟にのれ日もくれぬといふにのりて渡らむとするにみな人物わびしくて京におもふ人なきにしもあらずさるをりしもしろき鳥のはしとあしとあかき鴫のおほき

さなる水の上にあそひつゝいをゝくふ京には見えぬ鳥なれは皆人みしらす渡し守にとひけれは是なむみやこ鳥といふをきゝて
「名にしおはゝいさことはむ都鳥我おもふひとはありやなしやととよめりけれは舟こそりてなきにけりえうなきは一本にやうなきともあり益なきなりそをようなきとして無用の事なりといふはわろし〇三河國は諸國名義考にいへり〇水ゆく川眞字本に水堰川と書るはさかしらなり〇くもては川筋蜘手の如く數條にわかれて流るゝ故に多く橋をわたせるなりあかたゐ大人の書れし圖も上田秋成か書し圖もともに八橋といふ名になづみたる誤なり我あらはせる圖もおしはかりなれば證に立がたけれど凡澤邊のおもむき又其所のさまなとみて思ひはかりしなり後撰集にうちわたし長き心は八はしのくもてに思ふ事は絶せし六帖に戀せむとなれる三河の八橋のくもてに物をおもふころかな〇かれいひは和名抄に餉加禮比於久留俗云加禮比以レ食遺レ人也とありあなかちに干飯のみにも限るべからす旅にての飯なれば餉といふなるべし古今集にふたみのうらといふ所にとまりて夕さりのかれいひたうべけるにとあり內裏に朝餉の御間あり〇からころも云々の歌は古今集に業平朝臣の歌にてある人いはくはなくて旅の心をよまむとてよめるとありからころもの縁によりて來つゝに着つゝをかね馴にしといひ妻に褄をかね遙々に張をかねて五句のかしらにかきつはたの五もしを置たりたくみにめてたくおもしろき歌なり歌の心明らかなり〇ほとひは液字潤字なとの心にて今俗にいふと同し清輔朝臣旅つとにもてるかれいひほろ〳〵となみたそおつる都おもへば史記に膠液船解とあり〇行々て云々道々まとひありく故に三河は春にて駿河へは夏に到れり〇駿河國も諸國名義考にいへり〇うつの山は有度郡內屋なり〇つたは和名抄に絡石本草云絡石一名領石和名豆太蘇敬曰此草苞ニ石木一而生故以名之〇かへては同抄に楊氏漢語抄云鶏冠木賀倍天乃木辨色立成云鶏頭樹加比留提乃木今案是一木名也さて眞字本には鶏冠木葉云々とあるによりて者とあるは誤也といふ說あれとかへりて葉とあるそ誤なるさる詞きゝつかす玉かつまに上の道は

のはと此かへてはのはとかさねたる一の格なりとあり古今集に秋はきぬもみちは宿にふりしきぬみちふみわけてとふ人はなしと者を三つまでかさねよめりさるをあかた居大人もかへて者といへはいまひとつほかにものあるやうにてわろしといはれつるはかへりてわろし道は云々かへては云々と二つあるをや○すゝろに文選註に坐者無故辭又不慮不覺などの意なり○す行者あひたりに修行者の來れるかあへるなりかなたよりあふをいへりいまはこなたよりゆきてかなたにあふこととのみおもへる故ににの字脱たりと思ふへし必脱にあらす古のてにをはなり今とは自他の違ひあり古事記傳の：……をひらきみるべし○いまするは眞字本に御座と有こゝろなり古事記佐々那美遲袁須久々々登和賀伊麻勢波夜萬葉三好爲而伊麻世荒其路同西邊遠君之伊座者又作伐久伊麻志豆速已庵又山越而往坐君乎者また十五大船乎安流美爾伊太之伊麻須君また多久夫須麻新羅邊伊麻須又廿安之我良乃夜散也麻故要豆伊麻志奈婆又久還幣麻之奈波古今法皇西川におはしましける日又布引の瀧御らんせんとて

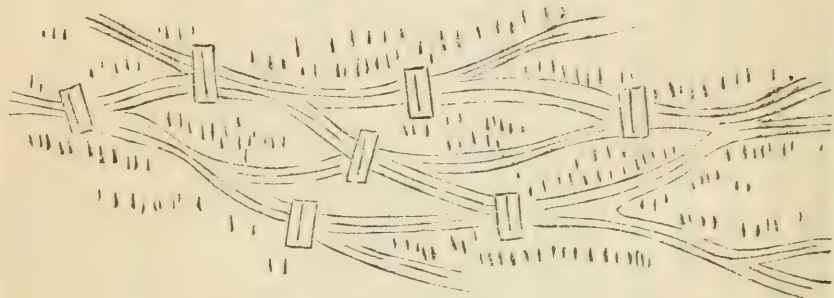
七月七日おはしましける時徹ひて尊なり今俗にも座に在事をも出行事をも入來ることをも御いてなさるといふ○其人の御許は二條后なりと打まかせていふにもあらず名もしれぬ人なりといふもかたくななり裏には其后を含めたるなるべし○駿河なる云々の歌は古本忠岑集に駿河なるうつの山へのうつゝにも夢にも君をみてややみなんとあるをとりて記者のよめるなるべしそを新古今集に業平朝臣として載られたるは例のひかことなり六帖に音にきくうつの山へのうつゝにも夢にもみぬに人の戀しき新續古今集にうつの山越しむかしのあとふりて蔦のかれ葉に秋風ぞふく家隆卿思ふ事蔦の紅葉に書付つ都におくれうつの山風○ふしの山は延喜神名式に駿河國富士郡淺間神社名神大この山孝靈天皇の御代に一夜の間に出現したりといふはあらぬいつはりごとなり萬葉集に天地之分時（アメツチノワカレシトキニ）從神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎云々とあり義楚六帖といふ書に日本國都城東北千餘里有レ山名ニ富士一亦名ニ蓬萊一其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有ニ諸寶一流下夜即却上常聞ニ音樂一徐福止レ此謂ニ

蓬萊ニ至レ今子孫皆曰ニ秦氏ト此是後周世祖顯德中日本僧弘順所レ語なりとあり○さつきは早苗(ワサナヘ)月の略なり○つごもりは月隱なる事既にいへり○時しらぬ云々の歌は記者のよめるをしらすして業平朝臣として新古今集に撰ひとられたり意は夏冬をもわきまへぬこの山はいつとおもひてか鹿子まだらに雪はふるやらむとなり萬葉集ニ燎火乎雪以滅落雪乎火用消通都云々反歌に不盡嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布刺家利風雅集に時しらぬ里は玉川いつとてか夏の垣根をうつむしら雪○ひえの山をはたちはかり云々こは高さをくらべたるのみにて山形は下にたとへありさるを眞字本に重上將有體而云々とかけるはさかしら也竹取物語にもちのあかさを十あはせたるはかりにて云々○なりはしほしりのやうに云々これ山形をいへるなりこのしほしりと下の右近の馬場の日をりの日とは物語中の難語なり契沖師はうつほ物語のつほしりと延喜式の花形鹽杯とを合せてことわられつれとこゝろゆかずあかたゐ大人は眞字本の體而鳴者云々にすかりて山形は上に高さとともにひえの山にたとへ有

ばこゝは鳴にて鳴澤の鳴音を難波川尻にたとへたるなりといはれたり上田秋成も鳴の字にすかりていつこにもあれ潮水の岩にふるゝを潮しりといふなどいへりみなたがへり天野信景かしほしりといふ書に海民鹽をやくに砂をあつめて堆をなし畦をなす潮水來りて砂畦をひたす所によりては潮を汲てひたすなり日々にかくして後に礒をつみ山のやうに作りて日にさらす是をしほしりといへり誠に富士の形に似たるよし玉かつまにみえたり○猶行行ては上に三河より遠江を過て駿河にいたる故に行々てと有こゝもまた駿河より伊豆相模を過て武藏をも過むとする所なれば猶行々てといへり○武藏下總も諸國名義考にいへり○隅田川はいと心得ず萬葉集に亦打山暮越行而廬前之角田川原獨可毛將宿とあるは駿河國なりまた紀伊國に眞土山あり庵崎あり隅田庄ありそこに川あり今は眞土川といふまた六帖にいてはなるあをとの關のすみた川流れてもらん水やにごるとこは出羽國なりかくて更級日記には下總國と武藏の堺にてあるふとゐ川といふ云々武藏と相模との中にゐてあすた川とい

ふは在五中將のいさこととはむとよみけるわたりなり中將の集にはすみた川とあり云々とありされど此物語のみかは古今集にもすみた川とあれば誤りしにもあるべからずさて今此江戸なるすみた川もかく名高く世になかれたるは御里の繁榮によりてなるべしそのはしめはたしかならねと庵崎眞土山などいふ所も聞ゆめりいかなる好事のもの丶いひふらしたる事にか猶よく考ふべきことなりかし御里といふ事は京の町をいふ名目なれども江戸なともいふべきなり○わたしもりはや舟にのれ云云土佐日記にかちとり物の哀もしらでおのれし酒をくらひつれは早くいなむとて汐みちぬ風も吹ぬべしとさわけば舟にのりなむとす云々よく似たり○皆人物わひしくて云々友とする人々皆わひしかる也京におもふ人もある故也○水の上に遊ひつ丶云々契冲師は水上にあそぶ鳥の足の赤きはみゆべからす古今集に川の邊に云々とあるを詞をかへて書たるか物語なればしひてとかむべからすよしいはれつれと水に浮むのみにあらず立居するもあそふなれば難なかるべし○みやこ鳥は說まち／＼なれどよくかなへるはありやなしやいまだ思ひ得す鷗也とはやくよりいへといまだ其證をしらす萬葉集に布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎爲都都奈久波美夜故杼里香蒙と詠るは難波の堀江ときこゆれば高津宮又は長柄豐崎宮などのころ其所にていひなれたる名にや此歌を始として都鳥の歌代代の集にあまたあれどみな水鳥をよめるなりそか中にうつほ物語に名にしおふ關をも越し都鳥聲する方を百敷にしてまた六帖にめつらしく鳴もきたるか都鳥いつれの空に年をへぬらんわひ人の住ぬる宿は都鳥音つれたえて年そへにけるなとあるは水鳥とのみもいひがたしこれらは都鳥といふ名にすかりてよめる後の歌なれば證には立かたけれど強て思ふにみさこ鳥にてはあらざるかさとやとは相通ふ音なり和名抄に雎鳩和名美佐古鶚屬なり好在二江邊山中一亦食魚者也とあれば水邊のみならす山林にも住りとみゆまた萬葉集に佐を夜に誤りしにはあらざるか字體よく似たりされどこはこ丶ろみにいふのみなり○名にしおはゝ云々の歌は古今集にありて業平朝臣の歌なりはし詞は大方同しさ

まなり名にしおはゝ俗に名高きと云事ぞと心得し人あればいふなりこは其名身己かうへにおひぬるなちはと云意なり歌の意はあかたゐ大人は拾遺集なる心ありてとふにはあらず世の中にありやなしやをきかまほしさそといふを引て生死の程おほつかなくてとふ也といはれたるはわろしこはからす都てふ鳥の名を聞てさらば我思ふ人もこゝにありやなしや

八橋之圖

鹽尻之圖

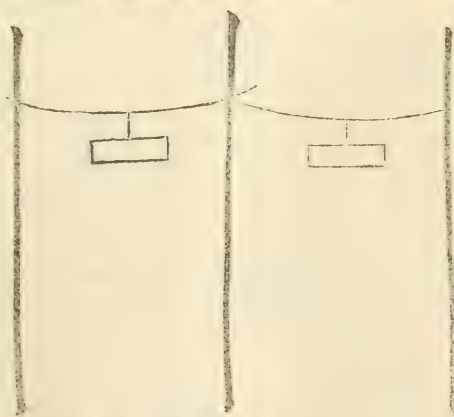
ととふなり○舟こぞりては舟の人みなことゞくと云意なり日本書紀孝徳天皇卷に被レ遣ニ大唐一使人高田招麿等於ニ薩摩之曲竹島之門一合レ船沒死云々の心なり莊子に擧レ世而擧レ之不レ加レ勸註擧皆也と有にても知へし

むかし男武藏の國まてまとひありきけりさて其國にある女をよはひけり父はこと人にあはせむといひけるを母なんあてなる人に心つけたりける父はなほ人にて母なむ藤原なりけ

ふ所なむあてなる人にと思ひける此むこかねによみておこせたりけるすむ所なむ入間の郡みよし野のさとなりける

「みよし野のたのむの鴈もひたふるに君かかたにそよるとなくなる むこかねかへし

「我かたによるとなくなるみよし野のたのむのかりをいつかわすれむとなむひとの國にてもなほかゝる はたえすぞ有けるイ となむやまさりける 下若草の條にあるべきなり

よはひは結婚なる事既にいへり○こと人は異人にて外の人也○あてなる人は貴人にてこのむこかねを云○なほひとは尋常の平人也○藤原はもと大和國高市郡藤原郷の名よりいてたり藤原系圖に藤原地名在二大和國一鎌足之所住也と有姓氏錄左京神別天神部に藤原朝臣出レ自二津速魂命三世孫天兒屋根命一也二十三世孫内大臣大職冠中臣連鎌子古記曰鎌足云々天命開別天皇諱天智八年賜二藤原氏一男正一位贈太政大臣不比等二天渟中原瀛眞人天皇諱天武十三年賜二朝臣姓一と有○むこかねは源氏うつほ等の物語にきさきかねなと云と同しくてかねてより

聟になるべきよしにていへり○入間郡は萬葉集に以利麻とあり和名抄に伊留麻とあり○みよし野の郷は入間東郡川越領的場村の邊にありと其郷人いへり○みよし野の云々の歌は續拾遺集によみひとしらすとありたのむは田面に頼むをかねたりひたふるは永の字一向の字などの意なりそを引板(ヒタ)振にいひかけたり歌のこゝろ明らかなり定家卿たか方による鳴鴈の

引板の圖

聲たてゝなみたうつろふむさし野の原○我かたに云々の歌は同集に前の歌のかへし業平朝臣とありこも例の撰者のひがことなり二首ともに古今六帖にある歌なり此歌の意も明らかなり新古今集に時

しもあれたのむのかりの云々こは大和の吉野とひとつにしたるたくみの歌なり○人の國にても云々こは記者の自註なりあかたゐ大人はすへて自註は後人の裏書なりとて捨給ひながらこれらの自註をはさま〳〵にいひたすけておかれたりいつれをか取捨すべき

むかし男あつまへ行けるに友たちともに道にいひおこせける

「わするなよほとは雲井になりぬともそらゆく月のめくりあふまて

友たちともに云々こは別條なれと上の條を含みたるなるべし○わするなよ云々の歌は拾遺集に橘の直幹か人の娘にしのひて物いひ侍りける頃遠き所にまかり侍るとて此女のもとにいひ遣しけるとあり古來風體抄に遠き所にまかるとて女に遣しける大江爲基とて此歌あり拾遺集の詞書の人のは衍字にて直幹か娘に云々遣しける大江爲基と有しか名脱したる故に後人さかしらに人の字を補ひしなるべし歌の意は遠き國にへたちゐて道の程雲井の如くはるかになりぬともそら行月のめくりあふ如く逢へき時をまちて忘れ給ふなとなり

むかし男ありけり人のむすめをぬすみて武藏野へゐて行程にぬす人なりけれは國のかみにからめられにけり女をは草むらの中に置てにけにけりみちくる人此野はぬす人あなりとて火つけむとす女わひて

「むさし野はけふはなやきそ若草のつまもこもれりわれもこもれりとよみてけるをきゝて女をはとりてともにゐていにけり人の國にても猶かゝることなんやまさりける こゝにあるへきなり京都にてあくた川の段にむかへて人の國にてもともの字有にて知べし

國の守は武藏は大國なり官位令に大國守相當從五位上とあり職原抄もおなし○からめられにけり契沖師は草むらの中に置てにげにけりといふより下にあるべきを落着を上に先書たるなりといはれたり○みちくる人は道來る人なり滿來にあらす眞字本に路行人とあるを岡田大人の認來人の誤かといはれつるもともにさかしら也○火つけんとすぬす人のかくれたるを燒んとてなり日本書紀景行天皇卷に日本武尊初至二駿河一賊有レ殺レ王之情一放レ火燒二其野一云々○むさし野は云々の歌は古今集に題

しらすよみ人しらすとある歌をとりて春日野を武藏野に改め春野の意をつくりかへて餘意を含めたり若草のつまとつゝけよめるは枕詞なれど此歌にては一首にめくれるなり日本書紀仁賢天皇卷に弱草吾夫怜矣自注に古者以二弱草一喩二夫婦一故以二弱草一爲レ夫とあり歌の意は春になれば野はやく時節なれどむさし野はけふは燒事なかれ若草のつまも我もこもれるぞとなりこの歌は古今集の意を作りかへたり古今の歌は萬葉集に於毛思路伎野乎婆奈夜吉曾布流久左爾仁比久佐麻自利於比波於布流我爾といへるによりてよめり○ともにゐていにけりはにけたるをとゝめてからめたるなり大鏡に二條后のいまた姫君にておはしける時なり平中將のしのひてかくして侍りけるを御せうとの君たちもとつねの大臣國つねの大納言などのわかくおはしけむほとの事なりけんかくとりかへしにおはしたりけるにつまもこもれりとよみ給へるは云々こは虛を實にせる物なりと契冲師はいはれたり○上條の自注人の國にても云々はこゝにあるべきなり

むかし武藏なる男京なる女のもとにきこゆれははつかしきこえねはくるしと書てうは書にむさしあふみとかきておこせて後音もせすなりにけれは京より女

「武藏鐙さすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし

とあるをみてなむたえかたきこゝちしけり

「とへはいふとはねはうらむ武藏鐙かゝるをりにや人はしぬらむ

京なる女はたれにてもあれ昔男のしれる人なりさたかにそれとさすべきよしなし○きこゆれは云々は前條なと含みたるにても有へし○うはかきは表題なり紫式部北へゆく鴈のつはさにことつてよ雲のうはかきかきたえずして○むさしあふみは元正天皇の靈龜二年高麗人千七百九拾九人此國にうつされて高麗郡を置れし事續日本紀にあり或說にこの高麗人ども鐙を作りて貢しよしいへり今も本鄉の邊に鐙坂といふあり○むさし鐙云々の歌は古今六帖に定めなくあまたにかゝる武藏鐙いかにのればかふみはたかふるといへる歌によりてよめるなるべし伊勢貞丈ぬしの臆斷別勘に契冲か鐙はさす

といへはさすかにとつゝけたりといへるは誤なり
鐙をはかくるとこそいへさすとはいはす此歌にさ
すかにかけて云々次の歌にもかゝるをりにや云々
また六帖の歌にもあまたにかくる云々とよめるに
あらずや云々とありこの論いとよしされど逆鞖に
鉸具ありて鐙鞖のみづにさす金をさすがねといふ
是にあふみをかくる故にさすがとさすがねといひ
かけたるなりといはれつるは餘りに强言なり此歌
さまてうがちてよめるにはあらずたゝ始にいはれ
つるにてことたりぬべし和名抄に鐙和名阿布美鞍
兩邊承脚具也とあり古代の鐙には唐鐙壺鐙大壺
鐙舌長鐙舌短鐙鏡鐙等の名あり武藏鐙は高麗郡よ
り貢しなるべければ唐鐙かとおもへどなほ倭鐙な
るべしさすかにはしかしながらしかながらさなか
らしかすかさすかみな同言なり思ひめくらしてさ
とるべし歌の意はむさしにて他心ありてあまたに
かよへる心はくやしけれどもさすかに心にかけて
賴みおもふにはとはですてなむもつらくまたとひ
おとつれむもうるさしとなり○たへかたきはこら
へかたきなり○とへはいふ云々の歌は男のかへし
なり意はつらしとてとひ給はば思ふ心をいひやる
べしとへはうるさしとのたまふとはねはつらしと
うらみ給ふかゝる時には死より外の事なしといふ
意なり

むかし男みちの國にすゝろに行いたりにけりそこな
る女京の人はめつらかにやおほえけんせちに思へる
心なむ有けるさて
かの女
「中々に戀にしな
すはくはこにそな
るへかりける玉の
緒はかり歌さへそ
ひなひたりけるさ
すかに哀とや思け

金澤文庫所藏武藏鐙の圖

むいきてねにけり夜ふかく出にければ女
「夜の明はきつにはめなむくたかけのまたきになき
てせなをやりつるといへるに男京へなんまかるとて
「くりはらのあねはの松の人ならはみやこのつとに
いさといはましをといへりけれはよろこほひて思ひ
けらしとそいひをりける

みちの國はみちのおくなるをおを略きてみちのくといひしをこゝにみちの國とあるは略に過たり委しくは諸國名義考にいへり○すゝろは上にいへり○せちは切なり○中々に戀に云々の歌は萬葉集に中々二人跡不在者桑子爾毛成益物乎玉之緒計といへるを少しかへてこゝに出せり桑子は和名抄に蠶和名賀比古虫吐レ絲也とあり淮南子に蠶食而不飮二十二日而化とあり歌の意はあふことかたき戀にこかれしぬるよりはわつかの命の間なりとも桑子となりて男女もろともにまゆにこもりをらんとなり○ひなびは鄙風にて上のみやびにむかへたるなり○あはれはもと歎息の聲にてよきにもあしきにも切なる時々にあゝはれといふ辭なり歌には愛すべき方に多くよめり俗言には悲しむへき方にのみいへり○夜もあけは云々の歌は萬葉集に刺名倍爾湯和可世子等櫟津乃檜橋從來武狐爾安牟佐武といへると六帖に夏のよの子持からすのさかそかし夜ふかく鳴て君をやりつるといへると二首調合して作れるがごとし 頭註書入云大平云二首ヲ合メ記者ノ作レルニハアラザルベシコレモ古代ノ歌ノ一首ナルベシカノ二ウタニ似タル所アルハ自ラノコトナルベシ きつは狐なり和名抄に狐和名木豆禰爲ニ妖恠一至ニ百歳一化爲レ女者也また日本靈異記に汝吾不レ忘レ汝毎來相寐故隨ニ夫語一而來寐故名爲岐都禰云々令三相生子名號ニ岐都禰一亦其子姓負ニ狐直一云々○くたは說々まち／＼なれどみなよろしからず東國にて家をくたといふといへるも附會の說なりまた唐丸しやむちやぼ南京などいへる俗の名にむかへてくたは百濟なりといふも心ゆかず思ふに鷄をにくみのゝしりて腐かけといへるにてはあらざるかよく考ふべし村田並樹云夜くたちて鳴物故に鬮かけし名を負せたるならむ梵語に矩羅俱吒といへると似たり混ふべからす 頭註書入云大平云くだハ頽ナルベシ頽愚頽狂ナドノくなニテくなかけトノリテイヘルナリホトヽギスホトヽギスト云フヤウノコトシイマダ夜ノ明ハテザルウチニ背名ヲ遣タレハまたきにト云也 かけは家鷄の字音なりといふも附會なり神樂歌にはとりはかけろとなきぬ云云とうたへるぞ名の意なる古事記に爾波都登理迦祁波那久云々またきは鳥の鳴べき時もいまだ來ざるに鳴といふ意せなは兄にて男をさしていふなり歌の意は夜も明しならば狐に喰せなん鷄のはやく鳴て男をかへしたる事のうらめしきにとなり○まかるは京より外へ行をまかるといひて京へ行をば

まゐるといふべきをこゝにまかるとあるはこの頃やゝ詞も亂れたるなり○くりはらの云々の歌は古今集にをくろさきみつの小島の人ならは都のつといさといはましをといへるをとりて作れるなりこの古今集の歌は日本書紀景行天皇卷の日本武尊御歌に比等萬麻莵比苦珥阿利勢麿岐農岐勢摩之嶋多知渡開摩之嶋とあるをとりてよみしなるべしくりはらは和名抄に栗原郡栗原郷あり續日本紀に神護景雲元年十一月乙巳置二陸奥國栗原郡一本是伊治城也とありあねはも地名なるべしつとは裹の字にて土産なり歌の意明らかなり○よろこほひて云々は我を思ふならむと女のよろこひていひをるなり
　よろこひのひを延してよろこほひといへりむかしみちのくにゝてなでふ事なき人のめにかよひけるにあやしうさやうにてあるべき女ともあらすみえければ
「しのふ山しのひてかよふみちもかな人のこゝろのおくもみるへく女かきりなくめてたしと思へとさるさかなきえひす心をみてはいかゝはせんは
なでふことなきは何といふ事もなきなり源氏東屋になてふ事なき人のすさまじき顔したる云々枕草子になんてふ事なき人のすゝろにえかちにて物いひたる云々などおもひあはすべし荷田大人の名ある人にあらぬをいへりといはれつるはわろし後撰集に伊勢の海ちひろの濱にひろふとも今は何てふかひかあるへき○人のめは人の妻なり○あやしうさやうにて云々はあやしくもさる何てふ事なき人につれそひ住べき女とも見えぬをいふさやうは然樣にてしかあるべきなり○しのふ山云々の歌は古今集に思ふてふ人の心のくまことに立かくれつゝみるよしもかなとあるをとりて作りたる歌なり新勅撰集に業平朝臣として載られたるはひかことなり和名抄に信夫志不乃國分爲二伊達郡一とあり其所の山の名を忍山といふか道もかな人の心の奥とつゞけよめるに陸奥の意を含めたるなり歌の意明らかなり○さかなきえひす心は惡き外心なりおのか夫を置てこの男の言をめてたしと思ふよろしからぬ婬婦のえひす心の奥をみたりともいかゝせむと也下のはの字は衍なるべしさてこの自注をあかたゐ大人はこの女京人をいとめてたしとおもひぬるか

ら心の奥をもあらはさまほしけれと猶我東夷のさかな心をあらはしてはいかゞせんいはてやみてんものをとみやこ人をやさしみていよゝ用意の深きなり上の條のしれたる女は用意もなくひなびたる歌をもよみてわらへる事をも悦へるに此條にはかくよしある女をいひて歌のこたへをもつゝしみてせざるをもて二條を對にしたる文のさまおもしろしといはれつるもさるべき説ながら猶しかにはあるべからすえびす心をみては云々ををとこのおもふこゝろとせざれば人の心の奥もみるべくとよみしにかなはず

勢語圖説抄卷之二

石見國濱田家人　藤原彥麿誌

むかしきのありつねといふ人有けりみよの帝につかうまつりて時にあひけれと後は世かはり時うつりにけれはよのつねの人のことにもあらす人からはこゝろうつくしくあてはかなる事をこのみてこと人にもにす。（世のわたらひ心もなくイ）まつしくへても猶むかしよかりし時の心なから世のつねのこともしらす年ころあひなれたるめやうやうとこはなれてつひにあまになりてあねのさきたちて。（尼にイ）なりたる所へゆくを男まことにむつましきことこそなかりけれ今はとゆくをいとあはれと思ひけれとまつしけれはするわさもなかりけりおもひわびてねむころにあひかたらひける友たちのもとにかうかう今はとてまかるを何事もいさゝかなることもえせてつかはすことゝ書て奥に

「手をゝりてあひみしことを（へにけるイ）かそふれはとをといひつつよつはへにけりかの友たち是をみていと哀とおもひてよるのものまておくりてよめる

「年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひ君を

たのみきぬらむかくいひやりたりければ
「これやこの天の羽ころもむへしこそきみかみけしとたてまつりければよろこひにたへてまた
「秋やくる露やまかふとおもふまてあるはなみたのふるにそありける

きは姓氏錄に建內宿禰男紀角宿禰之後也とあり○ありつねは三代實錄に元慶元年正月廿二日乙未從四位下周防權守紀朝臣有常卒有常左京人正四位下名虎之子也惟清警有二儀望一少年侍二奉仁明天皇一承和中擢二拜左兵衛大尉一數年右近衞權將監兼近江權少掾云々貞觀九年爲二下野權守一秩滿爲二信濃權守一十五年授二五五位下一十七年爲二雅樂頭一十八年至二從四位下一爲二周防權守一卒時年六十三云々有常の妹惟喬親王を生奉れり○みよのみかとに云々仁明天皇の承和九年十九歲にて仕へ始て文德天皇御一代をへて淸和天皇の貞觀十八年六十三にて卒○世かはり時うつり大鏡に藤氏は榮る程に紀氏はかれむとてかなしめる云々陳鴻長恨謌傳に時移事去樂盡悲來○よのつねの人の事も云々なみ〳〵の人の如くにはあらぬ也○あては貴の字の意なる事既にいへりはかは貴くみゆるをいふ意にはたらく詞也淺くみゆるを淺はかなといへると同し○こと人は異人也○あひなれたるめは久しくなれたる妻也○とこはなれは床離にて離別也○姉の先たちて云々姉尼の事此物語になきをとかむへからす○むつましきことこそなけれ云々は世の常のこともしらぬ愚人故にしたしみなけれと今は不便に思ふとなり六帖にある時はありのすさひにかたらひてなくてそ人はこひしかりける○ねむころにあひかたらひける友たちは契沖法師は下の天雲の云々の歌を古今集詞書に有常の娘とあると大和物語に棟梁は有常の娘のはらなるよしを引て業平朝臣なりといはれつれとさばかり證を引て論ふまてもなく此友たちは業平朝臣を含めたるはうつなしされとうちまかせて此朝臣なりとはいふべからず○てをゝりて云云のうたは意明らか也婚姻より離別まて四十年をいへるなり源氏帚木に手を折てあひ見しことをかそふれはこれひとつやは君かうきふしさて此手を折てといふ事心得がたし萬葉集に指折とあるはおよひをりなるを此物語にのみめなれたる人指折を

しもてをゝりてと訓したり手を折はひちを折事にてことわりたかへりされと指も手のなかのひとつなればしかいひしにや○よるの物まて云々にてむねとすべき衣服器物を含めたり○年たにも云々の歌は業平朝臣として續千載集に載られたるも例のひかこと也歌の意明らか也○これやこの云々の歌はよのつねに増れる衣をほめて天の羽衣といへり天に尼をかけたりむへは諸宜などの字の意也みけしは御衣也歌の意は明らかなり○たへては不堪而なり○秋やくる云々の歌は新古今集に紀有常とありこも例の撰者の麁忽也意は秋のくるにや露のまかふにやといふほとおもはるゝは我なみたのふるにそ有けると也さて有常の家かはりおとろへしことなきをかくいへるぞ物語のたくみにはありける

年ころおとつれさりける人の櫻のさかりに見にきたりけれはあるし

「あたなりと名にこそたてれ櫻はな年にまれなる人もまちけりかへし

「けふこすはあすは雪とそふりなましきえすはありとも花と見ましや

此條にむかしといふ事落たるなるべし○森比音信さりける人は實は業平朝臣なれと此物語にては誰にても有なん○あたなりと云々の歌は古今集に櫻の花のさかりに久しくとはさりける人のきたりける時によみけるよみ人しらすと有意はちりやすくはかなき物と名に立たる櫻なれと久しく音つれさりける人をけふや來ますとちりもせすして待つけたりとうらむ意也○けふこすは云々の歌は上の歌のかへし在原業平朝臣とあり意はけふ我來たれはこそ花もちらすにはあれけふこすは雪の如くみたれてちりぬへしかゝらは消ずには有とも花とは見えしとかへりてうらみかへしたる也さて古今集なるはたゝ花のうた也この物語には戀の歌にとりなして作たる也後鳥羽院けふたにも庭をさかりとうつる花消すは有とも雪そともみよ定家卿庭の面にきえすは有とも花とみる雪は春まてつきてふられむ花さそふ庭の春風跡もなしとはゝそ人の雪とたにみむ

むかしなま心ある女ありけり男ちかう有けり女うたよむ人也けれは心みむとて菊の花のうつろへるを折

て男のもとへやる

「くれなゐに匂ふはいつらしら雪の枝もとををゝにふるかともみゆをとこしらすよみに讀ける

「くれなゐにはふかうへのしらきくはをりくる人のそてかとも見ゆ

なま心は下になま宮つかへとあり源氏になまなまの上達部なといへるみな俗にいふ熟せぬかたまらぬなどいふに同じくてよく物をも心得ずして好色めかしくするをいふ○男ちかうありけりは隣などの住居なるべし○心みむとては男のこゝろをみんとて也貫之集にちかとなりなる所に方たかへにある女のわたれると聞て有ほとに事にふれてみきくに歌よむべき人也と聞て是か歌よむさまいかて心みむと思ふといはんとの心なりければふかくもいはぬにかれも心みむとやおもひけむ萩の葉もみちたるにつけておこせたり合せて十首の中に秋萩の下葉につけてめにちかくよそなる人の心をそみる返し世の中の人のこゝろをそめしかは草葉の露も見えじとそおもふ此二首拾遺集にいれられたり○くれなゐに云々の歌の意は好色の男ときゝしかと其色の紅ははいづらなるや我目にはたゞしら雪の枝も撓むばかりになるかとぞみると也○しらすよみに云々は心みらるゝをしりながらしらぬ顔にて也○くれなゐににほふが上の云々の歌の意はかばかり紅の色ふかく匂へども猶白菊とみゆるは折ておこせたる女の白妙の袖の色かともみゆると也古今集に花見つゝ人待時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける

むかし男宮つかへしける女のかたにこたちなりける人をあひしりたりける程もなくかれにけりおなしところなれば女のめには見ゆるものから男はある物かとも思ひたらす女

「あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆるものからとよめりければ男かへし

「あま雲のよそにのみしてふることはわかゐる山の風はやみなりとよめりけるは又男ある人となんいひける

宮つかへしける女は女官也○こたちは源氏にも御達といふあり本朝文粹に俗謂二貴女一爲レ御盖取二夫人女御之義一也この女官に仕る女房なるべければ

御達といふか加茂大人は御等也といはれたり又後宮に仕る女を後達といふか○かれにけりは離にけり也○みゆるゝのからは女のめには其男はめにかかりて見ゆる物なから也○男はある物かとも云々は男の心には女を行とも思はすめにもかけぬ也思ひたらすは思ひてあらず也○天雲のよそにも云々の歌は古今集に業平朝臣の紀有常の娘に住けるをうらむる事ありてしはしの間ひるはきてゆふさりはかへりのみしければよみてつかはしけるとありあま雲は枕詞なれど下までかけてよめる也心は天雲の如くはるかによそにのみ人の成行かなさらばめに見えぬ筈なるをしかしながらめには見ゆる物ながらと也○あま雲のよそにのみ云々の歌は古今集に上の歌の返し在原業平朝臣と有て行かへり空にのみして云々と有意はあま雲の如くはるかによそにのみして月日をふることはそなたの山にかゝり居むと思へど風はげしさによりもつかれずと也異男のかよふよし也後撰集にしら雲の行へき山もさたまらす思ふかたにも風はよせなむ拾遺集にしらくものかゝるそらことするひとを山のふもとによせてけるかな○又男ある云々は風はやみ也といひしはまたこと人のかよふゆゑに我につらしといへる事也と記者の自註なり

むかし男大和にある女をみてよはひあひにけりさて程へて宮つかへする人なりければかへりくる道にやよひはかりにかへてのもみちのいとおもしろきを折て女のもとに道よりいひやる

「君かため手をれる枝は春なからかくこそあきの紅葉しにけれとてやりたりければかへりことは京につきてなむもてきたりける

「いつのまにうつろふ色のつきぬらん君かさとには春なかるらし

大和は諸國名義考に云り○よはひは既に云り○程へて宮つかへ云々宮つかへする人なれば程へてかへりくる也○かへりくる道は山城の京へかへる道也○かへての紅葉は春なればたゞ色の赤をいふか○君か爲云々の歌は玉葉集に業平朝臣として入られたるはひかこと也玉かつまに君に我こゝろざしの深きを見せむにかなひて春ながら秋の如く色ふかく染たりといふ意也秋に女の心のうつろふをか

ねたると云はわろしさてかへしの歌めつらしからず又女の心をうたかふへきよし上の詞に見えずといはれたり後拾遺集に太政大臣かれ〳〵になりて四月ばかりにまゆみのもみちをよみ侍りける藤原兼平朝臣母佳人のかれ行宿は時わかず草木も秋の色にそ有ける○かへりことは返事なりとのみにてはたがへり其使か立かへりてしか〴〵のよしを申事也古事記に復奏の字をかけり日本書紀には報聞來報報命などの字をかけり○いつの間に云々の歌はわかれて時もへぬをいつの間に心かはりし給ひしやらむ君かかへり給ふ里には春はなくたゝ秋のみにやとうたかひうらむ意にたはぶれて心に飽や來つらむといふことを含めたる也萬葉に毎年梅者(トシノハニウメハ)開友空蟬之世人君羊蹄春無有來(サケドモウツセミノヨノヒトキミシハルナカリケリ)

むかし男女いとかしこく思ひかはして異心なかりけりさるをいかなる事かありけむいさゝかなることにつけて世の中をうしとおもひ出ていなむと思ひてかかる歌をなむよみて物にかきつけゝる

「出ていれはこゝろかろしといひやせむよのありさまを人はしらねはとよみおきて出ていにけり此女かく書置たるをみてけしう心おくへき事もおほえぬを何によりてかかゝらむといといたうなきていつかたにもとめゆかんとかとに出てとみかうみ見けれといつこをはかりともおほえさりければかへりいりて

「おもふかひなきよなりけり年月をあたにちきりて我やすまひしといひてなかめをり

「人はいさ思ひやすらん玉かつらおもかけにのみいとゝみえつゝ

此女いと久しくありてねむしわひてにやありけんいひおこせたる

「今はとてわするゝ草のたねをだに人のこゝろにまかせすもかなかへし

「わすれ草うゝとたにきく物ならはおもひけりとはしりもしなまし又々ありしよりけにいひかはしておとこ

「わするらむとおもふ心のうたかひにありしよりけに物そうれしきかへし

「中そらにたちゐる雲のあともなし身のはかなくもなりにける哉とはいひけれとおのかよゝに成にけれはうとく成にけり

かしこくはもとおそるゝことにいへりさるをうつりては怜悧の人をいへりこゝはあたし心なく切にふかくいひかはしたるをいふ〇ことゝ心は異心にて別心也〇うしとおもひて云々女か世をうしと思ひて出ていなんとする也萬葉に世間乎倦跡思而家出爲吾哉難二加還而將成〇出ていなは云々の歌は六帖には悲みの歌として結句人はしらすてと有歌の意は世中をうしと思ひて出ていぬるを世上の人は夫婦のかたらひのありさまをしらねば心かるしといふらんと也源氏帚木に心ひとつに思ひあまる時はいはむかたなくすこきことの葉哀なる歌をよみ置しのはるべきかたみをとゝめて深き山里世はなれたる海づらなどにはひかくれぬかし云々さてこの出ていにしは女なるべければいさゝかの上に女の字脫たるなるべしと玉かつまにいはれたりかゝれば此女[の]かく書おきたるを[男の]見て云々と言をそへてみるべき也〇けしうは殊異なとの字の心にてあやしうといふ意にて世の常にたかひてことに心おかるべき中ともおほえぬを也〇とみかうみは彼方をみ此方をみ也〇いつこをはかりは何方を量り也源氏夕顏に君もかくうらなくたゆめてはひかくれなばいつこをはかりとか我はたつねむ〇思ふかひ云々の歌の意は深く思ひたるかひもなき世也けり年月あまたはかなく契りて我はすみはせぬものをとうらみたる也〇人はいさ云々の歌は新勅撰戀五によみひとしらすとて入られたり歌の意は人のこゝろにはいかゞあらむしらねど我を思ひやすらん我は忘れねば女の姿がおもかげにみゆると也玉かつらはかけといはん料なりこの歌はもと萬葉集に人者縱念息登母玉蔓影爾所見乍不所忘鴨といふをとりて作れる記者の歌也その玉かつらは日本書紀神代卷に天鈿女命云々持統天皇元年云々以二華縵一進二于殯宮一此曰二御蔭一とあり和名抄祭祀具に蘿鬘爲レ鬘以レ蘿比加介加都良加都良少者所三以被二助其髮一也云々とあり萬葉集に百合花の鬘あり延喜內藏寮式に忍冬花鬘あり後撰集に菊の花鬘あり又綏を鬘とよみしも有四月のあふひかつら五月のあやめのかつらなどもみな同じ〇ねんじわひては念し侘て也こゝにてこらへかたくて也男の方より便なければ下心に便を待わび

こらへかねていひおこせたる也源氏帚木ににけかくれて人をまどはし心をみむとてする程に長き世の物思ひとなる云々女の歌也新勅撰によみ人しらすと有わするゝ草は和名抄に萱草一名忘憂和須禮久佐と有詩衛風焉得ニ諼草ー言樹ニ之背ーまた文選養生論合歡蠲レ忿萱草憂とありまかせすもかなは不レ令レ蒔と不任とかねたり古今集忘草何をかたねと思ひしはつれなき人のこゝろ也けり忘草たねとらましをあふ事のいとかくかたき物としりせば六帖忘草たねの限ははてななむ人の心にまかせざるべく○忘草云々男の歌也續後撰集に在原業平朝臣とありうゝは植也意は我心に忘草の種を植ると聞ならは常に思ひたえぬとしれと也○ありしよりけには有しより殊に也勝の字などの心也○わするらんと云々も男の歌なり古今集に題しらすよみ人しらす忘なんと思ふ心のつくからに有しよりけにまつそかなしきとあるをとりて我心を人の心によみかへて作れる記者の歌也意は忘れぬるらむと思ひうたがひ給ふゆゑに始よりもまさりて戀しく思ふと也○中空に云々の歌の意は出で

行し方にも元の男の家にもならねは我身のはかなきを中空に立ゐるうき雲にたとへてよるべもなくなりゆくを歎きしなり○おのか世々はおのれおのれかそれ〳〵に男は妻を定め女は夫を定めたるをいふ後撰集に笛竹の本のふるねはかはるともおのかよゝにはならすもあらなむ

むかしはかなくて絶にける中猶や忘れさりけん女のもとより

「うきなから人をはえしも忘れねはかつうらみつゝ猶そこひしき

といへりけれはされはよといひて男

「あひみてはこゝろひとつをかはしまの水のなかれて絶しとそ思ふ

とはいひけれと其夜いにけりいにしへ行さきの事ともなといひて

「秋のよの千夜を一夜になすらへて八千夜しねはやあく時のあらむ

かへし

「秋の夜の千夜を一夜になせりともことはのこりて鳥やなきなむ

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける

はかなくて絶にける中云々前條のつゞきの如くきこゆれど別條なり是ぞといふ事もなくて絶たる也

○猶や忘れさりけんははかなくて絶にける中なれど猶忘がたく戀しく思ふといふ心にて必前條を受たるにはあらず○うきなから云々の歌は新古今集によみ人しらすとて入られたり意はうきなからもえわすれねはうらめしきなから猶戀しと也○されはよは然あればよ也拾遺集に片岸の松のうきねと思ひしはされはよつひにあらはれにけり○あひみては云々の歌は異本にあひはみてとあり續後撰集に業平朝臣として載られたるはいかゞ歌の意はあひみずして心をひとつをかはすといふに川島の水といひかけ水の緣によりて流れて絶しといへるなり新續古今集にわするなよさすか契を川島のへたつるなかの浪はたゆとも○いにしへ行さき云々荷田大人の云異字本に古來(コシカタユクサキ)とあるぞ連續せりいにしへは今にむかへたるなれば行先とは連續せすといはれたるはわろし去方往先(イニシヘユクサキ)いとよく連續せり○秋のよの云々八千夜し云々の歌は六帖に結句戀はさめなむとあり意は秋のよは長き物なるを其夜の長きを千夜合せて一夜として八千夜寐るならはすこしはあく時もあらむかと也萬葉集に今夜之早開者(コノヨラノハヤクアクレバ)為便乎無(スベヲナミ)三秋百夜乎願鶴鴨(アキノモヽヨヲネガヒツルカモ)○秋のよの云々詞のこりて云々の歌は新古今集によみ人しらすとて入られたり歌の意明らか也○いにしへよりも云々男は女を哀と思ひてかよひしなり

むかしゐなかわたらひしける人の子とも井のもとに出てあそひけるをおとなに成にけれは男も女もはちかはしてありけれと男はこの女をこそえめとおもふ女は此男をと思ひつゝおやのあはすれともきかてなむありけるさてこのとなりの男のもとよりかくなむ

「つゝゐつの井つゝにかけしまろかたけすきにけらしないもみさる間に

女かへし

「くらへこしふりわけかみもかたすきぬ君ならすしてたれかあくへき

などいひ〳〵てつひにほいのことくあひにけりさて年ころふる程に女親なくたよりなくなるまゝにもろともにいふかひなくてあらむやはとてかうちの國高安の郡にいき通ふ所いてきにけりさりけれとこのもとの女あしとおもへるけしきもなくていたしやりけれは男ことこゝろありてかゝるにやあらんと思ひうたかひてせんさいの中にかくれゐて河内へいぬる顔にてみれはこの女いとようけさう

してうちなかめて
「風ふけはおきつしらなみたつ田山よはにや君かひとりこゆらむとよみけるをきゝてかきりなくかなしと思ひて河内へもいかす成にけりまれ〳〵かのたかやすにきてみれは始こそ心にくゝもつくりけれ今はうちとけて手つからいひかひとりてけこのうつは物にもりけるを見て心うかりていかす成にけりさりけれはかの女大和のかたを見やりて
「君かあたりみつゝををらむいこま山くもなかくしそ雨はふるともといひて見いたすにからうして大和人こむといへりよろこひて待にたひ〳〵過ぬれは
「君こむといひし夜ことに過ぬれはたのめぬものゝ戀つゝそふるといひけれと男すます成にけり

むかしの下に大和國に云々と有べき所なりと玉かつまに見えたり○ゐなかは和名抄に田舍人楊氏漢語抄に田舍兒和名井奈加比止(キナカヒト)○わたらひは産業にて世渡りの事也渡るをわたらひと云は業をなりはひ商をあきなひなどいふ活詞也下に女がみづからいひかひとりてけこのうつは物にもるをみて心うかる程いかてかゝらむやかくさまにつくりなすが

作者のたくみ也大和物語に年ころわたらひなともいとわろく成て云々源氏夕顔にことしこそなりはひもたのむ所すくなく田舍かよひも思ひかけねばいと心細けれ云々日本書紀仁德天皇四十一年百濟王之孫酒君云々欺之曰天皇既赦臣罪故寄汝而活焉云々また後漢書に濟度百姓また西域記に傭力自濟また事林廣記に涉世また宋王僧達曰大丈夫寧當玉碎安可沒々求活躬恒集に玉くしけ二見のうらに住あまのわたらひくさはみるめなりけり○井のもとに云々古事記に到(イタリマシ)其神御門者(ソノカミノミカトニナ)傍之(ヘカタヘナル)井上(キノウヘニ)有(アラム)湯津(ユツ)香木(カツラ)云々日本書紀に門前有一井井上有一湯津杜樹云々和名抄に井四聲字苑云鑿地取水也和名爲○おとなは大人(オトナ)の意也○はちかはしは恥交也○親のあはすれとは異人にあはせむといふ也○となりの男とては異人の如くきこえていかか猶井のもとに出てあそびし男也○つゝゐつの云云の歌は異本につゝゐづゝとつゝゐつは筒井筒の略にて井筒といはんかさね詞也意は井筒のもとにあそびし時井にくらべし我たけも今は妹のみぬ間に井のたけよりも過つらんとなりまろは自らをい

やしめていふ稱也○くらへこし云々の歌の意は童の時もろともにくらべし髮も今は肩を過て長く成たりこの髮は君ならで誰か取あげ結ふべきと也萬葉に振別之髮乎短彌青草髮爾多久濫妹乎師會於母布また多氣婆短禮多香根者長寸妹之髮比來不見爾掻入津良武香人皆者今波長跡多計登雖言君之見師髮亂有等母○いひ〳〵ては上に行々て云々と云ると同意なり數々いひかはすこと有しなれど今は略きたる也拾遺集に世の中をかくいひ〳〵てははてはいかにやいかにならんとすらむ○女親なく云々大和物語に此女いとわろく成にければ思ひわつらひてかきりなく思ひながらめをまうけてけりこの今の女はとみたる女になむ有ける云々戸令に……………○諸友に云々男女共に田舍わたらひなくてはあらじと也○河内國は諸國名義考にいへり田舍わたらひの爲に也○高安郡和名抄に高安多加夜須とあり○こと心は他男の來るやとうたかふ也○せんさいは前栽にて植物せる園也○けさうしては假粧して也上の懸想と混ふべからず大和物語にせんさいの中にかくれて男やくるとみれははしに出

居て月のいといみしくおもしろきにかしらかいけづりなとしてをり夜ふくるまでねず云々○風ふけは云々の歌は古今集によみひとしらすと有其もとは萬葉集に海底奧津白浪立田山何時鹿越奈武妹之當見武とあるをとりてよめる也一二の句は三の句をいはむ料也龍田山は日本書紀神武天皇卷に皇師勒レ兵步趣二龍田一而其路狹嶮人不レ得二並行一乃還更欲下東踰二膽駒山一而入中中洲上云々　けはしき山也大和志に小倉峰有レ二一在二立野村西一一在二小倉寺村上方一又云龍田川自二廣瀨郡一流二經勢野一至二立野村西兎瀨一入二于河州一　とあり歌の意はあきらか也さてこの奧つしらなみをぬす人の事也といへるは後人の俗說なれば此物語にてはたゝ古今集の歌をとりて出したるのみなれば白浪にぬす人の意こもれるにあらず拾遺集に藤義孝の家のかみゑにたひ人のぬす人にあひたるかたかける所藤原爲賴ぬす人のたつたの山に入にけり同しかさしの名にやけかれむ新古今集釋教に不偷盜戒舜然法師浮草の一葉なりとも磯かくれ思ひなかけそ沖つしらなみ又新勅撰同し事を法眼宗圓こえした丶同しかさしの名

もつらし立田の山のよはのしらなみこのうたなどは後漢書靈帝中平元年張角反皇甫崇討レ之角餘賊在ニ西河白波谷一爲レ盗時俗號ニ白波賊一とある俗説によりたる也○いひかひは和名抄に匙和名賀比(カヒ)所ニ以取一レ飯也とあり俗にいふ杓子也○けこのうつはものは同抄に笥和名計(ケ)盛レ飯器也とあり俗にいふ椀の類也○心うかりて云々大和物語にさてかいまめはわれにはよくて見えしかといとあやしきさまなるきぬをきて大くしをつらくしにさしかけてをりてつからいひもりをりけり云々○君かあたり云々のうたは萬葉集に君之當(キミカアタリ)見乍母(ミツヽモヲラム)將居(イ)伊駒山雲(コマヤマクモ)莫蒙雨者雖零(ナクモリソアメハフルトモ)といへるをてにをはをひとつかへてこゝに出し也歌の意は大和の方をみてをらむをいこまやまに雨はふるとも雲は立かくす事なかれと也定家卿の歌にいこまやまいさむるみねにゐる雲のうきておもひのはるゝよもなし○まつにたひたひ云々こゝには脱文あるにやことたらずたひたひの上にこぬ夜の三字ありしが脱たるかされど此物語はことすくなにこゝろをこめて書たればいひおふせぬ所もなきにあらねばこは此まゝにて置てむ○君こんと云々の歌の意は君こむといひし夜ことにこずして過ぬればたのみにはならぬ物ながら戀つゝ日數をふるとなり異本には戀つゝぞぬるとあり此歌もいひおふせぬさま也○すますは女の家に男のすまずなりしとなり

むかし男かたゐなかに住けり男みやつかへしにとてわかれをしみて行にけるまゝに三とせこさりけれはまちわひたりけるにいとねんころにいひける人にこよひあはむと契りたりけるにこの男きたりけり此戸あけたまへとたゝきけれとあけて歌をなむよみて出したりける

「あらたまの年のみとせを待わひてたゝこよひこそ新まくらすれといひ出したりけれは

「あつさ弓まゆみつきゆみとしをへて我せしかことうるはしみせよといひていなむとしけれは女

「あつさゆみひけとひかねとむかしよりこゝろは君によりにしものをといひけれと男かへりにけり女いとかなしくてしりにたちておひゆけとえおひつかて清水のある所にふしにけりそこなりけるいはにおよひのちして書つけゝる

ふりわけ髪の圖

母歎つゝひとりぬるよのあくるまはいかに久しきものとかはしる○あら玉の云々の歌は續古今集に入れられたり意は宮つかへに出てかへり給はぬままに三年のあひだ待わひて今宵こそねむころにいふ人と新枕しつれと云に今まていと心なかりしよしを含めいへり萬葉集に荒雄良者妻子之産業乎波不念呂年之八歳乎待騰來不座また若草乃新手枕乎巻始而夜哉將間二八十一

「あひおもはてかれぬる人をとゝめかね我身は今そきえはてぬめるとかきてそこにいたつらに成にけりむかし男の下に女の字脱たるなるべし眞字本にあり○みとせこさりけれは云々眞字本に三とせまて云々とあり○ねんごろにいひける人云々こはこと男也戸令に其夫沒ニ落外蕃一有レ子五年無レ子三年不レ歸及逃亡有レ子三年無レ子二年不レ出者並聽ニ改嫁一○この男云々は始のみやつかへに出し男なり○この戸明給へ云々古事記に那須夜伊多斗遠云々拾遺集に入道攝政まかりたりけるに門をおそく明ければ立わつらひぬといひ入て待りければ右大將道綱

飯匙の圖

笥子の器の圖

不在國○あつさ弓まゆみ云々の歌は契冲師の說もあがたゐ大人の考もともにわろし伊勢貞丈ぬしの臆斷別勘にあら木弓は弦なれさる程はそこつよくしてやはらきなく引心よからぬ物也是は木弓を引て試みざる人はしるましきなりさすがに契冲は法師なれば武器のことにはうとし夫木集に弦なれぬ荒木の弓のそりたかみさていたつらに引人もなしとよめるは其意也荒木は引かたきものなれどあまたの年月をへて常に引ならせばおのづから弦なれておもふまゝに引るゝなりされば其如く女もわかおもふまゝにひかれよかしといふ意女の返しにもそれをうけてひけどひかねど云々とはよめる也下の句に弓の緣なしといへるは荒木弓の事しらざれは也といはれたり此論いとよしさるを或は後の男に節をつくせよと敎訓したる也といひ或は後の男にをしへたる歌也などとかれたるは皆わろし梓は和名抄に梓和名阿豆佐木之名楸之屬也とありまゆみは同抄に檀和名萬由三木名也とありつきは槻和名豆木乃木木名堪レ作レ弓也と有我せしかことは神言託言などいへるはわろし我せしが如く也うるはしは善の字の意にて正しきをいふ正しきものは難すべきことなくみゆるよりうつりて美麗の事となりまた美麗なるものは愛する意あるものなれば愛する意にもうつりたる也○梓弓ひけど云々の歌は續後撰集によみ人しらずと有て三の句ひきみひかれみとあり意は男の歌をうけて我を君か引時もひかぬ時も我心はむかしより君かかたによりしとなり萬葉集に梓弓引見弛見思見而既心齒因爾思物乎また梓弓末乃多頭吉波雖不知心者君爾因之物乎古今集に梓弓ひけばもとすゑ我かたによるこそまされ戀の心は○しりにたちてはうしろにしたがひて也日本書紀に隨從の字をかけり○おひつがでは不追續而也追附といふは俗言也○およびはすべての指をいふ小指のみにかぎらず小の假名とはたがへり和名抄に拇於保於與比食指比止佐之於與比中指奈加乃於與比無名指奈々之乃指季指古於與比とありて五ともにおよびといへり○あひおもはて云々の歌の意はもろともに思はずして離てかへるひとをとゝめかね我身は今こゝにてむなしく成ぬるとなり○いたつらに云々謙德公の歌に哀ともいふへ

き人はおもほえて身のいたつらになりぬへきかな
とよめり

むかし男ありけりあはしともいはさりける女のさす
かなりけるかもとにいひやりける
「秋の野にさゝわけしあさの袖よりもあはてぬる夜
そひちまさりける色このみなる女かへし
「みるめなき我みをうらとしらねはやかれなて海士
のあしたゆく來る

あはしともいはさりける云々はあはしともいはず
又さすがにおひもせぬ也〇秋の野に云々の歌は古
今集に兩の句おはてこしよそと有て題しらす業平
朝臣とあり意は秋のゝにさゝ分せし朝の袖の露け
さよりもあはでぬるよの袖は泪にひたしまさると
也〇みるめなき云々の歌は古今集に上の歌の次に
有て小野小町とありたまかつまに云此歌上の歌の
返歌にあらずあはしともいはさりける云々又色こ
のみなる女なといへるにかなはす此間詞多く落て
別條なるべしとありみるめは和名抄に海松崔禹錫
食經云水松狀如松而無葉 和名美流とあり海松に
みるめをかねたり我みをうらは浦に憂にかねたり
意は古今集の方にてはみくるしき我身をうしとも
しらねばにや離れずして海人のあしたゆきまで來
ると也さるを此物語にては逢みる事もなき我をう
らみともしらねはにや云々と恨をうらとのみいふ
べくもあらねどうらみうらむうらむるうらめしな
どはたらく詞なる故に略きたるいひかけなるべし
菅家萬葉集に信宜吾身之浦砥成禮々者也戀敷人之
頻波丹起後撰集に春の池玉もにあそぶ鳰鳥の足の
いとなき戀もするかな小大君集によひ〳〵の夢の
魂あしたゆくありきてまたむとふらひにこよ

むかし男五條わたりなりける女をえ得す成にける事
とわひたりける人のかへりことに
「おもほえす袖にみなとのさわくかなもろこしふね
のよりしはかりに

五條わたりなる女を二條后也といふはわろし〇わ
ひたりける人は五條后也といふもわろし玉かつま
にわびは眞字本に慙とあるもわろしとふらひたる
など有べき也といはれたり彥麿云かへりことはひ
とりことの誤なるべし〇おもほえす云々の歌は新
古今集によみひとしらすとして入られたり玉かつ

まに袖に湊の云々は袖のみなとの云々なるべしとあり眞字本には袖に浪渡云々と有意はおもはずも袖に泪せきあへずして唐舟のよりし湊の浪のごとくさわぐと也此歌とゝのはず新古今集に影なれてやとる月哉人しれずよな〳〵さわく袖のみなとに續古今集にさもこそはみなとは袖のうへならめ君そ心のまつさわくらん　鳴千鳥そてのみなとをとひこかし唐舟のよるのねさめに醍醐入道前太政大臣女人しれぬ袖のみなとのあた浪は名のみさわけとよる舟もなしこれらみな此物語の歌によりてよめる也

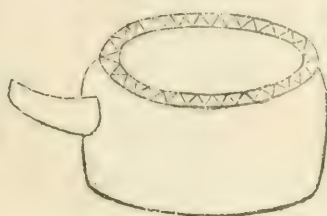
むかしをとこ女のもとにひと夜いきて又もいかずなりにければ女の（親はらだちてイ）手あらふ所にぬきすうちやりて（をとりてなげすてければイ）たらひの影に（水になくかけのイ）みえけるをみつから

「我はかり物おもふ人は又もあらしとおもへは水の下にもありけりとよむをこさりける男たちきゝて

「水口に我やみゆらむ蛙さへみつの下にてころ聲になく

ぬきすは水のほとはしらぬ料也延喜主殿寮式に三年一請貫簀一枚と有萬葉集に古人乃令飲有吉備能酒痛者爲便無貫簀賜牟こは吐逆せむ料なり○うちやりては棄遣而也○たらひは　和名抄に盥澡レ手也字從ニ臼水臨レ皿也多良比俗用ニ手洗二字一うつほ物語に白かねの御たらひちんをまろにけつりたるぬきす白かねのはんさうしろかねのすきはこ云々○みつからは眞字本に云々なりにければ女の母はらたちてたらひぬきすをなげゝれは手洗水になく影のうつりけるを見てと有玉かつまにこの眞字本の詞よしされど云々見ての下の女とあるべき也といはれたり○我はかり云々の歌は古今集に一もとゝおもひし菊を大澤の池のそこにも誰かうゑけんふたつなきものとおもひしを水底に山のはならて出る月影貫之集に我みまたあらしとおもへと水底におほつかなきはかけにやはあらぬなどあるによりてよめる記者の歌なるべく歌の意は明らか也○立きゝては眞字本に聞つけてとありいつれにてもありなむ○水口に云々の歌は物おもふ人の水の下にもあるとのたまふは我顔も友にうつりてみゆるならむ蛙さへ水中にひとりはなかすもろこゑに鳴物を我もいかでおもはざらむと也

むかし色ごのみなりけり女いてゝいにけれは
「なとてかくあふこかたみになりにけん水もらさし
とむすびしものを
あふこは和名抄に朸和名阿布古(アフコ)杖名也とあり新撰
字鏡に朸阿保古(アフコ)
とあり○かたみ
は籠也堅間也和
名抄に笭箵賀太(カタ)
美(ミ)と有この歌の
意はいかてかくあふこと
のかたく成にけむ水もら
さしといひかはせしもの
をと也後撰集にうれしけ
に君かたのめしことの葉
はかたみにくめる水にそ
ありける結ひ置しかたみ
のこたになかりせはなに
にしのぶのくさをつまゝし金葉集にあふ事の今は
かたみのめをあらみもりてなかれん名こそをしけ
れ

ぬきすの圖

たらひの圖

むかし東宮の女御の御かたの花の賀にめしあつけら
れたりけるに
「はなにあかぬなけきはいつもせしかと
もけふのこよひにになるときはなし
東宮は貞明親王にて貞觀十一年春宮に
たゝせ給ふ○女御は御母二條の后也あ
かたゐ大人は東宮の女御東宮の御息所
など
ある
を東
宮の
嫡妃
也と
いは
れつるは後の俗稱にまどはされたる也
こは東宮の母の御息所といふこと也と
玉かつまにいはれたり○花の賀は春な
り紅葉の賀といふも其時節もていふ也
○あつけられは被二充附一にて其數に加へらるゝこ
とをいふ白氏文集衙曹會詩序云時秘書監狄兼暮河

あふこの圖

かたみの圖

南尹廬眞只三年未三七十一雖レ與レ會而不レ及レ列とあるに同じ眞字本にめしあけられとあるもあしからす〇花にあかぬ云々の歌の意明らか也なけきは長息にてよきにもあしきにも物の切なる時に歎息するがなけき也悲歎愁歎などのみにかきらす嗟歎讃歎などの類もなけき也後世は悲歎愁歎などのみにいへりそはたのしきよりはかなしき方必切なれば也

眞字本にはこゝに一條あり流布本にはなし

むかし男女をぬすみて行道に水ある所にて男のまむやとゝふにうなつきけれは結てのますさてゐてゆくにはかにはかなくならんとすをとこもとの所へかへるにかの水のみしところにて

「大原やせきの清水を結あけてあくやとゝひし人はいつらは

此一條ありとは上のあくた川の並におよひのちして歌書たる條によりて眞字本の僞作者の自作なるへしいとつたなしもと此歌は萬葉集に泊湍川速見早湍乎結上而不飽八妹登問師公羽裳といふをつくりかへたるなり

むかし男はつかなりける女のもとに

「あふことは玉の緒はかりおもほえてつらきこゝろのなかくみゆらむ

はつかは小篇の字を書りほのかなとゝ同意あふことのすくなきなり〇あふ事は云々の歌は新勅撰集によみ人しらすとありこの歌古今集のあふ事は玉のをはかり名のたつはよしのゝ川の瀧つせのこととあるによりてよめる也玉の緒はこゝには短きたとへなり意はあふことはいとすくなくしてつらき心はながくみゆると也この歌のもとは萬葉集に佐奴良久渡多麻乃緒婆可里古布良久波布自能多可禰乃奈流佐波能碁登とあるよりよめる也

むかし宮のうちにてあるこたちの御つほねのまへをわたりけるに何のあたにかおもひけむよしや草葉よならむさかみむといふをとこ

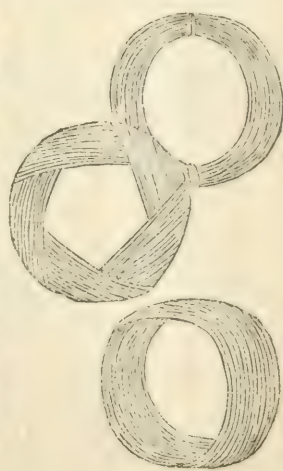
「つみもなき人をうけへはわすれ草おのかうへにそおふといふなるといふをねたむ女もありけり●

宮のうちは内裏を始て神の御社をも親王の御舘をも宮と云御屋の意也こゝは内裏にて也〇こたちは上にいへり〇つほねは玉かつまに榮花物語著枝の

卷に屏風に帳ばかりを引つほねてひまもなくゐたりとあるにて局といふはつほやかにつぼねたる所のよし也と有今俗にいふ女中部屋也○あたは敵怨などの字の意也阿多とすみてよむべし阿太と濁るべからず仇とは異也伊勢我爲に何のあたとか春風のをしむとしれる花にしもふく○よしや草はよは眞字本に草葉のとあり○ならむは生らむ也○さかは祥瑞にてよかれあしかれ其しるしあるをいふ白樂天詩に古墳何世人不レ識姓與レ名化作ニ路傍土一年年生ニ春草一といふ意ににたり○つみもなき云々うけひは詛誓所などの字の意にてよかれあしかれともにいへり古事記に故科ニ曙立王一令ニ宇氣比一云々源氏紅葉賀にこきてんなとのうけはしけにのたまふときゝしを云々○忘草は既にいへり歌の意はつみもなき我をのろひ給はゞ忘草がそなたのうへに生ふへきぞと也生に負をかねたり法華經普門品に呪咀諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還着於本人といへる意也○ねたむ女もありとは記者の趣意也

むかし物いひける女にとしころありて

「いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしを今になすよしもかなといへりけれと何ともおもはすや有けむ

いにしへ云々の歌は古今集にいにしへのしづのをたまきいやしきもよきもさかりは有し物也とあるをとりてよめる記者の歌也いにしへは去方也しつは日本書紀神代卷に倭文遠祖建羽槌また古語拾遺に建羽槌命織ニ文布一また舊事本紀にも復令ニ倭文遠祖天羽槌神織ニ文布一とあり萬葉集にいにしへのしつはた帶云々またいにしへに有けむ人のしづはたの帶ときかへて云々などよめる是也賤の意にはあらず○をたまきは麻環也和名抄に卷子(ヘソ)閇蘇閇卷所レ傳續レ麻圓卷名也とある是也歌の意は明らか也

をたまきの圖

むかしをとこつのくにうはらの郡に住みける女にか

よひける女このたひ男かかへり行てはいきてはまたはこしと女の思へるけしきなれはをとこ「あしへよりみちくるしほのいやましに君にこゝろをおもひますかなかへし「こもり江に思ふこゝろをいかてかは舟さすさをのさしてしるへきゐなか人のことにてはよしやあしや津の國は諸國名義考にいへり○うはらの郡は和名抄に兎原宇波良郡とあり○この度いきては云々男

さをの圖

京へ行ては又は不來と女のおもへる也○あしへより云々の歌は萬葉集に從蘆邊滿來鹽乃彌益荷念歟君之忘金鶴また於伎儆欲里美知久流之保能伊也麻之爾云々また湖轉爾滿來鹽能彌益二云々また朝奈祇爾滿來鹽之夕奈祇爾依來波乃彼鹽乃伊夜益舛二彼波乃伊夜敷布二云々なとあるをとりてよめる也菅萬葉集に白蘆間滿來潮之彌增丹思增輛不飽君鉋ともあり歌の意明らか也○こもり江に云々の歌は續後撰集によみ人しらすとて入られたり意はみくさ生しげりてかくれたる江のごとき君かこゝろなれはうはべには見えぬゆゑにしかあらむとはさしてしれがたしと也こもりは隱の字にてかくれたるをいふさをは和名抄に檣和名佐乎棹竿也刺レ船竹也とあり○ゐなか人は上にいへりこれは作者の自批判したる也下にゐなか人の歌にてはあまれりやたらずやとあると同じ

むかし男つれなかりける人のもとに

「いへはえにいはねはむねにさわかれてこゝろひとつになけくころかなおもなくていへるなるへし

いへはえに云々の歌荷田大人は眞字本にいへは家にとあるにまどはれたりこはいひかぬる事也歌の意はいはむとすれともいひやらすいはねはむねのうちさわかれてくるしく心ひとつに歎くとなり六帖にいへはえにいはねはくるし世の中を歎きてのみもつくすへき哉いへはえにふかく悲しき笛竹のよこゑや誰ととふ人もかな源氏須磨に中納言の

肴いへはえにかなしう思へるさまを云々〇おもなくて云々記者の自註也おもなくては面目なくて也萬葉集に暮相而朝面無美(ヨヒニアヒテアシタオモナミ)云々源氏紅葉賀におもなのさまやとみ給ふもにくけれ云々玉かつらにおもなの人やとわらひ給ふ云々異本には思ひ〳〵てとあり中々にわろし

むかし心にもあらて絶たる人のもとに

「玉の緒をあわをによりてむすへれは絶ての後もあはむとそおもふ

心にもあらては心にも思はすしてかくなりたるをいふ也後拾遺集に心にもあらてうきよになからへは戀しかるへきよはの月哉〇玉の緒を云々の歌は萬葉集に玉緒乎沫緒二搓而結有者在手後二毛不相(アハス)在目八方とあるをすこしかへて作りたる也あわ緒は合せ緒也といへるはたがへり沫はあわ也合はあはせ也あわ緒はあわわ也貫之集に春くれは瀧の白糸いかなれや結へとも猶あわとみゆらむ清少納言上氷あわにむすへるひもなれはかさす日かけにゆるふはかりをとあり沫緒によりて結ぶは鎮魂の法にて離遊の運魂を身體中府に結びとゞむる事なれば萬葉に在て後にもとあるはなからへ在經ての義也さるを此物語に絶ての後としたるは玉を貫きたる緒になしたる也されどあわ緒といふ事かなはすこの物語につきてあは緒は結ひたるかたちとして和名抄の結果形如結緒加久乃阿和とあるを引たるは此物語の方にてはよろしけれと本歌をとりたる沫緒によりてとあるよりてはこゝにえうなし鎮魂祭に靈の緒よまえ事は凡の神司などのしる事にあらすおのれとしころいかてと思ひわたりつるをからうして得たり

あわむすひの圖

むかしわすれぬるなめりととひことしける女のもとに

「谷せはみみねまてはへる玉かつらたえむと人に我おもはなくに

とひことしけるを契沖師はうらとひしたる也といはれつれどわろし男のわすれぬるなめりと女の方

よりとひおこせたる也○谷せはみ云々の歌は萬葉集に多爾世婆美彌年爾波比多流多麻可豆良多延武能己許呂和我母波奈久爾又丹波道乃大江乃山之眞(サナ)玉葛(カツラ)絶年乃必我不思木綿疊白月山之佐奈葛將絶跡妹乎吾念莫久爾などあるをとりてつくりたる歌也玉かつらは和名抄に五味和名佐奈加豆良皮肉甘酸核中辛苦都有ニ鹹味一故名ニ五味一也とあり歌の意は谷かせはさにみねまではひのぼる玉かつらの長くつらなりたる如くなればたえむとは我はおもはしと也詩周南云葛之覃兮施ニ于中谷一維葉萋女羅本細草抽レ萱信不レ功懸レ高出ニ嶺上一假レ樹入ニ雲中一とあり

むかし男色このみなりける女にあへりけりうしろめたくやおもひけむ

「我ならて下ひもとくな朝顔のゆふかけまたぬ花にはありともかへし

「ふたりしてむすひしひもをひとりしてあひみるまてはとかしとそおもふ

うしろめたきはこゝろもとなきをいふうたかひ也古今集に女郎花うしろめたくもみゆる哉あれたる宿にひとりたてれは○我ならて云々の歌は安信清行朝臣の混本歌朝かほの夕かけまたすちりやすき花の世そかしといふをとりて作りたる記者の歌也新勅撰集に業平朝臣として入られたるは例のひがこと也した紐は常の衣服の上に結ふ紐なり装束の下に結ふ故に下ひもといふ和名抄に紐比毛結而可レ解者也とありあさ顔は新撰字鏡によりて桔梗也といふ説あり又木槿也ともいへりこゝなるは牽牛子也歌の意明らか也○ふたりして云々の歌は萬葉集に二爲(フタリシテ)而結之紐乎一爲而吾者解不(トキミ)見(シ)直相及者(タヽニアフマテハ)とあるを作りかへたる也歌の意は萬葉集にては明らか也此物語にては三の句は結句にかゝる也四の句につゝきてはきこえず

むかしきのありつねかりいきたるにありきておそくきにけるよみてやりける

「君により思ひならひぬよのなかの人はこれをや戀といふらむかへし

「ならはねはよのひとことになにをかもこひとはいふととひしわれしも

かりは許也有常かもとになりこゝに文落たるへし娘にあひて後男外へ行てありきて云々など有べし

眞字本には有常物に行て久しうかへらざりけるに
いひやると有かくては男女の哀情にあらす朋友の
中には似つかはしからぬ歌となれり○君により云
云の歌は萬葉集に作代衛戀云物乎相不見者戀中爾
毛吾份苦寸とあるをとりてこの贈答は作りし也さ
るを此歌續古今に載られたり意は若故に今始て習
ひ得たり世の中の人はかやうに物おもふ心を戀と
いふならむと也○ならはねば云々の歌はきこえか
たし強ていはゞ戀といふはいかなるものぞととひ
し我もならはねはしらずといへる歌なるべしこは
心あまりて詞たらぬ朝臣の心になりて作者のよみ
しなるへし本文のまゝにては贈答男女分かたし

むかし西院の帝と申みかとおはしましけり其みかと
のみこたかい子と申いまそかりける其みこうせ給ひ
て御はふりの夜其宮のとなり也ける男御はふりみむ
とて女車にあひのりて出たりけるいと久しうゐて出
奉らすうちなきてやみぬへかりける間に天の下の色
このみ源のいたると云人是も物みるに此車を女車と
みてよりきてとかくなまめく間にかの至螢をとりて
女の車にいれたりけるを車なりける人此螢の火にや
みゆらむともしけちなむするとてのれる男のよめる
「出ていなはかきりなるへきともしけちとしへぬる
かとなく聲をきけかのいたるかへし
「いとあはれなくそきこゆるともしけちきゆるもの
とも我はしらしなあめのしたの色このみの歌にては
なほそありけるいたるはしたかふかおほち也みこの
ほいなし

西院の帝は大伴天皇也日本根子天高讓彌天皇と申
後御諡を淳和天皇と申奉る大御父は桓武天皇大御
母は藤原旅子也御位の後四條の北大宮の東西院に
おはせし故に西院の帝と申○たかい子は第十の皇
女無品崇子內親王なり御母は正四位上淸野女橘船
子也○うせ給ひしは續日本後紀に仁明天皇承和十
五年六月改元ありて文徳天皇の嘉祥元年なり五月十五日薨十九歳とあり○
御はふりは御葬式也いと女車にあひのりては女と同
車する也毛詩云有レ女同レ車○うちなきて云々御葬
送の遲き故になきつゝ見ずしてかへらむとする程
になり○源のいたるは楊院大納言定卿の子也○と
もしけちなむするとて云々に螢のともす火に女の
顔のみゆるをいとひてともしたる火をけたむとし

てよめるなり源氏螢の巻に源氏の君螢をうすものにつゝみて玉かつらの君のみすのうちに入て兵部卿の宮にみせ奉らむとしたまひける事こゝを取てつくりしなるべし眞字本には螢をとりて此車に入たりければ車なりける人この螢のともす火にや似むとおもひてけちなむとすとて男のよめるとあり○出ていなは云々の歌は葬送を出ていなばといへり限なるべきは崇子内親王の世の限をいへりともしけちは法華經に如ニ焰盡燈滅一また王充論衡云人之死也猶ニ火之滅一而耀不レ照人死而智不レ慧とある意に螢の火のきゆるをみこの身のうせ給ひしによそへたる也年へぬるかとは十九歳にてかくれ給ひしを惜む也なく聲は諸人のかなしひをいへりかくいひて至を恥しむる也玉かつまにいにしへ人もかはかりつたなき歌よみけるにやといはれたり○いとあはれ云々の歌は契沖師のいはく意は年へぬるかと鳴聲いとあはれにきこゆる也されど四大假合の火はきゆるとも眞如の惟に歸すれは失る事なしと也法華經に我雖レ説ニ涅槃一則是非ニ眞滅一とある意也といはれたり○なほそ有けるは凡にそ有けるにて色このみの歌ならは今一ふしあるべきものをと也○みこのほいなしは皇女の御爲には本意ならぬ戲也となり

嵯峨天皇──源定 正三位大納言
　├源至 従四位右京大夫──源擧 正六位上左馬允
　└源順 従五位上能登守

むかしわかき男けしうはあらぬ女を思ひけりさかしらする親ありて思ひもぞつくとて此女を外へおひやらむとすさこそいへまたおひやらす人の子なれはまた心いきほひなかりけれはとゞむるいきほひなし女もいやしけれはすまふちからなしさるあひたに思ひはいやまさりにまさる俄に親此女をおひうつ男ちのなみたをなかせともとゞむるよしなしゐて出ていぬをとこなく〳〵よめる

「いてゝいなはたれかわかれのかたからむありしにまさるけふはかなしもとよみてたえ入にけり親あはてにけり猶思ひてこそいひしかいとかくしもあらしと思ふにしんしちにたえ入にければまとひてくはんたてけりけふの入相はかりにたえ入てまたの日のい

ぬの時はかりになんからうしていき出たりける昔のわかうとはさるすける物おもひをなむしける今のおきなまさにしなむや
けしうは惟殊などの意也あやしからぬ女といふ意也宇治拾遺に殿の御手に大きなるかなまり哉とみゆるけしくはあらぬ様なるべし云々仕女也○さかしらは情進の字など書り男の親のかしこだてをいふ萬葉集に黙然居而賢良爲者飲酒而醉泣爲爾尙不如來また王之不遣爾情進爾行之荒雄良奥爾袖振また官許曾指且毛遣米情出爾行之荒雄良波爾袖振古今集にさかしらに夏は人まねさゝのはのさやく霜夜を我ひとりぬるなとみなかしこだて也○思ひもそつくはかくておかは女の心に男を思ひつきてはなれかたからんとうたかふ也○おひやらむとすは女を外へうつしやらむとする也萬葉集に可美都氣努佐野乃布奈波之登利波奈之於也波左久禮騰和波左可禮賀倍とあり○人の子なれは云々は親がゝりの子なれば親の心をへだてゝ思へる也○すまふちからなしは捔力なしにてあらそふ事あたはぬをいふうつりては難退をもすまふといふ散木集にか

くはかりはけしき野への秋風にをれしとすまふをみなへしかな○おひうつは追弃也女を暇やる也古事記に投棄吹棄奴岐宇氐古今集に鳥うたんなどあると同じ○ちのなみだは韓非子に楚人卞和抱二其璞一而哭二於楚山之下一三日三夜泣盡繼レ之以レ血また易に泣血漣如云々また長恨歌回レ首血涙相和流大和物語に夜一夜なきあかしてあしたにみれはみのもなにも涙のかゝりたる所のちのなみたにてなむ有けるいみじうなけばちのなみたといふ物はある物になん有けるとぞいひける云々古今集白玉とみえし泪も年ふれは唐紅にうつろひにけり○ゐていてゝいぬは婢を送り遣すとて奴か率て出行也○いてゝいなは云々の歌は續後撰集に業平朝臣として入られたるはわろし例のひかこと也六帖にも眞字本にも初句いとひてはとありともにつたなし玉かつまに此歌上と下とに縁なしまた端詞にもいとうとしとあり歌の意を強ていはゞ強て出て行程ならばわかるるにわかれかたき事はあるましけれど今はと出ていなは長きわかれと成もやせむ有しきのふにまさりてけふはかなしといへるなるべし眞

字本には此歌の次に女返しに付て何所までおくりはしつと人とはゝあかぬわかれの涙川まてとよみてたえ入ぬれは云々とあり此返歌いと〳〵つたなく此物語に入べき歌にあらず又かくてはたえ入たるは女になるなりいかゞもし女たえ入たるならばむかしの若人にむかへて今の翁とはまさにいはむと玉かつまにあり濱松中納言物語にうき戀のためしにはありはらなりける男の絶入し思ひも身にしられて云々こは此物語によれるひがことなれど絶入しは女ならぬ證なり○親あはてたる也○猶おもひてこそ云々きこえず眞字本になほざりにおもひてこそ云々とあるよろし○かくしもあらしと云々は是程にはあらじと思ひしにと也○しんしちは眞實也○くはんたては願立也○むかしのわかうとは昔の若人也是より記者の自語也○すける物おもひは今俗に物好なるといふに同じ○今の翁は記者みづからをいへり○しなむやは玉かつまに死なむやにあらず爲なむや也といはれたれど古説のまゝに死なむやといへる方よろし

むかし女はらからふたり有けりひとりはいやしき男のまつしきひとりはあてなる男もたりけりいやしき男もたるしはすのつこもりにうへのきぬをあらひて手つからはりけり心さしはいたしけれとさるいやしきわさもならはさりけれはうへのきぬのかたをはりやりてけりせむかたもなくてたゝなきに泣けり是をかのあてなる男きゝていと心くるしかりけれはいときよらなるろうさうのうへのきぬを見いてゝやるとて

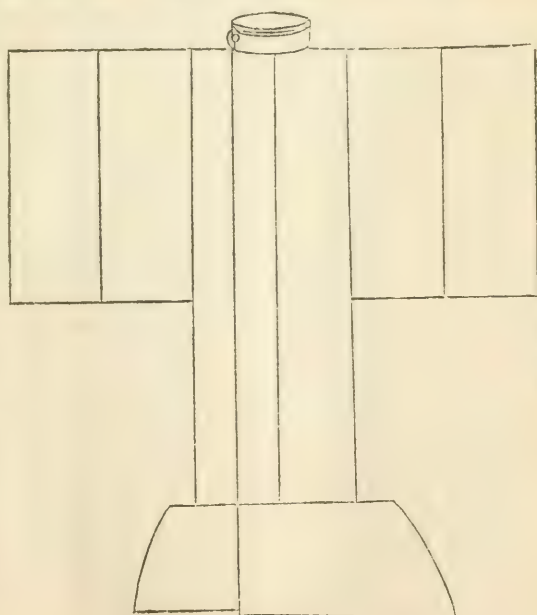
「むらさきの色こきときはめもはるに野なる草木そわかれさりけるむさしのゝ心なるへし

女はらからふたりは同母兄弟也紀有常の女といふはわろし○いやしき男は凡卑の人にあらずらうさうのうへのきぬをきる程の人なれば官人也○あてなる男は貴人也○しはすは年巣(トシハツ)の略語也師走の字にかゝはるべからず○うへのきぬは和名抄に袍和名宇倍乃岐沼一名朝服著襴之袷衣也とあり○はりやりは張徹也○ろうさうは綠衫にて綠は衣服令に六位深綠衣七位淺綠衣云々とあるによりて六位の服と定めしはいかゞ彦丸思ふに歌に紫の色こき時

とよめれば綠にはかぎるべからず直衣なるべし和名抄に襴衫須倍豆介乃古路毛一云奈保之乃古呂毛とあり○むらさきの云々の歌は古今集にめのおとうとをもて侍りける人にうへのきぬをおくるとてよみてやりける業平朝臣とありそれを委しく作りなして一條としたる也歌の意は紫の色こき時はめも及ばずはるかにして野なる草木ひとつになりてわかれずと也下の心は初春には明かなる衣きるがほまれなるを是は人の口をうくれは恥かはしくやあらんとおしはかりたる心歟○むさしのゝ心なるべしは古今集に紫のひともとゆゑにむさし野の草はみなから哀とそみるといへる歌のこゝろなるべしといふ意也是記者の自註なり上にみちのくの忍ふもちすり云々といふうたのこゝろばへなり云々とあるとおなじことなりと說るはひが言なり

むかしをとこ色このみとしる〳〵女をあひいへりけりされとにくゝはたあらさりけりしは〳〵いきけれと猶いとうしろめたくさりとていかてはたえあるましかりけりなほはたえあらさりける中なりけれは二日三日はかりさはる事ありてえいかてかくなむ

「いてゝこし跡たにいまたかはらしをたかかよひちと今はなるらむものうたかはしさによめる也けり

ろうさうのうへのきぬの圖

色このみとしる〳〵は色このみなりとしりながら也後撰夏虫のしる〳〵まとふ思ひをはこりぬかなしと誰か見ざらん○しは〳〵は數々度々なり○さ

りとてはたえ云々玉かつまに云此詞あまりてきこゆ眞字本にさりとてはたいかではえあらざりける中なりければとあるにてよくきこゆ花すしてはえあらぬよしなり○いてゝこし云々の歌は新古今集に業平朝臣として初句いてゝいにしと有歌の意はかへるさの跡今にかはらじを今に成てはこと人の通路になりたるらむとよめるなり○ものうたかはしさに云々これも記者の自註なり

勢語圖説抄卷之三

石見國濱田家人　藤原彥麻呂誌

むかしかやのみこと申すみこおはしましけりそのみこ女をおほしめしていとかしこくめくみつかう給ひけるを人なまめきて有けるを我のみとおもひけるをまた人きゝつけて文やるほとゝきすのかたをかきて

「ほとゝきすなかなくさとのあまたあれは猶うとまれぬおもふものからといへりこの女けしきをとりて

「名のみたつしてのたをさはけさそなくいほりあまたとうとまれぬれはときはさつきになむ有けるをとこかへし

「いほりおほきしてのたをさは猶たのむ我すむさとにこゑしたえすは

かやのみこは二品治部卿賀陽親王也桓武天皇第七皇子御母夫人多治比氏也文德實錄に齊衡二年春正月壬午朔戊子加三品加陽親王二品同所天安二年八月己丑朔丙申勅賜二品親王帶劍とあり榮花物語にむかしかやのみことといひし人こそ細工はかしこけれ云々とあり貞觀十三年十月八日薨し給ふ御

年七十八歲なり○かしこくめくみ云々はけさうにあらず仁慈惠愛の思召なり○つかう給ひけるはつかひ給ひける也此物語に給ひけるを給うけるなどあり後世の音便のくつれたる也○なまめきてはこと男のなまめく也荷田大人は男にいふへき詞ならねは女のなまめく也といはれたるはわろし上の源のいたるのなまめきしことも有をや有けるをのを文字はかなりしか下のを文字うつりたる誤寫なるべし○きゝつけては又もとよりの男のきゝつけてふみやる也○かたは繪也和名抄に圖ニ畫物像一也畫丹青所レ圖也繪五綵也とあり○ほとゝきす云々の歌は古今集に題しらすよみ人しらすとあるをとりて次の二首を作りそへて一條としたる也歌の意は時鳥汝かなく里多くあれば厭きかまほしく思ふ物ながらうとまるゝそと也古今集にては時鳥の歌なれどこゝにては戀にとりなせり此歌猿丸集に入れしはいかが古今集にかづみれとうとくもある哉月かけのいたらぬ里もあらしと思へは」思へとも猶うとまれぬ春霞かゝらぬ山もあらしとおもへは菅萬葉にうとみつゝとゝむる人のなけれはや山ほと

ときすうかれてはなく○けしきをとりては俗にいふ機嫌をとる也源氏松風にとけさりし御けしきとりに夜ふけぬれとまかで給ひぬ云々金葉集にぬす人といふもことわりさよ中に人の心をとりにきたれは源氏箒木に何事をかとり申さんと思ひめくらすに云々○名のみたつ云々の歌はいまだ說得たる人なし契沖師のしてのたをさは時鳥の別名也といはれつるはわろし伊勢貞丈ぬしの別勘に云く古今集にいくはくの田をつくれはか時鳥してのたをさを朝な〳〵よふとあるを思へは古人の俗諺にしてのたをさよぶ鳥といひならはせしなるべししてのたをさは賤の田長也賤の田長が田を作る頃鳴鳥なれば其田をさをよぶ鳥と古くよりいひしなるべしそを死出のたをさ也といひて冥途より來りて農事をすゝむる鳥なりといへるはあちきなきこと也とあり此說いと〳〵めてたし彦麻呂思ふに十王經に一切衆生臨ニ命終時一閻魔法王遣ニ閻魔卒一一名ニ奪魂鬼一二名ニ奪精鬼一三名ニ縛魄鬼一卽縛ニ三魂一至ニ門關樹下一樹有ニ荊棘一宛如ニ鋒刄一一鳥栖掌一名ニ無常鳥一二名ニ拔目鳥一我汝舊里化成ニ鳥鵲ニ示ニ悲語一鳴ニ

別都頓宜壽我汝舊里化成鳥鳥示怪語鳴阿和薩加酉時知否亡人答曰都不覺知云々死天山云々破膝割膚折骨滿髓死天重死故言死天云々とあるは此物語よりは後に僞作したる經文なりでは賤　通音なることをしらぬ僧徒のわざなり拾遺集にしての山越てや來ぬる時鳥戀しき人のうへかたらなんといへるも俗説にまよへる也成都記に杜宇亦曰杜王自天而降稱望帝好稼穡至今蜀人將農者必祀杜王まつ格物論に杜鵑二四月間夜鳴達旦田家候其鳴興農事とあるは其時に鳴なればかくたくみにいひなしたるのみ也かの國にてはかゝる事めつらしからす萬葉集に信濃奈流須我安良能衛保登等藝須奈久許惠伎氣婆登伎須疑爾家里とあるは農事の時過たるにあらず人にあはんと契りたる時の過たるをよめる也榮花物語にさなへとる折にしもなく時鳥しての田長とむへもいひけりとあるは此物語にしての田長とのみいへるによりしなり○けさそなくはうたかはれて泣なり○いほり多き云々の歌の意はいほりあまたに鳴わたるとも我里に聲たえす鳴かはたのみ思はむとなり

むかしあかたへ行人に馬のはなむけせむとてよびてうとき人にしあらさりけれは家とうしに盃さゝせて女のさうそくかつけむとすあるしの男歌よみて裳の腰にゆひつけさす

「出てゆく君かためにとぬきつれば我さへもなくなりぬへきかな此歌はあるか中にもおもしろけれはこころとゝめてよますはらにあちはひて

あかたは縣也諸國郡の官人京都にて我任國をさしてあかたといふ打まかせて田舎をあかたといふといへるは郡縣と封建との差別辨へぬ人のいふ事也○馬のはなむけは旅立を送るに其人の馬行先に向ふ故にいへるをうつりては旅立人に送る品をもはなむけといへり説文に餞送去也除曰以酒色送也○家とうしは日本書紀允恭天皇に戸母此云都自とあり和名抄に負俗作刀自老母爲負云々謂老女爲負字從目也今訛以貝爲自歟和名度之とありこはひか言にて字はいかにまれ假字にて戸主の義なり○さかつきは同抄に盃一名巵盞盃之最小者也和名佐賀都岐とあり酒杯といふ意也○女

のさうそくは同抄に背子和名加良岐沼云々婦人表衣以レ錦爲レ之また袿大褂衣婦人袿衣也字知岐婦人上衣也なとあり○裳は同抄に裾裳上曰レ裾下曰裳和名毛とあり○ゆひつけさすは結付刺にはあらし結付さする也人をしてしからしむるを云日本書紀神功皇后卷に予時適當ニ皇后之開胎一則取レ石挿レ腰而祈レ之曰事竟還日産ニ於玆土一云々萬葉に四舶早還來等白香著朕裳裾爾鎭而將待○出てゆく云々の歌は六帖には二の句君をいはふと結句なりにける哉とあり歌の意は出てゆく君か爲に我裳をぬきつれは我さへ裳なくなりぬへしとなり裳に喪をかねたり喪とはもろもろのわさはひをいへり今の世に忌服にあふをいへるも其ひとつなり萬葉集五三十七丁に事母無裳無母阿良牟遠云々同十五二十五丁毛奈久由可牟登云々同九二十丁多婢爾弖毛母奈久波也許登和伎毛故我牟須比思比毛波奈禮爾家流香聞などあり○この歌はあるか中に云々記者の自注なりきこえがたし眞字本にあるか中におもしろけれは心とゞめてよまずばはらにふかきあちはひ出こずとありこの斷え難きを聞ゆるさまに潤色したるなるべし

こゝなるは脱字あるべしこゝろみにいはゞおもしろけれはと心とゞめて人はよまずはらにあちはひてよ此物語には實に業平朝臣のいとよき歌を自注にわろくいひなしてかゝるよろしからぬ歌おしもあるか中におもしろきなどいへる記者のたはふれなり

むかし男ありけり人のむすめのかしつくいかて此男に物いはむと思ひける打出むことかたくや有けむ物（めのさなごに也）やみに成てしぬへき時にかくこそ思ひしかといひけるをおやきゝつけてなく〳〵つけ（男に也）たりけれはまどひきたりけれとしにけれはつれ〳〵とこもりをりけり（此所連續せす下の第○段の所にかたみに入交たるなるべし）○時はみなつきのつごもりいとあつき頃ほひによひはあそひをりて夜ふけてやゝすゝしき風ふきけり螢高くとぶ此男みふせりて

「ゆくほたる雲の上までいぬへくは秋風ふくと雁につけこせ

「くれかたきなつの日くらしなかむれはそのことゝなくものそかなしき

かしつくは傅なり竹取物語に几帳のうちよりも出さすいつきかしつきやしなふ程に云々こゝの文は

人のかしつく娘のいかて此男に云々と詞を入かへてみる也○打出むことかたくは口にいひ出しかたきなり後拾遺集に白浪の打出んことそつゝましき思ひよるへの汀ならねは○物やみは戀病也○なくつけたるはかの男に告るなり此段は萬葉集十六に戀夫君歌左耳通良布君之三言(サニツラフキミガミコト)等云々とある歌の傳に時有娘子姓車持氏也其夫久逕年序不レ作ニ往來ニ于時娘子係戀傷心沈臥痾疹瘦羸日異忽臨ニ泉路ニ於是遣レ使喚ニ其夫君ニ來而歔欷流涕口ニ號ニ斯歌ニ登時逝沒也とあるをとりて一條の物語とせり○つれつれとこもりをりは日數へて同し趣にこもるなりうつりては淋しき事にいへり○みな月は水無月也と古くよりいへるわろしあかたゐ大人は雷鳴月也といはれつれどわろし實生月なるべしさて大平大人云もと此段二條にて時はみなつき云々より以下は別條なりしか上條の末と下條の始と脫たるなるへしといはれたり○あそひをりは管絃などなり上文を受ていにしへの葬式也など古事記舊事本記などひけるは非なり○螢高く飛は江談抄に螢火亂飛秋已近また蘆葭水暗螢知夜楊根風高鴈送秋夕殿螢飛思消然殘燈挑盡未能眠○みふせりては見なから寐たる也○ゆく螢云々の歌は後撰集に業平朝臣とあり意は高く飛あかる螢に雲のうへまて行ならばいまた夏ながらやゝすゝしき秋風ふくゆゑに鴈に來れと告よと也こせは乞にてこそと同言なれば願ふ意なり下の意は世を飽たりといふもこもれるかそはいかにてもありなむ○くれかたき云々の歌は續新古今集に業平朝臣として入られたり意はくれかたく長き夏の日を物かなしさに終日思ひくらしてなかむればそれとさしていふへきことゝもなくひたすらに物かなしきとなり此條みたれたりとおほし上文のつれ〳〵とこもりをりけりくれがたき夏の日くらし云々時はみな月つこもり云々行螢雲のうへまて云々とありしが亂れたるならん

むかし男いとうるはしき友ありけりかた時さらすあひ思ひけるを人の國へいきけるをいと哀と思ひてわかれにけり月日へておこせたる文にあさましくたいめせて月日のへにける事忘やし給ひにけむといたく思ひわひて侍る世の中の人の心はめかるれはわすれぬへき物にこそあめれといへりけれはよみてやる

「めかるともおもほえなくに忘らるゝときしなけれはおもかけにたつ

うるはしき友は善友にて心へだてずむつましき友をいふ○あひ思ひけるは互に思ひかはす也○あさましうより物にこそあめれまでは文詞なりさるを眞字本には世中人之心者被目離者可將忘物爾祉在禮と歌の如く書なせり○めかるは目離也○あめれは有めれにてあれの意也○めかるとも云々の歌は六帖に業平朝臣とあり意はわすらるゝ時なければ君がおもかけの我目の前にたちてみゆるなり目かるとはおもはぬそとや

むかし男ねもころにいかてと思ふ女ありけりされと此男をあたなりときゝつけてつれなさのみまさりつついへる

「大ぬさのひくてあまたになりぬれはおもへとえこそたのまさりけれ

かへし男

「大ぬさと名にこそたてれ流てもつひによるせはありてふものを

ねもころは懇なり○あたは仇にてうつろひやすきをいふ○大ぬさの云々の歌は古今集にある女の業平朝臣をところさだめずありきすと思ひてよみて遣しけるよみ人しらすとあり六帖には三の句とまらねはと有大ぬさは祓の具なりはらひはてぬればあまたの手して引物なれはかくはよめるなり歌は明らかなり同集に我をのみ思ふとしらはあるへきをいてや心は大ぬさにして六帖にみな月のなこしの山のよふことり大ぬさにのみ聲のきこゆる○大ぬさと云々の歌は古今集に上の歌のかへし業平朝臣とあり意は引手あまたの大ぬさなりと名にこそ立れ其ぬさは後に川へ流れ行てつひにとまるへき所はありとなり大和物語には薬殿の内侍と業平朝臣との贈答として歌の姿詞いさゝかかはれりはらひはてゝはぬさを川へ流す事は大祓祝詞に四國卜部等大川道爾持退出氐祓却止宣とあり能宣集にみそきする川の淵瀬に引あみを大ぬさ也と人やみるらむさてよるせは流れよる川の瀬なることは勿論なり又思ふに流れよる時節といふ意をもかねたるかそは古事記に若瀬とあるはうき時節をいふ歌にもこゝをせに又戀しきせ又あふ瀬などよめる皆時節をいふなり萬葉集に河上爾洗若菜之流來而妹之當

乃瀬社因目六帖にわたつみのおきのしほせになかれても人のよるせは有てふものを
むかし男ありけり馬のはなむけせむとて人をまちけるにこさりけれは
「今そしるくるしき物と人またむさとをはかれすとふへかりけり
馬のはなむけは上にいへり○今そしる云々の歌は古今集にきのとしさたがあはのすけにまかりける時に馬のはなむけせむとてけふといひ遣りける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えこざりければつかはしける業平朝臣と有意は人をまつはくるしきものなりと今始てしれりこを思へは人待里をは離すとふへき也となり大和物語に人の國の守の下りけるうまのはなむけを堤中納言していひ給ひけるにくるゝまてこざりければいひやりけるわかるへきこともあるものをひねもすに待とてさへもなけきつる哉
流布の諸本ともに是より以上を上巻とし以下を下巻とす

むかし男いもうとのいとおかしけなるを見をりて
「うらわかみねよけにみゆる若草を人のむすはんことをしそおもふときこえけりかへし
「初草のなとめつらしきことの葉そうらなくものをおもひけるかな
いもうとは妹弟也妹とは女をなへて親しみいへる稱也弟とは男女にわたりていへる稱也古寫本には妹弟のおかしけなるか琴引けるを見をりてと有○おかしは欣感にておむかしの略なり可笑のをかしとは假名異なり混ふ可らすこは異母兄弟なるべし同母兄弟は日本書紀允恭天皇巻に同御母の御兄弟𨫴ありて御膳羹汁氷りしをトへて事あらはれし故に伊豫國に流され給ひし事あり外國の聖人の掟なかりし已前より同母兄弟婚する事なし聖人の掟ありても異母兄弟婚する事憚なし同姓不娶といふは周以來の私言にして天地自然の定經にあらねばいまをもていにしへをいぶかるべからず玉葉集にいもうとのおかしきを見て書つけて侍りける參議篁中に行よしのゝ川はあせなゝむいもせの山を越てみるべく返事參議岑守朝臣女妹脊山かけたにみえ

てやみぬへくよしの〻川はにこれとそおもふ新千載集に妹のかけたにみえて云々と申侍りけれはよめる參議篁にこゐせはしはしはかりそ水しあらはすみなむとこそたのみわたらめ續古今集に參議篁身はならむ淵瀨もしらす妹脊川おりたちぬへきこゝちのみして○うらわかみ云々の歌は新千載集に業平朝臣として載られたり意はうらわかき故に寢よげにみゆる妹を若草にたとへて人の結ばんことを思ふとなりむすふもうらもねも草の緣語なり後撰集にまた年若かりける女に遣しける源仲正葉をわかみほにこそ出ね花すゝき下の心に結ばさらめや大和物語に忠みね我宿の一村すゝきうらわかみ結ふ時にはまたしかりけり○初草の云々の歌は上の若草と有をうけてたゝにめつらしの枕詞とせりうらなくは內にへたつる心なく也萬葉集にあまたよめり毛詩に不レ屬二于毛一不レ離二于裏一とある裏も心なり歌の意はいかで兄弟に似つかはしからぬ言をめつらしくもかくはのたまふぞ我はもとより其意ともしらず兄弟のしたしみのみにてへたつる心もなく物を思ひける哉となり源氏あけ卷に在五か物語書ていもうとにきんをしへたる所の人の結ばんといひたるをみていかゝおほすらんすこしちかくまゐりていにしへの人はさるへき程はへたてならはし侍けれと忍て聞えましかばとおぼすに忍かたくて若草のねみむ物とは思はねと結はゝれたる心地こそすれことしもこそあれあやしと思せは物ものたまはすことわりにてうらなく物をといひたる姫君もされてにくゝおほさる云々狹衣に此繪ともをみせ給へは在五中將の日記をはいとめてたう書たるなりけりとみるにあいなうひとつ心なるこゝちして目とゞまる所々おほかるにえ忍給はでこはいかゝ御らんずるとてさしよせ給ふまゝによしさらは昔のあとをかへりみよ我のみまよふ戀の道かは梵網經十重禁戒の中第三婬戒云不擇畜生乃至女女婦妹六親行婬無慈悲心者是菩薩波羅夷罪

むかし男ありけりうらむる人をうらみて

「鳥の子を十つゝとをはかさぬともおもはぬ人を思ふものかはといへりけれは

「朝露はきえのこりてもありぬへしたれか此世をたのみはつへきまたをとこ

「吹風にこそのさくらはちらすともあなたのみかたひとの心は又女かへし

「行水に數かくよりもはかなきはおもはぬひとをおもふなりけりまたをとこ

「行水とすくるよはひとちる花といつれまててふことをきくらむあたくらへかたみにしける男女のしのひありきしけることとなるべし

うらむる人をうらみては男をうらむ女を又男かうらみてなり○鳥の子を云々の歌は意明らか也六帖には下の句人の心をいかゝたのまむとして十首の中に有日本書紀雄略天皇卷に國之危殆過ニ於累卵ニまた欽明天皇卷に危甚ニ累卵ニ又魏志に吾之危殆過ニ於累卵ニ史枚叔傳に危ニ於累卵ニまた說苑に晉靈公造ニ九層臺ニ云々加ニ九雞子其上ニ云々忠峰集に鳥の子はかさねてしはし有ぬとも人をたのまむことのはかなさ蜻蛉日記に三月つこもりかたに鴈の子のみゆるを是十つゝかさぬるわさをいかてせむとて手まさくりにすゞしの糸を長う結びてひとつ結てはゆひ／＼して引たてたればいとようかさなりたり猶あるよりはとて九條殿女御殿御方に奉る紅花にぞつけたる何事もなく只例の御文にてはしに此十かさなりたるはかうてもはべりぬへかりけりとのみきこえたる御かへり數ならす思ふ心にくらふれは十かさぬとももものとやはみるとあれは御返り思ふ程しらてはかひやあらさらむかへす／＼も數をこそみめ續千載集にいくつつゝいくつかさねてたのまゝしかりのこの世の人の心を○といへりけれはの下に眞字本に女とあり○朝露は云々の歌は續拾遺集に哀傷の部に入れり意は朝露は日影をまたできゆる物なれど其露だに消殘る事は有べけれと誰かは男女の中をたのみ果へきと也○吹風に云云六帖に下の句人のこゝろをいかゞたのまんとして十首のうちに上句ちらずしてこそのさくらはありつともとあり後に續古今集に業平朝臣として入られたり意はあきらか也白氏文集に縱舊年花殘梢待後春難賴是人心といへると同じ○行水に云々の歌は古今集に題しらすよみ人しらすとありはかなきたとへなり萬葉集に水上如數書吾命妹相(ミツノウヘニカズカクコトキワガイノチヲイモニアハント)受日(ウケヒ)鶴鴨(ツルカモ)とあるをもとゝしてよめるなり齋宮女御集にかつみつゝかけはなれゆく水の面にかく數な

らぬ身をいかにせんとよめるは此物語によれるなり涅槃經に此身無常念々不ﾚ住猶ニ雷光暴水幻炎ー亦如ﾚ畫ﾚ水隨ﾚ合○行水と云々の歌は上によめるはかなき事をひとつにあつめてこゝにいへるのみにて歌いとつたなし此歌古今集にまてといふにちらてしとまる物ならは云々菅家萬葉集にちる花のまててふことをしらませは云々などよめるを思ひて作りたる歌なり玉かつまに此歌此條男女の忍ありきに不叶眞字本になきそよきとあり○あたくらへは是より作者の自注なりはかなきことを互にくらべたるなり累卵朝露落花畫水等のあた物をもてくらべしなり○かたみは互なり

むかし男人のせんさいに菊うゑけるに

「うゑしうゑは秋なきときやさかさらむ花こそちらめねさへかれめや

せんさいは前栽なり花なとうゑおく園なり○うゑしうゑは云々の歌は古今集に人のせんさいに菊に結つけてうゑけるうた業平朝臣とあり大和物語には在中將にきさいの宮より菊めしければ奉りける次手に云々とかいつけて奉りけりとあり意は植に植たれば秋のなき年はさかざるべけれどいつの年も秋あれは秋毎に花は咲なりたとひ散とも其根はかれずとなり菊はちらぬ物といへど離騷に朝飲ニ木蘭之墜露ー兮夕餐ニ秋菊之落英ー兮ーまた類史にこのころのしくれの雨にきくの花ちりふしぬべきあたらそのかをとよみ給へり眞字本には初句うつしうゑはとありさて菊は類史に始てみえたるが其以前の書にもありしか今とみにおもひ出ずふるくよりありしものにてはあるべからず和名抄に菊和名加波良與毛木一云可波良於波岐とあるは加良を加波良に誤りたるなるべしされと歌にしかよめる事なしたゞ伎久とのみよめるなり菊は擧竹の反と有て字音也

むかし男ありけり人の許よりかさりちまきをおこせたりける返事に

「あやめかり君はぬまにそ惑ひける我は野にいてゝかるそわひしきとてきしをなんやりける

かさりちまきは契沖師はいろ〳〵の糸しておほく巻物なれば千纒の意なりといはれつれどあたらず糸にて巻物は粽に限らず何にても有べしこは茅も

て纏物なれば茅巻の意なるべし和名抄に糭亦作㆑粽和名知萬木以二菰葉一裹㆑米以二灰汁一煑㆑之令二爛熟一也五月五日啖㆑之とあり拾遺集に五月五日ちひさきかさりちまきを山菅のこに入てためまさの朝臣の娘に心さすとて春宮大夫道綱母心さし深き汀にかるこもはちとせのさつきいつか忘れん續齊諧記に屈原以二五月五日一投二汨羅一而死楚人哀㆑之毎㆑至二於此日一以二竹筒一貯㆑米投㆑水祭㆑之漢建武中長沙歐回白日忽見二一人一自稱二三閭大夫一謂㆑回曰聞君常被㆑祭甚善但常年所㆑遺苦二蛟龍所㆑竊今若有㆑惠可下以二楝樹葉一塞中其上上以二五色絲一轉縛㆑之此二物蛟龍所㆑憚回依二其言一世人五月五日作㆑粽幷帶二五色絲及楝葉一皆汨羅之遺風也○あやめかり云々の歌はあやめは和名抄に昌蒲一名䒢蒲和名阿夜女久佐とありこは粽の料ならねと時によりていふのみ意はあやめをからむとて君はぬまにまとひ給へり我は雉をからむとて野にさまよふか侘しきとなり日本書紀に天智天皇七年丁卯夏五月五日遊二獵於蒲生野一○きしは雉子なり

むかしをとこあひかたきをんなにあひて物かたりなとするほとに鳥の鳴ければ

「いかてかは鳥の鳴らむ人しれずおもふ心はまた夜ふかきに

餝粽の圖

いかてかは云々の歌は續後撰集に業平朝臣として入られたり意は明らかなり遊仙窟に始知二難㆑逢難㆑見可㆑貴可㆑重可憎病鵲半夜驚㆑人薄媚狂鷄三更唱㆑曉とあるに似たり

むかし男つれなかりける女にいひやりける

「ゆきやらぬ夢路をたどるたもとにはあまつそらなる露やおくらむ

ゆきやらぬ云々の歌は後撰集に題しらすよみ人しらずと有て二の句夢路にまどふ結句露や置そふと有意はつれなき人のもとにゆかんとしても夢なれは行事の心にまかせずかなたこなたとたどりゆく道々袖のいたくぬるゝは天つ空の露のおくにやあらんとなり古今集に夢路にも露やおくらんよもすからかよへる袖のひちてかはかぬ

むかしをとこ思ひかけたる女のえうましうなりてのよに

「おもはすはありもすらめと言のはのをりふしことにたのまるゝかな

思ひかけたるはいかてと思ひかけたるなり○えうましうなりては得る事かたく成てなり上にえうましかりける云々又えゝす成にける云々なと思ひ合せてこれを二條后なりといふ說は強言なり○思はすは云々の歌は續後撰集に業平朝臣として入られたり意は女の方にては思ひ給はすはさてありぬへきををりふしの文詞などには情たちたる言の葉書給ふ故にわすれがたくたのみおもふとなり古今集によし野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことはわすれすとあるは今はつれなくともむかしいひかはせし言は忘れずと云意にてすこしたがへり

むかし男ふしておもひおきて思ひおもひあまりて

「我袖は草のいほりにあらねともくるれは露のやどりなりけり

ふして思ひ云々は歌の意を深くせんとての詞なり○我袖は云々の歌は新勅撰集に業平朝臣として入られたり意は明らか也和名抄に菴和名伊保草舍也とあり

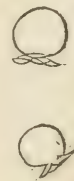
むかし男人しれぬ物思ひけりつれなきひとのもとに

「戀わびぬ海士のかるもにやどるてふわれから身をもくたきつるかな

玉かつまに人しれぬ物思ひけりはいたつらごとなり眞字本に昔人しれぬ物する男云々とあるぞよきといはれたり○戀侘ぬ云々の歌は古今集(此物語の下にも)にあまのかる藻にすむむしのわれからと音をこそなかめ世をはうらみしといふ歌をとりて作りたるな

り此歌新勅撰集によみ人しらずとあり藻は和名抄に藻和名毛水菜也 文選云 海苔之彙食經云 沈者曰藻浮者曰蘋すべて海草は食用なるも食用ならざるもおしなべて藻と云われからは說々まち〳〵なり或は小蝦の如くなる虫なりといひ或は口の如くなる虫なりといひ或は靑き蟲なりともいへり伊勢國安濃津芝原春房が三重郡四日市の浦の船人にとひしに三四寸ばかりの靑く長き虫なりともいへるよし玉かつまにあり或は露貝なりともいへりこはかううすくしてわれやすき故に破殼也といへり齋宮女御集にしらなくにわするゝ物はおほつかな藻にすむむしの名にこそ有けれかへしわするらむ藻にすむむしの名をとはばかひもあるそとあまはつけましと有によれは破殼といふにも身をもくたきつる哉といふにもよく叶へりされとこの戀わひぬ云々の歌は古今集の歌によりて後に作りたるなれば證には成かたし齋宮女御集は元來後の集なれはとかくいふべからずわれからは古今集につきて理りいふべきことなりそは下のあまのかる云々の歌の所にいふべし○藻はさま〳〵あり圖に及はず

はやくよりわれからといふ蟲の圖

われからといふ貝會榛堂にて見たる圖

四日市舟人のいへるわれからの圖

むかし心つきて色このみなる男長岡といふ所に家つくりてをりけりそこのとなりなりけるみやはらにこともなき女とものゐなかなりけれは田からむとて此男のあるをみていみしのすきものゝしわさやとてあつまりて入來れは此男にけて奧にかくれにけれは女

「あれにけり哀いくよの宿なれや住けむ人のおとつれもせぬといひて此宮にあつまりきゐて有けれは此男

「むくらおひてあれたる宿のうれたきはかりにもおにのすたく成けりとてなむ出したりける此女ともほ

ひろはむといひければ
「うちわひておちほひろふときかませは我も田つらにゆかましものを
心つきては物毎に心きゝたる好色をいふ眞字本に榮而とあるはきこえず〇長岡は山城國乙訓郡也伊豆内親王を含めたるか〇宮原は宮部等にて宮たちといふこと也源氏箒木に宮はらの中將とあるは母大宮の御腹といふ義にて異なり榮花物語によろつの殿原宮原さるべき用意せさせ給ふとある殿ばらも殿部等にて上達部といふも同じ枕草子に女院宮はらの屋なとあり〇こともなきはよくもあしくもなく仔細なきをいふうつほ物語にこともなき娘又かたちもいとこともなし〇田からむとては男の田からむとてあるを女のみし也〇すきものは好色者也古今集に梅の花ちりてのゝちのみなれはやすきものとのみ人のいふらむ紫式部日記にすきものと名にしたてれはみる人のをらてすくるはあらしとそ思ふかへし人にまたをられぬ花を誰かこのすきものそとは口ならしけん仲文集にすき物を花のあたりによせさらは此とこなつもねたまましやは〇

あれにけり云々の歌は古今集に題しらすよみひとしらすとある歌をとりて物語とせり意はあるしのかくれたるを見てたはふれによみたるなり明らかなり〇きゐては來居てなり〇むくら生て云々の歌むくらは和名抄に葎草和名毛久良とあり上に圖ありうれたきは慨なり古事記に宇禮多久母那久那留登理加云々〇おには女をたとへたるなり拾遺集にみちの國名取の郡黑塚といふ所に重之か妹あまた在ときゝていひ遣しける兼盛みちのくのあたちかはらの黑塚に鬼こもれりといふは誠か龍猛大士曰女人地獄使能斷二佛種子一外面似二菩薩一內心如二羅刹一然則於二我門德一者眼不レ見二女人一云々すたくは集なり歌の心明らかなり〇出したりけるは女を追ひ出すにはあらず歌をよみて出したるなり〇穗ひろはんといへるは上の田からむといへるとむかへたる詞なり是業平朝臣には似つかはしからずといひて田からむもほひろはんもたはふれていへるなりと心つかひしてとかくいひたすくるはいたつらごとなり〇うちわひて云々の歌の意は世にありわひて落穗ひろひ給はゞ我も田つらに行てひろひ得

させんとなり落穂拾ふは延喜式に凡百姓被レ霍刈レ稲之日不レ得下牽レ人拾上レ穂とあり毛詩北山之什大田章曰彼有二遺秉一此有二滯穂一伊寡婦之利また列子云林類年且二百歳一底レ春被レ裘拾二遺穂一また白氏文集に観二刈麥一詩云復有二貧婦人一抱レ子在二其傍一右手秉二遺穂一左臂懸二弊筐一田つらは田面也

むかし男京をいかゝ思ひけむひむかし山にすまむとおもひ入て

「住わひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてむ（第上段の所と入替てみるべきなり）「かくて物いたくやみてしにいりたりけれはおもてに水そゝきなとしていきいてゝ

「我うへに露そおくなる天の川とわたるふねのかいのしつくかとなむいひていき出たりける

ひんかし山は京都の東をなべていふ○住わひぬ云云の歌は後撰集に世の中を思ひうして侍りける比業平朝臣とありて四の句つまきこるべきと有意はうき世に住わひぬれは今は限と思ひて身をかくし世にまじはらさるかくれ家をもとめむとて山さとに入らんと也千載集に「住わひて身をかくすべき山さとにあまりくまなき月の陰哉○かくて物いたくやみては大病にあらず深く物を思ひ心をなやませしなるべしこは別段にてはし詞の落たるか又は此前に歌詞ともに脱たるか此段の始終連續せず○おもてに水そゝぎ云々法華經信解品に于時窮子悶絶躃レ地父遙見之而語使言不レ須二此人一勿二强將來一以二冷水一灑レ面令レ得二醒悟一竹取物語に御目はしらめにてふし給へり人々水をすくひ入れ奉るからうじていきいて給へるに云々○我うへに云々の歌は古今集に題しらずよみ人不知とある歌也我うへは面なり天の川は古事記日本書紀萬葉集等に天の安川とあり後世は外國にて天漢銀河なといへるを天の川と云りとわたるは門渡るなりかいは和名抄に棹在レ旁撥レ水曰レ櫂加伊櫂二於水中一且進レ櫂也とあり思ふに加伊は加伎の音便なるべし水を搔て舟を行しむればなり歌の意は我面のぬれたるは天の川門をわたる舟の棹の雫にやとなり萬葉集に此夕零來雨者男星之早榜船之賀伊乃散鴨

むかし男ありけり宮つかへいそかはしく心もまめならさりける程の家とうしまめにおもはむといふ人につきて人の國へいにけり此男うさの使にていきける

にある國のしそうの官人のめにてなむ有ときゝて女あるしにかはらけとらせよさらすはのましといひければかはらけとりて出したりけるにさかなゝりけるたちはなをとりて

「さつきまつ花たちはなの香をかけはむかしの人の袖の香そするといひけるにそ思ひ出てあまになりて山にいりてそありける

かいの圖

まめならさるは不忠誠也いそかはしきにつきて女をはふかく愛せざる也〇家とうしは上にいへりまめに思はむと云々外の男此女をふかく愛せんといふにつきてなり〇うさは豊前國宇佐郡なり〇使は八幡宮への奉幣使なり天皇御一代に一度遣はさるなり稱德天皇の御代に遣はされし清麿卿以來和氣氏代々の役なり此物語にては和氣氏にまれ在原氏にまれ其人の事はとかく論ふべきにあらず〇しそうの官人は祇承官人なり國々にありて勅使下向の時饗應萬事の役なり〇女は妻なり〇女あるしはかの妻をさす〇かはらけは瓦笥にて土の盃なり〇さかなは酒菜也　和名抄に肴凡非ㇾ穀而食謂ニ之肴一亦作ㇾ餚和名佐加奈とあり〇たちはなは和名抄に橘一名金衣和名太知波奈とあり古事記に天皇以三宅連等之祖名多遲麻毛理遣ニ常世國一令ㇾ求ニ登岐士玖能迦玖能木實ニ云々是今橘者也云々　日本書紀　垂仁天皇九十年春二月天皇命ニ田道間守一遣ニ常世國一令ㇾ求ニ非時香菓一今謂橘也とあり續日本紀元明天皇和銅元年十一月己卯云々天皇賜ニ浮杯之橘一勅曰橘者菓子長人所ㇾ好云々また本朝編年錄に和銅元年十一月云々勅曰橘者菓子之長柯凌霜雪葉經寒暑以是賜汝橘宿禰姓云々萬葉集に等許余物能己能多知婆奈能(トコヨモノコノタチハナノ)云々また田道間守常世爾和多利(タヂマモリトコヨニワタリ)云々時自久能(トキシクノ)香久乃草子乎(カクノコノミヲ)云々〇さつきまつ云々の歌は古今集に題しらすよみひとしらすとあり六帖には伊勢とあり伊勢集にもありさつきまつは花たちばなとい

はむ料なり意は橘の香をかけばむかし相しりたる人の袖の香そすると也かの官人の女をさしていへり漢書に與芳七尺之盧橘傳古袖巽○思ひ出ては心みしかきを耻悔て尼になりたるなり箒木雨夜の品定めの所にさるましき事にて尼になりたる物語あり

むかし男つくしまていきたりけるにこれは色このむといふすきものとすたれのうちなる人のいひけるをきゝて

「そめ川をわたらむ人のいかてかはいろになるてふことのなからむ

女かへし

「名にしおはゝあたにそあるへきたはれ島浪のぬれきぬきるといふなり

つくしは諸國名義考に委しくいへり○すき物は上にいへり○すたれは和名抄に簾和名須太禮編竹帳也○そめ川を云々の歌は拾遺集に入て業平朝臣とありそめ川は筑前也意は色このみのすきものとのたまふもうべなり染川をわたりたる人の色にならざるといふ事はなしとなり後撰集にわたりてはあたになるてふ染川の心つくしになりもこそせめ

大和物語にあた人のたのめわたりし染川の色の深さをみてややみなむ○なにしおはゝ云々の歌は後撰集にたはれ島をみてよみ人しらずと有て二の句あたにそ思ふ結句いくよきぬらむと有たはれ島は肥後なり浪のぬれきぬはなき名たつをいへり意はたはれ島の名におふ物ならばあたにあるべきをさもなきは浪のぬれ衣を常にきるといふなりといふ意なり色好といふはあたなる名にて身にしらぬうき名の立しなるべしとなり後撰集にまめなれとあた名はたちぬたはれ島よる白浪をぬれ衣にしてかれこれ取あわせて贈答として一條の物語としたるなり

むかし年ころ音つれさりける女こゝろかしこくやあらさりけむはかなき人のことにつきて人の國なりける人につかはれてもとみし人のまへに出きて物くはせなとしけりよさりこの有つる人給へとあるしにいひけれはおこせたりけり男われをはしらすやとて

「いにしへの匂ひはいつらさくら花こけるからともなりにけるかなといふをいとはつかしと思ひていらへもせてゐたるをなといらへもせぬといへばなみた

のこほるゝにめもみえず物もいはれずといふ

「これやこの我にあふみをのかれつゝ年月ふれとまさり顔なきといひてきぬゝきてとらせけれとすててにけにけりいつちいぬらむともしらす

かしこきの本語はいみつゝしみおそるへきをいふうつりてはおろかなるにむかへてさかしきをもいへりこゝには賢きをいふ○人のことにつきては人の言にすゝめられてなり○人の國は他國なり○人につかはれては被仕なり○もとみし人は先夫なり○物くはせは饗應の給仕なり○よさりの上に其男と有べきなりと玉かつまにいはれたり○ありつる人はかの女をさす○いにしへの云々の歌の意明らかなり眞字本にこけるかこともとあるもあしからず○いとはつかしの上に異本には女の字あり○いらへは答也○物もいはれすといふの下に眞字本には又男とあり○これやこの云々の歌の意は我をむつましく相かたらふ身をのかれて今こゝに年月をふれとまさりたるかほもみえぬとなりされど此歌さらにとゝのはすあふみをのかれつゝといへることきこえず上下もかけあはすこれらの歌をも業平朝臣なりと思ひて心あまりて詞たらぬは此朝臣の常なりといひてたすくるは歌しらぬ人の私なり○いつちは何路也日本書紀に於是倭彦王遙望ニ迎兵一懼然失レ色仍遁ニ山壑一不レ知レ所レ詣

むかし世心つけるおむないかて心なさけあらむ男にあひえてしかなとおもへといひ出むもたよりなさに誠ならぬ夢かたりをす子三人をよひてかたりけりふたりの子はなさけなくいらへてやみぬ三郎なりけるなむよき御男そゐてこむとあはするに此女けしきいとよしこと人はいとなさけなしいかて此在五中將にあはせてしかなと思ふこゝろありき狩しありきけるにいきあひて道にて馬の口をとりてかう〳〵なむ思ふといひけれはあはれかりていきてねにけりさて後男みえさりけれは女男の家にいきてかいまみけるを男ほのかにみて

「もゝとせにひとゝせたらぬつくもかみ我をこふらしおもかけにみゆとて出たつけしきをみてうはらからたちにかゝりて家に來てうちふせり男かの女のせしやうに忍てたてりてみれは女なけきてぬとて

「さむしろに衣かたしきこよひもやこひしき人にあ

はてのみねむとよみけるを男あはれとおもひて其夜はねにけり世の中の例として思ふをは思ひ思はぬをは思はぬものを此人はおもふをもおもはぬをもけちめみせぬこゝろなむありける

世こゝろつけるは老年にして色情ふかく世にまじらふ心あるといふ眞字本に世營とあるは物遠し○おむなは和名抄に嫗和名於無奈老女之稱也○あひ得てし眞字本には相見てし哉とありいつれにてもあもなん○誠ならぬ夢かたりはいつはりて夢物語に取なして思ふ心をいふ莊子に文王觀ニ於臧一見ニ一丈夫釣一文王欲三擧而授ニ之政一而恐大臣父兄之弗安也欲ニ終而釋レ之而不レ忍百姓之無レ天也於是且而屬ニ之大夫一曰昔者寡人夢見良人黑色而髯乘ニ駁馬偏朱蹄曰寓ニ而政於臧丈夫一庶幾乎民有レ瘳乎諸大夫蹵然曰先君王也文王曰然則卜レ之諸大夫曰先君之命王其無レ佗又何卜鳥また左傳に小臣有ニ晨夢一○ゐてこむは將て來むなり○あはするは夢語にあはせいふなり日本書紀崇神天皇卷に天皇相レ夢謂ニ二子一曰云々拾遺集に夢よりそ戀しき人をみそめつる今はあはする人もあらなむ○在五中將は三代實錄に業平者故四品阿保親王第五之子云々元慶元年爲ニ右近衛權中將一と有此物語に業平朝臣とあかしいへるは此段のみにて外になきをもて始終業平朝臣を含めたるをしるべしまたかゝる僞ことに朝臣の名をあらはしかへりて實事に名をかくしたるをもて業平ならぬ業平の昔物語としるべし○かうかうは斯々也母の爲に我かく思ふとなり○哀かりては三郎か實情を此男哀に思ふなり○かいまみは上にいへり○もゝとせに云々の歌のこゝろ明らかなりつくもは和名抄に江浦草久毛豆（ツクモ）一云太久萬毛（タクマモ）老女の髮のわゝけたるに似たればなりさるを此歌によりて後世九十九をつくもといひ又百に一畫のたらねば白髮をつくもかみとよめりなどいへるは末にすかりて本をしらさる說なり○うばらは荊也古事記にはうまらとあり和名抄に薔薇一名墻蘼營實無波良乃美○からたちは和名抄に枳椇和名加良太知似レ橘而屈曲者也思ふに唐橘（カラタチハナ）の義にてさむしろに云々の歌は古今集に有て下の句我をこふらむうちの橋姫とありしを作りかへてこゝに出せるなりさむしろは狹きむしろなり新古今集にきりぎりす

鳴や霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん
延喜式に山城國廣席二百八十枚狹席五百九十枚また狹席六枚長席八枚などあり歌の意明らかなり〇其夜はねにけりは老女と共になり〇世中の例として是より記者の自注なり〇けち目は分目なり

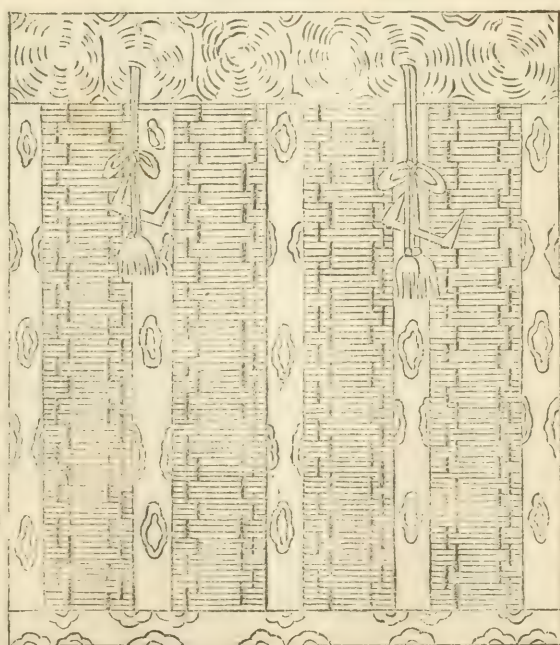
むかし男女みそかにかたらふわざもせざりければいつくなりけむあやしさによめる

「吹かせに我身をなさば玉すだれひまもとめつゝいるべきものをかへし

「とりとめぬ風にはありとも玉すだれたかゆるせばかひまもとむべき

いつくなりけむは女はいつくにありやとうかゞふなり〇吹風に云々の歌は新千載集に入れて業平朝臣とせり意は我身をなすならば玉すだれの透間をたづねて入つき物をとなり萬葉集に玉垂小簾之寸鷄吉仁入通來根足乳根之母我問者風跡將申イキノヲニ吾ハ思ヘト人目多ミコソ吹風ニアラハシハシハアフベキモノヲ文選曹子建七哀詩云願爲二西南風一長逝入二君懷一〇とりとめぬ云々の歌の意は手にとりとめられぬ風なりとも誰かゆるしてか玉すだれの透間をたづねて入べきとなり朗詠集に風詩

漢主手中吹不レ駐

すだれの圖

むかしおほやけおほしてつかう給ふ女の色ゆるされたるありけりおほみやすむ所とていますかりけるいとこなりけり殿上にさふらひける在原なりける男の

またいと若かりけるを此女あひしりたりけるをとこ女かたゆるされたりけれは女のある所にきてむかひをりけれは女いとかたはなり身もほろひなんかくなせそといひけれは
「思ふには忍ることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれといひてさうしにおり給へれは例のそうしには人のみるをもしらてのほりゐけれは此女おもひわひてさとへゆくされは何のよきことゝ思ひていきかよひけれはみな人きゝてわらひけりつとめてとのもつかさのみるにくつはとりて奥になけいれてのほりぬかくかたはにしつゝありわたるに身もいたつらに成ぬへけれはつひにはほろひぬへしとて此男いかにせむ我かゝる心やめ給へと佛神にも申けれといやまさりにのみ覺えつゝ猶わりなく戀しうのみおほえけれはおんやうしかむなきよひてこひせしといふはらへのくしてなむいきけるはらへけるまゝにいとゝかなしきこと數まさりて有しよりけに戀しくのみ覺えけれは
「戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすもなりにけるかなといひてなむいにける　此みかとは御かほかたちよくおはしまして佛の御名を御心にいれて御こゑはいとたふとくて申給ふをきゝて女はいたうなきけりかゝる君につかうまつらてすくせつたなくかなしき事此男にほたされてとてなむなきけるかかる程にみかときこしめしつけて此男をは流しつかはしてけれは此女のいとこのみやす所女をはまかてさせてくらにこめてしをり給ふけれはくらにこもりてなく
「海士のかる藻にすむ蟲のわれからとねをこそなかめよをはうらみしとなきをれは此をとこひとの國より夜ことに來つゝふえをいとおもしろくふきて聲はおかしうてそあはれにうたひけるかかれは此女はくらにこもりなからそれにそあなるとはきけとあひみるへきにもあらてなむ有ける
「さりともと思ふらむこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらすしてとおもひをり男は女しあはねはかくしありきつゝ人の國にありきてかくうたふ
「いたつらにゆきてはきぬる物ゆゑにみまくほしさにいさなはれつゝ水の尾の御時なるへし大御やすむ所も染とのゝ后なり五條のきさきとも

おほやけおほしては天皇の深く思召て召仕ひ給ふ女なり○色ゆるされたるは禁色をゆるさるるをいふ延喜式彈正式に凡禁色者總雖二下衣一不レ聽二服用一また左右京式に有下著二禁色一者上謂綾羅錦綺之類また禁秘抄に聽色大臣孫○大みやすむ所は春宮皇太子の御母なりこは惟仁天皇の御母染殿后をふくめたるなるへしされはいとこなりける色ゆるされたる女は二條の后をふくめたるなるべし其事は下に系圖をあらはせり○在原なりける男は業平朝臣をさすことうつなしされど實事にあらぬ作物語といふ事始終わするべからず名もなきむかし男の物語なりといひけつは實事ならぬ作物語なりとつよくいはむ心すさびなれど委しからず○男女かたゆるされ云々男なれとも幼年なれば女の居る殿中へ出入事をゆるされたる也○かたはといふは鳥の片羽よりいへる詞なり源氏をとめにかの人の御爲にもいとかたはなることとなり云々うつほ初秋卷に鳥のかたはの事歌に數々よめり枕草子にみくるしき物色くろき人のひとへのすゝしきたるいとみくるしかしのしひとへも透たれどそれはいとかたはにもみえず云々○身も亡ひなんは公の御とかめに我はもとより御身も亡ひ給はんとはかるこゝろなり○おもふには云々の歌は古今集に有りて下の句色には出しと思ひし物をとありしを上の句のみとりて下の句は同集にいのちやは何ぞは露のあた物をあふにしかへはをしからなくにとある下の句をとりてすこし作りかへて彼と是と調合して一首とせる記者の歌なりそを新古今集に業平朝臣として載られたるはよみ歌にのみはこりていにしへにくらき者たちのひがことなり歌の意はふかく思ふ心よりは堪忍ぶ心のよわければかつ事あたはすつひにさけて色にあらはるゝさはあれとあふにかふる物ならばよしやつらからじとなり○さうしは曹子にて御局なり女の部屋をいふ臺盤所より部やへ行なり○さとへゆくは私の家へゆくなり○何のよきことと思ひて何のあしき事かあらんと含めたるなり土佐日記に何のあしかけにことつけて云々うつほ物語にも何のよきことゝいはゝとにこそあらめなとあり何のあしき事かあると思ひて里へも行通ふなるへし○つとめては翌朝なり女の里より内裏へか

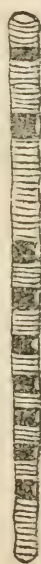
へりてなり○とのもつかさは朝淸めにて早く起出るなり職員令に頭一人掌下供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒ニ掃殿庭一及燈燭松柴炭燎等事上云々殿司後宮尙殿一人掌ニ供奉輿繖膏沐燈油薪炭事一また職原抄に主殿寮唐名尙舍局掌ニ殿上殿下洒掃事一云々大鏡にとのもりつかさの下部も朝淸めつかうまつる事も云々○くつは和名抄に唐韻云草曰レ扉麻曰レ履革曰レ履和名並久豆(クツ)とあり○奥になけ入て云々は宿直をおこたり女の里へひそかに通ひながら其事をかくさむとしてくつをば人の履よりも奥の方へなげ入て夜すがら殿中に宿直せし顔にてのほり居るなり枕草子にみつし所のおものたなといふ物にくつ置ていひのゝしるをいとおかしかりてたかくつにかあらむえしらずとのもりつかさ人々のいひけるをやゝまさひろがきたなき物ぞや云々仲文集に永香殿に侍ひける人をかたらひけるかみそかに人をもたりてまかりたりしかばまとひかくしてけるくつの有けるをみて云々○かたはにしつゝは上をうけていへる詞の首尾なり○つひに亡ひぬへし云々は男の思ふ心なり○わりなく戀しうは道理にたがひて戀しきをいへり古今集にわりなくもねてもさめても戀しさか心をいつちやらは忘れむ○おんやうしは職員令に頭一人掌ニ天文曆數風雲氣色奏聞事一云々陰陽師六人掌ニ占筮相一地とあり○かむなきは和名抄に巫加牟奈岐(カムナギ)祝女也覡乎乃古加(ヲノコカ)牟奈岐(ムナギ)男祝也このころやゝ私事には陰陽師巫祝などにはらへさせしなるべしをしむべしかなしむべしみそぎの大はらひはかけまくもかしこきいさなきの大御神筑紫日向の橘の小門の檍原にて始てみみそき給ひしより始りてすさのをの命のちくらおきどのはらへつ物とともに大はらひのおこりなり朝廷にてもおもく取行はせ給ふ事は國史をよみてしるべしかゝるたふとき御わざの陰陽師巫などのつかさとる事となれるはいとあたらしきことなり○はらへの具は日本書紀天武天皇卷また延喜式四時祭式等に委しかれどこと長かればこゝにはもらしつ○いきけりは加茂川邊へなり○あはしよりけに云々始よりも殊にまされるなり古今集に忘れなむと思ふ心のつくからに有しよりけにまつそかなしき○戀せしと云々の歌は古今集によみ人しらす

にて下の句神はうけずそなりにけらしもとありしをすこしかへたるなり意のかゝる心やめ給へと佛神にいのり戀せしと云はらへなどするまゝにいとかなしく戀しけれはさては御手洗川にてせしみそぎも神はうけ給はぬかとなり六帖につらき人忘れなむとてはらふれはみそくかひなく戀こそまされ新續古今集に戀せしとせしみそきこそうけずともあふせはゆるせかものみつかさ」戀せしのみそきは神もうけすとや人をわするゝつみふかしとて萬葉集に何爲而戀止物序天地乃神乎禱迹吾八思益天地之神尾母吾者禱而寸戀云物者都不止來○このみかとは清和天皇を含みてかけるなり○御顔かたち云々三代實錄に風儀甚美端嚴如レ神性寛明仁恕溫和慈順好讀二書傳一潜思二釋敎一鷹犬之遊漁獵之娯未二嘗留一レ意云々○すくせは宿世にて前世よりつたなきをいふ伊勢集に水くきのかよふはかりをすくせにて云々大和物語に行末のすくせも知らす云々歌にすくせとよめるはわろし○ほたされてはほたしを用言にいへるなり馬の足にかけて令レ行さるをほたしといふ和名抄に絆平也拘使下半行不上レ得二自縱一也和名保太之鉅加奈保太之鏁レ足具也こは刑罰の具也獄令また延喜獄司式などに鈦とあるに似たる物なり古今集によのうきめみえぬ山路へいらむにはおもふ人こそほだしなりけれ」あはれてふ事こそうたて世中を思ひはなれぬほたし成けれ萬葉集に馬爾己曾布毛太志可久物云々とあるふもたしも同じ物なり○とてなん泣ける迄は上の女はいたう泣けりの自註なり○此男を流しつかはし云云業平流罪の事國史に見えされば東山に隱居なるべしといへるはわづらはしき論なり此條業平朝臣を含めたるはうつなけれと流罪の事は作物語なればは實事にあらす類聚國史刑法部に聖武天皇神龜元年定二諸流配處遠近之程一伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐六國爲レ遠諏方伊豫爲レ中越前安藝爲レ近○しをりは契沖師云風の草木をふきしをるといふも撓ていたましむるをいへば今もいたむる意なりおちくほ物語に此北の方にこめて物なくはせそしをりころしてよと父中納言おいほけて物の覺えぬまゝにのたまへば云々○あまのかる云々の歌は古今集に題しらす典侍藤原直子朝臣とありわれからは上に

委しくいへり圖ありさてこゝにねをこそなかめとあるからは上にいへる說はみないかゞなる心ちす此歌は古今集なる古歌なり上の歌は此歌によりて作れる記者の歌なれは證に立かたし日本書紀仁德天皇卷に爰皇位空之既經三三歲一時有二海人一賫二鮮魚之苞苴一獻二于菟道宮一也太子令二海人一曰我非二天皇一乃返之令レ進二難波一大鷦鷯尊亦返以令レ獻二菟道一於是海人之苞苴鯘二於往還一更返之取二他鮮魚一而獻焉讓如二前日一鮮魚亦鯘海人苦二於屢還一乃棄二鮮魚一而哭故諺曰有海人耶因己物以泣其是之緣也云々とありかゝる諺もてよめるかむしとは和名抄に魚和名字乎俗云伊遠水中連行蟲之惣名也といへる意か又は海人を虫にたとへたるか歌の意はきこえたり〇ひとの國よりは流されたる他國よりなり〇ふえは和名抄に律書樂圖云橫笛和名與古布江本出二於虎一也漢張騫使二西域首傳二一曲一李延年造二新聲二十八曲一〇おもしろくおかしくあはれみな上にいへりうたひけるは徒に行てはきぬる云々の歌を謠ふなり〇あなるは有なるなり六帖にいへはえにふかくかなしき笛竹のよこゑやたれとゝふ人も

かな〇さりともと云々の歌は新勅撰集によみ人しらず意は今くらにこもり居てあるにもあらずくるしき身をはしらずしてあはるゝ事もあらんかといたづらに行てはかへり思ふらんこそいとほしく悲しけれとなり〇人の國に云々眞字本にはなし〇いたつらに云々の歌は古今集に題しらすよみ人しら

履之圖

笛之圖

ずと有意はいたつらに行てはあはすしてかへる物なるに又みまほしくていさなはれて行かへりするとなり〇水の尾の御時は淸和天皇の御時なり元慶四年十二月四日御年三十一にて崩し給ひ粟田山に葬奉り御骨は水尾山に納奉るゆゑに水尾天皇と申

奉る○染殿后は明子なり○五條后は順子なり次に系圖あり

后之系圖

○冬嗣公閑院左大臣
- 長良公贈太政大臣
  - 國經大納言
  - 二條后高子陽成天皇御母 清和天皇御后
- 五條后順子文德天皇御母 仁明天皇御后
- 良房公攝政太政大臣准三宮 號白川殿又號染殿侯 諡忠仁公
  - 基經太政大臣關白
  - 染殿后明子清和天皇御母 文德天皇御后

勢語圖說抄卷之四

石見國濱田家人　藤原彥麻呂誌

むかし男津の國にしる所ありけるにあにおとゝ友だちひきゐて難波のかたにいきけりなぎさをみれは舟どものあるを見て

「なにはつをけさこそみつのうらことにこれやこのよをうみわたる舟これをあはれかりて人々かへりにけり

津の國○しる所ともに上にいへり○なにはゝ日本書紀神武天皇卷に皇師云々到二難波之碕一會レ有二奔潮太急一因以名爲二浪速國一亦曰二浪華一今謂二難波一訛○なぎさは和名抄に渚韓詩注云一溢一否曰レ渚和名奈木佐なぎさは浪岸の意にてもあらむか○難波津を云々の歌は後撰集に身のうれひ侍ける時津國にまかりて住始侍りけるに業平朝臣とありて二の句けふこそとありみつのうらは古事記に於レ是大后大恨怨載二其御船一之御綱柏者悉投二棄於海一故號二其地一謂二御津前一也とあり歌の意はなにはつをけさ始てみつるに御津をいひかけてうらことにあ

るふねを是やこの世をうみわたる舟にてあるらんといひふくめて海に憂をかねたるなり契沖師の云文選秋風辭云歡樂極兮哀情多といへる如く眺望の興より終に世上を歎ずる心のつくなり云々さて津の國あしやの鄕の邊に阿保山觀王寺などありまた行平卿は須磨におはしたる事などもあれば此條に津國にしる所あり云々といへるもよしあるか○これを哀がりて云々はあにおとゝの歌をのせねはともなへる意をあらはしたるなり

むかし男せうえうしに思ふとちかいつらねていつみの國へきさらきはかりにいきけりかふちの國いこま山をみればくもりみはれみ立ゐる雲やますあしたよりくもりてひるはれたり雪いとしろう木のすゑにふりたりそれをみてかの行人の中にたゞひとりよみける

「きのふけふ雲の立まひかくろふは花のはやしをうしとなりけり

せうえうは逍遙なり○思ふとちは思ひかはし心あへる友なり○かいつらねては播連にて同道也○いつみの國は諸國名義考にいへり生駒山の東は大和西は河内なり山城より和泉へ行には西の方を通るなり○きさらきは草木の芽を張ころをいふ二月なり○くもりみはれみ云々○きのふけふ云々の歌は萬葉集に奈爾波刀乎己岐涯弖美例婆可美佐夫流伊古麻多可禰爾久毛曾多奈妣久とあるをおもひてかけるなりきのふけふ云々はきのふけふ立まひたる雲もいつこへかくれけん今みれば雲はなくよく晴たりさるは雪の花咲林を立かくさんかうき故に雲も所をさりつらんといふ意なるべし古人の說の如く花の林をねたましく思ひて雲のかくせるなどいへるは非なりさては物語の文にかなはず

むかしをとこいつみの國へいきけり住吉郡すみよしのさと住よしの濱を行にいとおもしろけれはおりゐつゝゆくある人住よしの濱とよめといふ

「雁鳴て菊の花さく秋はあれと春の海へに住よしの濱とよめりけれは皆人よますなりにけり

住吉郡は和泉にはあらず攝津なり和名抄に住吉須三興之とあれどいにしへは須美乃衣といひしを住吉と書けるよりしかよみひがめたるなりそは日枝を日吉と書しより比與之とよめる事と成しと同じ

攝津國風土記に所以稱住吉者昔息長足比賣天皇世住吉大神現出而巡行天下不見可住國時到於沼名椋之長岡之前乃謂斯實可住之國遂讃稱之云眞住吉之國仍今俗略之直稱須美之叡とあり郡鄕誌と二つかさねいへるは地處せめしていへるなり　雁鳴て云々　歌は意明らかなり定家卿の歌にしらきくのにほへる秋も忘草生てふきしの春の浦かせ○皆人々よます云々は外の人々此歌をめでゝよまぬなり伊勢集にいはくりう門といふ寺にまうでゝ人々いさ歌よまんといひければたちぬはぬ衣きし人もなき物を何山姫の布さらすらんとよみたればこと人よまず成にけり三躰詩劉禹錫西塞山詩李昌增註云按鑒成錄載元微之劉夢得韋楚客會於白樂天之居各賦金陵懷古詩夢得騁其材略無遜意滿引一揮而成白公覽詩曰四子探驪龍吾子先得珠其餘鱗甲將何爲三公於是罷吟よく似たり

むかし男ありけりその男伊勢の國にかりの使にいきけるにかのいせの齋宮なりける人のおや常の使よりは此人よくいたはれといひやれりければ親の事なりければいとねもころにいたはりけり朝にはかりにいたしたてゝやり夕さりは歸りつゝそこにこさせけりかくてねもころにいたつきけり二日といふ夜男われてあはんといふ女もはたあはしともおもへらすされと人目しげければえあはすつかひざねとある人なれはとほくもやとさす女のねやもちかくありければ女人をしつめて子ひとつはかりに男のもとにきたりけり男はたねられさりければとのかたを見出してふせるに月のおほろなるにちひさきわらはをさきにたてて人たてり男いとうれしくて我ぬる前にゐて入て子ひとつよりうしみつまてあるにまたなに事もかたらはぬにかへりにけり男いとかなしくてねす成にけりつとめていふかしけれと我人をやるへきにしあらねはいとこゝろもとなくて待をれは明はなれてしはしあるに女のもとよりことばゝなくて

「君やこし我や行けむおもほえす夢かうつゝかねてかさめてか男いといたうなきてよめる

「かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはこよひさためよとよみてやりてかりにいてぬ野にありけと心はそらにてこよひたに人しつめていとゝく

あはむと思ふに國の守いつきの宮のかみかけたる獨の使ありときゝて夜ひとよ酒のみしけれはもはらあひこともえせてあけはをはりの國へたちなむとすれは男も人しれすちのなみたを流せとえあはす夜やうやう明なんとする程に女のかたよりいたす盃のさらに歌を書て出したりとりてみれば

「かち人のわたれとぬれぬえにしあれはと書てするはなし其さかつきのさらについまつのすみして歌のするをかきつく

「又あふ坂の關はこえなむとてあくれは尾張の國へこえにけりいつきの宮は水尾の御時文德天皇の御娘これたかのみこのいもうと

かりの使は三代實錄に臂二鷹堪二犬行拂二野禽一また賫二鷹鷂一拂二取野禽一などあり他國へことに人を遣し給ふ事はあれど伊勢國へ遣し給ふ事はなし業平朝臣を遣し給ふ事はいよゝなしされと物語なれば其虛實を論すべからず此時の天皇は狩をこのみ給はぬゆゑにこは奉幣使ならむといへる說は出て此物語をたすけたる說なり○齋宮なりける人の親は一わたりは齋宮恬子內親王の御母靜子記名虎女をさすに似たれどこの下に記者の自注に齋の宮は云々とあるによりて思へば齋宮なりける人は其內親王につかへまつる女官なるべし荷田大人云無實の惡名業平にはおほするとも恬子內親王にはおほすべからずといはれたりあかたゐ大人は文德實錄天安元年二月巳己朔丙申廢二鴨齋內親王慧子一更立二無品述子內親王一爲二齋內親王一云々其事祕无レ知レ之者一也とあるがまぎれたるならむといはれたり○こさせは來らせなり西行法師山さとは人こさせしとおもはねとはるゝ事のうとくなりゆく○いたつきは勞の字の意にていたはる也○われては破なり心にたもちかね打わりてなり萬葉集に自高山出來水石觸レ破衣念妹不相夕者また從聞物乎念者我胸者破而摧而鋒心無古今集宵の間に出て入ぬるみか月のわれて物おもふ頃にも有哉○つかひさねは眞實などの義にて正使をいふ日本書紀にかみさねに主神と書給へり下にまらうとさねとあるも同じ大和物語に春の野のみとりにはへるさねかつら我君さねとたのむいかきそ○しつめては令レ靜而也○子ひとつは子の上刻なり一剋を四つに割て始の一割をいふ

とのかたは外方也○わらはゝ和名抄に童和名和良波未冠之稱也又曰侲子和良波倍童男乎乃和良倍童女女乃和良倍○うしみつは丑の下剋の始也拾遺集に内にさふらふ人をちぎりて侍ける夜おそくまうてきけるほどにうしみつ時と申けるをききて女のいひつかはしける人心うしみつ今はたのましよ良岑宗貞夢に見ゆやとねず過にける○いふかしは思ひ詰られて晴やらぬなり○心もとなくは便を待遠に思ふなり○詞はなくては交詞はなくて歌はかりなり○君やこし云々の歌は古今集に業平朝臣のいせの國にまかりたりける時に齋宮なりける人にいとみそかにあひて又のあした人やるすべなくて思ひをりける間に女のもとよりおこせたりけるよみ人しらずとあり歌の意は君來給ひしや我行しやさらに覺えず夢にてありしや現にて有しやといふ意なり結句は四の句を再ひ詞をかへていへるなり萬葉集に窺香妹之來座有夢可毛吾香恚流戀之繁爾○かきくらす云々の歌は古今集に上の歌のかへし業平朝臣とありて結句世人さためよとあり意は我はかきくらしたる心のやみにまとひて夢ともうつゝともわきまへず今宵又きたまひて夢とも現とも定め給へとなり○心はそらにては狩に心をいれずして昨夜の事のみおもふをいふ萬葉集に十一十七十二二十に心空在土者踏鞆なとよめり○國の守は伊勢守なり職原抄に伊勢大とあり官位令に大國守從五位上とあり○いつきのみやのかみは齋宮頭也職原抄に伊勢齋宮寮頭一人相當從五位下とあり○かけたるはかねたるにて兼官をいふ三代實錄清和天皇貞觀七年五月の條に從五位下藤原朝臣宣といふ人伊勢權守兼齋宮頭にて外にこと人の伊勢守齋宮頭兼官の事見えずされどそはいかにても有なむ○もはらは專なり○あひことは相言なり萬葉集に夫婦はもとよりにて親子兄弟朋友にてもしたしといへるむつひを相聞といふに同じ○ちのなみたは上にいへり○さかつきのさらは和名抄に酒臺子志利佐良とあり○かち人のわたれど云々の意は步行人のわたれどぬれぬ淺き江にといふを逢かたらはずしてわかるゝ淺き緣をかねたるなり○するはなしは下の句はなしといふ心なり歌は上の句下の句といふは後世の俗語なりいにしへはもとするといへ

り日本書紀景行天皇卷に日本武尊云々諸侍者不レ能二答言一時有二秉燭者一續二王歌之末一而歌曰云々萬葉集に尼作二頭句一并大伴宿禰家持所誂尼續末句等一和歌一首云々枕草子にも蘭省花時錦帳下と書て是か末はいかに／＼とせむるをしりかほに眞名にてかかむもみくるしなど思ひてそのおくにすびつのきえたる炭のありしをして草の庵を誰かたつねむ云々こゝにいとよく似たり○ついまつは和名抄に松明唐式云每城油一斗松明十斤今按松明者今之續松乎○すみは同抄に炭和名須美樹木以レ火燒レ之○又あふ坂の云々の歌の意は又あふ事もあらむとなり此歌本末をむすひて一首として六帖にありかかれは六帖の歌を本末わかちて物語としたるなるへし後京極あふ坂の關ふみならすかち人のわたれとぬれぬ花のしらなみさてあふ坂は近江志賀郡也日本書紀神功皇后元年忍熊王そむき給ふ條に武內宿禰出二精兵一而追之適遇二于逢坂一以破故號二其處一曰二逢坂一也とあり文德實錄に相坂是古昔之舊關也時屬二靈運一不レ閉二門鍵一出入無レ禁年代久矣また日本紀略延曆十四年廢二近江國相坂剗一云々また令義解に關者檢判之處剗者塹柵之處是也また和名抄に關世岐廣在レ境所二以察レ出御レ入也○いつきのみやは云々より記者の自注なりあらぬことを誡めかしく書なせるが此物語の常なり水尾は清和天皇なり文德天皇は則御父也惟喬親王は清和天皇の御兄也

酒臺子圖

昔をとこかりの使よりかへりきけるに大淀のわたりにやとりていつきの宮のわらはへにいひかけける

「みるめかるかたやいつこそ棹さして我にをしへよあまのつりふね

大淀は伊勢國多氣郡也大與杼神社式にあり○いつきの宮のわらはへは上のわらはと同じきや異ひとにやそは別條なればいかにても有なむ○みるめかる云々の歌は新古今集に業平朝臣として入られたりみるめは和名抄に海松とあり上に圖を出せりさをは上にいへり圖あり歌の意は明らかなりたゝみるを海松と見るとにかけたるのみなり古今集にわたの原八十島かけてこき出ぬと人にはつけよあま

のつり舟とよめり

むかし男伊勢の齋宮に内の御使にてまいれりけれは
かの宮にすきことといひける女わたくしことにて
「ちはやふる神のいかきも越ぬへし大宮人のみまく
ほしさにをとこ
「戀しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむる
道ならなくに

内の御使は内裏の御使なり○すきことといひけるは
眞字本に椙子といふ女の名とせり強言也こは好言
いひける云々なるべし後撰集に男のまてきてすき
ことをのみしけれは云々蜻蛉日記にむかしすきこ
とせし人も今はおはせす云々○わたくしごとにて
は宮の御使にあらぬをいふ源氏須磨に内侍のかみ
の御もとに中納言の君のわたくしことのやうにて
云々○ちはやふる云々の歌は萬葉集に千葉破神之
伊垣毛可越今者吾名之惜無とある下の句をかへて
神の制禁と女王の御疾妬とを含めて此物語につく
れるを又續千載集にえらひとられたりちはやふる
は最早振にて神のあらぶる御いきほひを云り○い
かきは和名抄に瑞籬俗云美豆加岐一云以賀岐とあ
り歌の意は明らかなり萬葉集に木綿懸而齋此神社
可越所念可毛戀之繁爾○戀しくは云々の歌は萬葉
集に鷲住筑波乃山之云々未通女壯士之往集加賀布
嬥歌爾吾毛交牟吾妻爾他毛言問此山乎牛掃
神之従來不禁行事叙云々とある意をとりてよみし
なり意は明らかなり神のいさむるはいましめ給ふ
を云なり

むかし男い勢の國なりける女又えあはてとなりの國
へいくとていみしううらみけれは女
「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもか
へるなみかな

女又えあはては眞字本に女を又えあはでとありこ
の又はにの誤りにて女にえあはでなるべし○とな
りの國は尾張なるべしこは上のいつきの宮の段を
含めたるか○大淀の云々の歌は新古今集によみ人
しらすとしていれらる意は大淀の松はいつも同じ
色なればつれなくみゆめれどさる心もなきをうら
みてのみ浪はかへるよとなり古今集にあふ事のな
きさにしよる浪なれはうらみてのみそ立かへりけ
る有家卿歌大淀の月にうらみてかへる浪松はつら

くも嵐ふくよに

むかしそこにはありときけとせうそこをたにいふべくもあらぬ女のあたりを思ひける

「めにはみて手にはとられぬ月のうちのかつらのことき君にそありける

そこは其所なり○せうそこは消息にてふみかよはし音づるゝをいふ○めにはみて云々の歌は萬葉集に目ニ破而手ニ破不所取月内之楓如妹乎奈何責とある結句をかへてこゝに出せしなり歌のこゝろ明らかなりかつらは和名抄に兼名苑云楓一名欇乎加豆良爾雅云有レ脂而香謂ニ之楓一兼名苑云桂一名梫女加豆良とあり爾邪郭璞註に楓樹似ニ白楊一葉圓岐有レ脂而香今之香風是なりとあり古事記に香木とあり字鏡に栢とありていとかぐはしき木なり今肉桂といふ月宮のかつらのことは酉陽雜俎月中有レ桂高五百丈下有一人常斫之云々文選に明月入我牖照之有ニ餘暉一攬レ之不レ盈レ手よく似たり

むかし男女をいたうらみて

「岩ねふみかさなる山にあらねともあはぬ日おほくこひわたるかな

この歌は萬葉集に石根踏重成山雖不有不相日數戀渡鴨とある下句をすこしかへてこゝに出せるを拾遺集にはかさなる山はなけれともあはぬ日數に戀やわたらむとして入られたり意はけはしき山の重りたるにはあらねどあふ日間遠くへだたりて戀わたるとなり

むかし男伊勢國にゐていきてあはむといひけれは女

「大淀のはまにおふてふみるからにこゝろはなきぬかたらはねともといひてましてつれなかりければ男

「袖ぬれてあまのかりほすわたつみのみるをあふにてやまむとやする女かへし

「岩間よりおふるみるめしつれなくはしほひしほみちかひもありなむまたをとこ

「涙にぞぬれつゝしほる世の人のつらきこゝろは袖のしつくか世にあふ事かたき女になむ

い勢の國にゐていきて云々はきこえがたし玉かつまにいせの國なる女を京にゐていきて云々とあるべきなりとありさらずはきこえじ○大淀の云々の歌の意はよく聞えたり海松と見るとかね海のなぐと心のなぐと兼たり○袖ぬれて云々の歌は新勅撰

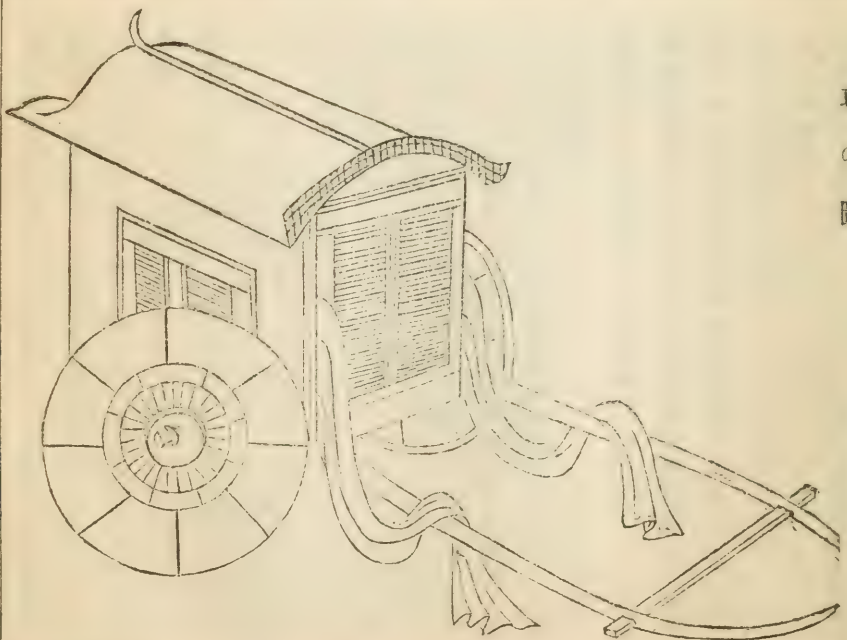
集に業平朝臣として入られたり意はみるからに心ははるゝとのたまへどそのみるばかりをあふにしてやみ給ふやとゝがむるなり上の句はみるといはむ料なりわたつみは海神の御名なれどもこの神のうしはき給ふ國なればたゞに海をわたつみといふわたつみは海津持のつゝまりたるなれは渡海なりとおもふはわろしわたとは海の古言なるをや○岩間より云々の歌もきこえがたし玉かつまにみることだにかはらずあらば今はとまれかくまれ後つひにはそのかひ有てあふ事もあらむといへるなり四の句はとまれかくまれといふ意なるをみるめの緣に海の事もていへるのみなるを詞になつみて此句の意をとき得たる人なきぞかしとあり異本に三句常ならはとありつれなくもたへて變らぬよしにいひなしたれば同じ事なり○なみたにそ云々の歌は續拾遺集に業平朝臣として入られたり意は人のつらき心は我袖のしづくにやなりけんぬれてかわく時なしとなり○世にあふ事かたき云々は記者の例の自注なりすべて此段はとき得がたし

むかし二條の后のまた東宮の御息所と申ける時氏神にまうで給ひけるに近衛つかさにさふらひける翁のろく給はるついでに御車より給はりてよみて奉りける

「大はらやをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいつらめとて心にもかなしとや思ひけむいかゝおもひけむしらすかし

二條の后は上にいへり○東宮は貞明親王也三代實錄淸和天皇貞觀十一年二月立爲二皇太子一とあり後に御諡を陽成天皇と申奉る　御息所は皇太子の御母をいふ東宮の女御といふも皇太子の御母なり○氏神は諸の氏々の大祖神を祀たる社をいふ二條后は藤氏の嫡君なれば大祖天兒屋命を祭たる大和國春日神社なりしかるを皇后の參り給はむたよりよからむために山城國大原に春日の神をまつり給へり文德實錄に仁壽元年二月乙卯別制二大原野祭儀一一准二梅宮祭一祭二月上卯日十一月中子日也云々后の參詣は三代實錄に淸和天皇貞觀三年二月二十五日己巳皇太后向二大原野神社一奉二幣御二牛車一以二藤原氏六位以下一爲二御車從者一云々○近衛つかさは職原抄に左右近衛大將は相當從三位同中將は相當

從四位下同少將は相當正五位下云々こは業平朝臣を含めたるなり三代實錄清和天皇貞觀六年右近衛少將同十七年正月十三日從四位下行右馬頭在原朝臣業平爲二右近衛權中將一とあり年數のいさゝかたかへるは物語なればくるしからず○くるまは和名抄に車駕和名久留萬とあり○大はらや云々の歌は古今集に二條后の東宮の御息所と申ける時に大原野にまうて給ひける日よめる業平朝臣とあり意は大原野小鹽山の神天兒屋命も御末長者の御女參詣し給ふをよろこび給ひてけふこそは神代に皇孫の尊の補佐として付そひ給ひし事思ひ出給ふらめ今も御末の御女天皇にちかくつかへ給ふはいとめでたき事なりといふ意なり此物語にては下情にあやしき事含めたり江家次第に大原野行啓超二五條后順子一以二藤氏勸學院衆一爲二車副一二條后高子以レ姪乘二車後一在五中將書二和歌一與二一條后一歌略レ之人疑先レ是若有二密事一歟とあるは此物語によりたるひが事なり源氏繪合によのつねのあたもの引つくろひかざれるにおされて業平の名をやくたすへき云々○心にもかなしとや云々例の記者の自注なり

車の圖

これにてあらぬ意味を含めたり

むかし田むらのみかと丶申みかとおはしましけり其時の女御たかき子と申みまそかりけりそれうせ給ひて安祥寺にて御わさしけり人々さゝけ物奉りけり奉りあつめたる物ちさゝけはかりありそこはくのさゝけ物を木の枝につけてたうの前にたてたれは山もさらにたうの前にうこき出たるやうになむ見えけるそれを右大将にいまそかりける藤原のつねゆきと申いまそかりてかうのをはる程に歌よむ人々をめしあつめてけふのみわさを題にて春の心はへある歌奉らせ給ふ右のうまのかみなりける翁めはたかひなからよみける

「山のみなうつりてけふにあふ事ははるのわかれをとふとなるへしとよみけるを今みれはよくもおらさりけりそのかみは是やまさりたりけむあはれかりけり

田村のみかとは道康天皇也後の御諡を文德天皇と申御父は仁明天皇御母は五條后順子也此帝山城國葛野郡田村鄕眞原丘に御陵ありよりてしか申奉る○女御たかき子は右大臣藤原良相公の女也文德實録に喜祥三年秋七月丙子朔甲子藤原朝臣多賀幾子等為二女御一○うせ給ひ三代實錄文德天皇天安二年十一月十四日辛未從四位下藤原朝臣多賀幾子卒ス賀幾子者右大臣從二位良相之第一女也少有二雅操一文德天皇仁壽初選二入掖庭一俄而為二女御一二年授二正五位下一四年進レ爵為二從四位下一○安祥寺は山科にあり五條后の御建立なり文德實錄齊衡二年六月戊寅朔詔以二安祥寺一預二於定額一云々三代實錄清和天皇貞觀元年四月十八日癸卯綠二皇大后御願一置二安祥寺年分度者二人一願文曰云々凡厥試度之事令下權律師傳燈大法師位慧運一專一勾當血脈相傳不レ闕二別人一其行レ事者一任二寺記一云々延喜玄蕃式に凡安祥寺果二階業僧一擬二補諸國講讀師一○みわさは後の御法事也三月つこもりの頃なり○さゝけ物は差上物なり源氏榮花などの物語にほうもちとあるは捧物の音なり○ちさゝけは捧物の數多きをいふ○そこはくは若干また許多など書てこきだこゝだここだくこゝらなと云りともに同言なり○山もさらに云々松陰中納言物語に其外のさゝけ物山のうこき出たらむやうにみゆる云々祝詞式に種々乃物乎

横山乃如打積置豆云々○右大將は右近衛大將をいふ○藤原のつねゆきは三代實錄に常行右大臣良相嫡男貞觀八年十二月十六日任二右大將一○右のうまのかみは官位令に右馬頭從五位上とあり職員令に頭一人掌下左閑馬調習養飼供御乘具配給穀草及飼部戶口名籍事上とありさて右馬頭は業平朝臣を含めたるは論なしされと業平朝臣右馬頭に任られたるは貞觀七年三月なり此みわざは天安二年より貞觀元年の間なりまた下條に七々の御わさの事あれば七々日は貞觀元年正月二日にあたるこのみわざは天安二年十一月十二月の程なるべしさるを春の心ばへある歌云々春のわかれを云々などかた〳〵たかへるが如きこゝちすれど物語なればとかむべからず○山のみなうつりて云々の歌は六帖にあり續後撰集には業平朝臣として入られたり意は山もおのつから所をうこき出てこゝに上り來りけふのみわざにあふは春のわかれをとふらふならんと云意也春のわかれは二月十五日釋迦入滅の意にもあるべし涅槃經に爾時世尊娑羅林下臥二寶林一於二其中夜一入二第四禪一寂然無レ聲於二是時頃一便般涅巳其娑羅林東西二雙合爲二一樹一南北二雙合爲二一樹一垂二覆寶牀一蓋二覆於如來一又大山崩裂また時世尊已入槃涅槃四天王天與二諸大衆一悲哀流淚各辨無レ數香花投二如來前一悲哀供二養五天一如是信勝二於前一色界無色界諸天亦如レ是信勝二於前一云々後拾遺集に山階寺の涅槃講に詣て光源法師いにしへの別れの庭にあへりともけふのなみたそなみたならまし○とよみたりけるを云々こは例の記者の意なり是をうつして源氏橋姬によからねとをりはいと哀なりけりとあり

良相 ― 多賀幾子 從四位下
　　 ― 常行 右大將

むかしたかき子と申女御おはしましけりうせ給ひてなゝなぬかのみわさ安祥寺にてしけり右大將藤原常行といふ人いまそかりけり其御わさにまうて給ひてかへさに山しなの禪師のみこおはします其山しなの宮に瀧おとし水はしらせなとしておもしろくつくられたるにまうて給うて年ころよそにはつかふまつれとちかくはいまたつかうまつらすこよひはこゝにさふらはむと申給ふみこ歡給うて夜のおましのまうけせさせ給ふさるにかの大將いてゝたはかり給ふやう

みやつかへのはしめにたゝなほやは有へき三條の大みゆきせしときの國のちさとの濱にありけるいとおもしろき石奉りき大みゆきの後奉りしかはある人のみさうしの前のみそにすゑたりしを島このみ給ふ君なり此石を奉らむとの給ひてみすいしんとねりしてとりにつかはすいくはくもなくてもてきぬこのいしきゝしよりはみるはまされり是をたゝに奉らはすゞろなるへしとて人々に歌よませ給ふ右のうまのかみなりける人のをなむ青きこけをきさみてまきゑのかたに此歌をつけて奉りける

「あかねとも岩にそかふる色みえぬこゝろをみせむよしのなけれはとなむよめりける

七々日は貞観元年正月二日己未なり千一疏尚志編曰人生七々四十九日而魂々全人死七々四十九日而魂々散○かへさはかへりしな也○山科は山城國宇治郡なり○禪師のみこは三代實錄貞観四年十二月の條に高岳親王の御事を禪師のみことあり此高岳親王は阿保親王の御兄にて在原美淵の御父なり業平朝臣には御叔父なり承和二年御落飾貞観三年入唐元慶五年遷化眞如親王とも蹄踞太子とも申せしなり○夜のおましは奥向の宴席なり○大將出ては表席へなり○たはかりはたは發語にてはかるなり慮字の意なり後世は僞あさむくにのみいへれどそはうつりたるなり六帖にたわすれていをそねにけるあかねさすひるはさはかり思ひし物をなどもよめり○たゝなほやは云々はたゝ何事もなくては有べからすといふ意なり源氏花宴にかたらふべき戸口もさしてけれはうちなきてなほあらしに云々○三條の大みゆきは三代實錄清和天皇貞観八年三月二十三日己亥鑾輿幸二右大臣藤原朝臣良相西京第一観二櫻花一喚二文人一賦二百花亭詩一預レ席者四十人云云観宴竟レ日賜二扈従百官祿一各有レ差夜分之後乘輿還云々こは七年後の御幸なるをこの七々日のみわざよりは前の事につくりなせり拾芥抄に百花亭在二三條北朱雀西一○きの國は諸國名義考にいへり○千里の濱は玉かつまに日高郡岩代の南に邊より南部までの間一里半ばかりの所をいふ云々大鏡に熊野の道に千さとの濱といふ處にて石のあるを御枕にておほとのこもりたるに云々○大御幸の後云々おくれて奉りしには不用にて捨おかれたる也○み

そは和名抄に田間之水曰レ溝縱橫相交稱也和名三
ゾ曾○みすいしんは御隨身なり○とねりは官位令に
舍人正六位上とあり此下に屬たる舍人なり○すゝ
ろは不意は遊仙窟に不覺をすゝろとよめり○青き
こけは石樹根なとにある小き苔なり和名抄に本草
云石衣一名石髮和名知比佐木古介とあり○まき繪
は錺繪なり何にてもかさるを蒔といふこは石にま
とひたる苔をうかちて歌を蒔繪のやうに苔をのこ
しおくなり○あかねとも云々の歌の意は君を思ひ
奉る心は色のみえぬ物なればみせ奉る事あたはず
是にては不足なれとかりに此岩にて我心をみせ奉
るとなり

むかし氏の中にみこうまれ給へりけり御うふやに人
人歌よみけりおほちかたなりける翁のよめる
「我門にちひろある陰をうゑつれはなつふゆ誰かか
くれさるべきこれは貞かすのみこ時の人中將の子と
なむいひける兄の中納言行平の娘のはらなり
氏の中は一門親類の中をいふこは在原氏を含めて
いへり○みこうまれ給へりは貞數親王なり貞觀十
七年に生れ給へり御母は參議太宰權帥從三位在原
朝臣行平の女更衣文子なり○御うふやは產屋は義
訓のかり字にて鵜背屋の意なるべし古事記に以二
鵜羽一爲二葺草一造二產殿一云々日本書紀一書の傳も
然り拾遺集の贈皇后宮の御うふやの七夜に兵部卿
致平のみこのきしのかたをつくりてたれともなく
て歌をつけ侍りける清原元輔朝臣朝またきき(のカ)かふ
の閒にたつきしはちよのひつきのはしめなりける
○御おほちかたなりける翁は御祖父方の人を云こ
は業平朝臣を含めたるなりこの時五十一歲なり○
我門に云々の歌我門は同姓一門をいふ千尋ある陰
(眞字本には竹とあり)は山海經に在二崑崙之北有岳之山一尋竹生
焉註尋竹大竹名長千尋また博物志異草木部に止些
山多竹長千仞鳳食二其實一また文選張景陽十命云尋
竹竦莖蔭二其壑一また玉篇に(竹尋寺林切竹長千丈生海畔)また曇鸞往
生論註に按二此間詁訓一六尺曰尋又云里舍間人不レ
簡二縱橫長短一咸橫舒二兩手臂一爲レ尋又小爾雅に四
尺謂二之仞一倍仞謂二之尋一倍尋謂二之常一又六尺謂曰
尋又說文に周制寸尺咫尋常諸度量皆以二人體一爲レ
法また大戴禮に布レ指知レ寸布レ手知レ尺舒レ肘知レ尋歌
の意は我一族の中に千尋の竹を植たれはたのみよ

るひと多からんとなり下に咲花の下にかくるゝ人おほみ云々といへると同じ○これは貞數のみこ云云例の作者の自注中將の子とあるをみていたくおどろきてこは後人のうら書なりといへるはかへりてつたなしかゝる人おとろかしなることいへるか此物語の記者の常なりこの自註をとりて源氏物語にはつくりたるなり

むかしおとろへたる家に藤の花うゑたる人有けり彌生のつこもりに其日雨そほふるに人のもとへ折て奉らすとてよめる

「ぬれつゝそしひてをりつる年のうちに春はいくかもあらしとおもへは

おとろへたる家云々は業平朝臣の卑下の詞なりといへるはわろし實におとろへたるさまにつくりなしたるなり()やよひは春三月也○つこもりは月の末なる事上にいへるか如しされはこゝの歌に春はいくかもあらじとよめりこゝにては晦日なり其日とことわるにてしるし○雨そほふるは上にいへり○たてまつらすは令奉にて人して奉らしむるなり○ぬれつゝそ云々の歌は古今集にやよひのつこもりの日雨のふりけるに藤の花をゝりて人につかはしける業平朝臣とあり意は雨にぬれつゝそしひて藤花を折たりけふは彌生の末つかたなれはのこる日數もすくなけれはとなり契沖師はつこもりを春はいくかもあらじといへるたがへるやうなれどかくの如くよむ事上手のしわさなりといはれたるはたかへり上にいへる如く始つかたを月立のころといひ末つかたを月隱のころといへるいにしへの常なり必しも朔日晦日に限るべからず既に此物語にはついたちつこもりの事多くてあたし日のすくなきにて月始月末をついたちつこもりといへるをしるべし

むかし左のおほいまうちきみいまそかりけり賀茂川のほとり六條わたりに家をいとおもしろくつくりて住給ひけり神無月のつこもりかた菊の花うつろひさかりなるに紅葉の千種にみゆるをりみこたちおはしまさせて夜ひとよ酒のみしあそひて夜明もて行程にこの殿のおもしろきをほむる歌よむそこにありけるかたゐおきな板しきのしたにはひありきて人にみなよませはてゝよめる

「鹽かまにいつかきにけむ朝なきにつりする舟はこ
こによらなむとなむみちのくにゝいきたりけるにあ
やしくおもしろきところ〳〵おほかり我みかと六十
余國の中に鹽かまといふ所にゝたる所なかりけりさ
れはなむかの翁さらにこゝをめてゝ鹽かまにいつか
きにけむとよめる

左のおほいまうちきみは官位令に左右大臣正從二
位とあり和名抄に於保伊萬宇智岐美とありこは音
便にて大きまへつ君なり此左大臣は融公を含めた
るなり嵯峨天皇第十二皇子母正四位下大原全子承
和元年元服源氏を賜ひ正四位下に叙嘉祥三年從三
位貞觀十四年八月左大臣仁和三年從一位寛平五年
輦車七年八月薨七十三贈正一位〇かも川は賀茂建
角身命の坐ける故にかもといへるよし山城國風土
記に委し〇六條わたり云々此館は河原院也六條坊
門南萬里小路東八丁にあり〇神無月は神無月の字
になつみていへる説はうるさしこは神嘗月なりま
た十は數の限なれは上無月なりといへるはいとい
とつたなし〇うつろひさかりはうつろひて後又ひ
とさかりあるをいふ古今集に秋を置一[illegible]を有け

れ菊の花うつろふからに色のまされは源氏やとり
木に御前の菊うつろひはてゝさかりなるころ云々
又菊のまたよくもうつろひはてゝわさとつくろひ
たてさせたまへるは中々おそきにいかなる一本に
かあらむいとみところありてうつろひたるを云々
〇紅葉のちくさに云々のゝ字いかゝなりもと有べ
きなり眞字本になきそよき千種は色のさま〳〵あ
るをいふ古今集に秋の露いろ〳〵ことにおけはこ
そ山のこのはのちくさなるらめ〇みこたちはいつ
れのみこたちともしれねど清和天皇のみこたちな
るべし〇おはしまさせては令坐而也〇とのは和名
抄に殿止乃宮殿名也〇かたゐは同抄に乞兒列子云
齊有二貧者一常乞二於城市一乞兒云天下之辱莫レ過二於是一
加多井土佐日記に此かちとりは日をもえはからぬ
かたゐなりけり大和物語にあしになひたる男いか
たゐのやうなる姿云々清少納言枕草子に年老たる
かたゐ今いふ乞食なり〇板しきは北山抄辨少納言
起座立二小板敷下一江次第自二清涼殿廣廂一經二上戸小
板敷並地上及下侍上一敷二莚道一近代小板下堆レ砂爲二
閤道一到二下侍一爲二御路一また先跪二小板敷前地一依二氣

色登之〕鹽かまに云々の歌は續後拾遺集に入られたり歌の意明らかなりされど鹽かまとは此河原院にて池をほり潮水を毎日三十石くみ入られたる事なとをよめるか又は此殿をほめて鹽かまといひなしたるか本文に菊紅葉の事のみ有て鹽かまのことなし古今集に河原の左大臣の身まかりて後かの家にまかりて有けるにしほかまといふ所のさまをつくれりけるをみてよめるつらゆき君まさて烟たえにし鹽かまのうらさひしくも見えわたる哉惠崇か烟蘿鷗坐㆓或瀟湘洞庭㆒欲㆘喚㆓扁舟㆒歸去㆖故人道是丹青〇となむよみける云々記者の自註なり〇あやしくは世にめつらしく常に異なるをいへり〇わかみかと云々みかとは内裏の御門なるを後には天皇をさし奉りてみかとゝ申奉るこゝにては既に御國をいへり則天皇のしろしめす御國なる故なり日本書紀孝德天皇紀に我日本國云々齊明天皇紀に大國云々ともにみかどゝよめり萬葉集に天皇乃等保能朝廷等之良奴日乃筑紫國波云々とよめるは筑紫の國の事なり〇鹽かまに似たる所云々古今集にみちのくはいつくはあれと鹽かまのうらこく舟の綱手

悲しもといへるを思ひて書る文なるべし

むかしこれたかのみこと申みこおはしましけり山崎のあなたにみなせといふ所に宮ありけり年ことの櫻の花さかりには其宮人なむおはしましける其時右のうまのかみなりける人を常にゐておはしましける時世へて久しく成ければ其人の名わすれにけりかりはねむころにもせて酒をのみのみつゝやまとうたにかかれりけり今かりするかた野のなきさの家其院の櫻ことにおもしろし其木のもとにおりゐて枝を折てかさしにさしてかみなかしも皆歌よみけりうまのかみなりける人のよめる

「世の中にたえて櫻のなかりせは春のこゝろはのとけからましとなむよみたりけり又人のうた

「ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれうき世に何か久しかるべきとて其木のもとは立てかへるに日くれになりぬ御供なる人酒をもたせて野より出きたり此酒をのみてむとてよき所をもとめゆくに天の川と云所にいたりぬみこに馬のかみおほみきまいるみこののたまひけるかた野をかりて天の川のほとりにいたるを題にて歌よみて盃させとのたまうけれはかの馬の

かみよみて奉りける
「かりくらしたなはたつめに宿からむ天の川原に我はきにけりみこ歌をかへす〱ずんし給うて返しえし給はす紀の有常御供につかうまつれりそれか返し
「ひとゝせに一たひきます君まては宿かすひともあらしとそ思ふかへりて宮にいらせ給ひぬ夜ふくるまて酒のみ物語してあるしのみこゑひて入給ひなむとす十一日の月もかくれなむとすれはかのうまのかみのよめる
「あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなむみこにかはり奉りてきのありつね
「おしなへてみねもたひらに成ならむ山のはなくは月もいらしを
惟喬親王は文德天皇第一皇子御母右兵衛督名虎女正二位下紀靜子承和十一年生れ給ふ○山崎は山城國乙訓郡也○みなせは山崎の近きほとりなり○時世へてよりわすれにけりまては業平朝臣なる事をおほめかしくいひなしたるなり○なきさの家其院は波瀲院なり光仁天皇延暦六年十月交野の御幸に藤原繼縄朝臣の別業を行宮とし給ひ嵯峨天皇弘仁五年御狩の時山崎離宮にやとり給ひし事續記後紀にあり是なるべし○かさしにさしは挿頭なり○かみなかしも上中下なり土佐日記にもかみなかしもゑひすきていとあやしく云々○世中に云々の歌は古今集になきさの院にてさくらを見てよめる在原業平朝臣とあり意は世の中に櫻といふ物絶てなくば咲をまち盛をめて雨風をいとひちるをゝしみ後にこひなどすべき心づかひもなくて中々に心のとかなるべしとなり愛する心あまりてなり萬葉集に比等余里波伊毛曾母安之伎故非毛奈久安良末思毛能乎於毛波之米都追といへる意に同じ忠岑の歌春はたゝ我にてしりぬ花盛心のとけき人はあらしな續後撰集に春風のふかぬ世にたにあらませは心のとかに花をみてまし土佐日記にかくて舟引のほる渚の院といふ所を見つゝゆく云々故惟たかのみこの御供に在原業平中將の世の中に絶て櫻のさかさらは云々とよめる所なり云々○ちれはこそ云々の歌は古今集にのこりなくちるそめてたき櫻花有て世中はてのうけれはといへる歌をつくりかへて上の歌と心をあはせたるなり歌の意明らかなり○野

より出來りは野にてあふたるをいふ○天の川は河内國天野郡にあり○大みきは大御酒なり酒を伎(キ)といふは古言なり○まゐるは參らすなり進るをいふうつは物語に大きなるかはらけをとりて中納言あるしのおとゝにまゐり給ふとて云々○かた野も同國なり○さかつきは酒杯なり和名抄に盃一名巵佐賀都岐とあり○かりくらし云々の歌は古今集に端詞は此物語と同じくて業平朝臣とありたなはたはもと機織女をさしていへるを外國にいへる織女星と混じたるを後にはこれのみいへる事とはなりぬ和名抄に織女太奈八太豆女とあり天の川はもと河内國にあるをこれも外國にいへる銀河と混せり萬葉集に天の原安の川原とよめるは實に天上にある川なるをかの銀河と混せり同抄に天河一名天漢又名二漢河一銀河也阿萬乃加八(ガハ)とあり歌の意明らかなり○すし給ふは誦し給ふなり○きのありつねは既に上にいへり○ひとゝせに云々の歌は意は一年に一度來給ふ彦星を待給へはことゝ人に宿はかし給はずとなり○かへりて宮にいらせ給ひぬはみなせの宮なるか○入給ひなんとすは御寢所に入給はんとなり○十一日の月もかくれなんとするは己の中刻の始なり○あかなくに云々の歌は古今集にはし詞此物語と同じくで業平朝臣とあり歌の意は明らかにてみこの醉て夜の御殿に入給ふを月のかくるゝにたとへてをしむ意なり土佐日記にこよひ月は海にそ入是をみて業平の君の山のはにげていれずもあらなむと云歌なむおほゆもし海邊にてよまゝしかばなみたちさへていれずもあらなむとよみてましや云々萬葉集に夜干(ヌバ)玉之夜渡月乎將留爾西山邊爾塞(セキ)毛有糠毛六帖にいる月を山のはにみていれすとも人の心をいかゝたのまむ○をしなへて云々の歌は後撰集に下の句山のはなくは月もかくれしとありてかむつけのみね雄と有六帖には大かたは峰もたひらになりなゝむ山のはあれは月もかくるゝとありてみね雄の歌なりこをとりて此物語の歌とせり意はあきらかなり

むかしみなせにかよひ給ひしこれたかのみこ例のかりしにおはします供にうまのかみなる翁つかうまつれり日ころへて宮にかへり給うけり御おくりしてとくいなむとおもふにおほみき給ひろく給はむとてつ

かはさゝりけり此馬のかみ心もとなかりて
一枕とて草ひきむすふ事もせし秋の夜とたにたのま
れなくにとよみける時は彌生のつごもりなりけりみ
こおほとのこもらてあかし給ひてけりかくしつゝま
うてつかうまつりけるを思ひのほかに御ぐしおろし
給うてけりむつきにをかみ奉らむとて小野にまうて
たるにひえの山のふもとなれは雪いとたかししひて
みむろにまうてゝをかみ奉るにつれ〳〵といと物か
なしくておはしましけれはやゝひさしくさふらひて
いにしへの事なと思ひ出きこえけりさてもさふらひ
てしかなとおもへどおほやけことゝもありけれはえ
さふらはて夕ぐれにかへるとて
「わすれては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみわけて
君をみんとはとてなく〳〵きにける
宮にかへり給ふはこゝにては京の宮なり枕とて草
引むすふ云々とよめれはみなせのかり宮なるべし
といふ人あれど歌なればしかよまんことさまたげ
なし○心もとなかりては契沖師はよもすがら春の
なごりをしまむとおほしめす心にやとおほつかな
く思ふよしなりといはれたるはよろしからず又追
考に後撰集の馬かいせより古郷にかへらむとする
所にとくいなんと心もとなかる云々いへるを引て
家をゆかしく思ひて心もとなきなりといはれつる
ぞよき心もとなきは待かぬる義なり○枕とて云々
の歌は新勅撰集に業平朝臣としていれられたり意
は春のよの短く明安き物を秋のよの長きとたにた
のまれねは草引結ひ枕として旅やとりはせじとな
り○大とのこもらては御寢所に入給はでなり唐賈
島三月晦日贈劉評事詩云三月正當三十日風光別
我苦吟身共君今夜不須眠未到曉鐘猶是春と
ありいとよく似たり○御ぐしおろし給ふは三代實
錄清和天皇貞觀十四年七月十一日巳卯四品守彈正
尹惟喬親王寢疾頓出家爲沙門とあり此時御年
廿九也法名素延と申宗叡僧正に密教を學ひ東寺の
悉曇を叡山の安然和尚に授り給へり寛平九年二月
廿日薨御御年五十四○む月はもとつ月の約なり睦
月なりといふ説はわろし○をかみはもとをろかみ
といへり折屈の義なり○小野は山城國愛宕郡也○
ひえの山は近江國滋賀郡なり○みむろは地名にあ
らず親王のおはします御室なり○おほやけ事は參

内して勤役するをいふ○わすれては云々の歌は古今集に端詞は同じくてかへりまうてきてよみて送りけると有て業平朝臣とあり歌の意は一二四五三とみれは明らかなり新古今集に此歌の御かへしとて夢かとも何か思はむうき世をはそむかさりけむほとぞくやしきと有此御かへし此物語にもなく古今集には元よりなければ後人の僞作なるべし又は撰者の心にいらずしてはぶかれたるかさてこヽに親王の御歌古今集に載られたる櫻はなちらはちらなむちらずとて古郷人のきてもみなくに白雲のたえすたな引みねにたにすめはすみぬるよにこそ有けれ此二首など此物語にいらぬこそくちをしけれ定家卿夢かともさとの名のみやのこるらむ雪もあとなきをのヽかよひち

むかしをとこありけり身はいやしなから母なむ宮なりけるその母長岡といふ所に住給ひけり子は京に宮つかへしけれはまうつとしけれとしは〱えまうてすひとつ子にさへありけれはいとかなしうし給ひけりさるにしはすはかりにとみの事とて御文ありおどろきてみれは歌有

「老ぬれはさらぬわかれのありといへはいよ〱みまくほしき君かなかのこいたううちなきて

「世の中にさらぬわかれのなくもかなちよもといのる人の子のため

これも業平朝臣を含めたり身はいやしなからは淺官をいふにはあらず四位なれば母の親王にむかへていやしといへり○はヽなむ宮なりける伊登内親王なり御父は桓武天皇御母は從三位藤原乙叡の女なり三代實錄阿保親王娶二桓武天皇女伊登内親王一生二業平一○ひとつ子は異本にひとり子とあるぞよき人にはひとりふたりとこそいへひとつふたつといへるは獸などの子なり萬葉集に不言問木尙妹與兄有云乎直獨子爾有之苦者とあるは市原王獨子の五百井女王を悲給ふ御歌也是人にはひとり子と云り又同集に秋芽子乎妻問鹿許曾一子二子持有跡五十戶鹿兒自物吾獨子之草枕客二師往者云々此歌の意は鹿こそひとつふたつ子持たりといへ鹿といふ物の如く我も獨子ありて遠く旅にゆかしむるがかなしきとなりこれ獨子の唐へ御使に行時に母のよめる歌なりひとりとひとつとにてことをわかてり

○かなしうはいとをしがり愛するなり伊勢集にやまとに親ある人さふらひけりおやいとかなしうして男なともあはせさりけるを云々○しはすは年果の約なること上にいへり○とみの事云々頓字の音なりといふは誤なり早字疾字急字などの義なり○老ぬれは云々の歌は古今集にはし詞此物語と同じさらぬは不避にてのかれかたき意なり歌の意明らかなり○世中に云々の歌古今集にも右の歌のかへしと有て業平朝臣とありて四の句ちよもとなけくと有こも歌の意明らかなり清少納言枕草子に業平の母のいよ〳〵みまくとのたまへるいみしうあはれにおかしひきあけみたりけむこそおもひやらるれ云々

むかし男有けりわらはよりつかうまつりける君御くしおろし給うてけりむつきにはかならずまうでけりおほやけのみやつかへしけれはつねにはえまうでずされどもとのこゝろうしなはてまうでけるになむ有けるむかしつかうまつりし人俗なる禪師なるあまた參りあつまりてむ月なれはことたつとておほみき給ひけりゆきこほすかことふりてひねもすにやますみな人ゑいて雪にふりこめられたりといふを題にて歌ありけり

「おもへとも身をしわけねはめかれせぬ雪のつもるそ我こゝろなるとよめりけれはみこいといたうあはれかり給うて御そぬきて給へりけり

わらはよりつかうまつる君はこれたかのみこを合めたり朝臣は親王に年廿余まされはわらはよりつかうまつるべきいはれなしとゝがむるは物語の趣意をしらぬ人なり○ことたつは正月なれは常とは異なるよしなり續紀宣命にもあり○こほすかことは傾盆か如くといふ意なり○おもへとも云々の歌は古今集におもへとも身をしわけねはめにみえぬ心を君にたくへてぞやるとある歌の下の句をかへてこゝに出せるなり六帖には雪のとむるそとあり歌の意はこゝにとまらんと思へどぇ身をわけて參る內ならねばかへらむと思ふを雪にふりこめられたるゆゑにとゝまりてつかへ奉るなり此雪こそ我本意なれとなりそを心の深きを雪のつもるにたとへたりと思ひて古今集の宗岳の大賴の事などいへるはひがことなりさては雪にふりこめられたりとい

ふ題にもかなはずめかれせぬといふもいたづらことになるなり

むかしいとわかき男わかき女をあひいへりけりおの〳〵おや有ければつゝみていひさしてやみにけり年ころへて女のもとに猶こゝろざしはたさむとや思ひけむ男歌をなむよみてやれりける

「今までにわすれぬ人は世にもあらしおのがさま〳〵年のへぬれはとてやみにけり男も女もあひはなれぬ宮つかへになむ出にける

つゝみていひさしては親々をはゝかりてもらさぬなり○こゝろざしはたさんは思ひをとけんといふ心なりそをやみにけりといふによりてこゝをは思ひ絶たりといひはたさむといふ心なりといへるはさる事ながらかへりてわろしいかてさる事あらむおひ〳〵親あれはつゝみていひさしたるはくちをしく殘多きものなれば思ひわぶるむねをいひて思ひをはらさむとするなり今は思ひ絶たりといひはたすにてはあるべからず又異本に女のもとより此事とげんといへりければとあるはわろし○いまゝてに云々の歌は新古今集に入られたり意はおのかさま〳〵年月をへぬれは今まてわすれずして思ふ人は世にあるべからずとなり四五一二三とみる心し○とてやみにけりはすこし聞えがたし眞字本にといひて男猶あひはなれぬ宮つかへになむ出にけるとありよくきこえたりしひていはばやみにけりは上にとはいひけれどおのがまゝになりにければうとく成にけりとあるたくひにてかくいひやりて後何事もなくてやみにけりといふ意なり○あひはなれぬ云々ちかきあたりにつかへて折々は見聞する程の宮つかへなるべし

むかしつのくにうはらの郡あしやのさとにしるよししていきて住けりむかしの歌に

「あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝす來にけりとよみける其里をよみけるこゝをなむ蘆屋のなたとはいひける此男なま宮つかへしけれはそれを便にてゑふのすけともあつまりきにけり此男のこのかみもゑふのかみなりけり其家のまへの海のほとりにあそひありきていさこの山のかみにありといふ布引の瀧見にのほらむといひてのほりて見るにその瀧ものよりことなり長さ二十丈ひろさ五

丈はかりなる石のおもてにしらきぬにいはをつゝめらむやうになむ有けるさる瀧のかみにわらふたのおほきさしてさし出たる石あり其いしのうへにはしりかゝる水はせうかうしくりのおほきさにてこほれいつそこなる人にみな歌よますかのゑふのかみ先よむ

「我世をはけふかあすかとまつかひのなみたの瀧といつれたかけむあるしつきによむ

「ぬきみたる人こそあるらし白たまの間なくもちるか袖のせはきにとよめりけれはかたへの人わらふことにやありけむ此歌にめてゝやみにけり歸りくる道遠くしてうせにし宮内卿もちよしか家の前にくるに日くれぬ宿りのかたをみやれはあまのいさり火多くみゆるにかのあるしの男よむ

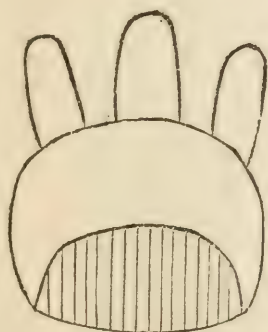
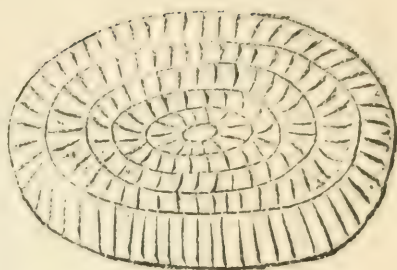
「はるゝよの星か川べのほたるかも我すむかたのあまのたく火かとよみて家にかへりきぬその夜南のかせ吹て波いと高しつとめてその家のめのことも出てうきみるの浪によせられたるひろひていへのうちにもてきぬ女かたよりそのみるを高つきにもりてかしはをおほひていたしたるかしはにかけり

「わたつみのかさしにさすといはふ藻も君かためにはをしまさりけりゐなか人の歌にてはあまれりやたらすや

つのくにうはらの郡あしやの里は上にいへり○むかしの歌は其時古歌を思ひ出したるなり以下芦屋の灘とはいひける迄は記者の自註なり○あしのやの云々の歌は萬葉に然之海人者軍布苅鹽燒無暇髪狐之小櫛取毛不見久爾とあるを詞をかへ時代にしたがひてつくり直してむかしの歌とせり筑前國糟屋郡志訶の浦を攝津國兎原郡芦屋の灘にいひかへたるなり此歌六帖にも新古今にも入られたり意はよく聞えたりされど萬葉の本歌に對へみればいささかとゝのはぬ所などあり海士といふ事なくてはきこえず鹽やく人を鹽燒とのみいふは後世の俗語なりあまのてわざしげくてめかりしほやきいとまなきはうべなる事なり和名抄に黃楊豆介色黃白材堅者也とありをくしは同抄に櫛久之細櫛保會岐久之百刺櫛佐之久之とあり○とよみける其里を云々きこえかたし眞字本にはとよみけるは其里をよみけるなりけりこゝをなむあしやの云々とありよくきこゆ○なま宮つかへは上になま心の所にいへり

○このかみは子ノ上にて兄をいへり○ゑふのかみゑふのすけは官位令に左右衞門督正五位上也左右兵衞督從五位上也左右衞門佐從五位下也左右兵衞佐正六位下也職原抄に左右衞門督從四位下同佐從五位上左右兵衞督從四位上同佐從五位上とありこゝにては在原氏兄弟を含めるなり三代實錄に行平卿は貞觀六年左兵衞督同十四年左衞門督業平朝臣は同五年左兵衞權佐同六年左近衞權中將と有○いさこの山の云々いさは率にてこの山は此山なりさるを夫木集にあしのやの砂の山のみなかみをのほりてみれば布引の瀧あしのやの砂の山の上にある瀧の白糸みてもかへらむとあるは誤なり○物よりことには他の物よりも殊に勝れたるをいふ源氏槇柱にものよりことにはなやかなる御うしろみ云々同初音にみすのうちの追風なまめかしく吹かほはして物よりことにきよらにみゆこれらの意なり○わらふたは和名抄に圓座和良布太圓草褥也とあり枕草子におき出たるをやがてみすればわらふたばかりに成て侍る云々○小かうしは和名抄に柑子加无之とあり三代實錄に大宰府例貢小柑子云々性靈集に獻二柑子一表云小柑子六小櫃大柑子四小櫃宇治拾遺池の尾禪師か鼻をいへる所に色はあかむらさきにて大柑子のはたのやうにつふたちてふくれたりこはみかんなるべし○くりは同抄に栗一名撰子久利とあり○我世をは云々の歌は新古今集に行平として載られたり歌の意は我世をけふあすと待間の淚の瀧と此布引の瀧といづれ高からむとなり貫之集にやみおきてけふかあすかと待程のをりふしゝるは淚なりけり定家卿布引の瀧にたちとをあらそひて我としなみのいつれ高けむ伊勢集に瀧は雲の中より落くるやうにみゆ仙のいはやといふはいたく年つもりて岩の上の苔八重むしたり哀に貴く覺て淚落る瀧におとらず云々○ぬきみたる云々の歌は古今集に布引の瀧のもとにて人々あつまりて歌よみける時によめる業平朝臣とあり上の歌は此歌をもととして記者のよめるなるべし歌の意は水上に玉をぬきて亂す人こそ有らし拾ふべき我袖のせばきに間なくもちる哉となり後撰集に瀧つせに誰白玉をみたりけむひろふとせしに袖はひちにき拾遺集になかれくる瀧の糸こそよわからしぬけと

亂て落る白玉古今集に行平こきちらす瀧の白玉拾ひ置ゝ世のうき時の泪にぞかる○此歌にめでゝやみにけりは人々よむべき歌をよまずしてやみぬるなりとあるは非なりわらふべきことをやみぬるなり○宮内卿は官位令また職原抄等に相當正四位下とあり○もちよしは氏姓父祖ともにしらすたゞ過行道の余情に書り源氏若紫の朝ぼらけ霧立空の云々の類なり○はるゝよの云々の歌新古今集に業平朝臣としてあしやのなたの云々の歌と并び入られたり歌の意明らかなり孫姫式に基泉木の間よりみゆるは谷の螢かもいさりの海士の海へゆくかも後京極いさりひのむかしの光ほのみえてあしやのさとにとふ螢哉定家卿あしのやの螢やまかふあまやたく思ひもこひもよるはもえつつ○南の風云々續日本紀孝謙天皇天平寳字五年九月攝津國御津村南風大吹潮水暴溢云々南おもての濱へなればなり○めのこともは女子等なり○みるは上にいへり定家卿この頃の南のかせにうきみるのよる〳〵すゝしあしのやのさと爲家卿よしやたゝあしやの里の夏の日にうきてよるてふ其名ばかりは○たかつきは高杯なり萬葉集に辛鹽爾古胡登毛美高杯爾盛云々○かしはゝ和名抄に槲また柏加之波木名也とあるは後世一木の名と成たる故なりもとは柏はもとよりにて檜杉櫧椎其外いづれの木にても葉の大なるまた葉の小にても繁く重りたるを食敷葉といひしなり○わたつみの云々歌の意は神のかざしにさし給はむとて齋み清め給ふ藻なれども君かためにはをしみ給はずして波風をおこしてこゝによせ給ひしとなり古今集にわたつみのかさしにさせる白たへの浪もてゆへる淡路島山また花咲て實ならぬ物はわたつみのかさしにさせる沖津白波○ゐなか人云々上にゐなか人のことにてはよしやあしやとあるに同じ記者の自註なり

槲之圖

圓座之圖

高杯之圖

勢語圖說抄卷之五

石見國濱田家人　藤原彥麻呂誌

むかしいとわかきにはあらぬ是かれともたちともあつまりて月をみてそれか中にひとり

「おほかたは月をもめてし是そ此つもれはひとの老となるもの

眞字本にはわかき人にはあらぬ云々とありさかしらなりむかしの下に男脱たるなるべしなくてもきこゆ○大かたは云々の歌は古今集に題しらす業平朝臣とあり意は大躰の事ならば月をも愛すまじきそ月を愛づる事の數つもりぬればつひは我身は老となる物ぞと也これぞ此はかれをこれに比していふ詞にて大空の月を來經の月にいひなしたるなり白樂天送内侍對月明莫思往事損君顏色減君歲とあるに似たり實に此朝臣の歌なりけり

むかしいやしからぬ男我よりはまさりたる人をおもひかけて年へける

「人しれす我こひしなはあちきなくいつれの神になき名おほせむ

いやしからぬ男云々業平朝臣を含めたる事は勿論也されど位階などの事いへるはつたなしたゞいやしからぬ男とみてありなん○我よりはまさりたる人は何人ともさしていふべからず〔ひとしれず云々の歌新續古今集に業平朝臣として入られたり意は人にしられもせずして我戀死なは神の御とかめにやとあぢきなくもいづれの神にかなき名を負せ奉らむとなり萬葉集に和伎毛古爾安我古非思奈婆曾和敝可毛加來爾於保世牟已許呂志良受氐また千磐破神爾毛莫負卜部座龜毛莫燒曾云々古今集に戀しなはたか名はたゝし世の中の常なき物といひはなすとも

むかしつれなき人をいかてと思ひわたりけれはあはれとやおもひけむさらはあす物こしにてもといへりけるをかきりなくうれしく又うたかはしかりければおもしろかりけるさくらにつけて

「櫻花けふこそかくもにほふらめあなたのみかたあすのよのこととといふこゝろはへもあるへし

物こしは物を隔て也眞字本には物こしにてものいはむといへりければ云々とあり○さくら花云々の歌は此櫻の花のいろよきが如くけふこそうれしき事のたまへれあすはいかなる風にか心かはり給ひてうつろふことも有べきかさらはたのみがたきは人心ぞとなり○といふこゝろばへも有べしは例の記者のたはふれ也此條は上に吹風にこその櫻はちらすともあなたのみかた人のこゝろはといへる歌より思ひよりて此一段は作りしなるべし

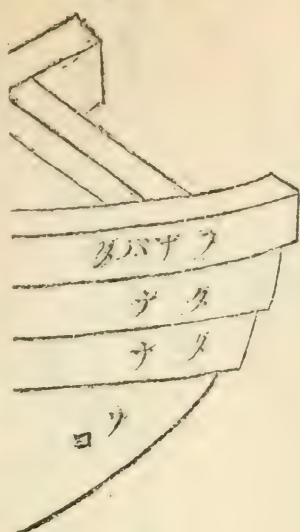
むかし月日のゆくをさへなけく男やよひのつごもりかたに

「をしめとも春をかきりのけふの日のゆふくれにさへなりにけるかな

月日のゆくをさへ云々は齢のかたふくをなげくあまりに月日のゆくをさへ歎く也○をしめども云々の歌は後撰集に題しらすよみ人しらすと有て三の句けふも又とあり歌の意明らか也夕ぐれにさへとよめるにてをしむ心つよし○眞子本にはきゝしる人もなしやといふ自註あり

むかしこひしさにきつゝかへれと女にせうそこをたにえせてよめる

「あしへこくたななし小ふねいくそたひゆきかへる

らむしる人もなみ
むかしの下に男の字脱たるか○きつゝかへれと云々来てはかへり〳〵すると一度も物いふこともなく也○あしへこく云々の歌は玉葉集に業平朝臣として入られたるはわろし此歌は古今集にほり江こくたななし小舟こきかへり同し人にや戀わたりなんとあるをつくりかへてこゝに出せる記者の歌也ふねにたなといふは左右の舟はたと底板との間の板也この板のなきを棚なし小舟といふ和名抄に棚和名不奈太奈（フナダナ）舟旁板也とあり意はあしのしけみの中を小舟にのりて幾十度行かへりすらむをしる人もなしと也このしる人もなみはしる人かなさにといふ格なれどこゝにてはしるひともなくてといふ心によめり

栅の圖

むかし男身はいやしくていとになき人を思ひかけたりけりすこしたのみぬへきさまにや有けむふして思ひおきておもひわひてよめる
「おふな〳〵思ひはすへしなそへなくたかきいやしきくるしかりけりむかしもかゝる事は世のことわりにや有けむ
になきは似さる人にて高き人をいふ○おふな〳〵云々の歌は六帖にになき思ひとして入れりおふな〳〵は随分相應などいへる事にて身分相應を身におふといひ不相應を身におはぬといふ意なれば負（オフ）な〳〵なる詞にはおふな〳〵といへり續日本紀の詔詞に於保世給とあるによりておほなとするは非也負と令負と差別有生と令生とも同じ源氏御幸にかれもおとりはらなればおほなけにのたまへば云々同槇柱におほなき事やのたまひ出む云々蜻蛉日記に敵は右兵衛源中將なむありおほな〳〵射ふせられぬ云々などいへると同言也なそへなくは平均ならず不相應をいへる意は身分相應の物思ひにす

べし不相應にては貴賤のへたてありて心にまかせずくるしきもの也といふこゝろ也定家卿よのなかに高きいやしきなそへなくなとありそめしおもひなるらん○むかしも云々はかく及びなき物思ひするも昔よりのことわりにやあらむと也

むかし男ありけりいかゝ有けむ其男すます成にけり後に男ありけれと子ある中なりければこまかにこそあらねと時々物いひおこせけり女かたにゑかく人なりけれはかきにやれりけるを今の男の物すとてひとひ二日おこせさりけりかの男いとつらくおのかきこゆる事をは今まて給はねはことわりと思へと猶人をはうらみつへき物になむ有けるとてろうしてよみてやれりける時は秋になむ有ける

「秋の夜ははる日わするゝものなれやかすみに霧やちへまさるらむとなんよめりける女かへし

「ちゝの秋ひとつの春にむかはめやもみちもはなもともにこそちれ

眞字本には昔男女ありけりとありさも有べし○後に男ある云々後の男は近院右大臣能有公にて子といふは在原滋春也といへるは大和物語にまとはされたる説也大和物語は此物語を潤色したるなれはいかてか證にはたつべき○子ある中は先の男也○今の男の物すとて云々は繪を書にやりたるが大和物語には染殿内侍といふいまそかりけりそれをよしありのおとゝと申けるなむ云々御そともをなむあつけさせ給ひける云々又中將のもとよりきぬをなむしにおこせたりける云々などあるをみて此物語のこゝをもきぬをたちぬひする也といへるは末をもて本をおしはかる私也○今まて給はねは眞字本には今まてして給はねばと有○ろうしては嘲哢而也源氏賢木いとさらにかろめろうせらるゝにこそ云々蜻蛉日記によろこひおはする人もかへりてはろうするこゝちしてゆめうれしからす云々○秋のよは云々の歌の意は今秋になりてはむかしの春をはわするゝものにやあらむ春の霞よりは秋のきりのたちまさるならむとうらむや結句ちへまさるらむは眞字本に立まさるらむとある方よろし立の草の手立と平假名のちへとよく似たれば誤りしなるべし○ちゝの秋云々の歌の意は今の男千人よりも昔の男一人の方まされりさは思へど春の花も秋

の紅葉も反にあたにちりぬればたゞ我のみひとりつらしといふ意也さてちなみにいふちゝは千の意なれば必しも千々の心にあらず下のちはひとつふたつのつとおなじくてはたちみそちなとのち也

むかし二條の后につかうまつる男ありけり女のつかうまつるをつねに見かはしてよはひわたりけりいかて物こしにたにたいめんしておほつかなく思ひつめたる事すこしはるかさむといひけれは女いと忍ひて物こしにあひにけり物語なとして男

「ひこほしに戀はまさりぬ天の川へたつる關を今はやめてよ此歌にめてゝあひにけり

見かはしては男女ちかき程の宮つかへなれば常に見交して結婚したるなるべし○物こしにだにのたに異本になしある方まされり眞字本には物こしにても云々と有こもあしからず○おほつかなくは欝悒にてこゝは待遠になり○はるかさむははらさむといふ意也○ひこほしに云々の歌の意は年に一夜ながらもあふといへば彦星にまさりて我は悲しく思ふ也今はつれなきへだて心はやめ給へと也彦星は和名抄に牽牛一名河鼓和名比古保之又以奴加比保之とあり二の句眞字本にこよひはましぬと有萬葉集に久方天印等水無河隔而置之神世之恨（ヒサカタノアマノシルシトミヅナシカハヘダテヽオキシカミヨシウラメシ）文選古詩河漢清且淺相去復幾許盈々一水間脈々不レ得レ語　同謝　運七夕詩遝川阻二暱愛一修渚曠二淸容一遊仙窟に如今寸步阻二天津一

むかし男ありけり女をとかくいふ事月日へにけり岩木にしあらねは心ぐるしとや思ひけむやう〳〵あはれとおもひけり其ころ水無月もちはかりなりければ女身にかさひとつふたつ出來にけり女いひおこせたる今は何のこゝろもなし身にかさひとつふたつ出きたり時もいとあつしすこし秋風吹立なむ時かならすあはむといへりけり秋まつころほひにこゝかしこより其人のもとへいなむすなりとてくせちいできにけりさりければ此女のせうと俄にむかへにきたりされはこの女かへてのはつもみちをひろはせて歌をよみて書つけおこせたり

「秋かけていひしなからもあらなくにこのはふりしくえにこそ有けれと書置てかしこより人おこせは是をやれとていぬさてやかて後つひにけふまてしらすよくてやあらむあしくやあらむいにし所もしらす彼

男はあまのさかてをうちてなむのろひをるなるむく
つけきこと人ののろひことはおふ物にやあらむおは
ぬ物にやあらむ今こそはみめとそいふなる

岩木にしあらねばは非情の木石にあらす有情人な
ればといふ意也遊仙窟に亦非木石豈忘深恩白
氏文集に人非木石皆有情源氏東屋に岩木なら
ねばおもほししる云々○心くるしは氣の毒に思ふ
也○みな月は六月炎天に渇水なれば水無月也とい
ふは字になつみたる妄説也あかた居大人は雷鳴月
の略也といはれつれとわろしすべて一年の月の名
みな稻によりて附たるなれは實生月の略なる事別
に考あり○もちは和名抄に釋名云望月毛知都岐月
大十六日小十五日日在東月在西遙相望也と有は
漢意なれは古意にかなはずもちはみちにかよひて
月のみつるをいへり望の意にあらす盈滿等の字の
意なり○かさは和名抄に瘡痍也加佐痍瘡也岐須と
ありてたゝいさゝかなるをもいへりみな月のあつ
き比ほひなれば同抄に熱沸瘡痱熱時細瘡也云々
治夏月熱沸瘡阿世毛とあるこの類なるべし○時
もいとあつし云々は今は身もいさきよからねは用
心のさま也古今集にさかしらに夏は人まねさゝの
はのさやく霜夜を我ひとりぬる曾丹集にせみのは
のうすく衣のなりしより妹とぬるよの間遠なる哉
うとまねゝ誰もあせこき夏なれは間遠にぬとや心
へたてむ淮南子に喝者望涼風于秋と云る心也毛
詩匪我愆期子無良媒將子無怒秋以爲期○秋
まつ比ほひ異本に秋たつころほひとあり○其人
のもとへいなむすは契沖師の云く男のもとへ多く
の女のゆかむとする也といはれしはたがへりこは
女のもとへ多くの男いなむとする也されはこそ此
女の兄もむかへにきたれ此女も書置したれかの男
ものろひことしたれ此物語はさらにて他書にも女
の家に男行てすむはつね也こゝなるは女の親にか
くす故に男の方へむかふ事也なへては今の世とは
いたく異本に女の父其人のもとに行へかなる事聞
ていひのゝしりてとは○くせちは口舌也○せうと
俄にむかへに來たりは父の家より兄が母家の妹を
なり○かへて上にいへり○初紅葉は夏の末秋の初
などに稀にうつろひたるをいふ貫之集に六月に木
の紅葉たるを取て云々曾丹集に下紅葉秋もこなく

に色つくはてる夏の日にこかれたるかも後拾遺集下紅葉一葉つゝちる夏山に秋とおほゆる蟬の聲かな○秋かけて云々の歌の意は秋風吹立なむ時必あはむと云しながら契の如くあひもせずさてしもあらぬに是にむかへられたればあはでやみなむは誠に淺き緣也といふ意也木の葉ふりつもる江は淺きものなれば江に緣をかねたるなり上にわたれとぬれぬえにしあればといへるも同じ後撰集に水鳥のはかなきあとに年をへてかよふばかりのえにこそ有けれ○さてやかて後つひにけふまてしらす云々くだ〳〵しくわつらはしき詞也眞字本にはさてつひにけふまてしらす云々とはよくきこゆたゝ其女は後つひによくてあるかあしくてあるかいにし所も男はしらずといふ意也○あまのさかて常には下に埀たる手を逆に上になしてうつを逆手を打といふ古事記に即踏‑傾其船‑而天逆手矣於‑青柴垣‑打成而隱也云々舊事本紀にもあり然かるを一條禪閤は逆手を後手也とのたまへどたかへり俊成卿の六百番歌合の判に云あまによめらむに何のうたかひかあらん云々愚老こそ昔によみて侍りし夫を難する由に侍ても伊勢物語の外にことなる證據なかるべし云々とのたまへり既に古事記に見えたるうへは外をもとむるに及はず此卿は後世の歌物語等に目なれ給ひて國史等にくらき卿なればさもあるべし○のろひは咀字にあたれりうつほ物語にさても

天の逆手打の圖

人ののろふ人はみとせにしぬる也大將いさゝかのあしてのつゝかもあらは云々〇むくつけき事云々はおそろしけなる事にてのろび事の自評也〇おふ物にやあらむ云々其人の身に負也上につみもなき人をうけへは忘艸おのか上にそおふといふなる萬葉集に丈夫之思和備乍遍多嘆久嘆乎不負物可聞

むかし堀川のおほいまうち君と申すいまそかりけり四十の賀九條の家にてせられける日中將なりける翁

「さくら花ちりかひくもれ老らくのこむといふなる道まとふかに

堀川の大臣は基經公也後の謚を昭宣公といふ貞觀十四年八月二十五日三十七歳にて右大臣右大將に任し給ふかゝれば其後三年にして四十賀行はれしなるべし堀川院閑院九條皆此大臣の家也〇四十賀はふるくよりありしかいまた其始をしらず仁明天皇四十御賀の事續日本後紀にあり懷風藻に正五位上刀利宣令詩五首賀五八年從五位上上總守伊岐連古麻呂一首五言賀五八年宴〇櫻花云々の歌古今集に業平朝臣とありちりかひくもれは散違曇也おいらくは老る也歌の意は櫻花ちりみたれ亂ちがひてくれよ老の來らむといふ道にまとはしめてきたらさらしめてしがなと也古今集に老らくのこんとしりせば門さしてなしとこたへてあはさらましを六帖に櫻花けふちりくもれあかすしてわかるゝひともたちとまるへく

むかしおほきおほひまうち君ときこゆるおはしけりつかうまつる男長月はかりにうめのつくり枝にきしをつけて奉るとて

「我たのむ君かためにとをる花はときしもわかぬ物にそ有けるとよみて奉りたりけれはいとかしこくおかしかり給ひて使にろく給へりけり

おほきおほいまうち君は大政大臣也官位令に正從一位とあり職員令に師㆓範一人㆒儀㆓刑四海㆒とあり此太政大臣は良房公を含めたるなるべし天安元年二月十九日大政大臣五十一四月九日從一位二年十一月攝政貞觀十四年九月二日薨謚を忠仁公といふ美濃國に封られたり〇つかうまつる男は業平朝臣を家禮の如くに造りなしたる也業平朝臣は平城天皇の御孫なれば藤氏の家禮にあらずといぶかるは作物語なる事をしらぬ論也〇長月は長夜の比なれ

ば名附し也といふは字になづみたる也一年の月の名すべて稲によりて附しなればなか月は稲苅月也○梅のつくりえにきしを云々つれ〳〵草に岡本關白殿さかりなる紅梅の枝に鳥一雙をそへて此枝につけて參らすへきよし御鷹飼下毛野武勝に仰られたりけるに花に鳥つくるすべしりさぶらはず一枝にふたつつくる事も存知さぶらはすと申ければ云々さらはおのれか思はむやうにつけて參らせよと仰られければ花もなき枝にひとつをつけて參らせけり云々君かためにとをる花は時しもわかぬと伊勢物語に見へたりつくり花はくるしからぬにや云々とあり契沖師の云く夫木集に有馬頭保昌朝臣のもとに紅梅の枝にきしをつけて送るとて祭主輔親卿のゝのきゝすの羽風あふけともねくらの梅はちらすそ有ける返し藤原保昌朝臣うくひすのねくらの梅ときく物をとりたかへたる心地こそすれとあるからはつれ〳〵草にいへるは誤也といはれたりされとかへりて誤也伊勢貞丈ぬしの云く伊勢物語も夫木集も歌よまむ料につくり花に雉子を付たるなれは一時のたはふれ事也さらに式法にあらす武勝かしわざは故實也されば兼好か作花はくるしからぬにやとおほつかなきなからいひしは誤にあらす契沖か夫木集を證として兼好か詞を誤也と注せしはかへりて誤なりといはれたり○我たのむ云々の歌は古今集に題しらすよみ人しらず初句かきりなきと有後人の右註にはある人の云此歌はさきのおほひまうち君の

としのはの圖

也とあり六帖には二の句君かかたみにと有意は我たのみ奉る君の爲にとて折し梅の花の九月なれど時をもわかず咲たりと也是造花なれば也時しもといふに雉の名いれり○ろく給へりけりは今世にいふ褒美なり

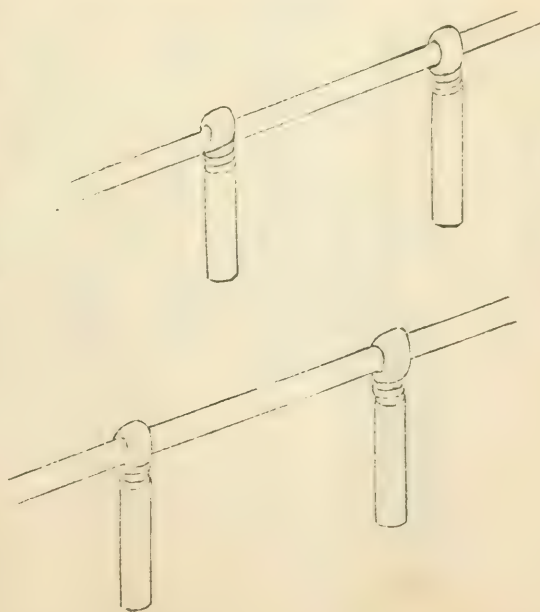
むかし右近のうまはのひをりの日むかひにたてたりける車に女の顔の下すだれよりほのかにみえければ中將なりける男のよみてやりける

「みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさむかへし

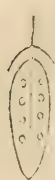
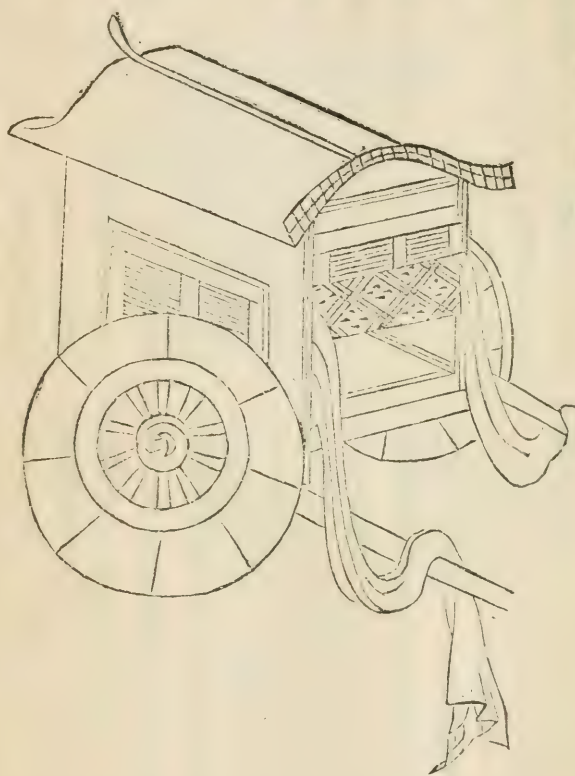
「しるしらぬ何かあやなくわきていはむおもひのみこそしるへなりけれのちはたれとしりにけり

右近のうまはは一條より大宮の方也○ひをりの日は此物語中第一の難語にてむかしより今にいたるまで說得たる人なし顯昭は五月三日四日は左右近衞馬場荒手結五日六日は左右近衞馬場眞手結也荒手結の日は射手の近衞舍人水干袴に括を上て褐の尻を前さまに引手折て其上に行縢を結也眞手結の日は紅の袴織物のさしぬきにくゝりを上すしてそはをはさみて褐の尻を脛より前さまに引手折て前にはさめり是を日をりの日といふ也といへり契沖師もこの顯昭の說にしたかはれてひをりは引折也俊頼朝臣の五月五日にけふやまゆみのひをりならむとよまれたるも五日を左近のひをりにあてられたる也などいはれつれどかなはず五日六日の眞手結は大內馬場にての騎射也左右近衞馬場にては五日六日はなしと古意にも玉かつまにも見えたりさて縣居大人は引棚又は標棚なとの意ならむといはれつれどかなはぬにや玉かつまに埒をひをりといへる事物にも見えす標をひといへることもなし又標を立ればとて其日を標棚の日といふべくもあらすかにかくに此事は誠に難義にぞ有ける云々とあり千歳の師たる本居翁すら斯の如くいはれたりさらばとかくいふべからねと彥麿ひそかに考ればひをりの日とある下の日の字は衍字にてひをりのむかひにたてたりける車の云々とありしならむかゝらばひをりは引棚にて埒をいふなるべしあまりに深く考へ遠くもとむる時はいさゝかなるたかひよりいみじきひが事と成行也またひとつの考あり右近の馬場のひをりと云切て日向ひに立たりける云

云と言をおこしていへはまたよくきこゆる也日に向ふ國を日向國となづけられしこと古事記日本紀及日向國風土記に見えたりかゝれば日向といふ詞も此頃はありしならむ○車の下すだれは和名抄に𩋡𩋡俗云車簾車帷也○みすもあらす云々の歌は古今集に端詞もこゝと同じくて業平朝臣とあり意はみぬにもあらず見たるにもあらぬ人を是程迄に戀しくおもはゞ何のわけもなくあやもわかぬ思ひをしてけふをくらさむと也○しるしらぬ云々の歌は古今集に右の歌のかへしよみひとしらずと有意は見たりとも見すとも何かわきていふべきたゝ思ひこそしるべとはなるべけれと也大和物語には在中將物見に出て女のよしある車のもとにたてり下すたれのはさまより此女のかほいとよくみてけり物などいひかはしけりこれもかれもかへりてあしたによみてやりけるみすもあらす云々女かへしみもみすも誰と知りてか戀らるゝおほつかなみのけふのなかめやとあり枕草紙におほつかなき物人のかほしらぬ物見○後は誰としりにけりは例の記者のおとろかしなり

むかし男後涼殿のはさまをわたりければあるやむごとなき人の御つほねより忘草を忍草とやいふとていたさせ給へりければ給はりて

「わすれくさおふるのへとはみるらめとこは忍なり後もたのまむ

ひをりの圖

後涼殿は和名抄に後涼殿在二清涼殿西一と有○はさまは雨殿の間なり○やむことなきは止事なきにて等閑ならぬをいふ大和物語にては御息所なり○忘草は萱草なることかみにいへり○しのふくさは和名抄に垣衣一名烏韮之乃布久佐とあり陸奥鹽竈の社人藤家知明か云く八雲御抄に忍草は細長く星のやうなる物有とのたまへり諫議大夫基春の鷹經辨疑論に忍文といふ鷹の尾の問に答へし圖斯の如し今川了俊の言塵集に忍草は金露艸なり常磐なる草なり葉の中に黄色なる粒あり云々といへり其あらはせる圖下に出せり○わすれくさおふる云々の歌は續古今集に入られたり歌の意は女の方より忘草を出して男にみせて忘れ給ひしさまなるは人目を憚り忍ひ給ふ故にやとゝふ心をうけて我心に忘艸の生たる野と人は見るべけれど人めを憚りて忍ぶらんと推量し給ふことくなればこの後も猶いよ〳〵頼み奉らむとかへりて女の心をみる如くよめるなり大和物語に同し草を忍草忘草ともいへばそれによりてなむよみたりけるとあるは誤なり續古今

車の下簾の圖

集にわするゝも忍ぶも同しふるさとの軒はの草の名こそつらけれとあるは大和物語によりたるなり思ふに此圖にあらはせるは垣衣といふべき艸にあらずまた衣にするべき品にもあらず村田春門の云く忍草忘草思草などいへるはみなそのもとはたゞ

藤家智明かあらはしたる

萱草の圖

心に忍ぶ事忘るゝ事思ふ事をいへる言稱なるべかりしを後世忍草は此草也忘草はかの草也といへるより說まち／＼となりこしなるべしといはれたり此說いと／＼めでたし和名抄に忍草は垣衣忘草は萱艸とあけられたるは其ころいひし名なるべし今檜の葉の如き草を忍草といへるは近來の名なるべし曾我物語には紫苑をさへ忘草といへり

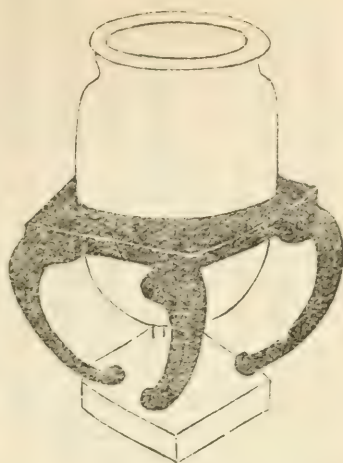
むかし左兵衞のかみなりける在原の行平といふ人あり其人の家によき酒ありときゝてうへにありける左中辨藤原のまさちかといふをなむまらうとざねにて其日はあるじまうけしたりける情ある人にてかめに花をさせり其花の中にあやしき藤のはな有けり花のしなひ三尺六寸はかりなむ有けるそれを題にてよむよみはてかたにあるじのはらからなるあるじし給ふときゝて來りければとらへてよませけるもとより歌の事はしらざりければすまひけれとしひてよませければかくなむ

「咲花の下にかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかけかもなとかくしもよむといひければおほきおとどの榮花のさかりにみまそかりて藤氏のことにさかゆるをおもひてよめるとなむいひけるみな人そしらす成にけり

左兵衞督は官位令に從五位上とあり職原抄には相當從四位下中納言參議散二三位非參議四位等皆任之とあり○在原行平卿は阿保親王の子業平朝臣の

異腹の兄也三代實錄に貞觀六年三月從四位上備前權守在原朝臣行平爲二左兵衞督一○よき酒ありとききて云々和名抄に食療經云酒和名佐介五穀之華味之至也故能益レ人亦能損レ人○うへは殿上也この所詞たらず玉かつまにうへに有ける人々のまむとてきけり左中辨云々となくてはとゝのはぬよしあり○左中辨は官位令に正五位上とあり○藤原良近は不比等公の末孫太宰員外帥正三位吉野第四の子也貞觀十二年右中辨同十六年左中辨に任ず大力上戸の人也三代實錄に容儀可觀風望清美無學以政理見推とあり○まらうとさねは客人眞といふ心にて上につかひさねとあると同意也正客をいふ○あるしまうけは饗應なり○花かめに花させり古今集に染殿の后のおまへに花かめに櫻の花をさゝせ給へるを云々清少納言枕草子におもしろく咲たるさくらを長く折て大きなる花がめにさしたるこそ云々又云青きかめの大きなるすゑて櫻のいみしくおもしろき枝の五尺はかりなるをいとおほくさしたれはかうらんのもとまてこほれ咲たり云々後撰久しかれあたにちるなと櫻花かめにさせれとうつろひにけりこゝなるは櫻のみにあらす櫻桃山吹つゝじ藤など色々なるべし○あやしき藤の花は常に異なるめつらしきをいふ○花のしなひ枕草子に藤の花しなひなかく色もよくさきたるいとめでたし萬葉集には萩にもしなひとよみ催馬樂には青柳にもしなひとよめり○三尺六寸はかり云々おのれちかきころ三月の末つかた下總國香取の神社へまうてたるに藤のしなひ五尺にあまれるか咲たるを見たり○はらからは上にいへる如く母の同じはらなる兄弟をいひしを此物語のころにいたりては異母兄弟をもはらからといへり○あるし給ふ云々これも饗應なり○すまひは辭退して爭ふ也撲の意なり○さく花の云々の歌の意は藤氏の榮花他に異なれば其下に賴みよる人多くしていにしへにもまされりと藤の花のしなひ長きによそへて良近朝臣の氏を賞したる也○なとかくしもよむとは在家にて藤家の榮をば何故によみ給ふと人々の咎る也○おほきおとゝは太政大臣忠仁公也こは業平朝臣の咎る人への答也○藤氏の殊にさかゆるは今に始ぬ事にて大祖天兒屋命皇御孫降臨の時より附添奉りたまひて

家系連綿として下賤の例に下らず代々執柄をとりて補佐し給ひ今に攝家と稱し奉るいづれの氏か並ぶものあらむいと／＼めでたき氏なりけり○皆人そしらず云々歌の意を不審に思ひしを業平朝臣の返答にて聞えたれば也

花かめの圖

むかし男有けり歌はよまざりけれど世の中を思ひしりたりけりあてなる女のあまになりてよの中をおもひうんじて京にもあらずはるかなる山里に住けりもとしぞくなりければよみてやりける

「そむくとて雲にはのらぬ物なれど世のうきことぞよそになるてふとなむいひやりける齋宮の宮なり

歌はよまざりけれど云々は實の業平朝臣也と思ひて卑下也と云はわろし人情の誠をしる事也○あてなるは貴也上に云り○尼になりては衰へてたつきなければ也○うんじてはうみして也倦の字の意也竹取物語においらかにあたりよりだになありきそと宣まはぬと云てうむしてみなかへりぬ○しぞくは親族也後撰集にしぞくに侍りける女の男に名立て云々大和物語に大かたのしぞく也ける人の娘の内にて云々○そむくとて云々の歌は新後拾遺集に業平朝臣として入られたりそむくは世をそむき山里に入るをいふ雲にのるは仙術也莊子云藐姑射之山有二神人一居焉肌膚若二氷雪一綽約若二處子一不レ食二五穀一吸レ風飲レ露乘二雲氣一御二飛龍一而遊二乎四海之外一といへるなどの類をいへり歌の意は世をそむき山に入とて雲にのるべき仙術もなき物なれどよのうき事はよ所になると云物ぞと也○齋宮のみやなりけるは眞字本になしこをいつきのみやとよみて宮の字一字衍なりとするはわろし中むかし以來の物語には字音多くまじれりこはさいくうのみや

とよむかたまされり作者のあらぬ自注をなして人をおとろかせり

むかしをとこありけりいとまめにしちえうにてあたなる心なかりけり深草のみかとになむつかうまつりける心あやまりやしたりけむみこたちのつかひ給ひける人をあひいへりけりさて

「ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさるかなとなむよみてやりけるさるうたのきたなけさよ

まめは上にいへり○しちえうは實要也○あたなる心のあだは濁りてよむべし上の清音のあたとはたかへり清音のあたは敵怨などの字也こゝの濁音のあたは仇字の意にてはかなくうつろひ易く變りやすきを云○深草のみかとは日本根子天璽豐聰惠天皇也御諱を正良天皇と申御謚を仁明天皇と申奉る嵯峨天皇第二皇子也御在位十七年嘉祥三年三月廿一日崩同廿四日葬深草山故に深草のみかとゝ申奉る○心あやまりは實要なるうへのあやまり也○みこたちは文德天皇宗康親王光孝天皇などを始め奉りあまたおはします○ねぬるよの云々の歌は古今集に人に逢ひてあしたにつかはしける業平朝臣とあるをかくたくみにつくりし也歌の意は人に逢ひてはかなくわかれたる夢のやうなれば其夢がはかなさにまとろみて又逢みる事もやとおもへば夢もみずしていよ〳〵はかなく成まさると也○さる歌のきたなけさよは卑下にあらす記者の自注也上にさまてもなき我さへもなくの歌をあるか中におもしろけれは云々といひてこゝにすくれてよきうたをさそ歌のきたなげさよといひて人おとろかすぞ此物語の作者の趣意なる

むかしことなることなくてあまになれる人有けりかたちをやつしたれと物やゆかしかりけむ賀茂のまつりみに出たりけるを男歌よみてやる

「世をうみのあまとし人のみるからにめくはせよともたのまるゝかな是は齋宮のものみ給ひける車にかくきこえたりけれはみさして歸り給ひけるとなん

ことなることなくてあまになるは凡尼になるはつかへまつる君にわかるゝか夫にわかるゝか又はまつしくして世に住みかたき女のなれるをさはなくてたゞなにとなく尼になれるをいふなるべし○も

のやゆかしかりけむは色情の心のうせざる也○かものまつり云々延喜神名式に山城國愛宕郡賀茂別雷神社（亦若雷名神大月次相嘗新嘗）賀茂御祖神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）まつりは四月中酉日なり續日本紀文武天皇二年三月乙丑朔辛巳禁山背國賀茂祭日會衆騎射夏四月庚子禁祭賀茂神日徒衆會集執仗騎射唯當國之人不在禁限また元明天皇和銅四年夏四月丙子朔乙未詔賀茂祭日自今以後國司每年親臨檢察焉○世をうみの云々の歌の意は海と憂とをかね海人と尼とかね海松と見るとかね海藻合喰と目胸とかねたる也目胸は目を交しうこかして心をしらする也俗に目交といふ文選屈原九歌云滿堂美人忽獨與余兮目成また史記項羽本紀云須臾梁眴籍（師古曰眴音舜動目而使之）源氏若菜に人々めをくはせつゝ云々清少納言枕草紙にあさりするあまのすみかをそことしもゆめいふなとやめをくはせけむ大鏡に大將の御方をあまたゝひ見やらせ給ふにめをくはせ申給へは云々とありされば世を海の海人とみる故に海藻を喰せよといひて下に色情を含みたる也○齋宮の云云例の記者のたはふれたる自注也○見さしては見終らずして也

むかし男かくてはしぬへしといひやりたりければ女
「しら露はけなはけなゝむきえすとてたまにぬくへき人もあらしをといへりければいとなめしとおもひけれとこゝろさしはいやまさりけり

かくてはしぬへしの上に詞落たるなるべし後撰集にまたあはれ侍ける女のもとに死へしといひやりければはやしねかしといへりければ又つかはしけるなどいへる也○しら露は云々の歌は古今集に櫻花ちらはちらなむちらすとて故郷人のきてもみなくにといへる歌のしらべにならひて同集に萩の露玉にぬかむととれはけぬよしみむ人は枝なからみよといへる意をとりてよめる作者の歌也さるを新千載集に家持集よりぬき出て入られたれど家持集はあらぬ僞ふみなることをしらぬ也歌の意は明らかなり○なめしは輕字又無禮字等の意也萬葉集に妹登曰者無禮恐然爲蟹懸卷欲言爾有鴨竹取物語になめけなる物におほしめしとゞめられぬらむ云々うつほ物語にいかになめけたるさまはべりけむ云々蜻蛉日記にふるまひのなめて覺ゆる事云々枕草子

になめけなる物云々源氏梅枝になめけなる姿を御覽せさせ侍る也云々同處女になめけなりとてもとかむ云々同夕霧にいかさまにして此なめけさをみしとおほへけれは云々同槇柱にうちにもなめく心あるさまにきこしめし云々

むかし男みこたちのせうえうし給ふ所にまうてゝたつた川のほとりにて

「ちはやふる神代もきかす立田川からくれなゐに水くゝるとは

みこたちはいつれの天皇の御子たちなるかしらねど古今集によれは淸和天皇の御子たちを含めたるなるべしされと御屛風の繪の立田川を實の立田川につくりなしたるなれはいつれの御子達とも定むべからす○せうえうは上にいへり○千早振云々の歌は今古集に二條后の東宮の御やすむ所と申ける時に御屛風に立田川に紅葉流れたるかたかけりけるを題にてよめる業平朝臣として素性法師の歌の次にありちはやふる上にいへりからくれなゐは韓吳藍也龍田川は大和國平群郡の立田河にあらず山城國乙訓郡山崎と水無瀨との境の河也大和の立田は山はあれども川はなし山城の立田は川はあれとも山はなしそは玉かつまにくはし水くゝるは二說あり一說は水潛也後京極歌是も又神世はきかす龍田川月の氷に水くゝるとは立田川岩根のつゝし影見えて猶水くゝる春のくれなゐ又一說は纐纈なりこれをゆはたともいへり結機の意なり今世にいふ鹿の子しほりなり古今六帖に木のはみなからくれなゐにくゝるとて霜のあやにも置まさる哉在原友于時雨には立田の川も染にけりからくれなゐに木葉くゝれはそはいつれなるや後の說まされりどおもはる歌の意は神代にはいろ／＼さま／＼にくすしくあやしきことあれといまたかゝる奇異はきゝも及はすと也華陽國志蜀時濯二錦於流江中一則鮮明也譙周益州志云成都織錦成濯二於江水一其文分明勝二於初成一他水濯レ之不レ如二江水一也新古今集に四月祭の日まて花ちりのこりて侍ける年其花を使少將のかさしにたまふ葉に書つけ侍ける神代には有もやしけむ櫻花けふのかさしにをれるためしは定家卿よし野川たきつかふちの春風に神代もきかぬ花そみなきる

むかしあてなる男有けり其男のもとなりける人を内記に有ける藤原のとしゆきといふ人よはひけりされとまたわかけれはふみもをさ〳〵しからす言葉もいひしらすいはむや歌はよまさりけれは彼あるしなる人あんを書てかゝせてやりけりめてまとひにけりさて男のよめる

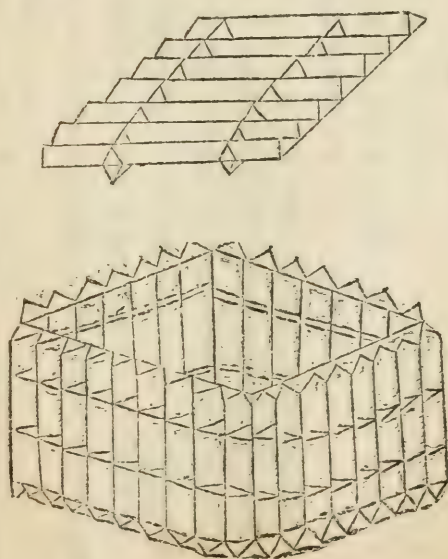
「つれ〳〵のなかめにまさるなみた川袖のみひちてあふよしもなしかへし例のをとこ女にかはりて

「淺みこそ袖はひつらめなみた川身さへなかるときかはたのまむといへりけれは男いといたうめてゝ今まてまきてふはこに入てありとなむいふなる男ふみおこせたりえて後の事也けり雨の降ぬへきに見わつらひ侍る身さいはいあらは此雨はふらしといへりけれは例の男女にかはりてよみてやらす

「かす〳〵におもひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされるとよみてやれりけれはみのもかさもとりあへてしとゝにぬれてまよひきにけり

こゝにあてなる男とあるも上にいやしき男とあるもともに業平朝臣を含めたるは論なきを位階の事王孫の事などいへるはわろし○内記は官位令に大内記正六位上中内記正七位上少内記正八位上大同元年七月に改て正七位上とあり○藤原敏行は從四位下富士麻呂の子也母は紀名虎の女也貞觀九年少内記同十二年大内記に任す能書也○をさ〳〵しからずは日本書紀に幹了をよめり不幹ともかけり長長しからすにて無長と同意也萬葉集に等夜乃野爾乎佐藝禰良波里乎佐乎佐毛禰奈敝古由惠爾波伴禰許呂波要○あんを書ては案を書てにて下書なり○めてまとひは文章のよきをめて又人の案文かと思ひまとふ也○つれ〳〵の云々の歌は古今集に業平朝臣の家に侍ける女のもとによみて遣しける敏行朝臣とありて四の句袖のみぬれてとあり意はつれつれと物思ひ居る事を日々長雨のふりつゝくにいひなして涙に袖のぬるゝのみにてあふよしもなしといへるを眺に長雨をよそへてよめる搜神記韓憑妻の其雨霪々河大水深といへるを蘇賀といふもの其意を釋して其雨霪々言愁且思也河大水深不レ得ニ往來一也六帖につれ〳〵と袖のみひちて春の日のなかめは軒のつまにさりける○淺みこそ云々の歌も古今集にありて女にかはりて業平朝臣とあり意

は淺き心なればこそ袖のみぬるらめ身もなかるゝばかり深く思ひ給はゞたのもしからむとなり萬葉集に廣瀬川袖つくはかり淺きをや心ふかめて我おもへらむうつほ物語に涙川うきて流るゝ今さへや我をは人のたのまざるらん源氏にあさみにや人はおりたつ我かたは身もそほつまて深き戀路を袖ぬるゝ戀路とかつはしりなからおりたつ田子のみつからそうき○ふはこは和名抄に笈不美波古負レ書箱也云々學士所下以負レ書狀如二冠箱一而昇上○えて後はしとけて後也○雨のふりぬへきに云々雨のふるへく曇りたれば行かねておもひ居る也我身に幸あらば雨はふらじと也○やらすは令レ遣也○かすかすに云々の歌は古今集に敏行朝臣の業平の家なりける女をあひしりてふみ遣はせりける詞に今まうてく雨のふりけるをなん思わつらひ侍るといへりけるをきゝてかの女にかはりてよめる業平朝臣と有意は思ふや思はぬや數々にはとひがたさに我身の程をしる雨はいみしくふりて泪の雨もいとゝまされりと也伊勢集にかたみにも身をしる雨のふりし哉我もおきあへす君もこしかな○みのは和名抄に蓑美能雨衣也とあり○かさは同抄に笠加佐所三以禦二レ雨也とあり○しとゝにぬれて云々俗に云しつぽりぬるゝ也しとゝはしをれしなへなどゝ同

文筥の圖

言也萬葉集に久堅乃雨零日乎我門爾蓑笠不蒙而來有人哉誰爲家卿雨衣笠着て內へいることは神やらひよりいむといふ也六帖に春雨にしとゝに袖をぬらしつゝ君が爲とそわかなつみくる金葉集に雨ふ

簑笠の圖

れば岸もしとゝになりにけりかさゝきならはかゝらましやは

むかし女人のこゝろをうらみて
「風ふけはとはに浪こす岩なれや我衣手のかわくときなきとつねのことくさにいひけるを聞およひける男
「よひことにかはつのあまたなく田には水こそまされ雨はふらねと
風ふけは云々の歌は新古今集に貫之と有また貫之集にもありて三の句磯なれやと有意は風吹毎に常に岩をうちこす浪の如く岩にもあらぬ我袖のかわく時はなしと也○常のことくさはたゞ何となく常常いふ言種也○聞およひたるは常の言くさを聞て我うへをいふかと思ひたる也○よひことに云々の歌の意は君か袖のかわく時なきは夜ことに蛙のあまたしてなく如く泣給ふ故に水のまさる如く袖のぬるゝにてやあらんつれなき我雨のふるにてはあらしと也
むかし男友たちの人をうしなへるか許にやりける
「花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひむとかみし
友たちの云々我友たちのふかくおもふ人の死たる

也○花よりも云々の歌は古今集に櫻を植て有ける
にやうやく花さきぬべき時にかのうゑける人身ま
かりければ其花をみてよめる紀のもちゆきとあり
歌の意は花のちるををしみ戀ひぬべき人は花より
もはかなくなりて花の方よりあるじををしむらん
といふ意也こゝなるははかなき花よりも思ふ人こ
そあたになりたれ思ふ人と花とはいづれを先に君
はこひんとか見しとなり

むかし男みそかに通ふ女ありけりそれがもとよりこ
よひ夢になむ見え給ひつるといへりければ男
「おもひあまり出にしたまのあるならん夜ふかくみ
えはたまむすひせよ

みそかは密なり○思ひあまり云々の歌の意は我お
もひまたる故に魂の出しならん夜ふかくみえしな
らは下褄を結ひてとゝめよと也吉備大臣の歌とい
ひ傳へたる歌に玉はみつぬしはたれともしらねと
も結ひそとむる下かへのつま狹衣にあくかるゝ我
たましひもかへりなむ思ふあたりにむすひとゝめ
よかへし玉しひのかよふあたりにあらすとも結ひ
やせまし下かへのつま小侍從君こふとうきぬる玉
のさよふけていかなるつまにむすはれぬらん鎮魂
の事延喜式舊事記結二糸於葛筥一江次第伯結二木綿一
貞觀儀式謚下取主上結二御魂一緒上三寶令義解等に委
しく有

昔男やむことなき女の許になく成にけるをとふらふ
やうにていひやりける
「いにしへは有もやしけむ今そしるまたみぬ人をこ
ふるものとは

なくなりたる云々眞字本にはなくなりたる女を云
云とあり○いにしへは云々の歌は新勅撰集によみ
人しらすと有意はまたみもせぬ人を戀しく思ふこ
とはいにしへは有しかしらねど我は今始てしると
也古今集にいにしへにありきあらすはしらねとも
ちとせのためし君に始めむよの中はかくこそ有け
れ吹風の目に見ぬ人も戀しかりけり

むかし男つれなかりける人のもとにイ
かへし

こは外よりまきれたる誤なるべし上の歌この下の
歌贈答にあらず眞字本に昔つれなかりける人のも
とにとあるそよろしき
「下ひものしるしとするもとけなくにかたるかこと

はこひすそあるべき又かへし

「戀しとはさらにもいはし下ひものとけむを人はそれとしらなむ

此段みたれたり贈答前後たかへり○下紐の云々の歌は後撰集に在原元方戀しとはさらにもいはし云云のかへしにて結句あらずも有哉と有眞字本にも下紐の歌を答とせり此物語にてはかへしの歌の意せむなし後撰集並に眞字本にては贈答連續せり又いつれにしても上のいにしへは有もやしけんの歌のかへしとは聞えず異本にはむかし男つれなかりける人のもとに戀しとはさらにもいはす云々かへし下紐のしるしとするも云々とありかくてはきこゆ意はこひらるればとくるといふ其しるしとすべき下紐もとけぬにかたるか如きにては戀ぬにてぞ有べきと也後撰集に結置し我下紐の今までにとけぬは人のこひぬ也けりさてかたるかことはを異本にはかゝるかことはかけすそ有へきとありさてはかゝるかこつけ言は詞にかけていひ給ふべきにあらずと也○又かへしこの又の字は上の別條の歌のかへしとするからこゝに又字を補ひしなるべし又字なきぞよき○戀しとは云々の歌後撰集に女のもとに遣しける在原元方とありて下紐の歌の前にあり意は戀しとはことさらに言にいたしてはいはぬを我思ふ心の切なれば其下紐はとけぬべしさらは我戀るとしり給へと也此歌のかへし女の歌したひものしるしとするも云々と有下紐とは上にいへる如くいにしへは小袖の上に結ふ帶を下紐とも下帶ともいへりそは上に裝束ありてうは帶といふものあれば也今世には大宮人の外つねに裝束きる事なければ常の帶にむかへてはたの帶を下帶ともいへり思ひ混ふべからず

むかし男ねむころにいひちぎりける女のことさまになりにければ

「すまのあまのしほやくけふり風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり

ことさまは異人によすか定りしをいふ○すまのあまの云々の歌は古今集に題しらすよみ人しらすの歌なり其もとは萬葉集に之加乃泉郎之鹽燒烟風乎疾立者不上山爾輕引とあるをつくりかへたる也意は明らかなり

むかし男やもめにてゐて

「なかゝらぬ命のほとにわするゝはいかにみしかきこゝろなるらむ

やもめは和名抄に釋名云無妻曰鰥夜乎言鰥々然不寐如魚目恒不閉者也又同抄に無夫曰寡夜無女孟子老而無妻曰鰥老而無夫曰寡小爾雅凡無妻無夫通謂之寡玉篇云寡或曰孀或曰婺婦とあれど後世は男女かよはしてやもめといふ

○長からぬ云々の歌は新勅撰集によみ人しらすと有意はみしかき命の間に人をわするゝはいかばかりみちかき心なるらむとうらみたるなりいのちは息中なり

むかし仁和のみかとせり川に行幸し給ひける時今はさる事にけなく思ひけれともとつきにける事なれは大鷹の鷹飼にてさふらはせ給ひけりすりかりきぬのたもとに書つけゝる

「おきなさひ人なとかめそかりころもけふはかりとそたつもなくなるおほやけの御けしきあしかりけりおのかよはひを思ひけれとわかゝらぬ人は聞おひけるとかや

仁和のみかとは時康天皇也後御諡を光孝天皇と申奉る仁明天皇の御子也御母は紀伊守藤原總繼の女也○せり川行幸は三代實錄に光孝天皇仁和二年十二月十四日戊午行幸芹川野寅二刻鸞駕出建禮門到門前駐蹕勅賜皇子源朝臣諱朱雀太上天皇帶劔是日勅參議已上着摺布衫行縢別勅皇子源朝臣諱散位正五位下藤原朝臣時平二人令着摺衫行縢辰一刻至野口放鷹鷂拂擊野禽山城國司獻物幷設酒禮飲獵徒日暮乗輿幸左衛門佐從五位上藤原朝臣高經別墅奉進夕膳高經獻物賜從行親王公卿侍臣及山城國司等祿各有差夜鸞輿還宮是日自朝至夕風雪慘烈矣十八日壬戌詔授左衛門佐從五位上藤原朝臣高經正五位下以帝幸其別墅故有此加焉○さる事にけなくは然る事似つかはしからずなり眞字本になま翁の云々とあり○大鷹の鷹飼は眞字本に大方の云々とあるはわろし○西宮記に鷹飼王卿大鷹飼者着地摺獵衣綺袴玉帶鷂飼者云々とあり○すりかり衣の云々後撰集に鶴のかたをぬひて云々異本には鶴のかたをつくりて云々眞字本には袂に鶴をぬひて書付ける

中將也ける翁とありよろしされと中將也ける翁はかの翁とありてまし上にかり衣のすそを切て歌を書てやるといふににたり○翁さひ云々の歌の意は老たる我か摺衣きて鷹のすさひするを人はとかむへからずたゞけふ計りそ鶴もなくなりといふ意也此歌後撰集に有て仁和帝さかの御時の例にて芹川に行幸し給ひける日在原行平朝臣さかの山行幸絶にし芹川の千代の古道あとは有けり鷹飼にて狩衣の袂に鶴のかたをぬひて書付たりける歌翁さひ云云行幸の又の日致仕の表を奉りけるとありかゝれは行平卿の歌なるを此物語にては業平朝臣を合めてかけり○おほやけの御けしき云々さもあるべき事也此とき天皇も五十七歳にならせ給也○すりかりきぬは上にいへり○おのかよはひを云々以下記者の詞也

むかしみちの國にて男女すみけり男みやこへいなむといふ此女いとかなしうて馬のはなむけをたにせむとておきのゐてみやこしまといふ所にて酒のませてよめる

「おきのゐて身をやくよりもかなしきは都しまへのわかれなりけり

うまのはなむけは上にいへり○沖の井都島ともに陸奥の地名也○おきのゐて云々の歌は古今集物名燠歌におきのゐみやこしま小町とあり小町集にはゐての島といふ題にて三の句わひしきはとあり沖は燠せかねたり和名抄に燠唐韻云猛火也和名於岐比とあり意は燠火をゐて身をやくよりも君か行都と我のこるしまへとのわかれは悲しと也異本にはこゝにとよめりけるにめてゝとまりにけりとあり

むかし男すゝろにみちの國まてまとひいにけり京に思ふ人にいひやる

「浪間よりみゆる小島の濱ひさき久しくなりぬ君にあひ見て何こともみなよく成にけりとなむいひやりける

すゝろは不覺不意也上にいへり○浪間より云々の歌は萬葉集に浪間從所見小島之濱久木久成奴君爾木相四手とあるを結句をすこしかへたるなり歌の意は下の句にありて明らか也上の句は久しといはむ料也ひさきは和名抄に楸比佐木木名也とあり○何事も云々きこえかたし詞脱たるか眞字本も心ゆ

かすさま〴〵にたすけいふ説あれどかなはす
むかしみかと住よしに行幸し給ひけり
「我みても久しくなりぬ住吉のきしの姫松いく代へぬらむおほむかみけきやうし給ひて
「むつましと君はしらなみ丶つかきの久しき世よりいはひそめてき

こはいつれの天皇ともしれず物語なれば强て定むべからず契冲師の業平にあづからぬことをこ丶にのすべきやうなしといはれつるは古學再興の博識に似合ざる小量也○われ見ても云々の歌は古今集に三の句すみのえの云々とあり吉を延とよむは古言なり此歌のもとは萬葉集に昔者之事波不知乎我見而毛久成奴天之香具山とある詞をとりてよめる也歌の意は明らか也○おほむかみは大御神也○けきやうは現形也この住吉神は伊弉那岐命筑紫の日向の橘の小門の檍原にて御みそき給ふ時生れ給ひし底筒男命中筒男命表筒男命を祀りて住吉三前の大神といふ續古今集に袖の海や檍か原の潮路よりあらはれ出し住よしの神これに神功皇后をあはせて住吉四所の明神といふ延喜神名式に攝津國住吉郡住吉坐神社四座並名神大月次相嘗新嘗この四座の中にていつれの御神けきやうし給ひつらんおぼつかなけれど四座なる事をしらぬ記者のしわざなればとかむへからず○むつましと云々の歌いと〳〵つたなくととのはぬ歌也さるを新古今集に載られて伊勢物語に云々といふ左注ありわらふべし奥義抄袋草子などに二の句君はしらずやとありさてみつかきはいつれの神社にも有物なれは瑞垣をよまむこと難なきを瑞垣の久しき代とつ丶けよめるは萬葉集に未通女等之袖振山乃水垣之久時從憶寸吾者とあるにて大和國山邊郡石上布留御魂神社は瑞垣宮御代に御造營ありし故に袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ云云とよめる也住吉神社は神功皇后の御時に祀られしよし日本書紀の皇后御紀にありて瑞垣宮御宇崇神天皇御紀にはなし其所に心つかずしていつれの神にもいへる事なれば地名の瑞垣と社頭の瑞垣とひとつに思ひたる記者の麁忽也顯昭古今秘注に物語古本とて引たるにむつましと君はしらすや云々此歌を聞て在原業平朝臣住よしに參たりけるついてによめる住よしのきしの姫松人ならはいくよか

へしとゝはまし物をとよめりけるに翁のなりあやしげなるがいできてめでてかへし衣たにふたつありせは赤はたの山にひとつはかさましものをとよみてきえうせにけり今おもへはおほんかみにてなんおはしけるとありあかたゐ大人の曰萬葉の歌をとなへかへたるを聞てめてゝ現れ給ひしは古歌にくはしからぬ神なるべしといはれたり

むかし男久しく音もせて忘るゝ心もなし参りこむといへりけれは

「玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

音もせて忘るゝ心もなしはきこえす音つれはせねとわするゝ心なしといふ意か〇いへりけれはの下に眞字本には女の字有〇玉かつら云々の歌は古今集によみ人しらすと有六帖には三の句有といへはと有男を玉かつらに比し女を其かつらの還木にたとへたるにて意は明らか也玉かつらのこと上にいへり

むかし女のあたなる男のかたみとておきたるをみて

「かたみこそ今はあたなれ是なくはわするゝ時もあらましものを

女の此のゝ字削去べし眞字本に女の字なきもわろし〇かたみこそ云々の歌は古今集によみ人しらすと有意はあたにうつろひ安き男のかたみを折々の夜かれには見てなくさめしを今は絶果たればこなたにも忘れんとおもへどかたみありて忘れかたければ今はあたかたきなりと也詞にあたなる男とあるあたは仇にて濁音なり歌に今はあたなれとあるあたは敵また怨などにて清音也おもひ混ふべからす源氏賢木に長き世のかたみを人にのこしてもかつは心をあたとしるらむ

昔男女のまた世へすとおほえたるか人の御許に忍ひて物きこえて後程へて

「あふみなるつくまのまつりとくせなむつれなき人のなへの數見む

また世へすとはいまた嫁せさるをいふか後撰集に女に物いふ男二人ありけりひとりに返事すときゝて今一人か遣しけるなひく方有ける物をなよ竹のよはへぬ物と思ひけるかな〇人の御許には貴人なとに忍ひて逢たるなるべし〇物きこえて後云々此

詞とゝのはず玉かつまに物きこえたるを後に聞てなど有べしとあり○程へてはかの男か歌を送る也○あふみなる云々の歌は拾遺集によみ人しらす初句いつしかもとありつくまは文德實錄に仁壽二年二月甲戌授近江國筑摩神從五位下延喜式に筑摩長擇膳部中補之とあり祭る神は宇賀の御魂の神也此神の祭禮には女の男にあひたるその男の數鍋を冠ぬ事なれば其女の冠りたる鍋の數をみてつれなさの程をしらむと男のうらむ歌にて意は明らかなり和名抄に堝奈閉鍋賀奈々閉とあり

堝の圖

むかし男梅つほより雨にぬれて人のまかり出るをみて

「うくひすの花をぬふてふ笠もかなぬるめる人にきせてかへさむかへし

「うくひすの花をぬふてふ笠はいな思ひをつけよほしてかへらむ

梅つほは拾芥抄に梅壺凝花舍也飛香舍北五間四面也○まかりいつるは退出也すべてまかるは下るなりまいるは參入にて上る事也○鶯の花をぬふてふ笠もかな云々の歌の意は梅壺なれば鶯の花をぬふといふ笠もあらば雨にぬれて出る人にきせてかへさむと也催馬樂に青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠古今集に鶯の笠にぬふてふ梅の花をりてかさゝむ老かくるやと○鶯の云々笠はいな云々の歌の意は鶯のぬふてふ花笠はかり侍らし思ひをつけ給へ我ぬれたる身をほしてかへらむとなり今本にほしてかへさむと有は上の歌の結句うつりたる誤なり何をほしてかへすにか後撰集ににくからぬ人のきせけむぬれ衣は思ひにあへす今かわきなん雨ふれとふらねとぬるゝ我袖のかゝる思ひにかわかぬやなぞ

むかし男ちきれる事あやまれる人に

「山城の井手の玉水手にむすひたのみしかひもなき世なりけり

ちきれる事誤れるは約をたかへたる也○山城の井出の云々の歌は六帖並に新古今集に入三の句手にくみてとあり意はたのみしかひもなき世也けりといはむとて上の句はまうけたる也頼に手呑をかけたり袋草子に井出の玉水とてめてたき水ありて行來の人手に結ひてのむと有大和物語にうとねりなる人井手のわたりにて兒女の帶をあたへし事有そは此物語を潤色して作れる也

むかし男有けり深草に住ける女をやう／＼あきかたにや思ひけむかゝる歌をよみけり

「年をへてすみこし里をいてゝいなはいとゝ深草野とやなりなむ女かへし

「野とならはうつらとなりて鳴をらむかりにたにやは君はこさらむとよめりけるにめてゝゆかむとおもふこゝろなくなりにけり

深草は山城國の地名也○としをへて云々の歌は古今集に深草の里に住侍りて京へまうてくとてそこなりける人によみて送りける業平朝臣と有歌の意は明らか也○野とならは云々の歌は古今集に右の歌のかへし也意は君か出行し後深草野とならは我はうづらとなりて君を戀つゝなきをらむさらばかりになりとも君の來給ふ事あらんと也狩に假をかねたり六帖に庭卿は鶉ふすまてはらはせし小鷹手にするこむ人の爲さて和名抄に鶉淮南子云蝦蟇化爲レ鶉宇都良とあり○めてゝは愛また感など也

むかし男いかなりける事を思ひけるをりにかよめる

「おもふことといはてそたゝにやみぬへき我とひとしき人しなけれは

いかなりける云々こはいかなる事ともしれかたければとかくいふべきならねど上田秋成か記者の意をあらはしたる也といへるぞことわりとおもはる○思ふ事云々の歌は新勅撰に業平朝臣として入られたるこそ愚なれ此物語の記者の歌なるをや歌の意明らか也左傳鄭子產謂二子皮一曰人心不レ同譬如レ面焉吾豈敢謂二子面一如二吾面一乎

むかし男わつらひてこゝちしぬへくおほえけれは

「つひにゆく道とはかねてきゝしかときのふけふとはおもはさりしを

こゝちは心中也○つひにゆく云々の歌は古今集に業平朝臣とあり意はつひに一度はしぬる物とはか

ねてしれどもきのふけふのことにてはあらじとおもひしに今はとおとろかるゝと也誰しもかねてかく悟したる事なれども今はに及ておとろくは實の實也契沖師云是誠有て人のをしへにもよき歌也後世の人死に至りてこと〴〵しき歌をよみ或は道をさとれるよしなどをよめる誠しからずしていとにくしたゞなる時こそ狂歌綺語をもましへめ今はとてあらむ時たに心の誠にかへれかし業平は一生の誠此歌にあらはれ後の人は一生の僞をあらはす也云々といはれたりわか鈴の屋大人の曰契沖は法師にも似ずいと〳〵たふとし日本魂なる人は法師ながらかくこそ有けれ漢意の神道者歌學者まさにかくはいはんや契沖法師は世の人に誠を敎へ神道者歌學者は僞をぞ敎ふなる云々といはれたり彥麿云く世の歌學者はみたりに師の僞を尊みて他人をそしるめり我大人は師の誤をも正し給ひて法師にても誠あればあはれみほめ給へり世の學者みなかくこそあらまほしけれ大和物語に水尾帝の御時左大辨の娘のみやす所とていまそかりけるを在中將忍ひて通ひけり中將病ひいとおも〳〵しくわつらひけるをもとのめもありこれはいとしのひてある事なればえいきもとふらひ給はずしのひ〳〵にとふらひける事日々ありけりさるにとはぬ日なむ有ける病もいとおもりて其日になりにける中將のもとよりつれ〳〵といとゝ心のわひしきにけふはとはずて暮してむとやとておこせたりよわくなりにたりとていといたうなききさわきて返しなどもせむとする程にしにけりときゝていといみしかりけりしなむとすることいま〳〵となりてよみたりける歌つひにゆく道とはかねて云々とあり

業平朝臣の傳

三代實錄卷第三十七陽成天皇元慶四年五月廿八日辛巳從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒業平者故四品阿保親王第五之子正三位中納言行平之弟也阿保親王娶二桓武天皇女伊登內親王一生二業平一天長三年親王上レ表曰無品高岳親王之男女先停二王號一賜二朝臣姓一臣之子息未レ預レ改レ姓既爲二昆弟之子一寧異二齒列之差一於レ是詔二仲平行平守平等一賜二姓在原朝臣一業平體貌閑麗於縱不レ拘略無二才學一善作二和歌一貞觀四年三月授二從五位上一五年二月拜二左兵衛權一

古意本の頭書に今の史に略無二才學一とあれど無は有の字を誤れるかとある人いへり業平から人の來りし時鴻臚館へつかはされし事も史に見ゆれば必才學有て且かたち人也けんを思べしとあり

系圖

物語に見えざる御兄弟は略く

四十九代〇日本根子天宗高紹天皇（御諡號光仁天皇　御父田原天皇御母贈太政大臣紀諸人女橡子）

五十代〇日本根子皇統彌照天皇（御諡號桓武天皇　御母高野御笠姫）

五十一代〇日本根子天排國高彦天皇（御諡號平城天皇　御母內大臣良繼女藤原乙牟漏大后）

五十二代〇神野天皇（御諡號嵯峨天皇　御母同上）

五十三代〇日本根子天高讓彌天皇（御諡號淳和天皇　御母藤原旅子）

賀陽親王（二品治部卿上野太守　御母多治比眞宗女）

伊豆內親王（無品　御母藤原南子）

崇子內親王（無品　御母橘船子）

五十四代〇日本根子天璽豊聽慧天皇（御諡號仁明天皇　御母太皇大后宮嘉智子）

源融（贈正一位左大臣　御母正四位下大原全子）

五十五代〇道康天皇（御諡號文德天皇　御母五條后順子）

五十八代〇時康天皇（御諡號光孝天皇　御母從四位下總繼女澤子）

惟喬親王（四品彈正尹上野太守　御母紀名虎三條町靜子）

慧子內親王（齋院　御母春宮亮足雄女列子）

五十六代〇惟仁天皇（御諡號清和天皇　御母染殿后明子）

怡子內親王（齋宮　御母）

五十七代〇貞明天皇（御諡號陽成天皇　御母二條后高子）

貞數親王（御母在原行平女文子）

阿保親王（一品彈正尹　御母葛井藤子）

高岳親王（御母伊勢繼子）

在原行平（正三位中納言民部卿　母）

在原業平（從四位下右近衛權中將美濃權守　母伊豆(登カ)內親王）

更衣文子

他姓の系圖はそのところ〳〵にあらはせる故に別に出さず

多武峰少將物語考證

提要

多武峰少將物語一名高光日記といへり物語と見えたるは榮花物語月宴卷云只いまあはれなる事はないしのかみのおほむるはからの高光少將と聞えつるはわらは名はまちをさ君と聞えしは九條殿のいみしう思ひ聞え給へりし君中宮のおほむことなともあはれにおほされて月のくまなうすみ登りてめてたきを見たまひて「かくはかりへかたく見ゆる世中にうらやましくもすめる月かなとよみ給ひてそのあかつきに出給ひて法師になり給ひにけり帝もいみしうあはれからせたまふ世の人もいみしくをしみ聞えさす多武峰といふところにこもりていみしくおこなひておはしけるにみつはかりのをむな君のいと／＼うつくしきそおはしけるそれそ猶覺しすてさりけるたふの峰まて戀しさはつゝきのほりけれはは丶君の御もとにそれによりてそおとつれ聞え給ひけるかのちこ君も屛風のしのをとこを見てはて丶とてそこひ聞え給ひけるこれば物語に作りて世にあるやうにそきこゆめるあはれなることに此事をそよにはいふ云々とあり日記といへるは仁和寺書目錄に高光日記一卷としるせりこのふみは應和元年（村上帝）十二月五日高光の少將横川に登られしより同二年夏の頃までをしるせるなりされとみつからか丶れつるにはあらて其頃したしくつかうまつりたりし家の子ともなとのかきしるせるなるべし

いてや此ふみの實記なる證をひとつふたついはむそも／＼高光の少將は藤原系圖本朝遯史大日本史等に從四位の下にてひえに登られしよし見ゆるはあやまりなり歌仙傳に天德五年正月七日敍從五位上云々とありて作者部類にも五位の部にのせ猶この物語の中にはの／＼とあけの衣をけさ見れは云々といふ歌あるにても四位にいたらさりし事論をまたす又新勅撰集雜三に少將高光橫川に登りて出家し侍りける時ふすまてうしてたまはせける御歌天曆中宮（師輔一女安子）露霜のよひあかつきにおくなれは云々とありそはこの物語に依式部卿（重明親王）の北のかた（師輔二女登子）とあるを天曆中宮とあやまりてえらひのせられたるなりけり

巽　同

今この本書に校合せる本は群書類從本に桂園翁の藏本となりその異同を皆もらさすかたへにあけつ墒としるせるは類從本イとしるせるは翁の藏本なりさてこのふみ其昔應和のころよりは八百六十年あまりを過しきつれは今本いつれも異同錯亂誤字脱文衍字もまたすくなからすされはそか錯亂の見過しかたきをのみこゝかしこたゝしあらためつれと猶今本のあやまれる次第を其所々にことわりおきつこはさかしらに似たれとひと文字をたになほしあらたむることなし猶みたりかはしき所々いとすくなからねとそをあらためむは古書をそこなへる罪なるへけれはさなからおきつ見む人かたふく事なかれ

本傳

高光少將の事は九暦蜻蛉日記榮花物語撰集抄大鏡藤原系圖歌仙傳作者部類本朝遯史扶桑隱逸傳大日本史多武峯略記談峰緣起便蒙本朝通紀等に見えたれとこれにあけたるはかれにもらし彼にのせたるは是にははふきなとしていつれを引てもことたらぬのみかはかみにいへることく諸傳に從五位上とあるを從四位下とあやまり撰集抄には少將を宰相とさへ誤られつれは皆はふきて正しきをのみいたせり

榮花物語月宴卷云たかみつ少將と聞えつるはわらは名はまちをさ君と云々　歌仙傳云從五位上守右近衛少將兼備後介藤原朝臣高光（九條右大臣師輔公八男母延喜皇女雅子内親王）天暦二年八月十七日昇殿（九暦作十九日）九年十一月廿二日叙從五位下（中宮御給）十年三月廿四日任中務侍從天德二年正月十九日昇殿閏七月任左衞門佐四年正月廿五日任右近衛少將五年正月七日叙從五位上同月兼備後權介應和元年入道號多武峯少將法名如覺卒年不詳　多武峰略記云如覺禪師者九條右大臣藤原師輔八男母延喜帝皇女前齋宮雅子内親王也如覺俗曰從五位右少將藤原高光巧詠和歌多入撰集一旦悟世虛僞應和元年十二月五日詣叡山横川禮增賀上人出家受戒同二年八月登多武峰修常行三昧從增賀受胎金密法聞摩訶止觀等後結草庵居名曰極樂房左右唯儒釋典籍麻衣葛屨而已正暦五年三月十日沐浴淨衣端座合掌向西方唱彌陀寶號書偈曰比來修行念佛業常願西方極樂界臨終夕初見三聖賢愚莫疑淨土致矣投筆遷北また談峰緣起便蒙云康保四年丁卯八月十五日己時化とあるは誤りなりさてもとよりこのふみに註釋せむの心さしありけれと兎角只見

すくしゝゑ此秋すゝしき風と共に思ひ立て書ともこれ彼見合せつゝかきつくるになほいはまほしき事とも日毎にかすまさりゆきてかき盡しつやうあらねとかの落葉のたとへもあれはしひて筆をとゝめつるにこそ

文政七年といふとし霜月二日松園のやとりに

丸林孝之

しるす

多武峰少將物語

本よりかゝる御心ありけれどちゝ（師輔）おとゞおはしけるほどは

頭註云　公卿補任云藤師輔太政大臣忠平第二男天暦元年四月廿六日任右大臣九年二月十七日叙正二位天德四年五月四日薨號九條右相府

せい（制）し聞え給ひければ

頭註云　廣韻云制征例切禁制又斷也止也云々

えおほしたゝざりけれどうせ給ひて後はら〳〵の君たちはみな

頭註云　重之集云みちの國のかみはら〳〵の子とも男女かうふりし裳きすまたはかまもきす云々

ころ（頭）とおはしませばおとゞおはしまさねども殊にものしき事もなし

頭註云　大和物語云女おとろきて人もなしと思ひつるに物しきさまを見えぬる事と思ひて物もいはすなりぬ云々　宇津保菊の縁云いとものしと思ひたりつるなかに云々

この尊(雅子)宮の御はらの女君(愛宮師輔五女)はまだともかくもなくておとゞのかしづき給ひしにかゝりておはせしにさもあらねば只この御せうと(兄)たちをむつましき物にかたらひ聞え給ひて世中のあはれなる事をおぼしゝを見たてまつり給ふを

頭註云　一代要記云延喜皇女雅子内親王承平元年二月爲伊勢齋後配右大臣師輔天暦八年八月廿九日薨寛平后宮歌合「空蟬のわびしき物をなつ草の露にかゝれる身こそありけれ宇津保俊蔭云まろか妻らするものにかゝりたまへる母もち奉りたり云々かた時みたてまつらではえおはしますまじけれと本よりかゝる御心ありけるうちに御めのとおはしけれど

頭註云　土佐日記云人のはゝひと日かた時もわすれねはよめる　後撰雜二讀人不知「思ひねのよな〳〵夢にあふことはたゝかた時のうつゝともかな

それはさとずみにてことなる事もなくてよろづの事心ぼそくおぼえ給ふまゝに

頭註云　蜻蛉日記云さとずみをしてまたかゝるめをみつるかなとはかりいひて云々

只この事のみ御心にいそがれ給ひつゝいで給ふたびごとには女君(師氏女高光室)にほうしになりに山(比叡山)へまかるぞと聞え給ひけれはれいの事とたはぶれにおぼしてなむ聞え給ひける

頭註云　このころのならはしにて比叡山を只山とのみいひしなりその例左にあぐ
古今離別云山に登りてかへりまうてきて云々
同云うりむ院のみこの舍利會に山に登りてかへりけるに云々　大和物語云かいせうといふ人法師になりて山にすむ間に云々

誠にこのたびはと聞え給ひければれいのよさりは歸りたまへらむをこそは法師歸るとは見めと聞えてわらひ給ひければ

頭註云　伊勢集云よさりつかたかへらせ給ひなむとしける折に云々　伊勢物語云よさりこのありつる人たまへとあるしにいひければおこせたりけり云々　法師かへるとあるは此ころのことわざなるへけれと其(の據イ)よしはしりかたし

まことになりときこえて出たまひければ女君(高光室)法師にならむと侍るは我をいとひたまふなめりとて「あは

れとも思はぬ山に君しいらばふもとの草の露とけぬべしときこえ給へば高光の少將のきみ「わ（高光）がいらむ山のはになほかゝりなむ思ひないれそ露もわすれじと申給ひて

頭註云　續後撰雜下云少將高光かしろおろしにひえの山に登るよし申て出けるをいつものならひにおもひて我をいとふゆへにやとうらみてよみ侍りける　大納言師氏女「あはれとも思はぬ山に云々

後撰春中　藤原朝忠朝臣「ときしもあれ花の盛につらけれは思はぬ山にいりやしなまし　六帖二「紅葉見に君におくれてひねもすに思はぬ山を思ひつるかな

あい（愛）宮の御もとにまで（詣）給ひてたちながら（いて給へは塙有）もの聞えむとのたまひければ

頭註云　藤原系圖云愛宮右大臣師輔第五女

大鏡四云三君は西宮殿の北の方にておはせしを御子うみてうせ給ひにしかは君たちの御ためあしかりなむとてまた御おとうとの五にあたらせ給ふ愛宮と申にうつらせ給ひにき云々

なごえのぼり給はぬと聞え給ひければなみだもいでたまひければいそぎものへまかるど聞え給ひて

頭註云　古今秋上云物へまかりけるに人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる

ことなることもきこえ給は（イ有）で出給ひてひえに登りたまひて

頭註云　いてたまひて云々この六字原本塙本ともに脫せり今はある方まさりたれは異本によりておきなふ

御おとう（尋禪）とのおはしけるむろ（室）におはしてとうせんじ（深覺）の君をめしてかしらそれ（剃）との給ひければいとあさましくてぜむじの君などかくはのたまふ御心かはりやし給へるとての給ふまゝになき給ふそれ（剃）とのたまふ阿闍梨もなきてうけ給はらざりければ御もとゞりを手づからかうぞり（剃刀）してきり給ひにければいかゞはせむとて猶ぞ（塙无）そりたまひけるぜむじの君なきまどひ給ひけり阿闍梨もいとあさましきわざかな御はらからの君たちもおのれをこそのたまはめと御せうそこ（消息）をだにも聞えあへずなりぬと（ろもイ　ろ塙）なくぜむじ（深覺イ无）の君かう〳〵なむいとにわかにあさましくと京の殿はらにきこえ

給ひければいみじうあさましがりのゝしりければばう内
裏ちにてきこしめしおどろきてけり御いもうとの君な
どもなきまどひ給ひけり女房もなきまとひて物もお
ぼえ給はすあさましきにいさゝかなる物もまゐらで（ろ增）
なき給ひけり

頭註云　天台座主記云第十九權僧正尋禪（諡慈忍飯室座主）治山五年九條右丞相第十男云々永祚二年二月十七日入滅　扶桑略記云寛和元年二月廿五日權僧正尋禪任天台座主云々　古今雜下云ひえの山のふもとなりければ雪いと深かりけりしひてかのむろにまかりいたりて云々　增基熊野紀行云さて人の室にいきたれは云々むろのあるし云々　仁和寺諸院家記云深覺大僧正（九條右府幸師輔息寛忠僧正入室寛朝僧正付法如意輪持者有靈驗）東寺一長者石山座主東大寺別當長久四年九月十四日入滅　古今誹諧なかき「雲はれぬあさまの山のあさましや人の心をみてこそやまめ伊勢集云あさましくいみしくかなしくて云々　和名鈔毛髮類云鬐（附鬉）唐韻云鬐（音計和名太止々利）鬣也四聲字苑云鬉（音宗和名美豆良一云訓上同）屈髮也　落久保物語云もとゝりはちりはかりにてひたひははけいりてつやくヽとみゆれは云々　枕草子云翁のもとゝりはなちたる云々　和名鈔僧房具云玄弉三藏表云鐵剃刀一口剃刀（和名加美曾利）宇津保たつの村鳥結ひつる初もとゆひはたえぬれとかみそりをたにあらせさらめや　落久保物語云かうそりわきにはさみてもたり云々　かうそりはかみそりの音便也　催馬樂淺水歌　世宇會己之止不良比爾久留也沙支牟太知也　駱賓王詩集云三鳥聯翩報二消息一云々　貫之集云うちのおほせにて歌よませたまふ云々　後撰戀三云うちに參りてひさしうおとせさりけるをとこに　韻會云内奴對切天子宮禁謂二之内一漢制二天子內中一曰二行內一行内猶二禁中一也云々

宰（謙德公）相中將君をはしめたてまつりておどろきとぶらひ
きこえ給ふ。

頭註云　公卿補任云藤伊尹右大臣師輔第一男天曆九年七月廿七日任左近權中將天德四年八月廿二日任參議（左近權中將如元）天祿二年十一月二日任太政大臣叙正二位三年十一月一日薨同五日贈正一位諡曰謙德公

山にみな登り給ふとてよなかにぞおはしけるおはし（イ壻无）
たまひたりけりときこゆる人ありければうちおき給（ろ補）
ひて見參らせ給ひての給ふ「あはれなるなにはおふ

やとみつれどもかたちはことにあればかひなしかたちもことになり給へりときけど其すぢ（筋）にはあらねばあはれにもあらずときこえ給ひけるをその北のかた（師氏女高光室）見たまひて「あふ事（高光室）のかたちはことになれりともところだにはあはれなりなむと聞えたまひければ其御かへし（高光）「もとむともかひやなからむたぐひなくあはれにありし君が心にとのたまひつゝをりふしごとになき給ふをうけ給る人殊にあはれがる

頭註云　今本ことにあはれかるとあるより後の三月はかりと云々へ續く

さてかの桃ぞのゝ姫君（師氏女高光室）少將の御袖に涙のかゝりぬれたりければ「ほの〳〵とあけ（明緋チカヌ）の衣をけさみれは草葉か袖は露のかゝれるはき給ひし御はかし（佩刀）のまくらがみなるを見給ひてもなき給ふさぶらふ（る塙）ひと〴〵上下かの御身（高光）より涙のながれ出ぬときこえ給ひければひめ君（師氏女高光室）「津の國のほりゑにふかく物思へば身より涙もいづる成らむひと〴〵北の方（師氏室）に聞え給ひければあはれがりたまひて「ともすればなみだをながす君は猶みをすみがまかこ（の塙）まもたえせぬ（本ノマヽ）

頭註云　衣服令云五位淺緋衣云々　後撰雜一云藤原さねきか藏人よりかうふり給はりてあす殿上まかりおりなむとしけるよさけたうへけるついてに

兼輔朝臣「ぬは玉のこよひはかりそあけ衣あけなは人をよそにこそ見め　同小野よしふるの朝臣にしの國のうてのつかひにまかりて二年といふとし四位にはかならすまかりなるへかりけるをさもあらすなりにけれはかゝる事にしもさゝれける事のやすからぬよしをうれへおくりて侍りけるふみの返事のうらにかきつけてつかはしける　源公忠朝臣「玉くしけふたとせあはぬ君か身をあけなからやはむらむと思ひし　寛平后宮歌合「秋の野の草のたもとか花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらむ　夫木集八知家卿「いまも猶くさのま袖にかくろへてあらはに見えぬ野への姫ゆり　書紀景行紀訓註云御刀此云彌波迦志（ミハカシ）　宇津保藏開云宮の御まくらかみに御はかしそへておきつ云々　落久保物語云これをたにもたまへらさらましかはといゝひてかきのこひて枕かみにおく云々　書紀仁德記

云十一年冬十月堀二宮北之郊原一引二南水一以入二西海一因以號二其水一曰二堀江一云々

また少將の常に見給ひし御かゞみをひめ君（師氏女高光室）見給ひて法師（高光）は鏡はみぬかとてかはしきの下にいれ給ふ「常にみし鏡の山はいかゞあるとかたちかはれるかげもみよかし山にもて參りたる御ふみにいとあはれおほかる御かへりに「かゞみ山君がかげもやそひたるとみればかたちはことにぞ有ける

頭註云　摩訶僧祇律卅三曰佛言從レ今已後不レ聽照レ鏡鏡者油中水中鏡中不レ得レ得レ好故照レ面自看若病瘥照レ面自看レ病瘥不瘥若新剃頭自照看二淨不淨一頭面有レ瘡照看無レ罪爲レ好故照レ鏡越毗尼罪是名二鏡法一云々

たれも〳〵かの姫ぎみの御なげきをあはれがり給ひけり」

頭註云　今本あはれかり給ひけりとあるより後の桃その丶ことに聞ゆるにと云々へつゞく

かくてかの桃ぞの丶權中納言（師氏）殿の中將の君まゐト中宮（安子）よりはじめたてまつりておどろきとぶらひ聞え給ふ中に心めのと丶愛宮（師輔五女）となむ物もきこしめさすなきまどひ給ひけるかくいひていふかひなくて月ごろになりぬ女君（師氏女高光室）にはあまになりなむとなきたまひけりあい宮の御もとになむつねにかなしき事をもかよはし給ひ（も塙）けるあまにはこ丶にもとなむ思ふたまふるひとたび（ひ塙）になり給へと愛宮の女ぎみの御もとに聞え給ひければあまには誰もなるともおなじ山にはいらざらむこそかひなけれど

頭註云　公卿補任云藤師氏太政大臣忠平第四男天暦九年二月七日任權中納言康保元年正月七日叙正三位天祿元年正月廿七日任大納言同七月十四日薨號桃園　藤原系圖を考るに師氏男親賢近信保信いつれも四位にいたりし人なれば中將の君は此三人の内なるへけれと詳に知かたし　本朝女后名字抄云藤原安子　村上后　冷泉圓融御母師輔大臣女云云　榮花月宴云天德二年七月廿七日にそ九條殿のにようこきさきにたゝせ給ふふちはらの安子と申て今は中宮と聞えさす云々扶桑略記云應和四年甲子四月十五日中宮藤原朝臣安子於二主殿寮一崩　元直集「住吉のきしのしら波そてひちて今はいふか

ひなくそなりぬる落久保物語云いといふかひなきことをもしたるかな云々、土佐日記云おきな月ころのくるしき心やりによめる　後撰春下云あひしりて侍りける人のもとより月ころはいかゝにそ花はさきたりやといひて侍りければ云々

（横川）よかはのふもとまでだにと思ふたまふるにそれもかたくやかく聞ゆる「いづくにもかくあさましきうき（の塙）（横川チ兼）よかはあなおぼつかな誰にとはましとあいみやに聞え給ひければ女君あまにと思ひたまへ（もふ塙）れば（塙无）「やまちしる鳥に我身をなしてしが君かくこふとなきてつぐべく

頭註云　山路しる鳥とは古今春上に「をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かなとある故に呼子鳥を山路しる鳥とかりに名つけしなるへし君かくこふといふは郭公を兼たり郭公はかくこうの假字なれはかなたかへれと拾遺物名に紅梅をこをはいかてかうまむとすらむとよめるも紅はこうの假名なるをこをといひ又この物語のうちに生老を兼たるたぐひはやく此頃は假字のみだれそめたるなりさて郭公は今はほとゝぎすの事とのみすれと埤雅釋鳥篇に鳲鳩秸鞠一名摶黍今之布穀江東呼爲郭公とありて今の呼子鳥のことなること明らけし　今本君かくこふとなきてつくへくとあるより後のかくてあい宮の御もとよりと云々へ續く

兵衛の（爲光）佐の君にぞたうの（高光）少將君の御かはりに少將になり給ひて

頭註云　公卿補任云藤爲光右大臣師輔第九男天德三年正月廿六日任右兵衛權佐應和二年正月廿三日任右少將永祚元年十月十四日叙從一位正暦二年九月七日任太政大臣三年六月十六日薨謚號恒德公

よろこびにこの中納言（師氏）殿にまゐり給へるをみ給ひて（爲光）もまたせきやりがたき御けしきなり中のきみ少將は（高光）山の君のかはりかとて「たがはずやおなじ三かさの（新勅撰それとみる集）山の井のみづ（かけ集）にもそでをぬらしつるかな（のぬれまさるかな集）きたのかた「たかふこととすくなきみにはあはれなるみかさの（ろイ）君がかはりと思へばこのいかを（爲光幼名歟）少將もおもひいで給ひて涙のこさでぞおはしましけるつかさもことにうれしからずとぞの給ひける兄君（高光）のなりいで給はむし

りに立てありかむとこそ思ひしかよろこびにありかむ事のかなしき事との給ひけれどいかゞはせむとぞありき給ひける

頭註云　中の君云々藤原系圖を按に雅子内親王の御はらは高光爲光尋禪等也この男子三人の中の君なれはかくいふなるへし　新勅撰雜三云おなし時恒徳公兵衞の佐に侍りけるかはりの少將になり侍りてよろこひに大納言のもとにまうてきてはへりけるを見てよみ侍りける　大納言師氏女「それとみるおなし三かさの山の井の云々後撰戀三云少將眞忠かよひ侍ける所をさりてこと女につきてそれよりかすかの使に出たちてまかりけれは　もとの女「空しらぬ雨にもぬるゝ我身かなみかさの山をよそに聞つゝ拾遺雜賀云おなし少將かよひ侍ける所に兵部卿致平の見てまかりて少將の君おはしたりといはせ侍りけるを後に聞てかのみこのもとにつかはしける藤原義孝「あやしくも我ぬれ衣をきたる哉三笠の山を人にかられて奧儀抄異名部云中少將みかさ山云々　伊勢物語云　男歸りにけり女いとかなしくてしりに立ておひゆけとえおひつかて云々　漢書谷永傳云臣永幸得以愚巧之材爲大中大夫備拾遺之臣從朝者之後云々

かくて近衞つかさの人きてうたひのゝしれど何のうれしけもなくてしほたれ給ひける「名に立るみかさの山にいりきてもなみだの雨になほぬるゝかなかへしうけ給はる人のきこえける「みかさ山あめはもらじをいにしへの君がかざしの露にぬるゝぞ

頭註云　延喜齋宮式忌詞云哭稱鹽垂云々　大和物語云みかとのゝしりあはれかり給ひて御しほたれたまふ云々　萬葉二泣涙霈霂落者云々貫之集「君まさぬ春のみやには櫻はな涙のあめにぬれつゝそふる　詩邶風云瞻望弗及泣涕如雨云々

桃ぞのゝ中納言の君(師氏)しろかねの花がめをよつはかりつくりて其ころのはなさして山にたてまつり給ふとて「山のははかくしもあらじ君がため都の花はをれば袖ひつ御かへり　我ために君がをりける花みればすむ山のはの露に袖ぬる

頭註云　古今春上云花かめにさくらのはなをさゝせたまへるをと云々　源氏鈴蟲云しろかねの花がめにたかくことく〳〵しき花の色をとゝのへて奉れ

り云々　萬葉十二　戀君吾哭涕白妙袖兼所漬爲便母奈之

さてこのはなゝど君たち皆聞え給ひてみな登りて見給ふ念佛堂には此かめに花立てなむおこなひ給ひける

頭註云　佛說華聚陀羅尼呪經曰若復有人於如來滅度之後行於曠路見於如來塔廟若善男子善女人能以一華若一燈燭云々欲使此人墮三惡道百千萬劫終無是處

殿上の君しか〳〵とにうだうの君（高光）にかたり給ふある殿上人「水（空墧）にすむ物といふとも君ともにかめさへ登るみ山なりけり同殿上人「よかはてふ名にはたてれど今よりはかめ山（蓬萊山）とこそいふべかりけれまた「あはれなる君がよはひ（齡）をゆづりてぞよかはにかめもたちのぼりけるかへしせじのきみ（深覺）「ひさしくもなにか我（はイ）身（イ死）を思ふべきかめのいのちは君にまかせむ

頭註云　拾遺別　戒秀法師「かめ山にいくくすりのみありけれはとゝむるかたもなきわかれかな

奥儀抄云かめ山とよめるは蓬萊なりかめの背にある山なれは云なり　史記始皇本紀云海中有三神山名曰蓬萊方丈瀛洲僊人居之云々　雜言奉和刑部大輔平有相龜齡祝著藏家算萬歲同供相國遊六帖三「大井川ゐせきにふせる龜山の命のかきりあひみてしかな　今本君にまかせむとあるより後のまたおせち殿よりと云々へ續く

三月ばかり鶯なきければ北のかた（師氏女高光室）我身にも世をうぐひすとなきを（け塙）れど君がみ山にえこそかよはねあね（師輔三女）北の方の御かへしこの間脫文

頭註云　古今戀五讀人不知「我のみやよをうぐひすと鳴わひむ人のこゝろの花とちりなは續古今哀傷延喜御歌「春ふかきみ山さくらもちりぬれはよをうくひすのなかぬ日そなき藤原系圖云右大臣師輔三女左大臣高明室この所諸本闕たれはしりかたし

ともげに誰もおなじやうにしりたまはざらむをなむおなじうきよかはとおもふたまふべきうからねばこそ登りおはすらめと山にてもといふ事あらばとなむ聞えまほしきを

頭註云　古今雜下みつね「世を捨てやまにいる人

山にてもなほうき時はいつちゆくらむ
このかみもこのよをそむきてあはれなる人のすみた
まふらむよかはを渡りて御影を（イ无）だにみるましくとも（に塙）
猶そむきてもおこなひ侍まほしきを宮（安子）にもしかぞま
た思しめすなる御（りイ）ともにもと參きいもうとをみずば
といふ事もなきにこそは誠にや（なれイ）誰にとはましとかす
み給ふ人にこそとひ聞えめうからねば（横川チ兼）こそ「ながれ
（くイ）ても君すむべしと水の上にうきよかはとも誰かとふ
べきとなむ聞え給ひける常にこのふた所かなしうあ
はれなる事となむ聞えかはし給ひける
頭註云　今本聞えかはし給ひけるとあるより前の
　かくてかの桃その（師氏室）丶と云云（高光）へつ丶く
さて中納言殿の北の方この君の御そうぞくけさ（袈裟）より
はじめてひとくだりせさせ給ひてこれ山へたてまつ
りければ山へ奉り給ふ
頭註云　和名鈔僧房具云袈裟東宮切韻釋氏云袈裟（袈裟二音俗云佐介）天竺語也此云無垢衣又功德衣孫愐曰傳法衣
　即沙門之服也
衣
この御ぞどものいとあはれなればわすれては誰がこ
とぞとおぼめかれつる「君がきしきぬにしあらねば（新古今）
墨染のおぼつかなさに鳴てたちつるなほ／＼（一おく）（集无）
山の苔の衣にくらべ見よいづれか露のおきはまさる
（とも集）となむ聞え給ひけるうへの御ぞよりはじめてすみ染
（る塙）なり只あはせの御はかまぞかいねりなりける山の御
かへりやまぶしはこけのころもなどのみこそ身には
そひたれこれは身にもあはぬ物どもなれど御こ丶ろ
ざしある物どもにてなむたまはりぬるむかしのきも
のにもあらねばやおぼめいたまひつらむ今よりなら
ひ給へかしわいてもこと人のころもかへやし給ふら
むあたらしく袖ぬれぬぬぎ給はゞもとの色わすれ給
ひなむ
頭註云　拾遺戀一讀人不知「いかてかとおもふ心
のあるときはおほめくさへそうれしかりける
枕草子云露おほめかていらへたまへりしかは云々
　延喜彈正式云橡白橡墨染云々　新古今雜中　少
將高光横川にまかりてかしらおろし侍けるに法服
つかはすとて權大納言師氏　おく山の苔の衣にく
らへ見よ云々返し如覺「白露のあした夕におく山
の云々後撰雜三小野小町「岩のうへにたひねをす

れはいとさむし苔の衣をわれにかさなむ後拾遺戀
四相撲「我袖をあきの草葉にくらへはやいつれか
露のおきはまさると和名鈔衣服類云楊氏漢語抄云
袍（薄交反和名宇倍乃岐沼一云朝衣）著レ襴之袷衣也　衣服品彙引貞觀儀
式云兵庫立鉦擊人各一人大口帛袷袴執夫四人白布
袴云々　伊勢集云中宮のうせ給へりし時かいねり
こしとてけひゐしのやらむとしければ　家集云あ
る女のかいねりのきぬを十月はかりにくとくにつ
くる　宇津保嵯峨院云山伏のこけの衣をぬきまつ
の葉をつゝみてふかき山よりとふらひはへる云々
　堀河百首永緣「山ふしの苔の衣のうすければ冬
になりぬるけふそかなしき　撰集抄二云きものを
ぬきくれて我身はたゝ合なる物はかりきて歸りに
けり云々

まことやすみ染のきぬはき給ふ（くさゝ）なればにや（よ塙）いとゞぬ
れまさりてなむ「わびぬれば雲のよそにぞ（新古今しら露の集）墨染のこ
ろものすそゞ露けかりける「露霜（さは集）はあしたゆふべに
おく山の苔のころもは風もとまらすとなむ有ける
頭註云　古今哀傷讀人不知「あし引の山へにいま
はすみそめの衣の袖のひるときもなし

さらに京にいでしとぞの給ひけるこれをこの（師氏女高光室）姫君（師輔）愛
（五女）宮おぼつかながりたまふあにおとゝ（兄弟）おこなひなむよ
く〳〵し給ひけるは（雅子）君ちゝ（師輔）おとゞをなむいと〳〵
よくこひ奉りたまひけるあいみやの御もとに桃ぞの
のおほ姫君（師氏女高光室）の奉れ（り塙）給ひける「物思ひのやむよもなく
て程ふればわするゝこともし（本ノマヽ）ひのわかきかたちはき
たるを見ればゐにかきたるさへなむかなしう侍りけ
る
　頭註云　たてまつれ給ひけるとあるれの字はらせ
のつゝまれるれにてたてまつらせたまひけるとお
なしこの歌解かたし按に誤字ありとおほし
けふの御かたちはしらずむかしのみおも影にはみえ
給ふそこにはいかゞとなむ聞えはべるつれ〴〵の御
すまひなればにこそおもひすてられけれ（る塙）しのぶ草う
どからずや御らむずらむこゝにも「ひとりのみなが
むる宿のつまごとにしのぶの草ぞおひまさりけるう
け給はりぬこれよりも聞えむと思ふ給ふれど袖ぬら
すながめにあかしくらすほどにおこたり侍りにける
頭註云　本草和名云垣衣和名之乃布久佐云々　伊

勢物語云忘草をしのふ草とやいふとていたさせ給へりけれは給はりて「わすれ草おふる野へとはみるらめとこはしのふなり後もたのまむくはしくは椎園翁の圓珠菴雜記標註に見えたり　古今戀五さだのぼる「ひとりのみなかめふるやのつまなれ
　は人をしのふの草そおひける

つきせぬ物思ひはいつはてなむと〔塙无〕おやたちにおくれ奉りたるにましてかゝる物思ひのそひて侍ればおぼしやれよもぎのしげき宿に立より給ひてあはれとの給ひし御すがたの見えねば月日のふるまゝにいとあはれに侍る

　頭註云　新撰萬葉下「蓬生荒留屋門丹郭公鳥　侘敷左右丹打蠅手鳴　高士傳中云張仲蔚者常居窮素所處蓬蒿沒人閉門養性不治榮名時人不識云々　南史孔珪傳云懸几獨酌傍無雜事門庭之內草萊不剪云々

かたちことになり給へ〔塙无〕つらむ御すがたをとき〳〵見え給はゞなぐさむよをねたじとの給ふなるこそいとどおぼつかなげれしのぶ草はこゝにもや「しげります忍ぶのうへにおきそふる我身ひとつは露の程にぞ思ひきえなでいきてとなむありける

　頭註云　萬葉十八「保登等藝須伊登禰多家口波橘能播奈治流等吉爾伎奈吉登余牟流　神樂蟋蟀歌「支利支利須乃禰多佐宇禮太左云々　新撰字鏡云悄於緣反平憂皃伊支止呂志又禰太之

さてこの姫きみ〔師氏女高光堂〕にはやうより心かけ聞えたりし人もとぶらひけりそれが聞え給ふなどかこの君を山にいり給ふべく見給ひぬべき事はあらせ奉り給ひしまろこそむかし山ずみはせむと思ひしか人に物思はせたまへりしむくいと思しめせよまめやかに山に住給ふより〔そ塙〕もとまりてひとりねし給ふころいかにねふたからずおぼすらむと思ひたてまつりて「ころたかくあはれといはゞ山彥のあひこたへずばあらじとぞ思ふまた〔よし塙〕ついでとてかへり事し給はずかなしさぞまさりける

　頭註云　後撰戀上云としをへて心かけたる女のことしはかりをたにまちくらせと云けるか云々　古事記中云宇麻良爾岐許志母知袁勢麻呂賀智云々　催馬樂鷹子歌　太加乃己波末呂爾太宇波良牟天爾須惠天云々　風俗知々波々歌　末呂許都太天禮云々

古今誹諧讀人不知「我を思ふ人を思はぬむくひにや我思ふ人の我を思はぬ　後撰戀四云まめやかにしもあらしなといひてはへりければ云々拾遺雜賀天曆御製「さよふけて今はねふたくなりにけり會丹集「入日さしひくらしのねを聞からにまたきねふたき夏の夕くれ古今戀一讀人不知「うち佗てよは〻むこゑも山彥のこたへぬ(耳無)山はあらしとそ思ふまたほどへて「やまとなるみゝなし山のやま彥はよべともさらずあびもこたへずこたへもとりいるゝ人を見まほしとてない給ふ
　頭註云　後撰戀六讀人不知「宇多の野はみゝなし山かよふこ鳥よふこゑにたにこたへさるらむ
京の殿より御ふみにこの頃はいかにおぼすらむこゝには心ぼそきをいとあはれになむこゝには(イ无)此つきなみだとゞめずそこにはおぼすらむをおもひ奉りてあまにならんとさへの給ふなる常はよのなかにさぞおほすらむこゝにぞう(塙无)きよをはそむきはてなむ(と塙)いさやよの中にないしのかみのぬしといふなればかしらおろしてはかう(冠)ぶりとられなむとひとのものすればなむいさゝかうしろのこしてはべるさうじ(清進)をさへし給ふなればわかき人だにふかく物をおぼす(え塙)なれば
　頭註云　大智度論廿九曰若シ身口意ノ業ニ寂滅不動ナル是ヲ爲二大精進一動スル者ハ爲二少精進一云々
こゝにはましてや水風(本ノマヽ)のいもひをせましとなむあまにてもうき世をばはなれずや猶しかなおほしそ「ふねなかす程(脫字)ひさしといふなるをあまとなりてもなが(海布チ衆)めかるてふと聞え給ひける
　頭註云　水風二字こゝろ得かたし按に誤字なるべし竹取物語云このひとゝもの歸るまでいもひをして我はをらむ云々　大和物語云よるひるさうしいもひをしてせけむの神ほとけに願をたてまとへとおとにも聞えす云々　蜻蛉日記長歌「ふねをなかしていかはかりうらさひしかる世のなかをなかめかるらむ云々　源氏榊「なかめかる蜑のすみかと見るからにまつしほたるゝ松かうらしま
御かへしかしこまりてうけ給はりぬいとうれしうつねにとはせ給へるをなむみづからまうさまほしう思ふたまふれど此ころみだりごゝちれいよりもまさりてあやしう侍りてなむながめ侍る「あまとてもみを

しかくさぬものなればわれからとてもうきめかるなりとうけ給はれば思ひもさだめずと聞え給へりまた右衞門佐（忠君歟）中納言（師氏）殿につたへ給へりける

頭註云　大和物語云みたり心ちはまだおこたりはてねといとむつかしう心もとなく侍れはなむ云々

宇津保俊蔭云みだり心ちあしう侍れはみやつかへもしはへらすなん云々　濱松中納言物語云けさはみたれ心ちもなやましうはへるを云々　古今戀五典侍藤原直子朝臣「あまのかるもに住蟲のわれからとねをこそなかめ世をはうらみし　右衞門佐云々按るに忠君歟右衞門佐を經られし事ものに見えされと外に考合へき人なけれは此頃右衞門の佐なりし事論をまたす　藤原系圖云忠君右大臣師輔第五男正四位下右兵衞督安和元年卒爲貞信公子

ついでに大姬ぎみ（師氏女高光堂）の御かたにつたへたまへりけり

「わすれてもうれしかりけるきみかとてたそがれ時はまどはれぞするひるねしておき給へりける程なりけりゑもむの佐（忠君）たちながら聞え侍る

頭註云　躬恒集「五月雨のたそかれときの月影のおほろけにやはわか人をまつ　貫之集「行春のたそかれ時になりぬれはうくひすのねもくれぬへらなり　曾丹集「妹と我ねやのかさとにひるねして日たかき夏のかけをすくさむ　落久保物語云々あなわかく〳〵しのひるねや云々　紫式部日記云戸くちをさしのそきたれはひるねし給へるほとなりけり云々

あやし（て塙）けれともいそぎてうち（內裏）へ參り侍ればなむいか（を塙イ）にともえしは〳〵も聞えたべらず（ふ塙）とていかに世中のたちはきたるさまをもみ給へとてなむきこえたまへる御返いとうれしうたちより給へるをいそぎ給へばなむすがたはたそがれ時におぼつかなくなむ

頭註云　萬葉一「數々毛見放武八萬雄云々　續日本紀天平寶字四年正月癸亥朔詔云掛久毛畏岐聖天皇朝太政大臣止之豆仕奉止勅部禮止數數辭備申多夫仁依豆云々　內へまゐり侍れはなむ云々とありて聞え侍らすとて云々とあるはてにをは心得かたし（と塙）

こゝにはそれにもあはれになむつれ〳〵のながめにすまひさへかはりたればあの人（高光）のかげもみえねば心

ほそきをとはせ給へるなむ聞え給へば
頭註云　伊勢集云いまはあの人はよにもとはしなにかたのみたまふ云々
さらばしづかにまゐらむたちはきたるすがたも見給はむとあらばえ。りく丶つにてもさぶらはむとて出給ひぬみやのこのかみの殿にて人たまへるついでによ うさりつかた月のほのかなるに立より給へりむかしきくやどのありしえにいかにぞや山人はしのびてをり給ふやあいなく「あしひきの山よりいでむ山彦のそまやま水におとまさらなむと聞え給へれば
頭註云　えりく丶つと云々按るに下のく字衍字なるへしこゝは忠君みつからをえりくつにたとへていはれつとおほし　えりくつは宇津保樓の上云みなそのをりのえりくつとそあらむなとの給ふ云々きれとこゝろみにいへるのみ　催馬樂蒹楮歌「安之太爾止利與宇左利止利云々　宇津保菊の縁云ようさりは風にやみゆるとたのみわたる云々　宇津保藤原の君云かくはうけたまはらぬものをあいなうものいはせ給はぬなと聞え給へり云々落久保物語云いとあいなくものしけにおほして云々

いとうれしくたちよりてとはせ給へるをはじめはうれしかりつれども後の御こと葉にさしあやまちていとゞしくさまも見えてとて歌のかへしは聞え給はずさかしらのやうに人もこそきけどこのきむだちはしば〳〵こそあはれがり給ひしか愛宮ぞおぼしやむことなかりける
頭註云　萬葉三「痛醜賢良乎爲跡酒不飲人乎熟見者猿二鴨似　古今誹諧讀人不知「さかしらに夏はひとまねさゝのはのさやくしも夜をわかひとりぬるいま本おはしやむことなかりけるとあるより後のさてこの姫君身をやなけてましと云々へつゞく
かくてあい宮の御もとより聞え給ひける「なぞもかくいける世をへて物おもひをするがのふじの煙たえせぬあはれ〳〵そこにもいかにとなむ思ひ聞ゆる夢にも山の君の見え給ふをりはさめてくやしくなむと聞えたてまつらるれば御かへし「物思ひは我もさこそはするがなる田子の浦波たちやますしてとなむ
頭註云　古今戀一讀人不知「人しれぬ思ひをつね

にするかなるふしの山こそわか身なりけれ　古今
戀一讀人不知「するかなる田子の浦波たゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日はなし
たれもたれも御はらからの君たちこのあい宮のなき
かなしびたまふを聞給ひて
頭註云　萬葉三「問放流親族兄弟無國爾渡來座而（トヒサクルウカラハラカラナキクニニワタリキマシテ）
云々新撰字鏡云昆波夏加夏
あはれがり（重明）聞え給ふ（もゝ塙）ものをきこえておは（ふ塙）しけるときとき（ときく塙）
く故式部卿（登子）の北の方はとき〳〵とぶらひ聞え給ひけ
る
頭註云　一代要記云醍醐天皇第四皇子重明親王三
品式部卿元名將保延喜六年四月五日爲親王天暦八
年九月十四日薨　藤原系圖云登子師輔第二女元重
明親王ノ上後村上貞觀殿尙侍
四月ばかりにうの花につけて「君のみか我もさこそ
は世中をあなうの花となくほとゝぎすかへし「卯花
のさけるかきねにほとゝぎす我はまさりて鳴としら
なむ又式部卿の北のかたも其殿に聞え給ふ
頭註云　古今雜下よみ人しらす「世中をいとふ山
へのくさ木とやあなうの花の色に出にけむ　赤人
集「卯の花のさける垣ねはほとゝぎす鳴てそわた
る人はきゝつや
猶思ふ〳〵ともあさまし山よりもいかにつきせずお
ぼすらむ夢もあらば「あはれなることかたらひて時
鳥諸ごゑにこそなかまほしけれと御かへりかしこま
りてなむいとも〳〵うれしくかく常にとはせ給ふこ
となむつきせぬ事にはいでやいでやすべて〳〵たゞ
おしはからでまことや「かたらはぬさきよりなきつ
時鳥物のあはれをしれりと思へばかくてあせちの大
納言（高明）殿の北の方（師輔三女同五女）あい宮の御もとにこのころはいかゞ
あやしう物さわがしく思ふたまへられてなむしばし
も聞えぬあはれ世中をいかにながめたまふらむ
頭註云　公卿補任云延喜天皇第一源氏天暦七年九
月廿五日任大納言天德二年正月廿九日兼按察使康
保四年十月十一日叙正二位十二月十三日任左大臣
天祿三年十二月十六日薨　濱松中納言物語云また
いと物さわかしくまきらはしきことゝものみ侍り
て云々
こなたにもなどかわたり給はぬ山（比叡山）よりはとぶらひ聞
え給ふやさもこそは世にそむき給はぬ忍びても（も塙）出て

おほむもとにはかたらひきこえ給へかし女のかよふ所ならば（墻元）さてかよはまほしくなむ思へどいまこそあはれなれ

頭註云　叡岳要記上ニ引ニ傳教大師ノ傳ヲ一云ク大師告テ諸ノ弟子ニ云ク命不ニ久存一若シ滅度ノ後チ著ニ衣服ヲ一不レ依ニ佛ノ制戒ニ一不レ得レ飲レ酒若シ爲ニ合藥ノ一不レ入ニ山院ニ一女人勿レ進ニ界地ニ一況ヤ院内ヲ哉

いかにそこにも世中心にかなはぬ折は山へいりぬべき折あれどえやは世中をそむくまかしくあまにならむとの給ふなるまことかゆめしかなおぼそ「うゝみ（尼かの誤）こしそむかまほしきよなりともみるめ（見目の誤）かづかぬあまになるなよ愛宮の御返しいとうれしうとはせ給へるなむ

頭註云　宇津保藏開云まかしきことをきゝみ給ふ人はとに花やかにも見え給はす云々　蜻蛉日記云なにかまかしうこゝになてふとかおはしまさむ云々　古事記上云上瀨者瀨速ト瀨者瀨弱而初於中瀨隨加豆伎而云々　古今戀四讀人不知「いせのあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

つれなるにこれよりこそきこえまほしけれどつねにさわがしうおはしますらむにとぶらはせたまふをよろこびてそなたにもまゐらまほしきを明くれのながめに袖ひちつゝ物おもはぬになむ山よりときときおとづれたまふかしらそり給へらむすがたのみ見給へ（墻元）まはしきに見えたまはぬかうき世中にかへらじとにやあらむとあまにはさもやとおもふたまふれどもさても猶世中にこそおもひかへりこめとおもふたまふればまたおもひたゝ（はの誤）なむ「あまならでそれにもしほはたるれどもうきめかづくとまたや成べき（海布の誤）（は墻）

「　（上十四字脱したるとおぼし）　世にはしりて山路にまどふこゝろもおこ（深覺）うとせじの君「いでゝこし人の家路もおもほえず我み山こそ住よかりけれかくてあい宮の御もとに（愚君）右衞門の佐おはして少將の君おはしつるやうかたり聞え給へば

頭註々　古今雜下在原行平朝臣「わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ　拾遺雜賀云人の國へまかりけるにあまのしほたれはへりけるを見て　古今戀五讀人不知「うき

めのみおひてなかるゝうらなれはかりにのみこそあまはよるらめ　忠見集「おとにきくなるとのもとにかつきてしあまよわひしきめをみするかな

我ばかりうき身はなしをとこはおはしかよひたぶと「山の井のふもとに出てながれなむ戀しき人のかげをだに見むとの給へは

頭註云　古今戀五讀人不知「山のゐのあさきこゝろも思はぬにかけはかりのみ人のみゆらむ

佐ゞ君の御かへし「君かすむ山がは水のあさましくうき世中にながれ出にし桃ぞのゝことに聞ゆるにおとゝ君つねにおはしてあはれがり給ふ御ふみにてもありけり

頭註云　拾遺戀一よみ人しらす「さを鹿のつめたにひちぬ山かはのあさましきまてとはぬ君かな今本うきよのなかになかれいでにしとあるより前のさてかの桃ぞのゝ姫君と云々へ續く

ひめぎみなほよの中こゝろうしあまになりなむとの給ふを聞て小將の君「あまにてもおなじ山にはえしもあらじ猶世中をうらみてぞへむ　かへし「袖浦にみをうしほやくあまなればみるめかづかであらむものかはさてこのひめぎみ山の君のおこなひたまふらむわれいをくはむこそゆゝしけれとて御さうじをぞ猶し給ひける山の君きこしめしてあはれとおぼしてこゝかしこよりをかしきさうじ物まゐらせたるをばときどきたてまつれる袋にかひにおひたるめをはじめていれたりまた四月つごもりばかりにうぐひすのすみつばかりうめすちはかりいれたり「たのみなくはかなく見ゆる我ゆゑに君がながめを思ひやるかなあはれ〳〵ときこゆるかひなくおぼすなまことやさうじしだもふなればしほうらこえぬ山なれど心ざしありておひ出たるめぞやとありうぐひすのおうすちにはかくぞせむとあり「わがすみか君はゆかしくおもほえばあなうぐひすのすのうちをみよ　かへし「こひてねし君なきとこのいは波にこゝのながめに袖のぬれぬるしのびきこゆるかひもありける哉「鶯のすのうちみてもねをぞなく君がすみかはこれかと思へば

剪註云　後撰雜二よみ人しらす「白波のうちさわかれてたちしかはみをうしほにそ袖はぬれにし

摩訶僧祇律三曰根食、穀食、身食、皆名時食何以故時得食非時不得食云々　涅槃經、四曰善男子從今日始不聽聲聞弟子食肉若受檀越信施之時應觀是食如子肉想云々　新撰萬葉下「公丹見汁牟事哉湯々敷女部芝霧之籬丹立隱濫

増基熊野記行云あなゆゝしや云々土佐日記云さうし物なけれはうまの時より後にかちとりのきのふつりたりし鯛に錢なけれはよねをとりかけておちられぬ云々　源氏若菜上云御あるしのことさうし物にてうるはしからすなまめかしくせさせたまへり云々　催馬樂庭生歌「見也比止乃左久留不久呂乎於乃禮加介太利云々　靈異記中云從緋嚢出一尺鑿云々清和實録貞觀十二年三月十六日紀に納緋帶袋云々　この外に袋を用ひしこともものにあまた見えたれとうるさけれははふきつ　拾遺雜春云天暦御時大はむ所の前に鶯のすをこうはいのえたにつけてたてまつられたりけるを見て　うめすちはかり云々この七字解かたし下文を考るに鶯の

あうすちとあれはこゝも鶯のす三つはかりにあうすちはかりいれてと有しをあやまれるかあうすちは和名鈔菓類云漢語抄云鷃實　俗云阿宇之智一曰宇久比須乃岐乃美今按所出未詳　和泉式部集あうすち「こつたひしうめをはおきてこれたにもうくひすのきとひとくいふらむ鷃實をあうすちとかくは實の音しつともしちともいへはじちをずちとかよはしたるなり　山の君きこしめして云々とあるより以下かくそせむとありとあるまて詳解かたし　狹衣一「しきたへのまくらにうきてなかれぬる君なきとこの秋いねさめに　今本君かすみかはこれかと思へはとあるより上十三丁ノ右さて中納言殿の北の方と云々へつゝく

五月ついたちに御はらからの君たちわつご（破子）くしておはしたりけるに雨のふりたりければいしを君（公季幼名歟）「かゝりてふよかは（横川ヲ兼）ともへどさみだれていと、涙に水まさりぬる少納言（兼家）「君がすむよかはの水やまさるらむ涙の雨のやむよなければ右衛門の佐（忠君）「草深き山路をわけてとふ人をあはれと思へどあとふりにけり宮権亮（兼通）

「いづくへもあめのうちよりはなれなばよかはにすめば袖ぞぬれますとなむ富小路の君たちわりごしつつまでたまへり六郎(遠度)君の聞え給ふ世中心うければおのれこそかしらそらむ山へいらむと思ふたまへしかと

頭註云　和名鈔行旅具云樏子 漢語抄云樏子加禮比计今按俗所謂破子其破子讀和利古 樏子中有隔之器也　土佐日記云いまわりこもたせてきたる人云々　いしを行云々按に公季公の幼名なるへし上十丁左に爲光公をいかを少將とあるにても考合すへし　公卿補任云藤公季右大臣師輔第十一男治安元年正月六日叙從一位七月廿五日任太政大臣長元二年十月十七日薨謚曰仁義公　同書云藤兼家右大臣師輔第三男天暦十年九月十一日任少納言寛和二年七月二十二日叙從一位永祚元年十一月廿日任太政大臣正暦元年七月二日薨號東三條　新勅撰雜三云高光よかはに侍りけるにとふらひまかりてよみ侍りける東三條入道攝政太政大臣「君か住横川の水や云々　公卿補任云藤兼通右大臣師輔第二男天德二年十月二十七日兼中宮亮天延二年二月廿八日任太政大臣同三年正月七日叙從一位貞元二年十一月八日薨號忠義公　拾芥抄云一條富小路云々　韻會云郎盧當切男子之稱　藤原系圖云遠度右大臣師輔一六男從三位右兵衛督永祚元年三月廿四日薨號小野三位

おとゝ(師輔)の君のかくしたまはでうせ給ひにしかばつみ深くなると思ふた(へ摘)まへて思はぬやま〳〵にありくこと今に思ひ侍れど君のおは(る摘)すれば御でしにもやなりなましと思ふたまふとの給へばせじ(深覺)の君でしまさりにこそあなれと聞え給へば

頭註云　大和物語云九條のきさいのみやようとねりを御つかひにてやま〳〵たつねさせてまひけり云々　莊子大宗師篇云仲尼曰同則無好也化則無常也而果其賢乎丘也請從而後也

六郎君でしまさりとおぼさばこれよりふかゝらむ山にこそいりはべらめいづくならむとて六郎ぎみ「みやこへもさらにかへらじわがごとくつみふかき山いづこなるらむせじの君の御かへし「これよりもふか(遠量)き山べにきみいらばあさましからむ山川の水四らう君「君をなほ浦山しとぞ思ふらむ思はぬ山にこゝろ

いるめり七郎君(遠基)せじのきみに聞えたまふ「君がすむ山路に露やしげるらむ分つる人の袖のぬれぬる御返し「苔のきぬ身さへそはればそぼちぬる君は袖こそ露にぬるなれおとゞせじのきみ「むかしより山水にこそ袖ひつれ君がぬるらむ露はものかはかくてこの入道(高光)の君御[illegible]におとゞ(師輔)の君出家したまへりし御すがたにてこのよかはにおはしましてなきて聞え給ひける

頭註云　藤原系圖云遠量右大臣師輔第四男從四位上大藏卿右馬頭　藤原系圖云遠基右大臣師輔第七男從四位下左京大夫　寛平后宮歌合「あけぬとてかへる道にはこきたれて雨もなみたもふりそほちつつ

なにをうしとてかくはなり給ひしにかたふとさはいとたふとけれどいとかなしくなむあはれにとひ聞え給へばそれにたすかることもありさはあれどいとくちおしくなむあるなどの給へばなく／＼聞え給ふいとあはれなるすまひし給ひけるをあまかけりてもた(おい)づねとぶらはむかゝりとならはよにたち給ふなとて「君がすむよかはの水しにごらずば我なきたまは常にみせてむ御かへりごと「いとゞしく袖ぞひぢぬるよかはには君かかげみば水もにごらしと聞え給ふ程にやがてさめ給ひぬ

頭註云　書紀景行紀云故時人號是陵曰白鳥陵然遂高翔上天云々　萬葉五久堅能阿麻能見虛喩阿麻賀氣利見渡多麻比云々　出雲國造祝詞云天翔國翔氐天下乎見廻氐云々　赤染衞門集「にごりなき横川の水に君すまはこなたのきしはいかゞわたらむ　拾遺愚草上遠戀「かなしきはさかひことなる中としてなき玉までやよそにうかれむ

こひちかひ給ひて御おとの君にかたら(高光女)ひ聞え給ひてかくなき給ふさてかの入道の君の御子は太刀はきたまへる人を見給ひてはてゝ君かとの給ふにあらずとの給へば母君こそてゝきにはあらずなどかてゝきのひさしく見えざらむとてなき給へば

頭註云　榮花見はてぬ夢云九の宮は(天暦皇子昭平親王)九條殿の御子入道の高光少將多武峯の君ときこえしわらは名はまちをさときこえしか御むすめにすみ給へりける云々　宇津保祭の使云てゝきなとも人になさけなくなりしに云々　母君こそてゝきにはあら

すべてにをはいかゝ
（師氏女高光室）ひめきみよゝとなき給ふ御ぐしかきなでゝ君は山に
ぞおはするとてなき給ふをおほ（師氏）ぢぎみ見たまひての
給ふ「あし引の山なるおやをこひてなく鶴の子見れ
ば我ぞかなしき北の（師氏室）かた「ひえに住おやこひてなく
こつるゆゑわがなみだこそかはとなが（ち墻）るれ母君（師氏女高光室）「澤
水にたつかげだにも見えよかしこゝら子鶴のなきて
こふるにとてなき給ふかくてあはれなることがちに
なむ有ける
頭註云　敦忠集「五月雨のよゝと鳴つるほとゝき
す袖のひろまもなきぞかなしき　六帖四「君によ
りよゝよゝとよゝ〱とねをのみぞなくよゝ
よゝよゝと　遍昭集「たらちねはかゝれとてしも
ぬは玉の我くろ髮をなですやありけむ　宇津保藏
開「こよひよりなかるゝ水のおのがよにいくたひ
すむとみましつるの子　重之集「ちよをすむこつ
るの池しかはらねはおやのよはひを思ひこそやれ
古今春下そせい「こつたへはおのか羽風にちる
花を誰におほせてこゝら鳴らむ　新撰萬葉上「作（ヘル）
春年者暮南散花絡將惜砥哉許々良鶯之鳴（ハルトシハクレナムチルハナヲヽシトヤコヽラウグヒスノナク）
たちはきたる人みてもこはやてゝきなどはゝき（し墻）いも
とこにおはせぬわれをいだき給はぬとてなげき給へば
（墻元）男君「あふことのかたきもしらずうちになくひな鶴
みるぞかなしかりける北の方「あふ事のかた（みイ）くとて
だになぐさまでわらはなきにぞ我もなかるゝおほぢ
君「かたにてもおやに似たらばこひなきになくを見
るにぞ我もかなしき
頭註云　公任卿「ひな鶴をすたてし程に老にけり
雲ゐのほとを思ひこそやれ　宇津保國讓「雲井よ
りかへりて見れは古里の今ひなつるそまちみきり
けり　今昔物語卷廿五云童泣ニ泣事ハイト鳴呼ナ
ル事ニハ非スヤ云々　元良親王集詠人不知「なか
なかにとふひの杜のほとゝきす君こひなきは夜半
にこそなけ　今本我もかなしきとあるより前の兵
衛の佐の君にぞと云々へつゝく
さて此ひめぎみ（師氏女高光室）をやなげ（き墻）てましとおぼせごきむ（高光女）た
ちのおはしければわれなくてはいかゞせむとおぼし
て山に閉え給ふ世をのがれだになくはいかゞせむと

おもふにすこし露の命をもとめいづる(イへ)「君やうゑし我やおほしゝなでしこのふた葉みつばにおひたるを風にあてじと思ひつゝ花のさかりになるまでにいかでおほさむと思へども露の命やあへざらむ今もけぬべきこゝちのみ常にみだるゝたまのをも絶ぬばかりぞおもほゆるものゝかずにもあらぬ身を只ひたへにてあさましくあまたのことを思ひ出て君をのみ世にしのぶ草山にしげくぞおいのよにこひてふこともしらぬ身もしのぶる事のうちはへてきてねし人もなきとこの枕がみをぞおもほしきことかたらはむ時鳥きてもなかなむ世をうしと君がいりにし山川の水のながれておとにだにきかまほしきをほだされてよにすみの江のみつのはこ(蘆ヲ兼)むすべる事のなかりせばつねに思ひをたき物のひとりひとりももえいでなまし」山の御かへし「もろともになでゝおほしゝなでしこの露にもあてじと思ひしをあなおぼつかなめにみえぬ花の風にやあたるらむと思へばいとぞあはれなる今も見てしがと思ひつゝぬるよの夢にみゆやとてうちまどろめどみえぬかなめのうつゝまにかぎりなく戀しき折はおもかげにみえても心なぐさみぬかたみにさこそみやこをば思ひわするゝときやはあるはるけき山にすまへどもつかまわすれず思ひやる雲ゐながらもあしがきのまぢかかりしにおとら(し墻)ずぞあはれあはれとまこもかるよと(淀ヲ兼)ゝもにこそしのび草我み山にもふもとまでおふとしらなむしらか(山城)はのふちもしらずはひたぶるに君がたにのみうきよか(櫃川チ兼)はうれしきせをぞながれては見むとなむありける」またあせち(高明)殿より桃ぞのゝ(師氏室)北のかたの御もとにあふみの北の方の御ふみいかに世中を思しめしますらむに(イ无)をさなき君たちをみたてまつり給ふにかなしくおぼすらむ

頭註云　寛平后宮歌合「なみた川身なくはかりの淵はあれと氷とけねはかけも宿らぬ　古今誹諧讀人不知「世中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ　萬葉十七「阿里佐利底能知毛相牟等於非倍許曾都由能伊乃知母都藝都追和多麗　後撰戀五讀人しらす「なからへは人の心もみるへきに露の命そかなしかりける　拾遺雜春平きむさね「深山木のふた葉みつはにもゆるまてきえせぬ雪と見えもするかな　風雅釋教大僧正行尊

「草も木もたねはひとつをいかなれはふた葉みつはにめくみそめけむ　拾遺長歌東三條太政大臣「ふた葉の草を吹風のあらきかたにはあてしとてせはきたもとをふせきつゝ云々　赤染衞門集「風にたにあてしとこそは思ひしかふくにさはらてゆくかかなしさ生はおひ老はおいのかなるをこゝに生老をいひかけたるはかなたかへり　萬葉六「八十件緒乃打經而里並敷者天地乃依會限云々古今戀五讀人不知「夕されは人なきとこを打はらひなけかむためとなれる我身か　同雜下小野小町「あはれてふことこそうたて世中を思ひはなれぬほたしなりけれ　伊勢物語云この男にほたされてとてなむなきける云々　夫木集卅六　民部卿爲家「子を思ふ心はかりにほたされてうきよを猶そいてかてにする　すみの江のみつのはと云々桂園翁云みつのはは御綱葉を思ひあやまれるなるへし書紀仁德紀に御綱葉(葉此云箇始婆)云々また延喜造酒司式に三津野柏と見えたり葉をばかしはとよむへきを字のまゝにはとよみてみつのはとはいへるなるへし古今戀三讀人不知「思ふとちひとり〳〵かこひしなは誰によそへてふち衣きむ　竹取物語云おもひ定てひとり〳〵にあひ奉り給ひねといへは云々

和名鈔香名類云薰爐漢劉向有薰爐銘(薰爐比度利)　書紀神代紀上云有一老公與老婆中間置一少女撫而哭之云々　萬葉二十「知知波波我可之良加伎奈弖佐久安禮天伊比之古度婆曾和須禮加禰津流　拾遺別たゝみ「露にたにあてしと思ひし人しもそ時雨ふる頃たひにゆきける　萬葉四「夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉　金葉雜上源俊頼朝臣「なきかけにかけゝるたちもある物をさやつかのまにわすれはてぬる　重之集「ことのはにいひおく露もなかりけりしのひ草にはねをのみそなく　元輔集「行さきのしのひ草にもなるやとて露のかたみにおかむとそ思ふ　伊勢集時平公「ひたふるに思ひなわひそふるさるゝ人の心はそれそよのつね　增基熊野記行「ひたふるにたのむかひなき浮身をは神もいかにか思ひなりなむ　今本となむありけるとあるより上二十三丁ノ左五月ついたちにと云々へつゝく

されど山(比叡山)にだにおはしませばたのもしく思しめすら

むこゝにこそ人數に侍らねどちゝなし子をもてわつらひぬれ

頭註云　伊勢集云人數ならぬ身はなとうちにけたるさまにいひければ云々　後撰戀三云心さしありていひかはしける女のもとより人數ならぬやうにいひはへりければ云々

それは世中をなにとも思はむまづかの（比叡山 塙无）山の御すまひのあはれなるをなむさとへ出給ふまじとあるは誠かされど御命だにおはせば「あし引の山にとしへむとおもへども宮古戀しくならばいでなむたとふべきことにはあらねどしての山入（塙无）にしおきなどものとしをふれど（師氏女高光室）あふことなくはべればいみじくとあり北のか（師氏室）たひめぎみにかくなむと聞え給へればひめ君の御かへりきこえ給ふ「都をばいとひて山にいりぬれど戀しからねば思ひいでじを道にわすれ草こそおひたらめとなむこのせじ（深覺）の君の御はらからの君たち山は夏ともさむかなるをわたもの奉入しし給ふ中宮（安子）よりくるみの色の御ひたゝれくちなし染のうちきひとかさねふるきのかはのおほむぞあをにびのさしぬきあはせのはかま奉れ給へる（ふ塙 塙无）御歌「夏なれど山はさむしといふなればこのかはきぬぞ風はふせがむとてなむたてまつるとある御かへし「山かぜもふせぎとめつるかはぎぬのうれしきたびに袖ぞぬれぬる大納言殿の北のかた（師輔三女高明室）のたてまつれ給ふいともきよげなるつむぎをあを色にそめて山吹いろのうちきひとかさね青にびのあやのさしぬきあはせのはかまひとかさねたてまつれ給ふそへられたるうた「君がためたちぬひたれば露ぞそふみやこの人の苔のきぬにはかへし「そはりける露（高明）もたえせぬ（師輔二女登子）苔のきぬいとゞ涙にぬれまさるかな式部卿の北のかた（の塙）ひとりおはすればことなる事おはせねど人のものしたまふに思しりてもあらねどふすまたてまつり給ふ「露のごとよひあかつきにおく（起ヲ衆）なればよるのさむさにふすまかさねむ御かへし「よるとてもうちふすまなき山ぶしはころもさだめずいまよりぞしくかくてこの中宮（安子）にお（とイ）はしますをみな人御ぞたてまつれ給ふかならず我も奉らむとの給ひければ

頭註云　古今戀五兵衛「しての山麓をみてそ歸り

にしつらき人よりまつこえしとて　伊勢集「しての山こえてきつらむ時鳥こひしき人のうへかたらなむ　十王經標注引涅槃經廿七曰佛告波斯匿王有四大山從四方來欲害人民四大山即生老病死也今此四大山之中第四死天山也云々今本不載此文　萬葉三　萱草吾紐二付香具山乃故去之里乎不忘之爲　和名鈔草類云兼名苑云萱草一名忘憂萱音喧和名和須禮久佐俗云如萱藏二音　毛詩衛風焉得諼草言樹之背諼草令人忘憂　文選嵆叔夜養生論云且豆令人重榆令人瞑合歡蠲忿萱草忘憂愚智所共知也　宇津保藏開云あやのもにわた入てしろきあやのうちきかさねて云々　蜻蛉日記云くるみ色のかみに書ていろかはりたるまつにつけたり云々　枕草子云くるみいろといふしきしのあつこえたるを云々　和名鈔染色具云、唐韻云梔音支子木實可染黄色者也　今按俗家書筆用支子二字和名久知奈之　紫式部日記云中なるきぬともれいのくちなしのこきうすきしをむいろ云々　和名鈔毛群類云黒貂唐韻云貂有黄貂黒貂出東北夷黒貂和名布流木　宇津保藏開云六尺はかりのふるきのかはきぬあやのうら付てわたいれたる云々　戰國趙策云李兌送蘇子明月之珠和氏之璧黒貂之裘黄金百鎰　濱松中納言物語云にひ色あをにひなと御しつらひあさやかにつくろひたれと云々　和名鈔衣服類云裘説文云裘音求和名加波古路毛俗云加波岐沼　竹取物語云もろこしにある火ねすみのかはきぬをたまへ云々　宇治拾遺物語一云あまうれしくてつむきのきぬをぬきてとらすれは云々　古事記上云蘇邇杼理能阿遠岐美祁斯遠麻都夫佐邇登理與曾比云々　宇津保菊綵云あをいろのきぬをおけきぬにかふとて云々　枕草子云あを色すかたなといとめてたきなり云々　古今誹諧素性法師「山吹の花いろころもぬしやたれとへとこたへすくちなしにして　兼輔集云女山吹のきぬきかへたりけり返すとて　古事紀上云牟斯夫須麻爾古夜賀斯多爾多久夫須麻云々　萬葉四「蒸被奈胡也我下丹雖臥與妹不宿者肌之寒霜　新勅撰雜三云少將高光横河にのほりて出家し侍りける時ふすまてうして給せける　御歌天曆中宮「露霜のよひあかつきにおくなれは床にや君かふすまなるらむかくのせられしは露のことよひあかつきにと云々の歌をつたへあやまられ

しなりすへて此物語は實記なれはこれを正とすへし

きさいの宮（安子）われとぐしてたてまつらむとてあをにびのうちきひとかさねおなじ色のはかまひとかさねなむたてまつれたまひける「君が影見えもやするとこゝろゝ河なみたちゐ（ぬイ）るに袖ぞぬれぬるかへし「我がためになみのぬひけるころもがはきてだになれむとしをわたりて愛宮われなにわざをせむとてきぬの御か（本ノ）たびらひとかさねぬのゝけうらなると御ゆどのしる（本ノマヽ）かるらむにとて「きみがためなく／＼ぬへば世中になみだもかゝるころもたちけり御を（本ノマヽ）いてあはれやこれよりこそやますげのやうなりとも御そばたてまつれまほしけれゆかたびらたゞのといかにせさせ給へらむとあはれ／＼とみ給ふるに「たもとよりぬれけん袖もまだひぬにみにもしみぬるからころもかなわがきた（師氏女高光室）のかたにはあふ事のかたみにとこそみたてまつれとなむ聞えたまへりけるいみじうあはれとなむことよりもあいみやのたてまつれたまへるをとりわきてなきたまひけるすべて／＼いひつくすべくもなくいみじうあはれになむ

頭註云　和名鈔伽藍具云浴室内典有溫室經今按溫室即浴室也俗云由夜落久保物語云御ゆとのなとしひたり云々　紫式部日記云うちには御湯殿のきしきなとかねてまうけさせたまへし云々　しるからむと云々誤字なりとみゆれともしりかたし　御をいて云々脫文誤字ありとおほゆ詳にしりかたし　萬葉四「山管乃實不成事乎吾爾所依言禮師君者與孰可宿良牟」　本草和名云麥門冬（和名也末須介）云々　やますけのやうなりとも云々とあるはたとへにいへるなれと詳にわきまへかたし　延喜圖書寮式云調布四丈五尺衣袴幷に湯帷子巾袜料云々　和名鈔澡浴具云溫室經云澡浴之法七物其七曰内衣（和名由加太比良）論語注云明衣以布爲沐浴衣也　榮花玉の飾に云御ゆかたひらなからおはしましたるに云々　萬葉一「眞草刈荒野二者雖有黃葉過去君之形見跡曾來師」

おのれこのころ用ありて假字記錄を人によませて聞つるに大鏡になん天曆の帝の少將高光の君にたまはりし御歌をも載たるこは新古今集にもえ

らはれて人もしれる事なるをいまこの物語に見えさるはうたかはしきに似たれとすへての事のたゝしくまめやかなるにくらふれはこれのみにつきて何をかいふかるへきそも〳〵このふみよ古くつたはれる本のいつれもついてのみたりかはしきはいかなるたかひにかあるらむこゝに丸林孝之これかれをふかく考へあはせてかのあやまれるをはたゝしかたふかるゝふしには考證をさへくはへしはいたりふかき人とやいはんされとふるきふみのついてをおのか心もてあらためむは人のうけひくましきわさなる物からもとのまゝなるはすてに群書類從に能せられたれは今はあらためむもつみうましうこそかくいへるは文政八年といふとし六月高取の殿人安新廼屋のあるし壓頭麻續一

山崎知雄書

四十二物語考證

こたみわかとも明清ぬしこの註さくものせられしはわさとにもあらすものゝついてにふとみいてゝこはをかしきものなりとおもはれしより文つくゐのかたはらにおきてやまともろこしのふみ見たまふまにまに似かよひたることゝもをかいつけられしかいつとなくことなりにたるなりさるはかくこと〱しくせむの心にもあらさめれと至清わがとちのわたくしものになさむこと のあたらしくおもひもて行て師にかくなと聞えけれはにこ草のにこよかにゑみて明清いかにさえあれはとてこの道に入たちてまたいく程もへさるをとてひらきみ給ひしかこは思ひの外にもある哉よしひかことありともうひことなれは人もとかめしわれ初春のつとひに例ものする文の何くれのものしけききまきれに未た思ひもさためさりしかこれをやかてそかまうけにはせむ至清はしかきせよと宣ふにこの春秋のあらそひのあらそはすて夏引の手ひきのいとみたりかはしく冬の日のみしかき筆もてかいつけつるは文政のはしめのとしはすの十日あまりになむ

四十二のものあらそひ提要

四十二の物あらそひ一名たけくらへ（他本にはみなものあらそひとのみあれと予かもたる一本にのみたけくらへとあり）こは作者時代並に詳かならすおしはかりにおもふに南北朝のするつかたにいて來にたるものなるへしさはれ正しき證をえされはさためてはいひかたけれと片岡寛光ぬしのもたりし本に後土御門内侍筆とあるをおもふに文正應仁よりおくれたるものにはあらしさてこのふみをつら〱みるに源氏物語によりたるふしいとおほしまつこゝろみにそのひとつふたつをいはんはしめ南殿の櫻見給ふくたりはまたく花宴巻のおもむきに似たりまた東宮と中宮と春秋をあらそひ給ふくたりは紫の上と秋好中宮との事によくかよひたり薄雲巻に云はるのはなのはやし秋の野のさかりをとり〱に人あらそひ侍りける其ころのけに心よるはかりあらはなるさためこそ侍らさンなれもろこしにははるのにしきにしくものなしといひはんへめり大和ことの葉には秋のあはれをとりたてゝおもへるいつれも時々につけて見給ふにめうつりてえこそ花鳥の色をもねをもわきまへ侍らね（中略）女御の秋に心よせ給へりしも哀に君のはるの明

ほのに心しめ給へるもことわりにこそあれ云々又處女巻野分巻にもみえたりまたをみなへしと撫子とゝいへるうたはまたく夕霧巻と紅葉賀巻との歌をふたつ合せたるなりまた雲井の雁と汀のをしとといへるうたも處女のまき夕霧大將雲ゐの雁の君をこひ給ふ條にきりふかき雲井の雁もわかことや云云とあるをとれる歟またうき舟に身をこかれけるおもひより云々落そめしおちはか上の露よりも云々これらのうたはまたくあらはしていへれは論をまたす又關白の息大納言より柏木のゑもんのかみの女三の宮のおもひゆゑ空しくなりしと有明の大將の山ふかく入りしとは云々此柏木のことは標註にいはんさて有明の大將といへる人源氏のうちに見えすこはきはめたるひかことなめれと山ふかく入しとはかをる大將か宇治の大君にかよひ給ひしほとのことをいへるにはあらさる歟橋姫巻に有明の月のまた夜深くさし出るほとに出たちていと忍ひて御もとに人なともなくやつれておはしけり河のこなたなれは舟なともわつらはて御馬にてなりけり入りもてゆくまゝにきりふたかりて路もみえぬしけ木の中をわけ給ふ云々又總角巻のうたにおくれしと空行月をしたふかなつひにすむへきこのよならねは云々と見えたりさはいへかをる大將の有明の月をよみ給ひし歌もみえされはしひて異名とすへきにもあらすさて風葉集に有明の別のみかと又有明のわかれの內大臣また有明の別の左大臣又有明の別の關白亦有明の別の中務卿みこの北方又有明の別の東をとめ又有明の別の東宮又女院大將にてつかへ給ひけるをひかゝゝしきもてなしとあらはすをりにや有けん有明の別の院御歌いかにせんたゝこのくれとたのめてもゆくかたしらぬ有明の月おほんかへしつれなくて猶有明のかけとめは身のよかたりになりやはてなん又大將におはしましける時內大臣のいりける所をしのひてかいまみ給ひけるにおとゝほとなく出にけれは女になつかしきさまにてかたらはせ給ひて有明の別の女院云々これらを合せ考ふるに有明の別の物語なといへるかありつらん有明の大將といへるはみえねと詞書のうちに大將といへることはしゝゝみゆれはかならす大將といへる人もありしなるへしさて此物語今世につたはらねはことのよしは詳ならすかくはいへと本文に女三の宮と匂兵

部郞とあはせ又ひかる源氏と夕霧の大將とあはせたる例もあれば有明の大將とは猶かをる大將のことをいへるに似たりさはれこはみなおのかおしはかりの考なれはいつれをよしとも定めかたし又くまなき月と朧月夜とゝいへるうたは花宴卷の歌を其まゝとれりまた棚機とはし姬とゝいへる歌も總角卷に中たえんものならなくに橋姬のかたしく袖や夜はにぬるらんなとあるより思ひよれるなるへし又中宮のすかたをいへる詞に是そかすみのうちのかはさくらなともかくやとおもひける云々とあるはまたく野分卷に夕霧の大將紫の上を見給ひし條の詞をとりてかけり猶いはまほしきことはくさ〳〵あなれとわつらはしけれはさてやみつ

大意

此書はしめ南殿の櫻見給ひてかり初に春秋のあらそひ有しより四十二條の物評ひとはなれるなりされは春秋のあらそひは此書の起原とやいふへからんそもそもこの評ひいとかみつ代よりのわさなりそは古事記卷之中云於此有二神兄號秋山之下氷壯夫弟名春山之霞壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志袁登賣不得婚汝得此孃子乎 中略 爾其弟如兄言具白其母即其母取布遲葛而一宿之間織縫衣褌及襪沓亦作弓矢令服其衣褌等令取其弓矢遣其孃子之家者其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之霞壯夫以其弓矢繫孃子之廁爾伊豆志袁登賣思異其花將來之時立其孃子之後入其屋即婚故生一子也云々 こはひきつけことに似たれと春山霞壯夫と秋山下氷壯夫と伊豆志袁登賣を爭ひたるさま春と秋との爭のはしめとやいはん また萬葉集卷之一天皇詔內大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艷秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌冬木成春去來者不喧有之鳥毛來鳴奴不開有之花毛佐家禮杼山乎茂入而毛不取草深執手母不見秋山之木葉乎見而者黃葉乎婆取而曾思奴布青乎者置而曾歎久曾許之恨之秋山吾者 また拾遺集雜下あるところに春秋いつれかまされるとゝはせ給ひけるによみてたてまつれる貫之はる秋におもひみたれてわきかねつ時につけつゝうつる心は 家集卷之九にもみゆ また元良のみこ承香殿のとしこに春秋いつれか優るとゝはせ侍りけれは秋もをかしう侍りといひけれはおもしろき櫻をこれはいかにといひて侍りけれはおほかたの秋に心はよせしかと花見るときはいつれともなし又よみ人しらすはるはたゝ花のひとへにさくはかり云云 本文にみえたり また伊勢物語に秋の夜は春日わするゝものなれや霞にきりや立まさるらんおなし心を拾遺愚草

にしらきくのにほひし秋もわすれ草おふてふきしの春の浦風また更科日記に春秋のことなといひて時にしたかひみること春かすみおもしろく空ものとかにかすみ中略また秋になりて月いみしうあかきに空はきりわたりたれと手にとるはかりさやかにすみわたりたる中略いつれにか御心とまるととふに秋のよに心をよせてこたへ給ふをさのみおなしさまにはいはしとてあさみとり花もひとつにかすみつゝおほろにみゆる春の夜の月こは新古今集春上祐子内親王ふちつほにすみ侍りけるに女房うへ人なとさるへきかきり物かたりして春秋のあはれいつれに心ひくなとあらそひ侍りけるに人々おほく秋に心をよせしかはさありてこのうたなのせられたりとこたへれは返す／＼うちすんしてさは秋の夜はおほしすゑつるなゝりな今宵より後のいのちのもしもあらはさは春の夜をかたみとおもはんといふに秋に心をよせたる人ひとはみな春に心をよせつめりわれのみやみむ秋の夜の月こは万代集雑一はる秋なあらそひけるに春に心をよせける人のもとにつかはしけるとありてこのうたなのせられたりあるにいみしうきようしおもひわつらひける云々また風雅集秋下選子内親王家中務大齋院の女房春秋のあはれを爭ひ侍りけるに中將春の曙は猶まさるなと申けるか秋の比山里にこもりゐて侍りけるにいひつかはしける山里に有明の空をなかめても猶やしられぬ秋のあはれはまた小夜のねさめにも春秋のあらそひありまた唐土にもいとよく似たる事あり侯鯖錄卷之四元祐七年正月東坡先生在ニ汝陰州ー堂前梅花大開明色鮮霽先生王夫人曰春月色勝ニ如秋月色ー秋月色令ニ人悽慘ー春月色令ニ人和悅ー云となほあるへけれとさのみはうるさけれはやみつ

別本異同

此書異本あまたありて本ことに大異同ありまた歌數もおの／＼おなしからす流布の大目錄といふものに四十二の物語二卷とみえたりいかて其本をえまくおもひしにさいはひ杏花園ぬしのもたりし活板の本あり歌數四十四首またた山崎美成ぬしの藏本に貞享二年の印本あり小本一卷歌數四十三首其外寫本八本をもて校合せり其一本は我か椎園大人の本うたかす四十一首また一本は片岡寛光ぬしの本うたかす四十四首また一本は後土御門内侍筆歌數四十一首また一本は梅塢ぬしの本白石先生自筆歌數四十三首また一本は柳亭ぬしの本うたかす三十九首外三本は予か藏本なり一本はうたかす四十四首また一本は歌數四十二首また一本はうたかす三十八首かく本ことに詞書はいふもさらなり歌の數さへ定まらねはいつれをかよしとしいつれをかあしとせんされと杏花園ぬし美成ぬしの二本ははやく世に印行せしものなれはこれをもて藍本としつへくおもへと猶よく合せ考ふるに此二本は土御門本白石本なとゝ同本にてまたたかひに錯亂あ

りこゝに春はたゝ花のひとへに云々といへるうたをのせたる千曳ぬしの本は予か藏本歌數四十四首ある本と同本にて異同もすくなく詞書も明らかに歌の數さへ初の二首をのそきあと四十二首ありて此書の名にもあへれは此本をもて藍本とはしつるなり本書の傍に活とあるは杏花園ぬしの本なり印とあるは美成ぬしの本なり土とあるは土御門本なり椛とあるは椛園大人の本なり柳とあるは柳亭ぬしの本なり白とあるは白石本なり異とのみあるは予か藏本二本を云別に藏さしるせるは千曳ぬしの本と同本なるうたかす四十四首ある予か藏本なりそも／＼おのれかゝることものせんはをこかましともいとをこかましきわさなれと本よりかく世におほやけにせんとてのわさにもあらす常にふみ見るいとま／＼このふみ彼書よみあはせあるは唐の大和の書ともなとみるまに／＼かいつけおけるをある日書肆あなかちにうはひ去て忽に上木しつ猶引もたらすいひもゝらせるふしおほけれといかゝはせむさはいへかきりある命もて限なき書みんとするは精衛とかいへる鳥のたとひに似たりたとへいくたひ打かたふきとさまかうさま考つゝ冬過春にあへりとも筆に花咲をりもあらしと其まゝにしてうちおきつるは文政とあらたまりしとしの十二月つこもりちかき日かくいふは山本明清

四十二のものあらそひ

むかしならの帝の御時と「かや」活本印本なし

頭註曰ならのみやこ詞林采葉抄巻之一奈良宮時代事或云九代亦は七代なと説々不同也續日本紀曰自二持統天皇一至二光仁天皇一九代居二寧樂都一云々水鏡曰和銅三年自二難波一遷二奈良都一矣萬葉集第一巻和銅三年春二月從二藤原宮一遷二寧樂都一焉如二此兩說一者七代と見たり仍今考之云慶雲四年六月十七日文武天皇於二藤原宮一崩御同七月十三日母后元明天皇即位同五年正月改元爲二和銅一同二年始建二那羅都一同三年遷レ都至二桓武天皇延暦二年一代々居二平城宮一同三年遷二山城國箇木郡長岡京一同十三年遷二都平安城一云々然者自二藤原宮一遷都以來皇后是七代なる者也

をりふし春宮中イ本の御かたへならせわたらせ白本おはしますやよひ二月諸本なかの六日のころなるに南殿庭活本印本のさくらは

頭註曰南殿のさくら源氏花宴巻云きさらきはつかあまりなんてんの櫻のえんせさせ給ふ后春宮の御

つほれ左右にしてまうのほり給ふ云々　本朝文粋
巻之十云春惜櫻花應製
菅贈大相國　承和之代清涼殿東二三歩有二一櫻樹一
云々　江談上云内裡紫宸殿南庭櫻樹橘樹者舊跡也
云々　古事談巻之六云南殿櫻樹者本是梅樹也桓武
天皇遷都之時所レ被レ植也而及二承和年中一枯失乃仁
明天皇被二改植一也云々　この外寶物集巻之一禁秘
抄上大槐秘抄越部禪尼消息東齋隨筆なとくさ／＼
あれとわつらはしけれはもらしつ
夕はえにあかぬ色をそへ(とり活本印本)みきはの柳はもえきの糸を
たれたる(たれたる土本白本)(みたしたるか椎本イ本)かと「うたかはるゝに」(あやまたれ柳本)(ほとに諸本ナシ)「よろつ」(はるかに白本)なかめおはし
ます(諸本)「ましける」(も活本印本)ほとに春宮おほせ「ける」(らるゝ諸本られ白本)はると秋とは
いつれ「おろかは侍らねとも」(たとらぬことなれとも諸本)なほものゝ哀をとゝめ
ことにふれてかなしきは秋のゆふへに侍るもろこし(を作りける諸本)
にははるを「あはれと見」(かなしみ活本白本また印本國活本土本イ本)わか朝(わこく印本)にはあきをあはれむ
(こそみにて侍れ土本イ本　拾遺雜下よみ人しらす　此歌諸本になし)
と見え侍るとて　はるはたゝ花のひとへにさくはか

り物のあはれは秋そしらるゝ「かやうにあそはし」(諸本ナシ)さ
ていかゝさため(に活本印本白本)「おはしますと」(おほすやと白本)おほせ(御うた土本)けれは中宮の
御かたよりみとりのうすやうに(もの活本印本しり活本白本柳本)おほかたはあら(に活本印本)
そふこころといひなからこゝろひとつは秋をさためん
(小侍従の君して奏らせ活本印本白本柳本こゝい八字)
とあそはして「まゐらせ給ふ」(はら活本印本白本)一御かと御(ことわりも土本白本)
(白本印本になし)
らんして」一女は秋をあはれむ心
頭註曰をんなは秋をあはれふ毛詩豳風春日遲々采
レ蘩祈々女心傷悲　傳云春女悲秋士悲感二其物化一
也箋云春女感二陽氣一而思レ男秋士感二陰氣一而思レ女
淮南子繆稱訓云春女思秋士悲春女感レ陽則思秋士
見レ陰而悲　源氏若菜下巻云女ははるをあはれふ
ことふるき人のいひおき侍りける　明清云女は秋
をあはれふとはこれらをうらうへにいへるにや
まことに(さて諸本)「ことわりなりと」(諸本ナシ)わらはせおはしますうへ
もいつよりも御つれ／＼におほしめすほとなれはこ(こと活本印本白本)
れをはしめ(にて印本白本)として四十二のものあらそひあるへしさ
(さふらはぬないしのすけなとめん／＼に御使ありけれは)(まゐり土本白本イ本)
て御前に「さふらひたまふ」(ぬるないしのすけを御使にて椎本)
頭註曰予か藏本には御まへにさふらひ給ふないし

のすけなさめん〳〵に御つかひありければ人々ま
ゐりあつまりたまひ云々とあり
いろ〳〵のうすやうたみたるかみのにほひなつかし
くてやさしきにさま〴〵の「おもしろき」（諸本ナシ）事「とも」（白本ナシ）を
あそはしける中宮の御かた（うた土本）をはしめとして（まゐらせ椛本）いま四十（あら）
一なれは公卿殿上人女房（も活本）たちもかほうちあかめて何
事そやとおほしける（そふ心もなくさふらひ給ふ活本印本イ本）まつうへより（かくそ遊はしける藏本）（侍ひ給ふ土椛白本）
月の夜と　雲の朝と　降る雪（に白本）はつもらぬかげも（は白本）有
明の月そ（に白本）くまなき冬の山さと（あけほのイ本）
頭註曰月の夜と云々後撰秋下貫之　ころも手はさ
むくもあらねと月影をたまらぬ秋の雪とこそみれ
萬代集冬建保御製　山かせに時雨やとほくなりぬ
らんくもにたまらぬ有明の月
春宮の御かた（かた白本）より　ひかし山と（れぬと椛本）　にし山と　月影の
いてつる山もわすられているかたにすむわかこゝろ
かな　春宮の（ちうくう活本かたより白本）御母后の宮より（り活本印本イ本）　時雨と　松風と　わ
きて猶あはれならしをまつ風の時雨のおとに「かよ（かはら）
は」（椛本）さりせは（しな活本印本）　ひやうふ卿のみやより（活本印本ナシ）　衣うつ　おと（けり土本）

と　夜舟こく音と　ころもうつ宿には夢もかよひけ
りねられぬものは夜ふねこく音
頭註曰ころも打おとゝ云々新古今秋下前大僧正慈
圓　ころもうつおとはまくらにすかはらや伏見の
ゆめをいくよさましつ　萬葉巻之十　吾世子（セコ）爾（ニ）
裏（ウラ）戀居者天河夜船榜動（コキトヨム）梶音所聞（キコユ）　李花集上　夜ふ
ねこく音はかりして白浪のあさなき空にかりやな
くらん
御かとの御おとゝ中つかさの宮より（卿活本印本）　病に薬をえた
るさ（れさ諸本）　戀しき人に逢と（あへる諸本）「嬉しさはいつれもおなし色（たさらぬ白本）
なから戀しき「かたやこゝろひくらん」（人にひくこゝろかな諸本）　宮内卿の宮（弘徽殿の女御）
より（より活本印本土本白本イ本）　風になみよる柳と　露にしをるゝ薄と「青柳の
かけふむ道にやすらはんまねく薄（なはな活本印本イ本）はさもあらはあれ
頭註曰風になみよる柳山家集上　みなそこにふか
き緑の色みえて風になみよる川やなき哉　青柳の
かけふむ道新古今春上太宰大貳高遠　うちなひき
はるは來にけり青柳のかけふむみちに人のやすら
ふ　萬葉巻之二「橘之蔭履（フム）路乃八衢（ヤチマタニ）爾物乎曾思妹
爾不相（アハステ）而

清涼殿の女御（よりイ本むらさめ活本印本柳本ほかなるみたれ活本印本イ本） 萩と をきと 紫のつゆもあたなる
なかめよりみにしむものはをきのうは風
頭註曰千載秋上大藏卿行宗 ものことに秋のけ
しきはしるけれとまつ身にしむはをきのうは風（より活本印本白本ものかく土本よむ土本）
桐壺のみや「す所」 手と（しゆせき白本） うた〇と（よむ土本）
濱千鳥それともわかぬあとそうきわかのうらには（見に活本）
まよひはつとも
頭註曰手とは漢書郊祀志云天子識二其手一師古曰手
謂二所レ書手跡一 鳥のあと源氏柏木卷云ことの葉の
つゝきもなくあやしき鳥の跡のやうにて云々 呂
覽君守篇云蒼頡作レ書蒼頡生而知レ書寫二倣鳥跡一以
造二文章一 淮南子本經訓云昔者蒼頡作レ書而天雨レ
粟鬼夜哭蒼頡始視二鳥跡之文一造二書契一 また瑯邪
代醉卷之十二にもこのこと見えたり 古今序まさ
きのかつらなかくつたはり鳥の跡久しくとゝまら
は云々 同雜下よみ人しらす わすられん時し
のへとそはま千鳥ゆくへもしらぬあとをとゝむる
異本保元物語崇德院 はま千鳥あとはみやこに
かよへとも身はまつ山にねをのみそなく
ひのゝ大みやより（皇太后宮の大將より白本） 貝おほひと すくろくと ひし

ひしとつとひておほふ貝よりもたゝふたりゐてめを（あは）
やろんせむ（活本印本）
頭註曰貝おほひのことは下にいはん雙六とは日本
紀持統天皇御卷云朱鳥三年十二月己酉朔丙辰禁二
斷雙六一 唐書狄仁傑傳云（略上） 久之召謂曰朕數夢二雙
六一不レ勝何也於是仁傑與二王方慶一俱在二人同レ辭
對曰雙六不レ勝無レ子也云々 このことまた容齋隨筆
四筆卷之八にもみえたり 洪遵譜雙卷之四日本雙
陸篇云白木爲レ盤潤可二尺許一長尺有五厚三寸刻二
其中一爲レ路置二二骰子於竹筒中一而擲二諸盤上一視二
其采一以行レ馬馬以二青白二色琉璃一爲レ之如二中國棋
子狀一馬先歸二一所一者爲レ勝（下略）
中宮の御をち左大臣（東活本 右のまうちきみ白本おうちきみ活本印本） うくひすと ほとゝきすと
梅かえにさへつる春のあしたよりなほめつらしきほ（うくひすの活本印本白本イ本）
とゝきすかな 近衛の大將より（宰相の中將諸本） みめのわろきと
ありかのあると 葛城の神はよるともちきりけりし
らすありかをつゝむならひは
頭註曰かつらきの神 拾遺雜賀春宮女藏人左近
いは橋のよるのちきりもたえぬへしあくるわひし

きかつらきの神　古事記雄略天皇御卷云一時天皇登幸葛城山之時云々有其自所向之山尾登山上人云々於是答曰吾先見問故吾先爲名告吾者雖惡事而一言雖善事而一言々離之神葛城之一言主之大神者也云々　奥義抄卷之二云むかし大和國にえんの優婆塞といひけるものゆきよかなんと云てかつらき山とよしのゝあひたに橋をわたさんと思ひて日本國の神々に祈こふにかつらきにいます一言主といふ神一夜のあひたにかの山この山のみねにいしのはしをわたしはしめてひるはかたちのみにくきにはゝかりてわたさぬを役おそかりなんといひてひるもわたすへきよしをせむるに神はらたちて託宣して帝に奏したまはく役優婆塞と云者王位をかたむけんとすつみし給ふへしとみかと此つけによりて役行者を伊豆國になかしつかはしつ云々此こと猶舊本今昔物語卷之十一俊賴無名抄卷之上袖中抄卷之六詞林采葉抄卷之二元亨釋書卷之十五なとにもみえたれとわつらはしけれはみなもらしつ

ありか　明清云爰にありかと云は狐臭の事也めのとの草紙に云人の身におのつからありかなとある人うるさくにかきわさなれこうちあふ人なとに斯る事こそうるさけれとのたまはてときときによきちんなと御たき候て云々其ありかをうしなふはかり御たしなみ候へ云々又河内守親行東關紀行にもありかの事みえたり朱書入云光中案東關紀行に有は臭き香ある物をたきしなごりの香と思はるれはこゝに引へきにあらす猶本書を見て知るへし

花山の女御　うとまるゝ身と　あかぬわかれと　かはる身はうきになくさむかたもあり　あかぬわかれのみちそかなしき　平大納言　曉のわかれと　夕のおもひと　あかつきの「たもとの露」もかすならす夕の袖のぬるゝけしきは三條の院の大夫うこん　枝に色こき紅葉と　庭にさひしき落葉と　もみちはをきそふ嵐もつらからし庭のにしきにしくものそなき五條の宰相　みめと　しほと　しほやかぬ浦そさひしきからさきの松のすかたもなにゝかはせむ

頭註曰みめ　源氏手習卷云この人をいけはてゝみまほしうをしみてうちつけにそひゐたりしらぬ人

なれとみめのことなうをかしけれは云々枕草紙云ときは木おほかゝる所に鳥のねて夜中はかりにいねさはかしくおちまとひ木つたひしてねをひれたる聲に鳴たるこそひるのみめにたかひてをかしけれ榮花物語わか枝の卷云それはさるものにてみめのおそろ〳〵しうきらゝかなることはまた世にめつらかに候つるわさなれ　又舊本今昔物語卷之二十にもみゆ　しほ　古列女傳卷之六云鍾離春者齊無鹽邑之女宣王之正后也其爲ㇾ人極醜無雙云々行年四十無ㇾ所ㇾ容　劉向新序卷之二云齊有二婦人一極醜無雙號曰二無鹽女一云々　明清云諺草卷之六に是らの文を引て俗にみめわろき女をしほなしといへるは此無鹽よりいてたりとみえたりこはうけかたき說なれとしはらくこれにしたかふのみまた李白詩集樂府子闕採花篇云丹青能令二醜者妍一無鹽翻立二深宮裏一自ㇾ古妬二蛾眉一胡沙埋二皓齒一　源氏闕屋卷わくらはにゆきあふみちを賴みしも猶かひなしやしほならぬうみ　後撰戀一貫之　しほならぬ海ときけはやよとゝもにみるめなくして年のへぬらん朱書入云光中按諺草を引て暫く是にしたがふと云

るはこゝのしほといへるをみめわろきをいふといへるにやさては此卷のつがひ〳〵の例にもあたらずいみしきひがこゝろえなりすべてを考わたすにいつれもとり〳〵にとり所あるものをつがひて人人のこのむところにしたがひてまさりおとりをことわれるなれはこゝのしほと云るもみめのよきにたいするほどのものならではかなはぬ事なりこれによりてつら〳〵考ふるにしほとは俗にいふなりふりのよきにて身のとりまはしをいへるなるへしそれをしほといふはいはゆるしほあひのよきにて何事にもしほあひよくふるまふとみめのよきとはいつれといへる事ならんとそ思はるゝ下にみめとふりとゝあるにても思ひあはすべし又判の歌もしほをよしとことわれるなり歌をよくあちはひて知へしなほしほといふ歌のことは別に委き考あり

頭註曰辛崎の松の事は懷風藻詠孤松詩又は尊朝法親王唐崎松記なと引へかりけれとわつらはしければ略つ　松のすかた　古世說容止篇云嵆康身長七尺八寸風姿特秀云々山公曰嵆叔夜之爲ㇾ人也巖々若二孤松之獨立一其醉也傀俄若二玉山之將一ㇾ崩

（位諸本）三條の中將より　たのめてとはぬ夕暮と　「かへる」（印本ナシ）
あしたの名殘と　曉の「わかれの袖の露」（かへるわかれのそて梳本）よりもとは
ぬうらみそやるかたもなき　頭の中將（東宮印本白本中納言話本）　思へともお
（かな諸本）もはぬ戀と　ふかきうらみと（恨のあるなか諸本）　なからへはせめて逢
夜もありぬへしおもはぬ人をまつそかなしき（くるしきイ本）
（六條諸本）中の院の中納言　きくと　うめと　しらきくのう（は土本）
（イ本）つろふ色は（な土本白本イ本）みるもうし軒端（さけふ白本柳本）の梅の香をやしのはん
四位の少將　嶺になく猿の聲と　鹿の「なく」（活本ナシ）音と
うきことは（を梳本）ましらの聲に聞そへて（なし梳本）（かへ白本）つまこふ鹿の音こ
（なやしのはん梳本）そつらけれ
頭註曰ましら翻譯名義集畜生篇云摩斯吒或末迦吒
此云二獼猴一古今誹諧　みつね　わひしらにましら
な鳴そ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ（わたる活本印本）
（右活本印本）さるもんのかみ　遠里の烟と　嶺に別るゝ横雲と
遠さとや（の印本）一すちたてる夕けふりみね行雲にまかふも
のかは
頭註曰嶺にわかるゝ横雲　新古今春上藤原定家朝
臣　春の夜のゆめのうき橋とたえしてみねにわか
るゝよこ雲の空
五條のさいしやう（あひ土本梳本）　夢と　文と　「はかなしやまれに（は白本）（かはせん梳本イ本）
待見る玉つさに見しよの夢（も活本印本白本）をなにゝたとへん
頭註曰玉つさ　萬葉卷之二上略黄葉乃過而伊去等玉（モミチハノスキテイニシト）
ふ乃使之言者梓弓云々　萬葉考卷之二云玉つさて
ふとは意得ず強て思ふに玉はほむることばつは助
の辭佐は章の字の音にや云々　なほ契沖雜記玉か
つま卷之一にもみえたれとことなかけれははふき
つ　みし夜のゆめ　千載哀傷上東門院　うつゝ共
思ひわかれて過るまにみしよの夢を何かたりけん
花山の院の侍從（の君とし十一にて白本イ本活本印本）　岩根の松と（みれ活本印本白本）　軒のし
のふと　さひしさは（も白本）「いはねの松や」（みたれて梳本）（みれのまつやま白本）きさるらん軒の
しのふはあまりめなれて
頭註曰いはねの松　源氏處女卷　風にちるもみち
はかろし春の色をいはねの松にかけてこそみめ
めなれ　同桐壺卷としころ常のあつしさになれ給
へれは御めなれて猶しはしはこゝろみよとのたま
はするに云々
ときはの大將　しやうやうしんか　わうせうくんか
うらみと　かなしひと　なけき行道の草葉の露

よりも窓うつ雨やそてぬらすらん

頭註曰王昭君前漢書元帝紀竟寧元年春正月匈奴虖韓邪單于來朝（中略）賜二單于待詔掖庭王檣一爲二閼氏一（應劭曰郡國獻レ女未レ御見一須レ命於掖庭一故曰待詔王檣王氏女名檣字昭君）同匈奴傳にもみえたり琴操卷之下云王昭君者齊國王襄女也昭君年十七時顏色皎潔聞二於國中一云々進二於孝元帝一以二地遠一既不レ幸納備二後宮一積五六年昭君心有二怨曠一僞不レ飾二其形容一云々後單于遣二使者一朝賀云々元帝謂二使者一曰單于何所レ願樂對曰珍奇怪物皆悉自備惟婦人醜陋不レ如二中國一帝乃問二後宮一欲下以二一女一賜（中）單于上云々于レ是昭君喟然越レ席而前曰云々誠願往時單于使者在レ旁帝大驚悔レ之云々遂以與レ之後漢書匈奴傳云昭君字檣南郡人初元帝時目二良家子一選入二掖庭一時呼韓邪來朝（中略）帝召二五女一目示レ之昭君豐容靚飾光明漢宮顧景裴回竦二動左右一帝見大驚意欲レ留レ之難二於失一レ信遂與二匈奴一此外西京雜記卷之二野客叢書卷之四瑯邪代醉卷之廿なとにみえたりなほ白氏文集卷之十四に滿面胡沙滿鬢風眉銷二殘黛一臉銷レ紅愁苦辛勤顦顇盡如今却似二畫圖中一また李義山詩集箋註卷之中に毛延壽畫欲レ通レ神忍爲二黃金一不レ顧レ人馬上琵琶行萬里漢宮長有レ隔生春一

後拾遺雜三懷圓法師　みるたひにかゝみのかけのつらきかなかゝらさりせはかゝらましやはこのうた奥義抄卷之二にもみえたれとこと長けれはもらしつまた和歌童蒙抄卷之六和歌色葉集卷之八にも出たり猶唐物語第二十五條に（文略）うき世そとかつはしる〳〵はかなくも鏡のかけをたのみけるかな（此歌漢故事和歌集にも見ゆ）　上陽人白氏文集新樂府云（上略）耿々殘燈背レ壁影蕭々暗雨打レ窓聲　明清云本文に上陽人さいへるはおそらくは梅妃のことならんか梅妃傳云梅妃姓江氏蒲田人父仲遜世爲レ醫妃年九歲能誦二二南一語レ父曰我雖二女子一期以レ此爲レ志父奇レ之名曰二采蘋一開元中高力士使二閩粤一妃笄矣見二其少麗一選歸侍二明皇一大見二寵幸一（中略）後竟爲二楊氏一遷二於上陽一また按するに君の寵すたれて上陽宮へうつされし人々をなへて上陽人とはいふなるへしと我もおもひ人もいへれと亦こゝに引いでし文集の詩のはしめの句にも入時十六今六十とみえまた奥義抄にも上陽人十六にてまゐりたりけるか云々と見えたれは一人の上をいへること論なしたゝし梅妃のこと

を上陽人といひしことはいまだ物に見あたらねは
さためてはいひかたし猶追て考ふべし　奥義抄巻
之二　戀しくは夢にも人をみるへきにまどろつ雨
にめをさましつゝこゝの文ははなはた長しとに人も
よくしれりしことなれはわつらはしくひきいてす
猶まどろつ雨とよめりしうたは和泉式部日記拾玉
集巻之七新續古今雜中風雅集秋下なとにみえたれ
とさのみはうるさけれはもらしつ
堀川の中將（大活本印本イ本のきみ藏本）　しうとめと　まゝはゝと　む
さし野のゆかりの草もつらけれと猶うきものは親な
らぬ親　中宮の御せうと「ひやうゑ（左衛門土本）」のかみ　はいた（しほやき）
（イ本）んの翁と　釣する海人と　すみかま（しほイ本）のけふりになる（賣炭）
るたもと（そて活本白本　ころもイ本）よりつりするあまや袖ぬらすらむ
頭註曰賣炭翁樂府詩集新樂府辭云賣炭翁伐レ薪燒ニ
炭南山中ニ滿面塵灰煙火色兩鬢蒼々十指黑（また文集巻之四にも見えたり）
猶このことは義經記巻之五また八島草紙に
も見ゆ　釣するあま　新古今雜下　よみ人しらす
さゝなみやしかの山風うみふけは釣するあまのそ
てかへる見ゆ

ないしの「かんの（活本印本ナシ）」君　をみなへしと「露にしをるゝ（白本ナシ）」
撫子と　をみなへししほるゝ（るゝ活本）野へにましれとも猶う
とまれぬやまとなてしこ　そちのきみ（刑部卿　活本印本イ本）　雲井の鴈と
汀のをしと（いけ　藏本）　はかなしや汀のをしのかりまくら雲（かはせ活本印本うき印土椛本　兵部卿白本　なみ藏本　しと白本）
井のかりにおよふへきかは（ま土本）
頭註曰雲井の雁　源氏處女巻「きりふかき雲井の
雁もわかことや晴せす物のかなしかるらん
うへの御めのと「ご三位（諸本ナシ）」　逢ふ遇戀と　あはぬおも（ひたすらあはぬ戀）
ひと（諸本）　あひみての後の心にくらふれはむかしはもの（拾遺戀二　權中納言敦忠　大納言のすけ諸本）
をおもはさりけり　中宮の御かたの女房大納言の君（まて活本印本　のはな活本印本）
藤と（まかへ椛本）　吹山と　池水のそこさへにほふ藤なみにたこ（きしイ本又いけ活本）
へてもみし井出の山吹　左大將より（大さか大納言活本印本土本白本）　つはきと　卯
（たくへ活本白本土本）
のはなと　玉つはき八千代（ちよを活本印本土本）ふりたる色みれはよをう（な藏本　かけ活本）
の花も何にかはせむ
頭註曰玉つばき莊子逍遙遊篇云上古有ニ大椿者ニ
以ニ八千歳ニ爲レ春八千歳爲レ秋　新千載慶賀賀茂經
久　神山の峯におふてふたまつはき八千代は君の
ためといのらん猶拾玉集巻之二新拾遺賀之部な

さにもみえたり　よをうのはな　長秋詠藻上　山
かつのかきほあたりにやさるかなよをうのはなの
さかりなるころ
かやうに「おの〳〵」（活本印本白本ナシ）「あらそひ」「あそはし」（おはし土本白本）ける所に
「ゐん」（印本ナシ）のこさいしやう（つほね活本印本白本イ本）○まゐりて此よし「女院に申（ゐんの少將と）（のへ活本）（たまふほさに土本）
させ給ひければ「さりあへす（この十二字白本にナシ）「女院」（白本ナシ）も入らせ（わたらせ土本）「おは（たま）（ひぬ土本）
しましける」「御門をはしめたてまつりて」おもひか（も）
けつるこさなれは（よらぬ印本白本イ本）「御門おほせけるは」（この八字白本にナシ）たゝ今のきや（御まゐ）
うかうは（り活本印本）「まことに思ひよらす」（この九字白本イ本ナシ）なに事にかとおほせ（や白本）（なさろ）（みゆ）
けれは（き白本）「女院の」（かせおはします諸本）（白本ナシ）あまりつれつれに侍りける折ふし。（に白本）
かかる御遊の
頭註曰歳本にはをりふしかゝるよし傳へきゝうら
やましさに云々とありてわたらせ給ふよし云々の
詞なし
「わたらせ給ふよしつたへきゝ」「うらやましさにさ（さうけたまはりさふらひてまゐり侍りさたほせらるゝ諸本　これよ）
おほせければおの〳〵うちわらひ給ひていよ〳〵御（りしも四十五字印本白本ナシ）
あそひのはえある心地して御門より」いまた神のあ

らそひはなからんとて「しやうきやうてんの女御（はへらぬやらん土本白本よ女院の御かたより白本）
（侍らぬにやイ本）（御うたもよふされける歳本）（本朝語園卷之十に六百番歌合をひきて此うた）
伊勢と　賀茂と　久かたのあまてる月のひかりより（には土椎本）
（たのまず今の本には此歌なし）
あらそふものは賀茂のみつかき（おか土本椎本）
頭註曰伊勢皇太神宮儀式帳云天照坐皇太神「所稱二
天照意保比流賣命一御座地度會郡宇治里伊鈴河上
之大山中云々」賀茂延喜神名式云山城國愛宕郡賀
茂神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）四季物語四月條云當社はむかし
山との國高鴨にものし給ふ事天武のすへらきの六
させにあたるきさらきのころ此みやこにうつされ
さたんみつかきいかめしうたゝせおはしましぬ仁
和のはしめのさしになんもろ〳〵の國に一のみ
やをさため給ふその時此みつかきを山城の國の一
の宮に定められかけまくもかしこき御事よ一人の
御まかきの御國を守らせ給ふにこそ
「女」（白本ナシ）院の御かたより　八幡と　熊野と　いはし水き
よきなかれもわすられ（れゝと土本白本イ本）すなほ身にしむはみくまのゝ（みにしむものは土本イ本）
浦
頭註曰八幡朝野群載卷之十六云石清水八幡宮略記
云右行敎恒時欲レ奉レ拜二大菩薩一爰以二去貞觀元年一

參二拜豊前國宇佐宮一夏九旬已畢欲レ歸二本都一之間（中略）同廿五日夜示下宣可三移座二之處上石淸水男山云峯也吾將レ現二其處一者驚奇向二南山城國一巽方山頂和光垂レ瑞宛如二日月光明一云々　熊野延喜神名式云紀伊國牟婁郡熊野早玉神社（大）熊野座神社（名神大）

その丶ち御門より仰られけるは（ろ丶は活本印本白本）みめよくしなたかくやさしき上﨟の「よもき」（活本印本ナシ）むくらにとちられて

頭註曰上﨟職原抄卷之五云不レ謂二是非一二三位典侍號二上﨟一著二赤靑色一候二御陪膳一也　海人藻芥卷之下云女房次第大上﨟と申は攝家の御女也上﨟とは三家等の大臣の女也

あさましくすたれてなくさむもの（こと藏本）とてはうたをよみ管絃をし日をおくり（くらし諸本）へかたからん（たらん白本印本）とまたとしより（はて土本）。「いやしき」（活本白本柳本ナシ）たるおきなか「せいとうの上俵の中にゐ（せにのたわらによりかヽりて土本椛本）（たはらによりかヽりて活本印本白本）て」

頭註曰せいとう杜少陵集偪側行詩云方外酒徒稀醉眠速宜二相就飲一一斗一恰有三三百靑銅錢一」異本に錢の俵によりかヽり云々明淸按するに錢を俵につヽみしことは太平記卷の三十五靑砥左衞門の事をいへる條に錢を三百貫俵に裹て後ろの山より潜に靑砥左衞門か坪の內へそ入れたりけるとみえたりさて俵の字をたわらといふ義に用ひしことは漢籍にはたえてみえねと我朝にははやくよりしかよませしとみえて延喜雜式に凡公私運米五斗爲レ俵仍用二三俵一爲レ駄なとみえたり

翁か「さいはう」（もの活本印本土本白本）こそわこせかものよと

頭註曰わこせ平家物語卷之一云入道相國いて〳〵さらはわこせかあまりにいふ事なるにたいめんしてかへさんとて御使をたてヽめされけり

「聲のいとわなヽきて（わなヽきふるはん土本白本椛本）いはんとは」いつれ「なるへし」（に心よるへし土本）とて「わかき」（白本ナシ）女はう。（たち印本白本）の中へと「仰ければわかき女（これより下三十五字は白本印本にナシ）房たちはおの〳〵かはあかめいか（かた印本）ヽ申さんとおもはれけれは」（けれは白本此十二字白本ナシ）御すヽり下され。「それ〳〵と有けるほとに」（これより下印本ナシ）內侍のすけ「とて中宮の御かたに侍るかかくなん」あちきなし富の小河のなかれより苔むすやとに（の白本）月をなかめむ

頭註曰とみの小川聖德太子傳曆卷之下云斑鳩（イカルカ）之宮

小河之絶祉我王之御名者忘目（ヲカハノタユハコソワカオホキミノミナハワスレメ）このうた拾遺哀傷之部にもいてたり　本朝文粹巻之十一奉レ賀ニ村上天皇四十御算一和歌序云行基菩薩臨ニ難波津一贈ニ於婆羅門僧正一達磨和尚至ニ富小河一寄ニ於斑鳩宮太子一

「また春宮より」（活本印本白本ナシ）源氏の女三のみや柏木のゑもんのかみの文をしとねの下より

頭註曰しとねのした源氏若菜下云よへのかはほりをおとしてこれは風ぬるくこそ有けれとて御扇をおき給ひてみたまふに御しとねのすこしまよひつまより朝みどりのうすやうなるふみのおしまきたるはしみゆるを何心なく引いてゝ御らんするに男の手なり云々

「源氏」（活本印本白本ナシ）にみつけられ。あさましきと。（し柳本　また印本イ本）うき舟の「匂ふ」（活白本ナシ）兵部卿「しのひてかよひたまひしを」（のこさな活本印本白本柳本）かをる大將に（すゑのまつ諸本やま活本）しられたてまつり一「たまひて」（活本印本ナシ）「岩根か松」とかきてつかはされたりしこゝろとは（印本白本）

頭注曰すゑの松同浮舟巻云御經の例よりしけきにつけてもものおもふ事さま〳〵也たゝかくそのたまへるなみこゆるころともしらす末の松まつらん

とのみおもひけるかな人にわらはせ給ふなとあるをいとあやしと思ふにむねもふたかりぬ云々（兵部卿の宮活本　土本白本命婦の）

いつれか「つらかりけん」（かなしかりける柳本　有しかは活本印本白本）と仰けれは

君（柾本女三の君藏本）　うきふねの身をこかしけるおもひよりし（れ柾本）とねのしたにしくものそなき「ひかるけんしの」（柾本ナシ）か

（活本印本白本なとにはたほろ月夜の内侍のかみこうきてんのほそさ）うきてんのほそさのをたゝすみありきたまふとてお（のにてあひそめしけんしの心さおちはのみやな夕きりの大將なのにてみそめわりなきさはいつれさありしかはとあり）ほろ月よの内侍のかみに

頭註曰おほろ月夜同花宴巻云ふかき夜のあはれをしるもいる月のおほろけならぬちきりとそおもふとてやをらいたきおろしたるさまはいとなつかしうおかしけなり（こゝの文いさなかけれははふきてしるしつ）

逢そめ「給ひ」（柾本ナシ）し御心と夕きりの大將の小野にて

頭註曰夕きりの大將同夕霧巻云小野といふわたりに山さともたまへるにわたり給へり（中略）とかくきこえよりて御せうそこきこえつたへにゐたりいる人のかけにつきて入り給ひぬまた夕くれのきりにとちられてうちはくらくなりにたるほとなりあさま

しくてみかへりたるに宮はいとむくつけうなり給
ひて北のみさうしのとにゐさりいてさせ給ふをい
とよくたとりてひきとゝめ奉りつ　壬生二品集上
はる〳〵とかすみくれぬる山のはにおほろ月夜
　のかけそいさよふ
（荏本ナシ）「落葉の君に」みそめしわりなさとは「（荏本ナシ）いつれならま
しとありけれは」春宮の御めのと。（子印本）大納言のすけ（君土本）
（むき諸本）落初しおちはのうへの露よりもおほろ月夜のかけそ（かみイ本）
（こ白本イ本）さひしき　手のよからんとことはのたらひたらんと
（これより下二十七字荏本ナシ）「はいつれなるへきと女院おほせられけれはつち御
門の中納言　しきしまや大和こと葉のあるなれ（りぬ諸本）はみ
るかひもなき水くきのあと
頭註曰大和ことは源氏薄雲巻云もろこしにははる
の花のにしきにしくものなしといひはへめりやま
とことはには秋のあはれを取たてゝおもへる云々
續古今賀後京極攝政前太政大臣　しきしまや大和
ことはのうみにしてひろひし玉はみかゝれにけり
みつくき古今六帖服飾之部ふみ伊勢　みつくきの
かよふはかりをすくせにて聞しなからにはてぬと

やきく　大和物語巻之一　大澤の池の水くきたえ
ぬともなにかうらみんさかのつらさを　源氏夕霧
巻云なみたの水くきにさきたつこゝちしてかきや
り給はす云々さて水くきの事は圓珠菴雜記また玉
かつまなとにいへれとところせけれはここにはも
らしつ
（活本ナシ）「中將の君」遠（あいさ諸本）くて稀にあふと（しの諸本）　近くて不（すかたさ諸本）逢戀と　よ
そにみる花のすかたをおもひてもあひみぬ戀そしつ
こゝろなき
頭註曰はなのすかた　源氏花宴巻　おほかたには
なのすかたをみましかは露も心のおかれましやは
新拾遺春下藤原清輔朝臣　年をへてわか身もあら
すなりゆけとはなのすかたはかはらさりけり
（この下一字活本印本白本荏本ナシ）「又關白のそく大納言より」柏木のゐもんのかみ。（の土本）
頭註曰かしは木源氏柏木巻云やむ藥ならねはかひ
なきわさになん有ける女宮にもつひに對面しきこ
え給はてあはのきえいるやうにてうせ給ひぬ云々
同須磨巻　うらにたくあまたにつゝむ戀なれはく
ゆるけふりよゆきかたそなき
（この十字活本印本白本ナシ）「女三の宮のおもひゆゑ」むなしくなりし。（おもひ土本）と有明の

大將の山ふかく入しかなみと（し本）「はいつれなんとあ（この十三字白本ナシ）
りけれは「新大納言」（活本印本白本ナシ）「おもひつる月は來んよをたの（いつ活本土本白本イ本）（こよひ活本印本）
むともきえし煙のゆきかたもなき（そ諸本）
頭註曰これより下四首のうた諸本になしたゝしみ
めのことはさきにみめとしほとゝいへるくたりに
いへれは今はいはす
二條の「右大將」（内侍白本）みめと　ふりと　さしすこすうち
しめやかにふりをみんみめもみさまも何にかはせん
頭註曰ふり乳母草紙云かしこきはあくとも善とみ
ゆる人の上にあしきことをみて我ふり心をなほせ
はすなはちあくをせんとせり云々
はむろの藏人　くまなき月と　おほろ月夜と「照り（新古今春）
もせすくもりもはてぬ春のよのおほろ月夜にしくも（上大江千里また源氏花宴卷）
のそなき　二條の少將　花と　梅と　八重さくら青
葉ましりの色みれは（なし藏本）うめのにほひもわすられにけり
頭註曰はな明清按するに花とのみいひては百花の
心にて櫻のみにはかきらぬよしは契沖法師か餘材
抄に菅家萬葉をひきいてゝくはしくいへれとまた
櫻のことゝすることもいとふるし源氏若菜下云花
といはゝ櫻にたとへてもなほものよりすくれたる
けはひに物し給ふ云々　長明簸川上云櫻といふ題
に花といへるとかなしまた王かつま卷之四にもい
へれと今ははふきつ猶古事記傳卷之十六木花之佐
久夜毘賣のくたり考へ合すへし又からくにゝも似
たることあり鶴林玉露卷之十三に洛陽人謂二牡丹一
爲レ花成都人謂二海棠一爲レ花尊二貴之一也などあるを
おもふにやまとにもから國にもみなたふとひめつ
るはなをは櫻にまれ海棠にまれ花とのみいへりと
みゆ
三條の大納言　たなはたのとしに一夜をまつこゝろ
と宇治のはし姫のとはんともせぬ人をまつ心とはい
つれならんとありけれは左大將「たなはたの一夜の
秋もたのみありまつもむなしき宇治のはし姫
頭註曰たなはた荊楚歲時記云七月七日爲二牽牛織
女聚會之夜一琅邪代醉卷之一引二述異記一云天河之東
有二美麗女人一乃天帝之子機杼女工年々勞役織二成
雲霧絹縑之衣一辛苦殊無二歡悅一容貌不レ暇二整理一天
帝憐二其獨處一嫁二與河西牽牛之夫婿一自後竟廢二織
紝之功一貪レ歡不レ歸帝怒責歸二河東一但使下一年一度

與ニ牽牛ー相會上る（このこゝを其まゝ作りた詩侯鯖錄に見にたり） 明淸云今の述異記にこの文なし　古語拾遺云令ニ天棚機姫神織ニ神衣ー云々　萬葉卷之十秋雜歌七夕　天漢水左閉而（サヘニ）照舟竸舟人（ワタリフテコクヒトニ）妹等見寸哉（ミエスヤ）　この外代々の集にいとおほくしてあくるにいとまあらすまた公事根元卷之下云乞巧奠略上天平勝寶七年にはしまるおほよそけふは牽牛織女ふたつのほしのあひあふ夜なり云々　今の續日本紀には此事なし猶ひき出へきふみからやまとにくさ〳〵あれとところせけれはいかゝはせん　はし姫源氏總角卷　中たえんものならなくにはし姫のかたしく袖やよはにぬるらん　古今戀四よみ人しらす　さむしろに衣かたしき今宵もやわれをまつらん宇治のはし姫このうた奥義抄にもみえたれとことなかけれはもらしつまた會家物語八之卷にもこのとみえたり

「おの〳〵かやうにあそはしぬれは」（この十五字活本印本土本白本ナシ）是まて（にてイ本）四十二首にそなりにけるなかにもさきはの大將のしやうやう（なりぬれはいろ〳〵にさためおはします諸本）しんか歌にそまつりてんはかゝりけるつき〳〵十一首（それより活本白本十首椛本そかゝりける活本白本　四十二首藏本）に「てんをそ」かけられける（白本土本ナシ　おはします土本）

頭註曰うたに點すること關秘錄卷之二云和歌に點する事は尤傳受有たる人に天子より免許ありていたす程のおもき御事なり云々

「そのゝち」（印本ナシ）御盃まゐりけり（るに印本土本　けるに活本印本土本白本）十六日の夜の月なれはやう〳〵すみのほり。さま〳〵御あそひせ（せ）させ給ふ（に活本印本土本白本）いろいろ「のしやうそくはなやかにしてかりきぬなほし（御そなほしかりきぬすかたにてとり〳〵）めん〳〵にうつくしくせさせ給て」ひき物ふきもの「おもひ〳〵にとりよせ」（たまひて活本印本白本）遊はし給ふ（けるに活本印本白本）中宮の御。かたは「たゝいま」（印本ナシ）二十一にならせ「給ふける」（す活本　おはします印土白本）

頭註曰中宮御とし廿一に云々源氏若菜下云なにごころなくうちゑみてうれしくかくゆるし給ふほどになりにけるとおほす廿一二はかりになり給へとなほいゝしくたかなりにきひはなることちしてほそくあえかにうつくしくのみ見え給ふ

明淸按するにこゝには中宮を女三の宮の上にとりなしてかけりさみゆ

白き「おんきぬに（おんそのなたらかなるに土本白本）」やなき「の五つ（いろはかりなたかしけに）にくれなゐの御袴おなし色の（きなしたまひて活本土本白本　なし色藏本にはゆるし色と有によ）こうちき木丁おしやりさうのこと」「かきならし給ふ」（りゐざせおはします土本白本）「是そかすみのうちのかはさくらなと（この廿六字諸本になしたゝ予藏本にのみあり）

もかくやとおもひける」

頭註曰かはさくら　源氏野分巻云けたかくきよらかにさとうちにほふ心地して春のあけほのゝ霞のまよりおもしろきかはさくらのさきみたれたるをみるこゝちす云々こは夕きりの大将の紫の上を見給ひしくたりなりまた新撰六帖第六　ひつかはのきしにゝほへるかはさくらちるこそ春のとちめなりけれ　活本土本白本なとには是そかすみのよりかくやと思ひけるまてのことははなくて其あひたに只今御さとへおはしますへきをみかとはあかすかなしくおほしめしけりとあり　また御門は御ひは云々のうへに活本印本白本なとには中宮の御かほによくかよひたまへるもことさらうたしとみかとは御らんすとあり　また和琴をひき給ふ云々のしもに土本白本なとにはおもしろくきこゆるにみきのおほいとのそのころあささくらうたひてとあり

御せうとひやうゑの「すけ」(きみ土本)。なほし(うきおりものに土本白本)けさうはなやかにしてよこ笛ふき給ふ(かみ白本)。くまなき月(御さま印本白本土本)にさしむかひてうつくしともおろかなり御門は御ひはをひかせ給ふ

女院は和琴をひき給ふ(りうのしらへにて土本白本)大将はこゝのやく四位の少將はせうのふえ三條の中將しやうかをしらへたまふ花山の院の侍從の君は

頭註曰明清云こゝに花山院侍從君といへるはまへにみえたる岩根の松やまさるらん云々といへるうたの作者なるへし

また童すかたにてひちりきをふきたまふ「とりとり(これよりしも三十五字土本白本にナシ)のやくともにて管絃をしてあそはせ給ふおもしろさたとへんかたなし」(かつかせおはします活本)女院。より(の御かた土本白本もみちの御きぬ)くれなゐのきぬ「を侍從のきみに」(土本白本ナシ)かつけさせ給ふ「侍從まことにおもはゆけなるけしきにみえさせ給ふ」(これよりしも廿二字活本印本ナシ)かりそめ。の御(ふり土本)遊ともなれともこゝろをすまして

頭註曰活本印本土本白本異本なとにはかりそめふりの御あそひとおもへ(さも白本柳本)とものしもはいたくかはりてことさら身にしむはかりなりやうやうあけかたになりゆけはみかとはくわんきよならせおはしますときはの大將はないしのかみのおもかけかたときもわすれすおほしこかるゝつねにはあさからぬことにそ聞えしとあり

おもしろきことたとへんかたなし聞人も心をうこかし天人のやうかうもかくやらんとおほえけるやうやう夜もあけかたになりしかは名殘ををしみつゝ御かた〳〵さまへそかへらせ給ひける

頭註曰天人影向　雜阿含經第四十八云過去世時拘羅國有二彈琴人一名曰二麤牛一於二拘薩羅國一人間遊行止二息野中一時有二六廣大天宮天女一來二至憍薩羅國麤牛彈琴人所一語二麤牛彈琴人一言阿舅云々爲レ我彈琴我當二歌舞一麤牛彈琴者言如レ是姉妹我當二爲レ汝彈琴一汝當語レ我汝是何人何由生レ此天女答言阿舅且二彈琴一我當二歌舞於二歌頌中一自說レ所二以生レ此因緣一彼拘薩羅國麤牛彈レ琴人即便彈レ琴彼六天女即便歌舞云々　洞冥記卷之三云帝常夕望二東邊一有二青雲起一俄而見三雙白鵠集二臺之上一倏忽變爲二一神女一舞於臺一握二鳳握之簫一撫二落霞之琴一歌二青吳春波之曲一帝舒二闇海去落之席一散二明天發日之香一猶みくにふみには政事要略卷之廿七本朝文粹卷之二江家次第卷之十また江談なとくさ〳〵のふみにみえたれとみなもらしつ

朱書入云光中按續詞花集詞書におほひかひめしたると有て作者兵衞とあり此作者或高經女又兼茂女なと說々ありて時代たしかならねと古今後撰に歌みえたれは山家集よりは先此かたを引へき事なり猶語林類葉二稿にくはし

補遺

是より以下八首のうたは諸本に有て此本にのみなけれは今別に書之（諸本）　皇后宮のみやより　かひおほひと手まりと　くろかみのみたれてさわく（なつろイ本）まりよりも貝におほへる袖はなつかし

頭註曰かひおほひ山家集下　いまそしるふたみの浦のはまくりを貝あはせとておほふなりけりこのうたまた夫木雜廿五にもみえたり　長門本平家物語卷之十六云をりしも御あそひのほとなりけれは御前へまゐりて御かひおほひなとしてあそひ給ひける云々　增鏡第五うちの〻雪の條に云（上略）らんこ貝おほひてまりへんつきなとやうのことゝも思ひ思ひにしつゝ日をくらし給へは云々　つれ〳〵草云貝をおほふ人の我まへなるをはおきてよそをみわたして人の袖のかけひさの下までめをくはる間にまへなるをは人におほはれぬ云々

仙御湯殿記にも見たり　手まり　明月記嘉祿三年十一月十九日條云午時參ニ大納言殿一則見參云々手鞠五節綺枕燒石裹檜扇墨筆檀紙每レ句置レ之云々東鏡貞應二年條云正月二日於ニ若君御方一有ニ手鞠會一

平治物語上卷云先一の箱の修禪定の具足の中に勢手鞠許して音有物あり　沙石集卷之二禪鞠とて座禪の時眠をさまさんかために頂におく手鞠のやうなる物を云々　辨內侍日記上卷云みな御所へ御まゐりあり殿よりかへてのえたに手まりをつけてまゐらせ給ひたるを云々

鶯と　子規と　（諸本）鶯のはつねよりなほほとゝぎすねさめてきくもよはの一こゑ　近衞の大將より　花と紅葉と　（同）もみちはのちりゆく秋の夕へより花にものうき風をうらみむ　（備活本）女一宮御ものゝけにてわつらひ給ふ頃世尊寺の僧正御加持に參り給ふをめして　せんほふと　らいさんと　（同）なむしゝんよりすちりたる聲よりもおほさかなれやれいしれいさん（活白本て同上）

頭註曰世尊寺　本朝無題詩卷之九云山寺中春日世尊寺即事　菅原在良（朝臣）世尊寺裏幽閑處閑レ鳥窺レ花動ニ眼神一　百練抄卷之四云長保三年二月廿九日右大辨行成供ニ養世尊寺堂一件寺故中納言保光卿舊宅也云々拾芥抄下（諸寺部）世尊寺（大宮西五條本名桃園保家中納言太政大臣伊尹家云々）

加持　大日經入眞言門住心品云毗盧遮那如來加持故奮ニ迅示ニ現ス身無盡莊嚴藏一　高野大師即身成佛義云加持者表ミ如來大悲與ニ衆生信心一佛日之影現ニ衆生心水一曰レ加行者心水能感ニ佛日一名レ持

せん法　明淸云懺法にくさ／＼あれと法華懺法なるべし天台大師の編輯にてあまねく世におこなはるれはなり　延喜十四年勅撰諸宗章疏目錄天台宗部（延曆寺玄日錄）曰法華懺法一卷とみえたり今黃蘗藏中輔字の函に收むるところの法華三昧懺儀一卷廿四紙は即同本にて廣略異同有　らいさん　亦曰禮讚に二種あり禮懺と禮讚となりさて其二種に又おのおの數品あり爰に對せるらいさんはいつれともわきかたけれと密家の金剛界禮懺か淨家の往生禮讚にやあらん　（大唐不空三藏譯）金剛瑜加三十七尊禮一卷これ密家にいへる禮懺なり高野大師請來目錄曰金剛瑜加三十七尊禮一卷四紙とのせられたり今黃蘗藏中隸字の函に收めて五ひらあり是も流布本と廣略小異

ありとて淨家の禮讃は善導大師の撰にて一卷卅三
紙あるもの流布の本とす　ていしていさん　亦曰
ていしていさんと云る事は別本にはなくてたゝ流
布の本のみにあり六根懺悔段云諸佛菩薩慧明法水
願以洗除以是因縁令我與法界衆生眼皮一切重罪畢
竟清淨懺悔已禮三寶（第二第三亦如是）とみえたり今按するに
らいさんのかたは南無至心云々といへることをい
くたひもくりかへして唱ふれはよりすちりたる聲
といへるかまたせんほふのかたはくりかへして三
度唱ふへきを第二第三とのみ云て再び唱へされは
さておほとかとはいへるなるへし

あちきなし富の小河のなかれ（花本白本異本）よりの下こうきてんの
御匣殿おなし心を　流れある富の小川に（の）すみなれて（むなれは白本）
苔むす宿をよそにながめん　小侍從のつぼねとて大
將の御めのと　（白本）恨みあると　思へどもかなはぬと
恨て（異本）もなく（白本）さむことのありやせんおもひかひなき身
こそつらけれ　はれぬおもひと　ふらるゝ（ふるさるゝ白本）身と　ふら（ふるさるゝ白本）
れぬるうき身は後もわすれなん（ありぬへし白本）はれぬ思ひそやるか
たもなきうへの御た[illegible]しひやうふのすけ　待人の來

ぬと　忍びてあはぬと　むらさき（白本）の露わけかぬる道
よりもたのめし人のとはぬ身とうき
拾遺集にみつね忠峯か問答歌をのせたりこれ等をも
て物をあらかひしはしめにやあらんまたこの書の名
とせる物あらかひといへることゝ増基法師か熊野の紀
行又は後撰集なとをやよりところとはせんなほこれ
らよりくたりても歌合の判の詞にかへたる歌なとも
みなこのすかたなるへしされはこゝろをも名をも是
によりかれにもとつきてとれることとすへていとたく
みにもいとをかしくもつくりなしたる書なれと世に
おこなはるゝことすくなし今は印本さへまれになり
もてゆきてしかも誤字脫文いとおほかるのみかはそ
のすゑにあらぬ長歌二首とみしか歌廿首とをのせた
るはいつの世にかまきれいりたりけむさはかりみた
りかはしきをあかぬことにおもひてこのころ山本明
清といふ人そのあまれるをはふきたらさるをおきな
ふついてになほかたふかるゝふしふし考へたゝし
て標注をもくはへたるか考證にくはしきこと異本に
とめることとたとへ世のおい人なりともかいなてのき
はのくはたておよぶべきことかはそもそもこの人は

しもかくはかり學のすぢにはいと贅ひたれとさし
また世にすこしあまれるばかりのわかうとなりまた
この書のはしかきものせし伊場至清といふ人才にも
よはひにもとめることこの明清にならふへくなむし
かもかくいへるおのれさへまたおいのさかひにもや
ゝはるけきよはひなるをかゝる人たちのわが門にし
もいてきぬることよおのれも世のさきはひ人のかす
にやいりなましあはれうれしきわかうとにこそかく
いへるは文政つちのとの卯にあたれるとしむ月はし
めになむ

岸本由豆流誌

鳴門中將物語考證

提要

鳴門中將物語一名なよ竹物語こは作者ならび時代つまびらかにしれがたけれどおしはかり思ふにこの物語の末の詞にこの後嵯峨院云々とありてしかも文永の頃撰びし風葉集（この集文永八年にえらびしよし序中に見えたり文永八年は後嵯峨院崩御の前年也）にも此物語の中の歌をのせざれば後嵯峨院崩御より後の作なる事論をまたずされど乳母草子（この草子の文中に北條高時朝臣の北方の事見えたれば南北朝のころの書なるべし）に人のいらへのことば上中下に三つあるものにて候おやしゆうのいらへはをと申はうばいたちあふなかはやとこたへ候めしつかふものなどにはえいとこたへ候なよ竹といふものを御らんじ候へ女房のいらへの本にはすべきかなるとの中將をほめたるも女房の心えのいうなるによりてこそみかどをはじめほめをのゝきたることにて候へ云々また後の普光園院のおほきおとゞの思ひのまゝの日記三月御鞠の條になよ竹のあぢきなきものおもひつきたるいろごのみども、おほく侍るとかや云々などもあれば後嵯峨院の御後いたくもおくれざりしものと見えたりまたこの物語を古今著聞集第八の卷にのせたりこれいと心えがたしいかにとなればかの集の作者橘成季が自序に建長六年と見えたり建長は後深草院の御宇なれば御父後嵯峨院のまだ太上天皇にて世にましましゝほどなるに後嵯峨院と御諡をしるしたるこの物語を著聞集のうちにのすべきいはれなきをやもしまたしひてこの物語を著聞集と同時につくりしものぞといふ人のあらんには文永にえらびし風葉集にこのものがたりの中の歌をのせざる事あるべからずされば思ふにこの物語は著聞集より後につくりしものなれどこともをかしく紙のかずもいさゝかなれば後の人のさかしらにかの集の中にはくはへつるにこそすべてかの集にはこれなみにかたぶかるゝ所この外にも見ゆれば心して見るべし

この物語の一名なよ竹物語としもいへるはこの中の詞にも見えて又御歌に「あだに見しゆめかうつゝかなよ竹のおきふしわぶるこひぞくるしき」などあるによりて物語の名とはせるなるべし今考ふるにこの物語を乳母草子思ひのまゝの日記などにはなよ竹としるしたればふるくはなよ竹とのみいひて鳴門中將

とはいはざりしか其思はるれど予がもたる本にも鳴門中將とし外の本にも皆しかのみあればなよ竹と云るかたふるしとは思へど今は書名を改たむる事なし
今こゝに校合せる本は繪卷物にてありし本とまたわが友高島千春がもたる繪卷物および群書類從本古今著聞集おなし異本などをもて校合せりその異同はみなかたへにしるしたり
本書に主上と申奉るは後嵯峨院の御事なるにのする所の公卿の官位のついでを考ふれは後深草院の建長三四年の間にあたれりこは後嵯峨院の御在位のほどのことを後にしるしたれば公卿の官位をしるし誤れる歟又はのちの官位を前におよぼしてもかける歟
そも〳〵おのれちかきころより著聞集考證をつくらんの心ありてこれかれくりかへし見るついでにまづこゝろみにこの物語に考證をくはへつるをふみあき人に見せしかばおのれ板にゑりなんといふにまかせておなじくはとくおほやけになしてれいのごと春のはじめのおくりものにもせまほしくとみに板にゑらすることはなりぬさらでだに世にいとまなきをりなるをいとゝいそがはしげに筆をとりてかきをはりぬればいひもたらず引ももらせることのおほかりぬべけれどかのことわざにひとますがめにふたますはいらじなどいへるかごとたとへほどふともみじかきさえもてたけたることをばいかでなし得んとてそのまゝ筆をおきぬるは文化十四とせといふとしのしはす末つかたはるちかしとはいへどふくかせさゆるまごのもとにしるせるは椛園のあるじ岸本由豆流になん

一本繪卷物發端

一段 第八十四代の王土御門院二御子父御門配所にて崩御のゝち大納言通成の御もとにかすかにてわたらせ給へは御位の事はおほしめしもよらす仁治二年の冬のころ八幡へまいらせたまひて御出家のいとま申させ給けるあか月御寶殿のうちより德是小辰椿葉之影再改とすゝのこゑのやうにてまさしく聞えさせ給けれはこれこそは示現ならめとおほして御下向有て通成のもとへいらせ給はて御祖母承明門院へいらせ給ふ

八幡にまうてさせ給ふところ御童形なり

二段 年もかへりぬ正月九日四條院十二歳にて禁中にてにはかに崩御のよしのゝしりけれは持明院の御方樣には御位につかせ給ふへき人もおはしまさす定て佐渡院の宮たちにそ御即位侍らむすらむとてきゝわきたる事はなけれとも時の官人四辻の修明門院へ參りつとふに天照大神の御事にや侍りけむかまくらより城介上總介二人はやうちにのほりてひそかに承明門院へまいりて御位は阿波院の二宮とさため申侍てやかて法性寺殿一條の大相國へも申入て下りぬ京中上下あはてさはきて今更土御門の女院へ我も我もと參り集まるある人御直衣をとりもあへすまいらせて侍けれはこの直衣はことの外に地いさし(本ノマヽ)こと人のれうにやあらむと仰られて佐渡院の宮へまいらせつためにやとおほしめしてあはれにおほされけり正月廿日春宮にたち給ふ其夜やかて御元服同三月十八日御年廿三太政官の廳御即位冷泉の太相國の御女女御にまいり給ふ后々(本ノマヽ)たち給て中宮ときこえさす宮々いてきさせ給て位につき給て後は二代の國母にておはします

承明門院にはやうち來たるところ築土なとくつれたり

三段 春宮に位ゆつりたてまつらせ給てのち嵯峨の大井河東はうつまさ常盤のもり躬恒かこかのありす川とよみし所にしは御子さの宮の舊跡龜山の麓わさと前水をなかし石をたてされと勝地なり南は大井川遙になかれて法輪寺のはしよこたへ北はさかの正身二傳の釋尊淸涼寺にましします眺望四方にすくれ四神相應の地なりそれにいまた位の御時に以下本文やよひにつゝく

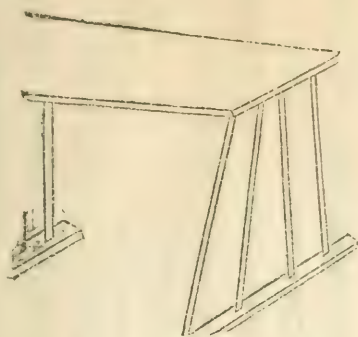
三段 御鞠あそはし給ふ女房あまた見物するところ 柳櫻楓松 如此御庭むしろをしかれたり四樹の根は○如此むしろを切拔たり

主上をはじめて五人袍のはた袖しろし

同段
左衛門の陣前にて藏人女房にものいふところ

四段
藏人仰ことかうふるところみとりの裝束おいかけかけて

五段
簀子に蹲居したり殿上人衣冠にてむかひをり
人々御かはらけ奉らせ給ふあそひするところ
こゝも主上をはしめて公卿のはた袖しろし
すのこ敷横に板をしきたり

六段
文衡か家に藏人いりをりあるしうらなふところ
板廂のいやしき車あり

圖の如き榻あり

七段
清涼殿にて最勝講おこなはせ給ふ所聽衆の公卿は皆東のひさしに列座せり前庭に裹頭の僧いと多し

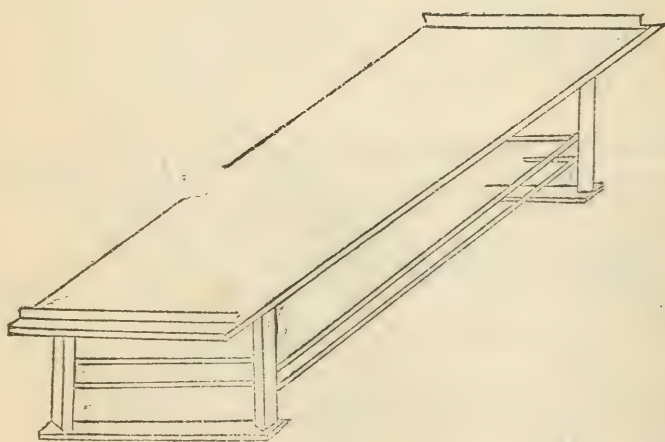
けさの紐を如此せるも五人ましれり

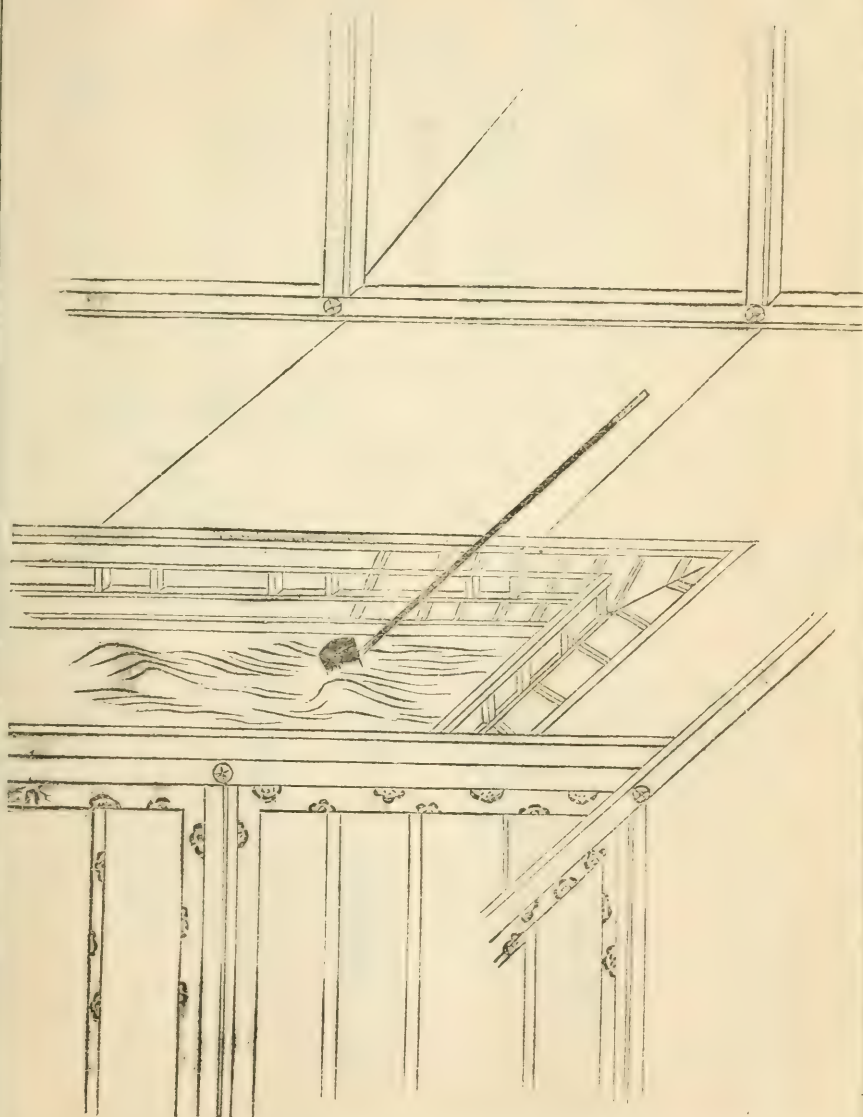
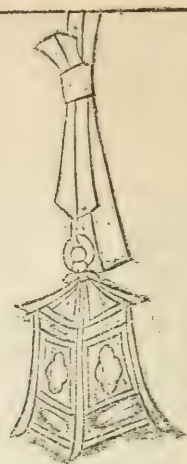
こゝも簀子しき清涼殿の板を横に敷たり前庭に竹臺あり

仁壽殿の西廂に女房おほく居たり

八段
少將のもとに藏人御使に來たり車より文筥をとう出て仕丁のたまはるところ次に少將のまへにて女房なけくさましたり

家はいたく荒たり

少將の前に文筥
硯筥なとありつ
ねのやうしたり

圖の如き
机あり

九段
小宰相君にをの字のこゝろをとはせ給ふところ
泉殿とも云べき御殿のさまなり次にその大よそをしるすを見るへし

十段
清涼殿にしてかの女房にかたらはせ給ふところ

此圖を形として近年此燈爐御再興ありき

出しきぬの圖いと明白なり

十一段
かの少將中將になりて參賀せらるゝところ蒔繪の太刀に柄に裾をかけられたり隨身四人いちひはゝきしてみな松をともしたり白丁も松をもたり童ひとり退紅ふたりしたかへり

奥書云

本云

なると中將一卷

詞書　飛鳥井故一位雅章卿眞筆

繪　住吉如慶筆

享保十六年亥霜月二日寫之

右一卷享和元年辛酉秋七月四日書寫了
源朝臣安寛

右書令源朝臣恒之摸寫畢

一本繪卷物發端ヨリ是迄ハ黑川春村翁ノ書入ナリ

鳴門中將物語考證

（一本无）「いづれのとしの春とかや」（イ三段つゞき）やよひの（ころイ）（イ无）「花。ざかりに」（の著）
（美イ華イ）和德門の御つぼにて
頭注云　口遊云今案式乾門東無₂僻仗門₁綾綺殿北有₂華德門₁是不ㇾ載₂弘仁九年定文₁今亦無ㇾ額云々以呂波字類抄には和德門とし拾芥抄には化德門とせり今は和德門にしたかふ猶この事は予か隨筆の中に辨せり
二條前關白大宮大納言（兵著）刑部卿三位。（中將イ）頭中將など（あそはしイ）「まゐ（入人してイ）り給ひて」御鞠。侍りしに
頭注云蹴鞠簡要抄云時節事或云三月上旬也正月公事忩々二月餘寒猶在云々　遊庭祕抄云時節事三十箇條云正月公事忩々二月猶寒云々三月上旬たるべしと云り淸明前二日冬至より百三日に當云々又春の始に鞠上そめん事は甲申の日を可用猶いそき思はゝ甲ならずとも申日を可用也云々　蹴鞠はおほく春のわざ也最勝講のころ御鞠のありし事家長日記に見えたり承元御鞠記には四月貞治二年御鞠記には五月とあれどなべては春の事也
（女房三人イ）「見物のひと〴〵にまじりて女どもあまた」（はり著）見え侍（群ナシ）（けるたうへイ）「ゐなかにうちの」御心よせにおぼしめ（いれさせ群）「すありけり」（してイ）鞠は御心にも（せられければ此女房イ）いらせたまはで（イ无）「かの」女。（房イ）のかたを頻に御らん「ずれば女」わづらはしげにおもひてうち（てたゝすめイ）まぎれて左衞門の陣のかたへ出「にけり」
頭注云拾芥抄云衞門陣左建春門右宜秋門
六位をめしてこの女。（房イ）のかへらん所見おきて申せと（なイ）（侍れ群）おほせ（られイ著）たび（てイ）ければ藏人おひ（いイ）つきて見るにこの女。（房イ）こゝろえ「たりけるにや」（イナシ）いかにもこのをとこすかし（賺）やりてにけんと思ひて
頭注云源氏行幸云うへはそのうちになさけすてすおはしませばなどいとようすかしたまふ云々すかしやりてんはあざむく心なり和玉篇に賺をスカスとよめりこの字の意なるべし
藏人をまねきよせて（へイ）「うちわらひて」（イ无）なよ竹の（くれ竹著）と。（御所）中させたまへ（世間イ群）あなかしこ（いイ）御返しをうけたまはらんほとはこゝにて待まゐらせんといへばすかすとはゆめゆ

めおもひよらで「たゞ(イ无)」すき(好)あひまゐ(いイ)らせんと「する(思よイ)(いイて著)
ぞ」と心えていそぎまゐり。
頭注云すきあひまゐらせん好あひまゐらせん也す(ぬイ)
きものすき〴〵しすき心などいふすきと同じ　古
今誹諧よみ人しらず「梅の花さきての後のみなれ
ばやすきものとのみ人のいふらん　仲文集「すき
ものを花のあたりによせざらばこのとこなつもね
だえせましや　伊勢物語云　これはいろこのむと
いふすきものとすだれのうちなる人のいひけるを
きゝて云々　宇津保俊蔭云うへはあやしくうせぬ
る朝臣たちかなよき女の有所をきゝてすきものど
もはいぬるならんとてかへらせたまひにけり云々
枕草子云いとすきたまへりなどゝうちわらはせた
まへる云々
(四段イ)(ことをイ)
○此よしの奏「し申せ(すれイ)」ばさだめて古歌(ふるうたイ)の「句にてぞ(こゝろにてイ)(あ)」侍
(藏人イ)るらん(イ著イ无)(たイ)
らむと「て」御尋あ「りけ(イ无けるに群)」れどもその座(庭群にてはイ)にはし「り(イ)
(无)た」る人なかりければ爲家卿のもとへ御たづねあり
けるに

頭注云公卿家傳云藤原爲家卿正二位權中納言定家
卿二男建久九年誕生仁治二年二月一日任權大納言
建長八年二月廿九日出家法名融覺文永十二年五月
一日薨
(もイ)(ぬほどに著)(六帖のイ)(新勅撰戀二)(しさでイ著)
とり。あへず「ふるき」歌とて「たかくともなにゝか
(くれ竹)(集、大和、群)(大和物語)
はせんなよ竹のひとよふたよのあだのふしをば
頭注云新勅撰戀二　兵部卿元良親王文つかはしけ
る返しによみはへりける　修理「たかくともなに
ゝかはせん云々　大和物語云おなじ女故兵部卿の
みや御せうそこなどしたまうけりおはしまさんと
のたまうければ聞えける「たかくともなにゝかは
せん云々　後撰春中　坂上是則「さくら花けふよく
見てんくれ竹のひとよのほどにちりもこそすれ
(イ无)「と申されたりければ」いよ〳〵心にく「きこ(くイ)」とに」お
ぼしめして御返し。(は著イ)なく「し(イ无)」てたゞ女(房イ)。のかへらん所(られイ)
(見てイ)を。たしかに見(イ无)て申せとおほせ「たび(あり著)」ければ立か(何がたへかゆきけんみえすイ)(なにかはあらん見えず著)
へり「ありつる(てイ)」門を見るに「かきけつやうにうせぬ」

またまゐりてしかじかとそうすれば御けしきあしくて尋ねいださずはとがあるべきよし「を」おほせらる藏人あをざめてまかりいでぬ

頭注云七十一番職人盡歌合　貝磨「色にいでゝ人に心をくだき貝あをざめはつる戀もするかな

このことによりて御まりもことさめていらせたまひぬ「其後」にがくしくまのだ「ゝせたまひ」て心苦しき御ことにぞ侍りけるに「ある時」近衛殿二條殿花山院大納言定雅大宮○大納言公相○中納言通成などやうの人々まゐりたまひて御遊侍れども

頭注云　平家物語卷四云かやうに花やかにめでたき事ども有しかどもせけんは猶にがくしうぞ見えし云々　增鏡卷六云かの草まくらよりはまことしうにがくしき御事にて姫宮までいできさせたまふ云々

源氏浮舟云心うき身にはすゞろなることもいとくるしくとてまめだちたまひて云々　遊仙窟云五嫂曰娘子把ㇾ酒莫ㇾ嗔新婦更亦不ㇾ致酒巡到二下官一飮乃不ㇾ盡云々

公卿家傳云兼經公家實公三男承元四年五月四日誕生延應二年十二月十四日任太政大臣正嘉三年五月四日薨

同書云良實公道家公次男建保四年誕生嘉禎四年七月廿日轉左大臣文應二年四月廿九日爲關白文永七年十一月廿九日薨

同書云定雅公忠經公三男建保六年誕生建長二年十二月任大納言同四年十一月十三日任右大臣永仁二年二月卅日薨

公卿補任云藤原公相公右大臣實氏公二男曆仁二年十月廿八日任權大納言文應二年十二月十五日任太政大臣文永四年十月十二日薨

公卿家傳云實雄公太政大臣公經公三男建保五年誕生仁治三年三月七日任權大納言文應二年三月廿七日任左大臣文永十年八月十六日薨

同書云通成公權大納言通方卿二男寛元五年十二月八日任權中納言文永六年四月廿三日任内大臣弘安九年十二月廿三日薨

さきぐのやうにもわたらせ給はず物をのみおぼしめすさまにて御ながめがちなれば近衛殿御かはらけ

をすゝめ申させたまふついでにまことにや（イナシ）ちかごろ
ゆくかたしらぬやどのかやり火にこがれさせおはし
まし侍るなるたづね「ゆきき見んに（侍らんにイ）」かくれ「侍るまじ（侍らしイ）」
（ますきこえ侍り高方士にみことのりしてたづねさせたまはん著）
ものを

頭注云　狹衣一「わが心かねてそらにやみちぬら
んゆくかたしらぬやどのかやり火（もかよふまぼろしの著）
もろこしには（まして著）蓬萊まで「たづね侍りける」ためしも侍
るを是は都のうちなれば

頭注云　列子湯問篇云八紘九野之水天漢之流莫ㇾ不ㇾ注之而無ㇾ增無ㇾ減焉其中有二五山一焉一曰二岱輿一二曰二員嶠一三曰二方壺一四曰二瀛洲一五曰二蓬萊一云々　史記封禪書云蓬萊方丈瀛洲此三神山者在二渤海中一金銀爲二宮闕一云々　又山海經博物志拾遺記等にも見えたり　白氏文集卷十二長恨歌云遂敎下二方士一殷勤覓上排ㇾ空馭ㇾ氣奔如ㇾ電昇ㇾ天入ㇾ地求ㇾ之遍上窮二碧落一下黃泉兩處茫々皆不ㇾ見忽聞海上有二仙山一云々こゝに仙山とあるは蓬萊をいへるなり事は長恨歌の全文を見てしるべし

（さすがやすかりぬべし著）
やすきほどのことなりとて御みきまゐらせ（いイ）たまふに
內もすこしうちわらはせたま「へども（ふやうにてイ）「さして與せ（辭ナシ）
させたまはず」そゞろがせたまひていとゞせたまひぬ

頭注云　新撰字鏡云悤所立反不滑也曾々呂加奈利　濱松中納言物語云はなやかなる心ばへしたる人にて人をもしばしとないがしろに思ひておほきにのぼりなばそゞろ心ありてはか〴〵しうもしなさじとおぼえければ云々　源氏紅葉賀云いとゞおよびなきこゝちしたまふにそゞろはしきまでなん（イナシ）云々

（六段イ）「その、ち藏人いたらぬくま（てイ）もなくもしやあふとも（さへ著）
とめありきつゝ神佛に○いのり申せどもかひなし思
ひわびて文平（衡イ）と中陰陽師こそ「富（このごろ著）」世にはたなごゝろ
をさして推察まさしかなれこのことうらなはせんと
おもひてまかりむかひてとひ侍りければまうしける
はこれは內○（々イ）にも承りおよべりゆゝしき大事なり文（神）
平（衡イ）かうら（門イ）はこれにて心み侍るべし火の曜をえたり（はイ）か
みごとなり

頭注云　宿曜經云火曜熒惑胡名云韈波斯名勢森勿天竺名盎哦囉迦　都經幽思詩云赤鳥驚二上天一火曜

舒二乾陽一云々

今日は巳の日なり巳はくちなは。（也イ）このことをするす（いイ）るに一旦のかくれなり「つひ（終イ）」にはあ（わイ）はせたまふべしたゞし火の曜（ゑうイ）は夏の氣にいたりて「御（イ无）」悦なり

頭注云　說文云四月陽氣巳出陰氣巳藏萬物見成二文章一故巳爲二蛇象形一云々　王充論衡物勢篇云巳火也其禽蛇也云々

和名抄蟲豸類云蛇孫愐切韻云蛇（食遮反和名倍美一云久知奈波日本紀私記云乎呂知）毒蟲也云々　史記天官書云察二剛氣一以處二熒惑一曰南方火主レ夏日丙丁云々　禮記月令云某日立夏盛德在レ火天子乃齋云々

くちなはなれはもとのあ（わイ）なに入てもとの所に出べし夏の中。（五月中群イ）にかくれけん所にてかならずあはせたまふべしと申せどもこれも凡夫なれば

頭注云　字彙引二廣雅一云凡輕也今人鄙人爲二凡夫一輕賤之稱也云々　佛性論卷三云次業本一者以二凡夫性一爲レ本凡夫性者卽是身見云々

一定たのむべきにはあらねどもむげにうはのそらな

（たのもしきかたいできぬるこゝちして著）りしよりはこ（つろイ著）「のこゝろ（れイ）」をきゝて後は（は著）つねに左衛門の陣のかたにぞたゝずみける

頭注云　源氏夢の浮橋云日もくれぬれは中やごりもいとよかりぬべけれどうはのそらにてものしたらんこそ猶びんなかるべけれど云々　金葉夏　修理大夫顯季「み山いでてまた里なれぬほとゝぎすうはのそらなるねをやなくらん

「五（七段イ）月十三（六イ）日最勝講の開（闕イ）白の日こそ女ありしさまをあらためて五人つれてふとゆきあひぬ

頭注云　續日本後紀卷九云承和七年正月乙酉於大極殿修最勝會也云々　江家次第頭書云最勝會寛弘六年以來被行也此以前或行或止不定云々　壒囊抄卷五云一條院長保四年五月七日始レ之云々　百練抄卷四云天喜四年閏三月八日殿下於二宇縣一被レ遂二修善事一以二山座主明決一爲二開白御導師一云々　承久三年七佛藥師御修法記云日中御結願有レ之先行道三匝音樂等如二開白一云々

藏人あまりのうれしさに夢うつゝともおほえずあやしまれじと思ひて人にまぎれて見（侍イ群）けれは仁壽殿のに

しのひさしになみゐて聽聞す
頭注云　和名抄居宅類云仁壽殿在紫宸殿北
御講。はて丶ひしめかん時また見うしなひてはいか
ゞせんと思ひて經俊の殿上の口におはする所にて
頭注云　公卿家傳云藤原經俊卿參議資俊卿二男建
保二年誕生仁治三年三月七日補藏人正嘉二年十一
月十一日任參議弘長二年正月廿六日任權中納言建
治二年十月十八日薨
このこと「しか〳〵と」奏したまへとかたらへば只今
中宮一所に御聽聞のほどなりこちなしと申ければ
頭注云　濱松中納言物語云こちなくあやしかりけ
るわざかなとおどろかれて云々　源氏螢云こちな
くもきこえおとしてけるかな云々　同細流抄云皆
實事なるものを無骨に申おとしてありけるよと也
長門本平家物語卷五云こちなしとて日かずをふる
あまりに云々
ちかうおよばず「また傳奏の人や　おはすると見れど
もおはせず」一位殿「宰相のすけに申しかば
頭注云　一位殿云々とあるより下誤ありとおぼし
くて心得がたし今考ふるに一位殿の三字申しかば
とある下にありしを誤りて上にくはへつる歟さす
ればよくきこゆめり
わが御つぼねぐちにて女房とものおふせらる丶を見
あひまゐらせて退りて申けるは推參に侍れど天氣に
て侍りしか〳〵のこといそぎ奏したまへと申ければ
かねてきこえ「ある」となればやがて奏し申させたま
ふに女房して神妙なり「かまへて」このたびはふかく
せで行方をたしかに見。おきて申せと仰らる丶程に
。講はつればタ暮に。なりぬ「この女共ひと車にてか
へるめり藏人わが身はまたあやしまれじと思ひてさ
かさかしき女をつけて見入させければ
頭注云　平家物語卷一云さか〳〵しかりしによつ
て常は院へもめしつかはれけるが云々　義經記卷
四云みめかたちは參らするにつけてはちゞ入て候得
ども心はさか〳〵しく候云々　增鏡卷十云この國
に那波又太郎ながとしといひてあやしき民なれど
いとまうにとめるが類ひろく心もさか〳〵しくむ
ねむねしきものにて云々

三條白川になにがしの少將といふ人の家なりこのよしを奏すればやがて御ふみあり「あだに見し夢かうつゝかなよ竹(くれ竹イ群)のおきふしわぶる戀ぞくるしき

頭注云　萬葉卷二長歌云秋山下部留妹奈用竹乃騰遠依子等者何方爾念居可云々　後撰戀五よみ人しらず「なびくかたありけるものをなよ竹のよにへぬものと思ひけるかな　山家集「われなれや風をわづらふしの竹はおきふし物の心ほそくて

このくれにかならずとばかりあり藏人御ふみをたまはりてかの所にもて行にをとこある人なればわづらはしうてなげくに御使は心もなく(もとなくて著　事イ)御返しをせむればいかにもかくれあらじと思ひてありのまゝにかたれば少將(イ无)さすがにわづらはしげにおもひて男の身にては左右なくまゐら(いイ)せんも(にも群)はゞかりありぬな「かしこ(かまイ群)」といさめん(ひむイ)も便なかるべきことも也人によりて事(はイ)ことなる世なればひとつは名聞なり人のそしり。さも(女イ)あらば(イ无)あれとく／＼まゐり(いらせイ)」給へとすゝむればうちなげきてかなふまじき由かへす／＼いなみければ(ひイ申せばイ群)少將申けるはこの三とせがほどおろかならず思ひかはしてすぎぬるも世々の契なるべしいまゝためされたま(ける)ふも(も著)あさからぬ御ちぎりならんかしやう／＼しくてまゐり(いイ)たまはずは

頭注云　大鏡卷四云おほかた御さまのいといふよりやう／＼しくおはしましたるぞ云々

さだめてあしざまなることにてわが身もおき所なきことにもなりぬべし

頭注云　金葉雜上しらぬ人のよみける歌「草の葉のなびくもまたず露の身のおきどころなくなげくころかな新勅撰雜二　寂蓮法師「さてもまたいくよかはへんよの中にうき身ひとつのおき處なき

よもあしくははからひ申さじとく／＼まゐ(いイ)りたまへとかへす／＼すゝめければ女うちなみだぐみて御ふみをひろげて見るにこのくれに必らずとある文字の(御文著イ)したにをといふ文字をたゞひとつ墨ぐろにかきてもとのやうにして

頭注云　をと云文字を御文にかきたるはをといらへ奉る也下に引諸書を見てもしるべし　書紀神武紀云武甕雷神登謂二高倉一曰予劍號曰二韴靈一今當」

置二汝庫裏一宜取而献二之天孫一。倉日唯唯而竊云々
祈年祭祝詞云神主祝部等共稱唯云々　萬葉卷七云
氏河乎船令渡呼跡雖喚不所聞有之檝音毛不爲　源
氏幸行云いづらこのあふみの君こなたにとめせば
をといとけざやかにきこえておきたり云々　乳母
の草子云　人のいらへのことば上中下に女房は三
つあるものにて候おやしゆうのいらへはをと申は
うはいたちあふなかはやとこたへ候めしつかふも
のなどにはゑいとこたへ候云々

御使に參らせ(いイ)けり「御(九段イ)ふみもとのやうにてたがはぬ
を御らんじてむなしくかへりたるよとほいなくおぼ
しめすにむすびめのしどけなければあけて御らんず
るに此を文字ありとて御(詳ナシイ无)思案あれども御心もめぐら
せたまはずさるべき(るに著)女房たちを少々めしてこのを文(イナシ)
字を御尋ありければ承明門院に小宰相の局とて家隆
卿のむすめのさふらひけるが申けるは

頭注云女院小傳云承明門院源在子後鳥羽妃土御門
母内大臣通親公女母刑部卿範兼卿女正治元年十二
月十三日敍從三位建仁二年正月十五日院號云々
作者部類云土御門院小宰相從二位家隆卿女承明門
院小宰相同人也云々

むかし大二條殿(敎通のりみちイ)。小式部の(イ无)内侍のもとへ月といふ文
字をかきてつかはしたりければさるすきもの和泉式
部がむすめなりければ

頭注云　攝關補任云敎通公道長公男治暦四年四月
十七日關白(左大臣從一位)承保二年九月廿五日薨號大二條
殿良暹打聞云小式部内侍和泉守橘道貞女母和泉式
部上東門院女房云々

母にや申あはせたりけんやすくこゝろ得て月のした
にをといふ文字ばかりをかきてまゐら(いイ)せたり(りイ)けるそ
のこゝろなるべし月といふもじはよさりにまち侍る(もイ)
べしいでたまへと心得けりまた人のめし侍る御いら
へに。男はよと申(は著イ)女はをと申也されば小式部(イ无)の内侍
も。(その夜著)上東門院にさふらひけるがまかりいでゝまゐり(いイ)
たりければ

頭注云女院小傳云上東門院藤彰子一條后後一條後朱
雀母法成寺關白第一女母左大臣雅信公第一女長保二
年二月十五日爲中宮萬壽三年正月十九日院號云々

いよ〳〵心まさりして「めで(イ无)」おぼしめしけり是も一(必イ)

定まゐり(いイ)侍りなんと申ければ御こゝちよげにおぼし
めしてしたまたせたまひけり
頭注云　蜻蛉日記云もし見たるけしきもやとした
またれけんかし云々　玉葉二懸閑院御製「おほ
かたの春は來ぬるにいかなればしたまつ花のおそ
くさくらん

十段イ「夜もやう〳〵ふけぬれどよるのおとゞ(なイ)へもいらせ
たまはずとのゐ申のきこゆるはうし(丑)になりぬるにや
と御心をいたましむるほどに
頭注云　源氏桐壺云ともし火をかゝげつくしてお
きおはします右近のつかさのとのゐ申のこゑ聞ゆ
るはうしになりぬるなるべし云々　禁秘御抄云奏
時事上古隨ニ陰陽寮漏刻一奏之近代指計藏人仰レ之
丑杭以後爲ニ明日分一云々　侍中群要卷四云夜行事
亥子刻左近勤レ之丑寅刻右近也中重兵衛勤レ之云々
藏人しのびやかにこの女(房イ)にまゐり(いイ)侍るよし奏し申け
ればうれしうおぼしめされてやがてめされにけり漢
武の李夫人にあひ玄宗の楊貴妃をえたるためしもこ
れにはまさり侍らしと

頭注云　漢書外戚傳云孝武李夫人本以レ倡進初夫
人兄延年性知レ音善歌舞武帝愛レ之延年侍レ上起舞
歌曰北方有ニ佳人一絕世而獨立一顧傾ニ人城一再顧傾ニ
人國一寧不レ知ニ傾レ城與傾レ國佳人難ニ再得一上嘆曰
善世豈有ニ此人一乎平陽主因言延年有女弟上乃召見
レ之云々
楊太眞外傳云楊貴妃小字玉環弘農華陰人也後徙ニ
居蒲州永樂之獨頭村一父玄琰蜀州司戶貴妃生ニ於蜀
一開元二十二年十一月歸ニ于壽邸一二十八年玄宗幸ニ
溫泉宮一使ニ高力士取ニ楊氏一於ニ壽邸一度爲ニ女道士一
號ニ太眞一住ニ內太眞宮一是月於ニ鳳凰園一冊ニ太眞宮
女道士楊氏一爲ニ貴妃一上喜甚謂ニ後宮人一曰朕得ニ楊
貴妃一如レ得ニ至寶一也乃製ニ曲子一曰ニ得寶子一云々ま
た唐書后妃傳にも見えたり

御心のうちもかたじけなくさま(うイ)〳〵かたらひたまふ
ほどにあけやすきみじか夜なれば曉ちかくなりゆく
にこの女(房イ)に身のありさまをかきくどきこまかにはあ
らねど心にまかせぬことのさまを奏し申ければま
づかへしつかはされにけり御心ざしあさからずやが
て三千の列にもめしお(なイ)かれて

頭注云　白氏長恨歌云後宮佳麗三千人三千寵愛在ニ一人ニ云々

九重のうちのすみかをも御はからひあるべきにて侍りけるをまめやかになげき申てさやうならばなかなか（ともなりぬ）御なさけにても侍らじ淵瀬をのがれぬ身のたぐひにも（へし著）なりぬべしたゞこのまゝにて人のいたくしらぬほどならばたえずめしにもしたがふべきよしを申ければつひにもとのすみかへ（にイ）かへされて時々ニ（そイ）忍びてめされけり（ろ十一段イ）「かの少將は隱者なりけるをあらぬかたにつけてめし出されて「よろづに（イ无）」御なさけをかけられて近習の人「かず（數イ）」にくはへられなどして程なく中將になされにけりつゝむとすれどおのづから「世（群ナ）こ（シイ无）に」もれきこえて人の口のさがなさはそのころのも（とわざには著）て（イ无）つかひにてなるとの（鳴門）中將とぞ申ける（イ无）なるとのわ（稚）かめ（海藻）とてよきめ（和布）ののぼるところなればかゝる異名をつけたりけるとかや

頭注云　延喜主計式云阿波國（中略）鮨鰒鮨年魚煮鹽年魚雜魚鮨海藻鹿角菜凝海菜云々　忠見集「おとにきくなるとのもとにかづきてしあまよわひしきめを見する哉　誹諧毛吹草云阿波鳴門和布　萬葉卷十六云角島之迫門乃稚海藻者人之共荒有之可杼吾共者和海藻

およそ君と臣とは水と魚とのごとし上としてもおごりにくまず下としてもそねみみだるべからずもろこしにも（はイ）楚の莊王と申きみは「ちよ（てイ）」つあいの后の衣をひくものを（とイ）ゆるしてなさけをかけ

頭注云　三國志諸葛亮傳云先主遂詣レ亮凡三往乃見因屏レ人與計レ事善レ之於レ是情好日密關羽張飛等不レ悅先主曰孤之有ニ孔明一猶ニ魚之有一レ水也願勿ニ復言一羽飛乃止云々　說苑復恩篇云楚莊王賜群臣酒日暮酒酣燈燭滅乃有下人引ニ美人之衣一者上美人援ニ絕其冠纓一告レ王曰今者燭滅有下引ニ妾衣一者上妾援ニ得其冠纓一持レ之趣レ火來上視ニ絕纓者一王曰賜ニ人酒一使ニ醉失レ禮奈何欲レ顯ニ婦人之節一而辱レ士乎乃命ニ左右一曰今日與ニ寡人一飲不レ絕ニ冠纓一者不レ懽群臣百有餘人皆絕ニ去其冠一纓而上レ火卒盡懽而罷云々この事又韓詩外傳にも見えたり

唐の太宗と申かしこき御門はすぐれておぼしめしけ
る后をも臣下のやくそくありとてくだしつかはされ
けり

頭注云　十訓抄云唐の太宗のこゝろがけたまへる
女を小臣契れる者ありとて魏徵いさめ申ければの
さずしてやみたまひける云々　唐書魏徵傳云鄭仁
基息女美而方皇后建請爲二充華一典冊具言レ許レ聘矣
徵諫曰陛下處二臺榭一則欲三民有二棟宇一食二膏粱一則
欲三民有二飽適一顧二嬪御一則欲三民有二室家一今鄭已約
レ昏陛下取レ之豈爲二人父母意一帝痛自咎即詔停レ冊
云々また貞觀政要直諫篇にも見えたり

我朝にもかゝるふるきためしもあまたきこえ侍るに（ゐイ）
（あらんイ群）や。（今の群イ）この後さがのみかどの御心もちひの。（御イ）かたじ
けなさかの中將のゆるし申けるなさけのいろいづれ（は著イ）
もまことに優にもありがたきためしにも申つたふべ
きものをや君とし臣としてはなにごとにもへだつる
心なくてたがひになさけふかきをもとゝすべきにこ（はイ）
そとむかしより申つたへたるもことわりにおぼえ侍
りけり

頭注云　禮記檀弓云事レ君有レ犯而無レ隱左右就養
有レ方云々

右以鈴木安寛翁所藏繪卷物比校了
天保十三年十二月廿二日夜
黑川春村

狭衣物語下紐

宇治拾遺物語私注

唐物語提要

取替早物語考

今物語書入本

今昔物語訓并出典攷

全

狹衣物語下紐第一

此下ひもといふところもの抄はながらの橋のあたりよりよろづの物がたりをあつめ給へる中にも筆のあやまりをうつしけるまゝことはりたしかならざる所所をしるすべしとありしかば古本を見るに心もこと葉もわきがたくて過ゆくに賀茂の神垣ちかき普賢堂の僧衆にちからを合て造營の次ねはん經の箱の底に下紐と外題にある雙紙を見るに明神のあたへ給へると懷中してかへりけり抑光源氏の物語の心見解なば此抄にをよぶべからず一條禪閤宗祇などのもてあそび給はぬにより講釋など絕たるべし系圖は逍遙院殿あそばしけりつれ〳〵のまぎらはしに御覽あらん人人猶あやまりをあらためらるべし

天正十八年初冬に書寫の功をはりぬ沙彌半醒

狹衣系圖

- 醍醐天皇 六十 五十九字多第一皇子
  - 朱雀院 六十一
  - 村上 六十二
    - 冷泉院 六十三
      - 花山院 六十五
      - 三條院 六十七
        - 小一條院 無ㇾ御即位ㇾ
    - 圓融院 六十四
      - 一條院 六十六
        - 後朱雀院 第三皇子 六十九
          - 後冷泉院 後朱雀第一皇子 七十
        - 後一條院 第二皇子 六十八

一條院長德之比源氏物語作ㇾ之寛弘 長德長保 寛弘初也

顯光兼任ニ右大將ー時右大臣

堀河殿此物語に見れは圓融院の二の御子なるべし

- 師輔 右大臣九條殿 坊城殿
  - 伊尹 謙德公一條攝政
  - 兼通 太政大臣忠義公 堀河殿
    - 今上也 狹衣の大將

- 堤中納言 越前守 爲時
  - 紫式部 源氏物語作者 左衛門權佐宣孝ニ嫁ス
    - 大貳三位 狹衣作者

一此物語は源氏物語のおもかけ也夕霧の大將冷泉院などに似たり又花山法皇或は字多御門いまだ王侍從と申奉りし時狩し給ひけるに賀茂の明神現じ給ひて臨時の祭をし給ふべき由申させ給ふに我はさ

やうの事しり侍らすと申させ給へばやうありて申
也とてあがらせ給ひけるがいくほどなくしておぼ
しもよらず御位につき給ひければ寛平元年十一月
より臨時の祭あり
一時代は不ㇾ慥一條院寛弘の比源氏物語作れり四十
年ばかり後歟源氏物語心得たらん人は注釋にをよ
ばざるなり
一少年の春　此發言蹈ㇾ花同惜少年春にてかけり少
年とは若年の心也是は花を蹈と云心なるべし
一中島の藤は引夏にこそさきかゝりけれ藤花松にと
のみもおもひけるかな　古歌のことばばかり也
一ゐてのわたり引春の池やゐでの川せにかよふらん
岸の山吹そこもにほへり　源氏胡蝶卷の俤也
一侍童　同前
一源氏宮　さ衣のいとこ堀川大臣の上は先帝（圓融院に比）の御い
もうと也齋宮にておはしましけりおりゐの後大臣
の得給へりさ衣の御母也中納言中將に源氏の宮の
宮女也
一そひふさせ　二人の宮女へ也
一春宮　後一條院也

一藤のしなひ　綴字也かたくだりとよめり綴照や片
岡の心也
一花こそ花のと　萬葉の歌あるべし此詞にて定家卿
引　にほふより春の暮行山吹の花こそ花の中につ
らけり
一くちなしにしも引　山吹の花色衣ぬしやたれとへ
どこたへずくちなしにして
一さるは　中納言答也
一いかにせん歌　大將の御心を山吹にたとへ給ひて
獨吟也
一たつをだまき引谷ふかみたつをだまきは我なれや
おもふ心の朽てやみぬる　此哥第三卷にありしる
人のなきといふ心也
一もやのはしらにより心くるしきやまで草子の地な
るべし
一むろのやしま引歌　未勘心はかくれなし
一さるはそのけふり　おもひをあらはさんもをよひ
なきにあらて二葉より姉妹兄弟のごとくにしてさ
いふ心なり當時は夫婦を妹背といへり
一大殿母宮なども可ㇾ然おぼしめさじと也

一いまはしめ　是より雙紙地也けれまでなるべし
一故院の御ゆいごん　此邊はやうは中ずみの侍從などいふ異本有レ之
一故先帝のいもうと　さ衣の御母也
一洞院　太政大臣　後一條院御祖父
一坊門　先帝御子式部卿宮の御むすめ也
一今上　さがの院の一の宮春宮也坊門の上の御孫也
一かゝる御中にも　堀川殿の齋宮のおりゐの比親めきてえ給へる御腹にさ衣のむまれ給へる事を書出せり男君さへから狹衣の事也
一二位の中將　さ衣の當官也天道をおぼしめして納言にもなし給はぬと也
一第十六　三十塵點劫昔大通智勝佛と申佛まし〱ける此佛いまた王位の時御子十六人ありし成道の後佛所へ詣して御弟子と成給ぬ入滅の後十六人菩薩達衆生を利益して十方にして佛に成給へり第十六番めの御子則この娑婆世界にして成道をとなへ給へり則今日の釋迦如來也
一おほふばかりの引　大空におほふばかりの袖もがな春ちる花を風にまかせじ

一此世をはかりそめにおほしめして御道心ある故世にありとある人をばおぼしめしかけぬと也さる程に世上人物すさまじくおもふと雙紙に書り
一かごと　そとばかり也
一引　あきの夜のちよを一夜になせりとも詞殘りて鳥や鳴なん詞計也
一引　しほみてば入ぬるいその草なれやみらくすくなくこふらくのおほき
一いなぶち　引　年をふるなみたかいかにあふ事はなをいなぶちの瀧まされとや　大和の名所なりさ衣のおやにくに心をつくし給ふと也此云狹衣の折ふし音信給ふ所々の人の心なるべき也
一野をなつかしみ　引　春の野にすみれつみにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける
一梵網經　梵網經ニ巻花嚴經の結經也一見ニ於女人ニ能失ニ眼功德ニ[illegible]也二條院にて閏五月廿九日に講るに梵網經には無之今よめる梵網經は下巻也又講たれば上巻に有レ之云々
一琴は時ならぬ霜雪降ル相傳あらでは罰があたると云也

一あめわかみこ　降臨日本紀下巻第一有レ之天稚彦

一源氏宮　先帝は圓融院內親王御母は中納言佐也さ衣さ御いさこ也さ衣の御母元は齊宮也の御めい也

一中將の同じごとに　さ衣の中將とおなじごとくにはぐゝみ給へると也

一よしかたる

一いたゞの萬葉引をはたゝのいたゞのはしのこぼれなばけたよりゆかんこふなわきもこ源氏の宮の事にはあらず萬似たるもあるかとかいまみめさるゝなり

一をとなしの　こひ侘てひとりふせやによもすがらおつるなみだやをとなしのたき紀州名所に清原元輔歌引　をとなしの河とそつゐにながれ出るいはてものおもふ人のなみたは此歌叶へり又引　いかにしていかによからんをの山の上よりおつる音なしのたき是は城州

一しのふもぢずり　たゞみだれたるにてもなし忍心なるべし

一大おとゞ　太政大臣の御むすめ今姫君やしなひ給て後一條院へまいらせんとし給へり

洞院の上は堀川のおとゞの北方

一春宮は後一條院　內と申は一條院也

一中將の君內よりまかん出給ふみちに　菖蒲手にさげぬ賤のおはなきと也

一十市の里引歌未勘八雲の御抄に有之只遠さ云心也十市に別に心なし

一かほなども　菖蒲おほく持てわがかほも見えぬと也隨身にとゞめられてかしこまりたるもいたくをひはらひそと御制禁也

一ならひにてさふらへは　隨身答申詞也

一こひのみちをば　くるしきならひと大將御身をつみておほせらるゝ心詞也

一あふぎを笛　あふぎにてふく事俗にする也かばぶえ源氏にあり口にてうそをふくを云也

一はじとみ　半蔀　源氏ゆふがほのまきに似たり

一あれが　女房ども隨身が身にてだにと大將の御くるまのすぐるをあかずしたふ心也

一軒のあやめ一すち　引落てをくれたる隨身にをひ付て奉る也

一歌しらぬまの　白沼歟　しらざる間とかけたるか白沼未レ勘しら波なとの心歟歌はかくれなし

一心ときき　利根なる隨身硯求出たる也
一たゝんかみ　源氏にも此詞ありかたかな源氏にな
し草の文字也俗に大和假名と云也
一みもわかでの歌　軒のあやめもみえぬばかり茸し
ゆへと也
一うちつけげさうなどはわざと御心にいらずたゞあ
るまじき　あやにくに源氏の宮入道の宮などに御
心とゞめ給へり
一色はだへ　紙のはだへよきと也めつらしき詞也
一御歌とも　草子の作者の卑下也
一左大將の女御　後一條院當春宮也さ衣に忍びて逢
給へりけふはあやめと歌にあそばしたり
一こひわたる歌　五日にはねさへと根を兼て也
一一條院のひめみや　三巻にさ衣へ參給へり四巻に
うせ給へり
一ほのかなりしかば　よくも見定給はぬと也少將の
かたへの文の中に　源氏わかむらさきへの御文少
納言への御文の中にとあるおもかげ也
一おもひつゝ歌　ことなるこゝなし
一おなし　筆者もらしつと也

一丁子にくろむまでそそぎたる　事そぎたる心なる
べし
一をとはの山にはなと　引歌あるべし
一うきにのみしつむ歌　しづむ身は中々音もなかれ
ぬと也根も流ぬ也うきは游泥の心なるべし
一そのゆふさり　宣耀殿　五日に御參內と思召にめされたる
と也せんようでんへの御心ざしは也
一父公へ　けふもまだ見えまいらせざりし也
一中宮の御かたに　さ衣の御妹也御母式部卿御むす
め坊門の上也御わづらひ心もとなく思召に御引風
とてまいり給はず又大臣も御煩と也明日御養生あ
りてまいらんと也暑比御退出あれと思召せども御
暇出がたからんと也
一何しに　暑比めさるゝがくるしきと二所してつぶ
やき給ふ也
一うちわ　團也
一さうかん　不レ知
一ふせんれう　浮線綾
一内には　節會なとあらぬ雨中の御さひしさなるべ
し

一大おとゞ　當宮權中納言四卷に一の大納言一品宮を心にかけて中納言の君にかたらひてぬれきぬ云出給ひし人春宮の大夫私此義誤也弟ノ宮也

一左兵衛督　權イ　○中納言御弟　宰相中將は左大將御子也宣耀殿御連枝也

一源中將　さ衣也

一こよひのえんには　合奏なくして獨々との勅定也

一中務宮──少將笙の笛ふき給ふ也
　　　　└姫君　弘徽殿にて大將の立聞の夜人々垣宮の御前にて天稚御子のおりさま繪に書き給ひしさかたる人也

一中にも　さ衣はたはふれにも横笛はまねび給はぬまゝ獨々はいかゞと也

一こよひ　こよひはしめて吹給へと勅定也

一いとかばかりの　如レ此勅定をそむかれんとは思召れぬと也大臣にもをとらず思召たるに此ことさへ無二御同心一は曲事とおほせらるゝ聞かしこまりてよこ笛とり給へる也

一こと人々も　さ衣の四五番め程もなき才にて琴などとかくとおほせられて皆のかはりにさ衣へ琴をと申されければ笛をさへ心ごはきにとの勅定なり

一かうとしらましかば　中將の心ふえなど御所望ならばまいるまじきものをとてわさとうゐ〳〵しく吹なし給ふ也

一うへは　おもしろきとおどろかせ給ふ聞人々も殘り多くおぼしめせ共大臣のをしへもたゞたはふれにかく詰とてさのみふき給はぬ也

一いとうたて　戯言をあり〳〵しく申さるゝ也　大臣の笛にまさりたるを吹ぐるしくおもはれば仰られじとの勅言也

一皇太后宮　さがのいん皇太后宮は先帝の御妹也

一おとゝの　いま〳〵しくおぼさんは中將の心御袖は天子なるべし

一雲のはたて　如二幡手一になびける雲也

一いなづま　雷電せんとおもへば音樂空にきこゆる也

一あさみ　俗にあさむといへり源氏にもある詞也

一いなづまの歌　さ衣の歌也雲の梯わたりて合奏あらんとの心なるべし

一いとゆふ　日かげにいとなど亂したる體也

一衣も　さ衣もきそはれんも心ぼそく思召也

一かなしく　さ衣の此世をいとはしくはおぼしめせ共御門叉父母の御心をおぼしてまいるまじきよしの詞を仰給ふ也
一雲のこし　雲輿可ㇾ尋
一あやうく　御門の御心也此世にさ衣の心とゞめざらん事を思召也
一一宮は　齋院
一此宮をば　女一宮也御門母后も取分かなしひ給也あめわか御子の下し夜の身の代にと天子のさ衣へと思召を源氏の宮に心染給ひてうけひき給はて弘徽殿のかいまみの夜見奉てさ衣忍びより若宮をうみ給ふ母我身になさせ給ひて奏し給ふ此御歎に御誕生の七日めに母后かくれ給ふをうき事におぼして御病にことつけて御ぐしおろし給也
一后もこのみや　女二宮也此宮をさ衣にまいらせられて天上のほだしにとおぼしめす也
一大殿には　ほり川殿にはさ衣の退出を待かね給へるに伊豫守來て天稚御子の下給へる事を申すをきかせ給へる也
一爲給へらん　天上と申まゝ跡をだに見んと思召御心の中を母宮おどろき給へる也
一世はいかに
一ちくま川　引歌未勘　ほり川殿禁中への道すがらの御涙の事歟
一へいのつら〳〵（此あたり異本有ㇾ之陣のほとり）壁のつらなるべし
一中將　大臣の御迎に殿上の口まで出給へる也
一ためらひて　涙に咽給へるを少思慮ありて御前へ參給ひて何事もいひ敎ゆるからおとゝの詞也本才の外琴笛などはをしへ給はぬと也
一たはふれにても　こゝもとてにはむつかしたはふれにもまねばしとおもひしと也
一いかに叉　只御一男と也
一つらくなんおもふ給へらるゝ　異本ありいかゝ
一中將　こと〳〵しき御遊にくたびれ給るなるべし
一みのしろも　天のは衣の代に女二宮をまいらせんとの御門の御歌也
一さにやと　女二宮の御事と推量ながら武藏野のゆかり源氏の宮ならはと也おもひくまなき心ちながらかしこまりて
一むらさきの　狹衣の歌なりさ衣の心は源氏の宮な

らばその心を何とも天子にはえ心得させ給はぬ也
引むさし野のむかひのをかの草なれば根をたづね
てもあはんとぞおもふ小町何も御ゆかり也
一よういかたち　草子の地也
一二宮も　みかどの御心なり
一なく一こゑ　引夏のよの臥かとすれば時鳥鳴く一
こゑに明るしのゝめ
一母宮いかにこうじ　困せめつめらるゝ心なり　くたびれたる心也
窮同源氏明石巻にあり
一御てづから　御膳などとりまかなひ給へどふよう
不用也用ひ給はぬ也
よわが御かたへとあれど母宮とゞめ給へる也
一木幡の僧都　三井寺の末寺名は不レ知也
一けいしきじ　家司職事なるべし
一御いのりのさまいとこちたけに　こと〳〵しく思
召を聞てさるまじきは源氏宮ゆへ身をいかゞとさ
衣の歎給ふ也
一うへのいみしき　女二宮は心につかず源氏宮おさ
なき時よりなれ給へるおもかげわすれがたくて御
身の代はかたじけなくもなくて只源氏宮ならばと
なり
一色々に歌　狹衣是よりさ衣と號す紫に御身の代は
かさね給はじと也
一ねぬに　引夏の夜をねぬに明ぬといひをきし人は
物をやおもはざりけん
一山きは　峯の事也薄雲巻にあり當時は山もとの心
に用也
一花たちはな　引けさきなきいまだ旅なる郭公はな
たちばなにやどはからなん
一夜もすがら　さ衣歌也時鳥のごとくなくねを聞知
人のなきと也
一身色如金山　端嚴甚微妙　法花序品　釋尊法花を説
給はんとての瑞に白毫相の光にて東方八千の世界
をてらし給へる時に東方の國土の佛の身相のいみ
じき事をいへる文也
一あまりなるありさまを　又兜率天のむかへにこそ
などかうしもといま〳〵しく思召也
一五月の空
一水こひ鳥　極暑の比鳴鳥也三笠山にあり
古連歌に入は中々思ひなかりき前句夜な〳〵の

水こひ鳥の啼こゑに付句 胸火のごとく赤也水をのまんとすれば影うつり火の如見ゆるゆへにえ呑さるとなり

一齋院　さがの院第一源氏宮の御いとこ也

一在五中將　此日記不レ見伊勢物語の事なるへし女一宮と匂宮との事源氏宇治卷に似たる所あり

一我はかり（かくイ）　狹衣歌也室八島の煙はむかしより絶ず立也さ衣も年へて源氏の宮にしのびこかるゝと也

一岩きり　引よしの川岩きりとをし行水のをとにはたてじこひはしぬとも

一かよはぬさとに　引歌未勘

一君も　さ衣の御顏色かはらんと自思召て立給ふ也

一さるべき人々　眞實の御おやならぬ事をおぼしめす也

一誰もかゝる　めのとなどもさ衣の御心を不レ知よとなり

一ありてうき世　引歌未勘

一うへも　御門のさ衣を同車にて退出の後不レ參と被レ仰と語給ふ也

一源氏の宮の御事　春宮へまいらせぬと恨給ふと也

一右大臣　當春宮へと也系圖相違歟

一何かは人の　右大臣殿のむすめにきしろはんもいとをしとさ衣へ父おとゞの御談合也

一つゐのことぞかし　つゐに春宮へと思召ながらさ衣のむねふたがる也

一權中納言

太政大臣
- 一條院の女院
- 東院上
- 左大臣今は權中納言春宮大夫兼官也

一右のおとゞの秘すらんむすめ　此御方源氏宮にはをとらんと也

一みづからくゆる　なま孫王とあれば王孫を今姫君自悔歟

一はなだか　鼻高也さ衣前かごかい間見に推量たがはぬと思召也

一ほゝゑまれ　さ衣の顏色をおとゞ御らんじて若かりし時の事仰出さるゝ也是より女の相論也

一故院の　別事は御憐愍ながら好色のかたはかたく御制禁なれどかしこく身をぬすみ出て見し人有しかど三人の上にをしけたれてやみしとむかしがた

り也おとゞの今のうへ三人也
一ひとりあるは　自然好色の方へかろ〴〵しき事出
來と也
一かの御けしき　笛の縁に女二宮の事也
一うち〴〵にも　女二の宮の御事こなたより仰られ
よらんと也
一あなむつかし　さ衣の心也中々なめげならんとい
ひのがれ給ふなるべし
一心にいらぬから　おとゞの心たちまちにこそ大臣
の詞也
一わつらはしくて　ひが〴〵しかるべきとのけしき
を見て立給也
一ほかさまに　狭衣歌也源氏宮を置て餘所へは心を
うつさじと也
一年をふる（引歌）涙がいかにむふ事は猶いな淵の瀧まされ
とや
一母宮　さ衣のまいり給へば暑氣にややせ給へると
母宮の御詞也
一殿のさばかり　母上のわかくすぐれ給へる也
一夏やせは　さ衣の御詞かたへすゞしき風にしたが
ひて行衛なくならんも悪事かはと也
一わたし守　未レ勘
一めづらしからん　はゝ宮の女房衆の事也
一中務　引東路の道のはてなる常陸帯のかごとばか
りはあはんとぞおもふ　そとばかりは恨をかけん
と也いかにそや殘り床しきとさ衣の御詞にて見わ
たし給へる也
一殿の　ほり川殿の女二宮へほのめかし給へとあれ
ども大宮（さ衣の御母先帝の御妹）はしたなくおぼしめすと也
一たゞさばかり　女二を身の代にとありしをめんぼ
くにてあらん天子にもあはれとやおぼしめさんと
なり
一かずならぬ　すき〴〵しき事このまて陰の小草の
數ならぬを尋出ばやと也
一さらずは又いく世もあるまじからん　かくの給ふ
を母上の御顔色もかはりてたはふれにもゆゝしき
事なの給ふそと仰らるゝ也
一ものうく　女二宮を物うくおぼしめさはしゐてま
いらせ給はんやまして母宮のすゝまずはあるまじ
き事と也

一一日三位　母宮の御心にたがはゞ危き也乍ㇾ去一日坊門の上の御兄弟の申されけるは笛の音のめでたさに女二宮のさかりにおかしくましますを行衛のたのもし人にゆづらんと天子のの給へるとかたられし也かたじけなく聞過されんもいかゞと也

一かくたに　如ㇾ此あらばいかゞとてさ衣の立給へる也

一暮ぬれは　内へまいり給へるつゐでにあやめの歌（右にあり）よめる所を尋給へば見置し隨身申也長門守家にて其むすめは中務宮の少將の御めのとなり大納言殿の五節舞しと二巻にある也此物語は後の事を先書出筆方可ㇾ見分ㇾ也

一中宮（堀川殿也）　堀川殿の御むすめ春宮の御母坊門上がちに殿もおはします也

一おほきおとゞ　洞院上中の第一といふ心也本柏は根本の心也　引礒上ふるから小野の本柏本の心は忘られなくに此歌に同心也誇りかにて叉わらゝかなる人ざまと也わらゝかは和ノ字なり　源氏玉かづらを云也

一かくさま〴〵　春宮などをもてあつかはるゝをうらやみ給へり

一中將　さ衣は源氏の宮のふしめに成給へる時のおもかげ手さぐりに似たるもやごと忍ひありきし給へと似たるもなさになぐさめかね給へる也
引わか心なぐさめかねつ更科やをば捨山にてる月を見ての心なるべし

一春宮に　さ衣まいり給也

一入ぬる礒　東宮の御詞也引しほみては入ぬる礒の草なれやみらくすくなくこふらくのおほき

一みだり心ち　さ衣詞也暑氣によりまいり給はぬよし申給ふ也

一なに心ち　春宮の御詞也物おもひなくは（らイ）へたてなく申されよと也

一これ御らんせよ　物おもひには侍らず只やつれたるとかいなをみせ給へり

一源氏の宮　春宮の御心中なるべし

一なかずみ　古き物かたりなるべし未尚大かた此物かたりにて可ㇾ知

一人のとふまで引しのぶれと色に出にけり我戀はものやおもふと人のとふまで

一さらぬ　中すみの物がたりにあるべしありがたき戀の山にはまよひ侍らしさ也

引いかはかり戀の山ちのしけゝれは入さ入ぬる人まごふらん

一こさずくなゝるけしきやしるかりけん　さ衣のこさすくなゝるけしきを御らんじていであるやうあらんさの給ふも御心ならひさて

一わか心　狹衣歌也かくれなし

一まことならぬ御連枝さ也　源氏宮は御兄弟のやうにはあれごもさ也

一せんようてん　さ衣のしのぶ事かひあるまじさて御退出也

一二條大宮　仁和寺の威儀師うづまさに飛鳥井の君の御參籠を乳母さかたらひてぬすみて行にあひ給へりおくにてよく聞ゆる也

一丸かしら　法師也圓頭さ書也さ衣の御車を見る也

一わらはべ　供の童僧の具を持たるべし

一がやく／＼　源氏物語にあづま人などの物云聲也

一しばしをしさゞめて　さゞめずして車禮慮外也ささがむる也

一母上は　飛鳥井君を云童のある故尼君か見んさいふ也

一法師はしり　かほをかくして威儀師にぐる也牛飼をさらへて尋るに佛のばちにて見付らるさありのまゝ申也たゞさく車やれさ威儀師君をぬすみえて牛飼にいそげさいふゆへ見付られたるさ也

一師にはしたがへ　師匠にはしたかふさ云法文をきゝたる故車をいそぎたるさ申也いまよりはしたがはしさをそれたる聞ゆるせるさ也

一君にしか／＼　ありさまを申につねに制するにあらけなき事さおほせらるゝ也

一そのわらはに　童にさはんもにげて行かたもしらすこゝもさに法師かくれてゐてつれにこんさ云て御續松もまいらぬ闇くらけれさ車まいれさ申也

一ぬすまれたらんは　さ衣の御詞也主の心にもあらぬ事ならば侘しからんくらき道にまさはんを法師本意のことくにつれてゆかんさなくはこよひかくてあらんはいかゝさ思召也殿へ先こよひはつれてや歸らんさ也威儀師かけさかづきてにげたるすがたにて道中手もやふれつらんさ也

一あすか井にうたひ物也　飛鳥井　にやどりはすべしかけもよしみもひもさむしみま草（御秣）もよしやとりせよともいかゝと思召ながら車へ乗りうつり給へる也

一いとなよ〳〵　飛鳥井の君の體也あないとをしさ衣の御詞也

一もろこしのよしのゝ山にこもるともをくれんとおもふ我ならなくに（引）　うちすてゝ心うくにげたるとある心なり

一ありつるかしらつきも　丸犬とこそ見分つれと也

一なをほいも　法師と心あはせられし事ならはさ衣の歸り給はんとの給ふ御聲さばかりはさ衣とおぼえながら又誰にかはとはづかしければ申さぬに又すてゝおはせは法師きてつれてゆかんと思ひてほの〳〵おぼえたる所を申さんとおもひながらわなゝかるゝけしきさ衣の思召たるよりたゞならぬ人のさまなればくるしく成給也

一さらばかへらん　御心ならぬと聞まゝにいとをしさになんと也

一何かなき給ふ　心見に法師此邊にあるべしとの給ふ也

一おはしぬべき　さ衣のすてゝをきて歸り給はんが佗しきと也

一ほり川といつくとかや　飛鳥井君の詞さていかにといふよりさ衣の御心なりこゝもと異本あり　さていかにといふけはひいとらうたげにおかしう見まさりしぬべき人にやとこよなく御心とまりてをくらんと思召つれど心やすき里の名なれば車よりおり給はで堀川へさ衣も入給へり

一さていかゞいふべきとさ衣の問給へど飛鳥井の君泣より外の事なければをしあてにさ衣のおほせらるゝ也

一いまゝで　宿の人の詞なり扨戸をあけたれは蚊遣火の煙りたるをさ衣の御覧しての御歌也

一我心かねてや　狭衣の歌也おもひの空にみちたると也行かたしらぬは姫君に御心とまると也

一物おほえ　飛鳥井君の心也法師に見えしとてこゝををしへつるとさ衣をはづかしく思はるゝなるへし

一大輔の君　むかへの車にそへたる人なるへし

一おほえなき　さ衣の詞也

一うちもこそすれ　うちたゝくと云心也

一あやしう　さ衣の御心中也さるべき宿世かと也

一いてや　法師に手なれつらんとおほしめす也

一ありつる　ほうしにおもひおとし給へるかと也

一とまれとも　飛鳥井君歌也道のしるべうれしとおもはればとまれとはの給ひなましとある詞の答也

飛鳥井の諸物をかりてみまくさ（御秣）もよしと申さん所にてもなしと卑下なるべしかりそめのやどりと也

一その水かけ　陰もよしの心合めり

一あすかゐに　狭衣歌也かげ見たくてやどらば御秣がくれは法師かくれ居てとがめやせんと也

一車まつほど　人に見せてをき給へとの詞也さて車よりおり給へる也

一御車　二條よりをそくまいるほと也

一家の人々　あやしがるほどに御車まいりたるなるべし

一ものきたなく　法師に心きよくなれずは狭衣の宿執と思召也

一かねていみしう　源氏宮なとなるべし

一このをんなは　例の系圖を今かけり帥中納言の娘今姫君といとこ也

一主計頭　かぞへのかみがめにて有しか德ある事をおもひて仁和寺の法師にあづけゝるに法師おほけなき心付て也

一車なども　威儀師かりけるたよりと也今根元をあらはす也

一ありつる牛かひ　めのとのもとに來て二條辺のことかたりければ狭衣を誰ならん姫君いかになどいひけるほどに狭衣は通ひ給ひし也

一其後　威儀師に無音也めのと人やりけれど返事もせぬ也おもひなげくもめのとの心なるべし

一この人　いぎしが事也今はまかなひする人もなし源氏の宮内まいりに人尋給ふにまいり給へ乳母はいづちへもまからんと申也さ衣は誰にておはしますぞ姫君は知給はんと申也

一しらす　不慮の御身の上と泣給へばめのともさすが打なきてある人一日御門をそくあけたれば檢非違使別當息少將と狭衣の名を借給ひたる也内大將外別當とて近代諸司代也別當職の子をあなづるか門役にをしてあけさせんといふ也さるほどにまれまいる女などもおぢてまいらずと也

一年おひて　乳母の詞也我は年老ぬあづまへさそふ

人にやつれてゆかん此君を誰にか見ゆづらんと也
一うち泣て　姫君はいづくへなり共めのとの行かた
へと也
一まことにしる人も　奥州の將軍のめに成てくだる
べし君は別當殿御子の少將殿へかたらひ給へと也
一さるは　是よりさ衣の御心也姫君にをとる人も見
なれ給はず此事のめでたしとはおぼしめさね共心
にかゝらぬひまなく物ぐるをしきまで思召も宿執
かと也
一またるゝ　飛鳥井君にまたるゝ夜な〳〵なくまぎ
れて通給也
一御とものの人　吉祥天女　源氏品定に吉祥天女を第
一にせりさりなから法氣付くすみて如何と云々も
のげなきやどりなりといへり
一かくいふほどに　東へ下るべきに君を殘してもい
かゞ又具し奉らんもいかゞと也少將殿通ひ給へど
もおぼつかなきと云體也何として世を過し給はん
と泣なるべし
一しばしのほどたに　姫君の詞也我身をうしなひて
から下給へと也

一さらばいでたち給ふべきにこそ　又少將殿の心深
きを見すて給ふべきもいかゞ又あさましき人に具
して御下もあるまじき事也いづれもことはりと也
一いまいくか　姫君の心也
一たれとたに　さ衣の御名かくしゆへ淺きちぎりと
てみちのく（陸奥）へ下事もほのめかされぬまゝ狹衣も名
かくしなどをおほつかなくおもへると深くこの世
のみならぬ契りをいひなぐさめ給ふ也　引しらな
みのよするなぎさ（渚）に世をつくすあまの子なれはや
どもさだめず　源氏夕かほの卷に同し
一源氏の宮ふるき跡　在五中將の古繪御覽してほの
めかし給へる好色なり引侘ぬればいまはたおなし
なにはなる身をつくしてもあはんとそ思ふ
一人めこそ　源氏宮在五中將の時のやうなるうき事
を耳にもきかしとおぼしめす也
一岩まの水の　引歌　未勘つぶ〳〵と聞え給ふべき
人間なき也
一大宮　さ衣の母宮と棊うたせ給へる時分也
一けんぞう　顯證あらはなると　源氏抄弄花にあり
俗にもくさんの心也

一千夜を一夜　宮の御かたちは引歌秋の夜の千夜を一夜になせりともことば殘りて鳥や鳴なんなぞらへて八千夜しとは久しくといはんためなるべしねばやあく時のあらんとは飛鳥井と源氏宮と思召くらべらるゝ也

一さてまぎらはしに　さていづかたの御先ぞ勝は又いかゞなどとひ給へど碁のこたへはなくて母上のさ衣を見付給ひては一切別の事は思召ぬ也源氏宮は御返答なし母うへもとかく聞え給はで內よりさ衣をよべ度々尋たまへるとの詞也

一なをかの　侍從の內侍二宮の人也二宮へ御文などまいらせ給はぬはひがくしきとむつかりながら母宮はさ衣のまゝとおぼしめす也

一その御いらへ　二宮の事は何ともおほせられすして殿のとは堀川殿のれいならぬは二宮への事に御勘當かと也

一東院太政大臣御むすめ東院の御しつらひを何事ぞととひ給へは今姬君の事おほせられてそれをむかへ給へる用と也宮の少將といふににたるとの給へり

一先帝
- 式部卿宮
  - 後式部卿宮
    - 宰相中將
      - 男子　式部卿宮の御子めさるゝと也今姬君の一腹也宮の中將に似たり母は宰相中將の子さ名乘故に系圖如此此母は常盤尼公の妹也
    - 姬君　藤壺の后さ衣の御位の時一宮うみ給へり
  - 坊門上　堀川殿の北方に成て中宮をうみ給へり
- 源氏宮

系圖は式部卿宮の中將とあれ共堀川殿の御子にてあらんとさ衣の御詞なり

一しのふへき　御子などのあるまじきとあるを大宮いまくしく思召也世中をあたに思召事は常の事

なから也
一かばかり　しのぶべき人なとゝあるさへ大宮かくおほしたるに世をのかれんの心なとをおぼしめしてなみだぐみ給へる也
一こゑたてゝ歌　さ衣心はあらはなり
一蟬鳴二黃葉一漢宮秋　朗詠題蟬　許渾作也
漢武帝崩して荒たれ共蟬は昔のごとく啼と也
一さばかりからは　草子に見る心也あらきゑびすも雙紙さうしの地なり
一日の暮行　引もゝ草の花のひもとく秋ののにおもひたはれん人なとがめそ
一我たにもと　ねにたてられぬにともとかしくおほしめすなりこゑたてゝの歌の首尾なるべし
一かのほとなき　飛鳥井の小家をおほしめしいづるは大かたならぬおほえなるへし
一おはして　やがてあすか井の宿へ也
一こざらましかは　引歌未勘
一ひるの　源氏の宮とおもひくらべ給へり思事かなはずはとは源氏宮の事也飛鳥井君世のほだしとやならんとおほしめす也

一涙のもろきをいかゞ心得らんと物なげかしげなるがいよ／＼あはれにおほしめす也奥州へ下べき比なるゆへなるへし
一久しう　物あはれなるを御覧じて世をのがれんと思召まゝ例の人の心中ならぬを見初てから見すてんとさらにおぼされぬと也
一さらは　引あかでこそ思はん中ははなれなめそをだに後の忘れがたみに古今
一あふには　引思ふには忍ぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ
一これはなを　さ衣にてあらんと也我か身ににあはずと也
一かりのはかせ　引歌未勘
歌一花がつみ　かくみるだに不二似相一に陸奥の國へ下らばあさかの沼の水のたえなんと也
歌一年ふともみちのくへ下事は知給はず淺きと計心得給へり　さ衣歌なり
一かくいと　さ衣の御詞也なをさり事はしらざりけり句心より外の不慮のさはりあり共さ衣の御心はかはらしと也いとかなしくは飛鳥井君の心中かく

なんとはくだる事をほのめかさばやとおもへども
人々しきとにもあらずとおもひとるかたはつよき
心ながら淺ましき心とおもひ給はんとせきやるか
たなし
一君は　さ衣はたゞ名乘もし給はぬをたのみがたき
とおもふかとおほしめして引はしたか（箸鷹）のとかへる
山のしゐしはの葉かへはすとも君はわすれしとか
へる 十字と烏と云々 未決
一まことや　東院のうへ今姫君をむかへ給へりはた
ちなれどもおほどき過給へるなるべしはなゞゝと
もてなし給へるに如何と草子の地也又なきものに
もてなしかしづかれ給へる母にもめのとにもをく
れ給へるにまめやかに後見する人なきにはれゞゝ
しくてほれゞゝしきと也
一うせにし　いま姫君の母のなましゐのゆかり物見
しりがほなるありけりおばの尼公常盤の尼の妹今
姫君の母上也
一ゆへゞゝしけにて　母代にしたり東院の上時々
母代を御覽するに御心につかねどもあまり人の心
のこまかなるは見知給はぬ也心をやりてうへはか

しづき給へるなるべし母代よくせずは何ごとぞし
いださんと也
一心にまかせ　作名親共を云て若女房達多也殿上人
などゝ參會あるなるべし
一君は　今姫君はあか子のごとくと也しつらひあり
さまなどを母乳母世にあらはみせんものをと心の
うちにおほしめす也よしなき母代などにまかせら
れてと打なげき給ふなりさりながら人のみるには
おほどきておはします也
一九月なをしもの　縣召除目に未落居等事書なをす
心なり末代斷絶なり源氏やとり木にあり
一よろこび申に　中納言參賀也內又春宮へ也先大殿
へ見え給へるにこといみもならずゆゝしくおぼし
めす也
一おほきおほい殿への次に　今姫君の西對へ行給也
一かの后　中宮也今姫君御連枝也中宮の女房達もこ
なたへと人々申つると也
一ひもども　几帳の紐どものよらはれさはよられ
たるをとひきかくひきとみかうみなどの詞也
一いまやそゝきやむ　そよめくをとのやむかと也

一やう〳〵のごまる　しづまる也

一からうじて　さ衣を見てあな物狂はしや此間の殿上人はさ衣に見合はするに土などの色と也楊貴妃の壁にある詞也源氏宇治巻にあり

一此みすの　さ衣の詞也

一そこらいじ〳〵　いじくじと世話に云ひし〳〵と居たる心なり俗にびづしと云

一そゞや　先は不レ用也君の給への給へとてにぐるも有べし

一物にくるふ君哉　丸は不用とてそろ〳〵ばしりにて逃るにきぬの裙をとらへたるにたふれ臥たる也

一きふ〳〵　俗にわらひ入ぬれば喉がぎめくと云詞なるべし

一このみすの　あへず　不ニ似相一也

一なをたえ消入とは絶入と云心なるべし

一こはいかに　引おぼつかなうるまの島の人なれやわがことのはをしらずかほなる琉球をうるまの島と云と也

一たゝうらみ歌

一はゝと　母代と云心わう君源氏物語に王命婦と云に同

一たうしは君なし　たはふれは君なしはと云詞筆誤歟

一いづくならん

一いてやさふらふ人句　これよりさ衣の心也

一きもさ衣をさしての詞也

一かばかりにては句　わかき人たちこれにさし出ぬがよからんと也

一さすがに　母代か皆々をにくみわたしてさしよりて也

一めづらしき　母代の詞也おぼしたがへたるをまでめづらしきまゝおもひたがへたるかとなるべし

一よし野川歌　いもせとは兄弟の事に用る也さ衣と今姫宮御兄弟ながらうと〳〵しければ人たのめなる名とよめり

一けにはゝと　母に成てよめる舌利と也のどかはく老人口中のうるほひなくて喉乾也きこしめしたる母代と也

一うらむるに歌　人だのめなるとうらみ給へるに淺くなると也

一又ある本に引　しらせばやいもせの山の中に落る

よしのゝ川の深き心を源氏物語にも本に侍るなど
あり其文體かおぼつかなかりしにうれしき御けは
ひと思ひ給へるにものをあしさまに母代の歌によ
めるとの給へば母代うちわらひていまより御見參
をつとめ給へわかき人々おもひむせぶと也
一犬もとき
一けふは　中納言參賀の次也おまへにかくと聞えさ
せ給へと也
一此みすの前にいかゞなれどかくごん宮つかへのら
うもなきゆへと也
一あれをは　さ衣を見給へといひつゝ我も〳〵きぬ
をかづきて一所にまろびあへるにさ衣のどかに見
入給へる也
一かうそめ　今ひめ君のめしものゝ色也
一ひるねしたりけるが　人々のさわぐにめをさまし
給へる也
一あうなく　奥なき心也とみにえそむき給はてさ
衣と見あはせ給へり近所の女房衆よりはよきと也
一かのせうと　今姫君の一腹式部卿の宮の御子と名
乘出し少將なりそれによくにたりおとゞには不
似と也同樣に心も中將に似たるべし
一又の日殿の御前にて　今姫君の事申出し給へり
一うち〳〵の　おとゞの御心也さ衣は御子ながらも
はづかしくおぼしめすなるべし
一木丁の　おかしかりしを念じ給へるさ衣の御氣色
をおとゞ御覽じてうちわらひておとどおほえもな
きまゝ姫君などのなきにもとり出ぬをありつかぬ
ありさまとうめき給へり
一あさましと　ねおきのかほを御らんじたしかにお
とゞの御むすめと名乘て又さすらへんはいかゝと
也
一いさや　おとゞの詞なるべし
一まこと　飛鳥井の事也此邊異本おほし君をもまこ
とにとゞむべくもなきに人しれずから君の心也み
るめにはめのとのみるめ也京にも獨住こそうしろ
めたからぬおやめのと千人よりおとこのあるはた
よりと申也男のおはせぬほどこそなればいまは乳
母などはやくなし用にたゝずといふ也
一いかにおもひ　乳母御門の鑰うしなひたるなどい
ひてさ衣をいとひがほ也御ともからはさ衣の御伴

衆門をふみこほちて入なまほしき折々ありけりとさ衣へ申上にめのと又威儀師にとらせんとするかとおぼしめして女のさやうの事におもひむすぼるるかと心得給へり

一いと心つきなくゆゝしけれと女君のありさまのいでやさらはさて異本思召すてらるべくもあらねば

一人しれす　源氏の宮の事也

一いまをのづから　さ衣としりてはいとはじ又かくしておかるゝ所もあるべしとおほすなるべし

一女君にも　さ衣の御詞也めのとがにくむなるべしとなり

一をとなし　引戀侘ぬねをだになかんこゑたてゝいづくなるらんをとなしのたき里イ　いざ給へわづらはしさのあればしのぶ故おぼつかなくおもはるゝもことはりと也

一我は何事にて　さ衣の御詞なりあなかちにもしられじとおぼしめされず名をもかくし給はぬと也いやしきにも契はかはらぬ心なるを猶こなたをたのまるゝ心のなきと恨給へば此別當の少將とおもはせ給へる也さ衣とをしはかる也

一さそふ水　引侘ぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふ又さそふ水あらましかばと物あはれにおもひて

一せいすべき人なとある　少將殿にてはなしと也

一かりそめに　東へくたるをやむべきにもあらず又めでたき御ありさまなるに行かたとてもめやすからんとしらすと也

一もりのうつせみ　引歌未勘

一かくいふ間に　懷姙なるべし東へ下のおもひとみるに着帶あらはるゝまゝ少將殿へほのめかし給へと乳母申也

一たのむべき　さ衣をしんじつたのまばこそと君の心なり

一見えぬ山路とはおもひながら　懷姙をほのめかさんとはおもひながらかけてもましていひ出給ふべきやうもなくて下りの日をかぞへて歎き給へり古今世のうき目見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ　詞計を取也

一此殿の

さ衣の乳母　大貳北方也

式部大輔道成　三巻に顕也

道季　さ衣の御身ちかく召遣ひ給へる也

常陸守が北方

一めもなくて　獨住也

一みづからは　飛鳥井の君はさゝ入給はぬに乳母はみゝに付たる也

一たゞいまは　こゝはうづまさにての事也　かく事共とは威儀師も相違也公達とてもたよりならずとおもへりさてあづまへ下などおとして此比申なるべし

一いひをこせ　乳母のあたりへなるべしいと思ふさまも使の心なるべしイ

一寺　うづまさにてあるまじき事と乳母云し也

一ほそきんだち　やせ公達のかけめとは手かけものと俗にいへる事也

一おとゝ　殿の字をよめり

一いでたち　料などよげに送也

一つくしへの出たちはして　姫君にはあづまへの出立は止まりぬ御懐姙にてあると乳母がいひなせり

一うちはへ心ち　命もおしからざりしに御懐姙の身ゆへ少我ながらいたはしく思ひなり給へる也

一野分だち　さ衣の忍ひ入給へりかやうのからさ衣の御詞也ひまなくうちかさねても心より外にへたつる夜やあらんと也

一あひみては　さ衣の御歌かくれなしわりなき心いられはならはさりしと也

一へだつれば　飛鳥井君歌也心かくれなし

一よし見給へ　さ衣の詞世中の命はしらずとのたまふをさしもあらじとこと〱しくもいはずして心のうちに目のまへに同さまながらたしかなる御名乗なし又我身の行衛もたどらすたゞわかびたるていなるべし

一行衛なく歌　飛鳥井より夜深く歸り給ひて又ねの夢の中に女の腹を見せての歌也歌の異本多也

引行衛なく身こそ成なめ此世をば跡なき水を尋てもみよ　不此世をはいつかみるべき浮しづみ跡なき水をたつねこふとも水にいらんのずいむ（瑞夢）也

一殿の　物忌の事おほせらるゝに御夢覺たる也物忌にはよそより物も取入ず又いだしもせぬ也物忌鬼の名也源氏に有也

一いまぞ　御懐姙をおぼしめしあはせらるゝ也
一あすか川歌　心かくれなしさ衣の歌なり
一御文（歌）こまかなれば　かれよりは返歌ばかりなり
一わたらなん飛鳥井君歌也水まさらはあすのわたりもかはらんと也
一かしこには　道成がつくしへの迎の車也たがふと云詞はいむと也これを随分とおもへり
一女君　むかしは井堀所を忌歟虚言を乳母いふ歟威儀師にくるまかる（車借也）べきものをなどいへり
一かくのみ　世中にたよりなき時は山林の栖求と也かゝれは宮つかへ人なども男をもつと也
一まこと〳〵　隣家に駿河守が女君情あるとみな虚言也
一さてこの　別當の少將殿とさ衣の名乗給へる間此乳母と古知音といふ也なんでう事かあらん可ㇾ然所と也　少將殿の通ひ給ふとて此頃は無音と也
一ありきも　うづまさにこもりて如ㇾ此成くたるとおぼしめす也土用をいますともと思召也
一あなまが〳〵し　あなおそろしやと云心なるべし懐姙ならぬ人さへ土用は忌にと申なせり

一かの少將殿と　さ衣を誠に少將殿とめのとはおもふ也さ衣のおほせらるゝ共めのとが心にあはぬ也さるほどにとかくおほせられぬ也
一かくまても　御誕生もあらばさり共おもひすて給はじと也
一の給ひちぎる　異本有このたのもし人めのとが事也源氏の宮へつかへにとありしかとさ衣などへ見えん事のはづかしさに心ごはくして出たゝざりし間今はいよ〳〵と思召也山なしと云本有
一いひ〳〵の　引世中をかくいひ〳〵のはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん
一京のうち　京中は一夜計にてはあらじ井倚などいるゝ日かずへんと也
一君此の給ひ　少將殿の乳母の所ならばいくまじきとおほせらるゝ也
一ときは殿　帥中納言殿尼公の兄也
一久しう　土用忌給ふまじきならば御心まかせ也乳母の申事ははか〳〵しからじと也
一とかうおはし　御誕生まではいきて侍らばあやしき女の身ながらもよく見奉らんとおもふ也さらぬ

だに土用は忌にかたも惡也少將殿御產の事などあ
つかひ給ふべくもなきと也
一おもへば異本あり女の苦(具イ)とははか〳〵しからぬと也
又異本あり叱云苦也具如何
一かやうの君たちは　おや(親)などのうしろ見おろそか
なればすてらるゝと也
一戀こそ　未勘
一かくほかへ　いきにくゝするも少將殿ゆへと乳母
は思ふ也少將殿への名殘おしさにはあらずうづま
さ籠にこり給へると也うづまさごもりゆへにこそ
かゝる幸もと又申也
一かしこは　ときは(常盤)は御忍所にもよし又とゞむる下
女にもなにがしそれがしへをしへよと申をくと也
一さまで　女君の詞げにゆくゑから女君の心也むか
し物語など忘るゝならひなりさして何の物がたり
ともなし
一かはらしと歌　心かくれなしとかへる山のとちぎ
り給ひしものをいかにめのとのしなすぞとおぼし
めす體也
一心もしらぬ式部の大輔にそへて西國へとさすがに
思也
一あかつきに　車來て門敲叩也たゝくをとするをする(駿河)
か殿の女君はま心あるといひなす也
一あすか川を　さ衣より夢中の朝をくり給へる歌の
事なりさてけふの暮に御出あらばいかゞとの心中
也物うきにさ衣へ名殘あると心ながらおぼしめす
にもめのとの物いふもはづかしき心ながらうごき
かね給へり
一久しう　從者などかへらんにと申也
一御くるま　異本
一あまのとを歌　さ衣のとひ給ふ時に鳥のこたへよ
と也
一なをたゞ　さ衣へ申たき事もあるべし
一めのと又一人　女の同車
一門ひきいるゝ　道成が所なるべしやなぐゐは武官
具也
一行かたしらぬ　蚊遣火の御歌二條にて初ての時也
一そゝろかなる　すくやかなる男なり　道成也
一大貳殿　津の國鳥かひなり
一中納言殿　さ衣の當官也

一きそく　さ衣の御氣色悪は物忌故飛鳥井へ御出なき心なるべし

一かうみやうの　高名の御馬拜領と申て大貳殿御急あるほどに江口の逍遥なるまじきと送衆と申也

一なにものならん　けびいし（檢非違使と書）の行幸なとに供奉する也武官なるべし

一めのとは　ゑみわらひなどする也おきあがり川へはしりいらんと思召ながらさもなさしと也

一なにかし　少將殿かけめにて道行人ごとに行あひなど有し人に心をつくし給ひやはせんあやしき身ながらも又なくかしづき奉らんを旬とり所に思召せと也殿のとはさ衣也此威光に道成をばえあなづらじなど丶申也

一少將とは　年頃地下に成たれ共來年又かへり殿上して昇殿して藏人に成てかの少將殿と見くらべさせんと也

一いまはいふかひなしおひらかにもてなして旬しなしなしからぬやうにてもいまはかひなし御心にあかぬことなきを取所に思ひてやすらかにすぐさせ給へと也

一またこそ　公達ならね共女ににくまれぬと也

一おとゝこそ　めのとをさして申詞也

一女君　あきたく思召を乳母あらみさき（荒神と云）中の障をなす神と云々此神の女君を見はなたぬと也

一おとゝたに　めのとをさしていふ也かくまで心うき御心ならんとはおもはざりしかと也かくまで心うきことはほいなくめのとも思はれぬかといとあやしく思ふ體也

一かはご　皮子より餞の扇薫物などとりいで丶見する也

一女のさうそく　さ衣の誰やらんゐて行とおほせられて拜領也女君の涙にぬれたるにめしかへさせ給へといふ也

一此御扇　あたらしきよりはと申とりたる旬目はつかしき人もやとおしませ給ひたると也なれたるとは古たる心也

一これ御らんせよ　美人さ衣の御筆をは一字もみたがると也

一まことに　我見しおなじものにやと床しけれどかほの見えんかと臥給へり

一我君をこそ　さ衣をこそ道成戀しく思也
一あをびれ　青侍なといふにおなし
一あたへて　ひそまぬ心也源氏にあり
一むつかりて　はらだちて歸たる間にみればたゞ一夜さ衣の持給へるあふぎ也
一まなかな　異草字にて引歌ゆらの戸をわたる舟人かぢをたえ行衞もしらぬこひの道かな　其折はただ何となく書給へるにいまよく似合たるさ也
一かぢをたえ歌　飛鳥井君歌也身をしづめんと思召心也
一そへてげる歌　あふぎの風に波の立歸に身をたぐへんと也
一などおもひつゞけらるゝはまだ本心もあるかと我ながらおもはるゝと也
一けさは又御文あらん　御文の使をば何といひてかかへしつらん飛鳥川の歌の時まではかゝらんとはおもはざりしと也
一海まではおもひやは入し也飛鳥君の歌也
一心得ぬ夢と有しいかなる事ぞや　たゞならぬは懷姫の事なるべし又うちかへしとは殘命あらばきゝをよばせ給ひても心うからんと也
一なさて　さしはなれたるあたりならで彼御家禮の道成にと思はるゝ心なるべし
一遠き　つくしへ行つかぬ先に身をうしなはんと也
一男も　しばじびんなしとおほしめさんも理也あまりとけがたさにあやにく心も付也いのちもあやしく見ゆると也
一おもひ侘て　身のほどをおもふに似相ぬとは思はねどれいならぬ心のいとゝまされは御心とゆるし給へ人のちかきさへくるしきと也
一げに消入給ふべきさまなれば　懷姫の間取食などはいかゞと思也
一京には　さ衣の夢のあやしさに御文遣はしたる也
一つくしの　小貳といふ人の買得と申也小貳豐後と云異本
一それや　小貳殿の行衞はしられんかと也
一となりの　隣家にも不レ知よしをさ衣へ申上也
一いかにもめのとが　めのとがはからひ也みづからの心にゆきかくるべくも見えざりし心也
いみしくともわか心とさやうにはあらじ異本多今までさ衣の油斷と也

一あすは淵せ　あすか川の返歌の事上にあり
一下草　源氏の宮の下草也
一しきたへの歌　かくれなしさ衣なり
一かの夢　懐姙の事也　誕生ありていかやうなる所にておひ出たらんとおほしめす也なれがほはわが御子をわがものにしてなるべし
一かゝ見のかけも　さ衣ににるべき也
一なにしに　さ衣の御子分にはなされじとしゐて思召なせども御誕生ならばとむねふたかるべし東なごきてしめしさらばふせやに生ひ出たらんとおほしめす也
歌一そのはらと　母のふせやに生出んとのさ衣の御歌はゝき木に母をもたせそのはらは腹の字を含めりふせやは御誕生ならはと也
一つねより　草子に人の見たる心なるべし
一心のつまと　おもひのつまと心同し
一夕暮　雲のありか定たるを御覧じける也
一西の山は　秋のかた也
歌一せく袖に　さ衣歌也さ衣の涙にて梢をも染たるかと也

一夕暮の　心のつまの詞よりなるべし
一此世の　草子に見る女也
一又是涼風暮雨天朗詠　かのときはのもりに秋またんと女君の常磐の森に秋や見ゆらんとよめる歌ありし也しづみはてんも歌の詞なり
一かの舟　唐泊からどまり也今は彼名所に人もよらず舟もつかぬと也　筑紫へ下る人に尋畢
一此大夫　道成也こゝろもの關は右のへだてなるべし
一大貳の舟に　よき女のあるに大夫心をかくる也
一よひ過るまで　大夫見えぬを女君は嬉しと思ふに乳母は君の心ごはさに大貳の女房に心をかくると腹立也
一とさまかうさまに　女君身を心づからせため給ふと云也かゝるごとく懐姙中は物おもひしづみ給ふは忌ならひなるべし御存命ならばおもふ人に又あひ給はんと中也
一いてあな　めのと大方にしてをかずしてかくうきめを見するど思しめす也うちまかせてをかさると也
一うちむつかりて　乳母腹立して立ける間也

一むしあけのせとへ　からごまりにてなるへし備前名所歟

歌一なかれてもあふ瀬やあると身をなけんと也　飛鳥井君歌也

一髪かひこし　肩より越體なるへし

一ありしあふき　さ衣の大夫に御餞に下されしあふき也

歌一硯を舟のせがい　背涯也

歌一はやきせの　さ衣へ風の傳にもしらせまいらせたきと也

源氏手習の君の入水のおもかげ也

狹衣物語下紐第二

一ものおもひの　躬恒家集に引草々も吹はらひぬる木枯にさきこそまされものおもひの花

一お花がもとの　引野べ見れはお花がもとの思ひ草かれ行冬になりそしにける　和泉式部

一たつぬべき歌　さ衣飛鳥井の君の行衞を也

一かのくだりし式部大輔は　大貳乳母—

　├式部大輔道成　肥前守が弟と二巻初にあり肥前守は系圖にはなし

　├道季

　└常陸守北方

一あににも　飛鳥井へ通給ふ事も忍ふ事なれは終に兄の道成にいはざる事を爰にて書あらはせり

一又あれも　道成も弟の道季に此人を筑紫へゐて行ともいはざりしと也

一大貳道より文にそれがし　此段は父大貳が便宜に道成が文言也それがしとは式部大輔が事也道成事大殿もきこしめしたるべし

一道成かめは　道季が申上也うづまさにて見し人をゐて行と申せしと也

一げにさもや　道成知ながらもゐて行しと思召て御氣色悪まゝ不ㇾ慥事を申たると後悔也

一此事　道季が前にてとかくの給はさりしと也

一さ月の夜の　あめわかみこのくたりし事也

源氏宮の事書出し與ㇾ風とある也

一母宮　たよりはなし御はらから（父歟）にはあると也

堀川殿の上と源氏宮の御母と御はらから也坊門の上の御腹の大殿の御むすめの中宮まいり給ひて時めき給へは源氏の宮のあたりへむつび給はんもいかゞと也このあたり心得かたし

一かゝり場の　御かゝりするかたのゝみのゝなら柴のなれはまさらで戀ぞまされる　なれぬといふ心計の引歌なるべし

一笛の　女二宮をさ衣へあづけ給はんと也

一かしこまり　此あたり異本あり卯月はかりにとの勅言をかしこまり申ながら　かの御心のとはさ衣のかひ〳〵しく思はずと大殿の心なり

一まろいかにも　大殿の年來の御本意と也

かくおほしとは天子の御心勅言なと忝なしと也

一心にいらぬ　おほせられずして不ㇾ叶と　おぼしながら御門の御ことなり共さ衣のいかにぞ思召ん事はなま心やましく打歎かれ給ふと也

一それよりまさりて　世のつねの御心さしならぬ間又えいなひ給はじとさ衣の御心なり何事にかから狹衣の詞なり

一さて大宮

- 先帝
  - 式部卿宮
    - 後式部卿宮
    - 坊門上（當春宮へまいり給ふ中宮の御母也又源氏宮のめい也）
  - 堀川大臣ノ上（狹衣の御母）
  - 嵯峨院皇太后宮（女二宮御母こゝの大宮是也）

一そはたかきも

異本不ㇾ用たゞ御門の御心にある也さらては后腹におはすれどもさしてあるまじき事にもなしと也

一中宮の　大殿の御女（坊門上の腹）中宮に參り給ひて時めき給ふゆへ大宮びんなしと思召んと也大宮とは皇太后宮也

一いまはじめて　大殿の平人に成たる計にこそあれ今初て帝の御女を得奉る事かはと也中々女二宮の御行末よからんと也

一さしならべたらん　さ衣にならべて見ぐるしからぬまゝ女二宮をと御かどの思召よれると也

一うつくしと　大殿の御けしきの哀なれば女二宮へ見え奉らまほしけれどゝ也
一我も人も　我もはさ衣人とは源氏宮也かの御心を見定ほどはうきたるさまにてながらへんに源氏へえ忍び過すまじくは身を捨んにいとやすしと也
一さばかり　女二宮を見奉り初ては身をすつるにほだしならんと也
一はゝみや　女二の御はゝ后也弘徽殿に住給へり
一宮の　后の上へまいり給へるなるべし
一中務宮┬少將　五月五日の御遊に笙笛吹し人前にも注也
　　　　└姫君　こうき殿にて大將立聞にあめわか御子のさまゑに書給へるさいゐ人也
一大將のかたちは筆をよばぬとて破給へると也
かたち心ばへ良々しく大將の具によからんと云也
一此三宮にや　さ衣の御目に三宮かと思召也
少おきあがりての詞也
一宰相　中務宮の姫君のめのと一巻にあやめの歌をさ衣へ奉りし人こよひ又あやめの歌も語る也
一大宮のおはしまさぬ　うへにまいり給へる御留守にさへしこう申さずしておるゝ也下字也　宮殿ィ本　女二の宮の御めのと也いざとくとは俗に夜ざとくと云々
一ものいひつる人　女房衆御丁へ入せ給へと申せどもうたゝねに臥給へり丁へ入給はぬ也女二宮は引給ひし琴をやがて枕にて臥給へるやうだいなど勝給へるを見奉り捨てかへり給はんはくち惜きと也
一みすのと　御簾外也
一かの御みゝ　女二の御みゝなるべし
一歌しにかへり　中々たのめすはいのちもかゝらんと也身の代にと勅言ありし故死かへりつるが又いのちもあやしきと也さ衣歌也
一きゝやしらせ　さ衣としろしめしていとゞはつかしきと也女二宮の御心也
一そこらはふき　省也　異本
一かの夜はの　身の代衣もおぼしかへさんやはとたのもしきなるへし思ひもかへさじと也
一心みだれ音異本　引君にあはんその日はいつと松の木の音のみだれて物をこそおもへ　源氏物かたりにある歌也
一大宮の御けしきの　母后の御心のつゝましさに文にても申かねければ人傳ならで申さんとてと云な

じ給ふ也
一心のとかに　おほけなき心はつかはじとさ衣の詞
也
一げにうとまし　さ衣の體を女二宮の心也
一げにこれこそ　女二宮と云ほどにてうつくしきと
也
一むろの八島　源氏宮のかいなをとらへ給へると一
巻にありそれにおもひなずらへ給へる也
一いかにしつるぞもし　若也けしきとは只今のけし
きを見る人ありて天子へめされたらんはと也遁所
なからんと也
一いのち　引ありはてぬいのちまつまのほど計うき
事しげくおもはすもかな
一又かうは　女二宮の御心をおもひとりながら也
後行末の分別もいかゝ成にけんと也
一おもひくまなき　おもてむきならでうへの御心に
たがふへしとはおぼしめしながら也
一左近は　明かたのとのゐ申也　名謁
一かつらきの神　葛城一言主太神申二行者一云自形
醜夜の間に作らん云々 上下略 岩橋を人目はづかし

ければよる〳〵わたさんと也絶間やはと心得べし
一こちたき 歌　こと〳〵しくは人のとがめんと也
一くやしくも　よべ戸口のあきたるゆへあやまりし
事くやしきと也やすらひにてすぐさんものをと也
一そのすなはち　面白き詞也むかしは如此の名目あ
るか可レ勘
一ふところかみ　色紙なといへどをしなへてのには
あらぬなるへし
一大將　さ衣へさへかろ〳〵しきとおもへるにこは
いかなる人ぞと歎給へる也しるへせし人あらんと
也
一ものにすこし　面白詞也きはたけくすくよかにお
はしますと也
一中宮　御連枝也おまへとは中宮の御前也中宮御文
かゝせ給へる折ふし也おろしの筆つかひならされ
て下々に遣筆といふ心也
一うへの　皇后宮也さ衣の御母也いまよりさばかり
異本多也うしろめたかるへき御心との給はするやう
あめるをとてうちわらはせ給ふ匂ひをかばかりな
るはかたきと中宮を見給へり

一ほゝゑみて　大かたいまより狹衣の詞也
一ゆだの　引いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたにものおもふ比ぞ古今
一おぼろけならぬ　さ衣のうつくしさを見るめなるべし心ぐるしかりつるは女二宮の御體也
一かきほに　古今山がつのかきほにはつる青つゞら人はくれどもことづてもなし
引あな戀しいまも見てしか山がつのかきほにさけるやまとなでしこ
歌一うたゝねを中々　さ衣かくれなし
一こきでん　女二宮の御方也
一とをき人　中納言は大貳のめのとのいもうと也西國へ大貳の乳母は下し也狹衣の乳母也
一かすまん空の　引歌末ㇾ勘
一木のまろ殿　未勘　叱云ゆくはたが子ぞの歌にて叶歟母宮の子なるにさやうにあだ名をたて給ふかと云心にや
一若無比丘　安樂行品末世の安樂行を佛のをしへ給へる文也
入ㇾ里乞ㇾ食將ニ一比丘ニ若無ニ比丘ニ一心念ㇾ佛

一宮の　女二宮を狹衣の御覽じたらばえさしも思召さじと也中納言佐か詞也
一外道　佛の成道の時女に現じて妨をなせる也若き女人又盛なる老女と成たると也
一ありつる　女二宮へ後朝の御文なるへし
一鴫と云鳥の跡　水鳥の跡は見えぬ心なるか猶可尋
一それは中々　女二宮へまいらせたりともかひあらじと也
一あが君　女二宮御らんじたらば破給へと也
一まことに　さ衣の詞也女二宮をけちかく見せたまへと也
一からうして　一段めやすき御心とうれしけれど早く目ならしてはいかゝと也
一おこがまし　御らんしたるものをと也
歌一相坂を猶行かへり　しのびてはあひ給へ共面むきはさなき事をよみ給へりさ衣の歌也
一男のたゝう紙　さ衣のよべのたゝんがみなるべし
一御文とり出たらは　中納言媒と人々もおほしめされんと也
一よべまで　女二の何のけしきもなかりしかば宮う

へにまいり給へるに我にいかなる御心ちそと思召て御心ちいかにと歎き給ひていつも〳〵何事にてかとは中納言佐が事をの給ふ也

一中納言すけ　女二の御枕もとへ參る也

一あまも釣する　引戀をしてねをのみなけは敷妙の枕の下にあまも釣する

一たゞさなりやと　さてはさ衣に過し夜誰そあはせ奉りたるかと思ふ也

一かごと　東路のみちのはてなるひたち帶のかごとばかりもあはんとぞおもふ

一しのだの森　未勘　引わがおもふことのしげきにくらぶれば信太のもりの千枝はものかは

一御かへりより　けだいなからんまでは詞也道心おこさんとさ衣のおほせらるゝ御心もうしろめたきと也

一戀の道歌　中納言佐の歌也あふさかまでたづね入給へるは道心はいかゞと也

一たうらいせゝの

一御こゝろのいと　草子地也面白にて何をきるべしいかなる事のありけるとは女二の御かたに文の行衞もおほつかなくおぼしめすこゝろなるべしなを中納言かたへもおほせられざると也

一雲の　引夕暮は雲のはたてに物ぞおもふうはの空なる人をこふとて

一一かたには　道心の御事　成就しがたく成と也此云源氏のみやの事歟

一此御ことは　源氏宮也　私女二宮事歟心を付て見るべしゆくりかに春宮にゐ給へらん事歟いとゞものごりは草子地にいへり

一おもひよそへんは上品也源氏宮など也又少中品などを御らんじつくし給ふまゝに思召出すと也

一みち芝の露　此卷の口にありし歌の事なり

一あふ坂山　引名にしおはゝあふ坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかな

一いかさまにして　女二のみやの事をのがれんとは今はおほしめさぬ心也

一たゞありしやうにて　女二にあひ給ひし如夢なる夢をたゞちに御らんずると也今眞實の夢也

歌一人しらば　狹衣歌也引枕より跡よりこひのせめくればせんかたなみぞ床中にをる

一うへのおまへ　天子の御事也
一飛かふ　鳥類虫などは飛ちがふほどにて子を生と
也
一こはいかにすべき　こは子を含めり古歌の心なる
べし
一ゑんだう　禁中行幸の時道に敷筵也
一わたらせ給ひてヽ　女二へ大宮のわたらせ給ふ也
一いとかういみしき　女二は我身の御懐姙を知給は
ぬ也
一いてやいとけしからぬ　異本有　大貳の乳母の妹内侍
のすけの申詞也狹衣の御文などおとしちらしてよ
からんとおもひ給ふるをと内侍申せは我さへとは
さ衣の御詞也
一たがうへをも　我ならぬ人もあらんをよの人はさ
あらじさ衣ひとりをにくまるゝとの御詞也
一あやしかりけん　しるしはふところかみなるべし
一そが　それがなるべし
一なをさりの　かいま見はあなかちにびんなかるべ
しともおぼしめさて近きほとにておとしたる紙也
一岩にも松は　引たねしあれは岩にも松は生にけり
こひをし戀のあはさらめやは此心なるべし
一心えぬ御心かな　内侍心なりさ衣の御心を心得す
思ふ也
一大宮の　大宮の御懐姙と出雲の乳母など思案して
内にも奏したると也
なべての　月のさはり也老ての子は大事と也
一ひつじのあゆみ　故事引に不レ及
歌
一吹はらふ　かくれなし女二宮の歌也
一りんだうの　をりうかされとは浮紋也
一たつたびめ　そめ色なり
一おどろきながら　此ながらはつゝといふ心也
一さきにとは　女二より先だち給はんと也
一をのゝ　引あさちふのをのゝしのはら忍ぶれとあ
まりてなどか人の戀しき
一みだれたる扇　如何
歌
一人しれす　かくれなし
一みゝくせ　俗言にみゝくせといふ
一心から　ぬるゝも御心から也いつも時雨のもる山
なれとも也

一狄雲井までおひのはらなん　人も尋ぬはさ衣不レ知よしと也大宮の歌也三巻の末にも故宮の歌と書たりなんは下知也
一つれなき　さ衣のつれなくしておはします也天子の女二をまいらせんもうけひき給はぬと也
一この御事　女二の御産をきゝ給はんと也
一行末にみやたち　さ衣なれは宮たちにても似相たると也殿上人なとならはなるべし伊勢物語源氏に唐の故事引給へり
一たがふ所なきにさて　不レ知體にてさ衣のおはしますはつらきと也
一御ゆより　かほつき狭衣のおさなき程如此ならんと也
一いてや　中納言かしわざとおもひて乳母わざとさ衣には不レ似といふ也わうげめきたるといひなす也
一なかれての　引歌にをよはず
一けに見めて（はイ）　御誕生を見んと思召たる念にて今まで御存命と也
一姫宮さへ　御門の御心中今一度御門へ見え奉らんと思召なぐさめとて人々などまいらせらるゝ也
一などいまゝで　さ衣の御詞也御懐姙ときこしめす事早はかくのごとくはせましきものをと也
一けに身のほどしらぬ　おほけなくちかづきまいらせたるがつみに成と也
一ことのほかにも　さ衣をいとひ給はぬと聞たらばと也
一まいて内なと　おもてむきゆるしなきにちかづきたるをなめげに思召んと忍ひたると也そのほども時々きこゆるに中納言したがひたらは見しる事むらんものをと也
一をのれつらく　引歌未勘
一おなしさま　大宮とうち具してならばと也
一はちにしにせぬ　俗言にいへり叱云君辱臣死
一あまのかるてふ　我から大宮なく成給ひしに心つきなさは世にしらずも姫宮の御心なるへし心より外ならんけふりはさ衣へなびきがたくおほしめす也
一まぼろしならでは　眞實あはぬ事也又ゆめにもと也ことばつゞきかね侍る歟

一こよひのほどに　尼に成給はん事を奏して案内申せと也
一かうなからはさりとも也
一きろ〱　御ぐしの尼髮のきらりとしたる心也見にくゝなし奉りても御いのちを時のまもかけとごめ奉らんと也
一あながちなるべし　源氏宮故也思ふ事かなひなばも源氏宮の事なるべし
一しはすの月　淸少納言枕草子源氏にも引歟
引歌 一おもひかねいもかりゆけば冬の夜の川風さむみちどり鳴也
歌 一我計　我ほどつがはぬ鴛も物おもひはせしとさ衣心也
一玉藻かるあま　尼入道宮の事也
一わだ〱　俗にわだ〱とふるふといへり
一かたしきに歌　さ衣かくれなし
一ふせこの少將　古物かたりなるべし
引 一あけまきやひろばかりやさがりてねたれどもころびあひにけりかかよりあひにけり源氏宇治に有
歌 一しらざりし　源氏若むらさきに紫上の蘆若の浦の面かげ也あし原のたづを雲井にきかんと也天子の御子分なればなり
一雪まろばし　源氏朝がほの卷をふくめり
一われもかう　むかし此色あるべし永孝へ尋畢
一いつまでか　消ずもあらんとは消んと云心也煙は富士の山也とも也
一雪山に　むすぶの神いかゞ
一もえわたる　狹衣歌かくれなし
一なむ平等大會　法華經の異名也
一けふりもいまは　たゞず不斷也口傳ありさ衣にはおもひもあらじとの心也
一氷がさねのからのうすやう
一雪いたう　源氏には霜もおとさずとあり
一もてなやませ　さ衣の御母春宮よりの御文をもてなやませ給へる也
一けふはまいて見所侍らんかしとゆかしげにおぼしたれば　さ衣の御心詞なり
一いとあるまじき　とまでは詞なるへし　源氏の宮の御自筆はあるまじき事と思召に狹衣けふはましてと被仰ゆへあるましき事と　源氏宮の思召べし

と母宮の給ふ也
一わらはせ　母宮也
一をしへ　狭衣に源氏宮へをしへ給へとて東宮より
の御文をもさ衣に見せ給ふなり
一ゆかしけにおぼしめすにさ衣にをしへ給へと也
一たのめつゝいく世　消果もせずたのめて久しきと
の春宮の御歌なるべし
一げにいとをしくうちをき給へば　是母宮の御詞也
まいてからさ衣也の給はすれどさりとてをしへ申
さではとて
歌一末の世も　消もはてなどゝあるごとくなるこゝろ
はたのみがたしと也源氏宮の代にさ衣よめり
歌一そよさらに　さ衣歌也小篠はさ衣の御身にあてゝ
春宮の御事をふくませ給へり
一みじかき　引難波潟みじかき蘆のふしのまもあは
てこの世を過してよとや
一なに事にも　をよぶへきならね共こゝに春宮へ源
氏宮ゆへいま一きはとむつかしき詞也
一ことはりといひながら　如レ此のをとりたる物か
なさていかゞ御覧ずるとてまいらせ給へりあたり

の衆さ衣おほしめすまゝなるとわらへば我もはさ
衣也
一えさぶらふ　こゝほどにちかづく事あるまじきこ
とゝ也
一うちそば見　源氏宮也
一引やり　さ衣のあはでこの世なとあるゆへ也
一いてや　源氏宮御覧じも入ぬと也
一は山の　つくば山端山しげ山しげゝれど思ひ入に
はさはらざりけり　され共大殿の御心など憚りた
まふと也
一ためこそ　引戀しなん後は何せんいける身のため
こそ人はみまくほしけれ
一れいの心うく餘所人の　大貳の乳母の妹なるに心
にも入ぬと也
一正月に　上洛して飛鳥井の事聞たくおぼしめすに
面白き事なと申すつゐでに三川になるも心うきと
申す次に八はしと云からはくもでにこなたかなた
に物おもふと也
一若宮の　飛鳥井君の腹にて誕生あらば若宮のさま
ならんをと思召也

一つたへよと　歌にかきそへられしなるべしをこせ
よ何をきるべし
一れいのつれなく　そばへもよらずとかたりしには
如何と也
一いけて見んと　飛鳥井君の詞也我をいけてみんと
思はゞそばへよる事をゆるし給へと也
一さそふ水　あふぎにかける事一卷にあり
一からどまり歌　狹衣かくれなし
歌
一あさりする　狹衣歌也源氏見ざらん人は心得行か
たし
一かぎりなき御歎の森　源氏の宮ゆへ何事もおもひ
けち給へりし也
一いとすなはちのやう　うせにしのち思召は忘れ給
はざりしも則刻のやうにはなかりしが此扇御覽に
て其時のごとくなると也
一かほに　唐泊にて女のかほに扇をあてし跡と見給
也
一涙川歌　狹衣かくれなし
一かの若宮　女二の御子五十日の御祝言也
一その夜　いかの夜女三宮若宮を具して御參內也

一なきが　引世中にあらましかはと思ふ人のなきが
おほくも成にけるかな
一こりずまに　又女三をさ衣へと思召なるべし
一大將のこゝろ　さ衣のこゝろせしをめし出されて也
一むさしのゝ　引歌可勘ゆかりの心なるべし
一袖の中にや　引歌未勘私勘古今にあかざりし袖の
中にや入にけん我かたましゐのなき心ちする
一いとくるしくて　御出家より中々御返事なきとさ
衣へ申理也
一一かたこそ　女二こそ也そこのもくづは飛鳥井君
の御子也其誕生あらばと也
一しのぶ草　ねぢけたる母かた也とも御子ばかりは
尋とらんものをと也
一おもひうるかた　分別はなくともと也
一中宮いと忍びがたげにおぼしなげきたるもいと心
苦しくは　中宮の御歎を天子又御心くるしく見給
へると也
一大やけわたくし　天子の行末たのもしかりしもけ
ふともしらぬあり樣にておもひはなれきこえまじ
きとても いかゞは何さてこそ いまはの きはにも

思ひはなれぬとおぼしきりて御出家と也面馴歟
一齋院　女一宮也
一さおもひ　さ衣へ女二をと思召しと也
一わか宮を　なま〳〵の孫王よりもさ衣にあづけ給はんと也
一おもふ心ことなる　天子の御詞也獨住もゆへあらんとおぼしめせとも内々はしらず御遺言ならばをろかにはあらじと也
一うちかはり　一巻にもある詞也たゞかへておほせらるゝ心也
一齋院のおはし
一さしはなれ　女二御入道に又女三と也
一袖にそよめく
一春宮のゐさせ　如ㇾ此めてたきにもさがの院をおぼしめしやりて春宮の御心中はあはれなると也
一女御代
一しき島のやまとにはあらぬと立井に
一我もはさ衣也そゝのかしは源氏宮きんひかせ給ひしに猶と笛吹給へどもおなじすぢを習しかごをとりたるとて引給はで大納言の君して狹衣に引給へとて指出さるゝ也
一しのぶるを　狹衣歌也日比忍ぶるを今夜こゑのかぎりねにあらはせとやと也
一くやしきや又やと心見まほしけれと
一ふもとよりだにこそ　山へあがらでと云心なるべし私勘古今しでの山麓を見てそかへりにしつらき人より先こえじとて
一衣かへやせんさきんだちわがきぬは野ばらしの原　引
萩が花ずりやさ公達　催馬樂
一一わたりおとして　上略なるべし又調子をくだしての心也
一かくれみのゝ　古物語歟
一三秋而宮漏正長空階雨滴
萬里而郷園何在落葉窓深愁賦張讀朗詠落葉題下也
一齋宮　誰ともなし一品は一條院かくれさせ給へるにより大膳より又おりさせ給へる也一條院姫宮也
一宮の御夢　源氏宮也神代よりの歌は堀川殿の夢中に御覧せし歌也心はかくれなし
一心ち中々　さ衣の御心なり
一あらばあふ世　引歌未勘

一から國の中將　故事未勘
一大貳　歸京して三河へ下し歟
一はゝ宮は　齋院に成給はゞおぼつかなき月日へだたらんとおぼしなげくを齋院はいかでかはさはへだゝらんとうらめしく思召を理とくるしく見給て也
一尼にならざらん限りはいかでかおぼつかなくはあらんと詞をかへ給へり齋院へは尼法師は出入不レ叶故也命のかぎりにえあひ給はじ今より忍びがたきと也
一神山の歌　しのべばぞはしたふゆへにゆふをかくると也忍べばぞにて忍ひ／＼の心こもれり
一大津皇子　可勘
一見るめなぎさ
一ちとせのかた見
一我戀の歌　引我戀は行衞もしらずはてもなしあふをかぎりとおもふばかりぞ
一齋院御まいりの日　女房衆の體也
一一乘の門をだに　法華一佛の門の事なるべし二乘は聲聞緣覺を云三乘は菩薩を加ふ也

一見たらし川　引戀せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずも成にけるかな　心もとなくとは本歌の心なり神はうけずもの心ならんかと也
一けふやさは　狹衣むかしわかれたらばけふの憂別あらしと也
一よし御覽ぜよ　此世にながらへしと也又遁世の心なるべし此おなじさまにてやのてにはなれば也
一大將の宿直所に　に文字入本可レ然と也
一心こそ野にも　引いつくにか世をばいとはん心こそ野にも山にもまどふべらなれ
一殿にても　源氏の宮のおはしませし所を也
一ゐんに　齋院へさ衣のまいり給ても也
一ほうらい　楊貴妃を含めり源氏宮を貴妃に齋院を蓬萊にして也
一いまはいとゝ　大宮は齋院又一條（大宮の姪也前齋院なり）とかけておはしますさ間衣の御獨住心もとなきと也
一三宮の御事はさ衣の御心にかなはす前齋院はいか（齋宮に定也）か女一宮なればと大宮思召也女二宮は御入道三宮は不レ叶又御姉宮は女一（前齋院也）やうのものと也
一弘法大師　入定所三會暁を待給ふ高野山也

一我ちさやうに　れいならずおもふ給へらるゝとさ
衣の詞をうけて殿もさやうに見給へると也
一よしの川あさせ　狹衣歌也源氏宮にあひ給はぬ中
と也
一わきかへり歌　同心也
引冬川のうへは氷れる我なれや下にながれて戀わ
たるらん古今
一かのそこのみくづ　飛鳥井君の事なるべし
一うき舟のたより　狹衣からごまりをゝしへよと也
一是人命終　普賢品法華書寫の功德によりて天に生
るゝ事を是人命終當生忉利天ととけると也
一たゞ石山とぞ　此寺江州石山にたると也
一寺の堂僧修行者
一藥王汝當知　如是諸人等　法師品偈也
是經難レ得聞　信受者亦難　如二人渴須一レ水
穿二鑿於高原一　猶下見二乾燥土一　知二去レ水尙遠一
漸見二濕土泥一　決定知レ近レ水上　藥王汝當レ知
如レ是諸人等　不レ聞二法華經一　去二佛智一甚遠
一我爾時爲現　清淨光明身　同し品也
若說レ法之人　獨在二空閑處一　寂寞無二人聲一

讀二誦此經典一　我爾時爲現二　清淨光明身一
若忘二失章句一　爲說令二通利一

狹衣物語下紐第三

一谷ふかみたつをたまきは　枝もなき木なるへし口傳有レ之源氏の宮の事をふくめるなり

一うしろめたく　大殿母宮なとなるへし

一をし明　引歌天の戸をなし明方の月みれは憂人しもぞ戀しかりける

一戀しさもつらさもおなし　源氏の宮なと也

一かみさうし　紙障子也

一たなゝし　引歌堀江こくたなゝしを船行かへりおなし人にや戀わたるへき

一ゆきかへり　いもせに思ひはなるゝ道もかなと也

一やすの川原　引歌未レ勘

一わがおもひ　御遁世なるへし

一雪やけを　湯にて御養性也俗日にやけと云心可成

一阿私仙人　かた目の法師を被レ仰也釋尊因位の時大王として法のために位を捨て阿私仙人に逢て法花經をえ給へりさて千歳の間菜摘水汲て仙人につかへ給へり仙人は今の提婆也

一いなふち　引歌年をふる涙かいかに逢事は猶いな淵の瀧まされとや和州名所也

一ありなしの　飛鳥井の行衞也池の玉藻とは猿澤に身をなけゝんうねめの事歟

一忍草　御子の事也

一齋宮　女三宮也

一前齋院　女一宮也

一やう／＼住吉の里

一一方より外に　源氏宮より外に心を分さりしと也

一もしほ草かくと云詞より海士の濱やと也とまやと同心なるへし

一おがみわたすにも　齋院を也

一さがのゐんこそ　入道の御門は御ぐしぎろ／＼として見にくし女二はうつくしきと被レ仰也髮はみしかきとはさげ尼の髮也

一うきふしは歌　かくれなしさても女二はいかやうにおほしめすそと也

一めさし

一ちりつもり　女二宮の古枕と也此心を繪にかき給へり

一かうのみつもる　是より入道の宮の御心中なり

一こよなかりける御心ぶかさ　母宮の御心を思食也
一うき事（歎入道宮）　母宮はなくならせ給へるに入道宮ながら
へ給へるがうきと也
一あらぬには　草子の地なり一夜の契のあらぬにな
しがたき也
一つねよりは　中納言のさ衣ゝの御返事を御覧じて
えおほししづめぬと也
一おほさるへし　雙子地也
一まことの御子　殿は眞實の御子とはおほしめされ（堀川殿也）
ども養母の御ためにはさもありてよからんと殿の
御子ならずともさ〱も御養子は同事なるへし
一母は　内にも眞實の母をは御覧せしと也堀川殿物
いひ給へる事有し故御子と名乘出し也天子も殿の
御子にてはなき御心ならんと也
一きさいの宮と　太政大臣（後一條院御祖父）　一條院女
院（きさいの宮是也）　東院上（堀川殿北方　今姫君養母）
一おとゝのゆかり　太政大臣
一かのおとゝ　是は堀川殿也
一かやうの御けしき　天子の御心に不レ叶を女院の
御覧じ知て故院崩御已後は花々しき事は思召入ず
乍去堀川殿の被仰たらんはよからんと也
一ことさら　堀川殿方にもあらず只女院の御心にこ
そとしゐておほせらるゝ也
一今おとゝのけしきみてこそは何　思ふ方おとゞの
別に思召す方有んを女院のすゝみ出ては如何と也
一さくらのかた
一つれ〱から　さ衣へ仰らるゝ詞也女院して天子
仰らるゝと虚言を也何（イツレ）の御事をもからさ衣の詞也
一いまやうの人は　おさなきより琵琶など引ならは
したまふに今姫君は廿過まで内わたりなどの事も
うと〱しきと也琴などをしゆる人もかなと尋を
きゝて此ひはの後見今參りあると也
一すぎ〱　次々也
一まきの馬　牧馬くるふ體なり
一かみは　色髮とて上品也
一いふべきことも　いま姫君の心也
一はじめ　さ衣御出の時いらへをそくしたるとて母
代腹立したる也
一かのはゝと　さ衣によみかけたる歌を東院のうへ
ほめ給ひしかと今姫君まれ〱思出給ふ也こゝも

と詞くだ〳〵し
一（引歌）吉野川なにかは渡るいもせ山人だのめなる名のみなかれて前の母代が歌をそのまゝ吟し出し給へり給へるをまでさ衣の心也げに人の忘れぬふしやよみ出たりけん是までさ衣の御心歟又草子の地たるべき歟
一（歌）吉野川かへす〳〵　または又也源氏末摘から衣又から衣から衣の等類歟　さ衣はいもせの返事を我ながらわすれ給へり
一瀬に入立も　とがめあるまじければ一わたりも心をとりし給へり
一先猿をつなげ　かなでをくと肱（ひぢ）してつくめればさるかなでいたち笛ふくいなごまろはひやうしうつきり〳〵すはなごほそめはほそ目也
一たれかへり〳〵　。
一おさしあげ　甲乙歟
一げに一偏によからんのみとはおぼしめさずと也普御心ながらも也
一名のはづかしきと也
一女院から　東院のうへの御心也時々打わたりとは今姫君にいつもそひ給はぬ間うはべばかりよきと思召なり
一あめつちを袋に　未ㇾ勘
一繪に苗代　柳櫻を寄合よりうせざめれば亂たると也不ㇾ失歟えりふかうはえり入たるごとく也源氏末摘にある詞也
一わが御心の　母代の心と也
一よのつねなりと　さ衣思召也人の文とは飛鳥井へ通給ふ文なるべし
一よに侍らしとの給へは　文などよにちらさぬ物をとなり
一（歌さ衣）なき人の　源氏夕顔の卷の歌に少もかはらす心は明也
一かすまん　引歌未勘
一眞木ばしら　引歌わぎもこがきてはよりそふ眞木柱そもむつましみかたみと思へは
一かの扇　飛鳥井の今はの時までの扇也
一（引歌）筑波山は山しげ山しげゝれとおもひいるにはさはらさりけり　玉のありかは楊貴妃の事なるべし
一おびたゝしかりし　懐姙ながら水に入心はこと

ことしきと也
一もゝか　百日也
一人のまどふ　引歌人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな
一遠山鳥　へたてゝある心也
一あかつきかけて　源氏すまの巻にある詞也
引歌春はたゞ霞むはかりの山のはに曉かけて月いつる頃　定家卿
歌一秋の色は　さ衣のあくかたの心なるへし
一云何女の身速得ニ成佛一（いかんぞ）　提婆品也　舍利弗龍女に對して五障の女の身としてすみやかに佛に成る事あるましきとの給へる詞なり
一いづみのよこ嶽と云山　行者のおこなひ所也
一太政大臣　御馳走なり
一よるひる　堀川殿御如在と東院のうへくねり給へり
一しかる　叱字歟　天下はいたしやらしと異本あり
一浦かよふ　見るめはかはらしを名のるにはをよばしとのこゝろなり聲を聞わかで浦通とあるにて西國の守領と思也

一月日過れと　故院　一條院
○女院　後一條院御母太政大臣御女
○姬君　後一條院御妹の姬宮也一品に成給
○女院さ衣の御かくしの御息女飛鳥井君腹を養ひたまへり
○藤壺　いつも御くし有てわたり給へると也
一賀茂の川なみ　齋院なり前かとより一品宮へ少將命婦して御文通し給へり
一一條宮一品宮　飛鳥井姬君を養給ふ也一條に女院おはしますなり若宮のましますー條宮と女院の御里近といへり
一こうきてん　中務宮の姬君也さ衣女二に逢給ふ夜の事也
一やみは　引歌春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えね香やはかくるゝの歌なるへし
一權大納言　東院のうへの御弟一品へ心かけ給ふ也
一中納言君　母は内侍の乳母也
一大納言　ほこりかなる人に大將見付られたると思召也其後大納言へつれなきが大將へ心ひくとおほせらるゝ也

一にふ〳〵異本　きは〳〵しき事を見さらん人のやうにとあり

一此たびばかりあへなん　ありなんの詞歟　似相と云心なるべし

歌さ衣　一おもひやる　身はよそながらぬれきぬをきたるとなり魂が行てぬれ衣をきたるかと也

一さればこそ　こゝもと堀川殿の御心中なるべし

一かゝりけり　さは

引歌　一いせの海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定かねぬる

一げに又かゝる　入道宮とは何とやらん自他御心ゆかさるやうなりしに一品の宮などは尤と也さて后に成たると也上下略

一こんよのあまとなり　入道の宮の御心なり

一芹つみし　歌あり可レ勘　拍手と云　和州　多武峯麓に老たる貧女あり子をほしかるに或時に如二月暈一降たる下に小女あり是を養に貧女に孝ありて芹を摘て是をそなゆる聖徳太子行啓に見むきもせず尋給へるに養母孝行　故と也私云　此故事　不レ當歟只心に物の叶はぬ事にいふ歟

一もりわづらふ　雨の漏ぬを御覧してもらさじと契らざるらんと也

歌　一かしは木の歌　狹衣也

歌　一戀わびて　撫子にて若宮の事を入道宮へ仰らるゝ也げにかゝるとは入道宮とは自他御心ゆかざるやうなりしに一品宮なとは尤と也

引歌　一あまのかる藻に住虫の我からと音をこそなかめ世をばうらみし

一さらにしるきことも侍らず　いかゞ思召とも御けしきの見え侍らさりしと也

一はらふべき　むかし物語あるべし

一げにさこそ　大將のおさめぬ好色とおぼしめされんがはゞかられどもとなり又をしはからるゝころ也

一いとかくいける　ありける事も心に何を切べしさなくては心得がたし

一みづからのつみになすと思召たればいてやこその外にたゞ〳〵しげにきゝ侍しに關の戸をしるべきなくても通ると也

一いたくまめだちて　むかしに云なし給ふと也さ衣

の大かたにおもひたると云なす昔も今も同し心と
なり
一いひむかへなし給ふ　さかふ心なり
一げに袖にはたまらぬ　引歌つゝめども袖にたまら
ぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり古今
一此比から　歌の心も明なり一品の宮の事ふくめり
歌 末こすはきかせ給ふと云心也
歌 一おれかへり　狹衣也
歌 一夢かとよ　ふるき歌詞也面白歌なりとはるゝは見
しに似たるがつらきと也かくのごとくうきためし
はあるましきと也
歌 一下荻の露きえわびしとは御命のあるとてもとはる
べきとは思召れぬにて末こす風の事をもとはせら
れぬと也
歌 一憂身には　秋としらるゝ故風の音ならねどもこな
たにはしられたるとなりおれかへりの歌をうけて
なるべし
一旅所にて　一品の宮へまいり給ひてはとの御心也
一なにの物かたり異本　古物語あるべし
一うきはためし　入道宮嵯峨にての御筆すさひの歌
也
一世はいと　思事一にて源氏宮ゆへ入道宮にと也
一たゝこよひ　因果と思召也
一たが玉章　引歌秋かせに初鴈がねぞ聞ゆなるたか
玉章をかけてきつらん
一せいたいし　青苔紙朗詠上雁下に碧玉装箏斜立柱
青苔色紙數行書菅三品　箏と紙とは天の晴たるに比す
柱と書とは列なる雁に比す
歌さ衣 一きかせばやは　入道の宮へ也とことよき衣の住給へ
る一條宮なるへし
引歌 一雁のくる峯の朝霧晴ずのみ思ひつきせぬ世中のう
さ
一なにのせう　右衛門歟　左衛門歟
歌さ衣 一おもひきや　葎は一條院一品草枕也心ふかき御心
にはおもひ散てもくるしからざる書さまとなり
歌 一古郷　一條宮は淺茅か原にならんと也今こそは一
品への事院もうれしく思召と也　嵯峨院御歌也
一まことに　入道なき時と也
歌 一まだしらぬあかつきおき　さ衣歌にかくれなし
一院には　一條院女院一品宮の御持也

一しからみかくる　引歌秋萩をしからみふせて鳴鹿の目には見えすて音のさやけさ　色々のさうそく目には見えねともと也

一ものもかゝれざり　伊勢かけさう文に詞はかゝすして歌はかりと也

一宮はいみもこそ　又御返事あるへきに打すて給へるはいみけると也御心に入ざるなるべし

一忍草をちかくて見ん何　若宮の御事也

一をとり所にて世を　獨住にて御心安がなぐさみとなり

一そのなぐさめも　又入道の宮もえ見給はぬと也

一さばかりはあかぬ　入道の宮の事也

一室の八島は前巻の歌也入道の宮に一品はをとり給へると也室の八島　歌可レ勘　又義入道宮萬勝給へるなだに源氏宮には思ひなさして如レ此なし給ひしと也

一頃はにおふる　若宮の御事前に御歌有し也

一いとさはかりの　宮に成給へる也撫子ゆへさか野の花は入道宮也

一なに事かは　大方にて勝れたる一かどもなかりしと思ふと也さはいへどもけぢかくては大かたならずと思出給ふ也

一くやしと　殿もくやしとおぼしめさんと也

一びはことにて夜を明し給ふをかたはらいたかる人もあらんと也

一引歌三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれかにせん

一よすればなびく蘆の根　未レ勘

一殿の口とつ　母宮と殿と同じやうに一品宮へ御うとうとしきといさめまいらせられぬと也

一普賢の御出現の夜の誦經を思召いだす也

一をのがつま　引歌あるへき歟

一われもかうのをり物　かれ野かさねは此　比不レ知と也藤宰相殿へ詩華

一歌さ衣むさし野の　かくれなし

一女院　あすかゐの姫君の腹　さ衣の御子の事也

一おさなき人はかならずほど　ほど／＼の差別なしと也

一引春なれぬるは浮世なればやすまの蜑士の鹽燒衣まどをなるらん

一八重たつ山の　引歌未レ勘

一忍ぶ草　かくれなし　さ衣
一あせうちあへて　汗歟
一思はずに　入道の宮なるべし又一品宮歟
一かけのこ草　心なし
一かくはかり見えまうく　一品の宮の御心也
一空ながら　さ衣の心うはの空なから也　げにうと
うとしくも同
歌 一思より又おもふべき人　心かくれなし一品の宮の
御歌也又おもふへき人とは狹衣大將をさして也
一是がゆかりこれよりさ衣の心なるべし
一はふ木あまたに成ぬれは中々
引歌 玉かづらはふ木あまたに成ぬれはたえぬこゝろの（思へさえこそたのまざりけんイ本）
うれしけもなし此心にても可レ然省の字にても中
中は立歟
一院にもかうに　女院也さ衣の御子とはしろしめし
ながらもぎのことを仰らるゝ也　つゐでならずと
もはさ衣の詞也　私云女院御詞なり
一何かは　女院の御詞大殿にもゆかしがり給ふと也　私
一げにつゐてよく侍なんとこそ院も　嵯峨院也　女
院の御事也の給はするとからうじてことつゞけて

こと葉おほくいひつゞけ給也
一聞給へる　さ衣の御子と云事を女院きゝ給へると
也
一あまへて　あまゆる　俗語也
一つゐてならずとも　さ衣の心詞也
一又いかに　女院の御心也
一院の御かた　さ衣の心さもなどか匂わさとだにこ
そ女院にては女子の御ためよからんと也
一かしこにては　女院にては誰そとことなしひにと
さ衣のいひなし給也さ衣の御心女院にての御用意
げにおほしたちたるかひなかるへければことなし
ひにいふとも女院にてと云心也
一うちつけのたよりならすとも　次ならずともかた
かるべきならすとはやすからんと也
一いまは我しも　女院御獨にあらすともさ衣の御子
なればと也
一院にうち〳〵の　さ衣の御子とは仰せられざる也
一みつからの　天子の御代にと大殿へ仰せらるゝ也
一たちあかし　炭がしらのごとくなる松明也源氏に
なきことは也

一その丶ち若宮をば母　さ衣の御母なり
一いますこし　さ衣と似相たると後見たち思ふ也
一さこそはあながち　入道宮御連枝難ㇾ放御宿執と
也　心ゆかすなからけふ（異本可用也一品宮の事也）のかれかたか
りけるぬれきぬ前に歌有　ふところかみは入道宮
に逢初給ひし時也
一入道の宮と　前齋院御連枝あひ住なりし時の事也
（歌さ衣）入道の宮とあひし事は空事といふべかりしをと也（海士の心也）
一おなじくは　にくからずやとはにくからぬとて尼
衣をきたく思召と也一本尼衣をぬれぎぬとなす
一院はすこし　前齋院也
一小宰相
常盤尼公——小宰相一條院の女院の宮女さ衣時々物の給ひし人長門守が娘にはあらず
　　　　┗筑前ノ北方
一姫君　さ衣の御子飛鳥井腹也過にし此御女の事な
るべし
一いつかたざまにつけても　さ衣の一品への御志は
いづかたさまにても思召いれさると思召也さる程（一品）
に宮は心つきなしと思食なから物にくみを色にも
みせ給はぬと也女院かくれ給はゞ尼にならんと思
召也
一殿かち　堀川殿がち也
一齋院　賀茂へ大將おはします也
一しのふ　源氏宮へみだれ初給へると也
一ふせんれう　浮線綾
一くね〳〵しく　一品宮に猫を思ひくらべ給へり
一岩間をくゞる水　引歌未ㇾ勘
一ゆかりむつび　一品とさ衣いとこ也
一おなじさま　源氏宮ゆへ遁世もせんと常々仰せら
れし也
（歌さ衣）一かつ見れとの歌　一品宮をみれども心に不ㇾ叶を
源氏宮は人の人と思召らんと也
一七僧　七人僧供養也源氏に在ㇾ之（貝散花など七役也威儀師）
（歌）一くらきより　夢中の歌　かくれなし
一吉野川　前の歌なるべし
（歌さ衣）一をくれじと　死出の山を契りしに自水なれば三途
川ならんと也
一皆如金色從阿鼻獄　東方萬八千世界の光如ニ金色一
法花序品事也法華經を說給はんとての瑞相の中也

佛の白毫相の光上至二有頂一下至二阿鼻獄一と云也
一佛だに　普賢の粉川にて御出現の事なるべし
一たのめこしはいづくと也かはりたると云心也下の
歌句古歌也
一ことの葉を引歌箸鷹のとかへる山の推柴の葉がへ
はすともきみはかはらし　私かへるとは十かへり
の松と云々千鳥とかへるははやき心飛歸歟
一なをたのむ歌　かくれなし
一よりゐけん　さ衣の御歌　涙浮木と也
一あへなん　此詞此物語におほしさあらんと云心也
さて一品宮にてこり給へかしとかくおほせらるゝ
ゆへ心にそまぬかと也
一うす大口
一さくらさうかんのうはぎ
一藤のふせんれう
一夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にのみとも思ひける
引歌かな　此歌の心を縫付たる也波よせてとは波にひ
たしたる心なと也
一なをやゝましく　心やましき也
一さいしさゝせ

一やを萬　八百萬神　さ衣の歌也
一をのれのみ　我のみなかれはせじ川水のごとく齋
院にておはしまさんと也　源氏宮の御歌也
一さか木葉にかゝる　さ衣の歌也源氏物語の面影也
をよはぬ枝もわかなの巻にある歌なるへし
一わが身　御製也人とは源氏宮也
一をきくち　銀細工に可レ尋
一おもふ事なるとは　時鳥尋きにけりとはさ衣に時
鳥をなすらへて也
一かたらはゞ神も聞いれ給はんまゝ殘らずあらはし
給へと也
一よろつの人に　おとなしきさへ萬人にむかひたる
心ちするさ申せば若人さへはつかしく思ふと也
一そは車にても　さ衣の御詞也車にても見ゆるはと
也されとうちつけにむつかしき詞也わびうらむる
人々は心あさきまゝ心やすくおぼしめせ也おとな
しきとある詞よりさ衣の御年たけたるは恨給ふと
もすさむる人もなしと見をこせ給へる也れいまで
さ衣の御すがたをほめたる草子の地なり
一見るたびには　さ衣歌也源氏の宮の事なるべし

歌一よ所にやは　昨日の御返歌を齋院へとそゝのかし給へと御くたびれとてかゝせ給はねばう（母上也）へのかゝせ給へる也よ所にやはおもひなるへき葵桂の如に影はなれじと也

一御覽するは　天子の御心なるべし

一みづから　若宮の御身のためさ衣もたゞ人にてあたらしからんと也おなじさまよりはせんようでんにてと思召也さがのゐんの御心も齋院の一條の宮におはしますたよりと思召たると也齋院賀茂への御跡におはしますと思ひなさんと大とのも思召也

一おぼしよろこばん　大殿と大將の御とりもちを也

一とりつきよろこびかほ　さ衣の御心也心ゆきたるとは皆人々の尤と思なり

一みつから　前齋院也御出家とも也前齋院と大殿と大將の御とりもちを也

一大將の思ひはなち　御出家もと也おやに成給ふも心許なく天子思召也（母云大將の思ひはなち給さは狹衣の我が物にさは思はで天子の御事な親めきてもてなし給も如何と思召けれども心にくきけはひの勝たれば天子の御心に入さなり）

一かのやすらひ　前の歌也夢路にまとひ給ひしも同じ心なるべし

歌さ衣一むかざりし跡やかよふは　入道の宮に似給へるかと也磯上はふるきといはん枕詞也

歌一なをいかなりし　入道宮への密通し給はぬ心也

歌一磯上ふる野の　見しにもあらぬは通とあれども前齋院は御心得ゆかさると也（前齋院詠也見しにもあらぬさは母宮のなき事也）

歌一しのぶもぢ　前の歌にあり

一あくがるゝ玉しゐもかへれと也おもふあたりに結留められなばと也

一宮の中將　後式部卿御子

宮中將のいもうとの姫君はさ衣の御位の時一宮をうみ給へり

一草のかう　さ衣のながめ臥給へるを見給ひて入しれず思あつかはるゝは中將の妹の事也中將の媒也

歌一玉しゐの　妹の方にむすひ留まほしきと也宮の中將歌也

一おばすて　なぐさまるゝ事はあるましけれどもおぼしめしへだてずはなくさめんと也

一いふとも人に　引歌未レ勘身にそふかけ前の歌也

一いみじう　戀路ならで御遁世の心ゆへ物あはれとさ衣の仰らるゝ也

一すこし心うる　妹と也
一こゑの秋風
歌一わか方に　さ衣也中將の妹を思召て也
一心には忍ひ給ひしをしがらみふする人あるかと也
魔にしからむ人を比して也
引歌一ときしかの大野の薄初尾花いつしかいもか手枕にせん
一さま〱の御才覺の中にも御手跡箏など勝れたること也
一まねくともなびくなよゆめ　ゆめ〱也秋風吹とは方々へ秋風をさ衣のふかせ給へると也宮中將歌
歌一をしなへて　さ衣のをしなへて御心あだなる闇露もかけじと也同人の歌
一色ごとかせ（素ならねばイ本）　秋萩を色どる風の吹ぬれば（には）（とも心はかれじ草）人の心もいかゝとそおもふ後撰
一竹の中　竹とりの翁がさ衣へは是非を定かねんと也
歌さ衣一かたにおもひみだるゝしの薄　かせのたよりは中將のつたへられたるかと也
一中なるには　竹の中なるを妹に比して也

扇をもちらしては見せたれどもと也
一一かた　妹も一方につゝましくおもふとの返事をげにいはけなきほどゝ思召也
一法華のまんだら　源氏御法の巻にあり佛檀法花經にての莊嚴也
一夢のしるべ
歌一大井川　さ衣ゐせきの如く年へても忘給はぬと也
一及見佛功德　譬諭品也諸天佛を供養し奉て廻向の文也我所有福業今世若過世及見佛功德盡廻ニ向佛道一
一宮は佛の　若宮の御詞也いざふたりねんも若宮也
一うつくしは　若宮の體なりとゝめき給ふにて何
一それは將　かうしもおろさである方は不動尊に見えんと也入道宮不動へ向ひておはします西の方をとさ衣の仰せらるゝ也
一ふせごの　古物語なるべし
一かけられは　掛鐵なるへし
一見しにも　ほんぐにかきたまへる歌也
歌一藻かり船　さ衣歌也尼といはんため也
一いかにしにせぬ　此物語におほき詞也

一袖ぬらすと云　古物語あるべし
（歌）一殘りなくうきめかる　入道宮の御心中歌也
（歌）一心にふかく　源氏の宮へなり
一八千かへりくゐ間の　岩間はくゐまとあり株間の
水　八千かへりくゐまは後悔歟さる時はくゐまは
詞のいはまほしのまゝ歟杭を悔にして也立がへり又
立かへりいひてもなれば岩間もよき歟　・
よし見よは思ひ死にならんとなり　さ衣歌也
（歌）一後の世の逢瀨を　後の世のあふせをたのまんと也
わかるゝ事はいまをかぎりなれば也さ衣歌也
（歌さ衣）一まてしばし山のは　月だにもさ衣を世に留めざら
なん御遁世のあらましにて過る月日と也
一心より外に　御遁世の事なるべし
一たゞ思ふかた一の　好色のみにもあらず若宮など
のことに情なくあらはさぬゆへ入道有しと也
わか身も誰ゆへそ入道の宮の思召所により捨がた
き身をも捨んとたに我心ひとつに思ひなぐさめど
也こゝもとことばつゞきがたし
一かの御心に　入道の宮ゆへ色々しからぬと思召る
まじけれどゝ也

一かの一きは　入道のみやの母宮也入道宮の御心を
さ衣の思ひ給也
一あさんづの橋　うたかひもの也
一見えぬ山路も猶いつしかとかたらひ　中納言佐に
も也
（歌さ衣）一いのちさへの歌かくれなし
（引歌）一すゑの露もとの雫や世中のをくれ先たつためしな
るらん
一齋院
一又うちすがひ　松の生ひすがひてと云は生ならび
たる心に用來也同心なるへし但如何
（歌）一にか見　顏をしかむると云心歟源氏にある詞也
一おぼろけに　かくれなしさ衣歌也五文字は大かた
也
一あかほし　さ衣のうたひ給へる也
一よすがのかきり　御子にてはなし
一おもふさきには　御遁世の事也
（引歌）一御熊野に駒の瓜づく靑つゞら君こそまろがほだし
也けれ
一風の前の

一世皆不牢固　隨喜功德品に法花一念信解功德の格

量に小乘無常の法門を說て阿羅漢の果をえせしむ

る事をいへる文也

世皆不二牢固一如二水沫泡焰一

一大井の物語 ちかづきイ本 未レ勘

一世やつきぬらん　引歌 あはさりし淚のもろくなりゆくはよやつきぬらん時やきぬらん

暮ぬれは齋院のおはします對へなり

一音なしの瀧　前に在レ之

一院もおもはず　前齋院也源氏宮也 淺ましはさ衣の好色な也

一いとゝまことに　とは御遁世あらば也 歌

一いはずともの歌　源氏の宮也ほだしはかりにおも

はましかばとはさ衣のほだしともおぼしめさじと

也

一行かへり歌 さ衣　こゝほと異本有　身は中空に成ねと

やさばとはさらば也世をひたとすてん事さすがな

り源氏の宮の御心もとけぬと也

一忍ぶもぢずり　前の歌也

一むかし有けん　琴は奇特ある也鬼神出たる事源氏

にあり

一法樂莊嚴　法をもつて神佛をたのしめ申心也

連歌猿樂の能なども法味に比して也

論義千部經などは眞實の法樂也

一こゝにも　殿の詞也

一大白牛車　法花一佛乘にたとへり

長者は釋迦如來諸子は三乘の機の舍利弗等の衆生

也火宅は此三界也

歌 一淚のみの歌　かくれなし

狹衣物語下紐第四

一日かりうする　賀茂の神詠夢想也御遁世の心なるへしさるはめづらしきは御即位あるべき事也
一淨藏淨眼の　妙莊嚴王は惡王にてまし〳〵けり此二人の御子と御母の淨德夫人と　雲雷音宿王花智の御もとにてさとりをひらき父の惡王を道引奉べき由申して神通往反遊行してみせられければ父王大に觀喜して邪見をひるがへし佛所に詣して共に聖者と成給ひぬ其時の妙莊嚴王は今の花德菩薩也淨德夫人は今の佛前光照莊嚴菩薩也淨藏淨眼は今の藥王藥上の兩菩薩也
一舍利弗劫濁亂時衆生垢重慳貪嫉妬成就諸不善根故諸佛以二方便力一於二一佛乘一分別說二三十方一世界には本體は二乘三乘の法はなき也
一(歌)院の御まへ　齋院也
一いそげども　入道尼君へのさ衣の御歌
一(歌入道宮)いひしにたがふ(不及引歌)御遁世の事三卷に申給へり
一いかばかり　心ふかく思ひ放給へる尼ならでは誰もはなれがたからむとなり

一はかなかりし　引さき給へる手習の紙を御覽せしやうにさ衣の給也
一宮も　一品宮のきかせ給ひて思ふすぢことなるとは御出家の心ざしあるをおさゞなどの云によりてと思召てはつかしくおもひ給へり
一(歌さ衣)あしせん　かための法師を阿私仙人に比せり
一この比は　御出家あらん物をとさ衣のおほしめす也
一みづからの神人の祝はたのもしげなれどさ衣の御歌には此世の榮花はおぼしめさぬと也
一宮におはし　一品宮也
一さがのゐん　恨かけさせ給ふをさ衣の聞給ひてさればよとなり
一かゝれは　さ衣のねひまさり給へるを御覽して也
一さま〳〵のほだし　若宮なと也
一うらめしきかたにはすゝみてなん若宮なとをふり捨給はんはうらめしからんと也
一山かへる　山より歸ると云名あらんと也鷹詞也
一(引歌)おはたゝの板田の橋のこほれなはけたよりゆかんこふなわきもこ　人丸攝州

一行末はをのづから　若君の御事によりえさりがたく聞えさせ給へることくにおぼしめさんと也いとごから入道の宮の御心を申也
一いてやかひなきは　好色はかひなけれどもあはれとおほしめさばと也
一いとゞ聞にくゝ　御出家は無用とみな申定らるゝとて出家なき事入道の宮の御心にはづかしきと也
一手にふれし（歌）（なイ）　さ衣歌也かくれなし
一まことや　院の女御　後一條院御位の時三巻にさ衣の御とりもちにて内に参り給へり嵯峨院の女一宮也
一齋院　源氏の宮也
一かぎりあれば　齋院におはしますまゝ若宮源氏の宮には馴給はぬと也
一此女御は　院の女御と齋院とうと〳〵しからぬ中となり給へり
一一重つゝ（歌）　齋院御獨吟也時しらぬは女御殿へ也歌は明なり
一このかはらぬ　榊也
一榊葉に（歌）　もとは齋院にておはしましゝ心也齋院におはしましたるとおぼしめさむと也
一猶しはしは　齋院を春宮へと思召たるにと也
一三千大千世界一須彌千を小千世界と號す小千世界千を中千世界と號す中千世界を千が三千大千世界也三十二相は佛の身相に殊勝なる相貌が三十二あるなり
一式部卿宮上は　中務宮の妹也中務宮はさ衣の大将かいま見の夜姫宮にやと云し人也
一神のいさむる道は　佛法也入そといさめ給ふと也
夢ならでは人こそ行末をしらざれ源氏の宮への心を神は知給はゝ思ふ事なきやうならんとは位に即給ふ瑞相也
一さても　心の中におもふ事あると神の御こゝろよせあらは夢のかなはんと也
一はかなしや歌（さ衣）　瑞夢の事也
一うき木にあはんやうならん　盲龜の浮木のごとくと也
一とりかへす物にもがなや世中をありしながらの我身と思はん（引歌）　神前なれば見いれ聞いるゝ人もあらじと也

一心うの事や　ものから心をおこす也物おそろしからでとは神前にておそるゝ間皆々へ物おほせらるる事のなきあひだ神慮に物おそろしからずしてすずしく中比くやしくこそいまは思ひ給へると也

(歌さ衣)一見かきもる　神垣にてひまもなくまもらるゝ也

(歌)一花櫻　心かくれなしさまで神の御いさめはあらじと也戀しくは神のいかきもこゑぬへしの心なるへし

(引歌)一思ふには忍ぶることぞまけにける逢にしかへはさもあらばあれ

一あせあへて　あへて此物語にあまたあり

一太政大臣の御子は　此巻大納言三巻には權大納言と見えたり新中納言當官也此巻に參官宰相中將と云し也後式部卿宮の御子も今宰相の中將也さきざるべからず兩人は太政大臣の御子也

一色々のすがたともぬきこぼして　飛鳥井殿へ尋申にぬきこほすとある詞近年斷絶かしろしめさぬと也

一くづしたる名ざし　くつしたる也源氏に夕霧をまめ人といひしをふくめり

一かうりたまかへり　かふり歟　愚推

一かのさくらを　源氏物語わかなの巻なるへし

一かのあきらか　入道宮を嵯峨にて月に御覽せし事ありし也

一はしがくし　車よせ也源氏にあり

一有漏無漏ほう　三界の世法は有漏なり佛法さとりは無漏也

一けうそくに　三十には式部卿の宮の上なり

(歌さ衣)一おり見ばや　朽木の櫻行ふるゝ心也

一こよひは　草子の地也

一夜もすがら　朽木の花の面影也

一れゐの姫君　入道の宮の心にて母うへにつかはし給へりさき〳〵姫君へつかはされしやうなれ共也

(歌さ衣)一ちりまがふ歌　朽木の櫻の心こもるなるべし

一中將　此御妹の姫君はさ衣の御位の時一宮うみ給へり

一かゝるかたち　無二分別一但かゝるかたちの人を姿をやつして母にはなれてあらん事をおぢて都の外の栖の事聞て後は母にたちもはなれぬ心歟

一宮の御ためをろか　春宮(一品宮也)への事をろかなるためし

にはあぢきなし道芝の露の歌前にあり一品宮へさ
衣のをろかなる也
一歌ちる花に　姫君の代に御母のなるべし
一一ゆきにとは　一行歟よべ母上をさ衣ほかげにか
いま見有し也
一歌右のおとゝ　宣耀殿と系圖にあり
一歌のとかにもたのま　影見ゆべくもなき五月雨と也
一歌いつまでとしらぬ　さ衣の歌也理（ことはり）しらぬを句をき
るべし理を不ㇾ知してなぐさめがたくてこそと云
心なるべし
一くちおしや　をたえの橋は奥州也雲ゐには及ばぬ
中ながら心は通と也さ衣へは姫君の返事なかりし
かと東宮へは自筆にてありしをいへり
一うちさくじり　源氏をとめの巻にありくじりとて
細工者の持也鹿の角叉鐵にて大きなるきり（錐）に似た
りこざかしくとりては御覽なきと云なるべし
一歌水あさみ歌　權大納言よめり左大臣に此巻に成給
へり
一物いひ　わが云いでぬ事は前々も有しと也
一誰かみする　見する人はあらしと也一品宮の事合
めり
一歌さ衣とりあつめ叉も　後岡如何うらやの岡名所なるべ
し國未ㇾ勘
一皇太后宮（嵯峨院ノ中宮也）　御母式部卿御娘春宮の（堀川殿北方也）御母大殿の御む
すめなり
一歌くらべみよ淺まの　かくれなしさ衣の歌也
一けふ計　春宮への御返しと取たがへてと也
一歌さしはなちは　春宮へなり
一あさましや　無二御同心一歌也春宮よりさ衣の御思
ひは淺きとの心なるべし
一宰相の心には　さ衣へはいたづらに成たる御返歌
也かうまとしくさ衣の思召折からゆるし給へと也
一さやうの御ましらひはならぬまでも中宮になとゝ
おもふゆへに内々のくるしさをもなくさむと也思
ひかけずはたゝ入しかるべからんと也
一上達部（かんだちめ）はしばしすき間なきやうにてつゐにくちお
しからん此大將はさ衣也よからんとあるおちつき
也一品宮御座あれば也一品宮は一條院の御姫宮也
さ衣の北方也
一歌さ衣一かたに思ひ歌　春宮へと御心が一かたなると也

一我のみぞ　さ衣御出家御あらましのみ也
一うき物と　限あれは心の旬そむかんと思ひ〳〵て
打過ぬるをいまそむける世中と也
一まかぬ吹きびの中山おびにせる細谷川の音のさや
けさ
一八重葎しけれる宿のさびしきに人こそ見えぬ秋は
きにけり
一年のわたり　引　玉かつらたえぬ物からあら玉の年
のわたりはたゞ一夜のみ歟
一へにける年のつもりには今がはしめにて物いひか
はすと也
一十市のさと　前にあり
一我も又　さ衣歌　十市の近所也ねぬ名はたてじ戀
はしぬともとある古歌はいけるかひなしの心也是
は一筋にはあらぬ姫君勿論御母もほのかに見給へ
る也
引歌　ねぬなはのくるしかるらん人よりも我ぞ益田のい
けるかひなし　こゝもとこの歌にて也
一たえぬへき心ち　たえぬべきに御命の事と又姫君
なあつけ給ふとも中たえんかはと也

一當得水
一玉のをの姫君
一形代　人形　源氏の宇治巻に在レ之
一歎わびの歌　實事なき心也
一あすの淵　明日也　飛鳥川の心なるべし
一とけてねぬは　實事なきと也　外にはかゝる丸ね
をならはぬとすこしほゝゑみての獨吟を乳母の獨
きくはいかゞと御母上へ申たれば
一草枕と御返歌也一夜ばかりにてかごとをかけんと
やとなり
一くはや　源氏の詞にさあと云心なり名殘をしみて
長居をにくむとおほせらるゝ心也
一葛のはふ歌　かくれなし狭衣の歌也
一面影は　さ衣かくれなしとけて　ねぬとは實事なき
と也
一ものおもひの花の枝さし　引歌二巻初に　木枯にさきこそ
まされ物おもひのと前に注レ之
一これもせぬ歌　さ衣歌　實事なき心なるへし
一よるの衣引歌いとせめて戀しき時はむば玉の夜の
衣をかへしてそぬる

一かたしきに　かさねもせずして戀ふる心はいかん
と也
一あなかちには　姫君也はかゞ〳〵しからぬは宰相中
將也
一うかりける歌　かくれなし
一十體　十齋　異本
一甘露法藥　前に注レ之
一光削不絕
一夢さむる　やゝ過にけりはなく成給ひし時よりや
や過ると也心むつかし
一中將は大納言殿へ通給ふに御懷姙になやみ給へり
按察使の大納言の聟になり給ふ
一ことはりの歌　年つもれどもきえずもあると也
一たゝそれかと　源氏の宮かと也
一おとゞ　殿の字めのと也
一宰相のゆるさゞらんにはいかでか內外し侍らんと
也
一かづらきの　引歌烏玉の夜の契りもたえぬべしあ
くるわびしきかづらぎの神
一ときわびし　さしぬきのひもをさし給ふ間中絕も
やせんと也
一いづれを　梅を分て折べきの詞計也
一引歌雪ふれば木ごとに花ぞ咲にけるいづれを梅とわき
ておらまし
一ほと〳〵　ほとんと也姫君の母上へ心うつりし也
さりながら姫君にもとよりおもひしめると也
一行すりの　さ衣かくれなしもと見し心すると也
一よそながら　さ衣よ所ながらにてなく成給へる御
母のごとくにならてとの歌の心也
一末なとして　俗におすゑと云心なるべし
一いりと入
引歌いかばかり戀の山路のふかけれは入といりぬる人
まどふらん
一かたもん　片紋
一かへりしぼみ　色のかへりしほめる心なるべし
一いけるかひあるは　そはより見たる體也
さ衣さしむかへるめのと也
一先かはり　先代を用意してと也
一殿の御けしき　けさほど御心よく見え給へばと也
一心やすく　踏分　宰相踏分もせずして荒たる所に

みすてヽをきがたさにと也かばなんにて何を切て也

一見まくほしさに　一品宮にゆきては徒づらに歸るさて姫君はみまくほしさに也本歌引やう奇妙也
（引歌）いたづらゆきてはかへるものゆへに見まくほしさにいざなはれつヽ

一十五日かゆ　粥の杖にて打古事可ㇾ勘禁中今も粥杖にて女房をうてば男子を生ずとてうつ也越前なごにはことㇰㇰしきとなり本文は不ㇾ知也

一（歌）尋みる（[illegible]后宮）　かくれなしさ衣

一おなじくは　大殿の御娘さ衣の御妹の歌也春宮は木高也　さ衣はしづ枝にはとなるべし

一庭たづみ　春宮よりの歌有し也

一さらすとも　さ衣ならては又別人への御契もあらむと也

一おばすて山　なぐさむと也

（歌さ衣）なかむらん歌　かくれなし

一一品宮に　飛鳥井の母の姫君也

一あかね事　宮の姫君めてたきを見ながら飛鳥井君の事を忍びかたく思召事もりなは一條院の一品宮を御母と思召事あさくならんと也眞實の親と知給ふゆへとなり

一宮も　若宮を待遠にれいよりは思召かと也さ衣の詞也

一あやかるとははらへすつれどもかた代か又あやかると也

一（歌さ衣）大かたは　みるにてもなぐさまで袖ぬるヽ也なくさは紀州也

一さることのあらばしも　しもはてには也

一さかの院の御時　若宮たゞ人になり給へり

一いとあまりから　見るをあふにてとの引歌のあたり（引歌）袖ぬれてあまのかりほすわたつ海のみるをあふにてやまんとやする

一耳とまらせ給へごまで草子の地なり　わが御心はさ衣也

一等覺　菩薩の極位也十住(ぢう)十行十廻向十地等覺妙覺是を別教の四十二位と申也妙覺は佛也

一水の白波なる御有さま　跡もなき心なるべし源氏宇治の巻に有

一歌 めぐりあはん歌　さ衣歌也又御返歌もかくれなし
一歌 月たにも　源氏の宮御歌也
一芹つみし　前にあり
一引歌 戀草をちから車に七車つみてこふらく我こふらく
は七車此歌にてなるべし
一引歌 箱かへて待にもとはず成ぬれはつらき所のおほく
もあるかな
一をくりをかれ　内へ姫君を送りすてさせ給へるを
今上あはれに思召也
一心もゆかさりし　姫君見付給へる所也
一かのよな〳〵 さ衣　源氏の宮の御歌也前にあり
一歌 戀てなく　齋院の事なるべし
一歌 哀そふ秋の　齋院の袖ならてはと也
一ゑんし樓の　燕子樓中霜月夜秋來只爲二一人一長
一白居易 墨染たに　ならひはなれ給ふべきにと也又義双也
一たゞそれかと　源氏宮也よく似たると也
一歌 かくこひん歌　かくれなしさ衣
一歌 名をおしみ　人たらしなれはあふと云名もおしき

と也手かくる程の契はたえたるとの御心なり
さ衣歌也
一ゐん　堀川院也
一歌 扇てふ　名をおしきとてかはらばとはあはゞつら
からんと也又かはらばとあらばつらからんと也
一歌 引つれて歌　かくれなし今上
一歌今上 かなしさも哀　こは是は也又子もかねて也
一歌 ことはりもしらぬ歌　かくれなし涙もなかるべき
にては如何　若宮
一けにあるへき物をとげにつらき心と思ふ人あるべ
きと也
一物としらずや　引歌如何上に今上の歌に子はまた
思ふものとしらぬをと被遊し事也
一一蓮托生　夫婦往生同蓮にむまるゝと也源氏にお
ほし
一かよちやう　加輿丁川がむつかしきと聲々申也此
心あり
一歌 思ふ事歌かくれらし　今上
一なめげなるは　齋院になり給へる後も心をかくる
を神の御ためにはなめげなるをとがめ給はで位に

さへ付給へると也人形にしも見がたきと也此云齋院の人形になるべし非二一方一

一八島もる歌　かくれなし　今上

一歌神垣の杉　同前

一此世にはとかや　前の巻に身をなくる時の夢中の歌也

一見たてまつり　一條院一品の宮にまかせ也

一一宮　今上の御子おもては嵯峨院御子兵部卿と申奉る也御元服の夜よりあらはれたるなるべし

一年つもる御歌　かくれなし　今上

一引歌いにしへになをたちかへる心かな戀しきことに物忘せで

一歌立かへり　中宮の御歌今上の入道宮へ御心中さはぐと也引歌いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

一歌今更に　えぞしらさらんとも在レ之如何無二分別一　今上

一あるべかりし人の　あらん事かはのてにはなるべし

一佛もしゝふしゆせつ　止々不レ須レ說方便品に一佛乘の法門を舍利弗の請し申されけるに佛のとかじとおしみ給ふ御詞也

一桐壺　今上の一宮なるべし

一二宮　飛鳥井の君の御娘也

一故宮　後一條院の御いもうと也御命みじかくてか樣に思出奉ると今上今思召出る也

一いとしも　最尤しも如レ此の思ひにてはなかりしと也

一行衞もしらずはてもなくおぼしまどはせし三川守なれども母の乳母不便に思召と也

一三川守かへりこし歌　又大貳に成て下りし時の事也

一歌人しれぬ　一品宮の御うぶきぬのしるしに母よめる也

一さゝのわき葉　蘆の若葉歟　脇葉歟

一歌わすれずは　心明なり

一歌行末　同

一歌今上をくれじ　同

一かすめよな　かすめて也中將の聞もはづかしく思

召さ衣の御歌也御遁世の心もむかしはありしに如
ゝ此の歌にて御心は見えたりをくれてくゆるよと
也歌

一おちたぎつ涙は波也過にし方へは歸らぬ世上と也歌今上

一ゑにかける形さへあるにゑなど色々かけると也歌今上

一うちはへたるは　よろしき時も散飯（三飯也）ばかりとらせ
給ひつゝ御精進ゆへ御煩もよろしからぬ也

源氏に朱雀院の行幸にいもゐの御はち三衣の御け袈
さ裟を先へ持せらるゝと也

一消はてゝかばね　心閉也今上歌

一たちかへり同歌

此物語のはても源氏夢の浮橋の面影也
少年と書そめて殘おほくかきとゝめたり四冊を全
部も心あるへしはかりかたし後生の人しるさるへ
し

天正十九年三月九日　臨江齊　法眼紹巴

狹衣物語下紐附錄

一●一條院　御母后
おりゐさせ給ふよし一巻に見えたりかくれさ
せ給ふよし二巻に見えたり

後一條院　御母女院太政大臣女
一巻より春宮にたゝせ給ひて二巻に御位につ
き給ふ四巻におりゐさせ給ひて父一條院の跡
にまします也

姫宮　御母弘徽殿后嵯峨院御女

一品宮　御母同
嵯峨院皇太后宮うせ給ひて齋院（誰ともなし）おりゐさせ給
ふ時賀茂にかはりゐ給ひて齋院と聞ゆ一條院
かくれ給ひて後に（三巻にて）一品し給ひてさ衣の大將の
北方になり給ふよし三巻に見えたり四巻にか
くれさせ給ふ
私母女院のおはする一條院に住給ふ三巻に父
帝（みかど）のかはりに御覽せんとて藤壺にしつらひし
て女院と共におはしまさせ給ふとあり三巻嫁
娶の時三十歳也さ衣に九あね也四巻に尼にな

りてやがてかくれ給へり

─嵯峨院─　御母同

一巻より御位此時天稚御子あまくだり二巻に治世廿年おりゐさせ給ひ御ぐしおろして嵯峨に住給ふ

─春宮　御母中宮堀川大臣女

一巻に一宮と見えたり二巻に春宮に立給ふ

─若宮　御母皇太后宮先帝の御いもうと

二巻に生給ふ七日といふに母宮にをくれさせ給ふ嵯峨院にうつろひ給ふ時さ衣大將にあづけ給ふまことは大將の御子女二の宮の御腹さがのゐんの御孫なり三巻に御はかまきせさせ八歳の時給ふ四巻に御元服十五歳兵部卿宮と申

私三巻に一條の宮に居給ふとあり四巻に御元服の時に今上一宮とあらはれたり又一條院の兵部卿宮とあり内にては桐壺におはしまさせ給ふ

─齋院　御母同

齋院に立給ひて二巻に御母宮の御服によりおりさせ給ひて一條の宮に住給ふ大將の御沙汰にて後一條院御位の時三巻に内へまいりて弘徽殿と聞ゆ四巻に姫宮をうみ后にたち給ふ

私一巻に女一宮とあり三巻の末に三十一歳の時入内なり四巻に院女御とあり

─入道宮　御母同

女二なり帝とりわきかなしくし給ふ天若御子くだり給ひし五月五日の夜大將の身の代に給はせんと嵯峨院の給ふ大將源氏宮の御事思ひみだれて心にもいれ給はざる中に弘徽殿のかひま見の夜見奉りて大將忍びまいりてわか宮を生給ふ母后わか御身になして奏し給ひしにおぼしなげきし御思ひにてつゐに后七日といふにかくれさせ給へるをうきことにおぼして御病にことつけて御ぐしおろし給ふ

私嵯峨院のうちに住給ふと三巻にあり能書のよし四巻にあり

─齋宮　御母同

二巻に後一條院御字也齋宮に定り三巻に伊勢へ下給二巻にありひし也女三宮也御かたち入道宮にはをとり給へるとなん

—堀川大臣— 御母同后腹と一巻に見えたり

一條院嵯峨院のひとつ后腹也たゞ人に成て御うしろみつかふまつり給ふ狹衣大將の父也
私六十四代圓融院の二の御子に比す一巻に關白とあり二條堀川也四巻におりゐの御門になれり堀川の院と號す

—今上— 御母は先帝御妹の齋宮也

今上とは狹衣の大將の御事也一巻に二位の中將同九月に中納言二巻の正月に大納言にて左大將かけ給ふ一巻に五月五日笛ふき給ひしに天稚御子あまくだり給ふ其夜御門女二宮を給はせんとの給ひしかど後に一條院の一品宮を三巻に給はり給ふ御心ざし淺くして歎き給ふ二巻に高野にて普賢菩薩あらはれ給ふ三巻に賀茂にて琴引給ひしを賀茂大明神大に感し給ふ四巻に御夢の告どもにて御位につき給ふ
私神代巻下の初に天國玉の子の天稚彥の喪の事あり一巻に源中將とあり又十八歳とあり四巻に賀茂の神又天照大神の告ありて即位なり

—一宮 御母中宮式部卿宮の御女

四巻にむまれ給ふ今上一宮といへり
私男御子也二歳（四巻）の十月袴着也

—一品宮 御母は飛鳥井の帥平中納言女

一巻に腹の内七月にてつくしへ下る道にて母君身をなげしにおばの京へのぼるとて具して常盤といふ所にてむまれ給ふ百日過て一條院の一品の宮の御子にして姫若とてかしつき給ふ三巻に御袴ぎ太政大臣まいり給ふ四巻に一品宮と見えたり
私七歳の時袴のこしゆひ大殿と一本にあり
四巻弘徽殿にゐ給ふ又二宮と書たり若宮の次なればや御裳着あり

—中宮 御母は式部卿宮御女坊門上也

さがのゐん御位の時參り給ひて一の宮うみ給ふ御おぼえいとめでたし四巻に皇后宮とあり式部卿の姫君への文に下枝の歌あり

—今姫君 母は一條院の后の童八條の中納言（飛鳥井姫君の父）のいもうと也

一巻に東院上むかへとり給ひてかしづき給ふ（廿歳時）
御子と名のり出たるなるべしおとゞ御心に入
給はず東院上後一條院御位の時三巻にまいら（今姫君廿二歳）
せんとし給ふに太政大臣の御子宰相中將はひ
よりてつゐに北方になりて君達をうみ給へる
よし四巻に見えたり心おほどきて母代におち
給ひしゆへ吉野川なにかはわたると返しいひ
し人

私母代は西國の受領と四巻にあり

⊖先帝　圓融

式部卿宮

かくれ給へるよし一巻に見えたり

後式部卿宮

かくれ給へるよし是も一巻に見えたり

宰相中將

一巻に宮少將とあり四巻に宰相と見えた
り

〇二巻にさ衣と高野へまいり給ひし人そ
の折は三位中將と侍り

私此圏外の說は誤也さ衣と高野へまいり
給ひしは中務の宮の三位の中將の時也

男子　私云一巻に今姫君のせうと少將とあり

今姫君とひとつ腹宮の中將に似たりと
侍り

私母宰相中將の子と名乘ゆへ如此也一
巻には式部卿宮の御子になさるゝと云

姫君

藤壺后也さ衣御位の時一宮うみ給ふ

私四巻に宮の女御とあり一宮をうみ給ふ
時に立后也

坊門上

堀川の大臣の北方になりて中宮をうみ給ひ（嵯峨院后也）
ていと花やかにおほやけしくもてなし給ふ

源氏宮　御母は中納言佐

御末にむまれ給ひてやかて父帝にをくれ給ふ（一巻三歳時也）
母御息所も打つゞきうせ給ひて堀川大臣上の
齋宮は御おばにておはせしが御子にしてむか

へとりてかしづき給ひしを狹衣大將おさなくより心にかけ給ひし此故におほくの人をいたづらになし給ひき其御心を知給ひて大臣上は後二條院春宮にまいらせんとかしづき給ひしを賀茂の齋院にたゝせ給ふべきしるし二卷末に神託ありて三卷に齋院に立給ふ
私一卷に十五歲とあり二卷におばの皇太后宮の服き給ふとあり四卷に能書とあり又入道の宮にはをとり給へる御ありさまとあり

堀川大臣上
四卷には皇太后宮と申先帝の御妹伊勢齋宮にておはせしをおとゞ下位の御後給はり給ふ狹衣の大將の御母也
私一卷に大宮とあり

嵯峨院皇太后宮
皇太后宮かくれ給ひて二卷になり源氏の宮も御名殘の服着給へるとあり先帝の御いもうとにやひめ宮達の御母后也嵯峨院の皇女也
私二卷に四十六歲なれども貝は三十ばかりとあり又同卷に大宮と書たり弘徽殿に住給ふ

中務宮

少將
天若御子おり給ひし五日の夜笙の笛ふきし人
私二卷の末に中務宮の少將といひしは今は三位の中將といふとあり此所にて狹衣の大將と十一月十餘日高野へまいり給ひし也

姫君
皇太后宮也弘徽殿にて大將たちぎゝの夜人々女は也姫宮の御前にて天若御子のありさま繪にかき給ひしといひしは此姬君也かたちも是也大將の具にてあらんといひし人なり

式部卿宮上
狹衣の大將かいま見の夜四卷姬君にやさいひし人さ行ふるゝ心也歌の詞なり四卷衣ゆきすりの花の折かとの給ひし人
私四卷に名高き能書とあり

●橫川僧都
女二宮の御ぐしおろしたる人后宮の御おちなるべし

―皇太后宮御母

●太政大臣―

後一條の院の御祖父世におもくせし人三巻に今姫君の御はかま着に御腰ゆひし人

―一條院の女院

もとは皇太后宮と申き三巻に尼になり給ひて女院と聞ゆ後一條院一品宮などの御母也

私に三巻に一條宮にすみ給ふ四巻にかくれ給ふ

―東院上

堀川大臣の北方也今姫君を養て後一條院へまいらせんといひし人御名はなし

―左大臣

一巻に權中納言五月五日天若御子の下給ひし夜琵琶ひきし人三巻に權大納言と見えたり一品宮を心にかけて中納言君にかたらひしなり一品宮のぬれぎぬいひ出し給ひし人

○四巻に一の大納言とあり春宮大夫なり

私云圈外の說は誤なり一大納言も春宮の大夫も左大臣の舍弟の事なり四巻に大納言は齋の別當也とあり同巻にて左大臣になり又關白になり給ふ

―大納言

一巻に左兵衞督天若御子の夜箏琴ひきし人三巻に宰相中將にて今姫君にはひ入し人

私云三巻に權大納言とあり四巻に新中納言中將といひしも今は宰相中將とぞいふ又同巻の末に今姫君の御よすがとなり給ひし宰相中將は此頃一の大納言にて春宮大夫かけ給ふ云々

―少將　母は今姫君

三巻に賀茂のつかひにわたりし人かたちおかしけ也とあり

―姫君　母同

四巻に母上兵部卿宮にまいらせんとの給ひしとなり

●左大將―

―一巻に也

宰相中將　天若御子の夜和琴引し人

―宣耀殿女御

後一條院春宮の御時（一巻五月）よりまいり給ふかたちいと
めでたし狭衣に忍ひて逢給ふ人けふは（一巻）あやめの
とよみ給ひし人なり
私云三巻に三十歳なり

●右大臣―
御娘を後一條院御位の時まいらせんとありし人
也

―姫君
堀川の大臣鼻高からんとのたまひし人権中納言（太政大臣の息也）
身にそふ影のやうに思ふといひし人（一巻）
私一巻に春宮へまいらせんと父のあらませしな
り

●致仕の大納言―

―姫君
此ひめ君齋院に似たる人と四巻にあり齋院とは
源氏の宮也

―●仲平中納言― 九州にてうせ給へるよし見ゆ（二巻）

―山臥

かた目しゐたる人二巻の末に狭衣高野へまい
りてめし出ていもうとの飛鳥井のゆく衛とひ
給ひし人常盤にて佛事せし也

―飛鳥井の君
一巻に太秦（うづまさ）にて威儀師（仁和寺人也）にとられんとせしを狭
衣に行あひ奉りて（たそかれ時に二條大宮にて）たしとめて御心ざし淺から
ずかよひ給ひしにたゞならで七月計りに乳母
がはからひにてさ衣の大貳乳母の子式部大輔
九州へ下るにとらせけるをうしと思ひて唐泊（備前名所）
にて身をなげしに長門守の北方に行あひて常
盤にて一品宮生奉りて後尼になりてかくれ給
ふ

―常盤尼公―
もとは一條院の女院に中納言とてさふらふ長門
守にぬすまれてつくしへくだり飛鳥井の君をや
しなひし人三巻に見えたり

―小宰相君
一條院の女院にさふらふさ衣大將時々物の給
ひし人長門守の子にはあらすと三巻に見えた

り　私四巻末に中将とあり

―筑前守北方
これは長門守か娘なるへし

―今姫君の母
一條院に童にて侍し堀川大臣物の給ひしゆへ今姫君を生めりとなん又おのこ子ひとりうめり宮の中將の子と名のりし也（式部卿宮の御子宰相中將也）

●別當―
一巻に右兵衛督と云三巻に左衛門督とて飛鳥井の姫君のゆかりと疑し人

―少將
さ衣飛鳥井に通ひし比名乗をかり給ひし人
私一巻に藏人少將とあり

●大貳乳母―
さ衣大將の御めのとなり
私に一巻に大貳北方とあり四巻に大貳三位とあり

―肥前守
初は三河守也後に又大貳也二度大貳になる

―式部大輔道成　飛鳥井とりし人三巻にのぼりて扇の風吹つたふ（一巻）
私一巻に廿ばかりとあり二巻の初に肥前守が弟とあり又藏人になりたるとあり三巻に三河守とあり

―道季　さ衣御身ちかくめしつかふ
私二巻の初に三郎とあり又御身にそふ影にて忍ひの御ありきにははなれすとあり

―常陸守北方

―中納言内侍佐　嵯峨院の皇太后宮にさふらふ二宮の御事大將殿にかたりなどして大貳乳母にをとらすおぼしめしける人也
私内侍佐の三字を只すけと計よむ也皇太后宮にさふらふ中納言のすけ共又内侍のすけ共又中納言の内侍とも書たり

●内侍乳母―　一條院一品宮の御乳母さ衣のたちぎきの夜風おこりて下へおりし人

―中納言君
さ衣の立きゝの夜權大納言（三巻　太政大臣息）にとりこめられて後

に狹衣の事を母の內侍にかたりし人

●出雲の御乳母と大和御乳母とは入道宮の御乳母なり入道宮たゞにもおはしまさゞりしを見つけ給ひて母宮此御乳母たちめし出てとひ給ひし人

●少將內侍　女二の宮御ぐしおろさんとありし事御行衞奏せし人二卷に見えたり

●大納言乳母　源氏の宮の御乳母室の八島にとあるし折御前に人なしとてまいりし人おなし三卷にさ衣の歌見んといひし人

●宇佐　雪の朝源氏宮へ春宮より御文もてまいりし人二卷に見ゆ

●木幡の僧都　堀川殿の御侍僧天若御子の夜御加持申せし人

●伊豫守　天若御子の事堀川殿にて大臣に申せし人

●中納言　一卷に狹衣山ぶき色々の花わらはにおらせて源氏宮へまいり給ひていはぬ色なる花なればとありし時御前にさふらひし人

●中將　同時御まへに侍りし人々也

●侍從命婦　一卷に身の代の後堀川大臣さ衣に案內せよと入道の宮の御事の給ひし人　女二宮事

私一卷に侍從の內侍とあり

●宰相　中務宮の姬君の乳母一卷にあやめの歌よみて狹衣に奉りし人二卷のかいまみの夜たちぎゝし給ひし人なり

私此乳母子に小宰相といふ人二卷にあり

●中務君　さ衣の母宮の女房なりみちのはてなるといひし人

●少將命婦　一品宮の女房はやくより狹衣の文とりつぎし人

●中將の君　三卷に弘徽殿のかいまみの夜三宮の御跡へまいりし人

●中納言佐　源氏の宮の女房狹衣へ琴とりつぎし人

●長門守　あやめの家主の女

中務宮の少將殿の御乳母也

私一卷に女房共より狹衣に歌よみかけたり其女共のある家主は長門守也大納言殿の五節舞しと二卷にあり長門守か娘也

●大納言　五節舞し人二卷に見えたり

●春日の督　あすか井乳母が男

●おと　飛鳥井君の女房

●大輔　あすか井の女房

●かはらのかみいぎし　飛鳥井とりし法師也飛鳥井の乳母のしたしき人也

●左衛門權助　さ衣より一品宮への文もて參りし人三卷にあり

●中將君　一品宮の御乳母の子わすれかたみ（三卷大將の歌なり）き丶とがめて姫君（飛鳥井服也）の事宮（一品宮也）へ申せし人

●前齋院の宣旨　齋院にて猫のいらへ狹衣にせし人三卷にあり

●女別當せんじ　源氏の宮の女房三卷にあり

●宰相乳母　若宮の御乳母也御供養の日はいだき奉る人三卷にあり

●山の僧都　なにかしの僧都とあり三卷に大將世をいとはんと思ひ立給ひし比賀茂にてうへ御いのり仰つけ給へと大將への給ひし人山にこもりけるなるべし

●藏人　四卷に賀茂の祭に帝より齋院へまいる人

●まつりの使　兵衛づかさ四卷にあり

●堀川院別當　けいし加階するよし若宮の御うぶやに行幸の時見えたり四卷にあり

●辨乳母　式部卿の宮の中宮の御乳母なるへし四卷にあり

●宰相の君　一品の宮飛鳥井の御らんじける時に帝の御いらへ聞こし人四卷にあり

●右近の君　致仕大納言の御むすめ源氏の宮に似たるよし堀川大臣上にてかたり申せし人四卷にあり

宇治拾遺物語私註

小島之茂文の道にこゝろさし有早川久方につきてまなふかの主の前駈をは景山つかうまつれり芙蓉社のつたへのまゝにす景山ものゝはしめ此ふみをよむに爪しるしのなきにくるしむ之茂一本をうつしとりて早川のかりまうてきよみかたきところ〳〵ことくはへたへとねきいふ本業のいとまあきあらぬにこれまてにをよへる心さしのあつきをめてもろ〳〵のふみをかうかへつゝ日ならすしてなれり此のちこれをたに明暮に手まさくらはふみの道にすゝまむ事日をかそへて待へしわかすゝみ行のみならす人のためもやくあり沖の小島よりふなてをなし早川の源にさかのほりゆくかきりもなきわさなり今此ことをしるしてよとあるまゝ筆をとるにこそ

文化甲戌季冬　　景　山

宇治拾遺物語卷第一

一道命阿闍梨於和泉式部之許讀經五條道祖神聽聞事

東齋隨筆好色之部

道命阿闍梨　○法興寺攝政道綱公の子傅の殿といひし人の子也

和泉式部　○和泉守道貞の妻越前守雅致か女後に丹後守藤保昌に具す

齋神　○和名抄道祖風俗通曰共工氏之子好遠遊故其死後以爲祖和名佐倍乃加美亦曰道祖神唐韻云禓音觴和名太無介乃加美道上祭一云道神也

行水　○是は垢離する也今沐浴を行水と云は聊違へり法師行に向ふとき浴するを行水と云とそ

四威儀　○密家十灌頂之內にも專用る事とそ

惠心僧都　○姓卜部父正親和州葛城の人寛仁元年遷化

二丹波國篠村平茸事

平茸　○今世に云初茸なるべし　蒼蕪蕈本草　庖厨本草に鼠菌を以て平茸とす本朝食鑑に木曾義仲西京

に入て跋扈し是を携て官客をもてなす是より本邦の珍味となると見えたり

むねとある　○宗とあるなり長たちたる人をいふなり

頭をつかみ　○螺髻めきたる頭と也

蔬　○蔬仲胤僧都〔俗後考〕

不淨說法　○女を犯し肉を食して佛經をとき又は財貨のために說經をうる者をいふ

三鬼にこぶとらるゝ事

雨風はしたなく　○雨風のあら〳〵しき也

どゝめき　○とよめく也騒劇のかたちなるへし

とうさき　○古語禪中頃ともに犢鼻褌の事也

貎の眼のごとく也　○光赫々たるなり

鬼　○陽靈を神と云陰靈を鬼と云大和にてはすべて恐しきものゝ總名とす

横座　○今云上座也

うらうへに二ならひ　○二行にならひし也

口說くせざること　○いふことのしかとわからぬ也

口說具せざるなり

ゑみこたれ　○ゑみさかへといふとは聊たかふべしわらひしれてゑつぼに入しなり

死はさてありなん　○鬼に魅せられなばそれまでよと思ふ也

あさみけうす　○ほめけふする也

おさめの手　○秘曲の手のこと也

つや〳〵なかりければ　○しか〳〵といふ義に同しつや〳〵ものもめさずなと源氏に多したゝしこゝにては更になかりければとみるもよし

おろ〳〵かなて　○朧々かなづるなりしかとはしらて手つゝにまふさまなり

四伴大納言事

伴大納言善男　○伴善男參議國道之子也性忍酷有口辨當官幹理察斷機敏而傲倖逢迎爲人主所愛自爲內記八年間累歷顯要終至公卿爲人褊狹好斥人短衆惜之　江談抄曰伴大納言者本佐渡國百姓也　古事談曰伴大納言善男始佐渡國郡司之從者也綠上京仕至大納言有罪被害　日本史曰貞觀八年丙戌閏三月十日乙卯應天門火延燒棲鳳翔鸞二樓同夏四月十四日戊子敕乃自應天門及東西樓觀火求之者猶見火氣自非神助災何以消宜令五畿七道奉幣境內諸

神同秋七月六日戊申遣使奉幣太神君頒幣南海道諸神告應天門火兼祈消災奕同八月二日乙亥備中史生大允鷹取告大納言伴善男及子右衛門佐中庸等燔應天門七日己卯敕參議南淵年名藤原長繼鞠問伴善男廿二日甲子是日伴善男及子中庸減死一等流ヶ于伊豆隱岐中略縁坐悉處遠流

相人　○人をみるとよむ義也今觀相なとかくは義理にたかへり

わらふた　○圓座也

高相の夢　○紀崇神四十八年三諸山夢仁德天皇紀兎餓野鹿記垂仁段錦色小蛇伊勢物語世心つける老母の誠ならぬ夢かたりしつるを太郎次郎は情なくいらへてやみぬるを三郎かよき御男ゐてこんとあはせたる事　宇治大納言物語に宇治殿の御夢に大かうし三御覽したりけるを夢ときあめ牛三得給はんと合せければあめうし三つ得給ふ云々後にりうさの三位それをあしくあはせたりとて是は三代の帝の關白になり給はんと合せければ其ことく成給ひける　風俗通代醉占夢者　周禮夢者事之祥也　占夢官　草木子　南唐近事圓夢

犯罪　○應天門の一條なり

江談抄著聞集

五隨求陀羅尼籠額法師事

ゆゝしく　○爰にて勇々敷と云義也

たてしとみ　○蔀はつき上る物なるにそれを遣戸などのやうにこしらへたるを立蔀と云

白山　○越前國祭所菊理姬命

御嶽　○吉野の金峰山なりかねのみたけといふみたけさうしといふも此行者なり

かうきは　○髮際也

隨求陀羅尼　○功德無量也此陀羅尼を書し卒塔婆の朽て無縁の墓に倒れたるか此風にあたりたる所は無縁不殘成佛せしよし陀羅尼に注に見ゆ

ゆゝしき　○爰にては氣踈きさいふさまにてけしからぬといふに同し

いもし　○鑄物師也

さいつえ　○此さいつえはさいつちさいほうのたくひにて強みいふ時の助語なり

まのしたる　○世俗の詞にましめに成と云に同し

六中納言師時法師の玉莖檢知事

中納言師時　○俟後考

高陽院 ○中御門の南堀川の東也二町うしろは賀陽
親王の家に入とあり
[illegible]
心譽僧正 ○三井長吏左馬助重輔男
きとめみ入奉るによりて ○怪物と目を見合せし也
このものゝけ何ともみえす
十 藤寶久向通俊卿許惡口事
治部卿 ○相當正四位下
俊通卿
後拾遺集
秦寶久 ○秦氏歸化の事日本書紀に委し
後三條院 ○御諱尊仁後朱雀二皇子國母陽明門院禎
子
圓宗寺 ○後三條帝御願本名圓明寺
四條大納言 ○公任卿正二位按察使古今之才人三條
太政大臣賴忠廉義公男母代明親王女

十一 [illegible]大納言經信一生不但借ゝ[illegible]うたを[illegible]る事
京極大納言經信 ○村上源氏[illegible]位左衛門督東宮
[illegible]
作にかへらたせて ○[illegible]
わなゝき ○慄の文字也
大かたどよみ ○動トヨミの文字也あし引の山下と
よみほとゝきすと古今に有
十二 兒のかい餅するに空寢したる事
比叡山 ○天台宗延暦寺一乘止觀院桓原帝御願延暦
年中御草創開基傳敎大師常城是有三里半山江二國
にわたる
かいもちゐ ○今の二度もちなるへし
心よせに聞けり ○こゝろたのみに聞ける也
おどろかせ給へ ○目を覺よと云し也
むこの後に ○暫して後也無下に後といふに同し
十三 田舍のちご櫻のちるを見てなく事
[illegible] ○雨のふるこそうちしめりてなく

木槵子の念珠　○無患子木患子菩提子鬼見愁古今註
に曰昔在神涖曰瑤眊能符劾百鬼得鬼則以此木爲棒
殺之世人相傳以此木爲器用以厭鬼魅故號曰無患子
人訛而爲木患子也宗奭曰今取釋氏爲念珠以紫紅色
小者佳　時珍曰俗號爲鬼見愁道家禳解方中用之緣
此義也釋家取爲數珠故謂之菩提子與薏苡同名
無始より已來　○儒に大極と云釋に無始と云
煩腦にひかへられて　○百八煩腦のうち色を第一と
するゆゑかく言し也
をろねふり　○をろ〳〵にねふるなり爰にては眼閉
て觀念したるさま也
とはかりあるほと　○聊ありてなり
玉莖　○古語拾遺云作二男莖形一以加レ之礒邊昌言纂
註云男莖形男耻形也云々
枉惑之法師　○ゆかみまとはすの意也
七龍門聖鹿に欲替事
照射といふこと　○夏山のしけみにゆかをまうけ松
の火串をたてをくなりこの火の光によりくる鹿を
射殺してとるをともしかりといふ
韋　○韋ヰオシカハ

八易のうらなひして金取出事
黃金千兩おひ給へる　○おひめあるといふ也
ずんざ　○從者也
あらしやさんなり　○あらはアナといふに同ししや
はいかりをふくむ詞さんは慮外といふ義推參也と
いふ意
皮子　○行李也今いふつゞらやうのもの
易の占　○周易十八變六十四卦也
いざさや侍けん　○いざは不知之義也しらすさやう
にあるやらんといふなり
さくこかし　○疾來兮なり
隗炤は易を善す死るに臨て板に書て妻子に遺て云
我死後五年有て詔使姓は龔と云ふ者來ん吾金を
負り此板を以て金を索めよと云て卒す期に至て果
して使者來る妻板を齎て使者に詣る使者憫然たり
乃蓍を取て筮して卦成感歎して曰妙哉汝か亡夫の
易を知る事吾全く金を負す賢夫金を藏して世の太
平なる時を俟つ吾易を善することを知のみ故に我
を俟て金の在處を知しむ金五百斤靑甕に盛埋て堂
屋の下に有壁を去ること一丈地に入ること九尺也

と云堀レ之果して金を得たりと云こと晉史に見ゆ
九宇治殿倒れさせ給て實相房僧正驗者にめさる
る事
高陽院　○中御門の南堀川の東北二町うしろは賀陽
親王の家に入とあり
宇治殿　○從一位關白賴通公御堂殿の男母
心譽僧正　○三井長吏左馬頭重賴男
きとめみ入奉るによりて　○怪物と目を見合せし也
このもの丶け何ともみえす
十秦兼久向通俊卿許惡口事
治部卿　○相當正四位下
俊通卿
後拾遺集
秦兼久　○秦氏歸化の事日本書紀に委し
後三條院　○御諱尊仁後朱雀二皇子國母陽明門院禎
子
圓宗寺　○後三條帝御願本名圓明寺
四條大納言　○公任卿正二位按察使古今之才人三條
太政大臣賴忠廉義公男母代明親王女
めてたき歌　○愛翫しつへきと云也めてたきはすへ
て鍾愛するの義也
此段たはふれのやうなれと熟思すれは詠歌稽古の
心得ともなるへし
十一源大納言雅俊一生不犯僧に金うたせたる事
京極源大納言雅俊　○村上源氏正二位左衞門督東宮
權大夫右大臣顯房公男母美濃守良任女
僧にかねうたせて　○今のソウバンなるへし
わな丶き　○慄の文字也
大かたどよみ　○動トヨミの文字也あし引の山下と
よみほと丶きすと古今に有
十二兒のかい餠するに空寢したる事
比叡山　○天台宗延曆寺一乘止觀院柏原帝御願延曆
年中御草創開基傳敎大師帝城艮有三里半山江二國
にわたる
かいもちゐ　○今の二度もちなるへし
心よせに聞けり　○こ丶ろたのみに聞ける也
おどろかせ給へ　○目を覺よと云し也
むこの後に　○暫して後也無下に後といふに同し
十三田舍のちご櫻のちるを見てなく事
さめ〳〵となく　○雨のふることとうちしめりてなく

といふこと也さめ〳〵は雨々の文字也
やはるよりて　○そとよるといふことしとやかによりそふ也やをるともいふ
よゝとなく　○しつくもよゝとくひぬらしたまふなと源氏にもみえたり

十四小藤太聟におとされたる事

源大納言定房　○未詳
女もめなにて　○上臈ならぬ女房のことなるへし
なまりやうけし　○生狭家司也なまはれいのさかしらなり
まくれ入てふせり　○立かへり入てふせし也

十五大童子鮭ぬすみたる事

さけ　○鱖これ正字也
まみしくれて　○眉のはれらかならぬさまにて相恰のあしきなり
わらはの竪首　○首の骨をたてにとらへしなり
さけの口長　○宰領なとゝのことなるへし
くは〳〵といひて　○これは〳〵といひし也
はたかになしてあさらむには　○あさるはすへてもとむるなり若菜をあさるなどふるくよめり

十六尼地藏見たてまつる事

かひまとひありく　○いつことさだめずうかれありくさま也
ばくうち　○職人づくしの書に兇惡なるおのこのゐぼし引ゆかめはかまのみきたるかすくろくのはむかゝへたるを書たり
ゐておはせよ　○ともなひておはせよといふ也將の文字也
くはこゝ也地藏のおはします所はといへは　○地藏のおはします所は爰也といふべきを展動してかくいふはことはの勢ほひによりてなるこの末なをいくらもあり
えもいはす　○ともかうもいえん方なきなり

十七修行者逢百鬼夜行事

きつとひたり　○來集の文字也
あさましく恐し　○こゝにてはわかみのすくせまておもひやらるゝはかりすさましく恐しと也
からうじて　○辛うじて也しのもし濁音
淺ましと思て　○爰にては希有のことかなとすこみ立たるさまなり

つゐすゆ　○突居の文字也
　十八利仁暑預粥事
利仁の將軍　○藤原氏鎭守府將軍越前守從五位上母
　越前國人秦豊國女
その時の一の人　○昭宣公なるべし
さりはみ　○鳥喰の文字のよし見えたり
格勤　○きやくきんとよむ東鑑にはかくごとよませ
　たり
さうじすみ　○曹司住也一の人の御もとのさうしに
　あるなりいまいふへやずみのことし
いさゝせたまへ　○こゝにては出させ給へ也
あをにひの奴袴　○はなたの青みたるをいふ
眉少し落たる　○狩衣のかたのひけしなりかたのま
　よひはたれかとりみんなと萬葉にもみえたり
下のはかま　○さしぬきの下にきるはかま也壯年は
　くれなゐ老年は白なり
調度かけ　○弓箙ゆかけを調度といふてうすかけと
　は今の弓臺の古製なるものなり
ものくるをしう遠かりけり　○爰にてはものに狂ひ
　たまふことなり

身を投て逃る　○ものをなけうつやうに身を飛して
　狐のにくるなり
はしらせていきつき　○五位の利仁にをくれしゆへ
　馬をはしらせて追つきし也
つとめて　○夙朝の文字朝まだきのこゝろ也
おとなしき郎等　○家長ともいふべきものなり
臺盤所のむねをきりにきりてやませたまひしかは
　○爰にては利仁の室をさすとみへたり三公の室家
　ならで臺盤所といふはいかゞなれと御の文字をは
　ぶくゆへよろしきにや東鑑には御臺所といふさへ
　なはおほし胸を切に剪て也胸のあたり刺切やうに
　いたみしなるべし
おちさはかせ　○恐懼せしなり怖の文字也
五位淺ましと思たり　○こゝにては冷しといふにお
　なし
くら〳〵に行つきぬ　○昏々にゆきし也
宿衣　○今いふ夜のものなり
しぼきぬのあを　○縮衣の襖なりあをは袖ひろから
　ぬしたての衣なりとぞ
みせん　○あらひよねのこと也御粲の文字也

けおさめのさうそく　○はれ着のれうなとにてよろしき品なるへし

宇治拾遺物語卷第二

一清徳聖きとくの事

清徳聖　○未詳

千手多羅尼　○功德觀音經に同し滅罪のみならす祈禱にも多く用ゆ唐土にて銕牢に入し人此陀羅尼の功力にて免れ出しこと註に見へたり

こはだへもせす　○聲絕もせす也

棺をめくること三年　○先皇廟陵記に曰御棺を囘ること三匝と云々功德しりかたし

なき　○菘菜具名　白菜和名奈義といへる是にや猶後考をまつ

坊城右大臣　○未詳

おものにして　○御膳の文字也

ゐとをまる　○糞を痢の文字也まるといふふるきことは神代卷にみゆ今の世便器をおまるといふこれいにしへのなこりなり

二靜觀僧正祈雨法驗事

摩訶盤若波羅密多經　○今大盤若といふマカは大也ハンニャは智惠也六百七十八卷中にも理趣分こと

にくとくすくれたりとそ

静觀僧正　○天台座主延喜之御時の人也

北向に立て　○水はもとより北をつかさとる皇朝にては罔象女命西域にては玄冥氏の方位なれは雨をこふにはしかるべくとそ

上達部　○かんだちめとよむへし

弓場殿　○拾芥抄に曰則校書殿也淸涼殿の南殿上の前と云々

大千界　○須彌の四州此廬岡許多すへてをさして大千世界といふよし浮圖氏のせつ也

三同僧正大嶽の岩祈事

加持　○則祈念丹誠之意也たとはゝ鑁を加持なれは水德を観して請雨の法となし囉を加持すれは火德を観して止雨のしるしあるかことし加持の大意大むねかくのことし

四金峯山薄蒲打事

金くつれ　○金峯山中の地名也尤難所のよし也

おろしてみれは　○石なとにつけてみし也

撿非違使　○職原抄に曰淳和天皇天長年中始て置之

かどのおさ　○看督長東鑑　今世にいふ東長名主などのたぐひなるへし

よせはし　○倚楷の文字也嬰のたぐひなるへし

がうし　○拷事也がうもむするなり

あな恐し　○あなは歎息のことば也噫於戯におなじ

五用經あら巻の事

左京のかみ　○左京大夫なるべし相當從四位下

にゑどの　○贄殿なり國々より奉るものをこめをく舍とみえたり東鑑にてはへつゐとのゝやうにみゆ

淡路守賴親　○從六位下多田之滿仲の二男母藤原致忠女

鯛のあら巻　○つとのことなり踈巻の文字也

出居　○今の書院に同し

はやがりのぞき　○はやりかにさし過てさへつりいふさま也

ときかはさず　○即時といふこと也不ㇾ替ㇾ時也

いづらきぬや　○何ゆへにこぬぞと也

いみじくつき〴〵しく　○わざとめかして見所あるやうにしなすなり

しれものぐるひ　○白痴狂人なるへし

おいらかに　○爰にてはあきらかにとりたまはてといふ義也

膳部　○和名賀之波傳かしはでとは調味をつかさどる人をいふ也

六原行死人を家より出す事

右近將監　○相當從六位上

原行　○所見未詳

朱雀院　○御諱寛明醍醐帝十一の皇子國母皇后藤穏子正一位基經昭宣公御女

村上天皇　○御諱成明醍醐十四皇子國母同朱雀天皇

忌の方　○逸士傳曰金王去非字廣道平陰之人也北隣に喪あり東方に出る事を忌けるに西北皆人居也南は則去非か家なりけれは去非我蠶室を壞ちて喪を南より出し遂に葬る事を得たり大定二十四年八十四歳にして卒す

穀たちのひじり　○木食行人のこと也

物いみしくつしく　○屈しく也偏屈のくつにてひかめるなりものいみこゝにてはたゝものいまひのことゝみるよし

年山記聞云今按に源氏品定卷のほうけつきくすしからんと云詞に合せて釋すへし

七鼻長僧の事

そはさまにふし　○横むかひにいぬるさま也

人にふますれは　○手にてをすをもふむといふへし必しも足にてふむとみるはあしゝ

さらめかし　○ふりすゝくさま也

八晴明封藏人少將事

晴明　○安倍氏左大臣倉橋丸九代大膳大夫益時男陰陽頭天文博士大膳大夫從四位下

藏人少將　○たれともなし

さかしく申やう　○爰にてはさし過て申やうなれとゝ也

ねたがり　○ねたましかりし也妬の文字

九季通欲逢殃事

なま六位　○すべてなま女房なま上達部などなまと置はさかしらのことば也

家人にはあらぬか　○家從にてはなくて寓居なとしておる也

はしたなく　○詞つきいやしくあら〳〵しくいひこらす也

うるせきやつ　○心にくきものと也今俗習にうるさきといふとはこと甚たかへり

たはかる　○爰にては謀略もあるかとなり

ひはぎ　○引剝の文字今いふ追はきのこと也
けしうはあらし　○爰にては怪しうはあらしと也又一わ御下しうはあらぬといふもあり源氏なとにままみゆ
しやかうべ　○しやかうへしやしりこれもつよくいふ時のことは也

十袴垂合保昌事

袴垂　○名保輔丹後守保昌の弟也
行もやらずねりゆけば　○行やらぬ明やらぬなとともにゆかんとしてはえ行もせす明るかとおもへはいまた明ぬといふ時につかふへし歌の上尤しかり不レ行不レ明といふにてはなし行やらて山路くらしつほとゝきすいま一聲のきかまほしさに此歌にておもふへし
とさまかうさま　○いろ〳〵やう〳〵と心をつくすさまなり
心もうせり　○ひはきせんとおもふ心もうせしなり
我にもあらでつゐゝられぬ　○我は居んとおもふにあらねと威力にしめされてそのつからひさまつきしなり

此英雄こゝには保昌とあれとまことは源頼光朝臣なるよし異本に見へたりさもあるへし
源保昌右京大夫致忠之子也爲人驍勇膂力過レ人精ニ達武藝與甥源頼信等ニ齊名保昌嘗夜微行吹笛時有ニ大盜袴垂者一欲ニ劫ニ褫之衣一踵行里許抽レ刀逼レ之保昌停レ笛顧問ニ其名一袴垂不覺首服保昌曰我嘗聞ニ汝名一汝亦非ニ碌々一者從レ吾而來復吹笛徐行還家取ニ絮衣一與レ之曰乏則復來愼勿レ作レ劫

十一明衡欲逢殃事

大學頭明衡　○藤原氏宇合八代孫肥後守敦信男文章博士母良岑英仲女
女房駭きて　○おそろくは目の覺たるなり

十二唐卒都婆に血付事

血のおほらか　○血の多らかに付し也
家の具足　○何にもあれ家のうちになくてかなはぬものゝかきりなり
空もつゝやみ　○やみのありさまをふかくいはんとての詞なり
家のものゝく　○さきに家のくそくといひしはとりそろへてもち出しゆへなり爰にたゝものゝくとい

ふは手にあたるならひとりてうちもそろはぬをいひし也文義おもしろし

十三なりむら强力の學士にあふ事

成村　○未詳俟後考

朱雀門　○大內裡正面二條大路也伴氏造之二階七間戸五間

なりせいせむなりたかし　○形制せん形高し成へし

血あゆはかり　○血出るまてにと也

腋をかきて　○腋をかけてと也

放義にてこそいかめ　○放義の文字覺つかなし能々放はからひ儀ならしてゆかんといふにや猶可尋

式部省　○朱省門の腋にあり

沓くはへなから　○沓の上なから取し也

かたのすけ　○ことりつかひなとのことにや猶可尋

十四柿木に佛現する事

延喜御門　○醍醐天皇御諱敦仁宇多帝第一皇子國母皇后藤胤子太政大臣高藤公女

五條天神　○祭神一座少彥名命皇朝の醫祖神也

右大臣殿　○此時の右大臣將而聖廟之御事なるへし日の裝束

大臣　○禁闕に上るには冠直衣なり院參は烏帽子直衣也これは倚路の服なり衣服冠なをし等を宿直裝束といふ是に對して束帶せしをは日の裝束といふ也但此時代は裝束のさまもたかへはいかゝ有けむされと浮世より書しものかたりゆへその時代のさまにとりなしものせし也

ひりやうの車　○びりやうの車とひの字濁てよむへし檳榔毛の車也とハナハケンケウノセツ檳榔毛は院中大臣はれの時もちゆ

あからめもせす　○あきたるさまもなくと也まだゝきもせずといふにおなし

宇治拾遺物語卷第三

一大太郎ぬす人の事

大太郎盜人　〇甲斐の國のゑほし折大太郎とあり盛衰記三考是人か猶後考をまつ

めくりもあばれ　〇回りも荒れ也

あだけなるに　〇あた〳〵しき也用意もなきさま也

たぎりゆ　〇沸湯なり百ふつとうなと本草にもみゆ

せめて物の恐し　〇迫セメの文字也せまりくるやうにおそろしとなり

思ひみふせて　〇打ふせいのりふせのことく何はかりのことかはとみとゝめたる也

けしき氣なる物もみへす　〇爰にてはさまてなるものもみへすとなり

矢のつまより　〇爪縷の文字也弓のつるをさは彌陀の眞言矢のつまよりは不動の眞言なとゝ浮居氏の入し弓書にみへたり

脊をそらしたる樣　〇うしろより引もごさるゝやうなりと也出るもかたく入は猶かたくうしろ髮といふものをひかるゝ樣なりと也

きやうやう　〇饗應のこと也

黑きかはらけ　〇今いふうちくもりなとの製なるへし

大矢の佐武信　〇大矢のことのちに委したけのふ無所見

むさのしろ　〇未詳

二藤大納言忠家物言女放屁事

藤大納言忠家　〇正二位權大納言御子左の嫡流冷泉家の祖御堂殿の男母近江守源高雅女懿子

月はひるよりもあかかりけるにたへかねて　〇たへかねてこらへかねしなり歌人の情かくあるへし

あな淺まし　〇此にてはあさ〳〵しきといふ也はしたなきといふに同し

いとたかくならしてけり　〇女のへをはなちし也

三小式部内侍定賴卿の經にめてたる事

小式部内侍　〇和泉守道貞の女母いつみしきふ

定賴中納言　〇藤氏正二位權中納言四條公任卿男母昭平親王女

此時の關白　〇宇治賴通公成へし寬仁三年より治暦四年までうち續きて關白なり再案するに賴通公に

てあるへからす大二條關白敎通公なるへし
きと耳をたつるやう　○定賴のそれかあらぬかとこころにかゝりしさま也
うといひてうしろさまに　○四聲五聲きゝとめしゆへそれなりけりと心に治定してうといひしなり

四山伏舟祈返事

景いたう房　○無所見
三寶　○佛法僧也
一町がうちによせきたり　○ちかあさにてうちかへせといふは命をたゝしのこゝろなるにや
むこうのこと　○無情のこと也情なきことなせそと人々のわふるなり

五鳥羽僧正與國俊戲事

法輪院
大僧正覺融　○未詳
とうのれ　○疾乘突の文字也とく／＼のれといひしと也
時の程ぞあらむずらむ　○一時のほともあるへしとなり
うちさしのきたる　○與所かましき人にはあらされはと也
ゑさひかさひとり衾　○此時代のたはれことはなるへし何のことゝも聞わきかたし
はしたなかりける　○こゝにてはあまりに心なきことゝいふ也

六繪佛師良秀家のやくるを見て悅事

わたうたち　○和黨達也
良秀　○年代出所可追考

七虎のわにをとりたる事

つゝまりゐて　○うつくまりゐてあやまりなるへし
なへ／＼として　○萎の文字よは／＼とせし也

八樵夫歌の事

さるへきことを申せ　○しかるへきことを申せなり

九伯母の事

たけのたいふ　○多氣の大夫なるよし某しりかたし
伯の母の事　○說てあれとも信しかたしゆゑにりやくす猶後人の加筆をねかふ
紅ゐのひとへ　○いろめてれとをる
いりもみ思ひけり　○恚操の文字こゝろをいられ氣をもむなり

乳母をとつれたり　○越前守のもとへ音信し也
東風のかへし　○西かせのこと也
あねは失にけり　○大姫こせはかくれし後也此大ひめかもち娘の二人ありし也
うへの　○こゝにては此女をいふ也
二人して奉り　○彼女二人して饗せし也
何共おもひたらす　○大やうなるせんしたりともおもひかけぬさま也

十同人佛事の事

伊勢大輔　○伊勢祭主輔親の女也
永縁僧正　○未考
長柄橋　○津國なから川に渡す大はし中古已來たへてなし
長柄橋契沖川社曰弘仁三年六月に作らるゝよし國史に見えたり　文德實錄卷之五仁壽三年冬十月戊辰攝津國奏言長柄三國兩河頃年橋梁斷絕人馬不通請准二堀江川一置二二隻船一以通二濟渡一許之
みやうふ　○名簿の文字師弟のやくをする時しるしにまいらする也

十一藤六事

十二多田新發意郎等事

多田滿仲　○鎮守府將軍攝津守正四位上六孫王經基王の男母橋繁古朝臣女武略達人和歌の上手
打せため　○打しへたげのやく也しえのかへしせなりけとめはかよふなる連聲にて何ともすへし
いといみし　○こゝにてはいみじ嚴なるさま也

十三因幡國別當地藏作差事

十四伏見修理大夫俊綱事

伏見修理大夫俊綱　○宇治殿之御子也後にくはし此養父を後遠と云
修理大夫相當　○正四位下也
尾張守　○從五位下
熱田の神　○祭神三座　宮簀姬命　日本武尊　建稻種命
土用殿所祭　○草薙之御劍
いちはやく　○殘戟强暴横惡神これにていちはやぶるとよめる古訓あれどたゞあらあらしくおはするとみるかたよし
大宮司　○尾張氏建稻種命の裔也
むつかりて　○いかりをふくむさま也

いやみおもひて　〇にくみおもひて也
此段の事續世繼物語藤波の巻康頼の寶物集等にもあり

十五長門前司女葬送時歸本處事

有附たる男となくてたゞ時々かよふ人　〇さたまりたるむこかねにはあらてひそみかたらふおのこあるなり
つね〳〵人におひものなといふ所なりける　〇このまめ男にしのひてあふところなるへし
鳥邊野　〇人をはふるところ也こゝに石碑あり古へ弘法大師の筆なりとか正面に南無天照皇太神宮とありといへり笠原景山説
むつかしく　〇やすからぬことゝ也

十六すゝめ報恩事

虫うち取て　〇賤女襤褸のさまなるへし
雀見よ　〇すゝめに心をつけよと也
なへてのしやく　〇夕かほをそきてさくにする今も猶あり
物ひとはた入けり　〇もの一はたはり入し也一はいにみち〳〵たるさまなり
たのもしき人　〇ふゆうになりたる也
世にねたしと思ひけり　〇妬し佞し兩儀也憎ましとすゝめのこゝろに老女をうらみしなり
きはた　〇黄蘗抹なり
そこらのとくむし　〇若干許のこと也いくらも〳〵多き也中臣に古々多許と云しに同し

十七小野篁廣才事

東齋隨筆人事之部
小野篁　〇橘氏敏達帝裔參議從四位上小野岑守男
嵯峨御門　〇御諱神野桓武帝第二の皇子國女皇后藤乙牟漏贈正一位太政大臣良繼公女
のろひ　〇うけへともいふ伊勢物語にみゆ呪咀諸毒藥還着於本乃　法花　人をうけへはわすれ草といへることのもと也

十八平貞文本院侍從等事

平貞文　〇家を平仲と云ある時女のもとにて泣てみするとてなみたの出さりけれはひそかに水をかくしをきてそれをゆひにつけて目に塗けるを女のはやう知てそれにすゝりすみを入てをきけるをかへりて平仲はしらすして猶ぬりけるに目ふちの黒く

なりたるを女のそは何そさゝかめけれはうちおご
ろきつゝもあまりのかなしさに罵まなこをなんす
りつふしつさこたへけるよし人いひつたへたり
勘云貞文左兵衛佐從五位下字仲(因號平仲) 左中將平好風
男(好風中野親王之孫茂世王之子也)
本院侍從　○村上の母后藤穩子の官女也
めてたくのかれ　○すかたことよくのかるゝなり
うつし心もうせ　○こゝにてはうつゝ心もうせしな
り
大方まちかき事はあるましきなむめり　○此段平仲
か心なり
ひすまし　○ものあらふ下司女也
ゆゝしけに　○こゝにてはみくるしげにとなり
ほけ〳〵しく　○耄々の文字心もこゝろならずおも
ひみたりし也

十九一條攝政歌の事

一條攝政　○太政大臣伊尹公諡謙德公九條右大臣師
輔公男母武藏守經邦女名譽の美男也
東三條　○拾芥抄云四條院讓生所或重明親王家云々
きやう〳〵　○輕々の文字也かろらかなると也

かへし父のしける　○此人たれともなし

二十狐家に火つくる事

たちの侍　○國司のみたちのさふらひなり

宇治拾遺物語卷第四

一狐人につきてしとき食事

ものゝけわたし　○風邪のたくひにて祓なとするなり

しとき　○粢也あらひよねなりされとこゝには洗米をむしたるようにみゆ

二佐渡國に有金事

鍊のすかね　○素鍊の意也鑛銗二義石にあるを鑛といひかねになりたるを銗といふと爾雅

さいて　○今いふ財布のたぐひにや

三藥師寺別當事

藥師寺　○南都七大寺の一天智の御宇造之

誦經にせよ　○すけうのれうにせよといひし也

四妹背島事

土佐國幡多郡

はなつき　○みなとにて追風のたつをはなつきといふ也

五石橋下蛇の事

雲林院　○常康親王造之遍照僧正住之寛平法皇御幸ありし所也

淳和天皇の離宮なり櫻を多く植させ給ひしにより て雲林院北野と申後仁明天皇の皇子常康親王住せ給ふ御出家の後寺となし遍照に給ふ又後遍照の子由性に付屬す

菩薩講　○二十五菩薩之經を講するなり

中ゆひたる　○帶のみして袴はきざるなり

ものよくあらせ奉り　○金穀なと多くあらせんとなり

下家司　○おもからぬ家人也

六東北院菩さつ講聖の事

東北院　○一條の南京極の東上東門院の御所と云々

ひとや　○囚の文字牢獄也

あしきり　○刑の文字足の筋をきる也卞和かあしきられしといふも此刑に逢しなり

此盗人聖　○たれともなし

七三河入道遁世々間事

三河入道　○法名寂昭不雙々遁世者也系圖未考

風祭　○級鹿津彥命級鹿津姬命此神を祀て暴風をさけ五こくのぶにようをいのる也

郎等のものも覺えぬか　○何ともして主のこゝろにいらばやとおもふのみにてものゝ情もしらぬむくつけ人なり
はやし言けり　○取繋しいひて諂ふ也
うましきといひけるものしたくたかひにけり　○いかてこゝろにいらむとおかしからぬをもおかしととりなせしにおもひの外になきいたされつれはところかまへのたかひしさまなり
乞食　○釋尊舍衛城の門にたゝして食をこひたまふこと經にみえたりこれこつしきのことのもとなる

八進命婦清水まうての事

進命婦　○因幡守種成女祇子
師の僧清かりけり　○清淨の僧となり容貌のことにはあらす
年頃たのみ奉る　○師とたのむとのこと也
京極の大殿　○後宇治大閤師實公賴通公男母進命婦
四條の宮　○未詳
覺圓座主　○賴通公六男宇治の僧正といふ
業遠朝臣　○未考

九業遠朝臣蘇生事

御堂入道殿　○關白太政大臣道長公依數多建寺號御堂殿關白太政大臣兼家公男母贈從一位時比畔右京大夫中正女

十篤昌忠恒等の事

法性寺殿　○攝政大臣忠通公太政大臣忠實公男母從一位師子顯房公女
しかりて也　○しきりて居しきりてといふにおなし
民部大輔　○正五位下相當也
わりなきものゝ　○爰にてはたゞひなきものゝやうたひ哉と云しこゝろなり

十一後朱雀院丈六佛奉作給事

後朱雀院　○六十九代御諱敦良一條皇帝の皇子御母上東門院
丈六佛之事　○かならずしもさくそんのみたけのかきりにはあらすとくきをとうとびてかくいひしとぞたとはゞくしのこしめくり十圍といふかことしと快光だるまのせつ也
明快座主　○大僧正文章博士俊宗男利下和尙と云
山　○山とは比叡をさす寺とは三井をさす

十二式部大輔實重賀茂御正體拜見の事

びむなくや　○便なくやなりされどこゝにてはゝかりなくや候はんと言しと言るよし

竹臺　○南殿之左右にあり左川竹右吳竹とつれ〴〵くさに見へたり

はやひたまへ　○囃の文字はやしたてよと也

ことうけしつ　○諸の文字ことをうけかひし也

ちくひやう　○竹貂の文字畜生との秀句なるへし

六陪從淸仲事

御母しろ　○御母代の文字御戸代苗代のしろのことし

重任　○てうにんとよむ一任を四年とす重任は八年なり

七かな曆あつらへたる事

假名曆　○大方は今のこよみなり昔のこよみは漢字にて歷々と書たるもの也今のやうになりたるはちかきことなり

八實子にあらさる人實子のよしたる事

その人の一定子ともきこえぬひと　○何某か子とはなのれとしかとその人の血脈共聞へぬなり

一定のよしいひて　○世の人はさたかならぬ由いへと子なるものは實子にまきれなきよしいひしきりてそのかさくをうけし也

出居　○いまいふ書院東かゝみに初てみゆ

さくりもよゝと　○さくり上て泣まとふ也噎噎にむせふはしゐてなくゆへなりよゝはしきりといふに同し

九御室戸僧正の事並一乘寺僧正の事

うしろみ　○此雅きんを敎諭する家の長なるへし

かいをつくる　○泣かほをつくるなり今俗にべそをつくるといふにひとしかるへし

十或僧人の許にて氷魚ぬすみくひたる事

かたさらはの調　○俟後考

氷魚　○宇治田上のあしろにてとる小いをなり白いをめくものなりとそ笠原景山在京の時くひたるよし說

十一仲胤僧都地主權現說法の事

日吉の二宮　○所祭大己貴命

此經難持　○已下法華神刀品

地主權現　○こゝにては山王を指也

十二大二條殿に小式部內侍うたよみかけ奉る事

大二條殿　○關白太政大臣敎通公母宇治殿に同し
上東門院　○後一條帝國母彰子御堂殿の御母
十三山横川賀能地藏の事
無間地獄　○八大地獄乃隨一重罪墮獄也○一名永沈
といふとそ其呵嘖間なきゆへに無間といふと法苑
珠林にいつ

宇治拾遺物語卷第六

一廣貴依妻訴炎摩王宮へめさるゝ事

閻魔の廳　○翻譯名義集二鬼神篇第二十一云琰以再魔或云琰羅中略此贍部州下過五百踰那有琰魔王國縱廣亦爾　同地獄篇二十三云輔行云
地獄從レ義立レ名地下之獄名爲二地獄一　大毘婆娑論
云今稱二地獄一者地底也下也謂ニ萬物之中最在ニ底
下ニ也獄局也謂拘局不レ得ニ自在一故　天台十六觀經
疏曰地獄名ニ泥犁一譯不可樂
男にぐしてともに罪をつくり　○男女交媾のことを
云とみへたり男女の婬樂はともに臭骸をいたくと
あるよりかく云しなるべし
地獄　○或は幽冥と云十界の中の一なり梵音泥犂耶(ナイリヤ)
梵本の正音奈落迦(ナラカ)と號ナラカとは足上にして頭下
につけ無上憂苦の故也日本に是をナラクと云
いふせく　○爰にてはいふ方なく口おしきと云し也
閻浮提　○十六の大國五百の中國十千の小國あるを
すへてゐむふたいといふ也
地藏菩薩　○地藏菩薩經曰或現琰魔王身云々如是法
身自體遍故現種々身云々

日本法花驗記　○作者いまたしらす追て備考をまつ

　二世尊寺に死人をほりいたす事

世尊寺　○大宮の西五佛本桃園と云保家中納言傳領伊尹公の家なり

桃園大納言　○師氏卿正二位東宮傅貞信公忠平の男母右大臣源有能公女

大饗　○三公は云に及はす正官の大納言に任すれば此賀莚を設くる事也もとより善美を盡す事也

あさてとて　○大饗してのあさて也

金のつき　○街重もつき坏もつきなりいさいふきそくのことし

　三留志長者事

留志長者　○猶可尋

はゝくひ　○則疵アザの事也和名抄黑子波々久曾はゝくひは波々くみの誤歟

須陀温果　○すだをんくはとよむ也阿羅漢果よりは頗るかろき果也とぞ名義集齋法四食篇云須陀此譯云白ト或云ニ須陀ハ此ハ天食也

　四清水寺に二千度參詣者打入双六事

　五觀音經化蛇人をたすけ給事

鷹　○おほやまとにて鷹をつかふこと酒の君よりはしまる由國史にみへたり

わりなくつま立て　○爰にては何のことはりもうちわすれたるやうにておのつから爪立て深谷をのぞきし也

あさましかりつる　○爰にては恐しかりつるといふに同し

あさましなとは　○爰にては俗に勿體なきことはおろかなるといふに同し

　六賀茂の社より御幣紙米等給事

くらま　○松尾山鞍馬寺本尊多門天桓武帝延曆十五年阪上田村丸建立也

うちまきの米　○打蒔の米也祭祀又は禊のおりに洗米をまくをうち蒔といふこれ天尊降臨之時に太田命のみさきをはらひしふることとなり

萬につかふに　○何事の交易にも此米をつかへとあとのへらぬさま也

　七信濃國つくまの湯に觀音沐浴の事

つくまの湯　○後拾遺集修理大夫惟正信濃守にて侍

る時ともにまかり下りてつかまのゆを見侍りて
源重之　いつるゆのわくにかゝれる白糸はくる人たえぬものにそありける

いらふるやう　○答ること也いらへのあるなきなと歌にも多くあり

あやい笠　○八雲御抄笠韵あやゐ

ふし黒なる簇　○ふしくろなる矢をさしてやなくひなるへしふしくろの矢といふは節影の矢なるへし

皮巻し弓　○にきり革を巻し弓なるへしいにしへはもろてともにゆかけをかけしゆへ大かた握に革をまくことなし

紺の襖　○水干に似たる仕立なり但ゐをかりしよりおもひそめてきと詠しにておもへは女房の旅路にも用しとおもはるこは轉して同名異製なるへし猶可尋

夏毛の行縢　○老鹿の皮なり平人熊皮を帶ることとはたしてなきゆへかく書しなるへし

しめを引　○注連の文字也しめをひくこと神代岩戸の段にくはしくしりくめなはの約語なり

かてう僧都　○賀朝の文字山の横川の知識也とそ

八帽子叟與孔子問答の事

孔子　○くしとよむへし

叟　○莊子雜篇漁父
叟長老之稱おきな

九僧伽多行羅刹國事

かしこき事　○爰にてはよろしき事と也文字を下さは賢の字にておろかならぬと云にひとしかるへし

門をいかめしく　○花やかに嚴重なることなり

によう聲　○あらぬ聲してうめく樣をによう聲と云也靈異記中呻爾與ふ　竹取物語によふ〳〵になはれて

鬼　○四聲字苑曰鬼人死神魂也　文選招魂東方長人千仞唯魂是索南方雕題黑齒得人肉祀以其骨爲醢此外夜國巴大温なと云國は今も人の肉を食ふといへり

よそろ筋　○あしの大筋なり刑せられしなるへしよほろのほをとよむよろし

補陀落世界　○ふだらくの淨土とも云觀自在の御在所也とそ

羅刹　○惡鬼羅刹の羅刹にて天魔のたくひ也とそ

つるきの太刀　○つるきはもとよりするどきの轉約也されはつるき太刀はするどき太刀といふこと也萬葉集にもみへたり

をきて　○掟の文字也　かくはせよかくなせそなどいひさたむるなり

宇治拾遺物語巻第七

一五色の鹿の事

五色の鹿　○法苑珠林巻六十三九色鹿鹿經を引而此事を云

かせき　○くしかの事也とそ麋和名おほしか

二播磨守爲家侍佐多事

播磨守　○相當從五位下爲家未詳

すなう（収納）　○出納

めな　○女房の誤りなるべし

きりかけ　○きりかけたつなと源氏にみへたり竹にもあれ檜にもあれ高低とりましへてゆひまはしたるかき也

さたかころもぬきかくるかな　○かくしだいなり佐多か衣を竹のきぬゝきたるにとりなせし也また最勝王經を按するに薩埵王子因緣と有これはさたわうしとらに身のをかはんとて竹の林にころもをかけられし也こゝをもてよめるなるへし

薩埵王子の因緣にてよめはかゝせたり

拾遺集雜上題不知よみ人しらす「いにしへのとらのたくひにみをなけはさかと計は問んとそおもふ

のりのろひ　○のゝしりさかしらせし也
金光明經捨身品摩訶薩埵園中に遊ひける時虎の子を産て饑たるを見て衣を脫竹の枝にかけて虎に身をあたへたるとなり
かなしういはれたる　○こゝにてはいやしういはれたるなり
夫木集二十八　六條院宣旨　竹の葉にかけし衣のなこりかはさらふすのへもむつましきかな　隆祐朝臣　竹の葉に衣をかけしいにしへの人の心はなき世なりけり拾遺集雜上「いにしへのとらのたくひに身をなけはさかとはかりはとはんぞ思ふ
なたて　「○貫之集　「うつろはぬ松のなたてにあやなくもやとれる藤の咲て散るかな　後拾遺集　みるかしに花のなたてのみなれとも心は雲のうへまてそゆく

三三條中納言水飯の事

三條中納言　○從二位朝成卿右大臣定方公男母中納言山蔭女
今昔物語に今は昔三條の中納言と云ける人有ける名をば口とそ云ける三條の右大臣と申ける人の云云とありて名きえて見えす　公卿補任云藤朝成右大臣定方公六男天德二年閏七月二十八日任參議
續教訓抄云古昔吹笙名人昭宣公三條中納言公（朝成）六條左大臣公（重信）以上公卿同書朝成公能吹笙小治田有秋ヵ弟子也　今昔物語に才かしこかりければ唐のことも此朝の事も皆よく知て思ひはかりあり行ふとくして押柄になん　今昔物語に又身の德なともありければ家のうちもゆたかなりけり　續故事談云朝成中納言（定方公二男朝忠中納言）拾三條西洞院朝成家云々
此朝成はあさましうこえてみめ人にこと也けるにや始て殿上して參りたりけるを村上聖主御覽して驚き給ひてかれはたそと兄の朝忠に問給ひければ朝忠か弟に候と申されければ能やあると問給ひければかたのことく學問し侍れともことのさらにおよはすや侍らむ又笙をそつかうまつるよしあしはかりしり侍らすと申ければ御笙をたびてふかしむるに其ころ雲にとほりてたへにめてたかりければそれより恩寵有て御遊のをりことにかならすめされけり　帝王編年記云天延二年甲戌四月五日中納言朝成薨年五十八諡德公敵人成鬼七代可取之云々

をしからたちて　○をしからたちてとはものに疑惑なく決斷あるといふ事也とそ

くすし重秀　○典藥頭從五位下丹波氏

四檢排違使忠明事

五長谷寺參籠男預利生事

長谷　○豊初山清水寺事跡都名所圖會にくはし

ふめきて

しはしあれといへ　○その男しはし爰にひかへゐよとそ也

おれてくる人もそ有　○をくれてくるの寫誤なるへし

六小野宮大饗事付西宮殿富小路大臣等大饗事

九條殿　○右丞相師輔公

清愼公實頼

小野宮殿　○右大臣藤實資公參議齊敏二男母播磨守尹文女

紅のうちたる細長　○紅そめをうちし也すへて衣につやを出すうちて出すも有はりて出すもあり近頃はいたはりにすとあれはふるくはみなしゐしにて張しなるへし細長なりきぬのむねあはさぬやうなる仕立にてさうそ（本ノマヽ）のうへにうちかけりむなひもを水干のやうにむすふとありいろゝは好にまかすへしすへて尊貴の人の童男多くは女房のふくなり

西の宮殿　○正二位左大臣源高明公延喜帝の皇庶子也母贈皇太后宮胤子勸修寺內大臣高藤公女高明醍醐天皇皇子左大臣正二位賜源姓號西宮殿

富小路のおとゞ　○右大臣顯忠公也左大臣時平公男母源昇卿女

額の望月のやうにて　○信州望月の御牧より牽こまのごとくと也又一說望月とは額に白き丸斑のあるをいふとも猶可考

七式成源滿則員等三人被瀧口弓藝事

式成（ノリシゲ）　源滿（モトミツ）　則員（ノリカズ）

宮道氏　○物部守家大連の裔宮道彌益の後なり續世繼ものかたりにみゆ

院之侍を　北面御所を瀧口東宮を帶刀と云

やうゆう　○養由基字□□列國の時の人弓藝のみにあらす數々武功の名臣也はしめ下賤より出て大將軍に上り討死せしなり

宇治拾遺物語卷第八

一大膳大夫以長前驅問事

法性寺　○九條河原ノ上貞信公建之二十一ヶ寺の内伏見街道中央東福寺北門の南西向にありこ山州名跡志

轅エン○くるまのなかえ

二下野武正大風雨日參法性寺事

下毛野氏　○國名をかはねに賜し也上古は國號の文字も定らさりしをすへて國號二文字つゝにあらためられし時毛の字をはふきて下野とせし也餘國みなこれに同し

法性寺殿　○法性寺殿は關白忠通公

かせ杖　○かせ杖雅望按に和名抄横首杖唐韻云欵横首杖也加世　都惠一云鹿杖

三信濃國聖の事

すゝろに　○爰にては我もしらすおもひもかけすこ也

行ひ出したり　○厨子佛を感得せしなり

あせ倉　○和名抄校倉阿世久良俗用之今按本文並未詳藏穀物也新猿樂記及倉(カセ)甲藏こみゆ

まきらはしく　○混雑にてものにまきれしさなり

つるきの護法　○修方眞秘にてすへて説かたきよし浮屠氏のせつなり

まうれんこいむ　○明蓮こ書なりこれは名なりこいむのこさいまた不考

ふくたい　○木曾の麻衣の類ひにてあらく〱しきものなるへし今尋るにさたかならす

四敏行朝臣事

敏行朝臣　○藤原　參議右中將從四位下高雄山鐘の銘の筆者無双之能書也

鎌足　武智麿　富士麿

敏行三代實錄仁和三年六月從六位上左兵衞權佐より右近衞少將に轉こ有

ひかへたるもの　○後拾遺集戀一女をひかへて侍りけるなさけなくて入りにければ

ふるふ〱つとひかへたり紅葉賀　かのものぬひし夜

ひかへたりけるは此君なりけりおちくほ物語

四卷經　○阿彌陀經無量壽經觀無量壽經地藏經也さいへこ猶つまひらかならす

紀友則　○大内記正六位上祖先は武内大臣より出系圖未詳
古今集の撰者なり此集えらみの中身まかりぬと見へて哀傷の部にいためる歌あり
三井寺　○江州志賀郡園城寺天台眞言兼　本尊彌勒
大津皇子建之　天智帝御産湯之事にて寺說あるよしゆへに御井寺とも書とも云也　元亨釋書に曰園城寺は大友與多の建る所與多は黑主の祖父にして大友皇子の御子也王子天武帝に戰負勢田に薨したまふ時先非を改め御子與多に命して大友連綿の宮城を毀ち寺を立る費の助とし玉ふと云々
五東大寺花嚴會の事
此物語治承より猶後の物か
恒例　○則を恒と云節を例と云恒例とは則をたかへぬを恒といひ節をたかへぬを例といふと古說なり
華嚴會　○花嚴經を初時經といふ
釋尊三七日譯玉ふ　則乳味　花嚴六十二卷此內梵網經二卷　料紙千二百二十一枚と云々
平家の炎上　○安德帝治承四庚子年十二月二十八日平相國淸盛令重衡焚之

六獵師佛を射事
愛宕山　○山城國おたきの郡祭神一座香久突智命
おひ〳〵　○宿木卷においやきゝし人なりとおほし出て　枕草紙におい此君にこそ　玉かつらにおいさり〳〵　但今のをい〳〵は泣聲にやたふとしとてのうもなくといふ詞脫たるにや
ひやうとゐる　○矢の羽をと也ひやうはたひやうずばなさいへり
七千手院僧正仙人にあふ事

宇治拾遺物語卷第九

一瀧口道則術をならふ事
陽成院　○五十七代　諱貞明淸和帝第一皇子國母二條后藤高子二條贈太政大臣長良公女
世に〳〵あさましけ　○世にあさましけといふべきを世に〳〵と重ねたるおもしろしいかにも〳〵いふかしみたるなり
よはひて　○呼ひてなり
精進　○精者不雜也進者不怠也
やをはかりなる　○八尺はかりなるへし猪の强大孟勢を云たてしなり

二寶志和尙影の事
寶志和尙　○志作誌法苑珠林にいはく梁の世の人京師道林寺に止住し僧儉を師として禪業を習修す髮の長きこと數寸常に街を跣行す一の錫杖をとる此杖のかしらに鏡剪刀及帛などをかけし人なり

三越前敦賀女觀音たすけ給事
雅望考るに日本靈異紀中卷孤孃女憑ニ敬觀音銅像ニ速得報緣第四世といへる條にしかせる物語今と大におなし

たまらさりけり　○とゝまらずとなりしる所　○知行するかた也
てつから　○雅望按るに葵巻人にもいはててつからといふはかりさどにてそつく　うつほ物語藏開巻參る者はかたなまないたをさへ御前にててつからといふはかりにてわれ猪そひまかなひて參り給ふすみつきあるへかしき　○相應にすみなすべしもあらずとなり
なと物いふへき主もなし　○家のかう廣きになさて主たちたる人もなきぞとなり
そゝめくほとに　○何かと取まかなふほとに日のくれしと也そゝめくはいそかはしきかたち也
嬉しき旅にそ　○旅はうきものなれと此女にあひしより何となく心いさましき也人情いとおもしろし
雅望考るに此あたり脫文おほし
こゝろめたさ　○此女のこゝろもとなきとなりうしろめたきのめたきに同し
みつし所　○くりやにて臺盤所のことなり
よこめすることなく　○男女ともにこと心なくておもひかはせしすかたなり

四くうすけか佛供やうの事

くうすけ　○空輔とかくよし猶可考

佛師　○このころまては今の佛師とはことたかひていつれも法師なり運慶湛慶なとも法體なりしとぞ

みなゝから　○皆そのまゝといふに同し

うるさき哉　○こゝにてのうるさきはものむつかしといふ義也うるせきやつにていひし心惜きとは大にたかへり

えむするものをつのりて　○得へきものをかたしろにて人にものをかりし也つのりてはそれと是と引かへてといふ義也何々の功につのりて何々の國郡を所望するなと東鑑に多く所見あり

むれらかに　○群々の字意也一つらにとり締てされとなり

契冲云一度に丸なからといふ事也

人の妻まくもの　○まく枉の文字にや妻をまくる人あるそといふなるへし直ならぬといふこゝろにや雅望考るに風俗歌玉たれの をかめ をなかにするゑてあるしはもやさかなまきに　古事記に八千矛神之御歌に「やちほこの神の尊はやしま國つまゝきかねて云々まきは覓也萬葉七廿五丁　すきにし人に往ヵ巻ヵ目八方紀神代巻覓國此方矩貳麼儀　袋法師と名付し繪物語に女を法師の犯す所にかける是誠にこのもしけにてさん〳〵にまきてけりと歟著聞集十六に蒔繪師の返事にたゝ今こもちをまきかけて候へはまきはて候て參り候へしと書たり此文の詞あしさまによまれたりこは何事の申やうそとて臺處の沙汰しける女房其文見さしてなけたりける是によりて蒔繪師かもとへかさねていかにかやうなる狼藉の詞をそ申そ云々唯今御物をまきかけて候へ者蒔はて候て參り候へしとこそ書て候へと申けれははけにもさにて有けり假名はよみなしとて誠にをかしき事也

同書兵庫介則宗と云者有けりむけにとし若き者にて侍りけるか侍の雜仕に小松とて六十計なる老女をさいあいしけり傍輩ともわらひて小松まきまきと云ける云々　同書七三十　母にて候ものこそ姉よりもよく候へ母をまかせ給ひかしといひたりける是等女を犯す事をまくといへり　若草のつまをもまかすといへるも是歟右歌萬葉廿防人悲別長歌まくといへるは美斗能麻具波比のまく歟

ものゝくをたに　○佛つくりの用ふる鑿鋸小刀やうのものなるべし

にふ色なるきぬ　○薄縹に墨をさしたるいろめなり源氏ににひ色とあるもおなし

まへの物　○雅望按るにまへの物膳の物か前と書たるを誤てまへとかけるにや　契沖云膳なりと

奉仕人（つかまつりびと）　○みやつかへする人也と也

はしのり　○端乘の文字先馳すへき人と也

夢にとひ　○ゆめにとみしたる也夢の宿邯鄲の古事なるへし　行幸巻に夢に見え

五つねまさか郎等佛くやうの事

兵藤大夫恒政　○所見未詳

何事するそと　○あからさまにゐたる人のことはなり

そのかわたくし　○表がたにあらぬしぞく又はちかごなりなとのこゝろしりなるへし

さることはなけれと　○左近のものならねとけしうはあらぬと也

此臺なる人の具したる僧を　○つねまさか妻のかたにみやつかへする女房のくせし男の僧也

おせくみたる　○脊のくゝまりたる也龜脊なとのやうにみゆるなるへし

竹取物語にみやつこ丸が手にうませたる子にてあらす吾山にて見つけたる云々御門おほせたまはりみやつこ丸か家は山もとちかくなり

ものゝやうたい　○ものゝわかちもしらぬ人よといふに同し

六歌よみて被免罪事

大隅守　○たれともなし

しとけなかりけれは　○こゝにてはとりしまりのなきといふに同し

かうけ　○葵巻に大將殿をこそかうけには思ひ聞ゆらん落くほ物語二にかうけたつるわか殿も中納言におはします也

かしらの雪　○拾遺雜下老はてゝ雪の山をはいたゝけり

しもとみるにそ　○宮の文字を霜にかけしなり山家集にさほる舟の千綱にあたりぬるをはかこちかゝりてがしけかましくまてむつかしく侍るなり

七大安寺別當女に嫁する男夢見事

大安寺　○本名百濟寺皇極帝之年曾我馬子造之南都七大寺之一菅公の別當有し寺也

東齋随筆大安寺は天平元年道慈律師先皇の遺詔に依て造立す大唐の西明寺の結構を移して道慈歸朝して造れり西明寺祇園精舍を摸して造る祇園精舍は兜率の内院を移せりと云り大安寺の名大官大寺と云り大和國添上郡平城右京五六條三坊にあり

八博打聟入の事

はくち　○博奕者也賭すくろくを役と打もの也光信か圖の職人盡歌合之書にぬす人とあはせて書るに相貌兇惡なるものゝもみゑほし引ゆかめてすくろく盤にむかひたり今にていはゝ山師なといふものゝたくひならんか

あめのしたのかほよし　○宇宙之美貌の文字なるへし

恐しきものりやうせられたる　○鬼の來通ふ女ともしらすむこになりたるいはゝこなたのあやまち也とをしかつけてくりことをいひし也これかはくちのこゝろざしなるへし

宇治拾遺物語巻第十

一伴大納言應天門をやく事

水の尾の御門　○六十代清和天皇御諱惟仁文徳帝第二皇子國母染殿后藤明子忠仁公御女

應天門　○八省朝堂院南面の外門也三間閣五間戸三間

信の大臣　○嵯峨帝第七の王子正二位左大臣號河邊母廣井氏笛書之名人也

忠仁公　○攝政太政大臣准三后閑院冬嗣公の二男昭宣公良房の御父也母尚侍美都女贈正一位藤眞作女

西三條右大臣　○正二位右大將良相冬嗣公の末子母從四位上安信雄笠女

頭中將　○藏人頭の中將也頭の辨もおなし

右兵衛の舍人　○衛府の官人なり

朱雀門　○大裏の正面二條大路にあり伴氏造之二階七間戸五間

出納　○納所の出入にあつかる下つかさなり

しれことといふかたい哉　○愚なることをいふ乞丐かなと放言せしなり

二放鷹樂明暹に是季かならふ事
放鷹樂　○未考東齋隨筆音樂部にあり
明暹已講　○明暹は名已講は僧官なり已講大法師なとゝつゝけたり
山階寺　○興福寺の古名不比等建之七大寺の一なり
是季　○樂官なるへし未詳

三堀川院明暹に笛ふかさせ給事
堀河院　○七十三代御諱善仁白川院第二皇子國母中宮源賢子六條右大臣顯房公女
やう／＼てうしをかへて　○さま／＼に御ふえのしらへをかへさせたまふなり
東齋隨筆音樂部○般若丸と名を付て持たりけりと有り
八幡別當幸清　○善法寺法務
建保三年の
當今の天子八十四代　○順德院御諱守成後鳥羽院第三皇子國母昭明門院

四淨藏か八坂坊に强盜入事
天暦の頃　○六十二代村上天皇の年號也御諱成明國母藤穩子昭宣公御女
淨藏　○三善淸行男母弘仁帝御孫女叡山にて受戒す密敎を玄明法師にうく康保元年十一月遷化
發心集に淨藏貴所と聞ゆるは善宰相淸行の子並なき行人なり云々

五はりまの守さたゆふか事
播磨守　○相當從五位下
阿波守相當同　此人々すへて未詳
あめまたらの牛　○赭色黑斑さらけのやうなる也
ゐせ牛　○はか／＼しからぬ牛ならはとなりよからぬ人をゐせものといふに同し
そゝろに　○こゝにてはいつこともなく此牛のかへりきしなり

六吾嬬人止生贄事
山陽道　○延喜式式部省にいはく播磨美作備前を近國とす備中備後を中國とす安藝周防長門を遠國とす紀の成務紀にいはく山陽を影面かげとも又式部省の曆帳に曰山陽陸道西宮記にはかけとものみち又は外面の道ともよめり北山抄には加介止毛乃美智又ある舊記に曾止茂之美智なといひをきたり
中山高野　○未詳かしこくもすめらみくにゝかゝる

神をまつりをかむいはれなしさらは祭神はもとよりしるへからすものゝこゝろをもえぬいなかうとのまかつみの神やいはひそめけんこれらの類ひをこそ蛍火の赫神五月蝿生あらふる神ともいふべけれ

三代實錄卷之九貞観六年八月十四日戊辰詔以美作國從四位下中山大神武藏國從五位下蒲田神並列宮社又按延喜式神名帳美作國苫東郡二座高野神社中山神社三代實錄貞観七年七月廿六日乙巳進二美作國從四位下中山神階一加二從三位一

らうたけ　○うちあかりてたをやかなるすかたなり

むくつけき　○こゝにてはたゝつよきかたちにて木訥なるといふまて也

ゆゝしかるへき　○こゝにてはいま〳〵しかるへき也

よりふして　○今俗にいはゝすはりたるなり

いとゝつゝましけ　○ことさらにはちらひかくれまほしとおもふ也

悲しきといはむ方なし　○可愛き事いはむ方なし也

うちうめきて　○こゝにては人のことはを聞いれて狩犬の領掌せしさまなり

桙　○此字未考梓ホコの誤なるにや

さきをひ　○警蹕の文字なり源氏に多し

無為に　○不意に同しかるへし

不意也はゝきかふいにかくて物し侍るなり

のといみしく　○祝詞の文字まつよかるへしのりとごとの約也

むしりわた　○つみわたのこと也わたほうしなと着したるに似たるとなり

いらなく○ならひなくといふにひとし

庖丁の刀　○ほうてうは柏人なりそれかつかう刀なり

をけさる　○おほきさるなるへし

とみに切やらす　○切へきさまなからさすかにきりもはなたすあはや〳〵とみする也

雅望按るに人をころすこと云しも古本なか〳〵わろし印本にしたかふへし

こりともこりぬ　○こりしうへにもこりしなり

たゝころされんくるしからす　○贊の一そうまてわつらはせしといひし神のちかことをうけて殺さはころせ祟はたゝれ此猿丸ゆるさしと男のつよりい

ふ也

七豊前王事

柏原御門　○五十代桓武天皇御諱山部光仁帝第一皇子國母高野夫人贈正一位高野乙繼女

豊前王（トヨサキ）　○帝王系圖紹運錄等にも所見なし

田村帝　○五十五代文德天皇御諱道康仁明帝第一皇子國母五條后藤順子冬嗣公御女

八藏人頓死の事

圓融院　○六十四代御諱守平村上帝第五皇子國母中宮藤安子九條右大臣師輔公御女

頭中將　○小野の宮實資公也まへにあり

おこなひ給ふ　○さしつしをきて給ふなり

かい出ゆく　○昇出ゆく也

九小槻當平事

主計頭　○主稅頭ともに相當從五位上

助　○正五位下

史　○從八位下

うるせかりし　○志のうるはしき也

さとしをしたり　○何となく奇瑞の有し也

陰陽師　○相當從七位上

まじわざ　○呪咀の文字ましものせるつみと中臣の祓のことはにもみへたり

死へき宿世　○死へき宿業の報にやあらんとなり宿世すぐせとよむへし

殃に逢て死けり　○毛を吹て疵を求むと毛詩にあり

細注人をうけへは忘草の段におなし

十海賊發心出家の事

此舟をへみしらぬ　○海賊の舟なるを向の人は夫ともしらぬよと賊人のわれなから思ふなり

此船うつしてむ　○船中のものをうつしとらむとなり

手をこそ〳〵とすりて水精のすゝのをの切たらむやうなる涙を　○此段手をするといふより涙を水晶のすゝにたとへし也文花おもしろし

むざう　○無慙

ひはつなる僧　○破髮なるへし優婆塞なとにや但ひはつとは力なけなるをもいふへきか

ひつら　○鬘の文字みづらとよむ源氏

すはへ　○楚の文字木より直立する細枝をいふと說文

氣條をいふ和名抄に楚をよめり萬葉集五に貧窮問答楚とる里をさるとはねやとまて云々紀に笞杖をホソスハエ、トフトスハエよめり
さはれ　○さもあれの約也
波羅門　○
こと〳〵なく　○異事なく一隨に歸ゑせし也
十羅刹　○藍婆　毗藍婆　曲齒　花齒　黑齒　多髮　無厭足　持瓔珞　皐諦　奪一切衆生精氣いつれもいつれも彌陀阿閦觀音等の化身なり

宇治拾遺物語卷第十一

一　あをつねの事

ふるき宮の御子　○たれともなし當今に御ゆかりの人なるへし
左京大夫　○相當從四位下
ほそ高にて　○やせてせのたかき也
頭の鐙かしら　○出額にて後骨もあとへ出しなるへしさるゆへに冠の纓のなだらかにはさからて脊とははなれしさまなり
花をぬりたる　○縹の文字也
齒かちなるもの〻　○はのあらはに大ひなるなり
聞しめしあまりて　○き〻かねさせたまひてなり
まめやかにさいなみ　○さいなみ爰にてはあららかにいのらせ給ふにはあらすかくてはいか〻なり左ありてはなめけなりなごまめたちてをしへむづからせ給ふなり
あがひ　○贖の文字つみをつくなふあがなひ也祝詞なとにも多くみへたり
あらがひ　○爭の文字蓮葉のうへはつれなきうらに

こそものあらかむはつくといふなれなとよめり
すまひ　○辭退の文字なるへし
打たる出し袙　○まへにあり
あをちの皿　○青磁の文字なるへし
ひのおまし　○日の御座なるへし

二保輔盜人たる事

丹後守保昌　○藤原右京大夫致忠男母元明親王女武略長者也保輔は致忠か二男也

三晴明を心見る僧の事附晴明殺蛙事

土御門通　○羅生門の外一條通道幅四丈
老しらみ　○髮の白くなりたる也また一義老て容貌のうせしさまなるへし輿のうせたるをはなしろむなと源氏に有
引まざくらむ　○手まさくりのこと也引あそはんといふ也
安部晴明大膳大夫益材の子也花山院寛和年中の人和歌は拾遺集に入天文暦道は加茂忠行に學尊卑分脈
廣澤僧正　○寛朝僧正のこと也東寺の長者一品式部卿敦實親王の男母時平公女遍照寺の開基長德四年六月十二日遷化

四河内守賴信平忠恒をせむる事

河内守賴信　○左少將鎭守府將軍從四位上昇殿滿仲朝臣二男母大納言藤元方卿女
平忠常　○上總介正六位下
仰らるゝことなきかことくにする　○勅命をもかしこみ奉らすをのかまに〳〵ふるまへるなり
家をつくりてゐたる　○こゝにては城とみるかたやすし
我家のつたへにて　○源氏の武略經基王より相傳して甚妙の機密あるなるへし上古の武將京畿に所しなから遠境の地理に通したる思ふへし
わなゝき聲　○慄の文字前にもある
おこたりふみ　○怠狀なるへし載狀とかくよし東鑑にはみへたり

五白川法皇北面受領の下りのまねの事

鳥羽殿　○とはの離宮也
受領　○何の守に成てその國へくたるをずれうと云
玄蕃頭　○相當從五位下ほうしから人のつかひのかみとよむよしみへたり

衞府とも　○左右衞門左右兵衞の府の官吏なり
左兵衞尉　○相當從六位上
おまへちかゝりける人の家に　○御所にちかきかたの人の家に入居てすはといはゝとふ出むとかまへしなり
むこに　○無下になり
さかるといふてふ　○辰の時と仰いたされたりともその時にはそろふましけれと時刻下るといふとも午未迄やはといふ也
藤左衞門源兵衞　○たれともなしたゝものかたりの對句にせしなり
棧敷　○橋杭なくてわたせるを棧といふ西蜀の棧道は樹木の梢をならへてみちとせりとそ岐岨のかけはしも古へはこれにならへりといへりさむしきの義も同しかるへし
六藏人得業猿澤池龍事
藏人得業　○得業は僧位とみゆ內にてもいふなる文章得業生なとのたくひならんか藏人は左大臣法印なとゝいふにひとし
鼻藏人おかしき事哉　○これはおもしろき事哉也
心中におかしく思へとも　○これはおろか〳〵しくおもへともなり
すかしふせむ　○たばかりおほせんと也
頭つゝみ　○帽なと引入しなるへし
興福寺　○法相宗本名山階寺和銅三年不比等建之七大寺の一
目くら　○說文に眼盲たるを矇といふとあり
あぶな　○あやふの約なりなは感したることはにて助語なり
七淸水寺御帳給る女の事
たよりなかりける　○親も夫もなき女なるへし
淸水寺　○山城音羽山本尊千手觀音
あなかち　○强の文字しゐてといふ義なり
年頃ありける所　○とし月すみなれし居所をもうかれ出てたよるへきかたもなき也
犬ふせき　○今いはゝこまよせやうのものなるへし
さかしくはある　○慣の文字逆しくはある也小ざかしきなとのさかしきにてさし過しとの事なるへし
怜悧といふ義には非ず
さはこれを　○さらは是を也

うれへをも　○訴訟のこと也
人の手より物をえ　○ゆくりなく他人の物をくるゝ
なり　觀音のたまはりたるかたひらを衣にせんと
おもひつきたる是則神學者流のいはゆる太占フトマニ
の意也をのつから神慮のくはゝる也上古の占方ま
つ大むねはかくのことし因に曰かたひらとは袷も
のゝ片枚也几帳のかたひらといふに同し

八則光ぬす人をきる事

すゝどくあゆみ　○鋭の文字○いかにもとくあゆみ
し也
ものゝきけれは　○何ものともしれす人のはしりか
かりし也
木にはあらさりけり　○堂上へ昵近する人はつね
には眞劔を帶せす木刀を帶する也忠盛朝臣のこと
思ひあはすへしさるを此太刀のきら／＼とするを
くみへけれは彼木刀にはあらぬよと驚き思し也ま
へに公達のおはしますそといひしにはことたかひ
しさま也
えさしあへす　○太刀もおさめあへす也
ゐたりけれは　○下につとゐしきし也

洗なとしたゝめ　○何にもあれよくとりとゝなふる
をしたゝむるといふ也書物を俗にしたゝめものと
いふも一部をよくとゝなふるの義なるへし
大宮大炊御門　○羅生門外二十六の小路の一也　道
はゝ各四丈也
淺ましくつかひたる太刀加那　○あはれいみしく道
たる太刀よとほめし也
無紋のはかま　○平絹にて仕立し也
山ふきのきぬ　○表うすくちば裏黄
猪のさやつかのしりさや　○ゐの皮のしり鞘にさや
まきせし太刀也
香きり　○しり切といふに同しとそ
をよひをさして　○指をさして也をよひとはゆひの
こと也　○源氏にもをよひかゝめて十はたなとあ
り　○とむきかうむきは右にむき左に向也
かたがたりおれは　○形語の文字にてしかたがたり
をせし也
けしきやしるからむ　○正しく我なせしことなれは
こゝろの鬼にてわれとわかけしきの人にみへむか
とこゝろもとなきさま也

九空入水したる僧の事

桂川　○山城の大井川の下流なり

祇陀林寺　○本尊釋迦佛開基仁唐上人ぎむだりとよむよし

そのはざまは　○其あいたはといふ也

うちまき　○まへにいへり

十日藏上人吉野山にて鬼にあふ事

芳野山　○和州の名山天武帝ののかれおはしましける所ふるさとゝよめり

日藏上人　○笙の窟の日藏と云幽冥へ往來せしといふ人なり

鬼　○和名抄に隱の字音也

十一丹後守保昌下向のとき致經父逢事

大矢左衞門尉致經　○平五大夫致頼か男也いにしへ大矢といふこと弓をよく射る人をさしてはかならすしも大矢の某とあた名せしとみゆ後三年の萹まきものゝことはにも大矢の季賢なとみへたり氏姓にては將してなし

十二出家功德の事

たうさかのさへ　○菩坂地名なるへしさへは齋の神なり

ふくろのゑほし　○もみゑほしなり烏紗帽の纓の無かことく檀紙にてたゝみしもの也後三年なとに多くあり

宇治拾遺物語卷十二

一達磨見天竺僧行事

達磨 ○かくいふ時はすへて沙門の梵音なり一人にかきるにはあらす 但初菩提達磨は梁の代に來りし人也

證果 ○羅漢果にもあれ須多温果にもあれ何にもあれ一果に證得せしをかくいふ也

二提婆ほさつ參龍樹菩薩許事

龍樹菩薩 ○八宗の開祖なり密家にては法を大日よりつたふとにて則密家にては龍孟菩薩といふ

提婆菩薩 ○未詳

三慈惠僧正延引受戒之日事

横川小綱 ○小綱は僧位也

四内記上人破法師陰陽師紙冠事

内記上人寂心 ○猶可考

法師陰陽師 ○まろかしらにて神事にもあつかる人なるへし今の俗にていはゝ山臥のはらへすることゝきのものなるへし

祓所の神 ○日向の小戸橘の檍かはらにて岐尊御禊の時出生之九神なりいはゆる底筒男命底津少童命中筒男命中津少童命表筒男命表津少童命八十枉津日命神直日命大直日命是也

三世の如來 ○過去現世未來の諸佛なり但わけていふ時には 過去阿彌陀 現在釋尊 未來彌勒也

五持經者叡實効驗事

わらはやみ ○瘧疾のこと也童疾とかく源氏

持經者叡實 ○いまた詳ならす但持經者とは何にもあれその經々を受持する人也

ひる ○蒜の文字 極ねちの草藥喰しと源氏にあり五辛の一にて不淨のものなれはなり所謂五辛とは蒜薤葱韮胡荽又一種に 蒜(キホヒル) 薤(マヒル) 葱(ヒトモシ) 蘭葱(ニンニク) 興渠(クレノチモ)

壽量品 ○法花八部之内之勝劣をわくる時此經第一なりとそ功德無量也となん

六空也上人臂觀音院僧正祈直事

空也上人 ○諱光勝六波羅密寺の本願天祿三年九月遷化紹運錄には常康親王男とみへたる

一條大臣 ○從一位左大臣實經公委くは前にあり

餘慶僧正 ○長吏庵主北晨倉大雲寺中に一寺をたて

ゝ觀音院と號くゆへくわむをんいむの僧正と云

七增賀上人參三條宮振舞の事

增賀上人　○參議橘恒平男慈惠大師の徒弟一條帝の

寛弘元年八月寂す

三條大后宮　○所見未詳

上達部　○三位已上大臣家の公たちかたをいふ

汗あへて　○血のあゆといふに同し我にもあらす汗

のしとゝにぬるゝさま也

操　○匾正字　○はむざうとよむ

八聖寶僧正渡一條大路事

東大寺　○聖武皇帝神龜五年建之本尊大像の毘盧舎那

佛　南都七大寺の一也

上座法師　○せうそほうしとよむ

たのしき　○富有なるさま也

聖寶僧正　○大友王子孫葛野王子の子東寺長者延喜

九年に遷化理源大師と諡す

たうさき　○犢鼻褌也著聞集承久記等同たうさきと

云り褌和名抄方言注云袴而無袴謂之褌音昆和名須

萬之毛能一云知比佐眩毛乃史記云司馬相如著犢鼻

褌草昭曰今三尺布作之如牛鼻者也唐韻云松小袴也

注云職容反與鍾同楊氏漢語抄云松子毛乃之太乃太

不佐岐一云水子みな肌袴なり

これを詮　○せとよむよろしこゝをせにせむほとゝ

きすのことし

九穀斷聖不實露顯事

五穀　○禾麻菽麥豆なりまた月令には黍稷麻豆麥ま

た吉田家三壇にもちゆるところは麥粟稗大豆小

豆

神泉苑　○方八丁天子御遊覽所也殿數十二宮正殿を

乾臨閣と云御庭巨勢大納言金岡卿の作也是則本朝

山水之起源也

穀斷　○文德實錄第六齊衡元年七月乙巳備前國貢二

一伊蒲塞一斷レ穀不レ喰有レ勅安二置神泉苑一男女雲會

觀者架肩市里爲レ之空數日之間遍於天下呼爲聖人

各々私願伊蒲塞仍有許諾婦人之類莫レ不三眩惑一奔

咽得月餘日或人云伊蒲塞夜人定後以水飲送二數𨊂

米一天曉如レ厠有人窺之米囊如レ積由是聲價應レ時減

折兒婦人猶謂之米糞聖人

十季直少將歌の事

季直少將　○未考

季直　○縣居曰大和物語に季繩と有語の理にては直といふへしされと此ほとの人の名の樣定云難し季繩少將右少將從五位下鷹名人號交野少將直作之末藤原子葉男延喜十九年卒

公忠朝臣　○源氏四位右大辨大藏卿國紀男滋野井の辨といふ信明の父也

源公忠大藏卿國紀男右大辨號滋野井辨國紀は光孝天皇之御子延喜十一年三月昇殿同十八年正月掃部介二月藏人同廿一年修理亮延長二年正月五位同三年十月內藏介同六年正月藏民部少輔同七年正月左少辨四十六承平三年轉右中辨

辨の掃部介にて藏人　○少辨相當正五位下掃部介相當從六位上此人は正五位上也

くやしくそ何々　○此一首墜涙無際

十一樵夫小童隱題歌讀事

おほけなのことないひそ　○おそれあることないひそとなり身におほせぬといふ義なりおほけなくうき世の民におほふかなと云々

十二高忠侍歌讀事

うす色のきぬ　○經紫緯白也

かいわぐみ　○かきわかねたるやうにと也搔綰の文字なるへし

十三つらゆきうたの事

貫之　○紀氏系圖未詳　古今第一の選者從五位下

因に云都の福大明神は貫之の靈社なり遍額に紀貫之靈社冷泉爲村卿の御筆にて則御當人の再興也

十四あつま人歌の事

十五河原院に融公靈住事

宇多院　○五十九代叉亭子院御諱定省孝光帝第三皇子國母后斑子二品式部卿仲野親王女

ひのさうそく　○細注まへにあり

所せく　○爰にては心をき有ていふせきかたち也

十六八歲童孔子問答の事

孔子　○周靈王二十一年十一月四日生悼王四十一年四月十八日卒唐玄宗開元二十七年文宣王とをくり名す

十七鄭大尉事

洛陽　○洛水の南を洛陽といひ東を長安と云

鄭大尉　○

十八貧俗觀佛性富事

十九宗行郎等射虎事

壹岐守　○相當從六位下　宗行所見不詳

はかなきことに　○させるつみにもあらぬなり

新羅　○しらきとよむ也

おほろけにて　○爰にてはものゝ決斷なくはきく〳〵ともせぬとなり

いみしき歡せむ　○恩賞なとあつうせんとなり

おもておこし　○面目を施せし也

二十遣唐使子被食虎事

遣唐使　○舒明天皇二年の秋初て遣唐使を發すと國史にみへたり

そはさまにくはむ　○横のかたよりくはんとなり

くた〳〵となしつ　○なへ〳〵となせし也

廿一或上達部中將之時逢召人事

あかき限なる目のゆゝしき　○目玉の血はしりしさま也

こりずまに　○こりすといふことにてまは助字也歌には須磨にもかけてよむ也

ことよろしくはゆるさんとて　○左はかりのつみならでかろ〳〵しきかたならはわきて法師の身のうへといひ乞ゆるすへくとの下心なれと八逆罪のものゆへにさもせられさりし也是は尤左も有るへし

わかくきひはなる　○爰にては花やきてうちたをみたる樣なるへし

四條大納言　○細注まへにあり公任卿なりとは世にいひしなるへし

二十二陽成院妖物の事

陽成院　○まへにあり

淺葱の上下　○かりきぬさしぬきひたゝれはかまをも上下といひし也淺黄とかくはあしくきは葱なり葱のわかは淺みどりなるゆへかくいふ也

浦島か子　○水の江のうらしまか子とてなかうた萬葉にもみへたり雄略の朝のことゝみえたり

二十三水無瀬殿むさゝびの事

後鳥羽院　○八十二代　又顯德院御諱尊成高倉院第四皇子國母七條院藤殖子七條贈左大臣信隆公女

水無瀨殿　○山城の山崎惟喬親王閑居の地なりとそ

むさゝび　○依本草猶可考

鼯鼠　○萬三むさゝひは梢もとむと足引の山のさつをに逢にけるかも志貴皇子萬六ますらをか高圓

山にせめたれは里におりくるむさゝひそこれ

二十四一條桟敷屋鬼の事

桟敷屋　○今にていはゝかし座敷やうのものなるへし傾城とふしたるといふにてしりぬあそひなとよび出すまうけなるへし

諸行無常　○涅槃四句の妙文也

宇治拾遺物語巻第十三

一上緒主得金事

兵衛佐　○相當從五位下

むなくるま　○副車ひとだまひ又むなくるま　但これにはあらぬなるへしものつむ車なるへし

皇嘉門　○若犬甘氏造之雅樂寮の御門といふ二條大路

うきのゆふ〳〵としゐる　○案にうきのやぶ〳〵としたるならむか　左傳注に曰草莽を藪といふと

藪　和名　夜分うきは泥濘なり

いみしき好物とおもひて　○こゝにてすきものはこんずのゝ人哉といふ心なりよからぬものをかはむといふはものずきよといひし也

二元輔落馬の事

元輔　○清原氏從五位上下總守清顯忠男母筑前守高向利生女

内藏助　○相當正六位下

おいらか　○おたやかにはといふ義也

ほとき　○缶の文字樂器のよし　○延喜式に有

大嘗會　○於本郡女間郡里 天子即位一度の大祭也即位七月以前なれは大嘗會その年の内に有八月以後なれは來年四月迄にあり

しれこさないひそ　○恐なることないひそとなり

滑稽潤達の人と見へたり英才量しるへからす

三倭宣迷神にあふ事

三條院　○六十七代御諱居貞冷泉帝第二皇子國母藤超子兼家公女なり

八幡　○雖德山また石清水と云 山城久世郡山の半腹に神泉あり故に石清水と云

祭神三座　○左神功皇后　中譽田天皇　右比咩太神

左京屬久衛宣傪　○相當正八位下此人いまたかふかへす

四かめを買てはなつ事

黑き衣着たる人　○龜は水德にて北方玄武をつかさとれはかく書しなり

五夢買人の事

備中國　○すへて吉備の國也中頃さきて三國とす

夢を人に聞かすましきなり　○文德實錄卷五十九丁 護命問延祥曰汝有夢乎答曰有之護命曰爲我言之延祥曰夢臥七重塔上備時三日並出光照身上護命曰吉也不可言愼勿語人云々

六大井光遠妹强力の事

薩摩氏長　○三代實錄孝光天皇仁和二年五月二十八日之條に曰至此之時膂力之士左近衛阿刀根繼右近衛伴氏長相撲之最爰于保天 天下無雙と云々　この人さつまの國の人にていふにやあらむなほ追々精考をまつ

うす色のきぬ　○まへにくはし

紅葉のはかま　○表黃裏蘇芳

七戲唐人女のひつしにうまれたる不知して殺事

さいて　○いまいふ手拭やうのものなるへし

八出雲寺別當の鯰に成たるをしりなからころして食事

三津出雲寺　○廢して今はなし但いにしへの所は今の上の御靈の社地也ゆへに出雲寺の御靈といふと云々

傳教大師　○諱最澄父三津召枝漢獻帝裔江州志賀郡の人叡山の開基台宗を唐の順曉に學ふ弘仁十年六月四日遷

ゐう〳〵といひける　○骨をたてゝうちむせふしは
ふきの聲なり

九念佛僧魔往生事

天狗　○神書にいはゝ高津鳥佛書にいはゆる障魔
茂卿の天狗説に猶くはし

十慈覺大師入纐纈城給事

慈覺大師　○諱圓仁姓壬生氏野州都賀郡之人貞觀六
年正月十四日遷化同八年七月依相應國師乞諡慈覺
大師

武宗　○唐の十三世主會昌は六年にて終る佛法を禁
止せしは會昌四年なり

十一渡天僧入穴事

玄弉三藏　○唐の太宗の時の人玄弉は名なり經律論
をかねたるを三藏といふ一人のことにはあらす

十二寂照上人飛鉢事

三河入道寂照　○雉子をいけはきにして發心せし人
也

三寶　○佛法僧なり

神祇　○天にいますを神と云地にいますを祇と云

十三清瀧川聖の事

清瀧川　○あたご山のふもとの河なり

火界の咒　○不動行法のうちに火性三昧とて恐しき
咒法あり別に眞言印像等ありて猥にはときかたき
ことゝいへり

十四優婆崛多弟子の事

優婆崛多　○崛多は名優婆摠名優婆々々塞々々異な
と法華經にみゆ

阿那含果　○須多溫果なとのことく證果の一なりと
なむ

宇治拾遺物語卷第十四

一海雲比丘弟子童の事

海雲比丘　○文珠の別稱なるへし彌陀を寶藏比丘と申かことし

二寬朝僧正勇力事

遍照寺　○東寺の別名なり寬朝僧正建之

仁和寺　○眞言　大内寺　光孝天皇仁和四年の勅願本尊は天子等身の阿彌佛也

中ゆひ打して　○法衣のうへに手巾なと引しめしなるへし

あかるくひ　○屋上にのほるへきあし代の杭なるへし

うむじかほ　○困窮したる顏のさまなり

三經賴蛇に逢事

經賴　○出所未詳

またぶる杖　○叙子の文字なりいまいふさすまたのたくひなり

ふみつより　○踏强るなりふみつよりしとは力足にてふみかためし也

酒にてあらふ　○酒の蛇蝎の毒を解すこと本草にくはし

四魚養の事

消息　○せうそことよむ玉章のこと也宗義未詳尙俟後考

七大寺　○興福　東大　西大　大安　元興　法隆　藥師寺合而七寺也

五新羅國后金榻事

六珠の價无量事

故宇治殿　○賴通公の事なり

あこやの玉　○石決明々珠を抱く光明遍滿すこれを阿古耶の多萬と云よし法花珠林に出

玉のあたひは限なき　○法華經に無價寶珠とあれはかくは書し也

美濃五匹　○みのよりをり出すきぬゝの也平緒のたくひにて光ありとそ今ゆふぐむなひの類なるへしや

七　北面女雜使六事

うるせき　○色はみてにくからぬなり

刑部祿　○相當正八位下六と祿とのまちかへなるか

わかくほこりたる　○年もわかく氣かたのはすはなる女房也
口てづゝ　○口のふつゝかなると也歌にてもことはつゝきのなひらかならぬをは手つゝなりなと批判したまはる也

十一高階俊平か弟入道算術事

おかしきさそ

八仲胤僧都連歌事

青蓮院　○粟田口　始號十輪院天台傳教九世行玄大僧正開基

七宮　○かくのみにてはたれの御方とも定かたし猶追て精考をまつ

九大將愼事

春日社　○大和國添上郡春日郷祭神四座　經津主命下總香取　武甕槌命常陸鹿島　比咩大神　天兒屋命本社　稱德天皇神護慶雲二年十一月鎭座藤氏之氏神也くはしくは諸書にみへたれははふく

山階寺　○まへにあり

枇杷左大將仲平　○正二位左大臣東宮傅昭宣公三男母同時平公

十御堂關白御犬晴明等きとくの事

いまずかり　○おはしますといふに同し

東齋隨筆鳥獸之部

もろおりと　○おりとのもろひらきなるなり

堀河左大臣顯光公　○從一位號廣橋堀川關白兼通公男惡靈左府と云し也

宇治拾遺物語卷第十五

一清見原天皇與大友皇子合戰の事

天智天皇　○三十九代　諱天命開別天皇舒明第一皇子國母齊明天皇在位十年十二月三日崩御

大友皇子　○又名伊賀王子天智皇子御母伊賀釆女宅子

清見原天皇天武　○四十代諱天渟中原瀛眞人天皇又諱大海人舒明第二皇子國母同天智帝

虎に羽をつけて　○蘇我赤兄臣等五人か申ことはなり

志摩　○天武紀初丁書紀天智天皇四年冬十月壬午云云是夕御ニ嶋宮ニ癸未至ニ吉野ニ而居之

いましかぞうを　○汝か一族を此國の司となし給はむと也族をぞうとよむこと文章のききさみによりていと多し

此一條の囙に曰　陸廣微か呉地記に曰呉の余昧か子を僚と云立爲ニ德樊之子公子光所レ弑在位十三年僚好ニ炙魚ニ子光借與ニ百金ニ以令ニ專諸ニ進ニ炙魚ニ置ニ匕首於炙魚中ニ刺レ僚殺子光纂立是爲ニ闔閭王ニ十市の皇子卿のつゝみやきといふものゝはらにかくして少き文を天武に奉られしこと言塵集にも有此こゝろを新六帖のうたに往昔ハ最モ賢志片田卿包燒奈流中乃玉章　但此趣書紀とは大同小異也

藥師寺　○七大寺の一也

二よりときか蒯入見たる事

宗任法師　○鳥海三郎大夫安倍氏義家朝臣の臣にて松浦の郡司にほせらる

頼時　○貞任宗任等か父也囙に曰此頼時はしめ頼義將軍の名を憚て時とかへたり此頼時に子供五人あり一は女にて有之一の姫二は貞任三は宗任四は女中の一の姫五女一之一之姫と云々いかゝおかしき名にあらすや右東鑑

三賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事

法性寺殿　○

幔　○和名比良波利きぬを竪にはきてうへに横へ布をきたるをまむといふ布のよこなるをまくといふすちなきものゝ心きはなりと譽けり　○こゝにては見落すべきすちのなきものと也あさけるへき筋のなきなり此武正前にもあり高名の人なるへし

四門部府生海賊射返す事

まとき ○的弓なり白弓塗弓といふに同し

さのみこそあれ ○いつまてかくてあらむやは世に出んこともとをからじなといふよしなるへし

賭弓 ○かけものをたまはりてあたりをあらこふを天子の叡覧あること也いまの圖的のことし

相撲のつかひ ○これをことりづかひといひて名たたるほてをめしにつかはさるゝ御つかひなり

いりめき ○いかりめくなり

四十六歩 ○のり弓のやころ也およそ十五間ほと也やころ殼の文字也

黄水をつき合 ○青へとをまると同しこは竹取にもみへたり

弓たちして ○弓矢をかまへて體配なとするさまなるへし

いたつき ○まと弓の鏃なり

ちりはかりの物也 ○強盗のわれをつよりいふより征矢なとにくらふれは甚微少なるものからちりはかりとおとしいひしなるへし

こつばき吐て ○小唾吐ての文字也

五士佐判官代通清人違して關白殿に奉合事

源氏狹衣 ○世にしられたる奇觀のものかたりなり源氏は上東門院の女房藤式部か作狹衣は式部か女の赤染衞門か作也

後德大寺左大臣 ○實定公從一位右大臣公能公男母俊忠卿女

關白殿 ○月輪兼良公なるへしとや

六極樂寺僧施仁王經驗事

打れうし ○うちさいなむ也科の文字

七伊良緣野世恒毘沙門御下文の事

越前國 ○いにしへ國々をわかちさためられよろしき文字二字つゝに掟せさせたまひし時越の國もさきて三國となり東國は上下とし西國は前後とすかはらけ ○神武天皇天のかく山のはにをとりてひらかをつくると是かはらけのことのもとなり

まどひ出て ○初は何ともわかぬ故に出あひたれはとなひらかに書てこの度はまとひてみれはといふ誠によろしくゆくりなきとたのめたるとこゝろがまへかくあるへしこれら文章の要にたつ所なり

あかきたうさき ○頭書前に有

八相應和尚上都卒天事付染殿后奉祈事

相應和尚　○孝德帝御裔姓禁氏江州淺井郡之人延喜十八年十一月二日遷化

不動尊　○五大尊之中央土德

都卒内院　○これを神道にたとふれは高天か原に同しきとそ

彌勒菩薩　○慈阿逸多と號當來之敎主にて如來同位のほさちなりとそ

染殿の后　○水尾帝の國母忠仁公御女にて藤明子と申　染殿正親町南京極西櫻樹を多く植させられ是を染殿と云后天長七年誕生承和八年十一月正四位下卅三仁壽元年十一月七日從三位

信濃布　○木曾の麻きぬなるへしかのふくたいのたくひにや

延喜式に見えたり

念珠　○木槵子經に曰當木槵子一百八箇貫常自身隨而志心南無佛陀一子可過當百八煩惱を斷獲ニ無上果ー

四五度はかりうち奉りてなけ入〳〵いのりたれは

○此段不能了解俟後精考

驗德　○驗は修驗德は道德也二義全備せしを驗德の聖と云としか〳〵

九仁戒上人往生の事

南京　○ならの京をいふ也

興正僧都　○諱叡尊興福寺別當醍醐の叡實を師として一時の名僧なり伏見帝の正應三年西大寺にて遷化後十一年にして菩薩の貴號をたまふ

はらあしくおはする　○いかりはやく意地あしきといふに同し

をとなひけれと音なし　○閣の外よりしはふきなとしておとろかせし也

引あけてみれは　○障子やり戸なとを明しなり

十秦始皇自天竺來僧禁獄事

秦始皇帝　○莊襄王子即位三十七年七月に崩魏趙韓齊楚燕是を六國といふこれに秦を加へて又七雄といふ周の末始皇始めてこれを亡し六國を合せて三十六郡とす

釋迦牟尼佛　○初名は瞿曇比丘所見詳なるゆへ不註此僧をたすけし者こゝには世尊とあれと法苑珠林には金剛神とあり

漢にわたりける　○後漢明帝永平七年天竺に使をつかはして佛法をもとむとあり

十一　後の千金の事

莊子　○名周字

粟　○あはにはあらすぞくといひていまたしらけさる米のこと也粟五瓶をあたへよと宣しも黑米のことなり

河伯神　○皇國にては罔象女命(ミツハノメ)漢土にては玄冥氏ともに北方水德の神なり

十二　盗跖與孔子問答の事

柳下惠　○柳下は魯國の地名姓司馬名惠字展市○女と同房にふしてこゝろをうこかさす人もまたうたかはぬほとの清廉の人也

柳盗跖　○惠か弟也人のあめをおくりし時かくゐいはこれをみて老を養ふに能物也とおもひ盗跖はこれを錠ににぬりてこかねを盗にたよりあるものとおもひしとなん保昌保輔同日の談なるへし

山ふところ　○山のさし合たる囘にて洞のやうなる所なるへし

魯の孔子といふもの　○かくはいかて書へき魯の孔丘とこそしるすへけれこは傳寫のあやまちなり但ことはのうへにてはくしといひし方勝るやうなり

肝鱠につくらむ　○しゝむらはなますにすへしいかて瞻を膾にはせむたゝつよくいはんとてかく書し也おもしろし

亂たること蓬のことし　○蓬はみたるゝを性とし麻はすくなるを性とす

世中の麻はあとなく成に是心のまゝの蓬のみして北條泰時なをふるくもあまたみへたり

中にしたかひていますかるへきなり　○何々とゝきおへてさて此うへはまろか申にしたかひておはしませと也

堯　○陶唐氏帝嚳高帝氏の讓をうく在位七十年也とそ

舜　○有虞氏堯のゆつりをうく在位六十一年なりとそ

伯夷　○

叔齊　○

顏囘　○字子淵○周景王二十四年に生

子路　○仲由か字なり周景王三年に生始まつしうし

て母につかふるに物なけれは米を遠におふて其ゐたひをもとめて養ふ後みやつかへして富たる時はかなへ千鍾をつらねて食せしかと母のみうせし後なれはこれをもうましとせすかへりてはしめ藜藿を喰し日をしのひしほとの孝子也

二度魯にうつされあとを衛にけつらる　○此段春秋世說なとにくはしけれはゆつりて筆をとゝむる

唐物語提要

一、此物語のと物に見ゐたらす八雲御抄風葉集仁和寺書目錄等にも其名たえてなしたゝ伊勢物語知顯抄（頭注云一條禪閤惡見抄に知顯抄は經信卿の名をかりて擬作せるにやさそれほえはべるまことかの卿の筆作ならは定家卿には見給はぬ事はあるましきた云々さのたまへりけにさるをなから[illegible]なる事うたかひもなけれはこゝに引證せるなり）に云物語に名をつくることはそのなかにかきあらはすことの心につけてこそ名つけはへれされはこそ橋姫の事をかきたる物語をはすなはち橋姫と名つけから國の事をのみかきたる物語をはから物語となつけやまとしまねの事をかきたるをはやまと物語となつけたれ云々と見えたり此ほかにはふつと見ゐたれるものなし

一、此物語作者たれともしられす又作れりし時代もつまひらかならす原本は西行上人の筆にてあるをうつしたるなりといひつたへたりさらは上人より以前の書なりけんされとそれもたゝいひつたへなれはたしかに上人の筆にてありしやしるへからす今按するに俊頼口傳抄揚貴妃の事を記せし條を見るに文勢此物語の揚貴妃の條と大かたおなしこと

つゝけからいさゝかまへしりへなることもあれど歌なとたかへることなしさらはこの物語は俊頼朝臣より以前の書にやともおほゆるに猶しかにはあらすそのゆゑはこの物語に文集琵琶引をやつしかける條に我身ひとつはしつまさりけりと思ひみたれつゝとあるは詞花集なる顯輔卿の歌をおもひよせしなり俊頼朝臣は先輩にて金葉集の撰者なり顯輔卿はいさゝか後輩にて詞花集の撰者なり此物語もし口傳抄より以前の書ならんにはいかて其中に顯輔卿の歌を引用ふへきよりて考れは此物語は俊頼朝臣よりは後の物にして楊貴妃の故事のみ物語ふりに書しかふるくよりありて口傳抄にも引用ひ此物語にもとりいれられしにや又按するに漢故事和歌集に載たる歌のついてを見るに各條のはしめにまつ此物語の歌を引てさて永久四年百首蒙求和歌撰集夫木等の歌をついてたれは此物語かならず蒙求和歌より以前の書にては有ぬへし文體歌調さすかに西行上人京極黄門なとより後のものとは見えぬにや

一、此物語今は十とせはかりのむかし西行上人のかきおかれたるをうつせりといふ本もて又うつしおけるを後に或人のもたる古抄本をかりえてむかへかうかへてたかへることありしをはかたへにしるしつけつるを近き比吾黨岸本弓弦のもたる漢故事和歌集をかり得てうつしおくついて歌の異同をはいさゝかそへたるになん

一、漢故事和歌集（頭注云漢故事和歌集作者未詳にしあてに室町の中頃の物にやと思はるゝ事あれとたしかにはいひかたし）はむねと此物語の中に見えたる歌を載てちなみには永久四年百首蒙求和歌集夫木なとよりみゝちかき故事よめる歌ともを引出てそれ〳〵の出所を漢文のまゝにて下に記したるものなりしかるに此物語にありては彼集に入らぬ故事あり此物語になくて彼集に入たるもおほし今兩書の目錄をこゝに記して後の考にそなふ但此物語は目錄なかりしを今試にしるせるなり彼集の目錄はおのつから有しまゝを出せり

唐物語目次

頭注云こゝに引たるもろこしのふみのうへと此物語のつたへことゝおなしきもありたかへるもおほしそは漢武内傳今の列仙傳なといふものははやく

いにしへのまゝなるはつたはらさりしなれはにやあらん又別の書によりてかけるかその書の今は絕たるもあるへく又わさといさゝかつゝは引たかへてかけるもありぬへき事なりもろこし文のうへに心いるゝ人はよく見わくへき事なれはあけつらはてもありなんかし

(一)王子猷 晉書卷八十本傳　(二)白樂天 白氏文集卷十二琵琶引
(三)賈氏 左傳照公二十八年　(四)孟光 後漢書卷八十三梁鴻傳
(五)司馬相如 史記卷百十七本傳○題柱故事見華陽國志　(六)綠珠 晉書卷三十三石崇傳
(七)宋玉 文選登徒子好色賦　(八)眄々 白氏文集卷十五燕子樓
(九)張文成　(十)徐德言 本事詩○兩京新記
(十一)簫史 列仙傳　(十二)望夫石 幽明錄
(十三)娥皇女英 博物志　(十四)陵園妾 白氏文集卷四新樂府
(十五)李夫人 前漢書卷九十七上外戚傳○白氏文集卷四新樂府　(十六)西王母 漢武內傳○列仙傳
(十七)四皓 史記卷五十五留侯世家　許由 高士傳　巢父 同上
(十八)楊貴妃 白氏文集卷十二長恨歌幷傳　(十九)朱買臣 前漢書卷六十四上本傳
(廿)程嬰杵臼 史記卷四十三趙世家　(廿一)平原君 史記卷七十六本傳
(廿二)楚莊王 韓非子○楚策○蒙求引說苑　(廿三)荀采 後漢書卷八十四列女傳
(廿四)上陽人 白氏文集卷三新樂府　(廿五)王照君 西京雜記
(廿六)潘安仁 晉書卷五十五本傳　(廿七)雪々

以上廿七條

此目のうち彼集になきは張文成と雪々との二條なり

漢故事和歌集目次

(廿七)桃源隱士　(廿八)屈原
(廿九)軻親斷機　(卅)孟嘗還珠
(卅　)蘇武　(卅二)綠珠
(卅三)鶯子樓　(卅四)牽牛織女
(卅五)塞翁　(卅六)匡衡鑿壁

以上卅六條

此目のうち此物語になきは王昭巫山神女桃源隱士屈原軻親斷機孟嘗還珠蘇武牽牛織女塞翁匡衡鑿壁これらの十條なり

一、此物語の故事を考るに廿七條のうち張文成と雪々との故事は何の書によりてかけるにかつまひらかならす文成か武后に寵せられて遊仙窟をつくれるよしはもろこしの書にはたえて見あたらすされと平判官の寶物集卷四云則天皇后と申すは高宗の后なり張文成といふいろこのみにあひて遊仙窟といふ書を得たまふ事なりとあれはもろこしにもさる傳説の有しをこゝにもつたへしるせしにやあらん雪々の故事はもろこしのふみにもこゝのつたへにもこの物語のほかにたえて見聞およはすこれら猶ひろくものしれる人にとひて考得たることもあらんをりおひつきてもしるしぬへし

一、漢故事和歌集には商山四皓の條と許由の條とは別條となして四皓の條に「深山よりいてゝや君につかへまし四のおきなの今もありせは」といふ歌を出せり此歌は夫木抄卷卅五翁中務親王とて入たり今此物語には四皓と許由巢父の故事と一條にかきつゝけて四皓の歌なきはいふかしき事なり後の考にもとてしるしおきつ

一、潘安仁の故事もろこしの書に見えたるは投之以菓遂滿車而歸とあるを僑といへるに此物語のみならす隆信朝臣家集戀五云ものいひわたりし女のもとより花橘をふみにつゝみていかなるすちの心ともおしはかり給へとかきたりけれはいと心得かたくかの「むかしの人の袖の香そする」といひけんたくひにも思ひよそふへきかたなく又潘安仁の車にいれけんためしを思ふにも此身のあやしさにはことたかひたれはいひやりし「むかし思ふにほひか何そ小車にいれしたくひのみにもあらなくに」女かへし「いつれとも思ひもわかすなつかしくとまる匂ひのしるしはかりそ」此女は建禮門院右京大夫に

て右京大夫家集にも此贈答のこと見えたりたゝし右京大夫家集にはかへしの歌「わひつゝも重ねし袖のうつり香に思ひよそへてをりし橘とありていつれとも云々の歌はなしいつれにても心はおなしきにやさてかくたち花といひなしたるはもろこしの故事をみやひにいひかへたるにてもありぬへしこれらのみならすもろ〳〵の歌集物語なとの中に此物語に見えたる故事をよみし歌これかれ見えたれとこと〳〵くひき出んはなか〳〵にうるさくはたこゝろおくれたるわさにもやとておほかたはもらしつ

一、此物語一本の巻末に一名蒙求和歌としるせるはものよくも心得ぬしれ人のさもやと思ひてふと書くはへしなるへし蒙求和歌は源光行の作にして十四巻を上下二冊とし作者の眞字序假字序あり蒙求の標題二百五十を春夏秋冬戀祝覊旅閑居懐舊述懐哀傷酒雜とわかちてこと〳〵く歌ありかきさまも大きにたかへりたま〳〵此物語とおなし故事なるも歌はみな別なりしかのみならす此物語の中に蒙求に見えし故事もあれと蒙求にいらぬ故事おほしされはいかて蒙求和歌とは名つくへき一本の一名蒙求和歌とあるはあやまりなることおしてしるへし

文化六年二月

清水濱臣識

【第一】むかし王子猷山陰といふ所に住けり世中のわたらひにほだされずしてたゞ春の花秋の月にのみ心をすましつゝおほくのとし月を送りけりことにふれてなさけふかき人なりければかきくもりふる雪はじめてはれ月の光きよくすさましき夜ひとりおきゐてなぐさめがたくやおぼえけんたかせ船に棹さしつゝ心にまかせて戴安道を尋ね行に道のほどはるかにて夜もあけ月もかたぶきぬるをほいならずや思ひけんかくともいはでかどのもとよりたち歸りけるをいかにといふ人ありければ「（漢故事和歌集）もろともに月見んとこそ思ひつれかならず人にあはむものかはとばかりいひてつひにかへりぬ心のすきたるほどはこれにて思ひしるべし戴安道は剡縣といふ所に住けり此人のとしごろの友なりおなじさまに心をすましたる人にてなん侍ける

【第二】むかし元和十五年の秋白樂天罪なくして江州といふ所にながされぬ其次のとしの秋入江のほとりに夜友をおくりけり松風波の音をきくにうれへの涙いとおさへがたしかくてさよ更行程に空すみわたり月かげ波にしたがへるを見るにつけても「わか身ひとつはしづまざりけり（頭注云詞花雑上顯輔なにはは江の蘆まにやと月見れはわが身ひとつ）と思ひみだれつゝ人もなぎさをこゝろぼそくあゆみゆくに浪のうへはるかにびはのしらべさまざまに聞えてかきあはせなどのありざま世にたぐひなきほどなりこれを聞にあやしき心おさへがたしあま人ものゝふより外に誰かは又なさけあるべきとおぼえければこゑをしるべにて誰の人にかと尋ねとふに我はこれあき人の女なり昔よはひ十三にて琵琶をならひえたることと世にすぐれたりきみかどの御まへにてひとたびしらべしに百の御ひき出物をたまひき又みめかたち有がたくめづらしきほどなりしかば見る人きく人さながら思ひをかけ心をつくせりきしかれども春過秋くれてみめかたち有しにもあらずおとろへにしかば世にふるちからうせはてゝせんかたなくなりしによりあき人に契りをむすびて此國のたみとなれりきあき人なさけなければ我をゝしむこといと淺し我をねんごろにせねば出ていぬるのち立かへる

ほど久しかへる程おそければおのづからまたずしもあらずかゝるまゝにはたゞむなしき鱒をまもりつゝ秋の月の白きをのみ見るとはいへり白樂天われびはの聲をきゝてうれへふかし又此かたらひを聞にとりかさねたるこゝちす我も君もうれへの心おなじからずやかならず其うれへのつきせぬ事を思ひ知べしわれいにし年の秋よりつかさをのがれ都をはなれて此所にしづめり又やまひのむしろにふして立ゐる事たやすからずいと物心ぼそき海つらの浪風よりほかに立まじる人もなきすみかにはあしのうは葉をわたるあらしをちこち人の舟よばふおとのみ聞えていまだかくのこゑをきかずこよひの君か琵琶のしらべを聞にほとゝゝ天のがくをきかむがごとしこれをきく人みな涙をながせり其中にも白樂天ひとり袂くちぬと見えけり「いにしへにありしことをつくさずは袖に涙のかゝらましやは此人は世中の人の心は皆にごれるをうしとや思ひけんひとりすましてつねは都にあとをなんとゞめざりける

〔第三〕　むかし賈氏といふ人たぐひなくかたちわろくて貌うつくしき女をなんもちたりける此女かばかり見にくき人ともしらずあひそめにければくやしき事とりかへすばかりにおぼえけれといふかひなくてあかし暮すによきことあしきことすべて物もいはずえもねらはでよのつねはむすぼほれてのみすぐしけるををとこたぐひなくうしと思ひてこの女にものをいはせうちゑませて見ばやとしけれどもいかにもかひなくて三年にもなりにけり春の野に出てもろともにあそび侍けり雉子といふ鳥の澤のほとりにたちゐ侍りけるをこの夫ゆみやをとりて名をえたりければ此きゞすをたちどころにいころしてけり是を見るにとしごろのにくさも忘れてものいひうちみゑたりければ夫うれしさたぐひなくおぼえて「きかましやいもがみとせのことのはを野澤のきゞすえざらましかばこれをきくにこそよろづの事よくせまほしけれ

〔第四〕　むかし梁鴻といふ人孟光にあひぐして年ごろすみけり此孟光世にたぐひなくみめわろくてこれを見る人心をまごはしてさわぐほどなりけれど此をとこをまたなきものに思ひてかしづきうやまふ事思ふにもすぎたりけりあさなゆふなにいひがひとりてつものにもりけるをみて云々と有をされり

にもりつゝまゆのかみにさゝけてねんごろにすゝめければ齊眉（頭注云後漢書梁鴻傳曰毎歸妻爲具食不敢於鴻前仰見擧齊眉云々）の禮とぞいまはいひつたへたる「（漢故）さもあらばあれ玉のすがたも何ならずふたごゝろなき妹かためには心ざしだに淺からずは玉のすがた花のかたちならずともまことにくち（以下一本ナシ）をしからじかしされども見にくからぬかほにはみかへがたくこそ

〔第五〕むかし相如といふ人ありけり世にたぐひなきほどにまづしくてわりな（イナシ）かりけれどよろづの事をしりざえ才學ならびなうして琴をぞめでたく引ける卓王孫といふ人のもとに行て月のあかき夜よもすがらきんをしらべて居たるに此家あるじのむすめに卓文君といふ人あはれにいみしくおぼえてつねはこれ（これなきくよりほかのことなしイ）をのみめできようじけるを此卓文君が父は相如にちかづく事をいとひにくみけれどことのねにやあはれ（賢）と思ひしみにけんこのをとこにあひにけり女がたの父卓王孫はよろづのたからにあきみちてよのわびしきことをしらざりけりかゝれどもこのわび人にあひぐしたる事をいと心づきなきことに（さまイ）思ひとりていかにもむすめのゆくへをしらざりけれど露ちりくるしと思はでなんとし月をすぐしけるこの夫蜀といふ國へ行ける道に昇僊橋といふはしありけりそれをあゆみわたるとてはしばしらに物をかきつけゝり我大車肥馬にのらずは又このはしをかへり渡らじとちかひて蜀の國にこもりにけり其後思ひのごとくめでたくなりて此はしをなんかへりわたりたりける女としごろまづしくてあひぐしたるかひありてしたしきうとき人々もたぐひなくうらやみける（よの中の人めもあやにうらやみけるイ）「（漢故）しづみつゝわがかきつけしことの葉は雲井にのぼるはしにぞ有ける心ながくて身をもてけたぬなん今もむかしもなほいみしくこそ聞ゆれ

〔第六〕むかし石季倫といふ人ありけりよろづのたからにあきて世のまづしきことをしらざりけり金谷のそのゝうちに五百のまひゞめをあつめてよろこびたのしむことよるひるをわかずこのうちに緑珠と聞ゆる舞ひめなんあまたの中にもすぐれ（まさりてイ）たりければ身にかふばかりあさからずおもへりけりかくて月日をおくるに時のまつりごとをとれる人孫秀この緑珠がたぐひなきありさまを聞たびに人傳ならざらんことをねんごろに思へりければたへかねて色にいでぬ石

季倫身をはかなきになすとも心よわからじと思へるを此人まけじ心のいちはやさにつはものをあつめいきほひをきはめて心ざしをやぶる此時綠珠はるかに高き樓の上にゐたりけり石季倫かの人のてにしたがひてゆく〳〵めを見あはせて誰ゆゑにかかくはなりぬるといひけるにたへ忍ぶべきこゝちせざりければ樓の上より身をなげてしなんとするを身にまさるものやはあるといさむる人あまたありけれどつひにきかず「おくれゐて（漢故）なけかむよりも（はイ漢故）時のまにしなんいのちは（のイ漢故）をしからぬかな（なくにイ）いとかく思ひとりけん心の有がたさもいひつくすべからず

〔第七〕むかし宋玉と聞ゆる人かたちすがた世にたぐひなくざえ才學ならひなかりけり此人の住ける東どなりに又世にたぐひなくうつくしき女ありけり此宋玉をいかでもと思ふ心の忍びがたさに東のかきによるひるたちそひてうかゞひけれどみとせまでめをだにみやらざりければ戀侘てつひにあふこともしらぬ淚にしづみはてけり「こひわひて（漢故）三年になりぬはながたみめならぶ人のまたもなければゆかしからずはなかりけめどあまり心のいう（優）にて人に物を思はせんとおもへりけるにや又さもやなかりけん心のうちしりがたし

〔第八〕むかし眄々といふ人張尙書に契をむすびていくとせふれども露ちりたがひに心にたがふ事なかりけり花の春のあした月の秋のゆふべ（夜もイ）もろともにまひを見歌をきゝてあそびたはぶるゝより外のいとなみなしかゝれどもわかきおいたるさだめなき世のうらめしさは思ひの外にこの夫（なさこイ）頭注云和名抄夫「和名平宇止一云乎止古」はかなくなりにけりそののち此女たちおくれたる事をかなしと思ひてわかれの淚かわくことなしみめかたち心ばせなどもいとめづらかなるほどに世に聞えたりければ帝よりはじめて色を好む人々ねんごろにいざみいひけるをかぎりなくうしと思ひけり秋のよの月くまなくてらすを見てもまづ昔のかげのみ思ひいで（ゐら漢故）られて「もろともに（漢故）見しにひかりやまさりけん（にさ）今は戀しき（び漢故）秋のよの月命は限りありといひながらかくてもいけるみのつれなさよなど（イナシ）ぞ思ひみだれ（しらイ）けるかくしつゝ月日を過ゆけば燕子樓のうちあれはてゝ床のうへかたはらさびしくおぼえけるまゝには手づからみづからたちきせたりけるから衣をとり重ねつゝ身に

ふるれごありしばかりの匂ひだになかりければいとご涙をそふるつまとなりにけり「みるたびにうらみぞふかきから衣たちし月日をへだつと思へばかくしつゝ十二年の春秋をおくりてつひにはかなくなりにけり

〔第九〕むかし張文成といふ人有けり姿ありさまなまめかしくきよげにて色をこのみなさけ身にあまれりければ世にありとある女さながら心づよくはおぼえざりけり其ころ時にあひはなめかせ給ふ后おはしましけりあまたの御なかによろづすぐれてなん聞えさせ給ひければ此をとこ人やりならず物思ひにしづみて頭注云俊頼無名抄引古歌せりつみし昔の人もわかことや心にものはかなはざりけんいけるかひなくそおぼえけるかゝるまゝにはねてもさめても此事の忍びがたきを頭注云あかつきのしちのはしかきもゝよかき君か来ぬ夜は我そかつかくこの歌のこころ袖中抄に載諸義を引て又くはしくいへり又いひあはする人だになかりければせりをつみしぢにふしてとしごろに成ぬればさるべきここにや淺からぬ心のうちをそらにしらせ給ひにけるあはれにいみじくはおぼされながらこゝろにまかせぬ御身のふるまひなればなぐさむかたさらになくてあかしくらすにいかなるひまかありけん夢にゆめみる御こゝちして下紐とけさせ給ひにけりちの涙袖につゝむべきこゝちもせざりけれどから國のならひにてかやうの事よに聞えぬればいみしき大臣公卿なれどもたち所にいのちをめさるゝことなれば又もあひ見給はず后もあはれにたぐひなくおぼされながら雲の梯とだえがちにてふみつたふばかりの道だになければ此をとこ織女の年に一夜の契をさへうらやみて人しれぬ涙のみぞ絶る時なかりけるかゝれどもあわたゝしく色に出す事やなかりけん物や思ふととふ人頭注云拾遺戀一平兼盛忍ふれといろに出にけりわか戀は物や思ふと人のとふまてだになくてとし月を送るにわりなくいみしくおぼゆるよしのふみを作りて后に奉りける「戀わたるそこのみくづとなりぬればあふせくやしき物にぞ有ける此文は遊仙窟と申て我國にもつたはれり后これを見給ふたびに御身ほろびぬべくおぼされけり唐の高宗の后に則天皇后の御事なり

〔第十〕むかし德言といふ人陳氏と聞ゆる人にあひぐして侍りけりかたちいとをかしげにて心ばへなご思ふさまなりければたがひにあさからず思ひかはしてとし月をふるに思ひの外に世中みだれてありとあ

る人高きもいやしきもさながら山はやしにかくれまごひぬさりがたき親はらからもともにたち別れておのがさま〳〵にげさまよへるなかに此人別れををしむ心誰にもすぐれたりければ人しれずもろともにあひ契りけり我も人もいづかたとなくうせなんのちおのづから世中しづまりて又もあひみる事ありなむ物をそのほどの有さまをばいかでかたがひにしるべきと聞えさするに女のとしごろ持たりける鏡をなかよりきりておの〳〵そのかた〳〵をとりて月の十五日ごとに市に出してこの鏡のなかばを尋ねさする物ならばかならずあひ見てたがひに其ありさまをしるべしといひつゝいといたううちなきて別れさりぬそののちこの夫（たきこイ）戀しさわりなくおぼえていたづらに月日をすぐすまゝにはいかなる人に心をうつして契りしことをわすれぬらん（漢故）とむねのくるしさおさへがたくぞおぼえける「まそ鏡われて（はなれイ）ちぎりしそのかみのかげはいづちか（らはイ）うつりはてにしかやうに思ひやりけるにしも色姿のなまめかしくはなやかなるにやめで給ひけん時の親王にておはしける人にかぎりなく思ひかしづかれてとし月をふるにありしにはにるべくもなきありさまなれど此かゞみのかた〳〵をいちに出しつゝ昔の契りをのみ心にかけてよのつねはしたもえにてのみすぐしけるにかゞみのわれもたる人をし尋ねおひてをとこ女のありさまたがひにおぼつかなからずしりかはしつ女これを聞けるよりおぼえずなやましきこゝちうちそひてうつし心ならぬけしきを見とがめて親王あやしみとひ給ふをさすがにおぼえてしばしはいひまぎらはしけれどしひてのたまはすればわびしながら有のまゝに聞えさせつ親王これを聞給ふに御袖もしぼりあへずあはれにいみしくおぼされけるにやよそほひいかめしきさまにていだしたてゝ昔のをとこのもとへおくりつかはしたるに徳言かぎりなくうれしきにつけてもまづ涙ぞさきだちける「契り（漢故）おきし心にくまやなかりけんふたゝびすめる中川の水いやしからぬありさまをふりすてゝ昔の契を忘れざりけん人よりも親王の御なさけはなほたぐひなくこそをぼゆれ

[第十二]　むかし秦穆公のむすめに弄玉と申人有けり秋の月のさやけく（わたらひイ）ゝまなきに心をすましてまたく世のことにはほだされず又簫史といふ樂人あり秋の月

きよくすさましきあけぼのに簫をふく聲あはれに悲しきこと限りなし弄玉それにや心をうつしけんすゝみてあひ給ひにけりよの人あさましき事に思ひそしりけれどいかにも苦しとおぼえずたゞもろともにうてなの上にて簫をふき月をのみながめ給ふことふた心なしほうわうといふ鳥飛來てなんこれを聞ける月やうやく西にかたぶきて山ぎは近くなるほどに心やいさぎよかりけんこの鳥簫史弄玉ふたりの人をぐしてとびさりぬ「たぐひなく月に心をすましつゝ雲にいりにし人も有けりむなしき空に立のぼるばかり心のすみけむもためしすくなくこそ又簫のこゑにめでて人のあざけりを忘れ給ひけんもすける御心のほどおしはかられていといみし

〔第十二〕むかしをとこ女あひ住けり年などもさかりにてよろづ行末の事まで淺からず契りつゝありけるに此夫思ひの外にはかなくなりにけり其後涙にしづみてあるにもあらずをぼえけるを我も／＼とねむごろにいどみいふ人有けれどいかにもゆるさゞりけりこれを聞につけてもなきかげをのみ心にかけつゝ時の間も忘るゝひまなくてつひに命をうしなひてけり其かばねは石になりてけり「ことわりや契りし事のかたければつひには石になりにけるかな此石をば其里の人々望夫石とぞいひけるひとすぢに思ひとりけん心のありがたさもこの世の人には似ざりけり

〔第十三〕むかし舜と申帝おはしましけり御政よりはじめてよろづめでたき御代のためしにはまづ此御事をのみこそ申めれ娥皇女英と聞え給ふ二人の后さぶらひ給ひけり御心ざしいづれまさり給へりとけぢめみえずたゞ紅葉などの根にあさからぬ御事にてなん侍りけるかくて多くのとし月をなんたもたせ給ひけれど此世は限りある所なれは帝湘浦といふ所にてはかなくならせ給ひぬ其後二人の后紅の涙をながし給てふるきをおぼせりければまがきの呉竹も御涙にそまりてまだらになりにけり「君こふるこゝろの色の深きには竹もまだらにそむとこそきけ昔の人は思ひそめつる事は淺からぬにや

〔第十四〕むかし陵園といふ宮のうちにとぢこめられたる人ありけり玉のはだへ花のかたちあざやかにて世にならびなくうつくしかりけりとしわかゝりける時女御にいつきかしづかれて内にまゐりけるにし

たしきうとき楊貴妃李夫人のためしにもまさりなん（頭注云こゝの詞源氏桐壺によりてかけるなるべし）と思へりけるをあまたの御かたぐ\めざましき事になんおぼしけるその御いきどほりにやさまぐ\のなきことによりて（しつみイ）陵園（頭注云續詞花集雜中陵園妾の心をよめる　登蓮法師　まつの戸をさしてかへりし夕よりあくるめもなく物なこそおもへ）といふふかき山宮にとぢこめられて「あくるめもなき物思にやつれつゝみめかたちもありしにもあらずなりにけり父はゝいきながら別れぬる事をなげきかなしめども逢見る事なかりけりよのつねは深き宮のうちに心すごくて風のおとむしのねにつれてもおもひ殘す事なしかくしつゝやうぐ\春にもなりゆけば四方の山べに霧たなびき野べのさわらびあしたの雨にもえいでこゝちよげなるもわが身のためにはうらやましくおぼえて花の匂ひかをりわたるにもひとりねの床のうへ心ときめきせられつゝあはれをそへたるおぼろ月夜のみさしいれどもとふにおとなきかげばかりほのかにてあかしくらすに春過夏たけて萩にし秋もめぐり來にけりさまぐ\咲みだれたるしら菊の夕の露にぬれたるをみるにもむかしの重陽の宴といひし事思ひ出られて落る涙いとゝおさへがたかりけり「見るたびになみだつゆけきしら菊の花もむかしやこひしかるらん（漢故）この人山宮にとぢこめられて後三代のみかどにぞあひたてまつりける

〔第十五〕　むかし漢武帝李夫人はかなくなり給ひて後思ひなげかせ給ふ事とし月をふれども更におこたり給はずそのかみやまひせし時みゆきし給ひしかどもいかにもみえたてまつらざりけり帝あやしとおぼして此由を問せ給ふにわれ君になれつかうまつりしほど露ちり御けしきにたがひ奉らざりき又御心ざし淺からねば恨みをのこす（ふるイ）事もなししかれどもやまひにしづみかたちかはりて後みこゝろにそむく罪あるべけれども又おもふ所なきにあらず「紫の草のゆかり（頭注云古今雜上よみ人しらず「紫のひともとゆゑにむさしのゝ草はみながらあはれとぞ見る）までめぐみ給ひ憐れみをかうぶる事はたゝ君の御心ざしのあらたまらざる（ほどイ）ところなりしかるを今のかたちに昔の御心かはりなばはかなきあとにもうれへの涙色まさらむ事を思ふにおとろへたる姿いと見え奉らまうしと聞えさす帝これを聞せ給ふにかなしくわりなくおぼさるたとひ夜はの烟と立のぼるともいかで其ゆかりをなつかしと思はざらんたゞ此世にて今一たびあひ見

るべき事をしひてのたまはすれどもつひにきかでははかなくなりにければみかど御心にうらみふかし甘泉殿のうちに昔の姿をうつして朝夕にまもり給ひけれど物いひゑむ事なければいたづらに御心のみつかれにけり「ゑにかける（漢故）すがたばかりのかなしきはことへごこたへぬ（けきイ漢故）なみだなりけり又なき人たましひ（魂）をかへ（反）す香をたきてよもすがら待せ給ふにこゝのへの錦の帳のうちかすかにて夜のともし火の影ほのかなるにやうやくさよふけゆくほどあらしすさましく夜しづかなるに反魂香のしるしあるにやとおぼえ給ひけれど李夫人のかたちあるにもあらずなきにもあらず夢まぼろしの如くまがひてつかの間に消うせぬ待ことひさしけれどかへることはぬば玉のかみすぢきるほどばかりなりともし火をそむけ帳をへだてゝ物いひこたふる事なければなか／＼御心をくだくつまとぞなりにける

〔第十九〕　むかしおなじみかどたれもとは申ながら限りなく此世をゝしみ給ひけり命ながらへん事をねがひ給てまぼろしといふ仙人におほせて蓬萊不死の藥をとりにつかはしつゝはかなき御あそびたはぶれにも此世にながらへておはせんことをぞいとなみ給ひけるおほよそ人のこのみねがふことはかならずむなしからねば此御時にあたりて東方朔といふ人仙宮より罪をおかしてしばらく人間にくだされたりけるをみかどまぢかくめしつかひてよろづおぼつかなくおぼせりける事をばまづ此人にぞとはせ給けるかゝるほどに宮のうちに色黄なるすゞめのれいの鳥にも似ずあやしきさましたる飛あそびけるをみかど日ごろかゝる鳥みえずいかなる事にかととひ給ふに東方朔がいはく君長生不死の道をこのみ給ふによりて御心ざしにめでゝ西王母と申す仙女まゐりてあそび奉らんとつげしらするよしのつかひなりと聞えさするに帝うれしくおぼしていかなる有さまにて其人を待べきぞとのたまはするに宮の中しづかにて庭のおもをきよめ香をたきさま／＼のゆかをまうけ給ふべしと申けりかくてたのめしほどにもなりぬれば帝御心すみてゆかのもとに東方朔をかくしおきてひとしれずいまや／＼とまたせ給ふに秋八月ばかりの月の光くまなき夜かうばしき（花イ）風（ふさイ）うちふきてはれ（晴）のそら（天）のごかなるに紫の雲ひとむらたなびけりその中よりこの

世ならずめもあやなる人百人ばかりおりくだれり其中にあるじとおぼしき人帝にあひ奉りてさまざまのことゞもを聞えさすや丶久しくなるほどにこの人（西王母イ）桃七をとりいだしてその三をばみかごに奉りけりこれを御口にふれ給けるより御身もかろく御こ丶ちもすゞしくならせ給て空にも飛のぼりぬべく生死の罪障もとげぬべくや思はせ給ひけん此桃我そのにうつしうゑてたねをもとりてしがなとの給ひけるに西王母うちわらひて天上のこのみ（木實）の人間にとゞまりがたくやとなんいふにもたへずげにおぼせり又ふし（不死）の藥やはべるとたづねさせ給ふにも生老病死の下界にうまれ給ひながらいかでかふしの藥をもとめさせ給ふべきはかなき御心なりと聞えさす西王母のみにもあらずかひなくおろかなる心にもむかしのかしこきひじりの帝の御心とはおぼえず（頭注云西王母云々よりおぼえずまて作者の武帝を評せる詞なり）かくてしばし（ばかりイ）。あるに上元夫人に雲環の轡（髩イ）うたせて舉妃瓊と聞ゆる仙人まひけりたまのかんざしをうごかし錦の袖をひるがへす有樣めぐる（廻）雪にことならず帝これを見給ふにおもほえず御袖ぬれにけりすべて此世のがくのこゑは物のかずならずおぼえ給ひけるより御心もいたくあくがれぬ夜やう／＼明がたになるほどに其御ゆかの下にかくれゐて侍ける東方朔は仙宮の人なりしかれども此みちとせに一たびなる桃を三たびまでぬすめる罪によりしばらく人間にくだされたりとがをあがひて後は又天上にかへり來るべ（ぬイ巳下ナシ）きなりとのたまひて紫の雲たち歸り（たちかへり）。ゆきしより御心はそらにあくがれにけり「（漢故）むらさきの雲のゆかりをいかなれはたちおくるべきこ丶ちせざらむ（ゆきしより（かさ漢故）こ丶ろはそらにあくがれにけり漢故イ）この後はいとゞ御心もそらにあくがれていよ／＼仙をねがひ給ひけりから國のならひにてかしこきみかどには仙人などもみなつかはれ奉るにこそはかなくならせ給て後も御身はとゞまらせ給はざりけるとかや

〔第十七〕 むかし漢高祖と申帝おはしけり呂后と聞え給ふきさき東宮（惠太子イ）の母にて誰よりも御心ざしおもく見えさせ給ひけりほかばらの親王に趙の隱王と申人を御心ざしのあまりにやみかども東宮にたてんとおぼしける御けしきを呂后見給ひてあさましく心うき事におぼして陳平張良と聞ゆる二人の臣下をめしよせてか丶るいみしき事なむあるいかにしてか此うら

みをやすむべきとのたまひあはするをげにとや思ひけんかなはざらんまでもはからひ侍へしとこたへて（さぶらふべしときこえ）かへりぬ又此後二人の人も世中のみだれなむずる事をも思ひなげきておの〳〵はかり事をめぐらしてけり商山といふ山に世はのがれつゝみかどのめすにもまゐらでこもりいたる賢人四人ありそれをこしらへ（頭注云書紀招慰）いだして此惠太子につけ奉りたらばさりともはづる心おはしなん物をと思ひよりてこの山の中に尋ね行にけり四人の人うちみつゝおどろきていはく何ごとによりいとかくあやしげなるすみかにはわたり給へるにかと聞えさするによの中みだれんとつかうまつれば我らが身までも歎深くて此山にかくれゐんと思ふ心侍りしかれども世中のほろびをさまらざらん事はたゞ其御心なりといへるに此人うちわらひて君も我にはぢ給はん事いと有がたかるべけれどむなしうかへし奉らむもむげになさけなきやうなれば後の事をかへりみずけふばかりは御逕にまゐるべしといへりければ限りなくうれしくおぼえて四人の人をぐしつゝ東宮の御もとへまゐりぬたちまちに學士といふつかさになりてふるまひ給ふべき有樣など

こまやかにをしへ奉るにたのもしくおぼさるゝ事限なしかくてとしたちかへる春のあした東宮内に參り給へる御ともに此人ども四人いとやう〳〵じくふるまひけだかきさまにて御ともに侍けるをみかどよりはじめてつかうまつる人どもゝおの〳〵あやしげに思へり帝これはたれにかと尋ねとはせ給ふに御ともに候ける人申ていはくひごろめしつる商山の四皓に侍と申けるに御心もおくせられてあさましくぞおぼされけるこれによりて帝四皓にとひてのたまはく我むかしより汝に國のまつりごとをまかせんと思へりしかれどもあへておこなはざりきしかるを今としわかくいとけなき東宮にしたがへる心しりがたし四皓申ていはく君は御心かしこくて世中をたひらげ國を治給へども人をあなづりかしこきをもかろめ給ふあやまちおはします東宮はわかくおはすれども御心おきてなさけふかく禮儀をたゞしくし給ふと聞え侍るによりて參りつかうまつれりと聞えさせてければ東宮は我よりも心かしこきにやとおぼして此事を思ひとゞまらせ給ひけりかゝれば呂后陳平張良よりはじめて世にある人々さながら心やすくなりにけりこの

趙隱王の母に戚夫人と聞ゆる人は帝をうらみそねみ奉り給けるを呂后いやましく心うき事にぞおぼしけるかゝるほどに帝はかなくなり給ひにければ東宮位につきてよろづ御心にまかせたりけれども呂后としごろの御いきどほりにやいつしか戚夫人をとらへてかみをそりかたちをやつしてあさましく心うきさまになし給つるをみかどかゝらで侍なむ此事さだめて先帝の御心にそむくらんなどさまぐ\にいさめ奉り給へどもいかにもかなはざりければ心ぐるしくおぼしつゝすぐし給ふに此趙隱王をさへうしなはんとし給ひければみかど夜もひるも御かたはらにはなたずおきふし給ひけり后ひまなきことをやすからずおぼして毒いれたる酒を此人にすゝめ給ひけり帝心えてまづ我にとのたまひければあわてゝとりかへしつかやうに人しれずねんごろにし給ひけれどいかなるひまか有けんたぐひなく力つよき女房二三人ばかりをつかはして帝の御かたはらにふし給へりけるをなさけなくつかみころしてけりうへあさましくはおぼしながらいふかひなくてやみにけりさて此戚夫人月くまなかりける夜心うくかなしきにつけても昔のありさまや思ひ出られけん其よしの詩を何となく口ずさび給ひけりみゝくせありける者これを聞とがめてかゝる事なん侍ると呂后に申たりけるにいまひとしほのにくさまさりてあし手をきりつゝ其むくろにはうるしをぬりてよにけからはしくきたなきみぞにひたしておかれたる有さまの其物とも見えずあはれにかなしげなり其後こはき物のけになりてほどなく呂后をとりころし奉りけりこれよりさきに商山の四皓は帝の御ありさまを心やすく見なし奉りて後いとまを申てもとのすみかにかへりぬるを世の人たとへをとりてほめていはく世中ひでりにあひ草木もかれ土さへさけて人の命もたえぬべきに一たび雨ふりつゝ四方の梢をうるほしかど田の稲葉も露しけくむすひゐぬる後やへの雨雲山にかへりいるなるへしとなんいひけることそまことにさもとおぼゆれ又周文王と申せし帝の御時太公望と聞ゆる賢人帝にめしいだされて後つかさくらゐ身にあまれるによろこびてかへる思ひなかりけり堯と申帝許由に位をゆつらんとてみたびまでめしけるをきたなき事をきゝつといひて潁水といふ川に耳をあらひけるもいかなる事にかとを

かゝきやうに聞ゆ又巣父といふ人牛をおひて此河をわたらんとするにきたなき事聞て耳あらひたる流にしもけがるべきかはとてはるかによけてとほりけんもをこがましくこそおぼゆれ又水くむひさごをひとつたけのあみ戸にうちかけたりけんが風の吹たびにとにあたりつゝなりけるをさへうるさしといひてたちまちにわりすてゝけりこれらをきくにもげにともおぼえぬに此商山の四皓はなさけあり人をたすくる心もふかくてたれよりもよのつねびたるさまにこそおぼゆれ―いさぎよく耳をあらひし川水をけがらはしとはたれかいひけむ

〔第十八〕　むかし唐の玄宗と申みかどの御時世中めでたくをさまりてふく風も枝をならさず降雨も時をたがへざりければみな人天下おだしきにほこりて花をゝしみ(頭注云書紀愛惜)月をもてあそぶより外のいとなみなしみかども色にめて香にのみふけり給へる御心のひまなさにやよろづをば楊国忠と聞ゆる人にまかせてやうやくみづからの御まつりごとおこたらせ給ひ。けりこれよりさきに元献皇后武淑妃など聞え給ひし后世にならびなく御心ざしふかくおはしましきそれはかなくならせ給て後ちはあまたの御中に御心にかなひたる人おはせざりきこれにより高力士におほせられてみやこのほかまでたづねもとめさせたまふに楊家の娘をえ給ひてけり其かたち秋の月の山のはより高くのぼることゝちして其いきざし(頭注云遊仙窟細調)は夏の池にくれなゐのはちすはじめてひらけたるにやと見ゆひとたびゑめばもゝの媚なりて人の心まどひぬべしすべて此世の人にはあらずたゞ天人などのしばし天降れるとぞ見えけるかゝりければぼうへ内裏のうちにたちまちにいでゆをほらせてこの人にあむさせ給ふ湯より出だるすがたまことに心ぐるしくうす物の衣なほおもげになん見えける色ざしあゆみいで給へるけしきかるびたる物からけだかくあい〳〵しくてさすが又思ふ所あるさまにふるまひ給へりうへ。これを見給ふたびにうれしくよろこばしくおぼさるゝ事たぐひなしたゞみめかたちの人にすぐれしわざありさまの世にならびなきのみにあらずよろづにつきてくらからずことにふれてなさけふかくなんものし給ける又うへの御心のうちにおぼせることをばさ

ながらそらにしりてふるまひ給ひければかぎりなき御心ざしをもよの人ことわりと思へりおなじ車ひとつゆかにあらねばみゆきしいね給ふことなし三千人の女御后我も〳〵とさぶらひ給へど御めのつてにだにかけ給はずたゞ此人をのみそ月日にそへてたぐひなきものにおぼしける又驪山宮に行幸し給ひては霓裳羽衣のまひをそうせさせ給ふまひの袖風にかへるたびに玉のかざりにはにおちつもりて極樂世界のるりの地。もかくやあらんとおぼえたりおほよそ驪山宮の秋のゆふべに心をとゞめぬ人なし春ははるの遊にしたがひ夜はよのみじかきを。なげき給けるかくてよもすがら日くらしに時をわかすこれより外の御いとなみなかりければ國のまつりごとのすみにごれるをもさとり給はざりけりすべてこの楊貴妃のはぐくみによりて世のくるしき事をわすれつゝほこりおごれる人その數をしらず又天下の人高きもいやしきも心にたがはじと思。へるけしきなべてならず見る人きく人うらやみめづる様いひつくすべからずこれによりてをんなごをうめるものは悦びかしづきてかかるたぐひを心にかけゝるもをこがましくこそ又帝の御おとうとに寧王と申人御かたはらをはなれずまぢかくゆかをならべてよるひるをわかぬ御あそびにもかならずさぶらひ給ひけり此親王。玉の笛を帳のうちにかくしおかせ給へりけるを楊貴妃とりて何となく吹ならし給ふ帝これを御らんじつけてたまの笛はあるじにあらずしてはふくことなししかるを心ざしのおもきにほこりて禮をあやまてり事のみだれにはあらずやとことのほかに御けしきかはりにけりこれによりて楊貴妃いたみおぼす心やふかゝりけん髪のかみ一ふさをきりて帝に奉り給ふ我身のはだへかしらの髪ならでは皆これ君の御物にあらずやしかるをわれ今御心にそむきぬれば罪にふしておこたりを申べしとなく〳〵聞えさせ給ふに御使もいとはしたなきまでおぼえつゝこのよしを奏するに御心もあわて物もおぼえさせ給はずながら時のまにめしかへして世に猶たくひなくもある心。かなとおぼしつゝくるに御心ざしの深さ日ごろにはすぎにけりはつ秋の七日の夕驪山宮にみゆきし給てたなはたひこぼしのたえぬ契りをうらみてはかなき此世の別やすき事

をそかねてなげき給ひけるかたちは六のみちにかはるともあひみんことはたゆる時あらじと契らせ給ひて「すかたこそはかなき世々にかはるとも契りはくちぬ物とこそきけなどのたまひつゝ御手を取かはして涙をながし給ひけるをすべて世にきく人さへ袖のうへ露けしかくてさし月をおくらせ給ふに右大臣楊國忠楊貴妃のせうとにて世の政をとれりけれど。人の心にそむくこと多くつもりにければ世中いきどほり深くなりぬ其中に楊貴妃のやしない子に左大臣安祿山と聞ゆる人いきほひをあらそひて心の中いきどほり深けれどもこれをあやむる人更になしこれによりてたちまちにつはもの十五萬人あつめてつひに楊國忠をほろぼすに世の中みだれてさわぎのゝしりあへりもゝしきのうちまでもそのおそれふかければみかど外へにげさせ給ふ東宮楊貴妃御かたはらにさぶらひ給ふ楊國忠高力士陳玄禮韋見素又御ともに侍りかくて蜀と云國へしりぞかせ給ふにいかならん野の末山の中迄とも此人さだにふたりあらばいけらん限り思ふ事あらじとおぼさるゝに人のけしきかはりて兵とも道をゆかず此時うへ思はずにおぼして御忍をとはせ給ふに陳玄禮といふ人東宮に申ていはくはやく楊國忠まつりごとをみだり人の心をやぶる故に君もけふ此事にあはせ給へり君の御かたき世のあたにあらずやしかじたゞ楊國忠をうしなひて人のうれへをやすめんにはと聞えさす東宮これをゆるし給ふにより。楊國忠。めのまへにはかなくなりぬ帝あさましくはかなくおぼされながら此後ゆかんとし給に。つはものどもたちまちはりつゝみたれの根緒ありと申た心よからぬけしきありけり此時にうへ楊貴妃のまぬかるまじき事をさとり給ひぬれば御顔に袖をおほひてともかくも聞えさすることなしかゝるほどにこの世に楊貴妃いかならんいはほの中なりともおぼつかならぬ御すまひならばいと。くるしからずおぼしけるに思ひの外に命絶ぬべきにやとあさからぬ別の涙千しほの紅よりも猶色深くてせんかたなく見え給ひながらなほ〳〵帝にめをかけ奉り給ひてかくれさせ給ふまでかへり見給へる御あり樣何にたとふべし

ども見えずなでしこの露にぬれたるよりもらうたくあを柳の風にしたがへるよりもなよらかに大液の芙蓉未央の柳にかよひ給へるをしもなさけなく道の邊のてらの中にしてねりたるきぬを御くびにひきまとひつゝつひにはかなくなし奉りつ物のあはれをしらぬ草木までもいろかはりなさけなき鳥獸さへなみだをながせり〔漢故〕ものごとにかはらぬ色ぞなかりけるみどりのそらもよもの梢も御ともにさぶらふ人心あるも心なきもたけきもたけからぬもみな涙におぼれて行かたもしらずまた帝の御心のうちには〔漢故〕何せんに玉のうてなをみがきけむ野べこそつひのやどりなりけれたゞ御袖の下より紅の涙ぞながれ。ける御心まどひにやうまのうへもあやふく見えさせ給へば人々うらうへにそひ奉りてやう〳〵ゆかせ給ふに兵どもかてつき力つかれて帝にしたがひ奉らん事二心なきにあらねば陳玄禮もとゞむべきこゝちせずかゝるほどに益州といふ國より貢物數しらずはこべりけるを御前につみおかせてさぶらふ人々にわかちたまはせてのたまはく我まつりごとのすみにごれるをしらざりしよりけふこのみだれにあへりわが身ひとつによりてさりがたきおやはらからにもわかれ二なき命をもすてゝ猶我にしたがへりわれ又石木ならねばあはれむ心ふかしはやく此物を給うておの〳〵故郷へかへりねとのたまはする御袖の上秋の草葉よりもつゆけく見ゆこの御ことをうけたまはるものみな涙をおさへて申ていはく命をはらんまではたゞ君にしたがひ奉るべしかくて日もゆふぐれになるほどに御かたはらさびしきにつけてもいかなる中有のたびの空にひとりやゝみにまよふらんなどおぼしみだれたる心ぐるしさあはれにかなしなどいふもおろかなり夜もやう〳〵あけがたになりぬれば又出ゆかせ給ふに在明の月西にかたぶくほど雲井はるかに鳴わたる雁がねをきかせ給ふにも御心のうちかきくらされて何方へ行くともおぼされず蜀山といふ山はけしくさかしくてとだえがちなる雲のかけはし。あゆみわたらせ給ふ御けしきよそ。にだになほ忍びがたし百のつかさ人數おとろへいきほひいかめしかりしはたなごさへ雨にぬれ露にしほれてその物ともみえず御ともに

さぶらふ人々何事につけても物心ぼそくおほえて鳥のこえもせぬ深山にかりの宮いとあやしきさまなり月のかげよりほかに光なきこゝちのみしてあるにもあらずあさましきほどなれど所につけたる御すまひはやうかはりてかゝらぬをりならばをかしくも有ぬべしこれにつけても九重のにしきの帳の内の玉の床のうへに枕をならべ衣をへだてざりし昔は我何事を思ひけんなどおぼされけるもまことにことわりなりかかるほどに東宮はゆづりをうけて。位につかせ給ひぬあしき心あるものをうしなひ世中をしづめて太上天皇をむかへとり奉らせ給ふまぢかく内裏をならべてよろづを申合せつゝ御政あるべしと聞え。給へど此御物思ひのあまりにさるべき事ともおぼれされず世もたひらぎ御心もさだまりて後は御なげきもわくかたなくひとすぢに成ぬ時うつりことをはりたのしびつき悲しび來れる池の蓮夏ひらけ庭の木葉秋おつるごとに御心のなぐさめがたさたぐひなくおぼされける時ははかなく別れにし野べにみゆきせさせ給ひけれどあさぢが原に風打吹て夕の露玉とちるを御らむしてもきえ。いりぬべくおぼされける「もろともに重ねし袖もくちはてゝいづれのゝべの露むすぶらんかくのみにおぼしつゞけて涙をおさへてたちかへらせ給ふ御有樣のよわ／＼しさもいはゞおろかなるべし「別れにし道のほとりに尋ねきてかへさは駒にまかせてぞゆく春の風に花のひらくるあした秋の雨に木のはおつる夕宮のうちあはれにさびしくていろいろの草の花庭の面に咲みだれたり又紅葉のにしき階のうへにくれなゐふかく見ゆ昔楊貴妃のまぢかくつかひ給ひし女房など。月くまなき夜はむかしをこふる涙にむせびつゝことをしらべびはをひきけるにもいとゞ御袖の上ひまなく見ゆる心ぐるしさよその袂までせきかぬるこゝちす忘れてもまどろませ給ふ時なければ夢のうちにもあひみ給ふ事は有がたし夜のきり／＼すまくらにすたく聲にも御涙まさり夕のほたるのみぎはをわたる思ひにもきえ入ぬべくおぼされけりかべにそむける殘のともし火光かすかにて朝夕もろともにおきふし給ひしとこの上も塵つ

もりつゝふるき枕ふるきふすまむなしくて御かたはらにあれども誰とゝもにか御身にふれさせ給ふべきかくて二年ばかりにもなりぬればまぼろしといふ仙人まゐりて我君の御心に楊貴妃をおぼせる事のかぎりなきそこをしれり六の道おぼつかなき所なしねがはくは生れ給ひつらん所を尋ね見てかへりまゐらんと聞えさする。うれしくおぼさるゝ事限りなくて御物思ひたちまちにおこたりぬ。まぼろし空にのぼり地に入ていたらぬ所なくもとむるにそのしるし雲にのりつゝ猶東ざまに飛ゆくにわたつ。みの中にいとたかき山ありそのうへに珠の臺こかねの殿とも軒をならべいらかをつらねたるよそほひ有さますべて此世のたぐひにあらず又其うちに仙女あまた遊びたはぶる此所に行むかひて玉の戸ざしをうちたゝくにいひしらず此世ならぬ人出てまぼろしにあへり楊貴妃のうまれ給へる蓬萊宮これなりといふを聞にうれしさ限りなくて唐の玄宗の御使なりと聞えさす楊貴妃たゝいまいねたまへりあしたをまつべしといひて歸りいりぬる後心もとなくてひとりたてり夕の嵐おとなくて波の上はるかに入日さすほどをりからにやあはれ心ぼそしかくて夜もやう／＼なかはすくるほどに花のとぼそに白露ひまなくおけるを見て

明やらぬ花のとぼその露けさにあやなく袖のしほれぬる哉

かゝるほどに夜もあけ日も出ぬれば楊貴妃出給へりこがねのかむざし光あざやかにたまのかざりめもかゞやくほど也まぼろしにあひむかひてしばしはとに出。給はずまづ落る涙をぞ所せげにおぼさる方士も袖の雫ひまなくてやゝ久しくなるほどに楊貴妃のたまはく天寶十四年よりこのかたけふにいたるまで帝の御心のうちを思ひやるになやましくくるしき事限りなしかばかりたへなる所に生れたれど契りの深きによりて猶我うき名をとゞめし故鄕のみぞ心にかゝれる朝夕なれしさとを見おろせといたづらに雲きりのみへだて見る晴間なしなどさまざまにのたまはする有さま猶霓裳羽衣のまひにぞ似給へる方士みかどの御心のうちをしれりければありのまゝに聞えさせつたがひにこゝろのいぶせさをはるけて方士かへりなんとするに楊貴妃こがねのかんざしを折つゝわが物と

て帝に奉れとのたまはす方士これをとりてこと淺くや思ひけんこかねのかんざしはよの中にたぐひなきものにもあらずそのかみ定めて人しれぬ御契り有けん物をねがはくはうけ給はりて奏せしめんといふに楊貴妃けしきかはり涙まさりておぼしみだるゝ事ありさみゆ昔天寶十年の秋七月七日驪山の宮に侍し時織女彥星の逢見る夕長生殿のうちおとなく。てよはのけしきものあはれなりしにみかごわれにたちそひてのたまひき天にあらばはねをかはす鳥となり地にあらば枝をかはす木とならんとこれ君よりほかに又しる人なし此契りのかぎりなきによりてかならず下界にうまれてさだめて二度あひ見てむつましきこと。ふるきがごとくならん我この事を」かさねてしれり思へばしかもかなしく思へば又うれしからずやなご聞えさせ給ふ御有さまにも忍びがたき御心のうちあらはれて馬嵬の道の邊にいまは限りと見え給ひし夕のうらみもなほ唯今のやうにおぼせるけしきまことに梨花一枝春の雨をおびたり　ひかりさす玉のかほばせ（頭注云和名抄云靨仙窗云面子師說加保波世）しをたれて猶そのかみのこ

こちこそすれ方士かへり參りて此よしを奏せしむるに御心日をへてなやみまさり給ひつゝ生れ給はんほどをも猶心もとなくやおほしけんその年の夏四月に身づからはかなくならせ（頭注云寶應元年四月甲寅上皇崩于神龍殿）給ひにけり

「しらさりしたまのありかをきゝえてぞよはのけふりと君も成にしこれひとり君のみに。あらず人とうまれて石木（頭注云白氏文集新樂府李夫人非木石皆有情不如不遇傾城色）ならねばみなおのづからなさけありいにしへより今に至るまで高きもいやしきもかしこきもはかなきも此道にいらぬ人はなし入とし入ぬれば（頭注引歌云萬葉集戀一讀人しらす「いかはかり戀てふ山のしけゝれはいりといりぬる人まさふらん）まよはずといふ事なししかじたゞ心をうごかす色にあはざらむにはおほよそたのしみさかえもうきもつらきも此世はみな夢まぼろしの如し八の苦のがるゝ事なければいとひてもいとふべし天上のたのしみ限りなけれども色のおとろへさとる事なければねがふべきにもたらずうまれてもよしなししかじたゞ心を一にして三界をいとひて九品をねがふべし極樂をねがふとも此世にしふをとゞめばこもつなをとかずして船を出さんがごとし此世をいとふとも

極樂をねがはずはながえをそむけて車をはしらしめんがむし此世をもいとひ極樂をもねかはゞ苦をあつめたる海をわたりて樂をきはめたる國にいたらんことはうたがふべからずゆめ〳〵出かたき惡趣にかへらずして行やすき淨土にいたるべし

〔第十九〕　むかし朱買臣會稽と云所に住けりよにまづしくわりなくてせんかたなかりけれどふみよみ物ならふ事よるひるおこたらすそのひまにはたき木をこりて世をわたるはかりことにぞしける（なしけりイ）かくてとし月ふるにむひぐしたりける女限りなくまづしきすまひをたへがたくや思ひけむ我も人もあらぬさまになりて世を心みんなどこまやかにうちかたらひければかくてしもや有はつべき猶ことしばかりは心づよくあひねん（念）せよとよろづにこしらへけれどもつひにきかで其としのうちにはなれにけりをとこ戀かなしめどもいふかひなくてつぎのとしにもなりにけりこの人のざえ才學よにすぐれたる事を帝聞せ給ひてその國の守になされぬはじめて國にくだりけるありさま心言葉もおよばずめでたかりけりかゝれども猶ありしつまのことを心にかけて一國のうちを尋求さすれども似たる人なくてあかしくらすに野にいでゝ狩しあそびける時ともなのめならずあやしくわびしげなる賤の女がかたみと云物を臂にかけてなを（菜）つみてゐざりありくをゆゝしげの物の有さまやと見るほどに我昔のとも（つま歟）と見なしてげり猶ひがめにやとめをとゞめて見るにいかにもたがふ所なかりければ人しれずかなしくおぼえてくるゝやおそきとよびとりてけり女我あやまつこともなきにいかなる事にかあたりなんずらんとおそれまどひけれど有しむかしの事などをこまやかにかたらひければ女あさましくおぼえてこの夫（なさこイ）をうちみるよりいかゞおもひけんいたくなやみわづらひて曉がたにたえ入にけり（漢故）「もろともに錦をきてぞか（や漢故）へらましうきにたへたる（ひさにしたがふイ）心なりせば心みじかきは何事につけてもくちをしき事にこそ（うらみなのこさずといふこさなしイ）錦をきて故郷にかへるとはこの人のことなり

〔第二十〕　むかし晉の景公（申イ）といふ人おはしけりそのつかはれ人趙朔國のまつりごとをとれり又屠岸賈といふ人あらそふ心やありけん動もすれば此趙朔をしりぞけんと思ふ心深くてとがをもとめなき事をいひ

つけてつみにおこなはるべきよしをあるじにいひけれどももちひられざりければ心中にいきどほりふかくてあかしくらすに猶やすめがたくやおぼえけん趙朔をはじめとして兄弟さながらほろぼしうしなひてけり其中にとしごろあひぐしたりける妻なんひとりこの事にまぬかれにけるをりしもたゞならぬことさへ有てかくれまどふにつけてもわりなくかなしかりけるを杵舊程嬰といふ二人のつかはれ人あるじを思ふ心ふかゝりければ人しれずかくしはぐゝみて若生れたらむ子をのこ子ならば親のかたきをも思ひしりなんたゞいかにもしてことなく人とならんことを思ひはかれりける(らひイ)をかたきもれ聞てめざましくなんおぼえければ猶たつね求て其あこをほろぼしうしなはんと思へりけりこれによりて此女かくれまどひながら本意のごとくをのこ子をうみてけり杵舊程嬰かぎりなくうれしく思ひけるにもわりなくして手づからみつからかくし忍びつゝやしなへりけるほどに此かたきの屠岸賈この事を聞つけてあながちにあさりもとめけり母の心にせんかたなくおぼえながらきたりけるはかまのなかに此子をいれてをしへていはく親のあこをつぎて君にもつかへ奉るべき物ならば物の心をしらすいとけなしといふとも聲をたてゝなくことなかれもし又此時にあたりて子孫ながくたゆべき物ならばはやくなくべしと心のうちに思ひつゝふかくかくれゐたるに本意のごとくおとなかりければかたきもとめかねてかへりぬ母の心によろこびふかし(かイ)しかれども此うれへにおきてはたゆる時あるべからずとなげきわびつゝ程嬰に杵舊かたらひていはく此子をことなくやしなひたてゝ父のあとをつがせんと命を捨んといづれかかたかるべき程嬰こたへていはくしなんはやすしたひらかにやしなひたてん事はいとかたしといふに杵舊がいはく恩のふかき事は君我にまされりきやすきにつけてもわれまづしなばその後かたきことをとげてかならずあだをむくい給へといひつゝ(難事)をさなき子(頭注云此をさな子は趙朔か子にはあらで他人の子を取て山にかくれしなり)をひとりいだきてふかき山の中にかくれゐたり程嬰かたきにつげていつはりていはく我もとめ給へる子の有所をしれりねがはくはこがね千兩をたびてをしへ奉らんといへるをかたきよろこびさわぎてたちまちに千兩をあたへつをこがましくはおぼえながらし

るべして此所に行むかへるに杵舊子をうちいだきてあきれたるけしきにてゐたりかたきこれを見ていつしかころさんとするに杵舊さけびていはくおろかなるかな程嬰むかしのおんをわすれてもろともに人となさずといふともいかでか千々のこがねにふけりてひとりの子をばころすべき今我をうしなはんことは其いはれなきにあらずいとけなき子におきては何のつみかはあるべきねがはくはいけよとさけびけれどたちまちにふたりながらころしつその後誠の子をば程嬰とりて山の中にかくせりとし月をふれどもかたきうたがふ心なければ又其わづらひなくて十五年になりぬその後主人やまひにわづらひ給ていと大事におはしけり此事をうらなはしめ給ふにつみなくして罪をかうぶれる人のたゝりとうらなひ申けり趙朔をほろぼす事はまたく我心よりおこらずたゞ屠岸賈みづからのいきどほりによりて世をなきにしなしてふるまへるゆゑに我今此やまひをうけたり天の下にあるじとして（頭注云一國の君たかく天下にあるじとしてとはいかゞ）あるまじきことをするものをしりぞけぬはもはらわがとがなりしかればいかなる事をしてかこのやまひをやむべきとのたまふに韓厥といふ人よろづにくらき事なかりければはからひ申ていはく趙朔がのちをつかはせ給ふべし十五になる子ひとりたひらかにて侍り事の有様をばこまかにしらせ給はずやと申けりあさましとおぼしてたちまちにめしとりて見給ふに昔はかなくなりしおやにつゆばかりもたがはずにたりけるをあはれにいみしくおぼしていつしか父のあとをつがせつかさくらゐ身にあまるほどになりての後本意のごとくおやのかたきをほろぼしうしなひつさるべき事にや有けん何事につけても世にもちひられ人にはぢられて廿にもなりぬれば程嬰心やすくおぼえけりかくて後このあるじにいとまをこひていはく我ははやくしに侍りなんといふ時にあるじ物おぼえず心あわてゝこはいかにといふに程嬰がいはく我むかし杵舊にちかひきやすきにつけてまづしなば。恩のふかきによりてかたき事をとげてかならずむくゆべしと申きしかるを我いましなずは杵舊にそらだのめするにあらずやかしこき人はいひつる事をたがへずとばかりいひてつひに我身をさしころしつ此時にあるじあやなくお

ぼしてかゝる事をみながら世にあらむことははぢなりとおぼえけれどむなしくちゝのあとをたゝんことはほいならずおぼえければ命をばすてずしてふぢの衣をぞ三とせまでぬがざりけるなげきかなしむこととし月をふれども更におこたらざりけり「思ひしる心はたれもふかけれどかゝるためしはまたもあらじな此つかはれ人二人が後の事より外のいとなみなかりけるも誠にことわりなりあるじの名をば趙武とぞいひける

〔第廿二〕むかし平原君と聞ゆる人三千人のつかはれ人をあつめてこれをあはれみねんごろに思ひけるにこのあるじのおもひづま(寵姫)高き樓のうへにゐてよもを見わたしけるにあしなへたるものゝはふ〳〵ゐざりつゝ水をくみに行けり左右の膝よりもかしら猶ひきいりて人のすがたにも似ずよにをかしげなりければ此をんな思ひわくかたもなくてうちわらひてけり此かたは人わらふ聲をきゝて我かゝるやまひにわづらひてとし月久しくなりぬ今はじめて人のわらひあざけるべきにあらずこれひとへに君の色をたのみてつかはれ人をかろしめ給ふゆゑなりもし我すてゝぬ御心ならばわらひつる人をうしなひ給ふべしとしひてあるじにうれふるにおのれがいきごほりをやむべしとはいひながらさすがにあるべくもなきことなればその後月日をふるに三千人のつかはれ人やう〳〵數すくなくなりゆくを我いさゝかもあやまつことなししかれどもうらみをいだきてのがれさる心しりがたしとおの〳〵にいひくだしけりこのなかにことにつまびらかなるもの申ていはく君このかたは人をすかし給へりこれ我らが身のうへにあらずやもしかくのごとくならば何をたのもしとおもひてか身をすて心をはげまして君につかへ奉るへきといへりあるじこれを聞て淺からぬとしごろのむつましさをもかへりみず此女をたちまちにころしてけりかたは人これをみて心ゆきぬ又その外のつかはれ人どももとのごとくかへりにけり「思ひきやたゞうちゑみしことのはのしでの山路にちらむものとはあしなへたるつかはれ人ひとりにかほうつくしき人をかへけるもいとなさけなきしわざなりやおほかたこれ。ならずから國のならひにてあやしきものなれどもいひたちぬることを帝もその心ざしをばやぶらせ給はぬにや

〔第廿二〕　むかし楚莊王と申人群臣をあつめてよもすがらあそび給ひけりその御かたはらにあさからず思ひ聞えさせ給ひつる后さぶらひ給ふを人しれずいかでかと思ひ奉る臣下有けりともし火の風にきえたりけるひまに后の御袖をとりて引たりけるをかぎりなくいきどほり深くやおぼしけん御手をさしやりて此をとこのかうぶりのえいをとりてかゝることとなん侍るはやく火をともしてえいなからん人をそれとしらせ給へと申給ふをみかどもとより人をあはれみなさけふかくおはしければともし火消たるほどにこれに侍る人々おの〳〵えいをとりて奉るべしその後火はともすべしとのたまはするに此をとこ涙もこぼれてうれしくおぼえけりかくてともし火あきらかなれごたれもみなえいなかりければその人と見えざりけりかゝれども此人いかなるわざしてか君のなさけをむくい奉らんと心のうちに思へりけるにあるじかたきの國にせめられてあやふきほどにおはしけるを此人ひとり身をすてゝ戰ひければあるじかたせ給ひにけり此ことを思はずにあやしくおぼして其ゆゑを尋ねとはせ給ふに此人申ていはくわれ昔后にえいをとられ奉りて思ひやるかたなく侍りしに誰となくまぎらはし給ひし事我今にわすれはべらずとなく〳〵申けり「なさけなきことのはならば今までに露のいのちのかゝらましやはあるじこれをきかせ給ふにもなほ人としてなさけあるべきことにこそとおぼしけり

〔第廿三〕　むかし後漢のよに荀爽といふ人有けり心かしこくかほうつくしきむすめをぞもちたりけるみめこゝろのたぐひなきのみにあらずざえ才學ならびなくてせぬわざなかりけりこれを父母もいつきかしづく事限りなしかゝりければたかきいやしきさながら心をかけてねむごろにいざみいはせけるなかに隱瑜と聞ゆる人心にたれることや有けん此娘にあはせてけりをとこ心ざしふかくて又なきものに思ひけるもまことにことわり深く見えけりみとせばかりになりにければ月日のすぐるまゝにはいとゞたぐひなくのみおぼえてさま〳〵に淺からず契りおきけることどもあまたゝびになりぬかゝるほどに此をとこ病にわづらひて後いくほどなくてつひにはかなくなりぬ女のけしきあるにもあらずかなしびのあまりにや命もたえぬとぞ見えけるよそに見る人さへいとはした

なきほどにおぼえけり月日はあらたまれども別れの涙はかわく時なかりけり父母いかにして「わするゝくさのたねをだに（頭注引試云伊勢物語讀人不知「いまはさてわするゝ草のたねをだに人の心にまかせずもかな」）とりてしがなと思へどさらにかなふべくも見えず此時におなじ里に住ける郭奕といふ人よにとりていやしからず時にもちひられたり此をおこおもひのほかにとしごろすみわたりける女はかなくなりてなげきやう〳〵おこたるほどに此女をあはれいかでかとおもふにたへぬけしき色にいでぬこれによりて父母わづらひなくゆるしてけり此女かなしと思ひてさま〴〵にあるまじきよしをねんごろにいひけれどおやの心にしたがはぬはかぎりなき罪とはしらずやみづからの心にこそふさはしからずは思ふともいかでかおやのほいをばたがふべきなど猶いひけるにむかしのをとこよりもいけるおやの事はおろかにおぼゆることわりにまげてなまじひに出たちつゝ今のをとこのもとへゆく〳〵も袖の雫かわくまもなかりけりかゝりけれどもをとこの家ちかくなりにければいろかたちをあらためてよろこびたるけしきになりぬ車よりおりつゝなよらかにあゆみいりて帳の前に火しろくかきたてゝうちゐたることがらけしきを見るにうれしくおぼゆることかぎりなし又物など見たるうちいひけることのはにつけてもはづかしくつゝましくのみおぼえてたちまちにまちかくよるべきこゝちもせずおくせられてやゝ久しくなるほどにかねもなりやこゑの鳥の聲々鳴わたりぬれば此女何となくすべき事有がほにもてなして身したしき女房ひとりふたりをぐしてはしのつま戸のうちに入ぬかくて後いたくうちなきて女房にかたりていはく我むかしの契りを思ふに時の間もたへしのぶへきこゝちせずさりながら親にそむける罪をおそれてなまじひにこゝまでは來たれどいきながら二人の人に契りをむすぶべきことわりなければ今はかぎりの我身とはしらすやとて「親にこそそむかぬ道にいりぬともふるきちぎりをいかゞわすれんいきてはひとつ床のまじはりたゆる事なくしなば又をなじつかの塵にもなりなんとちかひし事は中有のたびの空にも思ふらん我も又忘れめやといひはつればはらうたきまなじりよりくれなゐの涙なかれ出るけしきまことににほひことなるやへ紅梅の春の期の雨にしほれてよそほひさびしき

にかよひたりかくてしはしばかりあるに身の有様をや思ひさだめけんゆびよりちをいだして妻戸のうちにかきていはくわがかばねをば隱瑜がはかのかたはらにおけとかきつくるに人のけしきのしければさわきてはてのもじ二三をばかきさしつみづからの帶をときてくびをひきまとひてみづからはかなくなりぬ「くれなゐの涙にまがふみづぐきのすゑをだにこそかきもながさねしばしあればたえいりぬ女房かへてなきをれどもいふかひなしかくて明ぬればをとこ入來てみるにいかゞおほえけんしばしばかりしに入ておきもあがらず「我さへやしたひやしなん契りける人ゆゑ人のたゆるいのちに時の人々かなしみなきけり此女は穎川の荀爽かむすめ南陽の隱瑜が女なり今のをとこは太子師郭奕といふ人なり

〔第廿四〕　むかし上陽人上陽宮にとぢこめられておほくの年月をおくりけり秋の夜春の日あけくれ月の光虫の聲より外に又さしいりおとなふ人なかりけり嵐にたぐふ紅葉のにしき百さへづりの鶯の聲もわがためはいとなさけなきこゝちす夜のあめまどをうつおとにもうれへの涙いとゝまさりけり「いとゞしくなぐさめがたき秋の夜に窓うつ雨のおとぞわりなき此人むかしうちにまゐりけるにその姿はなやかにをかしげなるをたのみて楊貴妃などをもあらそふ心や有けん一生つひにむなしき床をのみまもりつゝはなのかたちいたづらにしをれてぬば玉の黒かみしろくなりにけり

〔第廿五〕　むかし漢の元帝と申みかどおはしましけり三千人の女御后の中に王照君と申人なんはなやかなる事はたれにもすぐれ給へりけるを此人帝にまぢかくむつれつかうまつり給はゞわれらさだめて物の數ならじとあまたの御心にいどましくおぼしけり此時にえびすの王なりけるものまゐりて申さく三千人までさぶらひあひ給へる女御后いづれにてもひとりたまはらむと申にうへみづから御らんじつくさん事もわづらひありければそのかたちをゑにかゝせて見給ふに人のをしへにや有けん此王照君のかたちをなん見にくきほどにうつしたりければえびすの王たまはりてよろこびゝらけつゝわが國へぐしてかへるに故郷をこふる涙は道の露にもまさりおやはらからにたちわかれぬるなげきはしげき山の行すゑはるかな

りかゝるまゝにはたゝねをのみなけども何のかひかはあるべき「うき世ぞとかつはしる〳〵はかなくもかゞみのかげをたのみける哉あはれをしらずなさけふかゝらぬものゝふなれどもらうたき姿にめでゝかしづきうやまふことその國のいとなみにもすぎたりかゝれどもふりにしみやこをたちわかれにしよりけふにいたるまで事にふれをりふしにつけてうれへの涙かわく間もなし此人はかゞみのかげくもりなきをのみたのみて人の心のにごれるをしらざりけり

〔第廿六〕 むかし潘安仁と申人有けり姿あり樣たぐひなくなまめかしくきよげにてそのかたちは玉なぞの如くひかる樣にぞ見えける秋のあはれをのべて賦につくり事にふれてなさけ深くやさしかりければよの中にありける女さながら名をきゝかたちを見るより下もえのけぶり絶る時なかりけり車にのりて道をゆくに道にあひける女思ひのあまりにや橘の枝をとりて車の物見よりうちいれけり人ごとにかくしければくだものくるまにあまりにけり「めぐりあふこともありやとからくるまつみあまるまでなれるたちばな

〔第廿七〕 昔みやこに人のむすめ有けりみめかたちなまめかしくうつくしかりければあらき風にもあてずして深き窓の内にかしづきやしなはれけりよはひやうやう人となるほどに父はゝ世にあらん事をかせぎ頭注云世わたらひのわざを俗にかせぎといふこと西行法師の撰集抄にも見えたり此程の俗言にやいとなむ此人これを聞てうれしからずいとはしき樣になんおもひけるを父母しひてうらみなげきけり我もしさる事あらばたゞ家をいでかざりをおろして世にもあらじなどまめやかにうき事にいひけりしたしきあたりまでもかぎりなく思ひなげきけれども心づよく思ひ立にけりつひにめのとごなりけるものひとりをぐして何方となくうせにけり此めのとごもかたちいとをかしげにて思ひはなつ人なかりけれども此人とおなじ心にて人に見えん事うるさしとや思ひけん鳥の聲もせぬ深き山の中に入ておの〳〵草の庵をひきむすびつゝ住わたりけるほどに此女の父母二なき心ざしばかりをしるべにて山はやしをわけつゝ尋ね來にけりうち見るまゝにちの涙をながせどももろともにたちかへるべきけしきさらになし誰も「子を思ふ道はま

ごはぬ頭注引歌云後撰雜一兼輔朝臣「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな人なければさるべき物などねんごろにいとなみやりけるを猶うるさしとや思ひけん又すみかをあらためてほかへにげ〔逃〕うせんなどいひければたゞ二人の心にまかせてすぐさせけるほどにまだらなる犬のうつくしげなるがいづこよりとも見えず此めのとの〔ごイ〕いほりの前に尾打ふりてゐたりけるを物などくはせてなできようじけるに隨ひて此犬ことの外に馴むつれけりつれ〔與〕づれなるまゝにふところになどうちふせてたゞこれをあいしもてあそびつゝあかしくらしけるほどにいさむつかしく心みだれてあらぬすぢにのみ物のおぼえければ此犬にうちとけにけりさるべき前の世の契りやふかゝりけんいぬのおもはしさ限りなくおぼえけるを我ながらあさましく心うくぞ思ひしられけるかくてしゆう〔主〕のゐたる所へ來てきしかたゆく末の事など打かたらひつゝゐたりけるに夏の衣くもりなくすぎたるより此めのと子のかた〔肩〕にいぬのあしあとあまた〔透〕つきたりけるを此人見つけてけりそれはいかなる事ぞとたづねとひければありのまゝにいはんも心うくけしからずおぼえて何かといひまぎらはすをしひてせめとひければあらがふべきかたなくてわがゐ所をさりげなくて時々見給へとをしふるをあやしと思ひながらその後はつねにうかゞひ見るに打たへて頭注云うちたへてはうつたへと同語なり打は詞たへは堪也ひたすらにといふに近き詞也新古雜下慈圓「打たへて世にふる身にはあらねどもあらぬすぢにも罪ぞかなしき此いぬとふたりねたり此人これを見るにたふべくもおぼえずはべるをまづは心もとなくわびしかりければたちまちにそのいぬをよびとりてあひにけりおもはしくかなしくぞおぼえける「あさま〔漢故兎〕しやなどけだものに打とくるさこそむかしの契りなりとも頭注引歌云續詞花戀上心ならず人にしたしく成て和泉式部「これもまたさぞなむかしのちぎりぞと思ふものからあさましきかな千載戀四これもみなさあり人の身にして犬に契りをむすびけるたぐひなきほどの事なれ〔ど歟〕ば物の心をしれらん人はうとむべからずいかばかりかは此道にいらじと思ひとりしかど契りのふかきにあひぬればかしこきもはかなきもさながらのがれがたきことにやこのいぬの名をば雪々〔惣〕とぞいひける

取替はや物語

今取替はや物語とみへし亡友伊藤五郎直方の本には他本を校して今の字を補入す九冊にて上中下三巻なり毎巻三冊つゝに裝潢したり

第一第二此二巻を上巻とし
第三此一巻を中巻とし
第四此一巻を下巻とし

取替はや物語考證

岡本保孝稿

第一

ふえふきうたうたひなとする三ォ　うたナシ一本　一本わろし下にもうたうたひと云語あり

わか君（めか）ひゐきみとそきこゆなる四ウ　誤字此わたりあるへしこゝより下はわか君をひめ君とよひひめ君をわか君とよふよしをいふことゝはきこえたり

あふきをひろけ五ォ　源氏わか紫八ウ　かみはあふきをひろけたるやうにゆら／＼として

源氏わか紫八ウ　かみはあふきをひろけたるやうにゆら／＼としてコヽニアタリテカヤウニカケルなり

しろくおひたゝしく五ウ　誤

櫻の御そのなよゝかなる六はかりに蒲萄染のおりものゝうちきあはひにきはゝしからぬを着なし給へる人からに　さくらさえひとは取合せにつかはしからぬものにや可尋もし　はにきはゝしきの誤かさては人からの上にいさゝと云詞を含めてみるへし

あまなと にて六オ　男君なれと女飾にて姫君とよはる
る故にゆく〳〵は入道してあまになしてかしつか
ましとおほしよる也

又こゝちもかきみたるやう六ウ　姫君かわかきみのま
ねをなしわか君は姫君のまねをするによりて也

きくら山ふきなと これは六ウ　これは若君をさすなら
んさくら山咲なとゝ云詞なにをさすにか

あふきをひろけ たらむやうにて七オ　上文五オ　あふき
をひろけたるなとこちたくいひたるほとにはあら
てとあるに今かやうに云はいかゝ但こゝはわか君
實は女の容儀なれば髪のおほきを自然褒美の意ある
によりて也上文は姫君實は男のとなれは髪のこちた
きも詮なければ程よくなつかしきまてにいへるな
らんか矛盾にはあらじ

今すこしいひ所あるとも七ウ　誤

うと〳〵しからぬはねちけたれとさすかにかたはら
いたく九オ　うち〳〵にて腰結はめつらしけなければは
名高き人にたのむへきを也そのめつらしけなきを
ねちけと云也他人にてはさすかに也男女とりかへ
てあれはこしゆひ給人に對してかたはらいたしと
也此こしゆひを他人にたのまさるは取替てある故
ならんときこゆれとわか君の引入は御伯父の右大
臣にてわか姫君を下文十五ウ　此わか君にゆるさんとい
ふことあれはその實は右大臣もしらぬなるへしし
たしく引入腰結なとしても男女とりかへてあると
のしれぬものならんには名高き人をたのむへきを
いかゝ

春宮は二十七八十一オ　女一宮にはあらす朱雀院の春
宮也下文十一ウ　内春宮にをとゝみこおはしまさぬ
よしあるもおなし

一の人の御むすめならねは后にもえゐ給はす十一ウ
榮花物語根合二　一の人の御むすめならぬ人の御
子おはしまさぬかならせ給例はまたなきことゝお
ほしめしてせさせ給はぬなりけり内大臣通教女生
子ヲ後朱雀帝ノ后ニシタマハヌ處ナリ

よからぬ身を十二ウ　侍従の心也男女とりかへて居を
不レ善といふ也

なにかはめのとまらん　侍従の目にとまらぬを云な
り従來女なれは女にめのとまらぬなり

書つくしいられわふれと十三オ　下文十四オ　涙もつゝます

うれへトアルコ、ノコト也
かゝれはいとうちとけむつひくれす十四オ　侍従實は
女なれは也うちとくれは女なることしらるゝ故也
うちいつることには人の御身のよつかさりけることの
みしらるゝに　式部卿ノ宮ノ子ノ打出ル也人ハ姫君
ヲサスコノ處ニ誤字ニテモアルニヤ又オモウニ人
ノ身トハヤカテ侍従ミツカラノコトニテカヤウノ
コトヲイヒカケラル、ニ付テ先ミツカラノコトヲ
歎カル、ニヤ
たくひなくうき身を　侍従の歌にておのれの身をた
くひなしといふ也されと式部卿宮の子ほとにはな
かれさるをいふ
右大臣殿の女御云々十五オ　の°ハ°はノ誤歟モシ誤ニア
ラサレハのノ字ニテ讀キルヘシ
あやしなとおもひと かめいふへきならす十五ウ　實」は
女なれはあやしとおもふへきことなれともこめか
しき女のことなれば詞にはそのことを出へからす
と也
かた〳〵つくしつる心のひとかたは十六ウ　左大臣右
大臣ともに姫君うつくしとてかた〳〵に心つくし
たるなかに右大臣の姫君は權中納言によすかさた
まりたるなり
しほやくけふり　古今戀四「すまのあまのしほやく
けふり風をいたみおもはぬかたに棚引にけり
おもふほとよりはとみれと十七ウ　右大臣のかたにて
中納言のことを不足におもふ也
かやうのましらひ十八オ　中納言の意に姫君かかやう
にわかごとく世にましらひて宿直なとをなさはな
り
ほうらいとうの月十八ウ　朗詠菊蘭 蓬莱洞
月照霜中
いまはたゝひとかたに　右大臣の四の君はすくせさ
たまりたる故に也
きゝまとひ　巻二八ウ　めつらしういみしきにさへきき
まとひ
ぬきかけて　下文五十五オ　くれなゐのうちたるぬきかけ
て
をのこの身にめてたく十九オ　宰相の 心也身にたにと
ありたし
わか身になりてきこえあはせたらんにしかやすかり

ぬへき御心なめり廿オ　宰相のとりもちをせんといふ
故に中納言の身になりて宰相のはからはんにはい
とやすく成就せんと也やすかりぬへき御心とは事
もなくなしうへきあた〳〵しき御心ならんとたは
ぶれて中納言のいふ也
おもひのほかにめでたき廿二ウ　中納言も實は女なれ
とかやうにてすきゆけば姫君も實は男なれと此例
をおもへは皇后になりてもおもひのほかにさいは
ひもあらんか也
わらはしもつかへ八人　四十人にくらへては八人に
ては少きやうなれど他例可考
中院廿四オ　拾芥抄中末諸名所　中院六條北烏丸西
ひのくま川　古今大歌所「さゝのくまひのくま川に
駒とめてしはし水かへかけをたにみん
こやかたきのすり衣也廿五ウ　女ノ初ノ歌ノ詞也
さらぬかきませのほとは廿六オ　その時にほかにも男
ある時也おのれ一人に引うけさる故也
うへたちの御いとみ心のなごり廿六オ　母たちの御い
とみにつれて中納言も内侍督もうと〳〵しかりき
となり

宣耀殿にまゐり給へれは廿六ウ　左大臣のまゐり給ふ
なれは大殿とかとのとかいふ詞あるへき也
そりはし　御庭の池なとに有へし源氏藤のうらはみ
ちのほとそりはしわたとのには錦をしき
しのふへくもあらねと廿八ウ　とハはノ誤歟
おしひらきて云々　催馬樂東屋「東屋のまやのあまり
の雨そゝきわれ立ぬれぬその戸ひらかせ　同我家
とはり帳をもたれたるを
いそうつなみ廿九ウ（は一本）　詞花戀「風をいたみ岩うつ波の
おのれのみくたけて物をおもふ頃かな
さならんかし三十オ　中納言北方ならむと也
しほやくけふりに　はしめわれも心つくしたる女な
り上文十六ウ　かくしほやくけふりと
春の夜もみるわれからの卅ウ　此歌風葉集卷一春上に
題しらす今取替はやの太政大臣四君とて入
孝云右大臣四君也風葉集に太政大臣といへる不審
なりもしは今本の今取替はやは風葉より後に書た
るものにか後撰春「あたらよの月と花とをおなし
くは心しれらん人にみせはや
あふ人にしも卅二オ　古今戀三「なかしともおもひそ

三はてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは
みくら山の四六帖山「わか戀はみくらの山にうつし
てんほとなき身にはおき所なし
一月ころのものおもひにウ卅三　二月ハ年ノアヤマリ也
次下にもとじころものゝトアリ
ありしよのほとにこそ中納言もウ卅四　宰相のはしめ
てあへるよのけしきにて考ふれは中納言も初枕の
程にはうれしく涙にもしつむへき也女のさまい
とめてたく云々也かやうのかたト云ヨリ中納言ノ
心ヲ察シテ云也あいきやうつきなからトハ女君は
めてたく有なから中納言ノかやうのかたハト也
おもひ出給はんおもひやるにウ卅五　給はんとト有へ
し
みるわれからのとト上文ウ卅　權中納言北方春のよも
みるわれからの月なれは
さとのしるへウ卅六　手引ヲスルコト也
ゆつか聞えてしみやことり　誤字アルニヤ
わたくしの心さしそへられしとにや　別におもふか
たの出來たるにやこゝにうとくしきよし也
なほ例ならすけなりウ卅七　けなりト一句キリテ讀ム
ヘシ殊ケ也
たきのよどみ　古今戀一「瀧つ瀨の中にもよどはあ
りてふをなどわか戀の淵瀨ともなき
いたくみたれぬほどのけしきにてオ卅八　宰相の様也
一說中納言のさま也ルケシキヨリ隔句ニつらくト云ニカヽ一說ナレバ此上ノ句いまのみや御覽
するとき云ヨリつらくト云ニカヽル
かへり出給夕暮の云々　中納言のさま也
みしられゐはすもあらすウ卅八　女君は宰相の意のほ
どをなり
かへり給へてもウ四十　右大臣わか居給ふ方へ也
ゐひてトアルヘシ
大將女御　大君と中君と女御にて物し給ふをいふな
れど誤字ありて聞えず
そのとなくかきりはウ一四十　中納言の心になんそ一事
なき時は也
たゝはゝうへの人におされぬ云々　中納言の母のに
中納言が人におされて勢のあるを面目におもひて
居給ふをもし隱遁にてもすれは母君を見捨てる事
になれば也
いかなるやみにかまよひオ二四十　後撰「人のおやのこ

ゝろはやみにあらぬとも

かくて有なからいまたさりける　ふりハしらノ誤歟

なそや四十四オ　歎息ノ詞也下文四十七オ　なそやいとうき

世の中に御心のすむにまかせて一本闕字とちあけて

一本に闕字あるはこゝに經文あるへき也其文今し

られす

したにめやしき四十四ウ　懷姙の事

あやしくもありけるかな四十五ウ　男ト云フモノハ中納

言ノヤツニノミハアラヌモノト女君ノオモハンニ

トナリ

なかのうとくもと　下文六十オなかのうとくもといふ

やうに

大殿うちの御とのゐ四十六オ　中納言の父の御もとや內

やの御とのゐにてとかくに北方に夜居勝なるをい

ふ

中納言のさりしから。。によつれから。。に　からト云詞重

りて耳立也誤字にても有にや

心さしふかし四十六ウ　四の君に宰相が也

この人はかりこそ云々　誤字あるにや

おやの御おもひ四十七オ　上文四十一ウ　たゝ母うへの人おさ

れぬ云々

みえぬ山路　古今「よのうきめみえぬ山路に

うとくそうとて十二年に一度　故事可尋　有德信歟

おしあてに假字をもしはらくしか書付おく

人のようめこんしやう四十七ウ　容面根性也

ほとなくうちうきり女二人　打しきりノ誤歟

させまつ四十九オ　濱松中納言物語にもみえたり出典未

考

おもふかたの風　濱松一「あらき浪風にもあはすお

もふかたの風なんことにふきおくるこゝろして

あらぬよのさかひになりてしもけふり　シモハ物ヲ

ツヨク云詞也けふりハ北方をさすあらぬよハ唐土

ト日本ト堺ヘタヽレバ也誤字にてもあるべし心ゆ

かぬ也

からくにのほんたい　本臺也北方ノ事ナルヘシ

それをうらむべき故ある身かは五十四オ　わかつまのあ

たし心あるをうらむも此方に黠うたるゝことのな

きならはよし今われは女なれはしらぬさまをする

なり

ぬきかけて五十四オ　上文十八ウ　くれなゐのつやこほるは

かりなるをぬきかけて
人めき出賜はんしるへ五十五ウ　上文五十　聊も人めき出賜ふみちのしるへ
かみをきはむへきちきり五十六ウ　後に此中納言女にかへりて后に立給ふ事あり
なかのおもひ六十オ　源氏胡蝶えしも打出ぬ中のおもひにもえぬへくわかきんたち河海にさゝれ石の中におもひは有なからうち出るとのさもかたき哉
いまひとりたくひあること六十一ウ　中納言を兄弟の数にいれて両人を三人とおほせと也
いかて見しり給はぬ人のあらん六十三オ　他より云也権中納言のすき〳〵しき事のなきを也中納言のなさけを也
人のありさまを見しり　人は中納言也見しりは宇治のひめ君のみしり給はぬ也
おとにのみ六十五オ　御とのゐのものなれは風の音のみさむけくてあたゝか也
あたかにて、あたゝかのアヤマリ也
なかのうとく六十九オ　上文四十五ウ　なかのうとくもといふやうに

かゝみのかけ六十九ウ　鏡にむかひおのかうつくしきかけをしりてかゝるうつくしさにて世にたかひたる男を（中納言其實ハ女ナレハ）持て世をすこす事かとすくせをうらみても也四の君かかゝらましかはなつかしうあはれならましと中納言のおもふ也
われよりふかく　宰相を也

第二

御恨さへとくるよなき一オ　中納言のよしの山をふみなるし給ふは北方をうらみ給ふによりて也そのこその御うらみとくる世もなき程に也
行末かみなくおもひやらるゝ　后に立給ふ事のあらんを也
とりはやし一ウ　うまれ給ふひめ君を也
こよひゆくてなとして三ウ　誤
菊のうへおほえて四オ　臺所は皆白き装束也よりてこもかの君も菊のきせわたに似たるをいふ
いとふかくはおはせぬおりと五ウ　誤字
なまこゝろおとり　宰相のうれしなから北方の女房なとを也
いとはつかしき人をかつす六オ　誤字あり人は宰相を

さすをはのの誤ならんか

心をなくさみて六ウ　なくさめて歟

ひとつことのみやはある　中納言の北方はかりにおもひのとまるにはあらて宣耀殿にかゝつらふ也

人に心おかるゝ　人は中納言ヲサス中納言に心おかるゝふるまひ也四ノ君ノコト　内侍督にしたしうならは四の君のこひしさものとめらるへき事と宰相のおもふ也

なしつほ七オ　東宮ヲサス

よろつわすれたり七ウ　かんの君にあはんとおもふはかりにて萬の事は也

そひえ　元來男子ナレハ也

しかのうらを八ウ　後撰戀三「みるめこそあふみの海はかたからめ吹たにかよへしかの浦風

きゝまとひ　巻一十八ウ　この聲をきゝまとひ

あやにくならんも　誤字か

みなれそなれて九ウ　句源氏松風七オ　たゝあたにうみる人のあさはかなるかたらひにみなれそなれてわかるゝ程はみならさめるを

みたれまされは　みたてまつれはの誤か

まくらより　古今まくらより跡より戀のせめくれはせんかたなみにとこなかにをる

かた／＼のかたみ十オ　一人は中納言の北方一人は中納言の娣かれにもこれにもかたみなれは也

このわたりにも十二オ　權中納言の心なりわか北方にも也

あひてもあはぬ戀云々　中納言ノ意ニ宰相ノ所業ヲオモフ也内侍督なとに逢てもあはぬ戀といふものなるへし夫れ一つにもあらすまたわれにもかくむつるゝをいふ也ソヘテト云詞心ユカス

逢ての戀と十二ウ　逢ての戀とはわか北方に宰相のあへるをいふあはぬなけきとはわか娣の内侍督にいまた宰相のあはぬをいふはやくあひたるかたや戀しさのまさらんといさゝか宰相をうらむるさま也

結局たハさノ誤カ　とりこめたてられては十三ウ　巻四十三ウ　中納言にとりこめられてはのかれやり給はさりしを

れいのまつうちゑみて十五オ　此ノ句ノ上ニ脱文アルヘシ上文十三オ　殿のおまへの給ふ事あり云々トアルニヨレハ宰相ノカヘリタルアトニテ父君ノ所ニ

行シ也
わさとまりてきたりつれはときこゑて　昨夜は右大
臣の家にまかりてこゝに侍りきと申也
うのけひき返事十五ウ　の゜ハ衍文なるへし
人てこにしぬる〳〵　中納言の北方にもかんの君に
もしかの給ふ故に也
のかれやらん十六オ　けしからん事あらんとの心もち
ひ也
かなしうわひき十六ウ　以上宰相ノ意ナリ
もろこもならん十六ウ　中納言にも中納言の北方にも
宰相の逢たる故に也
たちかへる心ちも十七オ　詞たらぬこゝちする也誤字
にてもあるにやしひてきこえぬにもあらねと心ち
もの下になくトアリタシ
御前にめしあれは十七オ　内侍督に心かけ給ふ事巻一
十一ウにいつれも（内な春宮さ也）御心をかけておほせことあれ
とトアル合せみるへし
けちかくならしては十八オ　中納言の心也内侍督のコ
トニハアラス帝にわか身の也
宰相はわかやうに　此の時宰相も大内に有て物のか
けにてかくおもふ也
かうてみ奉るこそおしはなち十九ウ　誤字アルニヤヨ
クキコエス
忍わたり　北方へ宰相のかたらひつきしこと也され
と誤字にてもあるにや
たちはなれたちぬれは廿ウ　下ノタチノ詞いう衍文
歟
よのつねの事と思へと廿一オ　誤かオモハ子トト有た
し
なからすきは　ナカラハ半分也十分ノ心ヲ六ツ七ツ
ハ中納言ノ方ニ宰相ノ心ヲ分ケテ也
れいの月ことに廿二ウ　巻一十七ウ　たゝ月ことに四五日
そあやしく
いくよしもあらし廿二オ　古今雑下「いくよしもあら
しわかみをなそもかくあまのかるもにおもひみた
るゝ
れいの人は心ならぬなけき廿三ウ　誤有へし中納言
ノ北方ヲサス
わかものにみまはしき　誤みまほしき
かくてのみは廿四オ　男ノスカタニテ居給フテハ也

しのふる人もいと有しやうにはいられす廿五オ　人ハ
宰相也宰相ハ中納言ニカヽツラフ故ニ也いられは
居歟入歟下文廿六ウ　わか身をもてかへていりゐな
んよなと

おとなしのさとに廿六ウ　實ノ地名ニアラスはひから
れて世の音信をたつよりいふ也下文廿八ウ　六條わ
たりトアリ

ゐしもる事とまりて　月事也

おほよど廿七オ　伊勢物語七十五段「大よどのはまにおふて
　ふみるからにこゝろはなきぬあたらはねとも

しのひまきるゝ卅一オ　上ノ女君にト云詞コヽニカヽル

あまたになりにたる　宰相の子二人也

この世はかへつることにても　誤

さま／＼に契卅二ウ　此下句誤有へし

冬の夜ふかくねはさひし卅二ウ　引歌有へし今考えず

うれへかけつと卅三オ　中納言ノ身ニメイワクヲカク
ル也

なとおもひなけきても云々卅三オ　此あたりに誤ある
にや

世のきはなり卅五ウ　誤

えやなからへ卅七オ　や文字衍文歟

これもいと人にすくれ卅九ウ　誤脱有へし

上にきるさよの衣の卅九ウ　上にきるは右大將ヲサス

やみはあやなし四十一オ　古今

那へてかたきの　巻一廿五オ　あふことは那へてかた
きのすり衣

さしもやはと四十一ウ　右大將ノ意ニ久シクタエタルコ
トニテハアリカタ／＼返事スマシキ事トオモヘル
也

おなし心なりけるも　誤此のあたりにあるへし立ヨ
ルハ同シ意ノ故ニハアルマジキ也立ヨリテヨリ山
ニ入ルト云歌ヲキクニアラスヤイカヽ

第三

むろのとほその所さきまてひめきみたちの御うへま
て三オ　まてト云詞ウルサキヨウナレト両脚ニいたら
ぬ事と云ニカヽルナリ

かきりにつきぬるいのち三オ　聞えぬにはあらねとも
しは下句ノカキリニと云詞ノコヽニウツリタルニ
ハアラヌカ

御くすり四オ　下文十二ウ　よしのゝみやのとらせ給

へりしくすりのなかに
おもふ心のつゝからに四ウ　われ遁世せんとおもふを
いふ
うきもうからす　北方の密通の事
人こそ人には　上ノ人ハ女君ヲサス下ノ人ハ中納言
ヲサス
こよなくおぼしおとすへかめれ　大將ヲオホシオト
ス也此ノ句ノ下ニド我ハといふ詞を含めてみるへ
し
中納言にさらにおもひおとされぬ五オ　ぬは不の意中
納言のことによりても北方をあはれとおもふ心は
かはらさるよと也
これこそかきりなめり五ウ　りはれの誤
人しれぬをそて六オ　巻二卅九ウ　上にきるさよのころも
の袖よりも人しれぬをはたゝにやはきく
けふはちゝへもまなうし七オ　誤
つねよりもひきつくろひ云々　上ノ句ニ内侍督の御
かたにこそ参り給フト云テコヽヨリその参給はんと
する時のさまをいふ是文法也ちかくは源氏桐壺の
巻にも此の例みえたり

うちへ参りて云々　内に参りてさふらひぬへく事な
くはさふらひ又さふらはすともよくはやかてまか
てん時宜によるへしと也
すゐちくの七ウ　朗詠藤紫藤露底殘花色翠竹煙中暮烏
聲
おもやせしかしと九ウ　誤あり
なつかしくみゆるをよつかさける十オ　よつかさりけ
るトアルヘシ
たちはなれくるし　くるしはかたしと同意也
とよらのてら十一オ　催馬樂かつらき
よしのゝみやのとらせ給へりし云々十二ウ　上文四オ
よしのゝみやよりくすりおくられたるとあり
れいも月ごとに五六日十三オ　巻一十七ウ　たゝ月ごとに四五
日そあやしく所せきやまひの
いとつらくものゝせちにおほさるゝには心上壽も
十六オ　心云々必誤寫也
いさなんさわきや　いまなんのアヤマリナラン
心のうちあはぬかゝること十六ウ　かゝるト今ひとつ
か文字有へし左衛門にあらぬ外の乳母か也
おこゝのおほさん所も十七ウ　大將の父をさす

ほかにはなちわたして　下文六十八オ　殿にかへり給ふ
事みえたり
くすりのしるしにや十八ウ　上文十二ウ　くすりのなかに
夜にみす云々
いかになくさみゆく十九オ　大將のなくさみゆく事の
なきをいふなれと猶誤字あるへし
さしならひにし　大將と中納言と也
いひはちしめらるゝ　中納言か大將に也
もていりてみを　みせノ誤也大將に也左衛門よりの
文也
御おこたりと思るそうとましきまておほゆれ　れ°は
る°ノ誤也その外にも誤あるへし
かみはいとなかくうらそへて廿一オ　そへノ詞誤アル
カ
おもひとゝめさりし御心なれ°廿三ウ　誤
たつねいへる廿四オ　いつるノ誤か
またくに〳〵の　誤
中納言こそさしも　大將は中納言にいさなはれきこと
いふとは大殿にておもひよらぬ也
とのゝむけたいたつらにならせ給ぬへき　上文廿四ウ

ほれ〳〵とふししづみけふにトアリ
所々におひたちたる廿六ウ　異母兄弟にて別々に生長
したるを云
我はたあなたのうへのものし給ひ云々廿七オ　北方兩
入別所ナルコト上ニアリ巻一オト丶ノ今ハ大將ノ
母ノ方ニ居給フニヤ上巻ニテハサヤウニモキコヱ
子ト此處ノ文義ニテシカオモハルヽナリ
いさゝかうい〳〵しく廿八オ　今マテ女飾ニテアリシ
故ニ也
この御將に廿八オ　誤
たゞありさまにてをと　誤
み奉るかきりの人あさましくとゝい　誤
りやう〳〵しうものよりけに°卅一オ　け°は殊也
內侍のかんの君かきりさおほしゝゆふへ卅二オ　かき
りは大將が也それを內侍督今おもひ出也上文八オ
宣耀殿に入り給へれは御まへに云々トアリその時
のこと也
かくと人につけはやると卅二ウ　る°はな歟
みつる事のは卅二オ　誤
さもなくはすまちわたり卅三ウ　誤

おほかたのよにそかりて卅四オ　誤
いみしかたら　らハうナルヘシ
それつれなくなからふるいのちよにありなし卅五オ
誤ありげなり
えぬある人も卅六オ　もはになるへしえぬ　トアル　面白
し他本モシカアルニヤ
うひ〳〵しきありさまそこし卅七オ　そはすナルヘシ
うちの川なに卅八オ　大將を宇治にて見かけたるをい
ふ
いとみさほしき卅八ウ　さはまナルヘシ
なしへくをりは　なしはなくナルヘシ泣也
七日の夜あふきみつけ卅九ウ　四ノ君出產の後七夜に
中納言のしのひて來給ふこと上にあり
心おちゐはてしかとさても云々　中納言の心は落居
たれと大將の身にはわか身を也
なか〳〵みしその人と四十ウ　北方をこゝによばゝわ
れをみし人とおもはんと也
ちかことをたてゝ四十一オ　上文十七ウ　ほかにはなちわた
して見きこえ給はず
うちこめきて身にかへてもそひゐ給はず　母の事な
れは父は腹たつともしのひ〳〵にも姫君に心よせ
有へきにさもし給はず俗に云ノホントシテアルヲ
こめくト云也かへてもとト文字ありたし
はらからの君たちも　四ノ君といふからはあね君な
どの有こととはしられたり上卷一九ウ　ニ大君中君ノ
事ナトモアリ
あなたつよに四十二オ　四ノ君ノ方ニ中納言ハ居ルヘシ
ト也
うちの橋守四十二ウ　古今「さむしろにころもかたしきこ
よひもや我をまつらんうちの橋姫
よるのみかそへん　衣かたしきいくよも〳〵待かそ
へんとなり
すゝろにうけ給四十六オ　うせノ誤
しる人も侍りきなり五十ウ　はへらさノ誤
人めやすくこそ侍らめの給を　らめとアリタシ
聞えて給へは五十一オ　誤
かくこそありけれとは　下文五十九オ　とのなとにはき
こえたてまつらしとの
殿は月日ころの五十一ウ　誤
かゝるおほしなけき　かくなノ誤

うちにはいつばかりにか御むかへにはきこえ給つ

五十三ウ　誤

をみなへしのうはきのかうちき　かはこノ誤ナルヘシ小袿ナラン

さかりは八尺の髪　はは濁へしさかりはト云詞源氏にもあり巻四十二ウ　うちきのすそに八尺あまりたらんかみよりも

かねてもおもはさりし人の心にもあらす五十五ウ　大將の意に也權中納言の心を汲しりてあることなれは也入は中納言をさす

たひことの御ことわり五十六ウ　上文にも俗ニ云中納言のイヒワケノアル故ニ也

すへてあかきみはやういけとさはやかなにあしらひを　此わたり誤寫あるにや

この夜中はかりになん五十六ウ　次下になんと又あり耳にたつやう也

いさとくまては五十九オ　誤

さりけりと　しかありけりとなり內侍督の心に大將の意をさつしてかやうの事ありとは父おと丶にきこえかたしとおほすを上文五十一オ　殿にもかくこそありけれとは云々トアルコノ事也

とかくおはしまさんほとも六十オ　春宮のはらみ給ひて居給ふをいふ

いまはうけはりわかものと　中納言か大將の北方を今はわかものと也されと此あたり誤寫あるへし給はんトアルヘキカ

むかしなからものゝたまひよう無　はやくより四ノ君に中納言のなれて有れは今よりも猶むかしのままにものいひよらんと也

すくせにまかせて六十一ウ　內侍督に姬君をまかする也

我あたりをはなちて云々　よしの丶みやみつから我わかあたりに姬君を遠さけて佛道を修行せんと也

これはさなへと六十二オ　よしの丶みやわか姬君たちに此度なるは眞の男なるよしをもつけしらせぬよしをいふ也

はしめのならひに　大將は元來女故におしたちたることをもせぬにならひて也

た丶ありし人なるも　もぬけの衣なれと眞に正身のあるおもひをなして也

かのわたりなりける人のみけれは六十七ウ　コレヨリ次

下人のまねひきみゆる詞也されとかのわたりと云
詞いさゝか心ゆかす
おほしたえてまえいりつゝ六十七ウ　まえは　たえの誤歟
母うへはみしと　はハいノ誤か
いつしかとのにゐて六十八オ　上文十七ウ　ほかにはなちわ
たして
まつのおもはん六十九オ　六帖五名なしむ　いかてなほあり
としらせし高砂のまつのおもはんこともはつかし
あてになさめき六十九オ　なまめきか
よしや身こそ　誤
むけにものけなきやうなり　巻四廿七ウ
かんの君はむねうちつふれ七十一オ　コレヨリ後ハヲノ
レ大将トナリテ四ノ君ヲツマトスルコト故ニ
いみしくそあはれなりけり七十一オ　けるとあるへし
むねつふれて七十三ウ　昔はおのれ内侍督なれは也
たゝひとりをとおもはくこそあらめ　四ノ君ひとり
にかきれる事ならんにはあたしき心ある女にては
いかゝなれと此方には春宮もありよしのゝ姫宮も
あれは也
又わ心に七十五ウ　上文の父の勘當うけしことにむかへ
て又といふ也
しのひのもりの
けしきはみてそ七十六ウ　今大将は初メテノ事故に也
いてやかゝれはきよくゝも七十七オ　中納言の事などを
人の云ゾト也
その末をまつもことわり七十八オ　四ノ君ノ歌に君ヲマ
ツトイヒテ其松ノ末吹云々ト云ハよしのゝ姫君ニ
カヽツラヒ給フヨトウラム也其コタヘニ我ヲマツ
ト云ハ尤千萬也其マツノ松山ニ波ヲヨセントナレ
ハ也今ハハヤ波ヨセシヤト中納言ノコトヲウラム
也約束ヲタガフルヲ末松山波コユルト古クヨリ云
故也
とけてはあるへきほとゝも七十八ウ　四ノ君ノ中納言に
むつましけれはわれには也
なほまはゆくてひるは云々　昔ノ大将ならねは見し
られさるやうにとて也
ひとつにも七十九ウ　われにのみひとつ心にあらてふた
こゝろ有て中納言にむつるゝほとの心のみたれよ
りしておなしわれをみてもこと人とおもふならん
となり

おほよそはかり八十ウ　伊勢「大よそのはまにおふて
　ふみるからにこゝろはなきぬかたらはねとも

第四

内侍のかんの君十一月つこもりに參り給へり一オ　元
　ノ大將也
めつらしうれしくて　うノ字かさぬへし
みたりかはしき人のうへと一ウ　とハをノ誤
猶まさりにける心ちを二オ　をハ衍文歟
しのひ奉れとて侍し　侍しノ二字衍文歟
今ははるけ侍なん二ウ　前ふの地より春宮の御心をさ
　つしていふ所なれは給なんトアルヘキ也
大將の御事のあさまし五オ　元ノ大將のいつちへかか
　くれ給ひしにと也
すきにしかたよりもみち〳〵しう六オ　句下文のきき
　わく〳〵ト云ニカヽル
それや大將との給ならん七オ　コヽニアヤマリアラ
　ン
聞えんかたなくさめやるへき七オ　なくノ詞カサネテ
　アルヘシ
こまかにきこえしらせ給ふにそ八オ　そノ結ははるか
　にへたてゝ下文九オ　心うきさまをみ給へすててけ
　るトアル處コノ結ナルヘシ
御うしろみ九ウ　大將の後見をし奉らんとなり下文
　十オ　内侍督のゆかりうとからぬ云々トアルコレナ
　リ
えかしの御心　内侍督にみかと心かけ給ふこと卷一
　十一オ　にいつれも御心をかけておほせことあれと
　トアルコレ也其の比は今上は春宮にてありし也
御くしこめにひきかつき十一オ　源氏わかむらさき
　の卷になに心もなくゐ給へるに手をさし入てさく
　り給へれはなよゝかなる御そにかみはつや〳〵と
　かゝりてすゑのふさやかさくりつけられたるトア
　ルモ御くしこめに有し故也
八尺あまり十二ウ　卷三五十四ウ　さかりは八尺の髮よりも
せんしのおとゝ十三オ　はゝおとゝおはおとゝなとの
　おとゝ也
れいならぬ十三ウ　帝の御詞也春宮のみこゝろあしき
　を例ならぬといふ也
たゝ大將なるをあさましき　コレマテ大將ニテアリ
　シ故ニ帝ノシカオボスコトワリ也

いつとなくおはしませと十四オ　帝の無期にゐ給ふ也
御歸のほともなく也
いとたひ〳〵しき十四ウ　たい〳〵トカクヘシ狹衣ニ
證あり
御いのちなと　上ノ句ニモナド〳〵トアリうるさし誤字
にてもあるにや
おとゝの心をやふらし十六オ　おとゝの句心は內侍督
の心也
ものおもひしるほとになり給にたれは　給トイフコ
トイカヾ
中納言の事なと十七ウ　中納言におかされ給ふ身にて
ことさらにうちまいりのことはいかゝとおほす也
わかをのこ廿オ　たかき人たちト云こと也下文廿八ウわか
きんたちト云詞アリ
ついたちの程廿ウ　あけんとしのむつきついたちの
程ト云こと也下文廿七オ　にもついたちの程なとは
さてさふらふへく
中納言にとりこいられては廿七ウ　巻二十三ウ　とりこめ
たてられてはトアリ
なさけ心おとり廿八オ　帝の御心に見とかめ給ふ一ふし

の有し也子うめる女なれは世なれてもあるへく乳
なとの手あたりもあるへく又外にしらるゝことも
なともなからん
みつせ川廿九オ　十王經をおもへるにや
今もみてし　古今戀四「あなこひし今もみてしか山
かつのかきほに咲るやまと撫子
あひてのこひも卅オ　今ノ大將ノ歌也巻二十二ウ
わすれし人　人は內侍督をさす昔の大將也
心さかしらに御返しきこえんもさこそ卅二オ　父おと
とのゆるしのなきに也
御心にかゝりたる卅四ウ　中納言に逢て產まてしたる
ことを也
二條殿卅五オ　上文卅三オ　二條堀川ふたりを
みえぬ山路卅五オ　古今「よのうきめみえぬ山路にい
つかたに身をたくへまし　此の歌風葉八離別
いといかめしく卅七ウ　巻三六十九ウ　このたひはかくろへ
忍びいつれはむけに物けなきやうなり云々トアリ
この御かたのあかれにてそ卅八オ　誤
人にのみちきり卅九オ　中納言の子二人產めは也源氏
みをつくしの巻にちきりふかき人の爲めには今見

いて給てんとおもふもくちおしや
大とのにものし給ふ卅九ウ　春宮のうみ給ふを云
おもひなきあたり　カケカマヒモナキアタリニ也
今はおもへるにこそと四十ウ　誤有へし
つれなくすかし四十一オ　むかし内侍督に中納言いひよりたる時の事也巻二八ウ　まことにふかきみ心ならはくるのこらをおほいて出いなは　トアルコレ也
とりかへのあれは　元ノ大將に通したる故也
うちなくさみにしを云々四十一オ　コノ所一行ホド誤アルヘシ
これへにても物し給へ四十二ウ　誤
御返事まてこそ侍らめ四十四ウ　誤也御返事はもとより也そなたよりのもみ給はぬよしとはきこゆる也
あひての戀も四十七ウ　今大將の歌にて巻二十二ウ　ひとつにもあらしなさてもくらふるに逢ての戀とあはぬ題を
れいけいてんのほそとのゝと四十八オ　巻三六十一オ　れいけいてんのほそとのにおり〳〵ゆきあひし人のことなとさへかたりいてし
いかなりけり御たひね五十二ウ　――けるトアルヘシ

おもひたまひしらぬに侍らねと　ト文字重て有へし
我きんたちなる　我ハ若ト書へシ
さひけのわたり五十二ウ　御ノアヤマリ
いとみくるしうて五十三オ　う。ハさ。ノ誤
けしきはかり五十四ウ　源氏夕顔しひらたつものかことはかりひきかけて
なけしのうへにそゐたる　誤字あるへし
きんの人はすらしおくに五十四ウ　下文六十五ウ　ありし月かけのきんの御かたちとあり大君也
ふとめ。さまりて五十五オ　と。まりノ誤
かたはとみゆるほとにあらさりしなと五十五ウ　誤有へし
さこそなごりなくまめに　上文四十七ウ　をこしうちみたるゝ事もなくてまめたち
なにかし大將の五十六ウ　狭衣物語に見えたり彼の物語の校註にくはしくいふべし
をさ〳〵ひきならす人もなかめる五十七オ　源氏やうのものと　元ノ大將ヲシタフアマリニ其コカリナレバ此女ヲ見スコスコトハアルマジクオホサレネト也又オモウニサノミ云々ト也ヤウノモノトハ

同シモノトイフコトニテ大將ノ北方四君にカタラヒ又宇治ノ大姫モ大將ノ北方ナリイツレモ北方ナレバシカ云ナリ

ゆきの事なとも五十七ウ　雪なるへしいさゝか詞たらぬこゝちす

ありし夜はの月影　上文五十七ウ　くまなき月かけにこなたにさしむかひトアルコレナリ一本夜はをひはトアルニヨレハ上文五十五ウ　ひはにかたふきかゝりてトアルコレ也

大將はいかゝもてなし給はんとおほすらん五十八ウ　誤

中納言にあはせてまし　上文四十七ウ　をさ〳〵うちみたるゝ事もなくまめたちトアル中納言ノコト也

內侍の督の御かたにいつみなと　二條殿に內侍督のまかり給ふ時の御料につくり給ふこと上文三十八ウ　にあり

まつきこえ給とて五十九ウ　誤

有し月かけおもひいへる　上文五十三ウ　夕附よの月くもりなくさし出たる

きむの音のみ六十オ　上文五十四ウ　きんの人はすこしおくにゐたるに

うちのはしひめ六十ウ　今の內侍督をさす古今戀四さむしろに衣かたしきこよひもや

昔みしうちの橋姫六十一オ　いかなる引出もの有ともむかしの契かはしたる君なくてはなくさまぬよしなり

橋姫の衣かたしき　えかしみ給ひし橋姫はうち川に身をなけて今はあらねはおもひやみ給へと也

おもひとまりなん　とまり給なんトアリタシ

かのうちのはし姫なとらす一本　ひとく六十一ウ　誤有ヘシ

一本もいかゝ

をはすてやまの六十二オ　わか心なくさめかねつさらしなや

れいのつきくさの　上文卷一十九ウ卷二廿オ

ふかにし戀ともも　元の大將右大臣の四君

あかしよの月かけ本二ウ　上文五十三ウ五十四オ

ほのかにしみそめ奉りし　ほのかにみそめニテキコユ。シは衍文也　ほいて出いなはいかにうれしトアルコレ也

かのうちはし姫とはおほしよらぬ七十二ウ　はしめしかのうらたのめ給ひしは今の大將にてその比の宇治

の橋姫か今は内侍督そとはおもひよらすト也

けにことはりはりなれば七十三ウ　はりノ二字衍文

のなかの清水は七十四ウ　古今雑上「いにしへの野中のしみつぬるけれともとの心をしる人ぞくむ

かたへの御かた〴〵も七十五オ　一人ハ中納言ヲサス其他ハ誰ヲサスニカ物語の上ニハナケレドモ内侍督ヲ戀ヒシタヒタル人イクラモアリケンヲソレラヲ汎クサスニヤ

なかのちきり七十五ウ

あけくれいひいてゝこひなき給ぬれとゆうへも七十七ウ　誤脱アルヘシ若君の心ト詞トしかとわかれす

されはよあるやうあらん七十九オ　みかとはしめて中宮にあひ給へる時に世なれてありしに人つかせなふこと上文廿八オ　にみえたり

おほかりぬへかなるかな。八十オ　る。ハれノアヤマリ上ノこそノ結也一本にかなノ二字なしよろし

うちみん人はかり八十二オ　誤

安政五年一月十一日燈火に筆をさしおく　況齋

一掖齋狩谷先生のいはれしには元かし織錦齋春海ぬし古寫本を藏せられたるか今は其の所在をしらすといはれし

一安藤爲章の年山紀聞巻一 眉ぬき齒くろめ にいはく取替はや作者未詳彰考館の御本は合册にて四册あり

一物語文のかす〴〵に今とりかへはや物語、とりかへはや物語と兩所にのせたり今本なるは今とりかへはや物語也とりかへはや物語は今はたえしにもあるへし、或人難して今本に取替はや物語と有はとりかへはや物語にて今とりかへはや物語は又別に有ならんといふ、答へていふやう、風葉集に春のよもみる我からの月なれは心つくしの影となりけりといふ歌を載せて今取替はやの太政大臣四君とあり此歌今現存の物語に有しにより今本なるは今取替はや物語としる也とこたふ、

こゝにひとつの疑あり今本の今取替はや物語は風葉集より後に出來たるものにて風葉集の比に有し物語は亡佚したるならんとおもふことあり、いかにといふに此上件に引出たる、みる我からの歌を太政大臣四君といへと今本にては右大臣の四君也

さては風葉をしらぬもの龍闕の物語に此歌たまたまつたはりたるを取たて丶作り出たるにはあらしかとおもふ也又此物語巻一のこれやさは入てはしげき道ならんの歌とのせしふもとよりいかなる道と有二首は風葉集戀部に入て取替ばやの歌として今取かへはやといはす是も不審の一にこそ

一元治元年秋七月書肆朝倉よりみせたる一本は亡友伴藤五郎直方が所藏本にて有し也巻末に

右とりかへはや物語は山岡明阿の校合せし本を得てうつし終ぬ

文政十一といふ年ふみ月十五日

伴宿禰直方

朱ニテ
右とりかへはやの物語四巻は逢來氏の本をかりてうつしとり校合もをへぬ

天明五年乙巳正月十日

本居宣長

コレモ朱ニテ
右鈴屋大人の御本もてうつしぬ

加藤磯足

コレモ朱ニテ
文政四年正月廿日校合をへぬ

千無羅仲雄

巻首に山岡氏の序ありその序の略にいはく
とりかへはやといふふみあり是を物にかむかふるにふたくさなん有はやく有しものはいつのほとにかほろひにたりされとそのうたふたつみつはものにのこりたれはそれとはしりぬこれにつきたるものはいまとりかへはやとそいふめるこれはまたく今もの也とりてそれはいと末の世の人の手にいてきにたれとすへておかしくあはれなるもの也よむかまに／＼あやまれるをなをしかなのたかへるをもまたかたはらからかへたることとしるしつけて云云

宿禰俊明とあり扨三巻なり標題に今の字なし朱にて巻首に今取替はや上トアリ中巻も下巻も標目なし校もなし

風葉集巻一　春上

題しらず　今とりかへはやの太政大臣四君

春のよもみるわれからの月なれはこゝろつくしのか
けとなりけり（蔵本今取かへはや物語一冊ウ）

同八　離別

よしのに侍ける比あねを關白のむかへ侍けれは
ちゝみこ別をしみ侍けるついて

今とりかへはやの吉野みこ中君

いつかたに身をはよせましちゝまるも出るもともに
おなしわかれを（蔵本今とりかへはや物語四冊七オ）
なしき一本

同十二　戀二

麗景殿のわたりにて女にわかれける曉よみける

今とりかへはやの關白

なこりのみなに有明の月影やまたあふき（ま歟）てのかたみ
とはみよ

同十七　雜二

忍ひて宇治にすみ給ひける比月いとあかゝり水の
面てもすみはたれるいとおほし出る事おほくて

今とりかへはやの中將

おもひきや身をうち河にすむ月のあるかなきかのか
けとみんとは

右大將にてつかへ給ける比にこもりゐさせたま
はん事ちかくなりてよしのゝ宮におはしまして
御子のむすめにのたまはせける

今とりかへはやの中宮

またもきくうき舟（身イ）かくさん吉野山みねの松風ふきな
わすれそ

風葉集第六　冬

題しらす　取かへはやの見てものゝひしり

秋はてゝよもの嵐にさそはるゝ木葉にたくふわか身
ともかな

神無月はかり時雨いとうする日女につかはしけ
る

取かへはやの前太政大臣

物思へはこゝろもそらにみたれつゝしくれにけふる
わかなみたかな

同八　羈旅

題しらす　取かへはやの新中納言

朝ほらけゆふつけ鳥も諸聲になくなくこゆるあふ阪
の關

同十　賀

太政大臣のむすめのうふやまにまかりて侍りけるにさかつきのついてに

取かへはやの中將

二葉よりちよのけしきのしるきかなこたかかるへきやとのひめ松

同十一　戀一

いとせちにおもひける女にたゝしはしそひ侍りける行へしらすなりにけれは

とりかへはやの前太政大臣

つらけれと鳥の音なくていかてかはあけぬとつくる聲をきかまし

狩谷氏本及大野氏本には

卷十一　戀一

をとこのはしめて「これやさはいりてはしけき道ならん山口しるくまとはるゝかなといへりける返事に

とりかへはやの前關白四君

ふもとよりいかなる道にまとふらんゆくへもしらすをちこちの山

トアリサテ此つらけれとノ歌は卷十二に入たりスヘテ十一卷ノ末ヨリ十二卷ノ初ノ處歌多クアリテ大異同ナリ

孝云こゝにみえたるこれやさは入てはしげき歌とふもとよりの歌とは應本今とりかへはや物語卷一

十五ウ十六オ　にみえたり風葉に今といはす不審也

同十五　戀五

秋の比はなれて侍ける女につかはしける

取かへはやの內大臣

戀わふるなかきよすからねさむれはならはぬ秋の風をしるかな

返し

權中納言母

君はさやおもひしるらんわれはたゝいつとも わかす秋のこゝろは

同十六　雜一

秋のなかはに靑葉なから紅葉のちるを見て

取かへはやの見てものゝひじり

秋はまたふかゝらねとも山ふしのなみたにそふはこの葉なりけり

中將出家して後おもひかけす見あひて侍りけるに雪の中にまたいてけるをかくるるまて見おくりて

とりかへはやの前關白四君

をちこちのしらぬ山路にあくかれてかゝる雪まをいかてわくらん

同十七　雜二

世をそむかんとて中宮にかき置てきこえ侍りける　とりかへはやの中將

戀しくはうきよの中にすみわひて入山の端に月をなかめよ

おもひの外なる身のふるまひをもとのすかたにあらため侍らんとていてけるにとし比まてならしける笛をふきたてゝ　とりかへはやの權中納言母

忍ぶへきふしもあらしな笛竹の此よをかきる音はつくすとも

○年立

卷一

權大納言にて大將かけたり

權大納言北方二人有之事

權大納言北方一人は源宰相の女わか君出生一人は藤中納言の女姫君出生男ハ弟女ハ姉

若君女のまねをこのみ姫君は男のしはさをし給ふ

若君を姫君ときこえ姫君を若君といふ已下取替へかように呼

春のつれ〳〵に父權大納言ひめ君の御方に來てめて給ふ

ことし姫君十二姫君十二歲其實若君

わか君叙爵年未知

姫君御裳着若君御元服支度之事

若君を大夫君といふ童より叙爵し給ふ故也

秋若君侍從になり給ふ

帝春宮いつれも姫君に御心かけ給ふ

女一宮を侍從にあはせたく帝思召事

式部卿御子は侍從に二年ばかりの兄也此御子侍從の姉又右大臣の四の君に懸想し給ふ

侍從に式部卿の御子姫君の事をかたらひ給ふ

帝おりゐ給ひて朱雀院に居給ふ
春宮位につき給ふ
女一宮春宮に立給ふ男宮いまさぬ故也
右大臣入道御年七十
權大納言左大臣になり給ふ關白し給ふ
侍從三位中將になり給ふ
右大臣の姫君三位中將を婿取し給ふ
三位中將權中納言にて左衛門督かけ給ふ
式部卿の宮の中將コレマテ中將トハナシ宰相になり給ふ
中納言十六右大臣姫君十九 中納言實姫君はじめて年十六とみえたりこれより年立をすべし
中納言例月四五日つゝめのとの家にゆき給ふ
九月梅壺女御のもうのぼり給ふさまを内わたりにて中納言見たまひてよのつねならは我もかゝらんものぞとうらやみ給ふ
十一月姫君春宮に參り給ふ内侍督になり給ふ
春宮は梨壺に姫君は宣耀殿にすみ給ふ
内侍督と春宮密通
五節に中院にみゆきあり
麗景殿女房と中納言贈答のうたあり 下文に女御の妹とあり

としあらたまる 中納言十七歳 内侍督十三歳
宣耀殿に左大臣參り給ふ中納言もさぶらひ給ふ 本文に左大臣とも大殿とも殿ともなし落たるものならん
中納言北方に宰相中將密通
中納言北方懷姙
中納言與北方不快之事
吉野に先帝三宮居給ふ此宮むかし渡唐し給ひて彼大臣の婿になり給ひて女宮二人をうまけ給ひしにその女なくなりし後女宮二人を具して歸朝し給ふ此宮謀叛し給ふといふ事世にいひ出たるにより隱遁し給ふ
九月中納言よし野に行給ふ姫君と贈答の歌あり
卷二
權中納言北方出産女子誕生
權中納言北方七夜に宰相中將しのひて帳内に入權中納言來合狼狽して扇子たゝうかみおとす
内侍督に宰相中將いひよりたるをすかされてかへる事
權中納言の男ならぬ事を宰相見あらはして密通す
此日あつき日にてすゝしのひとへ着てうちゐせさせたるよしみえたり

中納言十八歲
年アラタマレトモ某月トモナケレトモコヽニア
ツキ日トアリ上巻ノ末ニ九月ノ事アレバコヽノ
間ニ年改ルコトモトヨリナリ
内侍督十四歳中納言と中將贈答の歌度々あり
中納言に女のさまにかへれと中將すゝむ
中納言北方ふたゝひ懐姙
十二月中納言つはりにてわつらふ
十二月末中納言父おとゝの許に參り給ふ
としあらたまる 中納言十九歳 内侍督十五歳
三月朔日比南殿の花の宴
中納言大將になり給ふ宰相は權中納言になり給ふ
三月廿日あまり麗景殿の女房に大將おとづれ給ふ

巻三

四月大將吉野に參り給ふ
大將十九になり給ふ北方は今三年のこのかみのよ
しみえたり 巻一に中納言十六女君十九トアリコヽト年符合ス
大將内に參りて夫より中納言にいさなはれて宇治
にかくれ給ふ
大將宇治にて眉ぬきかねつけて女のかたちになり
給ふ
大將かくれ給ふによりさかなき女房なと中納言の
事をいひ出てその事により大將はかくれ給ふなり
といふにより北方の父君母君おどろき給ふ
内侍督まかてゝ女の形を改め大將をたつねに出給
ふ
内侍督吉野に大將たつねに行給ふやかて逗留し給
ふ
大將は宇治にて男君をうむ
八月宇治より大將しのひて吉野に文奉る此文のか
へりことにそへて内侍督よりの消息あり
宇治より又吉野に御かへり奉る
内侍督大殿にかへり給ふ
内侍督宇治に大將のむかへに行給ふやかて吉野に
つれたちて行たまふ
中納言都より宇治にかへりて大將のみえぬをなけ
き給ふ
内侍督大將をつれて殿にかへり給ふ
よしのゝ姫君を殿にむかへんとす
今の大將 コレマテノ内侍督 はしめて右大臣四君にあふわか

我身やあらぬ人やかはれるの贈答あり

巻四

十一月内侍督入門（コレマテノ大將也）

今大將（コレマテノ内侍督）しのひて春宮にあひ給ふ

今内侍督（コレマテ大將）孝曰今大將ト云フ名目ハアレトモ今内侍督トイフ名目ハナケレトモ今大將ト云名ニナソラヘテシバラクカヤウニシルス

十二月春宮わか君をうみ給ふ

としかへる（今大將十六今内侍廿）

三月よしのより姫君たちを大將二條殿にむかへ給ふ

十二月比より大將北方はらみ給ふ

内侍督此春の比よりはらみ給ふ（大將十七内侍督廿一年アヲタマルヨシハナケレトモ上ニ十二月アリコヽニ春トアレバ年ノ立チカヘルヿサラナリ）

四月麗景殿のほそとのに大將おとつれてはしめてあふ贈答の歌あり

六月中納言に宇治中の君を大將手引してあはす

七月内侍督五ケ月と奏してまかてぬ

八月右内臣の四君二條殿にうつる

九月右大臣の四君出産わか君うまる

内侍督男みやをうむ（某月トイフヿナシ）

としかへる（大將十八内侍督廿二）

正月男宮春宮にたちて今までの春宮は院になり給ふ

四月内侍督立后

年月多くすきかはる

中宮むかし大納言に逢てうめるわか君に逢て落涙し給ふ十一にやならんとあり（中宮十九むかし男のまれして大將にてありし時年十九にて此わか君をうむそれよりかぞへてみれは廿九に居なり給ふ）

此物語おほよそ三四十年はかりのことをかけりみかどは三代にわたれり

○系譜

朱雀院　位ヲスベリ給テ朱雀院ニ居給
　帝　御年四十バカリ
　院ノ上

女一宮　母宮中腹

春宮　朱雀院ノ次ノ帝ニ男宮イマサヌ間
　侍従ニ給ヲント朱雀院オボシメシタルコト

梨壺

春宮ヲスベリ給フ

女院

内侍督　其實男宮　ニ通シテ男子ヲウム大將ノ子ノ由ニ披露ス

仙洞　おりゐの帝ト物語ノ上ニハナシ假ニシカ云　春宮　朱雀院ノ春宮
　某帝ノ御子トイフコト見エズ御年廿七八
　朱雀院ノ讓ヲ受ケテ卽位シ給フ
　内ノウヘ
　位ヲスベリ給フ

權大納言ノ姫君ニ心カケ給フ

今上　母内侍督　後立后
　春宮

二宮　母同　今上卽位シテ二宮ハ春宮ニ立給

三宮　母同

姫宮　母同

右大臣　年七十　入道
　大君　朱雀院女御　仙洞女御
　中君　内侍督ノ中宮ニナリタマヒテヨリヨチウラミコモリ居給フ
　三君
　四君　男君北方　大將ヨリ三ツバカリノコノカミナリ
　　式部卿宮ノ御子コレニ心カケ給フ遂ニ通ジ給フ
　　年十九

權大納言　大將　大殿或殿　左大臣　關白　入道

男君　母　源宰相女

年十二
大夫
侍從
三位中將
權中納言
年十六
右大將
年十九
以上ハ姫君ノ假ニ男飾シテ男君トイハレタリシ程ナリ
此間ニ式部卿ノ御子ニ女ナル丁チシラレテ懷姙シテ若君ヲウム

―姫君 母 藤原中納言女
（女御
后
以上ハ男君ニテアリシ姫君タチカヘリテヨリノ丁ナリ但シ宮ヲウマザルホドハ猶內侍督ニテアリ仙洞ノ女御ナリ

―女 母 右大臣ノ四君 今上ノ女御
―女 母 同上 コノ兩人ハミナ式部卿ノ御子ノ四君ニウマセタルナリ
―某 母 春宮後女院 殿ノ男君ノ女飾シテ內侍督トイハレシトキ春宮ニ通シテウマセ奉リタル
―某 母 右大臣ノ四君
―某 母 同上
―某 母 同上

―女 母 麗景殿女御 二ノ宮ノ女御
式部卿宮
中將 殿ノ侍從ヨリ二ツホドコノカミ
宰相
權中納言
大納言
中宮大夫
源大納言 コヽニ源トアルカラハ源氏ヲ賜リタル丁カゲニアリトスヘシ
內大臣
大將
某 母 姫君ノ男ノマネシテアリシホドニ通ジテ產マセタルナリ
童殿上
年十一
三位中將
―某 母 宇治中ノ君
―女 母 同上
―女 母 同上

宮 吉野山ニ住ミタマフ 先帝ノ三ノ宮
―大君 母 唐大臣ノ女 殿ノ男君ノ北方
―中君 同 上 宮ノ中將ノ北方

―麗景殿女御 仙洞女御也中宮ニオシケタレ給フニ今ノ大將ノ姫君ヲ養給フニヨリ大將ウシロミ爲シ給フマヽ何事モモテカクサレテスキタマフ中宮ハ大將ノ姉也
―女房 今ノ大將ニ逢テ姫君ヲウム 女御ノ妹トアリ
權大納言ノ北方
源宰相
―女 男君ノ母也 東ノ上ト云
―藏人兵衛佐

藤中納言——女　姫君ノ母也

男君ノ北方

右大臣ノ四君

吉野宮ノ大君

左衛門　右大臣ノ四君ノ乳母

中務　同上

中納言　殿ノ姫君ノ乳母

辨の君　殿ノ男君ノ乳母

宰相の君　同上

大納言の君　殿ノ男君ノ乳母歟姫君ノ乳母カタシカナラス

宮宣旨　女一宮ノ母后ノ御乳母ノ子

中納言の君　宣旨ノ妹也

中將內侍　仙洞ノ女房

左衛門督

宰相中將

辨の少將

コノ三人二條殿ツクラセ給ヒテ內侍督（後皇后）ノ御料ニセントセシ比管絃シタル人々也他ニミエス

梅壺女御

仙洞ノ女御ナルヘシ殿ノ姫君男ノマ子シテ居給ヒシ比コノ女御ノ御イキホイチウラヤミナヒシコトアリ

殿ノ男君ノ乳母子三人

姫君ノ男餝シテ大將トイハレタル比見エサセタマハヌニヨリ男君ノ女餝シテ內侍督ナリシカ尋ニ出給フトキ御供ノ人々ノ內ニコノ三人アリ上ニノセタル辨ノ君宰相の君ナドノ子ドモニヤシラレズ

今物語書入本

〔一〕山本信哉云此書群書類從卷四百八十三雜部三十八に收む而して書名の下に前右京權大夫信實朝臣の十字あり 大納言 朱書云令曰大納言四人掌下參二議庶事一敷奏宣旨侍從獻替上 職原抄 大納言令四人相當正從三位唐名亞相納言亞槐 其職掌與二右大臣以上一參二議天下事一云々然者大臣不レ候之間奉行與二大臣一同故云二亞相之官一也 なりける人内へ 内裏也參内すること
まいりて女房あまた 女官達也 大納言の也 ものかたりしける所にやす 女房達の手ことにとりて見る也
らひけれは此人のあふきを手ことにとりてみけ 其扇に花の如き美き姿したる女の繪たかきてありたりと也
るに辨のすかたしたりける人をかきたりけるを見て
此女房ともなくねなそへてのへの松むし その誤也 朱書云源氏榊卷にやう／＼あけゆく空の氣色ことさらにつくりいてたらんやうなり源「曉のわかれはいつもつゆけきをこは世にしらぬ秋のそらかな」いでかてに御手をとらへてやすらひたまへるいみじうなつかし風いとひやゝかに吹きて松蟲のなきからしたるこゑもをりしりがほなるをさして思ふことなきだにきゝすくしかたげなるにましてわりなき御心まどひどもに中々こともゆかぬにや御息所「大方の秋のわかれもかなしきになくねなそへそのべの松むし」くやしきことおほかれどかひなければ明ゆく空もはしたなくて出給みちの程いと露けし 大納言也 とくちにひとりこちあへるを此人聞ておかしとおもひ 獨言すること
たるに奥のかたよりたゝ今人の來たるなめりとおほ 彼の女房ともの一人がいひし也
ゆるに是はいかになくねなそへそとおほゆるはとし 曹時
たりかほにいふをとのするをこの今きたる人しは
したためらひていと人にくゝいうなるけしきにて源氏 躊躇すること

のしたかさね 朱書云下襲半臂の下に着すべきものにして其製は後をいと長くして袍の下にいたし引きたるまゝに練り歩む也是を下襲の裾とも或はたゞ裾とも云ふ也 のしりはみしかゝるへきかは
とはかりしのびやかにこたふるをこのおとこあはれ 大納言
に心にくゝおほえてぬしゆかしきものかな誰ならん
とうちつけにうきたちけり 源氏の下襲のしりはみしかかるべきかはと云ひし主のゆかしく見たしと也うちつけ端的俄にと云ふ意うきたちは心の浮き立ちたりと也 たふへくもおほ 堪え得ぬ心也
えさりけれは後にえさらぬ 朱書云えさらぬ身なさいへばのがれかたなき身よんところなき身と云ふ心となるなり 然るべき人也 人に尋ねけれは近衞院 朱書云近衞院七十六代の帝門御諱體仁鳥羽第八の御子御母は皇后藤原得子贈左大臣長實の御女なり の御母ひか事かうのと
の〻御つほねとさゝやきけれは 耳語ひそかに云ふこと いてやことはりなる 無比のことなれどこゝはいとゝと云ふ程の意也
へしそのちゝはたくひなきものゝおもひになりにけり
〔二〕「大方の秋の別も悲きに鳴音なそへそのへの松虫 源榊大將御息所の意も兩か也
朱書云此の話著聞集第八好色の條及び十訓抄第一可施人惠事と云ふ條に見ゆ著聞集のは文章に違あれど十訓抄はほゞ同じ
とれと薩摩守忠度 刑部卿平忠盛の子也壽永三年二月七日攝津國一の谷に於て戰死す といふ人 宮殿にて宮の殿にできたる女也 女房の局也
ありきある宮はらの女房に物申さんとてつほねのう
へさまにてためらひけるかことのほかに夜ふけにけ
れは扇をはら〳〵と 扇を使ふ音也 朱書云守信云はら〳〵とぬのおとなひはら〳〵として」とあり 源氏帚木にき

鳴らし　彼女房にきこゆるやうに知らする也
つかひならしてき丶しらせければ此局の心しりの女
房野もせにすたく　朱書云野もせにすたく　声も狭にてもは助辞也庭もせと云へば庭も狭にの義也しかる
を後には野もせ庭もせと云へば野の面庭の面と云ふ如くなれりこゝは狭の方よろし　すたく　多くあつまる心也それよりして鳴くこと
にも云ふ　詠みいつることも也
むしのねやさなかめけるをき丶てあふきをつか
寝静りて後也　彼の女房の出て逢ひける也　忠度に同
ひやみにけり人しつまりて出あひたりけるにこの女
云ふの敬語　忠度の云ふ
房あふきをはなとやつかひ給はさりつるそといひけ
ふ也　騒々しき
れはいさかしかましとかやきこえつれはといひたり
る也　男女とも優美なることなりと也　新撰朗詠虫好忠　意義明
けるやさしかりけり「かしかまし野もせにすたく虫
か也
のねよ我たに物はいはて社思へ

殿上人五位以上の昇殿を許されたる者六位にても許さるゝ者は
しか云ふ也
〔三〕或殿上人さるへき所へ参りたりけるにおりし　朧
釣屋より釣殿泉殿に渡したる廊の中程にある門也
も雪降て月おほろなりけるに中門のいたにさふらひ
本屋又母屋とも云ふ　應答合釋
て寝殿なる女房にあひしらひけるか此おほろ月はい
新古
か丶し候へきといひたりけれは女房返事はなくてと
りあへすうちよりた丶みをさしいたしたりける心は
朱書云とりあへず　とりなふせぬことに　而直ちにと云ことも也　うちよりは御簾の
やさいみしかりけり
内より也　たゝみは疊也疊は敷く物なれば敷くに及(シク)を
かけたる也疊をいたしたるは次の歌の心を思ひ合せたる也
「照りもせす曇もはてぬ春のよの朧月夜にしくものそなき
朱書云新古今春上に文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といへることを
よみ侍りける大江千里「照りもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜
にしく物ぞなき

〔四〕朱書云此の話も十訓抄可庭人慈事と云ふ條と及び悦目抄に見えたりされど少々異れる處あり
ある殿上人ふるき宮はら　宮腹
朱書云宮ばら　守信云ばらは殿ばら方ばらなどのばらにて「たち」「ども」の意也伊勢
物語に「そこの隣なりける宮ばらにとあり
へ夜ふくる程に参りて北のたいの
馬道縁也　佇立すること　上より各々我局に下るゝ也
めむたうにた丶すみけるに局におる丶人の氣色あま
泉水
たしければひきかくれてのそきけるに御局のやり水
集　詠みいつる也　調することに　次
に螢のおほくすたきけるを見てさきにたちたる女房
の螢火みたれとひてさうちなかめたるにつきなる人
何となくいふこと
夕殿に螢とんてとくちすさむしりにたちたる人かく
俗言にははつきりと云ふ意也　獨言
れぬものは夏むしのとはなやかにひとりこちたりさ
り〳〵にやさしくもかおもしろくて此男何となく
朱書云何となく他本には何と云ふ　一筋もなからんださもいよろし
ふしなからんもほいなく
旧稿也　朱書云守信云ねずなき　枕草子に雀の子のねすなきするになどりくる云々とあり
てねすなきをしいて
一向一切絶えて
たりけるさきなる女房ものおそろしや螢にも聲のあ
驚きたる氣色のなしと也
りけるよとてつや〳〵さはきたるけしきなくうちし
つまりたりけるあまりに色ふかくかなしくおほえけ

るに今ひとりなく虫よりもとこそさとりなしたりけ
り是もおもひ入たるほとなくゆかしくてすへてとり
つゝめて正しくと云ふ義也
とりにやさしかりける「音もせてみさほにもゆる
頭注云後
捨れもひにもゆる
螢こそ鳴虫よりも哀成けれ」「螢火亂飛秋已近
元稹 後撰 樂天
辰星早沒夜初長」「夕殿螢飛思悄然」「つゝめともかく
大なかけたり
れぬ物は夏むしの身よりあまれる思ひ成けり
〔五〕朱書云此話十訓抄可尋人惠事と云ふ條にあり近き御代に五節朱書云五節毎年十一月中辰日豐
明節會ありこれは今年の稲な神に奉らせ給ひて君もきこしめし臣下
にも給ふ節會也この日舞姫のぼりて舞な奏する也これな五節の舞
姫と云ふ　善相公異見封事曰五節舞妓者大嘗會時五人皆預ニ叙位ニ
其後年々新嘗會時四人又曰擇ニ良家女未ㇾ嫁者ニ置爲ニ五節妓ニ云々
縁にたよりて也
の比ゆかりにふれてたれとかやの御局へ或女のやん
ちはみかの誤
ことなき忍ひて參りたりける事ありけるをちときこ
なるべし　彼の女也　其女の隱れ
しめしていかて御覽せんと思しけるまゝに滅にとし
たる局に也　直ちに　燈火　消
いらせ玉ひけりとりあへすともし火を人のけちたり
帝の御傍中ヨリ也　十訓抄には匣とあり
けれは御ふところよりくしをいくらも取いてゝ火ひ
つの火にうちいれ給ひたりければおくまて見えてよ
風情
く〱御らんしけり御心のふせい與ありていとやさ
優美
しかりけり
優
〔六〕　此比のことゝかやある田舍人いうなる女をか

たらひて都に住わたりけるかとみの事有て田舍へく
住みてあり經ること　頓の音急なること
たりなんとしけるその夜となりて此女れいならすう
例也つれの如くならず
ちしめりてうしろむきてねたりけるを男いたう恨て
靠れて也　男に背を向けていねたりと也
けりいつまてかかくもいとはれまいらせむたゝいまはかりむ
朱書云いつまてかかくもうとまれ云々　俗にいつまてかくいやがられてあらん
いやがらるゝも今夜限と也
きたまひてあれかしといひけるにこの女「今さら
今迄中よく
暮し來りて今更になり　今より後
にそむくにはあらす君なくてありぬへきかとならふ
はかりそといひたりければ男めてまとひて田舍くた
りとまりにけるとかやいとやさし
朱書云守信云とまりにける思ひ止りたる也
くこそ
〔七〕　大納言なりける人日比心をつくされける女房
思をこかせし女也
のもとにおはして物語なとせられけるか世に思ふや
女の我か思ふ様
うならてあけゆく空も猶心もとなかりければあから
にもあずさら也　夜の明けゆくことの待ち遠なる心也　假初ヘカ
さまのやうにて立出て隨身に心を合せて今しはしあ
リソメ)の様にて外にいでて隨身にいひ含めし也　大納言の詞也
りてまことや今宵は内裏の番にて候ものをもしおほ
言ひ入れよと也
しめしわすれてやとをとなへと敎てうちへ入ぬその
無骨　大納言
儀にしはしありてこちなけに隨身いさ
朱書云こちなけ無骨也無風の心也
の敎へし如くいひし也
め申ければさることあり今夜はけに心をくれしにけ
氣つかざりしを云ふ

りさてとりあへすいそき出んとせられけるけしきを女の見て也見てこの女房心得てやかていとうらめしけなるにおりふし雨のはらはらとふりたりけれは「ふれや雨雲のかよひちみえぬまてこゝろ空なる朱書云こゝろの空にさまようこゝろ空なるここにて氣の落ちつかぬを云ふなり人やとまるといふなるけしきにてわさこならすうちいてたりける詠みいでし也に此大納言なにかのとはなくて其夜とまりにけり後まても絶すをとつれけれ捨つる様のこともなく道ひけるとも也けるはいとやさしくこそかく申は後徳大寺左大臣其女を見實定朱書云後徳大寺實定大政御門右大臣公能の子母は中納言俊忠の女祖父は徳大寺實能と云ひしかは此公を後徳大寺とは云ふ也壽永三年正月内大臣文治二年十月右大臣同五年七月左大臣建久二年六月出家時に年五十三歳也大納言となりしはその前なるべしときこえし人の事とかや

〔八〕粟田口の別當入道といひける人わかくて人をお或る女な也もひけるにやう／＼離々男女の中らひの跡くなることさかれ／＼になりて後に男の彼のかれ／＼になりし女を思ひいでし也おもひ出ていとの有けるをやりたりければ女に送りし也いとをは返して歌をなんよみたりける「わすられておもふはかりのあらはこそかけてもしらめ夏引の糸隈なくて明なりける夜也

〔九〕或藏人の五位の月くまなかりける夜革堂朱書云革堂本堂は行圓上人建立初め一條寺町にありしか寶永三年類焼して今は寺町竹屋町にありへ參りけるにいと美くしげなる女房のひとり參りあひたりける見すてかたくおほえけるまゝにいひよりてかたらひけれ物を云ひかけし也はおほかたさやうの好色の道なりみちにはかなひかたき身にてな互にいひ合ふことにてこゝはさこまても男の意に從はぬこと也んとやう／＼にいひしろひけるを猶たへかたくおほ女の婦るに跡をつきて行く也えて歸りけるにつきて朱書云守信云つきては女に附從ひて也土佐日記によき人の男につきてくだりてすみけるなりとあり行けれは一條河原になりにけり女房見かへりて「玉みくりうきにしもなさねをとめてひきあけところなき身なるらんとひとりこちてきよのか家の有けるに入にけり男うれしもいとあはれにふしきとおほえけり

〔十〕朱書云此話も十訓抄可施人恵事と云ふ條と又び平家物語七卷に見えたり大納言なりける人小侍從朱書云小侍從阿波の局と云ふ八幡光清法師の女にして高倉院の侍女也と聞えし歌よ明時と云ふ義也みにかよはれけりある夜物いひて曉かへられけるに大納言か也女の家の門をやりいたされ車ないたされし也けるかきと見かへりたりければ此女名殘を思ふかとおほしくて車よせのすた名殘惜しく思ふことれにすきて透ひとり殘りたりけるか心にかゝりおほえてければ供なりける藏人藤原經尹朱書云供なりける藏人藏人所は嵯峨天皇の弘仁年中に初て之をおきたりか當一人頭二人五位の藏人三人六位の藏人四人[illegible]りこれは朝廷の官なれ共攝家などにも又ある也職原抄に關白家（大臣家た[illegible]同攝關同時別當文殿藏人所侍所等を置き其家の大將同[illegible]年預　侍　別當　文殿　藏人所　侍所云々にいまた大納言

の藏人にの給ふ詞也
入やらて見送たるかふりすてかたきになにごとまれい　何事にても
よろしき敬いひ來れと也　　長々し也
ひてことの給ひけれはゆゝしき大事哉と思へどもほ　門内に入りし也　役女
時なうつすべきにあらざれば
とふへき事ならねはやかてはしり入ぬ車よせのえん
房のたてし處の前に恐まりし也
のきはにかしこまりて申せと候とはさうなくいひ出
たれと何といふへきことの葉もおほえぬに折しもゆ
ふつけ鳥　鷄のこと也ゆふつけ鳥といふは神社に奉るにゆふをつけてはなつなればいふとうゆふはゆふたゝみの木綿也　頭注云新古[illegible]　三小侍從「待
聲々になき出たりけるにあかぬわかれの
よひに更行かねの聲きけは　あかぬ別れの鳥はものかは　新拾　意義明也
といひける事のきこおもひい
てられけれは「物かはと君かいひけん鳥のねのけさ
しもなとかかなしかるらんと計いひかけてやかては
主人の車にはしりつきし也　前に注しなけ
しりつきし車のしりにのりぬ家に歸りて中門におり
大納言の藏人に問ひし言也
りて後さても何とかいひたりつると問玉ひけれはかく　十訓抄
にはかくこそとまりよろし
こそと申けれはいみしくめてたかられけりされはこ　かく頓才あ
ればこそあの物き使を仰せしと也
そつかひにははからひつれとて感のあまりにしる所
朱書云しるとこゝしるは掌領治等の文字をあつ　轄を領する意也こゝも其心にて即ち知行也
ける　朱書云守屆云たびたりけるは賜ひける意也　なとたひたり
とてなん此藏人は内裏の六位な
やさし藏人と渾名せられたる也
とへてやさし藏人といはれけるもの也けりこの大納
言も後德大寺左大臣の御事なり

〔十一〕能登前司清長政といひしは今は世をそむき　出家せし也　者
て法名寂緣とかや申なんめり和歌の道をたしなみて
其名聞ゆる入也新勅撰　朱書云新勅撰集　後堀河天皇の貞永中藤原定家勅を奉じて撰びしもの也
えらはれし時三首とかや入たりけるをすくなしとて
亂妨せし也　激烈
きりて出たりけるすこしはけしきには似たれともみ　貴
ちを立たる程はいとやさしくこそ其人此比あるやん
ことなき大臣家に和歌の會せられけるに述懷の歌を
御にて暮に離なたてるこさ　無月に詠の
よみたりける「あふけとも我身たすくる神なつきさ
無しさかけたり
てやはつかの空をなかめむとよみたりけれは滿座感
彼の貴人也
歎して此歌よみためて主も稱美のあまりに國の所ひ
朱書云國の所ひさつのうち或一個處を賜はりしと也　我か領國
さつやかてたまはせたりけ
り道の面目世の靈目ふしきの事也末代にもさするか　實經
[illegible]るやさしきことの殘りたるにこそ此事を聞て隆緣
侍從いひやりける歌「みかきける君にあひてそ和歌　意義明か也
の浦玉も光をいとゝそふらん　意國
〔十二〕吉水前大僧正と聞えしは今は慈鎭和尚と申
にや天王寺の別當に成て拜堂有けるに上童おほく具
せられたりける中にたれかしとかやいひける兒を天
王寺に有ける女たへかたう思ひかけて紅梅の檀紙に

心も及はすあしてをかきて此ちこのもとへをこせたりけるぬしもよそなからもつや〳〵見しりたる人もなくてむけにはちかましくありぬへかりけるに此ちこうちあんするけしきなりけれは何とすへきにかと人々まはゆく思ひたりけるにやかてそのあしてのうへに「おほつかなにはにかけることとの葉そ都にすめはしらぬあしてをと書てやりたりける取あへすいとあしからすや

〔十三〕　宇治のひたりのおと丶（頼長）の御前に銀をきり火桶につませられて頼政卿のいまた若かりける時召ありてきり火をけとわか名をかくし題にて歌つかふまつりて是をたまはれと抑事有けれはとりもあへす

宇治川の瀬々の白浪おちたきりひを（氷魚）けさいかによりまさるらんとよみたりけりめてさせたまひけるとなん〔頭注云顕輔　二條院御時ひたりまきのふちふちきり火たけたこめて河によせて歌奉るへきよし仰ありけれはみつからの名なろへてよみ侍ける従三位頼政　水ひたりまきのふちふち下同〕

〔十四〕　秦公春といひける隨身宇治の左大臣殿につかふまつりけるか御くつをまいらせけるか御沓のしきに千鳥をか丶れたりけるを見て「沓（英致波）のうらにもとふちとりかなといひてたりけるをとりつく殿上人ものもいはさりけるにおほい殿しはし御くつをはき玉はて「難波（同）なるあしの入江をおもひ出てと仰られたりけるいとやさしかりけり

〔十五〕　待賢門院の堀川上西門院の兵衛をと丶いなりけり夜ふかくなるまてさうしをみけるにともし火のつきたりけるにあふらわた〔頭注云和名鈔容飾具云澤釋名云人髮恒枯悴以此令濡澤也俗用胎綿二字（頭布良和太）〕をさしたりけれはよにかうはしくにほひけるを堀川（英兵衛）「ともし火はたきものにこそ似たりけれといひたりけれは兵衛（英堀川）とりもあへす「ちやう（同）しかしら〔朱書云守信云ちやうじがしらもえさしの丁子の如くなれるをいふ　燈心の〕の香やにほふらんとつけたりけるいとおもしろかりけり

〔十六〕　或者所の前を春の頃修行者のふしきなるかとをりけるかひかさに梅のはなを一枝さしたりけるを見とも法師なとあまた有けるか世におかしけにおもひてあるちこの梅の花笠きたる御房よといひて笑ひたりけれはこの修行者立かへりて袖をかきあはせてゑみ〳〵とわらひて「身のうさのかくれさりけるものゆへに梅の花かさきたる御房よと仰られ候やらんといひたりけれはこの者ともこはいかにとおもはすに思ひていひやりたるかたもなくてそ有けるさう

なく人を笑ふ事あるへくもなきことにや

〔十七〕或所にて此世の連歌の上手と聞ゆる人々よ（ん字たちたるなるへし）り合てれ歌しけるに其門のしたに法師のまことにあやしけなるかかしらはをつかみ（朱書云をつかみ頭髪の生へたる程ないふ也守信云字治拾遺物語に頭をづかみなる法師ども云々古事談にわたし守な見れば頭なづかみといふほどにねびたる法師の云々など見ゆ）におひてかみきゐのほろ〳〵とあるうちきたるかつく〳〵と此れん歌を聞て有けれはなにほとの事をきくらんとおかしと思ひて侍るに此法師やゝ久しく有てうちへ入て綵のきはにゐたり人々おかしと思ひてあるにはるかにありてふし物は何にてやらんと問けれは其中にちとくわう（荒）りやう（涼）なる者にて有けるやらんあまりにおかしくあなつらはしきまゝに何となく（菟）くゝりもとかす足もぬらさすといふそといひたりけれは此法師打聞て二三返計詠して面白く候ものかなといひけれはいとゝおかしとおもふにさらは恐れなから付候はんとて　名におふ花のしら河わたるにはといひたりけれはいひ出したりける人をはしめて手をうちてあさみけりさて此僧はいとま申てとてそ走出ける後に此事京極中（定家）納言きゝ給ひていかなるものにかと返す〳〵ゆかしくこそいかさまにてもたゝものにてはよもあらし當世は是ほとの何なとつくる（そく イ尋號の）人は有かたしあはれ歌よみの名人たちはたゝかうか（義にて俗に耻なかくさいふ義也大鏡にもみえたり）きたりけるものかな世中のやうにおそろしきものあらしよきもあしきも人をあなとる事あるましき事とそいはれける

〔十八〕伏見中納言といひける人のもとへ西行法師行て尋けるにあるしはありきたかひたる程にさふらひの出てなにことといふ法師そといふにえんにしりかけて居たるをけしかるほうしのかくしれかましき（よイ）そと思ひたるけしきにて侍共にらみをこせたるにみすのうちに箏の琴にて秋風樂をひきすましたるを聞て西行此侍にもの申さむといひけれはにくしとは思ひなから立寄て何事そといふにみすのうちへ申させ給へとて　ことに身にしむ秋の風かなといひてたりけれはにくきほうしのいひことかなとてかまち（僧背）をはりて（朱書云守信云はりてては打たゝきて也）けり西行はふ〳〵歸りてけり後に中納言のかへりたるにかゝるしれ物こそ候つれはりふせ候ぬとかしこかほにかたりけれは西行にこそありつらめふしきの事也とて心うかられけり此侍をは

やかておひ出してけり
【十九】後白川院（七十七）の御時日吉社に御幸有て一夜御泊り有て次の日御下向有けるに雨の降ければ御車近うつかうまつりけるかんたちめの中に　菟　きのふ日よし
朱書云家信云ひよしは日吉社に日よし即ち天気よしといふたいひかけたる也
とおもひしものをといふ連歌の出来たりけるをおほかたつくる人なくてほどへければ左馬権頭なりける人のはるかにさきなりけるを召かへしてこれ付よと仰ことありければほどなく　同　今日はみな雨ふるさとへかへるかなと付たりければ安かりけることを口おしくもおもひよらさりけると人々いひあへりけり此左馬権頭加茂の臨時祭の舞人なりけるに暁つかひ也ける人をうちくしてかへりたち（たイ）にまいりけるに雪いたくふりて袖にたまりたりけるをみて　同　あをすりの竹にも雪はつもりけりといひたりけるにつかひなりける人はつけざりければ秦兼任人長にてうちくしてけるか馬を打よせ〳〵けしきはみければ兼任かつけたるとおほゆるぞといはれて下﨟はいかてかとはゝしくいひけるをなをせめてとはれて　同　色はかさしの花にまかひてと付たりけるまことに兼久兼方なとか子孫とおほえていとやさしかりけり
【二十】やむことなき人のもとに今参の侍出来にけりゆき縉をめてたくするよし聞えければ前によひて脩縉にやきゑをせさせけるに何をかやき侍へきといひければ水に鶯をやけといはれけるに打うなつきて　菟侍　水にはをしをいかゝやくへきと口すさみけるをあるし聞とかめて同しくは一首になせといはれければかい
朱書云家信云かいは添へたる詞也
かしこまりて　同　沖の石岩より火をは出すともといへりければ人々みなほめにけり
【二十一】京極太政大臣（宗輔）と聞えける人いまた位あさかりけるほどに雲居寺の程を通られけるに　菟　瞻西上人の家をふきけるをみて雑色をつかひにて　ひしりのやをはめかくしにふけといはせて車をはやくやらせけるに　同　雑色のはしりかへるうしろに小法師をはしらせて　あめの下にもりてきこゆることもありといはせたりけるその程のはやさけしからさりけり
【二十二】待賢門院の女房加賀といふ歌よみあり
「かねてよりおもひしそそふし柴のこるはかりなる歎せんとは
朱書云著聞集和歌
といふ歌を年比よみてもちたりけ

るをおなしくはさりぬへき人にいひむつひて頭注云守信云いひ
むつふはいひ語らふに同じいひかたらて後に我身の忘られたらんにさ也忘られたらんに讀たら
は集なとに入たらんもいうなるへしと思ひていかゝ
有仁
ありけん花園の左のおとゝに串そめてけり其後おも
ひのことくやありけむ此うたをまいらせたりけれは
大臣殿もいみしくあはれにおほしけりかひ〳〵しく
懸三
千載集に入にけり世の人ふし柴の加賀とそいひける

〔二十三〕 基房
松殿の思はせ玉ひける女房かれ〳〵にな
り給て後はかなき御なさけたにもまれなりけれは我
なからあらぬかとのみたとりわひ人の心の花にまか
せて月日をむなしくうつり行に宮の鶯百さえつりす
れともおもひあれはきくことをやめつうつはりのつ
はくらめならひすめとも身老れはねたますちゝたる
春の日もひとりすめはいとゝくれやらすせう〳〵た
る秋の夜はむなしき床にあかしかたくてすくしける
に事のよすかや有けんむかへに御車をつかはされた
りける夢現ともわきかねつらん嬉しともおもひさた
めすされはとて今更待よろこひかほならんもいたう
つれなく身なからも中々うとましかりぬへけれはこ
れにこそ日頃のつきせぬなけきもあらはさめと思ひ
つよりてたけにあまりたりける髪を押切て白きうす
やうにつゝみて「今さらにふたゝひ物をおもへと
やいつもかはらぬおなしうき身にと書付て御車にい
れて参らせたりける此人は後にはみそのゝあまとて
近くまてもきこえしとかや

〔二十四〕 東山のかたすみにあはれに人もかけみぬ（てイ）
あはらやにいとやさしくいまた人なれぬ女ありけり
庭の萩原まねけとも風より外はとふ人もなくのきは
のよもきしけれとも杉村ならねはかひなくて月にな
かめ嵐にかこちても心をいたましむるたよりはおほ
く花を見郭公をきゝてもなくさむへきかたはまれな
ることにて明し暮すに清水詣のついてに思はぬ外のさ
かしら出来ていたらぬくまなかりし御心にたゝ一夜
の夢の契をむすひまいらせてける是も前世をおもへ
はかたしけなかりけれともさしあたりてなけきに悵
をそへて心のうちはるゝまもなしかひなくありふれ
と今一度のことのはゝかりの御なさけたに待かねて
よし是ゆへそむくへき憂世なりけりとおもひ立てあ
り、御心しりのもとへつかはしける「中々にとは
ぬも人のうれしきはうき世をいとふたより也けりと

はかり心にくゝおさなひれたる手にてはなた朱書云守信云はなだ 天智紀に紺布をハナダメノさよあり今のあさき色也のうすやうに書たるを折そうかゝひて奏しけれはまことにさる事あり尋さりけるこゝろをくれこそと御氣色有けれは頓て走向ひて尋るにさらぬたに荒たる宿の人すむけしきもなきをやや久しくやすらひて老たる女ひとり尋えてことのやうをくはしく聞けれは何といふことはしり侍らすあるしは天王寺へ參り給ひぬといへはやかて夫れり天王寺へまいり寺々をたつぬるに龜井のあたりにおさなしき尼ひとり女房二三人ある中にいと若き尼のことにたと〳〵しけなるか有此心しりを見付て淺ましと思ひけにてたゝやかてうつふしてなくより外の事なしかたへの者とも聲をたてぬはかりにてをさる袖なくしほりけれは御使夫見捨て歸るへき心地もせすおとなしき尼は此人の母也けれは事のやうこまかに尋けれともとより是は思ひつる事也何しにかは君の御ゆへにてさふらふへきかしこくといひもあへすなきて其後はこたへさりけれはよしなき御夫をしてかはゆきの朱書云守信云かはゆき つれ〳〵草に年老たる法師の小童の肩をさへて聞えぬ事どもいひつゝよろめきたるいとかはゆしとあり 猿撰集抄發心集などにも此詞見ゆことを見つるよと悲しくてさりとても爰にて世をつくすへきならねは立かへりぬ此よしを奏するにはしたなの心のてさまや心をくれかとかに成つるよとてかひなかりけりあはれにもやさしくもなかき世の物かたりにそなりぬるみそ野々あまのこゝろといつれかふかゝらん

〔二一五〕 或人を有て遠き國へ流されけるに年頃心さしふかゝりける女のはらみ朱書云守信云神代紀に妊身をハラメリとよめりたるを見捨てゆきけれはいか計の別にか有けん其後此女尋ゆかんとしけれとも父母有ける故にてゆるさゝりけれはたゝ一人出て行けるに漸其國まてかゝくり朱書云守信云かゝぐり 枕草子に又こと所にかゝぐりありくに宇治拾遺物語に桂よりかゝぐりたる者ありなど見ゆ又云 生まれんな「むまれんといへるは「うべなむべうまやたむまやなどいふ類にて平安朝以後の詞づかひ也江戸時代の人々これを誤と思へるはなかなかにひがつきにけり ここになん腹なる子のむ生まれんとしけれはかた山にうみおとしてきたりける物にひきつゝみて捨置て血つきたる物なとあらはむとて人の家の有けるかたへ漸よろほひ行けるに此家にはしをあつむるをとして流され人の死たるを葬らんする拵いふ殊にあやしくむねつふれてくはしくたつねけれは京なる人を戀悲しみてけさうせ給ひたるなといふにたゝ此人なりけりことはもたゝすわなゝかれけれとからく

して此死人のもとに行て見れはゝ我男也けりかなしき
ことかきりなくて枕かみにゐてかく參りたるなり
今一度めみあはせたまへとなきもたれて此男いき出
て目を見合せて此世にては今はいかにもかなふまし
きそこと計いひて頓て又死にけりさてのみあるへきな
らねははふり（朱書云守信云はふり萬葉に葬の字をよめり）けるにその火に此女
飛入て（燒死）やけしにゝけり腹の中の子をうみおとしける
は罪のあさかりけるにやとそいひあへりける一人く
したりけるめのわらはもともに火に入んとしけれと
も取とめて此人の有樣をくはしくたつねうみおとし
つる子なとをも取て村の者のやしなひけるとこそ此事
はちかきほとのことなり

〔廿六〕　小式部内侍大二條殿（敎通）におほしめされける比
久しく御ことなかりける夕くれにあなかちに戀奉り
てはしちかくなかめ居たるに御車の音なともなくて
ふと入せ給ひたりけれは待えて夜もすからかたらひ
申ける曉かたにいさゝかまとろみたる夢に糸の付た
る針を御直衣の袖にさすと見て夢さめぬさて歸らせ
給ひにけるあしたに御名殘を思ひ出て例のはしちか
くなかめ居たるにまへなる櫻の木に糸のさかりたる
をあやしとおもひて見けれは（イ死）夢に御なをしの袖にさ
しつる針なりけりいとふしき也あなかちに物をおも
ふ折には木草なれともかやうなることの侍るにや其
夜御渡あることまことにはなかりけり

〔二十七〕　小大進と聞えし歌よみいとまつしくてう
つまさへ參りて御前の柱に書付ける歌
あはれみたまへ世中にありわつらふも同しやまひを　（南無藥師）なもやくし
とよみたりけれはほとなく八幡の別當光淸に相くし
てたのしく成にけり子なといてきて後もろともに居
たりける所近き所にいものつるのはひかゝりてぬか
こ（朱書云守信云ぬかご　和名抄に零餘子和名沼加古署預子也と見ゆ方丈記にもぬかごをもり芹をつむとあり）なとの
なりたりけるを見て光淸　（苑葉）はふほとにいもかぬかこ
はなりにけりといひたりけれはほとなく小大進（同）「今
はもりもやとるへかるらむとつけたりけるおもしろ
かりけり

〔二十八〕　ある女房の加茂のたゝすに七日こもりて
まかりいつるとて物にかきつけゝる「鳥のこのたゝ
すのなかにこもりゐてかへらんときはとはさらめや
とよめりけれはあはれとやおほしめしけんやかて
めてたき人におもはれてさいはい人といはれけり

〔二十九〕　加茂につねにつかうまつりける女房の久敷まいらざりける夢にゆふしてのきれに書たりけるものを直衣きたりける人のたまはせけるを見れは「おもひいつや思ひそいつゝ春雨に涙とりそへぬれしすかたをとありけるをみて夢さめにけりあはれとおもふ程に手に物のにぎられたりけるをみけれはゆふしてのきれに墨三十一付たるにて有ことにあはれにめてたく涙もとゞまらすそありける

〔卅〕　嘉祥寺僧都海恵といひける人のいまだ若くて病大事にてかきりなりける比ねいりたる人俄におきてそこなるふみなと取入ぬとさきひしくいはれけれともさる文なかりけれはうつゝならすおほえて前なる者ともあきれあやしみけるにみつから立走てあかりしやうしをあけてたてふみをとりて見けれはものとも誠にふしきにおほえてみる程に是をひろけて見てしはし打あんして返事書てさし置て又頓てねいりにけり起臥もたやすからすなりたる人のいかなりけるとにかとあやしみける程にしはしねいりて汗おびたゝしく流れて起上りてふしきの夢を見たりつるさて語られけるおほきなるさるのあゐすりし水干きたるかたてふみたる文を持て来つるを人の遅く取入つるに自ら是を取て見つれは歌一首あり「たのめつゝこぬ年月をかさぬれはくちせぬちきりいかゝむすはんとありつれは御返事には「心をはかけてそたのむゆふたすき七のやしろの玉のいかきにとかきて参らせつる也是は山王よりの御うたを給りて侍る也と語られけれはまへなる人あさましくふしきにおほえて是は只今うつゝに侍ること也是こそ御ふみよ又かゝせ給へる御返事よといひけれは正念に住して前なる文ともをひろけて見けるに露たかふことなし其後やまひをこたりにけりいとふしきなり

〔三十一〕　延應元年正月十九日の暁或人の夢に清水の地主よりとて御文ありけるを見けれは一月日のみ杉の板戸のあけくれてすきにしかたは夢かうつゝかと有けりいとあはれにめてたかりけり

〔三十二〕　八幡の袈裟御子かさいはいのゝち打つゝき人に思はれて大菩薩の御事をしりまいらせざりけれは若宮の御たゝりにてひとり持たりけるむすめ大事にやみて目のつぶれたりけるをこと祈りをせすむすめを若宮の御前にくして参りてひさのうへに横さ

まにかきふせて「おく山にしをるしをりは誰かため
身をかきわけてうめる子のためといふ歌を神歌（信云神歌は神前になく〳〵の誤りなるべし）あまたゝびうたひたりけれ
は頓て御前にてひやみ目もさは〳〵とあきにけり

〔三十三〕 讃岐三位俊盛と聞えし人春日の月まうで
をしけるにさたまりたることにて夜泊にまいりて暁
下向しけるに夜ふかゝりけるたひ雨降つていと所せ
かりけるに後生の事をかくほとに信を致して佛にも
つかうまつらはいか計のてたかりなん現世の事のみ
おもひて此宮にのみつかうまつることゝ思ひて春日
山を通りけるに高き梢より菩提の道も我山の道とい
ふ御聲の聞えけるにかきりなく信おこりてたふとく
おほえける

〔三十四〕 ひえの山よかはに住ける僧のもとに小法
師の有けるか坊の前に柿の木の有けるを切てたかん
とていちのきれをわりたりける中にくろみの有ける
か文字に似たりけるをあやしと思ひて坊主にみせた
りけれは南無阿彌陀佛と云文字にて有けるふしき孫
もいふはかりなくて横川の長恵に法師といひける人
に見せたりけれは上西門院おりふし御社に御こもり
有けるに持て參りて御覽せさせければさらせ玉ひて
後白川院にまいらせさせ玉ひてけり蓮花王院の寶藏
に納りけるを我所にこそをくりけれとていきとをり
申けるとなん

〔三十五〕 安貞のころ河内國に百姓有けるか子に蓮
花王といひけるわらはありけり七なりける年死ける
か念佛申て西に向てかたはらなる人に我死たらは七
月といはんにあけて見よと云て死にけり其後人の夢
に必あけよといふとみてあけてけれは舍利に成にけ
り是を取て人におかませんとてかりそめにちやうを
して入たりけるに此帳をほとなくむしのくひたりけ
るを見けれは　歸命蓮花王大聖觀自在廣度衆生界父
母善知識とくひてはての文字の所に虫の死てありけ
るいとふしきにめてたき事也

〔三十六〕 鎌倉武士入道して高野山の蓮花谷にをこ
なふ有けり此者かぬる所にて夜な〳〵女と物語をし
ける音のしけれは具したりける弟子とも大方心えか
たくてひんきの有けるに或弟子此入道に尋たりけれ
はさることあり吾女の鎌倉に有しか夜な〳〵是へ來

る也それに何事もいひせ又古里の事の覺束なさも語り世間の事もはからひなさして「有也といひけれは弟子いふはかりなくふしきに覺えてふしきの餘りに空阿彌陀佛（朱書云守信云空阿彌陀佛は念阿彌陀佛慈阿彌陀佛などいふもありて僧の名なり一言芳談に高野の空阿彌陀佛の御庵室のしつらひのびんぎあしげにて云々とあり）に有のまゝに申けれは空阿彌陀佛うち案してさることもおほく有此女のいたく戀しくおもふによりてたましゐなさのかよふにこそ此定ならは臨終の妨にも成なんす急き祈るへきそとて祈られけり或時に念佛にて試て見むとて蓮花谷のひしり三四十人計めくりゐて此入道を中にすへて念佛をせめふせて申たるに入道おなしく申けるか空阿彌陀佛の秘藏の本尊の帳に入たるかおはしましけるそのかたをつく〳〵とまもりておそろしけに思ひてわな〳〵（朱書云守信云わな〳〵といふ詞平家物語にも見えたり）さふるひけれは空阿彌陀佛よりてなとおそろしけにおもひたるそととへは其御本尊の御前にかの女房かまうてきて我を世に恨めしけに見て候かなとやらんあまりにおそろしくと申けれは其時空阿彌陀佛門々不同八萬四爲滅無明果業因利劍即是彌陀號一聲稱念罪皆除とたかく誦せられたりけれはこの女のかほの中より二にわれてちるやうに見えてうせにけり是をは人はみすたゝ入道はかり見ていとゝおそろしくてつん〳〵とかみへおとりたるか其後はもとの心になりてをこなひけり念佛のちからのたふとき事いとゝ人々たふとびあひけりほんたいの女はつや〳〵さることなくてもとのやうに鎌倉に有けりとそ聞えし天魔のしわさか又女の戀しとおもひけるかゆへにかいとふしきなり

【三十七】少輔入道（寂蓮）ときこえしうたよみありまの社にまうてゝ社の前なるものを見て　此山のしゝいかめしく見ゆるかないかなる神のひろまくそこはとよめりけるいと興有てこそ聞えけれひんなきさまにてそ聞ゆるすへてかやうの歌いみしくよまれけるとかや寄鳥述懐の歌に「このうちも猶うらやまし山からの身のほとかくす夕皃の宿（玉）

風の氣有て灸治しけるに人のとふらひて侍りける返事に「年へたる風のかよひちたつねすは蓬か關をいかゝすへまし

此人うせて後宇治なる僧の夢にありしよりことの外にほけたるさまにて「我身いかにするかの山のうつつにも夢にも今はとふ人のなき（朱書云守信云伊勢物語に「するかなるうつの山へ）

（のうつゝにも夢にも人の逢ぬなりけりとあり）となかめてけるいとあはれなり此うたのさまうつゝに其人の好まれしすかたなるこそまことにあはれに侍りけれ

〔三十八〕　或人の夢に其正體もなきものかけ（のイ）のやうなるかみえけるをあれは何人そとたつねけれは紫式部也そらことをのみおほくしあつめて人の心をまとはすゆへに地獄におちて苦をうくる事いとたへかたし源氏のものかたりの名をくしてなもあみた佛といふ歌を巻毎に人々によませて吾くるしみを訪ひ給へといひけれはいかやうによむへきにかと尋けるに「桐壺にまよはむやみもはるはかりなもあみた佛とつねにいはなむとそいひける

〔三十九〕　昔の周防内侍か家のあさましなから建久（後鳥羽）の比まで冷泉堀川の西と北とのすみに朽殘りて有けるを行て見けれは「我さへ軒のしのふ草（頭注云金葉雑上家を人にはなちてたつとて柱にかきつけ侍りける周防内侍「住わひて我さへのきの忍ふ草しのふかた〳〵しげき宿かな）と柱にむかしの手にて書付たりしか有けるいとあはれなりけり是をみてあるうたよみかきつけゝる「是やその昔のあとゝおもふにも忍ふ哀のたえぬ宿哉

〔四十〕（頭注云十訓可施人惠事）　近ころ和歌の道ことにもてなされしかは内裏仙洞攝政家何れもとり〳〵にそこをきはめさせ給へり臣下數多聞えし中に民部卿定家宮内卿家隆とて家のかせ（朱書云家の風　守信云拾遺雑上に「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹せてしがなさあり）たゆることなく其道に名を得たりし人々也しかは此二人にはいつれも及はさりけるに或時攝政殿（後京極）宮内卿（家隆）をめして當時たゝしき歌よみおほく聞ゆる中に何れかすくれ侍る心におもはんやう有（イ先）のまゝにと御氣有けれはいつれともわきかたく候とはかり申て思ふやう有けなるをいかに〳〵とあなかちに（強）とはせ給ひけれはふところよりたたう紙（朱書云たゝう紙　守信云タゝミ紙の音便にて紙を疊みて懷中し用に供ふるもの也）をおとしてやかて出にけり御覽せられけれは「明は又秋の半も過ぬへしかたふく月のおしきのみかはと（新勅秋上）書たり此歌は民部卿（定家）の歌也かゝる御尋あるへしとはいかてかしるへきたゝもとよりおもしろくおほえて書付てもたれけるなめり其後また民部卿（定家）を召てさきのやうにだつねらるゝに是も申やりたるかたなくて「かさゝきのわたすやいつこ夕霜の雲井にしろきみねのかけはしと（新勅冬）たかやかになかめて出ぬ是は宮内卿（家隆）の歌也けりまめやかの上手のこゝろは

されはひとつなりけるにや
〔四十一〕後拾遺をえらはれける時秦兼方といひける随身「去年みしに色もかはらす咲にけり花こそものはおもはさりけれ」と云歌をよみてえらふ人のもとに行て此歌入んとのそみけるに花こそといへるかい出の名に似たると難しけるを聞てたちさまに此殿は勅撰なとうけたまはるへき人にてはおはせさりけるものを「花こそ宿のあるしなりけれ（頭注云拾遺雑春公任卿「春きてそ人もとひける山ささは花こそ宿のあるしなりけれ）といふ歌もあるはといひかけて計るいとはしたなかりけり
〔四十二〕西行法師か陸奥のかたに修行しけるに千載集えらはるると聞てゆかしさにわさとのほりけるにしれる人行あひにけり此集の事とも尋聞て我よみたる「鴫たつ澤の秋のゆふ暮（頭注云新古今秋上西行法師「心なき身にもあはれはしられけり」下同）といふ歌や入たると尋けるにさもなしといひけれはさてはのほりてなにゝかはせんとてやかて帰りにけり
〔四十三〕或人歌よみ集て三位大進と聞えし人のもとに行て見せあはせけるに侍るといふ事をよみたりけるを歌のこと葉にあらすといひけれはふるき歌にまさしく有といひけりよりもあらしものをといふにいてひき出て見せ奉らんとて古今をひらきて「山かつのかきほにはへるあをつゝら（頭注云古今戀四籠「山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし）といふ歌をみせけるいとおかしかりける
〔四十四〕下毛野武正といひける随身の関白殿の北のたいのうしろをまことにゆゝしけにてとをりけるにつほねのさうしあるゆゝしはとふく（朱書云守信云はとふくは鳩笛吹くにて手を合せて鳩の聲のやうに吹ならす道也好忠集に「まふしさし鳩ふく秋の山人はおのかありかを知らせやはする）秋とこそおもひまいらすれといひたりけれはついふされといひてけり女心うけにてかくれにけり随身所にて秦兼弘といふ随身にあひて北のたいのめのわらはへに散々にのられたりつると云ければいかやうにのられつるぞととはれて鳩吹秋とこそ思へといふに兼弘は兼方か孫にて兼久か子なりければかやうの事心えたる者にて口惜事のたまひけるかな府生殿をおもひかけていひけるにこそ「み山出てはと吹秋の夕暮はしはしと人をいはぬはかりそといふ歌の心なるへししはしとまり給へといひけるにこそ無下に色なくいかにのり玉ひけるぞといひければいで〳〵さては色直して参らんとてありつる局のしも口に行て物承らん

たけまさはとふく秋そよう〳〵といひたてりけるいとおかしかりけり

〔四十五〕鳥羽院（七十四）の御時花の盛に法勝寺へ御幸ならんとしけるに執行なりける人見てとて參りけるに庭のうへに所もなく花散しきたりけるを淺ましき事なり只今御幸のならんするに今まで庭をはかせさりけるとしかり腹立て公文の從儀師をめして今迄いかにさうぢをばせさりけるぞふしぎ也といひければつい（突）ひざまづきて「ちる（散）もうし（憂）散しく庭もはか（掃）まうし花に物思ふ春のとのもりと申てこや御房かはき侍らぬになといひければは丶かつひといひて猶しかりけり

〔四十六〕（頼德）承久の頃住吉へ然るへき人の參らせ玉ひけるに折ふし神主經國京へ出たりける人をはしらせて住の江殿など掃除せさせよといひやりたりけるにあまりのきらめきに年比しかるべき人々の書をかれたるうたとも柱なげし妻戸にありけるを皆けつり捨てけり神主くだりて是を見てこはいかにせんと足ずりをして悲しめどもかひなかりけりこれを見てふるき尼の書付ける「世中のうつりにけれは住吉の昔のあともとまらさりけり是は承久の亂の丶ち世中あらたまりける時のこと也

〔四十七〕松島の上人といふ人有けり修行者のあはむとてゆきたりけるに幽玄なる僧の出あひたりければいと思はすに覺えてかへりいりたりける跡に又ありける僧にあれは誰にておはしますにかと尋ければあれこそひじりの御房よといひけるにたふとげになんとやおはしますらんとこそおもひつれといふをひじり物こしにきゝてよめるうた「紫の雲まつ島にすめはこそ雲ひじりとも人のいふらめとよめりけり此ひじりのもとへ肥後の右衞門入道といひけるもの行てかくてはおはします程何事か候と尋ければさせる事も侍らす法花經なとおほえ奉りてねたるおり〳〵此島の松の葉毎に金色の光の見えてかくやく事なとぞ侍るといはれけるいとめでたかりけり

〔四十八〕文學上人佐渡國に流されたりけるか召歸されたりけるにあるやんことなき歌よみのもとより「わかれしをかなしと聞し老の身の今まてありしうれしきはいかにと有ければかへし「嬉しさも宮こに出しそはいかに今はかへりてかたるおひせを此上人のうたに「世中に地頭ぬす人なかりせは人の心はの

さけからまし 朱書云古今春上に「世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし ことよみて我身に業平にはまさりたり春の心はのどけからましといへる何條春にこゝろのあるべきぞといひけり

〔四十九〕小侍從か子に法橋實賢と云もの有けりいかなりける事にか世の人是をひきがへるといふ名をつけたりける法眼をのぞみ申て「法の橋のしたに年ふるひきかへる今ひとあがりとびあからばやと申たりければやかてなされにけり

〔五十〕弘誓房といふ說經師人の物をかりておほく成てのちかへしやるとて其文のうちに書付ける「夜やさむき衣やうすきかるせにの日比をへてはあとつかひつゝ

〔五十一〕然るへき所に佛供養しけるに堂のかざりよりはしめてえもいはぬ聽聞の局のきちやうの中にそらたきの香みちていみしかりけるに聽聞の人のおほくあつまりて耳をすましたるにうちよりおひたゝしくおほきなるへ 屁也 の音出きにけり皆人興さめて侍に導師とりもあへず放逸邪見の里にはついくわをもおしむ聽聞隨喜の局よりおほへをこそうち出されたれといひたりけるあさましくもおかしくも有けり

〔五十二〕或說經師の請用して殊にめでたくたふとく說法せんとしけるにはこ 朱書云守信云はこは屎也宇治拾遺物語假名暦の條に或日ははこすべからずとかきたれば云々 のしたかりけれはといそか〇はイしくなりてよろついそきて布施もとらすかへりて物ぬきちらして急きひどの 朱書云ひどの雪隠の事也 へ行たりけるにへはかり 朱書云へばかり庇のみ也 ひりて又ものもなかりけりかゝるべしと知たらば高座の上にてもしはし 暫時也 こらへて說經をもすべかりけるものをと悔しく思ひてける程に其次の日又人に呼れて說經しける程に又はこのしたかりけるをすかしてんとおもひて少し居なをるやうにしけれはまことの物おほく出にけり此僧すべきかたなくて「きのふはへにすかされてはこをつかまつるけふははこにすかされてへをつかまつるといひて走りおりてにげ出にけれはうへのはかまよりたりおちて堂の中きたなく成にけり聽聞の人はなをさへて興さめてけりいとおかしかりけり

〔五十三〕念佛者の中につち遊いふけつ ふイ と云僧有ける或所にいたふろ 朱書云守信云いたふろは板もて作れる風呂なるべし と云物をして 閉 人々入けるに此僧目をやむよしいひけれは目をひき

ぎて 朱書云ひさぎてはふさぎてなるべし いるはくるしかるましきよしを
人々いひければさらはさて目をゆひて板ふろのあり
さまもしらぬもの丶目は見えざりければ風呂の前に
わき戸のうちのありけるにふろと心えてはたかにて
抱也 か丶へたる所もうちとけてゐにけり人々女房なと見
をこせたるにはだかなる法師のかくし所も打出して
あなぬるのふろや 朱書云あなぬるのふろや呼徹温ぃ風呂やといふ意也 鳴たけ〳〵と
いひてゐたりけるいとおかしかりけり人々笑ける聲
を聞てあやしくおもひて目をあけて見れは風呂にて
もなき所にゐて人々笑ひける時にあさましくおほえ
てはしりにけにけり人々おかしく〇思ひあへりけり もイ

朱書云此奥書類從本ニナシ
右今物語一帖者右京權大夫信實朝臣之抄也信實者
爲經入道寂超之孫右京大夫隆信朝臣之子少將内侍
辨内侍等之父御歌並書而講達也此書借洛東岡崎隱
士村井古巖之藏書寫且以橫田茂悟屋代諸賢本再三
遂校合聊注愚案令爲鏤梓請諸賢淸書畢

天明六年丙午二月二十五日　檢校保己一

朱書云群書類從本奥書云右今物語以村井敬義本書寫與屋代弘賢
橫田茂語本校合了

今昔物語出典攷

此今昔物語條條の出典は三拾年前狩谷棭齋存生の比これかれ書付おかれたるをかりてそのまゝにうつしおきたるに又友人伴氏直方といふものゝ挿架の書におなし筋の物あれは借得てくらべみるに藍本はひとつものにて棭齋氏增補ありたるものとみえて本朝の部は殊に出處おほくもれたり全部にわたりては伴氏のかたにのみ出處しるしおけるもあれはこれをも書加へおきたるをこのころ友人木村正辭氏又標目　考と題したるをかされたりひらきみるに是も兩氏の書とはしめはひとつものとみえてつましるしのまたくおなしさまなるもおほし天竺の部には殊におほく出處をのせたれは今そのまゝに書入おく△の印を冠して兩氏と混せしめじと也おもふに木村氏のかされたるは釋氏の人の物したるものならむ天竺のみ詳にして本朝は甚麁略なれはしかおもはるそも〳〵天竺と震旦とはこゝろをつくして尋たらんにはしられさるはすくなかるへし本朝の事は此書にのみ殘りて他書にはそのつたへの絕たるおほかるへくおもふ也此三書にもれたるをもいつるまに〳〵書くはへおかむとそおもふ

安政庚申花朝後一日の夜燈下にしるす

ましての屋の主人

三寶感應要略錄　孝云此書は隆國と同時なれは此書より取たるにはあらて三寶諸に本つくものよりとりたらんなのれ法華攷證に詳に云おきたり

法苑珠林	佛祖統紀	諸經要集
楊鴫曉筆抄 摘書目雜類	賢愚經	雜寶藏經
經律異相	西域記	說因
宇治拾遺	大藏一覽	大論
報恩經	法華傳	漢書
白氏文集	史記	淮南子
述異記	法華驗記	元亨釋書
靈異記 摘書目傳記	太子傳 摘書目傳記	日本往生極樂記
	扶桑略記	袖中抄
古事談 百六二百八可考	俊賴無名抄	弘法行狀記 續類從二
	拾遺往生傳 續類從百九十六	
古今著聞	公事根源	宇治大納言物語
續往生傳	發心集	弘傳略頌抄 續類從二百十
本朝神仙傳 續類從百九十三	編年集成	遺告

十訓抄　三國傳記　地藏靈驗記
本朝文粹　撰集抄　事類眞言傳
冥報拾遺　冥報記　太平廣記
榮花物語　百因緣集　宗鏡錄
涅槃像考文抄　大般涅槃後分　付法藏經
大原問大祓書　雜譬喩經　孝子傳
日記故事大全　說苑　扶桑往生傳

今昔物語集卷第一

天竺

釋迦如來人界宿給語第一△統紀二卷ノ五葉珠林十四卷ノ初葉　○釋迦如來人界生給語第二△統紀二卷ノ六葉　○悉多太子在城受樂語第三△統紀二卷ノ十二葉　○悉多太子出城入山語第四△統紀二ノ十三　○悉多太子於山苦行語第五△統紀二ノ十七大智度論十四ノ十五　○菩薩降伏天魔語第六△統紀二　○菩薩於樹下成道語第七△統紀二ノ十七　○釋迦爲五比丘說法語第八△統紀二ノ十九四谷名目抄一　○舍利弗與外道術競語第九△統紀三ノ廿六　○提婆達多與佛諍語第十△統紀二ノ十一大經十九　○佛入婆羅門城乞食給語第十一△智度八ノ二　○佛勝宻外道家行給語第十二△珠林五十ノ五十葉　○佛滿財長者家行給語第十三△珠林六十八ノ二葉　○佛敎化婆羅門城人給語第十四△三國傳記三十二葉　○提何長者得自然太子語第十五△涅槃獅子品　○鴦堀魔羅切佛指得道語第十六△珠林三十一ノ十三葉　○佛迎羅睺羅令出家給語第十七△統紀三ノ廿九葉　○佛敎化難陀令出家給語第十八△寶物集△雜寶藏經六ノ十七葉　○佛夷母憍曇彌許出家給語第十九△統紀三ノ卅一葉　○佛耶須多羅許出家給語第二十△珠林卅一ノ八葉　○阿那律跋提出家語第二十一　○斛羅羨王一口出家生天第語第二十二△諸經要集四十六　○仙道王詣佛所出家語第二十三三寶感應要略錄上第二條　○郁伽長者

詣佛所出家語第二十四○和羅多比丘出家語第二十五○福增比丘出家語第二十六○翁詣佛所出家語第二十七○醉婆羅門不意出家語第二十八△智度十三ノ三十三 ○波斯匿王阿闍世王合戰語第二十九○帝釋阿脩羅合戰語第三十△珠林十九ノ二 ○須達長者造祇園精舍供養佛語第三十一△雜寶藏經二ノ十八珠林五十二ノ二百因縁集三ノ五葉 ○舍衛國勝義供養迦葉得福語第三十二○貧女以糸供養佛待記別語第三十三○長者家牛乳供養佛語第三十四○舍衛城人以伎樂供養語第三十五○婆羅門遠佛一町語第三十六△要集三ノ十七葉○財德長者幼子稱佛遁難語第三十七○舍衛國五百草賊稱佛遁難語第三十八

今昔物語集卷第二 藏本卷二(據朽木氏本爲)△コレチ三卷トナスヘシ孝云イカナル意ニカ△ノ次第コノ目ハノ方此次卷ノ目六ノ後ニアレハシカキモヘルナラン別ニ深意アルニハアラヌナルヘシ

天竺

佛御父淨飯王死給時語第一珠林百十六卷四 ○佛爲摩耶夫人昇忉利天給語第二純紀四卷雜寶藏經一ノ十一 ○佛報病比丘恩語第 ○佛弁卒堵婆給語第 ○佛入家六日宿給語第 ○老母依迦葉教化生天報恩語第 珠林七十一卷一 ○婢依迦旃延教化生天報恩語第 諸經要集六四十六 ○舍衛國金天比丘語第 珠林七十卷二諸經要集六 ○舍衛城寶天比丘語第 榻鴫曉筆抄十二卷賢愚經二○舍衛城金錢比丘語第 賢愚經 ○舍衛城寶手比丘語第 珠林五十卷十二 ○王舍城擧指比丘語第 珠林四十八卷四 ○舍衛城齊離比丘尼○阿育王女子語第 珠林九十八卷七 ○須達長者蘇曼女生十卵語第 賢愚經十三卷經律異相卅八卷 ○天竺依燒香得口香語第 ○迦毘羅城金色長者語第 ○金地國王語佛所語第 ○阿那律得天眼語第 珠林四十八卷七 ○薄拘羅得善根語第 珠林五十五卷九 ○天人聞法得法眼淨語第 ○常具天蓋人語第 珠林五十卷十三 ○樹提伽長者福報語第 諸經要集七六卷廿三珠林七十卷 ○婆斯匿王娘善光女語第 雜寶藏經二卷十五

今昔物語集卷第三 藏本(據朽木氏本爲)卷三△コレチ卷二トスヘシ孝云イカナル意ニカ

天竺毘舍離城淨名居士語第一 宗鏡錄十八卷一 ○文殊生給人界語第二△三寶感應錄下卷四釋迦九代相法華科注上一 ○目連爲聞佛御音行他世界語第三△智度十ノ二 ○舍利弗攀縁暫籠居語第四○舍利弗目連競神通語第五△珠林三十四ノ六○舍利弗慢阿難語第六○新龍伏本龍語第七○瞿波羅龍語第 ○龍子免金翅鳥難語第 △珠林四十七ノ三 ○金翅鳥子免修羅難語第 ○釋種成龍王聟語第 ○須達長者家鸚鵡語第 △要集二ノ十二 ○佛說耶輸多羅宿業給語第 △珠林十六ノ八葉 ○波斯匿王娘金剛醜女語第 △雜寶藏經二ノ十三 ○摩竭提國王燼杭太子語第 ○貧女現身成后語第 三國傳記十九ノ九 ○羅漢比丘爲感報在獄語第

△大藏一覽五ノ三十七 ○駈二八羅漢弟子比丘語第 ○須達家老婢得道語第 △要集十五ノ三十五 ○佛頭陀給鸚鵡家行給語第 ○長者家淨屎尿女得道語第 ○盧至長者語第 法苑珠林七十七 ○△七十四六葉宇治拾遺六第三條 ○跋提長者妻慳貪女語第 △珠林九十四ノ十二 ○目連尊者弟語第 ○后背王勅詣佛所語第 △珠林三十ノ七 ○佛以迦旃延遣罽賓國語第 △雜寶藏經七ノ九 ○阿闍世王殺父王語第 △珠林六十二ノ十一 ○佛入涅槃告衆會給語第 ○佛入涅槃給時受純陀養給語第 △涅槃像考文抄ノ十三 ○佛入涅槃給時遇羅睺羅語第 ○佛入涅槃給後入棺語第 △統紀四ノ九 ○佛涅槃後迦葉來語第 △大般涅槃後分下ノ九葉 ○佛入涅槃給後摩耶夫人下給語第 △涅槃後分ノ二十 ○荼毘佛御身語第 △涅槃後分下ノ十四 ○八國王分佛舍利語第 △統紀四ノ十三

今昔物語集第四

天竺付佛後

○阿難入法集堂結集第一 珠林十九卷ノ六 ○波斯匿王請羅睺羅語第二○阿育王殺后立八萬四千塔語第三 珠林五十卷諸經要集三卷ノ三○狗拏羅太子抉眼依法力得眼語第四 西域記三卷ノ十 ○阿育王造地獄堕罪人語第五 ○優婆崛多試弟子語第六 寶四卷五宇治拾遺十三卷 ○優婆崛多會阿斯匿王妹語第七 說因卷十 ○優婆崛多降天魔語第八 統記五付法藏經△ ○陀樓摩和尚行所々見僧行語第九 宇治拾遺十二卷 ○比丘僧澤觀法性生淨土語第十○羅漢比丘値山人打子語第十一○羅漢比丘教國太子死語第十二○於海中値惡龍人依比丘教免害語第十三○國王入山見裸女令着衣語第十四○舍衛國髮起長者語第十五○乾陀羅國爲二人女繪師成半身語第十六 三寶下第二條△上十八葉 ○佛爲盗人侶被取屈閉玉語第十七 大藏一覽四ノ廿 ○國王以髏爲令踏殺罪人語第十八 珠林二十五諸經要集二卷ノ十一 ○僧房天井鼠聞經得語第十九○爲國王被召妻人依唱三　免蛇害語第廿○爲國王負過人供養三寶免害語第二十一○波羅奈國人抉妻眼語第二十二○天竺大夫語第二十三○龍樹菩薩作隱形藥語第廿四 統紀五卷ノ十七 ○龍樹提婆二菩薩傳法語第二十五 統紀五卷ノ廿宇治拾遺十二卷西域記十憍賞彌國 ○無著世親二菩薩傳法語第二十六 西域記五遺經部下 ○護法清辨二菩薩空有諍語第二十七 大原問答六書拔一卷ノ十一 ○天竺白檀觀音現身語二十八○天竺山人見入定人語第二十九○天竺波羅門貫死人頭賣語第三十 諸經要集二卷珠林五△二十五七 ○天竺國人眼乳成瞳擬殺耆婆語第三十一○震旦國王前阿竭陀藥語第三十二○天竺長者婆羅門牛突語第三十三○天竺人兄弟持金通山語第三十四 要集十五卷ノ八 ○佛御弟子値田打翁語第三十五 珠林六十五卷ノ五 ○天竺安息國鸚鵡鳥語第三十六 三寶上第十七條 ○

執師子國渚寄大魚語第三十七（三寶上第十八條）〇天竺人得富貴語第三十八〇未田地阿羅　造彌勒語第三十九（三寶下第十一條）〇天竺貧女書寫法經語第四十〇戀子至閻羅大王宮人語第四十一

今昔物語集卷第五

天竺付佛前

僧加羅五百商人共至羅剎國語第一（西域記十一卷ノ三宇治拾遺六卷）〇國王狩鹿入山娘被取師子語第二（西域記十一卷ノ二珠林十一卷）〇國王爲盜人被盜夜光玉語第三〇一角仙人被負女人從山來王城語第四（大論十七卷ノ十一）〇國王入山狩鹿見鹿母夫人爲后語第五（雜寶藏經一卷ノ十九報恩經三卷）〇般沙羅王五國卯初知父母語第六〇波羅奈國羅睺大臣擬罰國王語第七〇大光明王爲婆羅門與頸語第八〇轉輪聖王爲求法燒身語第九〇國王爲求法以針被螫身語第十〇五百人商人通山餓水語第十一〇五百皇子國王御行皆忽出家語第十二〇三獸行菩薩道莵燒身語第十三（珠林七ノ二五十四ノ四獸可尋獸供養）〇獅子哀猿子割肉與鷲語第十四（珠林八十一卷ノ）〇王宮燒不歎比丘語第十五〇國王好美菓人與美菓語第十六〇國王依鼠護勝合戰語第十七〇身色九色鹿住山出河邊助人語第十八〇龜爲人報恩語第十九（要集八卷ノ三珠林六十三卷）〇狐爲獸王乘獅子死語第二十（珠林六十七卷ノ五）〇狐借虎威被責發菩提心語第二十一〇東城國皇子善生人通阿就頸女語第二十二〇舍衛國鼻缺猿供養帝釋語第二十三〇龜不信鶴敎落地破甲語第二十四（珠林五十九ノ八同十九△九十九ノ十葉）〇龜爲猿被謀語第二十五（珠林六十七ノ七）〇林中盲象爲母致孝語第二十六（雜寶藏二ノ八）〇象足蹈立扶人令拔語第廿七〇五百商人於大海値摩竭大魚語第廿八（珠林四十六△雜譬喩經）〇五人切大魚肉食語第二十九〇天帝釋夫人舍脂音聞仙人語第三十（經律異相三十九卷）〇牧牛人入穴不出成石語第三十一（宇治十三卷）〇七十餘人流遣他國語第三十二（雜寶藏經一卷ノ八珠林六十三卷）

今昔物語集卷第六

震旦付佛法

秦始皇的天竺僧渡語第一（宇治拾遺十五△統紀卅五ノ十九）〇後漢明帝時佛法渡語第二（△統紀三十六八葉）〇梁武帝時達磨渡語第三（△統紀三十ノ）〇康僧會三藏至胡國行出家佛舍利語第四〇鳩摩羅焰盜佛傳震旦語第五〇玄奘三藏渡天竺傳法歸來語第六（△統記卅一ノ十二三國傳記二ノ卅三）〇善無畏三藏胎藏界曼陀羅渡震旦語第七（三寶上第三十五葉三十二條）〇金剛智三藏金剛界曼陀羅渡震旦語第八（同五葉）〇不空三藏誦仁王咒現驗語第九（同中ノ四十五）〇佛陀波利尊勝眞言渡震旦語第十（同中ノ廿八）〇唐虞 安良兄依造

釋迦像得活語第十一（同上卷ノ十九）○疑觀寺法慶依造釋迦像得活語第十二（同上ノ十四）○李大安依佛助被害得活語第十三（同上ノ十五）○幽州都督張高値雷依佛助存命語第十四○悟眞寺惠鏡造彌陀像生極樂語第十五（三寶上ノ十六）○安樂寺惠海畫彌語像生極樂語第十六（同廿二）○開覺寺道喩造彌陀像生極樂陀第十七（同廿二）○並洲張元壽造彌陀像生極樂語第十八（同廿三）○並洲道如造彌陀像語第十九（同廿四）○江陵僧亮鑄彌陀像語第二十（同△珠林二十三ノ五十）○溜洲司馬造藥師佛得活語第二十一（三寶上ノ廿三）○貧女錢供養藥師像得富語第二十二（同ノ三十一）○溜洲女依藥師佛助得平産語第二十三（同ノ廿三）○勇洲夏侯均造藥師像得活語第二十四（同ノ廿二）○雙惠造阿閦佛生歡喜國語第二十五（同ノ廿九）○國子祭酒蕭璟得多寶語第二十六（法華傳卷五ノ八）○並洲常慜渡天禮盧舍那語第二十七（三寶上ノ三十三）○興善寺含照禮子佛語第二十八（同ノ廿五）○汴洲女禮金剛界得活語第二十九（同ノ廿六）○沙彌念胎藏界遁難語第三十（同ノ廿七）○天竺迦彌多羅花嚴經傳震旦語第三十一（同中卷ノ一）○僧靈幹講花嚴經語第三十二（同ノ八）○王氏誦華嚴經偈得活語第三十三（同ノ十）○空觀寺沙彌視華嚴界得活語第三十四（同ノ十一）○孫宣德書寫華嚴經語第三十五（同ノ九）○新羅僧俞受持阿含語第三十六（同ノ十三）○並洲道如書寫方等生淨土語第三十七（同ノ十七）○會稽山陰縣書生寫維摩經生淨土語第三十八（同ノ十九）○法祖於閻魔王宮講楞嚴經語第三十九（同ノ二十）○道珍始讀阿彌陀經語第四十（同ノ廿一）○張居道書寫四卷經得活語第四十一（同ノ廿三）○義淨三藏譯最勝王經語第四十二（同ノ廿四）○曇鸞燒仙經生淨土語第四十三（同ノ廿一）○僧感持觀無量阿彌陀經語第四十四（同ノ廿二）○梓洲郪縣姚待寫四部大乘語第四十五（同ノ廿五）○張李通寫藥師經延命語第四十六（同ノ廿六）○張李通寫藥師經延命語第四十七（同ノ廿六）○童兒聞壽命經延命語第四十七（同ノ廿八）

今昔物語集卷第七

震旦付佛法

唐玄宗初供養大般若經語第一（三寶中卷ノ廿三）○唐高宗代書生書寫大般若經語第二（同ノ廿四）○豫州神母聞般若生天語第三（同）○僧智諮誦大般若經二百卷語第四（同ノ廿六）○並州道俊寫大般若經語第五（同ノ廿六）○靈運渡天竺蹈般若所在語第六（同ノ廿八）○比丘讀誦大品般若得天供養語第七（同四十）○天水郡志達依般若延命語第八（同ノ四十一）○寶室寺法藏誦持金剛般若得活語第九（三寶中卷）○並州石壁寺鴿聞金剛般若經人語第十（法華傳九ノ四）○唐代依仁王般若力降雨語第

十一三寶中卷ノ四十六○唐代宿大山廟誦仁王經僧語第十二同ノ四十六
六○眞表比丘誦無量義經渡震旦語第十三同ノ四十六第六十一第六十二
○法花持者現身香語第十四同ノ四十八○僧爲羅剎女被嬈
亂依法花力存命語第十五○定林寺普明轉讀法花經伏
靈語第十六法華傳四ノ卷三寶中○會稽山弘明轉讀法花經縛鬼語
第十七法華傳四ノ七○河東尼讀誦法花經改持經文字語第十
八同八ノ十二○僧行宿太山廟誦法花經見神語第十九同十四○
沙彌讀法花經忘二字遂得悟語第廿○豫州惠果讀誦法
花經救厠鬼語第二十一珠林百十三卷法華傳四ノ六○死官寺僧惠道講
後寫法花經語第二十二法華傳八ノ十六○絳州孤山僧寫法花
經救同法苦語第二十三同ノ三十六○惠明七卷分八座講法花
經語第二十四三寶中卷ノ五十第六十六法華傳三○絳州僧徹誦法花經臨
終現瑞相語第二十五法華傳五ノ六○魏州史崔彥武知前生持
法花語第二十六同七ノ二○韋仲珪誦法花現瑞相語第二十
七同五ノ九○中書令岑文本誦法花免難語二十八同五ノ七○都
水使者蘇長妻持法花免難語第二十九同七ノ二○右監門校
尉李山龍誦法花得活語第卅同六ノ十五○爲救馬寫法花
經免難人語第三十一同八ノ十八○清齋寺玄渚爲救道間寫
法花經語第三十二法華傳八ノ一○仁壽寺僧道懸講涅槃經語
第四十一珠林三十三卷○李思一依涅槃經力活語第四十二冥記

拾遺[illegible]記卷九○陳公夫人豆盧氏誦金剛般若語第四十三珠林二十
六卷ノ十三太平廣記百三冥報記○河東僧道英知法語第四十四○幽州
僧知苑造石經法門語第四十五珠林卌六卷ノ十一冥報記五太平廣記九十一○眞
寂寺僧惠如得閻魔王請語第四十六○右監門兵曹參軍
鄭師辨活持戒語第四十七○華州張法義依懺悔得活語
第四十八冥報記六太平廣記百十五

今昔物語集卷第九

震旦付孝養

郭巨孝老母得黃金釜語第一△孝子傳○孟宗孝老母得冬笋
語第二△孝子傳○丁蘭造木母致孝養語第三△孝子傳○魯州人
殺隣人不負過語第四○會稽洲揚威入山遁虎難語第五
△日記故事大全卷ノ八○張敷見死母扇戀悲母語第六○會稽洲曹
娥戀父江死自亦身投江語第七△後漢列女傳○歐尙戀父死墓造
菴居住語第八○劉都僧賢從夷城迎父孝養語第九○東
陽顏烏自葉父墓語第十○韓伯倫負母狀泣悲語第十一
△公說○朱百年爲悲母脫寒衣衾語第十二○　人以父
錢買龜放河語第十三△法華傳八○江都孫寶行冥途濟母活
語第十四○河南元大寶死報告叙　夢語第十五○素曾
死流菰夢告可得官期語第十六○隋代人得母成馬悔悲
語第十七○韋慶植殺女子成羊悔悲語第十八宇治遺十三卷太平廣記

百卅四引珠林△珠林九十二ノ三 ○長安人女子死成羊告客語第十九太平廣記百三十四△珠林九十二ノ四 ○周代臣伊尹子伯奇死成鴝報繼母怨語第二十○代洲人好畋獵失女子語第二十一○兗洲都督遂女子兎死犬責語第二十二○京兆潘果拔羊舌得現報語第二十三 太平廣記四百三十九引珠林△珠林九十一ノ五 ○冀洲人子食鷄卵得現報語第二十四 △珠林八十ノ十一 ○隋代天女姜略好鷹獵現報語第廿五 太平廣記百三十二冥報記五△珠林八十ノ十 ○隋李寬依殺生得現報語第二十六○周武帝依食鷄卵至冥途受苦語第廿七 冥報記四 ○遂洲總管孔恪修懺悔語第廿八 太平廣記三百八十一引冥報記 ○京兆殷安仁免冥途使語第廿九 太平廣記四百卅六引珠林△珠林九十一ノ五 ○魏郡馬生嘉運至冥途活語第卅○柳智感至冥途歸來語第三十一○侍御史遜迴璞依冥途使錯從途飯語第卅二 太平廣記三百七十七冥報記 ○大史令傅英行冥途語第三十三○刑部侍郎宋行質行冥途語第三十四 廣記百十六冥報記 ○慶抱被殺曾氏報怨語第三十五○眭仁蒨願知冥道事語第三十六 冥報記 ○周善通依破戒現失財遂貧賤語第三十七○後魏司徒不信三寶得現報遂死語第三十八○卞士瑜父不償功成牛語第卅九 廣記四百三十四 ○梁元帝誤呑珠一目眇語第四十 廣記百三十一 ○隋大業代獄吏依惡行子身有瘡死語第四十一○河南人婦依姑令食蚯蚓羹得現報語第四十二 廣記百六十二冥報記△珠林六十三ノ三 ○晉獻公王子申生依繼母麗姬讒自死語第四十三○莫耶造劍獻王被殺子眉間尺語第四十四 △珠林三十六ノ三 ○厚谷諫父止不孝語第四十五○三人會樹下孝其中老語第四十六

今昔物語集卷第十

震旦付國史

○秦始皇在咸陽宮政世語第一○漢高祖未在帝位時語第二 漢書本紀 ○高祖罰項羽始漢代爲帝王語第三○漢武帝以張騫令見大河水上語第四 イ ○漢前帝后王照君行胡國語第五 白氏文集 ○唐玄宗后楊貴妃依皇寵被殺語第六 白氏文集 語第八イ 奇日吳招見流詩其主 俊頼無名抄下つひのあふせ ○孔子道行値童子問申語第七○孔子逍遙値榮啓期聞宮語第八 宇治六卷 ○莊子 許借粟語第九○莊子行人家主殺雁肴語第十○莊子見畜類所行走逃語第十一○費長房夢習仙法至蓬萊語第十二 後漢書列傳七十二 ○孔子爲致盜跖行其家怖返語第十五 宇治十五卷 ○養由天現十日時射落九日語第十六 淮南子堯時十日並出羿射之三教指歸刪補三ノ八可考 ○李廣箭射立似母巖語第十七 前漢書列行廿四 ○霍大將軍値佗妻死語第十八○蘇規破鏡與妻遠行語第十九○紀札劍懸猪君墓語第二十 史記 ○長安女代夫逆枕爲敵被殺語第二十一○宿驛人

隨遺言金副死人置得德語第二十二○病成人形醫師開其言治病語第二十三左傳○賈誼死後於墓文敎子語第二十四○高鳳任䇳洲刺史迎舊妻語第二十五○文君與箏値相如成夫妻語第二十六○三人兄弟賣家見荊枯返直返住語第二十七○國王行江釣魚見大魚怖返語第二十八○國王服乳膜擬殺醫師語第二十九○國王前阿竭陀藥來語第三十○震旦國王愚轉玉造手語第韓非子十四○漢武帝蘇武迷胡塞語第前漢書列傳二十四○二國互挑合戰語第三十一○盜人入國王倉盜財殺父語第三十二○立生贄國王山國語第三十三○聖人犯后國王咎成天狗語第三十四○國王造百丈石率堵婆擬殺工語第三十五○嫗每日見率堵婆付血語第三十六宇治拾遺二淮南子注述異記○長安市汲粥施人嫗語第三十七○於海中殺龍戰獵師射殺一龍得玉語第三十八○燕丹命生馬角語第三十九史記○利德明德興酒常行會語第四十

今昔物語集卷第十一

本朝付佛法

聖德太子於此朝弘佛法語第一法華驗記上元亨釋書十五又廿靈記上太子傳本卷第廿一條可併考○行基菩薩學佛法導人語第二法華驗記上釋書十四日本往生極樂記○役優婆塞誦持呪駈鬼神語第三靈異記上釋書十五扶桑略記五袖中抄六○道照和尚亘唐傳三論還來語第四靈異記上釋書一○道慈亘唐傳三論歸來神叡在朝試語第五釋書二卷同十六卷○玄昉僧正亘唐傳法相語第六釋書十六卷○波羅門僧正爲値行基從天竺來朝語第七法華驗記上卷古事談三釋書十五俊頼無名抄○鑒眞和尚從震旦渡朝傳戒律第八釋書一○弘法大師亘宋傳眞言敎歸來語第九釋書一弘法行狀記○傳敎大師亘宋傳天台宗歸來語第十釋書一拾遺往生傳上○慈覺大師亘宋傳顯密法歸來語第十一釋書三宇治十三卷入緫緇城△宇治十三○智證大師亘宋傳顯蜜法歸來語第十二釋書三○聖武天皇始造東大寺語第十三釋書二十八○淡海公始造山階寺語第十四同興福寺○聖武天皇始造元興寺語第十五同○代々天皇造大安寺所々語第十六同○天智天皇造藥師寺語第十七○高野姬天皇造西大寺語第十八釋書二十八○光明皇后建法花寺爲尼寺語第十九○聖德太子建法隆寺語第二十○聖德太子建天王寺語第二十一釋書二十八本卷第一條○推古天皇造本元興寺語第二十二同○建現光寺安置靈佛語第二十三靈異記上○久米仙人治造久米寺語第二十四釋書十八○弘法大師始高野山語第廿五弘法行狀記○傳敎大師始建比叡山語第二十六傳取意○慈覺大師始建楞嚴院語第二十七傳取意○智證大師初門徒立三井寺語第二十八釋書廿八著聞卷二○天智天皇建志賀寺語第二十九釋書二十八○天智天皇御

子始笠置寺語第三十(同五貞慶傳)○德道聖人始建長谷寺語第三十一(同二十八)○田村將軍始建清水寺語第三十二(同)○秦川勝始建廣隆寺語第三十三(同太子傳ニ蜂岡寺トアリ廣隆寺ノ事也)○建法輪寺語第三十四(同三)○藤原伊勢人始建鞍馬寺語第卅五(同二十八)○修行僧明練始建信貴山語第三十六(宇治拾遺八)○始建龍門寺語第三十七○義淵僧正始造龍蓋寺語第三十八(釋書二)

今昔物語集卷第十二

本朝付佛法

越後國神融聖人縛雷起塔語第一(驗記下十五△十六釋書)○遠江國丹生第上起塔語第十二(靈異記中)○於山階寺行維摩會語第三(釋書十八)○於大極殿行御齋會語第四(公事根源)○於樂師寺行最勝會語第五(同)○於山階寺行涅槃會語第六○於東大寺行花嚴會語第七(宇治八古事談三)○於藥師寺行萬燈會語第八(釋書九)○於比叡山行舍利會語第九○於石清水行放生會語第十(公事根源)○修行僧廣達以橋木造佛像語第十一(靈異記中)○修行僧從砂底堀出佛像語第十二(異書二十八靈異記中)○和泉國盡惠寺銅像爲盜人破壞語第十三(靈異記中)○紀伊國人漂海依佛助存命語第十四(靈異記中)○貧女依佛助得富貴語第十五(釋書二十九靈記中)○禱者依佛助免王難語第十六○尼所被盜持經自然奉値語第十七○河內國八多寺佛不燒火語第十八○藥師佛從身出藥與盲女語第十九(釋書二十九)○藥師寺食堂燒不燒金堂語第二十○山階寺燒更建立間語第二十一○於法成寺繪像大日供養語第二十二○於法成寺藥師堂始例時日現瑞相語第廿三○關寺駈牛迎化葉佛語第二十四(左經記古事談五宇治大納言物語榮花物語嶺月)○伊賀國人母生牛來子家語第二十五(驗記下靈異記中)○奉入法花經筥自然延語第二十六(同同中第六)○魚化成法花經語第廿七(同上同上第六)○肥後國書生免羅利難語第二十八(同下)○沙彌所持法花經不燒語第二十九(靈異記下)○尼願西所持法花經不燒給第三十(釋書十八)○僧死後舌殘在山誦法花語第三十一(靈異記下釋書廿九)○橫川源信僧都語第三十二(釋書四驗記下)○多武峯增賀聖人語第三十三(同十驗記下續往生傳發心集宇治十二)○書寫山性空聖人語第卅四(同十一同中著聞書圖乙十)○神名睿實持經者語第三十五(驗記中二卷宇治十釋書十一)○天王寺別當道命阿闍梨語第三十六(釋書十九宇治一驗記下)○信誓阿闍梨依經力活父母語第三十七(驗記下)○天台圓久於葛木山聞仙人誦經語第三十八(釋書十一著聞十五驗記上)○愛宕護山好延持經者語第三十九(法華驗記上拾遺往生傳)○金峰山蘇嶽良算持經者語第四十(釋書十一驗記中)

今昔物語集卷第十三

本朝付佛法

修行僧義睿値大峰持經仙語第一釋書廿九驗記上○籠葛川僧値比良山持經仙語第二驗記上○陽勝修苦行成仙人語第三釋書十八驗記中宇治八○下野國僧住古仙洞語第四釋書十八驗記中○攝津國菟原僧慶日語第五釋書十一驗記中○攝津國多々院持經者語第六驗記上○比叡山西塔僧道榮語第七釋書十六驗記上○法性寺尊勝院僧道乘語第八釋書十九驗記上○理滿持經者顯經驗語第九釋書十一驗記上○春朝持經者顯經驗語第十釋書十二驗記上○一叡持經者聞屍骸讀誦音語第十一釋書十九驗記上古今著聞十五○長樂寺僧於山見入定尼語第十二○出羽國龍華寺妙達和尚語第十三釋書十九驗記上○加賀國翁和尚讀誦法華經語第十四驗記下○東大寺僧仁鏡讀誦法華語第十五驗記上釋書十一○比叡山僧光日讀誦法華語第十六驗記上○雲淨持經者誦法華免蛇難語第十七驗記上○信濃國盲僧誦法華開兩眼語第十八驗記下○平願持經者誦法華免死語第十九釋書九驗記上拾遺往生傳中○石山好尊聖人誦法華免難語第廿釋書九驗記中○比叡山僧長圓誦法花經施靈驗語第二十一釋書九驗記下○筑前國僧蓮照身命食諸蟲語第廿二釋書十二驗記下○佛蓮聖人誦法花護法語第廿三釋書十一驗記中○一宿聖人行空誦法花語第廿四釋書十一驗記中○周防國基燈聖人誦法花語第廿五釋書十一驗記中○筑前國女誦法華開盲語第廿六驗記下○比叡山僧玄常誦法華四要品語第廿七釋書十一驗記中○蓮長持經者誦法華得加護語第廿八釋書十一驗記中○比叡山僧明秀骸誦法華經語第二十九驗記中○比叡山僧廣清髑髏誦法華語第卅驗記中著聞十五拾遺往生傳上○備前國人出家誦法華經語第卅一驗記中○比叡山西塔僧法壽誦法華語第卅二拾遺往生傳上驗記中○龍聞法華讀誦依持者誦降雨苑語第卅三驗記中○天王寺僧道公誦法華救道祖語第卅四釋書九驗記中○僧源尊行冥途誦法華活語第三十五驗記上○女人誦法華經見淨土語第卅六驗記下○无慚破戒僧誦法華壽量品語第卅七驗記中○盜人誦法花四要品免難語第卅八○出雲國華嚴法華二人持經者語第卅九驗記上釋書十二○陸奥國法華最勝二人持經語第四十驗記中釋書十二○法華經金剛般若二人持者第四十一釋書十二驗記上○六波羅僧講仙聞說法華得益語第四十二釋書十九驗記上○女子死受蛇身聞說法華得脫語第四十三○定法寺別當聞說法華得益語第四十四驗記上

今昔物語集卷第十四

本朝付佛法

爲救元空律師枇杷大臣寫法華語第一日本往生極樂記釋書十九驗記上○信濃守爲蛇鼠寫法華救苦語第二驗記下○紀伊國道成寺

僧寫法華救蛇語第三釋書十九驗記上○女依法華力轉蛇身生天語第四○爲救野干死寫法華人語第五古今著聞廿驗記下○越後國國寺僧爲猿寫法華語第六著聞廿釋書十七驗記下第百廿六○修行僧至越中國立山會小女語第七驗記下○越中國書生妻死墮立山地獄語第八○美作國鐵堀入穴依法花力出穴語第九驗記下○陸奥國壬生良弃惡趣漸寫法花語第十驗記下○天王寺爲八講於法隆寺寫太子疏語第十一○醍醐僧惠增持法花知前生語第十二驗記上○入道覺念持法花知前生語第十三驗記中拾遺往生傳上○僧行範持法花經知前世報語第十四驗記中○越中國僧海蓮持法花經知前生語第十五驗記下○元興寺僧蓮尊持法花經知前世報語第十六驗記中○金峯山僧轉乘持法花知前世語第十七驗記下○僧明蓮持法花知前世語第十八驗記中○備前國盲人知前生持法花經語第十九驗記上○僧安勝持法花知前世報語第二十驗記上○比叡山横川永慶聖人誦法華知前世語廿一驗記中○比叡山西塔僧春命讀誦法花知前世語第廿二釋書十九驗記上○近江國僧頼眞誦法華知前生僧第廿三釋書十九驗記上○比叡山東塔僧朝禪誦法華知前世語第廿四驗記上○山城國神奈比寺聖人誦法花知前世語第廿五驗記上○丹治比經師不信寫法花死語第廿六靈異記○阿波國人謗寫法花人得現報語廿七靈異記○山城國高麗寺榮常謗法花得現報語第二十八靈異記上ノ十九條中ノ十八條○橘敏行發願從冥途返語第廿九宇治八十訓○大伴忍勝發願從冥途返語第三十靈異記○利荊女誦心經從冥途返語第三十一同中○百濟僧義覺誦心經施靈驗語第三十二釋書九靈異記上○僧長義依金剛般若驗開盲語第卅三靈異記○壹演僧正誦金剛般若施靈驗語第三十四釋書十四○極樂寺僧誦仁王經施靈驗語第三十五○伴義通令誦方廣經開聾語第三十六靈異記上○令誦方廣經知父成牛語第三十七同○誦方廣經僧入海不死返來語第三十八○源信内供於横川供養涅槃經語第三十九○弘法大師挑修圓僧都語第四十古事談弘傳略頌抄△弘法行狀記○弘法大師修請雨經法降雨語第四十一釋書一卷本朝神仙古事談遺告編年集成○依尊勝陀羅尼驗力遁鬼難語第四十二釋書二十九○依千手陀羅尼驗力遁難語第四十三○比叡山僧宿播磨明石値貴僧語第四十四○依調伏法驗利仁將軍死語第四十五

今昔物語集卷第十五

本朝付佛法

元興寺智光頼光往生語第一釋書二十日本往生極樂記十訓五○元興寺隆海律師往生語第二釋書二往生記○東大寺戒壇和上明祐往生語第三釋書十三往生記○藥師寺濟深僧都往生語第四釋書十往生記○

比叡山定心院僧成意往生語第五 釋書九往生記 ○比叡山頸下有瘻僧往生語第六 日本往生極樂記 ○梵釋寺僧兼算往生語第七 同 ○比叡山僧横川尋靜往生語第八 同 ○比叡山定心院供僧春素往生語第九 同 ○比叡山僧明清往生語第十 往生記△扶桑往生傳 ○比叡山西塔僧仁慶往生語第十一 驗記中拾遺往生傳上 ○比叡山横川僧境妙往生語第十二 驗記中拾遺往生傳上 ○石山僧眞頼往生語第十三 往生記扶桑往生傳 ○醍醐觀幸入寺往生語第十四○比叡山僧長増往生語第十五○比叡山千觀内供往生語第十六 釋書四著聞二 往生記 ○法廣寺僧平珍往生語第十七 往生記△扶桑往生傳 ○如意寺僧増祐往生語第十八 同△同 ○陸奥國小松寺僧玄海往生語第十九 驗記上△扶桑往生傳 往生記 ○信濃國如法寺僧藥蓮往生語第二十 往生記△同 ○大日寺僧廣道往生語第廿一 驗記下△扶桑往生傳 拾遺往生傳中往生記 ○始雲林院菩提講聖人往生語第二十二○治丹後國迎講聖人往生語第二十三○鎭西行千日講聖人往生語第二十四○攝津國樹上人往生語第二十五 往生記 ○播磨國賀古驛教信往生語第二十六 釋書九往生記 ○北山餌取法師往生語第二十七○鎭西餌取法師往生語第二十八○加賀國僧尋寂往生語第廿九 驗記下拾遺往生傳中釋書十七 ○美濃國僧藥延値无動寺僧往生語第三十 驗記下拾遺往生傳中釋書十七 ○比叡山入道眞覺往生語第三十一

往生記△扶桑往生傳 ○河内國入道尋祐往生語第三十二 往生記△同 ○源憇依病出家往生語第三十三 同△同 ○高階良臣依病出家往生語第三十四 同釋書十七驗記下 ○高階成順入道往生語第三十五 往生記拾遺往生傳中△釋書十七驗記下 ○小松天皇御孫尼往生語第三十六 往生記△扶桑往生傳 ○池上寛志僧都妹尼往生語第三十七 同△同 ○伊勢國飯高郡尼往生語第三十八 同 扶桑往生傳 ○源信僧都母尼往生語第三十九○肩植聖人母尼釋妙往生語第四十 驗記下釋書十八 ○鎭西筑前國流尼往生語第四十一 扶桑略記往生記釋書十七驗記下 ○左近少將藤原義孝朝臣往生語第四十二 ○丹波中將源雅通朝臣往生語第四十三 釋書十七驗記下 ○伊豫國越智益躬往生語第四十四 往生記△扶桑往生傳驗記下 ○越中前司藤原仲遠往生兜率天語第四十五 釋書十七驗記下 ○長門國阿武大夫往生兜率語第四十六 釋書十七驗記下 ○造惡業人家後唱念佛往生語第四十七○近江守彦眞妻伴氏往生語第四十八 往生記△日本往生極樂記 ○右大辨藤原佐世妻往生語第四十九 同△日本往生極樂記 ○女藤原氏往生語第五十 同△日本往生極樂記 ○伊勢國飯高郡老嫗往生語第五十一 同△同 ○加賀國 [illegible] 郡女以蓮花供養佛往生語第五十二 往生記△日本往生極樂記 ○近江國坂田郡女以蓮花供養佛往生語第五十三 往生記△日本往生極樂記 ○仁和寺觀峯威儀師從童往生語第五十四

今昔物語集卷第十六

本朝付佛法

僧行善依觀音助從震旦歸來語第一靈異記上 ○伊與國越智直依觀音助從震旦歸來語第二同 ○周防國判官代依觀音助存命語第三驗記下 ○丹後國成令觀音靈驗語第四三國傳記 ○丹波國郡司造觀音像語第五釋書十七 ○陸奥國鷹取男依觀音助存命語第六宇治六驗記下 ○越前國敦賀女蒙觀音利益語第七宇治九 ○殖槻寺觀音助貧女給語第八靈異記中釋書廿九 ○女人仕清水觀音蒙利益語第九○女人蒙穗積寺觀音利益語第十○觀音落御頭自然繼語第十一○觀音爲遁火難去堂語十二○觀音爲人被盜後自現語第十三靈異記中 ○御手代東人念觀音願得富語第十四同上 ○仕觀音人行龍宮得富語第十五○山城國女人依音助遁蛇難語十六驗記下釋書廿八音開二十 ○備中國賀陽良藤爲狐夫得觀音助語第十七釋書二十九 ○石山觀音爲利人付和歌末語第十八宇治六 ○新羅后蒙國主咎得長谷觀音助語第十九宇治十四 ○從鎭西上人依觀音助遁賊難持命語第二十○下鎭西女依觀音助遁賊難持命語第二十一○瘂女依石山觀音助得言語第二十二三國傳記五 ○盲人依觀音助開眼語第二十三○錯入海人依觀音助存命語第二十四○被放島人依觀音助存命語第二十五驗記下 ○盜人負箭依觀音助不當存命語第二十六同 ○依觀音助借寺錢自然償語第廿七○參長谷男依觀音助得富語第二十八宇治七卷 ○仕長谷觀音貧男得金死人語第二十九○貧女仕清水觀音給御帳語第三十宇治十一卷 ○貧女仕清水觀音給金語第三十一○隱形男依六角堂觀音助顯身語第三十二○貧女仕清水觀音値盜人夫語第三十三○無緣僧仕清水觀音成乞食聟得便語第三十四○筑前國人仕觀音生淨土語第三十五驗記下 ○醍醐僧蓮秀仕觀音得活語第三十六同中 ○清水二千度詣男打入雙六語第三十七宇治六 ○紀伊國人邪見不信蒙現罰語第三十八靈異記中 ○招提寺千手觀音値盜人辭不取語第卅九○十一面觀音變老翁立山崎橋柱語第四十

今昔物語集卷第十七

本朝付佛法

願値遇地藏菩薩變化僧語第一地藏靈驗記一卷 ○紀用方仕地藏菩薩蒙利益語第二同 ○地藏菩薩變小僧形受箭語第三同六 ○依念地藏菩薩遁主殺難語第四同 ○依夢告從泥中堀出地藏語第五同一卷 ○地藏菩薩値火難自出堂語第六同六 ○依地藏菩薩敎始播磨國清水寺語第七同 ○沙彌藏念世稱持藏變化語第八同二卷 ○僧淨源祈地藏絹與老母語

第九同六 ○僧仁康祈念地藏遁疫難語第十同一卷 ○駿河國富士神主歸依地藏語第十一同六 ○改綵色地藏人得夢告語第十二同一卷 ○伊勢國人依地藏助存命語第十三同一 ○依地藏示從鎭西移愛宕護僧語第十四同二卷 ○依地藏示從愛宕護移伯耆大山僧語第十五同 ○伊豆國大島郡建地藏寺語第十六同 ○東大寺藏滿依地藏助得活語第十七同 ○備中國僧阿淸依地藏助得活語第十八同一卷 ○三井寺淨照依地藏助得活語第十九同六卷 ○播磨國公眞依地藏助得活語第二十同二卷 ○但馬國前司國擧依地藏助得活語第廿一同 ○賀茂盛孝依地藏助得活語第二十二同 ○依地藏助活人造六地藏語第廿三同 ○聊敬地藏菩薩得活人語第廿四同九卷 ○養造地藏佛師得活人語第廿五同一卷 ○買龜放男依地藏菩薩助活語第廿六同四 ○墮越中立山地獄女蒙地藏助語第廿七同六△九 ○京住女人依地藏助得活語第廿八同 ○陸奧國女人依地藏助得活語第廿九同二 ○下野國僧依地藏助知死期語第三十同 ○說經僧祥蓮依地藏助免苦語第三十一同一卷 ○上總守時重書寫法華經蒙地藏助語第三十二同二△三 ○比叡山僧依虛空藏助得智語第三十三○彌勒菩薩化柴上給語第三十四靈異記下 ○彌勒爲盜人破懷叫語第卅五同中 ○文珠生行基見女人惡給語第三十六同中 ○行基菩薩敎女人惡子給語第卅七同中 ○律師淸範知文殊化身語第三十八○西石藏仙久知普賢化身語第三十九驗記上 ○僧光空依普賢助存命語第四十釋書九驗記中 ○僧眞遠依普賢助遁難語第四十一同 ○於但馬國古寺毘沙門伏牛頭鬼助僧語第四十二驗記中同 ○籠鞍馬寺遁羅刹鬼難語第四十三○僧依毘沙門助令產金得便語第四十四○吉祥天女攝像奉化蒙罰語第四十五靈異記中 ○王衆女依吉祥天女得富語第四十六同 ○生江世經仕吉祥天女得富語第四十七○依妙見助得被盜絹語第四十八○金就優婆塞修行執金剛神語第四十九靈異記中 ○元興寺中夜叉施靈驗語第五十 靈異記上 扶桑記 水鏡敏達記 道場法師傳（本朝文粹載之）

今昔物語集卷第十八 孝養本十八トス 孝云△ハ廿三トス △廿三卷トナスヘキカ ルイカナル據アルニカ

十八卷廿一卷ナド、ナシテモ害ハアルマシキニ其意タトリカ子タリ

本朝

平維衡同致頼合戰蒙咎語第十三○左衛門尉平致經道明依僧正語第十四○陸奧國前司橘則光切殺人語幷宇治十一 ○駿河前司橘季通構逃語第宇治二 ○尾張國女伏美濃狐語第靈異記中 ○尾張國女取返細疊語第同 ○比叡山實目僧都强力語第 ○廣澤寬朝僧正强力語第宇治

十四○大學衆試相撲人成村語第（同二）○相撲人海垣世會䖝試力語第（同十四）○相撲人私市宗平投上鰐語第○相撲人大井光遠妹强力語第（宇治十三）○相撲人成村常世勝負語第○䆳時敦行競馬勝負語第（著聞十）

今昔物語集卷第十九

本朝付佛法

頭少將良峯宗貞出家語第一（釋書三卷續往生傳）○參河守大江定基出家語第二（釋書十六卷宇治四卷又十三卷續世繼まことの道撰集抄發心集二續往生傳寶物集七沙石集五下十訓抄）○內記慶滋保胤出家語第三（續往生傳扶桑往生傳下撰集抄四卷發心集二卷拾遺十二卷）○攝津守源滿仲出家語第四（古事談四卷）○六宮姬君夫出家語第五○鴫雖見雉死所來出家人語第六（沙石集八ニ似類ノコトアリ）○丹後守保昌朝臣郎等射鹿母出家語第七○西京仕鷹者見夢出家語第八（撰集抄五）○依小兒破硯侍出家語第九（撰集抄六）○春宮藏人宗正出家語第十○信濃國王藤觀音出家語第十一（宇治六）○於鎭西武藏寺翁出家語第十二○越前守藤原孝忠侍出家語第十三○讃岐國多度郡五位聞法師即出家語第十四（發心集三卷）○公任大納言出家籠居長谷語第十五○顯基中納言出家受學眞言語第十六（釋書十七卷續往生傳發心集五十訓抄古事談）○村上天皇御子大齋院出家語第十七○三條太皇太后宮出家語第十八（拾遺十二卷釋書十[illegible]記下）○東大寺僧於山値死僧語第十九○大安寺別當娘許藏人通語第二十（宇治九）○以佛物餅造酒見蛇語第廿一○寺別當許麥縄成蛇語第廿二○般若寺覺縁律師弟子僧師信遺言語第二十三○代師入太山府君祭都狀僧語第二十三（釋書十二卷）○瀧口藤原忠兼敬實父得佳語第二十五○下野公助爲父敎行被打不逃語第二十六（著聞卷第十十訓）○住河邊僧値洪水棄子助母語第二十七○僧蓮因修不輕行救死母苦語第二十八○龜報山陰中納言恩語第二十九（三國傳記七）○龜報百濟僧弘濟恩語第三十（靈異記上）○髑髏報高麗僧道登恩語第三十一（同釋書一）○陸奧國神報守平維茂恩語第三十二（釋書十七卷）○東三條內神報僧恩語第三十三○比叡山天狗報助僧恩語第三十四○藥師寺最勝會勅使捕盜人語第三十五○藥師寺舞人玉手公近値盜人存命語第三十六○比叡山大智房檜皮葺語第三十七○比叡山大鐘爲風被吹　語第三十八○美濃守侍五位遇急難存命語第三十九○檢非違使忠明於清水坂値敵存命語第四十（宇治七卷）○參清水女子落入前谷不死語第四十一○瀧藏禮堂倒數人死存命人語第四十二○貧女弃子取養女語第四十三○達智門弃子狗密來令飮乳語第四十四

今昔物語集卷第二十

本朝付佛法

天竺天狗聞海水音渡此朝語第一○震旦天狗智羅永壽渡此朝語第二○天狗現佛坐木末語第三○祭天狗僧參內裏現被追語第四○仁和寺成典僧正値尼天狗語第五○佛眼寺仁照阿闍梨房託天狗女來語第六○染殿后爲天狗被嬈亂語第七（釋書三古事談宇治十五釋書十相應傳亦載）○良源僧正成靈來觀音院伏餘慶僧正語第八○祭天狗法師擬男習此術語第九○陽成院御代瀧口行金使習外術語第十○龍王爲天狗被取語第十一○伊吹山三修禪師得天狗迎語第十二（宇治十三）○愛宕護山聖人被謀野猪語第十三○野干變人形請僧爲講師語第十四○攝津國殺牛人依放生力從冥途還語第十五（靈異記中）○豐前國膳廣國行冥途歸來語第十六（靈異記上）○讃岐國人行冥途還來語第十七（同中）○讃岐國女行冥途其魂還付他身語第十八（靈異記中）○橘磐島賂使不至冥途語第十九（釋書廿九）○延興寺僧惠勝依惡業受牛身語第二十（釋書二十九靈異記十）○武藏國大伴赤麿依惡業受牛身語第二十一（靈異記中）○紀伊國名草郡人造惡業受牛身語第二十二（同中）○比叡山横河僧受小蛇身語第二十三○奈良馬庭山寺僧依邪見受蛇身語第二十四（靈異記中）○古京人打乞食感現報語第二十五（靈異記上卷）○白髮部猪麿打破乞食鉢感現報語第二十六（同）○長屋親王罰沙彌感現報語第二十七（同中）○大和國人捕兔感現報語第二十八（同上卷）○河內國人殺馬得現報語第二十九（同）○和泉國人燒食鳥卵得現報第三十（同中）○大和國人爲母依不孝得現報語第三十一（同上卷）○右京女爲母依不孝感現報語第三十二（同上）○吉志火麿擬殺母得現報忽死語第三十三（同中）○出雲寺別當淨覺食父成鯰肉得現報忽死語第三十四（宇治十三）○比叡山僧心懷依嫉妬感現報語第三十五○河內守依慳貪感現報語第三十六○就財娘爲鬼被噉悔語第三十七（靈異記中）○石川沙彌造惡業感現報語第三十八（同上卷）○清瀧河奥聖人成慢悔語第三十九（宇治十三古事談三發心集ニ類ノコトアリ）○義紹院不知他人被返施悔語第四十○高市中納言依正直感天神語第四十一（靈異記上）○女人依正風流得感成仙語第四十二（同）○依勘文左右大將可愼枇杷大臣不愼語第四十三○下毛野敦行從我門出死人語第四十四（宇治二）○小野宮依情勤西三條大臣語第四十五○能登守依直心息國得財語第四十六

今昔物語集卷第二十二

本朝

大織冠始賜鎌原姓語第一○淡海公繼四家語第二○房

前大臣始北家語第三○内麿大臣乘惡馬語第四○閑院冬嗣右大臣并子息語第五○堀河太政大臣基經語第六○高藤内大臣語第七○時平大臣取國經大納言妻語第八（宇治大納言物語下卷）

今昔物語集卷第二十四

本朝付世俗

北邊大臣長谷雄中納言語第一○高陽親王造人形立田中語第二○小野宮大饗九條大臣得打衣語第三（宇治七）○於爪上勁馭返男針返女語第四○百濟川成飛彈工挑語第五○碁擲寛蓮値碁擲女語第六（古事談六今昔續）○行典藥寮治病女語第七○女行醫師家治瘡逃語第八○嫁蛇女醫師治語第九○震旦僧長秀來此朝被任醫師語第十○忠朝治値龍者語第十一○雅忠見人家指有瘡病語第十二○滋岳川人被追地神語第十三○天文博士弓削是雄占夢語第十四○加茂忠行道傳子保憲語第十五○安倍晴明隨忠行習道語第十六（宇治十一）○保憲晴明共占覆物語第十七○以陰陽術殺人語第十八○播磨國陰陽師智德法師語第十九○人妻成惡靈除其害陰陽師語第二十○僧登照相倒朱雀門語第二十一○僧平入道弟習算術語第二十二（宇治十四）○源博雅朝臣行會坂盲許語第二十三○玄象琵琶爲鬼被取語第二十四（著聞十七）○三善清行宰相與紀長谷雄口論語第二十五○村上天皇與菅原文時作詩給語第二十六○大江朝綱家尼直詩讀語第二十七○天神御製詩讀示人夢給語第二十八○藤原資業作詩義忠難語第二十九○藤原爲時作詩任越前守語第三十○延喜御屏風伊勢御息所讀和歌語第三十一○敦忠中納言南殿櫻讀和歌語第三十二○公任大納言讀屏風和歌語第三十三○公任大納言於白川家讀和歌語第三十四○在原業平中將行東方讀和歌語第三十五○在原業平於右近馬場見女讀和歌語第三十六○藤原實方朝臣於陸奥國讀和歌語第三十七○藤原道信朝臣送父讀和歌語第卅八○藤原義孝朝臣死後讀和歌語第三十九○圓融院御葬送夜朝光卿讀和歌語第四十○一條院失給後上東門院讀和歌語第四十一○朱雀院女御失給後女房讀和歌語第四十二○土佐守紀貫之子死讀和歌語第四十三○安陪仲麿於唐讀和歌語第四十四○小野篁被流隱岐國時讀和歌語第四十五○於河原院歌讀共來讀和歌語第四十六○伊勢御息所幼時讀和歌語第四十七○參河守大江定基送來讀和歌語第四十八（十訓抄十 宇治拾遺物語十九）○七月十五日立盆女讀和歌語第四十九○筑前守源道濟侍

妻最後讀和歌死語第五十〇大江匡衡妻赤染讀和歌語第五十一（著聞五）〇大江匡衡和琴讀和歌語第五十二〇祭主大中臣輔親郭公讀和歌語第五十三〇陽成院之御子元良親王讀和歌語第五十四〇大隅國郡司讀和歌語第五十五（宇治九）〇幡磨國郡司家女讀和歌語第五十六（同七）〇藤原惟規讀和歌被免語第五十七

今昔物語集卷第廿五

本朝付世俗

平將門發謀反被誅語第一（古事談四）〇藤原純友依海賊被誅語第二（同）〇源充平良文合戰語第三〇平維茂郎等被殺語第四〇平維茂罰藤原諸任語第五〇春宮大　源賴光朝臣射狐語第六〇藤原保昌朝臣値盜人袴垂語第七（宇治二）〇源賴親朝臣令罰清原　語第八〇源賴信朝臣責平忠恒語第九（宇治十一）〇依賴信言平貞道切人頭語第十〇藤原親孝爲盜人被捕質依賴信言免語第十一〇源賴信朝臣男賴義射殺馬盜人語第十二〇源賴義朝臣罰安陪貞任等語第十三（闘十）〇源義家朝臣罰清原武衡等語第十四

今昔物語集卷第二十六

本朝付宿報

於但馬國鷲[illegible]取若子語第一（靈異記上）〇行東方者娶蕪生子語第二〇美濃國因幡河出水流人語第三〇藤原明衡朝臣若時行女許語第四（宇治二）〇陸奧國府官大夫介子語第五〇繼母託惡靈人家將行繼子語第六〇美作國神依獵師謀止生贄語第七（宇治十）〇飛驒國猿神止生贄語第八（事類）（異言）傳〇加賀國諍蛇蜈島行人助蛇住島語第九〇土佐國妹兄行住不知島語第十（宇治四）〇參河國始犬頭糸語第十一〇能登國鳳至孫得帶語第十二〇兵衛佐上總王於西八條見得銀第十三（宇治十三）〇付陸奧守人見付金得富語第十四〇能登國掘鐵者行佐渡國掘金語第十五（宇治四）〇鎭西貞重從者於淀買得玉語第十六（同四十）〇利仁將軍若時從京敦賀將行五位語第十七（同一卷）〇觀硯聖人在俗時値盜人語第十八〇東下者宿人家値產語第十九〇東小女與狗咋合互死語第二十〇修行者行人家祓女至死語第二十一〇名僧立寄人家被殺語第二十二〇鎭西人打雙六擬殺敵殺打殺下女等語第二十三〇山城國人射兄不當其箭存命語第二十四

今昔物語集卷第二十七

本朝付靈鬼

三條東洞院鬼殿靈語第一〇河原院融左大臣靈宇多院見給語第二（宇治十二）〇桃園院柱穴指出兒手招人語第三〇

今昔物語集卷二十八

本朝付世俗

十六○左大臣御讀經所僧醉茸死語第十七○金峯山別當食毒茸不醉語第十八○比叡山横川僧醉茸誦經語第十九○池尾禪珍內供鼻語第二十（宇治二）○左京大夫付異名語第二十一（宇治十一）○忠輔中納言付異名語第二十二（同）○三條中納言食水飯語第二十三（同七著聞十八）○殺斷聖人持米被咲語第二十四（同十二）○彈正弼源顯定出閉被咲語第二十五○安房守文室清忠落冠被咲語第二十六○伊豆守小野五友目代語第二十七○尼共入山茸舞語第二十八○中納言紀長谷雄家顯獨語第二十九○左京屬紀茂經鯛荒卷進大夫語第三十（宇治二）○大藏大夫藤原清廉怖猫語第三十一○山城介三善春家怖蛇語第三十二○大藏大夫紀助延郎等唇被咋龜語第三十三○筑前守藤原章家侍錯語第三十四○右近馬場殿上人種合語第三十五○比叡山无動寺義清阿闍梨嗚呼繪語第三十六○東人通花山院御門語第三十七○信濃守藤原陳忠落入御坂語第三十八○寸白任信濃守解失語第三十九○以外術盜食　語第四十○近衞御門倒人蝦蟆語第四十一○傳大納言得烏帽子侍語第四十三○立兵者見我影成怖語第四十二○近江國篠原入墓穴男語第四十四

今昔物語集卷第二十九

本朝付惡行

西市藏入盜人語第一○多襄丸調伏丸二人盜人語第二○不知人女盜人語第三○隱世人聟成　語第四○平貞盛朝臣於法師家射取語第五○放免共爲強盜人々家被捕語第六○藤大夫　家入強盜被捕語第七○下野國爲光家入強盜取女語第八○阿彌陀聖人殺人宿其家被殺語第九○伯耆國府藏入盜人被殺語第十○幼兒盜瓜蒙父不孝語第十一○筑後前司源忠理家入盜人語第十二○民部大夫則助家來盜人告殺害人語第十三○九條堀河住女殺　語第十四○檢非違使盜糸被見顯語第十五○或所女房以盜爲業被見顯語第十六○攝津國來小屋寺盜鐘語第十七（十訓抄）○羅城門登上層見死人盜人語第十八○袴垂於關山虛死殺人語第十九○明法博士善化被殺強盜語第二十○紀伊國晴澄値盜人語第二十一○詣鳥部寺女値盜人語第二十二○具妻行丹波國男於大江山被縛語第二十三○近江國王女將行美濃國賣男語第二十四○丹波守平貞盛取兒子語第二十五○日向守　殺書生語第二十六○主殿頭源章家造罪語第二十七○住清水南邊乞食以女謀入人家語第二十八○女被捕乞匄弃子逃語第二十九○上總守維持郎等打雙六

今昔物語集卷第三十

本朝付雜事

今昔物語集卷第三十一

本朝付雜事

今昔物語訓

川底雜抄上　山田常典著

今昔物語卷廿八條廿七　俄ニ立走テ乙(ハ)ケレ　傀(ク)、儡(ツ)子共彌(ヨ)詠ヒ早シケリ

乙はかなてとよむへきなり倭源抄にゑ此字をかなてとよまするよし書たりしかれともしかよまするゆゑをいはす

五重十操記といふ書に坐部甲歌者是樂也立部乙舞者是舞也甲者樂也歌者歌也乙者舞也といへりこれにてみれは舞樂の坐部立部を甲乙として乙をは舞のかたにとりてかなてとはよませたる也

八　經(イツ)營(キ)參入

營(イソグ)　侍中群要卷一新藏人云々東帶營(イソギノボル)上

小右記永觀二十十九仍營(イソキ)參內　同長和三四十

春記長歷三十廿九今明日可ニ營(イソキ)書ー

東京帝國大學圖書館藏松屋筆記第百卷に舊本今昔物語讀法あり本書と比較するに大概同しけれとも此の本の方末に少々多し

眞道識

舊本今昔物語讀　　小山田與清大人著完

川底雜抄上今昔物語はをかしく字を用ひたるを點は
ろびてよみかたき所多しかるをさいつ年殿に此物
語の零本一冊得させ給へりしは第十五と廿の巻との
抄寫にて古筆也し其中に賤(アヤシ)ノ様ニ被レ書(カヽレ)タリ微妙(メデタシ)掲(シタタメ)
澆(アワ)テ 鈚(ハタソ・ケ) 褫(スクミ) 寡(ヤモメ) 口實(クチスサミ) 睃(アクル) 揰(スク) 極(イミシク・リ) 挟(ニクム) 憾 尩(オモマナブリ)
親(マノアタリ) 纔(アツカヒ) 挺(エン) 今云椽也 奇異(アサマシ) 蹤(ツクロウ) なとばかりありきそのか
みは全部皆ありつらんと思ふもいとゞ口をしきわざ也
けり又殿にひめ給へる御本の中にわつかに點の殘れ
るは目(メ)ヲ価(ソバニシ)テ 譏(アザワラヒ) 睒(ツタナシ) 弊(ナヤマス) 齟 茹(ユデ) 侹(ヒレ) 臥(フシ) 誘(コシラヘ) 譧(オモシロキ)
などぞありける

舊本今昔物語讀

ツ　ヲ廿ノ十一
テ　テ
へ　キ
𠂤　ホ
籾　粱
虛　戲
无　无
遅　遅
丆　マ
ハ　ツ
ユ　ユ
𠙻　血
辺　邊
囙　因
滕　滕
力　事四ノ四
ト　計
歓　鈇

事　事
寡(ヤモメ)　寡
奪　奪
卆　卒
迯　延
廣量 卅一ノ卅八 廿七ノ廿八
暫許 トバカリ シバシバカリ　ユガマ子バ カヾメ廿
曲 九ノ三 マカラ子バ
微妙(イミジ) 十ノ四 十ノ六 十ノ七 十九ノ五 十九ノ二十　ミメウ一ノ廿三 メデタシ
微妙クテ 十九ノ三 同四　廿四ノ卅一
微妙(シタヽム) 十八ノ三 廿六ノ五 廿九ノ三 卅一ノ十トルハル クヽリテ
拈(イマシムサダメテ) 十三ノ卅八 十六アナグル 十九ノ十四 固(カタ)メ拈(シメ)テ
迫(セマリ) 廿九ノ一 十三ノ卅六 十　一ノ卅六ハザマ 宇治拾遺　五ノ卅九
極 十九ノ十九 イミジク コウジ アビダイ キハメテ 四ノ十四　タク一ノ十六
蹤(ツクロヒ) 十九ノ廿七 廿ノ七 廿　ノ卅四 廿三ノ十七 廿　八ノ卅
惢(イツ)キ
鐃(トギ)或作鋭
熛ケフリ廿七ノ廿五

失　失
頥　願
蒄　荒
湎　酒
罔　罔
思量オモヒハカリ
然(サ)ラ也廿七ノ四十語
思(オボ)ユ 三ノ口 オモヒ　オボシテ三ノ口
十九ノ十四 廿七ノ七語
憾ニクム 一ノ十一 九ノ四
怳(ホ)ラシ レテ 七ノ十五
嘲(アザケ)ラセ 十九ノ廿二
媚(ウツクシキ)コビ 廿ノ七 廿四ノ廿二
器量 十六ノ卅四 イカメシク 九ノ卅六　五ノ廿七 五ノ一 イカメシ 五ノ二　ケカ 価通用 廿ノ十八 廿ノ
𤺺フ チル 卅七

乾　カタヤカ　カハラカ廿二ノ七　カタシ
制　イマシメ　イサメ
絡　クリ　十九ノ三　十六ノ廿四　クル
謎　ウツクシク　十二ノ九　廿二　ノ八　オモシロク
交　ホド　マギレ　ハサム　マキラハス
甍(コモ)リ
氷(ヒ)　ヤヽカ
器　ウツホ空也　廿四ノ卅二櫻ノ　器ト云フ
否(エ)　イザ
遣(オコ)セ　ツカハス　ヤル
淫　ウカレ　十八ノ六
線　ワツラヒ　アツコフ　七ノ廿七　十八ノ十三　廿四ノ五丁十　八ノ六　廿六ノ五　メクル　十ノ四　廿ノ卅一　四ノ八　四ノ十二
鎌　シラヒ　線鎌相似故誤歟
句引(ウドハ)サレ
頭(ヤワラカ)　ヤワラ十ノ卅五
長(オトナビ)　オトナシク
厳　イツクシ　ウツクシ　厳氣(イツクヘ)　廿七ノ卅八
大液天皇小廿八ノ十三オ

畠　ハタケ
娥　ウルハシ　ウルハシク　廿六ノ四
俸(オキ)テ十五ノ十六　十六ノ七　オ　キテヽ廿八ノ卅五
喜　ウレシク　ヨロコビ
嫌(チタマ)シク
裾　ナホシ　直衣也　表衣(ウヘキヌ)廿八ノ四
栄(スサマ)　サク　サキ　サケド　十二　一ノ十二　二ノ四
冷シク　ツラナク　ツタナシ　イヤシ　ツタナシ　十三ノ廿
弊　十二ノ二　廿六ノ八
倡　サソヒ　イサナヒ
要(トツク)　廿六ノ二　クナク
去　シリソケテ　一ノ三　一ノ十四　ノクルサケノキ　取去(トリノケ)四ノ八
摘　デク筆ノ柄廿一語　カラ卅ノ六語　ニ者摘云々
寵　アハレビ　ナハコリ廿八ノ卅　廿九ノ四
淩(シボリ)　シボル

偃　ナゲサム　一三語　十ノ五　廿六ノ五　卅ノ六　九ナゲ　サメ　ナクサメテ　一ノ十七
誘(コシラヘテ)　十一ノ六　一ノ四　九ノ四十三
故　ユエ卅ノ七コトサラ廿七三　ノ□トモ廿六ノ五語歟(トモ)　ノ者共云々
棍　チコツリ　十一ノ六　廿六ノ　八　コシラヘ　スカス
微妙　メデタク　二十四巻ノ勁勵テ沂ス　男ノ語ニ極(イミ)シク微妙(メデタク)讃云々廿七ノ七
勞　イタハル　イタハリ
仰様(アフサマ)　十六ノ五　十六ノ廿四　十八ノ十三
瑞　ミツ祉也
鋭　トグ磨也
皿(チ)　五ノ十四
総　アト
促(サマリ)　アラハシ
爛(ヒラ)メク　キラヽヽカ　キラヽヽシク
胖(ニキハ)　卅一ノ十三　ニキハヽシ　ニキハヘバ　十九ノ廿三
済　スクヒ
有　ナル
僅　オヒトリ
辭　ママイ　イナビ
櫝　クチヘシリテ

放(サケテ)　ハナチ　ナクサミヌル　十ノ八
嫌　ヤモメ
佃(ツレナケレ)　五ノ八　十九ノ十九　廿六ノ五　卅一ノ七　ニクキ七
組　マナイタ　アハテ廿七ノ三十二
周　卅二ノ四十二　廿八ノ卅二
何(イク)ツ　イカニ
喬(ハタカリ)　廿九ノ十七　五ノ十八十ノ卅三十一ノ十三　ワキソバ
蹇　アシナヘ
擺　コク擺ノ誤
局　ユカム　ユカメ　ユカミ
爛(ラ)ヽ々シク
総(ニキ)ハヽシ廿七ノ卅二
奉(マイ)ラセ
至(イタ)ス三ノ□
櫃(モ)ツカ　廿六九十ウ
燈(トモ)サセ　十九ノ六
疾(ハセ)テ

辛巻(カラマク)廿九ノ卅三
撓(タリメテ)
垂敷(タレシ)キ廿九ノ卅七
食行ハミユク
蹲(ウツクマリ)テ居タリ
濟上(スクヒアゲ)テ
美(イツク)シク
嫋(シナダリ)
切ニ切テ卅ノ四或作切々々
捻懸(ヒキリカケ)タル　領ノ捻懸廿ノ卅八
謀(イマシ)ソ
戰(スマヒ)廿八ノ一　ワナヽキ一ノ四
生(ナマ)メカシ　廿八ノ一
伏(ウツフシテ)　同廿　タレテ　廿八ノ一　十九ノ九　十七ノ卅三
筈オカ
襷褌チハヤ　廿八ノ十四ウ
福(カクス)キテ字或作編　廿七
術テダテ
耄ホレ

恍クツロク
知(サトリ)智者字
特牛コトヒ
突カヘ
不意(オモハス)
婚トツク　クナグ
濕ヌル
切(ネムコロニ)
領(ヒタヒ)ニ捻(ヒネ)リタル程
披(ヒロゲ)テ廿七ノ四十三補チ披
詠(ウタフ)　ウタヒテ　五ノ一　五ノ四
衣曝キサラキ　廿八ノ一
ウツフキテ　十六ノ廿九
統チサメ　廿八ノ一
福(トマシ)
躓ツマツク　十六ノ廿八
憩(イコハシタテ)立　廿八ノ四
要コシ
可咲チカシ

熄イリ
非(アラ)デ　廿八ノ六
扶括刀ク、リ袴ノ扶廿八ノ九
特テ廿八ノ十六　ノベテ　ノシテ　タヽミ
要事十一ノ十一　廿八ノ十七　廿七ノ卅九
食ノ廿　廿八ノ十七　メス公ノフ　タウベ　廿八
賑ニキハヒ　廿八ノ廿
竊ヒカツ　廿八ノ廿
萎　廿八ノ廿
斷ハゲキ　廿八ノ廿一
贖(アカハ)セ
早(ハヤ)シ離也
月(ツキ)なシク　廿八ノ卅
蹴(ト)不爲シテ　廿八ノ廿一
籾モミ
害(ク)ソコナフ
合モリ音
ト　バカリ廿六ノ廿三此前卷三處ニ見エ廿八ノ卅三計ラ汴ト書ルヨリ誤カ
合クヽム　廿八ノ卅四　クヽモ　リ廿八ノ卅二

繿サラ唐綾ハ糸盤也　廿八ノ六
袪タモト
深更(フクル)
轉クルメク　廿八ノ十七
果(ハテシホウシ)備　廿八ノ十七
精十八　コメヒメ　廿二ノ七　廿八ノ
皺フクレ　廿八ノ廿　同廿七
腋テノ十五　シヅマリ　廿八ノ廿　卅一
飲(ス)ル廿八ノ廿、
眼皮マナコ井
朋(トモ)ナヒ
吠ホエ
開アキテ日口開　廿八ノ卅
聞(ナ)キ廿八ノ卅一
瞬メクハス　一ノ一　マジロク
六借(ムツカシ)
猿樂(サルカウ)ニ　廿八ノ卅三
下オロシクタリ　廿八ノ卅四　シモ
吻サ、フラ　廿八ノ卅五

大浚天皇　小　廿八ノ廿三ウ　三十

晉　三十　廿一右　心疎シ(ケウトシ)　廿一右

按晉恐朏チマミレ歟

按晉ハ晉(シ)ノ誤釁(キン)ト同義ト字典ニ見エタレバ覃也ハ

チマミレナリト訓ムベシ

括(シツ)カニ　廿五上　廿八右　秤(アツメ)テ　廿五上　三左

梁菴愚按抄

梁菴後抄

全

梁塵愚案鈔卷之上

神　樂

庭燎（にはび）（はじろやき）　火處燒

眞考神樂をはかみあそひと唱ふへし樂の事を後の物語にあそふといふは古より傳はれる事にて古事記仲哀建內宿禰大臣白恐我天皇猶阿蘇婆勢其大御琴と見えたり樂をかくらと云は後の世の言なれは古書になき言也にはひは古事記には漏たり神代紀天岩門條に火處燒と有を始とすさて神樂のはしめも同し岩門條にみゆ古事記より紀まて見わたして足りぬ古語拾遺は誤りとも有也引にたらす

み山には霰ふるらし外山なる正木のかつら色つきにけり

古語拾遺（忌部廣成撰）曰其後素盞嗚神奉ニ爲日神ニ行甚無狀云々于時天照太神赫怒入于天石窟閉ニ磐戸ニ而幽居焉爾乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔措凡厥庶事燎燭而辨高皇產靈神會ニ八十萬神ニ於天八湍河原ニ議ニ奉謝之方ニ云々又令下天鈿女命以ニ眞辟葛ニ爲レ鬘次蘿葛爲ニ手繦ニ以ニ竹葉ニ飫憩木葉爲ニ手草ニ手持中著鐸之矛上而於ニ石窟戸前ニ覆誓槽（古語字氣布禰ニ誓之意）擧ニ庭燎ニ巧作俳優相與歌舞云々于時天照太神中心獨謂比吾幽居天下悉闇群神何由如レ此歌樂聊開レ戸而窺之爰令下天手力雄神引ニ啓其扉ニ遷ニ座新殿ニ則天兒屋命太玉命以日御綱迴ニ懸其殿ニ令ニ大宮賣神侍中於御前上豐盤間戸命櫛盤間戸命二神守ニ衞殿門ニ當ニ此之時ニ上天初晴衆俱相見面皆明白伸レ手歌舞相與稱曰阿波禮（言天晴也）阿那於茂志呂（古語事之甚切皆稱阿那言衆面明白也）阿那多能志（言伸レ手而舞今指レ樂事謂之多能志此意也）阿那佐夜憩（竹葉之聲也）飫憩（木名也振ニ其葉ニ之調也）爾乃二神俱請曰勿復還幸仍ニ歸罪過於素盞嗚神ニ而科以ニ千座置戸ニ云々　愚案神樂の濫觴は古語拾遺に見えたり庭燎の事は禮記に載たり又毛詩の篇の名にもあり但み山にはあられ降らしの歌は古今集の第廿の內大歌所の歌の中に神遊の歌とてのせ侍る其內也是は後の世の人のよめるを庭火の曲と名付てうたひ侍るなり（奈良の朝なとにうたひ初しか）正木のかつらは木の名也天のうすめの神のかつらにせる木なれは其由あるにや眞考眞栝（マサキ）は常葉なるかつらにて十月と四月に古葉の紅葉いとよき物也夏白き花咲てちいさくさゝけの如き子なる

阿知女作法(わざ)

本

阿知女　於於於於

末

於介　阿知女　於於於於

愚案あちめの作法たしかなる所見なし但うすめをあちめといへるにやあこうと五音相通せり天鈿女神の岩戸のまへにたゝして俳優(わざをぎ)のたはふれをなし侍るを今の世にあちめの作法と名付け侍るべし於於於於は笑聲也日本紀にはあゝと笑聲をいへりあおゝ又同五音通也於介はあまのうすめの手草にしてふるまひ侍る木の名也(眞考於介を木名とするもひかごとそこゝに其一つのみいふへきかは)古語拾遺に見えたり但また歌のふし歟下にも數多所にあり

眞考阿知女は宇受賣命を轉せし言かといふ人有さも有なんか然れは知を濁るへしさて神代紀にうすめの命の神樂ひせし形をもて人長のわさを阿知作法とはいふならん其うすめの命のさまを八百萬神の笑ふをうつして　於於於於と云於於於於は警蹕也御先(ミサキ)(前)追さ唱ふ事のはしめなれはかくいふ也次の前張の末に本方あいさしゝゝゝゝといふしゝゝゝは今も警命する時しつしつといふにて此於々々々と言同しさて應答には口を開

採物歌(とり物とは榊以下皆手に取物なりイナシ)

眞考神遊の時人長か取て舞なとする物をいふ衆其取物の事に古歌をうとふ也さか木よりひさこまては種のとり物有

榊　賢木

本

さか木葉のかをかぐはしみとめくれば八十氏人そまとひせりける。(まさゐせりける古本皆重れたり)

愚案㊁本の歌は拾遺集の神樂歌に出せり(もされり)㊀草木は花にかきらす皆其氣かうはしけれは榊葉(さかき)の香をかくはしみとよめり八十氏人(集ゐるをいふ)は。もろ〳〵の氏の人(神につかふる)なりまとゐはあそふ事なり(遊なさ)神樂するを云へし

末

神垣のみむろの山の榊葉(さかき)は神のみまへにしけりあひにけり

愚案㊂この歌は古今集のとり物の歌に。のせ(も)侍り(つ)㊂

みむろとは神の社をいへは神垣とは枕詞における
なり眞考御あしかたと云さて神かきは其社をひろくさす也されと重ねいへる例はなし神なひのと有しを誤りしなり六帖に行かうへに又もゆけこまかみかきやみむろの山と有もかみなひの誤り也うたふものゝ唱へ迷ひし成へし
眞考かみなひのみむろは飛鳥の雷岡の事也もしは
他の社にてうたふとき神かきとかへしにや

或說

本

榊葉にゆふとりしてゝたか世にか神のみむろと祝ひを一本是也
そめけん

愚案とりしてゝは取つかねてなと云心なり神のみのとりは上にそへいふこと古き例多しとしてはしたゝして也神代紀其外にも垂の字を用ゐたり
むろは神の社也

末

霜やたひおけと枯せぬ榊葉の立さかゆへき神のきね
かも

眞考此左沽本に本方於介阿知女於々々々末方於介
以下九句のとり物に皆此こと有　きねはねき女の
略歟

愚案㊀此末の歌は古今集○にも取物の歌也㊁霜八たひさてのりつ
は霜のしけく置を云八度はおほき數に八とは云り
神のきねはかんなきと也又神の御前に神樂する八乙
女なときねとはいふへきにや榊葉の常盤なる色に
よせて祝の心に立さかゆるとはよめるなり眞考い
や度もおけとも也やはすへていやの略也神のきね
とは巫女の事にてねきめといふをねを略きめを通
はしてきねといふと聞ゆさてさか木の榮專によせ
て巫女をいはふ也此一二句ともよろしき古こと也

幣

本

みてくらはわりにはあらす天にますとよをか姫の宮の
みてくら。魚云古本返す

愚案㊀この歌は拾遺集のかくらの歌也歌にも入つみてくらは
御幣なり眞考充座にて社に奉る多くの物をいふか中に專らとする物故か絹布の幣をのみいへる事多し　こよ
をり姫とは大ひるめのみことを申天照太神の御名也
「すと或說にいふ何に出たる言にや今考るに豐
宇氣ひめをうたひ誤れるもの也豐宇氣姬は古事記
上いさなみの命御ほとやかれ給ひて生れ給ふ末の
御子に和くむすひの神其子豐宇氣ひめの命と有又
天孫天降給ふ條に登由宇氣神此者度外宮度相者也
と有神也此類の歌次にも下にもありて皆取物の神
とも也大神は大殿祭にも屋永くゝのち命屋永豐宇

氣比貴命といひ廣瀨神稚うかのめの神も同しと見ゆれはここに祭給ふ時の歌か天照太神也と云はかの外宮にませはいふか考へし」眞訂

末

みてくらにならまし物をすへ神の御手にとられてなつきはるべく^ましを^魚云此下の句も古本に返すと

愚案㊀此歌も拾遺集にのせ侍りすへ神とは皇神^すめ^也と昔言皇すめらみことゝいひ又すへらきといふなるもふにたゝしきにまかせてすめともすへともいふ也何れにいふも意同しかれと唱へのよろしきによりたる音便也是も天照太神の御事なり㊁なつきはるとは馴むつるゝ心なりと或說にいへりそは後世とも轉し用ゐたる也此言のもとは山路をなつみくる船の澳になつさふなと萬葉にいひてとゝこほる事也^以下眞淵訂^

杖

本

この杖はいつのこのつえ^ゑ^そ天にますとよをか姫の宮の杖なり。古魚云神の杖也古又還す

愚案此杖の歌はさきのみてくらの歌と其心同し。こは上樣也

末

あふ坂をけさこえくれは山人の千とせつけとてきれる杖なり

愚案㊀この歌は拾遺集にも^あり^㊁眞考山人は仙人の意也萬葉に仙人を扇はなさす山に住人また山人のわれに得しめし山つとそこれとよみませしも仙人をのたまふとみゆ　古本王禮仁久禮多留也萬川惠會古禮山杖曾古禮と有

或說

本

足曳の山をさかしみゆふつくる榊^さかき^の枝をつえにきりつゝつる^が古本ゑ一本つきつる^

愚案さかしき山をこえんために杖をきるとよめる神をいはひ奉りゆふを付たる柴木を杖にきりつるといへりゆふつけは木綿を付るなり

末

すへ神のみ山^御^の杖と山人の千歳を祈きれるみつえ^ゑ^そ^は一本^

愚案前の歌と大意其心一同也すへ神の宮をみやまと此杖はわれ／＼かこれは天すゝ皇神の其眞山を盛ます爲の御杖とて仙

人の千歳を齋ひてきりし神の御杖そといふ也
さつゝけよめるなり

篠

本

あめにますとよをかひめのみやのみさゝそ古本

このさゝはいつこの篠そ。とねりらかこしにまかれ
ともをかのさゝ古本返す
るともをかの篠。
こはいつこのさゝそともをかのさゝ也といふ中に二句の序をおき
愚案とねりは舎人と書近衛なとの弓射るものを云
たる歌也そのとねりらは舎人等にて御守をすれは弓矢を常にもて
らは等の文字なり鞆は弓射る時の装束也ともとい
り鞆は弓いるとき左手に付るものなれは常に腰につけてゐるなる
はんとて腰にさかれるとはいへりとも閑は所の名
べしよりてこゝにさかれるともいひ下したりさかれるをまかれる
にて侍るべし　眞云枕さうしともをかはさゝのは
と書しは誤なり
へたるかをかし

末

さゝわけは袖こそやれめとねかはの石はふむともい
ら古本いさかはらより
さかはしより。
こはたゝ初句の言のみを笹の歌にとりたり
愚案此歌は新勅撰集第九神樂の歌に定家卿えらひ
毛の　也萬葉に多くみゆ
入られ侍りとね河は上野國にある河の名也篠をわ
けは袖か破れんする程に石はふむとも河原よりゆ
かむとよめり
眞云萬葉十四上野歌刀禰河泊乃可渡世毛思良受多
々和多利奈美爾安布能須安彌流伎美可母六帖に
「とね川の上はにこりて下すみて有ける物を

或説

本

さゝの葉に雪ふり積る冬のよにとよの遊をするかた
古本と
のしき
大やけによもひからともしびをはりて大神遊し給ふを豊のあかり
愚案とよの遊は豊明の心也日本紀に宴と云字をと
といへり豊はゆたかに大きなる事明りは大御あかしによることは
よのあかりとよめりすへて宴遊をいへり豊明乃節
也こゝに豊のあそひといふも豊のあかりして神遊ひする意也
會にかきるべからす
されと豊のあそひといへる古言は聞えす今京なとにいひそめし略
言と見ゆとて是もさゝはへことを取のみ

末

みすかきの神の御代より篠の葉にたふさにとりて遊
すらしも
眞若古本太布佐止止利天安所比介良志毛と有も太
倶佐を誤りぬ
萬葉に人丸かみつかきの
愚案みすかきはみつかきを書あやまれるにや瑞籬
久き時ゆとよめるは崇神天皇の礒城瑞籬の宮の遠く久しき世なる
は久しき事にいひならはせり人丸の歌にも袖ふる
をもて久しき事にいひ冠らせたるもこゝに神の御代てふに冠らせ
山のみつかきの神の御代よりといへりたふさにと
てかの岩との條に有し手草の事に冠らせしは違へり後の歌にはか
りてとは手をたふさとはいへり折りつれは手ふさ

ゝる違ひ多き也　たゝきとは手くきを誤りし物也或説に道風の手
にけかるたてなからみよの佛に花たてまつるさい
くさにけがなどよみしを引たるは強助くるにてかなはす　あそひ
へるも手に折心也天鈿女の神の竹葉を手草にする
ほうたまひの事也
よし見え侍り竹はさゝの事なり

弓

本

古本もゝさめすし
弓といへはしなゝき物を梓弓まゆみつき弓しなこそ
なもゝさめす
あるらし

古本志奈毛も止女須　あつさ弓ま弓つきゆみ其木によりてくさ
愚案此歌は新撰のとり物の歌なり但終の七字集
くゝのわかちあれされしこめて弓といふ時は何のくさもわかすま
には一品もなしといへり歌の心は品は弓にあまた
ゆみといふにて此しなは種といふ意也梓の木檀の木槻の木なとに
の品々有されは其品を云にをよはす神の手向さす
て作るを各それの弓といふのみ
るなり其品をはいはねとも然も又梓弓まゆみつき
弓の品はあるべしといへるなり一品もなしは第二
句の心をかさねていへるなり伊勢物語にあつさ弓
ま弓つき弓年を經てわかせしがごとうるはしみせ
よと有梓も槻も木の名なり

末

(古)安津佐誤り也　(古)也宇也宇
みちのくのあたゝらのまゆみ我引はやうやくよりこし
古しのひくくにと返す
のひしのひに。

こは錦の歌を弓のとり物の歌に用たり古今集にも取物の歌に入つ
愚案此歌は古今集取物の歌也第四句は末さへより
其集には末さへよりこさ有後にやうやうよりこと轉したるなら
こさあり安達原のまゆみは木の名なりそれを弓に
ん安達はみちのくの郡名なりそこより出る弓をいふへし萬葉に
取なしてよみならはし侍り弓はひけは本末かわか
しなのゝまゆみてふ類也かくて弓を引は本末のわかかたへよるも
方へよる物なり此歌は戀の心なり
のなればよるといへるなし且やゝくもなし萬葉によみしかは
魚云あたゝらまゆみ云々やうやくを古今にすゑさ
やゝくよりこさいへるを後にやうやうさいへるかやうやうは言
へさ有をよしとす　眞云延喜六年安達郡を置こみ
なのへていふ常言也雅言にはやゝやゝさこそいへ
ゆこの歌はその前也

或說

本
(古)乎　(古)耳
さつてらかもたせのまゆみ奥山のみかりすらしも弓
古本佐門乎眞加
のはつみゆ
眞考弓の幸有人弓矢をもて物を得るてふ古言よりして弓矢もて獵
愚案さつてらは薩人の父といへるにや薩人は狩す
する人をさち人といふをはやくより轉してさつ人さつをさはい
る人の惣名なりもたせはもたせるなり
へり。もたせはたゝもつを延ていふのみ從者なとにもたせるてふ
事にはあらす
又本(末)人のまもりにする弓を一說　イ　つ
よもやまのまほりにたのむ梓弓神のたからに今しつ
るかな
古事記に山をたてやまといひ萬葉にたゝなつく青垣やまなさい
愚案此歌は㊂拾遺集の神樂歌にあり但集にはよも

ふた思へは四方山は其國の堺にて守りとなるに弓矢はたもとより
山（華たるに よも山イ）の人の寶にする弓を神の御前にけふ奉
守りなれはかく重ねいふとそ聞ゆる　人てふ意也こは後世
るとあり（る）よも山はたゞ四方の山也爰にはすへ
の常言なれはさりかたし次のたちもひとし
て世界の人をいへり

末

梓弓はるくることにす（古）ゐ へ神のとよのあそひにあはん
とそおもふ

愚案とよの遊上（出）にいへるかことし

劔

本

銀のめぬきの太刀をさけはきてならの都をねるや（古）波 た
か子そ

ねるは足ふみをひとしく靜にわたる也是も
愚案拾遺集神樂の歌なりねるはあゆむ事をいふ
にも入

末

石上ふるやおとこのたちもかな（も）くみのをしてゝみや
路通はん

眞考布留の社なとに在し人よき太刀はきし事有か又此神宮には古
愚案此歌も同集にあり石上ふるやは大和國布留と
寶劔なれほく納給ひしかはそれに准へてよき太刀はく人有しか今
云所の名なりそこにある男子をいふへし又布留は

考ふるに萬葉に虎爾乘古屋乎越而青淵爾蛟龍取將來劔刀毛哉てふ
古きとそへて年老たる男といへるにやくみのを
古屋は地名と見ゆ今も是也石上は冠辭成へし然らは此古屋は何こ
は太刀の帶とりのくみにてしたるを云みやちは都
とも知かたし且かの劔刀毛我は古屋によし有事とは見えぬを今に
のみちなるべし
よれは古へかの地によき太刀もたる男ありしか又雄略天皇の御時
すかるといふ人かみなひの蛇をとりてこゝも似たりその人ふる
やてふところ在しにはあらずや

或説

本

いはひこし神はまつりつあけよりはくみのをしてゝ
（古）遊ひ刀はき

愚案歌の心は神の祭は過きつ隙ある折なれは太刀
はきてあそはんとよめる也

眞考いはひは非常をいみつゝしみて祭るをいふく
みの緒は上によるに太刀の緒を垂る也されと裝束
して太刀を垂はくは常の事也此歌には劔の緒とき
て遊へといふへき也されとくみのをのをゝ太刀の
をとせされは劔の歌に由なし强て太刀の緒とす可

末

おきづきにすめ神たちを祝こし心は今そたのしかり
ける

愚案おきつきは。人をおさめたるつか（奥都にて）のことを申
侍れは爰には神のほこらをおきつきといへりすめ

神は皇神なり太刀の歌たれかすゝめ神たちとすへよめる也

眞考奥つ神籬てふ意にいへり常に人の棺柩をいふも本意はひさしくてきは萬の物のかこひなしたるをいふ

鉾

本

この鉾はいつこの鉾そ天にますとよをか姫の宮のほ（古）みほこそ奉すこなり

愚案此歌はゝ先の杖の歌と一同也太刀鉾なとは神社（し）（な）にたるはは上つ代よりの事にて親詞なとにも多し依て採物とすの寶物の中にあれはとり物によめるなり

末

よも山の人のまほりにする鉾を神の御まへにいはひ（古）比止乃 保多天多留々々々つるかな

愚案此歌は又先の弓の歌と心詞をなしにひとしその中に人の守りといふ時はよも山はたゝよもといはんかことし

抒

本

大原やせか井の水をひさこもて鳥は鳴ともあそひて（古）しくめゝゝゝ古（ふせた）ゆかん

眞考せかゐは堰之井也大原也堰の清水をといせ物語にも有これ也

愚案せか井は清和井と書り山城國大原の郷に有清水の名なり此歌は六帖に載たり第三句は手に汲て有の又六帖には手にくみてと有な抄の中とせんとてひさこもてかへたる物也よりて涼ところにはかなはぬなり古本安曾不世遊久女とありひさこもても汲心なり鳥はなくとも曉のと有は聞えかたし是もうたひ誤りしならんとて曉までも遊ひてか鳥鳴比まても猶納涼してあそはんといふ心なりへらんと也

眞云清和院を枕さうしにせかゐといふよりこゝをも清和井と書はいかにそや

末

眞考おほはらやせかゐやせかゐの水をひさこもて鳥はなくとも遊てゆかん此歌こゝに落たり古本又イにも有保(古)

我かとの板井の清水さととをみ人しくまねはみ草ゐ古美門佐比にけり眞考水さびは水渋のうかめる也水草ゐりは誤れり古一本みつさびにけりと有なよしとす耳介里々々々々々々歌

愚案此歌は古今。集取物の歌なりに水草ゐにけりと有そよきゐるとはうき草のゐるそといふはわろしそれも生ととそいはめ萬葉にも有言也板井は板を立たる井也

片折說本(古)

（大原やの歌奥にあるべし編者云一本爰にあり）

眞考是に片折とあれと古本に依て折說本とす又末子歌の末に加太於呂志々々々と有古事記に片下て

ふ事も有こゝの折もおろしの意にて下の借字かされとかなたかへは只折たゝむ事か折説本とは板井やのことのみを重ねうたふをいふ

イナシ

大原やせかゐやせかゐの水をひさこもて鳥はなくともあそひてゆかむ

末

我門の板井やいたゐのし水里とをみ人し汲ねはみ草ゐにけり（古）美門佐比耳介里々々々々

愚案片折と云は歌曲のふしの名なり抄の歌に取てせかゐやせかゐ板井やいたゐと第二句をかさねてうたふといへり

諸學古本　本は上に同し

本

せかゐや〳〵板井の水を抄もて鳥はなくともあそびてゆかむ　末右に同じ

末

板井や板井板井の清水里遠み人し汲ねはみくさゐにけり

愚案もろあけといふも歌のふしなり第一句を略し　は初句を略きて
て第二句を三重てうたふをいへり（いひて又同しことをいひ下すをいふ）たとへは陽關三疊の曲といひて王維か詩を行人を送時詩の句を三たひ重てうたふ事の有になそらふへし

女畫

葛　古は取物せしを後には用たる事古本に注あり

本

わきも子かあなしの山の山人とひともしるへく山かつらせよ　逅す　かに（古）

愚案古今集取物の歌只まきもくのあなしの山とに入しには此山古事記に麻伎牟久性兵鉄に巻椋と有て誤りけんそれを又有萬葉集に巻向と書てまきもことよめりしかれと唱へ是にははわきもこはまきもこを云あやまれる也まきもこは大和國城上郡に有山也あなし山も則其あたりの山なれはつゝけて云り山かつらとは神事にしたかふ時正わさする人は眞折葛を冠の上のこゝろ葉にまとひてたるゝを山かつらと云り六帖に行かう木のかつらにて額をゆふを山かつらとはいへる也へに又もゆけこまかみかきやみむろの山の山かつらせん是も神なみをかみかきとあやまりし也

眞云あなしの山人としもいふ事垂仁天皇紀に天照大御神を磯城嚴檀か本に鎮座せ奉り倭大神をは定

神地於穴磯邑て祭り給ふと云りこれより穴磯は神祭る所と成て此歌もよめるならん又只あなしを祭る人のよみしを用しか

末

み山には霰ふるらしと山なる正木のかつら色付にけり

愚案此歌上に見えたり こは上ににはひの歌にもせり

本

韓神 弃頭 是初句なうたはぬ也下のこも枕には加頭とあるに對ふ眞考

みしまゆふかたにとりかけわれからかみのからをき からをきせんや

せんやからをき。

愚案みしまゆふは伊豆の國三島といふ所より出る 賦役令別貢に安藝木綿十一兩東木綿十二兩と有木綿なり木綿は紙に付る木なりそれを四手にして にて 綿は穀の皮麻のごとく作りなしたるにて式に麻はいやしく木綿は貴く用ゐたりそれを頭よりかたまで垂る故かたにとりがけさいへかたにとりかけ神を祭るなりからかみとは宮内省にましまする也頭にかくる事萬葉にみゆ韓神二座を申侍るにやからをき未詳 は古本にませるを申す

たとへは神を祭るとて神前にひもろきなとをすへ 平支と書しかは供儀のなきなるへし然らはからわさなしならん古へ雅樂の後種々の伎樂ありし中に有へし

置たる心となり

眞考旋頭歌なれは五七七を本とす五七七を末とす然るに本に五言なきは異體也今うたふにはわれを下へつくる也本意にあらす 或説にひもろきをすゑおく事といふはかな誤り古本はすへてかな正しきに平支と書り置は於支なれは也 わさをきから名考へし

末

八ひらてを手に取持て我からかみのからをきせんや 又反す からをき

愚案八ひらては八枚の平盤なり柏の葉にてさして おほく を集て竹串な 器形に作りて神の御食物なもる也大嘗祭式に葉椀久菩比良弖 以笠形葉盤似笠形 と有是也 神供をもる物なり

眞云古本此處にも本方於介 阿知女於々々末方於介なと有て又本末の阿知女於介なと此度はたゝ阿知女於々々志々志々々と云ことも有

或説

本

我あれはみや人しらす父か方母か方とも神はしるらむ 生

これは幼き時養はれし子にて本の方をしらぬ人なれは我生れし系をは宮人たちも知事なし父かたの氏より養はれしか母かたのうからよりか神こそ知給ふらめといふ也

愚案みやひは日本紀に風姿と書り妖艶なる心成へし又好色の道にも通せり伊勢物語源氏物語にも数多所に此詞は見えたり事にしたかひて用べし此歌の心は我心はみやひかなる事をもしらす父方共母方とも神はしるへきなり

末

みな人のしてはさかゆるおほなほみいさわが一本此所にいさわ

かさもにかみさかもさにさ有いさわか

さもからに神酒ほきにさいふか

愚案しては木綿四手也　木綿四手の四手は垂也是をしてのみ云は後也眞考　おほ

なほみは古今集に大直日（び）といへると同し神を祭る　には

て丶それに預りし人々集りて悦の酒宴する日をいふかのいまびつ

時も百官のあつまる事をいへり諸社直會殿とて有

丶しみたるを常に直す意にてなほひといへり其びとみと通ふ例に

神事に随ふ人の居所なりさかもとは坂本也神のま

てなほみと唱ふる事是にて知へしさて大とは公の神事の時にいへ

しますす所なり

り他の神社にてはたゞなほみと云諸の神社に直會殿とて殿あり

大前張をほさいはり

眞考さいはりに衣はすらんてふ歌によりて此名はありさいはりは初萩の事也今は傍なるに似たれと物の名はさる類も多き也神樂さいはらといふは後の好事のいへるにてこのまいはりをすへての名にもせし也

愚案大前張に七首あり下の小前張に九首有前張は一曲の名なるを摠にわたりて大小と名付かへたる事いとおほつかなしたとへは大前張七首の中の前はりは本曲にて有をその調子にて十六首なから（イナシ）たふに取て又呂律なとの違めあるによりて大前張小前張とはいひかへたるにや偏に是は僻案なり可笑之猶郢曲の人にとふらふへし

宮人

本

みや人のおほよそころもひさとほし古本ひささぼし

末

ひさとほしゆきのよろしもよおほよそころも

古語拾遺曰磯城瑞垣朝漸畏二神威一同レ殿不レ安更令三齋部氏一率二石凝姥神裔天目一神裔二氏一更鑄レ鏡造レ劍以爲二護身御璽一是今踐祚天之日所レ献神璽劍鏡也仍就二於倭笠縫邑一殊立二磯城神籬一奉レ遷二天照太神及草薙劍一令二皇女豊鍬入姫命一奉レ齋焉其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰美夜比登能於保與須我良爾註 今伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須

俗歌曰美夜比登乃於保與曾許呂茂比佐止保志由伎乃與保志茂於保與曾許侶茂（詞之轉也）愚案宮人の歌は崇神天皇の御宇に天照太神を大和國笠縫の村に遷し奉りし時に宮にてまし〳〵ける豊鍬入姫のみと宮人と共によもすがらとよのあかりし給ひけるにうたひ侍る歌なり古語拾遺に載たる歌の詞世俗に用ゐ所轉今の誤り有ことをいへりおほよすからをおほよそころもとうたひいさとほしをひさとほしとうたへるはいつれも五音相通なり歌の心はおほよそは凡の心也ひさとほしは膝より下まで衣のたけのなかきをいふゆきのよろしも雪の夜によろしき（と有はわろし肴のよろしも也）と云心なり神樂の曲にはこの一首を本末にわかちてうたふなり（へり）但きのよろしもといふ詞相違ありき（よさいふそよき）のよろしもはきてよろしきと云ふ心にや又ゆきのゆ文字を略してきのよろしもとうたふにやしりかたし

眞云賦の左に宮人木綿して前張階香取（與此號大前張）と古本に注す然るを難波潟をも今に書入たりされは本是に不入と注せり

木綿志天

本

ゆふしての神（留鮴）のたき田（佐は加の誤也　佐支(古)術）のいね（奈）のほの

愚案たきたは田の名なるべし

眞考ゆふしてのとては此下の言につゞかすゆふしてるを誤りつらん古本にさき田と有佐は加の誤り也神代紀に垣田萬葉に垣津田と有も堤なとかこひたる田也

末

いなのほのもろほにされはこれといふなし（志天與古禮千保毛奈久(古)）

（古本一本いなのほの諸ほにしあれはうれるほもなし）

愚案もろほは稲の穂のなかき心にや

眞考これといふなしてふ言後人のなほしたる物にて定かにも聞へす

眞云してよは垂よにてもろほ云々は八束穂にしなへと也これ千の千は留にてのこれるを略くか又かれるほもなくか

難波潟

眞考此條古本にゆふしての上に書て注に難波潟不入此譜以他本書入也と有る然れは古一本にはあれ

と此大さいはりには入ましき也

本

なにはかた鹽みちくれはあまころも

末

あまころもたみの丶島に田鶴（多搗(古)）なきわたる

愚案これは此本末は古今集に入一首の歌也（も入たり雨衣は）田蓑といはん

料のみとてあま衣とはいへり雨にきる衣は蓑なれは也

前張

眞考前張は一首の言なるをそれか詞にうたふ神遊をみな大小の前張の中にこめていへり然れは前に今さいはらといふも此返しを三度拍子にするをその如くの拍子にすれはかれをもさいはりの名を負せしもの也然るを好事の人催馬樂と書なしてよりさいはらといひて前の意を思ふはひか事也貞觀記にもしか書しかと後の事也

本

さいはりにころもはそめん雨ふれと

末

雨ふれとうつろひかたしふかくそめては

愚案この歌は拾遺集神樂歌にも入なりさいはりは初萩（芽子にて ヘギ）也さいは前也前は初といふ心也はりは萩也萬葉集に（はきた萬葉にはりともいへりよりて）はりはらといふは萩原也榛の字をはりとよむ又は（かりて書る所多し）芽子き共よむ也衣はそめんは萩の花に染る。心なり（とはいへとここは）

は摺る也萬葉に摺た染るといふ所有萬十六紅にそめてし衣雨ふれ

階香取（シナカトリ）

本

しなかとりやゐなのみなとにあひそつる船（以留(古)）のかちよくまかせ（爾(古)）。かだふくなかたふくな

愚案しなかとりゐなのと常には申侍りしなかとりはめつらしき様に侍れとも取の字をはとる共とり共よむうへしなかとりも説々有事に侍れは是非を定かたき事に侍り猪名の湊は攝津の國の所の名也あひそのことは丶歌曲のふしにて侍り異儀なきにやつる舟は釣舟也かちよくまかせは風にまかせてよくとれといふ心にやかたふくなは舟をくつかへすなと云心也

眞考階香取はかり字にて尾長鳥也此鳥群る故井（卒）と

いふ冠辭とす冠辭考にくさ〴〵擧けし中に各を用うゐなみなとは津のくに地名也あいそは取助の辭つる船古本に以留不爾と有そよき湊なれは也まかせはかちをよくとりやるなるべし

末

わかくさのやいもゝのりたりやあいそわれものりた（世(古)）（古になし）
利(古)らや舟かたふくなふねかたふくな（は夫婦にたとふる紀にいへり）
愚案わかくさのいもは若くさのつまと云かことしのりたらやは乘たやと云詞也

〔非奈野〕　古本に此題はなくみなしなかさりに入歌の言もしか也

本

しなかとりやゐなのふしはらあひそとびてくるしき（志支加波於登）
かはをとはをとおもしろきかはをと。（於(古)　於(古)　志支(古)於(古)）
眞考今は句も字も荷且かなも誤りぬ
愚案この歌は拾遺集神樂の歌に。（も有それには）しなかとりゐなのふしはらとびわたるしきか羽音はおもしろきか（也）なといへる歌をかやうにうたひなしたるなりふしはらはりしの（榮てふ）木の生たる原也あひそのことはゝ（は上にたなし）音曲のふし也

末

しなかとりやいなのふしはらあひそかみさすやわか（安美(古)）
世(古)代の君はいくらかとりけんいくらかとりけん
眞考しきとらんとて鳥あみをさす吾夫の君そのしきたいくらかとりけんと也
愚案かみさすやは髪にかんさしをさしたるをいふへしわかよの君は夜妻を云いくらかとりけんはいく夜か我妻をとられしと云なり

〔脇母古〕

眞考此も古本ともに無をよしとす各にいふかことし脇はかり字にて吾妹兒也我伊の駒藝なれはわかいもこを和藝毛古と云

本

わきもこにや一夜はたふれあひそあやまりにしより
とりもとられすとり。とら。す。（毛(古)讀(古)也(古)）
愚案にわきもこは女の名也一夜肌をふれてあやま（とは）りしより。又ともあはぬ心にとりもとられすと云（たいふへしとて心うければ）りにや

末

しかりとてやわか夜の君はあひそいつゝよりむつと（(古毛)　(古)世　(古)止利）

り。な丶つ。やつとり。こ丶の夜とを。とりとをはと（古）こり　止利　こり　與助字（古）
七　八　九　十　波（古）
りけん。
愚案しかりともは然ともと云詞也さはあれとも五（也）（有と雖也云つとり云々はたゝしきの事の）
夜六夜より十夜はあひたりと云にや（みなりまた）（か）

小前張

薦枕

本

こも枕やたかせのよとにやあひそたかにゐ人そしき（古）以也辭也　（古）戸　古本裏書云誰贄人
つきのほるあみおろしさてさしのほる（古）あひそより以下二遍かへす
愚案たかせのよとは河内國の名所也まこものおほ（こもまくらは冠辭）
き所なり薦枕たかせのよと丶つ丶くるは枕のたか
き心は贄人は鳥魚なとをとりて供御に備る人の（御贄　獻　たいふ）
事也鳴をとるをは。つくといひならはし侍りさて（手あみしてつきとるか　せり）
は小網なり。河中にさしてをけは魚かとらる丶物（萬葉にさて刺といへり是は魚とる也）
なり

末

あめにます。とよをか姫のやあひそ所のにゐ人そし（也（古））（そ）（へ）

きつきのほるあみおろしさてさしのほる（古注云從此折三度拍子）
愚案あめにますとよおか姫は天照太神の御事也。
○御神の贄人といへる也（大）（り）

閑野　（古）志都夜乃小菅

本

しつやのこすけかまもてからはをひんやこすけ（於（古））（（古）於比牟夜於比牟也己須介）
愚案賤屋のこすけは菅の名也萬葉に賤まろこす
けともよめり鎌もてかる共又跡より生んやと云也（イナシおひんやは二度もおひんや也）

末

あめなるひはり。よりこやひはりとみ草。もちて（於（古）一本）（くひ古本）
愚案ひはりはあかりて空に囀る鳥なれは天なると
はいへりよりこやは寄來。と云也富草は稻を云な（下り）（な用ゆへし）
り（也）

籏等　前（古）

本

いそらかさきにたひつるあれのたひつるあまの（ま）
愚案いそらか崎は名所也たひは鯛なり

末

わきもこかためとたひつる。太比門留(古) あまのたひつるあまの

眞考式に陸奥國荒島郡と那賀郡に礒前有萬葉に礒前のこぬみの濱とよめりされとも下の弓立の歌の本に伊勢島やといひて末にいそらめさきにかをりあふとよめれはたゝ礒の崎の事也

篠波　波は借字也並久摩の意也

本

さゝ波や奈(古)しかの幸崎やみしねつゝ奈(古)一本次のかへしも奈也をみなのよさ女歟ゝや

それもか願也もかれもか願也もいとこせ女仁(古)のまいとこせにせんや

愚案見しねつゝは御稲春女也女ををみなといふは古言にて麻績女(チヤミナ)の意なりよさゝは吉とくやとかされをしねなと云ことく稲の名成へしそれを春女といへりさゝやは詞也それもかもかいふ也ひさくなひさゝあらくなあらゝなとの類也なもかれなもとすへていへるれもかもはそれもかれもと云詞なりいとこせに。な或説にいとこといへるはいかにかゝることにせさいふは男なこそとこなりまいとこせはまことのいとこ也それもかいへこはいとこあといふな唱へ誤りつらん末歌によめな得すされもいとこにせんとはつまにせんと云心なるへしてやと云るはこゝの事也然れは寝床妻(イトコメ)也

末

あしはらたのいなつきかにのやをのれとへよめをえすとてやさゝけてはさゝげやさゝけてはさゝけやかひなけをするや　天波　於呂之也　於呂志天波

愚案あしはら田は萬葉歌に有いなつきは稲をつく人也にのやはかたになふ荷也よめは子の婦也さゝけては荷を持あくるをいふかひなけれはかひなるをさゝくるによせてかひもなきと云心をそへたり子婦かあらはもたすへきにさもなきによりてみづからさゝけてかひなきといへる也

眞考あしはら田は浦廻のあし邊の田をいふへしかなつきかには蟹の名也のやは辭のみよめは童女をいふこと古書によめの齋鋤(イミスキ)を童女の齋鋤と書りさて新婦は專ら童女なれは後には新婦の事とのみ思へりさゝけてはおろしやは蟹の手をあけおろしする物なるをいふかひなけは腕擧をするにて即かのはさみの手を擧るをいふ也さて紀の大歌萬葉なとにも蟹にたとへて身のうへをよみ給へるも有されとこゝはたゝ蟹かさまをいふのみ聞ゆ

殖槻

本

うへつきやたなかのもりや。てふかさのあさちかは（ふ古）（もりや）
らに
愚案うへつきは槻の木を植たる森と云也又田をは
つき〳〵うふる物なれは田といはんとて枕詞にい
へるにやおほつかなしもりやてふは名のもると云
にやかさのあさち原は所の名なり

末

我をきてふたつまとるやとるなてふかさのあさちか（也(古)）
はらに。（我をは置也）
眞考われをきてなるをなを略きいふは古也依て古本にわれ
愚案我をきてはわれを置て二人の妻をむかふるな
乎支天と有古事記にほつえはあめをへりとあるも天をてふへり
りとるなてふはとるなといふ也（といふといへる也）
のてを略く也

總角

本

あけまきをわさ田にやりてやそ思ふとそおもふとそ（なも）（な）
おもふとそ思ふとそおもふとや（な）（なも）（を）
愚案あけまきは上童をいふ男女ともにいふことは（男の童の髪を巻あけて有をいふわさ田は末）
に春日といひたれは早稲を作る田を即しかいへる也やは上へつ
也やそおもふとそおもふやとそとは詞也
く例の辭也曾乎毛不止はそれを思ふなるをてを略くは古歌の常
にて萬葉に多し下みなてなし眞考

末

其思ふとなにもせすして。はる日すらはる日すら春（曾乎毛不止(古)）（也(古)）
日すらはるひすらはるひすら
愚案あけまきを戀しく思ひをる程になにわさをも（おもふに）
せすしてなかき春の日をすら徒に暮すといへるな（さなから）（り）
り
眞考萬葉に春日すら田に立つかる君はかなしもわ
か草のつま無君か田に立つかると有すらもさなか
らてふ言にて春日もそのまゝといふ意也

大宮

本

おほみやのちいさとねりてらにやてらにや。たまな（也(古)天々下同し）（波）
らはてらにや（波(古)）
愚案大宮は内裡をいふちいさことねりはちいさき（大）
小舎人童也殿上童をはことねりと稱するなりてら（いふ）
にや。は手にとらはやの心也扨玉ならは。手にと（は）（やはさらはさらるゝいかてとらはやもし）（小也(古)）（こそ）
らんといへり（ふ也）

末（めを）

玉ならはひるは手にさりや（須臾（古））よるはさねてん（女（古））一說已て下なし（女）（女）
にやよるはさねてんてにや

愚案玉ならは晝は手にさらん（り）よるははやくねんさ
いふなり（へり）

眞考さねさは發言にて渡るをさわたるさいふ類也

湊田

本

みなさ田にくらひや。つせり。さろちなやさろちな（や）（を　やなりさも（古））（ら（古））
やなややつなからさろちなや

愚案みなさ田に鵲八をりたりさ云也さ（つゐたる也）ろちなや。は
（さろもちのむさいへり登留毛知の留毛の約呂なれは也）
是をさる智のなきさ云心也

末

やつなから物もはすをりやさろちなや八なからさろ（ら）
ちなや。（返す）

愚案物もはすをりは物もはまてをりたるなり（おもはてゐろさいへり）

巷

本

眞考古本蟋蟀さ有されさ蟋蟀はこほろきさよむ事
なるを今京此方誤りてきり〳〵すさすこゝはきり
きりすさ書へし

きり〳〵すのねたさうれたさやみそのふにまいりき（古ニナシ）（ゐ（古））（遠禮奴於左萬左）
て木の根をほりはんてをさまさ。つのおれぬをさま（支（古））（於）
さ。（つのたれぬたさまき）（於）

愚案きり〳〵すは蟀蟋也ねたさはねたき也うれた（秋の虫）
さは。うれはしき也御園生にまいりて木の根をほ（角たれたるたれたく）（てあやまちせし也）
りてはむさいへる也をさまさは歌曲のふしなる（の助辭ならん）
へしつのおれぬさはきり〳〵すは角ある物也木の（きり〳〵すの類は頭に）（こは）
（何そたさふる意有ていひし歌なる可し）
根をはむさて角かおれたるさいふ也

末

ねたさうれたさやみそのふにまいりきて。（木のれたほ）
りはんてたさまさつのたれぬ

或說此或說は古本には歌さもになし

本

したらかまうさのひさへのかり衣なさかれそ（り）わたし（こか）
愚案したらは所の名歟かまうさは高麗人也（になる）（こ）（なるへし）
眞云したらは三河甲斐にも有所の名也單へ　狩衣

を取入る事莫かれと云也莫々慈そ莫侘そなとの如
く莫を先にいふは古の常也

末

なとりれそこさめにそほぬらせよかれするいと〳〵
ねたし

愚案よかれするはねたきにそのかり衣を。取入れ（が）（莫）
そ こ しほ〳〵ぬらせといへりそほはしほるゝなりほの
すして。雨にぬらさんと云る心也そほぬらせはそ
溼となと通ふ例也此書後世人は誤りて或説是まては小前張の曲
とぬらせ也是迄は小前張の曲なり
といへと古本裏書に千歳まてなかけて云し事あれは千歳も小前張
の中なるへし

千歳

本

せんさいせんさいせんさいや千とせのせんさいや

末

まんさいまさいまんさいやよろつよのまんさいや

早歌

本

れ（古）や（古）と（古）
いつるそも。と。まり

末

かのさきこえて

愚案いつれそもとゝまりはいつれの所に止まるそ
て 彼崎をこえ行とみつから問答事か
と云也かのさきは山の崎をこえて行なり

本

みやまのこつゝら
みやまは眞山也
愚案つゝらはかつら也くれ〳〵は野くれ山くれは
る〳〵と來る心也

末

くれ〳〵こつゝら
にてこれたくりひけといふ也

本

さきのくひとろむと

末

いとはたとろんと
加奈宇天

愚案さきのくひは鷺の頸かとろんとはとらんと云
なとらんといたくはたして長く
て也
心なりいとはたは最將と云詞なるへし

本

末

あかゝりふむなしりなるこ　われもめはありさきな
るこ

愚案あかゝりは足にされる胼胝也しりなるこはう
なしりなることいふさて
しろよりくる人なり我もめありは後なる人われに
石なさにあゝかりはふみつけし
も目はあれはふむましきそとさきなるこに答へた
ふ
るなり

本

末

とねりこんそしりこんそ
古曾字（古）　古取字

我もこんそしりこんそ
古曾字（古）　古取字

愚案とねりは舎人なりしりこんそはうしろよりこ（古本にしりこそうと有も）
ぞと云なるべし
んと云心也

本　　　　末

あちのやませやま（世）　せやまのあちのせ（世）（古(古)）
眞云是は古本に或説とて小字也
愚案あちの山はあなたの山と云心なりあちのせも（也あちの古と有は妹をいふに）
て山越に妹を置て思ふよしかさらは世山は背山也
あなたの瀬也

一このゑのみかさにこしおとひつ（川止(古)）　かみのね○なけれ（の(古)）
は　愚案このゑのみかさは陽明門を云也こじはかむ（式のころまては）（別に作りてさし）
りの巾子也昔は磯額と巾子とをはさりはなつやう
にこしらへたるゆゑ也かみのねは髪のね也髪のな（なければ巾子の落たる）
き故に巾子を落したるぞと云也（と云也）

四ゆすりあけんすぞ○あけん（(古)よ）（そり）（古ニナシす）　す○りあけんゆすりあけ（よ(古)）（昔(古)）
ん（古ニナシ）

或説
愚案ゆすりあけんは人のおほくてすりあけらるゝ
と云也すゝりも同意也（と云へり必人の多き事とも定かたし何にても有べし）

五たにからゆ(伊)かはをからゆ(伊)かん　をからゆ(伊)かはたにか
ら(伊)ゆかん
眞考をは山の末をいふ
愚案をからゆかんは山のをからゆかんと云心也

六これからゆ(伊)かはかれからゆ(伊)かん　かれからゆ(伊)かばこ
れからゆ(伊)かん
愚案此ことは不審なし
眞考みなたかふさまにする事也

をみなこのさえは（乎美那古乃左衣八）　しも月しはすのかいこほち
二愚案をんなこのさえは女子の才也かいこほちは垣
をやふりて薪にする心なり
眞考こは稲を納めなせる時にかきこほちたる籾を
女兒とも材(サイ)とするといふ也いにしへのから
うたにも有し也又は穂を拾ふ事は式にも其後のも
のにも有其類を女か得ものにするのみ　かいこほ
ちはかきこほしの意

三　本　　・末
あふりごやひはりご　ひはりごやあぶりご

愚案あふりとは腋戸なとの風にあふらるゝを云也
ひはりとは板のひわれたる戸と云也
眞考雨をさへるを雨降戸といひ日を障るを日張戸
と云

○星 明(古)

本　吉々利々 古ニナシ

きゝりりゝせんさいゐやうひやくしゆとうちやうせ
つしむてうしやう〳〵けやあか星はみやうしやうは や の(古)
くはやこゝ○なりなにしかもこよひの月はたゝこゝ
たゝこゝに(古)
に○こゝのすや
愚案きゝりりゝせんさいゐやうは吉々利々千歳榮
と云心也吉々利々は吉利共によき也千歳やうは千
歳のさかへ也皆祝願の心也ひやくしゆとうは白衆
等なり衆等にまうすと云也ちやうせつしんてうし
やう〳〵けやは聽説晨朝淸淨偈也心は晨朝の淸淨
の偈を説をきくと也法花懺法の六時の讃の晨朝に
も此詞ある也あかほしは明星を磬と訓とに云りく
はやはこよなと云詞なり今宵の月は明星のいつる
時は有明の月の事也此下の三首は皆星の曲なり

末

ひやくしゆこう さ
本歌の詞に同し仍略之 下は本歌に同し

得錢子

本

とくせにこかねやなりしもゆふひばをたれかたお 波 乎
りしとくせにこやたらちこきひよやたれかたおりし 太々 眞古夫比興也 波 乎
とくせにこや 古ニナシ
愚案とくせに○こは得選也今の世にも女官に得 是をまつ或説のまゝにいはゝ 子之にて
選と云名有也ねやは閨也しもゆふはしめゆふ が
也しはは檜の葉也たらちこきひ未詳但たらちきゝ たたら よはたゝあるなる檜よ
といふ意にて惜しき様をいふかよは淨たこす殺されとも聞さてたゝ
はきよと云詞なるへしひは檜なりと云へし
の檜の葉は似つかす聞ゆれと未審にてさと聞ゆ
眞考比興也はもしひとやとよまんかたゝらこきは
あたらこきか

末

我こそはみれはやうれたさにたおりてこしかやとく 乎 波
せにこやたらちこきひよやたおりてこしかとくせに たゝ 乎 波
太藏如淡太平利之(古)

こや
愚案我見れはうれたさに手折てこしといふ也
木綿作
本
ゆふつくるしなのはらにやあさたつねあさたつね朝
たつねや
愚案ゆふつくるは木綿をつくる也しなのはらは信（地の名にや）濃の原なりあさたつねは朝に尋行也（といふか）
眞言しなのはらを或説に信濃の原也といへとゆふ
はあさと伊豆三島こそ名あれしなのはよしなくや
末
あさたつねましもかみそやあそへ〳〵あそへ〳〵あ
そへや
愚案ましもかみそやは汝も神そやと云かごとしあ
そへは神遊せよといふなり
晝日。（晝古 古本あさくら いかへ是也歟）
本
古一本いかにして
いかはかりよきわさしてか天照やひるめの神をしは
しとゝめん。（しはしとゝめん古）
愚案あまてるやひるめの神とは天照太神（大御 萬葉に天照ひるめの命紀に）を申大ひ
るめのむちと御名を稱する故なり（も申せり）

末
止古
いつこにか駒をつなかんあさひこかあさるさはべの（佐須也乎加）
玉さゝのうへに。（玉さゝのうへに（古））
愚案拾遺集に神樂歌我駒は早く行なんあさひこか
やへさすをかの玉さゝのうへに此歌と心同し朝ひ
こは朝日を云あさるは求食物と書り食物を求むる
をいふ人にも鳥獸にも云詞也朝日のあさるとはい
ひかたけれと彦とは人を譽たる心なれは人にとり
なして日の影のあさるといへるにや又朝にも事よ
せていへると見えたり拾遺集の八重さすは日のか
けのしけくさす心なり
眞言今本は誤れり古本の裏書に或本を引も佐須也
手加へと有且朝日照岡とは萬葉に多く讀りさはへ
にはよしなしまた拾遺歌集に我駒ははやく行なん
朝日てかやへさすをかの玉さゝの上にと有やへも
誤り也さて日子とは男にいふ事故に日神とひこと
申せし例なし此歌は唱へ誤れるか又さまわかちを
も意得ぬものゝよみしを用來りしか玉さゝはまろ
くつふらかに生しけりたる小さゝをいふ此初句を
古本に伊止古衞加と有もづとこの通にて古有事也

或説

本

なにわさをわれはしつるか（つ一本）

弓立（ユタテ）

本

伊勢島やあまのとねらかたゝほのけおけ〳〵（の（古）　女（古）　く）

愚案とねらは刀根等也六位以下の人をとねとは云り爰にはいやしき人を云にやほのけは火の氣なりおけはあちめの曲にいへる詞と同し但是等は皆歌のふし成へし

眞考いにしへとねりといふは大内に宿直する人を皆いへりそれより轉して刀禰といふも意は舍人なから末なる人を云事となりて里の刀禰なと祝詞にもいへりこゝにはかなはす　今考ふるにあまをとめらをあまのとめらとうたふのみ古本にのとめと有はよし今は誤れり

末

たくほのけいそらかさきにかほりあふおけ〳〵（な）

愚案かほりあふは薫の字也火の氣をかほるとは云也

眞考こは火氣のあかくもるをかをるといふ萬葉に朝かすみかひや[illegible]けのみるをれるなとはくもるなり後に烟にもいひたり

本

大君のゆきとる山のわかざくらおけ〳〵

眞考稱に作る木には櫻を用る成へし弓の木と云へと弓に櫻を用し事なふなし

愚案ゆきとるは弓につくる木をとるなりわかさくらは若木のさくらなり

末

若さくらとりにわれゆくやふねかちさほひとかをおけおけ（古ニナシ　な　せ）

愚案櫻をとりに行に舟のかいと掉と人かをといへる也人かせは他人にかせと乞なり

本

すへ神のけさの神あげにあふ人は千とせの命にあることこそきけ

愚案神あけは神遊はてゝ神の天にあかり給ふをいふなり

末

すべかみはよき日まつれはあすよりはあけの衣をけ衣にせん

愚案そへ神はすへ神と同し（に）あけの衣は五位のきぬなりけ衣は鶴の毛衣をいふへし千とせの命に對していへり（當の衣にきんと云也此祭り仕りしにしに五位に成るべしといふ也）

朝倉

本

あさくらやきのまろとのにわかをれは

末

わかをれはなのりをしつゝゆくやたれ

愚按天智天皇御製朝くらや木の丸とのに我をれは名のりをしつゝ行はたか子そといへる末の詞をいさゝか略して朝倉の曲にうたひ侍る也朝倉の宮は天智天皇の行宮筑紫に有よし奥儀抄八雲御抄等に載られ侍れと慥なる所見をよひ侍らず爰に日本紀を勘へ侍るに齊明天皇の御時（皇極天皇重祚諡號）百濟より高麗を攻し時高麗すくひの軍を我國に求め侍りしかは天皇筑紫へ赴き給はんとて伊豫の國に幸して熟田津の石湯の行宮に留り給へり其時天智天皇はいまた太子にて供奉し給へり其年朝倉の橘のひろ庭の宮に移たまひて朝倉の社の木を切拂ひて此宮を作り給ひしかは朝倉の神怒りをなせりとなん齊明天皇は終に朝倉の宮にして崩御し給へり朝倉の社は延喜式神名帳には土佐國土佐郡に有りと記せり風土記にも土佐國朝倉の郷に朝倉の社有と見えたり四國の中なれは伊豫國より土佐國に移りましましけるにや朝倉の木の丸殿は土佐の國に侍るを古來誤りて筑紫にありといへり木の丸殿は行宮を云まろ木の黒木にてつくれる名也天智天皇いまた春宮と申侍る時齊明天皇に隨給ひて朝倉の行宮に留り給へる時此宮へ參るもゝのつかさ名謁してまかり出侍る事を名のりをしつゝゆくはたか子そと詠し給へる也郢曲に朝倉返しと云事あり神樂譜云朝倉吹返催馬樂拍子式云搔返絲竹云々神樂に朝倉をうたふ時は笛も和琴も別に調てさいはら拍子にてうたふをかへすといへり朝倉の歌をは御所（前イ）返しと延喜帝の勅諚也朝倉は皇居成しによりて御所（前イ）返しと名付給へるにや

眞考こは齊明天皇筑紫へ幸して朝倉てふ所に行宮を作らせておはします時中大兄皇子命の讀ませる御歌そと後の抄共に見ゆ古き物には見えねとさも有へくおほゆ朝倉は紀にも見えねと筑紫ならては

似つかはしからす木のまるとのは行宮なれは全く玉をもほとこさすよろつ木のまゝにて作れは也名のりは名謁とて其夜のとのゐ人の名を申て去也

或說

本

朝倉やお乎めの湊にあひきをれ古せは玉のめさしにあひに古き逢にけり

愚按織面の湊は所の名なるべし（眞考或說織面と書は古本に乎女とあれはかな違へり）めさしは古今集歌にめさしぬらすな沖にをれなみと云に同じ（枕さうしにちこのめさしなるさもいひていまたひたい髪のみしかくして目さすほさなる）二の說あり一說には海士のいさりするとて貝つものなと（をいへりそれより後わらはさ成ても同じことを云ならんこゝのめさ）とり入る籠のやうなるものをめさしといへり又說（しはなきほさになりし女子をいふとみゆ玉はほめたる也あひきあ）はめのわらはをめざしと云りめなとをさしとる海（ひは網引あひ也今は字わろし古本によろ）士乙女也玉はほめたる詞也いつれにも違ふべからず但此歌の心は猶のちの說叶へりといへり

末

かつらきやわたるくめちのつき橋の衣もとらすいさかへりなん

愚案久米路の橋は常の事なり衣も（心歟 し一本）とらすはいそきかへる心なるへし久米路の橋そ夜の明れはかけ絕る故に急きかへるといへるにや

眞考六帖にうもれ木はは虫せはむといふなれはくめちのはしは心してゆけといふとおなしくちたる橋なれは心もとなしとよめる也久米石橋てふ物かたりはいと後のわさなれはいふにたらす

其駒

本

その駒こや我にわれくさこかふくさはとりかはん轡こ（古ノみつは）り草はとりかはん。（みつはとり草はとりかはんや（古））

愚案草飼也こは五音相通する也一云駒か我に草をこふと云心也

或說　葦駮歌（アシフチノウタ）（古）

あしふちのやもりのもりの下なるわかこさまゐてこあしけ古ナシふちのとらけのこま

愚按あしふちのやは芦けふちの駒と云心也わかこさは若草也ゐてこは將來なりもちてきたれといふなりとらけの駒は虎毛や芦毛ふちはまたらなるとらけといふにや

竈殿。歌（遊(古)）

本

とよへついみあそひすらし。久かたの あまの かはら（毋古）
にことの聲するひわのこゑするとさのこゑする（ひきつ古）（さ）

愚案竈殿はへつい殿なり（にて）神供を調する（燒）（くほめていへり）所なりとよは豊也とよみきなと云かことしゆたかなる心なりみあそひは御遊神樂を謠也（神遊する也）遊事也あまのかはらは昔八百萬の神の集り給し所なれはへつい殿になすらへていへり（ふか）とさの聲するは文字誤あるへし笛の聲するとそあらまほしき

末

久かたの天の河原にと。へつひ。すらし。ひわの聲よし琴の聲する（よ(古)）（み遊(古)も）（(古)さ）（す）（ろひき(古)）

愚案とへついはとよへついといふと同し

酒殿歌

本

さか殿はひろしまひろしみかこしのわかてなとりそしかつけなくに（原(古)）

愚案酒殿はみきつくる所なりまひろしは間廣き也（神御酒をかむ）（眞しにて）殿の廣事を云りみかは甕の字也神酒をもる瓶なり（眞に廣きさをいふる事のこと也）（神御酒を醸する甕也みかこし）祝詞にも甕の腹みちならへてといふこゝは則腹を云へしわかてなとりそは我手にはなとりそは穢るへき故なりしかつけなくにとれとはつけさる故にと云也（も其甕に男の女の手をとりてたはくる也よりてしかせよとはつけいはぬにさいへり且古き事説に之知は世数相佐とも有）

末

さか殿はけさはなはきそむれりめのもひきすそひきけさははきてき（とうれ(古)）（古になし）

愚按けさはなはきそは掃除すへからすと云也むれりめはうれりめとも云り五音相通せり加茂のみとしろにかたらひにもきたる女の色とりたるみかはたもつ物をなりめといふそれをうれりめ共云にや神田作ものゝ食物もつをみかはたとは云也むれりめは群女と云心なるへし

眞考けさはなはきそは即女とものはきつれはといふ也其女の立ふるまふさまをも引すそ引とはいへりさて今むれりめと有は聞えす古本に宗字云々と有も宗は誤りにて宇爾利女か字も猶誤りにて一本

に依て止禰利女とすへし其殿にとのいする女とも
をとねりめと云へし且刀禰といふもとねりの略な
るに六御縣祭の祝詞に六御縣能刀禰男女等至萬氏
云々諸参出來氐といへり

或說

あまのはらふりさけ見れるや雲のくもの中なる（波(古)へ(古)　み一本）
雲のなかと。のなかとのみの。こすけをさきはらいい（天の(古)　べ）
のりしことはけふの日の。あなこなやわかするの神（たゐ(古)　さ　下上古）
のかみろきのよさこ

眞考萬葉に造酒歌とて中巫のふとのりとことといひ（臣歟）
はらへあこふ命もたかためになれ

愚案あまの原は天也ふりさけ見れははふりあふ（放て遠）
きてみる也雲のなかなるはなかとみといはんとて（序のみ　く）
儲の詞なりなかとみとは中臣氏天兒屋根命を申也
あまのこすけは小菅なりさきはらいはさきはらふ（ひ）
也菅にてはらふは菅貫もて秡する事也あなこなは（古へありしわざと見えて大祓の詞にも天つ菅曾を云々といへり中頃より此事絕たるなるへしあなこなはけ）
なこむると云心也なこむるはやはらくる也なこし（ふは日かけもよくあゝなこらやといふ意なるへし）
の秡と云心なりわかすへの神は末孫の神也神ろき
は神呂伎と云神の父を申也神ろみとは神の母を申
也中臣の祓の詞に有こと也よさことはよき子成へ
し神の孫子たる人のなこむる祓をする事を云也（ひ）
にはとりはかけろとなきぬなりおきよ〳〵わかと（よ）
によのつま人もこそ見れ（は）

愚案かけろは鷄の鳴聲かけろと聞ゆる。なりおき（よりて百濟かけともいへり）
よは夜も明たれは起よと云也よのつまは夜の妻也（り）
吾門に見る人もこそあれ夜を籠て歸れといふなり

右神樂の釋は愚案のをよふ所也歌の起其よし何事の
起りと云事を不知只字面の義はかりをいさゝか是を
註す凡神樂は一越調をもて謡ふといへり二條家には
宮人の曲をもて奥儀とす綾小路家には弓立を秘曲と
す但宮人の曲は近代うたひ絶えすと云り

眞考貞觀元十月紀曰尚侍從三位廣井女王薨（長親王後長田王の曾孫）也　廣井少修德操擧動有禮以能歌見稱特善催馬樂諸太
夫及少年好事者多就而習之焉至于殂沒時人悼之と
あれは今京と成てはやくより有事也されとかつらき
の寺の前なるやといふは光仁天皇即位より前の童謡
也然れは奈良の朝よりの事ならぬか又此童謡即とい

はりふしにうたへるかさらは此歌は後にかりて此さいはり拍子のうたは猶むかしよりありしか

梁塵愚案鈔卷之下

催馬樂

愚按催馬樂は昔諸國より御貢物を大藏省へ納し時民の口すさみに謠ける歌なれはさいはらと名付る也馬をもよほすとかけるは御貢物おほする馬をかりもよほす心なり

異考神樂に前張有それか拍子にうたふ故に是もさいはりの名を負しもの也其三度拍子になる事上の巻にいふか如し然るにこれをはからの唐の世に催花樂てふ樂の有しをもて好事のもの丶後に催馬樂とは書つらんを三代實錄にもしかしるせしかさて後の人其字につきて此抄の如き說をなせしことしるしか丶る說は後人のくせなり催馬樂と書ても猶さいはりと云へくおほす

律

我駒

いてわかこまはやくゆきませ（ませと有は後人のわさ也一本行こせと有は）まつち山あはれまつち山（またよし）○はれ（あ落か）

二段

つらゝ山まつらん人をゆきてあはれゆきてはやみん
眞考まつち山のまを略しうたふなり籠うたふといふ多し
愚按吾駒の歌は萬葉集十二にいてわか駒はや〱ゆきこせまつち山まつらんいもをゆきてはやみん紀にも萬葉にも乞の字なかきて即こふ意也此歌に詞をそへて謠ひ侍る也いてはさらばなど云のこせも此歌は去欲と書て欲は乞意なれがこそしゆきこせは行越よと云心なりまつち山ははこせとよめり萬葉にこせは皆乞事也こそと云も同し
大和紀伊兩國の境に有山也はれは我也二段つらゝつち山はまつちのまを略きてつち山とうたひし事しるしちな誤りつらゝと書けん外も末歌には略きいへる多し山も名所なるべし
眞考まつち山は紀伊にあり萬葉に紀路に入立まつち山とよめり
澤田川
さはた川袖つくはかりあさけれとはれ
二段
あさけれとくにの宮人やたかはしわたす
三段
あはれそこよしやたかはしわたす
萬葉七に廣瀨川袖衝計淺幾乎也心深目乎吾念有良武と有本を用ゐ
愚按此歌は澤田川袖つくはかり淺けれと國の宮人たかはしわたすと云歌を三段にわけて謠なり澤田末をかへて山城の久邇京作られしはじめにいへるもの也河久邇の都は皆山城國みかの原に有所の名也袖つくはかりは水の袖にひたる計淺きを云然は橋までこは泉川なるへきを澤田川とも云るにや淺くてたれたるそての末のやゝつくばかり淺き也にも及ふも入ましき事なれとたかはしを○わたすと云るはにさへ地景のためにせるにこそ三段のあはれそこよしやわたされしはしにやこゝなはあはれは○嗚呼也譽たる詞也そこはこの所也其所といふ也さほめなけく也
高砂
たかさこのさいさこのたかさこの
二段
おのへにたてるしらたまたま椿たまやなき
三段
それもかとさんましもかとましもかと
四段
ねりをさみおのみぞかけにせんたまやなき
五段
なにしかもさんなにしかもなにしかも
六段
心もまたいけんゆり花のさゆりはなの

七段

けさいたる初花にあはまし物をさゆり花の

砂の高き所を云
のさは發言にて上のとを重
愚按高砂は山の名也さいさこはちいさき砂也高砂
ね云のみさて砂長して山さなるてふから事より此高さこは山の心
も小石の重りて山となる心也二段白玉椿は花の白
にて飹峯上(チノヘ)さ云り　それたもりにて左平は辭のみ
き椿を云也三段のそれもかささんは誰かさ云詞也
は汝(イマシ)をもか也木草をさしてもさがなさ云はましさも
ましもかさは汝かさ云心也四段ねりをさみおは織
云べし　練緒染緒の御衣掛さいふか衣かくるには竿を用うるなる
たる衣さ云心也みそかけは衣袈裟をかくるもの也
た又綱をひきても懸れは其綱を緒さ云へし椿はよしなけれさ綱の
五段のなにしかもさんはなにかさ云詞也古今集の
糸なしかいふらん　なに也左はをは也古本に左ンさ書てはぬるは
歌に誰しかもさ云かこさし六段の心もまたは心に
うたふ時の事也今さんさ書はわろし　いけんは
待しさ云也ゆり花は百合花なりさゆりは早く咲百
またかれけん也またくは急く也　さは狹にてちいさき也
かくれたる事なし
合也七段は其心不審なし

眞考山に峯さ尾さいふ尾は山するの尾にて香具山
の畝尾てふ類也さるを又をのへといふは峯の上の
事にて別也萬葉に峯ををさいひみねの上ともいへ
る是なり右二つの言似て人まさへりこゝは嶺上と
心得へし

夏引

夏引のしら糸なゝばかりありさ衣にをりてもきせん
於(古)
ましめはなれに
與(古)

二段

かたくなにものいふをみなかなましあさきぬもわか
めのをくたもさせくきよくかたよくこくびやすらか
與(古)
萬之(古)
にぬひきせめかも

糸鹽　引ものなれはいふ
愚按夏引は。夏。この糸也なゝはかりは七兩をいふ
にやさ衣はちいさき衣也ましは汝也めはなれよは
その
しかいへる女にこたへて
本妻に離れよさ云ふ也二段の心はめはなれよさ数
心たらにはひなく一かたな
たる女に答たる詞也かたくなは頑字也をみなは女
るたいふ　なみなはさ云
也ゑしは又汝也あさ衣は麻のきぬ也たもさよくき
はぬひなしによるもの也
よくは袂をよくきよらかによる也かたは衣の肩也
は此言のもさにて古皆しか有
肩にしはみつりなさなくめやすく
やふれやすき所なれさよくぬひたる也こくひは大
女
むかひ　ましわか
くひに對して云へり汝我ら妻離れよさいへとも本
よろしくぬひてきせんか
妻のこさく衣裳をぬはん事は覺束なきさいへり

貫河

ぬき河の瀬々のやはらたまつらやはらかにぬるよは

なくておやさくるつま
二段
おやさくるつまはましてる日はしもしかしあらはや
はきのいちにくつかひにかん
三段
くつかはゝちかいのほそしきをかへさしはきてうは
もとりきてみやちかよはん
愚按貫河は美濃國に伊豆貫河と云所あり伊豆を略
やはらは泥のやはらかなるなやはら手枕にい
していへり瀬々の手枕は波枕と云かことし波はあ
ひかけたる序のみさて枕もやはらかなるはうまいせらるればはい
らき物なれはやはらかにぬる夜はなきと枕によせ
ひて且次の和らかにぬる夜はなくてとは思ふ夫とさけてぬる夜
ていへりおやさくるは父母として子の妻をさくる
はあらて父母のさりさくる中よさなけく也こは女の歌也
なり二段おやさくるつま夫の詞なりましは汝也て
たやさくるつまこれも女のいふめりたやの放る夫なれはまして
る日はしもは照也みやひかにてれるやう也しかも
おやにくにうるはしくなもはるゝと云ふを略きてうたふは常多
あらはしかくの如くあらはと云詞也やはきの市は
しかしあらはこれに男のいへりしかうるはしくおもひてあら
參河の國矢矧の里に立てる市なりくつは女の沓な
はくつかひてたくらんと也 の を略けり
りかひにかんはかひにゆかんと也三段は女の詞也
ちかひは線鞋にて千閑の久都と云と和名抄に云り然れは千かい
ちかひのほそしきは沓の縫目のちいさきを云女の
と書しを後にちかいと誤りし事しるし同し抄に此沓男女通著と云
沓は男の沓よりも小きを云さしはきては沓をはく
り大小有へしこの小さき女くつをかへと云也うはらは裙の事と云
を云うもは裙の字なりしひらとも云宮ちは三河國
人あれと古へ下裳と云はさくひ也うはもは衣のすそのうへに引
に宮路山と云所有矢矧の市同國なるへし
かくるをいふもみゆ宮路山は矢矧の市より今の道一里はかり東
に有といへり宮路山とよめる歌更科日記に有

東屋

眞考あつまやは和名抄に唐令云宮殿皆四阿 和名阿豆萬夜
又下の欀の下に楉木 須美屋四阿 大欀也と有を合せみ
れは屋檐の四角を阿と云也かゝれは阿つまやにて
阿は字音なれと古言にあらす今の京こなたの言也
まやは同抄に唐令云五品以上三門兩下云々兩下 和名末夜
といひてこは表うらへのみ屋のたれたる也すへ
て左右の手を眞手といふ如く二門そなへたるを眞
といへはこはこゝの古言也かゝれはあつまやのま
やとつゝくよしなしあつまやの雨そゝきまやのあ
まそゝきてふをつゝめていへるならん杢式鐵工
壑鐙一隻 長三寸廣六寸 料鐵十三兩鐙舌一枚 長八寸廣九寸 料鐵七兩
あつまやのまやのあまりのあまそゝき我たちぬれぬ 是はあつの二字を略
そのとひらかせ

二段

かすかひもさしさあらはこそそのさんのさをさゝ（外之戸）（さなイ）
めおしはらひてきませわれや人つま（ひ一本い）

愚案四阿口さ書てあつまやさ讀雨下さ書てまやさ讀り四阿口は御所造なさの四方に軒ありてあまたりの四方におつる屋也まやは臺屋作の雨方に雨水の落を云あまりは軒の事也あまそゝきは小雨なり（軒よりそゝき）おつるしつく也そのさは男のたゝく其戸也金次（カスカヒ）てふ言そのさは。戸の戸さ云か如し二段のかすかひは戸にて物さ物を次合する所に打かね也こゝは戸のほこたちなさなさしをもたするかねなりさんのさも戸の戸也人妻かために金を立しさゝしたゝかなる戸さしにあらす開やすしさは女の自稱せるなり
いへり戸さしは局にて戸の內に有鐵鉤也
眞考そのさんのさは其外の戸かわれや人つまさはわれや他人の妻なるやはしからねははゝかりなしさいふ也

走井

はしり井のこかやかりおさめかけそれにこそまゆつ（乎（古））（於（古））
くらせていさひきなさめ

愚案走井は相坂に有所の名にやこかやは小萱也まゆは蠶の繭なり

眞考はしり井は萬葉七にも二所出たれさいつこを指さも知かたしされさ萬葉の二首も此歌も必相坂のはしにはあらし　こかひするには下に簀を置其上に萱なさわらにてもあみて敷いさたてを置て桑を置也是は後世にて古へはたゝかやを敷桑を置にやさて桑はかれかくひ物なれは云すかのこかやの上にまゆをつくらせてそのて引なさめさいふのみ桑の下に敷て蠶をあらするにをさめかけは心得すもしかひこによし事あるかそれにこそさいへは其家の專らなる女をかけてつくらせさいふにや

飛鳥井

あすか井にやさりはすへしかけかけもよしみもひも（也（古）於介）
さむしみまくさもよし（りイ）
夏蔭也萬葉に此言有

愚案飛鳥井は大和の國あすか井河の邊り也又東宮の里に有井か今其飛鳥神社のまへに古井有さいへる實なるか知らすの二條萬里小路に飛鳥井さ云所有其仔細また詳ならすかけもよしは木の陰凉しき也みもひは寒水也
其井の
其邊馬にかふによき草有さいふ也
みまくさは馬に飼草也

青柳

あをやきをかた糸によりてをけや鶯のをけや（也（古）於）（於）

二段

鷲のぬふさいふかさはを（於）けや梅の花かさや

愚案古今集第廿かへし物の歌青柳をかた糸により
（かへし物とは初めはまかれふくなとの
呂のうたをうたひて後律にかへして此青柳をうたふといへり）
て鷲のぬふてふ笠は梅の花かさ此歌を如此に謠也
をけやは歌のふし也源氏若菜の巻の上かへり聲に
青柳といへり律の歌をかへり聲といふへし

伊勢海

いせの海のきよきなきさに鹽かひ（しほの間ならむ）になのりそやつま
也(古　也(古)
んかひやひろはん。玉やひろはん。
愚案此歌の心はかくれたる所なししほかひは鹽の
ひたる間なりなのりそは神馬藻を云也
眞考しほかひは海の貝なれはいふしほ舟といふ類
也清きなきさは萬葉に住のえに清き濱をいへる類
にて一つの名にあらす

庭ニ生ル

にはにおふるからなつなはよきななりはれみやひン(古)
とむのさぐるふくろををのれかけたり
愚案からなつなはたゝ薺也みやひとんは宮人也さ
くる袋は薺を摘入袋をかけたるへし

眞考さくるふくろはなつなの子は三角にて袋の如
くなれは宮人のこしに下る袋をおのれか莖にかけ
たりといふならん

我門爾（古ニナシ）

わかゝとにやわかかとにうはものすそぬれ下ものす
そぬれあさなつみゆふなつみあさなつみ

二段

あさなつみや（古コナシ）ゆふなつみわか名をしらまくほしから
はみそのふのみそのふの

三段

みそのふのや（古ニナシ）みそのふのあやめのこほりの（安也女乃古保利乃）大りやう（領）
のまなむすめといへおとむすめとこそいはめ
愚案うはも下もは女のきる（上にいへり）裳也わかなをしらまく
ほしからはとは朝な夕なつむ女の名のりをしらま
く（おもはゝ）ほつせはと云也みそのふは御園生也あやめのこ（あやめの郡は）
もし讃岐の阿野郡なるもとは綾部郡といひしかへなめといふは常
ほりは郡の名也大領は郡の司に大領少領と云名有
也後には河内の錦部の郡を略ていふ類ならん御園生といへるは
職員令に見えたりまなむすめは實の娘也乙娘は弟
御園の池の菖蒲にいひなせるか猶考へし
女也

我門乎

わか門をさ散(古)んかう散(古)さんねるをのこよしこさるらしやよしこさるらしや

二段

真之奏之御
よしさらはさ散さんかう散さんねるをのこよしこさるらしやよしこさるらしや

愚案とさんかうさんはとさゝんかうさゝんと門をさゝんするやうをあらまししたる也ねるをのこは練男也今の世にも七日の節會に大將の假粧の具をたまふ陣の官人をはねりおとこといへりよしは假の字也ゆるす心也こさるらしは不來共あらなんの心なり

眞考と散かうさんは左さま右さまにてからこちとねりてあゆむは故有ことくなれは我方へは依來さるらしやいかゝと女の思ふ也何の故緣もなくたかくにねりあゆみつゝ過かたけなりされと猶も心ひかるゝさま也　散は借字　ねるはならの都をねるはたか子そと言かことし　よし來さるらしのよしは萬葉に妻よしこせね其外にも我方へ心をよせるにも依來るにもいへり　よしなしに右のよしこさるのよしとは異にて故由のよし也本よしさらはと有は誤也

二段

大路
於引音
おほをちにそひてのほれるあをやきか花やあをやきが花や

み一本
あをやきかしなひをしれはいまさかりなりやいまさかりなりや

愚案そひてのほれるは路のほとりにそひておひのほれる柳也しなひは柳の枝のしなひなびく也糸の長くうつくしき心也　源氏物語に藤の花にもしなひといへり

眞考をちのをは發語か例を思ふに於保於知爾と保を引て唱ふる餘音を傍に附しか本言に入しもの也上の何しかも左ッを此本にはさんと書上のしャに生たるを即しんしにと書るか如し　古へ京の大道に柳を多く植られしと見えて萬葉にも大道の柳の歌あり　添てのほれるは大道のまに〳〵九條より一條の方まて立なめるをいふなるへしさて柳花はから歌にはおほくいへとこゝの柳によめる事なし如糸有柳もむかし有しにやしなひをしれはゝ見れは

を見誤りけん

大芹

眞考和名菜羹部蒸の次に茹厨人進藿茹々(由天毛乃)

おほせりはくにのさたものこせりこそゆてゝもむま(宇(古))しこれや(古)このせん(前)はん(盤)さん(三)たの(太乃支)木のゆし(由之)の木のは(盤)んむしかめのさうさいかく(ヤンこ以下別也もさ此所に言さも落しもの也)のさうさいかくのさいひやうさい(こさい注に有面)。りやうめんかすめかけ(宇(古))たるきりさをしか(保)なはめはむき(此左雨)五六(五ノウラ二也)かへしの一六(古ナシ一ノウラ六也)のさいや四三(四ノウラ三也)さいや

眞云今も石(波盤支)の立様二つあり古のは又異有か

愚按くにのさたものは諸國より。奉る物を云也ゆ(か)てても(湯煮するた云)は芹を羹也むましは味の美也(定りて)せんはんさんたゆしなさはみな木の名にて双六の盤に用る也ゆしの木はゆすの木櫛にひく物也むしかめのさうは賽を入る筒也むしかめは虫のくひたる形をほりたるなりさいかくは犀角を賽にすりたる也ひやうさいさい是も賽の名なるべし(いかゝ)りやうめんは両面を切目にしたる盤の木也かすめかけたるは詞なりきりさをしは両面に切りたるを云かな(いかゝ)はめは盤の目に金をはめ入たる也五六のさいと云六の字は二をあやまりて六とかけるにや五六のうらは一二なる故也然者賽の六つの目を悉くあらはせり萬葉集の歌一二の目にも非す又五六二三四さへありけり雙六のさいといへる歌と同意なり

眞考國のさたものもし芹を貢る國有か式を考ふへし芹は御園にこそ作らせり

淺水

あさむつのはしのとゞ(古)ろとゞろとゞとふりし雨のふり(爾(古))。し我をたれそこゝのなかびとたてゝみもとのかたちせうそこしとふらひにくるやさきんたちや

愚案あさむつの橋は飛彈國にも越前國にもある名所也とゞろは橋板を踏ならすを云ふりにし我とい(を)はんため雨と云ふ字を加へたりなか人たてゝは中人をたつる也みもと(みもとのかたちは其君たちの御許の有様をいはする)は御許なりかたちは貞也人をかしつく詞なりせうそこは消息なり文にても又只音信するをも消息と云也さきたんちは。公(やさ)達(の)なり(略なるへし)心は年ふりたるわれをしらすして媒(も)妁をたのみて(やさしき)。きんたちのとふらひせうそこするといふなり

挿櫛

さしくしはたそはりなくつ。ありしかとたけゝのせ（さ　萬(古)　字　久(古)）
うのあしたにとりゆふさりとり。ともしかはさしく（與字(古)　此間落しなるへし）
しもなしやしやきんたちや（沙(古)　利(古)）

愚按さしくしは額にさす櫛也たうはりは給り也七（万　十餘り也又十計の略か）
八枚なりたけくのしようは越前國に武生國府と云（のこふ下に有）
所有それをたけくといふ也しようは様なり國の司（と同しかるくし其たけふのふをうと云を又くに轉して云か次には）
也（様なり　國司の）しやきんたちはききんたちと上にいへる（たけふと有古本たけ久と有れは此説いかゝしやきんたちとあるは）
に同し（古本に沙のかな書たるをもて書誤れり前後に其事有にて知るへし）

鷹子

たかの子はまろにたうはらんてにすへてあはづの原（天(古)　ゑ(古)）
のみくるすのめくりのうづらとらさんやさき。たち（和太里　乃(古)　か(イ)世(古)　ん）
や

愚案まろにたうはらんは丸に給はらん丸とは昔自（われ　也まろとは我）
稱して云也あはつの原は近江國にありみくるすは（を下りていふことは也）

山城の。栗栖野をいふなり（科　小）
（也美はみよしのなとの類の上にそへいふこ）

逢路（さは也）

あふみぢのしのゝをふゝきはやひかすこもちまちや（り歟　し歟）
けぬらんしのゝをふゝきやさきんたちや（し歟）

愚案しのゝふゝきは秋ふく風のはけしき也野分な（篠　寄ませに）
との類也はや。ひかすははやふかす也五音相通也（吹たゝいふり　は若よにて上へつくことは）
こもちは子を持たる女なりまちやとぬらんはまち（こもりまちはましとはしの誤りなるべし）
てやねぬらんといふ心也

眞云こは近江なる女の歌也それかもとへかよふき
んたち其あふみ路の篠原にふゝきのふかすも
かなふゝきにこもりましやしぬらん此ころおとつ
れたえたりと云なるへし或人上を男の言とするは
さきんたちてふ言にたかへり

道口

眞考風を便りに互に心をかよはするにとりて心あ
ひの風といひなせしか萬葉に風をたのみたる歌多
し○武藏と但馬にて生口あれとこは道の口といふ
にかなはす

みちのくちたけふのこふに我はありとおやには申た

へ心あひのかせやさきんたちや

愚案みちのくちたけふのこふにわれはありとおやにはつけよ心あひの風といへる歌をかくうたふ也

道口とは越前の國を云心あひの風は風の名なり

眞云すへて前中後の國をはみちのくち道のなかみちのしりといへりみちのしりこはたをとめみちの中國つみ神なと萬葉に多くよめり文なとにはこしのみちのくちなといへりされとたけふてふところ越前に有かしらす　桓武紀に武生てふ氏の人みゆれは地の名には有也

更衣

眞云こは夏冬の衣かへにはあらすひとゝわれか衣をとりかへてきんと云也

ころもかへせんやさきんたちわかきぬは野原しのはら萩の花すりやさきんたちや

愚案一説はきの葉のすりと有春夏は葉のすりと諸ひ秋冬は花すりとうたふといへり　眞考されといにしへはきの葉にてすれる事なしはなのなの落しにつけて附そへたる說知へし

何爲

いかにせん。やをし（世字(古)）のかもとりいてゝゆけは（加）おやはありくとさいなめ（牟）とよづまはさだめつやさきんたちや

愚案をしのかもとりは鴛鴨なり（もかもの類なれはしかいふ）此鳥のことくに出（忍び）て行は親はありくとて罪なんなりよつまは。夜の妻也

眞考萬葉にこらか名にかけのよろしき朝妻といふはあらはしての妻はひるむかひをるにて朝は日のよし也忍ひたるは夜のみあへは夜妻と云

鷄鳴

鳥はなきぬてふかさゝらまろかしかものをおはしきたりゐてすれなるこなすまて

愚案鳥なきぬてふは鳥はなきぬと云心也かさゝくらまろは人の惟氏なるへし其下の詞未詳「しかは（以下一本ニナシ）然は也物をおしはしは物をおしたて也きたりゐてすれは來に掇其事也何事とは不知也なるこなすは鳴子を引やうに諸人こそりて見也

老鼠

にしてらのにし寺のおひ（於以）ねすみ。（和加通須美）おんもつ んづけさ

つんつけさつんつほうし（法師）にまうさんしに（師）申せほうし
にまうさんしにまうせ

愚案にしてらは昔東寺に對して西寺とてあり（これ）何方
（ならん）の寺にても西にあたりたるを云へし鼠にわかきこ
老たるとあるへしおんもは御嚢也つんつは鼠の食
たる事を云也けさは袈裟也是を法師と又師匠とに
告けんと云也

眞考法師に申さんといふのみにて次ははふきて師
とのみいふならん別に師匠といはゝ法師のかたは
ばとして聞えす

隱居（隱名イ）

くをいたをはなにとかいふくをの名をは何とかいふ
（ら）つゝたりけふくなうたもろは日のなかのひつきめけ
ふくなうたもろ

愚案くをはくほとも云奥深くかくれたる所を云お
ちくほ谷くほなと云かことし下の詞いまた審なら
すかさねて尋しるすへし「つゝたりけふくなりは（以下イニナシ）
ひもろきを云心也たもろは田もり賤き也留守ともも
り女也日の中は日つきにいはん爲の詞なり日つき
めも女の名也くほのあるし女をいふ也

呂

安名尊

あなたうと（ふ（古））けふのたふときやいにしへもはれ

二段

いにしへも（（古）は音略の例）かくありけんやけふのたふとさ

三段

あはれそこよしやけふのたふとさ

愚案あなたふと（はゝあさ歎くこゑ）はあなは嗟嘆する聲也たふとは貴
也はれ（ここは也下に多し）は我也あはれそこよしや歌のふし也そこは
（あゝ其所にて上にも有是は神にも天皇にもこゝとある時そのよし）
足下也人をたつとふ詞也昔より如此諷ひ來りたれ
（はいはていはていふ事のみ）
と何事とは定かたし其時にあたりては萬事に渡る
へき事なるへし

眞考そこを足下と云は誤也古意知らぬ人の常いへ
る解也

新年

あたらしきとしのはしめにやかくしこそはれ

二段

かくしこそつかへまつらめよろ代までに

三段

あはれそこよしやよろつよまでに

愚按此歌は古今集に大なほひの歌にあたらしきとしのはしめにかくしこそ千とせをかねてたのしきをつめ日本紀には下の七ゝつかへまつらめ萬代までにと有催馬樂には日本紀にもとつけて謡へるなり

眞云あたらしき……は初春をいふのみならす久邇の新京にての事なれはかねいふにも有へし新京をはあたら代と萬葉にいへり是を古今集に大なほひ歌に千とせをかねてたのしきをへめと有は或時うたひかへしなるへし

梅枝

うむめかえにきゐるうくひすや春かけてはれ

二段

春かけて鳴けともいまた雪はふりつゝ

三段

あはれそこよしや雪はふりつゝ

愚按此歌は古今集春の部に入たり

眞考隔句體の歌にて鶯なけともいまた春かけて雪はふりつゝと心得る歌也しからされはかけての言聞えす

櫻人

櫻人(佐久良)その舟ちゝめしまつたをとまちつくれるみてかへりこんやそよやさす(沙須)かへりこんやそよや

二段

ことをこそあす(安)とも(毛)いはめを(乎)ちかたにつまさるせなれはあすもさねこじやそよやしや(沙須)すもさねこしやそよや

愚案櫻人は花人なといふかことし麗人を云へしその舟ちゝめはその舟とゝめ(まれ)也五音相通也しまつくだをは(は島つ田)島傳也とまち(ち)つくれるは(千町の田を作れるた)島傳せんと今日を待備たる心なりみてかへりこんはそれを見て歸りこんとなりそよやは謠ふふし也さすかへりこんは(のことは)○あす(さ)歸りこんと云心也(也)二段は女にかはりて(の歌にて)云る歌の心なりことをこそあすともいはめ詞に(は言を)こそま(さ)すかへりこんとはいへる(いひもせめ)也をちかたは遠方なりつ(に妻を迎て行夫な)れは明日も實には來じしあすもまことにはこじと云り今はあすあまさるせなゝれはつまよふと書る本あ

りせなは夫を云とねは早也明日も早くは歸りこし
さてしあさてと云へり
と云也しやすもさねこしはあすもさね來しと云詞
うたふ聲にかくのことく聞ゆるなり
眞考ことをこそは言を社也　明日の次をさあすと
云をつゝめてさすとうたへりさあすはさきのあす
也

葦垣

末加支(古)　天不(古)
あしかきまかき○かきわけてゝふこすとおひこすと
一本ナシ　太(古)
おひこすとはれ

二段

天不
てふこすとたれかたれかこのことをおやにまうよこ
末字之々
しけらしも

三段

(古)於た略又例
とゝろけるこの家この家のをとよめおやにまうよこ
しけらしも

四段

加美毛　末字字々與已
あめつちのかみもかみも○しようしるへわれはまう
之末字佐須　曾宇之
よしこしまうさす

五段

すかのねのすかなすかなきことを我はきく我はきく
かな

田舍なとにて蘆をもてせる籬也天不は其かきなか
愚案あしかきは○蘆をあめる垣也てふこすはてふ
きわけと云ことたの意也次の句は已須止於比已須止といふ也此五
は超の字也是もこす心なりてふこすは聲と訓とに
段に須加名すか無ことを云々下の實由にわかすわかする時にと様
云る也おひこすは人(女)をおひてこゆる也二段の
にかさぬるも又例多し超の音訓ないふは後世の人のくせ也
やにまうよこしけらしは○申けらしと云詞に文字
欄ことた也
を添て謡ふなり三段のとゝろけるは家の落やふれ
物さわかしき生れ
たる心なり源氏物語に年へにけるとこの詞を書る
なる弟よめ也
本有とゝろの字を轉として書誤れる也乙女は乙婦
也たとへは家にある男子の女をつれて垣をおひ越
かことは也
したることのあるを親の知りたるは乙婦そつけ
に
たるらんと云事也扨四段五段はをとよめの陳した
曾字　し
る詞なりしようしたまへは天地の神達も證人に立
よこさすといへり
給へ更に申たる事もなしと陳したる也まうよこし
因所(ヨ
まうさすは障申さすといふ詞也すかなき事はすけ
ズ力)無事といふ也弟よめのわれによするなき事いひかけらるゝよ
なき事也實もなきことゝ云かことし我はきくかな
さはら立也

は乙婦の無實の事をいひつけらるゝと腹立たる心
なり

山城

眞云萬葉に山しろのくせのわくこかわれをほりと
いふさわにわれをほしといふ山しろのくせ和名抄
相樂郡下狛また大狛といふも有わたり（和太利乃(古)）はあたり也
山しろのこまの。瓜つくりなよやらいしなやさいし
なや瓜つくりうりつくりはれ

二段

うりつくり我をほしといふいかにせんなよやらいし
なやさいしなやいかにせんいかにせんはれ

三段

いかにせんなりやしなましうりたつ（太川）まてにやらいし
なやさいしなやうりたつまのうりたつまてに
愚按山城國狛と云所にこまのうりふとて瓜作る所
ありなよやらいしなやさいしなやは歌のふし也（是も次の歌に有をもてみれはこゝは）我
のみをほしと云は瓜作る者か我をけしやうする（得んといふ也）なり三
段のなりやしなましは瓜作の妻になりやせましと（しはしは成）
也うりたつまてには瓜のなり（生）たつまてに猶やます

ほしと云心なり（やせんやといふか）

眞金吹

眞云古今集大歌所御歌の中にかへしものゝ歌とて
青柳、、、有て次にまかねふく、、、、の歌と
もを舉たり其次に承和御にへの歌、、、、と歌こ
とに注せるは此歌の出る所をいふのみその歌とも
はかのかへしものゝ歌といふ中にあれはこれら皆
かへしものゝ歌也
まかねふくきびの中山おび（於）にせるなよやらいしなや
さいしなやおびにせるおびにせるはれ

二段

おひにせるほそ谷川のをとの（お）さやけさ（也）。らいしなや
さいしなやをとのさやをとのさやけさや
愚案古今集承和の御嘗（青柳たかた糸によりてといふ歌の次に）の吉備の國の歌也まかねふ
くきひの中山帯にせる細溪川のをのさやけさと云
る歌也。まかねは鐵也（こは萬葉に大君の三笠山……てふをとりかへたるのみ）ふくは鍛冶のふいこうにて
くろかねを吹きわかす也吉備の中山は備中の國に
有り鐵の出所也鍛冶なとの名匠も備州におほくあ

る物也帶にせるは細谷川の山の下腰を廻りて帶のやう成なりさやけさ清の字をさやけさとよむ也

紀伊國

乃古志賀々きのくにやしてのはまにましての濱にきてゐるかもめはれその玉もてこ

二段

不介禮波

風しもふいたれはなこりしもたてれはみなそこきりてはれその玉みえす

愚案しての濱は伊勢と紀伊との兩國の名所に載たり濱も有紀伊に有と云り萬葉に同國白崎白神なと云同し事にまの言を添て重る例也りましては誠に白き心也玉もてこは玉をもちくれてこよと鷗にいひきかせたる也二段は鷗の返答なりなこりは風の名なりなころと同しみなそこきりてはきりふたかりたる也波のしつかならぬこゝろなり

眞云なごりは汐干のなこりに風の猶吹て波の立をいふされはそこくもりて玉の見えすといふ也きりとはくもりをつゝめいふ言也

葛城

眞云光仁天皇寶龜年紀に天皇の御事を申に皇極無レ貳人疑彼此罪廢者多天皇深顧ニ横禍時ニ或縱レ酒晦レ迹以レ故免レ害者數矣又嘗龍潛之時童謠曰葛城寺乃前在也豊浦寺乃西在也於志止度刀志止度櫻井爾白壁之豆久也好壁之豆久也於志止度刀志止度然爲波國昌也田波吾家良昌也由流於志止度刀志止度于時井上内親王爲妃識者以爲井則内親王之名白壁爲ニ天皇之諱ニ蓋天皇登極之徴也これをこゝには白玉とうたひ誤れるか其中櫻井は却て榎葉井そよかりなんや好壁もま白かへのかたよく聞ゆ紀も今本はたのまれす○おさとゝは歌の助辭なり度と書しは濁るなりけり今考るに歌は白玉好玉うたひて白かへの皇子をそへ奉ると見るへし直に白壁――しつくと書しは俗の誤也

かつらきの寺のまへなるやとよらの寺の にしなるや

二段

江の葉井にしら玉しつくやましら玉しつくやをしとんとをしとんと

三段

しらてしては國そさかへんやわいへ戸らそとみせんやおしとんとをしとんとをしとんとをしとんと

曻云かつらきの寺とはいつれたいふかとよしの寺は同しかつらき高間山の下に在し寺也前と別とたいへは二寺ないふあり

愚案とよしの寺は葛城に有寺也榎葉井は清水の名そこにありし井也しら玉雫は水の玉のことくなる也雫はひたしした水底に玉つしつみて有といふ也萬葉にしつく白る心なり古今集歌に水の面に雫花のいろと云ひ又玉と多くいへり雫石なと云かここしをしとんとは歌のふしこそ也三段わいゑらへっそと見せんやは吾家等を富せんと云詞也

是は光仁天皇の御時のわざ歌也それは白かへしつくと有

竹河

たけかはの橋のつめなるや橋のつめなるや花そのにはれ

二段

花そのに我をはなて我をはなてやめさしたいへ太久戸天て

愚案竹河河内國に有竹川の橋のつめなる花そのにははしのはた也そこに花園の在しならんわれたばこゝははなちおそはせよゆるせわれをはゆるせめさしたくへてと云歌也はなてとあさしたくへてわらはへなそへて也めさしめらすな童のめさしとゆるせ同事也めさしたかへては目くはしをしてとな さめ皆同し云心なり

河口注古不

かはくちのせきのあらかきやせきのあらかきやまもれともはれ

二段

まもれともいてゝわれぬやいてゝわれぬやせきのあらかき

愚案　河口の關は伊勢國壹志郡に有り六帖の歌に河口の關のあらかきまもれともいてゝ我ねぬ忍ひ〳〵にこそ

此歌をかく謡ふ也あらかきあしかき兩說也あら垣也あらかきはすいかいてふ堅く關なき木を立たる垣也ねやはねるよ也木はたさへ衣はねやの守れとゝ忍ひ出て男とねぬると云へりは釘貫なとの類なりぬやはねやと同しねたる心也

此殿の

このとのさむへも牟无戸毛とみけりさき久佐草のあはれさきくさのはな禮

二段

さきくさのみつは四つはのなかに名加爾とのつくりせりや殿つくりせりや古ナシ

愚案此殿はむへもとみけりさきくさのみつはよつはに殿つくりせりてふ。此歌は古今集序の六義の歌の中にいはゐ歌に貫之是をとれりむへは諾宜なりさきく

さきくさは本は端草にて一茎みつ枝葉々相當といへりよりて合に三枝だと書萬葉に中とつゝけしも三有ものは萬と中有れは也さて三葉を殿の屋軒のみつまよつまとつゝけたり且みつまてつゝけて下へはつゝかすまた是にはみつはよつはの中に殿作りせりとここさなそへたるは此事よく心得かれたる人のそへしもの也眞云さは舊說に榆をいふといへり材木にする故なり但證據不分明萬葉に三枝と書てさきくさと讀めり扨三葉四葉とつゝけていへり一說若草をさき草と云三葉四葉にもえ出るゆへ也心は家を三棟四棟に作る心成へし

此殿西 以下三條古本不註

このとの丶西のくらかき春日すらあはれはる日すらはれ

二段

春日すらゆけとゆけともつきす西のくらかきや西のくらかき

愚案くらかきは倉の垣也春日すらゆけともつきぬは倉垣の遠き事をいふ也（長きをいふ）

此殿奥

このとの丶おくのさかやのうはたまりあはれうはたまりはれ

二段

うはたまりわれを我をこふらしこさかこえなるやこさかこえなるや

愚案うはたまりは酒殿に酒なとをうる女を云也こさかこえは小坂の道をこえてくる也

鷹山

たか山にたかをはなちあけてあくをなみあはれをくをなみはれ

二段

おくをなみわかすわかするときにあへるせなかなやあへるせなかも

愚案鷹山は所の名也鷹をはなちて木にをくなりをなみは女なりせなは夫也わかする時はたかかりをするときといふなり

眞考狩する山に鷹の放れうせて行へもしられぬをたとへて男の中絶ておほつかなかりし時にたまたまあへる夫なかなやあへるせなかもと云也そを末の所をせなかりやかへるせなかもと有は書誤まれる物也おくをなみは萬葉におくかなくおくかもしらすなといふに同しく奥方も不知と云言也

美作

みまさかやくめの（久女乃）。さゝ山さら〳〵になよやさらさらになよや

二段

さら〳〵にわかなはたてし（太衣之）萬代までにや（古ナシ）萬代までにや（古ナシ）

愚案みまさかやくめのさゝ山さら〳〵にわかなはたてしよろつよまでに（萬代ま）此歌は古今集に入れり水尾
てにといふを石へてたてしは本たらしの誤なるへしされもひした
古本衣之と有
のみかとの美作の賛の歌也

藤生野

ふちふのゝかたち（加太知）かはらに（乎）しめはやしなよやしめはやしなよや

眞考かたちのをのといふは吉野の蜻蛉の小を後に誤てかたちのをのといひし事あり此外に聞えぬ事也此ふちふ野もおほつかなしもしみよしのゝあきつのをのを誤りとなへしにはあらすや

二段

しめはやしいつきいはひしるく時にあへるかもや時にあへるかもや

愚案ふちふのゝかたちが原にしめはやしいつらい（き）はひし時にあへるかもと云歌也藤生野は山城國に有しめはやしは野をしめて木をはやす也いつらい（といへりさ）
れとはやすはさにあらす△△野をしめかさりてといふほどの事也
いつきはそこに神をたふとみいはひし事有ていふとみゆ
はひしを誤ていつきいはひしと書るにや

妹與我

いもとわれといるさのやまの（安）あらゝき（也末夏々支）てなとりふれそやかゝまさるかにや（加遠万左留加爾也）とゝまさるにや（止久）

愚案入佐山は八雲御抄に但馬の國なり（いかゝ）と注され侍り山あらゝきは草の名也蘭をあらゝきと讀り手な
夏々支は山蘭とて毒なるにや
とふれなり香を（香たきまさり）かまり毒かまさるといへり（いふなるへし）

淺緑

あさみどりやこいはなたそめかけたり（し）やみる（止）までに玉ひかるしたひかるらんきやうすさかのしたりやな（万太波太乃止奈留）（保）きまたいたるとなるせんざい秋はきなてしこからほひしたり柳

愚案あさみどりはあさき緑（色）なりこいはなたは濃

綠色
花田なり是皆柳の色をいへり玉光下ひかるも玉柳は新京を
ほあたり
の事なりしんきやうは新京也すさかは朱雀門也山大道
い初な
城平安城を云るにやいたゐは家の事か板を敷て居
戸
故也又板井の水といふにや未詳前栽の草花をかそ
へて擧たるからほひは唐葵也

貞(古)
青馬　古不注

あを馬はなれはとりつなけとをのまはなれはとりつ
なけしのいさやのしのいさやのさをこかひこなるさ
いろんこまたいたむこのたいきのわらはのさをこか
ひこなるさいろんこ

愚案あをのまは青毛の馬也とをまは少青き馬也しのさは發言そへて重
れ云のみしのきばのさ矢の篩(サ)と云冠辭かさてきた子
のいさやは所の名なるへしさをこは人の名なりひ
は人の名それか曾孫(ヒコ)といふならんといろんこはさ郎子(イ
こは曾孫也といろんこは才論子也童の名也たいこ
ロコ)なるな例のろんと唱ふなるへし又いたむこのたいきのわら
のわらはゝ大伎と云心にや大なる才伎有と云心也
はゝ眞大鞴子の大氣の童なるへし下のむは衍字ならんそれに馬を
是らは馬を取繫けと云に付て童子をよひたるなり
取つなけされふする也

妹之門　古不注

眞云萬葉十一にいもか門ゆき過かねつ久かたの雨
もふらぬか其を因にせんといふを古今六帖にかの
ひさかたをひちかさと誤りてさなへしをかくうた
へる事也

いもか門やせなか門ゆきすきかねてわかゆかはひち
かさのひちかさの雨もりやふりなんしてたをさあま
やとりかさやとりやとりてまからんしてたをさ

眞云こは妹か門の心なるをこゝさはの拍子にのりてせなか門とも
いふのみ
愚按いもか門は女の門也せなか門は夫の門也ひち
かさ雨は俄に降雨の笠も取あへすして袖をかつく
さる雨もふれかしこさつてゝ入てやさらんにさいふ也
雨也してたをさは時鳥の名也雨。やどりしてや行へ
ひよせ　さる雨ふらは
きとはとゝきすにとふらひたる心なり
也

蓆田

むしろ田のや莚田のいつぬき川にやすむつるの
(古)死

二段

すむつるのや仟鶴の千とせをかさねてそあそひあへ
千歳世乎
るよろつ代かねてそあそひあへる

愚案蓆田にも伊津ぬき川も美濃の名所也に在といへり

大宮

大宮のにしのこんちにあやめこんたりさやめこりた
りやりたんな

愚按にしのこんちは西の小路也あやめこんたりは

菖蒲刈たりと云也五音相通なりさやあも又あやあ（さは倒い）
（そへていふ詞）（助けことはこは筋に無之歌うたふな）
なりたりやりたんなは謠ふふし也
らん

總角

あけまきやとうとう（止字止字）ひろはかりやとうとう（止字止字）さかりて
ねたれともまろひあひけりとうとうかよりあひにけ
りとうとう

愚案此あけまきは童なとに（なの童な云）下る絲を組たるを云童
の名にては有へからすひろ。は（はかり）尋也八尺を尋と云八（一尋）
尺計女とさかりて（放）寝れともつねにはまろひ。たり（終）（合）
と云りかよりあひたるも寄合たる也とうとうは歌（たりといへりかよりのかは上にそへいふ）
辭にて青か黒深手にもかまれるすかたといへりとうとうはさく（さくといふ也）
のふしなり

本滋

もとしけきもとしけききびの中山むかしよりむかし
から

二段

むかしからむかしよりなのふりこぬは今のよのため
けふの日のため

愚案もとしけききひの中山昔よりなのふりこぬは（は木しげき也紀の歌にもさことに花はさげ）
今のよのためと云へる歌也本滋は木の本のおほき（ともといひ萬葉に木山を本山といへり）
也

蓑山

みの山にしんじに（之ン之ン留）（な）をひたる玉かしはとよのあかりに
あふかたのしさやあふかたのしさや

愚案みの山にしらにおひたる玉柏とよのあかりに（はみのゝくにの山しゝに云々は磐々に生たる也）
あふかたのしさこの歌は承和帝の大嘗會の悠紀の
風俗の歌也しらは滋く生たる也それをしんしにと
謠ふなり（につけて今の本にしんしと書しはわろししゝと有例也）

眉止之女

みま草とりかへまゆとしめまゆとしめ眉としめまゆ（萬由止白女）
としめまゆまゆとしめまゆとしめまゆとしめ

愚案まゆとしめは女の名なり　としは戸主也一戸
の主のよし也

酒飲

さけをたうへてたべようてたふとこりんそやまうて（惠宇天太牟止己呂曾）
くる「よろほひそまうてくるたんなたんなたりやた（丹名安丹名安二太利戸々是ノミ）

んなたりちりう」
愚案酒をたうへては酒を飲たる也たへようてはの
たふさは痛々を平言にしかいへりこりんそは醉にこりなん也
み醉て也たふさこりんそは醉てこりたる也よろ
（ゑひ）
ほひそはつよくよふてよろほひ倒んさするなりま
うてくるは醉たれさ君の御許へまうつるなりたん
即歌のたすけに云めり
なたりなは下は笛の聲を表したる歌の節なり

田中井戸

たなかのゐさもにひかれるたな○きつめ（つめ（古））あこめ○たら（あごめ）
太利真利　己　己妥己女
りらり○たなかの○あこめ
田の中あたりにある井所か又水を引堰所にてもあるへ
愚按田中の井とは田を作らん爲に井さ云て池をほ
しひかれゐはなきの花ないふか又葉もつや〳〵めけはいふか
りて水をためたる也其水を田にまかせいるゝを井
たなきは田にあるなき也今水あふひさ云ものにて水葱の事也萬葉
戸とは云也たなきは田に有なきさ云菜也あこめこ
になきのあつものさも當代の小なきさもいへり
あこめ賤き女を云へしたらりらりは歌の節なり
あごめは晋子女にてたしみて晋子さはいふ

無力蝦

伊加隱（倍カ）留
ちからなきかへるちからなきかへるほねなきみゝす（伊）
一反（古）下死
「ほねなきみゝす」
眞云是をはかはつさ云を後にはかへるさもいひた
り
愚案かへるは力なくみゝすはほねなきさ云りみゝ
すをはかへるかさりて喰物也故に對して云へるに
や

難波海

（死）　（死）　（乎）　（於保）
なんはの海なんはのうみこきもてのぼるをふね大舟
つくしつまてにいますこしのほれ山さきまでに
なにはさ有てうたふ時なんはさいふ例はいきしちにひみいりゐの
愚案難波は昔波の早くありし故に浪花さいへるを
音はことばの中に有時はれて唱ふるはさなへのならひ也
なにはさ略して云へりなんはゝ聲に讀るかはりめ
なり心はおなしき也つくしつは筑紫の船の着津なの
ありていふなるへし山崎は淀川の東西をいふ
り山崎も淀のあたり舟津をいふへし

鈴之河

すゝか川やそせのたきをみな人のめくるもしるくや
時にあへる時にあへるかも
愚案この歌はすゝか河八十瀬の瀧をみな人のめく
るもしるく時にあへるかもさ云歌也八十瀬は瀬の
おほきをいふたきは水のたきる所なり

石川

（波）　（乃）　（久）　（以）
いしかはんのこまうさにおひをさられてからきくひ

する

二段

伊かなんるいかんなるおびぞはなだの帯の中はたえ
伊加ン名留々々々
たる

三段

かやるかやるかなかはたえたる

愚案石川は所名也其所に住宅したる高麗人なりか河内の石川郡にて古へ高麗人を置れしこと紀に見ゆらきくひするは後悔する也花田の帯の中は絶たりろさ云はうのこま人さんにもあらてさきかはしつるにつけて思さはちきれる帯を云也三段のかやるかやるはこまふ夫の中のたにたるさくゆる成へしかへよ〳〵中たにはてりさ人にさらはゆるしてやるか中は絶たる帯なれはさいふか又くやる〳〵にて相臥たるをいふかなり

奥山

おく山にきヽるやおちきをやはけんづるまきやはけんつるきけづるをち

愚案奥山に木きるは我伯齋父さ云也翁也萬葉に山田もる翁かさいふ如く少し年ふけたる人をいふのみきやはけんつるは木をは削さ云也まきは眞木なりにて檜の事をいへりこヽは重れこさはの例の眞也

奥々山

おくやまにきなかすさか木かおちきやさきやさきうやはけんつるまきやはけんつるきけつるおち

愚案きなかすは木をきりて河へ流入るヽ也まきな萬葉に田上川に眞木をなかし又かす。丹生川上さいへるか如しさかきは人の名成をちを書そこなへりさ見ゆへし大略上の歌さ同し

眞云きや〳〵とは木と木と也きうやはヽ木をやは也

我家

わひへんはさばりちやうせもたれたるをおほきみきませむこにせんみかさかなになによけんあはひさたをかかせよけん

愚案わいへんは我家さ云詞なり音曲にはかく聞ゆるなりさはりは幌なりちやうは帳なり又帳をも則さはりさよむ也むこは聟人也みさかな。は御肴也なにかよかるへきさいひて其いろ〳〵をかそふる其中にさたをは衆鰈をいふか下のかは歟にて疑の辞也なりあはひさたをかかせなさは皆貝の名なるへし延喜式に鰈をさたゑさいへりさヽいの事なるへし

眞云かせは和名抄に石鹽子を加世と云り且東の海人かせと濁りて云うにの類の貝也

西宮抄一私遊宴事

夫於律遊者用平調於呂遊者用雙調至于他調隨時用之但律呂遊呂歌（一本）為本樂曲相交仄聲於倭琴先常陸同音數度次甲斐各獨唱風俗等也顯昭法師袖中抄云催馬樂の譜一條左大臣の時にしたゝめて律呂の歌をさためられたり雅信公

體源鈔抄終

此抄者後成恩寺殿之御作なり先勘狩被陂故被清文字以御筆被直置之者也

良賢在判

此南帖大永元年秋八月芳純上洛之時三條西殿（于時大臣宣道）臣御本紙無箱底秘藏限申請書寫畢然而唯佐法師仍爲同斷於京都殿中書寫之在于細奉納字都宮大明神寶殿云々

于時延寶三乙卯暦仲秋中旬書寫之

安永九庚子臺季冬中旬以右之本摸寫之畢

島田主計教（後改文足）

此抄下れる世のことにしてあやまり多かりけるを加茂のあかたぬしなんたゝし置れしを小野のぬしのさよりこひもとめてうつすことにはなりぬ

源阿希足

萬延二年二月廿四日求　古流家元所藏

梁塵後抄一

凡樂府にとられたる歌は偏に音振節拍の事となりて歌の意をたつぬるに及はす故に古譜注書ありといへとも歌意を知において益なしたまへ〳〵歌の意を解て世に流布するもの梁塵愚案抄のみ近代眞淵の考魚彥の補ひたる寫本あれとも猶ことを盡さす又高田與清といふ人數本を校正して神樂催馬樂東遊風俗に至るしかれともいまた其義解の卷を出さす此事を得すかの梁塵抄によるに印本寫誤多く假名亂て正しかたしこゝに伶官安倍の家に藏る所（頭注書入云安倍季尚傳神樂歌古譜一卷）神樂歌古譜二卷あり一は博雅三位の二男雅樂頭信義の自筆その體初は文字假名奥は平假名に書る所多し流布の神樂次第に大異小異有り歌も不注ものも多けれとも假名遣ひ正しく惣て勝たる所少からす二は左近衛將曹八俣部宿禰重種の譜也是又小異有て信義の譜について正しとす希代の珍書彼家の秘藏と候へとも今此を請借て流布の神樂次第を校合し順次におきてはかりに梁塵抄のまゝに立次第の文字を本行とし於介安以曾なといふ類の歌ふによりて添はれる聲また返し歌へる詞等は文字の左に點しこれを除て左行に平假名もて歌となる限りを記しぬ次第によりて順次を改る時は梁塵抄に引合見るに煩らはし且除かれたる歌も少からねは也信義の譜大異の所左に擧く

梁塵後抄上

神樂歌　（書入云信義ノ譜　音振拍子　箏和笛譜）

北御門

元者曾己加於己名不也萬の於こな不也萬乃之比加毛止於介也

韓神　（北御門時異例唐神　音樣大直日又同）

美之萬由不加太爾止里加介加太仁止利加介太加與爾加於介也

氣比歌　（萬葉濁音　合八首）

安之支太和良波乃不奈天世留比波和禮加千止里天也安波禮和禮加千止里天也安波禮

採物　（合八種十六首　音振皆同之）

左加支波爾不止里之天々太加々美乃見无呂止以波比曾女介ム以波比曾女介无　譜

韓神

見之萬由不加太爾止里加介和禮加良加美波加良乎支世无也加良乎支世无也

倭舞歌

見也比止乃於保與曾己呂毛比左止保之
狹居張歌　昔人云コノ書サマイカ、　三種合本末六首音振同件狹居張以前召才男○頭書云さきた○いなのろほの
由不之天乃加見乃左支太乃以奈乃呂保乃
之名加取　用早狹居張琴但件歌本末合六首依次各一度唱更以一歌數度不唱安知女不云　此より奥
次第に小異のみ其催馬樂紀州神樂に入て猶詞多し
本末として四段となる催馬樂に注しぬ初の歌北御
門といふ未考歌は優婆塞が行山乃椎が本成へし氣
比歌は越前國氣比太神を祭られける歌にや葦花童
の船出せる日は我枻取て成へし其餘其所々に注し
ぬ安倍家當主季良與書あり左にあく
此神樂歌雅樂頭信義朝臣 博雅卿二男 自筆也爲希代之古
物之間加修理畢可爲當家重寶者猥不可他見者也
于時天保八年丁酉林鐘二十七日　　雅樂助季良
重種譜奥に云く
新撰姓氏錄云八俟部 百濟國人多地多郎卿之後也
體源抄十上神樂道名人從五位下伯耆權助多宿禰公
用 能良此道
二品式部卿貞保親王 作俟季譜 右近衞權少將良岑朝臣宗
貞 撰左笛譜 左衞門尉大石宿禰富門 撰篳篥譜 左近衞將曹八俟

部宿禰重種 能歌 已下略之
此神樂左近衞將曹八俟部重種注進云々爲古物之間
加修理了可爲當家之重寶努々可禁他見于時天保八
年林鐘下旬　　雅樂助季良
右二書をもて今傳る所の神樂次第に校合す假名は
文字の異にて音異ならざるものは不記音異にして
義たがふものはこと〳〵く右に記して信義のはノ
とし重種のはシとす何とも記さるものはもとより
傍付有し也梁塵抄を合する時は本の字を記すノ本
シ本に文字なきものは字の右に○○と記す左に平
假名に記歌は校正して注解にいふ所の意をもて其
よきものに從ふうたかはしきは注にいへり本行の
文字次第によるといへども全體梁塵抄をもて注し
侍れは此抄を本抄と引傍付にも本とす
字音を借て詞をしるすものは皆假名なれ共紀記の
歌の如く書たるを文字假名とさためいろはかなの
體に書たるを平假名といふ平假名なるものは心々
に寫して誤多ければ文字假名によらされば正しか
たし故に次第を本行とし左行に平假名もてもとの
歌となる所を擧心得やすからんか爲也誤あらんも

のは見る人文字假名に引合て改へし
今の次第は男山の御神樂の次第成へし其最初文に
云先人長庭火乃前仁出來云鳴高々々次云不留末不
々々々々今夜乃夜乃御神態乃人乃長左左乃近伊衞
利府乃佐將監己止人正伊六乃位乃上乃之奈某姓名懸多利男
古山乃惣撿校頬已懸多利云々樂書をうかゝふに神樂
の名目なほ多し人長神樂陪從神樂恒例神樂殿上神
樂臨時神樂里神樂山神樂夏神樂等なりされは其時
其所により歌もいろ〳〵多少も有へく所作も異な
るへく故實もまち〳〵なりけん即上に擧る信義の
譜なとの初の歌はいはゆる山神樂なとにや歌はれ
けんさて神樂は祭祀の樂にして舞樂也催馬樂は遊
宴乃樂にして音樂に屬すへし本邦舞曲甚多し其日
物に見えたる數へかたし神樂は其中の一大曲にし
て殊に是を尊はれけん事しるし

神樂次第上に引所の人長云々より庭火の儀本末座
定て御神態奉仕る趣猶裏書の文加茂社の次第御前
作法又歌の所々に注せる音振節拍の異なる或は錄
給り退散の事迄一渡りよみて凡神樂の式知るゝと
いへ共皆樂家の事にして歌意を解に用なければ略
し侍りぬ只本末といふ事歌毎に記したれはいさゝ
か是を擧く座を兩段にまうけて唱和すると云り本
方にて發聲するは唱也末方の人副音するは和也其
外安知女作法より始て靜歌早歌諸擧尻擧片折なと
さま〳〵の名見えたれ共しらぬ事なれはあけす其
家に聞へきなり

尾張國人藤原守中著所の歌傳品目と云書有卷一皇
朝樂目神樂本邦樂曲の一種にして殊にこれを貴重
せらる然るに令文に其名みへず舊事記に云鎭魂祭
日者猿女君等率二百歌女一擧二其言本一而神樂歌舞尤
是其縁者矣といひ古語拾遺に中臣齋部二氏倶掌二
祠祀之職一猿女君氏供二神樂之事一自餘各有二其職一
と云もの物に見へたるの原始なるにや其事は神代
に天照太神の天岩戸にこもり給ひしときより出た
りと傳ふ然れとも神代卷には神樂と云名目はみへ
ず公事根源に大かた神樂のおこりは天照大神のあ
まのいはとをさしてこもり給し時諸神のいのり申
されたるに天鈿女命まさきのかつらをかつらさし
ひかけをたすきにしてうたひまひ庭火をたきしい
にしへよりはしまる事なれは我朝の風俗神代の緣

其他に異なるへきにやとみへ又殘夜抄に此朝のあそひは其はしまり神の代に天照大神あまのいはとをさして天下をとこやみになし給へりしにやをよろつの神々よりあひて神めて給ふほとのあそひといふいまの神樂由きには我俗の風俗といふ催馬樂風俗とておゐ〳〵のこりたる事也といへり又花鳥餘情に和琴は伊弉諾伊弉冊の二神の御代よりいてきたる器といへ共日本紀なとにはみへ侍らす又天岩戸に天照大神のこもり給ふ神宴よりいてきたる共いへりとみへたれはいつれ吾邦太古のことなること知るへし其曲名は君子ありて下の神樂曲名の部に載たるを以て今こゝに記さす古へとは増損もありといへとも一條帝の御時よりは宗廟祭祀にのみ用ひられて宴亭等には用ひられさることゝみへたり嘗つて宴亭に用ひられしことは三代實錄に仁和元年十月二十三日甲戌天皇御二紫宸殿一右近衞右衞門左兵衞三府并右馬寮獻レ物是去五月六日武德殿前騎二走馬一之輸物也諸王及太政大臣已下出居侍從已上侍二殿上一奏二音樂一種々散樂ノ日暮親王以下降レ殿於二玉階前一奏二神樂一歡傳極レ歡諸衞官人内豎等能歌者預レ之賜二夾侍從以上祿一各有レ差案にこれにはたま〳〵の事成へし江家第内侍所神樂條云自二一條院御時一始十二月有二御神樂一といへり下略此說くはしけれ其訓義の出所は詳ならす神樂の文字加美安曾比とよむを正訓とすへし貫之古今大歌所のうたに神あそひの歌と記されたり樂を安曾比といふ事は日本紀古事記等の古書を始歌にも文にも常に見えたりやがて竈殿歌にもみあそひすらしなと有か如しさて安曾不は今も俗にいふ遊にて昔より意はたかはねとさる遊ひの中にも樂してうたひ舞はかりたのしきわさなけれは安曾比とのみいひて打任て樂の事にもなれるなり加具良と訓る事は古へにはなき事にや古歌にも聞及ひ侍らす思ふに是は常の樂に對へて神に供る樂なれは加美賀久加牟良久なといひけるか加久良といひならされたる成へしそは音訓交る故いかゝと思ふ人も有へけれと道樂船樂立樂の類たよりに任せていかにもいふ事に侍り強て解なす說々も侍れとかへりてあたらぬ事成へし加久良と云事やう〳〵いひならして歌にもよみたるはいつの頃にかあらん古今六帖冬部にかくらの題あれと

歌には見え侍らす忠見集に水のほとりにかくらする水上のこゝろなかれて行水にいとゝなこしのかくらおもしろと有や初ならんされは此訓に色々故有義を解なすはおそきわさにこそ侍らめ
庭燎仁者比と訓來れり眞淵本に保止呂也伎と假名付たるは岩戸の段の訓によれるならめと今更しかとなへかへん事有へからすされと神樂は舊說の如く岩戸の條の古事をまなへる事と見ゆれは火處燒といひ擧庭燎なといへるによし有事成へし歌は美也萬耳波安良禮不留良之云々次の葛の所に出たり之を庭火曲といふは其はしめ人長先令して御火白久献呂津禮なといひてさて物すれはしかいへる成へし

阿知女法

本方　阿知女於々々　末方　於介
本方　阿知女於々々　末方　於介

舊說に天鈿女神の岩戸のまへにして俳優のたはふれをなし給へるを今の世に阿知女のさほうと名つけ侍るへし於々々々わらふ聲也日本紀には阿々と笑聲をいへり安々於々又同五音通也於介は天鈿女の手草にしてふるまひ侍る木の名也古語拾遺に見えたり但又歌のふしか下にもあまた所に有と云りけにさる事にも侍るへしさて其式も音振なとも古へはいたくかはりて有し成へし天鈿女神の形してつから阿知女と唱へし成へし次なる千歳の下にも次々採物を取てそれ〳〵の舞をなしけん其初にみ志加佐戸つる聲と注したれは千歳と云者出來て先自千歳々々也々々を唱へさて次の早歌を舞けん事知らる韓神も一つの舞曲成へく今は只人長わつかに歌により其かたはかりをなす成へし抑本邦歌舞の稱甚多し太古はさま〳〵の舞曲有し也神武の御製を始功有歌なとは必歌ひて其舞を作りし成へし今の世芝居能狂言の如し
高田與清の著る樂章類語鈔全部十二卷有よしされと初三卷諸本校正の所のみ見侍れは義解の所をしらす必すくれたる考こそ多からめ先凡例の末に延喜天暦の頃の假名遣むめむまむへいをまうすたまうさふらひ云々なとの類あらたむへからすと云條甚よき考成へし既に今擧る所の信義重種の譜もその趣也自今此考に從ふへし
此注大かた書終ぬるをりに橘守部と云人の入綾を

見る己前古學者の考知らさる條々多く其考證の廣き事至りと云つへしされはかゝる淺はかなるかいつけこと人に見すへうもおほえす墨引てかいやらまほしく思ひ捨らるゝものから此人は歌の意を解くに及ひて悉く表裏の意有として或は諷刺或は譬喩とやうに必寓意を解れたり歌といふもの己か見る所よりいへはしからす風俗童謠の類みなから寓意あるものにあらす只何となきか常にてたま〳〵裏の意有も交れるなり國史なとに載られたる童謠はたま〳〵寓意有をもて記せり只何となき流歌は載へきいはれなし此神樂催馬樂の如きは何となき歌こそ多けれされは歌意を解に至りて其筋大にたかふ所ありよしあしは見る人の心にまかすへし

榊

本

佐加幾波乃加乎加久者之美止女久禮波也曾宇知比止
曾萬止爲世利計留萬止爲世利計留
さかきばのかをかくはしみとめくればやそうち人ぞ
まとゐせりける

今神事に用る所の榊と稱るもの葉はもとよりにて花も實も香氣有物にあらす古へ佐加伎と云るは今の樒としてよくかなへり樒こそは專ら深山に生て清淨の氣味覺るものなれ和名抄樒之岐美香木也と有て此歌の意にもかなへり荒木田久老の説に樒なるよしいへりときけとくはしき事は知らす太神宮へ節分に花さかきとて奉るは樒なりといへり其外國國の神社にても節分には樒を供る所多し考るに今の世樒を佛に供しそれより墓所死者のまへなとに專らものする故に世俗いま〳〵しき木のやうにさへ思ひなりてかつて神事に用ることなしされと佐加伎の稱容しうしかたきによりて異木の一種をさなりといふ事になれる成へしそはもと神より佛にうつれるものにて太古より神を祭るに樒を用ひ來れるか後に佛の道わたりて佛を祭るも凡神を祭るに似たる事故同しく樒を供へけんか佛道世を經て盛んに成行まゝにいつとなくかの方にうはゝれたる成へし佛に花奉る事は更なれと樒を供る事の説をきかす皇朝に渡りて後花にかへて樒を用ひしもの也西國なとにては樒を花叉花の木といひてかへりて志伎美とはいはす是佛者花にかへて用ひし證

也和名抄に龍眼樹を佐加伎と云るは實によりて號くる物也祭祀具龍眼木楊氏漢語抄龍眼木佐加岐今按龍眼其子名也見本草云々榁の子は正面より見れは花形にして六角にも七角にもしのき立て畵にかける龍のまふたのいら立たるに似たれはなり是にても古への佐加伎は榁なる事を決へしさて歌の意其香をしるへとして來て見れは神の御前にて神の氏人あまた集ひて祭を執行ふなりと云りさて榁は香氣たかしといへともさはかり遠く匂ふへきものにあらす歌のうへには梅の一花も千里の外にかくはしくいひなすへき事なきにあらねと此歌の香くはしみとめくれはと云る趣は實に其香の遠く及ひけんをねんころにしたゝめ行たると聞ゆこは冬の神事に今もお火たきと云は即里神樂にてかの祭のたひ毎にぬさ切かけあるは手種に取りなとせし榁の枯枝山の如くつみ置たるを廣前にとうてゝ燒はやし神樂せしもの成へし今佛事に葉もて製したる抹香をさへ多く燒たらんはやゝ遠く匂ひくるをやさらはいよ〳〵上句のさましたしき也○入綾に是を公の御神樂と見て八十氏人を其職々の人といへれと歌のさまさは聞えすよく味ふへし○次々歌每に阿知女云々略之

末

加美加幾乃美牟呂乃也末乃左伽幾波々加美乃美末戸仁之介利安比仁計利之介利阿比仁介利

神がきのみむろの山のさかきばゝ神のみまへに茂りあひにけり

神垣はいがきにて神の坐す所は垣ゆひめくらして不淨をさくるなり御室はやかて社なり室は家の事なるを神の坐す家なれはあかめて美文字を添たり此神垣御室とつゝけたるを神並の御室と有しか誤れる也又は神並は三輪飛鳥をさすによりて異神社にうたふ時唱へかへたりと云は過たるへし神並といふも三輪飛鳥なと限るにあらすいつくにても神のます所をいひしと見ゆ其中にいひならして地名となれるも有にこそ此歌の神垣御室共に神社をいひてさはかりのけちめはなき事なからみむろの山としもつゝけたれは所の名の方にしたしき也

○入綾神かきとは神坐す杜の樹立を指せる稱にて即御諸の事なるから重ねてつゝけたる也忌垣なと

と同しかるへしみはされは神籬と書たる字を直にひもろきと訓て其ひもろ木のやかて御諸の事なるは崇神記に神籬此云比莽呂岐ーと有か如し云々中略神のみまへにしけりあひにけり此句ともは彼立さかえたる神籬の御諸の榊を移して手種にされゝは直に神のみまへに茂りあへりとはいふ也云々借母侶母理音通云々なともいへれといかゝあらん杜は樹の盛々としたるの名にやそはともあれ此歌の下句を手種にされる榊と見たるは決てわろし只歌のまゝに神前に立榮たる榊と意得へし是は榊の歌にて神樂をよめるにはあらす　(眞淵云或本榊木歌)

本

左加支波仁由不止利志天々多(太加々美乃)加與仁加神乃御室止伊波比曾女計奴

さかき葉にゆふとりしでゝたが代にか神のみむろといはひそめけん

此歌の神の御室といへるは神殿宮室をさすにあらす榊即みむろ也いがきの内なとさらぬ山邊杜の中にても一株の榊にゆふぬさなと切垂て神靈のまし所とする類也木綿してたる枝を社に奉りていはふを云にはあらすたか代にかといひ御室といへると文字の意聞とるへし今俗に榎の荒神なといふ所所に有か如し○入綾に一首の惣意おして知へき也とて何事もいはす右の如く聞はめつらしき歌也

末

志毛也多比於介止加禮世奴左加幾波乃多知左加由戸支加美乃支禰加毛

霜やたひおけどかれせぬさか木ばの立さかゆへき神のきねかも

年々歳々霜はおけともいよ〳〵常盤にて榮え行榊葉をいひて立榮ゆへきと云ん序とせり下句のきねは巫子にて神樂舞八をと女なとを云へしそは少女のいとうるはしきをめてゝ行末いよゝさかゆへきを思へるけさう歌にも有へし神樂舞ふを見てよめれはやかてそこにありあふ榊を序とせり拾遺貫之あし曳の山の榊はときはなるかけに榮る神のきねかもこれをもとゝしてよめるか是を難して神に奉る神樂にかたはらなる巫子かうへを讃ふへきいはれなしなといふはあたらす上にも云如く此歌ともは讃の歌もあり雜の歌もありもとより神に奉る歌

もありすこし詞のよせあれはさりたる物と見ゆ〇遠鏡木根の說はうけかたし久綫にも木根に檮都を相築てもろともに立榮ると解るはわろし序歌を聞分ぬ也

幣

本

美天久良波王加仁波阿良須阿女仁萬須止與遠加比女乃宮乃美天久良美也乃美天久良

みてぐらはわがにはあらず天にますとよをかびめのみやのみてぐら

此歌は即幣を採て物する人のみつからいふ意によみなせりこの我さゝけたる幣はかしこくも己か物にあらす天にましますとよをか姫の御物也と人に示す心なり豐遠加姬は止與宇氣姬にて登由氣神此者坐二外宮之度相一神者也と有神といふに隨へしさるは其宮の神樂にうたひ初たるか又先つ此神をいひ出へきよしありしかしられねと神樂歌となりては何所にても用られたる成へし次々杖篠なとも同し歌を物をかへて諷ふのみ

末

美天久良仁奈良萬志毛乃遠須戸加美乃美天仁止良禮天奈津佐波萬志遠奈津佐波萬之遠

みてぐらにならまし物を皇神のみてにとられてなづさはるべく

なつさはましをにても聞ゆれとなつさはるへくと有方ならまし物をといふを受たる意もまさりぬへし幣帛は榛打振なとして神を拜し又神もみつから持給へる物なれは其御みつからもたせ給ふ方につきて御手にとられてなつさはるへうといへる也奈津左はるは馴添也須女神はもと皇祖神をいへるならんと是らに云るは只神をあかめて云るにて例多し此歌本末一作ならは豐をか姬をさせる成へし

杖

本

古乃津惠波伊津古乃津惠曾安女仁萬須止與遠加比女乃美也乃津惠奈里美也乃津惠奈里

この杖はいつこのつゑぞあめにますとよをか姬のみやのつゑなり

幣の本歌と意同し上句はとひをまうけ下句は答へたる體也

末

安不佐加遠計佐古衣久禮波山人乃王禮仁久禮女留也
萬津惠曾古禮山杖曾古禮
あふ坂をけさこえくればやま人の我にくれたるやま
つゐぞこれ

千年つけとて云々と有も心は明らけし是は萬葉廿
幸行於山村之時歌二首先太上天皇云々御口號曰安
之比奇能山行之歌婆山人乃和禮爾依志米之夜麻都
刀曾許禮と有に似たれは御歌を杖にうたひかへた
るか異歌か知へからす是は神事によれる歌にはあ
らて只逢坂越行人の杖をえてよめるやうの意成へ
し山人といふは只山に在る人を云へし仙人を也萬
人とよめる事此頃には見及す山人か杖を我にくれ
たるのみ

裏書云
或說杖本

安志比支乃也末乎左加志美由不津久留左加支乃江多
乎津惠仁幾里津留
あし引のやまをさがしみゆふ付るさか木のえたをつ
ゐにきりつる
木綿つくる榊はいはひ木にて神のやどります木也
さるはいみはゝかりて手もふるましきを此山路の
さかしきを越わつらひてたゝりもかへり見す杖に
しも切たりと云也此歌神事にかなへりともなけれ
と榊といひ木綿付るといひて杖の歌なれは心もな
く取りてうたへる成へし次々類多し○入綾の解わ
ろし

末

寸戸加美乃美也末乃津惠止也末比登乃知止勢乎以乃
里支禮留美津惠曾
すべかみのみ山の杖とやま人の千とせをいのりきれ
るみつゑぞ
杖はいつくにもつく物なれと山路には殊にたすけ
あれは山づゑともいへり是は神に奉る意にてすへ
神のみ山つきます御杖とて千歳をいはひ山人の切
れるよし也杖も弓鉾の類も皆人の物なるを奉るな
れは人の用る意をうつしていへる也

篠

本

古乃佐々波伊津古乃佐々曾安母仁萬須止與遠賀比女
流乃美也乃美佐々曾美也乃美佐々曾

このさゝはいづこのさゝぞあめにますとよをかひめのみやのみさゝぞ

意上枝の本歌に同し或説マガレルと有は鞆の形まかりたるを云といへれと腰にといふよりつゝきたれはサガレルと有方まさるへし三四句は鞆岡といはん序也とねりは衞府の官人よりすへて武を任とする者には廣くいへり鞆は弓射る時の具にて弓取者は常に腰につけて持し成へし和名抄山城國乙訓郡鞆岡 度毛乎賀 枕草子に鞆岡は篠の生たるがおかしき也と有は此神樂の歌にたかはすはたして篠のあるをいへり

末

佐々和介波曾天古曾也禮女止稱賀波乃伊志波布無止毛伊佐加波良與里伊佐加波良與里

さゝわけばそてこそやれめとねがはのいしはふむともいざかはらより

とね河は上野國利根郡にあるへし萬葉東歌六帖等にもよめりさて此歌は戀か又雜の歌にても有へし大かた其國人の歌成へし河原石のあら〳〵しき上はあゆむにかたき物なるを猶其はとりの篠はら分行んよりしひて河原より行んと也篠原は露ふかくして分る衣のやれん事をいへり此歌神樂にとれるは篠と云詞有によれるのみ○入綾に笹を分は袖の破れんするほとにと云るはやるゝの語はもと破る意にもせよ只露にぬれ色もそんしそこなはるゝ方にいへる也又此衣は妹かきせたる成へしと云るも過たり

裏書云 或説篠本

佐々乃波仁由幾布利津毛留布由乃與仁止與乃阿曾比遠須留加多乃志佐

さゝのはにゆきふりつもる冬の夜にとよのあそびをするかたのしさ

豊のあそひの豊は豊さかのほり豊御幣なとの豊にて盛大なる心あそひは既にもいふ如く樂する事にて即神樂を云として聞えたれとも是より先此詞見えねは猶豊のあかりの心に解なすめり豊のあかりは豊明會のみにかきらす古へ宴なと給ふ事にてひろくいへり紀記萬葉等に所々見ゆそは多く夜宴にて燎を擧て物すれは豊の明りといひしか宴會の事になれる也されは此歌も豊のあかりをするかたの

しさと有しを誤り唱へたるも知へからす又豊樂ブラクと
つゝきたる文字をあれはしかいひたるも知へから
す

末

美津加護乃加美乃美世々利佐々乃波乎太布佐仁止利
天阿曾比介良志毛

みつがきの神のみ代よりさゝのはをたふさにとりて
あそびけらしも

美津垣は萬葉十一十三にも久しきの枕詞に用たる
より打任て久しき事にしてこゝは只久しき神代よ
りといふ事也さて其神代は岩戸の前にてうずめの
命小竹葉を手草にとりて舞し事にて今も採物にす
れば神代より云々と云也太布佐はたぐさと有方よ
ろし○みつ垣の久といふを崇神天皇磯城瑞籬宮の
事とするはいかゝ也みつかきの宮といふ時こそ皇
居の名とも聞ゆれ瑞籬と計にてはいつくにもいふ
へしまして振山の水垣なとよみするたるをや入綾
にひろく神の坐森をさせる稱云々と云るはよから
めと此神樂歌の初句を五百箇眞賢樹の立榮えたる
を見れは其御諸の瑞垣の久しき神の御代より云々
と解るは過たり美津垣の神といふつゝけは有へか
らす入綾の説にては一首のうへとゝのほらす只久
しき神代よりと聞へし

弓

本

由美止伊倍波志奈々支毛乃遠安津佐由美萬由美津支
由美志奈毛毛止女須志奈毛々止女須

弓といへばしななにものを梓弓まゆみつきゆみしな
もゝとめす

此歌は結句志奈古曾ありけれと有か正しき也いろ
いろに傳へたるは或はうたひかへ或は誤りたる成
へし志奈々支毛乃を志奈古曾有けれと受されはさ
とのはす歌の心は弓といへは只弓なれとも其に梓
弓眞弓槻弓等の品こそ有れと云のみ○入綾これを
戀のたとへとして天治本に志奈毛々止女すと有を
解て我はさる品階をも求めすと打まかせたる也と
いへるは女にてたにあれはよしと云意にやさる戀
の歌やは有へき其うへしなゝきものをしなも求め
すとは受へからぬ所なるをや

末

美地乃久乃安津佐乃萬由美和鶴比可渡也字々々與里
古志乃比々々仁志乃比々々仁
みちのくのあづさのま弓我ひかはやう〳〵よりこし
のひ〳〵に

此歌は抄も古今に出たる二句安多知のま弓とあり是は誤也上の歌にも有如く梓弓と眞弓とは材も異にてかく梓の眞弓とつゝけ云へきにあらず扨萬葉に陸奥の安太多らま弓と二所迄よみたればそれと同し事なるへし安達郡は後におかれしよしなればもとあたらといひし郷名なるを達の字につきて唱へあやまれる成へし達はタルともよめはタラとも用ひし成へしさらは安達(アタラノ)郡成へし下句やう〳〵よりこはやゝ〳〵也俄ならすとも我ひかは末終により來れと也古今は末さへよりこと有り詞はかはれともおし廻して意は同し是は上は序なれとも我ひかはと云より戀のうへ也

眞書云
或說弓本

佐津天(乎)良加毛多世乃末由美於久也末仁美加里須良志
毛由美乃波須美由
さつてらかもたせのまゆみおく山にみかりすらしも
弓のはす見ゆ

佐津天良は誤也佐津乎良と有そ正しき薩男は狩する人をいへり歌の心はおく山に御狩すらし薩男等かさゝけもてる弓の弭の見ゆるはと云也もたせは人してもたしむるにはあらすモチをモタセと云也みかりは貢る料の狩の意か弓の弭は長くてしもと原のうへなとにあらはれて見ゆれはかくいへり萬葉二人丸とりもてる弓弭のさわき云々とよめるも趣同し

又本

與毛也末乃末保(モ)利仁多乃武梓弓神乃多加良仁今志津
留加奈
よもやまのまもりにたのむあつさ弓神のたからにい
ましつるかな

諸說四方山をいろ〳〵解なせれと山の詞いかに助けても心よく解得かたしこはもと四方八方(ヨモヤモ)と云語有し也或は四方山の事にも混し又也末といひなから八方の意にも用る有し成へし既に與毛也毛乃と書る古本も有とそ歌意は弓は第一の兵器にて四方八方の護身の要なるを今神社に奉納して神の御物

となしつることゝよめるにてよく聞えたりヨモヤ
モは日本紀のかな附にも有り

末

安津佐由美波留久留古止仁寸女加美乃止與乃安曾比
仁安波武止曾於毛布

あつさ弓はるくることにすめ神のとよのあそひにあ
はんとそ思

梓弓は春と云枕のみ豊のあそひ上に出たりさて此
歌は春の神事によめる成へし

劔

本

志呂加禰乃女奴支乃多千遠佐介波支天奈良乃美也古
遠禰留波多賀古曾禰留波太加古曾

しろかねのめぬきのたちをさげはきてならの都をね
るはたが子ぞ

太刀の造も古へのは今をもていひかたけれと目貫
の太刀とは柄又尻なとに穴明たる成へし今短刀に
いぬまねきと云は猪目貫にて即穴也又古書にさけ
はきたる大劔も柄頭に穴ありて組緒してたりさて
目貫の太刀は一種の造りさまと聞えたり白銀造り
の目貫のたちなり下けはくは太刀の緒を長くして
帯るをいふねるは徐行のかたち也此歌は雅雄のき
ら〳〵しき太刀を帯て都大路ねり行らんを傍の人
の見てよめる意也神樂にとれるは太刀の詞によれ
るのみ

末

伊曾乃加美不留也遠止古乃多知毛可奈久美乃遠志天
天美也知加與波牟美也千可與波牟

いそのかみふるやをとこのたちもがなくみのをして
てみやちかよはん

石上は布留の枕詞是は萬葉十六虎爾乘古屋乎越而
青淵爾鮫龍取將來劔刀毛我といへるは傳はなけれ
といにしへに古屋といへる勇武の者ありてよき太
刀帯たりしか淵に龍殺せし事傳へたりけんを境部
王のよめるには我レ彼いにしへの古屋にも立越た
る勇氣を發して虎にまたかり淵の底にひそまれる
龍をも取來らんにあはれよき劔をも得てしかなと
いへりと聞ゆさらは此歌も其古屋男にてそれが帯
たりしと云よき太刀をも得てしかな組の緒取垂て
はきもて宮身かよはんをといへりしてゝは木綿取

垂と同しく太刀より下る也宮路は都の大路也祭良
にても今の京にても有へし組緒は打緒也○諸説組
緒してゝを劔を下け帶る緒とせるはあたらす上に
も云目貫の穴より下る也緒を太刀よりしてゝ也古
圖にも見ゆ

裏書云
或本叙本

以波比古志加美波末津里津阿寸奥里波久美乃遠志天
天阿曾比多知波幾

いはひこし神はまつりつ明日よりはくみの緒してゝ
あそべたちはき

一本あそべと有よしいはひこしは社に齋ひ置たる
也神はまつりつは其神の祭事ことゆゑなく今日終
たる也明日よりは組乃緒してゝ遊へたちはきとは
さる祭に預りたる武官の人々にゆるす心也組の緒
してゝは上に出たりたちはきは今一の官名となれ
る類にはあらて武衛の人は劔を帶て護する故たち
はきと云武士を弓取と云に同し歌心は齋戒きひし
き神事は今日にて終りぬ明日よりこそおのか心の
ゆくまゝにあそへよといふ也上の歌によるに組の
緒してゝ太刀はくは私の遊宴或は壯士の好む事に
て古へさる方によしある裝束成へし

末

於支津支仁寸女加美太知遠以波比古志古々呂波以末
曾多乃志加里計留

おきつきにすめ神たちをいはひこしこゝろはいまそ
たのしかりける

おきつきは萬葉三九十八十九なと所々見えて字は
奥槨又奥津城なと書て皆墓の事にいへる中に十八
なるは賀陸奥國出金詔書歌の長歌の返歌にて大
伴能等保追可牟於夜能於久都奇波之流久之米多氐
比等能之流倍久と家持卿のよめるは大伴遠祖天
忍日命をさせりと聞ゆれはなみ〳〵の墓所にはあ
るへからす忍日命をいはべる氏社なといへるなる
へけれは今の歌によしありさて奥つ城の意か奥は
おくまりたるをいひ城は城郭の心成へし皇神等を
いはふといへは一神にはあらす其奥城に諸神を合
せ齋れる也下句は本歌と同しく祭はてゝよろこへ
る成へし此歌劔の詞も見えぬを皇神達を皇神太刀
と心得てとれる成へし

鉾

本

古乃保古波伊津古乃保古曾安女仁萬須止與遠可比女乃見也乃見保古曾宮乃見保古曾

このほこはいづこのほこぞ天にますとよをかひめの宮の御ほこぞ

上に出たる杖の歌に同し

末

與毛也萬乃比止乃萬保里仁寸留保古遠加見乃見末陪仁伊波比多天ゝ留伊波比多天ゝ留

よもやまの人のまほりにする鉾をかみのみまへにいはひ立たる

古本よも也毛と有よろし歌は上弓の歌に同し人の守りとさへあれはいよ〳〵四方八方ならては通せす

杓

本

於保渡良也世加爲乃志（美津遠）美津比佐古毛天止里波奈久止毛阿倍不世遠久女阿倍不世遠久女

おほはらやせか井の清水ひさこもて鳥はなくともあそふ瀬を汲

せかゐはせき井にて堰をかけて流を汲へくかまへたるを云すへてゐは用水の稱にて汲へき水を貯ゐと云り大原によき清水の流有てそをせか井といひし成へし六帖此歌を出して三句以下手に汲て鳥は鳴とも遊て行んとしたるを曉の鷄の事と心得て諸說夜の納凉の歌とせるはいかゝ鳥はなくともの語もゆくりなきにあらすやこは大原なるせか井の水を入して汲しむるに瀬におり居る鳥は鳴とも其鳥のあそふ瀬をくめといふ事にて瓢もてと云より遊ふせを汲めと云までつらぬきてよく聞えたり鳥は鳴ともは榛の歌に鳴つる枝を折てける哉とよめる類也

末

和可々止乃伊多爲乃志見津佐止々保見比登志久萬禰（佐久奈比爾計里）波見津佐比耳介里見津佐比耳介里

わがかどの板井のしみづさと遠み人しくまねばみつさびにけり

板井は板もてかこひたる井にて深からぬ清水成へしさて是は里はなれたる幽居のさまにて汲人もまれなるまゝに水さびにけりと云也水さびの浮て清

からすなれるなりみくさ生にけりは草の茂れる也
いつれにても有へし
片折諸擧等此間に本末あれとも歌は上杓の同歌
なれはこれを略
葛但今世不用
本
和岐毛古加阿奈志乃也末乃也末比止々人毛志留邊久
也末加津良世與也末加津良世與
わぎも子が穴師のやまの山人とひともしるべく山か
づらせよ
初句古今集に卷向のと有を正しとす三句も人も見
るかにと有是は此まゝにても聞ゆへし卷向穴師は
共に大和國城上郡也山かつらは日蔭にて俗に狐の
襁といふ草也深山の陰地にのみ生れは此名あり萬
葉十九に足日木乃夜麻之多日影可豆良家流といへ
る是日蔭の鬘也又それを山かつらとのみもいひて
同十六足曳之山縵之兒云々是は鬘兒と云女の名に
云かけたり同十九譬喩歌安之比奇能夜麻可都良加
氣麻之波爾母衣可多伎可氣乎於吉夜可良佐武また
日蔭とも山共いはて玉鬘とのみいへるも女蔭のこ
とゝ聞ゆるは同十三に五十串立神酒座奉神主部之
雲聚玉蔭見者乏文同十六上に出たる鬘兒の歌の次
足曳之玉縵之兒と有今も神事に小忌きる人の女蘿
をかくる是也又それを組糸にしてかくかにも日陰
の名ありさて此歌は垂仁紀に天照太神を磯城嚴橿
か本に鎭座し奉り倭大神を定神地於穴磯邑と云事
有れはさるをりの神事にうたひしにや歌の意はさ
ながら其山の山人と見るはかり山かつらせよと傍
より催す意也山人といふ事上の歌にも見え杖の歌
のちとせを祈云々なとたゝの人の事とも聞えぬに
似たり又萬葉廿卷に引足曳の山行しかは山人の云
云の御答舍人王の歌も山人の心も知らす山人やた
れなと有は神人めきても聞ゆれとも仙人を也萬比止
とよむ事はしはらく後の事成へし萬葉九詠二仙人
形一常之陪爾夏冬往哉裘扇不放山住人とよめ
るは打任て山人といへるとは異也此歌ともにいへ
る山人も人仙人にはあらす和名名義集にも仙人の
字カミヒトと訓たり
末但庭火唱之
美也末耳波安良禮不留良之止也末奈留末佐岐乃加津

良以呂津幾耳計里色津支爾計里
み山にはあられふるらしとやまなるまさきのかづら
いろつきにけり
歌の心は冬たちてやゝ寒く成行頃程なき山の岩か根に正木の葛の紅葉したるを見て奥なる山は寒氣もつよくて霰ふるらむといへる也神樂にとれるは正木のかつらの詞によりて也庭火にうたへる故はしらす○入綾に採物は八種にしてこゝは杓葛と記しけんを後に杓と葛と二つにひかめ分ちけるならんさてくはしく論せりしかるへき考なれとも今は歌の出たるまゝに注しぬ猶かの書を披き見るへし

韓神 辨頭

園韓神とて諸書に見えたり宮内省に齋へる社にて遷都已前よりありし社也と云り宮内省を建られたる時其境内になれる故におもく祭らるゝにやされはさのみ功なき神もおはす成へし古事記大年神子韓神と有り

本

見志萬由不加太仁止利加介和禮可良加見乃加良乎支世武也加良乎支加良
みしまゆふ肩にとりかけわれから神のからをきせん
みしまゆふは伊豆國三島と云所より出る木綿なりと云り肩に取かけは木綿にて製たる肩衣か萬葉五にも布肩衣と有り又は襁の類かからをき眞淵は俳優かといへり唐めきたる俳優をからをきと云んもいかゝ宣長は體源抄源氏物語によりて枯荻とせり枯たる荻をさゝけて物するからに其わさをからをきと云んもいかゝ末歌には八ひらてを手に取もちてからをきせんと有り今案にたゝ韓神招成へし本末一事にて木綿を肩にかけ葉盤を手に持てから神を招奉るわさをする成へし○入綾に頭より肩迄垂るといふ鬘なとのやうに見たるなり

末

也比良天乎天耳止利毛知天和禮加良加見乃加良乎支世武也加良乎支加良乎支世牟也
やひらでを手にとりもちて我からかみのからをきせん
葉盤をひらてと訓て柏葉を集て細き竹もてとちたる器神供を盛もの也八は數の多き事にもいへと柏葉八枚にて作る意にはあらしや　大嘗祭式による

に葉椀葉盤等の名あり歌は本歌の意に同じ今田舎
の神事なとに椀をもて舞を見る遺風にや
或説
本
和かあれはみな人しらすちゝかかたはゝかかたとも
神はしるらん
古本本文字有は術成へし二句宮人と有もいかゝ也
歌心は吾生は皆人不知にて父母葉といふ事を世人
しらさる也父か方母か方は今も父方母方と云にて
其父母の姓氏系統の事也ともは其徧の意也人は知
らねとも神は知たまふならむと云也○幼き時養は
れし子にて本の方をしらぬ人なれはわか生れし系
をは宮人たちも知事なし父か方の氏より養れしか
母かたのうからより養れしか神こそ知給ふらめと
云るは強てみつからも知らぬ事にせんとての説也
いとむつかし自からは知て居れとも世人の知らぬ
也味ふへし
末
みな人のしてはさかゆるおほなほみいさわかともに
神さかもとに

大直日は古今集にも有て神事終て直相の日を云へ
し此二首は直相にうたひしにや袖中抄此本歌神樂
の大直日歌也と云りしかれは古今の大直日も直相
なる事しるしさて二句本綿垂の尋と解るいかゝ本
綿といはずして志天とのみ云は後の事也こは皆人
の為てはさかゆるにて大直日をして神酒のおろし
給ひゐみさかゆるよし也下句いさ我共にとは伊佐は
さそふ聲我共は吾も人も諸に也神酒許には古へは
甕を堀するゑて酒かもし其まゝ奉るなれはやかて其
酒許に集ひて宴をひらけは云成へし

梁塵後抄二

大前張　催馬樂曲ノ狹居張シ佐篤波利

ノ本シ本ともにゐの假名を用たり可考本抄に云大前張に七首有小前張に九首あり前張は一曲の名なるを惣にわたりて大小と名付かへたることいと覺束なしたとへは大前張七首の中の前張有本歯にて有を其調子にて十六首なからうたふにとりて又呂律なとのちかひめ有によりて大前張小前張とは替たるにやと有本曲とは佐以はりに表は染んの歌の事也其後近世の學者の說々もあれと今少明ならす守部の入綾に上略先つこゝの標下に天治本文治本嘉禎本等に或曰催馬樂曲と記したれは是れ實は催馬樂のはしめなりしも知へからすそは神樂曲はもと八種の採物のみなりけむ故に韓神曲に直會の歌出て御靈上せしにそ有けるさて其儲興に打解たる遊ひすとてはしめて七首の催馬樂をうたひて興しけるを其後又九首くはへける時はしめの七首を大前張と名つけ後に添たる九首を小前張とはとなへけんそれよりして此十六首はもとは催馬樂なからも毎時神樂にうたふ故に神樂歌譜の中に收て一部とはなし來しならん云々下略と云るはしかるへき考成へし卵信義の古譜には紀伊州の曲小前張に連ねたり又八種の取物韓神なとも舞有てものしたる趣なり前張は歌のみにて舞はなかりけむ常の催馬樂もうたひものにて舞樂にはあらす末に至り其駒の所に注ありて此歌時人長立レ座天必加奈天寸止伊布吉止奈志と有をもてみれは前張よりおくの曲ともは或はかなて或はかなてすと見えたりさる中に此大小の前張はうたひものにてすこしやうかはりけむ韓神の次の注に取物了謂前張ニ歌舞ニ云々また人長召ニ才男ニ令奏雜樂催者と云り彼是入綾の說あたるへくやたゝし七首の催馬樂有しに又後に九首添られたるより初を大とし後を小と號けたるへしと云いかゝあらん郢曲抄といふ書に上略催馬樂は樂の催馬樂の拍子に唱てもと其樂よりおこる成へし風俗の音聲短く節にいやしめる聲有其ふりをかへて唱也云々と有ははやり歌は大かた國毎に拍子をあてゝ歌ふ故に其さまいやしきを諷歌して聲をなかく引のはへ雅調にかなへて神樂の中にもうたへる成へし詩の雅と云く雅なるを大雅といひ雅なからも少國風の変れるを小

雅と定とか此前張も全く雅樂としらへなしたるを大前張とし少風俗の趣有を小前張とせるにはあらしか大前張には神樂と同く安知女於々々と有小前張には安伊志々々々安伊佐々々々なといへるも大小とふりのかはれる所成へし詩に義理によりて別てるにやここに雅といひ俗といふはひとへに音拍の事にて詞の義理にはあらすと知へし

梁塵後抄

宮人ノ催馬歌

本

見也比止乃於保與曾己呂毛比左保之

末

比佐止保之支乃與呂之毛與於保與曾己呂毛

宮人のおほよそ衣ひざとほしきのよろしもよおほよそ衣

こは本末にて一首の歌也おほよそ衣は魚彦云大裝衣也形を飾る意也と云るしかるへきか膝通しは大かたは袴ある故衣は腰にて切れたるを此衣は膝より下までひとなかれに通したる成へしきのよろしは着の宜し也毛與は古歌に折々有て助言也結句は再ひいひたるなり本抄古語拾遺を引て天照太神を[illegible]に籠れける時終夜宴樂して歌ひし歌にて美夜比止能於保與須我良爾伊佐登保志由伎能與呂志茂於保與須我良爾と有をもとられたれといかゝ也拾遺に其傳はありてこそ記せかならめと解得かたし

木綿志天

本

由不志天乃加見乃佐支多爾乃伊奈乃保乃

末

伊奈乃保乃毛呂保耳志天與古禮千保毛奈志

ゆふしでの神のさき田のいなの穂のもろほにしあれはこれてふもなし

ゆふしての神とつゝく事ことわりなし由不志天之と有しを之は乃ともよめは乃と誤し成へし神のさき田魚彦説に幸田也と云り神のさきはふ田と云意にて聞えたれと外にいへるをきかす眞淵は佐は加の誤にて加き田也神代紀に垣田萬葉に垣津田と有も堤なとかこひたる田也といへり是もしかるへけれと諸本多支田佐支田乃外なけれは字を取かへん事いかゝ神后紀に爰定神田云々當時雷電霹靂蹴裂其磐令通水故時人號其溝曰裂田溝也是は雷の裂田といふへし諸穂は並穂にて一莖にならひ出たる穂にて瑞稻の事か只多くの穂をもろほと云事もいかゝさて此歌四句志天與と云をとり五句これる穂又はかれちほこれちほなと有を枯朽穂也として神の幸によりて諸穂に垂れ與枯朽穂なくての意に事もなく解なす説あれと先三句神のさき田爾と爾文字にては上下合ぬ所あり本乃と有によるへし志天與と合する詞ならは縿り奈久と有へし彼此不調の歌也本に從て神のさき田の稻の穂のとする時は必序歌の體也序と見る時はにしあれはこれといふなしとしてとゝのへりにしあれはもにされはも同しくこれ止いふもこれてふもこれちほも歌なす聲にて同しかるへしさて試にいはゝさき田はいつれにもせよ木綿してゝ祝ふ神田に並穂の生たる意にて好女の是も捨かたく彼もはなちかたきやうの意はへをいへるにてこれといふなしは此方と云なし成へし

難波方

本

奈仁波加太志保見知久禮波阿萬古呂毛

末

安萬古呂毛多見乃々志萬爾多津多地和太留

なにはがたしほみちくればあまころもたみのゝ島にたづたちわたる

シ本久良須と有は久良志の誤なる事しるしたつ波堵袮太留も聞えたり此歌古今集雜に難波かた汐みちくらしあま衣云々と有久禮波にても聞ゆ萬葉にわかの浦に汐みちくれは潟をなみ蘆へをさして鶴鳴わたると云るに同し意也汐みちくらしといへはたつのわたるを見て其汐の滿るを知意也いつれにても有へし雨衣は手蓑と云ん枕詞也師說に賤き者のたみのといふを見るに上下はなちて着る物也是によれは上をさして手蓑と云る成へしやかて腰蓑といふあり是にむかへる名成へし島の名も難波菅笠の如くさる蓑を造りしよりの所の名成へし諸說只蓑にかゝる雨衣也といへとしかにはあらし田蓑の名の故もさては知りかたしと云り田蓑の島は同集雜に難波へまかりける時たみのゝ島にて雨にあひてよめる貫之雨によりたみのゝ島をけふゆけは名にはかくれぬ物にそありけるとよめるさてろなり

　前張

　本

佐伊波里仁古路毛波所女无阿女布禮止

　末

安女布禮止宇津路比禮多之布可久曾女天波

さいばりに衣はそめん雨ふれどうつろひがたしふかく染ては

はりは榛にてはんとも云木也皮もて衣を染るもの也萬葉中所々見ゆ針波里なとかなにも書りさいはりは其はきたる皮をもてものすれは刺榛の意成へし結句そめてはは染たらは也師說古今集に出たる此詞たれはと聞へき事詮なれと此歌のは宣命なとにいへる多良婆の意成へしさなくてはそめんといへるにかなはす

　階香取ノ之名加取

　本

之奈加止留夜爲奈乃見奈止仁安以曾以留不禰乃加千與久萬加世禰加太不久奈不禰加太不久奈　ノ萬加世與

しなが鳥猪名のみなとに入船のかぢよくまかせ船かたぶくな

之奈加止留と有は里の誤成へししなか鳥は萬葉にもよみて猪名乃枕詞也和名抄攝津國河邊郡爲奈と有津留不禰と有本によりて釣舟とするは歌の趣に

かなはす湊にこき入船也かちよくまかせとは楫よくされと云意也シ本萬加世與と有も同意也船かたふくなといひて末の詞にてかたふかさらんを願ふ意をあらはせり

末

和加久佐乃波以毛々乃世太利安以曾和禮毛乃利太利夜不禰加太不久奈不禰加太不久奈

わか草のいもものせたりわれものりたり船かたぶくな

妹ものせたりにてもよく聞えたれと本抄のりたりと有方まされり若草は枕詞さてこは本末一連の歌にてしなか鳥猪名の湊に入船の楫よくまかせ若草の妹ものりたり我ものりたり船かたふくなとなれり楫よく取れ船も傾くなと楫取りにも船にも令する意也

本

之奈加止留夜井奈乃不志波良安以曾止比天久留之支加波於止波於止於毛之呂木加波於止

しながとりゐなのふしはらとびてくるしきが羽音はおとおもしろき

是より次下本末一連の歌にて男女の贈答也上の猪名湊に入船云々本末とは別歌と聞ゆされは此間に井奈野女には鵬毋子と標したる本もありて本抄は是によれゝと今は神楽譜のまゝに記しつふし原は五倍子原也携て来る鳴か羽音は音面白き也拾遺集に三和彌わたる五和おもしろき哉として入られたるは一連のしらへを考るに拾遺の方常の歌に直して入たるにやさて先つ是は男の詞とす

末

之奈加止留也井奈乃不之者良安以曾阿美佐須夜和加世乃支美者以久良加止利介武以久良加止利介武

しながとりゐなのふしはらあみさすわがせの君はいくらかとりけむ

こは本の鳴か羽音はおと面白きといふを受て女のいへる也其猪名のふし原に網張て吾夫君は飛来る鳴を幾つ取りけんと云也網さすは網を張るをいふわなをもさすと云り萬葉十七家持鷹の歌をてもこのもに等奈美許里といひ返歌には二上のをてもこのもに安美佐之底とよめり

本

和支毛古仁夜比止與波太不禮安以曾安也萬利仁之與利止利毛止加禮須止利毛止良禮須夜

わきもこに一夜はたゞふれあやまりしより鳥もとられず

安也萬利仁之の仁文字シ本なしまさりぬへし是は男の答へ也誤らか取りけむとのたまへとそなたに一夜あひ事して其夜とりあやまりしより後はそなたの事のみ心にかゝりて鳥もとられ侍らすと男のいふ也一夜膚ふれたるによりて鳥をとりそんじたる也萬葉十四新膚ふれしなともよめり

末

之加利止毛也和加世乃支見波安以曾五津止利六津止利七津止利八津止利九古乃與十乎波止利十乎波止利介武夜

しかりとも吾夫の君は五ツとり六ツとり七ツとり八ツとり九よ十をばとりけん

シ本九津塔利と有は論なし九與の與文字數をよむに一二三よりいひもてこゝのよ十といひし成へし今天王寺食堂にて元日の夜量り初と云事をするを見るに米一升より一斗迄量るに一二よりよみ出てこゝのや十と云り又田舍にて兒女の羽子つくにも九與十と云所有り此也與同韻にて十は成數なれは其終に自然此助言いはるゝ成へしさてこゝも五六七八の下には各取りの詞有て九の下はとりの詞なくて九與十をは取けんと有しにやこは又女の答にて鳥もとられすとのたまへとさのみ取り給はぬ事はあらし五ッ六ッ七ッ八ッ九ッ十計は取り給ひけんといふ也さて是は誰名のふし原に網張て毎夜鴫のかゝるを待居る所へ女の來て逢し也催馬樂山城のこまのわたり云々の意に似たり合見るへし

小前張

薦枕

本

古毛萬久良以也太加世乃與止仁夜安以曾太加仁戶比止曾之支津支乃保留安見於呂志佐天佐之乃保留

こも枕たかせの淀にたかにへ人ぞ鴫つきのぼる網おろしさでさしのぼる

薦枕は高と云枕詞也たかにへ人は誰が贄人也贄人

とは魚鳥などとりて贄に備る人をいふ也鳴槍登さは鴨は水鳥にて川の汀の草かくれにひそまり居れは竹竿なとしてつきてとる成へしあみおろしは網下し也さでさしのほるは小網刺登也萬葉にもよみて小網の柄も付たる物成へし故にさしのほるさしわたすなと云り是は雜魚を取成へし下す網は立網也其中に入りたる魚を小網にてすくひ取也サデは逆手にて小網に柄付たるを逆手に取て水中の魚をすくひ取の名か古事記天逆手もし是にやとさへ思はれ侍るは非か

末

安女仁萬須也止乎加比女乃夜安以曾々乃仁戸比止曾志支津支乃保留安差於呂志左天左志乃保留

天にますとよをか姫の其贄人ぞ鳴つきのぼる網おろしさでさしのぼる

是は答への意也誰か贄人そといふを受て其贄人は天に坐すとよをか姫の御贄人也と云なりさて此大小の前張守部の說の如ならは此句は神樂に歌ふによりて作りかへたる成へけれとも既にもいふ如く打任たる催馬樂にもあらす安知女安以志安以左等の詞もそひ本末として全く神樂の姿にて大小と別たるも音振の事にやと思はるれば強てさとも定かたくや

志都夜乃小菅　閑野

本

志都夜乃己須介加萬毛天加良波於比牟也己須介

しづやの小菅鎌もてからばおひんやこすげ

志都也は所の名か泉の小菅なとよめる類と聞ゆ鎌もちて刈らは又生んやと云也本抄志都也の小菅は菅の名也とあれとさる名いかゝあらん或說にも萬葉七はしたての倉橋川の川の志都菅（書入云わか苅てかさにもあま）といふを引ていへれと川のしつ菅（すかはのしつ菅）と云ふと志都也のこ菅といふは異に聞ゆる萬葉に根也はらこ菅泉のこ菅なといふ如く小菅にて名なれは上に志都也のと云るは所成へし

末

安女奈留比波利與利古夜比波利止見久佐止見久佐毛比知天

あめなるひばりよりこや雲雀とみくさもちて

天なるひはり本抄に云る如く空に高く囀る鳥なれは天なるといふへしおりこやは下来よ也與利こ也と有も歌ふに任てうつれる音にて同意也富草くひてと有もよしく比持て也本抄富草を稲の事と有しかるへからす花をいひ山なとにもよめる歌有風俗歌に安良太仁於不留止見久佐乃波奈天仁川見禮天見也戸末井良牟といへるはげんけばななるべし此花荒田に滿々てさけは富草といふか又農家の人のいふをきけは此草を田の土の下にかり入れ苗代草と云ものにすれば稲よく登るといひて生ぬ所には求めて種をも蒔くとそ此はな咲滿る田をはさなからかへしなとする田の爲にいと宜とそさらば稲を富す草の心にていふにや迂説に似たれと捨かたし今トビ色といふ色あり即トミ草ノ花色なるへしげんげの咲滿たるはいかにも今いふトビ色なりさなくてはトビ色といふ語の出所なしさて此富草其名は聞えなから實物ははやくうしなはれしにや六七百年はかり昔の人のよめるもおしあてにやとおもはるゝか多し此神樂にいへる歌の意必げんげを雲雀の喰ものにもあらねと囀る時にうちあひて田や野や咲みちたれはいへるなり　入綾にも富草の事は本抄にゆつりて何ともいはす〇ちなみに云師説に古へ菫とよみ来れるはげんげ花なる事既に明けし是をもときてさにあらすやはりスモトリ草なりと云人も聞ゆれと古歌皆菫はげんげならてはけしきかなはすよく吟し見るへしさてスミレはツミレにや此花必手に多く摘ためらるゝ物なれはツミイレ花と云がツミレといひなされ又スミレともうつれるなるへきか上に云風俗歌にも手につみれてみやへまゐらんといへるにあらすやツボ菫は摘ためたるかたちにや

磯等前

本

伊會良加左支仁太比津留安末乃太比津留安末乃

末

和支毛古加多女止太比津留安末乃太比津留安末乃

いそらが崎に鯛つるあまの我妹子が爲とたひ釣る海士の

磯等崎志摩國答志郡とか次にも伊勢しまやあまをとめらかたくほのけ磯らか崎にかをり合たりと有

歌の意は明らけしあまのゝの文字は心なしさて上
志都也の小菅より以下本末七言三句にしらへなし
たる歌也

篠波　小竹波　篠並

本

佐々奈見也志加乃加良左支也見之禰津久乎見名乃與○○佐々也曾禮毛加名加禮毛加名伊止古世仁萬伊止古世仁世乎也○

さゝなみや志賀のから崎みしねつく女のよさゝそれもがなかれもがないとこせにまいとこせにせん

佐々奈見也の也文字ノ本によるに本文と見ゆれは除かす餘の三ツの也はなし又與佐々を與佐とせり曾禮毛加々禮毛加と有共によく聞えて意は同しみしねつくは御稲舂也をみなは少女也與さゝは好さ也それもかもかれもかもは此をも彼をも得てしかなと願ふ也仵女あまたなるを皆からほりする意也いとこは親みいふ詞にて古事記に伊刀古夜能妹の命萬葉に伊刀古名兒乃君なと云り眞淵引る古本に伊刀古女と有と云れとさる本を見す風俗歌にも於乃禮加也伊止古世乃加止仁云々と有れは改かたしさて考るに御稲舂といへるは新嘗なと又は神社に奉る料にて別に少女のうるはしきを撰みそろへて舂しめたるわさ有し成へし貝郷の賤女か稲つくらんを見てかくはいふましきにや

末

安志波良田乃以名津支加仁乃也於乃禮佐戸與女乎江須止天也左々介天波於呂之也於呂志天波佐々介也加比奈介乎須留也

蘆原田の稲舂蟹のおのれさへよめを得ずさてさゝげてはおろしおろしてはさゝげかひなげをする

蘆原田は田の中に蘆の生たるか蘆原の中にひらける田をいふか蟹は蘆蟹ともいひて蘆有所に多く住もの也和名抄に葦原蟹稲舂蟹等の名ありかれか雨手をさゝけおろしするさま人の稲舂に似たれは名とせり萬葉十六蟹を琴引笛吹なと云るも手の爪より思ひよせあわ吹口つきよりいひなせるものにて今と同しよめは童女の稱なるを專らめとる新婦の稱にいひならせりさて欲する物を得まくする時は

兩手を指擧るより其蟹のおのれさへ新婦を得まく欲して得かたしさや手を擧おろしするよと也本は御稻春少女の好を見て此も彼も吾ものにせんとい ひ末は吾のみならす稻春蟹さへに新婦を欲するを云成へし加比奈介は腕擧也と云に從へし本抄さゝけてはさゝけと有は朝廷にものせらるゝ時おろしの詞をうたひかへられたる物と云り

殖舂ノ宇惠津支本 殖槻

本

宇惠津支也多名加乃毛利也毛利也天布加佐乃阿左知加波良仁

うゑつきやたなかのもりやかさのあさぢがはらに

殖槻田中杜笠淺茅原共に大和國添下郡と見えたり毛利也天布の天布はふしの聲也次にも例有初句二句の也は歌詞成へし末歌も二妻とる也といふ也除へからぬさま也意は末と合解へし

末

和禮乎支天不多津萬止留也止留也天布加左乃安左知加波良耳

われをきてふたづまとるやかさのあさぢがはらに

われをきては吾を置て也吾乎の乎に於の意出れは省かりたる也君をおきてあたし心を我もたはなとの如きしおきて也二妻は二人の女をいふ歌意は笠の淺茅原に吾を妻とさため置て又異女を妻にとるやの意也総のかさの淺茅原は再ひいふのみ

總角ノ擧卷

本

安介萬支乎和左多仁夜利天也曾乎毛不止曾乎毛不止

末

曾乎毛不止曾乎毛不止曾乎毛不止

曾乎毛不止奈仁毛世須志天也波留比須良波留比須良

春日須良春日須良波留日須良

あけまきをわさ田にやりてそをもふとなにもせずしてはるびすら

總角和名抄髮也其余皆髮字俗用ニ垂髮ニ字ニ謂ニ之童子ニ垂レ髮也なとも有て子を稱る名先ツ初生る赤子と云全身赤し乳を含めは乳子とも云頭の髮やゝ生て背けれは綠子と云其髮延てうなしに及ふをうなゐと云ヒ切そろへたるをうなゐはなり

といひ眼の所のみ切明たるか其髮目をさすか如きをのぞしといひいよ／＼長く成て肩に及ふを取擧て卷たるを安介萬支といへり次々其稱有をもて年の程知へし萬葉にうなゐはなりは髮あけつらんかともよめりわさ田は早稻田也秋早く登る稻は春もとくうくる成へしやりては其童を遣す也そ思ふとはそれを思ふとて也ノ本奈仁毛波段をりと有童を思ふによりて外事は何もおもはす居也シ本春日久良之津と有もよく聞ゆれと暫く本文に從ふ歌意は其童のうへの心にかゝりて何事をもせす永き春日をさなからくらせしと云也すらはさなからの意にて朝より夕まてと云か如し下にも此殿の西のくらかき春日すら云々と云りさて是は五七五七五と連ねて總角をわさ田に遣てそをもふと何もせすして春日すらと云也

大宮

本

於保見也乃知比佐古止禰利也天々仁也波天々仁也波多萬名良波天々耳也

末

太萬奈良波比留波天耳止利也（シ須惠天）與留波佐禰女天々仁也（シ本てん　和留津末也）

與留波左禰天々仁也

おほみやのちひさこごねり玉ならばひるは手にとりよるはさねてん

大宮は皇居也ちひさことねりは小子舍人也雄略紀に聚嬰兒て小子部連を給りし事なと思ふに古へは小童をチヒサコといひし也こゝも小子なる舍人なり二十一歳より仕る內舍人なとの事思ふへからず只殿中の小童をいふべしとねりも廣き稱にて次にも考有天々仁也例のふしの詞とも聞ゆれと下句の手にすゑの詞を引上て返し歌へるにやとも聞ゆいつれにしても除かるべき詞也手にとりにても聞ゆれと須惠と有方勝れり其小童玉にてあらは晝は掌にすゑ愛し夜はいたきもて寢ぬへきをと云也佐禰の佐は例の發語也是は小童のめでたきに戀思ふにて歌は三十一言也本文與留波佐禰女天々仁也と有は佐禰天女天々仁也と有しか下上になり天文字一ツおちたる物成へし

湊田ノ美名止谷

本
見奈止多仁久々比也也津乎利也止呂知名也止呂千奈
也津奈加良止呂千名也
末
也津奈加良毛乃毛波須乎利也止呂知奈也止呂知奈也
也津名加良止良之ゝ尓也
みなと田にくゞひ八ッをりやつながらものもはずを
りとろちなや
湊は水門にて川の海に流入る所を云さるほとりに
有田を湊田と云へし鵠八居和名抄に日本紀私記云
久久比と有鳥也鵠か田におり居る也止ろ知は鳥黐
也利毛の約呂となりてトロチといはるゝ也鳥は黐
を引てとるもの也萬葉十三長歌に花橘乎末枝爾毛
知引懸仲枝爾伊加流我懸云々といへるも末枝に黐
を張て其下にを鳥をかけ置て鳥を取也又毛知鳥の
かゝらはしもよなとかゝるの枕詞にも云りやかて
今も鳥黐と云ふ也さて是は其黐の有台ぬによりて
鵠を見なから取る事あたはさるをいへりとろちな
その也は助言と聞ゆ也津遠りの也津數多き事をい
ふも常なれと八ッなからと有は猶定數成へし也津
なからものもはすをりは物思はす居にて鵠か何の
心もなく人のねらひよるも知へからぬさまにて居
をいふさるは黐たにあらはたはやすく取得んもの
を黐のなき事哉といへる也歌は湊田に鵠八ッ居り
八ッなから物不思居り鳥黐なやと五七五七五とつ
らねて聞へしシ本以波須と有は鳥のさまならず

蟋蟀

本
支利支利須乃禰多佐宇禮太佐也見曾乃不仁萬爲利天
支乃禰乎保利波武天遠佐末佐津乃遠禮奴遠佐末佐於
佐末佐津乃於禮奴
きり〳〵すのねたさうれたさみそのふにまゐりてき
のねをほりはんでおさまさつのをれぬ

末
於左末左禰多佐宇禮多佐見曾乃不仁末伊利天支乃禰
遠木利波牟天於左末左津乃遠禮奴
ノ本 末以同歌唱但ねたさうれたさより唱
於佐末佐遠佐末佐假名不定ノ本於文字也於禮奴も

ノ本違文字也共に正しとす蟋蟀は萬葉より初て古歌に多く見えたりくはしき考は師説に有ねたさうれたさは蟋蟀が角をれたるを氣毒に思ふ也物ねたみするなとの類に吾ょりねたむにあらす俗にきのどくなど云はかりに聞へし土佐日記に淡路の御の歌におとれりねたきいはさらましをとくやしかるうちに云々是らは殘念なゞ俗にいひて後悔する計の意也うれたさはうれふと云詞の動き也こゝはねたさもうれたさも蟀蟋かうへを外よりきのどくに思ふよし也御園生のふは生る事にて淺茅生麻生古くは豆生粟生なともいひて生はいたつらに添る詞にあらす必園生の竹園生の萩なとつゝけたるを後には只園と云へき所にも園生といへり此歌の園生は後の方にやとも思はるれと木根とあれは猶古への心成へしさて蟋蟀の類は長き毛の如きものロの兩脇より一筋つゝ生たれはそれを角と云る也されと木根を掘はむものにあらす冬に至れは土中に入る其頃はかの角おちてなくなるより云る成へし於佐萬佐は歌ふふしの聲にや一ツの詞にや考へしさて是は何そよせ有歌成へし試にいはゝ下賤の人などの高貴のあたりへあなかちに出交りてさかしらたてして事を損したるとやうの事有を傍よりいためる心にや

或説

卷　本

したらかまうどのひとへのかりぎぬなどりれそね。たし。。

末

などりれそこさめにそぼぬらせよがれするいといとねたし。。。。

志太良は所の名三河叉甲斐にも有と云り催馬樂に石川乃高麗人とも有類にてこまうどをかまうとゝ歌へる成へしと云さる事にや歌の意は其高麗人と契かはせる女のいふ也したらこま人が單の狩衣かけほしていにたるに小雨降來ぬれはとく取り入ぬへきを猶さておきてぬらせよかのこま人異女にかよひて我方に夜がれかちなるかねたきにといふなりそほぬらせはそほちぬらすにていたくぬらすを云などりれそは利に以の韻出

くれはな取り入れそ也ねたし是はまさしくさしあてゝねたむ也夜かれは來ぬ夜有を云いさ〳〵は重ねて強く云也

千歳法　志加左戸津留聲

本

世佐伊々々々々々哉知止世乃々々々哉

千歳々々千歳也々々々知止世乃千歳也

末ノ此歌類本末合二十二首音振皆同之

萬佐伊々々々々々々哉與呂津與乃萬佐伊哉

萬歳々々萬歳也々々々與呂津與乃萬歳也ノ此詞ナシ

千歳法下注に志加左戸津留聲と有はそれが囀る聲といふ事也しかれは古へは千歳と稱る者出て先ツ自らかく唱へてさて次の早歌を雜し成へしノ本には萬歳の方はなしシ本によるに世佐伊末佐伊と唱へし事也世佐伊知止世萬佐伊與呂津與那といふは音訓重ね云にて安加保志波明星波の類なり

早歌　十二

本

伊津禮曾毛止々吉利

末

加乃佐支古衣天

いづれそもとゝまり　かの崎こえて

早歌本末は贈答のさま多し是は旅人に傍より問たるを旅人の答へたる意也今日のやとりは何所そと云を彼崎越てなりと答へたる也曾毛の毛は助言崎は山の崎成へし

本

見也末乃古津々良

末

久禮々々古津々良

みやまのこつゞら　くれ〳〵こつゞら

葛は連にて長くつらなる意つゞらはつら〳〵也かづらはからみづらかこつゞらは古萩古柳の類かさて葛の類はくりよせて取る物なれはくれ〳〵と人にいひ命する意に云り

本

佐支乃久比止呂牟止

末

伊止波多奈加宇天

さぎのくびとろんと　いとはたながうて

本抄鷺の頸取らんと云心也いとはたは最將の心と

有と頸は頭の莖也と云て頭を切り取る事を久比をとるといふ事は古へになき事とか或説に是は薪こりの歌にて鷹の頸とは松の心ののひたる所をいふと云る少し迂遠なるに似たれとしかるへし松の末の長きを鷹の頸に見たてゝそれをとる事なれはよく聞えたりいとはたは最末にて松の梢の最末を云へし意は松の末取らんとして望むに末いと長く高けれは取得かたき成へし

本

安加々利不牟奈志利名留古

末

和禮毛女波安利佐支奈留古

あかゞりふむな後なる子我も眼はあり先なる子

和名抄皹阿加々利手足坼裂也とあり詞の意は足かゞり也はだへ荒て物にかゝる成へし萬葉十四稻つけはかゝる吾手を今よひもやとのゝわく子か取てなけかんと有は手のかゝり也其皹を後より來る人にふむ事なかれと云也末は答にていふにや及ふ我も目あれは見てさるあやまちすへきかはといふ也

本

止禰利古曾宇志利古曾宇

末

和禮毛古曾宇志利古曾宇

とねり來ぞ後來ぞ　我も來ぞ後來ぞ

四ツの字は曾の餘韻成へし古へは來も行も同しやうに云る所あり是は問答にあらす舍人を召具して行人のいへる心也舍人來れ後より來れ吾も行ほどに後に隨ひて來れ也

本

安知乃山世山

末

世山也世山

あちのやませ山　せ山や世山

こはいつれもみたれたりと見えてよりかたし本抄にあちの山を山をやまのあちのせと有やしかるへからんあちは今俗にもいふあちにてあの方の山也を山は小山成へし世は夫にて女の遙なる山を隔てある夫を戀る歌也古本にあちの山せ山せ山のあちのこと有とか古は子にて是によれは男の女を思へ

る歌也せ山はおちの山の背に立かさなれる山にて
山後の山也其あなたに在女を云成へし

本

古乃惠能美加止仁古志於津止。

末

加美乃彌乃奈介禮波

このゑのみかどにこじおつ　かみのねのなければ

本抄こしおとひつと有は落しつの音便也此かた勝れるか近衛御門は陽明門を云こしは冠の巾子也昔は纔額と巾子とをは取はなつやうにこしらへたる故也髮の根なしとは老人なと髮少くなりて笄にて巾子のとまりかたきよし成へし

本

由須利安介與曾々利安介

末

曾々利安介與由須利安介

ゆすりあげよそゝりあげ　そゝりあげよゆすりあげ

ゆすりはゆりすり成へしそゝりもすゝりも同しくすり也本抄ゆすりあけんすそあけんと有しかるへし是は諸手して衣腹の帶紐とかす腰のあたりを取てゆり上るを今もゆすり上るといへり裾あけんもよく聞ゆあけよと云時は人にしかせよと令する也

本

多仁加良伊加波乎加良以加牟

末

乎加良伊加波多仁加良以加牟

谷うら行ば尾から行ん　尾から行ば谷から行ん

をは山の尾にて嶺の引はへたる所也谷うら彼ゆかは我は尾より行ん尾より彼ゆかは我は谷より行ん也

本

古禮加良伊加波古禮加良以加牟

末

加禮加良伊賀波古禮加良以加牟

此から行は彼から行ん　彼から行ば此から行ん

意上に同し

本

乎美名古乃左衣は

末

志毛月志波須乃加伊古本千

をみなごのさえは　しも月しはすのかいこぼち
本抄に女子の才也かいこぼちは垣をやぶりて薪にする心也と有に從ふへし女子の才のこさかしきをそしりたるにて十一月十二月の頃は雪深く山に入かたき折しも火燒ことの專らなるに思ひよりて間近き垣の柴木をやぶり來てたく也さる類女の才智の常にて遠きおもひはかりなきをいふへし

本

安不利止也比波利止

末

比波利止也安不利止

あふり戸やひはり戸　ひはり戸やあふり戸
あふり戸はかりそめの開戸にて風にあふらるゝ戸也馬具のあをりなとも同詞か扇もあふくの名也ひ。はり戸は其戸骨の弱くて風にたわめらるゝ也たわむをひはるともしはるともいへりさて此早歌と云は其句長短有に似たれとも凡七言二句の姿にて短けれは早歌といふ成べし今街兒のあの月見たかおくさて見たはなと云か如し

明星

本

吉々利々千歳榮白衆等聽説晨朝淸淨偈也安加保之波明星波久波也古々奈利也名仁志加毛古與比乃津支乃多々古々仁萬須也多々古々仁多々古々仁末須也

末

白衆等聽說云々　次々本末同詞略之

きゝりゝせんざいゐやうびやくしゆさうちやうせつじんでうしやう〱げあかぼしは明星はくはやこゝなりや何しかもこよひの月のたゞこゝにますや

眞淵云古へ重る言を古事記に許袁呂許袁呂といふを許々袁々呂々と書登袁々登袁々と云を登々袁々々と書る如く吉利吉利といふを吉々利々と書しものと見えて吉利は神異なる鳥の名千歳榮也延喜治部省式祥瑞の中に吉利鳥獸形鳥頭と有云々祥瑞の吉利は麒麟の事と聞ゆいかゝあらん是は咒文にてまつキリ〱と唱へしにはあらぬにや千歳榮は壽言也白衆等は諸人に告也聽說晨朝淸淨偈是は法華懺法の六時の讃の晨朝の詞といへり抑神樂歌はあまた

傳りて其神遊の料に製られたるは更也其餘の古歌をとられたるも皆上世の風流にていと尊き限りなるに以上の語のみ佛交りてあたら錦にきたなきさい手功入たらん心ちするものにやあかぼしは明星は同事を音訓重ねいへり久波也は今俗にこれはといふはかりの言にて驚き歎する詞成へしこゝなりやはこゝにありや也何しかも今夜の月のたゝこゝにますやとは明星の月よりけに照かゝやくをまことの月にやとうたかひて何しに今夜あるへくもあらぬ月のこゝにいますやといふ意也上吉々利々より晨朝清淨偈まては唱へことと成へし明ぼし以下はさる時仰見ていへる言成へし是はきはめて古調なるものなり和名抄明星兼名苑云歲星一名明星此間云阿加保之

末は吉々利々千歲を除て次句より唱ふとなり

得錢子　シ德世利古

本

シ止古世利　女　シナシ

得錢子加禰也名留也志毛由不比波乎太禮加波太乎利

○シナシ　シ多利哉𥝱古木止與哉

志○得○錢○子○也多々良古支比與○也○太○禮○加○波○太○乎○利○之○得○錢

○子

○とこせりこがねやなるしめゆふひばをたれかはたをりしたゝらこきひよ

本抄得錢は得選女官の名と有に從ふへしそれをシ本によりて暫くトコセリコと訓標結檜葉は其女得選を男ありておのかとしめ置をいふ誰か手折しとは人にとられたるをいふたゝらこきは祟こきにて其女の事に付て煩しき事なと有を云へし采女なとにとられん女をあらそふなれはさる方の咎も有へし神なとの祟るか如きをいふこきは繁こきかしこきなとのこき成へし古今集俳諧に石上ふりにし戀の神さひてたゝるに我はいをねかねつも又後にも檜の葉に葉守の神のますとも知らて手折したゝり給ふなゝと云を思ふへしひよは檜與成へし寢屋と云事檜につきなしと云人あれと閨の前に檜あらんにはいふましきにあらす

末

和禮古曾波見禮波也宇禮多左安見太乎利天古志加也

シナ○シ　シ比波　緒々に利天波　波○シナシ

シナシ○　シ多利哉𥝱古木比與哉

○得○錢○子○也多々良古支比與○也○太○乎○利○己○之○加○也○得○錢○子

われこそは見れはうれたさにたをりてこしがたゝら
こき槍よ
是は誰か手折しと云其手折し人の答へにて我これ
を見れはうれたさにたをりて來しがと云意也得錢
子を人の標たるを見れはいとうれはしさに奪へり
と云也

木綿作

本

由不津久留志名乃波良仁也安佐多津禰安佐多津禰安
佐多津禰也
ゆふつくるしなのはらにあさたづね

末

安佐多津禰末志毛加見曾也阿曾邊安曾戸安曾戸安曾
戸安曾戸安曾戸
ましもかみぞあそべあそべ
一二句木綿作る信野原と聞えたり或説に木綿は安
藝と伊豆乃三島とより出すといへれと信野よりも
ゆふを出せし成へし即此歌を據とすへし信野原は
信野成へし國名も野によれるなれは原ともつゝけ
いひし成へし但ノ本には志乃々波良乃と有は猶考
へし入綾に信野志を引て志那は木の名にて其皮も
て藤布の類を織るよし云りさらは志那原と有へし
乃文字は少いかゝにや松原杉原なといへは木なら
んには志那原と有へきか安さたつね此句意を得す
末にましも神そ遊へ々々と云を本抄に汝も神そや
と云か如しあそべは神遊せよと云也とあり是に從
ふ時は狐狸はかりの物に汝も神のうち也神樂せよ
といはんか如しもしは安佐留き津ねと有しを留を
脱しきをたに誤りしとやうの事にはあらしか次々
數度返したるには幾美毛可見曾萬志毛可見曾とか
はる〳〵いへるは歌ひものゝ常にて少しかへてい
へるなり例多し

晝目歌

本

伊加波加利與支和佐志天加阿萬天留也比留女乃加見
乎志波志止々女牟志波志止々女牟
いかばかりよきわざしてか天てるやひるめの神をし
ばしとゞめん
古今集にもひるめの歌と有てさゝのくまひの隈川

云々の歌あり是を或抄に大嘗會に米をひるとてうたへるよしいへれと此神樂にて見れは本抄の如くひるめの神の説成へし歌意はいかはかり能わさしてとはわさをきのわさにて即神樂舞ふ事成へしさて祭はてゝは神の歸りのほらせ給ふなるをしはしとゝめんと御別をしみ奉る意也萬葉にも天照日女之命と日神の事を云り

末

伊津古仁加古萬遠津奈加牟安佐比古加佐須也遠加戸乃多末左々乃宇惠爾多末左々乃宇惠爾

いづこにかこまをつなかん朝日子がさすや岡べの玉笹の上に

拾遺集神樂歌に吾駒は早く行なん朝日こかやへさす岡の玉笹の上にと有も同歌の轉るか八重さすもおもしろき詞なれと先古本によるへしあさる澤へと有は誤成へし朝日子と云事此歌より古くはなき事にや是を朝彥と心得て彥は男に稱する詞日神は女神なれはいふましきよし言說有是は彥にはあらて朝日に子の付たる詞成へし只朝日と云に同し晝日歌にされるは朝日子の詞によれるのみ成へし

弓立歌ノ湯立

本

伊勢之末乃安末乃止爾良加多久保乃介於介々々

末

太久保乃計以曾良加左支仁加保利安不於介々々

いせしまにあまをとめらがたくほのけいそのさききかをりあひたり

ゆだてハノ本湯立と書る正字にて今も諸社に傳へて行ふ神事の類成べし歌の燒火の氣なと云も其意にされるにやと舊說にもいへり又弓を立て神樂する事有しにや貫之集に弓のたちとて梓弓春の山へにいる時はかさしにのみは花は散けると有弓の立は別事か可考次の歌大君の弓木取山の云々なとは弓の詞によれるにて湯の緣はなきにや伊勢島云々志摩國は古へ伊勢のうちにて離れたる島なりしを後に分たれたりと云りされは伊勢志まとつゝけいへり安末乃止爾と有に說々あれと皆正本を見さるよりたすけていふ說成へしノ本に遠とあり古本傍

付に女と有うへは海人少女(アマヲトメ)にてうたかひなきもの也焼火氣は鹽焼煙也磯等崎上に既に出たる所かとも思はるれとノ本に磯の崎々と有いとよし所々に燒鹽煙のひとつに棚曳合ひて薫るけしき崎々と云よくかなへりさらは地名にはあらず結句もかなりあひたりと有り磯の崎々島の崎々古事記にも萬葉六にもよめり

本

於保岐見乃由(シ布 ノは)幾止留也末乃和加左久良(ノナシノわかさく)於介々々

末

和加佐久良(ノナシわれなりに)止里可和禮由久(ノナシ)不禰加知(ノをシ緒)左保比止加勢(シナシ)於介於介

おほきみのゆきとる山のわかざくらとりに我行舟かぢ棹人かせ

ゆきとる本抄に弓に作る木成へしと有しかるへし是を櫻を弓に作る事なしといふは非也次の若櫻は其弓木の料といふにはあらず弓木取る山の其山の若櫻といふ事也泥すへからずシ本によれば木綿取(ユフトル)山のにや考へし舟梶棹人借(カヂサヲヒトカセ)は其山水を越て行所成へし若櫻は若木也清正集にいつしかとうゑて見たれは若櫻さかすて春の過ぬへき哉とあり

神上(シカミアゲ)　此題本抄になし次第には歌共に不注本抄を本行さす

本

すへ神のけさの神あけにあふ人は千とせの命(シ安利堵伊)ここそ(布那利)きけ

神樂はて丶神を天におくりあけ奉るを神上(カミアゲ)といふへし終夜神わざして明る朝なればけさのといふ也結句シ本よし

末

すへ神はよき日まつれ(シ利都)はあすよりはあけの衣(シ哉保與呂津與緒伊)をけころも(乃留波加利曾)にせん

よき日祭れは丶吉日を得て祭り終りぬれは也シ本祭つと有もいとよしあけの衣五位のきぬ也と云るいか丶也神事に預る人五位にも限るへからず式の中なとにも禰宜著二明衣一(衣冠幷用二生絹一)論語に齊必有二明衣一布(ヌ)と云漢字より訓出て神事にきる衣をいふべし褻衣(ケコロモ)は常服也意は祭はて丶明日より尋常に直(ナホ)るのよろこびを云也上に紐の緒して丶あそへたちはきと有類なりシ本下句明けし

朝倉

本

阿佐久良也支乃萬呂止乃仁和加乎禮波

末

和加乎禮波奈乃利乎志津々由久者太禮（也シ加古曾）

朝倉やきのまろ殿に我をればなのりをしつゝゆくはたが子ぞ

本抄朝倉の宮は天智天皇行宮筑紫にあるよし奥儀抄八雲御抄等にのせられ侍れと愷成所見及ひ侍らす爰に日本紀を考へ侍るに齊明天皇御時（皇極天皇重祚の諡號也）百済より高麗をせめし時高麗救の軍を我國にもとめ侍りしかは天皇筑紫へおもむき給はんとて伊豫の國に幸して熟田津の石湯の行宮にとゝまり給へり其時天智天皇はいまた太子にて供奉し給へり其年朝倉橘の廣庭の宮にうつり給ひて朝倉の社の木を切はらひて此宮をつくり給ひしかは朝倉の神いかりをなせりとなん齊明天皇は終に朝倉の宮にして崩し給へり朝倉の社は延喜式神名帳には土左國土左郡にありと記せり風土記にも土左國朝倉の郷に朝倉の社ありと見えたり四國の中なれはい與の國より土佐の國へうつりましくゝけるにや朝倉の木丸殿は土左の國に侍るを古來あやまりて筑紫に有と云りきのまろ殿は行宮を云まろ木の黒木にてつくれる名也天智天皇いまた東宮と申侍る時齊明天皇にしたかひ給て朝倉の行宮にとゝまり給へる時この宮へ參る百の官揚名して罷出侍る事を名のりをしつゝ行はたか子そと詠し給へる也（下略）此御説的論なれとも契冲は三善清行の意見封事の中に備中國下道郡爾磨郷の事をかゝれたるには彼國の風土記を引て筑紫へおはしましたるやうに見ゆれは今傳る説は筑前國の風土記なとより出けるにやと云り和名抄筑前國郡に下座（下都安佐久良）上座（准上）も有て舊くより言傳へたる説なり紀風土記（中論）共に此幸は百濟高麗の軍事によれるおもむきなれは世に傳へたる如く筑紫の方にて紀の傳へおそらくは誤たる成へし四國も經給ひたる所にて同し地名なと有よりたかへる物成へしさて此御歌新古今に天智天皇とせるは何によれるにか或説には日本紀竟宴の歌也といへとおしあて也木の丸殿は黒木の丸木にて作られたるを云へし丸木殿といふへきを便にまかせ

てきのまろ殿と云也萬葉八に波太須珠寸尾花逆葺黒木用造有室者迄萬代なども有て古へかりそめに黒木作りにせし家は殊にめでていへれは此黒木の行宮も名に負る成へし蘆の丸屋竹のまけ庵なとはおしまかねて作れるにて似て異也さて下句の意を考るに其宮に參る人の揚名とは聞えす行宮といへとも其堺關門なと有てそれに名を告て往く人の有を宮中より聞しめして吾居れは云々とのたまひし成へし又入綾に其名謁せし人の容儀なとのよきを御目にとまりて宣る御詞也上の奈良の都をねるはたか子そと云類也と云れとなのりをしつゝといふ都都の詞は數人にかゝりて多く人の名を告て過るをいつくの人にやとのたまふ意也是や此ゆくもかへるも別れつゝ知もしらぬも逢坂關と云都々に似たり

又或本

本

安佐久良也乎女乃見奈止仁安比支世波多末乃女佐（シ緒部 シ布 シ世）（シモ 波女哉）（本なれ）
志仁安比支安比仁介里

あさくらやをめの湊にあひきをれは玉のめさしにあひきあひにけり

朝倉緒部所の名と聞ゆこは土佐にや筑紫にや定かたし海邊なる事は歌にて明也シ本緒部乃布奈世と有も捨かたし萬葉六幸於播磨國印南野時金村作歌名寸隅乃船瀬從所見淡路島松帆乃浦爾云々と有船瀬は播磨國成へしもし朝倉乎女なと云地ありや考へしさて此歌こゝに取たるは朝倉の詞によるのみ安比支をれは網引居れば也安比支世波と有にはシ本結句安比毛安波女哉と有方かなへり玉のめさしは玉は美稱めさしは童女也めさしの詞既に總角の所に出つ

末

加津良支也和多留久米知乃津支橋乃古呂毛々止良（古々呂毛志良）
須津以佐加戸利奈牟

かづらきやわたるくめぢのつぎはしの心もしらずいざかへりなん

此歌は序歌にて女のもとにいたりたる男その女の心量り知かたきよしにていさ歸らんと云也上は心もしらすの序にて葛城久米の岩橋は役小角神に令して作らせたるを不成してやみしといふ

より中絶たりとも云ひ夫より又繼橋ともいひなせりそは神異の説にて量り知かたき事なれは心も知らすの序とせり古呂毛々止良津は誤成へし

其駒

曾乃古末曾也和禮仁和禮仁久佐古不久佐波止利加波牟美津波止利久佐波止利加波武也

その駒ぞ我に草乞草はとりかはん水はとりかはん

歌の意は其駒我に草を乞ふさらは草取飼ん水もとり飼んといふ也とりは輕く添たるとり也今改て草を取にはあらす本抄轡とり草はとり飼んと有轡を取除て心のまゝに草を喰しめんと也是もよく聞えたり

或本云葦駮歌

本

安志布知乃也毛里乃毛里乃志多奈留和加古佐非天

末

古安志介布知乃止良介乃古末

あしぶちの杜の下なる若駒ゐてこあしけ駮の虎毛の駒

あしふちのもりは地名と聞ゆわかこさは若草にて駒の欲する物と云説あれとゐて來と云に草にてはかなはす若駒と有に從ふへし若駒將て來也さて次句は其駒の毛文也葦毛駮の虎毛の駒成へし葦の花毛ともいひて蘆穗の色也虎毛は虎の毛文ある也即駮也今も猫犬に多く虎毛と云り

末

曾乃古末の歌と云々

是は或本の方正しくて古謂本歌脱たる成へしそれより又本末の文字も不書なりしか傳れるにや

竈殿遊歌

本

止與戸津比美安曾比須良之毛比左加太乃安末乃加波良耳比和乃古惠須留比和乃古惠須留　或本登左乃古惠須留

とよへつひみあそびすらしも久方の天のかはらに琴の聲する

末

比左加太乃安末乃加波良耳止與戸津比見安曾比須良之毛比和乃古惠須留飛和乃古惠須留

久方の天の河原に豐へつひみ遊すらしも琴のこゑする

へつひは竈所の事にて今はそれに座す神の事に云り豐は盛大なるの美稱也竈神は久登古開と云てものに見えたりみあそひすらしは竈の神達天上にて樂し給ふらし也久方は枕詞天のかはらは天に有河神代よりいひ傳へたり琴琵琶は明らけし登左は誤か一本比左は匏か匏を打事古樂にありしにや太神宮儀式帳にさこくしろいすゝの宮に御氣立止字都奈留比佐波宮もさゝろにさあり又空也堂念佛匏を打も古の樂器の殘れるにや是を和名抄に笙竹母匏と有を思ひて笙の笛の事かと云はあたらす打なる比佐と有をや又宣長の說さて膝の聲とする如何膝の聲とは樂む時膝を打ッ也と云私の酒與なとに乘して膝を打らんはしらす御膳奉るに打へきにあらず又膝の音とはいふとも聲とはいふへからす古へは聲と云へき所を音ともいへる事なきにあらねと自らけちめある詞也又此歌のも琴の聲に合せいふに打ともいはすして膝の聲と云いかゝ也かたく〳〵是も信しかたし須良志毛の毛は歌の詞成へけれとみあそひとあらは毛は衍字成へく須良志毛とあらは美文字衍たるべし

酒殿歌

本

左加登乃波比呂志末飛呂志見加己之衛和加天奈止利曾之加津勢那久耳（介）　或云世奴和左

さか殿は廣しまひろし甕越に我手なとりそしか告なくに

さか殿は酒釀する室也廣し眞廣しは眞は美稱にて重ねいふ也甕は酒釀する器也是は戀の歌にて意はひしとするならへたる甕の上を打越て女の手をとりてたわくるをしかする事なかれ酒殿はいと廣きに甕こしにものせすとものの意也結句しか告なくにはしかせよといはぬをの意也萬葉十二ませこしに麥はむ駒の云々なと云る越の如し

末

佐可止乃波介佐波奈波岐曾止宇禰利女乃毛比支須曾（武禮里女乃トニ○）比支計左波波幾天岐

酒殿は今朝はなはきそとねり女の裳引裾引けさははきてき

三句止宇禰利は歌ふによりて字のそはれるにて一本止禰利女乃と有にしはらく從ふ酒殿に宿直する

女也と云しかるへし女をとねりと云を聞すされと
さもいひし成へし歌意は酒殿は今朝は掃除する事
なかれ既に直宿女の裳引裾引今朝は掃たりしと云
也裳引裾引は裳の裾を引也其女のさまをいふのみ
萬葉に赤裳裾引又裳引ならせしなといへり

或説 本

あまの原ふりさけ見ればやへ雲の雲のなかなる雲
のなかとのなかとみのあまのこすげをさきはらひ
いのりしことはけふの日のためあなこなやわがす
べ神のかみろぎのよさこ

天原振放見者八重雲乃雲乃中なる天乃古菅をと
續くへし大祓詞に天津菅曾云々八針取刻天と云
萬葉三天有左佐羅能小野之七相菅手取持而久堅
乃天川原爾出立而潔身而麻之乎云々なと有て祓
事なとは今行を天上のわさのやうに云なすめり
中臣は即菅取さく任也是を八重雲より中臣にか
かる詞と思ふはしかるへからす祈し事は今日の
日の爲とは兼てよりさる潔身祓なとして祈しは
今日の爲なりと一日あたる事有て云ふ也吾皇神
の神呂岐乃與さこ凡みな古くいひ馴たる語也與
左こは與左々にて上の御稻舂女の與左々と同言
にや

末

には鳥はかけろとなきぬなりおきよおきよわかか（ひ）
さよ
とによのつま人もこそ見れ

鷄はカケロと聲の聞ゆる也魚彥云萬葉十六吾門
爾千鳥數鳴起余起余我一夜妻人爾所知名此歌を
轉しいへると云りけに相似たり一夜妻はかりそ
めに誘ひきて一夜忍び會たる女也本行は此止與
を加止爾と誤れる成へし

梁塵後抄三

神樂凡例に引所の歌儛品目に云催馬樂按スルニ催馬樂ハモト曲名ナリ新撰樂譜ニ笛譜アリテ黄鐘調ノ中ニ收メ入ルコレハ歌曲ノ我駒ヲ序トシ伊勢海ヲ破トシ竹川ヲ急トスルトイヘリ然ルニ和名抄ニハ双調ノ部ニ收メ入レテ注ニ我駒曲是ナリトアリ鄙曲抄（書入云此書ノ説鄙曲抄ノ説ナ是トス）に先だち祖父のおほせに催馬樂（書入云（サイバラク））がくの催馬樂の拍子に唱てもさ其樂よりおこる成へし風俗の音聲みしかく節にいやしめる聲のあり其ふりをかへて唱也本は催馬樂といふ樂の音めくりて唱つくるものなりトアリサレト註秘抄ニハ昔諸國より御貢物を大藏省に納し時民の口すさみに歌ける歌なれは催馬樂と名付る也トイヒ或説ニハ神樂歌ニ前張アリソレカ拍子ニ歌フ故ニ其名ヲ負ヒシモノナルヘシトモミヘタリ其譜は延喜二十年藤原忠房朝臣に勅シテ定メ給ヒケリトミエタリ世々朝廷ノ宴享ニ用ヒ玉ヒ又其他ニモ宴遊ノ供トナセシハ漢土ノ古ノ雅ト云ヘキモノナルニヤ又其傳ニモ源家藤家ノ少異同アリト云と云り今案に大藏省に貢物納し云々の説は徃くいひし事なるへけれと附會成へし又神樂の前張より出たりと云説有此はさもと聞ゆれとも猶鄙曲抄の説の如く成へし和歌を唐樂に合せたる和名抄曲調部にもあまた出たり櫻人を地久破に蓑山を同急鷹山を放鷹樂に紀伊國を白濱に石川を節世伎に葦垣を西王樂序に酒飲を胡德樂に田中井戸を胡飲酒破に眉止自女を酒靑司に無力蝦を古簡に（以上呂）高砂を長生樂破に夏引を夏引樂に靑柳を同序に伊勢海を十翠樂に庭生を喜春樂に鷄鳴を鷄鳴樂に老鼠を林歌に走井を耳州に更衣を老君子に飛鳥井を廻忽に道口を五常樂破に（以上律）合せたる類獨尋へし皆いさゝかよせあれは合せたるものと見えたりそか中に催馬樂は序破急とさへ備はりて專らと用ひられたるより總名のやうにもなれる物成へし其駒の曲を譜の初に擧たれは一部の總名となれるにやといふ説は猶いかゝあらん其駒の曲は律に收催馬樂は呂律とついつと云古説も有は一部始とは云かたし又此名は延喜二十年撰定よりは先なるへく思はるれは也

催馬樂は天治の奥書ある古寫本をもて文字假名の本行として波積安波禮曾己與之也佐支牟太知也の類の歌ふ聲又返し歌へる詞等を左に點し除て平假名に書事神樂に同しされとも古譜には近代不歌不注其詞として除かれたる歌もあれはそは今の梁塵抄のまゝに平假名を本行とす順次も神樂と同しく梁塵抄のまゝにたつ催馬樂は呂律と立る事本說有即天治譜も呂を初とす是に從ふ時は梁塵抄にたかひてまさはしけれはしはらく律を初にするもの也天治譜云

表 催馬樂譜 堀河右大臣殿流 按察使大納言 藤大納言寫之不可及他見 裏 堀河右大臣殿按察使大納言 大宮右大臣殿 藤大納言 皆此人々次第所傳也 奥書 天治二年春三月付

家說稱野了口傳

己秘藏也不可有外見歟

諸ふまに/\添れる詞其義なきにあらす波禮安波禮の類は歎辭也曾古與之はそれ好也曾與はそれよ也されと佐以之奈也良以之奈也の如きに至りては今いかにとも知かたし皆諸ふうへのふしにて歌の意にかゝはらぬ事故除て聞へき也

天治本目錄 淺草文庫本

催馬樂抄

呂

安名尊 新年 拍手十四 三段 梅枝 葦垣 卅五 五段 櫻人 廿四 二段

葛城 廿二 三段 竹河 河口 十四 二段 眞金吹 山城 廿 二段 三段

紀伊州 十七 二段 石川 十六 三段 此殿 十六 二段 此殿西 此殿同人 鷹山

妹與我 十 美作 藤生野 十六 二段 席田 十二 二段

淺綠 白馬 妹與門 十二 二段 本滋 十 二段 美乃山 十

角總 十 田中井戶 十 酒飲 八

挿止自女 八 難波海 十二 無力蝦 八

律

高砂 卅五 七段 夏引 廿三 一段 青柳 十二 二段

伊勢海 十 庭生 九 走井 九

飛香井 九 我門 廿一 三段 我門乎 大路 十四 二段

大芹 卅四 淺水 廿一 刺櫛 一五

鷹子 十四 更衣 十三 二段 老鼠 十

梁塵後抄

律

我駒

いで我こまはやくゆきませまつち山あはれまつち山
はれ
二段つちゝ山まつらん人をゆきてあはれゆきてはや
見ん

此我駒澤田川古譜不注故に本抄のまゝに記下所々
此例也萬葉十二乞吾駒早去欲亦打山將待妹乎去而
速見牟と有歌也ゆきませはうたひさかめたる物也
二段つち山はまつち山を返し歌へる成へしいでは
師說發語にてもと出る意にてさしいでさしすくる
語也されはせまりて見てたす調ありさる方より轉
して何にまれ推もさむる時の發語に用ひならして
只いてとはかり打出るにも其意こもりし也そのか
み其意をえて乞の字をあてたり中略 萬葉の頃に至
りてさらに一轉して物をいひ起しいひかくる時の
發語に用ひたり云々と百首異見ありまた山猪名の笹
原の歌にくはしくいはれたり即其中の萬葉の頃の
つかひ方にてこゝは只いひおこすまでの詞也是を
も乞の字に意をあらせて解は過たり歌は戀の歌に
て亦打山を越て妹かもとに行也早くゆけこそのこ
そは願ふ詞にて萬葉中多く見えたりはやくゆけか
しと云か如し亦打山は同四にあさもよし木道爾入
立眞土山とも有て大和より紀伊國に入たつ堺に有
よし也

澤田川

さにだがは袖つくばかりあさけれどはれ
二段あさけれとくにの宮人やたかはしわたす
三段あはれそこよしやたかはしわたす

契沖云續日本紀云天平十四年八月乙酉宮城以南大
路西頭與甕原宮東之間令造大橋令諸國司隨國
大小輸錢十貫以下一貫以上以充造橋用度又云
同十五年十二月己丑始運平城器杖收置於恭仁宮
中略 辛卯初壞平城大極殿並步廊遷造於恭仁宮四
年於茲其功纔畢矣用度所費不可勝計至是更造
紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉是によるに聖武天皇
は久しく世を治めさせたまひて至盛なりし事唐の
開元天寶の頃とひとしかりけり此時の御事をは良

史すこしそしりたれは今の歌も時の人のよみて諷刺をふくめるにや袖つくはかりとは淺きを云萬葉第七云廣瀬川袖衝計淺乎也（ヒロセカハソテツクハカリアサキテヤ）云々裝束したる長き袖にわつかにつきふるゝほとの水なれは深からぬなりおなしき十一に須蘇衝河（スソツクカハ）とよみ十七には安夫美都加須毛（アフミツカスモ）とよめりつきあたる也高橋とは常の橋を高くかくるをいふか神代記に大己貴命のために天安河に高橋及ひ打橋を造んと天神のみことのりし給ふは高橋はそりはしのやうに聞ゆるにや袖つくはかり淺き瀬なれはかりそめなる橋をわたしてもことたりぬへきをと思へる心と聞ゆるにやと云るは義理におきてはさるへき事なれとも歌には淺けれと高橋わたすといへるか常の事にてさまて諷刺の意有歌とも聞なされぬにや澤田川といふは泉川の名にや宮城以南大路西頭與甕原宮東之間といへる所咸へしさて此橋造は諸國におほせてゆすり立たる造作なれは歌にもしかよみし成へし袖つくはかりとはこと〳〵しく裝束せると云までもなく古へは凡て袖長けれはいふ也又萬葉の廣瀬川の歌を末をかへたるといふはわろし萬葉は序歌の躰なり

まかふへからす　はれあはれそこよしやの類次々色々有神樂の例に左に點して除くへし〇入綾に契沖の說をのへて猶其心を云上略　そも〳〵此ほとの錢一貫と云ものはいとも〳〵重き直ひなりつるに何のかひもなき事に初めてかゝる役を課せられけれは民の心に恨所ありてこは人の渡る高橋にはあらて價の高き高はし也と云意を諷諫してちまたにてうたひし也中略　澤田川と云も泉川の水源恭仁宮の南の流なりけるをわさと設て只山澤と云はかりの淺き小流に然かそくはくの費をかけてと云ん料の誹也云々と云り橋に價高しと云事後の俗意也袖つくはかりと云こそ淺き事をいへる所なれ泉川を澤田川と初ていひなしたりとて何の誹にかならん又澤川と云とは違て澤田川といふ時はもとよりの川の名と聞外なし又用度所費不ㇾ可ㇾ勝計一至ㇾ是更造ニ紫香樂宮一仍停恭仁宮ノ造作なと有文は後より云るにてこそあれ此歌よめる時は専ら造橋のをりなれはかけても思ふへきにあらす惣てほしきまゝに心あらせて古歌を解なす事あるましき事也又謠につきて添る詞を入れて解事是又有ましき事也此歌も

三十一言の歌にてその始詠し時そへる語あるへからすもとの歌にかへして聞へき也

高砂　七段

太加左古乃左伊左古乃太加左己乃　二段　乎乃戸爾太天留之良太末太萬川波岐大萬也名岐　三段　曾禮毛加止左乎萬之毛加止末之毛加止　四段　禮利乎左美乎乃見曾加介爾世乎太萬也名岐　五段　名爾之加毛左名爾之加毛名爾之加毛　六段　古古呂伊萬太以介乎由利波名乃沙由利波名乃　七段　介左左伊太留波川波名爾安波萬之毛乃乎左由利波名乃

高砂のをのへに立る白玉椿玉柳それもかましもかねりなきみをのみぞかけにせん何しかも心もまたいけんゆり花の今朝咲たる初花にあはましものを

高砂は海邊に浪風の吹上て砂の山と成れるをいふさるは必引はへて長くなりたれは尾上あるべしさいさこのさは發語にて歌ふに付て重ね詞成[illegible]しさて後には山の惣名などいふ事も出來播州の名所となれるもとより海邊にて高砂ありし也猶師の百首異見にいへりさて此歌其心解得かたければ入綾に云る説を擧ぐ○今按に紲緒染緒之也古へは衣に紐を著し事「から衣ひもゆふくれなとよむ如くにて一ッ毎に紐の緒をつけたればかく云て即二つの衣のこと也練緒の著る衣染緒の著衣と心得べし○みぞかけにせん御衣架にせむと也衣架に和名抄云爾雅注曰箷音移和名美曾加介懸衣架也とある是也さて此句は妻にせんと云比喩也そはかの姉妹の二人を我がかけ替の衣にたとへたれば其衣桁は即妻の如くなれば也○五段何しかもさゝしは助辭にて何かもと後悔するよし也さゝは上なると同しくて歎息の拍子也○六段こゝろもまたいけん今按心も速けん也古今集俳諧六日の夕たなはたの心をよめるいつしかとまたく心をはきにあけて天の川原をけふやわたらん此またくを音便に云る也上よりのつゝきは何しか心もマア急ぎてものしけんと云が如し○ゆり花のさゆり花の今按に百合花之眞百合花之と云にて其心は緩やかにも寛やかに物すべかりしをと歎く也萬葉集中にも百合を緩やかなる事によめる多く見ゆ八二十九丁にわきもこかやさの垣津の佐由理花由利登云者いならふに似る十八丁十八に左由

理波奈由利毛安波牟等おもへこそ今のまさかもうるはしみすれまた二十九丁に左由理花由利毋安波無等奈具佐無流云々などの如し○七段けさゝいたるはつ花にあはましものを今按に今朝開而有初花爾將過ものをと云にて是は時の到りたる比喩也さてものをと悔めるは未時の到らさる少年のほどよりあまり急て却て手に入かねたるを後悔せるなり先注はあまり無用の談なればすべて略きすてつ此歌の譬へ詞には逃べかたかれと　一篇の惣意は高砂の尾上にたてるしら玉椿玉柳の如き高き家の二人の處女子よ願はくば姉もかな弟もかな二人なから手に入て我が練緒の衣染緒の衣と朝夕の着替をかくる衣架の妻にせんものを何しかまたきより心急きしてあやまちけんさゆり花の緩々待て事をはからは今朝咲たる初花のよき時節に逢ましものをと悔む也以上入綾此説はなはたしといへとも舊來の解の如きは何事とも聞えず歌毎に裏の心有といへるは有ましき事なから此歌などは必戀たとへなるへけれは凡さる心なるべし其中に練緒の著る衣染緒の著衣云々といへるいかゝあらん緒も紐も同しやうなれと衣などには紐とのみいひなれて緒と云は似けなくや又其紐をもて衣をねるもいかゝ也風俗歌頭注者入云テリナタ衣ノ此の事風俗ニ不見に爾利乃平乃古呂毛能曾天乎多禮天云々と云るもさゝ衣の事と聞ゆれは緒といふは經緯の糸の事にて練たる衣といふ事にやと左美乎はさいみをにて不練を云にはあらしか田舍にては織おろしのまゝをさいみ又はさいめなどといへり　萬太以介牟の解もしかるべし四段五段の間はいかにしても事たらはねとしはらく從ふへし

夏引　廿三　二段五切　九十四

一段

名川比岐乃之良伊止名々波加利安利左古呂毛爾於利天毛岐世牟萬之女波名禮與

夏引の白糸七はかりありさ衣に織てもきせん汝妻はなれよ

二段

加太久名爾毛乃以不乎美名加名末之安左岐奴毛和加女乃（奴比）己止久太毛止與久岐與久加太與久己久比也須良爾萬之岐世女加毛

かたくなにものいふ女かな汝麻衣も吾妻の如くたも
さよくきよくかたよくぬひきせめかも
夏引の白糸は麻也夏専ら物すれば夏引といふ枕詞
の夏そ引うなかみかたも夏麻をひき績とかけたる
也夏蠶の糸と云説はわろし二段に麻衣と有にて決
へし夏の贈答に其時のものをいへる也七はかりは
七両をいふとも云り麻はかけて物すれは七權にや
七も定數にはあらて凡多きことも云へしさし櫛は
十はり七つなともいへりき衣のさは只つけ詞と聞
へし汝妻離よとは本妻の有を又の女かはなれよと
すゝむる也我に夏引の糸多くありいましか爲に狹
衣に織り着すべし仍て汝本妻をさりて吾を妻とせ
よと云也　二段は男の答へなりかたくなは片の意
側にて一方にまとひたる心を彼此てらし合せて思
ひかへす智のなきを云さるは痴のなすわさなれば
頑の字なとよませたり物いふはさかしら立て多言
なるやうの意女哉いにしへ皆をみなと云り汝は改
て呼かけて云也麻衣は即夏引の糸して織らんと云
衣也我妻の如くとは只今の本妻を云 袂能着能肩

能縫たてたる袂の調ひも肩の行も着たる樣もよく
也小頸は大頸に對する名と云れは襟成へしやすら
はものゝとゝこほらすよろしきを云汝きせめかも
にても聞ゆれとぬひきせめかもと有まさりぬへし
上に引風俗歌にもねりのその衣の袖をたれてあな
やすらけと衣のうへに云り○入綾繭と麻との兩說
を擧て猶蠶糸に付あまたわつらはしき考を出して
二段麻衣と有所にいたり蠶の衣はなたらかにて縫
さまあしくとも着やすかれと麻衣はこはくそくひ
かたしあしく縫へは着にくきものなるそ汝其麻衣
も着よくやはらかに縫得るやと云るはいと迂說也
さる意あるべけんや

貫河　譜に不注今しはらく與清校正の文による

奴支可波乃世々乃也波良多萬久良也波良加爾奴留與
波名久天於也左久留川未　(入)こすけの
ぬき川のせゝのやはら手枕やはらかにぬる夜はなく
ておやさくる妻
二段　於也左久留川未波末之天留波之もしかし安良
波也波支乃伊知爾久川加比爾加牟

おやさくる妻はましてるはしもしかしあらばやはきの市にくつかひにかん

三段　久川加波々千加伊乃保曾之支乎可戸左之波支天宇波毛さ利支天美也知加與波牟

くつかはゞせんかいのほそしきをかへさしはきて上裳とりきて宮路通ん

此歌の説久綾よろしとみゆれは略して擧く○今按に矢矧といひ宮路とあれは美濃にては合はず三河の内に此名の河在へし行囊抄東遊六曰矢矧橋此川上は信州駒ケ嶽ヨリ流出テ下流ハ鷺塚ノ湊邊ニテ大洋ニイル自橋右ニムツナ村亘村明神ノ森見ユ左ニ天王宮比奈村ノ大明神ノ森見ユ自此橋川上一里今村ノ前ニ歩渡ノ瀨アリ可秘ト云々是ヲ貫川ト云催馬樂ニ云々」とて此歌を引けり實に其處を貫川といふへし拔川の意也○諸説を略す今按に此本に小菅のとあるそよき菅を枕にする事は萬葉十四七にあしがりの麻萬乃古須氣乃須我麻久良あせかまかさんころせ手枕とよめり又二十五丁に宇奈波良乃根夜波良古須氣と云もあり或人はやはらと云水草ありといひ又或人は瀨々は須氣の誤り也なといへれさては一句に詞も足はす又節付のふしに合はす正しき古本に如此あるからは言擧せずして從ふへしさて是まてはやはらかにといひ出ん序也○やはらかにぬる夜はなくて考曰おもふ夫とさけてぬるよはなくて也今按にかくても聞ゆれと猶いは古事記上卷須勢理毘賣命の御歌に阿和由岐能和迦夜流牟泥遠曾陀多岐多々岐麻那賀理麻多麻泥佐志麻伎母々那賀邇伊遠志那勢とある類にて男女くみ寐を云ならん○おやさくるつま父母避夫なり避るとはとりはなたるゝを云萬葉十四十四にかみつけぬさのゝ船はし登利波奈之於也波左久禮騰吾はさかるかへ○二段おやさくるつまはましてるはしも親避る夫は益て愛はしもと云字を省るなりさてうるはしとは古書に愛ノ字を書てめでうつくしむ意に云りこゝも其意にていとほしさのまさるをいへり此句まては女の詞也○しかしあらばやはきのいちにくつかひにかん考曰此三句は男のいふ也然かうるはしとおもひてあらは沓かひておくらんとなりやはきは三河國矢矧里の市也沓買に往んと云伊を略けり今按にこゝは男の沓買んと云いはれ

はさらば忍びて通ひ来よとて也其事は夫の詞にもにて聞ゆしかしの志は助語にて然かあらばさ云ことなれさしもじにちからありて俗にさうだに思はばさ云意になれり矢矧は碧海郡にて昔の驛宿也宗祇方角抄に矢矧里西有八橋より五里鹿川に橋あり渡れは岡崎と云宿あり○三段くつかはゞせんがいのほそしきをかへ今按に沓買者線鞋の細底を買へと云也これより又女の詞也せんがいは和名抄に辨色立成云線鞋上仙戰反字亦作綫下戸佳反又戸皆反揚氏漢語抄云線鞋千開乃久都纏綫兼用男女通著とありこゝに細しきをかへと云は男女通はし用る中に少し底の狭く女の足に相應するを求むる也今も足袋の底をしきと云を見れば即足の踏敷幅をいふ也さて今本に此せんかいをちがいとあるは千開と書たる千を千とよみて寫す者の誤りたる也○さしはきてうはもとりきて抄云うはもは褶也考四古へ下裳と云は褶鼻也うは裳は衣の褶の上へ引かくるを云今按に此考説の如くにて此句は刺著而褶取服而と云也うはもは和名抄に褶裳釋名云上曰褶下曰裳和名毛と見ゆ○みやちかよはん考曰みやちは三河國宮道山とよめる歌更科日記に見ゆ今按に和名抄に參河國寶飯郡宮道美也知玉葉集に東より上りけるとて三河國宮路山を十月つごもりに過るにもみちまださかりに見えければ菅原孝標女あらしこそ吹こざりけれ宮路山まだもみちのちらでのこれる更科日記にありと云も是也東鑑に建久元年十二月十九日頼朝卿上洛頓路入夜令宿宮路之山中給云々十六夜日記に九月二十一日八橋を出てゆくに云々もみちいと多き山にむかひてゆく風につれなき所々くち葉はかりそめかへてけりときは木共も立ましりてあをぢの錦を見るこゝちす人にとへは宮路山といふ云々宗祇方角抄云宮路山東に川あり北向の里なり矢はぎより近し山は高からす衣のさとより二里許俗書に八矧里より宮路まで一里と記せり　一首の意女云は拔川の瀬々の小菅の枕やはらかにそひねする夜はなくて親にとりはなさるゝわが夫よ昔よりいふごとく親の引わくる夫は却ていとほしさのます男云汝が心にさうたに思ひてあらは忍びても通へかしわれ矢矧の市に沓かひにいかん女云沓かい給はゝ線鞋の底のせばきをかひ給へそれ

をはきてうは裳とりきて君かすむ宮路の里の道をかよはんと也（以上入集）此説にて聞ゆへし

東屋　二段

あづまやのまやのあまりのあまそゝぎわれたちぬれぬその戸ひらかせ

二段かすがひも戸さしもあらばこそそのとのとわれさゝめおしひらいてきませわれや人妻

眞淵云和名抄唐令云宮殿皆四阿（和名阿豆萬夜）又下ノ榱ノ下桷（須美木）屋四阿大棟也トアルヲ合ミレハ屋檐ノ四角ヲ阿ト云ナリカヽレハアツマヤニテ阿ハ字音ナレハ古言ニアラス今ノ京此方ノ言ナリまやハ同抄ニ唐令云五品以上三門兩下云々兩下和名（万夜）トイヒテコハ裏表ノミ屋ノタレタル也スヘテ左右手ヲ眞手ト云如ク二ツ備ヘタルヲ眞トイヘハコヽノ古言ナリカヽレハあつまやのまやトツヽクヨシナシ四阿ノ雨ソヽキマヤノ雨ソヽキヲツヽメテイヘルナランといへり此説の中阿は字音なれは古言にあらすと云るはいかゝ阿を音とせは次のツマヤを何とか解ん妻屋と云にやこゝはさに聞えす屋舍の樣も所所にて作りのかはれゝは四方等しくふきおろしたる家作り東國に多くておのつから此名を得たるにも有へし東某と名におへる物多しマヤは間屋の意にて檐の下なるへし兩下は門舍の事にてマヤは只ふきおろしにて下の字にあたる語成へし二ッ備へたるを眞と云の説は受かたしさてあまりも其屋のふきあまりにて即まやの事也歌の意は東屋の其間屋の餘りより落る雨そゝきに吾立ぬれたりとくその戸ひらきて入れ給へといふ也雨そゝきは詹よりそゝき落る雨水也是は女のもとに行たる男のよみし歌なり二段よりは此歌によりて作りそへて歌ひし物なり上なる貫河も初は一首の歌にて二段の於也左久留川末波末之天留波之毛と云よりは作りそへたる事是に同しさて二段は内より女の答へたる意也和名抄鍵功程式云擧鍵（爾介賀須加比今按鍵字本文未詳）扃野王案扃（意經和名度佐之）戸扇鐶鈎所ニ用テ於内ニ以關ク門也かすかひとさしは皆内より戸のあかねやうにさしかたむる具也今はそれなけれは外より押ひらくへしと云也紀に味酒三輪の殿の殿戸にもいてゝゆかなみわの殿戸をとも有り外の戸と云は義かなひかたし吾や人妻は吾人妻にあらす君の妻也何の心おく事かあ

らんと云なり

走井

波之利井乃己加也加利乎左女加介曽禰己曽末由川久良世天伊止比岐名左女

走井の小萱かりをさめそれにこそまゆ作らせて糸引なさめ

走井は所の名と聞ゆ相坂にも伊勢にも有といへり井は用水の名なる事既にいへるか如く走井は急流にて其水の波へきをゐと云也萬葉七に二首よめるは必地名とも聞えす小萱苅納めは萱を苅入れ置也加介はふし次にも例あり夫にこそ繭作らせて糸引成めは蠶するには虫のあがりまへになれば桑も喰すなるを撰み取て萱の幹の中に入置はよきほとにまゆを作る也さて後糸に物するを云○入綾是をも譬喩として事むつかしく解るは非也もし譬喩ならはこと〳〵くたとへ成へし糸繰縫織の事のみさせおきて云々なと皆は實事に云るいよ〳〵わろし只何となき街歌のはかな言と見てよし今も其類多し又小萱を鮎萱也として解れと羅萱といふ事は何にも見えす

飛鳥井

安須加井爾也止利波須戸之也於介加介毛與之美毛比毛左牟之美末久左毛與之

あすか井にやとりはすべし陰もよしみもひもさむしみま草もよし

飛鳥井は大和國なる飛鳥か京二條萬里小路にも有といへりみもひは水を云れと古へ水を盛器を毛比と云けるよりうつりて冷泉の飲へきものをいへり用水をゐと云例なり美はほめ詞美まくさも同し馬草は萬葉に君が來まさんみまくさにせんとよめり歌意は夏旅行の人のいふにて必飛鳥井にやとるへし樹陰の趣もよく井水もひやゝかにてよし馬草も生茂りて飼にたれりと也馬にて行人の宿らんには馬草必用也契沖云蜻蛉日記に云はつせさまにおもむくあすかにみあかしたてまつりければ（中略）庭きよけに井もいとのまゝほしければむへやとりはすへしといふらんと見えたり云々今の京と成ての歌ならは二條あたりよりはやゝ遠く大和の方にこそと聞ゆ○入綾に是らも何事そ下にいひ含めたらん云といへるはよろしからす只聞えたるまゝの歌也

青柳　二段

安乎也岐乎加太以止爾與利天也於介也宇久比須乃於介也

二段宇久比須乃奴不止以不加左波於介也牟女乃波名加左也

あをやきをかたいとによりて鶯のぬふといふかさはむめの花がさ

片糸は合せぬ糸を云笠は糸して縫ひ調るものなればいふ也是は滿開の花間を鶯の出沒して木傳ふさま針もて物縫に趣似たれは思ひよりて時のものなれは青柳の糸して縫せたる也古今に是を取て鶯の笠に縫てふ梅花折てかさゝん老かくるやとゝよみ給ひしは後人さるよせもなく亂りに梅の花笠といふ類にはあらず霞は衣趣なき物なるをぬきをうすみの歌よりして雲なとと同しやうに衣と詠なすと同例也又師說に古今の笠に縫てふは聞えたれと本歌の方はといふと受するていふへからす縫めるなとや有けんと云り持統の御製を本歌に取て後京極のみうたに衣ほすてふ天の香久山とよみ給へるか百首の方もいつかてふになれると同例成へし○入綾に一ッの花の事として梅花の五葩並て中の蕋める狀笠によく似たり云々鶯其大さもよく似あへりなと云て鳥の頭に合せたるなと俗解也わらふへし

伊勢海

伊世乃宇美乃岐與岐名岐左爾之保加比爾名乃利曾也川末牟加比也比呂波牟也太萬也比呂波牟也

伊勢の海の淸きなぎさに汐がひになのりそや摘んかひやひろはん玉やひろはん

古今長歌うらの鹽貝(シホカヒ)ともよめれはこゝも鹽貝と解く人もあれと爾文字も聞えす次に改て貝やひろはんと云るにも重れゝは汐が合の安の字を略きしといふ魚彥の說しかるへし引たる汐のさゝぬ間を云也安の字を略まてもなく汐合(シホアヒ)をしほかひといひならしたるもの也さて是もなのりそや摘ん貝や拾ん迄にて常の歌なるを玉や拾んといひそへてうたへるもの成へし其例多し玉ひろふと云事昔より海邊にいひて明解はなきを師の土左日記創見にくはしく辨して玉は石のみかゝれてまろみたるをいふ事明らけし淸き渚は名所にはあらぬものから伊勢の海は殊に淸きとそ○入綾是をも思ふ女を障りなき

聞にはやく手に入んといふたとへ也上の莫名告は人にはそれと告すして忍ひてものせんよしにそへたる成へしなといへる例の説也取へからず

庭生

爾波爾於不留加良名川名波與岐名名利波禮見也比止乃左久留不久呂乎於乃禮加介太利　返爾波爾於不留

庭に生るから薺はよき菜なり宮人のさくる袋を己かけたり

からなつなは或詞に甘菜辛菜と有如く辛味あるを云か唐瞿麥唐葵の類はもとよりこゝにも有うへに唐より渡來るをよひ分る名也薺は野菜にてさとも聞えぬにや拾遺集に長能女のもとになつなの花に付てつかはしける雪をうすみ垣ねに摘るから薺なつさはまくのほしき君哉是は只薺と聞ゆさて上句は薺を好菜也といひて次は其好わけをいへり宮人の下る袋とは火燧袋などの類が己かけたりとは薺の子の袋に似たるをもていへり

我門爾　三段

和加加止爾和加加止爾宇波毛乃須曾奴禮之太毛乃須曾奴禮安左名川美由不名川見安左な川美

二段安左名川美由不名川美和加名乎之良萬久保之加良波美曾乃不乃美曾乃不乃　三段美曾乃不乃美曾乃不乃安也女乃古保利乃大領乃末名乎須女止以戸於止乎須女止古曾伊波女

我門に上裳のすそぬれ下裳のすそぬれ朝菜つみ夕菜摘我名を知まくほしからはみそのふのあやめの郡の大領の眞むすめといへ弟むすめとこそいはめ

若菜の類は多く水邊に生れは摘に裳の裾のぬるゝを云或説に是を吾名といはん爲の序也といへれと序とは聞えかたし我門といふは大領の娘が詞にて其門に出て朝夕に菜摘する吾をけさうする男有て其名を知らんといはゝ云々と答んの意成へし裳の裾ぬるゝなとは女のさまなり萬葉に赤裳すそに汐みつらんかと云か如し御園生は菖蒲の枕詞と云人も有りさにや郡名にや安也女郡も知かたし大領は郡の司に大領少領あり職員令に其職見えたり眞娘は萬葉に父母に吾は愛子そと有意也弟娘は殊に父母のうつくしむものなれば必末子ならでもしか云り吾は大領の弟娘にて愛娘なりと云意なり

○入綾是をれいの意をつけてほしきまゝに解るは

取へからず其中初の朝なつみ夕なつみ迄は巨名の
序といひて又末にさるをりしも人のとひうけたる
やうにいへるもいかゝ也

我門乎　二段

和加加止乎止散加宇散禰留乎乃己與之己左留良之也
與之古左留良之也　二段與之奈之爾止散加宇散禰留
乎乃己與之己左留良之也與之古左留良之也
わがかどをとさんかうさんねるをの子よしこさるら
しよしなしにとさんかうさんねるをのこよしこさる
らし

散は字音を借て書るにてとざまかくざま也さてこ
はかくいひうつし侍るものゝおそらくは　我門を
とさんかうさんねるをの子よしこさるらしよしな
しにしてと云歌を打返しうたひなせるにもあるへ
しいつれにも意はたかはすさて是も女の歌にて誰
ともしらぬ男のその女の門前を往かへりくあゆ
むさまは必其女に心ありげなるを女下によろこひ
てよしこそ有ならしといへる世俗にわけがありさ
うなと云が如しとさんかうさんは右さま左さま也
よしこさるらしはよしこそ有らし也ぞありけるを
さりけると云に同し　二段のよしなしには何の故
ともなく往かへりするをいふ此よしなしは表に見
えたるわけのなきをいふ次のよしこそ有らしは女
のおしはかり思ふ也萬葉に志太の浦を朝こぐ舟は
よしなしにこぐらめかもよしこさるらめと有に
同し〇入綾の解わろし

大路二段　書入云同音此歌強不識仍其詞不記

おほおぢにそひてのほれるあをやぎがはな也
二段青柳がしなひを見ればいまさかりなりや今さか
りなり也

おほおぢのおは傍書の引の於の本行にまきれたり
といふ説よし是は大路にそひてのほれる青柳がし
なひを見れは今盛なりと云歌成へし柳か花といへ
は柳絮なれと今盛也の句はしなひといふを受たれ
は此花の詞有てはいかゝ也次此殿はむへもとみけ
りと云歌にもさき草の花とあれと共にふしの詞と
して除てきくへき也大路な朱雀大路にて一條より
九條まで柳櫻を植並られしといへりそひて登れる
は九條より一條にのほり行道にそひて柳の並立る
をいへりしなひは靡く也〇入綾是をも例の含めた

る其有として古今集の染殿后の類に解なし光明皇后又は乙牟漏旅子君など引出たる必あるましき事也

大芹

於保世利波久爾乃左太毛乃己世利己曾由天天毛牟萬之古禮也古乃前盤三太乃岐乃由之乃岐乃盤牟之加女乃止字左伊加久乃左以平左伊止左伊兩而加須女宇介太留岐利止保之加名波女盤岐五六加戸之伊知六乃左以也四三左伊也

おほせりは國のさたもの小芹こそゆてゝもむまし是やこのせんばんさんたの木のゆしのきのばんむしがめのごうさいかくのさいひやうさいとさいりやうめんかすめうけたるきりとほしかなはめばん木五六かへしいちろくのさいや四三さいや

此歌は諸注も通りかたく己も解かねたりしを入綾に數々の書とも引て注したるを自らも力入れ年月考へ得たるよし記したれはまつ其説の要を擧てそれに付て己が思ひよりをもいふへし入綾云今按に芹に二種有葉の大きなるを大芹といひ葉の細かなるを小芹と云それをこゝは博奕に比て樗蒲を大羅といひ雙六を小羅といひなせるなり書言故事に公子家囊家囊台銀事乞頭羅子なと有是也壒囊抄にも雙六の事をあまた書るに乞出を古き點にせりと訓たり文明の頃に書る負博奕と云書に博奕の名を記せる中に張乗半乗追羅前羅後羅懸なと見えたり今世の俗言にもせりあふせり賣なと云こと遺れり國のさだものは國禁なり御制禁を御定と云故に定ものとはいへるにこそ博奕を制せられたる事は古き時よりのこと也持統紀三年十二月己酉朔丙辰禁斷雙六續紀文武天皇元年丁酉七月文曰禁博戯遊手之徒其居停主人亦與居同罪云々後紀一延暦五年七月二十八日文曰今日内舍人大野夏貞配流又捕博戯之輩云々延喜彈正式云双六者不論高下一切禁斷此外捕亡令雜律及僧尼令及天平勝寶六年官符等に出たれとさまても得引ず先つ右等にて見へし○こせりこそゆてゝもうまし今按に上よりのかゝりは彼樗蒲なとの博奕は國の大禁なれは思絶たれと猶双六くらゐの小羅は少少饗め折檻ても其味ひ忘れ難しと云心を芹の緣に湯でゝもうましとは云る也芹の湯でらるゝは入

のしをらるゝか如しさてこその助辭は直にうましといふ詞にこめて下へはかゝらぬ也○これやこのせんばんさんたのきの考曰これや此と云より下は全く別也もしくは此間に言あまた落たる歟さて以下は雙六の事にや詳ならす或說もいかゝと覺ゆ書入曰宣長云是はゆてゝもうましの下詞あまた落せし故に二首か一首に混れたる也上は芹のうた下は雙六の歌にて更によしなし上下別々也已上とあり誰も誰も只芹の事とのみ思へるからかゝる疑ひは有なりけり　守部此譜を注せんとてはやくより見合てし本ともいとあまたなりけるを中にも樂家に代々傳へたる古き時の本とも〻猶皆如此ありて節調子拍子音振等迄いと委く嚴重に記しつけたるをいかてか二首混雜といはんおのれ解事を得さる時は凡てかくさまにいひなせる近世の古學者のよからぬくせなり今按にこれや此は是が彼云々歟と其指物を下に云ときに先打出す詞也こゝは下のかなはめのばんぎにかけたり其よしはそこに云へしせんはんさんたの木は栴檀珊瑚木をわささ然か云なせる歟音振によりて轉しうたふにも有へしさて是よりかく雙六盤碁筒等の事をいろ〳〵云るはきひしく禁斷せられける代に其徒ともくやしかりてあかぬあまりにかそへたつる詞とも也其盤目前に在て爲事のならさる時の若き人情おもひやるへし今にしてかゝる歌を見るにはさせる興もなきやうなれと其わさの行けむその代にして此を聞かは諸人の心中を刺か如くなりけらし古へ雙六の行はれつる事は壒嚢抄曰聖武天皇曲水宴時詩を作らさる者には五位以上に雙六局を給ひて賭には錢三千貫を被下といへりとあり此御時既に禁制最中なりけれとかくのことし此後中古となりても蜻蛉日記上ことしは節きこしめすへしとていみしくさわく云々すくろくうたんといへはよかなり物見つくのひにとて女うちぬよろこひてさるへきさまの事ともしつゝ云々枕册子六につれ〳〵なるものうまおりぬ雙六又かたきのさいをこひてとみにもいれねは筒を盤のうへにたてゝ云々此外いと多く見えたりさて和名抄に雙六𣑥名苑云雙六子一名六采今按簙亦是也音博俗云須久呂久壒嚢抄云凡雙六𣑥名苑には阿育王作始と見えたり天竺には波羅と名つけ又は六采

と云仍漢上雙六といふは六をならふる義也天寶中に始漢日本云々なと見えたり又續事始曰魏陳思王曹植制雙六置骰子二唐末有葉子戲不知誰人遂加至六今按唐李賀州郤雙六始因明皇與楊貴妃采戰將兆唯重四可轉敗爲勝上擲而連呼叱之宛轉良久而成重四上天悅命高力士賜四緋以飾四朱也また五雜俎云雙六本是胡戲也胡王有弟一人得罪將殺之其弟於獄中爲此戲云々など見ゆ今此本文にすぐろくと云ことは出されど是よりあまた雙六の事とも云故に引おく也○ゆしの木のばん」抄曰ゆしの木はゆすの木にて櫛にひくもの也」今按に和名抄に四聲字苑云柞音祚和名由之葉作梳也と有今俗はいすの木といへり○むしかめのごう」抄曰さいを入る筒也むしかめは虫の喰たるかたを彫たる也」今按に牟些食の筒成へし楚辭招魂宋玉菎蔽象棊有六簙些分曹並進遒相迫些成梟而牟呼五白些注王逸曰倍勝爲牟五白簙齒也言已棊已梟當成牟勝射張食棊下逃於窟故呼五白以助投著者也云々文選七同之五雜俎云子隨骰行若得雙六則無不勝也故名雙六云々謂之無梁と有

此等の牟些にて勝べく爲食たる筒を云るなり今ら雙六の盤に駒を運ぶに六まで二つづゝ並を牟些と云て勝とすといへり此詞の遺れるにこそ○さいかくのさい」抄曰犀角をさいにすりたる也」今按に然るべしさいは萬葉十六丁十七詠雙六頭歌一二目耳不有五六三四佐倍有雙六乃佐叡 和名抄に漢語抄云頭子雙六の佐以と見ゆされば本さえと云しを後に音便にさいとは唱へならひし也其さえは賽の字音を直路に直して唱へし歟才の字音をさえと云と同例なれば也今此歌はさえをうたふ時の音便にさいとはいへる也和名抄とは同しからず○ひやうさいさい」抄曰是も采の名成べし」今按にひやうさいは平簺也壒囊抄に雙六の名目を出して云相見品態扣子平簺乞出入破採居立入袖隱透筒要筒とある是に平簺の名出つとさいは投簺也上に引つる續事始に置骰子二と有是也又簺を投と云ことは物に多く見ゆ此外雙六の名には猶いろいろあるべし拾遺集雜戀によみ人しらす「すぐろくのいちばにたてる人妻のあはでやみなんものにやはあらぬ」こは一牟に立るひとつといひかけてあはでといふ

迄皆雙六の緣語也此類も又これかれあるべし○りやうめんかすめうけたる」一抄曰兩面をきりめにしたる盤木也かすめかけたるは詞也」一今按にかすめうけたるはほのかに浮紋をつけたるを云てそれを公よりうすく名さしに預りたるよしに相兼たるなるべし今本にかすめかけたると有はほのかにいかけたるよしにもある歟心得かたし只古き節付の本ともにかすめうけたると有を正しとすへし○きりとほし」一抄曰兩面に切たるを云」一今按に兩面に切らざる盤もあらざるにかく云るは雙六の禁制を犯すは上下一同通しての事也と云下心を比したる詞也○かなはめばんぎ」一抄曰盤の目にかねをはめ入たる也」一今按に四方の角々に金具を打はめたるを云それを此は我等が徒もつひに此盤木にかねをはめ入たる如く身に鉗をやつけられなんと比たる也扨初に「これやこのと置たるは即此かなはめ盤木を指るにこそ有ける然るに先注ともには上下別也として釋も悉くすてたれとよく見もてゆけは如此相應して疑ふ處もあらさるものをや鉗の類は和名抄刑罰具に盤枷久比加之鉗加奈岐杻天加之械阿之加之鋜加奈保太之と有此等の刑具をはめたるが如くなれるは罪ある人に此等の刑具をはめたるが如くなれば是を指て決着せる也○五六かへしの一二のさいや四三のさいや」一抄曰一二のさいとある六の字は二を誤て六と書るにや五六の目のうらは一二也しかれはさいの六ツの目をことく\あらはせり」一今按に此詞ともは猶さても好むわさは止にくゝてさいを投じて心をやる形容なり

一篇の惣意は樗蒲なとの大せりの博奕こそ國の大禁なれ雙六なとの小耀はあながち害にもならねばその事の忘れがたくてつら\〴〵其具を打守るに榜檀珊瑚柞の木の蒸牟些喉の筒犀角のさい平賽投賽とかそへゆくに兩面かすめ浮たるうき紋の盤の如くうす\〴〵われらも名ざしにあつかれとこは切通しの盤の如く上下一同の事なれはいかにせんこれや此かなはめ盤の身に鉗をはめられぬともすべしたゝ五六がへしの一二のさいよ四三のさいよと投うちて心をやりをると云なり

○守倍此說は年頃多くの書共を見て考へ得たるよしに云れは先埊文を出して云先輩別段の歌也なと

云て捨たるを雜といふ言を見出て雙六の事に思ひよりたるはめつらしき説と云へしされとあまりにかいさりて譬の心をほしいまゝに解なせるはおそらくは過たるにやあらん此人のくせとして悉く比譬の意をあらせていへるはあたらぬ事也古へも今も街歌童謠の類只何となき歌こそ多けれたま〳〵國史なとに載たるはさる故有によりて記されたり何の事もなき歌は史に用なけれは入へきにあらすさて雙六に雜の詞は有へけれど博奕を大せりといひ雙六を小せりといひ分たる稱何にありともなけれは推あてにやおほつかなし○これやこのと云詞を數言を隔て金はめ盤木にかけたるはいたく調をしらぬ説也直にせんはんさんたの木以下連ねてかかるてには也○金はめはんといふ事も舊説の如くにてしかるへし四角に金具を打たるならははめとは云へからす錯の譬にはよし有ともはめの詞は盤の目に入たる方成へし○くにのさたもの舊説の諸國より芹を貢の事受かたし貢物をさたものと云ふも例もなくや入綾の御定と云か如しと云もいかゝ制禁をしかいひし例もなくや今俗何の御沙汰なといふさたはもと字音なれと噂のやうに用たる事昔はなくや今此句の語路を考るに大芹は大の字は冠れとも味ひの小芹におされる意也さては入綾の譬の意には聞かたくや是は只芹の事をいひて説の如く雙六に此語有にまかせ此や彼云々と雙六の事をいひならへたるのみとしてしかるへくや萬葉の雙六の歌も只何となき歌なり謠歌の類さる例多○和名抄當歸を於保世里また夜末世里また宇萬世里とも云り西國にては三ッ葉をも三ッ葉芹と云り此類大芹か小芹は常の芹成へし○國のさたものもしは少物成をさたと傳へたるにはあらしか國は國のなか人世の遠人なとの國にて世間にての少物と大の字の返にて大芹をいひおとしたる詞成へし守倍は節付の本をかたく執て正本とせれと決てしからす街歌の類は其本よりいひ誤り多く落たる事添る事量りかたしそれを樂に唱付て催馬樂とせるには少も義理にかゝはらず永々といひ延へたるものなれは今歌の意をうかゝふには少もたのむへからす

淺水

安左美川乃波之乃止止呂止止止呂止不利之安女乃不利

爾之和禮乎太禮曾古乃名加比止太天天美毛止乃加太知世宇曾己之止不良比爾久留也沙岐牟太知也
淺水の橋のとゞろ〳〵と降し雨のふりにし我をたれぞ此なか人たてゝみもとのかたち消息しとふらひにくるや

あさむつとも音便に云り和名抄越前國丹生郡朝津阿佐布豆と有さて此歌は降し雨はふりにし我をの序淺水の橋はとゝろ〳〵の序に云り橋板は人の踏ならすにとゝろ〳〵と鳴をもて轟々の詞をおこし雨のいたくとゝろき降を云也降し雨の古にしと詞を重ねて歌の意は思ひかくる人もなくていたつらに年たけたる我を今更媒をもていひよるはいかなる人そと云也誰そこのは俗にたれがあのといふか如し人に捨られしをふるされしなともいへとこゝはしからす中人は此方彼方の中に立入て事を取とゝなふる人也みもとのかたち消息しは御許は先の人をいふかたちはいかなる人にて云々のよし也と云か如しあるかたちを申なとのかたち也其人の容貌の事にはあらす〇入綾板ばしに雨の音のとゝろくよし也と云るはあらすあさむつの橋のとゝろ〳〵と云るの文字さは聞えぬ也又さきんたちやも意あらせて云る例のわろし

刺櫛

左之久之波止宇萬利名々川安利之加止太介久乃様乃安之太爾止利與宇左利止利止利之加波左之久之毛奈之也沙岐牟太知也
さし櫛はとうまりなゝつ有しかとたけくのせうの朝にとりようさりとり取しかば挿櫛もなし

さし櫛は髪にさす櫛也とうまりなゝつは十餘り七ツ也櫛數十七枚也本抄越前國武生國府といふ所ありそれをたけくと云也様は國の司也と有りさて是は越前の女にて武生様と通し居る成へしかの様親しき中らひなるあまりに女の所持したるさし櫛を朝夕にとり物したるかつひに數を盡して用ひたるとやうの事成へしようさりは夜さりにて只夜の事也今俗にもようさりとのへても云り〇入綾に猶くわしく云りされとさると云語を交接の事也といへるはうけかたし既に神樂井奈野の解に今此歌も男女の情をいへるにてつか〳〵次の歌と合せて考るにこはある色ごのみの男の人のむすめを得んとし

ていたづきけるをゐなのふし原にて網を張て鴫を捕に譬へてかたへの女のよみかけたる趣の作意也さればいくらかとりけむとは鴫の數に比してかのねらひたる處女をいくつばかり犯しけんかと云戲れ也とるとは女を犯す事にて今世の俚言にも云は此言の遺れる也此所にも五ッとり六ッとり七ッとり八ッとり云々こゝも鴫に准へて交接の數を戲れ云る也云々さしくしもなしや云々はさする氣もなしと云意云々なと云り○比したる意有と解くに此入綾の例のなれと交接をとると云る證も引ねは古書に有りともなしやさらは今俚言に云は此語の遺れる也とはいかゝ又俚言も普く云事にはあらす又サスルキモナシと解るいかゝサシグシモナシは別の言也キ文字もいかゝ也猶云へき事は上にいひつ

鷹子

太加乃己波末呂爾太宇波良无天爾須惠天安波津乃波良乃美久留須乃和太里乃宇川良都良世牟也沙岐无太知也

○たかの子は麻呂に給はらん手にすゑて粟津の原のみ栗林のわたりのうづらとらせん

鷹の子は麻呂に給はらん也麻呂は自稱今俗私にと云か如し粟津は近江滋賀郡栗栖は山科の小栗栖もあれと神功紀狹々浪栗栖と云る所かわたりはあたりと云に同しとらせんを一本からさんと有もよし○入綾に捕を延へてとらすと云といへるはわろしこれは鷹に令捕にてよく聞ゆ又比したる意も有へからず

逢路

あふみぢのしのゝをふゞきはやひかずこもちまちやせぬらんしのゝをふゝきやさきんたちや

本抄しのゝをふゝきは秋吹風のはけしきを云野分なとの類なりはやひかすははやふかず也云々こもちは子を持たる女也待やとぬらんはまちやねぬらんと云心也と有此中待やとぬらんは決てわろし本行マチヤセヌランと有に從ふはやひかす吹をひく云所もあれは云ましきにあらねど義をなしかたし眞淵ははやを上に付て詞とせりあつまはやの如し是もいかゝあらん魚彥は蕗也とせりしはらく從ふへしをふゝきは小蕗か和名抄園菜類に蕗（和名布木）葉似葵而圓廣其莖煮可噉之と有蕗とする時はしの

は所の名成べし近江野洲郡に篠原之乃波良蒲生郡に篠田篠笥有り是等の所にやさて是は譬諭歌成べし試にいはゝ蕗は其葉春生て夏盛に秋冬かけて葉少くやせおとろへ冬より其葉の本に玉の形したる花を生し春に至りて咲也其さま子持と云によしあり茸笋の類丸形の物に子の稱多しそれを女に譬へて子持待痩ぬらんといふ也はやひかすは蕗を取にて莒蒲引なと根なから物するを云男の歌にて此女に子さへ産せたるをとて引取て吾家にも入れなは女も安かりなんを心にまかせぬ事にて捨置まゝに女は子持となりていつか〳〵と待痩ぬらんの意にや近江志野蕗の名有し所か又は女の居所か成へし○入綾逢路を男女逢路の意に解たれとアフミチと云語いかゝあらん路にて逢はさる事なから路は往來の道にこそあれ逢所にはあらすされは語をなしかたくや

道口

みちのくちたけふのこふにわれはありとおやにはまうしたべこころあひのかせやさきんたちや

上さし楠にたけくと有同所にて越前國丹生郡武生國府成へし前中後有國はミチノクチミチノナカミチノシリと常に云り國に在は京人なるへし意は聞えたり心合の風は吾心と同しき風也心合の友といへは隔なく親しく同心の事也さる風故にあつらへ告る也入綾心あひの說むつかし

更衣

己呂毛加戸世牟也沙岐牟太知和加岐奴波乃波良之乃波良波岐乃波奈須利也沙岐牟太知也

衣がへせん我衣は野原志の原萩の花ずり

更衣は四月の更衣にあらす我と人と衣を取かへきるを云古へは互に衣をかり又取かへもせしさま也野原篠原以下は吾衣の摺のよきをいへり○入綾につれなき人を戀とて我衣は野原しの原いきかよふほどに萩か花摺となれりいざ衣がへせんやと女に云を直にさきんだちへかけたる也と解るはわろしわろくなりたるをぬきかふる調ならんや聞へし野原篠原は萩の咲所を云るにてふせい也

何爲

伊加爾世牟世牟也乎之乃加毛止利伊天天由加波於也波安利久止左伊名女止與川萬左太女川也沙岐牟太知

也
いかにせんをしのかも鳥いでゝゆけばおやはありく
とさいなめど夜妻さためつ
をし鴨といひて鴛も鴨のうち也と云りさる事成へ
し鴨は種類多くてかる鴨小鴨などさま〲有鴛も
同く群浮ひて同種と見ゆされはをしのかも鳥とも
つゝけし成へし出て行はといひおこさん爲也水鳥
類は羽音高く群立ものなれは朝鳥の朝立行むら鳥
の我むれいなはなと云おやはありくとさいなめと
は父母のみたりに夜行して女にくまふそとてさゝ
へいなむ也さいなむは寒いなむ成へし夜妻は定つ
とは妻とすへき女は定め得たりと云也夜行すれは
親の心にはそむけとも出て逢女は約定せりいかに
せんと云意成へし伊夫々由加波と有は前後にかな
はす眞淵朝妻と云詞を引て晝も向ひすゑたるは本
妻也夜妻は其裏にて夜のみひそかに逢妻にて忍妻
也と云るは過たり妻は閨房中の契りにて夜を專ら
にすれは夜妻といふのみ

鷄鳴

とりはなきぬてふかささくらまろがしがものをおし
はしきたりゐてすれながこなすまで
てふは植槻の歌のと同しく歌ふ詞成へし笠櫻丸本
抄の人名と云説によりて考へ見しは笠は氏櫻麻呂は
名にて其人の通る女の歌成へししか物は汝が物に
て紀の歌にしかなけは土佐日記にしか足はなとい
ふしがにてそれがと云か如し物は男根をあらはに
いはて聞せたる詞おしはしの所は説かたけれと發
起させ來り居てと云やうの意歟すれは即交合也是
もあらはにいはて聞せたる詞齊明記にをはやしに
我をひきれてせし人のなと有か如し爲るは何事も
皆する也物は何も皆物なれとかうやうの事は古も
あらはにいはて聞せたる成へし汝か子成すまては
女の腹に子を懷むまて成へし養ひ子をなさぬ子と
云の返也櫻丸數會に及ふ間に鷄の鳴たるとやうの
事にやといひ試みたりしに入綾をみれは〇とりは
なきぬてふけさくらまきれしたひものをにおしす
がりゐてこそとゞこほれなくこなすまでと有本に
よりて鷄は鳴ぬと云今朝闇混れ下紐の緒に押すが
り居てこそとゞこほれなく子なすまてと解て逢し
夜のつとめての別に女のとりつき滯るさまを云也

と云り此方義理も聞ゆれは用へし己かおもひしは
櫻丸人名と云先入の誤成へし

老鼠

爾之天良乃於以彌須美和加爾須美於牟裳都元川介左
川ヲ川介左川牟川法師ニ末字左牟師ニ末字勢法師ニ
末字佐牟師爾末字勢

にし寺の老鼠若ねすみおんもつむつけさつむつほう
しにまうさん師に申せ

御裳袈裟を鼠の喰たる也嚼は歯にて物をほり〳〵
と喰を云田舎にて餅の霰いり豆の類を喰をつむと
いへりもとより鼠の物くふにもいへり法師に申ん
師に申せとはほうしは侍者沙彌の類にて師は貫主
すなはち法師か師也法師も師も同しやうなれと法
師は輕き方にいひならして中間法師下司法師なと
云り今俗ぼうずと云に同しさて是は裳袈裟を鼠の
喰損したるをはしめて見出て人の惡事を訴ふるや
うに我此事を見つけたり法師に告て師にうつたへ
申さすへしと云意也見つけたる人は下部にて直に
貫主にいひかたけれは侍者に告ていはしむる也西
寺は京にも奈良にもな[illegible]いつれにや

隱名

くぼの名をばなにとかいふくほの名をはなにとかい
ふつらたりけふくなうたもろひのなかのひつきめけ
ふくなうたもろ

くほの名云々こは次々皆醜婦を罵りいふ稱を並へ
擧たる成へしまつ久保は女の面の中くほなるを云
俗におたふくと云類成へしつらたりは頰垂にて俗
にほうたれと云けふくは皷と云病有りて和名抄に
肉憤起也と有萬葉に角乃布久禮なといひて醜きさ
まの面也毛皷はそれに毛さへ生たる成へしなうた
もろ以下解かたけれと古へ醜婦をおとしめいふ詞
と聞えたりと註し侍しか是も入綾に〇くほのなを
ばなにとかいふつびたりけふくなうたもろひのな
かのひつくめなと云に依て〇くぼの名をば今按に
女陰の一名にて上古に保登と云る類也新撰字鏡上巻
二十四云屎音朱開也久保とある是也屎は玉門を朱門
と云に同じ和名抄にも出たり次に引へし〇なにと
かいふ一名は久保と云が本名は又何とか云と也〇
つびたりその本名は開とありと云也和名抄に房內
經云玉門女陰名也楊氏漢語抄云屎通鼻と有是也さ

て一本にくぼをくをと記しつびをつらさあるはつつましき事故に唄離の終か聞ゆる所を記せし也次の詞ごもをも此でうに心得てさくへし○けふくなう毛ふくれ嚢にてこは男陰を云也萬葉十六丁十六にうましものいづくあかぬをさかごらか角乃布久禮爾しくひあひにけんと有此角のふくれも男陰を云り嚢は和名抄に針灸經云陰囊俗云布久利と有是也此根とホとを相兼て云こと今俗の男陰を指て金玉とも云か如し○たもろ賜はれと云ことの約れるにやあらん今の言にも賜はれと云ことをたもれと云と同例なれは也○ひのなかの𡱖の中のと云を此は都を省きたる也○ひつきめな此何心得かたし一本ともにはひつきめと有てな字なし嘉禎本の或説にひつくめと有此等を相合せて考るにひつくめなにて𡱖つくめなとの上略なるへし口をつくむなと云箝にて書紀には閉字をつくめとよめりもし此意ならは是も𡱖閉めんと云にてんをなと云は古言の格にて萬葉に例多しさて𡱖の中の𡱖とは俗にいはゆる子孫と云物を指るにて玉門の奥區を云也
一篇の意は開の名を何とかいふ其本名は𡱖たり

然らは毛陰囊賜はれかし𡱖の中の子壺を繼あて子を生さんと云成へしかゝれは陰陽和合の歌になるからに律と呂との間に置るならん以上といへり此考則なるやうなれは用へし其中に毛陰嚢と云る語如何あらん證例もひかす又根嚢相兼て金玉と云なとも心得す考へし𡱖はヒにて陰門奥區を云歟言舌を此奈佐岐と有もヒノ先と聞ゆれは也もしさらはつゝむつぼむつくむなとの心にて陰門の意にやひの中のひの詞聞ゆへし又萬葉十六の歌は角乃布久禮爾士の顔面のうたにとらされは聞えかたし左注の文應レ許二下姓醜士之所一レ說也と有にかなはす是を男陰の事としては高性美士といへとも男陰なき人はなけれは也但し守清は此歌も別解有にや陰陽和合の歌なるからに律と呂との間に置の說はいかゝ催馬樂は呂律と立るの說も有をやすへてかうやうの歌は解かたく意得かたきも尊き事也たとへは器物の如き彫の消失たるあかつきてさだかならさるに古色も有事なり證據あれはとて余りいひあらはしては再ひ謠ひあくる代もなかるへしされと解なす人出きぬれは又其うへをもいはてはあられぬわざ也
歟へし

梁塵後抄四

呂

安名尊　三段五五四

安名太不止於々々々々介不乃太安々々　不止左也安々々伊爾之戸衣々　毛於々々波禮衣々々二段伊爾之戸衣々々毛於於々々加久也安々々安利介元也安々々々介不乃太安々不宇宇々止左安々々三段　安波禮會於々々己與之也安々々介不乃太安々不宇々々止左安々々

あなたふと今日のたふとさいにしへもかくや有けんけふのたふとさ

此歌は一時さる事にあたりてよめる成へし意は明らけし

新年

安太良之岐以々々々止之乃波安々　之女會也安々々々加久之己於々會於々々　波禮衣々々二段加久之己於々々會於々於々川加戸末安々々　川良女也安々々々與呂川與於々　末安々々天爾以々々三段安波禮衣々々　己與之也安々々々與呂川與於々末安々々天爾以々々

あたらしき年のはしめにかくしこそつかへまつらめ萬代までに

續日本紀聖武天皇天平十四年正月十六日天皇御ニ大極殿ニ宴ニ群臣ニ云々又賜ニ宴天下有位人并諸司史生ニ於是六位以下人等鼓レ琴歌曰新年始爾何久志社仕奉良米萬代麻弖丹さ有歌也古今集大歌所におほなほひのうたとて下句千年をかねてたのしきをつめと有左注に日本紀にはつかへまつらめ萬代までにとしたるを同歌として彼此云說あれとよろしからすそは師の正義に辨しおかれたり眞淵云初春をいふのみならす久邇新京にての事なれは兼ていふにも有へしと云るはあたらす新しき年の始にかくしこそとは年の始每にかくこそといふにて今よりは每年かくあらん事をねかふ意なれは久邇の新京をあたらしき代の始と祝ふにはあらすさて上の穴尊もし此同日の詠にはあらぬか二首連ねて時情よくかなへり

梅枝

牟女加衣爾岐井留宇久比須也波留加介天波禮二段　波留加介天名介止毛伊萬太也由岐波不利川々三段　安波禮會己與之也由岐波不利川々

むめか枝に來居る鶯はるかけてなけともいまた雪は降つゝ

古今集春部に出諸注春かけての説非也正義に梅か枝に冬より來居る鶯のけふは春にかゝりてさへなくにいまた雪は降つゝと雪の春色を妨るを厭へる歌也といへり

櫻人　廿四二段各十二　頭註書入云催馬樂ニアリ

左久良比止曾乃不禰知々女之末川太乎止末知川久禮留見天加戸利己牟也曾與也沙須加戸利己牟也曾與也

二段　己止乎己曾安須止毛以波女乎知加太爾川萬左留世名々禮波安春毛左禰己之也曾與也沙須毛左禰己之也曾與也

さくら人其船ちゞめ島つ田を十町作れる見て歸り來んさすかへりこん二段　言をこそ明日とはいはめ彼方に妻さるせなゝれば明日もさねこゝさすゝさね不來

契沖云櫻は所の名にて難波人須磨人と云たくひ成へし和名抄に尾張愛智部に作良鄕ありそこの人をいふか云々と云り其船ちゞめは諸説の如くとゞめ成へし一本には止々女と有島つ田は海中の島に有田也故に船にて行へし十町作れりは多く作成へし

さすかへりこん諸説皆明日也といへれとさすはさあすにてさきの明日明後日也西國にて一昨日明後年なと云サ也又本抄にはしあすさゝあり志明日也明後々日といふ語もありさて一段に終のは見て歸りこん明日歸り來んとなくてはかなはす二段の終のは明日もさねこじさすもさねこしと有へし歌は櫻人よ其舟とゝめよ我島つ田を多く作り打乘行て見てかへりこんといふ意一首也結句を再ひ返して明日かへりこんと云成へし二段は家なる妻か詞にて明日かへりこんといふを受て　言をこそあすとはいはめ古事記に許登袁許曾須宜波良登波米云云日本紀に去等烏許曾陀多彌等異絆梅云々なと有顧にて言にこそ云々といへ實は云々といふ意也彼方に妻さるせな入綫に枕片去とも夜床加多左里ともよめる左里にて彼方に思ヒ妻を避おくを云なり此句一わたりは妻を避て彼方へ行ク夫なればとも聞ゆるやうなれと此二段は女の詞なれは避ち置クかくし妻を妬がりて云にそある換言に妻よはふ人なれはとあれは昔も其意にとれりし也といへり此説しかるへしおやさくる妻なとも親の避る妻なれ

はさけ置妻と云意なれはさも聞ゆへし二段は家なる妻か詞なれは言にこそ明日歸りこんとのたまへ彼方に思妻あれは明日もこじと明日もこし志明日もこじと云也とあすは明後日しあすは明後々日也さねはかろく付云詞にてさねあらすさねなしなといへり

葦垣　卅五　五段各七

書入云岐作支下同
安之加岐引々々々末加安々岐引以末加岐以加安々々々岐以和安々介衣々々々天天不己須宇々止於々於比己於須止於
チ
於々波禮引二段天不己須止於々々々太禮衣々加引安大禮加安己於々々乃己於止於々乎於々々々於也爾末安々宇字々與己之以末宇字々々之之引　三段止々呂介留字々々々己乃於以戸引衣己乃於以戸乃於々々乃止於々女衣々々々於也爾末安々宇字々與己之以介良安々々之毛引四段安女川知乃於々々々加見以々毛引於加見毛於曾於々々宇之以太安々戸衣々々々和禮波末安々宇字々與己之以末宇字々五左須引五段須加乃於禰乃於々々々須加安々名引須加名安岐以々以々己於止於々乎於々々々和禮波岐以々久字々和禮波安岐久字々々加名引

あし垣まかきかき分てこすとおひこすと二段　たれか此事をおやにまうよこし申し三段　とゝろける此家のおとよめおやにまうよこしけらしも四段　天地の神もそうしたゝ我は申よこし申さす五段　菅の根のすかなき事を我はきくかな

てふは田中の森や森や天不の類かおひこすは負越にて歌は芦の籬をかき分て夜々大家の弟婦を負て忍び出る者ありと誰人か此事を父母に申譏しと云也三段は再びいひて同じ事也とゝろける此家の弟婦をとを文字入て聞へし契沖云日本紀萬葉に譏の字をヨコスと訓たれは申譏也清き物を汚すをヨゴスと云譏者はよき人をいひけかす也と云れとヨコは横の意にて正直なる事を僞りて横さまにさまたくる成へし萬葉に人言のよこすを聞て我脊子か云云なとよめり三段とゝろける此家の弟婦とは繁榮の大家は從者も多く人の出入もしけゝれは轟くといへりさる家の弟婦なれは父母の寵愛も殊更也さるを夜々垣越て誘ひ出す男ありと譏したる人有と云也弟婦か譏したるといふ說はとるへからす四段よりは誰か此事を云々といはれたる人の答へたる

意也天神地祇も證し給へ云々は古への淳朴のならはせにて何事にも僞なしと云證に天地の神云々と云しと見えたり我は申讒し申さずと也五段も同人の言葉也菅根は詞をかさぬるのみすかなきは入綾にすけなきなと同言にておもひやりなく心つよく物云こと〻聞ゆと云り物いふ上に限る語にはあらねと意はさる事なるへしこ〻は無實の事をきくもの哉と歎息する也　本抄と〻ろけるは家の落破れたる心也と有よろしからず又家に在男の女をつれて垣を負こしたる事のあるをおやの知りたるは弟婦と告たるらんと云事也と云るもよからす家の男子女をつれて垣越て去りなは何そ弟婦の告をまたん又弟婦の弟な其娘を愛して云稱也大領の弟むすめ離宮の弟嫗の類也讒者をいふに美稱もいか〻眞淵はと〻ろけるは物さわかしき生れなる弟婦也といへりいよ〻わろし入綾も弟婦を讒者としと〻ろけるこの家の一段の終につけてわれ忍々垣を踰てうしろぐらき事するやうに誰か此事を親に讒言せしその横言によりて此家のうちとゞろきさわげりこは家のおとよめが横言せしならんと云に弟嫁聞て天地の神たちも證し給へわれはさる横言はせず思ひよらぬすけなき事をも聞もの哉となりと云り踰垣密夫を免よし也といへるを見れは女の垣を越て外へ出る也又おひこすは追越なりといへり何を追にやふみこすはさても有へしかくては其家に弟婦と今一人女有ての問答也親に告るなとは必弟婦か事を外人の父母に告るならては事情かなはすや

山城　三段

也末之呂乃己末乃和太利乃宇利川久利奈與也良伊之奈也左以之名也宇利川久利宇利川久利波禮二段宇利川久利和禮乎保之止伊不伊加爾世牟奈與也良伊之奈也左以之名也以加爾世牟伊加爾世牟波禮三段伊加爾世牟奈利也之名末之宇利太川末天爾也良伊之名也左以之名也宇利太川末宇利太川末天爾

やましろのこまのわたりのうりつくり我をほしといふいかにせんなりやしなまし瓜たつまでに

狛は地名山城國相樂郡瓜の名所とぞ瓜作りは瓜を作る人にて男女共日毎に瓜畑にて出會をもて此男其女を妻になれといふ也　萬葉に山城の久世のわく子がほしといふ我あふさわに我をほしといふ山

しろの久世と有同意也さて是は女の歌にて我を妻にほしといふいかにせん意に隨んやいかゝあらんと也男女の中らひになるならぬと多くいへりなりもならすもねてかたらはんの如し瓜立まては瓜の花落より漸大く成を瓜立といひけんか立はもの丶成立也さて是はかりそめの會事にて生涯の妻に定るといふやうの事にはあらす一時の事なるへし故に瓜作る間の事也　しなか鳥ゐなのふし原網さすやの歌叉詩の丘中有麻の類思ふへし入綾に處女初得ㇾ薦ニ寢於人一曰ニ破瓜一と云こと猶漢の例をあまた引て童女の初て男する事に解るめつらしき考のやうなれとまさしくそれを瓜たつといひし例は聞えすまたさためなくなるなる瓜のつら見てもたちやより來んこまのすきものと云たちやを瓜をたつといふにもうけたりと云は强たり叉我をほしといふいかにせんを女の詞としそのいかにせんを男の詞にも用ひてなりやしなましを男のうたとせる甚あるましき解也つらねて女の詞ときこゆ

眞金吹　二段

末加禰不久破比乃名加也萬於比爾世留奈與也良伊之奈也左以之名也於比爾世留於比爾世留波禮ニ段　於比爾世留保會太爾加波乃於止乃佐也計左也良伊之奈也左以之名也於止乃左也於止乃左也介左也

まかね吹吉備の中山おひにせるほそ谷川のおとのさやけさ

古今集大歌所の歌に出萬葉にも大君の御笠の山の帶にせる々々みもろの神の帶にせるなど河をいへる同しつゝけあり帶にせるは山の腰をめくるを云まかねは眞は例の美稱にて金也此山なごより堀出るは專鐵成べし吹は其あら金をたゝらにかけて吹て出すを云也

紀伊州　二段

岐乃久爾乃之良々乃波末爾末之良々乃波末爾岐天井留加毛女波禮會乃太末毛天己　二段　加世之毛不伊太禮波名己利之毛太天禮波美名會己岐利天波禮會乃太末美衣春

紀國のしらゝの濱に眞しらゝの濱に來て居るかもめ其玉持來　二段風しも吹たれはなごりしも立れは水底きりて其玉見えず

天治譜に殘二段近代絕不ㇾ歌仍不ㇾ注ニ其詞一也とあ

り然に神樂の本あめなるひはり云々の次に入て本末四段となる今こゝに擧本之良々乃波萬爾萬志良良乃は萬にお利爲留加毛女曾乃多萬毛天古末加世之毛不以多禮ば奈古呂之毛多天ば美那曾古奈利天曾乃多萬曾乃多萬美江ず　本　加世之毛也美奈は奈古呂之毛爲奈は安佐利天毛天己曾乃は止曾乃は止之萬仁　末　曾乃者止曾乃は都志萬に加世志毛也美奈は古乃多萬安佐利毛天加毛　白良濱は入綾に南紀名勝志云牟婁郡白良濱は瀬戸庄湯崎村海邊十町許を云とありと云り眞は例のにて吉野美吉野の美の類かすべて濱は眞砂の白きものなればいひ出し成べし來て居る鷗其玉持來は海底の玉をかつき出て持ちきたれと也蟆玉ともいひすへて貝類貝殼の磨けたる光ある丸石の類皆玉と云と見えたり歌によりて心得へし　二段　は鷗の答る意也風しもなこりしものしもは助言也波凝は風の風止たる跡に波の立殘りて有を云萬葉になごろとも云る同し詞也水底きりてはくもりて見えぬ也霧と云もさへきるの稱にてきらふなと働けても云也さて神樂に入たるノ本四段もおもしろき續き也初紀國のさなくて志良々乃濱に眞志良々の濱にと云出たるいとよしおり居る鷗もよし水底なりては浪に鳴にや見えずと受るにはきりてのかた勝れるか風しも止なば波凝しも居なばよく聞えたり浪は立もの故其靜るを居ると云あさるは水底の玉を取を云意を得て求食なども書りは止島は今海邊湊などに石垣を築出たるを波戸と云り此古き名成べし島は必海中ならでも凡にいふべしさらば鷗の玉かづき出て持來べき所也終りの安佐利毛天加毛はあさりもて行ん也上のくつかひにかんに同し牟毛は同音に用ひたり

葛城　三段

加川良紀乃天良乃末戸名留也止與良乃天良乃爾之名留也　二段　衣乃波井爾之良太末之川久也末之良太末之川久於々之屯止於々之屯止　三段　之加之天波久爾曾左加衣牟也和伊戸良曾止美世牟於々之屯止於々之屯と於々之屯止於々之屯止

かづらきの寺の前なるや豐浦の寺の西なる也榎葉井にしら玉しづくや眞白玉しづくしかしては國ぞ榮んや吾家等ぞとみせむ

こは續日本紀三十一光仁紀の童謠也曰天皇諱白壁

王云々又嘗龍潜之時童謠曰葛城乃寺乃前在也豐浦寺乃西在也於志止度刀志止度櫻井爾白壁之豆久也好壁之豆久也於志止度刀志止度然爲波國曾昌由流吾家曾昌由流於志止度刀志止度于時井上內親王爲妃識者以爲井上則內親王之名白壁爲天皇之諱蓋天皇登極之徵也この歌を傳へてうたひならしたるもの也葛城寺豐浦寺の事は次にいふべし先續紀の童謠を解く古今集に水のおもにしつく花の色さやかにも云々と有は水の上に咲靡ける花のあり〳〵とうつるをさやかの序にいへり今此歌のしづくも其類にて白壁のきら〳〵しきが井の水底に見ゆるをいふもとしづくの詞は下着にて水底に在るをいへと影のうつりて水中に在か如きをいへり壁は和名抄壁和名加閇室之屛蔽也と有又墻壁具に石灰以之波比白土なと有て壁を塗る事今の白壁に異ならずされば櫻井の彼方此方鄉里富榮えて家作りのきら〳〵しき白壁の水底にうつる見て歌へるなり好壁よきかべと訓にやもしは其白塗の琢磨至れるものを眞壁ともいひけんか今眞壁といふ名の有にて知りぬさらは好壁の字マカべとかマシラカべとか訓へし後にうたひかへたるも白玉ましら玉といへれば也好の字は壁を美る詞しるし風俗歌に我門にしだる小柳しだるかいで葉國ぞ富せん郡ぞ昌ん鄉ぞ富せん吾家ぞ富せん云々といへるも柳雞冠木の若葉のしたりたるはいかにも富榮えたるおもむき有物なるをいひて云々ぞ富んといへり今は家作り墻壁の光澤をいへればいよ〳〵よく聞えたりさて其白壁の詞おのつから皇子の諱に合ひ櫻井の井の詞も內親王の名によしあれは識者配妃登極の徵とせし成べし童謠は其意ありて作れるものにあらずさて後樂府に歌へるには白壁はいかにそや聞ゆればうるはしく白玉眞白玉とかへられたる成べし櫻井榎葉井は何れにても有べし換たる意をたすけいはは其井の清水を汲あぐるやかてに白玉なしてしたゝる雫の水底に沈むけしきを云へしされとしかしては國家富昌るとつゝけたるにはよくかなへりともなくや打つけに家作り墻壁のきら〳〵しくうつるにはしかし○入綾に豐浦寺の事行囊抄を考るに云元興寺は飛鳥村西南久米寺へ行方に在豐等村ノ內也昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ノ額ヲ掛タリ扁曰東門ニハ飛鳥寺西門ニハ葛城寺

一本ニハ法興寺ト記レリ 南門ニハ元興寺北門ニハ法滿寺ト云境内方二十二町余最坊舎數十宇有シト也今ハ僅ニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈釋迦佛ノ銅像一躰昔ノ餘波に殘レリ云々豐浦寺云是也」又大和巡路記に此寺の記錄とて引て右の趣に云り然れは此寺東門は飛鳥に向ひたる故に飛鳥寺といひ西門は葛城に向ひたる故に葛城寺といひし成へし推古御時葛城邊にいまた寺あらさりけれは彼四ッ五ッの寺號の中にも豐浦は本の大宮の號飛鳥葛城は地名なりける故にかの四天王寺を難波寺といひしやうに專ら此二ッを以て呼しならんかし然るときは別に葛城寺と云か有しにはあらす今此四句は彼榎葉井の在方角を此寺の前通りにして少し西の方にあるよしを詞をかへて云るにて二ヶ寺のあはひと云にはあらす云々と猶くわしくいへり此説よし舊説色々解わつらひて或は此によりてよめる近き歌を迄誤のやうにいへれと此説にてよく聞えたり法隆寺の記錄なとにても聖德太子建立の寺は皆しれたる中に豐浦寺もその如くあるよし也先ッ豐浦寺と云は高市郡推古天皇の皇居の跡を寺となして惣號也四門

に額云々と打たるは各其寺其内に在し也飛鳥寺元興寺等皆奈良へ引移されたるにても知らる今も大乘院の宮を飛鳥御殿と稱す其號とそ承るされは此井は豐浦寺の前葛城寺の前にて共に西なるをいへる也入綾此寺の前通りにして少西といへるは猶其意を得さる也五六百年前迄は凡そ人も心得たる事と見えて體源抄卷十一に資賢云昔人々葛城ヲタヅネンタメニ行向ケリ路邊ニ板葺ノ古寺アリ下居テ晝の破子觸一ノ翁アリ寺ノ名ヲ問答云葛城寺ナリ人々是ヲ感シテ葛城ヲ歌フ八十返に及テコレヨリ還リ畢或人云有賢其中ニアリト云々又寺ノ後ニ井アリ翁江ノ波井ト號スト云々孫將舊跡を尋テ行向フ其時寺ハ如形現存井ハツブレタリケリ　無名抄ゐのは井の事或人云宮內卿有賢朝臣時の殿上人七八人あひともなひて大和國かつらきのかたへあそひにゆかれたる事ありその時ある所にあれたるだうのおほきにやう〳〵しきか見えけれはあやしくてその名をあふ人ことにとひけれと知れる人もなかりけりかゝるあひたにことの外に鬢白き翁ひとりきま見えけりこれはしもやうあらむとてたつねけ

れはこれをはとよらの寺とぞ申といふ人々いみしき事也と返々感してさるにてはもし此へんにゐのは井といふ井やあるとゝふみなあせて水も侍らねとあとは今に侍りとて堂よりにしいくほとならぬほとにゆきてをしへけれは人々興に入てやかてそこにむれゐてかつらきといふ歌數十返うたひてこの翁にきぬともぬきてかつけたりけれはおほえぬことにあひてよろこひかしこまりてさりにけるとそ云々是は同說と聞えたれと無名抄は少の傳への違もありけ也體源抄に資賢云昔人々と云るも無名抄に宮內卿有賢朝臣時の殿上人七八人といへるも皆樂うたひ物にたけたる人々故　葛城の催馬樂にうたひ傳へたる葛城寺のあと榎葉井をも尋見んとて大和の方へ行れたる也もとより高市郡豐浦をさして行たる也葛城をタツネンタメと云葛城山なとの事ならんやさて行てはみたれとも廢寺の跡なれは知れかたきにかの老翁にあひてしれたる也兩說を合せてみれは明らけしされは葛城豐浦吐懷編なとにいへる說はさらにあたらぬ事なり

竹河　二段

太介加波乃波之乃川女名留也波之乃川女名留也波名曾乃爾波禮（二段）波名曾乃爾和禮乎波波名天也和禮乎波波奈天也女左之太久戶天

たけ河の橋のつめなる花ぞのに我をばはなてめざしたぐへて

竹河本抄を始いろ〳〵にいへと契沖齋宮によれる歌を引て伊勢國多氣郡に有とせり入綾に云今按に先注皆たがへり竹川橋は伊勢國多氣郡齋宮にて今に其處に笛川も竹川も花園村と云もありて各其名のこりたりそのよし行囊抄にいと委く記したる此に其要のみを採出ていさゝか云へし齋宮村三村並テ有シガ今ハ一村トナレリ編笠ヲ多ク造ル所也齋宮ノ舊跡ハ通町ノ左ニ在リ黑木ノ花表ノ形モアリ宮ハナシ里俗は野宮ト云フサレド其レハ誤也野宮トハ群行已前ノ洛北ノ宮ノ稱也云々笛川橋今ハ三間許ノ小橋也俊頼集に伊勢の齋宮に侍りける頃よめる笛川のいしなとりつゝ見えつるはねによろつ代を吹ながせとや云々多氣川は齋宮村ノ並ノ西ノ方也竹河ノ橋トテ橋アリ笛川ノ同流也源順集に貞元元年のはしめ齋宮の侍從の厨におはする間には八月二十

五日庚申夜人々参りあひてあそふにいはひの心を「神代より色もかはらぬ竹川のよしを君にそかそへわたらん」伊勢名所拾遺云多計河橋齋宮村のやがて西の方なる村を竹川と云今に花園なと云田畠の字あり」とて歌をあまた引たり猶此花その丶事は次に云へし○はしのつめなるや」今按に橋の頭にて端の心ならん天智紀九年五月の童謡に于知波志能都梅能阿素弭爾伊提麻栖古萬葉九に大橋之頭爾家有者なとよみて今も橋つめと云を有○はな園に」今按に行嚢抄の上のつゝきに多川橋云々花園村此村に今も花園と云田畠の名アリ是昔ノ齋宮ノ花園ナルベシ竹川ニ花モミヂヲヨミ合セタルモ此故歟」伊勢舊跡志云竹川の小橋の前に花園の名有是は昔齋内親王の御心を慰め奉らんとて四時の花紅葉をおひたゝしくあつめ殖られたる跡也今の花園村邊迄いと廣き間の事と見えたり其川は大和伊勢の境なる高見嶺より落て凡二十里下流は一里計りにして大淀の浦黒部村の海に入」これらにて見へし○二段 われをはなてめざしたくへて」今按に其花麗なる花園の内へ童女をそへて我をは放(ハナテ)かしと云也そは齋宮は男禁斷にて其一傳の中に若き女ともの いと多かりつるを世の若きをのこどもの羨しみてうたひし也たくへは具せしむるをいふ云云と云り此歌は此説にていとよく聞えたり

河口 二段 天治譜近代强不歌仍不注其詞也

かはぐちのせきのあらがき也せきのあらかき也まもれとまもれ 二段まもれともいでゝわれねぬ也いでゝわれねぬ也せきのあらがき

本抄河口關は伊勢國といへり入綾に此關の事色々説を擧たり考見るへし六帖に川口の關のあら垣守れとも出てわかねぬ忍ひ〳〵に上二句は守れとも の序也父母の守れとも忍ひ出て夫と寐ぬると云也今は結句關のあら垣を再ひいひてとちめたるこれも古歌のさま也あら垣は關門の左右に木をならへ立て人の通ふましく搆へたるを云成へし

此殿 二段

己乃止乃波牟戸毛无戸毛止美介利左岐久左乃安波禮左岐久左乃波禮 二段左岐久左乃美川波與川波乃名加爾止乃川久利世利也止乃川久利世利也

このとのはむべも富けりさき草のみつばよつばにと

の作りせり
此歌は次の西のくら垣と同しく富昌たるをほむる也むべは心にさこそと得る意なれは兼て聞及ひしにたかはずさこそ富さかえけりといふやうの意也三枝草は三と云ん枕のみ三端四端は軒の端の幾重も立かさなれるを云如魚鱗なと云か如し正義に榮花は何はあれと家作りのいかめしくきら／＼しきにいちしるき物なれはかくいへりと有乃名加と有は衍字なるべし三十一言の歌を安波禮はれなと入てかへし歌へる多けれど凡同さまなるに此所此文字余りなし三枝の說人々いろ／＼の說あれども三俣と云もの成へしとおもはるゝ也されと古書にいへる趣も思ひむかへて引つくれはいかやうにも聞なさるゝもの也いつ迄いくらの說を出したりとて正にあたれりやいなや又定る期なしすへて枕詞は此類多し大かたにして止むへし
天治譜此殿西　此殿奥　鷹山　已上三首强不ㇾ歌仍不ㇾ注其詞也

此殿西　二段

このとのゝにしの西のくらがき春日すら安はれはるひすらはれ　二段はるひすらゆけとゆけどもつきずにしのくらがき也にしのくらがき

是も榮花をほむる也上のは直に殿作りをいひ是は其殿に屬したる倉の廣大なるかあまた連れるを云り西の倉としも云るは其殿西の方に倉有し成へし倉庫は五穀寶物等を納置ものにて是又富榮を見るに足へし其倉立つゝける永き春日のくるゝ迄經行とも盡すと云也すらはさながらにて春日一ぱいと云か如し別に倉垣と云垣のあるにはあらす

此殿　二段

このとのゝおくのさかやのうはたまりあはれうはたまりはれ　二段うはたまりわれをわれをこふらしこさかこえなるやこさかこえなる

此殿の奥の酒屋とは古へは酒を家々にて釀する事にて大家は別に造酒場をかまへたる成へし其酒屋奥の方に有を云也貢酒もなきにあらねと造り酒を賞したる趣顯宗紀室壽の詞なとにても知らるうはたまりは古本宇波奈里と有或人奈の字を太末二字に寫し誤れりと云るさも有へしうはなりは古へ前妻後妻をこなみうはなりと云て神武天皇の御歌に

も有和名抄に後妻宇波奈利と有後夫を宇波乎と云に對へる名なれとも必後妻ならても大方年長たる女をいふと見えたり入綾には姥専女を轉じて云ときこゆと云り是もしかるへし神樂酒殿は今朝はなはきそ云々又みかこしに我手なとりそ云々なといへるをもて思ふに酒屋の中は多く女の仕ふる事と見えたり我を戀らしこさかこえなる一本共にこさかこゆなるまたこさかこえすなる此句は何れにしても解かたし濃酒歟こえは假名誤りて乞歟さらは我を戀らし酒乞ぬかと云の意にやまたは醴を作るにほごよりも濃くなるは人を思ふ印など云古への諺も有けんかこゆなるコクナルと云へきをユと云るにや皆おしあて也入綾小賢肥なるやと男の嘲るにやと云肥たるは賢きと云義常にあらはこそさもいはめ何の義理もなき事也そのうへ我を戀らしとあらんには必其戀るによりて云々の趣を云へし老女か身體の事のつゝくへき歌にあらすと思ふへし

鷹山　二段

たか山にたかをはなちあげておくをなみあはれおくをなみはれ　二段おくをなみわかすわがするときにあへるせなかもやあへるせなかも

高山に鷹を放ち上ては狩人のあやまちて鷹を放失ひし也おくは假名乎久にて萬葉十七放逸鷹の長歌にかけりいにきと歸りきてしはふれ告れ呼久余思乃曾許爾奈家禮婆云々と云り拾遺集にはし鷹のをき餌にせんとかまへたるおしあゆるすな鼠とるへしなとも有をきはわさをきなとのをきにて我方に招く意也鷹を放ち上て招く方のなきといひてそれを序とし思ふ人を招きよすへきすべのなくて侘たるをりに思の外逢りとよろこふ意成へし○入綾に招よしなくてとかくもてなやめるをりしもあやにくにあへるを云也然れは此歌は女のうたにて親なとの留守に女かあやまちて高き山に鷹を放せあげてもてあつかふをりしも思ふ男に逢たるを時わろしとて悔むなりと云るはたかふへし鷹を放ちあげてなと女の所作ならんや親の留守きなとあまりの事也一首の調も序なる事を聞しらす又曲名に鷹山とせるは諸物になりての誤也高山と書へき例なり

美作　二段

美萬左加也久女乃久女乃左良也末左良左良爾奈與也

左良左良爾奈與也　二段左良左良爾和加名和加名波太衣天之與呂川與末天爾也與呂川與末天爾也

みまさかや久米のさら山さら／＼に我名はたてじ萬代までに

古今集大歌所に清和の御心の美作の國の歌とあれど其時作られたるにはあらで古き戀の歌の有しを序におもしろく地名をいへると萬代と云詞の有によりて貞觀の大嘗主基方の風俗に用られたる成へし一本に和加名波大衣之と有は其時かへられたるか又後にうたひかへたるにや上はさら／＼の序にて我名はいつまでもたてじと云のみまきるゝかたもなき戀のうた也

藤生野　二段

不知不乃々加太知加太知加波良爾之女波也之奈與也之女波也之奈與也　二段之女波也之以川岐以波比之之留久止岐爾安戸留加毛也止岐爾安戸留加毛也

ふちふ野のかたちが原にしめはやしいはひしるく時にあへるかも

藤生野は山城國相樂郡藤生村と云處もありとは入綾に千五百番歌合を引又夫木の歌をも引れと此歌によりて作れる歌なればたのむへからすしめはやしははへさせ成へししめは限領る意がもとにて繩など引て領るを云萬葉などにも此をいろ／＼にうつし用ひたり神にいへるは不淨を隔る注連戀にいへは女を我物に定置事の類なりいはひは是も齋がもとにてうつしては祝の意にも云りさてこゝは加太知加波良乎と有本しかるへきか次の鈴鹿川も同しやうの歌にて考るにみの山にしゝに生たる玉かしは豊明にあふかたのしさと云歌も玉柏が大嘗に取用られたるをよろこふ意也鈴鹿川此歌も共に風俗歌の題に取られたるを時にあへりと云成へしさるはかねてより注連はへいはひしもしるく時にあへりと云鈴鹿川も昔より人のめてし所なるがめつるもしるく此度時にあへりと云成へし以川岐は以は此を誤れる物也外此類はわがなわがなはたてじわがすわがするときにわれをわれを戀らしなさいひさして重て次にいふ例也こゝもいはひいはひし也又此下に毛文字有へし心なくてはとゝのほらす鈴鹿川にも有り加太知加波良爾と有ては其注連は

へ祝ふ所のもの何物とも聞えすそれ故に或は神にやといひ又いつきといふ詞をたすけて女の事なとにいひなすあたらぬ事なるへし入綾に藤原氏を藤生野に比し其姫君のかほかたちのすくれ給へるをかたちか原といひなししめはやしは豫てより奉らんと申しはやしおきつるを云いつきいはひしは彼にしき綾の中につゝめるいはひ子とよみたるやうにいつきかしづきいはひ來しよし也しるく時にあへるかもは其かひありて入内の時運にあへる哉と云ほとの心也と云りあまりにもて付たる説也用へからすさる事を作りて我か見し如く古歌を解はいくらにもいはるへし知れかたき所はしられさるもたふとからずや

妹與我

伊毛止安禮止伊留左乃也末乃也末安良良岐天名止利不禮曽也加遠萬左留加禰也止久末左留加禰也

妹と我。いるさの山の山。あらゝき手なとりふれそかをまさるかにとくまさるかに

妹と我とはいると云枕詞なるへしさるは夫婦は立居出入共に諸共にたぐふ事常なれはいかにも冠らせつへしいるさの山は名所と聞ゆ諸説但馬國と云り入綾に（上略）彼國にそれとおほしき山の名見えす山城大和の邊にも此名なし如此在所の定かならぬに其歌の甚多きはいかなる事ならん又此名所に限りて然かあまたなる歌ともの中に傍の地名あはせよみたる一首も見えす云々本名所にあらて佐はゆくさくさかへるさなといふ時の意の佐にていつこの山にまれ入時の山の心によみたるか弘りたるにもやあらんと云り此説も一ッの考なれは捨かたけれと猶名所と聞ゆる方にや後に多くよみ出たるは皆此催馬樂かもとにて月にも鳥にもいひかけの便よけれは人毎にいへる物也但馬ならてもいつこにかさる山名こそあるらめ山あらゝき和名抄辛夷（和名夜末阿良々木一云古不之波之加美）蘭（和名阿良々木）澤蘭（和名佐波阿良々木）何れ蘭の字なとよみたれは香氣有もの成へし手なとり不れ曾とりは打撥なと云類輕くそへたる詞也手觸る事なかれと云也終り二句解かたし毒の説はあるへからす毒まさると云詞も義聞えす和名抄にも辛夷は其子可レ啖レ之とあれは毒草にあらす入綾にはかをかをすかにかをまさすかにと有本をとりて香を令レ薫

鵞香を令ㇾ增鵞の意といへり 先さてありなんやされと妹と我と入る山の山蘭に手をふる事勿のわれらか袖に香をかをらすその爲にと云るはかの入佐をも名所にあらすとして云る說也歌の詞もさは聞とりかたし初は枕詞入佐は名所として聞かた古の意にやかには古今集かへりくるかになとにいへるか如し

淺緑

安々美止利己以波奈太曾女加介太利止也美留萬天儞太萬比加留之太比加留新京朱左加乃之°太利也奈岐萬大波太太爲止奈留前栽安岐波岐名天之古加良保比之太利也奈岐

あさみとり濃花田染かけたりと見るまでに玉光るした光る新京朱雀の垂柳又は田居所なる前栽秋萩瞿麥唐葵したり柳

淺緑はうすみとり濃花田は深緑也染かけたりは染出したり染上たりなど云んが如しさて是は淺緑染かけたりと見るまでに云々と云歌を歌ふに任せて初句を濃花田と再び詞をかへていへる外にも例多しさて新京の事にうつれるさま也玉光るは玉の如く光る也した光はしたはしに照りした泣俗にしたもの云々なと云類にてつよく光るかたち也磨き建たる新京のきら〳〵しきをほむる也朱雀は平安城の朱雀大路にて並樹の柳あるを云是は遷都ほとなき時の作なれば新京と云り又は田井所なる前栽は萬葉に伏見の田居などいへる田居にて田舍の事とは所の詞なるべし上は先新京の柳のけしきより花麗の至りをほめ又はといふより洛外の私の家居の趣をほめたる也秋萩瞿麥唐葵は前栽有へき花をいひならへたり結句垂柳は上の柳を再ひ歌ひ返したる體成へし〇入綾にまだいたゐとなると有本によりて高砂に心をまだきけむをまだいけむと云るも又おなし然れはこれはすこし譏りたるにやあらんかゝる事もちまたの謳し歌のならひにはあれと恐れ多かれば今はたゝ語釋のみあら〳〵說て止なんかしと云るは玉光る新京も早く荒て田舍と成べしと云心に解たる也まだいの詞はそれにもせよ初より終まで只新京又私の家所迄をほめたる調の外聞えぬうた也早田村と成るの詞ならは旣に成とげたる上により外には聞えぬ也又其心ならは秋萩なてし

こ云々よりも次に有へし聞人きくへし　天治本白馬

妹頭門　已上二首強不歌仍不注其詞也

青馬 白

あをのまはなればとりつなげさをのまはなればとり
つなげしのいさやのしのいさやのさをこがひこなる
さいろんこまたいたむこのたいきのわらはのさをこ
がひこなるさいろんこ

入綾云青之馬放者取繫也さをのまの眞青馬也中略し
のいさやの萬葉十三に梓弓弓腹振起志之能鰭羽矣
二手挾云々とある是也矢に翮羽を凌羽と云は風を
凌きて直に飛故也太刀に云凌ぎも心は同しさやは
眞箭也さをこがひこなる箭雄子之孫なると云歟箭
を狹さ云は萬葉十三に投左乃遠離居而廿に阿良之
乎乃伊乎佐太渡佐美牟可比多知云々綏靖紀に一發
二發とある此發も箭の事也さて又萬葉九に本國之
昔弓雄之響矢用鹿取靡坂上爾曾安留とよみたる是
と合せて思ふに弓に強き人を弓雄といへは矢をよ
く的し人を箭雄子と云しにやさいろこ眞郞子を音
便に云歟いろはいろせいろど郞女なとのいろ也ま
たいたんこのたいきのわらはの此句は若に眞大膽

子の大氣の童子と云歟と云るさるとにや但したい
きは多力の音便にて剛き童と云成へしといへり此
說しかるへし神樂のふるや男の太刀もかなの類に
て人の名なとは其世にはよく知れたる事も今は何
事共聞えぬ事多かるへし此說に付て猶いはは入綾
に引るしのぎ羽を二手挾はなちけん人し悔しも云
云と云る長歌ゐ初木國の室の江のべにとあれはか
の昔弓雄と云る同人の事にて何そ其箭を射たる事
に付て命を失ひしと云やうの事を妻なといためる
歌成へし諸注梓弓より二手挾迄は離けんの詞の序
とせれと是ははなちけん人し悔しもとつゝく調に
外は聞とられぬにやさらはしのいさやのさをこは
紀國にありし勇士にて其孫なるへし

妹之門

いもがかどやせなが門ゆきすぎかねて也わがゆかば
ひぢがさのひぢかさの雨もやふらなむしでたをさあ
まやどりかさやどりやとりてまからむしてたをさ

此歌は萬葉十一に妹門去過不勝都久方乃雨毛零奴
可其乎因將爲と有を六帖に妹か門行過かねつひち
かさの雨もふらなんあまかくれせんとて入たり此

誤たる方を取て詞を作りそへてうたへるもの也妹か門夫か門と二ッにいひては義をなさす歌ふに任せて詞を少かへたるのみ淺緑濃花田に同しして たをさは歌ふ節の詞成へし古今集俳諧にいくはくの田を作れはか郭公してのたをさを朝な〳〵よふと有も郭公はよふものにいへれはしてたをさとは別也是には乃文字をさへ加へて云るいかなる事にや入綾に萬葉の歌の袖を笠に着といふを引て袖を笠にきるには肱を張わさなれはひち笠と云も同し事也なといひて近來古學者のかたくなにいふ說を破したれと是はまさしく比左かたを比知かたと誤りたるいちしるけれはたとひいかほと古き時よりの誤にても誤は誤り也したかふへからす

席田　二段

牟之呂太乃也牟之呂太乃伊川奴岐加波爾也須元川留乃伊川奴岐加波爾也須牟川留乃二段 須牟川留乃也須牟川留乃知止世乎加禰天曾安曾比安戶留千止世乎加禰天曾安曾比安戶留

むしろ田のいつぬき河にすむつるの千年をかねてそあそひあへる

千年をかねては千とせをかけてと云んも同し眞淵云尾張國人道丸云いつぬき川は美濃に有此川大野郡より出て席田郡を通り本巣郡の須の俣川に入る今俗糸貫川といふ

大宮

おほみやのにしのこんちにあやめこんたりさやめこんたりたりやりたんな

大宮の西の小路に菖蒲籠りたりと云か菖蒲の多く茂りなる様にやてみちをコンチこもりたりをコンタリなと云皆音便也我のみやこもたりといへは高砂の尾上に立る松もこもたりさやめはさあやめ也青の馬佐乎乃萬に同し入綾にはこみたりにて五日の料の菖蒲を多く持よせたるが西の小路にしげくこみあひたるをいへるならんとあり是らは實は菖蒲にや何事にや聞知かたし其世にてはよく聞えたる事也菖蒲ならは五月五日の料に市立なとしたるさま成へし

總角

安介萬岐也止宇止宇比呂波加利也止宇止宇左加利天禰太禮止毛萬呂比安比介利止宇止宇加與利安比介利

止宇止宇

あけまきひろばかりさかりてねたれどもまろひあひけりかよりあひけり

總角旣にいへりさる童さ尋ばかり離りて寢たれども轉び逢にけり寄合ひにけりと云也さかりは遠さかりなどのさかり也かよりのかは發語萬葉にもかよりあひにけりかよりあはんかもなどよめりさてより合て是は童と少し間をおきて同しく寢たるかより合てあひ事せしよし也轉ひ合なとわらはのさまおもしろし初句安介萬岐止と有へき所也歌ふによりて省れたるにや安比彌介利本抄は彌文字ありある方歌調まさりぬへし入綾に止宇止宇を意あらせて解たるはわろくや今歌の意を解時はもとの歌にして解へきなり

本滋　二段

毛止之介岐毛止之介岐比乃名加也萬牟加之與利牟加之加良二段牟加之加良牟加之與利名乃不利己奴波伊萬乃與乃太女介不乃比乃太女

もと茂き吉備の中山昔より名のふりこぬは今の代のためけふの日のため

もと茂きは山は麓の茂き也古今序にも筑波山の麓よりもしげくと云り吉備の中山既に出つ昔より昔からは同し事を少かへてうたへるのみ名のふりこぬはとは美名の珍らしからぬものにならず盛にもてなさるゝをいふ今の代の爲今日の日の爲は次の蓑山と同しく大嘗會に作りてうたはれたるにやさらは當代の爲大嘗行るゝ今日の爲と云意成へし上の細谷川の歌の名高きによりて其名のふり來ぬといふ意も有べし結句は再びうたひかへたる例の奏にや又只少し詞をかへてかへしたるにや　入綾はもとは木の事として孝德紀もとごとに花は咲ども又萬葉おほしもとこのもと山など云歌を引り是も聞えたる事なれど此頃の此歌などにはもとゝはかり木をいはん事如何とおもへは先如くいひ置つ

美乃山

美乃也萬彌之之彌於比太留太萬加之波止與乃安加利彌安不加太乃之左也安不加太乃之左也

蓑山にしゞに生ひたるたまがしは豐明にあふかたのしさ

本抄承和帝の大嘗會悠紀の風俗歌也と有りしゝは

茂き也玉柏は葉をほめて云也柏葉は專ら用らるゝ故に其玉柏が豊明にあふをたのしと思へるよし也
眉止自女
美萬久左止利加戸萬由止自女萬由止自女也萬由止自
女萬由止自女萬由自止女也萬由止自女萬由止自女（書入云以下无）
みまくさとりかへまゆとじめ
御馬草取飼也刀自は古書多く見えてこゝなどは只女をいふめは女也眉刀自は今俗に下女なと白歯と云はいまだ歯を染ぬほとの女をいふことく少女の生のまゝなる眉をはらはて有を眉刀自女といひし成べし
酒飲
左介乎太宇戸天太戸惠宇天太乎止己輪曾也萬宇天久留與呂保比曾萬宇天久留丹名丹名太利也良乎奈太利（書入云以下太利々耳々）
天利奥
さけをたうべてたべゑうてたんところんぞまうでくるよろぼひぞまうでくる
たべをたうべと延云也賜の意よりいへれは多く尊き方より賜ふ飲食に云り即是もさる意成べし飲酔ては閉けし太乎止己輪曾はたんにてもだふにても音也酔て倒る音を云今もドントコロブといふ也今ならは轉でそ云々とで文字有へき所也古へはなくて聞し成べしよろほひはよりの詞にほひはひらひなとの活言のそへるにてよろめくさま也是はさる所にて酒を給りていたく酔て或は轉ひ或はよろめきて退くさま也太乎止己輪をたんとこりんと訓て多く懲る事とせるなどさる詞續き有べうもおもはれす又輪はろんの備字には用ゆへからすもしは論の字にやと思はるゝにつけて上の如くいひ試みたる也〇入綾に今按に上のたふと懲んぞといへる縁にたんな云々と云笛の譜をとり出てやがてその譜の詞どもを酔人のよろぼふ足の拍子にとれる氣取のをかしき也是を十五拍子にうたふをきかはえもいはずおもしろき節ども成らん一首の意は酒をたうべてたべ酔てたんと懲りなんぞ此まうでくる道に勿よそぼひそまうてくる其足つきのをかしさよ拍子をとらばたんなたりや云々とあはせて見べきさまそよと也と云り守倍は歌を解にほしきまゝに意をあらせて打見たるやうにいへるしかるへから

ぬ事也其うへ是を十五拍子にうたふをきかは云々なごいへる決てあるましき事也催馬樂となりては樂にうつりたるうへの事故いづれの歌とてもさるものにあらずもとの國風の流歌の時こそ入綾にいへるやうの趣もあるべき事なれ凡例に云し事共と合せ見るべし

田中井戸

太名加乃井止爾比加禮留太那岐川女川女安己女己安己女太良利良利太奈加乃己安己女

たなかのゐとにひかれるたなきつめあこめこあこめ

田中の井戸は田中の杜田中の里の如し井は田に水まかせん料なれは必田中に有り和名抄水葱奈木水葱可食也と有りて今も食料につましむる也萬葉にも宇惠古奈宜云々古奈伎我波奈乎云々なと有り田に生れは田水葱と云其葉つやあれは光ると云りあこめこあこめは吾子女小吾子女也吾子は古へしたしみ云詞是は童女なり

無力蝦

知加良奈无伊加陪留　保禰名伊美々須

ちからないかへる　ほねないみゝす

和名抄蛙和名賀閉流また蚯蚓和名美美須と有り本抄みゝすは蛙か取喰もの也故に對して云るにやといかゝあらん只はかなきむしを二ッ擧たりと見てありなんや神樂歌なとの類也次にも貝山なと同し

難波海

名尤波乃宇美名尤波乃宇美己岐毛天乃保留乎不爾於保不禰川久之川萬天爾以末須己之乃保禮也末左岐萬天耳

なんばのうみこぎもてのぼるをぶね大舟つくしつまでに今すこしのぼれ山崎までに

つくしづ入綾に後撰雜一に女ともたちのもとにつくしよりさしぐしを心さすとて大江玉淵女難波がたなにゝもあらずみをつくしふるきこゝろのしるしはかりぞ此歌詞書につくしといひて歌には難波のみをつくしをよめれはこゝのつくしつと同しく淀川より難波迄のあひたに然云地名のありし也玉淵女の攝津國によしありし事大和物語に亭子の帝鳥飼院におはしましし時此玉淵か女をめしてとりかひと云ことをよませ給へりしに淺みどりかひあるはるにあひぬれは霞ならねとたちのぼりけりとよめる事有にてしるしと云り可然考なりさて昔は淀

川の水も深くて大船小船共に山崎の大橋のもと迄のほりし也筑紫津は其少川下と聞えたり土左日記の頃既に川水少き時は船のぼりかねし事見えたり今少しのほれと云るは大かた山路迄はのほしかたくて少し下なるつくしつより乗人を上る也故に乗り居る人の今すこしのほれと願ふ心也今伏見迄行へき乗人を淀よりあくるたくひ也

鈴之川

すゝか川やそせのたきをみな人のめくるもしるくや時にあへる時にあへるかも

八十瀬の瀧は漲る所の多き山川のけしき也皆人のめくるは少迂也一本めつると有に從ふへし皆人の賞る也時にあへるとは大嘗なとに此鈴鹿川を取いてゝ歌れたるを云上美乃山なと同意也○入綾に此川の事を云るに行嚢抄云鈴鹿川は坂下ノ明神ノ邊ヨリ關ノ地藏マデ二里許ノ間右ニ流レ左ニユキ幾度モ涉ル故ニ八十瀬川ト號ス」とて古歌紀行等をあまた出せるを見るに川も小瀧の如く山よりいくつも落て流れけるを行めぐりて實に八十たびもわたりしさま也今も山國に四十八瀬なと云所これかれあり其狀なりけん湘秦紀行云上略關ヨリ坂下マデノ間近年マデ八十瀬川ノ谷水ノ支流イクラトモナク渡リテ登リケルガ往年霖雨ニ谷水漲リ出坂下ノ驛舍悉ク流レ沒シケレバ此災ヲ除ントテ官吏ニ仰テ山ヲ切開キ新道ヲ付カヘラレシヨリ今ハ谷川ヲ下ニ顧テ其上ノ高キ所ヲ通ル故ニ往還ノ勞スクナシ云々中略此說の如く成へし又歌の意を解たる所にめぐるもしるく今按に此川のあふさきるさに流れめくりたるをわたりてはわかれ別れては又めくり逢へるをもてかくつゞけたり上は序也たとへ也一本にめつるもと有はくもじを見たがへてうつしひがめたる也　一首の意は鈴鹿川八十瀬の瀧つ山川を皆人の渡りめぐりてあまたゝびいたづきけるがつひにからうじて待し時世に逢けるよといふ也譬へたることわりおもしろしと云るはいかゝあらんめくると云詞を流れめぐりたるをと川にかけ又別れては又あふと云も聞えす皆人のめくるとより外聞へき方なし同人の又ゆきあふ事あるへからす上る人と下る人のあふと云意にや序也たとへ也と云もいかゝ序たとへ兼たりと聞や何れの歌も

裏に意有としていへれは我見る所とはたかへり

石川　三段

伊之加波乃古未宇止倍於比乎止良禮天加良岐久以須留　二段　伊但名留伊加奈留於比曾波名太乃於比乃名加波太衣太留　三段　加也留加也留加名加波太衣太留

いし河のこまうどに帯をとられてからきくいするいかなるおびぞはなたの帯のなかはたえたる

石川は河内國石川郡　同國錦部郡に百済大縣郡に巨麻また若江郡にも同名有ていにしへ百濟高麗の人を置れし所なりといひ傳へたり既に出たるしだらかまうどのひとへの狩衣なとりれそ云々の類にて高麗人と通し居る女の歌也さてときおきて相serあした申せし帯を其高麗人に取隱されていたく悔るよし也二段　其帯はいかなる帯ぞと問をまうけて色は花田なりしが古き帯にて中はやれ絶たる帯也と女が耻る意也常に馴たる男の殊に夜の事なればやれ切たる帯のまゝに逢しを取かくされて見つけらるゝ事をからく悔る女の情也　三段かやるか〳〵ふしの詞成へし○入綾にかやるかあやるかといふ本につきて例の是に意あらせていろ〳〵にいへれど既に帯をとられて云々は中は絶たる迄にて其意盡たれは三段は只返しふし詞としてかならん

奥山

おく山にきゝるやをぢきをやはけんづるきけづるをぢ

をぢは年長たる人を云詞也もと父々の兄を小父と云かもと成へし日本紀萬葉等にあまたいへり今俗おやぢと廣くいふか如し木をや削るなり也波の洩は除て聞へし常歌に云也は云々のかへる意にはあらす眞木と云もこゝは意なし只木を專ひ云意也

奥々山

おく山に木ながすさが木かをぢきやときやときうやはけんづるまきやはけんづるきけづるをぢ

深山にて柚したる木は川あれは流し出し常に川なき所は谷底に切ため置て大雨の時に流し出す也さが木は汝が木かと問意也木やと〳〵は汝か木なるやの意かきうやばはきをや也やはの詞上に云か如し

我家

和加伊戸波止波利帳を毛多禮太留乎於保支美支萬世

无己衞世无差左可奈衞奈衞與介无安波比左多乎可加世與介无安波比左太乎可加世與介无
わがいへはとはりてうをもたれたるを大きみきませ聟にせん御肴に何よけんあはびさたをかゝせよけん
和加伊戸にて論なけれど上の例和伊戸と有本抄にはわいへんはとあり即わいへを謠へるまゝと聞えたりとはりてうは門に張る帳也和名抄幌音長張也施張於床上也云々古へ聟は女のもとにかよひ住ものにて其女の家には父母も玉の如くもてはやすものなれは玉はやす武庫と云祝詞にも用たり此歌は吾家は帷帳など垂ていざ富貴也諸王の君公達にても來給へあはれ聟にしかしつき申さんさて聟殿の御肴には何かよからんとて次々陰門に似たる貝をならへ云る也土左日記になにの蘆陰にことつけてほやのつまのいすしすしあはひ云々と云る合せ見へしさておもへはとはり帳も施張於床上といへる緊所の事にや女子有家の親のたわむれ云る意也おほきみは諸王親王なときはやかに云類にはあらて凡さる高貴の人を云成へし榮螺子佐左江又佐太江とも石陰子加世とあり　左太江加の加はあはひかさたえかゝせかがよからんといふか也

天治二年春三月付家說移野了口傳
己秘藏也不可有外見歟

鈴鹿河　我家　大宮　奥山　眉刀自已上呂
澤田河　我駒　貫河　東屋　道口　逢路　鷄鳴　陰名已上律
作歌並絶後及數十年盡依不傳家說不書也

明治十一年十月十一日以淺草文庫御本一校了
黒川眞頼

室松岩雄
保持照次　校
信田重並

裏に意有とし、
石丁

明治四十三年六月卅日印刷
明治四十三年七月三日發行

定價金參圓

著作權所有
不許飜刻複製

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所　公木社

發行所　國學院大學出版部
東京市麹町區飯田町五丁目八番地